Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/ykyokutaikan01sana

文學士佐成謙太郎著

謠曲大觀

第一卷

東京　明治書院

7549

序

佐成謙太郎君の「謠曲大觀」が完成された。首尾の卷を併せて、全部七卷、約四千頁の大著である。今その第一卷の世に出づるに當つて一言を添ふることは、余の光榮であるばかりでなく、又本書に對していさゝか關係を有してゐる余の義務であることを信ずるのである。

思へば、はや一昔のことである。故芳賀博士が東京帝國大學の教壇を引退されて、余がその後を襲うて國文學講座を擔任することになつた頃、余は責任の頗る重大なることを思うて、密に講座以外に種種の計畫を立てた。不敏な余一人の力では、如何に研究に沒頭し、精進した所で、成就し得べき所は恐らく言ふにも足らないであらう。若し今與へられた新しい余の立場の便宜をかり、多數同學諸君の協力を得て、國文學の諸方面に或事を企つることを得るならば、一方に

は不振の斯學を起し、又一方には斯學に對する世の蒙を啓く上に貢獻し得る所が多からう。それには具體的な方策として、雜誌の發刊、新研究叢書の出版、新註釋書の著述、特殊辭典の編纂、講演旅行等々を實行したいものであると考へた。而してその中の一二は、同感同學諸君の多大な協力援助を得て、現に實行の途中に在り、又或ものは準備中に在るのである。當時新註釋書として余の求めた所は、過去の業績を集成すると共に、これを增補し、訂正し、且つ先人の成し得なかつた方面に向つて、現代の新學問を以て新しい開拓をなしたものといふのであつた。かういふことが一朝一夕に成し得べきことでない位は萬々承知のことであつたが、余はこれを新進氣鋭の學者諸君に希望し、勸誘して、各自の造詣の深いものについて實行されんことを懇求した。固より余の志をよく理解してゐてくれられる諸君は、余の企てを賛成されたが、繁務その他の事情で、その一つも成功しな

い中に、十年の歳月は空しく過ぎ去らうとしてゐる。幸に佐成君はこの間不斷の努力を以て謠曲註釋の大業に當られた。二百數十番に亘つてこの難業に從事された不退轉の勇氣は、實に敬服に餘りある。余はこゝに本書の完成を見るに至つて、恰も大きくて、壯健で、容色勝れた嬰兒の產婆役を務めた人のやうに、得意と愉快とをおぼえるのである。

かういつては君に對して非常に失禮に當るかも知れない。併しこれは余の衷情である。思ふに、本書は余の勸說を待たずとも、いつかは固より世に出づべきものであつた。佐成君の謠曲(能樂)研究は周知のことであり、君は實に斯學の大家である。その平素の熱心、忠實な態度は、時々發表されたものに由つて世人の推重してゐる所である。その年と共に進んでゐる蘊蓄は早晚必ず纒められて、世に出づべきものであつたと信ずる。余の勸說は唯その時期を早めたに

過ぎない。

君が余の企てを賛成して、本書の完成を約されてから、暫くすると、數百枚の原稿を携へて來て示された。余はそれを披見して、何の助言を挿むべきものを發見しなかつた。唯その成功の日を待つのみであつた。然るに、その後君は又大部の稿本を持參されて、全部稿を改めたといつて示された。余は君の業に忠實なのに驚歎した。そして初稿より更に一段の進歩を示し、面目を一新してゐるのを知つて、本書の完成の日を待つ念は一層深くなつたのである。

かうして只管成功の機を待つてゐたところ、本年に入つて、この大業の略完成したことを報告され、且つ深見畫伯の畫譜・演能圖等をも示された。余は我が事のやうな喜をおぼえて、直ちに國文學註釋書出版に最も豐富な經驗を有つてゐる明治書院を紹介した。幸に明治書院は本書出版の大業を快諾されて、現代印刷製本技能の限りを

盡して、活字に、印刷に、體裁に、紙質に、裝幀に、十分の注意・意匠を用ひられることになつた。今その第一卷を見るに、余の期待に背かず、この種の著として確に劃期の大著勞作として、又よく書架を飾るに足る美本として、これを世に奬め得ることを喜とし、光榮とする。

蓋し、新を追ふばかりが我々の能とすべきものではあるまい。況や奇を衒ふが如きは、寧ろその國家社會に及ぼす弊の多きに堪へないのである。我が國は世界特殊の文化を有し、又誇るべき古典文藝を有する國であるに拘らず、國民は餘りに祖國の文化に冷淡であり、餘りに自國の古典文藝に無知である。謠曲(能樂)は我が古典文藝の一として、我々の眞面目な鑑賞・研究を必要とするものである。のみならず、我々はその特質・價値を世界に紹介して、世界の藝術に寄與せんと期すべきものであらう。けれども、特殊な古典藝術であるから、我々と雖も、卒爾としてその詞章に臨み、演能を觀れば、到底十分に理

解し、鑑賞することを得ない。豫め必要な知識を準備して置かなければならないのである。

然るに、古來「謠鈔」「拾葉抄」「通解」などの、詞章の註釋書や、又特殊な研究などもあるが、いづれも十分に纏まつたものでない。隨つてそこに非常な不便があつた。本書はあらゆる方面を集めてゐる所に特色の一がある。この點に於て先づ時弊を救ふものである。卽ち各曲には第一に解說を設けて、能柄・人物・所・時・作者・梗概・出典・概評を述べ、それから頁を三段に區劃して、中段には詞章がある。詞章の中には、演出の場合の、間狂言の詞・ワキゼリフから、型・裝束等を示してある。上段には語句の註釋がある。下段には口語譯がある。そして終には諸流・古謠本の考異等が揭げてある。かくて獨り詞章の註釋・口譯に止らず、謠曲〔能樂〕を知るに必要な事項を悉く網羅してある。思ふに謠曲は、その詞章のみを讀むすら頗る困難である。出典の多い語句

の義を明らかにすることの困難な上に、緣語・掛詞から、語句の連續關係を知ることに、又容易ならぬものがある。本書の註釋と口譯とは、一見容易なやうに見えて、實に人知れぬ涙の苦勞の多かつたことを信ずる。能の演出方面は、その專門家達に祕められたものがあつて、學者研究の便を缺くことが多い。余の如き斯道に淺いものは、實に本書を津梁として始めてよく舞臺に親しむことを得るを喜ぶものである。

要するに、本書は研究者の好參考書として、啓發を受くるものの多いことを信ずると共に、又一般謠曲能樂鑑賞家に、一般の知識を授けて、その鑑賞の確實な基礎を作らしめる上に、甚だ有効であると信ずる。余は躊躇なく、これを學界と一般家庭とに推奬する。

昭和五年十月

藤村作

緒言

本書の成功は一に恩師文學博士藤村作先生の御高庇によるものであります。

思へば、私が小謠・仕舞の教へを受けたのは、今を去る三十餘年小學生時代のことでありました。やゝ長じて謠曲を今少し深く研究したいと考へはじめた頃から、是非欲しいと思つたのは、演能の仕科を示す型附でありました。謠本に記されてゐない詞章、間語の詞でありました。謠曲文の難解に苦しむ毎に、他の古典文藝には續々として口語譯が出るのに、謠曲にはどうして誰も譯をつけてくれないのだらうと疑ひました。大正七年大學院に入つて、室町時代の文學を專攻することとなつて以來、更に深く根本的に謠曲を研究したいと志しました。しかし能樂の前史は渾沌として把握することが出來

ない、謠曲の眞意は幽玄にして捕捉することが出來ない。終日書庫に閉ぢ籠つて一行の資料をも索め得なかつたことが幾度あつたことであらう、長歎息して街道に出れば、電燈の光が眩しく眼を射る。謠曲などといふものは、自分の趣味としておぼろに鑑賞して置けばよいのだ、自分の研究題目は他のものに代へた方がよいのだなどと、幾度か心が動きました。然しまた思ひ返して、研究を續けて行くうちに、資料は少しづつ積み重なつて行きました。偶然、間語の寫本を手にした時の喜びは、ほんとにいひやうのないものでありました。この間、恩顧・辱知の方々が、或は觀能の便を與へ、或は資料を貸與し、或は懇切に教示して、直接間接私の研究を援けて下さつたことは、實にありがたい仕合でありました　大分材料が整つて參りました

藤村先生から本書の編述をお勸め戴いたのであります。さて愈筆を執つて見ると、容易に體裁が整ひません。口語譯は可なり困難

な業でありました。またしても筆を投げたくなりました。先生は常に激勵して本書を完成するやうに鞭韃して下さいました。

遂に出來上りました。顧みればそれほど長い歳月ではなかつたのであります。微力な私に兎に角これだけのものの出來たのは、全く神佛の冥護だと思はれてならないのであります。

さて、かうして出來ました本書は、これを七卷に分ち、首卷に總說及び畫譜を、別卷に索引を載せ、その間の五卷に現行曲二百三十五番を曲名の五十音順に從つて收めました。各曲の取扱ひ方については、例言に於て細述することと致します。

なほ、表紙の圖案、首卷の畫譜、每曲演能圖等はすべて深見坦郎畫伯に揮毫して貰ひました。氏は能畫について三十年餘の研鑽を積まれた斯道の權威で、本書の爲にその蘊蓄を傾けて妙筆を揮はれたことは、著者の最も欣幸とするところで、讀者諸君も亦これを諒とせら

れるであらうと信ずるのであります。

本書の刊行について、明治書院が多大の好意を寄せられ、すべて著者の望むがまゝの體裁に出版せられたこと、印刷所も亦複雜な組版を整備して、幾回ともなき校正を快諾せられたことは、著者として愉悦に堪へないところであります。

背及び扉の文字は、古稀の齡を超えた父に書いて貰ひました。幸ひに兩親とも健在で、本書の刊行を喜んで貰へるのは、子として何よりも嬉しいことで、かうした私情の一端をこゝに洩らしても、讀者諸君はこれをゆるして下さるだらうと思ふのであります。

昭和五年十月五日父の七十一回誕生日に

佐成謙太郎

例言

全般に亘つて

能樂の演奏には、シテ方・ワキ方・狂言方・囃子方等の役柄がありますが、その主體をなすものはシテ方で、一般に行はれてゐる謠本も亦シテ方のものであります。そして、このシテ方には觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流（梅若も一流を樹立しましたが、その謠本は觀世流のものを踏襲してゐます。）がありまして、各流二百十番乃至百八十番を現行曲としてゐます。そして、その大部分は各流共通のものでありますが、その間に多少の出入がありまして、五流現行曲は凡て二百三十五番となるのであります。（最近金剛喜多の二流で廢曲としたものは、當然これを削除し、金剛流で新しく加へることとしたものも、未だ流布してゐないのでありますから、これを省略しました。）

本書は上述二百三十五番を、〔翁〕は別曲として第一に擧げ、〔鸚鵡小町〕以下を曲名の五十音順に從ひ、每曲、解說・本文・語釋・口語譯・考異の五部門に分つて、これを揭げました。そして、本文・語釋・口語譯の三項は、彼此對照する便宜を考へて、上中下の三段に、互に相對するやうに記しましたが、その間に自ら繁簡の差異があつて、多少前後するこ

とを免れませんから、一曲を數節に分つて【一】【二】【三】等の符號を附し、識別し易いやうにしました。

なほ、各部門を通じて、謠曲名には必ず〔一〕の符號を附けてこれを表示し、流名には往々觀(觀世)、寶(寶生)、春(金春)、剛(金剛)、喜(喜多)の略符號を用ゐました。

解說について

解說に於ては、また能柄・人物・所・時・異稱・作者・梗概・出典・概評の諸項に細分して記しました。

イ 能柄

能樂五番立の分類、脇能・二番目・三番目等の分類は、確乎たる根據のあるものともいへませんが、その曲柄を知るのには甚だ便宜なものであり、夢幻能・劇能等の名稱は、著者の私に與へたものでありますが、これも脚色の大體を知るのに便宜でなからうかと思ひましたので、兩者とも每曲にこれを揭げました。

ロ 人物

舞臺に登場する每曲の役柄・人物は、獲聲順又は登場順によつて揭げました。

ハ 所

謠曲に描かれてゐる場所は、一曲の中でも多少移動するのが普通でありますが、ここには、その主要な場所を擧げました。前後の二段に於て主要場所の移る場合には、これを表示しました。

ニ 時

謠曲に描かれた時は、明確でないものが少くありません。さうした場合には、能樂實演の取扱上指定してゐる季節を、括弧を施して、(一月)(二月)のやうに記しました。

ホ 作者

謠曲の最も著しい作者が世阿彌であることには疑ひがありませんが、どの曲がだれの作であるかは、明言し難いものが少くありません。本書には、世阿彌の著書によつて明らかなものは勿論これを明示し、なほ後世の書ではありますが、作者目錄として相當有力なものと認められてゐる吉田兼持の能本作者註文、觀世元章の二百十番謠目錄の說をも揭げて置きました。なほこの外、作者、制作時代等を知る傍證となるべき古記錄、金春禪竹の著書、室町時代公卿日記等の所見をも揭げました。この項に就ては、丸岡桂氏の古今謠曲解題から得たものが多いのでありますが、著

者自身も亦同樣の搜索を試みましたので、同書の遺漏を多少補ひ得ました。なほ筧文學士の言經卿記に就ての研究に負ふ所も少くありません。

ヘ 梗概

一曲を通じた口語譯を試みたのでありますから、梗概は一見してその大要を知り得る程度にとゞめました。

ト 出典

謠曲の主材は大部分先進文藝から得たものでありまして、これを知ることは、謠曲作者の創作態度を見る上にも、謠曲を正しく解釋する上にも、必要なことでありますから、典據の索め得たものは、なるべく詳しくこれを引いて、謠曲文と對照する便に供へました。

チ 概評

すべて文學藝術の批評鑑賞は、その人々の主觀から出るもので、客觀的な一定の基準は定め難いものだと思ひます。著者の主觀から出發した批評などを述べるのは、誠にをこがましいことではありますが、初心の人々には多少參考になることもあらうかと思つて、敢て卑見を略述しました。

本文について

イ 底本の選定

謠曲の本文は、諸流とも大體同一でありますが、その間に多少詞章の出入した所があります。それで、本書の底本には、謠曲の大成者觀阿彌・世阿彌の流系であり、その後引續いて現在も最も流布してゐる觀世流のものを採り、觀世流で行はれてゐないものは、上懸として觀世に最も近い、そして現在觀世に次いで廣く行はれてゐる寶生流を採り、上懸二流に行はれてゐないものは、下懸三流の中で流系の最も古い金春流を採り、次いで金剛流を採り、最後に五流の中最も新しい喜多流の文を採りました。

ロ 本文の校訂

本文の底本には、その流の現行謠本を採りましたが、漢字・假名遣等は、古謠本及び諸流謠本を參酌して、その穩當なものに從ひました。

用語・用字は各流を通じて、一定の樣式に統一しましたが、句讀はすべてその流現行曲の主張に從ひました。

漢字には、「何々にて候(さうらふ)」「何々にて候(さうら)へば」の外は、「さん候(ざうらう)」などと、候を濁音で謠ふ場合も

すべて振假名を施しました。そしてその振假名は字音假名遣、歴史假名遣に從ひましたが、謠曲には特殊な謠ひ方が少くありませんので、さうした場合にはすべてその謠ひ方の發音に從つて、「御宇」「青墓」「危く」などと記し、「謠ふ」「榮うる」なども、「うたう」「きカうる」と謠はないことを明示する爲に、「謠ふ」「榮うる」と記し、假名でも、讀み誤る恐れのあるものは、「今日見ずは」などと、特に片假名を傍につけて、これを明示しました。

謠曲では、上の音が字音のタ行又は撥音ンで、その次の音がア行・ヤ行・ワ行、又はハ行「は」である時は、その音がタ行又はナ行或はその拗音に轉じて、「今日は」「御入り候」「陰陽」などと謠ふものであります。かうした場合、漢字の振假名にはその發音假名を記しましたが、假名書きの場合には、これに一々傍訓を施すのは、餘りに煩はしいので、省略しました。それらはすべて、「善神は」「他生の緣ありて」「利物を」などと謠ふのであります。

章句・節附の名稱、次第・道行・下歌・上歌・クリ・サシ・クセ・ロンギ等は、すべて謠本の指定に從つてこれを附し、呼掛・語・待謠等の名稱も括弧を施してこれを記しました。たゞ、カヽル・打切は本書の如き性質のものには、煩はしいばかりで必要のないものと思

つて省きました。

なほ謠がかりの部分と、節をつけないたゞ詞の部分とは、その句頭に、前者には『、後者には「の印を附けて、これを辨別しました。（口語譯等に附けた「『は、會話文又は引用文を表示したもので、これとは全く意味を異にしてゐます）

ハ本文の補修

能樂の實演を一度でも觀たことのある人は、誰でもすぐ氣づくやうに、謠本や從來の謠曲註釋書に記してゐる詞章は、能樂詞章の全部ではありません。謠本に記されてゐない狂言詞やワキ詞（時としてはシテ詞をも）を知らなくては、精細に謠曲を理解することが出來ないのであります。たゞこれらの詞は寫本として、役者の家家に相傳してゐるだけで、世間には殆ど出てゐないのでありますが、著者は幸ひにしてこれを見出すことが出來ましたので、すべての曲を通じて、舞臺で述べられるほどの詞は、洩れなくこれを收めるやうに力めました。その中、

シテ詞・ツレ詞　は、その流現行のものに從ひ、

ワキ詞　は、現在家元の存續してゐる唯一のワキ方である脇寶生流の古寫本により、寶生流に求め得なかつたものは、高安流・春藤流などに從ひました。（寶生流以外

に據つた場合は、その都度その旨を斷つて置きます）

狂言詞　は、もと狂言には大藏・和泉・鷺の三流があり、現在はその中大藏・和泉の二流が行はれてゐるのでありますが、その詞は謠曲の他の部分に比べて流動性の多いものでありまして、現在行はれてゐるものでも、同じ流の中にも、例へば大藏流の茂山派と山本派、和泉流の三宅派と山脇派と野村派など、それ〴〵可なりの相違があるのであります。それで、本書では成るべく古い原形に近いものに據りたいと思ひ、森川杜園舊藏の大藏流古寫本（推定寛政頃）に據り、大藏流にないものは和泉流に據りました。

二　型附

能樂は一種の劇であり、從つて謠曲は一種の脚本と見られるのであります。それで、「ト書き」のない脚本が、舞臺を想像するに不都合であるやうに、型附の記されてゐない謠曲文は、能樂の演奏を想察することの困難な、從つて謠曲として十分に鑑賞することの出來ないものだと思ひます。それで、本書にはこの型附を「ト書き」風に記して見ました。そして、その型附は著者所藏の觀世大夫清親型附本を本とし、帝國圖書館所藏觀世流舞本その他の型附本、木下敬賢氏の能樂蘊奥集、大和田建樹氏

の「能の栞」、池内信嘉氏の「能の見方と謠の聞き方」、謠曲界連載の「うたひ通解」、大觀世連載の「能の型」等を參酌し、殊に著者の觀能手控を參考としました。

尤も、能の型附は極めて些細な點まで嚴密に規定してゐますと同時に、變型の少くないものでありますが、さうした詳細な型附の記載は本書の目的とするところでもなく、又却つて全篇通讀の妨げともなるものでありますから、たゞ演出の大體を想像し得る程度に略記することにとゞめました。

なほ、現行曲二百三十餘番のうち、凡そ百番内外が屢〻實演せられるもので、型附本等の參照すべきものも多いのでありますが、他の百數十番は實演せられる機會が少く、型附も殆ど見當らないのであります。著者はなるべく廣く求めて、その大概を知るに力めましたが、一二の曲に就ては、裝束附及び登場人物の出入を記すにとゞまつたものがあります。

ホ 活字の差別

以上擧げました、謠本以外の狂言・ワキ等の詞及び型附は、謠曲として完全な本文を作る爲に必要な條件であると信じますが、謠本に記されてゐる部分とその他の部分とには、可なり輕重の差がつけられてゐるやうに思はれます。その上、謠本以外

の部分は、著者が必要と認めて新しく加へたものでありますから、その差別を明らかにする爲に、謠本に記されてゐる部分は十二ポイント、その他の詞は九ポイント、型附は八ポイントとして、活字の大小を以てこれを辨別しました。――狂言詞は、謠本にも時折記してゐることがあります。その場合、その文が實演に使用してゐるものと同樣のものである時にはこれに從ひ、大差ある時には著者の用ゐた狂言底本の文に從ひ、謠本の文を參考として上欄に掲げ、いづれにしても、その都度これを明示して置きますが、その謠本に從つたと否とに拘らず、狂言詞はすべて九ポイントとして、體裁を整へました。

語釋について

謠曲の語句の解釋は、夙く豐臣氏の頃から大仕掛に行はれ、德川末期、犬井恕軒の謠曲拾葉抄に於て一度大成したのであります。その後、明治時代に入つて、大和田建樹氏の謠曲評釋、丸岡桂氏の觀世流改訂謠本(刊行會本)辭解等に於て、更にこれを修補せられて、著者の新しく加へ得る所は甚だ少かつたのでありますが、多少は修正し得たかと思つて居ります。

本書に掲げた語釋は、なるべく煩雜にならないやうに、要領を記すやうに注意しましたが、引歌・引用句などはなるべく洩れなく掲げるやうにし、緣語・掛詞なども一々指摘するやうに心掛けました。

語釋は本文の上段に置いたのでありますが、それではいひ足りない時には、その曲の末尾に「附記」として掲げました。

口語譯について

謠曲の口語譯、謠曲文の全體を通じて、一貫した解釋を施すことは、これまでまだ試みられたことがないと思ひます。否、これまでは、謠曲は「綴れ錦のちやんちやんこ」のやうなものだ、などといはれてゐて、全篇を通じた逐語的飜譯は出來にくいものと考へてゐた人が少くないやうに思ひます。著者は大膽にもこれを試みて、その二三十を謠曲界に連載して、識者の教へを乞うたのでありますが、こゝにすべての曲に亘つて口語譯を試みることとしました。著者自身が讀んでもの足りない節が少くない、將來大に修正せられるべきものではありますが、從來全くなかつたものだけに、讀者諸君の參考にもならうかと期待してゐるのであります。

考異について

イ 諸流異同

前に述べました通り、五流の詞章には多少の異同がありまして、この差異を辨別することは、各流の主張を見る上にも、謡曲を解釋する上にも、參考となるものでありますが、些細な相異まで一一指摘しますと、非常に煩雜なものとなり、頁數も甚しく增加しますので、些細なものはこれを省略し、やゝ著しい相異は必ずこれを掲げることとしました。

ロ 古謡本異同

謡曲の詞章は、殆ど原形のまゝ傳へられて來たのでありますが、元祿以前とその以後とでは、やゝ著しい差異の認められるものがないでもありません。そして、この古謡本從つて原形に近いものを知ることは、いづれの點から見ても、大切なことだと思ひますので、慶長光悅本をはじめ元祿以前の古謡本の索め得ましたものは、その最も古いものに從つて、これを現行曲と比較して、その相異は大小となくすべて原文のまゝで指摘しました。

なほ、世子六十以後申樂談儀、金春禪竹の五音次第・五音三曲集等に謠曲の一節を引いてゐますものは、これこそ原形を知る最も大切な資料でありますから、本項の末、又は解說の作者の項に於て、その全文を擧げ又は現行曲との異同を辨じて置きました。

能畫について

毎曲冒頭に揭げました演能圖は、緒言に申し述べました通り、すべて深見坦郎畫伯の揮毫に係るものであります。これまでにも、演能の版畫又は寫眞は數多くありますが、現行曲すべてを網羅したものは、深見畫伯のものが最初であると思ひます。畫伯が本書の爲に苦心して終にこれを完成せられたのは、また一には斯道の劃期的事業であつたと信じるのであります。

謠曲大觀第一卷 目次

序……一
緒言……一三
例言……二七
翁……四一
鸚鵡小町……六五
阿漕……七七
蘆刈……一〇五
飛鳥川……一二三
安宅……
安達原……
敦盛……

い

淡路……一三九
葵上……一五五
海士……一六九
綾鼓……一八九
嵐山……二〇一
蟻通……二一三
藍染川……二二五
碇潜……二四七
生田敦盛……二六三
一角仙人……二七五
岩船……二八五
鵜飼……二九七
浮舟……三一三
雨月……三二七

う

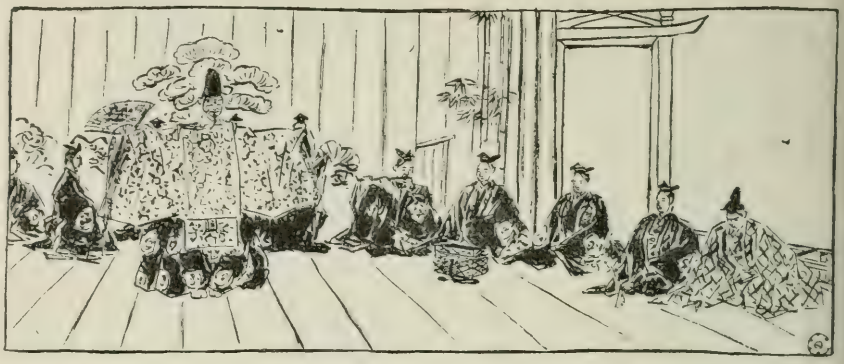
え

右近……三三九
歌占……三五三
内外詣……三七一
善知鳥……三八一
采女……三九五
鵜祭……四一一
梅枝……四二三
梅枝……四三五
鱗形……四四九
雲林院……四五七
江口……四七一
江島……四八九
箙……五〇五
老松……五二一

お

か

大原御幸……五三五
大江山……五五三
大社……五七三
項羽……五八七
高野物狂……六〇一
杜若……六一七
景清……六三一
柏崎……六四九
春日龍神……六六七
合浦……六八一
葛城……六八九
鐵輪……七〇三
兼平……七一五



千歳

三番叟

翁

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】　別曲

【人物】　シテ　翁、ツレ　千歳、狂言　三番叟、狂言　面箱持

【所　】　不定

【時　】　（無季）

【異稱】　古くは「式三番」といつた。この詞章を特に「神歌」といふ。

【作者】　他の謠曲とは全く別趣な、遙かに古い作であるが、その作者は分らない。世阿彌は花傳書の神儀篇に、

申樂舞を奏すれば、國穩かに民靜かに、壽命長遠也と、太子（聖德）の御筆あらたなるにより、村上天皇申樂をもて天下の御祈禱となすべしとて、その頃かの河勝より此申樂の藝を傳ふる子孫、秦氏安あり、六十六番の申樂を紫宸殿にて仕る。其頃紀のこの守と申す人才智の人なりけり。これはかの氏安が妹聟也。これも相伴ひて申樂をす。其後六十六番までは一日に勤めがたしとて、其中を選んで、稻積の翁（翁面）、代繼の翁（三番申樂）、父の助、これ三を定む。今の代の式三番これなり。則ち法報應の三身の如來を象り奉る所なり。

といつてゐる。演奏記錄の最も古いのは、續塵記に、

正安三年（一九六二）正月五日巳刻參二仙洞一、今日千秋萬歲被レ急之故也、未剋法皇渡二御小御所一、於二前庭一御二覽之一、猿樂三番了云々。

讀史愚抄同日の條にも、

彼位依二關白兼基喪日一延引、法皇一院覽二猿樂三番及手物一於高小路殿小御所。

但し、世子六十以後申樂談儀に、

翁をば昔は宿老次第に舞ひけるを、今熊野の申樂の時、將軍龍苑院（義滿）初めて御成なれば、一番に出づべきものを御尋ねあるべきに、大夫にてなくてはとて、南無阿彌陀佛一言によりて、清次出仕し、せられしより、是を始めとす。よつて、大和申樂是を本とす。當世、

京中、御前などにては、式三番悉くはなし。今は神事の外は悉くはなし。

といつてゐるやうに、翁を大夫の役として第一番に演ずることに定まつたのは、義滿將軍が始めて觀阿の藝を觀た應安七年（一三七四）の吉例によるもので、しかも、その頃の式三番の形式は、五十年を經た永享の頃まで續かず、神事能の外は、古式が大分省略せられてゐたのである。今日に於ても、〔翁〕に、初日之式・二日之式・三日之式・四日之式・法會之舞・十二月往來・父尉延命冠者などの變式があり、千歳や面箱持の役格が上懸と下懸とで違つてゐるのは、〔翁〕が永らく流動してゐた名殘であらう。とはいへ、申樂談儀に、

申樂の舞とは、いづれと取立てて申すべきならば、この道の根本なるが故に、翁の舞と申すべきか。又謠の根本を申さば、翁の神樂歌と申すべきか。

といつてゐるのであるから、世阿彌時代に既に〔翁〕を申樂の神聖な根源として取扱つてゐたことは疑はれないのである。

【梗概】 數種の歌舞を雜然と寄せ集めたものに過ぎないが、大體四部に分れてゐて、その第一部では翁が地謠との連吟によつて「とうとうたらり〻所千代までおはしませ」と謠ひ、次に千歳が「鳴るは瀧の水」と今様を謠つて舞を舞ひ、第三部ではまた翁が立つて祝言を述べ舞を舞ふ。舞ひ終つて翁と千歳が退場した後、最後の第四部として、三番叟が面箱持に勸められて、これも亦舞を舞ひ、めでたく舞ひ納めて一曲を終るのである。

【出典】 〔翁〕は「總說第一章第四節に述べたやうに、申樂能の成立する當初、優娟な稚兒舞に對して演せられた滑稽な翁舞の整理せられたものであつて、その詞章は大體當時流行してゐた歌謠を組み合せたものに過ぎない。そして、この歌詞に就ては、語釋に述べる方が便宜であるから、こゝには省略して、たゞ翁の最初に謠ふ「とうとうたらりたらりら」云々の詞について吟味すれば、古く僧宜竹は翰林胡蘆集に、陀羅尼から出た詞であるといひ、その他能役者流の間には色々の神聖說が行はれてゐるが、荻生徂徠や賀茂眞淵かこれを排斥してゐるやうに、笛や鼓の拍子の擬聲から出たものと見るのが、穩健な見方であらう。例へば、古く催馬樂の酒飲の曲に、

酒をたうべて、たべ醉うて、たうと懲りんぞや、詣でくる、なよろぼひそ、詣でくる、たんな、たりや、らんなたりちりら

とあり、綾小路俊量卿記の「五節間郢曲事」に、

思ひの津に、舟の寄れかし、星のまぎれに、をして參らう、やれ、こととうたふ時はどんこうと謠也

とあるやうに、謠の合の手として實際に謠つたものが、こゝに採入れられたのであらうか。さうすれば、もとはこの前に何か謠ひ物が

あつたのであらう。或は高野辰之博士が日本歌謠史に擧げて居られるやうに、舞樂の最初に演する「振舞」の笛の譜、

ト(引)ト(引)、タアハアアロ、トヲリイラア。』　トラアリイラリ、チイラリイリイラ、タアリアリヤリ(引)。』　トラアロリチラアハ、チイヤリイヤラタアハハハルラルラアルラ、トヲヒタロヒ、トヲヒ(引)

の訛つたものであるかも知れない。さうすれば、これはもと振舞のやうに翁の前の霊拂ひの謠つたものであらうか。ところが、最近河口慧海師の發見によれば（昭和三年四月十二日朝日新聞所載）、この文句は西藏國の古代語で、祝言の陀羅尼歌、サンバ・ソウ（瑞祥・作成といふ意）の詞、

トブトウ（得物は）タラリ（輝き）タラリ・ラ（かゞやいて）、タラリ（輝きは）ア（嗟呼）ガレララ（何れも樣に）リトウ（壽きあれや）、ツエ・リン・ヤツ（壽命は長く善く）タラリ（輝き）タラリラ（かゞやいて）、タラリ（輝きは）ア（嗟呼）ガレララ（何れも樣に）リトウ（壽きあれや）

であるといふ。これに從へば、古い散樂時代にこの藝能が移入せられて、翁舞に傳はり、僧宜竹の說のやうに、陀羅尼呪文として永く謠はれて來たもののやうであるが、吾等はまだ直にこれに從ふだけの傍證を持つてゐない。なほ後の研究に俟つて、これを明かにしたいと思ふ。

【概評】〔翁〕は近代申樂の成立する以前の、古い形を保存して來たもので、申樂の祖先として極めて神聖な取扱を受けてゐるのであるが、姑くこの神聖觀を離れて、その成立事情について考へて見ると、世阿彌が花傳書にいつてゐるやうに、式三番はもと三番の翁舞から起つたもので、「翁」「千歲」「三番叟」がこの三翁に當る譯であるが、そのうち翁と三番叟とは、名前も扮裝も老人らしいが、千歲は直面で、老人らしい感が起らない。それは、式三番が一度は大人猿樂師の翁舞で固められたが、これへも稚兒・若少の勢力が侵入して來て、その一を稚兒の役に奪はれたのでなからうかと思ふ。嘉慶元年（一〇四七）の春日臨時祭記に、

五月十九日、猿樂　小冠兒（稚形殿）　延覺坊（翁面）　大輔君（三番申樂）

とある小冠が卽ちそれで、しかも翁面よりも先に演舞したのである。前記義滿將軍の御覽能に、觀阿彌淸次が翁を第一番に演じたといふのは、このやうな順序を古い形に、翁・小冠・三番叟の順に整へたのでなからうか。翁の變式に「父尉延命冠者」があるのは、これがやがて翁舞から稚兒舞に移つた形跡を暴はしてゐるもので、もし推測を逞うすれば、「父尉」を稚兒の役とする爲に、その子で將來の永い

「延命冠者」と改名したが、しかし、冠者では翁舞本來の趣旨に戻るので、現在千歳の翁であるか、將來千歳を保つべき冠者であるか、どちらにでも解釋の出來る「千歳」に改名したのでなからうかと思ふのである。〔翁〕七式の歌詞を見ても、千歳の部分に異同が多く、その配役を見ても、千歳を上懸てはツレ役とし、下懸は狂言役としてゐるなど、甚だ流動性に富んでゐるのは、この間の消息を洩らしたものであらう。

さて、上述の見地を以て、〔翁〕の歌詞卽ち「神歌」を見ると、三番叟は狂言役として別種の取扱を受けたのに不思議はないが、翁と千歳との歌詞が、翁・千歳・翁といふ三部から成り、翁が千歳の前後に二度謠ふこととなつてゐるのは、もと翁が千歳の後に演じてゐたものを、千歳の前に、第一番に演じるについて、特殊な歌詞を加へ、しかも本の形をも遺存したのでなからうか。そして、その特殊な歌詞とはこの翁の爲に新しく作つたものではなく、申樂談儀にも見えてゐる「露拂ひ」の謠つたものを、翁舞の詞に採入れたのではなからうか。翁がこれを謠ふ間直面でゐることも、その一證左であり、殊にこの詞が前述の通り振舞の節譜の訛つたものであるとすれば、一層この感を強くするのである。

〔翁〕は凡そこのやうな變遷を經て、しかも元來滑稽な自由な形であつたものが、儀式化し神聖視せられるに從つて、今日では解し難い點の多いものになつてしまつたが、それにしても、このやうな古い形の保存せられて來たことは、歷史的に見て極めて貴いことであるといはなければならない。

語釋

〔一〕本文

シテ翁、翁烏帽子・襟白・着附白綾・翁狩衣・指貫・込大口・翁扇の裝束、ツレ千歳、侍烏帽子・襟赤・着附段厚板・千歳直垂・込大口・小刀・神扇の裝束、狂言三番叟、折烏帽子・着附厚板・直垂上下の裝束、狂言面箱持、三番叟と同樣の裝束にて、まづ面箱持、兩手にて面箱を捧げて出で、續いて翁、千歳、三番叟、囃子方、地謠の順にて橋懸に出で、面箱持目附柱の方に行き下に

〔一〕口語譯

シテ翁、ツレ千歳、狂言三番叟など登場。まづ翁が、

○とうとうたらりたらりら　笛や鼓の拍子の振靡から出たといふ說、舞樂「振舞」の笛譜の訛つたものであるといふ說、西藏國の祝言の陀羅尼歌であるといふ說などあるが、未だいづれとも定め難い。委しくは解說にいふ。

○所千代までおはしませ―「たらりとう」のとの音を重ねて所といつた。この所に於ていつまでも榮えられよといふ意。以下「幸ひ心に任せたり」まで七五調句の今樣。

○われらも千秋さむらう　私達も君の御前にいつまでもお仕へ申すといふ意。

○鶴と龜との齡にて―淮南子に「鶴千歲極二其游一、龜五百歲二其遊一」などとあつて、鶴と龜とは最も長壽のものとせられてゐた。古今集在原滋春の歌に「鶴龜も千年の後は知らなくにあかぬ心に任せはててむ」

居ると、翁は舞臺正面先に進み、下に居て正面に禮拜し、立ちて地謠座の前に行き安坐す。面箱持翁の前に出で、白式尉面を箱より取出し、蓋の上に置き、脇座の次に行きて着座す。千歲脇座に行きて平伏し、三番叟は仕手柱際にて下に居り、囃子方は常の座に、地謠は常とは異り囃子座の後に坐す。囃子方打出して、翁は座のままにて、

翁　とうとうたらりたらりら。たらりあがりららりとう

地　ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう

翁　所千代までおはしませ

地　われらも千秋さむらはう

翁　鶴と龜との齡にて

地　幸ひ心に任せたり

翁　とうとうたらりたらりら

地　ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう

翁　とう〳〵たらりたらりら、たらりあがりらゝりとう、ちりやたらりたらりら、たらりあがりららりとう」

三拍子面白く謠つて樂しい氣持になり、

翁「どうかわが君は、この所にいつまでもお出でになつて、限りなくお榮え遊ばすやうに。私どももいつまでも御前にお仕へ申しませうから。ほんとに、わが君の御壽命は鶴や龜のやうに千年も萬年もお永らへ遊ばして、思ふが儘のお仕合をお取りになるのでございます」

三わが君を祝つて、また

翁「とう〳〵たらりたらりら、ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう

三拍子面白く謠ふ。

【二】
○鳴るは瀧の水―梁塵秘抄に收められた、今様四句神歌の一で、原書には「瀧は多かれど、うれしやとぞ思ふ、鳴るは瀧の水、日は照るとも、たへてとうたへ、たへてとうたへ、やれことつとう」とあるが、源平盛衰記・平家物語・義經記などには「うれしや水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり」と變へて採れ、また寶際にこの後の歌詞で廣く諸人はこれてゐたことが明月記などに見えてゐる。
○天つ少女の羽衣よ―拾遺集讀人知らずの歌に「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖ならなむ」と詠まれた故事に據つたもので、これは佛說に劫といふ長久の時間を說明して天人が百年に一度づつ降りて來て四十里四方の巖を、柔かな羽衣の袖で撫でて、終にその巖を摺り盡すまでの時があつても、一劫はまだ盡きないといつた所から出たのである。

【三】
○總角やとんどや―催馬樂の總角の曲―總角や、とうとう、尋ばかりや、とうとう、さかりて寢たれども、まろびあひにけり、とうとう、かよりあひにけり、とうとう。に據る。原歌は卑俗な戀歌であるが、これを轉じて

【二】
千歲『鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水日は照るとも
と謠ひながら立上り、
地『絶えずとうたりありうとうとうとうとう
千歲『絶えずとうたり。常にとうたり
と大小前より正面先に出で、たら〳〵と後に下りて、

〔千歲舞〕

千歲『君の千歲を經ん事も。天つ少女の羽衣よ鳴るは瀧の水日は照るとも
地『絶えずとうたりありうとうとうとうとう

〔千歲舞〕

舞ひ納めて、脇座に歸り、もとの如くに平伏す。

【三】
翁この間に白式尉面をつけ、千歲座につくと、
翁『總角やとんどや――
地『尋ばかりやとんどや
翁『坐して居たれども（と扇を開きながら立ち）

【二】
千歲『――
『鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり』――」
（瀧の水がどん〳〵と大きな音を立ててゐるわ。この瀧の水はどんなに日照りが續いても、少しも衰へることがなく、絶えずどう〳〵と鳴り響いてゐるわ。わが君もこの瀧のやうに、どのやうなことがあつても、お衰へになることはなく、いつまでも限りなくお榮え遊ばすことだ）といふ祝言の今樣を謠ふ。

〔千歲舞〕

舞ひ、
千歲わが君は、千年經つても、いやあの天女が羽衣に纏を撫でたところで、巖の摺り減ることがないやうに、いつまでもいつまでもお榮え遊ばすことであらう。（ほんとに嬉しいことだ）――
『鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり』――」
と喜び舞って、舞ひ納める。

【三】
翁は愈々興に乘じた態で、三番叟に向ひ、
翁「催馬樂の總角ではないが、そなたとずんと離れて坐つてゐたが、面白うてならぬ。どうれ、そなたの側へ參りませう」
と立つて、

今までは三番叟と距つて坐つてゐたが、誠にめでたい、實に愉快だから、立上つてそなたの方へ行かうといふ意に用ゐたのである。

○千早振神のひこさの昔より―伊勢物語（新古今集にも）に住吉明神の神詠として載せた「睦ましと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」に據つたのであらう。千早振は神の枕詞。「ひこさ」は解せられない。

○そよやりちや―「そよや」は「それよ」といふ意味の發語。りちやは拍子言葉。

○萬歳樂―四人又は六人で舞ふめでたい舞樂の一。體源抄に、「萬歳樂中曲新樂、又名二鳥歌萬歳樂一」通典に「鳥歌萬歳樂武太后所レ作也、一説、武后時宮中養鳥、能如レ人言、又常稱二萬歳一、仍作レ樂以象二此舞一、又曰此曲賢王御時、來二鳳凰一鳴音也、件鳥音鳴二賢王萬歳一也、件音爲二此樂曲一」と。この説に從つて千年を經た鶴が萬歳樂を謠ふといつたのである。

○又萬代の池の龜は―池に住む萬代を經た龜はといふ意。

○三極―天地人の三才。易

地『參らうれんげりやとんどや

と大小前の方へ行く。この時三番叟も立ちて二人向合ひ、翁正面に向くと、三番叟は狂言柱の下に行きて下に居る。

翁『千早振る。神のひこさの昔より。久しかれとぞ祝ひ

地『そよやりちや

舞臺の眞中にて、兩袖を一ぱいに擴げて、

翁ツカ『凡そ千年の鶴は。萬歳樂と謠うたり。又萬代の池の龜は。甲に三極を備へたり。渚の砂。索索として朝の日の色を朗じ。瀧の水。冷々として夜の月鮮かに浮かんだり。天下泰平國土安穩。今日の御祈禱なり。在原や。なぞの。翁ども（と三番叟の方を見）

地『あれはなぞの翁ども。そやいづくの翁とうとう（と直し）

翁『わが君は、神代の昔から、幾久しくお榮え遊ばすやうに、神がお護りになつてゐるのだ。さうだ、さうだ。わが君を祝つて、千年の年を經た鶴が萬歳樂と謠つた。池の中の萬年を經た龜は、その甲に天地人の三才を現したのだ。水際の砂はさら〳〵として、朝日の影を映してゐる。瀧の水はひや〳〵として夜の月光を鮮かに宿してゐる。實にめでたいことだ。天下は太平で、國土は安全。――この詞を以て今日の御祈禱とするのだ」

といつてまた三番叟の方を見て、

翁『おや、あれはどういふ老人だ。一體何處の老人だらう。まあそれはそれとして、さうだ、今日はわが君の千年萬年お榮え

樂辭傳に「六爻之動、三極之道也」龜甲は占卜に用ゐられるから、かういつたのであらう。
○索々として―さら〳〵として。
○朝の日の色を朗じ―「朗じ」は映じの意か。
○在原や―在原とは業平を指し、伊勢物語の歌「翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる」に據つて、翁といふ意に用ゐたものか。しかしそれでは餘り無理な用ゐ方といはなければならない。或は、もとは「あれはそや」であつたものを「ありはそや」「ありはらや」と謠ひ誤つたのであらうか。
○なぞの―何ぞの。どういふ。
○そや―それや。それはまあ。

【四】

○この所より外へは―悦びを永くこの所に留めて、外へ遁がしはしない。「所千代までおはしませ」と同じ意。
○おんもふ―思ふの撥音便
○あど―狂言の脇役。「あとまふ」(率ゐる、伴ふ、誘ふ意)といふ古語から出た語であらうか。
○げんざう―見參。

翁『そよや

〔翁舞〕（神樂）

翁『千秋萬歳の。歡びの舞なれば。一舞まはう萬歳樂

地『萬歳樂

翁『萬歳樂

地『萬歳樂

と舞ひ納めて、扇をたゝみながらもとの座に歸りて面を取り、正面に出で、始めの如くに禮拜し、靜かに幕に入る。千歳も後より幕に入る。

【四】

三番叟、この間に折烏帽子を三番叟烏帽子にかへて、千歳幕に入ると、「あゝ」と掛聲しながら舞臺に走り出で、

三番「おゝさいおゝさい喜びありや。喜びありや。喜びありや。この所より外へはやらじとぞおんもふ

といひて【揉之段】を舞ひ、濟みて後見座にくつろぎ、黑式尉面をつけ、名乘座に立つ。面箱持も立ちて三番叟と向合ひ、

面箱「あゝらめでたや。物に心得たるあどの大夫殿に。ちよつとげんざう申さう

遊ばすお祝ひに舞ふのだから、一さし萬歳樂を舞はう」

といつて

〔神樂〕

を舞ひ、

翁「萬歳樂、萬歳樂、萬歳樂」

と謠ひ舞ひ納めて退場。

その後、三番叟もめでたく舞ふ。

三番「たがお立ちにて候ぞ
面箱「あどと仰せ候程に。某隨分物に心得たると存じ、おあどのために罷り立ちて候
三番「ほゝう
面箱「今日の御祝儀を千秋萬歳とめでたきやうに舞うてをりそへ。色の黑い尉殿
三番「今日の御祝儀を。この色の黑い尉が千秋萬歳とめでたいやうに舞ひ納めうずる事は。何より以て易う候。先あどの大夫殿には元の座敷へおも〳〵と御直り候へ
面箱「某座敷へ直らうずる事は。尉殿の舞より以て易う候。先御舞ひ候へ
三番「まづ御直り候へ
面箱「まづ御舞ひ候へ
三番「いやたゞ御直り候へ
面箱「あゝらめでたや。さあらば鈴を參らせう
三番「あらやうがましやな
面箱持鈴を三番叟に渡して橋懸より幕に入る。三番叟これより【鈴之段】を舞ひ、舞ひ納めて幕に入る。

○をりそへ―居り候へ。
○尉―老翁。尉は丈の借字で、丈は丈人、杖をつく老人の意。
○おも〳〵と―重々しく。
○御直り―お坐り。
○やうがまし―様子ありげである。晴れがましい。

〔考　異〕

諸　流　（五　流）下懸三流では、千歳を狂言方で勤める。

變　型　「翁」には、初日の式、二日の式、三日の式、四日の式があり、徳川時代の演能には、數日連續する場合にも、大抵毎日「翁」を演じたもので、初日から四日までその式を變へ、五日目には復もとの初日の式を演じた。なほ特殊の場合には、この外に、法會の舞、十二月往來、父尉延命冠者の式をも用ゐたが、現今では幾日續いても、初日に「翁」を演ずるだけで、それも四日の式を用ゐることとしてゐる。本文に掲げたのが即ちそれである。左に他の六式の詞章を掲げると、

初日　（點を施した語句が四日の式と變る語句）

翁『とうとうたらりたらりら。たらりあがりららりとう。地『ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう。翁『所千代までおはしませ。地『われらも千秋さぶらはう。翁『鶴と龜との齢にて。地『幸ひ心に任せたり。翁『とうとうたらりたらりら。地『ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう。千歳『鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水日は照るとも。地『絶えずとうたりやりうとうとうとう。千歳『絶えずとうたり。常にとうたり。千歳『所千代までおはしませ。地『われらも千秋さぶらはう。千歳『鶴と龜との齢にて。所は久しく榮え給ふべしや。鶴は千代經る君は如何經る。地『萬代こそ經れやりうとうとうとう。翁『總角やとんどや。地『尋ばかりやとんどや。翁『やあ坐して居たれども。地『參らうてんげりやとんどや。翁『松やさき。翁や先に生まれけん。いざ姫小松年比べせん。地『そよやりちや。翁『凡そ千年の鶴は。萬歳樂と謠うたり。又萬代の池の龜は。甲に三極を備へたり。渚の砂。索々として朝の日の色に朗じ。瀧の水。冷々として夜の月鮮かに浮んだり。天下泰平國土安穩。今日の御祈禱なり。在原や。なぞの。翁ども。地『あれはなぞの翁ども。そやいづくの翁とうとう。翁『そよや。翁『千秋萬歳の。祝ひの舞なれば。一舞まはう萬歳樂。地『萬歳樂。翁『萬歳樂。地『萬歳樂

二日　初日の式と、千歳の歌章を異にし、

千歳『千歳ましませ。千歳ましませ。松の木末に。地『鶴や住むなりやりうとうとうとう。千歳『鶴や住むなり。鶴や住むなり。千歳『君が千年を經ん事も。天つ少女の羽衣よ千歳ましませ松の梢に。地『鶴や住むなりやりうとうとうとう

三日　これも初日の式と、千歳の歌章を異にして、

千歳『萬歳ましませ。萬歳ましませ。巖が上に。地『龜や住むなりやりうとうとうとう。千歳『龜や住むなり龜や住むなり。千歳『君が萬代經ん事も。天つ少女の羽衣よ萬歳ましませ巖が上に。地『龜や住むなりやりうとうとうとう

法會舞　大體初日の式と同じで、たゞ地『あれはなぞの翁ども。そやいづの翁とうとう、翁『そよや」の次に翁『萬歳の龜これにあり。千年の松庭にあり。誠にめでたきためしには。石をぞ引くべかりける。地『君が代は、を加へ、翁『千秋萬歳の」に續く。

十二月往來　翁が左右の二人で、初日の式と同じ歌章を、始めの「とうとうたらり」は二人、「所千代まで」は左、「鶴と龜との」は右、「とうとうたらり」は二人、「總角や」は左、「やあ坐して」は右翁が謠ひ、次の地『參らうてんげりやとんどや」の次に、

左『やゝ尉殿に申すべきことの候。右『そもやそも何條事にて候ぞ。左『かゝるめでたきみぎんには十二月の往來こそめでたう候へ。右『それこそ尤もめでたう候へ。左『睦月の松の風。右『八絃の琴を調べたり。左『更衣の霞は。右『天つ少女の羽衣よ。左『彌生の桃の花。右『三千

年も猶榮ふる。左卯月の橘け。左常世の國も變らじ。左皐月の菖蒲草。左大御殿に葺いたり。左水無月の氷は。左聖の傳へなりける。左文月の梶の葉は。左幸をもとむる種とかや。左葉月の月はそも。左盡きせぬ秋と照らすなり。左長月の菊の花。左老いせぬ藥なるかも。左神無月の龍膽草は。左うち日さすなへるまはし。左霜月の梅の花。左新嘗祭る心葉。左師走のみ雪は。左豐年しらす祥瑞左やあ千歳千歳。左ちとせの千歳。左やあ萬歳萬歳。左よろづの萬歳。左み足らはします。御貢の御寶、數へて參らん。翁ども

を加へ、翁「松やさき。翁や先に生まれけん」以下「在原や。なぞの。翁ども」までを省き、地「あれはなぞの翁ども……」に續き、以下翁謠をすべて二人にて謠ふ。

父尉延命冠者　初日の式のうち、翁「松やさき」以下「そやいづくの翁とうとう」までを省き、父尉「あれはなぞの小冠者ぞや。地「釋迦牟尼佛の小冠者ぞや。生まれし所は忉利天。父尉「育つ所は鼻が。地「そのましまさば。とくしてましませ父の尉。親子と共に連れて御祈禱申さん。父尉「一天雲治まつて日月の影明し。雨うるほし風穏かに吹いて。時に隨つて旱魃水損の恐れ更になし。人は家々に樂しみの聲絶ゆる事なく。德は四海に餘り。悅びは日々に增し。上は五德の歌をうたひ舞ひ遊ぶ。そよや悅びに又悅びを重ぬれば。ともに嬉しく。地「物見ざりけりありうとうとう

を加ふ。

鸚鵡小町

觀（寶剛喜）

解說

【能柄】 三番目 一段劇能

【人物】 ワキ 陽成天皇勅使新大納言行家、シテ 小野小町

【所】 近江國 關寺邊

【時】 陽成天皇御宇（三月）

【作者】 作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】 陽成天皇が歌道に御執心の餘り、小野小町が老後落魄して、近江國關寺邊に侘住居してゐる由を聞し召され、新大納言行家を遣して、御憐みの御歌を賜つた。小町は鸚鵡返しの返歌を奉り、歌道の物語をし、わが身の零落を歎いた。そして行家の求めに應じて、業平の玉津島法樂の舞に倣似て舞を舞ひ、勅使と悲しい別れを告げた。

【出典】 小野小町が老後零落したといふ傳說については、「卒都婆小町」の解說に述べることとして、こゝには鸚鵡返しの說話について見ると、阿佛鈔に、

鸚鵡返しといふ事、歌の返歌にあり。唐土に鸚鵡といふ鳥は、人の

物云ふ詞を眞似て鳴く鳥なり。その如く人の方にり來りたる歌を、そのうちの文字一つ二つ取りかへて、わが歌になして返しするを、鸚鵡返しと申すなり。……小町老い衰へて後、大内ゆかしげに見物申しけるに、大内の女房達見て、小町がはてなるといひ、又それにはなきなどと言ひ爭ひけるが、或女房のいひ給ふやうは、「歌をよみかけて心を見給へ、小町ならば返歌をすべし」といひければ、歌をよみかけたるに、

もとの身のありしすみかにあらねどもこの玉簾の内やゆかしき

小町はもと大内には住まぬなり。玉簾の内とはすだれの内の事なり。この返しに、

もとの身のありしすみかにあらねどもこの玉簾の内ぞゆかしき

かやうにあるは、皆鸚鵡返しなり。

とある。但し、本曲に引いた歌は、民部卿成範の事として、十訓抄第一「可レ定二心操・振舞一事」に、

成範民部卿、事ありて後、召し歸されて、内裡に參られたりけるに、昔は女房の入立にてありし人の、今はさしもなかりければ、女房の中より、昔を思ひ出でて、

雲の上はありし昔に變らねど見し玉だれの内やゆかしき

とよみて出だしたりけるを、返事せんとて、燈爐のきはに寄りけるほどに、小松の大臣の參り給ひければ、急ぎたちのくとて、燈爐の火のかきあげの木のはしにて、や文字をけちて、そばにぞ文字ばかりを書きて、みすの内へさし入れて出でられにけり。女房とりて見るに、文字一つにて、返しをせられたりける、ありがたかりけり。

とあつて、本曲の作者はこの二傳說を取交せて構想したものであらう。

【概評】本曲は三番目物であるが、劇能の脚色で、複式夢幻能とはやゝ趣を異にしてゐるが、序段に次第及び道行を缺いてゐるだけで、外に著しい特異な點はない。ワキ・シテの掛合以後は四段から成り、その第一段（第三節）には小町落魄の樣を描き、第二段（第四節）には本曲の主眼たる鸚鵡返しの歌について述べ、第三段（第五節）には歌道特に鸚鵡返しの歌體に就て說き、最後（第六節）にシテ小町をして舞を演せしめることとしてゐる。かういふ行き方は謠曲として一般的な形であるが、これを他の小町物と比較すると、その落魄を描くことに於ては「卒都婆小町」の方が深刻であり、その歌道を說くことに於ては「關寺小町」の方が精彩に富み、その演舞に就ては

〔草子洗小町〕の方が意義が深く、結局鸚鵡返しの歌といふ説話以外に、本曲の特色は認められない。小町物の現行曲のうちでは、劣つた作であるといはなければなるまい。

【一】

○陽成院―第五十七代の天皇。清和天皇の太子で、貞觀十八年御即位、元慶八年御讓位、天曆三年崩御。御年八十二。

○新大納言行家―謠曲作者の假作であらう。

○敷島の道―和歌の道。

○小野の良實―平安初期の漢詩人小野篁の子であると傳へた。小野氏系圖に「出羽守良實、小野篁二男、大内記石見守俊生之弟也、一本當澄、又名二常澄一、有二女二人一、妹名二小町一、歌人也」

○小野の小町―古今集序に六歌仙の一として擧げられた著名の歌人であるが、その傳記は明らかでない。

○關寺―近江國逢坂山の東にあつた寺。小町が關寺にゐた事は〔關寺小町〕に記されてゐる。

【二】

名乘笛にて、ワキ新大納言行家、風折烏帽子・着附厚板・狩衣・大口・腰帶・扇の裝束にて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。さてもわが君敷島の道に御心をかけられ。普く歌を撰ぜられ候へども。叡慮に叶ふ歌なし。ここに出羽の國小野の良實が女に小野の小町。かれは雙びなき歌の上手にて候が。今は百年の姥となりて。關寺邊にある由聞し召し及ばれ。帝より御憐みの御歌を下され候。その返歌により。重ねて題を下すべきとの宣旨に任せ唯今關寺邊小野の小町が方へと急ぎ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ小野小町、面姥・姥髮・無色臺帶・襟白・着附摺箔・無色唐織壺折・扇の裝束にて笠を被り杖をつき一出で、橋懸一の松に立ち、

【一】

舞臺は初め京都で、ワキ陽成天皇の勅使新大納言行家登場、

行家「私は陽成天皇にお仕へ申してゐる新大納言行家です。さて、わが君には和歌に御心をお懸け遊ばされ、廣く人々の歌を索めてお撰びになりましたが、これはと御感心遊ばすやうな歌がありません。ところが、出羽國の小野良實の女に小野小町といふ者があつて、これは天下に雙ぶ者のない歌の上手ですが、今は非常な老婆となつて、關寺の邊にゐるといふことを、お聞き遊ばされて、帝より御憐みの御歌を賜はつたのです。そして、その返歌の出來榮によつては、また題を下げて、歌を詠ませようと仰せ出されたので、これから關寺の邊にゐる小野小町の許へ急いで行くのです」

と見物人に自己紹介して、事件の發端を述べ、やがて行家は關寺に着いた態で、舞臺は近江の關寺となる。

【三】

シテ小野小町は街道からわが庵へ歸つて來る態で杖をつきながら橋懸に出で、

シテ一聲。身は一人。われは誰をか松坂や。四の宮河原四の辻。いつ又六つの。巷ならん

シテサシ。昔は芙蓉の花たりし身なれども。今は藜藿の草となる。顔ばせは憔悴と衰へ。膚は凍梨の梨の如し。杖つくならでは力もなし。人を恨み身をかこち。泣いつ笑うつ安からねば。物狂と人はいふ

シテ上歌。さりとては。捨てぬ命の身に添ひて（と舞臺へ進み）。捨てぬ命の身に添ひて。面影に九十九髪。かからざりせばかからじと昔を戀ふる忍び音の。夢は寢覺の長き夜を。飽き果てたりなわが心

と舞臺に入り常座に立つ。

【三】

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなるは小町にてあるか

○身は一人―この一の字によつて、四の宮河原四の辻いつ又六つの」と、數字を重ねて文のあやとした。

○誰をか松坂や―誰をか待つを松にいひかけた。松坂は山城國宇治郡山科村にあり京都から滋賀に入る坂路

○四の宮河原―同じく山科村にある。

○四の辻―粟田口十禪師辻をいふ。

○六つの巷―衆生が生死輪廻する世界、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道をいふ。いつ死んで冥途に迷ふことであらうといふ意。

○昔は芙蓉の花たりし…芙蓉は蓮、藜藿はあかざといふ雜草。李太白の詩「昔作芙蓉花、今爲藜藿草」以レ色事二他人一、能得二幾時好一」に據つたか。玉造小町子壯衰書にも「嘴嘴面子疑三芙蓉之浮一曉淚一」とある。

○顔ばせは憔悴と衰へ…玉造小町子壯衰書に「容顏憔悴、身體疲羸、頭如二霜蓬一、膚似二凍梨一」とあるに據る。憔悴はやつれ衰へたこと。

○凍梨の梨―「凍梨の如し」とあるべきものを、殊更梨

小町　自分はほんとの一人ぼつちで、誰を待つといふあてもなく、或は松阪や四宮河原、又は四の辻のあたりをさ迷ひ歩いてゐるが、やがてはこの世たらぬ冥途の六道の辻にさ迷ふことであらう。

思へば自分も昔は、蓮の花のやうに美しかつたのが、今はあかざのやうな有樣で顔はやつれ果て、膚は氷つた梨のやうにざら〳〵と萎びてしまつて、杖を突かないでは、歩く力もないのです。そして、人を恨んだり、わが身を歎いたり、泣くかと思へば笑ひ、少しも心の靜かな時がないので、世間の者は皆自分を氣違ひだといつてゐます。

このやうな身上になりながらも、捨てようにも捨てられない命が、身について離れず、たゞ昔の面影が眼にちらついて、あの時あゝしなかつたならば、かうもならなかつたであらうと、とかく昔が戀しくて、忍び泣きに泣くものだから、夜も碌々寢ることが出來ない。あゝこのやうなつまらない命を生き長らへて、何の甲斐があらう。われながらこの世がいやになつてしまひました」

と愚痴をこぼしながら開寺へ歸つて來た態で舞臺に入る。

の字を重ねたのである。凍梨は凍つた梨で、ざら〳〵としなびた膚の形容。
○かこち—愚痴をいふこと
○捨てぬ命の身に添ひて—捨てようとしても捨てられない命が、身について離れないといふ意。
○面影に九十九髪—昔の事が面影につくを九十九髪にいひかけた。九十九髪は「つくも—といふ海藻のやうに亂れ縮れた老人の髪。伊勢物語の歌に「百年に一年足らぬ九十九髪われを戀ふらし面影に見ゆ」
○かからざりせば—髪のかゝるにいひかけて、後拾遺集戀四の歌「見るたびに鏡の影のつらきかなかゝらざりせばかゝらましやは」を引いた。
○忍び音の—忍び音に泣くを昔を忍んで寢るにいひかけた。
○夢は寢覺の—寢ても寢られず、夢が覺めがちであるとの意。
○長き夜を—長き夜を長き世にいひかけた。長き世は長生の意。
【三】
○雲の上人—朝廷に仕へる高官の人。

シテ「見奉れば雲の上人にてましますが。小町と承り候かや何事にて候ぞ
ワキ「さてこの程は何處を住家と定めけるぞ
シテ「誰留むるとはなけれども。唯關寺邊に日數を送り候
ワキ「げにげに關寺は。さすがに都遠からで。閑居には面白き所なり
シテ「前には牛馬の通ひ路あつて。貴きも行き賤しきも過ぎ
ワキ「後には靈驗の山高うして（と脇正面を見）
シテ「しかも道もなく
ワキ「春は
シテ「春霞
地上歌「立ち出で見れば深山邊の。立ち出で見れば深山邊の。梢にかかる白雲は（と右の方を見）。花か

【三】
行家、小町の姿を見て、
行家「おい、そなたは小町か」
小町「お見上げすれば、雲上人でいらつしやいますが、小町とお呼びになつたのでございますか、何の御用でございます」
行家「この頃はどこを住家としてゐるのだ」
小町「誰に引留められたわけでもありませんが、たゞ關寺のあたりにその日その日を送つて居ります」
行家「いかにも、この關寺は都から餘り遠くもなくて、靜かに暮らすのには、面白い所だ」
小町「前には牛馬の通ふ賑やかな街道があつて、貴い人も賤しい者も通りますし……」
行家「後には靈驗のあらたかな比叡山が高く聳えてゐるし……」
小町「しかも、こゝには道もなくて人々の往來する煩しさもなく、春は春霞がたなびいて、遠くを見ますと、深山の梢にかかる白雲までが、花のやうに見えて面白いことでございます。それから、松風も花の香に匂ひますし、枕もとにも花が散つて來ますし、たゞもう一面白雲のやう

○誰留むるとはなけれども―關は人を留める所であるが、自分は誰にも引留められたのではないがといふ意。
○牛馬の通路―大津へ通ふ街道を指す。
○靈驗の山―延暦寺のある比叡山を指した。
○春霞立ち出で見れば―古歌を引いたのでなからうかと思ふが、見當らない。春霞立つを立ち出でにいひかけた。
○松風も匂ひ―西三條實隆集に「散りかゝる花のさゞ波吹きまぜて松風にほふ志賀の辛崎」
○志賀辛崎―辛崎は近江國滋賀郡の湖岸にあり、その一つ松は近江八景の一。志賀はこの邊一體の古名で、こゝでは辛崎に冠したのである。
○身の類ひ―たゞ一本だけ生き殘つてゐる老松は、獨り身で老い衰へた自分の身上に似てゐるとの意。
○石山の觀世音―近江國滋賀郡にある石山寺の如意輪觀音。石山の秋月も近江八景の一。
○勢田の長橋―勢田は近江國栗太郡にあり、その長橋は琵琶湖の湖尻に架けたも

と見えて面白や。松風も匂ひ（と正面に出で）。枕に花散りて。それとばかりに白雲の色香面白き景色かな（と眺め）。北に出づれば湖の志賀辛崎の一つ松は。身の類ひなるものを（と靜かに歩み）。東に向へばありがたや（と東に向き合掌）。石山の觀世音勢田の長橋は狂人の。つれなき命のかかるためしなるべし

と常座に立つ。ワキ地上歌の初めに下に居る。

【四】

シテ「かくて都の戀しき時は。柴の庵に暫し留むべき友もなければ。「たより梨の杖に縋り。都路に出でて物を乞ふ。「乞ひ得ぬ時は涙の關寺に歸り候

としをりながら下に居り、杖を下に置き笠を脱ぐ。ワキ、シテに向ひ、

ワキ「いかに小町。さて今も歌を詠み候べきか

シテ「われ古百家仙洞の交はりたりし時こそ。事な花盛りで、色香の勝れて面白いことでございます。でも、北の方に出ますと、唐崎の一つ松がありまして、あのたゞ一本の老松を見ますと、頼るべもない老の身に引き比べられて悲しうございますが又東の方を見ますれば、石山の觀世音が拜まれてありがたいことでございます。しかしその向ふの瀬田の長橋を見ますと又しても、この氣違ひ婆がつまらない命を生き永らへてゐるのに似てゐるやうな氣持がするのでございます」

【四】

小町「かうして、都の戀しい時は、この柴の庵には暫くといつて引留めてくれる友もないことでございますから、誰に淺慮もなく、その代り誰を頼りにするものもなく、たゞ杖に縋つて、都路に出て、物を乞ひ受けるのでございます。そして、誰からも貰へない時は、涙ながらに、またこの關寺に歸つてくるのでございます」

といつて、杖を置いて坐る。

行案「ところで小町、そなたは今でも歌を詠むか」

小町「私が昔宮中や上皇樣の御所で、高位

の。瀬田の夕照も八景の一
○狂人の―小町自身をいつたのである。
○かゝるためし―長橋の長いにつけてつれなき命の長いことを怨んだのである。
「かゝる」は橋の縁語。
【四】
○たより梨の―便り無しを梨にいひかけた。
○涙の關寺―涙を握きあへないといひかけて、關寺とつゞけた。
○百家仙洞―百家は朝廷に出仕する百官の意。仙洞は上皇の御所。百に對し千と重ねて仙洞といひかけた。但し百家を「もゝか」と誤ふのは變で、或は他の語を傳へ誤つたのかも知れない。
○事によそへて―物事に寄せなぞらへて。
○花薄穗に出でそめて―古今集序の「花薄穗に出すべき事にもあらず」を借りて人生の秋深くなり、わが身の老衰した意に用ゐた。
○霜のかかれる―霜のかゝるを「このやうな」といふ意の「かゝる」にいひかけた。
○さだかに―確かに。はつきりと。

によそへて歌をも詠みしが。今は花薄穗に出でそめて。霜のかかれる有樣にて。浮世にながらふるばかりにて候

ワキ「げに尤も道理なり。帝より御憐みの御歌を下されて候。これこれ見候へ

と懷中より文を出し、シテへ寄り、これを示す。

シテ「何と帝より御憐みの御歌を下されたると候や（と文を受け）。あらありがたや候（と捧げてこれを開き）。老眼と申し文字もさだかに見えわかず候。それにて遊ばされ候へ（と文をワキに返す）

ワキ「さらば聞き候へ

シテ「いかにも高らかに遊ばされ候へ

ワキ文を見て

ワキ「雲の上は

シテ「雲の上は

ワキ「雲の上は。ありし昔に變らねど。見し玉だ

の方々と御交際してゐました時には、何かの時折につけて歌も詠みましたが、今は花薄の穗の出た秋の末のやうな、やがて霜枯れに枯れてしまひさうな身上で、歌などは思ひも寄らず、漸くのこと、この世に生き永らへてゐるばかりでございます」

行家「いかにも尤もな、無理からぬことだ。忝くも帝から御憐みの御歌を賜つたのだ。さあこれを拜見なさい」

と帝の御歌を示す。

小町「何と仰しやいます。帝から御憐みの御歌をば賜つたのでございますか。あゝありがたいことでございます」

と御歌を戴いて拜し、

小町「老眼で、御歌の文字もはつきり分りかねます。どうかあなた、そこでお詠み下さいませ」

行家「それではお聞きなさい」

小町「どうか高い聲でお詠み下さい」

行家「――『雲の上は……

小町「――『雲の上は……

と行家が一句を讀む毎にその句を繰返していふ。

行家「――『雲の上はありし昔に變らねど、見し玉だれのうちやゆかしき』

○遊ばされ候へ―お讀み下さいといふ意。
○雲の上はありし昔に變らねど―十訓抄に記された歌。委しくは解説に掲げた。
○古き流れを汲んで―古今集序に「小野小町は、古の衣通姫のながれなり」とある。に據る。
○恐れなり―天皇に對し奉つて恐れ多い。
○所詮―つまり。
○心の足らぬ―歌の意味の十分にいひ表されない。

れの。内やゆかしき

シテ「あら面白の御歌や候。『悲しやな古き流れを汲んで。水上を正すとすれど。歌詠むべしとも思はれず。「又申さぬ時は恐れなり。所詮この返歌を唯一字にて申さう

ワキ「不思議の事を申す者かな。それ歌は三十一字を連ねてだに。心の足らぬ歌もあるに。一字の返歌と申す事。『これも狂氣の故やらん

シテ「いやぞといふ文字こそ返歌なれ

ワキ「ぞといふ文字とはさていかに

シテ「さらば帝の御歌を。詠吟せさせ給ふべし

ワキ「不審ながらもさし上げて（と文を見て）。『雲の上は。ありし昔に變らねど。見し玉だれの。内やゆかしき

シテ「さればこそ内やゆかしきをひきのけて。内

（宮中の樣樣はお前の宮仕して居つた昔の頃と何も變りはないが、お前は自分の居馴れた御所の中をなつかしくは思はないか）と讀む。

小町「あゝ面白い御歌でございます。ところで、私は悲しいことに、古の衣通姫の流を引いた者として、あのやうな正しい歌道を保ちたいと思ひましても、もはや歌も詠めさうには思はれないのでございます。と申して、御返歌を申し上げないでは、又恐入つたことでございますから結局たゞ一字でこの御返歌を申しあげませう」

行家「不思議なことをいふ人だ。一體歌といふものは、三十一文字を連ねてさへ、意味のいひ足りないものもあるのに、一字の返歌を申すとは、これも、氣が違つてゐるから、そのやうな事を申すのか知らん」

小町「いえ、ぞといふ文字が返歌でございます」

行家「ぞといふ文字とは、一體どういふことなのだ」

小町「それでは、帝の御歌をお詠みなさいませ」

行家「不審なことだが、それでは帝の御歌

○鸚鵡返し―人からよみかけられたる歌を一二字だけ變へて返歌するもの。解説に阿佛抄の記事を揚げて置いた。

○ばひ―奪ひの畧。

○天の恐れ―天罰の恐れ。

【五】

○長歌―五字句・七字句が六句以上續いて最後を七字句で結ぶ歌體。即ち次の五句の短歌より上多いもの。五・七・五・七・七の二句の短歌は五・七の十文字以上多いもの。

○短歌―五・七・五・七・七の三十一文字の歌。

○旋頭歌―五・七・七、五・七・七・七の三十八文字の歌體。例へば古今集の一うち渡すをちかた人に物申すわれ、そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」

○折句―五字の語を一字づつ毎句の頭に置いて詠む歌體。例へば「かきつばた」を詠んだ在原業平の「から衣きつつなれにしつましあればはるゝ〳〵來ぬるたびをしぞ思ふ」

○誹諧歌―滑稽味を持つた歌。例へば古今集素性法師の「山吹の花色ごろも主やたれ問へど答へずくちなし」

○混本歌―旋頭歌の異名であるなどとの説もあるが、普通には五・七・五・七・七の二十四文字の歌體であるといはれてゐる。例へば安部清

ぞゆかしきと詠む時は。小町が詠みたる返歌なり

ワキ『さて古もかかるためしのあるやらん

シテ『なう鸚鵡返しといふ事は

地上歌『この歌の樣を申すなり。帝の御歌を。ばひの道ならば神も許しおはしませ（と合掌）。貴からずして。高位に交はるといふ事。唯和歌の德とかや唯和歌の德とかや

ワキ「ばひ參らせて」に文を懷中し、上歌終ると脇座に歸り下に居る。

【五】

地クリ『それ歌の樣を尋ぬるに。長歌短歌旋頭歌。折句誹諧混本歌鸚鵡返し。廻文歌なり

シテサシ『なかんづく鸚鵡返しといふ事。唐土に一つの鳥あり

をお詠み申しあげて見よう――

『雲の上はありし昔に變らねど、見し玉だれのうちやゆかしき』――」

小町「そこでございます、その『内やゆかしき』のやをとりのけて『内ぞゆかしき』と詠みますと、私の詠んだ返歌となるのでございます」

行家「すると、昔にもこのやうな例があるのであらうか」

小町「さやう、鸚鵡返しといふのが、この歌の樣を申すのでございます。帝の御歌をお奪ひ申して返歌を詠みましては、どのやうな天罰があらうかと、恐しく思はれますが、和歌の道の爲なれば、神樣もお許し下さいませう。どうぞ神樣お許し下さいませ。まことに、賤しい者も高位の方々と交はることの出來るのは、和歌の德でございます」

【五】

小町「一體和歌の體について考へますと、長歌、短歌、旋頭歌、折句、誹諧歌、混本歌、鸚鵡返し、廻文歌などありますがその中で、鸚鵡返しといふ事は、支那に一種の鳥がありまして、その名を鸚鵡と申します。この鳥は人の言ふ言葉を眞似て、その言葉をそのまゝ自分の囀り聲と致します。例へば何々と或言葉をいへばその言葉の通りに答へます。この鸚鵡の

シテ『和光の光玉津島
地『廻らす袖や。波がへり

〔序舞〕

シテ『和歌の浦に。潮滿ち來れば。かたをなみの
地『蘆邊をさして。田鶴鳴き渡る鳴き渡る
シテ『立つ名もよしなや忍び音の
地『立つ名もよしなや忍び音の。月には愛でじ
シテ『これぞこの
地『積れば人の
シテ『老となるものを
地『かほどに早き光の陰の。時人を待たぬ。習ひとは白波の
シテ『あら戀しの昔やな

と下に居てしをる。

地『かくてこの日も暮れ行くままに。さらばとい

○まなび候へ、眞似て舞へとの意。
○夜をこめて…夜の明けないうちに。
○稻荷山―京都の南にある。夜をこめて出づを稻荷にいひかけた。
○葛葉の里―河内國交野郡にある。
○うら近く…葛葉の裏を浦にいひかけた。
○和歌―紀伊國の和歌浦。
○吹上―和歌浦に續いて和歌山市の西南にある吹上濱
○思ひめぐらす―袖を廻らすといひかけて、その當時の樣を思ひ出せばといつたのである。
○信夫摺―忍草の葉で模樣を布帛に摺りつけたもの。伊勢物語に「業平信夫摺の狩衣をなん著たりける」
○木賊色の狩衣―木賊色は濃綠色、狩衣はもと狩などの時に着たもので、後に官服となつた。こゝでは忍草を木賊色に摺りつけた狩衣といふ意であらう。
○大紋の袴―藤の大紋を染めた差貫袴。
○そば―袴の裾をいふ。
○風折烏帽子―折烏帽子の一種。
○和光の光―和光は和光同塵の略で、神佛が衆生濟度

〔序舞〕

を舞ひ、

小町『――『和歌の浦に潮滿ちくれば潟をなみ、蘆邊をさして田鶴鳴き渡る』

（和歌浦に潮がさしてくると、干潟がなくなつてしまふので、鶴が蘆の生い茂つてゐる方へ鳴いて行く）

『立つ名もよしなや忍び音の、月には愛でじこれぞこの、積れば人の老となるものを』

（人に忍んだ戀が顯れて、浮名が立つても構ひはせぬが、月の眺めを愛することはしまい。月日が積れば、人は年を寄つてしまふから）

と謠ひ舞ひ、この老といふ語が氣になつた態で、

小町「ほんとに月日の經つのは早いものだのに、時は人の爲に少しも待つてくれないといふことに氣がつかなかつた。あゝ昔が戀しい」

と舞を止めて歎き泣く。

そのうちに、日も暮れて來たので、新大納言行家が、

行家「それではお別れしよう」

の爲に德光を和らげて世塵に交はり給ふこと。その光を承けて玉と續けた。
○波がへり—舞の手。
○和歌の浦に潮滿ち來れば潟をなみの蘆邊をさして鶴鳴き渡る—萬葉集卷六、幸二紀伊國一時山部宿禰赤人作歌の返歌。第三句に「潟をなみの」とあるのは衍字。「かたをなみ」は潮が滿ちて干潟がなくなるとの意。
○立つ名もよしや—鶴の音を重ねて立つといつた。忍び音に泣いて戀ひ慕つてゐたが、浮名が立つならば、それでも構はないとの意。
○月には愛でじこれぞこの—古今集(伊勢物語にも)在原業平の歌「おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」を引いた。
○時人を待たぬ—陶淵明の詩に「盛年不二重來一、一日難二再晨一、及レ時當二勉勵一、歲月不レ待レ人」
○白波の—知らぬを白波にいひかけた。
○あら戀しの—波の荒きを感動詞のあらにいひかけた。

ひて。行家都に歸りければ

とワキ立ちて橋懸へ行く。後見その間にシテの烏帽子・長絹を脫がせ、シテはモギドウになる。

シテ『小町も今は。これまでなりと

と杖を力に立ち、

地『杖に縋りてよろよろと。立ち別れ行く袖の涙。立ち別れ行く袖の涙も關寺の。柴の庵に。歸りけり

と橋懸のワキを見送りて、しをりながら柴の庵に歸る態にて二三足出で、留拍子を踏む。

(現今觀世流では素謠ばかりで、能には演じないが、他流では演奏し、梅若でも大正十四年五月に實演したから、その型附を畧記した)

といつて都に歸つて行くと、小町も

小町「では、お別れ申します」

と、杖に縋つて、よろ〳〵と立ち、別れを惜しむ涙はせきとめられず、涙に袖を濡らしながら、關寺の柴の庵に歸つた。

柴の庵に歸る態にて退場。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ロキ これは陽成院に……帝より御憐みの（剛ナシ）御歌を……【四】シテ「あら面白の御歌や候（寶ナシ）

古謠本（貞享三年本）

異同がない

阿・漕（あこぎ）

觀（寶　春　剛　喜）

解　説

【能柄】　四番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　日向國の者、**前シテ**　漁翁（阿漕の靈）、**狂言**　阿漕浦の者、**後シテ**　漁夫阿漕

【所】　伊勢國　阿漕浦

【時】　秋（九月）

【異稱】　古謠本には〔阿濃〕〔阿古貴〕〔阿古木〕などの字を當てたものもある。

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。言繼卿記天文元年五月一日の條に演能のこと、言經卿記文祿四年四月一日の條に註釋のことが出てゐる。

【梗概】　日向國の男が伊勢參宮に出掛けて、阿漕が浦に着き、折柄來合せた漁翁に浦の名のいはれを聞くと、漁翁は、この浦は太神宮御膳調進の網を引く所で、禁漁となつてゐるのを、阿漕が度々密漁したことが顯れて、この沖に沈められたことから出た名であると答へ、その回向を賴ん

で消え失せる。日向の男が法華經を讀誦してゐると、その夢に阿漕の靈が現れ、娑婆で網を引いた樣、今地獄で苦しむ樣を示して、海底に入る。

【出典】この傳說の原據は、古今和歌六帖に、鯛といふ題で揭げた、讀人知らずの歌、

逢ふことをあこぎが島にひく網のたび重ならば人も知りなん

から出たもので、これが轉じて、源平盛衰記卷八「讃岐院事」に、

さても西行發心の起りを尋ぬれば、源は戀故とぞ承る。申すも恐れある上臈女房を思懸け進らせたりけるを、「あこぎの浦ぞ」と云ふ仰せを蒙りて思ひ切り、官位は春の夜見ほてぬ夢と思ひ成し、樂み榮えは秋の夜の月西へと准らへて、有爲の世の契りを遁れつゝ、無爲の道にぞ入りにける。

伊勢の海あこぎが浦に引く網も度重なれば人もこそ知れ

と云ふ心は、彼の阿漕の浦には神の誓ひにて、年に一度の外は網を引かずとかや。此の仰せを承つて西行が讀みける。

思ひきや富士の高根に一夜ねて雲の上なる月を見んとは

此の歌の心を思ふには、一夜の御契りは有りけるにや、重ねて聞食す事の有りければこそ阿漕とは仰せけめ、情なかりける事共也。

とあるに據つて、謠曲作者が阿漕といふ漁夫の密漁を創案したのであらう。この漁夫阿漕の事については、勢陽雜記・阿古木草子・諸國里人談などに、謠曲と同樣の事を記してゐるが、それらは後世の著述で、謠曲によつて記述したものである。

【概評】本曲の脚色は複式能として一般的な形式をとつたものであるが、たゞ前段シテの語の次に地謠があつて、その次に「片クセ」を加へてゐるのが、やゝ變つた點である。文段の推移も、前段シテワキの掛合（第三節）に阿漕の和歌について語り、次（第四節）に阿漕の漁夫について述べ、その次（第五節）にこれと關聯した故事を語り、ロンギ（第六節）に前ジテの眞性を明らかにしてゐるのは、圓滑な進展であり、後段の、密漁のイロへから地獄の苦患に移るのも、妥當な變化であると思ふ。たゞこれを本曲に相似た「鵜飼」に比べると、かれはワキを日蓮として、佛法の功德を强調してゐるだけ、作の趣旨が徹底してゐるが、本曲にはさうした力が弱く、殊に觀世流ではワキを旅僧ともせず、在俗の旅人としてゐる爲に、一層力が弱い。更にまたこれを同じく殺生の者を主材とした「善知鳥」と比べて見ても、彼の方が凄慘な深刻味を持つてゐる。本曲がかうした悽慘味の少い、むしろ優雅な趣の漂うてゐるのは、その主材が

【一】○心づくしの秋風に―古今集讀人知らずの歌「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」及び源氏物語須磨の卷「須磨には いとゞ心づくしの秋風に海は少し遠けれど」に據つて綴つた。心づくしとは人の心を動かしあはれの情を誘ふことで、これを地名の紫にいひかけた。○月ぞすゝなき―まだ初秋で落葉が少く、從つて木葉が茂つてゐて、月の光が十分に見えないのである。○日向の國の者―古謠本及び他流では僧としてゐる。○日に向ふ―日向の國の字を引延べて、日の出る東方に旅をする意にいひかけた。○八重の潮路―遠い海路。○淡路潟通ふ千鳥の―波の泡を淡路にいひかけ、金葉集源兼昌の歌「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜ねざめぬ須磨の關守」を引いた。○須磨の浦―攝津國武庫郡にある。○寢覺をするといひかけた。

【一】次第の囃子にて、ワキ日向國の男、着附段鬘斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて出で名乘座に立ち、囃子座の方に向きて、

ワキ次第『心づくしの秋風に。心づくしの秋風に。木の間の、月ぞすくなき

地取に正面に向き、

ワキ「これは九州日向の國の者にて候。われ未だ伊勢大神宮に參らず候程に。唯今思ひ立ちて候

ワキ道行『日に向ふ。國の浦舟漕ぎ出でて。國の浦舟漕ぎ出でて。八重の潮路を遙々と分けこし波の淡路潟。通ふ千鳥の聲聞きて。旅の寢覺を須磨の浦。關の戸ともに明け暮れて。阿漕が浦に着きにけり阿漕が浦に着きにけり

「通ふ千鳥の聲聞きて」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸りて、阿漕浦に着きたる心。道行濟みてまた正面に向き

ワキ「急ぎ候程に。これははや伊勢の國安濃の郡

【一】前段

舞臺は初め日向國で、ワキ日向國の男登場。

男「人の心にあはれを感ぜしめる秋風が吹いて來たが、まだ秋になつたばかりなので、木の葉も散り落ちず、月の光が木の間隱れにさしてゐることだ」

ミ次第にこの頃の景趣を述べ、

男「私は九州日向國の者ですが、まだ伊勢大神宮に參詣しないので、今度思ひ立つて、これから出掛けるのです」

ミ見物人に自己紹介を、

男「日向國の濱邊から舟を漕ぎ出して、東に向ひ、廣々とした遠い海路を渡つて來て、淡路潟のあたりでは、そのあたりを往き來する千鳥の鳴く聲を聞いて、旅の夢をさまし、やがて須磨の浦をも過ぎ、かうして、船の中にその日その日を過してゐるうちに阿漕の浦に着いた」

ミ道々の旅情を述べてゐるうちに、阿漕に着いた想で、舞臺は伊勢國阿漕浦となる。

男「途を急いだので、はやこゝは伊勢國

○關の戸―須磨は關所のあつた所で、續拾遺集藤原爲氏の歌に―須磨の浦や關の戸かけて立つ波の月に吹きこす秋の汐風―とあるので、須磨を承けて關の戸を出し、戸を開けるにかけて「明け暮れて」と續けた。

○阿漕が浦―伊勢國津市東方の海岸。この邊の郡名安濃を託つたのであるといふ。

【二】

○波ならで―波の爲に袖が濡れるのではなく、悲しい涙の爲に絶えず袖が濡れて乾く隙もないとの意。

○身の秋―いつと限らまし―秋は人に哀しい情を起させるものであるが、自分は常に哀し涙にくれて、一年中秋のやうなものであるとの意。

○職を營む―人間らしい職業に從ふ。

○田夫―農夫。

○殺生―佛教五戒の一。漁獵を業とするからかういつた。

○拙かりける―前生の戒行の拙かつた。運のわるい。あさましい。

【三】

○尉―老翁。尉は丈の借字、丈は丈夫で、丈夫は杖をつく老人の意であると、安齋隨筆にいふ。

とやらん申し候。暫く人を相待ち、所の名所をも尋ねばやと思ひ候

といひて脇座に行き、下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ漁翁、面癸尉・尉髮・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて、釣竿をかたげて出で、常座に立ちて、

シテ一聲「波ならで。乾す隙もなき海士衣、身の秋いつと。限らまし

シテサシ「それ世を渡る習ひ。われ一人に限らねども、せめては職を營む田夫ともならず。かく淺ましき殺生の家に生まれ。明暮物の命を殺す事の悲しさよ（と面を伏せ）。「拙かりける殺生かなとは思へども。浮世の業にて候程に。今日もまた釣に出でて候

といひて釣竿を下す。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる尉殿に尋ね申すべき事の候

の安濃郡とかいふ所です。暫くこゝで人の來るのを待つてゐて、このあたりの名所を尋ねませう」

ミ、人の來るのを待つてゐる體。

【二】

シテ阿漕の浦、漁翁の姿で釣竿を持つて登場。

漁翁「自分は波のためにこの漁師衣を濡らすだけではない、愚痴の涙で袖を濡らしてゐるのだから、いつだつて着物の乾く隙はない、まるで、一年中悲しみの秋のやうなものだ」

ミ感慨を述べ、

漁翁「一體この世を暮らして行くために、苦しい働きをしてゐるものは、自分一人に限つたわけではないが、同じ苦しむにしても、せめて人間らしい職業を營む百姓にでもなればまだしもだが、このやうな淺ましい殺生を仕事にする家に生まれて、明けても暮れても、物の命をとつてゐるのは、ほんとに悲しいことだ。われながら前生のわるいあさましいことだとは思つてゐるが、これも浮世を渡る仕事だから是非もなく、今日も亦釣りに出かけることだ」

ミ漁場に近づいてくる。日向國の男はこれを見て、

【三】

男「もうし、おぢいさん、お尋ねしたいことがあるのですが……」

漁翁「わたしをお呼びになるのですか。何

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「伊勢の國にとりても。この浦をば如何なる所と申し候ぞ

シテ「さん候この所をば阿漕が浦と申し候

ワキ「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや古き歌に。『伊勢の海阿漕が浦に引く網も。「度重なれば顯れにけり。かやうに詠まれし浦なるぞや。『あら面白や候

シテ「あらやさしの旅人や。所の和歌なればなどかは知らで候べき。かの六帖の歌に。『逢ふことも阿漕が浦に引く網も。「度重ならば顯れやせん。かやうに詠まれし海士人なれば。さも心なき伊勢をの海士の。見る目も輕き身なればとて。賤しみ給ひ候なよ

ワキ『げにや名所舊跡に。馴れて年經ば心なき

○伊勢の海阿漕が浦に引く網も―源平盛衰記の歌の末句「人もこそ知れ」を「顯れにけり」とかへて引いた。委しくは解說にいふ。

○六帖―古今和歌六帖の略で、或は「紀家六帖」ともいひ、紀貫之が女の爲に集めたものであるとも、貫之の女の撰んだものであるとも、或は具平親王の御撰であるともいひ、未だ明かにし難い。阿漕の歌、六帖には「逢ふことをあこぎが島に引く網のたび重なれば人も知りなん」とある。

○見る目―海草の海松にいひかけた。

○心なき―風雅な心のない。

男「こゝに伊勢國でせうが、その伊勢國で、この浦を何といふのです」

漁翁「はい、この所を阿漕が浦と申します」

男「すると、こゝが曾に聞いてゐた阿漕が浦なのですね。昔の歌に――

『伊勢の海阿漕が浦に引く網も、度重なれば顯れにけり』

（伊勢の阿漕浦で、人知れず密漁してゐたものも、度重なると仕舞ひには人に知られてしまつた）

と、かう詠まれた浦なのだ。いや實に面白いことです」

漁翁「おゝ、風流な旅の方ぢや。この土地の歌だから、私も勿論知つてゐます。かの古今六帖の歌に――

『逢ふことも阿漕が浦に引く網も、度重ならば顯れやせん』

（人に隱れて男女の逢ふことも、阿漕が浦で密漁することも、一度や二度ならば、人も氣がつかないで濟むであらうが、度重なつたならば、人に知られてしまふだらう）

このやうに歌に詠まれた阿漕が浦に住む漁師なのですから、――一寸見たところでは、いかにも心柄の賤しい伊勢の漁師のやうに輕々しく見えても、輕蔑なされてはいけませんよ」

○住めば所による波の。古諺「住めば所による」を波の寄るにいひかけた。この古諺は人はその住む所の環境によつて教養せられる名所に住めば自ら風雅になるといふ意。

○物の名も所によりて變りけり　寛玖波集に收められた連歌で、前句「草の名も所によりて變るなり」、救濟法師の付句「難波の芦は伊勢の濱荻」とある、前句の草を物に改めて引いたのである。

○藻鹽燒く煙も　續後撰集　太上天皇御製「鹽釜の浦の煙は絶えにけり月見んとての海士のしわざに」を少しかへて引いた。

○許され申す　こゝには風流の者と認められてゐるといふ意。

○敷島により來る　敷島は歌道をいふ。島の縁で、寄り來るといひ、人並に波をいひかけた。

シテ『海士の焚く藻の夕煙
ワキ『身を焚くべきにはあらねども
シテ『住めば所による波の
ワキ『音も變るか
シテ『聞き給へ（と二足つめ）
地上歌『物の名も。所によりて變りけり。所によりて變りけり。難波の蘆の浦風も。ここには伊勢の濱荻の音をかへて聞き給へ。藻鹽燒く。煙も今は絶えにけり。月見んとての。海士のしわざにと。許され申す海士衣。敷島により來る人なみにいかで洩るべき

【四】
ワキ「この浦を阿漕が浦と申すいはれ御物語り候へ

といはれて、シテ舞臺の眞中に出で、下に居り笠を置く。ワキも下に居る。

シテ（語）「總じてこの浦を阿漕が浦と申すは。伊勢

男「成程、名所舊跡に住み馴れて、永い年月がたつと、何の風流心もない漁師でも……」

漁翁「あの漁師の藻を焚く夕煙を見ても、風雅な心が湧いて來ようといふものです」

男「自分自身で別段意識するわけではないからうが……」

漁翁「人はその住む所によつて色々變つて行くもので……」

男「こゝは波の音も他所とはちがつてゐるようか」

漁翁「さうですとも、よくお聞きなさい。

『物の名も所によりて變りけり、難波の蘆に伊勢の濱荻』といひます通り、風の音も難波とこゝとは違がちがふのですから、よくお聞き下さい。

『……藻鹽燒く煙も今は絶えにけり、月見んとての海士のしわざに』

（漁師達が月を見たいと思つて、藻焚く煙の爲に月の隱れることを恐れて、今はすつかり藻を焚くことをやめてゐるので、煙が全く絶えてゐる）

と詠まれたやうに、われ〳〵漁師も風流な者と認められてゐるのです。このやうな嬉しい漁師でも、和歌の道に志す人の仲間に外れはしないのですよ」

【四】　この浦を阿漕が浦といふわけをお話し下さい」

「されば」漁翁は男の傍に坐り、

【四】

○御誓ひ—御誓約、御利益。
○うろくづ—魚類。
○すなどり—漁。

○阿漕といふ海士人—謠曲作者の假作人物。

○さなきだに—神前に供へる物を盗んで神罰を受けなくても、漁獵は佛の殺生戒を破つた罪の深いことであるのをいふ。
○苦しみの海—佛教で生死苦惱の極まりないことを海に譬へた語。
○冥途—衆生が死んだ後に行く世界。
○娑婆—梵語 Sabha 雜界と譯す。この世。
○阿漕がうらめしや—阿漕が浦を恨めしやにいひかけた。
○呵責の責—地獄で責めさいなまれること。

大神宮御降臨よりこの方。御膳調進の網を引く所なり。されば神の御誓ひによるにや。海邊のうろくづこの所に多く集まるによつて。浮世を渡るあたりの海士人。この所にすなどりを望むといへども。神前の恐れあるにより。堅く戒めてこれを許さぬ處に。阿漕といふ海士人。業に望む心の悲しさは。夜々忍びて網を引く。暫しは人も知らざりしに。度重なれば顯れて。阿漕を縛め所をもかへず。この浦の沖に沈めけり。

『さなきだに伊勢をの海士の罪深き。身を苦しみの海の面。重ねて重き罪科を。受くるや冥途の道までも

地。娑婆にての名にし負ふ。今も阿漕がうらめしや。呵責の責も隙なくて。苦しみも度重なる罪弔はせ給へや（とワキに合掌す）

漁翁「この浦を阿漕が浦と申しますのは、一體こゝは伊勢大神宮が御降臨遊ばしてよりこの方、大神宮にお供へする魚を捕る所なのです。それで、神樣の御功德によつてか、このあたりには海の魚が澤山集まりますので、世渡り渡世に漁をしてゐる者どもが、この所で漁をしたいと思ふのですが、神にお供へする所の魚を捕つては、神罰を受ける恐れがあるので、嚴しく禁じて漁をさせなかつたのです。それだのに、阿漕といふ漁師が、渡世を繁昌させたいと思ふ欲心のあさましさに、夜々人に隱れて、網を引いたのです。暫くは人も氣がつかなかつたのですが、度重なれば、自然人にも知れて、阿漕を縛り、すぐその場で、この浦の沖に沈めてしまひました。このやうなことがなくても、伊勢の漁師として殺生の深い罪を犯してゐるものが、密漁の罪を重ねて、苦海に身を沈めることとなつたのです。そして、死んだ後までも、この世では阿漕の惡名を殘され、冥途では絕え間もなく呵責の責に苦しめられるといふ重い罪人となつてしまひました。どうぞこの跡を弔つて下さい」

と日向の男に合掌し、

【五】
○錦木の數積り―袖中抄に、昔陸奥では男が女に逢はうとする時には、錦木を門に立てた。そして女が許さない間は、何本でも數多く積み重ねるといふ風俗があつたと記してゐる。「錦木の」を數積りの序としたのである。委しくは「錦木」にいふ。
○千束の契り忍ぶ身の―錦木の故事によつて「千束の契り」といひ「忍ぶ」の序とした。
○憲清―西行法師の俗名。西行は鳥羽上皇北面の武士で、佐藤兵衛憲清といつた。
○忍び妻の事源平盛衰記に見え、その本文を解説に掲げた。
○責一人に―續日本紀卷十一、天平六年七月の詔に「民多入レ罪、責在二一人一」

【六】
○執心の浦波の―執心の恨みを浦に、波の泡をあはれにいひかけた。
○値遇―出逢ふこと。
○一樹の宿りをも―說法明眼論に「宿二一樹下、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」これに似た語、今樣にも平家物語にもある。
○松陰に―待つを松にいひかけた。
○うらぶれ給へ―「うらぶれにいひかけた。

【五】
地ケセ『恥かしや古を。語るもあまりげに。阿漕が浮名もらす身の。亡き世語の色々に錦木の數積り。千束の契り忍ぶ身の。阿漕がたとへ浮名立つ。憲清と聞えしその歌人の、忍び妻阿漕阿漕といひけんも。責一人に。度重なるぞ悲しき（と しをる）

【六】
地ロンギ『不思議やさては幽靈の。幻ながら現れて。執心の浦波の。あはれなりける値遇かな
シテ『一樹の宿りをも。他生の緣と聞くものを。御身も前の世の。値遇を少し松蔭に。うらぶれ給へ墨衣。
地『日も夕暮の汐煙。立ち添ふ方や漁火の（と竿を持ちて立ち）
シテ『影もほのかに見えそめて（と正面を見渡し）
地『海邊も晴るる村霧に

【五】
漁翁「このやうな世話をするにつけても、ほんとに恥かしく思ひます。阿漕といふ浮名を殘して、死んだ後までも、世間の色色の噂話に、人知れぬ戀の淺瀨の數積つた場合にも、阿漕を譬へに引いて浮名を立て、例へば憲清（西行法師）といつた歌人が、忍び妻に思ひを寄せた時にも「阿漕々々」といはれたやうな次第で、度重ねることの罪をすべて阿漕一人の責に負はされることとなつたのは、ほんとに悲しいことです」

【六】
日向の男は漁翁がかういつて泣くのを見て、
男「これは不思議だ。さては阿漕の幽靈が夢まぼろしのやうに現れて來て、この世に對する執心の恨みを語るのであらう。あゝ可哀想な人に逢つたものだ」
漁翁「同じ樹の蔭で一所に雨宿りをするのも、前世からの因緣だといふことですから、あなたにお逢ひするのも、前世からの御緣だと思つて、暫くこゝに待つて、お休み下さい」
男「おゝもう日も暮れかゝつて、汐煙が立ちあがり、その方に漁火が……」
漁翁「いかにも、火影がほのかに見え出して來ました」
男「今まで晴れてゐた海邊にも村霧が立

る」とは普通わびしく思ふ、心憂く思ふといふ意に解するが、こゝではそれでは通じ難い。拾葉抄に「古今榮雅抄に云ふ、秋萩にうらぶれをればこ引のとよめる注に、うらぶれは馴れをればと云ふ心なり云々、私云ふ阿漕が浦を云ひかけてうらぶれとは續けたり、此謠のうらぶれはなれ給へと云ふ心なり」とあるに從ふべきであらうか。

○墨衣―僧の着る衣。うらぶれを裏にかけて、衣を出し、衣の緣語紐結ぶにかけて「日も夕暮」とつゞけた。

○手繰の網―普通の小網。手で網を繰り寄せるものであるから、かういふ。

○はやて―颶風。

○敷波―頻りに寄せてくる波。

○跡はかもなく―跡方もなく。

【間】

シテ『すはや手繰の（竿の絲を解き）地『網の綱。繰り返し繰り返し浮きぬ沈むと見しよりも（正面先にて魚を釣る形をし）。俄かにはやて吹き（脇正面を見渡し）。海面暗くかきくれて。敷波も立ち添ひ漁の燈消え失せて（正面にて竿をすて）。こはそも如何にと叫ぶ聲の波に聞えしばかりにて跡はかもなく、失せにけり跡はかもなく失せにけり

「こはそも如何に」と音を聞く心持をし、直して仕手柱際にてひらき、中入。

【間】 狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。阿漕が浦に住居する者にて候。今日は浦に出で心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いや是に見馴れ申さぬ方の御座候が。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「是は西國方より出でたる者にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵このあたりの者にて候

ワキ「左樣にて候はゞまづ近う御入り候へ。尋ね申したきことの候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中へ出で、ワキに向ひ下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用ちこめて來た。

漁翁「さあ急いで網の綱を手繰り寄せよう」

と、漁翁が波間に浮きつ沈みつして、網の綱を手繰り寄せてゐるうちに、俄かに颶風が吹いて來て、海面が眞暗になり、頻りに波が立ちあがり、漁の燈火は消え失せて、『これは一體どうしたことであらう』と叫ぶ聲だけが波間に聞えて、漁翁の姿は跡かたもなく消えてしまつた。

にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古この所に於て阿漕と申す釣人の果てたる仔細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言(正面に向きて)「まづこの浦を阿漕が浦と申す子細は。人の名によりてつけたると申す。その故は。この浦の魚は大神宮の御膳に供へ申す間。常は殺生禁斷にて御座候處に。この浦に阿漕と申す漁師のありしが。夜な夜な忍び出で網を引き申し候に。暫しは人も知らざりしが。度重なるに從つて浦の者ども。これを聞きつけ何卒捕へたしとて。こゝかしこに忍びゐて。かの阿漕を待ち申すに。左樣の事とは夢にも知らず。忍び出で網を引く處を。待ちゐし者どもばつと寄り。そのまゝ捕へ大竹を取り寄せ。それをさいて簀に編み。その上に阿漕を寢させ。くるくると卷いて五番六番きつといましめ。大石を括りつけ。この海の深き所に柴漬に致し候。それよりこの浦を阿漕が浦と申し候。されば御歌にも。伊勢の海阿漕が浦に引く網も。度重なれば顯れぞする。と。かやうに詠ませられたると承り候。(ワキに向ひ)まづ我等の承りたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいつくともなく老人一人釣人の體にて來られ候程に。阿漕の謂れ尋ねて候へば。唯今御物語の如く懇に語り。網を引く體に見え

○五番六番―五卷六卷。
○柴漬―罪人を簀卷にし水中に投げ入れて殺すこと。

て候が。俄かにはやて吹き漁火も消ゆると見て。姿を見失つて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては阿漕が幽霊顯れ出でたると存じ候間。かの跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申しありがたき御經を讀誦し。かの跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はゞ重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【七】ワキ上歌(待謠)『いざ弔はん數々の。いざ弔はん數々の。法の中にも一乘の。妙なる花の紐解きて。苔の衣の玉ならば。終に光は、暗からじ終に光は暗からじ

【八】出端の囃子にて、後ジテ阿漕、面痩男・黑頭・黑地鉢卷・襟淺黄・着附無地夏斗目・白縞水衣・腰帶・腰蓑・扇の裝束にて、四手網を持ちて橋懸に出で、一の松にて、

後ジテ「海士の刈る。藻に棲む蟲のわれからと。音をこそ泣かめ。世をば恨みじ。今宵は少し波荒

○一乘の妙なる花―妙法蓮華經をいふ。一乘とは一切衆生を悉く成佛せしめる法で、卽ち法華經を指す。同經方便品に「聞二我所說法一、乃至於二一偈一、皆成佛無疑一、十方佛土中、唯有二一乘法一、無レ二無レ三一」。「妙なる花」は妙法華を和らげたのである。

○紐解きて―卷物の紐を解くことを花の開くことにいひかけた。

○苔の衣の玉ならば―「紐解く」の緣で「苔の衣」を出し「衣の玉」とつづけた。苔の衣は僧衣をいふ。衣の玉とは、法經經五百弟子授記品に見えた法華七喩の一、衣珠喩をいふ。ここには法華の教を受けて佛緣を得たならばといふ意に用ゐたのであらう。

【八】

○海士の刈る藻に棲む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ―古今集與侍直子の歌。われからは海草に棲む蟲の名。それをわが心からの意に轉じて、上二句をその序とした。

【七】

後段

日向の男と所の者から阿漕について悲しい物語を聞き不思議の思ひをして、

男「さあ丁重に回向をしよう。ありがたいお經も色々澤山あるが、その中でも、一切衆生が成佛することの出來る一乘妙典、妙法蓮華經を讀誦して、佛緣を得たならば、遂には佛の御光を受けて、極樂往生することが出來よう」

と法華經を讀誦する體。

【八】

後ジテ阿漕の霊、生前にゐた時の姿で、地獄より現れ出た心持で登場。

阿漕 歌に――

「海士の刈る藻に棲む蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ」

(漁師の刈る海草の中に棲んでゐる虫の名のわれから、

○御膳の贄―大神宮に奉る魚。贄は新嘗の約で、新しい物を神又は人に饗すること。
○夕月―よき隙なりといふを夕にひかけた。
○入汐―さし汐。滿汐。月の入るといひかけた。
○あごの海―あごは英虞と書き、志摩國に接した海であるが、芭蕉仙覺抄には「伊勢の名所なり」とあり、諸曲作者もこれを安濃郡の海と解して、阿漕と音を重ね、その枕詞としたのであらう。
○鹽木―鹽を燒く爲に薪とする木。
○懲りもせで―木を焦るを懲るにいひかけた。

【九】
○伊勢の海清き渚の―催馬樂の「伊勢の海の清き渚のしほかひになのりそや摘まん貝や拾はん玉や拾はん」に據り、玉を承けて「たまたま」の序とした。
○持網―手に持つて魚を捕る網。罪をのみ持つといひかけた。
○猛火となる―焦熱地獄の苦しみである。

れて。御膳の贄の網はまだ引かれぬよなう（と正面を見廻し）。「よき隙なりと夕月なれば。宵よりやがて入汐の（と少し前へ出で）。『道を變へ人目を。忍び忍びに引く網の。沖にも。磯にも舟は見えず（と見廻し）。唯われのみぞあごの海。阿漕が鹽木懲りもせで（と舞臺へ進み）

地『猶執心の。網置かん（と正面先にて網を下し）

〔イロ〈〕

に網を持ちて色々魚を捕る形をし、下に居て正面を眺め、

【九】シテ『伊勢の海。清き渚のたまたまも

地『弔ふこそ便り法の聲

シテ『耳には聞けども。猶心には（と網の中を見）

地『唯罪をのみ持網の。波は却つて。猛火となるぞや（と立上りて網を後へ投げ捨て）。あら熱や。堪へがたや

と脇正面に安坐す。直して扇を開きながら立ち、これより謠

ら、といふ言葉のやうに、すべての罪業は自分で作つたものだから、自分ひとり先非を悔いて泣かうとも、世の中を恨むやうなことはすまい）

と詠まれた通りだ。世の中を恨みるやうなことはしまい」

阿漕「さいひながら漁場へ來た態で、あたりを眺め、神宮へお供へする鯉の網はまだ引かないやうだぞ。丁度よい暇間だ。今は夕月夜だから、宵のうちから滿汐だ。……いつもとは道を變へ、人目を忍んで網を引かう。うまい具合に、沖にも磯にも舟は見えない、たゞ自分ひとりだ。相變らず性懲りもなく、執念深く、網を打つてやらう」

〔イロ〈〕

に網をうつ樣をしてゐるうちに、地獄で苦しめられる心持になり、

【九】漁翁「たま〳〵にでも、ありがたいお經を伺ふことの出來るのは、成佛する爲のよい便りであるのに、それを耳には聞いてゐても、心はやはり罪深い持網の方に氣をとられてゐるものだから、波がいつの間にやら烈しい火となるのだ、あゝ熱い、たまらなく熱い」

と焦熱地獄の苦しみを示し

○丑三つ—丑の刻は今の午前二時。それより寅の刻午前四時までを四分して、丑一つ、丑二つ、丑三つといふ。轉じて、丑三つを眞夜中の意に用ゐるやうになつた。
○因果の廻り來る—前世で殺生をした業因が報うて來るとの意。
○火車に業積む—火車は地獄で罪人を載せる車。業は罪業の意で、罪の多いことを車に積む荷に喩へたのである。
○紅蓮大紅蓮—紅蓮地獄・大紅蓮地獄で、烈しい寒さの爲に膚肉が壞れて紅蓮のやうになる所。
○焦熱大焦熱—焦熱地獄・大焦熱地獄で、烈しい熱の爲に膚肉の焦げ爛れる所。
○起居に—焦熱地獄の焰から煙、煙の緣で雲霧を出し、霧の立つを起居にいひかけた。

に合せて舞ふ。

地『丑三つ過ぐる夜の夢。丑三つ過ぐる夜の夢。見よや因果の廻り來る。火車に業積む數苦しめて、目の前の。地獄も眞なりげに。恐しの氣色やシテ『思ふも恨めし古の

地『思ふも恨めし古の、婆婆の名を得し。阿漕がこの浦に。猶執心の。心ひく網の手馴れしうろくづ今は却つて。惡魚毒蛇となつて。紅蓮大紅蓮の氷に身を傷め。骨を碎けば、叫ぶ息は。焦熱大焦熱の。焰・煙。雲・霧。立居に隙もなき。冥途の責も。度重なる阿漕が浦の。罪科を助け給へや旅人よ。助け給へや旅人とて。また波に、入りにけりまた波の、底に入りにけり

「助け給へや」とワキに胸ざしをし、「また波に入りにけり」と扇にて面を掩ひ、下に居て海底に沈む心を示し、立ちて留拍子を踏む。

漁翁 今この眞夜中の夢に御覽下さい。婆婆の惡因惡業が報うて來て、火の車に載せられて、責め苦しめられるこの樣、全く目の前の地獄で、實に恐しい有樣です。あゝ考へても恨めしいことだ。この婆婆に浮名を殘した自分は、この浦にまだ執心が留まつてゐる爲に、この婆婆でいつも網に引きなれてゐた魚類が、今は却つて惡魚毒蛇となつて自分を苦しめ、又紅蓮地獄大紅蓮地獄のあつめたい氷で身を傷け骨を碎かれるので、悲しい叫び聲を出すと、その息が焦熱地獄大焦熱地獄の焰となり、少しの隙もなく、冥途で責めさいなまれてゐるのです。どうか罪を重ねたこの阿漕を助けて下さい、どうかこの罪を救つて下さい」

といつて、また海の底に入つてしまつた。

阿漕の霊、海底に入る態で退場。

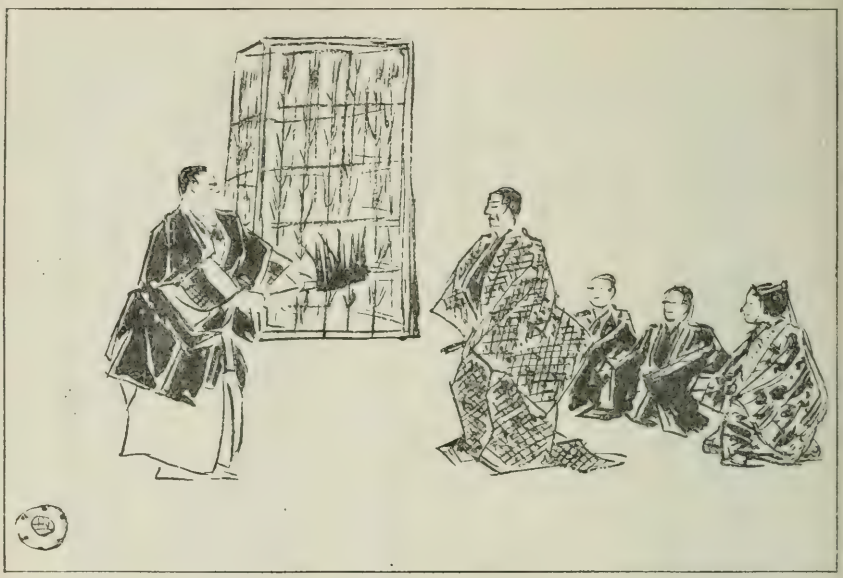
〔考異〕

諸流（五流）

金春は次に擧げる光悅本と殆ど同じであるが、他の寶剛喜三流はワキが「九州日向の國より出でたる僧」である外、觀世現行曲とほゞ同じである。

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは九州日向の國の者（光西國かたより出たる僧）にて候。われ未だ伊勢（光ナシ）大神宮に參らず（光參詣申さず）候程に」唯今（光此たび）……道行「日に向ふ……阿漕が浦に着きにけり」（光ふなてする八重のしほちのはる〳〵と。〳〵。難波の浦につきしかはしはし都の月影も。雲井の跡にうつりきて。伊勢や日向もへたてなき。阿漕か浦に着にけり〳〵）。急ぎ候程にこれはは（光此所は）伊勢の國安濃の郡とやらん申し候（光あこきか浦と申けに候）。暫く人を相待ち所の名所をも尋ね（光一見せ）ばやと思ひ候【二】シテサシ「それ世を……一人に（光は）限らねども……かく淺ましき（光明暮）殺生の家に生まれ明暮（光ナシ）……拙かりける殺生（光かくあさましき前生）かなとは……釣に出でて（光はやと思ひ）候【三】ワキ「いかにこれなる尉殿（光釣人）に尋ね申すべき事の候（光ナシ）。シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ（光ナシ）。ワキ「伊勢の國にとりても……申し候ぞ（光阿漕か浦とは此所を申候か）。シテ「さん候この所をば（光浦は伊勢國阿漕が浦と申し（光にて）候。ワキ「さては承り及びたる（光此所は）……古き歌に（光ことのおもひいでて候）……現れにけり（光そする）かやうに詠まれたる……面白や候（光ナシ）。シテ「あら（光ナシ）やさしの……かやうに詠まれ（光み）ー海士人なれば。さも（光げに）心なき……見る目も（光の）……給ひ候なよ（光ナシ）【四】ワキ「この浦を……御物語候へ（光いかに申候。阿漕とはいかなる謂にて候そ）。シテ語「總じてこの浦を阿漕が浦と申すは（光阿漕とは人の名にて候。委かたつて聞せ申候べし。昔此うらは）伊勢（光ナシ）大神宮御降臨……されば神の御誓ひによるにや海邊のうろくづこの所に多く集まるに（光ナシ）よつて……この所（光浦）にすなどり……業に翼（光そ）む心の……罪深き（光に）身を苦しみの……罪科（光神罰）を受くるや【六】シテ「一樹の……他生の（光かはらぬ）緣と聞く……【八】後ジテ「海士の刈る……今宵は少し（光ことに）海荒れて……



蘆刈（あしかり）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 一段劇能

【人物】 ツレ 日下左衛門の妻、ワキ その從者、ワキツレ 同從者（二人）、狂言 所の者、シテ 日下左衛門

【所】 攝津國 難波浦

【時】 （三月）

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作として、「奥は善德云つく」と註し、二百十番謠目錄には金春禪竹の作としてゐる。世阿彌の著にはこの曲名が見えず、禪竹の著には、歌舞髓腦記、拾玉得花ともにその曲名を擧げ、五音三曲集に幽玄第五有心體曲味の例として、本曲のシテサシ「あるは男山の昔を」以下クセ上「緣こそ嬉しかりけれ」までを引いてゐる。これを見れば本曲は金春禪竹の作であらうか。親元日記寛正六年二月二十三日の條に、二十七日の仙洞御能目錄用意の分にこの曲名が見えてゐる。

【梗概】 攝津國日下左衞門は貧困の爲に夫婦別れをしたが、妻は京都の或貴人の乳母となり、相當の生活が出來るやうになつたので、その家に仕へてゐる男を從者として、難波の浦へ夫を尋ねに行つた。ところが、夫は零落してその居所も分らなくなつてゐたが、折柄來合せた蘆賣る男に蘆を買はうとした所から、その男が夫であつたことが知れ、再會を喜んで、歌物語をし舞を舞ひ、やがて打連れて都に歸る。

【出典】 この原形は、拾遺集卷九に、

難波に被しに、ある女まかりたりけるに、もと親しく侍りける男の、蘆を刈りて怪しき樣なるに、道にあひて侍りけるに、さりげなくて、年頃え會はざりつることなどいひかはしければ、男のよみ侍りける、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住みうき

かへし

あしからじよからむとてぞ別れけむなにか難波の浦は住みうき

これを大和物語では、

津の國の難波の邊に、家居して住む人ありけり。相知りて年比ありけり。女も男もいと下種にはあらざりけれど、年比わたらひなともいとわろくなりて、……男「己はとてもかくても經なん、女のかく若き程に、かくあるなんいといとほしき、京に上りて宮仕をもせよ、よろしきやうにもならば、われをもとぶらへ、己も人のごともならば、必ず尋ねとぶらはん」など泣く〳〵いひ契りて、たよりの人にいひつきて、女は京に來にけり。……さてとかう女さすらへて、ある人のやごとなき所に宮立てたり。……かゝる程に、この宮仕する所の北の方うせ給うて、これかれある人を召使ひ給ひなどする中に、この人を思ひ給ひけり。思ひつきて妻になりにけり。思ふ事もなくめでたげにゐたるに、たゞ人知れず思ふ事一つなんありける。いかにしてあらん、あしうてやあらんようてやあらん、わが在所もえ知らざらん、人を遣りて尋ねさせんとすれど、うたてわが男聞きて、うたてあるさまにもこそあれと、念じつゝわたるに、なほいとあはれに覺ゆれば、男にいひけるやう、「津の國といふ所のいとをかしげなるに、いかで難波に歳しがてら罷らん」といひければ、「いとよき事、われも諸共に」といひければ、「そこにはな物し給ひそ、おのれ一人罷らん」といひて、出で立ちて往にけり。難波に歳して歸りなんとする時に……蘆荷ひたる男の、かたゐのやうなる姿なる、この車の前より往きけり。これが顏を見るに、そ

の人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わが男に似たり。これをよく見まほしさに「この蘆持ちたる男呼ばせよ、かの蘆買ほん」といはせ……この男をよく見るに、それなりけり。……下簾の間のあきたるより、この男まもれば、わが妻に似たり。怪しさに心ををさめて見るに、顔も聲もそれなりけりと思ふに、思ひ合せて、わが樣のいといらたくなりにけると思ひ計るに、いとはしたなくて、蘆もうちすてて走り逃げにけり。「暫し」といはせけれど、人の家に逃げ入りて、竈のしりへに屈まり居りけり。この車より「なほこの男尋ねゐて來」といひければ、供の人手を分ちてもとめ騷げり。人「そこなる家になん侍る」といへば、この男に「かく仰せ事ありて召すなり、……」といふ時に、硯を乞ひて文を書く、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住みうき

と書きて、封じて「これを御車に奉れ」といひければ、怪しと思ひてもて來て奉る。開けて見るに悲しきこと物に似ず。よゝとぞ泣きける。さて返しはいかゞしたりけん知らず。車に着たりける衣脱ぎて、包みて文など書き具してやりける。さてなん歸りける。後はいかゞなりにけん、知らず。

あしからじとてこそ人の別れけめなにか難波の浦は住みうき

本曲はこの物語によつて脚色したのであらう。源平盛衰記卷三十六にも、村上天皇の御宇のこととして、この物語を傳へてゐるが、これには夫が邪見で妻を去つたこととしてゐて、本曲とは距離が遠い。

【概評】 本曲は劇能で、やゝ長篇のものであるが、これをワキ、シテ掛合以降について見ると、その第一段即ち第三節では「よし」「あし」の異名について語り、次の第四節で御津の濱の由來を說き、第五節に「笠盡し」の舞を演じ、第六節でツレの妻がシテの蘆を買取る所から、愈々夫婦の再會となるので、この段が本曲の主眼であり、人情味の最もよく現れた場面である。さて第七節では前節に夫婦が各々和歌を詠んでその眞心を傳へあつたといふ動機から、長々しい歌物語をすることとなり、第八節にワキ從者の所望によつて、例の通りシテが舞を演じて、めでたく本曲を結んでゐるのである。以上の經過を顧みると、第三・四節の物語は謠曲常套の手法であつて、咎めることもないと思ふが、第七節クセの歌物語は第五節の輕快な「笠盡し」に對して、餘りに重々しい感じを與へてゐる。これは恐らく前の輕妙な俗謠舞踊に於ける民衆的興味に對して、觀衆の古典的趣味に叶へようと意圖したものであらうが、相反した二つの興味、趣味は結局調和融合しなかつたものと見なければならない。或は能本作者註文に暗示してゐるやうに、本曲はもと世阿彌の原作で、こ

れに金春禪竹がこのクセの部分を增補して、却つて破綻を生じたのでなからうかと疑ふのである。　さもあれ、常に男女の戀愛を否定排斥してゐる謠曲作者が、本曲に夫婦再會の喜びを描いたのは、まことに珍しいことであつて、殊にこの出典である大和物語などでは、女は既に他に富貴の夫を得て、再會の喜びはほんの一時的のものに過きない――盛衰記では更に甚しく夫に苦痛を與へてゐる――に對して、この曲の、相携へて京に歸ることとしてゐるのは、特に注意すべき點であらう。

【一】

○古き都―難波を指す。難波は仁德天皇の舊都であつた。
○難波　今の大阪地方。

○都さる御方―都の或る御方。
○御事―御方。
○頼み奉り候―お仕へ申してゐる。頼みはわが主人として頼りにする意。
○若子―をさなご。
○御乳の人―乳母。
○日下の里―賞は攝津國でなく、河内國中河内郡にあり、今その郡の日根市村に屬してゐる。
○淀―山城國久世郡にあり

【二】

次第の囃子にて、ツレ日下左衛門の妻、面連面・憂・憂帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束、ワキ妻の從者、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束、ワキヅレ從者、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

次第『古き都の道なれや。古き都の道なれや。難波の浦を尋ねん

地取にツレとワキとは正面に向き、ワキヅレは下に居て、

ワキ「かやうに候者は。都さる御方に仕へ申す者にて候。（ツレへ向き）又これに御座候御事は。頼み奉り候人の若子の御乳の人にて御座候。（正面に向き）御里は津の國日下の里にて候が。今一度御下りありたき由仰せ候程に。この度われら御供申し。淀より舟に乘せ申し。唯今難波の浦へと

【一】

舞臺は初め京都で、ツレ日下左衛門の妻、ワキ及びワキヅレの從者を隨へて登場。

從者「昔都であつた難波の浦へ行かうと次第に旅の目的地を述べ、

從者「私どもは都の或るお方に仕へてゐるものです。（妻の方を見て）又こゝにお出でになる方は、私どもの御主人の若樣の御乳母なのです。この方のお里は攝津國日下の里で、一度里へ歸りたいと仰しやるので、今度私どもがお供をして、淀から舟にお乘せして、難波の浦へ急いで行かうとしてゐるのです」

と見物人に自己紹介をして、

宇治川と桂川との會する所で、京より難波に下る水路である。
○美豆野の原―同國綴喜郡にある。美豆の原といふのが正しい。
○山本霞む水無瀬川―水無瀬川は山城の國境から攝津國三島郡に流れて、廣瀬で淀川に合する川。新古今集後鳥羽上皇の御製「見渡せば山もと霞む水無瀬川夕は秋となに思ひけむ」によつて「山本霞む」を水無瀬川に冠した。
○渚の森―河内國交野郡にあり、淀川に沿うてゐる。
○渡邊―淀川の海に入る所今の大阪市天滿橋のあたりであつたといふ。
○大江の岸―渡邊に隣接した地。後拾遺集良暹法師の歌に「渡邊や大江の岸に宿りして雲居に見ゆる生駒山かな」
○日下の左衞門―謠曲作者
○日下の左衞門―謠曲作者假作の人名。

急ぎ候

一同向合ひて、

ワキ「道行」淀舟や。美豆野の原の曙に。美豆野の原の曙に。影も殘りて有明の。山本霞む、水無瀬川渚の森をよそに見て。なほ行く末は渡邊や。大江の岸も移り行く。波も入江の里續く。難波の浦に着きにけり難波の浦に着きにけり

「なほ行末は」とワキは正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて、難波の浦に着きたる心。道行濟みてツレとワキとは正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程に。これははや津の國日下の里に御着きにて候。(ツレに)これに暫く御待ち候へ。(ワキヅレに)日下の左衞門殿を尋ね申さうずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

ワキ(ツレに)「まづかう御座候へ

といひて、ツレは脇座に、ワキヅレはその次に行き下に居る。

ワキは仕手柱際へ出で、

從者「淀から舟に乘つて、水野の原のあたりを、まだ夜の明方で、有明の月影の殘つてゐる頃に通り過ぎ、山の麓の霞んでゐる水無瀬や渚の森などを遠くから眺めなほ舟旅を進めて、渡邊や大江の岸を過ぎ、入江に家里の續いてゐる難波の浦に着いた」

と道々の景趣を語してゐるうちに旅は進んだ趣で無事は攝津國難波の浦にたる。

從者「道をお急ぎになつたので、思ひの外早く攝津國の日下の里にお着きになりました」

といつて、左衞門の妻に向ひ、

從者「こゝで暫くお待ち下さい」

更に他の從者に向ひ、

從者「こゝで日下左衞門殿をお尋ねしよう」

といつて、妻等を休ませ、從者はある人家を尋ねる趣で、

ワキ「この邊の人の渡り候か

狂言所の者、清附段袋斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「このあたりに日下の左衛門殿と申す人の渡り候か

狂言「さん候もとはこの所に御座候ひしが。今は散々に御なりあつて。この所には御出でなく候

ワキ「あら何ともなや候。この由をやがて申さうずるにて候間。暫く御待ちあつて給はり候へ〔本書には「間書く」以下の十四字を書く〕

狂言「心得申して候

ワキ、舞臺の眞中にてツレに辭儀をして、

ワキ「いかに申し候。左衛門殿を尋ね申して候へば。今はこの所には御座なき由申し候

ツレ・サシ「げにや家貧にしては親知少く。賤しき身には故人疎しとかや申すなれば。身には限らぬ

◎所の者と——この狂言詞、諸本には「誰にて渡り候ぞ」とある。

◎さん候——諸本には「もとはこの所に御座候ひしが。散々御無力にて。今はこの所には御座なく候」とある。

○何ともなや候——何ともいひようのないことである。實に驚いたことだ。

○やがて——すぐさま。

○家貧にしては親知少く——本傳文章、攝在列の句「家貧親知少、身賤故人疎」を引いた。

○身には限らぬ——自分だけ

從者「この里の人が誰か居られませうか」

狂言里人を暗して、

里人「この土地の者をお尋ねになりますのは、どういふ御用でございます」

從者「この邊に日下左衛門殿といふ人が居られませうか」

里人「はい、もとはこの所にお出でになりましたが、今はひどく零落して、この所にはお出でになりません」

從者「あゝ困つたことだ。この事をすぐ申しあげますから、暫く待つてゐて下さい」

といつて妻に向ひ、

從者「もうし、左衛門殿をお尋ねしましたら、今はこの所にはお出でにならないとの事です」

妻「あゝ昔の人が『家の貧しい者には親しい知合も少く、身分が賤しくなると昔の知合にまで疎々しくせられる』といつて

がこのやうな憂き目を見るのではない。
○契り置く―約束して置く

◎さん候―以下「御覽候へ」までの狂言詞、謠本の文に從ふ。
○濱市―濱邊に於ける市場

習ひなれども。餘りにあさましき有樣かな（としをり）。「さりながら樣々契り置きし事あり。この所に暫く逗留し。かの人の行方を尋ねばやと思ひ候

ワキ「げにげに仰せ尤もにて候。この所に暫く御逗留候へ。猶々御行方を委しく尋ね申さうずるにて候。（仕手柱際へ出で）いかに以前の人の渡り候か

狂言「これに候

ワキ「この浦にいかなる面白き事は候はぬか。都の人に見せ申したく候よ

狂言「さん候この浦に濱市の候。色々の物を賣り買ひ候なかに。若き男のこの難波の蘆を刈りて賣り候が。色々に戯れ事を申して面白きものにて候間。名草の事にて候程に皆々買ひ取り候。暫く御待ち候てかの者を御覽候へ

ワキ「あら嬉しや候。さらばかの者を待つて見うずるにて候

ある通りで、貧しい者が憂目を見るのは自分一人に限るわけではない、世間一般の習はしではあるが、わが夫の行衛も知れないとは、あんまり情ないことです。でも、以前色々約束して置いたことがあるのですから、暫くこの所に逗留して、あの人の行衛を尋ねたいと思ふのですが……」

從者「いかにも御尤もなお話です。暫くここに御逗留なさいませ、なほよくお行衛を尋ねて見ませうから」

といつて、前の里人に向ひ、

從者「この浦に何か面白い事がありませんか、都の人に見せたいと思ふのだが」

里人「左樣、この浦には濱邊の市がありまして、色々の物を賣り買ひしてゐますが、その中に若い男てこの難波の蘆を刈つて賣る者がありまして、色々ざれごとをいふのが面白いものですから、蘆はこの土地の名草でもありますので、皆の者が買つてゐるのです。暫くお待ち下さい、あの男をお見せしませう」

從者「これは嬉しいことです。それではその男を待つて見ませう」

里人、蘆刈男を呼び出す。

狂言「やがて呼び出だし申さうずる間。まづかう御座候へ

ワキ地謠座の前に行き下に居る。狂言幕に向ひ、

狂言「やあ〳〵蘆を賣る男。今日は何として遲く候ぞ。とうとう此方へ出でられ候へや

といひて狂言座にくつろぐ。

後見、小屋の作物を大小前に出す。

【二】

一聲の囃子にて、シテ日下左衞門、直面・襟淺黄・着附段熨斗目・紺水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、黑塗男笠を被り、竹に蘆の葉を挾みたるを右手に持ちかたげて橋懸に出で、一の松に立ち、

シテサシ「足引の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路潟。げにや所から異浦々の景色までも。眺めにつづく難波舟の。出で浮かみたる朝ぼらけ。心も澄める面白さよ（とあたりを眺め）

シテ一聲「難波なる。見つとはいはじかかる身に

と謠ひながら舞臺に入り、

地「われだに知らぬ。面忘れ

○足引の―山の枕詞。
○淡路潟―波の泡を淡路にいひかけた。
○所から―場所柄、流石名所だけあつて。
○異浦々―難波浦ばかりでなく、こゝから見渡される他の浦々までも。
○見つとはいはじ―古今集讀人知らずの歌「君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ」を借り、妻を見たとはいふまいとの意に用ゐた。見つは御津をいひかけたのである。
○面忘れ―落魄して姿が變つた爲に顏を見忘れる意。

【二】

シテ日下左衞門、蘆刈男の姿で、笠を被り、蘆を持つて舞臺。

日下「山の方は霞んでゐるが、難波浦の方はずつと晴れ渡つて、遙か向ふの方には淡路潟が見える。そしてさすが名所だけあつて、この浦の景色が美しいばかりではなく、この浦續きの他所の浦々の景色までが面白い眺めで、あの難波の沖合に船の浮かんでゐる朝氣色の面白さ。ほんとに心も澄み渡るやうだ」

シ、あたりの景色を眺め、ふと妻の事を思ひ出した心持で、

日下「このやうなみすぼらしい身の上で、妻のことなとは思ひ出すまい。この變れ果てた顏、自分ながら自分とも思へないやうだ」

といつて、思ひ切つた樣で、

○立ち舞ふ―たち振舞ふ。○隠れ所はあるものを―人の雑沓する中が却つて身を隠し易いとの意。文選王康琚の句に「小隱隱二陵藪一、大隱隱二朝市一」○受け難き人界を―涅槃經に「生レ世爲レ人難、値レ佛生レ信難」。平家物語に「人身は受け難く、佛敎には値ひ難し」○戒行こそ拙けれ―前世で佛戒を行ふことが足りなかつた爲に、現世で富貴の家に生まれ得なかつたのであるといふ意。○荒磯海の―かくこそあらんを荒磯にひかけ、濱を呼び起した。荒磯海は磯際の波の荒い海。○濱の眞砂の―數の序詞。古今集讀人知らずの歌に「荒磯海の濱の眞砂と頼めしは忘るゝ事の數にぞありける」○數ならぬ―人並に入らない、賤しい。○あだなる露の―消え易い露のやうな頼み難いものを頼りにしてとの意○里に雪の―里に行きを雪にいひかけた。○しほたるるわが身の方は―後拾遺集、道命法師の歌

〔カケリ〕を舞ひ、つゞいて次の謠に合せて仕科。

シテ『立ち舞ふ市のなかなかに

地『隱れ所は。あるものを

シテサシ『げに受け難き人界を。たまたま受くる身なりせば。榮華の家には住みもせで。かかる貧家に生まるる事。前の世の戒行こそ拙けれ。今とてもなす業もなき身の行方。昨日と過ぎ今日と暮れ。明日又かくこそ荒磯海の。濱の眞砂の數ならぬ。この身命を繫がんとて。あだなる露の草の葉に。蘆刈人となりたるなり

地下歌『何とかならん難波江の。浦に出で里に雪の寒き日をも厭はず。上歌『しほたるる。わが身の方はつれなくて。わが身の方はつれなくて。異浦見れば夕煙。恨めしや終に身を立てかねてこそ賤しけれ、あしたづの。雲居のよそに眺めこ

〔カケリ〕を舞ひ、

日下「さうだ、かういふ人の雑沓する所の方が却つて人込に紛れて、隱れ場所のあるものだ。……あゝ思へば、容易に生まれられない人間に、折よく生まれ出たからには、富貴の家に住むことが出來れば生まれ甲斐もあらうものを、このやうな貧しい家に生まれたといふのも、つまり前世で佛の戒をよく守らなかつた報いなのだ。いや前世ばかりではない、現在今の世でも、これといふことも出來ない身の上で、昨日もぶら〳〵過し、今日も同じやうに暮らし、また明日も同じやうなことで過すのであらう。それでゐながらこのやうなつまらない命、草の露のやうな果敢ない命を繫ぐために、蘆刈男となつたのだ。

何の甲斐もないことに、浦に出たり里へ行つたりして、雪の日も雨の日も厭はずに働いて、そして袖を濡らして悲しい思ひをしてゐるのだ。自分には誰も同情してくれる者がない。他所を見れば賑やかな夕煙が立つてゐるが、自分はいつまでも身を立てることが出來ず、賤しい身の上で過して行かなければならないとは、實に殘念なことだ。……昔はまさかこのやうな仕事をしようとは思はなかつたの

「しほたるるわが身の方はつれなくてこと浦にこそ煙立つなれ」を引いたもしほたるるは潮水に濡れることと悲しみの涙に濡れることとをかけていふ。つれなくては自分の方には少しの同情もなくてとの意。○身を立てかねては煙の縁語。

○あしたづの　蘆鶴、蘆の生ひ茂つた所にゐる鶴。鶴は空高く飛ぶものであるから、雲居の序に用ゐた。○よそに眺めこしこのやうな賤しい業は餘所事に思つてゐたとの意。○月の下蘆　月下の蘆、雲の縁で月を出したのである。○猶ありがほの　風雅な心でもあるらしい有樣だといふ意。

【三】難波の蘆　古來歌の詞に用ゐられたのでかくいふ。○ゆかりの露　ゆかりは縁故。自分が舊都に縁故のあることと、露が蘆に縁のあることと、兩方にかねていふ。○おちぶれたる　零落した。露の落ちといひかけた。○よしとて　蘆の別名「よし」を「善し」にいひかけ、何の風情がなくても、まあ

し。月の下蘆刈り持ちて。露をも運ぶ袖の上猶ありがほの、心かな猶ありがほの心かな

帶座にてくつろぎ、笠を脱ぎて後見に渡し、正面に向く。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】ワキ「いかにこれなる人に申すべき事の候

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「見申せば色々の物を賣り候中に。難波の蘆を御賣り候事優しうこそ候へ

シテ「さん候このあたりにては賣る者も買ふ人も。唯何となくあつかふ處に。都の人とて難波の蘆を御賞翫こそ。返す返すも優しけれ。「われも昔は難波津の。名に負ふ古き都人の。ゆかりの露のおちぶれたる。身は枯蘆の。色なくとも。よしとて召され候へ（とワキに二足つめ）

ワキ「あら面白や候さて葦と蘆とは同じ草にて候か

だか。……それてもあの月が蘆の露に宿つてゐるのをそのまゝ刈り取つて、運んで行く姿は、どうやら風雅な心でもありさうな有樣だ」

といつて、妻や從者のゐる方へ來る。從者ほこれを見て、

【三】從者「おういこゝな人に話がしたいのだ」

日下「私をお呼びになつたのですか、何の御用です」

從者「見れば、色々の物を賣つてゐるが、その中に、難波の蘆を賣つて居られるのを、優しい心掛だと思ふのだ」

日下「はい、この邊では賣る者も買ふ人も、唯何の風雅な心もなく取扱つてゐますのに、流石都の方だけあつて、難波の蘆を特に御賞翫なさいますのは、ほんとにお優しいことです。實は私も昔はあの有名な難波の舊都に居ました者で、都には縁故のある者ですが、すつかりおちぶれて枯蘆のやうな身の上となつてしまつたのです。何はともあれ、この蘆も私同樣何の色香もありませんが、どうぞお買ひ下さい」

從者「實に面白い人だ。ところで、よしとあしとは同じ草なのですか」

善いとしてといふ意に用ゐた。

○物の名も所によりて―萬葉集の連歌に「草の名も所によりて變るなり」「難波の蘆は伊勢の濱荻」とあるに據つた。

○むつかしや―面倒くさい
○よしあしも―草の名を「善し惡し」にいひかけた。
○えぞ知らぬ―え知らず。知らない。
○かりの命―假りを刈りに通はせて用ゐた。
○足數に―市に運ぶ足數と蘆の數とを兼ねた。
○おあし添へて―おあしは錢のこと。あしの音を重ねて用ゐた。
○月をも運ぶ―蘆の露に月の光が宿つてゐるのである
○暇惜し―夜になれば蘆刈りの仕事に忙しいので、時の經つのを惜しむのである
○晝の内に―夕潮の干るを晝にいひかけた。

シテ「さん候譬へば薄ともいひ。穂に出でぬれば尾花ともいへるが如し

ワキ『さては物の名も所によりて變るよなう

シテ「なかなかの事この蘆を、伊勢人は濱荻といひ

ワキ『難波人は

シテ『蘆といふ

地『むつかしや。難波の浦のよしあしも。難波の浦のよしあしも。賤しき海士はえぞ知らぬ。唯世を渡るためなればかりの命繋がんとて。蘆を取り運びてこの市に出づる足數に。おあし添へて召されよやおあし添へて召されよ（と蘆を兩手に持ちて二三足ワキへ進み）。露ながら難波の蘆を刈り持ちて（と扇を拔きて蘆を刈る形をし）夜は月をも運ぶなりや。暇惜し、夕潮の晝の内に召されよや晝の内

日下「はい、譬へば、同じ草で薄といふものを、穂が出ると尾花といふやうなものです」

從者「すると、物の名も所によつて變るのだね」

日下「さうです、この蘆を伊勢の人は濱荻と申しますし……」

從者「難波の人は……」

日下「蘆と申します……いやこんな話は面倒くさいことだ。よしだかあしだか、そんなことは、私のやうな賤しい漁夫には何も分りません。たゞ私どもは渡世の爲に蘆を刈つてゐるので、果敢ない命を繋いで行く爲に、蘆を運んで市に出るのですから、その手間代として蘆の數相應のお金で、買つて下さい。露の宿つたまゝ難波の蘆を刈るので、夜はその露に月が宿つて、月をも一所に運ぶこととなるのです。……おゝさう〳〵、夜はまた忙しいのです。どうかこの露の乾かない蘆のうちにこれを買つて下さい」

（蘆を從者に差出さうとする。しかし從者はなほ話を續けて、

【四】○御津濱—日本書紀仁德天皇の條に「於是大后大恨怨載二其御船一之御綱柏者、悉投二棄於海一、故號二其地一謂二御津前一也」。津は港の意、御は美稱であるから皇居であつたが故の尊稱と解したのである。

○仁德天皇—紀元九七三年御即位、一〇五九年崩御。「難波」の曲參照。

○大宮造り—日本書紀仁德紀に「都二難波一、是謂二高津宮一」とある。皇居は今の大阪城の邊であつたといふ。

○波濤海邊—波の打ち寄せる濱邊。

○雲上—内裡を天上に比べていふ。

○月卿—雲上の高官。公卿。

に召されよ

と蘆を扇に添へて、ワキの方へ二三足進み、くつろぎて蘆を後見に渡す。

【四】

ワキ「いかに申し候。さて御津の濱とはいづくにて候ぞ

シテ『忝くも御津の濱の御在所はあれにて候（と正面の方を見る）

ワキ「不思議やな何とて忝きなどとは仰せ候ぞ

シテ「あら何ともなや。さらば何とて御津の濱とは御尋ね候ぞ。忝くも仁德天皇。この難波の浦に大宮造りし給ふ。御津と書いて御津の濱とは申すなり

ワキ『げに面白き謂れかな。皇居なりつる浦なれば。御津の濱とは理なり

シテ「波濤海邊の大宮なれば。漁村に燈す篝火までも。禁裏雲居の御火かと見えて。上雲上の月卿

【四】

從者「ところで、御津の濱とはどこだね」

日下「忝くも御津の濱の御在所はあそこです」

從者「これは不思議だ、どうして忝くもなどといはれるのです」

日下「これは驚いた。それならばどうして御津の濱といつてお尋ねになつたのです忝くも仁德天皇がこの難波の浦に御所をお造りになつたので、おん津と書いてみ津の濱といふのです」

從者「いかにも面白い謂れだ。皇居であつた浦だから、御津の濱といふとは、成程尤もなことだ」

日下「波の打ち寄せる海邊に皇居があつたのですから、漁村でともす篝火までが御所の御火のやうに見えまして、上は御所

◎あれ御覽ぜよ―以下「つれづれもなき心面白やや」までを「笠の段」といふ。
○網子ととのふる―網を引く者の揃ひ集まる。

○大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海士の呼聲―萬葉集、長忌寸意吉麻呂が難波の離宮で詔に應じて詠んだ歌。
○古歌をも引く網の―古歌を引くを網を引くに、網の目を目の前にいひかけた。
【五】
○心あらん人に見せばや津の國の―後拾遺集能因法師の歌。下句「難波わたりの春のけしきを」
○朧舟―春景色の朧を朧舟に、舟の漕がるを水鳥の焦がれ寄るにいひかけた。朧舟は板が朽ちて水などの浸み入つた舟。吳竹集の引歌に「難波がた蘆間の月のおぼろ舟霞みて見ゆる春のあけぼの」
○友呼ぶや―鷗千鳥の友を呼ぶさまが、海士小舟の互に呼び交はすさまに似てゐるといふ意。

より。下萬民の民間までも。ありがたかりし惠みぞかし。や（と脇正面の方を遠く見渡し）。あれ御覽ぜよ御津の濱に。網子ととのふる網船の。えいやえいやと寄せ來るぞや

地 名にし負ふ難波津の。名にし負ふ難波津の。歌にも大宮の。內まで聞ゆ網引すと網子ととのふる。海士の呼聲と詠み置ける。古歌をも引く網の。目の前に。見えたる有樣あれ御覽ぜよや人々

とワキの袖を取りて正面に誘ひ出し、

【五】
シテ 面白や心あらん

と、これより謠に合せて舞ふ。ワキはまたもとの座に歸り下に居る。

地 面白や心あらん。人に見せばや津の國の。難波わたりの春の景色。朧舟こがれ來る沖の鷗磯千鳥。連れだちて友呼ぶや。海士の小舟なるら

の高位高官の方々から下は民間の萬民まで、大御惠の露に落うた、まことにありがたい御代でございました。（向ふの海を見こおや、あれを御覽なさい。網引の者の揃つた漁船が、えいや／＼と掛聲勇ましく網を引きながら、こちらへやつて來ますよ。難波津の宮を詠んだ有名な歌にも―『大宮の內まで聞ゆ網引すと、網子とゝのふる海士の呼聲』

（網引の者が勢揃いをする爲に、大きな聲で呼びあつてゐるのが、御所の中までも聞えてくる）

と詠まれた光景が今目の前に見えるのです。あれを御覽なさい」

と從者を滿近く誘ひ出して、

【五】
日下「あゝ實に面白い景色だ。歌人が―『心あらん人に見せばや津の國の、難波わたりの春の景色を』

（この摂津國難波のあたりの春景色を、風雅な心のある人に見せたいものだ。實に面白い眺めだ）

といつた通りだ。あの朧に霞んだ沖合に鷗や濱千鳥が連れ立つて、友を呼び交はしてゐる樣は、まるで、小さな漁船が互に呼びあつてゐるやうだ」

○雨に着る田蓑の島も―古今集紀貫之の歌「雨により田蓑の島を今日行けば名には隱れぬものにぞありける」を借り、雨に着る蓑と露を防ぐ菅笠を對せしめた。田蓑島は今は分らないが、天王寺に近い海邊にあつたといふ。
○露も眞菅の笠―露を防ぐ菅笠。
○梅の花笠縫ふてふ鳥の―古今集大歌所の歌「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」、同集讀人知らずの歌「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老隱るやと」などによつて、花笠を出して鳥の翼を呼び起したのである。
○鵲も有明の―七夕には鵲が翼を竝べて天の河に橋を渡すといふ故事によつて、翼から笠の名を持つ「かささぎ」を出し、鵲もありを有明にいひかけた。
○月の笠―月のまわりにかかつた輪をいふ。
○袖さす―袖をかざす。
○衣笠―絹を張つて蓋とした傘。月の笠を天女の衣笠に見立てたのである。
○難波女―難波の里女。
○かづく―かぶる。
○袖笠肘笠―俄雨などに袖

ん

シテ『雨に着る
地『雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も眞菅の笠はなどかなからん

常座にて扇をさし、笠を後見より受取り、これより笠を採物にして舞ふ。

地ロンギ『難波津の春なれや
シテ『名に負ふ梅の花笠
地『縫ふてふ鳥の翼には
シテ『鵲も有明の
地『月の笠に袖さすは
シテ『天つ少女の衣笠
地『それは少女
シテ『これは又
地『難波女の。難波女の。かづく袖笠肘笠の。雨の蘆邊も。亂るるかたを波あなたへざらりこなた

と、興に乘じて、

日下「――
『雨の降る日に着る蓑が、田蓑の島とて難波邊の島の名にまであるものを、露の夜に着る菅笠のなくてどうしてよいものか』――

と歌を謠つて笠を持ち、

日下「――
『難波の春は名に高い梅の木の花咲き匂ふ。枝を木傳ふ鶯は梅の花笠縫ふとやら。かさを名に持つ鵲は夜明の空に橋かける。夜明の空に月の笠あれは天女の衣笠か。それは天女の舞の笠、難波少女は袖笠や肘笠などで雨防ぐ。雨の降る日は蘆邊も亂れ、波にゆられてざら〳〵とあなたへざらりこなたへざらり。ざらざらざつと音するは風のあげたる古すだれ。

をかざして笠の代りとするを袖笠といひ、肘で頭上を覆ふのを肘笠といふ。
○雨の蘆邊も―雨の脚を蘆邊にいひかけた。
○かたを波―萬葉集山部赤人の歌「和歌の浦に汐滿ちくれば潟を無み蘆邊をさして田鶴鳴き渡る」の「潟を無み―を「片雄波―と誤解して用ゐたのである。
○ざらりざらり―波の爲に蘆のざわめく音を寫し、轉じて古簾の動く擬聲とした。
○つれづれもなき―退屈しないこと。古すだれを釣るをつれ〴〵にいひかけたのである。
【八】

へざらり。ざらりざらりざらざらざつと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心おもしろや

「風の上げたる」と笠を投げ、小廻りして、舞ひ終り、下に居る。

【八】

ツレ、ワキに向ひ、

ツレ「いかに誰かある

ワキ「御前に候

ツレ「あの蘆賣る人に。その蘆一本持ちて來れと申し候へ

ワキ「畏つて候

ワキ立ちて、シテに向ひ、

ワキ「いかに申し候。あのお輿の内へ。その蘆一本持ちて御參りあれと仰せ候

シテ「畏つて候

後見座に行き、蘆を笠に載せて持ち來り、

シテ「さらばこの蘆を參らせられ候へ

ワキ「いや唯直に參らせられ候へ

といひて下に居る。シテ、ツレの前に行き、下に居て面を見合

ほんにをかしや面白や』――」

と「笠づくし」の歌を謠ひ舞ふ。

【八】

日下の妻、從者に向ひ、

妻「これ誰か一寸」

從者「はい」

妻「あの蘆を賣る人に、その蘆を一本持つてくるやうにいつておくれ」

從者「畏りました」

日下左衛門に向ひ、

從者「蘆刈殿、あのお輿の内へその蘆を一本持つて來てくれとの仰せです」

日下「畏りました」

日下は蘆を笠にのせて、

日下「それではこの蘆をあげて下さい」

從者「いや、そなたが直におあげなさい」

○いにしへ人―以前に連れ添つてゐた夫。

○更に苦しからぬ事―決して心苦しく思はれるべき事でない。

せ、俄かに蘆を捨てて立ち上り、づか〳〵と早足に作物へ行き、戸を開きて内に入り戸を閉ぢて安坐す。ワキこれを見て、

ワキ「あら不思議や。今の蘆賣る男の。御姿を見參らせ。これなる所へ隱れて候は。何と申したる御事にて候ぞ（とツレに向く）

ツレ「今は何をか包み參らせ候べき。唯今の蘆賣る人は。わらはがいにしへ人にて候。『これは夢かやあらあさましや候（としをる）

ワキ「言語道斷の御事。更に苦しからぬ事にて候。某やがて參り御供申し候べし。御心安く思し召され候へ

ツレ「いや暫く。皆々御出であらば。定めて恥ぢ參らせられ候べし。わらは密かに行きかくと申さばやと思ひ候

ワキ「げにこれは尤もにて候。さらば御出であらうずるにて候

日下左衛門は妻の前に行き、その面を見て「驚く」て躊躇る。從者もこれを見て、

從者「これは不思議だ。今の蘆を賣る男が御乳母のお姿を見るや否や、この所へ隱れてしまつた。（妻に向ひ）これはどうした事でございませう」

妻「今は何を隱さう。唯今の蘆を賣る人は私の夫なのです。まるで夢のやうな。あゝほんとにあさましいことでせう」

從者「これは意外だ。しかし決して心苦しくお思ひになる事はありません。私がすぐ行つて、お供して來ませう。御安心なさいませ」

妻「いえ一寸お待ち下さい。あなた方がお出でになれば、定めて恥しく思はれることでせう。私がそつと行つて、申して來ませう」

從者「いかにも御尤もな事です。それではお出でになるがよろしいでせう」

○行末かけし玉の緒の―未来へかけての意を胸に懸ける意にいひかけて、玉の緒を結ぶの緒を出し、玉の緒ー結ぶ契りとつづけた。
○世にある様―世間に恥しからぬ生活。
○白露の―人の心は知られぬを白露に、露の置くを起くにいひかけた。
○きぬぎぬ―後朝。男女の相會うた翌朝の別れをいふ。朝起きて自分の衣を着て別れる意であるから、衣の縁語。
○妻や重ねし―後妻を娶つたかといふ意。
○蘆火焚く屋は煤たれて―萬葉集柿本人麻呂の歌「難波人あし火たく屋の煤したれとおのが妻こそとこめづらしきを」を引いた。
○おのが妻衣―本妻。妻を衣に取りなしたのである。
○誰にか馴衣―誰に馴れ親まうといふのか衣に寄せた。
○君なくてあしかりけりと思ふにぞ―いとゞ疑ひ浦は住み憂き―拾遺集及び大和物語に出てゐる歌。解記參照。
○あしかりとは蘆刈りと悪しかりとを兼ねた。
○悪しからじ善からんとてぞ別れにし何か難波の浦は住み憂き―同じく前二書に出てゐる歌。

ツレ立ちて作物の側に行き、下に居てシテに向ひ、

ツレ『いかに古人。わらはこそこれまで參りて候へ。行末かけし玉の緒の。結ぶ契りのかひありて。今は世にある樣なれば。遙々尋ね參りたるに。いづくへ忍ばせ給ふらん。疾く疾く出でさせ給ひ候へ

シテは作物に籠りたるまゝにて、

シテ『これは唯夢にぞあるらん現ならば。よその人目もいかならんと。思ひ沈めるばかりなり

ツレ『かくは思へど若しは又。人の心は白露の。おき別れにしきぬぎぬの。妻や重ねし難波人

シテ『蘆火焚く屋は煤たれて。おのが妻衣それならで。又は誰にか馴衣。『君なくてあしかりけりと思ふにぞ。いとど難波の。浦は住み憂き

ツレ『悪しからじ。善からんとてぞ別れにし。何か難波の。浦は住み憂き

妻は左衞門の傍へ行って、

妻「もうしあなた、私がこゝまでお迎へに參つたのです。先々の事をお約束して置きました甲斐があつて、私も今は世間に恥しからぬ暮らし向きになりましたので遠い所をお尋ねして來たのです。それだのに、どこへお隠れになるのです。早くお出でなさいませ」

日下「これは全く夢であらう。もし事實だとすれば、これは又人目も憚慮せられるので、それで、どうしたものかと思案にくれてゐるのだ」

妻「私もさうだらうとは思ひますが、或は又人の心は分らないもので、本の妻とは別れたきりで、新しい妻をお持ちになつたのでなからうかと……」

日下「いや、このやうな蘆火を焚いて、僅かに命を繋いでゐる身の上で、自分の本妻を外にして、どの女に馴染むことがあらう、わしの心持はかうなのだ――『君なくてあしかりけりと思ふにぞ、いとど難波の浦は住み憂き』

（妻と別れて悪いことをしたと思ふにつけて、この難波の浦の働き住居を愈々傷なく思ふ）

妻「私はまたかう思ふのです――『悪しからじ善からんとてぞ別れにし、何か難波の浦は住み憂き』

（いえお互に、どうか不仕合にならないやうに、よくなるやうにと思つてお別れしたのですからこの所もいつまでも住みづらいまゝで終りはしません）

○難波津淺香山の道―和歌の道をいふ。古今集序に「難波津の歌は帝の御始めなり、淺香山の言の葉は采女の歳れより詠みて」この二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしける」とあるので、これを和歌の根本とし、進んで和歌の道といふ意に用ゐた。

○夫婦の媒―古今集序に和歌は「男女の中をも和らげ」るとあるので、かういつた。

○何をか包み井の―何をか包みを包井にいひかけ、これを隱すの序とした。包井は塵埃などの入らぬやうに蓋をし、又は上に屋根を作つた井戸。

○隱れて住める小屋の戸を―拾遺集源重之の歌―蘆の葉に隱れてすみし津の國のこやのあらはに冬は來にけり―を引き、小屋に續けた。

○面なの―面目のない。

○現にあふの松原―夢ではなくて實際に逢ふといふ意を―逢の松原―にいひかけた。逢の松原は長門國にあるともいつて、未だ分らない。

○圓居―樂しく居遊ぶこと

【間】

シテ『げにや難波津淺香山の。道は夫婦の媒なれば

地『さのみは何をか包み井の。隱れて住める小屋の戸を（と戸を開き）。押しあけて出でながら（と連れ立ちて眞中に出で）。面なのわが姿や（と兩袖を見）。三年の過ぎしは夢なれや。現にあふの松原かや木蔭に圓居して難波の、昔語らん

とツレは脇座に、シテは舞台の眞中にて下に居る。

ワキ「かかるめでたき御事こそ候はね。やがて都へ御供あらうずるにて候。（シテに）まづまづ烏帽子直垂を召され候へ

シテ後見座にくつろぎ【物着】。侍烏帽子・掛直垂・扇・小刀の裝束に改む。この間に、狂言は名乘座に出でて、

【間】

狂言「扨も〳〵めでたい事かな。先々御尋ねありたるは。唯今の蘆刈男と見えて候。この由を申さう。（ワキに向ひ）いかに申し候。最前御尋ねの御方は。唯今の蘆刈男と見え候

ワキ「げに〳〵かたがたの引合せを以て。左衞門殿に對面申し祝着申して候

狂言「かやうに早く御逢ひなされ候も。われ等を呼び出し御尋ねにより。蘆刈男を御目にかけ申した

日下「ほんにさうだ。今の歌でお互の心持はよく通じた。和歌の道といふものに夫婦の媒となるものだから、この上は、さういつまでも隱れてゐることもなからう」

といつて、今まで隱れて住んでゐた小屋の戸をおし開けて出ながら、

日下「あゝ面目もない姿だ。別れた三年の間の事は夢のやうだ。それが事實逢ふことが出來たのか。さあ木蔭に休んで、昔話をしよう」

と夫婦は一所になつて話し合ふ。

從者「このやうなめでたいことはありません、早速都へお供致しませう。（左衞門に）まづ烏帽子直垂をお召しなされませ」

日下左衞門、新しい裝束をつける。その間に狂言所の者は妻の從者と歌物語などをする。

【七】

○高き山深き海―夫婦の愛情の厚く濃やかな喩。

○殊に難波の海山の―殊にこゝは難波の海の近くであるから、情の深いのも當然であるとの意。海山の山は添へ語で、難波の山といふのがあるわけではない。

○男山の昔を思ひ出で―古今集序に「男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてざなぐさめける」とあるを引いた。「くねる」はすね恨む意。

○露もたわわに―歌の言の葉の縁で露を出し、情の深いことを、秋萩の枝もたわむばかりの露の重さに喩へたのである。

○秋萩の―「もと」の枕詞としてもとの契りとつゞけた

○消えかへり―消えは露の縁語。

○つれなかりける命―あはれな命を生きながらへて、みぢめな娶を妻に見られたことを恥ぢる意。

○羽束師の森―山城國乙訓郡にある。恥しを地名にいひかけた。

る故。早く御逢ひにて候。假初ながらわれ等は忠の者にて候間。都へ御供申したく候

ワキ「いかさまかたがたをも都へ伴ひ申し候べし。又この所は歌の名所にて候間。歌物語あつて御聞かせ候へ

狂言「それは近頃にて候。我等も名所に住みながら。所の古歌をも知らぬはいかゞと存じ。一首は習ひ置きて候程に。都に上り候ても恥をかくまじいと存じ候。さあらばとてもの事に聞かせ申し候べし。物の名も所によりて變りけり。難波のあじは伊勢のはまぐりと習ひ申して候。面白き歌にてはなく候か

ワキ「いや〳〵左樣にては候まじ。物の名も所によりて變りけり。難波の蘆は伊勢の濱荻とか承りて候

ワキ「あしあじ。扨は我等の存じたるは片言にて候。都の御方に定說を承り滿足申して候。それは兎もあれ都へ御供申したく候

ワキ「又左衞門殿に烏帽子直垂を召され候はゞ是へ御出であれと御申し候へ

狂言「畏つて候

といひて、仕手柱際に立ち、

狂言「いかに左衞門殿に申し候。烏帽子直垂を召されて候はゞ。急ぎ御出であれとの御事にて候。急いで御出で候へ

といひて狂言は引く。

【七】

シテ次の地謠に舞臺へ出で、眞中にて下に居る。

地クリ『それ高き山深き海。妹背戀路の跡ながら。殊に難波の海山の。所からなる情とかや

【七】

左衞門は仕度を整へて、もとの座に直り、夫婦で歌物語をする態で、

日下「一體山の如く高く海の如く深いのが夫婦戀愛の情であるが、殊にこゝは難波

○言葉の花　和歌。花は春の縁語。

○難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花」「難波津淺香山の道」の語釋に擧げた古今集序の古註に、王仁が仁德天皇に奉つたものとして擧げてゐる。

○難波の御子」仁德天皇。同じく古註に「おほさゝきの帝の、難波津にてみこと聞えける時」とある。

○淺香山の言の葉は」同じく古今集序の古註に「淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」

○采女の盃取りあへぬ」同じく古註に「葛城の王を陸奥へ遣したりける時に、國の司ことおろそかなりとて設けなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりてよめるなり。これにその王の心とけにける」采女は御膳奉仕の女官。

○この二歌は今までの」前に擧げた古今集序の詞。

○花色の言の葉草の」秀れた和歌としての意。花、葉、草、種、みな縁語。

○目に見えぬ鬼神をも」古今集序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」

シテサシ『或は男山の昔を思ひ出でて

地』女郎花の一時をくねるといへども。いひ慰むる言の葉の。露もたわわに秋萩の。もとの契りの消えかへり。つれなかりける命かな

シテ『さればかほどに妾へて

地』身を羽束師の森なれども。言葉の花こそたよりなれ

地クセ『難波津に。咲くやこの花冬籠り。今は春べと咲くや。この花と榮え給ひける。仁德天皇と。聞えさせ給ひしは難波の御子の御事、又淺香山の言の葉は。采女の。盃取りあへぬ。恨みをのべし故とかや。この二歌は今までの。歌の父母なる故に。代々に普き花色の。言の葉草の種とりて。われら如きの手習ふ、はじめなるべし。（シテ立ちてこれより仕舞）然れば日に見えぬ鬼神をも和ら

の海邊であるから、場所柄一層情が深いといふものであらう。

和歌といふものは、男が盛んであつた昔を思ひ出す時にも、女が何か一寸すれた時にも、詠み出して心を慰めるものだが、その和歌の情のこもつた言葉によつて、かうして夫婦がもとの契りに返ることが出來たとはいふものの、これまでよくもあはれた命を生き永らへて來たことだと、恥しく思ふのだ。このやうに妾へやつれたことは恥しいが、それでも、かうして逢ふことの出來たのは、やはり和歌のお蔭なのだ。

和歌の中でも『難波津に咲くやこの花冬籠り、今は春べと咲くやこの花』といふ歌の通りにお榮え遊ばした、仁德天皇と申しあげた帝は、この難波の御子の御事であり、又『淺香山かげさへ見ゆる山の井の』といふ歌は、葛城王が陸奥國司の御饗應を快からず思し召した時、采女がこれを怨んで申しあげたものだといふことだ。そしてこの二首の歌は今日まで歌の父母として仰がれてゐるもので、代代に秀れた歌の手本として、自分達のやうな者が手習をするにも、まづこの歌を

○津の國の難波の春は夢なれや—新古今集西行法師の歌。下句は「蘆の枯葉に風渡るなり」この歌を夫婦の再會が夢のやうだといふ意にとりなした。

○波の起居の隙とても—波の立つを起居にいひかけた和歌は起居進退の間にも疎畧に思はれない大切なものであるとの意。

○わたづみ—海。「淺かるべしや」の緣で出した。

○濱の眞砂はよみ盡し—古今集序の古註に「わが戀はよむとも盡きじ荒磯海の濱の眞砂はよみ盡すとも」

○もてあそべ—和歌の道に遊び樂め。

○難波の恨み—難波の浦を恨みにいひかけた。

○ありし契り—もとの契り

【八】

○恨みも波の上—恨みも無しを波にいひかけ、波の緣で立ち舞ふとつゞけた。

○浮寢忘るる—これまでの貧苦を水鳥の浮寢に喩へた

○蘆の若葉を越ゆる白波—新古今集藤原秀能の歌「夕月夜汐みち來らし難波江の蘆の若葉を越ゆる白波」を引いた。

○こやの住居—攝津國河邊

げ、武士の心慰むる。夫婦の情知る事も今身の上に知られたり

シテ『津の國の。難波の春は夢なれや

地『蘆の枯葉に風渡る。波の立居の隙とても淺かるべしやわたづみの。濱の眞砂は。よみ盡くし盡くすとも。この道は盡きせめや。唯もてあそべ名にし負ふ。難波の恨みうち忘れて。ありし契りに歸りあふ緣こそ嬉しかりけれ

と舞ひてツレに向ひ下に居る。

【八】

ワキ「いかに申し候。めでたう一さし御舞ひ候へ

シテ「さらばそと舞はうずるにて候。『今は恨みも波の上（と立ち上り）

地『立ち舞ふ袖の。かざしかな（と直垂の袖をとり）

〔男舞〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて仕科、

習ふことだ。このやうな次第で、和歌は目に見えない鬼神の心をも和らげ、武士の心をも慰め、夫婦の情を示すものだといふことが、今自分自身の經驗からよく察せられたのだ。自分達の再會は——

『津の國の難波の春は夢なれや、蘆の枯葉に風渡るなり』

（難波の浦も今は蘆の枯葉に寒い風が吹き渡つてゐて、あの面白かつた春景色はもはや夢のやうなものとなつてしまつた）

の詞のやうに、まるで夢のやうな氣持がするのだ。何にもせよ、歌は起居進退の隙にも忘れられない大切なもので、どのやうに詠み盡しいひ盡しても、歌の盡きる時といふことはないのだ。たゞこの和歌の道こそ大に學ぶべきものだ。……何はともあれ、かうして前の事を一切打忘れ、再び夫婦の緣を結ぶことの出來たのは嬉しいことだ」

【八】

從者、左衞門に向ひ、

從者「左衞門殿、めでたう一さしお舞ひなされませ」

日下「それでは、一寸舞ひませう」

と、今は昔の辛い思ひもなく、袖をかざして舞ふのである。

〔男舞〕

を舞ひ

郡の昆陽を小屋にいひかけた。

○冬ごもり―難波津に咲くやこの花―の歌の詞を借りた。

○大伴のしみつの枕詞。伴ひの字を重ねたのである。

○見つつを　御津の音を重ねた。

○歸る事こそ―もとの夫婦の契りに返ることと都に歸ることとを兼ねて用ゐた。

地（キリ）。浮寢忘るる難波江の。浮寢忘るる難波江の。蘆の若葉を越ゆる白波。月も殘り。花も盛りに津の國の。こやの住居の冬ごもり。今は春べと都の空に。伴ひ行くや。大伴の。御津の浦わの見つつを契りに。歸る事こそ。嬉しけれ

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

日下「これまでの役苦をうち忘れて、この難波江の蘆の葉にうち寄せる白波に月が映り、花も盛りに咲き揃ふ春の今、小屋住ひの冬籠りを去つて、春らしい心持となり、夫婦うち連れて、この御津の濱を跡に見て、都へ歸ることの出來るのは、ほんとに嬉しいことだ」

といつて、夫婦打連れ京に歸る樂屋へ退場。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「かやうに候者は……難波の浦へと急ぎ候（下懸是は都さる御方に仕へ申す者にて候。久是に渡り候御方は。行方も知らぬ人にて御入り候が。嵯峨法輪寺に御籠り候處に。同じく願み奉り候人も御籠り候ひしが。御緣こそ渡り候ひつらめ。若子の乳母につけ申され候へば。けしからず若子も勇氣にめでたき人にて渡り候。さる程に國はいづこ名字は如何なる人ぞと尋ね申され候へば。われは津の國難波の内日下の里に住む身にて候が。夫はさる事ありて。流浪の身とならせ給ひ候とて。涙を流させ給ひ候程に。痛はしく思召され。きつと御行方を尋ねて來れとの御事により。われ等御供申し。淀よりも川舟に乘せ申し。唯今津の國難波の内日下の里へと急ぎ候）……

【二】シテサシ「けに受け難き人界を……地下歌「なにとやらん……上歌「汐たるる……猶あり潮の心かな 下懸ナシ）……

【四】シテ「波濤海邊の……下萬民の民間までも　下懸惠み間近きあしがきの。世を隔てたる今迄も）ありがたかりし……

【八】ワキ「いかに申し候。めでたう一さし御舞ひ候（下懸ナシ）。シテ「さらばそと舞はうずるにて候。今は恨みも波の上（寶下懸ナシ）。地「立ち舞ふ袖のかざしかな（下懸ナシ）。（下懸　地「ツレ「げにや妹背の中だちの。言の葉ぐさの末かけて頼むや契りなるらん。　シテ「思ひずも尋ね逢ふ瀾ぞ難波江の薄に埋るる玉柏顯れぬべき住居かな。栖もよしや逢ふまでと。心にくだく紫の。シテ「露の盃。地「とりん〳〵に。シテ「さす盃や梅が枝の。地「匂も深き。袂かな。ワキ「めでたき折なれば左衛門殿一さし御舞ひ候へ。地「匂ひも深き。袂かな。）

古謠本　（貞享二年本）

【一】ワキ「かやうに候……淀より（貞御）舟に……難波の浦（貞さと）へと……　ワキ「あら何とも……申さうずるにて候間暫く御待ちあつて給はり候へ（貞ナシ）……　ワキ「この浦にいか（貞樣）なる面白き……　【六】ツレ「あ（貞今）の蘆賣る……　ワキ「いや唯直に參らせられ候へ（貞シテ「畏て候）……　ツレ「いや暫く（貞候）……ツレ「かくは思へど……人の心は白露の（貞ナシ）……　ワキ「かゝるめでたき……召され候へ（貞やがて御盃を參らせうずるにて候。餘りに日出度折にて候程に。それがしお酌に參らうずるにて候）

附

五音三曲集（長祿四年金春禪竹著）に、【七】シテサシ「或は男山の」から、クセ上の終り「緣こそ嬉しかりけれ」までを擧げてゐるが、觀世現行曲に比べて「采女の盃とりあへぬ」の「ぬ」がず、「言の葉草の種とりて」の「り」がしになつてゐる外變りがない。

飛鳥川（あすかがは） 剛（喜）

解說

【能柄】 四番目 一段劇能

【人物】 子方 友若、ワキ 都の男、シテ 友若の母、ツレ 田植女（二人）

【所】 大和國 飛鳥川邊

【時】 五月

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作とす。飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日觀世又三郎の演じたことが見えてゐる。

【梗概】 友若といふ子供が母の行方知れずになつたのを悲しんで、京の男に伴はれて、吉野の金峯山に再會の祈願に行き、その歸途、飛鳥川岸で田植の樣を眺め、やがて川を渡らうとすると、田植女の一人が河の淵の變つてゐることを注意する。そして飛鳥川の古歌を物語り、わが身上を述懷したが、やがて氣を取直して、田植歌面白く早苗をとる。友若はその田植女がわが母であることを發見して、めでたく母子再會する。

【出典】多くの古歌を引用してゐるが、主題は母子の再會といふ世話で、特に出典といふほどのものはない。

【概評】本曲の舞臺を飛鳥川邊としたのは「昨日の淵は今日の瀬となる」といふ飛鳥川の古歌を主材として劇を展開させる爲であることはいふまでもない。さて、このやうな母子の再會を取扱つた謠曲は、外にも少くないが、多くは母が子を思ふあまりに狂亂の姿となつて、物狂を演ずるのであるが、これは子の方が母を尋ねて行くのであつて、母は狂亂もしてゐない。子を失つた淋しさは述べてゐるが深い執着はなくて、「かゝる業はいつか身に馴れ衣、袖ひぢていざいざ早苗取らうよ、面白や」といつて、呑氣に構へてゐる。だから、母子が邂逅しながらも、母の方は先に氣づかないで、幼い子の方から聲をかけられてゐるのである。詞章としては、所謂「名所舊跡の緣に作りなして、一座見風の曲感」とした、美しいものであるが、人情の深みが足りない。

【一】

○北の山路や―昨日參籠の時とは反對に北に向つて山を下らうとの意。

○上京―京都の三條通より北をいふ。

○三吉野へ參籠―三吉野の三は美稱。大和國吉野金峰山藏王權現に參籠して、母との再會を祈禱するのである。

【一】

次第の囃子にて、子方友若、着附縫箔・兒袴・腰帶・扇の裝束、ワキ都の男、着附熨斗目・素襖上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ次第「昨日入りにし三吉野の昨日入りにし三吉野の北の山路や歸るらん

地取に正面に向き、

ワキ「これは上京邊に住居する者にて候。これに渡り候幼き人は。母御を行方なく失ひ給ひ御歎き候程に。我等御供申し御祈りの爲。昨日三吉野へ參籠申し。唯今都へ上り候

といひてワキ、子方向合ひ、

【一】

舞臺は初め吉野で、ワキ上京の男、子方友若を伴つて登場。

都人「昨日は南に向つて吉野山へ入つて來たが、今日は北に向つて山を下りて歸らう」

ミ次第で、旅の目的地を述べ、

都人「私は京都上京の邊に住んで居る者ですが、こゝに居られる幼い人が、母御の行方の分らなくなつたのを悲んで居られるので、母御に再會出來るやうお祈りをする爲、私がお供して、昨日吉野金峯山に參籠し、これから都へ歸るのです」

ミ見物人に自己紹介し、

○立ち歸る旅衣—衣の緣語裁つを立つにいひかけ、衣を着るを昨日といひかけた

○岸田—川岸の田。

○波も淵瀨の名にし負ふ—古今集讀人知らずの歌「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨になる」の廣く知られてゐるのをいふ。

○飛鳥川—大和國高市郡を流れる川。

○田歌—田植歌。

【二】

○とりどりの—早苗を取るを早少女のとりどりの袖にいひかけた。

ワキ道行『一夜寢て又立ち歸る旅衣。又立ち歸る旅衣。昨日過ぎにし道芝の露も草葉も五月雨の。山水添へて行末の。岸田の早苗綠にて。波も淵瀨の名にし負ふ。飛鳥川にも着きにけり飛鳥川にも着きにけり

「山水添へて」とワキ正面に向きて二三足出でまたもとに歸りて飛鳥川に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程にこれは。飛鳥川に着きて候。向ふを見れば笛鼓を鳴らし田歌をうたひ候ぞや。暫く御眺め候へ

と子方にいひて脇座へ行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ友若の母、面曲見・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織脫掛の裝束、ツレ田植女二人、面連面・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織脫掛の裝束にて、いづれも苗を籠に入れて持ち橋懸に立ち並び、

シテ ツレ 一聲『飛鳥川。岸田の早苗とりどりの。袖も綠の。景色かな

都人「一夜吉野にお詣りをして、また歸りの旅に出掛け、昨日通つた道を通つて來ると、五月雨に道邊の草葉も潤ひ谷川の水も多くなつて、川岸の田の早苗も青々としてゐる。(その景色を眺めながら)、淵瀨の變るので有名な飛鳥川へ來た」

といつてゐる間に飛鳥川邊に着いた態で、無臺は飛鳥川の川邊となる。都人は友若に向ひ、

都人「道をお急ぎになつたので、思ひの外早く飛鳥川へ着きました。向ふを見ると笛や鼓を鳴らして面白く田植歌を謠つて居ます。暫く休んで、あれを御覽なさい」

二人は岸邊で休息の態。

【三】

シテ友若の母田植女の姿で、同じ田植女のツレ二人と登場。一同田植をしてゐる態で、

母「この飛鳥川邊の田で早苗を取つてゐ

○種蒔きしその神の代―稻穗は天照大神の初めてお作りになつたものであると日本書紀に見え、また嘗田のことが古事記にも見えてゐる。「淡路」參照。
○天の村早稻―神代の稻を、いふ。
○ちぎのかまへ―地儀の構へで、土地の形勢がよいといふ意か、或は「ちぎ」は千木で、家に就ていふか。
○天の川苗代水にせき下せ―金葉集能因法師の雨乞の歌。下句は「天降ります神の實國」。
○ばば神―。衾草子に「是は朝臣伊豫守となりて下向の時、數月雨降らず、民困に相語ふ時に、守能これを歎き思ふ時に、歌を詠じて曰く、請ふ明神に祈すべし」と云々。時に詠ずる所の歌なり。依りて大雨下りて三日三夜止まずと。
○飛鳥風―飛鳥風のどけき飛鳥川の邊を吹く風。續後拾遺集津守國助の歌に「飛鳥風のどかに渡れ手弱女の挿頭の櫻今さかりなり」
○都はここに遠けれど―萬葉集志貴皇子の御歌「手弱女の補吹き返す飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」を借りた。
○天さかる―鄙の枕詞。
○誓ひ―神の利益。

ツレ『山時鳥聲添へて。シテ『うたふ田歌も猶繁し

といひて舞臺に入り、

シテサシ『種蒔きしその神の代ぞ久方の。天の村早稻種繼ぎて

シテ『今人の代の末までも。惠みの國は治まりて。我等如きの民までも。ちぎのかまへは豐かなり。然れば神と君が代の。廣き御影のありがたさよ

シテ下歌『天の川苗代水にせき下せ。上歌『天降ります事ならば。天降ります事ならば。神ぞ知るらん代のためし。雨も豐かに木の音ものどけき飛鳥風。都はここに遠けれど。天さかる鄙の國まで漏れぬ誓ひはありがたや。漏れぬ誓ひはありがたや

と苗を正面に植う。

シテ「暫く休らひ田を植ゑうずるにて候

ツレ「心得申して候

ると、皆の着物の袖までが綠のやうに見えますな」

女「おや山時鳥まで鳴き立てゝ、田植歌が愈々賑やかなことです」

母「神代の昔、天照大神が稻をお蒔きになつてよりこの方、人代の今日に至るまで、この結構な稻穗を受け繼いで來て、國は太平に治まり、私達のやうな下々の民まで豐かな生活をしてゐますのは、ほんとに神樣と天子樣との廣い御惠みの御蔭でありがたいことです」

母「さういへば、昔――

『天の川苗代水にせき下せ、天下ります神ならば神』

（神樣がほんとに天からお降りになつたものなら、その天にある天の川の水を旱魃で困つて居る苗代田へ流して下さい）

と歌を詠むと、すぐ雨をお降らしになつたやうに、神樣の御惠みはいつの代にも變りがなく、雨も十分に降り、風も穏かに吹いて、こゝ飛鳥川の邊に都から遠い田舍だけれど、やはり都と同じやうに、御惠みを戴いてゐるのは、ほんとにありがたいことです」

三語り合ひ、

母「暫く休んで、それからまた田を植ゑませう」

女「さうしませう」

【三】

○折々の目前なり―目前の景色が時節柄に適はしい面白さである。
○渡瀬―人が徒歩で渡ることの出來る淺瀬。

【三】

ワキ立ちて正面に向き、

ワキ『面白や頃は五月の始めつ方。四方の梢も深緑。氣色を添へて小田の早苗取り持つ人の裳裾を浸し。袖を濡らせる有樣は。げに折々の目前なり。「これなる川の水出でて。本の渡瀬も定かならねど。昨日渡りしその儘に。川瀬を尋ね渡り行けば(と二三足出づ)

シテ「なう旅人ここは渡瀬に候はず。今少し上へ廻り給へ

ワキ「なに上へ廻れと候や

シテ「なかなかの事御廻りあれと申せばとて幾程もなく候。あれに見えたる澪標を。しるべに渡り給ふべし

ワキ『不思議や昨日三吉野へ參りし時はこの渡瀬。さては渡瀬の今日かはり。上へ廻り候やら

○澪標―水の深淺を示す棒杭。

と、(友若の母を初め田植女達、暫く田植をやめて休息の態。都の男と友若は田植の樣を見てゐて、

【三】

都人「ほんとに面白い眺めだ。今は丁度五月の始めで、木々の葉は濃い綠となり、それを背景にして、田植の女達が早苗を持つて、着物の裾を水にひたし、袖を濡らして働いてゐる樣は、いかにも時節柄に適はしい面白い眺めだ。(おや大分時も過ぎた。)この川に水が出で、どこが淺瀬かよく分らないけれど、昨日渡つた所を渡りませう」

とその川瀬を渡つて行くと、

田植を休んでゐた友若の母が見て、

母「もうし旅の方、こゝは淺瀬ではありません。も少し川上へお廻りなさい」

都人「なに川上へ廻れといはれるのですか」

母「さうです。けれど、お廻りなさいと申したところで、さほど遠くはありません、あそこに見えてゐる澪標を目印にしてお渡りなさい」

都人「變ですね、昨日吉野へ參つた時にはこの瀬を渡つたのに、それが今日は瀬が變つてゐて、上へ廻れといはれるのですか」

ん

シテ「なかなかの事旅人よ。この川筋の昨日にかはりたるとの御不審は。名をまだ知ろしめさざらん

ワキ「いやこの川は飛鳥川にて候はぬか

ツレ『飛鳥川ぞと知ろしめして。昨日の淵は今日の瀬に。かはるとかねて知ろしめさぬは。御心なき仰せかな

シテ「夜の間の雨に水増り。殊更今日は流れ洲の。渡瀬は定めなきものを

ワキ『げに隠れなき名河なり。扨々この飛鳥川のわきて淵瀬の定まらぬ。いはれは如何なる事やらん

シテ「いやそれは唯山川の。末の流れの石多く。淵瀬の常に變る事。『いひならはせる心なり

○かねて—以前から。

○流れ洲—蘆の浮根などに土が積つて水中に浮島を作つて居るのをいふ。

母「さうです、この川筋が昨日と變つてゐるのを御不審になる所を見ると、またこの川の名前を御存じないのでせう」

都人「いや知つてゐます。この川は飛鳥川ぢやありませんか」

女「飛鳥川だと御存じありながら、昨日淵であつても今日淺瀬に變るといふことを前もつて御存じないとは、風流氣のないお詞でございますね」

母「夜の間の雨に水嵩が増して、殊に今日は浮島までが流れて、何處が淺瀬だか分らないと、すぐ氣がつくぢやありませんか」

都人「いかにもこゝはあの歌で有名な川でした。ところで、この飛鳥川の瀬の深さの定まらないのは何故でせう」

母「それはたゞ山川の流れを受けて、石が澤山流れ落ち、瀬の深さが始終變るので、さういつて居るのです。それで、歌にも——

○世の中は何か常なる―前に掲げた古今集の歌。

○左右なう―思慮もなく。

【四】

○夏闌けて―夏が深くなつて。

○五月雨に物思ひ居れば時鳥夜深く鳴きていづち行くらん―古今集紀友則の歌。

○身に白絲の―身に知らるるを白絲といひかけ、絲をよるを夜といひかけた。

○胡蝶の夢―莊子が胡蝶となつて遊び戯れたといふ夢を見た話の如く、覺め易くはかない世の中といふ意。莊子齊物論に「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也、俄然覺、則蘧々然周也、不ノ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上」

ツレ『されば歌にも

シテ『世の中は

地『何か常なる飛鳥川。何か常なる飛鳥川。昨日の淵は今日の瀬に。なるや夜の間の五月雨に。水層まさりて濁りたる。水の心も知らずして。左右なう渡り給ふなよ左右なう渡り給ふなよ

ワキ下に居り、ツレは地謠座前に坐す。

【四】

地クリ『それ春過ぎ夏闌けて。秋も又暮れぬべし。冬にならんも。幾程ぞ

シテサシ『五月雨に物思ひ居れば時鳥。夜深く鳴きていづち行くらんと

地『よみし心も今更に。身に白絲の夜となく。晝ともわかであだし世のいつまでとてかながらへん

シテ『思へばあはれ胡蝶の夢に

『世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬になる』

（世の中は果敢ないもので、何一つ變らないものはないのだ。飛鳥川でも、昨日淺瀬であつたものが、今日は深い淵となるのだもの）

といつて居ります。夜の五月雨に水層がふへて、水が濁つて底の深さも分らないのですから、氣をつけずに無暗にお渡りになつてはいけません」

母は都人との對話を終つて、また田植に取りかゝらうとしながら、

【四】母―ほんとに年の經つのは早いもので、いつの間にか春は過ぎてしまひ、やがて夏となり、そのうちに秋もまた暮れてしまふことであらう。そして冬になるのも間のないことであらう。――

『五月雨に物思ひ居れば時鳥、夜深く鳴きていづち行くらん』

（五月雨のしさ〳〵と降る鬱陶しさに、つい物思ひに耽つてゐると、どこへ行くのか、夜深く時鳥が鳴いて飛んで行く）

と昔の人が詠んだ歌の心持も、今更わが身に思ひ知られることです。この世の無常の風は夜晝の區別もなく吹いてゐるので、どうせこの浮世に長く生きてゐることは出來ないのだ。考へて見れば、今現にやつてゐることも、莊周が夢に胡蝶と

〇御田屋守今日は五月になりにけり急げや早苗老いもこそすれ―後拾遺集曾根好忠の歌、御田屋守は田の番をする人。
〇五月雨の晴れぬ日数―續古今集前右大臣の歌「片敷の袖ほしわびて五月雨の晴れぬ日數や宇治の橋姫」
〇明日とないひそ―明日といはず今日直にとの意。明日・飛鳥と頭韻を重ねた。
〇いくばくの田を作れば―朝なか時鳥四手の田長を朝なか呼ぶ―古今集藤原敏行の歌時鳥の異名を四手の田長といふので、時鳥が毎朝田長（田を作る人）を呼んで居ると詠歌したのである。
〇死出の山田―時鳥は人の魂が化して鳥となつたのだといひ傳へられて居るのである。四手を死出に取做したのである。
〇この土―この婆婆。人間界。
〇ほととき過ぐる―「ほととぎす」の音を一程時過ぐ」と通はせたのである。古今集藤原敏行の物名の歌に「くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をとよむる」
〇時の鳥―ほととぎすを時鳥と書くのは、時の鳥といふ意であるといつたのである。

地遊ぶぞ今日の。現なる

シテ次の謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ御田屋守。今日は五月になりにけり。急げや早苗。老いもこそすれ。げにや五月雨の。晴れぬ日數もふり行くに。明日とないひそ飛鳥川の。水田の淺綠たち連れいざや植ゑうよ。抑もいくばくの田を作ればか時鳥。四手の田長を朝な朝な呼ぶと。詠ぜしも誠なり。死出の山田のほととぎす。この土に來り聲立てて。ほととき過ぐる世の中の。教へを知る故に時の鳥とは申すなり

シテ五月山。梢を高み時鳥
地泣く音そらなる戀やする。われも戀しき綠子の行方も知らで足引の山路に迷ひ里に出でて。國々浦々廻る日の。積る三年の春過ぎて。夏もなつて戯れ遊んだといふ話と同じやうなほかないものです」

母「しかし、さういつて仕事をせずには居られない、――

『御田屋守今日は五月になりにけり、急げや早苗老いもこそすれ』

（百姓達よ今日はもう五月になつたのだ、急いで田植をしてしまへ、うろ〳〵してゐると、早苗が大きくなつてしまふだらう）

と詠まれた通りで、ほんとに五月雨で晴れない日數も多いのだ。また明日にしようなどといはず、今日すぐこれから、この飛鳥川の水田で、皆と一所に早苗を植ゑませう。――

『いくばくの田を作れば時鳥、四手の田長を朝な〳〵呼ぶ』

（一體時鳥はどんなに澤山田を作つて居るのだらう、毎朝々々百姓に起きよ〳〵と呼び起して居る）

といふ歌があるが、これも尤もなことで、時鳥は冥土からこの婆婆へ來て、『時間はすぐ過ぎてしまふものだ』と鳴き聲を立てゝ人に教へて居るので、それで時の鳥といふのだもの。時鳥といへば、――

『五月山梢を高み時鳥、泣く音そらなる戀もするかな』

（五月の頃には時鳥が山の高い梢で聲を立て・

○五月山梢を高み時鳥―古今集紀貫之の歌。下句「鳴く音空なる戀もするかな」
○足引の―山の枕詞。
○振分髪―五月雨の降るといひかけた。振分髪は子供の左右に結び分けた髪をいひ、その髪に玉蔓（玉を連ねた頭飾）のかゝるを、かかる業にいひかけた。
○袖ひぢて―袖を濡らして。

【五】
○雁金さむみ暮れし田を―新古今集善滋爲政の歌「時鳥鳴くや五月に植ゑし田を雁金寒み秋ぞ暮れぬる」を少しかへて引いた。
○又時鳥早苗とる―また時鳥が鳴き早苗を取る頃となつたとの意。
○五月の玉―五月五日内裏に於て群臣に賜ふ藥玉をいふ。その玉を「玉の波」にいひかけた。
○手玉も由良の―手玉は手に纏ふ玉。五月の玉を承けて、手玉を出し、手玉が早苗を取る爲にゆらぐ（搖れ動く）を由良にいひかけた。由良は淡路國の海岸。
○湊田―海岸の田。
○さすや潮も交る―海岸の田に滿潮の時汐水の打寄せ

はや五月雨の。振分髪の玉葛。かかる業はいつか身に。なれ衣袖ひぢていざいざ早苗取らうよ。面白や

〔舞〕

なほ次の謠に合せて舞ふ。

【五】
シテ『面白や。雁金さむみ。暮れし田を
地『又時鳥早苗とる。又時鳥早苗とる。五月の玉の波を散らすぞ
シテ『手玉も由良の湊田の早苗
地『さすや潮も交る早苗は
シテ『住吉の岸田
地『入江にまかせしは
シテ『難波田のふし水
地『都邊に植ゑしは
シテ『伏見田鳥羽田の

鳴くが、自分も大きな聲を立て、泣かなければならないやうな戀をすることだ）
といふ戀歌があるが、自分も戀しく思ふ心には變りのない、いとしいわが子の行方が知れないで都を出て、山路に迷つたり村里へ出たり、國々浦々をさ迷うて、三年の春を過ごし、また夏の五月雨時となつたが、いとしいわが子には會ふことが出來ず、いつの間にかこのやうな仕事に馴れてしまつたことだ。いや〳〵そんなことをいつてゐても致方がない、さあ皆と一所に早苗を取つて植ゑよう。何も考へなければ、これも面白いことだ」

と田植をつゞけ、興に乘じた態で、

〔舞〕
を舞ひ

【五】
母『――
『ほんに田植は面白い。雁の鳴き行く秋の暮、稻の刈り入れしたものを、いつのまにやら春が來て、ほととぎす鳴く頃となり、はや早苗とる時となる。早苗手に取り田に植ゑば、五月五日の藥玉の、五色の絲を散らすやう。手にまく玉のゆら〳〵と、ゆらぐ雅びのをかしさは、由良の湊田の早苗。さし來る潮の寄せて來て、水田に汐の交じるのは、海邊住吉岸田の田。入江の水を引

入るをいふ。
○住吉の岸田―攝津國東成郡住吉の名所。新後拾遺集公勝の歌に「松にのみ音は響きて住吉の岸田の穗波秋風ぞ吹く」
○まかせし―田に水を引き入れること。
○難波田―攝津國難波の田。
○ふし水―流れない溜り水。
○伏見田・鳥羽田―京都の南にある伏見及び鳥羽の田。
○手弱女―美人をいふ。前に擧げた萬葉集の歌を胸に置いて綴つたのである。

地『これは都に近き手弱女の袖吹き返す飛鳥風。心も亂るる青柳の綠子戀しや。なつかしや

【六】

地ロンギ『今までは行方も知らぬ賤の女の。行方も知らぬ賤の女の。不思議や見れば母上か友若ここに來りたり（と子方立ちてシテへ向く）

シテ『わが子ぞと聞けば夢かと夕暮のそれかあらぬか夢ならば覺めての後はいかならん（と子方へ行き）

地『よくよく見ればみづからが。尋ぬる母や

シテ『友若に

地『あふの松原の。あふの松原の。盡きぬ逢瀨や飛鳥川。深き契りの親と子に二度逢ふぞ嬉しき二度逢ふぞ嬉しき

と子方母と共に歸る心にてまづ橋懸へ行き、シテ常座にて留拍子を踏む。

○あふの松原―友若に逢ふを地名の逢の松原にいひかけた。逢の松原の所在は明かでない。
○盡きぬ逢瀨―松の綠の色の變らない意を含めて、盡きぬといひ續けた。

上げて、高い所に作るのは、攝津の國は難波の田。都に近い所では、伏見や鳥羽の田であらう。そこは都の近くとて、田植女も優しかろ。こゝは飛鳥の風が來て、田植ゑの袖を吹き返す。柳の絲も亂れませう、心も一所に亂れます』

ミ田植歌を謠つてゐるうちに情に迫つて來て、

母「あゝいとし子が戀しいなつかしい」

ミ田植をやめてあたりを見る。

【六】

友若はこの田植女が自分の母であることに氣附いて、

友若「今までは何の關係もない田植女だと思つてゐたのに、これは不思議だ。よく見れば私のお母さまだ。友若がこゝへ參りました」

母「わが子だと聞いてはまるで夢のやうだが、これはほんとだらうか夢だらうかもし夢だつたら、覺めた後をどうしよう」

友若「よく見ると、私が尋ね探してゐたお母さまに違ひなかつたのです」

母「やつぱり友若であつたか」

と親子の盡きない宿緣によつて、母と友若とが二度逢ふことの出來たのは嬉しいことである。

〔考異〕

諸流（剛喜）

殆ど異同がない。

古謠本（觀世流元祿二年本）

【一】ワキ「これは……三吉野へ參籠（元詣）申し……ワキ「御急ぎ候程に是は（元早）……

【二】シテ「種蒔きしその神の代ぞ（元は）……シテ上歌「天下ります……のどけき（元空の）飛鳥風……鄙の國まで（元も）

【三】ワキ「面白や……これなる川（元是は村河）の水出で……尋ね渡り行けば（元候）。……シテ「夜の間（元今宵）の雨に……流洲の（元淀みつつ）渡瀨は定め……

【四】地クセ「御田屋守……水田の淺（元ふか）綠……地「泣く音……國々浦々廻る（元わたる）日の……

安宅（たか）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目　一段劇能

【人物】 **ワキ** 關守富樫何某、**狂言** 同臣（太刀持）**子方** 源義經、**シテ** 武藏坊辨慶、**ツレ**（立衆）伊勢三郎等義經の臣九人、**狂言** 强力

【所】 加賀國　安宅

【時】 文治三年二月

【作者】 能本作者註文には作者不明とし、二百十番謠目錄には觀世小次郎の作とす。親元日記寛正六年三月九日の條に觀世太夫演能のこと、言經卿記文祿四年四月三日の條に註釋のことが出てゐる。

【梗概】 平家滅亡の後、兄賴朝の疑ひを受けた源義經は、主從十二人作り山伏となり、奥州さして都を落ちのび、加賀國安宅まで來ると、賴朝の意をうけてこの地の關を守つてゐた富樫何某は、一行を怪しんで斬り殺さうとした。辨慶は南都東大寺の勸進山伏であるといひ免れようとしたが、富樫は是非をいはせないので、辨慶等は覺悟を示して最期の勤行を

始めた。すると、富樫は或は誠の山伏かと佛罰を恐れ、策をかへて、勸進帳の讀上げを求めた。辨慶はもとよりかやうなものを持つてゐなかつたが、さあらぬ態て笈の中から往來の卷物を取出し、勸進帳と名づけて高らかに讀み上げたので、富樫は一行を通すこととした。ところが、義經が露顯を恐れて强力姿となり、一行の最後になつて關を通らうとすると、富樫はこれを見咎めた。手をかけて義經を抑へようとした。辨慶等は今こそ一期の浮沈と武力を以つて爭つたので、富樫はその勢ひに恐れて、遂に一行を關から通してしまつた。そして更に酒を持ち出して一行を慰めた。辨慶は舞を舞つて酒席を助け、やがて虎口を遁れる思ひをしてここを立去つた。

【出典】義經等が作り山伏となつて奥州に下つたことは、吾妻鏡、文治三年二月十日の條に、

前伊豫守義經、日來隱二住所々一、今度遁二追捕使之害一訖、遂經二伊勢美濃等國一赴二奥州一、是依レ恃二陸奥守秀衡入道權勢一也。

とあり、源平盛衰記卷三十六に、

判官奥州へ落ち下り給ひし時、十二人の虛山伏の其一也。

とあるが、詳しいことは見えない。義經記卷七には義經奥州落ちの事を詳述してゐるが、勸進帳讀上げの事はなく、義經打擲の事、笈さがしの事も、安宅以外の各別な所で行はれてゐる。卽ち安宅の關で辨慶が富樫と應待したことは「平泉寺御見物の事」に、

富樫これを見て、「いかなる山伏ぞ」といへば、「これは東大寺勸進の山伏にて候」「いかに御身一人はおはするぞ」、「同行の山伏多く候へども、さきざま宮越へ通り候ひぬ。これは御內勸進の爲に參りて候……」と申しければ、富樫「よくこそ御出で候へ」とて、加賀の上品五十匹、女房の方より罪障懺悔の爲にとて、白袴一腰、八花形に鑄たる鏡……總じて冥帳につく百五十人……それより大野の湊にて參りあひけり。

とあつて、この場には義經も居合はさず、極めて無異に通過してゐるのである。義經が見咎められて、辨慶が打擲したのは如意の渡で、「如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事」に、

（渡守平權の頭）「あの舳に、村千鳥の摺の衣めしたるこそ怪しく思ひ奉れ」と申しければ、辨慶「あれは加賀の白山より連れたりし御坊なり、あの御坊ゆゑに所々にて人々に怪しめらるるこそ詮なけれ」といひけれども、返事もせで、うち鬱ぎて居給ひけり。辨慶腹立ちたる姿になりて、走りよりて、舟ばたを蹴まへて、御腕をつかんで肩にひつかけ、濱に走りあがり、砂の上にがはと投げ捨て、腰なる扇ぬき出し、痛はしげもなく續けうちに散々に打ちたりける、見る目もあてられざりけり。……平權頭これを見て、「すべて羽

黒の山伏ほど情なき者はなかりけり。判官にてはなしと仰せらるれば、さこそ候はんずるに、あれ程にいたはしく情なく打ち給へるこそ心憂けれ。せんずる所、これは某が打ち參らせたる杖にてこそ候へ。かゝる御痛はしき事こそ候はね。これに召し候へ」とて、舟をさし寄する。

とあり、なほ義經の笈に手をかけたことは「直江の津にて笈さがされし事」に、この浦の代官が義經や片岡の笈を檢べたが、辨慶は言葉巧みに辨明して、事なきを得たと記してゐる。本曲はこのやうに義經記に記してゐる所々の遭難を安宅一所に集中し、更に勸進帳の讀上げをも加へて戲曲化したものであらう。――この勸進帳は恐らく平家物語卷五文覺の「勸進帳」から暗示を得たものであらう。――尤も幸若舞曲の「富樫」には勸進帳の讀上げがあるが、義經打擲の事（ねづみつまの關」笈さがしの事（直江の津）はやはり義經記同樣安宅以外の所としてゐて、要するに謠曲作者の創意に出た所が多いのである。

【概評】判官物の謠曲は〔鞍馬天狗〕〔橋辨慶〕〔烏帽子折〕〔正尊〕〔船辨慶〕〔攝待〕など世に流布した、從つて後世の文藝に著しい影響を與へたものが多いのであるが、本曲の如きは、その中でも最も顯著なるものであり、本曲自身の價値からいつても、簡素な舞臺で演せられ得べき劇の頂點を示したものと觀られるのである。本曲の、濃やかな人情の描寫はクセの一章にあり、舞踊としての興味は最後の男舞にあるが、劇としての緊張した場面はその以前、辨慶と富樫との曲折した應待に盡されてゐるのであつて、その應待は凡そ三段の變化をとつてゐる。第一回の應待は富樫の職權をふりかざした抑壓と辨慶の佛罰をかさにきた威嚇とを以て行はれ、第二回の應待は富樫の巧妙なる探偵と辨慶の機敏な遁辭で經過し、第三回の應待は富樫の判官發見とこれに對する辨慶の機智及び武勇から成立つてゐるのである。そしてこれらの應待は、第一回及び第二回では正に辨慶の勝に歸したのであるが、最後の第三回目には、敵に判官を抑へられた爲に辨慶は極めて不利の立場に陷り、遂に武力を振ふといふ拙劣な手段を用ゐるやうになつたのであるが、この場合「笈に目をかけ給ふは盜人ざうな」といふいひがゝりを得たのは、やはり辨慶の勝れた手腕と見られるのである。かうして結局シテの辨慶が勝を得るのであるが、實演の場合ワキの富樫が勝れて居れば居るほど、シテの技量は一層光を增すのであるから、二人の演者が殆ど互角に勝れてゐる時には、極めて緊張した場面を作り得るのである。

【一】

○富樫の何某―富樫は加賀國石川郡にあり、何某はその地の領主。義經記卷七「平泉寺御見物の事」の條に「富樫介と申すは當國の大名なり。鎌倉殿より仰せは蒙られねども、内々用心して判官殿を待ち奉るとぞ聞えける」

○頼朝義經御中不和―義經は平家討滅に殊勳を建てたが、その爲に却つて兄頼朝に嫉まれ、更に梶原景時の讒言によつて愈々その憎しみを加へ、遂に叛逆者と見做されるやうになつたのである。

○判官殿―義經を指す。判官は檢非違使尉のことで、義經は元暦元年八月六日之に任ぜられた。

○山伏―修驗道の行者。山野に臥して苦行するので、山伏といふ。

○奥―陸奥。

○簡み申せ―吟味せよ。

○御前に候、畏つて候―この狂言詞章本にもある。

【二】

名乘笛にて、ワキ關守富樫何某、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・上下長直垂・込大口・小刀・扇の裝束にて、狂言太刀持（着付熨斗目・狂言上下・腰帶・扇・小刀の裝束）に太刀を持たせて出で、舞臺の眞中に立ち、

ワキ「かやうに候者は。加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより。判官殿十二人の作り山伏となつて。奥へ御下向の由頼朝聞しめし及ばれ。國々に新關を立てて。山伏をかたく簡み申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて山伏を留め申し候。今日もかたく申しつけばやと存じ候

狂言の方に向き、

ワキ「いかに誰かある

太刀持「御前に候

ワキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ

太刀「畏つて候

【二】

舞臺は加賀國安宅の關で、ワキ關守富樫何某、狂言の從者を隨へて登場。

富樫「私は加賀國富樫の領主です。さて頼朝義經御兄弟の御仲が不和になられたので、義經殿には主從十二人僞山伏となつて、陸奥へお下りになるとの事を、頼朝公がお聞きになつて、國々に新しく關所を立て、山伏を嚴重に吟味せよと仰せ出されたのです。それで、私はこの所をお引受けして、山伏を吟味して居るのです。今日も家來の者に嚴しく申付けようと思ひます」

ミ見物人に自己紹介をして事件の發端を述べ、狂言の從者に、

富樫「今日も山伏が通つたら、すぐこちらへ知らせよ」

ミ申付ける。（以上はいはば序幕で、ワキ及び狂言は一先退場した形になる）

ワキ脇座へ行き床几にかゝる。狂言太刀持、名乗座に出で、太刀「皆々承り候へ。判官殿十二人の作り山伏となり奥へ御下りにて候間。今日も又山伏達の御通りあらばこなたへ申し候へ。その分心得候へ〳〵

といひて笛座の上に着く。

【二】

次第の囃子にて、子方義經、兜巾・襟赤・着附厚板・水衣・白大口・篠懸・腰帶・扇・小刀・刺高數珠の裝束、シテ辨慶、兜巾・襟淺黄・着附無色段厚板・縞水衣・大口・篠懸・腰帶・扇・刺高數珠の裝束、立衆九人、シテ同樣の裝束、狂言强力、兜巾・着附無色厚板・括袴・脚半・小刀・笠の裝束にて笈を負ひ棒を持ちて出で、一同舞臺に立ち並びて、

シテ次第『旅の衣は篠懸の。旅の衣は、篠懸の露けき袖やしをるらん

地取の代りに、强力『おれが衣は篠懸の。破れて事や缺きぬらん』と謠ふ。

シテサシ『鴻門楯破れ都の外の旅衣。日もはるばるの越路の末。思ひやるこそ遙かなれ

シテ『さて御供の人々には（とツレを見渡し）

○篠懸―山伏が上に着る麻衣。深山の篠の霧霜を拂ふ爲の衣といふ意。衣笠内大臣家集に「三吉野の苔路を傳ふ山伏の篠懸衣露に濡れつゝ」

○鴻門楯破れ―漢高祖が楚項羽と鴻門の地に會した時項莊が劒舞に托して高祖を擊たうとしたのを、高祖の臣樊噲が楯を擁して之を防いだといふ故事（史記列傳卅五に見ゆ）に據り、辨慶を樊噲に比し、楯を義經を保護する心に喩へ、その志

【三】

辨慶は初め京都で、子方源義經、シテ武藏坊辨慶、立衆伊勢三郎以下十人の臣及び狂言强力を從へ、一同山伏姿で登場。

一同「山伏の篠懸衣を身に纏うて、このやうな旅に出るのだが、行先さぞ情ない思ひをすることだらう」

ミ次第に旅の心持を述べ、さて見物人に向つて、

辨慶 わが君判官殿をお護り致したもののその力が足らず、遂にこのやうに都の外へ追ひ拂はれ、日數のかゝる北國の旅に出ることとなつたが、誠に行先の遠い心細い感じのすることだ。といつた所で今

も失敗したといふ意。楯を衣の縁に通はせて、旅衣とつゞけた。
○日もはるばるの—「日も」は紐「はる」は張ると、衣の縁語にいひかけた。
○伊勢の三郎、片岡、增尾、常陸坊—いづれも義經の臣。委しくは本曲の末尾に附記す。
○先達—修驗者が峯入する時、同行の案内者となる者、峯入を度重ねたものが先達となることになつて居る。
○いつまでの限りも—陸奥にいつまでに着くといふ豫定の日限も。
○白雪の—限りもいさ知らずを白雪にいひかけ、雪の縁で越路を呼び起した。
○二月の十日の夜—吾妻鏡には文治三年二月とあり、義經記卷七には文治二年二月二日とある。
○これやこの行くも歸るも別れては—後撰集蟬丸の歌下句「知るも知らぬも逢坂の關」逢坂山の序に用ゐた。
○霞ぞ春は恨めしき—古今集おとの歌「山隱す春の霞ぞ恨めしきいづれ都の境なるらん」を借りて、都の名殘を惜む心をいふ。
○波路遙かに—琵琶湖を渡るのである。

ツレ『伊勢の三郎駿河の次郎。片岡增尾常陸坊

シテ（正面に向き）『辨慶は先達の姿となりて

シテ・ツレ向合ひ、

ツレ『主從以上十二人。未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を。今日分け初めていつまでの。限りもいさや。白雪の。越路の春に急ぐなり

シテ上歌『時しも頃は二月の。時しも頃は二月の。二月の十日の夜月の都を立ち出でて。これやこの。行くも歸るも別れては。行くも歸るも別れては。知るも知らぬも。逢坂の山隱す。霞ぞ春は、恨めしき霞ぞ春は恨めしき。下歌『波路遙かに行く舟の。波路遙かに行く舟の。海津の浦に着きにけり。東雲早く明け行けば淺茅色づく有乳山。上歌『氣比の海。宮居久しき神垣や。松の木目山（とシテ正面を見）。なほ行くさきに見えたるは。柚山人

更致し方もなく、かうして伊勢三郎、駿河次郎、片岡八郎、增尾十郎、常陸坊などがお供をして、中にも自分は先達の姿となり、主從十二人が、これまで經驗したこともない山伏姿の旅裝束をして、篠懸衣で露霜を拂ひながら、今日出立して、これから幾日かゝることか、行先の見込もつかない北國の旅を急ぐのである」

ミ二回の境遇を述べ、

一回時は二月十日の夜、月の光に都を立ち出で『これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關』と歌に詠まれた逢坂山に來て、後をふり返つて見ると、一面春霞に埋もれて、都の樣子の見えないのが恨めしく思はれる。やがて琵琶湖を舟で渡つて海津に着いた。それから、明け方早く有乳山を越え、越前國に入つて敦賀浦に着き、氣比の宮を拜し、木目峠を越えて、なほ旅を進め、板敷や柚山を過ぎ、藤生津を通つて、小波寄せる三國湊を經、敵の陣地のやうな危い思ひのする加賀の國安宅に着いた—

ミ旅程を述べてゐる間に、舞臺は移つて加賀國安宅となる。

○海津—近江國高島郡にある。越前に出る順路。
○東雲—夜明け方。
○淺茅色づく—朝を淺茅にいひかけ、新古今集柿本人丸の歌「矢田の野に淺茅色づく有乳山峯の淡雪寒くぞあるらし」を借りて有乳山とつゞけた。
○有乳山—近江國高島郡鍬熊村から越前國敦賀郡愛發村に入る間の山。
○氣比の海—越前國敦賀灣
○宮居久しき神垣—敦賀の氣比神社をいふ。官幣大社で、御食津神・伊奢沙別命を祭る。
○松の木目山—神垣の松、松の木目、木目山といひかけた。越前國敦賀郡木目峠をいふ。
○柚山人の板取—柚山人は木を伐り板に引くので、この意を文の綾として、柚山・板取の地名を出した。板取は木目峠の麓にある小驛。柚山はそれより三里北、湯尾と淺水との間にある山、從つて地理的にいへば、本文は逆になつて居る。
○河瀨の水の麻生津や—「河瀨の水の」は淺を呼び出す序詞。麻生津は越前國足羽郡にある。

の板取。河瀨の水の麻生津や（右の方を見廻し）。末は三國の湊なる。蘆の篠原波寄せて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に着きにけり花の安宅に着きにけり

シテ「末は三國の湊なる」と正面に向きて二三足出で、またもとへ歸りて、一同安宅に着きたる態。上歌濟みて、子方とシテとは正面に向き、

シテ「御急ぎ候程に。これははや安宅の湊に御着きにて候。（子方に向ひ）暫くこの所に御休みあらうずるにて候

【三】

この間にワキ・太刀持狂言は笛座の後にくつろぐ。子方脇座へ行き床几にかゝり、ツレ山伏子方の次々に地謠座前より囃子座前にかけて弓形に居並ぶ。強力狂言は狂言座にくつろぐ。

子方「いかに辨慶

シテ舞臺の眞中へ出で、子方に辭儀して、

シテ「御前に候

子方「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあ

辨慶「旅をお急ぎになつたので、存外早く安宅の關へ御著でございます。暫くこの所で御休息なさいませ」

と義經にいつて、一同安宅の關に近い街道で休息の態。

【三】

義經「辨慶」

辨慶「はい」

義經「今旅人が歩きながら話してゐた事を

○末は三國の湊―河の縁で「末は」とつゞけ、湊を出す。三國は越前國坂井郡にあり九頭龍川の河口にある湊。
○蘆の篠原―海邊の縁で蘆を出し、篠を呼び出す料とした。篠原は加賀國江沼郡にある沙丘地。〔賞歴〕參照。
○靡く嵐の烈しきは―波の縁で嵐を出し、嵐は花の仇といひかけて「安宅」とつゞけた。頼朝を嵐に喩へ、義經を花に喩へ、天下は頼朝に靡いて、義經は頼朝に虐げられるとの意を含めたのであらう。
○安宅―加賀國能美郡にあり、篠原より三里北に當る。

【三】

○言語道斷―何とも言葉でいひやうのないこと。瓔珞經に「言語道斷、心行處滅」
○御談合―御相談。

るか

シテ「いや何とも承らず候

子方。安宅の湊に新關を立てて。山伏をかたく簡むとこそ申しつれ

シテ「言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆゆしき御大事にて候。まづこの傍にて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候

二の「我等が心中には何程の事の候べき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候

シテ「暫く。仰せの如くこの關一所打ち破つて御通りあらうずるは易き事にて候へども。御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして

間(とツレを見渡し)。皆々心中の通りを御意見御申しあらうずるにて候

聞いたか―

弁慶「いえ何も聞きません」

義經「この安宅の湊に新しく關所を立てゝ山伏を嚴しく吟味して居るといつてゐたぞ」

弁慶「これは驚きました。それでは、わが君が陸奥へ御下りの事を存じて、關所を立てたものと思はれます。これは容易ならぬ大事件でございます。まづこのあたりで、この對策を御相談遊ばすのが宜しうございます」

弁慶(一同に向ひ)「これは容易ならぬ大事件です。各々方、御意見を御遠慮なく御申しあげになるがよいでせう」

一人「私どもの考では、さした事はなからうと思ひます。唯關所を打ち破つてお通りになるがよからうと思ひます」

弁慶「いやお待ち下さい。あなたの御意見通り、この關所一箇所を打ち破つてお通りになるのは容易な事ですが、これから先お出でになる行先が大事です」

といつて義經に向ひ、

○無爲の儀—事を起さない穏かな手段。
○きつと—急に、ふいと。
○につくい—憎いの促音便筋骨の逞しい形容。

○強力—山伏が伴ふ下僕。
○笈—山伏が修行の道中、佛具食物等を入れて肩に負ふ入れ物。
○そと—一寸。

無爲の儀が然るべからうずると存じ候

子方「ともかくも辨慶計らひ候へ

シテ「畏つて候。（正面に向き）某きつと案じ出だしたる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が。（子方に向ひ）何と申しても御姿隠れ御座なく候間。このままにてはいかがと存じ候。恐れ多き申し事にて候へども。御篠懸を除けられ。あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ。御笠を深々と召され。いかにもくたびれたる御體にて。我等より後に引き下つて御通り候はば。なかなか人は思ひもより申すまじきと存じ候

子方「げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取り候へ

シテ「畏つて候。（強力に向ひ）いかに強力

強力狂言シテの前に出で、

強力「御前に候

◎御前に候—この狂言詞及

辨慶「私はこの場合たゞ何とかして穏かにお通りになるのがよからうと存じます」

義經「いづれなりとも、辨慶よいやうに取計つてくれ」

辨慶「畏りました。私がふと考へついたことがございます。私を始め一行の者は皆憎態な頑丈な山伏らしい者ともでございますが、何と申しても、わが君のお姿は見違へを致しさうには思はれません。このまゝではいかにも不安に思はれますから、誠に恐れ多い申し事でございますが、その御篠懸をお脱ぎになり、あの強力の背負うて居ります笈を暫く御肩におかけ遊され、御笠を深くお被りになり、いかにもくたびれた御様子で、私どもより後に下つてお通りなされゝば、却つて人も氣がつくまいと存じます」

義經「いかにも尤もだ。それでは篠懸をとつてくれ」

辨慶「畏りました」

といつて狂言の強力を呼び出し、笈を持つて來させ義經に笈を負はせて、強力に、

び次の「畏つて候」、謡本にもある。

○なんぼう—いかほど。非常に。
○冥加—冥中の加護。目に見えない神佛が我等を護り給ふこと。轉じて、この上もない幸福。

シテ「笈を持ちて來り候へ

強力　畏つて候

強力狂言座に行き笈を持ち來る。シテ子方に笈を負はせて強力に向ひ、

シテ「汝が笈を御肩に置かるる事は。なんぼう冥加もなき事にてはなきか

強力「けに〳〵冥加もなき事にて候

シテ「まづ汝は先へ行き關の樣體を見て。眞に山伏を簡むか。又さやうにもなきか懇に見て來り候へ

強力「畏つて候

強力名乘座に出で、

強力「扨も〳〵一大事を仰せつけられて候。急いで關の樣體を見て參らう。見咎められてはなるまい。兜巾を取つて參らう

と兜巾を懷中して、橋懸一の松に行き正面を見て、

強力「扨も〳〵夥しい事かな。櫓かいたてをあけ逆茂木を引き。鳥も通はぬ體にて候。又あの木の下に黑いものが二つ三つ見ゆる。あれは何ぢや。山伏のこゝぢや(と左手を首にあて)といふか。あら痛はしや。一首連ねて參らう。山伏は貝吹いてこそ逃げにけれ。誰追ひ驅けて阿毘羅吽欠。急いでこの

○かいたて—垣楯。楯を立て並べて垣のやうにしたもの。
○逆茂木—刺のある木の枝を柵に結んで敵を防ぐもの

辨慶「お前の笈をわが君がお負ひ下さるとは、實に仕合なことでないか。……ところで、お前は先に行つて關所の樣子を探り、山伏を嚴しく吟味して居るか、それほどでもないか、見て來い」

強力は少し先へ行つて、遙かに關所の樣子を眺めその怖しい樣を辨慶に復命する。

由申さう

シテの前に出で、

強力「いかに申し上げ候。關の樣體を見申して候へば。櫓かいたてをあけ逆茂木を引き。鳥も通はぬ體にて候。又木の下に黑いものが二つ三つ御座ある間。何そと尋ねて候へば。山伏のこゝぢやと申すによつて痛はしう存じ。一首連ねて候

シテ「それは何と連ねてあるぞ

強力「山伏は貝吹いてこそ逃げにけれ。誰追ひ驅けて阿毘羅吽欠〳〵と連ねて候

シテ「汝はこざかしき者にて候。やがて御跡より來り候へ

強力「畏つて候

といひて狂言座に着く。

【四】

シテ子方に辭儀して、

シテ「さらば御立ちあらうずるにて候

一同立つ。シテ子方を見て、

シテ『げにや紅は園生に植ゑても隱れなし

ツレ『强力にはよも目をかけじと。御篠懸を脫ぎ替へて。麻の衣を御身にまとひ

シテ『あの强力が負ひたる笈を

子方『義經とつて肩にかけ

○紅は園生に植ゑても隱れなし―優れて立派なものは、平凡なものの中にあつても、必ず人目に立つとの意。義經記卷二に「壁に耳、岩に口といふ事あり、紅は園生に植ゑても隱れなし」

○麻の衣―粗末な衣といふ意。

【四】

辨慶「それでは御出立なさいませ」

一同立ち上る。辨慶義經の姿に見入つて、

辨慶「いかにも御立派な方といふものは、どのやうに姿をお變へになつても、紛れのないものだ」

一人「いやそれでも、かういふ强力姿には氣がつきますまい」

義經は今まで着てゐた篠懸衣を脫ぎすて、粗末な衣を身に纏ひ、强力の背に負うてゐた笈を肩にかけ、笈の上には

○雨皮―油紙で作つた雨具
○肩箱―山伏の肩につけて負ふ小箱。
○綾菅笠―綾に編んだ菅笠
○金剛杖―山伏の持つ、八角又は四角の白木の杖。

ツレ『笈の上には雨皮肩箱とりつけて
子方『綾菅笠にて顔を隠し
ツレ『金剛杖に縋り
子方『足痛げなる強力にて
地『よろよろとして歩み給ふ御有様ぞ痛はしき

子方のみ二三足前に出づ。

シテ「我等より後に引きさがつて御出であらうずるにて候。(ツレに)さらば皆々御通り候へ
一の[illegible]ツレ承り候

シテ以下橋懸に行く。子方最後につき後見座にくつろぐ。

【五】

ワキ脇座につく。太刀持狂言立ち、山伏一行を見てワキに向ひ、

太刀「いかに申し候。山伏達の大勢御通り候
ワキ「何と山伏の御通りあると申すか。心得てある

と立つ。シテ以下關所に近づく態にて舞臺に入りかゝるを見て、

ワキ「なうなう客僧達これは關にて候

シテ常座に立ち、

雨皮や肩箱をとりつけ、菅笠で顔を隠し、金剛杖に縋つて、いかにも足の痛さうな強力姿で、よろ〳〵と歩かれる御樣は、實にお氣の毒なものである。

舞臺「それでは私共の後に下つてお出でなさいませ。(一同に向ひ)では、各々方參りませう」

一同「承知しました」

といつて關所へ近づく型。

【五】

舞臺は安宅關。先程の富樫及びその從者が登場して、義經一行が關所に近づくと、その家來が山伏の關所へ來たことを富樫に注進する。

富樫「なに山伏が通られるといふのか。よし心得た」

一行の關所に入るのを見て、

富樫「もし〳〵、山伏達、これは關所ですぞ」

○南都東大寺—聖武天皇御造營の寺で、華嚴宗の大本山。奈良大佛のある寺。治承四年十二月平重衡の兵火に罹つて燒失したので、その再建の爲の勸進であるといふのである。
○北陸道—若狹・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七箇國を總稱す。
○勸め—勸進。俗人を勸めて寄進させること。

シテ「承り候。これは南都東大寺建立の爲に。國々へ客僧を遣はされ候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。まづ勸めに御入り候へ

ワキ「近頃殊勝に候。勸めには參らうずるにて候さりながら。これは山伏達に限つてとめ申す關にて候

シテ「さてその謂れは候

ワキ「さん候頼朝義經御中不和にならせ給ふにより。判官殿は奥秀衡を頼み給ひ。十二人の作り山伏となつて。御下向の由その聞え候間。國國に新關を立てて。山伏をかたく簡み申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて山伏をとめ申し候。殊にこれは大勢御座候間。一人も通し申すまじく候

シテ「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよ

○秀衡—陸奥出羽押領使藤原某衡の子。鎭守府將軍陸奥守。

辨慶「分りました。私達は奈良東大寺建立の爲に諸國へ山伏達を遣はされました中に北陸道の方を擔當して出て來た者です。まづ寄進をして下さい」

富樫「それは誠に御殊勝なことです。いかにも寄進は致しませう。しかし、こゝは特に山伏に限つて吟味する關所ですから……」

辨慶「して、それは何故です」

富樫「それは、頼朝義經御兄弟の御中が不和になられたので、義經殿は陸奥の秀衡を頼り、十二人の僞山伏となつてお下りになるとの噂があるので、國々に新しい關所を立てゝ、山伏を嚴しく吟味せよと仰せられたのです。そのため私はこの所を預つて山伏を留めて居るのです。殊にあなた方は大勢御同伴ですから、一人も通すことはなりませぬ」

辨慶「よく分りました。しかし、それは僞

と仰せ出だされ候ひつらめ。よも眞の山伏を留めよとは仰せられ候まじ

太刀持狂言シテの前に出で、

太刀「ようのかはおしやつぞ。昨日も三人斬つて掛けてす

シテ「さてその斬つたる山伏は判官殿か

ワキ「あらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候

シテ「さては我等をもこれにて誅せられ候はんずるな

ワキ「なかなかの事

シテ「言語道斷。かかる不祥なる所へ來かかつて候ものかな。この上は力及ばぬ事。さらば最期の勤めを始めて。尋常に誅せられうずるにて候。(ツレに向ひ)皆々近う渡り候へ

一の「承り候

シテ以下扇を懷中し、水衣の肩を上げ、舞臺に三角形に並びて

○ようのかは—この狂言詞諸本には「いや昨日も山伏を三人まで斬つつる上は」とある。

○むつかし—面倒。

○及ばぬ事—致し方のないこと。

○尋常に—非常手段に訴へないで、穏和に。

山伏を留めよと仰せられたのでせう。まさか眞の山伏を留めよとは仰せられますまい」

富樫臣「いやぐづ〳〵いふな。昨日も山伏を三人斬つたのだぞ」

辨慶「それては、その斬つた山伏が義經殿か」

富樫「え〻面倒な、問答は無用だ。一人も通さないといつた以上は、どうあつても通さない」

辨慶「それでは私達もこゝで斬らうとせられるのですな」

富樫「その通りだ」

辨慶「これは意外千萬だ、運悪くこのやうな不吉な所へ來かゝつたものだ。しかしもはや致し方がない、最期の勤行を始めて、大人しく斬られよう。(一同に向ひ)各々方も近うお寄りなさい」

一同「畏りました」

一同寄り集まる。

○役の優婆塞―名は小角、役の行者ともいひ、葛城山に登つて三十年の間神呪祕密の法を修行し、鬼神を驅使したと傳ふる修驗道の開祖。〔葛城〕參照。
○不動明王―五大尊明王の中央尊。〔安達原〕參照。
○兜巾―山伏の額に當てる小さな頭巾。
○五智の寶冠―五智とは法界體性智・大圓鏡智・妙觀察智・成所作智・平等性智をいひ、大日如來・金剛薩埵・虛空藏菩薩等はこの寶冠を戴き五智圓具の妙德を表す。
○十二因緣の襞―十二因緣は煩惱の因緣となる無明・行識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老・死をいふ。
○九會曼荼羅―曼荼羅は梵語Mandalaで、圓輪具足・道場等と譯す。佛世界を描いた繪圖の意。九會曼荼羅は金剛曼荼羅のことで、九會とは羯磨會・三昧耶會・微細會・供養會・四印會・一印會・理趣會・降三世羯磨會・降三世三昧耶會をいふ。
○胎藏黑色の脛巾―胎藏界は大日如來の理法身卽ち母胎に胎兒を保つが如くに一切の功德を具有して外に顯現しない眞實の理體をいふ。黑色の脛巾をはくのはこの

安坐し、

シテ『いでいで最期の勤めを始めん。それ山伏といつぱ。役の優婆塞の行儀を受け
ツレ『その身は不動明王の尊容を象り
シテ『兜巾といつぱ五智の寶冠なり
ツレ『十二因緣の襞をすゑて戴き
シテ『九會曼荼羅の柿の篠懸
ツレ『胎藏黑色の脛巾をはき
シテ『さて又八日の藁鞋は
ツレ『八葉の蓮華を踏まへたり
シテ『出で入る息に阿吽の二字を稱へ
ツレ『卽身卽佛の山伏を
シテ『ここにて討ちとめ給はん事（とワキへ向き）
ツレ『明王の照覽計り難う
シテ『熊野權現の御罰を當らん事

雜摩「さあ最期の勤行を致さう」
一同數珠を揉んで、
一同「――『抑も山伏と申す者は、役の優婆塞の行法を學ぶものゞ、その身は不動明王の御姿に象り、頭に戴く兜巾は五智の寶冠を表し、その十二の襞は人間煩惱の十二因緣を表し、身に纏ふ柿色の篠懸衣には金剛界九會曼荼羅を表し、足にはく黑色の脚半には胎藏界曼荼羅を表し、又八つ目の草鞋は八瓣の蓮花を踏むに象つたものである。しかも、出入の息には萬法の象徵たる阿吽の二字を唱へてゐるものゞ、山伏はこの身このまゝ佛性であるのだ。然るに今こゝで討ち斬られるならば、恐らく不動明王も御照覽遊ばされよう、熊野權現の御罰の忽に當ることも疑ひなからう。唵阿毘羅吽欠』――」
と數珠をさら〳〵とおし揉んだ。

胎藏界の曼荼羅を表してみるとの意。脛巾は脚半の意。○八目の草鞋—八つ目のある草鞋をはくのは八瓣の蓮花を踏む心であるとの意。○阿吽の二字—阿は口を開いて發する聲、吽は口を閉ぢる時の聲で、密教ではこの二字を以て一切の太初と太終とを意味するものとなし、阿を萬有發生の理體に、吽を萬有歸著の智德に配す。○即身即佛—この肉體がそのまゝ佛性であるとの意。○明王の照覽—明王は三寶國土人民を擁護する天神でこゝには不動明王を指す。○熊野權現—紀伊國熊野神社。本宮新宮那智の三社あり。山伏の常に參詣する所。○唵阿毘羅吽欠—梵語Om. Avirahumkham. 胎藏界大日の眞言。唵は呪文の始に置く詞で、歸命の義。阿毘羅吽欠は大日如來に祈る呪文の詞で、地水火風空の五大の義。南無阿彌陀佛に相當する語。

【六】○勸進帳—寄附を請ふ趣旨を記した帳。○往來の卷物—庭訓往來・雲州往來の如き消息文を書き集めた卷物。

ツレ「立ちどころに於て

シテ『疑ひあるべからず

地「唵阿毘羅吽欠と數珠さらさらとおしもめば

と一同數珠を押し揉む。

【六】

ワキ「近頃殊勝に候。さきに承り候ひつるは。南都東大寺の勸進と仰せ候間。定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳を遊ばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候

シテ「何と勸進帳を讀めと候や

ワキ「なかなかの事

シテ「心得申して候

シテ立つて後見より卷物を受取り、

シテ「もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の卷物一卷取り出し。勸進帳と名づけつつ

「高らかにこそ讀み上げけれ

といひながら正面先へ出づ。ツレは脇正面に二列に並ぶ。シテ

【六】

富樫「勸行を承り、誠に御殊勝なことに存じました。先程承れば、奈良東大寺の御勸進とやら。それならば、定めて勸進帳をお持ちのことでせう。勸進帳をお讀み下さい、こゝで聽聞しませう」

辨慶「何といはれる、勸進帳を讀めといはれるのか」

富樫「さうです」

辨慶「承知しました」

といつたものの、もとより勸進帳のあらう筈はないが、笈の中から往來文の卷物を取り出して、勸進帳だといつて聲高らかに讀み上げた。

○大恩教主―釋迦如來をいふ。衆生の爲に親と師と主の三德がある故にいふ。
○涅槃の雲に隱れ―釋迦の入滅を秋の月の雲に隱れるに喩へたもの。
○生死長夜の長き夢―釋迦の入滅して以來、生死界にさ迷うてゐる衆生の迷夢を呼びさます人がないとの意。生死長夜は迷ひの心をいふ。唯識論に「未レ得二眞覺一恒處二夢中一故佛說爲二生死長夜一」
○聖武皇帝―大寶元年御降誕、神龜元年御即位。深く佛法を御信仰遊され、奈良に東大寺、諸國に國分寺を御建立遊された。天平勝寶八年崩御。御年五十六。
○最愛の夫人に別れ―大佛御建立の時光明皇后は御在世である。夫人とは何方を指し奉るか分らない。
○涙玉を貫く―御涙の甚しい形容。源氏物語總角の卷に「わが涙をば玉にぬかなん」。榮花物語楚王の夢の卷に「御目より水精を貫きたるやうにつゞきたる御涙いみじうて」
○思ひを善途に飜して―愛着の思ひを善根の途に飜して大佛を建立せられたとの意。

巻物を開きて、

シテ「それつらつら。惟ん見れば大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隱れ 生死長夜の長き夢。驚かすべき人もなし。ここに中頃帝おはします。御名をば。聖武皇帝と。名づけ奉り最愛の。夫人に別れ。戀慕やみがたく。涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思ひを。善途に飜して盧遮那佛を建立す。かほどの靈場の。絶えなん事を悲しみて。俊乘坊重源。諸國を勸進す。一紙半錢の。奉財の輩は。この世にては無比の樂に誇り當來にては、數千蓮華の上に坐せん歸命稽首。敬つて白すと天も、響けと讀みあげたり

この間にワキ二度巻物を覗き込む。シテその度毎に少し後に下り、平氣を裝ひて讀み終る。ワキもとの座に歸りて、

ワキ「關の人々肝を消し地「恐れをなして、通しけり恐れをなして通しけ

辨慶」――「熟々考へるに、衆生濟度の釋迦如來が入寂遊されてよりこの方、衆生は永らく迷ひ苦しんでゐるのであるが、その迷ひを覺ましてくれる人がない。ところが、こゝに中古聖武天皇と申し奉る帝は最愛の夫人に御別れ遊され、御追慕の御心深く、御涙の乾く御時もなかつたが、執着の心を離れ、後生の爲に善根を施さうと思しめされ、大佛を御建立遊された。然るに今度兵火に罹つて伽藍が燒失し、このやうなありがたい寺の絶えることを悲しみ、俊乘坊重源が發起して、諸國の人々に寄進を願ふのである。僅か一紙半錢たりとも寄進せられるならば、この世に於ては此上もない樂しみを極め、來世に於ては蓮花の妙なる極樂に往生することが出來よう。右の趣旨を重源敬つて申す」――」

と天も響けとばかり聲高らかに讀み上げた。それで、關所の人々もその勢ひに怖れて、一同を通すこととなつた。

○盧舎那佛—毘盧遮那佛 Vairocana の略。光明遍照と譯す。密教で大日如來といふは卽ちこの佛を指す。こゝには奈良の大佛をいふ。

○俊乘坊重源—黑谷の源空上人の弟子。仁安三年宋に渡り翌年秋歸朝した。治承四年東大寺が平家の爲に燒かれた後、勅を奉じて再興の主となり、諸國を勸進した。吾妻鏡元暦二年三月七日の條に「東大寺修造事、殊可抽丹誠之由、武衞被遣御書於南都衆徒中、又被送奉加物於大勸進重源上人」記

○一紙半錢の奉財—僅かばかりの物を寄進しても。涅槃經に「以一紙半紙志、可願德果」。大寶積經に「一枚紙施人令書經、福滿三千界」

○歸命—南無の漢譯。

【七】

○すは—驚いた時の聲。

○一期の浮沈—一期は一生涯。生死の別れる危險な時。

◎いかに申し上げ候—この狂言詞、謠本にもある。

り

ワキ「急いで御通り候へ

シテ「承り候

シテ以下立衆一同關を通る心にて橋懸へ行く。シテその途中卷物を後見に渡す。

太刀「さあ〳〵急いでお通りやれ。

【七】

シテ以下一同橋懸にくつろぐと、太刀持狂言舞臺の中程に出で橋懸の方を見て、ワキの前へ出で、

太刀「いかに申し上げ候。判官殿の御通りにて候

ワキ「心得てある

子方後見座を出で仕手柱際へ來るを見て、

ワキ「いかにこれなる强力とまれとこそ

子方下に居る。ツレ一同之を見て刀に手をかけ、

ツレ「すはわが君を怪しむるは。一期の浮沈極まりぬと。「皆一同に立ち歸る

シテ立衆の前に走り出で、

シテ「ああ暫く。あわてて事を爲損ずな

舞臺に入り子方を見て、

富樫「急いで御通りなさい」

義經「承知しました」

【七】

義經以下山伏一行立つて關所を通過する。富樫の家來、最後に義經の通るのを見て、之を富樫に告げる。富樫義經を見て、

富樫「あゝこれ、その强力留まれ」

一行「さあわが君を怪まれては、一生の大變だ」

と一同皆立ち戻る。

義經(一行に向ひ)「あゝお待ちなさい、あわてゝ事を仕損じてはいけない」

と一行を抑へて、靜かに義經に向ひ、

シテ「やあ何とてあの強力は通らぬぞ

ワキ「あれは此方より留めて候

シテ「それは何とて御留め候ぞ

ワキ「あの強力がちと人に似たると申す者の候程に。さて留めて候よ

シテ「何と人が人に似たるとは。珍しからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ぞ

ワキ「判官殿に似たると申す者の候程に。落居の間留めて候

○落居の間―事の眞僞が判明するまで。

シテ「や。言語道斷。判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは。能登の國まで指さうずると思ひつるに。僅かの笈負うて後に下ればこそ人も怪しむれ。總じてこの程。憎し憎しと思ひつるに。いで物見せてくれんとて。金剛杖をおつ取ってさんざんに打擲す（と子

○日高くは―夕暮までに、まだ時間が多くあれば。

辨慶「やあ、あの強力は何故通らないのだ」

富樫「あれはこちらで留めたのです」

辨慶「何故お留めになつた」

富樫「あの強力が少し人に似てゐると申す者があるので、それで留めたのです」

辨慶「何といはれる。人が人に似たとて何の不思議があります。して、その人とは誰に似てゐるのです」

富樫「義經殿に似てゐると申す者があるので、その眞僞の分明するまで留めたのです」

辨慶「やあこれは意外だ。義經殿に似てゐようとは、この強力の奴には一生のよい思出であらう。しかしこちらは腹が立つわ。まだ時間が早ければ、能登國まで行かうと思つてゐたのに、俥かばかりの笈を負うて、うろ〳〵と後に下つて居るから、人にも怪まれるのだ。一體この間中から憎い〳〵奴だと思つてゐたが……。よし目に物見せてくれよう」

といつて、金剛杖を奪ひ取つて、散々に打擲し、

方の杖を奪ひその笠を打ち）通れとこそ

と杖にて子方を追ひやる。子方するゝと後見座に驅け込む。

ワキ子方を追はんと二三足前に出づ。シテこれを見てワキに向ひ、

シテ『や。笈に目をかけ給ふは。『盜人ざうな

ツレ一同舞臺に走り入りシテの後に押寄せながら、

ツレ『かたがたは何故に。かたがたは何故に。かほど賤しき強力に。太刀刀ぬき給ふはめだれ顏の振舞は。臆病の至りかと。十一人の山伏は。打刀ぬきかけて。勇みかかれる有樣は。いかなる天魔鬼神も。恐れつべうぞ見えたる

ワキ「近頃誤りて候。はやはや御通り候へ

太刀「まことの山伏ぢや。急いでお通りやれ

【八】

ワキ・太刀持狂言囃子座の後にくつろぐ。

シテ以下裝束を整へ、子方は脇座、ツレは地謠座より囃子座へかけて弓形に立並び、關より遙か距りたる所へ來たる態。

シテ「さきの關をばはや拔群に程隔たりて候間。この所に斬く御休みあらうずるにて候。皆々近

○盜人ざうな―盜人候なの畧。

○めだれ顏―目垂り顏。他の弱小に乘じてこれを輕侮すること。强力だと思つて馬鹿にすること。

○打刀―鍔をつけ、敵を打ち易くした、稍ミ長い刀。

○拔群に―非常に。

辨慶「さあ通れ」

義經立つて行かうとするを、富樫詰め寄る。辨慶富樫に向ひ、

辨慶「やあ笈に目をつけられるのは、さてはそなた達は盜人だな―

山伏一行も富樫へ詰め寄せて、

一行「各々方は何が故にこのやうな賤しい强力に太刀刀を拔き、弱い者いぢめな振舞をなさるのだ。臆病至極でないか―

と十一人の山伏が刀を拔きかけて、勇みかかつた有樣は、いかな天魔鬼神でも怖れさうに見えた。

富樫「いやこれは誠に惡うございました。早々お通りなさい」

【八】

一同關所を通過した態で、舞臺は安宅關からや、距つた街道となる。辨慶義經に向ひ、

辨慶「先程の關所はもはや餘程離れましたから、暫くこの所でお休みなさいませ。

（一同に向ひ）あなた方もお側近うお寄りな

う御参り候へ

子方床几にかゝる。ツレ一同下に居る。シテ舞臺の眞中にて子方に辭儀して、

シテ「いかに申し上げ候。さても唯今は餘りに難儀に候ひし程に。不思議の働きを仕り候事。『これと申すに君の御運。盡きさせ給ふにより。今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば。いよいよあさましうこそ候へ

子方「さては惡しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶。さても唯今の機轉更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。『關の者どもわれを怪しめ。生涯限りありつる處に。兎角の是非をばもんだはずして。唯眞の下人の如く。さんざんに打つてわれを助くる。これ辨慶が謀に非ず八幡の

地『御託宣かと思へば忝くぞ覺ゆる(子方しをる)

○惡しくも心得ぬと存ず―惡く心得たと思ふ。辨慶の心得方がまちがつてゐたと思ふ。

○もんだはずして―「もんだふ」は問答を動詞に働かせたもの。問答しないで、かれこれ躊躇しないで。

○八幡の―八幡宮は弓矢の神で、特に源氏の守護神であるからいふ。

さい」

一同休息の態。

辨慶「申し上げます。唯今は餘りの難儀でございましたので、不都合千萬の所業を致しましたこと、これと申すも、わが君の御運の御盡きになつた爲、この辨慶の杖にもお當りになつたのかと思へば、感あさましう存じます」

義經「いや辨慶、それはお前の考へ方が間違つてゐるのだ。唯今のあの旨い機轉は到底人間業で出來ることでない。自分は天のお助けだと思つてゐるのだ。あの時、關所の者が自分を怪しみ、一生の最後に迫つた時、かれこれ躊躇せず、たゞほんとの下部のやうに散々に打つて、自分を助けてくれたのは、これは辨慶だけの計略でない、八幡大菩薩の御託宣であらうと、ありがたく思つて居るのだ」

○世は末世に及ぶといへども―平治物語に「末世なれども流石に日月は未だ地に落ち給はぬものを」

地クリ『それ世は末世に及ぶといへども。日月は未だ地に墜ち給はず。假令いかなる方便なりとも。正しき主君を打つ杖の天罰に。あたらぬことやあるべき

子方サシ『げにや現在の果を見て過去未來を知るといふ事

地『今に知られて身の上に。憂き年月の二月や。下の十日の今日の難を遁れつるこそ不思議なれ

子方『唯さながらに十餘人

地『夢の覺めたる心地して。互に面を合はせつつ。泣くばかりなる。有樣かな

（居クセ）

地クセ。然るに義經。弓馬の家に生まれきて。命を賴朝に奉り。屍を西海の波に沈め。山野海岸に

○現在の果を見て―因果經に「欲レ知二過去因一見二其現在果一、欲レ知二未來果一見二其現在因一」

○憂き年月の二月や―憂き年月の來るといふを、二月のきにいひかけた。

○屍を西海の波に沈め―源平の兩軍が壇の浦で決戰したことを指す。

辨慶『いえ／＼如何に世は澆季とは申せ、未だ日月は地に落ちず、道理は失はれて居りません。たとひどのやうな計略にもせよ、まさしき主君をお打ちして、天罰の當らない筈はございません』

義經『さういへば、『現世の運勢所業を見れば、過去の業因も未來の運勢も分る』といふことが、今のわが身上でよく知られたのだ。思へば、情ない年月を經て、殊に二月下旬今日の危難に遭うて、それが無事遁れられたのが不思議だ』

一行十餘人の者は夢の覺めたやうな氣持がして、互に顏を見合せ、殆ど泣かんばかりの有樣である。

義經『あゝ思へば、自分は武士の家に生まれて、一命を兄賴朝に捧げ、平家の討滅に從うてよりこの方、或時は壇の浦等で

○かたしく隙も波の上―「かたしく」は袖を片方下に敷いて寝ること。鎧の袖を敷いて眠る隙もないといひかけて、波とつゞけた。

○或時は舟に浮み―元暦二年二月十八日屋島を襲ふ爲に、攝津の渡邊から船に乘り、風波の難を冒して阿波國に著いたことを指す。

○或時は山脊の馬蹄も見えぬ―壽永三年二月七日一の谷の合戰に、鵯越で雪路に迷つたことを指す。

○海少しある―海の少し隔つたとの意。源氏物語須磨の卷に「心づくしの秋風に海少し遠けれど」とあるを文の綾としたのである。

○とかく三年の程もなく―明石の戸といひかけて「とかく」と續けた。義經が三年の間に平家を討滅したことを源氏物語の光源氏が須磨に三年侘住居した事に寄せていふ。

○梓弓の―返せばの緣で弓を出し、弓を造る木の直なる意を以て、直なる人と續けた。

○讒臣―義經を賴朝に讒言した人、梶原景時を指す。

○遼遠東南の雲を起し―遙かに南方吉野山に落ち延び

起き臥しあかす武士の。鎧の袖枕。かたしく隙も波の上へ。或時は舟に浮かみ。風波に身を任せ。或時は山脊の。馬蹄も見えぬ雪のうちに。海少しある夕波の立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もなく。敵を亡ぼし靡く世の。その忠勤も徒らに。なりはつるこの身の、そも何といへる因果ぞや

子方『げにや思ふ事。かなはねばこそ憂き世なれと

地『知れどもさすがなほ。思ひ返せば梓弓の。直なる。人は苦しみて讒臣は。いやましに世にありて。遼遠東南の雲を起し。西北の雪霜に。責められ埋る憂き身を。ことわり給ふべきなるに唯世には。神も。佛もましまさぬかや。恨めしの憂き世やあら恨めしの憂き世や

命がけの戰ひをし、山野海岸に起き臥して、鎧の袖を敷いて眠る隙もなく、或時は屋島の戰などに、小舟に乘つて波風に身を任せ、又或時は一の谷の合戰に峻しい坂路を攀ぢ、雪に路を踏み迷ひなどして、須磨や明石と各地に轉戰して、僅か三年の間に敵平家を滅ぼし、天下を平定したのに、その忠勤も今は無になつてしまふとは、何といふ惡運であらう」――

義經『なるほど、儘にならぬのが浮世だ』とは知つてゐるが、それにしても、正直な者が苦しんで、讒臣が惡く勢を得、かうして或は吉野に追はれ、或は北國の雪に責められて、情ない身上となつたのを、神佛は理非を御分別下さる筈だのに、それだのに、かうして苦しめられるとは、世には神も佛もないのであらうか、あゝ浮世が恨めしい」

今又北方越路の雪に踏み迷ふとの意。東・西の字は文の飾りで意味はない。
○ことわり給ふべきなるに―神佛が理非を判斷し給ふべきに。

【九】
○聊爾―粗忽。失禮。

○畏つて候―以下狂言詞、謠本には「畏つて候。いかに申し候。先には聊爾を申して。あまりに面目もなく候とて。關守のこれまで酒を持たせて參られて候」とある。

【九】　ワキ橋懸二の松へ出で、

ワキ「いかに誰かある

太刀持狂言一の松にてワキに應へ、

太刀「御前に候

ワキ「さても山伏達に聊爾を申して。餘りに面目もなく候程に。追つつき申し酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝はさきへ行きてとめ申し候へ

太刀「畏つて候。(立ち正面に向ひ)はや抜群に御出であらうずるものを。いやこれに御座候(と舞臺に向ひ)。いかに案内申し候

強力狂言名乘座に立ち、

強力「誰にて渡り候ぞ

太刀「是は最前の關守にて候が。最前は聊爾を申して候間。所の名酒を持ちてこれまで參りて候。先達へその由御申しあつて給はり候へ

強力「心得申し候。(シテに向ひ)いかに申し上げ候。最前の關守餘りに聊爾を申して候間。所の酒を持ちて參りたる由申し候

【九】　橋懸はもとの安宅關。

富樫「誰かゐるか」

と家來を呼び出し、

富樫「先程は山伏達に失禮なことを申して餘りに面目がないから、追つかけて酒を一つあげようと思ふのだ。お前は先へ行つて、山伏をお留めして來い」

といつて、家來をやり、富樫も續いて後を追ふ。

強力が富樫が酒を持つて來たことを辨慶に告げる。

シテ「言語道斷の事。やがて御目にかからうずるにて候

強力（太刀持に向ひ）「その由申して候へば。かう〳〵御通りあれとの御事にて候

太刀「心得申して候。（ワキの前へ行き）かう〳〵御通りあれとの御事にて候

子方ワキに見現されざるやう後見座にくつろぐ。シテ常座、

ワキ一の松に出で、

ワキ「先には聊爾を申して候間。酒を持たせてこれまで參りて候

シテ「かう御通り候へ

ワキ脇座につく。シテ一の松に出で、

シテ「げにげにこれも心得たり。人の情の盃に。うけて心をとらんとや。これにつきても猶々人に。

（ツレに向ひ）『心なくれそ呉織

地『怪しめらるな面々と。辨慶に諫められて。この山陰の一宿りに。さらりと圓居して。所も山

○うけて心をとらんとや―酒に浮かれさせて機嫌をとらうとするのであらうか。
○心なくれそ―心をやるな油斷するな。
○呉織―「くれ」の音を重ねて呉織、漢織といひかけ、怪しめらるなと續けた。呉織漢織は應神天皇の御宇支那から渡來した織工。〔呉服〕參照。

辨慶「これは驚いた。だが、早速お目にかからう」

と強力に當座を案内させて、

辨慶「なるほど分つた。これも酒を飲ませて、人の機嫌をとらうとするのだな。（獨言して一行に向ひ）これにつけても各々方、油斷をして關守に怪まれるな」

と辨慶が注意して、一同はこの山陰に圓座を作り、めでたい酒宴を催すのである。

○菊の酒―長壽を保つめでたい酒。仙人が魏文帝に奉つたといふ故事に基き、重陽の節會に用ふ。ここには今集表性法師の歌―ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ」を借りたのである。

【一〇】

○流にひかるる曲水の―曲水の宴は三月三日の節會に禁裡で行はれた御遊で、水に盃を浮べ、盃が自分の前へ流れて來た時、その盃を取つて詩を作り酒を飲む。この事を詠んだ和漢朗詠集菅原雅規の詩句に「凝レ石遅來心竊待、峯と流過手先遮」とある。本文はこの詩句を引いて「袖ふれていざや舞を」の文飾としたのである。

○三塔の遊僧―比叡山三塔かけての遊僧との意。三塔は比叡山の東塔・西塔・横川をいふ。辨慶はその西塔の住僧であつたと傳ふ。遊僧は延年舞に於ける藝僧をいふ。

○舞延年―延年はもと遐齢延年の義で、僧侶大衆の會合の後に、餘興として行はれた演技歌舞の總稱。舞延年はこの延年舞を轉倒していつたのである。この舞のこと、中古雜唱集の「興福寺延年舞式」に委しく見えて居る。

路の菊の酒を飲まうよ

シテ常座にて下に居る。

【一〇】

シテ『面白や山水に

地『面白や山水に。盃を浮かめては。流に牽かるる曲水の。手まづ遮る袖ふれていざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は。三塔の遊僧。舞延年の時の若。これなる山水の。落ちて巖に響くこそ。（シテ立ち上り）鳴るは瀧の水

シテ「たべ醉ひて候程に。先達お酌に參らうずるにて候

と眞中へ行きワキに扇にて酌をす。ワキ之を受けて、

ワキ「さらばたべ候べし。とてもの事に先達一さし御舞ひ候へ

地『鳴るは瀧の水

（男舞）（シテ舞ふ）

シテ引續きこれより謠に合せて舞ふ。

【一〇】

辨慶は既に酒に醉うた態で、

辨慶「いやこの山水の景色が實に面白い。流れに盃を浮かべる曲水の宴ではたいが、まづ手をとつて、さあ一つ舞を舞はう」

辨慶はもと／＼比叡山かけての藝僧で延年舞には若少の役を勤めた男だけあつて、

辨慶「……『これなる山水の、落ちて響くこそ、瀧……鳴るは瀧の水……』（と美しく謠ひ出し）

辨慶「大層醉ひましたから、一つ愚僧がお酌をしませう」

富樫「それでは一つ頂戴しませう。とてもの事に、先達殿一つ舞を見せて下さい。……『鳴るは瀧の水……』（と謠ひ出す）

（男舞）

富樫が謠ひ出したので、辨慶立つて舞ひ、

○鳴るは瀧の水―鎌倉時代盛に流行した今様歌。「うれしや水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり」〔参照〕参照。

○疾く疾く―歌の末句の音を承けて、とく〳〵とつゞけた。

○手束弓―手に握り持つ弓「立つや」のたの音を重ねていふ。

○關守の人々―「關守の人人に心を許すな」と「關守の人々よ暇申す」と上下にかかる。

○虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れ―危い處を遁れ得た喩。大論に「如二虎尾踏一、如二毒蛇首蹈一」

シテ「ツカ」『鳴るは瀧の水
地『日は照るとも。絶えずとうたり。絶えずとうたり疾く疾く立てや。手束弓の。心ゆるすな。關守の人々。暇申してさらばよとて。笈をおつ取り。肩にうちかけ。虎の尾を踏み毒蛇の口を。遁れたる心地して。陸奥の國へぞ。下りける

「疾く疾く立てや」と子方ツレ一同幕に入り、シテ眞中に出で「暇申して」とワキに辭儀をし「下りける」と、仕手柱際にて留拍子を踏む。

辨慶『鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり』

と舞ひ納めて一行に向ひ、

辨慶「さあ早く出立しませう。關守の人々に油斷してはならぬぞ」

富樫に向ひ、

辨慶「それではお暇します。左樣なら」

と笈をとつて肩にかけ、九死に一生を得た危い思ひをして、陸奥の國へ下つて行つた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「かやうに候者は……申しつけばやと存じ候」（春是は加賀の國安宅の湊の關守にて候。扨も頼朝義經御兄弟の御中不和にたらせ給ひ。義經は都の住居叶はせ給はず。十二人の作り山伏となり。奥州秀衡を頼み御下向の由。頼朝聞召し及ばせ給ひ。國々に新關をする。山伏をかたくえらび申せとの御事にて候）【二】シテ「これは一大事の御事にて……。ツレ「われらが心中には……。ツレ「暫く……然るべからうずると存じ候（春ナシ）

諸流詞の出入があるが、金春が最も變ってゐる。

古謠本（光悦本）

【一】シテ「御急ぎ候程に……御著きにて候（光いかに申上候）【三】「言語道斷の……まづこの傍（光所）にて暫く（光みな〳〵）御談合

……一大事の御（光ナシ）事にて候……　シテ「畏つて候（光承り候）いかに強力……　【四】シテ「さらば御立もあらうずるにて候（光ナシ）　【五】シテ「言語道斷……誅せられうずるにて候（光ツレ「承り候）。皆々近う渡り候へ。ツレ「承り候（光ナシ）　【六】ワキ「なか〳〵の事（光ナシ）　【七】ワキ「判官殿に似たる……留めて候（光シテ「なにとあの强力が判官殿ににたると候や。ワキ「なか〳〵の事）……シテ「や（光ナシ）笈に目をかけ……　【一〇】ワキ「さらばたべ候べし……御舞ひ候へ（光シテ「承候）

附記

○伊勢の三郎―名は義盛。義經記卷二に、上野の國の者、父は伊勢の神官で義連といひ、義經が鞍馬山を出て奥州へ下つた途で主從の契約を結んだといふ。義經西國落の際伊勢に歸つて討死し、この時には居ない。〔忠信〕參照。

○駿河の次郎―名は淸重。義經記卷八に「武藏坊を召して廻文を書かせらる。……雜色駿河の次郎に給ひぬ。夜を日につぎて京に上り筑紫へ下らんとす。如何なる者かいひけん、この由六波羅に聞きて、駿河を召取りて、下部二十餘人さしそへて、關東へ下されけり」とある。

○片岡―八郎弘常。經春の弟。義經に從つて奥州に下り、直江津で船を求めたことが、義經記卷七に、衣川で自刄したことが同卷八に見ゆ。

○增尼―十郎權頭兼房。義經北方の乳人。義經記卷八にその最期の樣を記す。

○常陸坊―海尊。義經記卷三に「御曹子の郎等には、西塔の武藏坊、又園城寺の法師の尋ね參りたる常陸坊」とあり、卷八に義經に從つて奥州に下り、衣川の合戰に落ち失せたといふ。

○辨慶―義經記卷三に「義經の御内に聞えたる一人當千の剛の者あり、俗姓を尋ぬるに、天古屋根の御苗裔、中の關白道隆の後胤、熊野の別當辨せうが嫡子、西塔の武藏坊辨慶とぞ申しける」といつて、詳しくその生立を記してゐる。吾妻鏡には文治元年十一月三日及び六日の條に記してゐるだけであるが、傳說として著名な人物。

安達原（あたがはら）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】五番目　二段劇能

【人物】ワキ　東光坊祐慶、ワキツレ　同行山伏（二人）
狂言　同能力、前シテ　老嫗（實は鬼女）、
後シテ　鬼女

【所】岩代國　安達原

【時】秋（八月）

【異稱】觀世流以外の寶生・金春・金剛及び喜多流では〔黑塚〕と題してゐるが、古記錄にはみな〔安達原〕とある。

【作者】能本作者註文には近江能とし、二百十番謠目錄には金春禪竹の作とす。或は安達原鬼女傳說がかなり古くから行はれ、近江申樂にもこれを脚色してゐたものを、禪竹が現行曲のやうな、山伏が鬼女を祈り伏せることに脚色したのでなからうか。親元日記に寬正六年二月二十八日演能のこと、言經卿記に文祿四年四月四日註釋のことが出てゐる。

【梗概】熊野山伏東光坊祐慶が廻國行脚して、陸奧國安達原で行き暮れ、あたりの淋しい一軒家で宿を求めた。家にはたゞ一人の老婆がゐて、山伏の求めに應じて、梓桙輪をとつて絲を繰つて見せ、やがて焚火の薪を取りに山へ出かけた。その時老婆は留守中閨の內を見てくれるなと止めて置いたのであるが、隨行の能力が密かに覗いて、その怖しい樣に驚いて、これを山伏に告げ知らせた。山伏は閨の中に死骸の累々として積み重なつてゐるのを見て、これこそ安達原の黑塚の鬼の栖家であつたと驚いて逃げて行く。老婆はこれを知つ

て鬼の正體を現して、山伏を喰ひ殺さうとしたが、山伏に祈り伏せられて消え失せた。

【出典】この說話の起源は、本文にも出てゐる拾遺集の歌、

名取郡黑塚に重之（陸奥守）が妹あまたありと聞きつけていひつかはしける　　兼盛

みちのくの安達が原の黑塚に鬼こもれりといふはまことか

から始まつたもので、大和物語にもこれを敷衍して、

兼盛、陸奥の國にて、閑院の三の御子の女にありける人、黑塚といふ所に住みけり、その女どもにおこせける、

陸奥の安達の原の黑塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくてその女を得んといひければ、親「まだいと若くなんある、今さるべからん折にを」といひければ、京に往くとて山吹につけて、

花ざかり過ぎもやすると蛙鳴く井出の山吹うしろめたくも

といひけり。かくて名取の御湯といふ事を、恒忠の君よみたりけりといふなん、この黑塚の主人なりけり。

とある。いづれにしても、こゝに鬼といふのは、美女を喩へたのであるが、これをまことの鬼に取做して、鬼女傳說が發生したのである。そしてこの傳說は謠曲以前に既に行はれてゐたものか、或は謠曲作者の創案であるかは分らないが、本曲に據つて廣く流布するやうになつたことは明らかである。

【概評】本曲の作者が安達原の鬼女傳說を創作し或は一曲に脚色して、廣くこれを流布せしめ、後の文藝に大きな影響を與へた功績は特筆すべきものであるが、さてその鬼女の取扱ひ方を見ると、前段では例の通り普通の老婆を裝うてゐるばかりでなく、まづ第二節では果敢ない老境を歎き、第三節では見苦しい庵を恥ぢ、第四節では佛說を物語り、第五節では賤女らしい「絲盡し」の唄を謠ひ、第六節に山へ木を取りに行くのも、山伏の夜寒を暖めようとする好意から出たものらしい。妾が歸らんまでこの閨の内ばし御覽し候な」といつてゐる辭には一種の凄味があるが、自身の眞性をさとられることを怖れただけで、他意はなかつたらしい。にも拘らず、閨の内を見顯されたが爲に鬼女の本性を出したのであつて、これを〔紅葉狩〕の鬼女が貴婦人を裝うて惟茂を醉ひつぶさうとしてゐるのに比べると、遙かに弱々しい女らしさを持つてゐる。これはもと〔紅葉狩〕の方は武勇傳說から出發し、これは和歌說話から發展したものであ

る爲に、このやうな差異を生じたのであらう。

【一】

○篠懸—山伏の着る麻の上衣。もと深山の篠の露を拂ふ用に供した所から出た名。

○那智の東光坊—那智は紀伊國東牟婁郡にあり、熊野三社の一。東光坊はその坊名。

○阿闍梨—梵語Acarya.軌範師と譯す。弟子僧侶の學解を指導し行儀を糺正する師範職。わが國では僧の職名とす。

○祐慶—謠曲作者の假作であらう。

○捨身—佛法の爲に身命を捨てて惜まないこと。出家と同意。

○抖擻—梵語頭陀の漢譯。衣食住の貪着を振り拂ふ行法。即ち托鉢行脚のこと。

○山伏—修驗道の行者。山野に起伏して修行する意から出た名。

○熊野の順禮廻國—昔熊野山伏は六十餘州を廻つて、法華經を一國に一所づつ納めたことをいふ。

○釋門—釋迦の門弟。即ち僧侶のこと。

【二】

後見、庵の作物に引廻しをかけて持ち出で、大小前に置く。

次第の囃子にて、ワキ東光坊祐慶、兜巾・篠懸・着附厚板・絓水衣・白大口・腰帶・扇・小刀・刺高數珠の裝束、ワキヅレ同行山伏（二人）、兜巾・篠懸・着附無地尉斗目・縷水衣・白大口・腰帶・小刀・扇・刺高數珠の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ次第『旅の衣は篠懸の。旅の衣は、篠懸の露けき、袖やしをるらん

地取にワキは正面に向き、

ワキヅレ『これは那智の東光坊の阿闍梨。祐慶とはわが事なり

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ『それ捨身抖擻の行體は。山伏修行の便りなり

ワキ『熊野の順禮廻國は。皆釋門の習ひなり

ワキヅレ『然るに祐慶この間。心に立つる願あつて。廻國行脚に赴かんと

【一】

第一段

舞臺は初め紀伊國熊野で、ワキ東光坊祐慶、ワキヅレ同行山伏を伴つて登場。

祐慶「篠懸衣を身につけて、旅に出れば、さぞ深山の露に袖の濡れることであらう」

と次第を謠つて、旅の心持を述べ、

祐慶「私は那智の東光坊の阿闍梨で祐慶といふ者です。さて私どもは佛道の爲に身命を捨てゝ、行脚托鉢するのを、山伏修行の方法としてゐるのです。殊に熊野山伏は諸所を廻國巡禮するのを、佛弟子たるの道としてゐますので、私どもは今度ある心願を立てゝ廻國行脚に出掛けようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

○わが本山―熊野を指す。
○紀の路潟―紀伊一帶の海岸をいふ。
○鹽崎の浦―紀伊國西牟婁郡にあり、潮の岬ともいふ。鹽の縁でさしとつじけた。
○錦の濱―鹽崎の磯續きにあり、二色とも書く。錦の縁でをり〳〵と續けた。
○しをり行く―旅衣の萎れて行くことと、道しるべに栞を作りながら行くことを兼ねて用ゐた。
○目も―衣の縁語紐にいひかけた。
○安達が原―岩代國安達郡安達太良山の東麓。
○笑止や―困つた時に發する語。

【一】

ワキ上歌「わが本山を立ち出でて。わが本山を立ち出でて。分け行く末は紀の路潟鹽崎の浦をさし過ぎて。錦の濱の、をりをりは猶しをり行く旅衣。日も重なれば程もなく。名にのみ聞きし陸奥の。安達が原に着きにけり安達が原に着きにけり

ワキ「日も重なれば」と正面に向き二三足出で、またもとに歸りて、ツレと向合ひ、安達原に着きたる心。上歌濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや陸奥の安達が原に着きて候。(正面の上を見て)あら笑止や日の暮れて候。このあたりには人里もなく候。(目附柱の方を見て)あれに火の光の見え候程に。立ち寄り宿を借らばやと存じ候(とツレへ向く)

ワキツレ「然るべう候

といひて三人とも脇座へ行き立つ。

後見、作物の引廻を下す。シテ老嫗、面深井・長髮・臺帶・襟淺

詞章 かうしてわが本山熊野を出發し、紀伊の海邊鹽崎の浦を過ぎ、錦の濱を通り道々巡禮して旅疲れを覺えながら、日數を過すうちに、噂にばかり聞いてゐた陸奥の安達原に着いた」

といつてゐるうちに、陸奥に着いた態で、舞臺は安達原となる。

【二】

舞臺の作物は鬼女の橫家の態で、シテ老嫗面は鬼

○わび人―頼る者もなく淋しく暮らしてゐる者。
○秋の來て―憂き世に飽きるを秋にいひかけ、新古今集大江匡房の歌「秋來れば朝けの風の手を寒み山田のひたをまかせてぞきく」を引いた。
○朝け―夜の明け方。
○まどろむ夜半ぞ命なる―寝てゐる間が苦を忘れる樂境であるとの意。千載集西住法師の歌に「まどろみてさても止みなばいかゞせん寝ざめぞあらぬ命なりける」
○定めなの生涯―行末の頼みにならない生活。

【三】

○月影たまらぬ―板庇など月の入る障りとなるものがなく、あらはに月の光の閨の内へさし入ること。

黄・着附無地熨斗目・無色唐織着流の裝束にて、この中に坐し居り、

シテサシ『げにわび人の習ひほど。悲しきものはよもあらじ。かかる憂き世に秋の來て。朝けの風は身にしめども。胸を休むる事もなく。昨日も空しく暮れぬれば。まどろむ夜半ぞ命なる。あら定めなの生涯やな

【三】

ワキシテに向ひ、

ワキ「いかにこの屋の内へ案内申し候

シテ「そも如何なる人ぞ

ワキヅレ『いかにや主聞き給へ。われら始めて陸奥の。安達が原に行き暮れて。宿を借るべき便りもなし。願はくはわれらを憐みて。一夜の宿を貸し給へ

シテ『人里遠きこの野邊の。松風烈しく吹き荒れて。月影たまらぬ閨のうちには。いかでか留め

女、その中にあつて、

老嫗「ほんとに世の中に頼りのない者ほどかなしいものはなく、何がなくても浮世が辛く感じられるのに、今は殊に秋の季節になつて、朝吹く風が身に泌むほど寒くて、胸を休める慰めとてはなし、昨日も今日も毎日辛い思ひのうちに過してゐることだ。このやうな身には寝てゐる間がせめてもの極樂とでもいはうか。ほんとにつまらない生活だ」

と獨言をいつてぐちをこぼしてゐる。

【三】

祐慶、燈火の光を目當にしてこの構家へ來た態で

祐慶「もうし、このお内へお願ひします」

老嫗「こんな所へお出でになるのは、一體どなたです」

祐慶「いや御主人ですか、どうかお聞き下さい。私達は始めて奥州の安達原に參り、途で日が暮れ、宿を借りる便りもなく困つてゐるのです。どうぞ私達を氣の毒に思つて、一晩宿をお貸し下さい」

老嫗「こゝは人里離れた所で、野邊吹く松風は烈しく、屋根は破れて月影も漏れなく入り込むといふひどい家です。どうし

申すべき

ワキ『よしや旅寢の草枕。今宵ばかりの假寢せん。ただただ宿を貸し給へ

シテ『われだにも憂きこの庵に

ワキ『ただ泊らんと柴の戸を

シテ『さすが思へば痛はしさに

地上歌『さらば留まり給へとて。樞を開き立ち出づる（シテ作物の戸を開きて出で、舞臺の眞中に下に居り、ワキも下に居る）。異草もまじる茅筵。うたてや今宵敷きなまし。強ひても宿をかり衣。かたしく袖の露深き。草の庵のせはしなき。旅寢の床ぞもの憂き旅寢の床ぞもの憂き

地上歌の間に後見絲繰車を持ち出し、正面先に置く。

【四】

ワキ「今宵のお宿返す返すもありがたうこそ候へ。（絲繰車を見て）又あれなるものは見馴れ申さぬ

○さすが思へば―柴の戸をとざす意のさすをいひかけた。斷りたく思ふが、さすがに氣の毒に思はれてといふ意。

○樞―戸。

○異草もまじる茅筵―いひわけの意の言種を異草にいひかけた。茅ばかりでなく他の雜草をも織り交ぜた粗末な筵。

○うたてや―情ないことだ

○かり衣―宿を借りるを狩衣にいひかけ、衣の緣で片敷くを呼び起した。

○かたしく―衣の片袖を下に敷いて寢ること。

○せはしなき―忙しい。落着きがない。

○もの憂き―つらい。

【四】

祐慶　いや構ひません。どうせ旅の宿のことです、今晩一寸寢られれば結構なのです、是非お泊め下さい」

老嫗「それでも、私でさへ嫌だと思つてゐる家なのですから……」

祐慶「いや是非泊めて下さい」

と戸口を開けようとしたので、老嫗もさすが氣の毒に思つて、

老嫗「それではお泊り下さい」

といつて戸を開けて請じ入れた。

祐慶等は家へ入つたが、なるほど見るゝ、粗末な茅筵だ。あゝ今晩はこれを敷いて寢ることか、無理に宿を借りたものの、この粗末な家では、寢ても落着くことも出來ない有樣だ。いかにも旅の宿りといふものは辛いものだ」（と獨言する）。

【四】

祐慶は座についた體で、

祐慶「今晩はお宿を戴き、誠にありがたうございました。（枠・絲繰を見て）あそこにあ

てお宿が出來るものですか」

○枠枠輪—枠は繰つた絲を巻く具。枠輪はその大きなもの。

○いつとなき—何時とも限らず、休む暇のない。

○情深き夜の—情の深い意と、夜の更けた意とに兼ねて用ゐた。

○眞麻苧の絲—麻で作つた絲。眞は美稱。

○昔を今になさばや—伊勢物語の歌「いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」に據つた。「なさばや」はなしたいといふ意。

○績苧—うんだ麻絲。絲を捻るを夜にいひかけた。

物にて候。これは何と申したる物にて候ぞ

シテ「さん候これは枠枠輪とて。賤しき賤の女の營む業にて候

ワキ「あら面白や。さらば夜もすがら營うで御見せ候へ

シテ『げに恥かしや旅人の。見る目も恥ぢずいつとなき。賤が業こそもの憂けれ

ワキ『今宵留まるこの宿の。主の情深き夜の

シテ『月もさし入る(と上を見上げ)

ワキ「閨の内に

地次第『眞麻苧の絲を繰り返し。眞麻苧の絲を繰り返し昔を今になさばや(とシテ絲を繰る)

シテ絲を繰る手を休めて、

シテ『賤が績麻の夜までも

地『世渡る業こそ。もの憂けれ

るのは見馴れない物ですが、あれは一體何といふものです」

老嫗「これですか。これは枠に枠輪と申して、賤しい女の生活の足しにするものなのです」

祐慶「これは面白い、それでは今夜それをやつて見せて下さい」

老嫗「ほんとにお恥かしい事です。初めてお會ひした旅人の、御覽になるのも恥ずないで、何時休む時もなく、このやうなつまらない事をしなければならないとはほんとに情ないことでございます」

祐慶「いや今宵お泊め下さつた御主人は情深い方だと思つて……」

老嫗「おゝ夜も深くなつて、月が部屋の中へさし込んで來ます。愚痴な繰り言ながら、やはり昔の花やかな生活を取返したい氣持が致します。

このやうに夜になつてもなほ、絲繰りなどして生活を立てて行かなければならないとは、ほんとに情ないことです。

折角人間に生まれながら、このやうないやな目ばかり暮らして、身を苦しめよう

○人界―後に擧ける六道の一である人間界。○生身―佛身に對して、未だ成佛しない衆生の身をいふ。○心だに誠の道に叶ひなば―菅原道眞の詠と傳へる歌下句「祈らずとても神や守らん」○佛果―善因を積んで佛と成る果報を得ること。○地水火風―佛教でこれを四大又は四大種といひ、一切萬物はすべてこの四種から成り、やがてまた四大は一切空に歸するものであると說いてゐる。○生死に輪廻し―衆生は一度死んでも寂光土に安住することが出來ず、次に擧げる五道六道に展轉して生まれ出るのをいふ。○五道六道―五道とは天上・人間・畜生・餓鬼・地獄をいひ、これに修羅道を加へて六道とす。これらは過去の業因によつて衆生のめぐり行く世界であると說かれてゐる。心地觀經に「有情輪廻生二六道一、猶如二車輪無二始終一」○人更に若きことなし―和漢朗詠集小野篁の詩句「人無二更少時一、須レ惜、年不二常春一、酒莫レ空」を引いた。

シテ『あさましや人界に生を受けながら。かかる憂き世に明け暮らし。身を苦しむる悲しさよ（しをる）

ワキサシ『はかなの人の言の葉や。まづ生身を助けてこそ。佛身を願ふ便りもあれ

地、かかる憂き世にながらへて。明暮ひまなき身なりとも。心だに誠の道に叶ひなば。祈らずとても終になど。佛果の緣とならざらん

（居クセ）

地クセ『唯これ地水火風の假に暫くもまとはりて。生死に輪廻し五道六道に廻る事唯一心の迷ひなり。凡そ人間の。あだなる事を案ずるに人更に若きことなし終には老となるものを。かほどはかなき夢の世をなどや厭はざるわれながら。あだなる心こそ恨みてもかひなかりけれ

とは、ほんとにあさましい悲しい事でございます」

前場　はかない事を仰しやる。人間といふものは、まづ第一に生きてゐてこそ、佛道を修めることも出來るのです。

老婆　御尤もでございます。たとひ平常はこの浮世に忙しく暮らしてゐても、心さへ誠の道に叶つて居れば、祈らないでも、終には成佛の緣を得ない事もございますまい。

老婆　考へて見れば、われ〳〵地水火風の四大を享けて、人間に生まれながら、煩惱に捉はれて、生死迷界の五道六道に輪廻してゐるのは、全く自分の心の迷ひからです。一體人間のはかない事を考へて見ますと、人といふ者はいつまでも若くはゐられないもので、やがて年老いてしまふのです。それほどはかない夢のやうな人生であるのに、その執着を離れられないのは、われながらわが心が恨めしい情ない氣がします。

【五】

○さてそも—このロンギはワキとシテの對話ではなく、シテが「絲盡し」の唄を謠ひながら絲を繰るのである。

○五條あたりにて—源氏物語夕顔の卷にある、光源氏が五條のあたりを通つて、夕顔の花の咲いてゐる宿を訪ねて、夕顔上を得た事を指す。〔夕顔〕〔半蔀〕參照。

○日蔭の絲の冠—新嘗祭・大嘗祭等の御神事に祭官の用ゐたもので、日蔭の蔓に擬へて青白の絲を冠につけたものをいふ。この語は夕顔の緣で續けただけで、源氏物語には見えてゐない。

○名高き人—光源氏を指す

○賀茂のみあれ—京都賀茂神社の祭をいふ「みあれ」は神のお生まれになつた日の謂。

○絲毛の車—牛車の一種。絲を車の屋に垂れて飾りとしたもので、高貴の人の乘用。

○絲櫻—しだれ櫻。

○くる人—見に來るを、絲を繰るにいひかけた。

○絲薄—葉莖の細い薄。

○月に夜をや—夜を絲を捻るにいひかけた。

○長き命—長きは絲の緣語

○思ひ明石の浦千鳥—思ひ

【五】

地ロンギ『さてそも五條あたりにて夕顔の宿を尋ねしは

シテ『日蔭の絲の冠着し。それは名高き人やらん

地『賀茂のみあれに飾りしは

シテ『絲毛の車とこそ聞け

地『絲櫻。色も盛りに咲く頃は

シテ『くる人多き春の暮

地『穗に出づる秋の絲薄

シテ『月に夜をや待ちぬらん

地『今はた賤が繰る絲の（シテ絲を繰り初め）

シテ『長き命のつれなさを

地『長き命のつれなさ を思ひ明石の 浦千鳥 音をのみひとり鳴き明かす音をの みひとり鳴き明かす

と絲繰りを止めてしをる。

光嬬『さても五條のあたりなる、花の夕顔咲く宿を、尋ね給うた貴人は、日蔭の絲の冠着た光源氏の君といふ。賀茂の祭の御祭に、高貴の方の召されるは、絲毛の車と申すとか。さて又花の絲櫻、色も盛りに咲く頃は、人出の多い春の暮。秋のものでは絲薄、月の夜には殊によい。とはいへ今又繰る絲の、長いにつけてわが命、つれないことの悲しさに、明石の浦の鳥のやう、夜晝ひとり泣きあかす』

光嬬は氣を取直し、次の「絲盡し」の唄を謠ひながら絲を繰る。

ながら夜を明かすを地名の明石にいひかけ、新古今集藤原公經の歌「つくづくと思ひ明石の浦千鳥浪の枕になくなくぞ聞く」を借りて、千鳥を呼び起す。

○音をのみ―聲を立てて鳴く。

【六】

シテワキに向ひ、

シテ「いかに客僧達に申し候

ワキ「承り候

シテ「餘りに夜寒に候程に。上の山に上り木をとりて。焚火をしてあて申さうずるにて候。暫く御待ち候へ

ワキ「御志ありがたうこそ候へ。さらば待ち申さうずるにて候。やがて御歸り候へ

シテ「さらばやがて歸り候べし

シテ立上り仕手柱際まで行き、立留まりてワキに向ひ、

シテ「や。いかに申し候。わらはが歸らんまでこの閨の内ばし御覽じ候な

ワキ「心得申し候。見申す事はあるまじく候。御心安く思しめされ候へ

シテ「あら嬉しや候。かまへて御覽じ候な。（ワキヅレに向ひ）此方の客僧も御覽じ候な

○やがて―早く。

○かまへて―必ず。

【六】

老婦は絲を繰るのを止めて、

老婦「お僧樣」

祐慶「何です」

老婦「餘り夜寒ですから、上の山へ登つて木をとり、焚火をして進せませう。暫くお待ち下さい」

祐慶「御親切ありがたう。では、お待ちしてゐます。どうぞ早くお歸り下さい」

老婦「では行つて、すぐ歸ります」

といつて行きかけて立戻り、

老婦「私の歸るまで、この部屋の中を御覽になつてはいけませんぞ」

祐慶「承知しました。決して見はしません御安心下さい」

老婦「あゝ嬉しい、決して御覽なさるな。（同行山伏に向ひ）こちらのお僧も御覽なさるな」

ワキヅレ「心得申し候

シテ橋懸へ行き、一寸立止まり、樣子を考へ、安心したる態にて中入。

【間】狂言能力、能力頭巾・着附縞熨斗目、水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて仕手柱際へ出で、

狂言「扨も〳〵陸奥の人倫絶えたる所に住む人の心は格別でござる。いかに夜寒にあればとて。夜に入り女の身として。山へ分け入り薪をとり。火を焚いてあたらせんとの志は。何より祝着申して候さりながら。餘の女と替り何とやらん物凄しく見え候間。心をつけて見申して候へば。山へ參りざまに阿闍梨に向ひ。わが閨の内ばし御覽じ候なと申し候が。阿闍梨などに左樣の事は申すまじき事にて候。閨の中にはいかやうの物を隱し置きたるか。この由申し上げそと見ようと存ずる

ワキの前に出で、

狂言「いかに申し候。今宵の主は奇特に御宿を申されて候

ワキ「げに汝が申す如く。今宵の主ほど情深き人はあるまじく候。女人の身として夜陰に及び。山に上り薪をとり。火に焚いてあてうずるとの志。なんぼう奇特なる事にて候

狂言「さりながら餘の女とは替り何とやらん物凄しく見え候間。心をつけて見申し候へば。山へ參りざまに阿闍梨に向ひ。閨の内ばし御覽じ候なと申し候が。閨の内には如何やうなる物を隱し置きたるぞ。そと見て參りたく候

ワキ「いや〳〵主と堅く契約してある間。さやうの事は無用に仕り候へ

狂言「阿闍梨こそ御契約なされたれ某は契約致さず候間。苦しくござあるまじく候

ワキ「いや無用にて候。夜はふけたり某もまどろまうずる間。汝もそれにて休み候へ

狂言「はあゝ畏つて候

從僧「承知しました」

老媼山へ行く態で退場。

【間】

○人倫—人間。

○祝着—喜ばしい。

○參りざま—參りがけ。

○奇特—殊勝。感心。

といひて仕手柱際へ出で、

狂言「是は如何な事。苦しくもない事を無用にせいと仰せらるゝに依つて。見る事はなるまい。唯休まう

舞臺の眞中にて横になり寢る。

狂言「なか〳〵寢られぬ。何卒主の閨を見たいものぢやが。（ワキを見て）見ればよう寢させられた。この内に御側をぬけてそと見て參らう

ワキを見て立ちかける。

ワキ「何事を仕るぞ

狂言「いや寢がへりを致して候

ワキ「心靜かに休み候へ

狂言「畏つて候。扨も〳〵さとい御方ぢや。聊爾にお側を抜けられぬ。たゞ休まう

一度寢てまた起きあがり、

狂言「寢られぬ〳〵。こわい〳〵と思へば襟元からぞつとつかみ立てらるゝやうな。この度はよう寢られたと見ゆる。さらばお側を抜けう

ワキ「いづ方へ參るぞ

狂言「はああの通りでござる。是非に及ばぬ。今度こそ思ひ切つて寢てのけう。（と寢てまた起き上り）いかな〳〵寢らるゝ事ではござらぬ。惣じて某が癖として人の見よと申す事は見たうもなく。な見そと仰せらるゝ事は見たうてならぬ。今度こそよう寢させられたと見ゆる。（ワキヅレを見て）又こちらのわろはよう寢らるゝ事ぢや。エヘン〳〵〳〵

ワキ・ワキヅレを見て、抜足して仕手柱際へ出で、

○聊爾に―かりそめに。容易に。

○な見そ―見るな。

○わろ―和郎。男。

○まんまと―うまうまと。都合よく。

狂言「なう〳〵嬉しやく。まんまと御側を抜けた。急いで閨の内を見て参らう

作物の戸を開き見、驚きて倒れ、あわてて橋懸一の松へ逃げ來り、

狂言「なう悲しやく。隱したこそ道理なれ。閨の内には死骨白骨數知らず。人の死骸は軒と等しく積み置いて候。是に御座ありては御命も取り申さうずる間。急ぎこの由申し上げう

ワキの前へ出で、

狂言「はあゝ見てござる

ワキ「見たとは

狂言「主の閨の内を餘りに見たく候程に。そと見申して候へば。死骨白骨數知らず。人の死骸は軒と等しく積み置いて候。この所に御座あつては御命を取り申さうずる間。急ぎ御立ちあれかしと存じ候

ワキ「最前堅く申しつけてあるに。曲事にてあるぞとよ。さりながら立越え見うずるにて候

狂言「はあゝ急いで御覽候へ。某はお先へ參り御宿を取り申さう。あら助かりやく

といひて幕に入る。

【七】

ワキ・ワキヅレ作物の前へ行き、

ワキ『不思議や主の閨の内を。物の隙よりよく見れば。膿血忽ち融滌し。臭穢は滿ちて膨脹し。膚腻悉く爛壞せり。人の死骸は數知らず。軒と等しく積み置きたり。いかさまこれは音に聞く。安達が原の黑塚に。籠れる鬼の。住家なり

【七】

第二段

祐慶及び同行山伏は老嬢の續み通り、部屋を見なかつたが、狂言の能力が好奇心を起して部屋の中を覗き、驚いて歸り、祐慶に之を告ゆる。祐慶等部屋を見て、

祐慶　これは不思議だ。主の部屋を隙間からよく見ると、膿や血が解け合ひ、くさい臭ひが一面に漂ひ、屍體が脹れ上り、その皮も肉も壞れた屍骸が數も知れない程あつて、軒まで積み上げてあるのだ。なるほどこれが噂に高い、安達原の黑塚の鬼の住家なのだ。

【七】膿血忽ち融滌し―佛教で人の死屍に九種の相があると説いてゐる中の、膿爛相（うみたじれ腐敗してゐること）血塗相（血肉の地にまみれてゐること）とが解け合ひ亂れ合つてゐること。九相の詩に「膿血忽流爛壞腸」

○臭穢―惡臭とけがれ。

○膨脹し―死屍九相の一である脹相の謂。死屍が膨脹してゐること。脹を「ちやく」と謠ふのは、うをくと

讀み誤つたのであらう。九相の詩に「朝見肪脹爛壞貌」○膚膚―皮膚と脂肪。○爛壞―壞れたくれること九相の體爛相と壞相。○陸奥の安達が原の黒塚に―拾遺集の歌。下句―鬼こもれりといふはまことか」。委しくは解說にいふ。

【八】

○あさまになされ―あらはに見現され。○胸を焦す焰―憤怒の烈しいこと。○咸陽宮の煙―咸陽宮は秦始皇の宮殿で、項羽に焼かれ三月燃え續いたといふ故事により、胸の炎の烈しい喩に引いたのである。和漢朗詠集源順の賦に「暴秦衰兮無二虎狼一、咸陽宮之煙片片」

ワキヅレ『恐ろしやかかる憂き目を陸奥の。安達が原の黒塚に。鬼こもれりと詠じけん。歌の心もかくやらんと

ワヅレ上歌、心も惑ひ肝を消し。心も惑ひ肝を消し。行くべき方は知らねども。足に任せて逃げて行く足に任せて逃げて行く

と謠ひながら、脇座に行き立つ。

【八】

出端の囃子にて、後ジテ鬼女、面般若・鬘・鬘帶・着附無地壓斗目・紋盡腰卷・腰帶・扇の裝束にて柴を負ひ打杖を持ちて橋懸に出で、一の松に立ち、

後ジテ『いかにあれなる客僧「とまれとこそ。さしも隱しし閨の內を。あさまになされ參らせし。恨み申しに來りたり。『胸を焦す焰咸陽宮の煙紛々たり（負柴をすつ）

地『野風山風吹き落ちて

シテ『鳴神稻妻天地に滿ちて（上下を物凄く見廻し）

同行「あゝ恐ろしい。こんな辛い目に遭はうとは思はなかつた。歌に――

『陸奥の安達が原の黒塚に、鬼籠れりといふはまことか』

と詠まれてあるのも、この事であらう」

と祐慶一行喫驚仰天して、どこといふ行先の目當もなく、足に任せて逃げて行つた。

【八】

祐慶等の逃げ出すところへ、老婆歸つて來て、鬼女の本性を顯した態で登場。

鬼女「これお僧たち、止まれといふに。あれほど隱して置いた部屋の中を見顯された恨みを申しに參つたぞ。あゝ腹立たしい。胸が燃え盡すほど腹が立つわい」

と、野にも山にも風が吹き起り、雷や電が天地に滿ち、空にかき曇り、山伏を一口に喰ひ殺さうと近づいて來る足音、鐵杖を振り上げる勢ひ、何ともいひやうのない恐ろしさである。

○鬼一口―伊勢物語に業平が密かに連れ出した女を奪ひ返された事を記して「鬼はや女をば一口に食ひけり」とある詞を借りた。

地『空かき曇る雨の夜の

シテ『鬼一口に喰はんとて

地『歩み寄る足音

シテ『振り上ぐる鐵杖の勢ひ（打杖をふり上げてワキを睨みつけ）

地『あたりを拂つて恐ろしや

シテ舞臺に入る、

〔祈〕

にワキ・ワキヅレ數珠を以てシテを祈り伏せんとす。

【九】

ワキ『東方に降三世明王

ワキヅレ『南方に軍荼利夜叉明王

ワキ『西方に大威德明王

ワキヅレ『北方に金剛夜叉明王

ワキ『中央に大日大聖不動明王

ワキヅレ『唵呼嚕呼嚕旋荼利摩登枳。唵阿毘羅吽欠婆婆呵。吽多羅吒干鉾。

【九】東方に降三世明王―以下密教の五大尊明王に惡魔降伏を祈る詞。委しくは本曲の末尾に附記す。

○唵―呪文の始めに置く詞歸命の義で、南無と同樣の意である。

○呼嚕呼嚕旋荼利摩登枳―藥師如來に祈る呪。

○阿毘羅吽欠―大日如來に祈る呪。この五字に地水火風空の五大を示し、これを稱へれば一切法悉く成就すといふ。

○婆婆呵―呪文の結句で、成就・吉祥などと譯す。

〔祈〕

祐慶等鬼女に呼び留められて立戻り、山伏の行法を以て之を祈り伏せる。

【九】

祐慶等―東方の降三世明王、南方の軍荼利夜叉明王、西方の大威德明王、北方の金剛夜叉明王、殊には中央にまします大日大聖不動明王。

唵呼嚕々々旋荼利摩登枳、唵阿毘羅吽欠婆婆呵、吽多羅吒干鉾。

わが身を見る者は菩提心を起し、わが名を聞く者は惡を斷ちて善を修し、わが說を聽く者は大智慧を得、わが心を知る者は卽身成佛せん。――

○吽―一切の教義を含む摧破の聲。
○多羅吒干縛―不動の慈救の呪。
○見我身者發菩提心　勝軍王不動明王四十八使者祕密成就儀軌に出てゐる、不動明王の本誓二頌。
○明王の繫縛―不動明王の左手に持たれる索繩。

【十】

○身をつづめ―身を縮め。
○ただよひめぐる―めぐる車のわだちをあだちにいひかけた。
○あさましや―「あさまになりぬ」と「あさ」の音を重ねた。

地『見我身者。發菩提心。見我身者。發菩提心。聞我名者。斷惡修善。聽我說者。得大智慧。知我心者。卽身成佛。卽身成佛と明王の。繫縛にかけて。責めかけ責めかけ。祈り伏せにけりさて懲りよ

ワキ數珠にてシテを打ち伏す。シテ安坐して、

【十】

シテ『今まではさしもげに

地『今まではさしもげに。怒りをなしつる、鬼女なるが。忽ちに弱り果てて（立上り）。天地に身をつづめ眼くらみて。足もとは。よろよろと。ただよひめぐる。安達が原の。黑塚に隱れ住みしもあさましやなりぬ。あさましや恥かしのわが姿やと。いふ聲はなほ。物凄しく。いふ聲はなほ凄しき夜嵐の音に。立ち紛れ、失せにけり夜嵐の音に失せにけり

「恥かしのわが姿や」と扇にて顏を隱し、「いふ聲はなほ」と橋懸へ行き、幕際にて留拍子を踏む

この御誓文の通り、不動明王の索を以てこの鬼女を繫縛して下さい」
と一心になつて不動呪縛の祈りをし、

補塵「これに懲りよ」
と祈ると、

【十】

今まであれほど怒怒の勢ひを示してゐた鬼女も、忽ちに弱り果てゝ、身も小さく縮まり、眼も昏み、足もともよろよろとして、

鬼女「安達が原の黑塚に隱れ栖んでゐたのに、わが姿を見現されて恥かしい」
といふ聲だけは、なほもの凄い勢ひであつたが、姿は夜嵐の音に紛れて逃げ失せてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【三】シテ「人里遠きこの野邊の。松風烈しく吹き荒れて月影たまらぬ閨の中には（寶下懸寒き柴の庵に）いかでか留め申すべき（寶下懸お宿を參らすべき）【七】ワキ「不思議や……人の死骸は數知らず軒と等しく積み置きたり（寶下懸ナシ）

古謠本（貞享二年本）

異同なし

附記

○降三世明王—五大尊の一で東方に配し、三面八臂あり忿怒の相を示す。三世は貪嗔癡で、この三毒を降伏するのを降三世といふ。

○軍荼利夜叉明王—五大尊の一で南方に配す。一頭八臂で、一切諸惡鬼神を降伏す。

○大威德明王—同じく西方に配す。三面六臂で、劍・鉾・輪・杵を執り、一切の毒蛇惡龍を降伏す。

○金剛夜叉明王—同じく北方に配す。三面六臂で火焰に包まれ、弓・箭・輪・鈴・杵を執り、一切の可畏夜叉を摧伏す。

○大日大聖不動明王—五大尊の中央に配す。大日如來が一切の惡魔を降伏せんが爲に變化して、忿怒身を現した明王であるから、大日大聖といふ。色眞黑、眼を怒らし、右手の劍は煩惱惡魔を斷伏することを表し、左手の索は方便の自在なことを示す。常に大火焰の中にあり石上に坐つて居る。

敦盛（もり）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 二番目 劇的夢幻能

【人物】 **ワキ** 蓮生法師、**前シテ** 草刈男（敦盛の靈）、**前ツレ** 草刈男（三人）、**狂言** 所の者、**後シテ** 平敦盛

【所】 攝津國 一の谷

【時】 鎌倉初期（八月）

【作者】 世子六十以後申樂諸儀に世阿彌の作として擧げ、能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作とす。曲名は應永三十年の能作書に見えて居り、演能の事は紀河原勸進猿樂記寛正五年四月七日に見えてゐる。文安三年の田樂記にもこの曲名が出てゐるから、田樂の方でも古くから演じてゐたものであらう。

【梗概】 熊谷直實は一の谷の戰に平敦盛を討取つて無常を感じ、出家して蓮生法師と號した。そしてその菩提を弔ふ爲に一の谷へ行くと、多勢の草刈男が來たので、これと笛の話をしてゐるうちに、他の男は皆歸り去つて、たゞ一人だけが居殘つたので、蓮生が不審を起すと、その男は敦

盛の靈であると仄かして消え失せた。蓮生は愈々信を起して終夜讀經回向をしてゐると、その夜の夢に、敦盛の靈が現れて、平家の沒落、わが最期の樣を懺悔し、敵の蓮生に弔はれて、共に極樂往生の出來ることを感謝して立去る。

【出典】この事は平家物語卷九「敦盛最後の事」又は源平盛衰記卷卅八「平家公達最後并類共掛二谷一事」から出たものであるが、蓮生法師が一の谷に行つて敦盛の亡靈に會つたといふのは、謠曲作者の新しい脚色である。その詞章は平家物語・盛衰記いづれに據つたか分らないが、稍々盛衰記に近いやうに思はれる。例へば、熊谷發心の事も、平家物語には、

……後に聞けば修理大夫經盛の乙子大夫敦盛とて生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。

と記してあるだけであるが、盛衰記には敦盛を討つ條に、

「よにも助け參らせばやと存じ侍れども、源氏陸に充ち滿ちたり、とても遁れ給ふべき御身ならず、御菩提をば直實よく〳〵弔ひ奉るべし、草の蔭にて御覽せよ、疎略ゆめ〳〵候まじ」とて、目を塞ぎ齒をくひあはせて涙を流し、その頸を掻落す、無慙といふも愚かなり。

といひ、「熊谷送二敦盛頸一並返狀事」にも、

直實はこの返事を給ほりて、いとど涙を流しつゝ、せん方なくぞ思ひける。穢土の習ひを悲しみて、遁ればやと思ひけるが、西國の軍鎭まりて、黒谷法然房に參りつゝ、髻を切り蓮生と名を附きて、終に世をこそ背きけれ。

と記してゐるのである。

【概評】本曲は二番目の所謂修羅物に屬する曲であるが、他の類曲に比べて著しく違つてゐる點がある。その一はワキが諸國一見の旅僧ではなくて、シテ敦盛を討取つた敵直實の出家したものであること、卽ちシテ・ワキの關係が現在物のやうに密接な劇的歷史的關係を持つてゐること、その二は後ジテが軍物語をしてゐるだけで、修羅道の苦患を訴へてゐないこと、その三は前段に比べて後段の詞章の甚だ多いことである。この第三に擧げた後段の詞章の多いことは、他にも類例のあることでもあり、行文の便宜と見る外に特殊な事情はない。第二の修羅の苦患を訴へないことは、他に類例の少いことであるが、敵から「毎日毎夜の御弔ひ」を受けてゐるのだから、戰死した武將とはいへ、修羅道に墮ちる「深き罪をも訪ひ浮め」られた結果として取扱つたのであらう。そして、このやうなシテに對して恩怨二面の關係を持つてゐる人物をワキとしたことは、謠曲の戲曲的發展から見て望ましい形であり、進歩した形といふべきであらう。第八節の、亡靈と實在人物とが對話して、「さてはその夜の御遊びたりけり、城の内にさも面白き笛の音の、寄手の陣まで聞えしは」と

いつてゐるなど、殊に面白い趣向だと思はれる。しかしながら、次の第九節に、自分を討取つた者に對して最期の樣を語つてゐるなどは、普通の旅僧ワキの複式能と全く同一の手法を履んだもので、このやうな特殊な曲に採入るべきものでない、甚しい失敗であらうと思ふ。これに比べると、同じく敦盛がシテである〔生田敦盛〕の方は、わが子に物語る態に作りなしてゐるから、無理がなくてよい。

【一】

○夢の世なれば驚きて—この世は夢のやうな無常なもの。であるから、そのことに氣がついて。

○捨つるや現なるらん—この世を捨てて出家したその事だけが夢でない現の事實であらう。

○熊谷の次郎直實—武藏國熊谷の人。源平の戰に源氏に屬して軍功を立てたが、平敦盛を討つて無常を感じ黑谷の法然上人の許で剃髮し、名を蓮生と號した。解說參照。尤も吾妻鏡（建久三年十一月）によれば、頼朝の態度を不快に思つた爲に出家したのである。

○敦盛—平經盛の末子。從五位下であつたが、職掌がなかつたので、世に無官の大夫といふ。一の谷の戰に熊谷直實に討たれた。時に年十六（盛衰記）或は十七

【二】

次第の囃子にて、ワキ蓮生法師、角帽子・着附夏斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、囃子座の方へ向き、

ワキ次第『夢の世なれば驚きて。夢の世なれば驚きて。捨つるや現なるらん

地取に正面に向き、

ワキ「これは武藏の國の住人。熊谷の次郎直實出家し。蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に懸け申しし事。餘りに御痛はしく候程に。かやうの姿となりて候。又これより一の谷に下り。敦盛の御菩提を弔ひ申さばやと思ひ候

ワキ道行『九重の。雲居を出でて行く月の。雲居を出でて行く月の。南に廻る小車の淀山崎をうち過ぎて。昆陽の池水生田川波ここもとや須磨の

【三】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ蓮生法師登場。

蓮生「この世の中はすべて夢だといふことに氣がついて出家したが、この出家したといふことだけは誤りのない現といふものであらう」

ミ次第に自分の心持を述べ、

蓮生「私はもと武藏の國の住人で熊谷次郎直實といひ、今は出家して蓮生といふ法師です。さて私は以前源平の合戰に敦盛を手にかけて殺したが、それが餘りにお氣の毒に思はれ、無常を感じて、このやうな姿になつたのです。それで、これから一の谷に下り、敦盛の御菩提を弔はうと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

蓮生「月の夜、都を出て南に向ひ、水車で名高い淀や山崎を過ぎ、昆陽池や生田川を通つて、波のうち寄せる須磨の浦へ來て

（平家物語）といふ。
○一の谷―攝津國武庫郡西須磨村鐵枴山の南麓。壽永三年二月平家が義經に敗られた地。
○九重の雲居―帝都。都から旅立ちすることを月にかけていつた。
○南に廻る小車の―月が南に廻るといふのを、廻るの縁で小車と續け、淀は水車の名所であつたので、車の縁で淀とつづけた。
○淀―山城國乙訓郡にあり京から難波へ出る水路。
○山崎―同く乙訓郡にある
○昆陽の池―攝津國河邊郡稻野村にある。
○生田川―攝津國摩耶山から出て布引瀧となり、神戸市の東を流れる川。池の音を重ねて生田を呼び起したのである。
○波ここもとや―源氏物語須磨卷に「波たゞこゝもとに立ちくる心地して」とあるを借りた。
○須磨―攝津國武庫郡にある。
○上野―須磨の山手に近い一圓の平原をいふ。

【二】
○草刈笛―草刈り男の吹く笛。
○かの岡に草刈る男―拾遺集柿本人麿の旋頭歌「かの岡に草刈るをのこしかな刈りそ、ありつつも君が來ま

浦一の谷にも着きにけり一の谷にも着きにけり

「昆陽の池水生田川」と右の方へ向き二三足出で、またもとに歸りて、一の谷に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。津の國一の谷に着きて候。誠に昔の有樣今のやうに思ひ出でられて候。（右の方に向き）又あの上野に當つて笛の音の聞え候。この人を相待ち。（正面に直し）このあたりの事ども委しく尋ねばやと思ひ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】

次第の囃子にて、シテ草刈男、直面・襟淺黃・着附段熨斗目・淺水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ草刈男三人、シテと同樣の裝束にて、皆烏帽子をかたげて舞臺に入り向合ひ、

シテ次第「草刈笛の聲添へて。草刈笛の聲添へて吹くこそ野風なりけれ

地取にシテは正面に向き、

シテサシ「かの岡に草刈る男野を分けて。歸るさにはや一の谷へ着いた」

といつてゐるうちに舞臺は攝津國一の谷に換る。

遲生「道を急いだので、存外早く攝津の國一の谷に着いた。こゝに來ると、ほんとに昔の有樣が今更のやうに思ひ出されることだ。おや、あの上野の方に笛の音が聞える。あの笛の主のこちらへ來るのを待つて、この邊の事を委しく尋ねませう」

といつて暫く休息の態。

【三】

シテ平敦盛の亡靈草刈男の姿で、ツレの草刈男と連れ立つて登場。

草刈「草刈笛を吹いてゐると、その音につれて、野風がそよ〳〵と吹いてゐるわい」

草刈「このやうに毎日岡や野に出て、一日草を刈り暮らし、夕暮になつてやつと家

さむ御馬草にせむ」萬葉集より出で和漢朗詠集にも見ゆ）の詞を借りた。○歸るさ―歸りがけ。○山に入り浦に出づる―或は樵夫となり或は漁夫となり。

○問はばこそ獨りわぶとも―古今集在原行平の歌「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」を引き、藻鹽たれを誰にいひかけた。○餘りになれば―餘りに零落して親しまれふと。○疎くして―古今集序に「にも疎くして」とあるは昨日は榮えおごりて今日は時を失ひ世にわび、親しかりしも疎くなり」○住めばとばかり―生きてこの世に住めば、このやうな悲しい生活もしなければならないと思ふから、あきらめて、憂き事もすべて天に任せて過して行くとの意

【三】

なる夕まぐれ。シテ「向合ひ」『家路もさぞな須磨の海。少しが程の通ひ路に。山に入り浦に出づる。憂き身の業こそもの憂けれ

シテ下歌「問はばこそ獨りわぶとも答へまし。上歌「須磨の浦。藻鹽誰とも知られなば。藻鹽誰とも知られなば。われにも友のあるべきに。餘りになれば佗人の親しきだにも疎くして。住めばとばかり思ふにぞ憂きにまかせて過すなり憂きにまかせて過すなり

【三】

ワキ立ちてシテに向ひ、とツレは地謠座の前に行き、シテは常座に立つ。

ワキ「いかにこれなる草刈達に尋ね申すべき事の候

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「唯今の笛は方々の中に吹き給ひて候か

シテ「さん候我等が中に吹きて候

に歸るのだが、その家といへば須磨の海近くで、山に入つて木こりをしたり、浦に出て魚を捕つたりして、生活を立てゝ行かなければならないとは、實に辛いことだ。自分だつて、尋ねてくれる人があれば、このやうに獨りぼつちで情なく暮らしてゐますと答へもしようものを、誰一人尋ねてくれる人もないのだ。いや自分にも友達はある筈なのだが、かうひどく零落してしまつては、親しかつた人も疎遠になつて、訪ねてはくれないのだ。しかしこれが憂き世だ。憂き世に住む上は致し方ないとあきらめて、何事も天に任かせて過ごして行くのだ。

さいひながら蓮生法師の居る遠くへ來る態。

【三】

蓮生法師、草刈男を見て、

蓮生「もうし草刈の人達、少々お尋ねします」

草刈「私の事ですか。何の御用です」

蓮生「唯今の笛はあなた方がお吹きになつたのですか」

草刈「さうです、私達の仲間で吹いたのです」

ワキ「あらやさしや。その身にも應ぜぬ業。返す返すも優しうこそ候へ

シテ「その身にも應ぜぬ業と承れども。それ勝るをも羨まざれ。劣るをも賤しむなとこそ見えて候へ。その上樵歌牧笛とて

シテ・ツレ向合ひ、

シテ『草刈の笛木樵の歌は。歌人の詠にも作り置かれて。世に聞えたる笛竹の。(四人ワキに向ひ)不審ななさせ給ひそとよ

ワキ『げにげにこれは理なり。さてさて樵歌牧笛とは

シテ『草刈の笛

ワキ『木こりの歌の

シテ『憂き世を渡る一節を

ワキ『謠ふも

○勝るをも羨まざれ―當時行はれてゐた諺であらう。この語「志賀」にも見えてゐる。寶物集に「金輪聖王をも歎ひ給はず、田夫野人をも歎き給はず」

○樵歌牧笛―木こりの唄と草刈の笛　和漢朗詠集紀齊名の句に「山路月暮滿レ耳者樵歌牧笛之聲」

○不審―笛竹の節にいひかけた。

逐生「それは優雅なことだ。人柄にも似合はない風流、ほんとに優しいお心掛けです」

草刈「異なことを仰しやる。人柄にも似合はないと仰しやるが、諺にも『自分より偉い人だとて羨むことはない、又自分よりつまらない者だとて卑しむものではない』と申すぢやありませんか。人の身柄を見て卑しむものぢやありませんよ。その上、樵歌牧笛といつて、草刈の笛に木こりの歌は、歌人にも詠まれて有名なものですのに、草刈が笛を吹いたからとて御不審なさるものぢやありませんよ」

逐生「いかにも御尤もです。ところで、今のお話の樵歌牧笛といふものは……」

草刈「草刈の笛とか、木こりの歌とか申すのも、この浮世を渡る慰めで、すべて謠

○寄竹―好ける心に寄るといひかけた。寄竹は波に流れて寄りくる竹をいひ、これを切つて笛に作れば、音色がよいとて愛用された。
○小枝―敦盛が最後まで持つてゐた笛。平家物語卷九に「件の笛は、祖父忠盛笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるにより持たれけるとかや。名をば小枝とぞ申しける」
○蟬折―源平盛衰記卷十五に、鳥羽院の御時唐土から獻じたもので、竹の節が蟬の形をしてゐたが、高松中納言が菩通の笛同様の取扱をした爲に、笛咎がして蟬が折れた。それで蟬折といふと。
○青葉の笛―十訓抄に一笛の最初は青葉・青二・大水龍・小水龍・頭燒・雲大丸是等なり―とあるが、敦盛が持つてゐたのではない。これを敦盛の愛笛と傳へるやうになつたのは、恐らく本曲からの附會であらう。
○高麗笛―高麗樂に用ゐる笛。住吉の浦は高麗船などの淀泊する所であるから、思ひ寄せていつたのである。夫木抄に「波の音にたぐへ

シテ『舞ふも
ワキ『吹くも
シテ『遊ぶも

シテ次の謠に合せて仕科。

地上歌『身の業の。好ける心に寄竹の。好ける心に寄竹の。小枝蟬折樣々に。笛の名は多けれども。草刈の吹く笛ならばこれも名は。青葉の笛と思し召せ。住吉の汀ならば高麗笛にやあるべき。これは須磨の鹽木の海人の燒殘と思しめせ 海人の燒殘と思しめせ

この間にツレは切戸より樂屋に入る。地上歌終りてシテは挿花を後見に渡す。

【四】

ワキ「不思議やな餘の草刈たちは皆々歸り給ふに。御身一人留まり給ふ事。何の故にてあるやらん

シテ「何の故とか夕波の。聲を力に來りたり。十念ふのも、舞ふのも、吹くのも、遊ぶのも、自分達の身にふさはしい、心の慰みとするものなのです。その中でも、笛と申せば、小枝とか蟬折とか色々有名なものがありますが、我々草刈の吹く笛を申せば、青葉刈りのことですから、これも青葉笛とでも思つて戴きませうか。尤もこれが住吉の浦であつたならば、高麗笛といふのが適はしいと申しませうか。さういへば、こゝは須磨の浦で鹽を燒く所ですから、薪の焚きさしに縁のある所で、私達の笛をあの『海人燒殘』の笛と思つて戴きませうか」

ミシテの草刈男が興に乘じて話を續けてゐる間に他の草刈男は行つてしまふ。

【四】

蓮生法師は草刈男が一人になつたのを見て、蓮生「おや不思議だ、外の草刈達は皆歸つてしまつたのに、あなただけ獨り殘つて居られるのは、これはどうしたわけです」
草刈「何故と仰しやるのですか。實は念佛を聞かして戴きたいと思つて來たのですどうか十念をお授け下さい」

てぞ聞く墨の江の汀にて聞く高麗笛の聲」

○鹽木―鹽を燒く薪。

○海人の燒殘―名笛の一で十訓抄に頭燒とある笛。續教訓抄には「海人燒不足」と記し、拾芥抄には「海人燒殘」と記す。鹽木の燃え殘りにいひかけたのである。

【四】

○夕波の―何の故とかいふを夕にいひかけた。

○聲を力に―稱名の聲を賴りにして來た。

○十念―南無阿彌陀佛を十度唱へること。淨土宗で、十聲の稱名を授ければ、惡人も極樂往生するといふ。

○若我成佛―觀無量壽經、彌陀四十八願每頭の初に「設我成佛」とあるのを、善導が譯した語。

○十方世界念佛衆生―觀無量壽經に「經一々光明、遍照十方世界念佛衆生、攝取不捨」とあるを引いた。十方は八方に上下を加へたもので、あらゆる世界の意。攝取は佛が衆生を極樂へ迎へ取ること。

○一聲だにも足りぬべきに―宗也上人の歌「一度も南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし」の意を取つた。

授けおはしませ

ワキ「易き事十念をば授け申すべし。それにつけてもおことは誰そ

シテ「眞はわれは敦盛の。ゆかりの者にて候なり

ワキ「ゆかりと聞けばなつかしやと。掌を合はせて南無阿彌陀佛

とワキ片膝をつきて合掌す。シテも眞中へ出で、ワキと向合ひ合掌して、

若我成佛十方世界。念佛衆生攝取不捨

といひて二人とも手を直し、

地「捨てさせ給ふなよ。一聲だにも足りぬべきに。每日每夜のお弔ひ。あらありがたやわが名をば。申さずとても明暮に（シテ立上り）。向ひて囘向し給へる。その名はわれといひ捨てて姿も見えず、失せにけり姿も見えず失せにけり

と、シテ仕手柱際にて開き、靜かに中入。

蓮生「それはお易いことです、十念を授けて上げませうが、それにしても、そなたは誰です」

草刈「私は實は敦盛の緣故の者です」

蓮生「敦盛の緣故の人と聞いてはなつかしい」

と掌を合はせて

蓮生「南無阿彌陀佛……」

ミ念佛するミ、草刈男も一所になつて、

蓮生草刈「――『もし自分が成佛せば、あらゆる世界の人々をすべて極樂へ迎へ取らう……』――」

ミいふ御經を讀み、

草刈「どうかこの御經の通り御見捨て下さるな。このやうなありがたい御經は一度聞いただけでも十分であるのに、每日每夜御囘向下さるのは、實にありがたうございます。私の名は申さなくてもお分りになる、朝夕御囘向下さるその亡靈です」

といつたまゝ、姿も見えず消えてしまつた。

【問】

○なか〳〵―然りといふ意の時代言葉。

【問】 狂言所の者、着附縞屢斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。須磨の浦に住居する者にて候。今日は罷り出で舟の通ひを眺め。心を慰めばやと存ずる。(ワキを見て)いやこれに見なれ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「是は都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左樣にて候はゞまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。(舞臺の眞中へ出で下に居て)さて御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所は源平兩家の合戰の巷と承り及びて候中にも。平家の公達敦盛の果て給ひたる樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に平家は壽永二年秋の頃。木曾義仲に都を落され。この所へ移り給ふが。源氏は平家を亡ぼさんと六萬餘騎を二手に分け。左右なう打ち破り。御一門は散々に落ち給ふ。中にも修理の大夫經盛の御子無官の大夫敦盛は。御座船に乘らんとて汀の方へ御出でありしに。小枝と申す御祕藏の笛を本陣に忘れ給ふが。跡にて敵に取られん事を口惜しく思し召し。又本陣に御歸りありて。笛をとり汀へ御出でありしに。御座船を始め兵船ども悉く沖へ出で申し候間。馬は強し泳がせんとて。馬を海へ打入れ給ふ處に。武藏の國の住人熊谷次郎直實扇を開き招きければ。敦盛やがて取つて返し。波打際にてむんと組み。兩馬が間にどうと落ちる。熊谷は大剛の者なればその儘取つて抑へ。

首をかゝんとして内兜を見れば。十五六ばかりと見えて化粧して。鐵漿黑々とつけ給ふ間。あつぱれよき武者かな。助けばやと後を見れば。土肥梶原十騎ばかり續きたり。熊谷申すやうは。助け申したく候へども。御覽の如く味方大勢續きたり。熊谷が手にかけ御跡懇に弔ひ申さんとて。御首かき落し御死骸を見奉れば。腰に錦の袋に笛の御座候間。卽ち大將の見參に入れしに。誠にかゝる折節笛を持ち給ふ事は。公達の中にても優しき御方なりとて。皆々鎧の袖を濡らしたると申す。その後御名を尋ぬるに。經盛の御子無官の大夫敦盛にて御座ありたると申す。誠や人の申すは。熊谷は出家して敦盛の御菩提を弔ふと申すが。左樣の者ならばその時助け申さうずるに。助けぬ者ならば是は僞りにて候べし。その熊谷がこの所へ來れかし。打ち殺して敦盛の孝養に致したくとの申し事にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。今は何をか包み申すべき。是は熊谷の次郎直實出家し。蓮生と申す法師にて候。敦盛の御菩提を弔ひ申さん爲。これまで參りて候よ

狂言「扨はその時の熊谷殿にて候か。左樣の事とも存ぜず聊爾なる物語申して候御免候へ。扨善に强きは惡にも强しと申すが。方々の事に候べし。彌々敦盛の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「いや〳〵苦しからず候。この所へ來り候も。敦盛の御跡弔ひ申さん爲にて候間。暫く逗留申し彌々ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「左樣にて候はゞ御宿を申さうずるにて候

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

　といひて狂言は引く。

○土肥梶原―源氏の武士土肥實平、梶原景時。

○見參に入れ―お目にかけ

○孝養―供養。

○聊爾なる―かりそめな。輕率失禮な。

【五】

【六】

○淡路潟通ふ千鳥の―金葉集源兼昌の歌「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寢さめぬ須磨の關守」を少しかへて引いた。

○關守は誰そ―この須磨にゐるのは誰かと、人聲を聞き咎めたのである。

○鳧鐘―鐘のこと。昔支那で鳧氏が初めて鐘を鑄たから出た名。

【五】

ワキ上歌(待謠)『これにつけても弔ひの。法事をなして夜もすがら。念佛申し敦盛の。菩提をなほも、弔はん菩提をなほも弔はん

【六】

一聲の囃子にて、後ジテ平敦盛、面敦盛・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白赤・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて舞臺に入り、常座に立ち、

後ジテ『淡路潟通ふ千鳥の聲聞けば。寢覺も須磨の。關守は誰そ。(ワキに向ひ)いかに蓮生。敦盛こそ參りて候へ

ワキ『不思議やな鳧鐘を鳴らし法事をなして。まどろむ隙もなき處に。敦盛の來り給ふぞや。さては夢にてあるやらん

シテ『何しに夢にてあるべきぞ。現の因果を晴らさん爲に。これまで現れ來りたり

ワキ『うたてやな一念彌陀佛卽滅無量の。罪障を

【五】

後段

蓮生法師は所の者から「先程の草刈男は實は敦盛の亡靈でせう、なほも御回向をお續けになつたら、きつと奇特が現れませう」といはれ、

蓮生「これにつけても、回向の讀經をし、終夜念佛をして、敦盛の菩提を弔はう」といつて念佛してゐるうちに、いつしか假睡した態。

【六】

後ジテ平敦盛が蓮生法師の夢に現れた心で登場。

敦盛「この須磨の邊には、關守の夢を驚かす千鳥の聲の外には、物音もしない筈だのに、人聲のするのは誰だらう」

と獨言しながら蓮生法師の前に出で、

敦盛「蓮生法師、敦盛が參りましたぞ」

蓮生「これは不思議だ、鐘を鳴らし念佛をして、假睡をする隙もないところへ、敦盛が來られたぞ。さてはいつの間にか假睡をして夢を見たのであらうか」

敦盛「いや決して夢ではない。在世當時の罪業を晴らしたい爲に、こゝまで現れて來たのです」

蓮生「何を笑止な事をいはれる。一度阿彌

だ。氣の毒なことだ。こゝでは愚かなことをいふ人だといふ意。

○一念彌陀佛―往生本緣經に「一念彌陀佛、卽滅二無量罪二」とあるを引いた。

○荒磯海の―何の因果かあらんを荒磯海にいひかけ、海の緣で深きとつづけた。

○得脫―佛と成つて迷ひを脫すること。

○他生の功力―後生成佛の功德の力。

晴らさん稱名の。法事を絕えせず弔ふ功力に。

何の因果は荒磯海の

シテ「深き罪をも訪ひ浮かめ

ワキ「身は成佛の得脫の緣

シテ「これ又他生の功力なれば

ワキ「日頃は敵

シテ「今は又

ワキ「眞に法の

シテ「友なりけり

地「これかや。惡人の友を振り捨てて善人の。敵を招けとは。御身の事かありがたや。ありがたしありがたし。とても懺悔の物語夜すがらいざや、申さん夜すがらいざや申さん

シテ舞臺の眞中へ行き床几にかゝる。

【七】

地クリ「それ春の花の樹頭に上るは。上求菩提の

【七】

○春の花の樹頭に上るは―名義集に「以智上求菩提、

○惡人の友を振り捨てて―朋友でも惡人ならば振り捨ててしまひ、敵でも善人ならば近づけよといふ誡。

○懺悔―過去の罪を佛法僧三寶の前に申し述べてこれを悔い改めること。

【七】

敦盛「春の花が樹の枝に咲くのは、向上心

陀佛を念ずれば、忽ち無量の罪をも滅せん』と經文に仰せられた、罪業滅却のありがたい念佛を絕えず唱へて、回向をしてゐるのだから、その功德で罪業の殘つてゐる筈はありません」

敦盛「この深い罪業をも浮かめて下さるのですか」

蓮生「さうです。そして自分も亦迷ひを離れて成佛する緣としたいのです」

敦盛「これといふのも、やがて後世成佛の功德となるのですから……」

蓮生「昔は敵同志でも……」

敦盛「今はほんとの法の友と申すものです。世の格言に『親しい友と雖も惡人はこれを退け、敵と雖も善人はこれを近づけよ』とあるのは、あなたの事をいつたものでせう。ほんとにありがたうございます。それでは、この夜中懺悔の物語を致しませう」

用レ悲下救二衆生一」といふ教の花は菩提を求める機會を知らしめ、水底の月は衆生を救ふ形相を示してゐるとの意。この一節秋の夜の長物語にも見ゆ。

○累葉枝を連ねし―兄弟一族といふ意。

○槿花一日の榮―和漢朗詠集白居易の詩句「松樹千年終是朽、槿花一日自爲レ榮」を引き、盛りの短い喩とした。槿にむくげ。

○善きを勸むる教―佛教。

○逢ふ事かたき―平家物語の「人身は受け難く、佛教には遇ひ難し」を引き、難きを堅きにいひかけて、石とつゞけた。

○石の火の―時の短い喩。寶玉論に「人生在レ世、如二石火電光一」

○一昔―十年又は廿一年をいふ。源平盛衰記卷二十に「廿一年を一昔とす」

○壽永の秋の葉の―平家物語に―壽永の今は秋の紅葉と落ち果てぬ―とあるに據つた。平家が都を落ちて西海に奔つたのは、壽永二年七月である。

○一葉―舟のこと。秋の葉を承けていふ。

○籠鳥の雲を戀ひ―住み馴

機をすすめ。秋の月の水底に沈むは。下化衆生の。象を見す

シテサシ『然るに一門門を竝べ。累葉枝を連ねしよそほひ

地『眞に槿花一日の榮に同じ。善きを勸むる教へには。逢ふ事かたき石の火の。光の間ぞと思はざりし身の習はしこそはかなけれ

シテ『上にあつては。下を惱まし

地『富んでは驕りを。知らざるなり

シテ床几をはなれ、これより謠に合はせて舞ふ。(舞クセ)

地ノセ『然るに平家。世を取つて二十餘年。眞に一昔の。過ぐるは夢の中なれや。壽永の秋の葉の。四方の嵐に誘はれ散り散りになる一葉の。舟に浮き波に臥して夢にだにも歸らず。籠鳥の雲を戀ひ。歸雁列を亂るなる。空定めなき旅衣。日も

を起して菩提を求める機縁を勸めて居るのであり、秋の月の水に映るのは、下衆生を教化する相を示してゐるのだ、といはれてゐるのに、平家一門の者は、こゝに心を用ゐず、一族門を竝べ、兄弟親族肩を竝べて榮花に奢つてゐたのです。しかしこのやうな榮花は盛りのほんとに短いものです。それだのに、佛教の一日も忽に出來ないこと、人生の極めて短いものである事に氣づかなかつたのは、ほんとに果敢ないことでした。私達平家の者どもは、高い地位にあつて下々の者を惱ましし、富み榮えに奢りの程度といふことを知らなかつたのです」

教盛 顧れば、平家が天下を掌握してから、僅か二十年。その時の過ぎ去るのはほんとに夢のやうなものです。やがて壽永の秋、木の葉の散るやうに散り〳〵になつて、波に漂ふ浮舟のやうな身上となり、都を落ちてよりこの方、夢にも都へ歸ることは出來ず、籠の鳥が雲を慕ふと同じやうに、都戀しい思ひをしながら、落着く先も分らない旅を永い間續けて、翌年

れた都を戀しく思ふ喩。平家物語に「鶴鳥の雲を戀ふる思ひ、遙かに千里の南海に浮び、歸雁友を失ふ心」とあるに據つた。○空定めなき—行先の定まらない。鳥の緣で空といつた。○日も—衣の緣語紐といひかけた。○ここに須磨の浦—こゝに住むといひかけた。○冴えかへる—烈しく寒いこと。海邊に歸る意に兼ねていふ。○舟の夜となく—舟の寄るを夜にいひかけた。○磯枕—磯邊の宿に寢ること。○共寢—海士と同宿すること。○磯馴松—磯邊の松。須磨人にのみ馴るといひかけ、松の緣で煙を出した。○柴といふもの—源氏物語須磨卷に「おはします後の山に、柴といふものふすぶるなり」とある詞をとつた。○思ひを須磨の—思ひを澄ますを地名にいひかけた。

【八】○經盛—清盛の弟で敦盛の父。和歌及び笛の上手であつた。○今樣—平安末期頃から流行した一種の謠ひ物。普通

重なりて年月の。立ち歸る春の頃この一の谷に籠りて暫しはここに須磨の浦

シテ『後の山風吹き落ちて

地 野も冴えかへる海際に。舟の夜となく晝となき。千鳥の聲もわが袖も。波にしをるる磯枕。海士の苫屋に共寢して。須磨人にのみ磯馴松の。立つるや夕煙柴といふもの折り敷きて。思ひを須磨の山里の。かかる所に住ひして。須磨人になり果つる一門の果ぞ悲しき

舞ひ納めてワキに向き、

【八】

シテ『さても二月六日の夜にもなりしかば。親にて候經盛われらを集め。今樣を謠ひ舞ひ遊びしに

ワキ『さてはその夜の御遊びなりけり。城の内にさも面白き笛の音の。寄手の陣まで聞えしは

シテ『それこそさしも敦盛が。最期まで持ちし笛

の春の頃暫くこの一の谷に籠り、須磨のあたりに落ちつくこととなつたのです。こゝ須磨の浦といへば、後の山からは山風が吹き下し、野も里も寒さに冴えかへつて、海際には夜晝となく千鳥が鳴いてゐるといふ有樣で、私達の袖も波に涙にしをれ勝ちだつたのです。かうして粗末な海士の家に、海士と同宿をして、田舍者とばかり馴染みになり、その日その日を僅かに過し、柴といふものを敷いて、暫く身を休めたのです。昔榮花に誇つてゐた者が、今このやうな所に住まつて、すつかり須磨の里人になつてしまふとはあまりに悲しい平家の末路でした」

【八】

敦盛 さて、かうしてゐるうちに、二月六日の夜となつたので、親の經盛が私達を集め、今樣を謠つたり。舞を舞つたりして、遊ばせたのですが……」

蓮生 それでは、あれはその夜の御遊であつたのですな、城の内からいかにも面白さうな笛の音が、寄手の私達の陣まで聞えて來たのは」

七五四句から成る。
○城の内にさも面白き―平家物語卷九に「この曉城のうちにて管絃し給ひつるはこの人々にておはしけり」とあるをいふ。
○寄手―攻撃する軍勢。源氏の軍陣を指す。
○朗詠―平安盛期頃から流行した、詩句（時には和歌）に節をつけて謠ふもの。

【九】
○御船―安德天皇の御座船を指す。
○のび給ふ―落ちのび給ふ
○せん方波に―せん方なくを波にいひかけた。
○打物―刀。波の打つにいひかけた。

竹の
ワキ『音も一節を謠ひ遊ぶ
シテ『今樣朗詠
ワキ『聲々に
地『拍子を揃へ聲を上げ

〔中舞〕

シテその夜の舞を忍ぶ心にて舞ひ、續いて次の謠に合せて仕科。

【九】
シテ『さる程に。御船を始めて
地『一門皆々船に浮かめば乘り後れじと。汀にうち寄れば。御座船も兵船も遙かにのび給ふ
シテ『せん方波に駒を控へ。あきれ果てたる。有樣なり。かかりける處に
地『後より。熊谷の次郎直實。遁さじと。追つ懸けたり敦盛も。馬引き返し。波の打物拔いて〳〵と扇を捨て太刀を拔きて仕科）。二打三打は打つぞ と見えしが

敦盛「それこそ私が最期まで持つてゐた笛で……」
蓮生「音も面白く謠ひ遊ばれたものですな」
敦盛「或は今樣、或は朗詠、それ〴〵拍子を揃へ聲を上げて謠ひ舞うたのです」

〔中舞〕

當時の樣を思出して舞を舞つて見せる。

【九】
敦盛は舞を終つて、
敦盛「このやうにしてゐる間に、御座船を始め奉り、一門の者が皆船を出して、誰も乘り後れまいと汀に寄つたので、やがて御座船も兵船も遙か沖合の方へ行つてしまつたのです。後に殘された私は、仕方なく汀に駒を控へて遙方にくれてゐたのです。すると、後から熊谷次郎直實が、この敵を遁すものかと追つ懸けて來ました。私も馬を引返し刀を拔いて、二三度斬り合ひましたが、馬の上で組み合つたまま、波打際に重なり合つて落ち、遂に討たれて死んでしまつたのです。ところが、今

馬の上にて。引つ組んで。波打際に。落ち重なつて（蹄をつき）。終に。討たれて失せし身の（立上り）。因果は廻り合ひたり敵はこれぞと討たんとするに。仇をば恩にて（坐してワキに向ひ）。法事の念佛して弔はるれば。終には共に（立上り）。生まるべき同じ蓮の蓮生法師。敵にてはなかりけり跡弔ひて、たび給へ跡弔ひてたび給へ

「敵にてはなかりけり」と太刀をすて、「跡弔ひてたび給へ」と常座にてワキに合掌し、返句に直して留拍子を踏む。

その敵に廻りあつたので、仇を討ちたいと思つたのですが、仇を恩で報い、念佛回向して弔つて下さるので、あなたの御名前の通り、極樂の蓮の臺に御一所に生まれることが出來るやうになつたのです。さうすれば、あなたは敵ではなかつたのでした。どうぞこの後も回向して下さい」といつて消え失せる態で退場。

○仇をば恩にて法事の―仇を恩にて報じを法事にいひかけた。

○同じ蓮の―共に極樂の蓮臺に往生しようといふのを蓮生法師にいひかけた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ次第「夢の世なれば……現なるらん（寶）旅泊に憂きは入相の。く。鐘こそとまりなりけれ」（春・剛ナシ）……ワキ「急ぎ候程に……思ひ出でられて候（寶・剛・喜・輪・觀）妄執に歸るぞや。南無阿彌陀佛）【五】ワキ上歌「これにつけても……菩提をなほも弔はん（寶・春・剛・磯）枕菩の衣を片敷きて。く。岩根の床に終夜念佛申し敦盛の菩提を深く弔はん〳〵」、喜「露を片しく草枕。く。日も暮れ夜にもなりしかば、念佛申し敦盛の菩提を深く弔はん〳〵。【七】地クリ「それ春の花の樹頭に……下化衆生の形を見す（下懸ナシ）……シテサシ「然るに一門かどを並べ。累葉枝を連ねし輩（喜ナシ）

古謠本（貞享二年本）

異同なし。

淡路（あはぢ）

觀（春剛）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 ワキ　當今の臣下、ワキツレ　同從臣（二人）、前シテ　老翁（伊弉諾神靈）、前ツレ　男、狂言　所の者、後シテ　伊弉諾神

【所】 淡路國　二の宮

【時】 春（三月）

【作者】 能本作者註文には作者不明とし、二百十番謠目錄には觀阿彌の作とす。古記に演能の記錄は見當らないが、金春禪竹の五音三曲集に本文の一節を引用してゐるから、相當古い時代のものであらう。

【梗概】 今上陛下に仕へ奉る臣下が住吉・玉津島に參詣した序に、淡路の古跡を尋ねると、老翁が水口に幣帛を立てて田を耕してゐるので、その謂れを聞くと、翁はこれは諾冊二神を祀る二宮に供へる神田であるからだと答へ、たゞ二神が國土を神生遊ばされた神話を物語り、やがて神代の樣を現さうといつて消え失せる。臣下が奇特の思ひをして待つてゐると、伊弉諾神が影向せられて、國土創成の樣を示し、神舞を舞ひ、御代を讃美せられる。

【出典】この國土創成の神話は古事記・日本書紀ともに記して居り、古事記によれば、

是に天神諸の神もちて、伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神に、「このたゞよへる國をつくり固め成せ」と詔ちて、天沼矛を賜ひて、言よさし給ひき。故二柱の神天浮橋に立たして、その沼矛を指し下してかき給へば、鹽をころこをろにかき鳴らして、引き上げ給ふ時に、その矛の末よりしたゞる鹽積りて島となる。これ淤能碁呂島なり。その島に天降りまして、天之御柱を御立て、八尋殿を見立て給ひき。……是に伊邪那岐命先づ「あなにやしえをとめを」とのり給ひ、後に妹伊邪那美命「あなにやしえをとこを」とのり給ひき。かくのり給ひ竟へて、御合ひまして、子淡道之穗之狹別島を生み給ひき。

とあるが、本曲の直接典據としたのは、神皇正統記であらう。同記には、

それ天地未だ分れざりし時、渾沌として圓れること雞子の如く、くゞもりて牙を含めりき。これ陰陽の元初未分の一氣なり。その氣始めて分れて、淸く明らかなるはたなびきて天となり、重く濁れるはつゞきて地となる。その中より一物出でたり、狀葦牙の如し。卽ち化して神となりぬ、國常立尊と申す。又は天御中主神とも號し奉る。この神に水火木金土の五行の德ましまします。まづ水德の神に顯れ給ふを國狹槌尊といふ。次に火德の神を豐斟渟尊といふ。天の道獨なす故に純男にてます。次に木德の神を泥土煮尊・沙土煮尊といふ。次に金德の神を大戸之道尊・大苫邊尊といふ。次に土德の神を面足尊・惶根尊といふ。……次に化生し給へる神を伊弉諾尊・伊弉冊尊と申す。これは正しく陰陽の二つに分れて造化の元となり給ふ。上の五行は猶一つ一つの德なり。この五德を含せて萬物を生ずる始とす。こゝに天祖國常立尊、伊弉諾・伊弉冊の二神に勅して宣はく、「豐葦原の千五百秋の瑞穗の地あり、汝往きてしらすべし」とて、卽ち天の瓊矛を授け給ふ。二神この矛を授かりて、天の浮橋の上に佇みて、矛をさし下してかき探り給ひしかば、滄海のみあり き。その矛の鋒より滴り落つる潮鋒りて一つの島となる、これを磤馭盧島といふ。……かくてこの二神相計ひて八つの島をうみ給ふ。まづ淡路の州を生みます、淡道穗之狹別といふ。

と。謠曲にこの陰陽五行說に從つて天地の開闢を說いて居るのである。やはりこれと同樣の思想を以て天地開闢を說いたものに、幸若舞曲の「日本記」があるが、これは稍〻新しい作のやうであつて、謠曲の先進と觀ることは出來ない。

【概評】本曲の脚色は、脇能として普通の形式を履んだもので特にいふべきこともないが、劇的葛藤を起す端を「二の宮」の詞咎めに發せしめ、これを諸册二神の意に附會して、國土創成の神話を展開して行つたのは、面白い趣向であると思ふ。それにしても、これを除

陽五行説に附會したのは、今日から見れば甚だ奇怪であるが、いつの時代でも、われ等の最も尊敬する神話を價値つける爲に、その時代に於て最も信仰せられてゐる宗教・哲學と結びつけて、これを彩らうとするのは、自然の人情で、本曲の所説も亦その時代の思想を反映したものに外ならないのである。われ等は本曲の所説をその時代の厚率な信仰として尊敬したいと思ふのである。

【一】

○治まる國の始めもや―治まれるわが國土の草創は淡路の國が最初であるとの意と、わが國の大御代は淡路に齋はれ給ふ伊弉諾・伊弉冊の二神から始まるとの意とを兼ねていふ。諸冊二神が國土創造の第一に淡路島をお生みになつたことは解説にいふ。

○住吉―攝津國東成郡住吉にある住吉神社。伊弉諾尊の御子底筒男・中筒男・表筒男の三神を祀る。古來和歌の守護神と崇められた神である。

○玉津島―紀伊國海草郡和歌村にある玉津島神社。住吉明神と共に和歌の守護神と崇められた神。

○波吹上の―浦風が波を吹き上ぐといふのを、吹上の濱にいひかけた。吹上は紀

【二】

次第の囃子にて、ワキ臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從臣二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

ワキヅレ「次第」治まる國の始めもや。治まる國の始めもや淡路の、神代なるらん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さてもわれ宿願の子細あるにより。住吉玉津島に參詣仕りて候。又よきついでなれば。これより淡路の國に渡り。神代の古跡をも一見せばやと存じ候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ「道行」紀の海や。波吹上の浦風に。波吹上の浦風に。跡遠ざかる沖つ舟。潮路程なく移り來

【三】

前段

舞臺は初め紀伊國で、ワキ朝臣、ワキヅレの從臣を隨へて登場。

朝臣「この天下泰平の日本は、國土神生の最初に淡路島をお生みになつた、伊弉諾・伊弉冊の神の神代から始まるのだ」

と次第を謠ひ、見物人に向つて、

朝臣「私は今上陛下に御仕へ申してゐる臣下です。私は以前から願望があつたので、今度和歌の守護神住吉・玉津島のお社へ參詣したのです。又丁度よい序だから、これから淡路の國に渡り、神代の古跡を見たいと思つてゐます」

と自己紹介をし、

朝臣「波を吹き寄せる浦風に帆をあげて、紀伊の海を出で、吹上の浦を通つて、次第に沖の方へ漕ぎ出て來るうちに、船足は

伊國和歌山市の西南雑賀村附近の古名。
○沖つ舟―沖の方を漕ぎ行く船。
○よそに霞みし―遠方に霞んで見えてゐた。
○淡路潟―淡路島附近の海こゝでは淡路島の意。島影の淡きを淡路といひかけた

て、よそに霞みし島影や。淡路潟にも着きにけり淡路潟にも着きにけり

ワキ「よそに霞みし」と正面に向きて二三足出で、またもとへ歸り淡路に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや淡路の國に着きて候。この所の人を待ち。神代の古跡を尋ねばやと存じ候

ワキツレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老女、面小牛尉・尉髮・襟淺黄・着附小格子厚板・茶袴水衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ツレ男、直面・着附無地熨斗目・淺黄縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、二人とも柄振を持ち、ツレを先に立てて橋懸へ出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテ一聲「神の代の。跡を殘して海山の。のどけき波の。淡路潟

二人とも正面の方を見て、

ツレ二句「種を收めし國なれば。シテ向合ひ「苗代水も。

ツレ「豐かなり

○波の淡路―波の泡を淡といひかけ、又粟と通はせて種を呼び起した。
○種を收めし國―國土の第一で、萬物成熟の源をなした國。
○苗代―稲の苗床。

進んで、遠くに霞んで見えてゐた淡路島に着いた。

ワキ旅程を進めてゐる間に、淡路に着いた體で、舞臺は淡路國一の宮となる。

ワキ旅を急いだので、存外早く淡路の國に着いた。こゝで、土地の人の來るのを待つてゐて、神代の古跡を尋ねませう」

ワキは脇座に行つて、人を待つ體。

【二】

シテ伊勢國一の宮の神主、老翁の體で、ツレの男を伴つて登場。

老翁この淡路島のあたりは、神代の古跡をそのまゝ傳へて、海の景色も山の景色も、いかにものんびりした、のどかな氣持だ」

男「この國は殊に日本國神生の最初の島で、萬物の生長する源をなす所ですから五穀が豐かで、苗代田に引く水も十分です」

○陰陽の神代―伊弉諾・伊弉册の御夫婦神の御代。
○人界―神代に對して人代をいふ。
○作り田―耕す田。山河草木國土皆諸册二神の惠みによつて作られたといふを作り田にいひかけたのである
○雨つちくれを潤して―耕田に雨が降つて土壤を潤すやうに、神の惠みが萬物に行き及んで。
○心の池のいひがたき―心の池は心に物を思ふ喩。池の樋を「いひ」といふので、「池のいひ」を「言ひ難き」といひかけたのである。
○春の田を人に任せてわれは唯―後拾遺集齋宮内侍の歌、この下句「花に心をつくる頃かな」
○盛りにひかれて―花の盛りに心を引かれるのと、田に水の引かれるのとを兼ねていふ。
○心の種蒔きて―新千載集津守國冬の歌「苗代に心の種を蒔きそへて鳴くや蛙のやまと言の葉」を借りた。「心の種」は和歌の意。
○櫻田―萬葉集卷三に「櫻田へ田鶴鳴き渡るあゆち潟潮干にけらし田鶴鳴き渡る」とあり、櫻田は尾張國愛知郡佐久良郷の田である

と謠ひて二人とも舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ『それ陰陽の神代より。今人界に至るまで。

シテ（向合ひ）ツレ山河草木國土は皆。神の惠みに作り田の。雨つちくれを潤して千里萬里の外までも。皆樂しめる時とかや

シテ下歌ツレ頃しも今はのどかなる心の池のいひがたき春の氣色もさまざまに。上歌春の田を。人に任せてわれは唯。人に任せてわれは唯。花に心の憧るる。盛りにひかれて苗代の水に心の種蒔きて。散ればここもや櫻田の。雪をもかへす、氣色かな雪をもかへす氣色かな

「雪をもかへす」と謠ひながら入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。

【三】

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる翁に尋ぬべき事あり。おことの風情を見るに。小田をかへしながら水口に

芝翁 この日本の國は諸册二神の神代から人代の今日に至るまで、山河草木一切萬物皆神の惠みを受けて、五穀も豐かなので、國中隅から隅まで、皆樂しい生活をしてゐることだ。
今は丁度春の盛りで、氣持ののんびりした、何ともいひやうのない景色の美しい時だ。それで、人は「春の田を耕すことは人に任せて置いて、自分は花の盛りにあこがれる」ともいふが、その花時がまた大切な苗代時だと思つて、田に水を入れながら、風雅な歌人の心持でゐると、折柄花が散つて來て、こゝも櫻田のやうだ。そして、この田を耕すと、落花の爲に雪を鋤きかへすやうな感じがすることだ。

ミ神田を耕す態。

【三】

ワキ朝臣はシテ芝翁の來たのを見て、

朝臣「もうし、おぢいさんに一寸伺ひますが、あなたの御樣子を見てゐると、田を耕すのに、水口に御幣を立てゝ、大屏御

といふ。
○雪をもかへす　田に櫻花の散つた樣は雪のやうで、その田を掛すのは、雪を鋤き返す風情であるとの意。

【三】

○おこと　ことば。
○風情　風雅な姿。
○水口　田に水を引入れる入口。
○幣帛　御幣。
○神田　神に供へる米を作る田。
○五十串　櫛串で、淨めた串の意。串に幣を挾む竹。即ち神前又は神田に立てる淨めた御幣の意であるが、これに五十串の借字を充てる爲、附會說が行はれるやうになつたのである。
○谷水をせく　水口に五十串立て　苗代小田の種蒔きにけり　この歌の出所未詳。
○二の宮　淡路國三原郡幡多山の大國魂神社をいふ。本來一カ宮・二の宮はいふ。の社格の次第を以て稱へたもので、淡路の一社一宮は津名郡の伊佐奈岐神社で現に官幣大社である。本曲はこの一の宮を主題とすべきであるのに、殊更二の宮を擇んだのは、伊弉諾・伊弉册二神を祀る故に二宮と稱へるものと解して、それに脚色の興味を持つたのであらう

幣帛を立て。誠に信心の氣色なり。いかさまこれは御神田にて候か

シテ　さん候春の田を作らんとては。よろづ祝ふ事の候程に。あの水口に五十串とて五十の幣帛を立て。神を祭り候。然ればある歌に。谷水をせく水口に五十串立て。苗代小田の種蒔きにけり。その上この御田は。當社二の宮の御供田にて御座候程に。殊には內外淸淨にて御田を作り候よ

ワキ　「さては當社二の宮にてましまさば。國の一の宮はいづくにてましますぞや。もし讓葉の權現にて御座候やらん

シテ　畏れながら惡しく御心得候ものかな。當社は二の宮にてましませばとて。國中一二の次第にあらず

信心の樣子だが、成程この田は御神田たのでですか

老翁　さうです、春田を作る時には、何かにつけてお祝ひをするものですから、あの水口に五十串と申して、御幣を五十立てゝ神をお祭りするのです。それで、淨にも

【谷水をせく水口に五十串立て、苗代小田の種まきにけり】

（谷川の水をせき入れる水口に五十串の御幣を立て、苗代田の種を蒔いた）

といふのがあります。殊にこの御田はこの社二の宮へお供へする米を作る田ですから、特に心身を淨めて御神田を作るのです

朝臣　すると、この御社が二の宮であらせられると、一の宮はどちらですか。もしや讓葉權現か一の宮なのですか

老翁　失禮なからそれはお考へ違ひです。この御社が二の宮だからとて、それは國の神社の社格の一二を申すのではありません

○御供田―御神田と同義。
○内外清淨―内は六根、外は六塵。心身を清めての意。
○讃葉の權現―三原郡讃葉山にある、熊野山十二所明神を勸進した社。本曲作者は二宮を中心としてゐるので、殊更眞の一宮を避けて讃葉權現を擧げたのであらう。
○神は一きう―一きうは一宮か、或は一体を一体と見誤つて落ひ傳へたものか。
○誓ひ―神佛が衆生を利益し給ふ誓約。
○伊弉諾と書いては―陽を生長の象徴とし、陰を收穫の象徴とし、これを夫婦神に配合した附會説である。

ツレ『御覽候へ當社の神達。二柱の社の御殿なれば

シテ「二つの宮居をそのままにて。二の宮と崇め奉るなり

シテ『ツレ『これは卽ち伊弉諾伊弉册の尊の二柱の。神代のままに宮居し給ふ。淡路の國の。神は一きう宮居は二つの。二の宮と崇め申すなり

ワキ『よくよく聞けばありがたや。さてさてかかる國土の種を。普く受くる御恩德。唯この神の誓ひよなう

シテ「ことあたらしき御諚かな。國土世界や萬物の。出生あまねき御神德。ただこれ當社の誓ひなり

ツレ『然れば開けし天地の。伊弉諾と書いては

シテ「種蒔くと讀み

里「御覽なさい、この御社の神は、二柱の神であらせられますから……」

老翁「それで、二柱の神といふ意味で、二の宮と申上げるのです。卽ち伊弉諾・伊弉册の二柱の神が神代そのまゝ淡路の國に鎭座遊ばされましたので、御夫婦御一所に二柱の神をお祀りしてあるので、二の宮と申上げるのです」

朝臣「承れば誠にありがたい御神德です。さうすると、この日本國土がすべて豐かなのは、全くこの神の御利益によるのですね」

老翁「事新しく仰しやるまでもないことです。この日本國土萬物の生まれ出たのも全くこの神の御利益によるのです」

老翁「男も聲を合せて『それで、天地開闢の御夫婦のうち、伊弉諾尊は萬物生長の種を蒔くといふ御意味であり、伊弉册尊はそ

古今榮雅抄に「伊弉諾と書いて種を蒔くと讀み……伊弉冊と書いて種を收むと讀めり」と記して居る。この書は寛正頃の作であるから本曲以前の制作ではないが、恐らく當時この種の說が廣く行はれてゐたのであらう。

○目前の御誓ひ—神の御誓約が目前に現れてゐるとの意。

○うららー—のどか。

○天より下れる種—稻穗は天照大御神が始めてお作りになつたものであるから、かくいふ。(この事日本書紀に見ゆ)

○富草—稻の異名。

○村早稻—群つて生える早稻。

【四】

○深祕—深い祕事。尊い謂れ。

○天地開闢の昔—日本書紀卷一に「古天地未レ剖、陰陽

ツレ『伊弉冊と書いては
シテ「種を收む
ツレ『これ目前の御誓ひなり
シテ『その上神代は遠からず
ツレ『今目の前にも
シテ『御覽ぜよ
地上歌『種を蒔き。種を收めて苗代の。種を收めて苗代の。水うららにて春雨の。天より降れる種蒔きて。國土も豐かに千里榮うる富草の村早稻の秋になるならば。種を收めん神德あらありがたの誓ひやなありがたの神の誓ひやな

「種を收めて苗代の」にツレ地謠座前へ行きて下に居り、ワキも下に居る。

【四】

ワキ「猶々當社の神祕懇に御物語り候へ

シテ、舞臺の眞中に行きて坐し、

地クリ「それ天地開闢の昔より。渾沌未分漸く分

の種の收穫を收めるといふ御意味なのです。しかも、これは神代の昔語ばかりではなく現在お示しになつていらつしやる御利益なのです。この目の前の事實を御覽なさい」(と御神田を指し)

老翁「このやうに種を蒔けば、やがて種を收める時が來るのでして、のどかな春の今日此頃、天照大神御創めの稻種を苗代田に蒔けば、しと〳〵と降る春雨に育てられて、日本國中何處も此處も立派に生ひ繁つて、稻穗が十分に實のり、秋には豐かに收穫することが出來るのです。實にありがたい御神德・御誓約です」

【四】

輔臣「どうかもつと委しく、この御社の御神德をお聞かせ下さい」

老翁「それでは、この天地の出來た初まり

不レ分、渾沌如二雞子一、溟涬而含レ牙。及下其清陽者薄靡而爲レ天、重濁者淹滯而爲レ地」とあるが、本曲は神皇正統記巻一の文に據つたのであらう。

○渾沌―圓きと訓ず。
○五行の神―神皇正統記の所說で、委しくは解說に擧ぐ。
○木火土の精―五行說では土は陰性であるが、こゝには陽神に入れた。
○未だ世界ともならざりし前―二神に附會した俗說。先進文藝にその出所は見當らない。
○おのころ島―磯馭盧島と書く。諸册二神が天瓊矛を以て海をお探りになつた時、海水の雫が凝つて島となつた、日本最初の島。その所在に就て諸說あるが、本曲はその地を淡路と解した。
○一島―同じ島。
○大八洲―日本國をいふ。その八つの國々は古事記・日本書紀多少の異同がある
○紀の國伊勢志摩日向―この國々も二神の所產であるが、記紀ともにその名を特記してはゐない。
○四つの海岸―四方の海。
○日神月神蛭子素盞嗚―日

れて。淸く明らかなるは天となり。重く濁れるは。地となれり

シテサシ『然れば天に五行の神ましまします。木火土金水これなり

地『既に陰陽相分れて。木火土の精伊弉諾となり。金水の精凝り固まつて伊弉册と顯る

シテ『然れども未だ世界ともならざりし前を伊弉諾といひ

地『國土治まり萬物出生する所を伊弉册と申す。卽ちこの淡路の國を。始めとせり

（居クセ）

地クセ『さればにや二柱の御神の。おのころ島と申すもこの一島の事かとよ。凡そこの島始めて。大八洲の國を作り。紀の國伊勢志摩日向並に。四つの海岸を作り出だし。日神月神蛭子素盞嗚と申すは。地神五代の始めにて。皆この島に御出

から申せば、この世界ももとは丸くて分れ目もなかつたのですが、次第に分れて淸く明らかなものは天となり、重く濁つたものは地となつたのです。さてその天には五行の神がお生まれになりました。木火土金水の神が卽ちそれであります。それから陰陽に分れて、木火土の精が伊弉諾神となり、金水の精が凝り固つて伊弉册神とおなりになつたのです。しかし、この二神については、未だ世界ともならなかつた以前を伊弉諾といひ、國土の治まり萬物の出生するのを伊弉册とも申します。そしてその萬物出生の第一に出來たのが淡路の國です。

それで、かの諸册二神が天浮橋に立つてお探りになつた時に出來た磯馭盧島といふのも、この淡路と同じ島だとかいふことです。かうして、二神は淡路島を始め大八洲の國をお作りになり、また紀國・伊勢・志摩・日向及び四方の海をお作りになり、次で天照大神・月讀尊・蛭子・素盞嗚尊をお生みになつた、これが地神五代の始めで、いづれもこの島に御出現になつた

神は天照大神、月神は月讀尊。神皇正統記に「伊弉諾・伊弉册尊相計らひて、天下の主を生まざらむやとて、まづ日神を生み、次に月神、次に蛭子、次に素盞嗚尊を生み給ふといへり」

○地神五代―天照大神、天忍穗耳尊、瓊々杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊を申す。五代の始は天照大神であるが、月讀尊以下三神も同時代の神として、併せて五代の始に擧げた。

○皇孫―瓊々杵尊。天照大神の御孫で、神より三種の神器を賜はり、日本を治めん爲に、日向國高千穗峯に降臨遊ばされた。

○火火出見の皇子―〔玉井〕參照。

○八十三萬―神皇正統記に地神五代の事を記して「すべて天下を治め給ふ事八十三萬六千四十三年といへり」

○御代をゆづり葉の―御代を讓るを讓葉權現にいひかけた。

【五】

○秋津洲―日本國土の狀が蜻蛉に似てゐるとてつけられた日本の異名。(神武紀三十一年の條に見ゆ)普通には「あきつしま」と讀むが、

現。中にも皇孫は。日向の國に。天降り給ひて。地神第四の火火出見の。皇子を御出生げにありがたき代々とかや

シテ『天下を保ち給ふ事

地『すべて。八十三萬。六千八百餘歲なり。かかるめでたき皇子達に。御代を讓葉の權現と。現れおはします。伊弉諾伊弉册の神代も唯今の、國土なるべし

【五】

地ロンギ『げに神の代の道すぐに。げに神の代の道すぐに。今も妙なる秋津洲の君の御影ぞありがたき

シテ『御影ぞと。夕日がくれの雲の端に。たなびく天の浮橋の。いにしへを現して。御客人を慰めん

地『そも浮橋の古と。聞くは如何なる言の葉の

のですが、殊に皇孫瓊々杵尊は日向國に御降臨遊ばされ、地神第四の彦火々出見尊をお生みになつたのです。そしてこの地神五代の御治世は實に八十三萬六千八百餘年で、それ以來また、御代々聖明な皇子に御代を御讓り遊ばすので、唯今も伊弉諾・伊弉册の神代そのまゝに傳つた國土なのです」

【五】

侍臣「お話の通り、神代そのまゝに傳つて現在も皇統を御繼ぎ遊ばした天子の深い御惠みに浴してゐることは、實にありがたいことです」

老翁「さういへば、夕日がかげつて來ました。これから、天浮橋の神代の樣を見せて、珍客をお慰めしませう」

侍臣「して、天浮橋の神代の樣と仰しやるのは、それはどういふ意味なのです」

謠曲では「あきつす」と謠ひ慣はしてゐる。
○夕日がくれ—御影の緣語また「御影ぞといふ」にいひかけた。
○天の浮橋—諸册二神が國土神生の爲、高天原より降臨の際お立ちになつた橋。
○御客人—ワキの當今臣下を指す。
○烏羽玉のわが黑髮も亂れずに—當社の御神詠としていひ傳へたものであらう。神祇百首和歌、鳥武見尊が妹下照姬に贈られた歌に「烏羽玉のわが黑髮も亂れぬに結び定めよ小夜の手枕」
○歌の種蒔きし神—諸册二神。二神の仰せになつた「あなにやしえをとめを」「あなにやしえをとこを」を、我國最初の歌謠とする。
○今は白波の—今は知らずといひかけ、波の泡を淡路といひかけた。
○天の戸—天。

【間】

シテ『その神歌は烏羽玉の。わが黑髮も地『亂れずに。結び定めよ小夜の手枕の歌の種蒔きし。神とも今は白波の。淡路山を浮橋にて天の。戸を渡り失せにけり天の戸を渡り失せにけり

シテ「結び定めよ小夜の手枕の」に立ち、常座へ行き、謠終りて中入。ツレも續いて入る。

【間】

ワキ(ワキヅレに)「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「所の者を呼びて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候。(仕手柱際へ出で)所の人の渡り候か

狂言所の者、着附縞髮斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來つて給はり候へ

狂言「心得申して候

二人とも舞臺に入り下に居て、

ワキヅレ「所の者を召して參りて候

狂言「所の者御前に候

老翁『はあは、その事ですか。神の御歌にも——

『烏羽玉のわが黑髮も亂れずに、結び定めよ小夜の手枕』

とお詠みになつたでせう。私はその歌の主の伊弉諾の……」

と、はつきりわが名はいはないで、淡路山を天浮橋として、天に上つてしまはれた。

ワキヅレはもとの座に坐る。

ワキ「是は當今に仕へ奉る臣下なるが。この所始めて一見の事にて候。この所に於て。二の宮の御事につき神祕さま〳〵あるべし。語つて聞かされ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等もこの所には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「さる程に當社二の宮と申すは。忝くも伊弉諾伊弉冊の尊二柱の神代より。その儘宮居し給ひ。今に至るまで靈驗あらたに御座候。然るに伊弉諾の尊天の浮橋の上より御鉾を振りさげ給ひし。その露の滴り凝り固つて一島となる。これ卽ち淡路島と名づけ。それより大八洲の國を作り。餘の國々をも作り給ふ。扨又月神蛭子素盞嗚尊と申すも。地神五代の始めとやらん承り候。又伊弉諾伊弉冊の始めを尋ね奉るに。天に五行の神ましまします。これ卽ち木火土金水なり。木火土の性伊弉諾となり給へり。金水伊弉冊と現じ給ふ。卽ち陰陽の神萬物出生。國土弘まり民榮え。めでたき御代の始めなり。又是なる御田は。當社二の宮の御神供田にて御座候間。田水は豐かに候へども。祭事としてせく所には五十串を立て。水口には幣帛を立て。神主を請じめでたき神拜の御座候。春の御田とはこの苗代の事にて候。さやうの事を御歌に。たに水をせく水口に五十串を立て。苗代小田の種蒔きにけりと。かやうに御歌も御座候。惣じて神祕樣々御座あるとは申せども。委しき事は存ぜず候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて候が。唯今の御尋ね不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。方々以前に老人夫婦來られ候程に。卽ち言葉をかはして候へば。二の宮の御事。唯今の如く懇に語り。天の浮橋の古を現し慰めんといひもあへず。かき消すやうに姿を見失うて候よ

◎老人夫婦―現行曲の前ツレは男で、夫婦でないが、こゝには原本に從つて記した。

狂言「是は奇特なる事を承り候。扨は二柱の神かりに現れ給ふと存じ候。暫くこの所に御逗留あつて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「愈々信心を致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はゞ重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

○あらたーあらたか。

【七】

○わたづみの挿頭に挿せる―古今集讀人不知の歌「わたつみのかざしにさせる白妙の、波もてゆへる淡路島山」を引いた。「わたづみ―はこゝには海神の意。「かざし」は頭の飾。

【六】

ワキ上歌（待謠）げに今とても神の代の。げに今とても神の代の。御末はあらたなりけりと。いへば虚空に夜神樂の。月に聞えて光さす。氣色ぞあらたなりけるや氣色ぞ、あらたなりける

【七】

出端の囃子にて、後ジテ伊弉諾神、面天神・黒垂・透冠・鉢卷・着附厚板・袷狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテ『わたづみの挿頭に挿せる白玉の。波もて結へる淡路島。月春の夜ものどかなる。緑の空も澄み渡る。天の浮橋の上にして。八洲の國を求め得し。伊弉諾の神とはわが事なり。（舞がかりに

【六】後段

朝臣「ほんとに今も昔に變らない、神代そのまゝな、あらたかなありがたい事だ。……おゝ、さういつて居ると、月の夜、空に神樂の妙なる聲が聞え、光がさし出た。實にあらたかな氣色だ」

【七】後ジテ伊弉諾神、月夜に影向せられた態で登場。

諸神「海神の頭に挿した白玉とでもいはうか、淡路島のあたりの波景色はいかにも面白い」

さあたりの景色を眺める態をして、

諸神「丁度この景色のやうに、のどかな春の月夜、空も鏡に澄み渡つた時、天浮橋に立つて大八洲國を求めた伊弉諾神といふのは、自分のことだ」

○國常立の―治まる國の常に搖ぐことのない意を國常立尊にいひかけた。國常立尊は書紀によれば、天地開闢の最初にお生まれになつた神。（神皇正統記の所說も同じ）

○七つ五つの神の代―天神七代・地神五代をいふ。天神七代とは國常立尊と前揭「五行の神」に相當する神々及び諸册二神とを申す。

○和光守護神―和光は和光同塵の略で、佛が光を和らげて俗界に交はり衆生を濟ふ事。こゝでは、神が德光を和らげて人界に交はり、國土を守護し給ふ意。

○扶桑―日本の異名。

【八】

（治まるや。國常立の始めより地）七つ五つの神の代の

シテ『御末は今に。君の代より

地『和光守護神の扶桑の御國に。風は吹けども山は動ぜず

〔神舞〕

を舞ひて常座に立つ。ワキシテに向ひ、

【八】

地ロンギ『げにありがたき御誓ひ。げにありがたき御誓ひ。抑も天の浮橋の。その御出所はさるにても。如何なる所なるらん

シテ次の謠に合はせて仕科。

シテ『ふり下げし。鉾の滴り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし此處ぞ浮橋の下ならん

地『げにこの島の有樣東西は海漫々として

シテ『南北に雲峯をつらね

○淡路よ―感動詞の「あは」を淡路といひかけた。幸若舞曲「日本記」に、諸册二神が「あは地よ」（おゝ土地が出來た）と仰せられて、淡路と名づけられたのであるといふ。

○海漫々―海の廣々とした貌。

○雲峯―峯を「ふう」と謠ふのは、謠曲の癖である。

諸神「わが日本國は常に搖ぎなく治まつて國常立尊の始めから天神七代地神五代を經て、皇統を御繼承遊ばした今の大御代に至るまで、神の守護を受けて、いかに風は吹かうとも山の動くことはなく、天下は實に泰平なのだ」

〔神舞〕

諸神悦びの餘り舞を舞はれる型。

【八】

朝臣「ほんとにありかたい神の御利益でございます。それにしても、天浮橋とは何處を申すのでございませう」

諸神自分の振下げた鉾についた海水の雫が凝り固つて一つの島となつたので、喜んで『あゝ地が出來た』といつたのが、この淡路島なのだから、此處が丁度天浮橋の下であらう」

朝臣「いかにも、この島の狀を見ますと、東西は海が廣々としてゐまして……」

諸神南北には高い山が連つてゐる、その

○さすは御鉾の―舞のさす手は天瓊矛をとつた手振りであるとの意。
○手風―鉾を振る手から生ずる風。
○引くは―舞の引く手を、引潮といひかけた。
○時つ風―潮の滿ち引く時に吹く、時の定まつた風。
○蘆原の國―日本の異名。
○國を國富みにいひ續けた。
○萬歲―萬歲樂。めでたい樂。
○千秋―萬歲樂をうけて千秋樂を出し年久しい意に續けて、千秋の秋津洲といつた。

地『宮殿にかかる浮橋を
シテ『立ち渡り舞ふ雲の袖
地『さすは御鉾の手風なり引くは。潮の時つ風治まるは波の蘆原の。國富み民も豐かに萬歲をうたふ松の聲。千秋の秋津洲。治まる國ぞ久しき
治まる國ぞ久しき

と舞ひ納めて留拍子を踏む。

山の上に宮殿があつて、天浮橋はこゝにかゝつてゐたのだ。
今かうして天降つて舞を舞ふのだが、この舞のさす手はあの天瓊矛を振り下げた手振りなのだ。この舞のひく手は潮の引くのにも似てゐよう。かうして萬歲樂を謠ひ千秋樂を舞ふにつけても、波風は靜かに、國は富み民は豐かで、わが國は幾久しく榮えて行くのだ」

と國土を讃美して舞ひ納め退場。

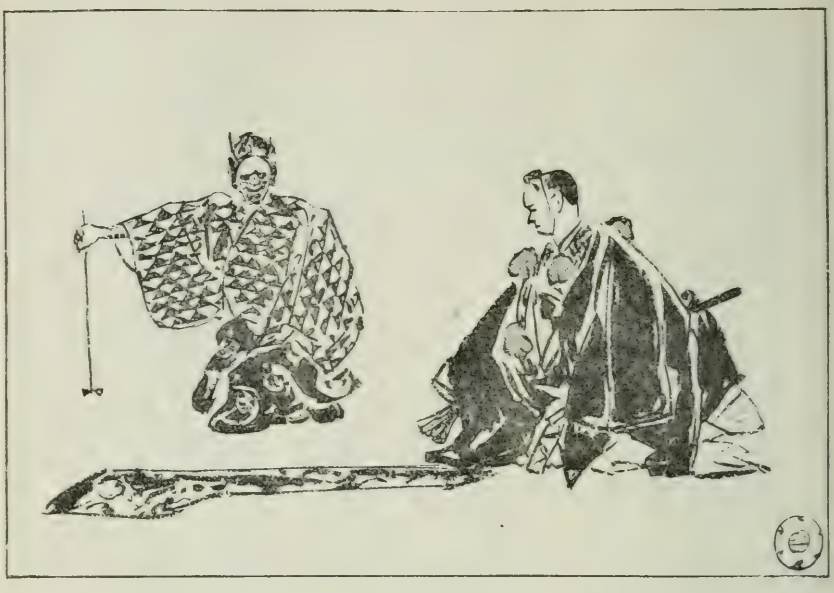
〔考異〕

諸流（觀春剛）

【二】シテサシ「山河草木……皆樂める時とかや（春・剛殊更にこゝは所も淡路潟。御國始めの神代より。受け繼ぐ民も豐かなる。天の村早稻種まきて。萬歲の秋を。待つとかや）

附

金春禪竹の五音三曲集に【四】クセ「さればにや」から、クセ上「唯今の國土なるべし」までを擧げてゐるが、現行曲に比べて、「天降り給ひて」のてがつつとある外變りない。



葵上（あふひうへ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目　複式劇能

【人物】 **ツレ**　照日の神子、**ワキツレ**　朱雀院臣下、
前シテ　上臈姿をした六條御息所の生靈、
狂言　左大臣の從臣、**ワキ**　横川小聖、
後シテ　鬼面を現した六條御息所の生靈

【所】 京都　左大臣邸

【時】 朱雀院御宇（假作）（無季）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに金春禪竹の作としてゐるが、夙く應永三十年世阿彌の能作書に、

或は六條御息所の葵上につき祟り、夕顏の上のもののけにとられ、浮舟の憑きものなどとて、見風のたよりある幽花種あひ難き風得也。

とあるから、既に世阿彌時代に作られたものでなからうか。栗田口猿樂記に永正二年四月十六日の勸進能に演じたことが見え、言繼卿記文祿四年四月三日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗概】　光源氏の北方である左大臣の女葵上が物怪に惱まされるので、照日の神子にその本性を現させると、六條御息所が現れ出で、源氏の愛を失つた恨みを述べて、葵上を引連れて行かうとする。それで左大臣邸では更に横川小聖を請じて加持させると、御息所の生靈は鬼面となつて現れ出て、葵上をとり殺さうとしたが、小聖に祈られて、心を和らげ成佛した。

【出典】　これは源氏物語殊に葵の卷に據つたもので、同書に據れば、本曲のシテ六條御息所は十六の年前東宮の妃となられ、二十の年に東宮に後れられ(榊卷)、三十の時源氏君と契りを結ばれたが(夕顏卷)、やがて源氏の愛が衰へたので、嫉妬の餘り生靈となつて、方々を惱まされたのであつた。殊に源氏の北方葵上に對しては、賀茂齋院の御禊の日(本曲では賀茂祭の日としてゐる)に、車の立所についてその下人から痛く侮辱せられたので、御息所の怨恨は殊に烈しかつたのであつた。本曲は卽ちこの怨靈を主題としたものであつて葵の卷にその狀を描いて、

　俄かに(葵上御產の)御氣色ありて惱み給へば、いとゞしき御祈りの數を盡してせさせ給へれど、例のしうねき御物怪一つ更に動かず。やむごとなき驗者とも、めづらかなりともて惱む。さすがにいみじう調せられて、心苦しげに泣きわびて、少しゆるび給へや、大將(源氏)に聞ゆべきことあり」とのたまふ。さればよ、あるやうあらむとて、(源氏を葵上の)近き御几帳のもとに入れ奉りたり……(葵上)「……かく參り來むとも更に思はぬを、もの思ふ人の魂は、實にあくがるゝものになむありける」となつかしげに……のたまふ離けはひ、その人にあらずかはり給へり。いと怪しと思しめぐらすに、たゞかの御息所なりけり。

とあるに據つたのである。

【概評】　本曲のやうな材料を、世阿彌が「見風のたよりある幽花種」と激奬してゐるのは、その主人公が貴婦人としての優雅と、怨靈としての凄慘と、明暗二面を持つてゐることが、貴族的典雅と武士的野趣の交錯した室町時代の風尙に適つてゐるからであらう。それで本曲の作者はまづ前段に照日の神子の日寄せを案出して、優雅な上臈姿の六條御息所を登場せしめたのである。尤もその御息所は旣に悲戀失意に歎いてゐるのであるが、未だ怨念はさほど强くはなくて、「わが思ひせめてや暫し慰むと」思つて現れ出て、「牛もなき車の轅にとりつき、さめ〴〵と泣く」のである。それは哀愁に閉された末期貴族の表象とも見るべきもので、觀客の涙をそゝるに十分であるが、やがて怨恨は次第に深くなつて來て、「あら恨めしや、今は打たでは叶ひ候まじ」といひ、「破れ車うち乘せ隱れ行かう」とする。情は失はれて意のみ烈しく動いて行くのである。かくして後段では、横川小聖と怖しい爭鬪を起すのであつて、その姿はもとより上臈で

にない、鬼面である。武士的野趣は高調に達するのである。當時の觀客はその樣を見て、嫉妬の醜さを覺るよりも、或は却つてその凄慘に一種の痛快を覺えたかも知れない。とはいへ、その痛快は一時的のものであつて、惡鬼は人の欲する所でない。謠曲作者の教へようとする所は、嫉妬の愼みにあつたのはいふまでもない。しかも、その結末に對する謠曲作者の態度は、貴族に對する場合と、平民に對する場合と、著しい相違があつて、同じ嫉妬を主題とした〔鐵輪〕では、その女主人公が平民であるが故に、最後まで「目に見えぬ鬼」として殘るのであるが、これは「心を和らげ」「菩薩もこゝに來迎して」「成佛得脫の身」となつたといつてゐるのである。——六條御息所をシテとした曲に、本曲の外に〔野宮〕がある。それは本曲よりも遙かに優雅な曲に作つてゐる。

【一】

○朱雀院—源氏物語假作の帝の御名。桐壺帝の御子で光源氏の御兄。以下の人物すべて物語の假作。

○左大臣—光源氏元服の時加冠の役をした人。

○葵上—左大臣宮腹の女で源氏元服の後、帝の思召により、源氏の北方となつた。

○物の氣—死靈・生靈など、人に憑いて祟りをなすもの

○貴僧高僧—身分の高い僧や行德の高い僧。

○大法祕法—心根を凝らした樣々の祈禱。

○照日の神子—これは源氏物語には見えない、謠曲作者の假作人物である。

○梓の上手—神子は梓弓の弦を鳴らし、呪文を唱へて死靈・生靈を呼び寄せるもの。梓の上手とは、その靈

【一】

後見、縫箔の小袖を正面先に置く。葵上が病床に臥せる態。

ツレ神子、面連面・壹・壹帶・襟淺黃・着附摺箔・唐織・白水衣・木綿襷・數珠の裝束にて出で、脇座に下に居る。

ワキヅレ朱雀院臣下、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で名乘座に立ち、

ワキヅレ『これは朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女。葵上の御物の氣。以ての外に御座候程に。貴僧高僧を請じ申され。大法祕法醫療樣々の御事にて候へども。更にその驗なし。ここに照日の神子とて隱れなき梓の上手の候を召して。生靈死靈の間を。梓にかけさせ申せとの御事にて候程に。この由申しつけばやと存

【一】

第一段

舞臺は葵上の實家左大臣邸で、葵上が病床に臥してゐる態。まづツレ神子が登場して控へて居る。次でワキヅレ朱雀院の朝臣が登場して、

朝臣「私は朱雀院にお仕へしてゐる臣下です。さて、左大臣の御息女葵上に憑き物が憑いて、ひどくお苦しみになるので、立派な僧を多勢お招きになつて、色々御祈禱や御醫療をお盡しになりますが、少しも效驗がありません。ところが、こゝに照日の神子といつて、有名な怨靈呼び寄せの上手な梓巫女が居るので、それを呼び出して、この祟りをする憑き物が生靈であるか死靈であるか、梓にかけて占はせよとの仰せであります。この事を神

を呼び寄せることが上手。○生靈死靈の間―巣りをなすものが、生靈であるか死靈であるか、その區別。○天清淨地清淨―以下―六根清淨―まで、神子が口寄せの始めに唱へる淨めの詞。六根は眼・耳・鼻・舌・心・意の六つをいふ。○寄り人は今ぞ寄りくる―怨靈を呼び寄せる歌。拾葉抄に「先代舊事詠歌本紀に云ふ、御託の歌に寄神者今底寄今來長濱于蘆毛駒于手綱搖懸」と記す。寄り人は神子が招き寄せる靈をいふ。

【二】

○三つの車―羊車・鹿車・牛車の三。これは法華經譬喩品に、或長者の家に火事が起つた時長者は子供達に早く逃げよといつたが、子供は遊びに耽つて出ようともしなかつたので、方便に羊鹿牛の三車が外にあるからそれに乘れといふと、子供は喜んでこの火宅を出たといふ喩へで、人世を火宅に、佛教を車に喩へて、佛が方便を以て衆生を救ふ事をいつたのである。法は車に乘るといひかけたもの。○火宅―苦しみの多い三界の喩。前項の譬喩による。

じ候

ツレに向ひ、

ワキツレ「やがて梓に御かけ候へ

といひて地謠座前に行き下に居る。

ノットの囃子にて、ツレその場にて、

ツレ『天清淨地清淨。內外清淨六根清淨。寄り人は今ぞ寄りくる長濱の。蘆毛の駒に。手綱ゆりかけ

【三】

一聲の囃子にて、シテ六條御息所の靈、面泥眼・襟白・長臺・臺帶・着附鱗箔・縫箔腰卷・唐織壺折・腰帶・扇の裝束にて橋懸に出で、一の松に立ち、

シテ一聲『三つの車に法の道。火宅の門をや。出でぬらん

シテ二句『夕顏の。宿の破れ車。やる方なきこそ。悲しけれ（としをり）

舞臺に入り常座に立ち、囃子座の方に向き、

シテ次第『憂き世は牛の小車の。憂き世は牛の小車

子に申付けようと思ひます」

と見物人に事件の概略を述べて、さて神子に向ひ

朝臣「すぐ梓にかけて占つて下さい」

ツレ神子、葵上の病床に向つて、

神子「――

『天清淨地清淨、內外清淨六根清淨』

（すべての穢れを祓て、清め給へ）

『寄り人は今ぞ寄りくる長濱の、蘆毛の駒に手綱ゆりかけ』

（蘆毛の馬に乘つて駆けつけるやうにして、憑き物はすぐこゝへ來るであらう）と憑き物呼び寄せの祈りをする。

【三】

シテ六條御息所の生靈、神子に呼び寄せられた態で、上蘆姿で登場。

御息所「外の人達はみな佛法の方便に敎へられて、生死の世界から免れ出ることであらうが、私は、源氏君があの憎らしい夕顏の宿をお訪ねになつてよりこの方、心は亂れ破れて、慰める術もないのが悲しい。

この浮世は車の廻るやうに、因果應報、前世の報いを受けて行くもので。色々廻り廻つても結局六道四生の苦界を離れる

○夕顔の宿の破れ車―源氏が夕顔上と契りを結んで以來、自分の心は破れ亂れたといふ意を「三つの車」の緣で、破れ車に喩へたのである。夕顔のこと〔半蔀〕〔夕顔〕に作らる。

○やる方なき―慰める術もない。「やる」は車をやる（進める意）にいひかけたもので、爲氏の禪林寺殿七百首「思ひやる方のなきこそ悲しけれ破れ車のかゝるわが身は」を借りて綴つたのである。

○憂き世は牛の小車―浮世は憂しを牛にいひかけ、車の緣で廻るといつた。憂き事の廻つてくるのは、因果應報であらうとの意。

○輪廻―衆生が成佛出來ないで、六道を經廻ることを車輪の廻るに喩へた詞。

○六趣―衆生が輪廻して行く、天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道。

○四生―すべての生類。佛敎で生類を大別して、人間の如き胎生、鳥類の如き卵生、蚯蚓の如き濕生、天衆の如き化生の四とす。

○芭蕉泡沫の世―人生の果敢ない喩。維摩經に「是身如レ泡、不レ得二久立一、是身如二芭蕉一、中無レ有レ堅」

の廻るや、報いなるらん

地取に正面に向き、

シテサシ　凡そ輪廻は車の輪の如く。六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ。昨日の花は今日の夢と。驚かぬこそおろかなれ。身の憂きに人の恨みの猶添ひて。忘れもやらぬわが思ひ。せめてや暫し慰むと。梓の弓に怨靈の。これまで現れ出でたるなり

シテ下歌　あらはづかしや今とても忍び車のわが姿。

上歌　月をばながめあかすとも。月をばながめあかすとも月には見えじかげろふの。梓の弓の末筈に立ち寄り憂きを語らん立ち寄り憂きを語らん

シテ　梓の弓の音はいづくぞ。梓の弓の。音はいづくぞ

ことが出來ない。殊に人間の果敢ないことは、芭蕉の葉か水の泡のやうなもので昨日の花も今日は夢と散つてしまふ。それに氣がつかないとは、考へて見れば餘りに迂濶なことだ。とはいひながら、私は自身自身の運命がつらい上に、人の無情な恨みまで加はつて、辛い思ひを忘れる時がないのであるが、せめて暫くでも慰むことが出來ようかと、梓の弓にひかれて、怨靈となつて、こゝまで現れて來ました。

しかし思へば恥かしいこの姿。以前の車爭ひの時と同じ姿ではあるが、自分では月を眺めても、自分の姿は月にも人にも見られない、陽炎のやうな怨靈であるから、構ひはしない。弓の末筈に立ち寄つて、自分の辛い思ひを語りませう」

と獨言をいつて、

御息所「梓の弓の音のするのは、どこであらう」

と次第に病床へ近づいて來る。

○昨日の花は今日の夢—白氏文集十九の「昨日榮華今日衰、轉似二秋蓬一無二定處一、長二於春夢一幾多時」を引いた。
○人の恨み—人を怨む心。
○今とても忍び車—賀茂祭の見物に、自分が忍びやかに車に乘つて出た折、同じ見物に來た葵上の下人に辱しめられたが、今も亦忍車の姿で出て來たとの意。車の緣で「輪が奏と續けた。
○月をば眺めあかすとも—引歌があらうと思ふが見當らない。
○弓の末筈—弓の古を末筈にいひかけた。末筈は弓の絃をかけた上部をいふ。

【三】
ツレ『東屋の母屋の妻戸に。ゐたれども
シテ『姿なければ。訪ふ人もなし(しをる)

ツレ、シテに向ひ、

ツレ『不思議やな誰とも見えぬ上蔦の。破れ車に召されたるに。青女房と思しき人の。牛もなき車の轅にとりつき。さめざめと泣き給ふ痛はしさよ。(ワキヅレに向ひ)「もしかやうの人にてもや候らん

ワキヅレ「大方は推量申して候。(シテに向ひ)唯つつまず名を御名のり候へ

シテ『それ娑婆電光の境には。恨むべき人もなく。悲しむべき身もあらざるにいつさてうかれそめつらん

と謠ひながら大小前へ行き、下に居てツレに向ひ、

シテ『唯今梓の弓の音に。引かれてあらはれ出で

○東屋の母屋の—これも引歌であらうと思ふが、見當らない。「東屋の」は母屋の序。「催馬樂に「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ」とある。妻戸は左右に開く戸。
○不思議やな—この一節は神子の目に賀茂祭の車爭ひの光景が映じたのである。
○上蔦—宮中に仕へてゐる身分の高い女。六條御息所を指す。
○青女房—官位のない卑しい女房。

【三】
御息所「私はこのやうに母屋の戸口に立つてゐるのだが、姿が見えないので誰も聲をかけないのだ」

神子、六條御息所生霊の幻影を見て、

神子 おや不思議だ、誰だか分らないが、立派な身分の女の方が破れ車に乘つていらつしやつて、御附らしい女房が牛もつけてゐない車の轅にとりついて、さめざめと泣いて居られる、お氣の毒なことだ(朝臣に向ひ)憑きものは、もしやかういふ方ではございますまいか」

朝臣「それで大體推量がつきました」

怨霊に向ひ、

朝臣 さあ何も隱さずに、あなたの名をお名乘りなさい」

御息所 この世の中は果敢ない、ほんの夢のやうなもので、何も恨むべき人もなく、またわが身を悲しむこともない筈だのに、どうして、うかゝとこゝへやつて來たのであらう」

こゝ謠ひながら前へ出て、

御息所 唯今梓の弓の音に引かれて現れて

○轅―牛車の牛を取りつける長い柄。
○娑婆電光の境―人生の極めて短い喩。寶玉論に「人生在レ世、如二石火電光一」
○六條の御息所―畧傳を解説に掲げた。御息所とは皇子を生み奉つた女御・更衣又は東宮・親王の妃の尊稱。
○世にありし古―前東宮が未だ世におはして、御息所の時めいて居た頃。
○雲上―禁中。
○花の宴―源氏物語の卷の名に寄せた。
○仙洞―上皇・法皇の御所。
○紅葉の秋―源氏物語の卷の名「紅葉賀」に寄せた。
○朝顔の日影待つ間の―堀河太郎百首に「しのめにおきつゝぞ見む朝顔は日影まつ間の程しなければ」
○もの憂き野邊の早蕨の―和漢朗詠集小野篁の詩句に「紫塵爛蕨人拳レ手」とあるので、嫩蕨をもの憂き早蕨といひ、これを萠え出づるの序詞としたのである。
○思ひの露―蕨の緣で露といひ、露の緣で「かかる」と續けた。
○情は人の爲ならず―諺。太平記に屢々用ゐられてゐる。

たるをば。如何なる者とか思しめす。これは六條の御息所の怨靈なり。われ世にありし古は。雲上の花の宴。春の朝の御遊に馴れ。仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み花やかなりし身なれども。衰へぬれば。朝顔の。日影待つ間の。有樣なり。唯いつとなきわが心。もの憂き野邊の早蕨の。萠え出でそめし思ひの露。かかる恨みを晴らさんとて。これまであらはれ出でたるなり

地下歌「思ひ知らずや世の中の情は人のためならず。上歌「われ人のためつらければ。われ人のためつらければ必ず身にも報うなり。何を歎くぞ葛の葉の恨みは更に、盡きすまじ恨みは更に盡きすまじ

【四】

シテ「あら恨めしや（と小袖を見込み）と「今は打たでは叶

葵上に向ひ、

御息所「よく思ひ知つたがよい。世の中の情は人の爲ではない。人に辛く當れば、きつと自分に報うてくるのが當りまへです。今更何も歎くことはなからう。こちらの恨みは決して盡きはしませんぞ」

【四】

御息所　あゝ恨めしい、今はこの憎い女を

○われ人の爲つらければ―新古今集皇嘉門院尾張の歌に―歎かじな思へば人につらかりしこの世ながらの報いなりけり」
○葛の葉の―葛の葉は風に吹かれて裏返り易いものであるから、うらの枕詞とする。

【四】
○うはなり打ち―「うはなり―は後妻。夫が妻を離別して後妻を娶つた時には、前妻の親しい人又は前妻自身が後妻を打擲して、嫉妬の怨みを晴らす風俗があつて、これを「うはなり打」といつた。但しこれは鎌倉以後の風俗であつたらしい。
○後にて苦を見する―神子が御息所を祈り伏せて苦痛を與へる意。
○瞋恚の焰―火の燃えるやうな甚しい怨み。大莊嚴論に『身如二乾薪一、瞋恚如レ火、未レ能レ燒レ他、先自焦レ身』

ひ候まじ

ツレ『あらあさましや六條の。御息所ほどの御身にて。うはなり打ちの御ふるまひ。いかでさる事の候べき。唯思しめし止まり給へ

シテ「いやいかにいふとも。今は打たでは叶ふまじと（立上り）。枕に立ち寄りちやうと打てば

と小袖の側へ行き、居立ちて扇にて小袖を打つ。

ツレ『この上はとて立ち寄りて（と小袖へ向き）。わらは

は後にて苦を見する

この間にシテは仕手柱際へ行き、

シテ『今の恨みはありし報い

ツレ『瞋恚の焰は

シテ『身を焦がす

ツレ『思ひ知らずや

シテ『思ひ知れ

と小袖を見込み、これより謠に合せて仕科、

打たずには置かぬ」

神子「あゝあさましい、六條御息所ともいはれる御身分の方でありながら、後妻打ちを遊ばすといふやうな、そんな事がございますか。是非思ひ止まりなさいませ」

御息所「いや何といつても、今は打たずには置かない」

と葵上の枕許に立寄つて、ちやうと打つ。

神子「この上は是非がございません。私が側へ寄つて、辛い苦しめをお見せしますぞ」

御息所「いや今の恨みは、私に辛く當つた報いだ」

神子「それでもなほお怒りの苦しみが焰のやうに燃えてゐるぢやありませんか」

御息所「そうだ、身を焦がすやうだ」

神子「それその通り、御自分が苦しんでいらつしやるぢやありませんか、よく思ひ知られたがよい」

○人の恨み―御息所の怨み
○憂き音に泣かせ給ふ―葵上がいかに泣かれようとも。
○生きてこの世に―葵上が生きて居られる限りは。
○水暗き澤邊の螢―和漢朗詠集許渾の詩句「蓼葭水暗螢知レ夜」を引き、光る君（源氏）の序とした。
○蓬生の―源氏物語蓬生の巻の歌「尋ねてもわれこそ訪はめ道もなく深き蓬のもとの心を」により「もと」の序に用ゐた。
○もとあらざりし身―源氏と契りを結ばなかつた以前と同じ無關係の身。
○葉末の露―蓬の緣で葉を出した。月清集（藤原良經）の歌に「蓬生の末葉の露の消えかへりたほこの世にと待たむものかは」
○消えもせば―光悅本には「消えもせで」とあり、意味が逆になつてゐる。
○昔語―源氏との契りが再びもとに返らず、過去の夢となつたこと。
○ますかゞみ―思ひは增すといひかけ、鏡にうつる面影とつづけた。
○枕に立てる破れ車―葵上の枕許に幻のやうに立つてゐる六條御息所の破車。

地『恨めしの心やあら恨めしの心や。人の恨みの深くして。憂き音に泣かせ給ふとも。生きてこの世にましまさば。水暗き澤邊の螢の影よりも光る君とぞ契らん

シテ『わらはは蓬生の

地『もとあらざりし身となりて。葉末の露と消えもせば。それさへ殊に恨めしや。夢にだに返らぬものをわが契り。昔語になりぬれば。猶も思ひはます鏡。その面影も恥かしや。枕に立てる破れ車うち乘せ隱れ行かうようち乘せ隱れ行かうよ

「うち乘せ隱れ」と唐織を被ぎ、返句にうつ伏しながら後見座にくつろぎ、【物着】

【五】

ワキヅレ「いかに誰かある

狂言從者、着附段熨斗目・長上下・扇・小刀の裝束にて出で、

狂言「御前に候

御息所　いや、葵上こそ思ひ知るがよい。この怨めしい心を。私のこの深い恨みの爲に、葵上がどんなに苦しみ泣かれようとも、生きて居られる限りは、私の恨みは晴れないのだ。いや葵上は生きて居られる限りは、光源氏君との契りが絶えないだらう。

それに引きかへて、私は昔の他人同樣の身となつて、このまゝ死んでしまつたなら、おゝそれこそなほ恨めしいことだ。いや生きてゐても、私たちの契りは元通りに歸らないのだ。だからなほ思ひが募る。あゝこの姿が恥かしい。さうだ、この破れ車に葵上を載せて、隱れて連れて行つてしまはう」

といつて退場。

【五】

後段

朝臣、狂言の家來を呼び出して、

○うち乘せ—葵上をこの破車に乘せて。

【五】

○横川の小聖—横川は比叡山三塔の一。小聖は高僧の意であらう。葵の卷に、山の座主なにくれとやむごとなき僧ども、したり顔に汗を拭ひつゝ」祈禱したとある。

○一段の事—大變よい。

ワキツレ「葵上の御物の氣。愈以ての外に御座候程に。横川の小聖を請じて來り候へ

狂言「畏つて候。名乘座に出でさても〳〵葵上の御物の氣。一段の事と承り候處に。以ての外なる由仰せ出だされて候。それにつき横川へ參り。小聖を請じて來れとの御事にて候。急いで參らばやと存ずる

橋懸一の松へ出で幕に向ひ、

狂言「いかにこの内へ案内申し候

ワキ横川小聖、兜巾・篠懸・着附厚板・縞水衣・白大口・腰帶・小刀・刺高數珠・扇の裝束にて橋懸三の松へ出で、

ワキ「九識の窓の前。十乘の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ。「三密の月を澄ます所に。案内申さんとは如何なる者ぞ

狂言「大臣よりの御使に參りて候。葵上の御物の氣以ての外に御座候間。急いで御出であつて加持して給はれとの御使にて候

ワキ「この間は別行の子細あつて。何方へも罷り

○九識の窓の前—九識は眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那(思慮)識・阿賴耶(藏)識・菴摩羅(無垢)識で、一切のものを識別する心。これを窓に喩へたのである

○十乘の床—十乘觀法、涅槃に入る十種の法で、觀不思議境・發眞正菩提心・善巧安心・做法觀・識通塞・道品調適・對治助開・知位次・能安忍・離法愛をいふ。心の安住する道であるから、これを床に喩へた。

○瑜伽の法水—瑜伽 yoga

朝臣「葵上の憑き物の御惱みが愈〳〵烈しいから、横川の小聖をお招きして來い」

家來は命をうけて、比叡山横川へ行く。

橋懸は横川小聖の坊で、ワキ横川小聖ここへ出で家來の詞を聞いて、

小聖「この深窓に思ひを靜めて十乘の觀法を行ひ、心を落ちつけて行ひ澄ましてゐるところへ、案内を頼むのは、誰ぢや」

狂言の家來、左大臣の御使として參つた旨をいふ

小聖「この頃はわけあつて、特別の佛事を

は梵語で相應と譯す。心は境に、行は理に、果は諸功德に相應する意。これを法水に喩へたのである。
○三密の月—三密は身・語・意で、その清淨明白なことを月に喩へた。
○別行—特別に執り行ふ佛事。
○やがて—直に。
【六】
○御大儀—御苦勞。
○大床—廣廂。こゝでは母屋の意であらう。
○行者—山伏修驗道の修行者。
○加持—祈禱。佛力を加へてその功德を持たしめる意
○役の行者—役小角。文武天皇の頃大和葛城山で修行した山伏修驗道の始祖〔葛城〕參照。
○胎金兩部の峯—吉野大峯をいふ。密敎で、眞實の理體で一切の功德を具有するのを胎藏界といひ、眞實の智體で一切の煩惱を摧破するのを金剛界といふ。修驗道はこの兩部を修め、その本山を大峯とするので、大峯を兩部の峯といつたのである。
○七寶の露—極樂に七寶合成の園林があるといふので、大峯の露を七寶に見立

出でず候へども。大臣よりの御使と候程に。やがて參らうずるにて候。汝は先へ行き候へ（汝は」以下七字謠本になし）

狂言「さあらば御先へ參らうずるにて候

舞臺に歸り、ワキヅレに向ひ、

【六】

狂言「いかに申し候。小聖を請じて參りて候

といひて引く。ワキ舞臺に入り、名乘座に立つ。ワキヅレ立ちて、

ワキヅレ「唯今の御出で御大儀にて候

ワキ「承り候。さて病人はいづくに御座候ぞ

ワキヅレ（小袖に向ひ）「あれなる大床に御座候

ワキ「さらばやがて加持し申さうずるにて候

ワキヅレ「尤もにて候

ワキヅレ下に居る。ワキ大小前にて肩をあげ、小袖の前へ行き居立ちて、

ワキ「行者は加持に參らんと。役の行者の跡を繼ぎ。胎金兩部の峯を分け。七寶の露を拂ひし篠

執り行ひ、どこへも行かないのだが、外ならぬ大臣からの御使とあれば、早速參りませう」

といつて左大臣邸へ來る態。

【六】

舞臺はもとの通り左大臣邸。

朝臣、橫川小聖の來邸したのを見て、

朝臣「唯今は御遠來御苦勞に存じます」

小聖「御用件は先程承りました。して、その御病人はどちらにお出でになります」

朝臣「あの母屋に居られます」

小聖「では早速加持祈禱を致しませう」

朝臣「お願ひ致します」

そこで、小聖は加持祈禱をするといふので、かの役行者の後を繼いで、大峯に分け入り露を分けて修行した篠懸衣

懸に。「不淨を隔つる忍辱の袈裟。赤木の數珠の刺高を。さらりさらりと押し揉んで。『一祈りこそ祈つたれ

と數珠を揉む。

【モ】

この間にシテ面を般若に代へ、唐織を被ぎ打杖を持ち、ワキの後に立ち、ワキを見込む。ワキシテに向ひ、

ワキ『襄謨三・曼荼嚩・曰羅敖

〔祈〕

ワキ、シテを祈り伏せんとし、シテこれに反抗する樣を示す。シテ唐織を腰に卷き、下に居て、打杖をつき、

後ジテ『いかに行者。はや歸り給へ。歸らで不覺し給ふなよ

ワキ『たとひ如何なる惡靈なりとも。行者の法力盡くべきかと。重ねて數珠を押し揉んで

と謠ひながら祈りかけ、

地『東方に。降三世明王

シテ『南方軍荼利夜叉

を身に纏ひ、一切の外障を防ぐ袈裟を上に懸け、赤木の刺高の數珠をさらさらと押揉んで、一祈り祈つた。

【モ】

後ジテ六條御息所の怨靈鬼面を頭にして登場。横川小聖を睨む。

小聖『――『襄謨三、曼荼嚩、曰羅敖』――

〔祈〕

横川小聖、怨靈を祈り伏せようとし、怨靈之に反抗する仕科。

怨靈『これ行者、早くお歸りなさい。うろうろして痛い目に遭ひ、後悔たさるな――

小聖『たとひどのやうに怖しい惡靈であらうとも、この行者の法力か負けをとるものか』

と復數珠を押揉んで、

小聖『――『東方の降三世明王、南方の軍荼利夜叉明王、西方の大威德明王、北方の金剛夜叉明王、中央の大聖不動明王、襄

てたのである。

○篠懸―山伏の着る麻の上衣。

○忍辱の袈裟―忍辱は諸の傷辱惱害を忍耐すること。法華經法師品に「如來衣者柔和忍辱心是也」

○赤木の數珠の刺高―紫檀などの赤木で造つた數珠。刺高は數珠の粒が算盤珠のやうに角立つたもので、山伏が持つ。

【モ】

○襄謨三曼荼嚩曰羅敖―不動經・大日經などにある、不動明王に祈る呪文。

○不覺―後で悔いるやうな不心得。

○東方に降三世明王―以下修驗道の祈禱として、東西南北及び中央に配した五大尊明王を呼び覺ます詞である。

る。五大尊はいづれも忿怒の相を示し惡魔を降伏する明王。委しくは〔安達原〕の附記にいふ。

○聽我說者得大智慧―不動明王の本誓二頌で、わが說を聽く者は大智慧を得、わが心を知る者は卽身成佛せん」と訓讀す。この語〔安達原〕九に出てゐる。

〔八〕○般若聲―般若經を讀誦する聲。

○得脫―生死の苦惱から脫すること。

地『西方大威德明王

シテ『北方金剛

地『夜叉明王

シテ『中央大聖

地『不動明王。曩謨三・曼荼嚩・日羅赦、旋陀・摩訶嚕遮那。娑婆多耶吽多羅・吒干𨭎、聽我說者。得大智慧。知我心者。卽身成佛

シテ祈り伏せられて安坐し、兩手をつき、

〔八〕

シテ『あらあら恐ろしの般若聲や（と打杖をすてゝ兩耳を掩ひ）。これまでぞ怨靈この後又も來るまじ（手を下す）

地（キリ）『讀誦の聲を聞く時は。讀誦の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ（怨念の去りたる心持にて立上り）。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もここに來迎す。成佛得脫の。身となり行くぞありがたき身となり行くぞありがたき

讀三、曼荼羅、日羅赦、旋陀、摩訶嚕遮那、娑婆多耶吽多羅、吒干𨭎、我が說を聽く者は大智慧を得、我が心を知る者は卽身成佛せん』――」と祈る。

〔八〕怨靈は小聖に祈り伏せられて、

怨靈「あゝ何といふ怖しい行者の讀經の聲だらう。もう歸ります。この後は決して參りません」

かうして、行者の讀誦の聲を聞いては惡鬼も心を和らげ、また菩薩は忍辱慈悲の姿を以て顯れ、この怨靈をお迎へとりになり、かくて、瞋恚の身も成佛して苦惱を免れるやうになるのは、誠にありがたいことである。

六條御息所の怨靈心を和らげて退場する。

「身となり行くぞ」と仕手柱際にて合掌し、返句に留拍子を踏む。

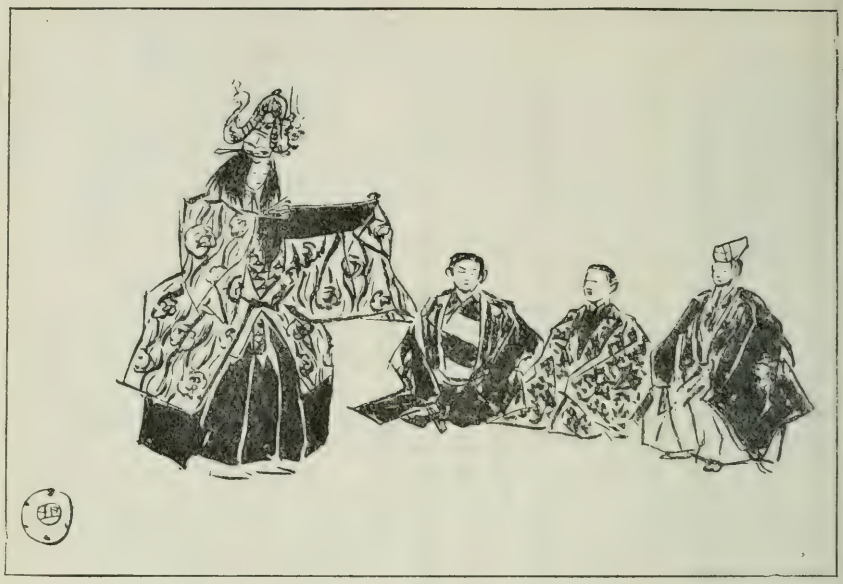
〔考異〕

諸流（五流）

【七】ワキ「行者は加持に……一祈りこそ祈つたれ（寶・下懸東方に降三世明王）

古謠本（光悅本）

【一】ワキツレ「これは朱雀院に……この由（光を）申しつけばやと存じ候（光いかにたれかある。てる日の神子をめして參り候へ）。やがて梓に御かけ候へ（光ナシ）【四】地「もとあらざりし……消えもせば（光て）……【六】ワキツレ「唯今の御出で御大儀にて（光をそれいりて）候……ワキツレ「尤にて候（光ナシ）



海士（あま）

観（寶春剛喜）

解説

【能柄】 五番目 劇的夢幻能

【人物】 **子方** 藤原房前、**ワキ** 房前の從者、**ワキツレ** 同（二人）、**前シテ** 海士（房前母の靈）、**狂言** 所の者、**後シテ** 母海士の成佛したる龍女

【所】 讃岐國 志度浦

【時】 奈良朝（二月）

【異稱】 觀世流では〔海士〕と書いてゐるが、他の四流では〔海人〕の字をあてゝゐる。

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作としてゐるが、前書の割註に「是は別作と云說あり」としてゐるやうに、世子六十以後申樂談儀に、

「あらなつかしのあま人やと、御涙を流し玉へば」、この「御なみだ」のふし、金春がふし也。あまりくだ〳〵敷ことをば、なが〳〵かきのこせず。同じのうに「ちの下をかい切、玉をおしこめ」などのかゝり

は、黒がしらにてかるゝといで立て、このはたらきの風體也。女などに似合はず。とある記事から考へると、世阿彌當時に既に行はれてゐた古作であるらしい。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十六日金春が演じたこと、言經卿記文祿四年四月三日の條に註釋のことが出てゐる。

【梗概】藤原房前が自分の母は讃岐國志度浦の海士であるといふ事を聞いて、追善の爲にその浦に行くと、一人の女海士が來たので、これに昔の話を尋ねる。海士は唐高宗の后となつた淡海公の妹が、藤原氏の氏寺興福寺へ三種の寶を贈つたところ、その一である面向不背の珠をこの沖で龍宮に奪はれたので、淡海公は身をやつしてこの浦に下り、海士少女と契つて一子を儲けた。その海士はかの珠を龍宮から取返して來たならば、この子を世嗣にして下さいと約束して、命を捨てて、海底に入り、遂に珠を取返して來た。かくして淡海公の世嗣となつたのが、今の房前大臣であると物語り、自分がその海士の幽靈であると打明けて消え失せる。房前は深く感じて色々追善供養してゐると、海士は龍女となつて現れ、法華經の功德によつて成佛の出來たことを喜ぶ。

【出典】この說話を記したものに、志度寺緣起と幸若舞曲「大織冠」とがあり、謠曲拾葉抄には、

世に大織冠物語といへる古き草子あり、此謠は彼の物語を以て作る也。

といつてゐる。そして帝國圖書館の寫本「大織冠物語」に據れば、これは幸若「大織冠」の前篇「入鹿」と同一のもので、幸若の「入鹿」「大織冠」二篇を合せて大織冠物語といつたらしい。吉田東伍博士は大日本地名辭書に史徵紫寶考證を引いて、

志度寺緣起は古卷軸にて長曾我部元親裱裝を加へたり。筆法遒美にして鎌倉時代を下らず。但其事は歷史に合はざる所多し。是緣起の常なるか、其中にも古今の別あり、此緣起の如きは頗る古說なり。謠曲海人は是に據りて構成したりと見ゆ。

と、緣起の方を本曲の原據と見て居られる。しかし現に同寺にあるものほどほど古いものではなく、幸若の方もその制作年代が不明で、俄かに謠曲との先後を定め難いが、傳說發展の順序から見れば、この海士傳說はもと日本書紀允恭天皇十四年の條に、

天皇獵二淡路島一……然終日不レ獲二一獸一、於レ是獵止以卜矣、島神祟之曰、不レ得レ獸者是我之心也、赤石海底有二眞珠一、其珠制二於我一、則悉當レ得レ獸、爰集二處々白水郎一、以令レ探二赤石海底一、海深不レ能レ至レ底、唯有二一海人一、曰二男狹磯一、是阿波國長邑之海人也、勝二於諸海人一、是腰繫レ繩入二海底一……抱二大鰒一而泛出、乃息絕死二浪上一、既而下レ繩測二海底一六十尋、則割二鰒實一、眞珠在二腹中一、其大如二桃子一、乃制二島神一、獵之、多獲レ獸也、唯悲二男狹磯入レ海死一、則作レ墓厚葬、其墓猶今之存。

とあるのが源で、これに今昔物語卷十一「聖武天皇始造三元興寺語」の、龍王が珠を奪つた說話が加はつて、志度寺の海人傳說が出來たのであらう。そして、本曲はこの傳說を記した古い緣起又は草子を本として脚色したものであらう。古作の謠曲には類型から離れてゐるものが少くないが、本曲の結末が、

さてこそ讃州志度寺と號し、每年八講、朝暮の勤行、佛法繁昌の靈地となるも、この孝養と承る。

と結んでゐるなどは、謠曲としては珍しい、寧ろ緣起式の結語と見られるのである。

【概評】本曲は母性愛を主題としたもので、一體謠曲には母性愛を描いたものは少くないが、それらは例へば〔櫻川〕〔三井寺〕のやうにわが子を失つて狂亂するとか、〔大佛供養〕〔谷行〕のやうに、わが子の冒險的な企を阻止するとか、性格の甚しく弱いものであるのに、これはわが子を出世させたい爲に、命を捨てて千尋の海底に飛び入るもので、誠に雄々しい强い愛に燃えてゐる。これに對する子の態度も、大臣の身を以て海山を距てた片田舍へ追善の旅に出るといふ孝養の念の深いものであるから、全體が極めてよく緊張してゐる。その脚色を見ても、劇的複式能として最も無理の少いもので、その行文も大體に於てよく整つて居り、殊に第五節の所謂「玉の段」は海底龍宮城の樣、これに忍び入る海士の樣が髣髴として眼の前に浮び出るの觀があるのである。秀れた曲の一つであると思ふ。

【一】

○出づるぞ名殘―三日月は空に出るかと思ふと間もなく隱れてしまふといふ意。房前が生まれて間もなく母を喪つたことを含めてゐる

○月の都―都の美稱。三日月を承けて月を出し、月の隱れる方角の西へ向つて行くといつたのである。

○天地の開けし惠み―天地開闢以來神の惠みの久しいといふ意。これを久方にいひかけた。

○久方の―天の枕詞。

【一】

次第の囃子にて、子方房前大臣、風折烏帽子・襟赤・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキ房前の從者、着附段鬘斗目・素袍上下・小刀・腰帶の裝束、ワキヅレ同じく從者二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

次第（ワキヅレ）『出づるぞ名殘三日月の。出づるぞ名殘三日月の都の西に急がん

地取に子方とワキは正面に向き、（ワキヅレは下に居る）

ワキサシ『天地の開けし惠み久方の。天の兒屋根の

【一】

前段

舞臺は初め奈良の都で、子方藤原房前、ワキ及びワキヅレの從者を隨へて登場。

從者「三日月が空に出たかと思ふと忽ちに隱れてしまふ、あの西の方角に向つて、急いで都を旅立ちして行かう」

〃次第を謠つて、旅の目的を述べ、

從者「天地開闢の昔御出現になつた天兒屋根命以來、永く神の御惠みを受けて、こ

○天の兒屋根—天兒屋根命。天照大神天岩戸隱れの御時祝詞を奏し、天孫降臨の御時これに隨つて天降つた、藤原氏の祖先神。
○房前—藤原鎌足の孫、不比等の子。天平九年年五十七で薨じた。葬儀に大臣に准ぜられ、天平寶字四年太政大臣を贈られた。
○志度の浦—讃岐國三木郡今の志度町。高松市の東にある。
○房崎—志度浦の別名。
○追善—死者の冥福を祈る佛事。
○習はぬ旅に—馴れない旅にも次第に馴れるといふのを奈良坂にいひかけた。
○奈良坂—奈良の北境にある坂路で、今の歌姫越がそれに當るといふ。
○みかさの山—顧みるを三笠にいひかけた。三笠山は春日山の別名。
○今ぞ榮えんこの岸の—新古今集に「興福寺の南圓堂作りはじめ侍りける時春日のえのもとの明神よみ給ひける」となむ」とある「補陀落の南の岸に堂たてて今ぞ榮えん北の藤波」を引いた。
○南の海—南海道（四國地方）をいふ。前の引歌の「南の岸」を轉用したのである。

御讓り

ワキは子方に向ひて居立ち、

子方「房前の大臣とはわが事なり。さてもみづからが御母は。讃州志度の浦。房崎と申す所にて。空しくなり給ひぬと。承りて候へば。急ぎかの所に下り。追善をもなさばやと思ひ候

ワキ・ワキヅレ立ちて、

ワキヅレ「下歌」習はぬ旅に奈良坂やかへりみかさの山隱す春の霞ぞ恨めしき。「上歌」三笠山。今ぞ榮えんこの岸の。今ぞ榮えんこの岸の南の海に急がんと。行けば程なく津の國の。こや日の本の始めなる。淡路のわたり末近く。鳴門の沖に音するはとまり定めぬ、海士小舟とまり定めぬ海士小舟

ワキ「行けば程なく」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸り、上歌濟みて、子方とワキは正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程に。これは早讃州志度の浦に御

の命の系統を次々にお嗣ぎになつて來た……」

房前「その房前の大臣といふのは自分のことである。さて、自分の御母は讃岐國志度の浦房崎といふ所でお亡くなりになつたと伺つたので、急いでその地へ行き、亡き母上の追善供養をも致したいと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

從者「これまでし馴れてゐない旅にもいくらか馴れて來て、奈良坂を越え、三笠山を顧みて見ると、春霞がたちこめて山を隱してゐるのは恨めしい感じがするが、『補陀落の南の岸に堂建てて、今ぞ榮えん北の藤波』と、藤原氏の榮榮をお詠みなつたされた明神の御惠みを思うては氣も勇み立ち、早く四國へ行かうと旅を急げば、間もなく攝津國昆陽の邊に來て、それから日本國土の最初に出來た淡路に近づき、鳴門を渡つては、この波音の高い沖合に、どこを泊りとも定めず漕ぎあるいてゐる小さな漁船を眺めたことだ」

ミ旅の道々、その景趣を話し合つてゐるうちに、讃岐に着いた態で、舞臺は讃岐國志度浦となる。從者は房前に向つて、

○こや日の本の―摂津國の地名昆陽を「これや」の意の「こや」にいひかけた。
○淡路―古事記・日本書紀に伊弉諾・伊弉册尊が國土神生の初に淡路をお作りになつたとあるをいふ〔淡路〕参照。
○鳴門―淡路と阿波との間にある瀬戸。末近くなるといひかけた。
○鳴戸の沖に音するは―拾葉抄に「たれぞこの鳴門の沖に音するはとまりさだめぬ海士小船かな」を引いたのであるといふが、出所は分らない。
○男女の差別は知らず―男だか女だか分らないやうな人間。

【二】
○海士の刈る藻に栖む蟲―古今集典侍藤原直子の歌「海士の刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」に據つて「われから」を出した。「われから」は海草に棲む蟲の名で、これを自分の心からといふ意にかけた。
○寺近けれども心なき―志度寺の近くに住んではゐるが、佛道をば修めず、殺生を事とするといふ意。

着きにて御座候。（目附柱の方を見て）又あれを見れば男女の差別は知らず人一人來り候。かの者を御待ちあつて。この所の謂れを委しく御尋ねあらうずるにて候（とワキヅレへ向く）

ワキヅレ「然るべう候

ワキ（子方に）「まづかう御座候へ

といひて子方は脇座に行きて床几にかゝり、ワキヅレは地謠座前、ワキは笛座前にて下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ海士、面深井・鬘・鬘帶・襟濃黄・着附摺箔・水衣・無色縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて、右手に鎌、左手に杉葉（海草の心）を持ちて出で、常座に立ち、

シテ一聲『海士の刈る。藻に栖む蟲にあらねども。われから濡らす。袂かな

シテサシ『これは讃州志度の浦。寺近けれども心なき。あまのの里の海人にて候。（右の方を見て）げにや名に負ふ伊勢をの海士は夕波の。内外の山の月を待ち。濱荻の風に秋を知る。又須磨の海士人

【二】シテ女海士、海松藻と鎌を持つて、房前の方へ近づいて來る態で登場。

海士「自分達の刈る海藻に栖んでゐる蟲のわれからではないが、やはりわれから――わが心から悲しみの種を蒔いて、袂を涙に濡らしてゐることだ」

と獨言をいひ、

海士「私は讃岐國志度浦のお寺の近くには住んでゐるものの、佛道をば修めようともせず、却つて殺生な漁業を事としてゐる、あまのの里の海士です」

と自己紹介をし、

海士「ほんとに同じ海士にしても、伊勢の海士は夕波の打ち寄せる頃には、内宮外宮の御山から出る月を待つて、その美し

從者「旅をお急ぎになりましたので、思ひの外早く讃岐國志度浦にお著きでございます。（海岸を見て）おゝあちらを見ますと、男か女か分らない變な人間が一人やつて來ました。あの者がこちらへ來るのをお待ちになつて、この土地の謂れを委しくお尋ねになるのが宜しからうと存じます」

といつて、海士の來るのを待つてゐる態。

○あまの里―志度寺の東の方にあるといふ。○伊勢をの海士―伊勢をのをは助辭で意味がない。○内外の山―夕波の打つを内にいひかけた。内外の山は内宮外宮の山。○濱荻―蘆を伊勢では濱荻といふ。〔阿漕〕又は〔蘆刈〕參照。○須磨―攝津國にある。○若木の櫻―源氏物語須磨の卷に出てゐる語。〔忠度〕參照。○慰みも名のみ―慰みも無しを名のみにいひかけた。○何をみるめ―見る目を海草のみるめにいひかけた。○刈らなくても運ぶ―みるめを刈らなくても、波の運び寄せる流れ蘆があるとの意。○濱川―濱邊を流れる川。○流れ蘆―波に流れ寄る蘆の節を世にいひかけた。○心なしともいひがたき―心なき業だといつて止めても居られない。

【二】○おこと―そなた。○かづきの海士―「かづく」は水にくぐることで、海中の物を取る漁夫をいふ。○痛はしや―氣の毒なことだ。○飢にのぞませ給ふ―「の

は鹽木にも（と正面に向き）。若木の櫻を折り持ちて。春を忘れぬたよりもあるに。この浦にては慰みも。名のみあまのの原にして。花の咲く草もなし。何をみるめ刈らうよ（と二足つめ）

シテ下歌「刈らでも運ぶ濱川の。刈らでも運ぶ濱川の。潮海かけて流れ蘆の。世を渡る業なれば。心なしともいひがたきあまのの里に歸らんあまのの里に歸らん

「心なしともいひがたき」と右の方へ向きて二三足出で、またもとに歸りて正面に向く。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる女。おことはこの浦の海士にてあるか

シテ「さん候この浦のかづきの海士にて候

ワキ「かづきの海士ならば。あの水底の海松藻刈りて參らせ候へ

シテ「痛はしや旅疲れ。飢にのぞませ給ふかや。わ

さを樂しみ、又濱荻を吹き渡る風の音を聞いては、秋の趣を味はつて居るし、それから、須磨の海士は鹽燒く薪を採る時にも、あの若木櫻の枝を折り添へて、春の樂しみを忘れないといふやうな、風流なよい事があるけれど、この志度浦あまのの里には、何の慰みもなく、花の咲く草もないといふ、ほんとに何の見所もない所だが、まあそれも致し方がない、海松藻でも刈りませう。

さうだ、自分で刈らなくても、濱邊の川から海へかけて、波が流れ蘆を運んでくれるのだから、あれでも間に合ふわけだが、いや〳〵これも世渡りの道だから、風流でない、つまらないなどといつて止めるわけにも行くまい。さあ海松藻を刈つてあまのの里に歸りませう」

といひながら房前の近くへ來る。

【三】房前の從者は海士を見て、

從者「おい、そこな女、そなたはこの浦の海士か」

海士「はい、この浦の、水をくぐつては物を採る海士でございます」

從者「水をくぐる海士ならば、あの水底の海松藻を刈つてさしあげてくれ」

海士「おゝお氣の毒な、旅にお疲れになつ

ぞむ」に改訂本では臨の字を充ててゐるが、光悦本のやうに望の字が正しいので飢ゑの餘りにそのやうなものを欲せられるのかといふ意であらう。

○雲の上人—禁中にお仕へしてゐる高官。

○みるめ召され—雲の上人を見るを海松藻にいひかけた。

○御諚—お言葉。仰せ。

○明珠—光り輝く玉。

○天満つ月も—天に光の満ちる月、卽ち満月。この浦の海士を天にいひかけた。

【四】

が住む里と申すに。かほど賤しき田舍の果に。『不思議や雲の上人をみるめ召され候へ。「刈るまでもなしこの海松藻を召され候へ

と杉葉をワキに差出す。

ワキ「いやいやさやうの爲にてはなし。あの水底の月を御覽ずるに。海松藻繁りて障りとなれば。刈り除けよとの御諚なり

シテ「さては月のため刈り除けよとの御諚かや。昔もさる例あり。明珠をこの沖にて龍宮へ取られしを。『かづき上げしもこの浦の

地次第『天満つ月も満潮の。天満つ月も満潮の。海松藻をいざや刈らうよ

【四】

地取に杉葉を捨てて、正面先の下を見ながら、みるめを刈る心にて進み出ると、ワキはシテに向ひ、

ワキ「暫く。何と明珠をかづき上げしもこの浦の海士にてあると申すか

て、飢ゑの餘りに、そのやうなものをお望み遊ばすのでございますか。自分の住む所とは申しながら、このやうな賤しい片田舍でございますのに、貴いお方がお出で遊ばすとは、ほんとに不思議なことでございます。さあ〳〵この海松藻をお召し下さい。刈るまでもございません、この海松藻をお召し下さい」

と手に持つてゐる海松藻をさし出す。

從者「いや〳〵、そういふ爲ではないのだあの水底に映る月を御覽遊ばすのに、海松藻が繁つてゐて邪魔になるから、それで刈り除けよと仰せになるのだ」

海士「それでは月を御覽になる爲に刈り除けよと仰せになるのでございますか。さういへば、昔もこれに似た事がございました。光明輝くばかりの珠をこの沖合で龍宮へお取られになつた時、それを水をくぐつて取り上げたのも、この浦の海士でございました。

おゝ空は満月で、潮は満ちて來ました。さあ一つ海松藻を刈りませう」

と海へ入らうとする。

【四】

從者「一寸待て。何といふのだ、明珠を海から取り上げたのも、この浦の海士だと申すのか」

シテ「さん候この浦の海士にて候。（目附柱の方を見て）又あれなる里をばあまのの里と申して。かの海士人の住み給ひし在所にて候。（正面に向き）又これなる島は。かの珠を取りあげ始めて見初めしによつて。新しき珠島と書いて新珠島と申し候（とワキに向く）

ワキ「さてその珠の名をば何と申しけるぞ

シテ「玉中に釋迦の像まします。何方より拜み奉れども同じ面なるによつて。面を向ふに背かずと書いて面向不背の珠と申し候

ワキ「かほどの寶を何とてか。漢朝よりも渡しけるぞ

シテ「今の大臣淡海公の御妹は。唐土高宗皇帝の后に立たせ給ふ。さればその御氏寺なればとて。興福寺へ三つの寶を渡さるる。華原磬泗濱石

○新珠島―志度浦の東に突出した周圍二町ばかりの島。

○面向不背の珠―源平盛衰記卷十四に「興福寺は是淡海公の御願、藤原氏累代の氏寺也……皇極天皇發願して丈六釋迦の三尊を造立せらるる也。眉間の水精は唐國より渡されたり。此玉左に見るにも右に見るにも、釋迦三尊の影うるはしく映りし玉也」とある水精の玉をさしたのであらう。

○漢朝―支那の朝廷。漢代の意ではない。

○淡海公―不比等の謚號。

○唐土高宗皇帝―唐の三代目の天子。不比等の妹がそ

海士「はい、この浦の海士でございます。（向ふを見て）あそこにある里をばあまのの里と申して、その海士の住まはれた所でございます。（正面の海を見て）又この島は、あの明珠を取り上げて始めて見た所なので、新しき珠島と書いて新珠島と申します」

從者「して、その珠の名は何といつたか」

海士「玉の中に釋迦如來の像がございまして、どちらの側から拜みましても同じ面なので、面を向ふに背かずと書いて、面向不背の珠と申します」

從者「そのやうな寶をどうして支那の朝廷から日本へ渡したのだ」

海士「今の大臣淡海公の御妹は、唐の高宗皇帝の后にお立ちになりました。それで御實家の御氏寺であるといふので、興福寺へ支那の寶を三つ渡されたのです。華原磬と泗濱石と面向不背の珠とがそれで

の后となつたといふのは史實でない。
○氏寺―一族の冥福繁榮を祈る寺。
○興福寺―最初藤原鎌足が山城國宇治に山階寺を建立したものを、不比等が奈良春日山麓に移して、興福寺と改稱したもの。藤原氏の氏寺として永く繁榮した。
○華原磬澗濱石―支那の華原又は澗濱から出る玉石で作つた樂器。白氏文集に「華原磬華原磬、古人不レ聽今人聽、澗濱石澗濱石、今人不レ擊古人擊」狂言の問語には澗濱石を硯と解してゐる。
○御身をやつし―忍び姿をして。
○便なや―都合のわるいことだ。失禮な事を申したとの意。
○惠み開けし藤の門―神の惠みで繁榮になつた藤原氏一門。
○心にかかる―かかるは藤の緣語。
○傍臣―側近く仕へてゐる臣。
○房前のあまり―房前の海士といひかけて、餘り申せばと轉じた。

面向不背の珠。二つの寶は京著し。明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを。大臣御身をやつしこの浦に下り給ひ。賤しき海士少女と契りをこめ。一人の御子を設く。今の房前の大臣これなり

子方（シテに向ひ）「やあこれこそ房前の大臣よ。あらなつかしの海士人や猶々語り候へ

シテ（子方に向ひ）「あら何ともなや。今まではよその事とこそ思ひつるに。さては御身の上にて候ひけるぞやあら便なや候

といひながら舞臺の眞中へ行き下に居る。後見鎌を引く。ワキも下に居る。

子方「みづから大臣の御子と生れ。惠み開けし藤の門。されども心にかかる事は。この身殘りて母知らず（としをり）。ある時傍臣語りて曰く。忝くも御母は。讃州志度の浦。房前のあまり申せば恐れありとて言葉を殘す。さては賤しき海士の

そのうち二つの寶は都に到着しましたが明珠はこの沖で龍宮に取られましたのを淡海公が忍び姿をしてこの浦にお下りになり、賤しい海士の女と契りを結び、一人の御子をお生みになりました。今の房前の大臣が即ちその方でございます」

房前「おゝ、この自分が房前の大臣だ。ああなつかしいことだ。海士、もつと話してくれい」

海士「これは何とも失禮申しあげました。今までは全く他人事と思つてゐましたのに、それではあなた樣のお身上であつたのでございますね。これは飛んでもない失禮を申しあげました」

房前「自分は大臣の御子として生まれ、殊に神の惠みで繁榮してゐる藤原氏として何の不滿足もないが、たゞ一つ心にかゝる事は、自分だけ生き殘つて、母を知らないことなのだ。ところが、ある時側にゐる臣下が自分に話していふには、「忝くもあなたの御母は讃岐國志度浦房崎といふ所の海士で……」といひかけて、餘り委しく申しては恐れ多いといつて、言葉

○帚木―信濃國園原の伏屋にあるといふ木。「はは」といふ音から母の意に用ゐ、木の縁で、月、雨露を出した。○暫し宿るも―子が母の胎内に宿ることを、月が露に宿ることに喩へた。○雨露の恩―養育された親の恩。源の愚「順の賦」草樹若告二雨露之恩」を引いた。○心なき海士衣―人らしい心もない海士の身でもといふ意を、衣につづけた。○一世ならず―前世からの因縁である。○滾―雨水の地上に溜つてゐるのをいふ。日月を淡海公に、滾を母海士に喩へたのである。○光陰を増す―光を増すと同じ意。○おろかや―いふまでもない。○わが君―大臣。○ゆかり―縁故。藤をゆかりの花といふので、藤咲く門(藤原氏一門といふ意)を出し、門の縁で口を閉つと續けた。○いはじや水鳥の―いはじや、見ずを水鳥にいひかけた。○お主―水鳥の鷺鳥にいひかけた。○朽たすまじ―名をおとし汚すやうなことはすまい。

【五】○とてもの事―一層の事。

子。賤の女の腹に宿りけるぞや

地上歌「よしそれとても帚木に。よしそれとても帚木に。暫し宿るも月の光雨露の恩に、あらずやと。思へば尋ね來りたり。あらなつかしの海士人やと御涙を流し給へば(子方しをる)

シテ「げに心なき海士衣

地「さらでも濡らすわが袖を。重ねてしをれとやかたじけなの御事や(シテしをる)。かかる貴人の賤しき海士の胎内に。宿り給ふも一世ならず。譬へば日月の。滾にうつりて光陰を増す如くなり。われらもその海士の。子孫と答へ申さんは。事もおろかやわが君の。ゆかりに似たり紫の。藤咲く門の口を閉ぢて。いはじや水鳥のお主の名をば朽たすまじ(と面を曇らす)

【五】

ワキ「とてもの事にかの珠をかづき上げし所を。

を濁してしまつたのだ。それで、さては自分は賤しい海士の子で、田舎娘の腹に宿つたものなのかと思つたが、いやたとひ賤しい田舎娘であらうとも、母に母だ自分を宿してくれたのは、母のありがたい恩ではないかと、かう思ふので、こゝまで尋ねて來たのだ。あゝ懐しい海士だ」

と涙を流されると、

海士「まあ勿體ない、このやうな心もない海士もありがた涙に咽びます。さうでなくてさへ波に濡れてゐるこの袖を、うれし涙でなほもお濡らし下さるとは、ほんとにありがたい事でございます。このやうな貴いお方が賤しい海士の胎内にお宿りになるといふのも、前世からの御縁でございます。譬へて見れば、日や月が庭に溜つた雨水に映つて光を増すやうなものでございます。實は私もその海士の子孫で……などと申しては勿體ない。そのやうな事を申しては、あなた樣と御養故のあるもののやうで、藤原家のお名折れにもなりませう。さうだ、口を閉ちて何も申しますまい、何も見ますまい、そしてあなた樣のお名を汚すやうな事を致しますまい」

【五】

養者「一層のこと、あの珠を海から取り出

○そと學うで—一寸眞似をして。

○世繼—跡目相續。
○子細あらじ—わけもない。何の異論もなくしてやらうといふ意。
○領承—承知。

御前にてそと學うで御目にかけ候へシテ「さらばそと學うで御目にかけ候べし。（扇を手に持ちて）その時海士人申すやう。もしこの珠を取り得たらば。この御子を世繼の御位になし給へと申ししかば。子細あらじと領承し給ふ。さてはわが子ゆゑに捨てん命。露程も惜しからじと。千尋の繩を腰につけ。もしこの珠を取り得たらば。この繩を動かすべし。その時人々力を添へ。引き上げ給へと約束し。『一つの利劒を拔き持つて

と扇を劒の心にて拔く形をして立上り、これより謠に合せて仕科。

地『かの海底に飛び入れば（と正面先へ乘込み）。空は一つに雲の波（と開きて上を見上げ）。煙の波を凌ぎつつ。海漫々と分け入りて（と正面にさし分け）。直下と見れども底もなく（と見下し）。邊も知らぬ海底に。そも

◎その時人々力を添へ—以下「海上に浮み出でたり」までを玉の段といふ。
○利劒—鋭い劒。

○空は一つに—空も海も一つに見えるとの意。
○雲の波煙の波—雲か煙の如き波。白氏文集の「海漫漫、直下無レ底傍無レ邊、雲濤烟浪最深處、人傳中有三三神山一」を引いた。
○海漫々—漫々は廣大な貌

した時の有樣を、わが君の御前で、一寸眞似てお目にかけてくれい」
海士「それでは一寸眞似てお目にかけませう。……その時海士が『もしこの珠を取ることが出來たならば、この御子をお世取りにして下さいませ』と申しますと、淡海公も『それはわけもないことだ、必ずしてやらう』と御承知になりました。それならば、わが子の爲に命を捨てるのは少しも惜しくないと、長い〳〵繩を腰につけ、『もしこの珠を取ることが出來れば、この繩を動かしますから、その時には多勢の人々が力を添へて引き上げて下さい』と約束して、一つの鋭い劒を拔いて手に持ち、あの海底に飛び入りました。

そして空も海も一つで、雲か烟のやうな波の中を泳ぎ、廣々とした海を分け入り直下へ來たと思つて見ましたが、底は見えず、實に限りも知られぬ深さで、このやうな海底では、神變不可思議力を持つたものならばいざ知らず、人間業ではと

神變はいさ知らず（常座へ行き）。取り得ん事は不定なり。かくて龍宮に到りて宮中を見ればその高さ（笛座へ行き脇座の方を見上げ）。三十丈の玉塔に。かの珠を籠め置き香花を供へ守護神は。八龍竝み居たりその外惡魚鰐の口（と見廻し）。逃れ難しやわが命。さすが恩愛の古里の方ぞ戀しき（と常座へ行きて面伏せ）。あの波のあなたにぞ（と脇正面を見）。わが子はあるらん父大臣もおはすらん。さるにてもこのままに。別れ果てなん悲しさよと涙ぐみて立ちしが又思ひきりて手を合はせ（と合掌して）。南無や志度寺の觀音薩埵の力を合はせてたび給へとて。大悲の利劍を額にあて龍宮の中に飛び入れば（と飛入る形をし）。左右へばつとぞ退いたりけるその隙に。寶珠を盜み取つて（と玉を取る形をし）。逃げんとすれば。守護神追つかくかねてたくみ

〇神變―神の不可思議力。

〇玉塔―玉で造つた塔。

〇香花―香と花と。

〇八龍―八大龍王で、難陀、跋難陀、婆迦羅、和修吉、德叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅をいふ。

〇觀音薩埵―薩埵は菩提薩埵の略で、菩薩と同じ義。志度寺の本尊は十一面觀世音である。

〇大悲の利劍―惡魔を降伏する觀音の慈悲を利劍に喩へた語であるが、こゝでは觀音の慈悲力の加はつた利劍といふ意に用ゐた。

〇左右へばつとぞ―八龍などが怖れて道を開いたのである。

〇たくみし事―豫測して考

ても取れさうに思はれません。それでもやがて龍宮に着いて、その宮中を見ますと、高さ三十丈の玉塔にあの珠を納めて置いて、香や花を供へ、これを守護する神としては八大龍王が居竝んで居りますたはその外に惡魚や鰐がゐて、到底自分の命は助かりさうに思はれません。さう思ふと、流石に恩愛の情にひかされ、故郷の方が戀しく慕はれます。そして、あの波の向ふに可愛いわが子が居ることであらう、父大臣もお出でになることであらう。それだのに、このまゝ死に別れてしまふとはほんとに悲しいことだと、涙ぐんで暫く立つてゐましたが、又思ひ切つて、『南無志度寺觀世音菩薩、どうか力をお添へ下さいませ』とお祈りをして、この觀音力の籠つた利劍を額にあてて、龍宮の中へ飛び入りますと、勢ひに怖れて、龍王達は左右にばつと淺退いて道を開けました。その隙に寶珠を盜み取つて逃げようとしますと、守護神の龍王達が追つ驅けて來ます。これは前から覺悟して考へてゐたことですから、手に持つて

へてゐたこと。

○龍宮の習ひに死人を忌めば―涅槃經に「譬如二大海一有二八不思議一……七者不レ宿二死屍一」華嚴經に「譬如二大海以二十相一故名爲二大海一……二不レ受二死屍一」などあるので、海の都龍宮では死人を忌むといつたのである。

し事なれば。持ちたる劍を取り直し。乳の下を。かき切り珠を押しこめ劍を捨ててぞ伏したりける龍宮の習ひに死人を忌めば（扇にて乳下を切りて扇を捨て下に居り）。あたりに近づく惡龍なし約束の繩を動かせば（扇を拾ひて繩を引く形をし）。人々悅び引き上げたりけり珠は知らず海士人は海上に浮かみ出でたり

と靜かに立ちて、

【六】

シテ『かくて浮かみは出でたれども。惡龍の業と見えて。五體も續かず朱になりたり。珠も徒らになり。主も空しくなりけるよと。大臣歎き給ふ。その時息の下より申すやう。わが乳のあたりを御覽ぜとあり。げにも劍のあたりたる痕あり。その中より光明赫奕たる珠を取り出だす。さてこそ御身も約束の如く（と子方に向き）。この浦

【六】

○五體も續かず―からだが切り裂かれてゐること。

○朱になりたり―からだが血に染まつてゐるのである。

○主も空しくなり―海士も死んでしまつた。

○赫奕―光りかがやく貌。

ゐた劍を取り直して、乳の下をかき斬り、珠をその中に押しこめ、劍を捨てて倒れ伏しました。龍宮の習俗では死人を忌み嫌ひますので、もはや側へ近づいてくる惡龍もありません。そこで、前に約束した繩を動かしますと、上にゐる人々は悅んで引き上げました。果して珠を奪ひ返し得たかは分らないが、海士は確かに海上に浮かび出たのでございます」

海士「このやうにして海士は海上に浮かび出たものの、惡龍のしわざと見えて、からだは切り裂かれて、血で眞赤になつてゐます。『これでは珠も取返せず、海士自身も死んでしまつたのだな』と大臣がお歎きになります。その時海士が息も絕え絕えに、『私の乳の下のあたりを御覽下さいませ』と申します。なる程、劍で切つた傷痕がありまして、その中から光り輝く珠を取り出したのでございます」

（といつて房前に向き、）

海士「それで、あなたも約束通りに、この

の名によせて。房前の大臣とは申せ。今は何をか包むべき。これこそ御身の母海士人の幽靈よ地、この筆の跡を御覽じて（と扇を女の心にて子方に渡し）。不審をなさで弔へや。今は歸らんあだ波の（としをりながら常座へ行き）。夜こそ契れ夢人の。あけて悔しき浦島が。親子の契り朝潮の波の底に、沈みけり立つ波の下に入りにけり

波の底に入る心にて靜かに中入。

【間】

ワキ（仕手柱際に出でて）「當浦の人の渡り候か

狂言所の者、着附段鬘斗目・長上下・小刀・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキに向ひ）所の者と御尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「ちと物を尋ねたき事の候。近う來つて給はり候へ

狂言「畏つて候

ワキはワキヅレの上へ行き、狂言は眞中に出で、二人とも坐し、

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古當浦に於て海士人海に入り。明珠をかづき上げ奈しくなりたる子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

○あだ波の夜こそ契れ―幽靈の身であるからあだ波といひ、波の寄るを夜にいひかけ、夜逢ふことを約束しようといつたのである。

○夢人―死人で、夢にのみ逢ふことが出來る身であるから、かういつた。

○あけて悔しき浦島が―浦島子が玉手箱を明けると俄かに老人になつたといふ故事によつて、開けてを夜の明けることにかけて引いた

○朝潮―親子の緣の淺いのを朝にいひかけた。

浦の名に寓へて房前といひ、大臣となられたわけです。今は何を隱さう。私があなたの母海士の幽靈ですよ。

といつて、女を取出して房前に渡し、

海士　この筆跡を御覽になつて、私の申したことを疑はず、私の後生を弔つて下さい。今は一先歸りませう。そしてまた夜にお逢ひしませう。夢にしか逢はれない幽靈の身で、夜の明けるのが何より殘念です。思へば、ほんとに薄い親子の緣でした。

といつて、朝潮の滿ちた波立つ海の底に沈んでしまつた。

（海士淺の底に入る心で退場。

○近頃にて候―近頃にない大層嬉しいことである。
○大織冠―藤原鎌足。
○光伯女―舞曲「大織冠」も同名である。
○管絃磬―華嚴磬。
○九條の袈裟―布九幅を綴り合せた袈裟。大衣の一。
○上のり―上席の船員。

狂言「是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづこの浦に於て。海士の珠かづき上げたる樣體は。奈良の都大織冠の御女。淡海公の御妹光伯女と申すは。隱れもなき美人にて御座ありたると申す。高宗皇帝聞し召し叡覽なき戀路に迷ひ給ひ。色々の子細ありて高宗皇帝の后に備はり給ふ。奈良の都の興福寺は御氏寺なれば。唐土に隱れなき寶物を三種までわが朝へ渡し給ふ。その寶物と申すは。管絃磬泗濱石面向不背の珠にて候。管絃磬と申すは打ちならし候。一つ打ち申せばいつまでも鳴り候。又鳴りを止めんと思し召す時は。九條の袈裟をかけ候へば。その儘鎭まり候。又泗濱石と申すは硯にて候が。御用の折節水なくても硯より水出でて。心のまゝにつかはるると申す。又面向不背の珠と申すは。玉中に釋迦の像のましますが。何方より拜しても同じ面に拜まるるにより。面を向ふに背かぬと書いて面向不背の玉と申し候。左樣の事を龍神聞し召して。龍宮へ取りたく思ひ。色々謀を廻らし候へども。その時の船の上のりは萬戸といへる者なれば。たやすく取るべき樣もなく。既に御船當浦に近つきし時。明珠はこの沖にて龍宮にとられ。殘る二つばかり京着仕り候間。大臣殿無念に思し召し。御身を變しこの浦に來り給ひ。賤しき海士少女と契りをこめ。一人の子を設け給ひ。色々の御約束ありて玉をかうきあげさせ。あれなる島にて始めて見給ふにより。新珠島と申し候。さるによつてその子を世繼の位に御立てあり。當浦の名によそへ房前の大臣殿と申す由承り候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。卽ちこれに御座候こそ。房前の大臣殿

○聊爾なる―失禮な。

○管絃講―管絃を奏して佛事を營むこと。

○一段にて候―大層よいことである。結構であつたとの意。

【七】

○御手跡―御筆跡。母海士の文。

にて御入り候よ

狂言「さては房前の大臣殿にて御入り候か。左様の御方とも存ぜず。聊爾なる物語仕り面目なく候。眞平御免候へ

ワキ「いや〳〵苦しからず候。當浦に御下向候も。御母海士人御追善の御爲にて候。管絃講を以て御弔ひあるべきとの御事にて候間、管絃の役者を相觸れられ候へ

狂言「心得申して候

ワキ「又一七日が間は。浦々の網をもあけ。殺生禁斷と相觸れ候へ

狂言「畏つて候

狂言仕手柱際に出で、

狂言「皆々承り候へ。この浦にて玉かづきあげたる海士人の御弔ひの爲。房前の大臣殿當浦へ御下向あり。管絃講を以て御弔ひあるべきとの御事にて候間。管絃の役者は疾う〳〵參られ候へ。又一七日の間浦々の網をも留め。殺生禁斷の御事にて候。その分心得候へ〳〵

ワキの前へ出で、

狂言「相觸れ申して候

ワキ「一段にて候

狂言引く。

【七】

ワキ眞中へ出で子方に辭儀して、

ワキ「いかに申しあげ候。餘りに不思議なる御事にて候程に。御手跡を披いて御覽ぜられうずるにて候

【七】

後段

ワキ從者は房前の前に出で、

從者「申しあげます。餘りに不思議なことでございますから、先程の御文を披いて御覽になるやうにと存じます」

房前は文を手に持つて、

○魂黄壤に去つて―以下「わが冥闇を助けよ」までが母の手跡である。黄壤は黄泉（死後の世界）の意であらう。この句色の土で、黄泉の土で、何か出典がありさうに思はれるが見當らない。

○一十三年―十三年に同じ　母海士が死んでから十三年目に當るのである。

○日月の算を經―多くの年月が過ぎて。

○冥路昏々―冥途の道が暗い。

○冥闇―冥途の迷ひ。

○この寺の志ある―志度寺の志の字を用ゐた。

○手向草―佛に供へる料。草の字から花を呼び起した

○花の蓮の妙經―妙法蓮華經を和らげていつた。

○善―追善供養。

【八】

○寂寞無人聲―法華經法師功德品に「若說法之人、獨在二空閑處一、寂寞無二人聲一、讀二誦此經典一、我爾時爲現、清淨光明身一」とあるを引く。

○五逆の達多―五逆は殺レ父・殺レ母・殺二阿羅漢一・破二和合僧一・出二佛身血一の罪を犯すことで、このやうな罪を犯した釋迦の從弟提婆達多も、嘗て釋迦に法華經を語つた功德により、天王如來となる許可を得たといふ

子方、前にシテの渡したる扇を文の心にて開き兩手にて持ち、

子方『さては亡母の手跡かと。披きて見れば魂黄壤に去つて一十三年。骸を白沙に埋んで日月の算を經。冥路昏々たり。われを弔ふ人なし。君孝行たらばわが冥闇を助けよ。げにそれよりは十三年（と扇を閉づ）

地『さては疑ふ所なし。いざ弔はんこの寺の。志ある手向草。花の蓮の妙經色々の善をなし給ふ色々の善をなし給ふ

地謠にワキもとの座に歸る。

【八】

出端の囃子にて、後ジテ龍女、面泥眼・鬘・鬘帶・黑垂・輪冠（小龍を戴く）・襟白・着附鱗箔・舞衣・色天口・腰帶・扇の裝束にて經卷を持ちて橋懸一の松に出で、

地『寂寞無人聲

この間に舞臺に入り常座に立ち、

後ジテ『あらありがたの御弔ひやな。この御經に引かれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八歳

房前『さてはこれが亡き母上の御手跡かと披いて見ると、――

（文）『自分が黄泉に旅立つてから今年で十三年、死骸を土中に埋んで早くも永い年月を經たが、自分を弔つてくれる人はなく、冥途の道は眞暗なのです。そなたが母に孝行しようと思ふならば、どうかこの冥途の迷ひを救つて下さい』

と母海士の文を讀んで、

房前『さてはこれが疑ふ所はない。さあこの寺で回向をして、母上の菩提を弔はう』

といつて、房前大臣は妙法蓮華經の讀誦や色々して、母の追善供養をせられるのである。

【八】

後ジテ母海士成佛して龍女となつて登場。

人々『――『……寂寞として人の聲もない時に、この經文を讀誦したならば……』――』

といふ法華經讀誦の聲を聞いて、

龍女『あゝありがたい御供養です。この法華經の功德を受けては、五逆罪を犯した提婆達多も天王如來となる許しを得、八

故事。この事、法華經提婆達多品に見ゆ。

○天王記別―天王は天王如來、記別は佛が修行者の證果を區別して、その成佛後の名稱を記して置くこと。

○八歳の龍女―娑竭羅龍王の女は八歳でよく佛道を修め、佛前に一寶珠を献じたので、衆會の目前で忽ち男子に變成し、南方無垢世界に生まれたといふ故事。法華經提婆達多品に見ゆ。

○轉讀―經文の要所を讀むこと。

○深達罪福相―同じく提婆達多品に佛德を讃美した偈文。

○具相三十二―是安平・手指纖長・手足柔軟など三十二種の勝れた形相を具へてゐること。

○八十種好―八十隨形好に同じ。好は相の細かなものをいひ、三十二相に隨伴した八十種の好い形相。

○莊嚴―立派に飾り立てること。

【九】

○德用―功德の力。

○天龍八部―天龍以下八部衆の意で、八部衆とは天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦をいふ。これも提婆達多品

の龍女は南方無垢世界に生を受くる。なほなほ轉讀し給ふべし

地。深達罪福相。遍照於十方

シテ經卷を開きて、

シテ。微妙淨法身。具相三十二

地。以八十種好

シテ。用莊嚴法身

地。天人所戴仰、龍神咸恭敬あらありがたの、御經やな

と經卷を押し、經を卷きて子方に渡し、

〔早舞〕

を舞ひ、次の謠に合せて仕科、

【九】

シテ。今この經の德用にて

地。今この經の德用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見彼。龍女成佛さてこそ讚州志度寺と號し。

讃の龍女も南方無垢世界に生れ變ることが出來たのです。どうか、もっと讀誦して下さい」

人々「――『……佛は深く善惡因果の相に達して、遍く十方世界を照らし給ひ……』

と讃誦すると、龍女も手に持つた經を開いてこれに和し、

龍女――「勝れて淨らかな佛身には、三十二のよい御相、細かくいへば實に八十の立派な御形相をお持ちになつて、その秀れた御相を以て佛身をお飾り立てになつていらつしゃる。それで天人も御佛を仰ぎ奉り、龍神も皆盡く敬信するのである」

――」

龍女「あゝありがたい御經です」

と歡喜の餘り、

〔早舞〕

を舞ひ、

【九】

龍女「今この御經の功德で『天人・龍王以下の八部衆、人と非人との差別なく、皆遙かにかの龍女の成佛するのを見た』といふ經文の通りに成佛することが出來ました」

と喜ぶ

にある經文。○志度寺―志度村の東にあり、眞言宗で、本堂には觀音を安置す。○八講―法華八講會。法華八卷を一度に一卷づつ修し朝夕二座四日間、八座で讀誦供養する法會。○この孝養―志度寺が繁昌するやうになつたのは、房前が母海士の爲に孝養を盡した結果であるといふ意。

毎年八講。朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地となるも。この孝養と。承る

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

かくして、この寺を讃岐國志度寺と號し、毎年法華八講が行はれ、朝夕讀經の勤行怠りなく、佛法繁昌の靈地となつたのは、この房前大臣の亡き母に對する孝養から起つたのであると聞いてゐる。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ下𤲡「習はぬ……かへりみかさ（下懸都）の……ワキ上𤲡「三笠山……泊り定めぬ海士小舟（下懸憂き旅なれどたらちねの爲と思へば急がれて。日數積りの雪の空。〳〵。夜晝となく行く程に。名にのみ聞きし讃岐の國房前の浦に着きにけり〳〵）【三】シテ「さては（春旅づかれ飢に臨ませ御所望あるかとこそ思ひしに）月のため刈り除けよとの御諚かや昔もさる例あり……龍宮に取られしを（下懸ぞや。たとひ千尋の底のみるめなりとも。仰ならばさこそあるべけれ。昔天智天皇の御宇に。唐土より一つの名珠を渡されしを。この沖にて龍神に取られ）かづき上げしも……【五】ワキ「とてもの事に……御前にてそと（下懸いかに海士人。此度はあまの海に入りて玉取りたる所を）學うで御目にかけ候へ。シテ「さらばそと……御位になし給へと申ししかば（下懸さきに申して候だにも憚り候程に。何とて學び候べき。思ひもよらぬ事にて候。ワキ「いや苦しからぬ事たゞ學うで御目にかけ候へ。シテ「今の御子を世繼の位に立て給はば。かの玉をかづくべしとありしかば）子細あらじと……【七】ワキ「いかに申しあげ候……御事にて候程に（春御追善の御事は懇に申付けて候先々。剛喜ナシ）（下懸殘し置かれたる）御手跡を披いて御覽ぜられう（下懸御披見あらう）ずるにて候

古謠本（光悅本）

【一】子方「房前の……急ぎかの所に下り（光て）……。ワキ下𤲡「習はぬ……かへりみかさ（光都）の……ワキ「御急ぎ候程に……讃州（光ナシ）……かの者を御待ちあつて（光相待）……【三】地次第「天滿つ月も……刈らうよ（光シテ「刈て參らせうやう）【四】ワキ「暫く何と（光ナシ）明

珠を……ヨモ「さん候……又これなる島は(光をば新珠島と申候)かの珠を……子方「やあ(光いかに)これこそ房前の……ヨモ「あら……御身の上にて候ひける(光ナシ)ぞや……

【五】ワキ「とてもの事に……御目にかけ候へ(光シテ「いや〳〵たゝいま申候事さへいかゝにて候に。それまてはあまりにひんなふ候。ワキ「くるしからぬ事。たゝそとまなふて御目にかけ候へ)。シテ「さらはそと……その時人々力を添へ(光合せ)引きあげ……

綾鼓（あやつづみ）

寶（剛）

解說

【能柄】四番目　二段劇能

【人物】**ツレ**　女御、**ワキ**　天智天皇臣下、**狂言**　同從者、**前シテ**　御庭掃の老人、**後シテ**　同怨靈

【所】筑前國木丸皇居（桂の池畔）

【時】天智天皇御宇（八月）

【作者】能本作者註文に世阿彌の作とす。世阿彌の能作書に「戀の重荷、昔の綾の太鼓也」といつてゐる。その「綾の太鼓」を改作したものであらう。

【梗概】木丸の皇居御庭掃の老人が女御を見參らせて、戀心に亂れたので、これをあきらめさせる爲に、桂の池の桂木に綾の鼓を掛けて「これを打てその音が皇居まで聞えたならば、二度御姿を御見せ下さるであらう」といはれたのを、老人はたゞ戀の迷ひに思慮もなく打ち續けて、その音の出ないのを歎いて、池に身を投げて死んでしまつた。その爲に女御は正氣もなくなられ、老人の怨靈が現れ出て、女御をお恨み申す。

【出典】これは前項に述べたやうに「綾の太鼓」といふ古作を改修したもの

で、これと同一系統のものに、「戀重荷」があるから、その曲の解説に併せ述べることとする。

【概評】〔戀重荷〕で比較して考へることとする。

【一】

○木の丸の皇居―筑前國上座郡朝倉にあつた天智天皇の行在所を申す。新古今集天智天皇の御製に「朝倉や木の丸殿にわれ居れば名乘りをしつゝ行くは誰が子ぞ」

○しづ心なき―心の亂れて落着きのないこと。

○戀には上下をわかぬ習ひ―諺。

○不便―氣の毒。

【一】

後見、立木に綾鼓をつけて正面先に出す。

ツレ女御、面小面・髮・髮帶・天冠・襟白赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束にて出で、脇座に床几にかゝる。

名乘笛にて、ワキ天智天皇の臣下、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に出で、

ワキ「これは筑前の國木の丸の皇居に仕へ奉る臣下にて候。さてもこの所に桂の池とて名池の候に。常は御遊の御座候。ここに御庭掃の老人の候が。女御の御姿を見參らせ。しづ心なき戀となりて候。この事を聞しめし及ばれ。戀には上下をわかぬ習ひなれば。不便に思し召さるる間。かの池の邊の桂木の枝に鼓を掛け。老人に打たせられ。かの鼓の聲皇居に聞えば。その時女御の御姿見え給はんとの御事にて候程に。か

【一】

第一段

舞臺は筑前國木丸の皇居。ワキ天智天皇の臣下登場。

臣下「私は筑前國木の丸の御所にお仕へ申してゐる臣下です。さてこの御所に桂の池といふ名高い池があつて、いつもこゝで管絃などの御遊をお催しになるのですところがこの御庭掃除の老人が、女御の御姿をお見上げ申して、うかゝゝと戀心に亂れたのです。女御はこの事をお聞きになり、戀には上下の差別のないものだからと可哀想に思しめされ、かの池の傍の桂の木の枝に鼓を掛けて、これをその老人に打たせ、その鼓の聲が御所へ聞えたならば、その時には女御が御姿を見せてやらうと仰せ出されたのであります。それで、これからかの老人を呼び出してこの事を申し聞かせようと思ひます」

の老人を召して申し聞せばやと存じ候

狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言從者、着附段鬘斗目・長上下・小刀・扇の裝束にて、

狂言「御前に候

ワキ「いつもの御庭掃の老人に。急いで參れと申し候へ

狂言「畏つて候

といひて幕に向ひ、(ワキは脇座の次に着く)

狂言「いかに庭掃の老人。御召にて候間とうとう參られ候へ

【二】

といひて狂言座にくつろぐ。

シテ庭掃老人、面阿古父尉・尉髪・襟濃黄・着附小格子・水衣・腰帶・扇の裝束にて蔡等を手に持ちて出づ。

ワキ「いかに老人。汝が戀の事を忝くも聞し召し及ばれ。不便に思し召さるる間。桂の池の桂木の枝に掛け置かれたる鼓を。老人參りてうち候へ。かの鼓の聲皇居に聞えば。今一度女御の御姿を見えさせ給はんとの御事なり。急ぎ參りて

○とうとう―疾く〳〵の音便。

【二】

こ見物人に事件の發端を紹介して、さて狂言の從者にいひつけて老人を呼び出す。

【三】

シテ御庭掃除の老人登場。

臣下「おい老人。お前の戀の事が畏くもお耳に入り、可哀想に思しめされて、桂の池の桂の木の枝にお掛けになつてある鼓を、老人に打たせよ。その鼓の聲が御所へ聞えたならば、今一度女御の御姿を見せてやらうと仰せ出されたのだ。急いで行つて、鼓を打つがよからう」

鼓を仕り候へ

シテ「仰せ畏つて承り候。さらば參りて鼓を仕り候べし

ワキ「こなたへ來り候へ。（と作物の前へ伴ひ行き）この鼓の事にてあるぞ急いで仕り候へ

シテ「げにや承り及ぶ月宮の月の桂こそ。名にたてる桂木なれ。これは正しき池邊の枝に。かかる鼓の聲出でば。それこそ戀のつかねなれと。

『夕の鐘の聲添へて。又打ち添ふる日並の數

地次第「後の暮ぞ と賴め置く。後の暮ぞと賴め置く。時の鼓を打たうよ

【二】

シテ一聲「さなきだに。闇の夜鶴の老の身に

地「思ひを添ふる。はかなさよ

シテ「時の移るも白波の

地「鼓はなにとて。ならざらん

○月の桂―西陽雜俎に「舊言、月中有桂有三蟾蜍一、故異書言、月桂高五百丈、下有二一人一常斫レ之、樹創隨合、人姓吳名剛、西河人、學レ仙有レ過、謫令レ伐レ樹」などと支那で月中にあるといはれた傳說の木。古今集壬生忠岑の歌にも「久方の月の桂も秋はなほ、もみぢすればや照りまさるらん」

○戀のつかね―戀心を慰める種。古今集讀人不知の歌に「あはれてふ言だになくは何をかは戀の亂れの束ね緒にせん」

○夕の鐘―つかねなれといふを夕にいひかけた。

○日並の數―日數の重なること。

○後の暮―明日の夕暮。

○時の鼓―時刻を知らせる爲に打つ鼓をいふ。

【二】

○闇の夜鶴の―夜鶴は夜巢にこもつてゐる鶴。「木賊」にも「子を思ふ闇の夜鶴の聲」こゝには老の形容として用ゐたのである。

○時の移るも白波の―時の移るのも知らずを白波にいひかけた。

老人「御仰せ出、ありがたくお受け致しました。それでは、早速參つて鼓を打ちませう」

臣下「ではこちらへ來い」

（桂の池の傍へ連れて行き、鼓を見せて、）

臣下「この鼓だ。急いで打つがよからう」

（老人桂の木の傍に立つて、）

老人「話に聞いた月世界の桂は名高い木だけれど、實際に見ることは出來ないが、この桂の木は確かにこの池の傍にあるのだ。そしてこの枝にかゝつてゐる鼓が鳴れば、私の戀も慰めることが出來るのだ。おゝ夕暮の鐘が聞えるわ。また今日も逢ふことが出來ないで、逢はぬ日が積つて行くのか。しかしこの次にこそきつと逢へるだらう。さあ鼓を打たう」

（鼓を打つて、）

【三】

老人「この老いぼれとなつて、さうでなくてさへものの分別を失つてゐるのに、その上戀の惱みを加へようとは、われながら情ないことだ。かうして時の移るのも知らないで、一所懸命打つてゐるのに、どうして鼓は鳴らないのだらう。

シテサシ『後の世の近くなるをば驚かで。老に添へたる戀慕の秋

地『露も涙もそぼちつつ。心からなる花の雫の。草の袂に色添へて何をしのぶの亂れ戀

シテ『忘れんと思ふ心こそ

地『忘れぬよりは。思ひなれ

（舞クセ）

地クセ『然るに世の中は。人間萬事塞翁が馬なれや。隙行く日數移るなる。年去り時は來れども。終に行くべき道芝の。露の命の限りをば。誰に問はましあぢきなや。などされば。これ程に。知らばさのみに迷ふらん

シテ『驚けとてや東雲の

地『眠りをさます時守の。打つや鼓の數しげく。音に立たば待つ人の面影もしやみけしの。綾の

○後の世の近くなる―年老いて來世（死）に近づく。

○心からなる花の雫の―心からは自分勝手の心からとの意。秋を承けて、露、花草といふ。花の雫は戀心の、草の袂は賤しい身の喩。

○忘れんと思ふ心こそ―忘れようと心を盡す方が、戀心に惱んでゐるよりもなほ苦しい。續拾遺集藤原實氏の歌に「面影を忘れんと思ふ心こそ別れしよりも悲しかりけれ」

○人間萬事塞翁が馬―禍福吉凶の定め難い喩。淮南子十八に「夫禍福之轉而相生、其變難見也、近塞上之人有善術者、馬無故亡而入胡、人皆弔之、其父曰、此何遽不能爲福乎、居數月、其馬將胡駿馬而歸、人皆賀之、其父曰、此何遽不能爲禍乎、家富良馬、其子好騎、墮而折其髀、人皆弔之、其父曰、此何不遽爲福乎、居一年、胡人大入塞、丁壯者引弦而戰、近塞之人、死者十九、此獨以跛之故、父子相保」

○隙行く日數―日の早く立つことを「白駒過レ隙」といふので、馬の字を承けて綴つた。

○道芝の露の命の―狹衣物

このやうな老人でありながら、死期の近づいて來ることに氣はつかず、年をとつて愈〻戀慕の思ひを增し、涙に濡れ暮らしてゐるのだ。これもわが心から勝手に悲しい思ひをしてゐるのだ。どうしてこの樣に戀に心が亂れるのであらう。あゝ忘れてしまひたい。忘れてしまひたいと思ふのだが、忘れようとすればなほ忘れられない、忘れようと苦心する方が戀心よりはなほ苦しいのだ。――

一體この世の中は、樂しい事悲しい事、まわり持ちで、年月が過ぎて、やがては誰も彼も死んで行くのだ。結局人生は果敢ないものだ――いやこのやうな事が分つてゐるなら、何故自分はこれ程戀に迷ふのであらう。――

明方の時の鼓は、このやうに人生の果敢ないことを知れといつて打つのであらうが、私はやはりあの御方のお姿が見えるかも知れないと思つて、その爲に一所懸命この鼓を打たう」

と鼓が綾絹を被せた音のしないものだといふことを知らないで、

語の歌「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」を引いた。
○これ程に知らば—人生の無常であるとの理を知つて居るならば、何故迷ふのであらう。
○もしやみけしの—もしや見ゆを御衣に、御衣の綾を綾の鼓にいひかけた。
○綾の鼓—音のしないやうに鼓の皮に綾の絹がかけてあるのである。
○怪しの太鼓や—鼓の綾をあやしにいひかけた。
四○人や待つらん—人は女御を指す。
○時の鼓のうつる日—鼓を打つを移るにいひかけた。
○頼めし人—約束した人。あてにした人。
○こは何となる神も—何となるを鳴神といひかけ、古今集讀人不知の歌「天の原踏み濟かし鳴神も思ふ中を

鼓とは知らずして。老の衣手力添へて。打てども聞えぬは。もしも老耳の故やらんと。聞けども聞けども。池の波窓の雨。いづれも打つ音はすれども。音せぬものはこの鼓の。あやしの太鼓やなにとて。音は出でぬぞ

四地ロンギ『思ひやうちも忘るると。綾の鼓の音も我も出でぬを人や待つらん

シテ『出でもせぬ雨夜の月を待ちかぬる。心の闇を晴らすべき時の鼓も鳴らばこそ

地『時の鼓のうつる日の。昨日今日とは思へども

シテ『頼めし人は夢にだに

地『見えぬ思ひに明暮の

シテ『鼓も鳴らず

地『人も見えず。こは何となる神も。思ふ中をばさけぬとこそ聞きしものをなどされば。かほど

老人「老人の力一杯に打つのに、音の聞えないのは、もしや自分の耳が遠くて聞えないのであらうか。それにしても、池の波の音や窓を打つ雨音はよく聞えるのに、この鼓だけ音のしないのは變だ。どうして音が出ないのだらう」

四老人「鼓を打てばこの憂みを忘れることも出來ようかと、一所懸命打つのだが、音がしない。音がしないから、私も御前へ出られないのを、あの御方はお待ちになつていらつしやりはしないか知ら。いつまで經つても鼓は鳴らないのだ。丁度雨夜に月の出るのを待ちかねてゐるやうなもので、この心の闇を晴らす鼓の、音の出る時はありはしないのだ。このやうな戀を思ひ染めたのは、昨日今日のことのやうに思つてゐるのだが、もう永い時を過して、そしてあの戀しいお方には夢にもお目にかゝることは出來ないのだ。鼓は鳴らず、あの御方のお姿は見えず、一體この後どうなることだらう。神樣でも、思ひあつた中はお裂きにならないと

ばさくるものかは」を引いた。
○生けらんものを―生きる甲斐がないものをとの意「生け」「池」と音を重ねた。

【間】

○こゝをせんどと―今が大事な折であると。「せんど」は「せど」、わけ目の意。

に縁なかるらんと。身を恨み人をかこち。かくては何のため。生けらんものを池水に。身を投げて失せにけりうき身を投げて失せにけり

シテ中入。

【間】

狂言、仕手柱際に出でて、

狂言「扨も〳〵あはれなる事かな。唯今の老人は。鼓の鳴らぬ事を歎き。身を投げ空しくなりて候。誠にいつの頃にか桂の池へ行幸の折節。女御を見奉りしづ心なき戀となりて候を。この事を聞し召し及ばされ。戀は上下に限らぬものなればとて。不便に思し召し。池の邊の桂の木に。綾にて鼓を張り掛け置き給ひ。その鼓を打ち鳴らすならば。戀を御叶へあるべきとの御事にて候間。ありがたく思ひ鼓を打ち候へども。更に音は出で申さず候。常の鼓さへ打ちつけぬ者が。打てばとて鳴らぬものにて候。況んや綾にて張りたる鼓ならば。こゝをせんどと打ち申し候へども。鳴り申さず候により。この上は命ありとても詮なしとて。池へ身を投げ空しくなり申して候。誠に老人の心中思ひやられ。われ等も涙を流して候。よく〳〵思へば綾の鼓は鳴らぬものにて候が。老人の及ばぬ戀を留めさせらるべきとの御謀にて候べし。いや獨言を申さずとも。老人の空しくなりたる由申し上げばやと存ずる

ワキの前に出で、

狂言「いかに申し候。御庭掃の老人鼓の鳴らぬ事を歎き。桂の池へ身を投げ空しくなり申して候

ワキ「なにとかの老人鼓の鳴らぬ事を歎き。桂の池へ身を投げたると申すか

狂言「なか〳〵の事急いで御覽候へ

いふのに、私はどうしてこのやうに御緣がないのであらう」
とわが身を恨み人を恨み、
老人「このやうな有樣では、生きてゐても何の甲斐もない」
と桂の池に身を投げて死んでしまつた
身投げした心で退場。

ワキ「さらばその由申さうずるにて候

狂言引く。ワキ、ツレに向ひ、

【五】

ワキ「いかに申し上げ候。かの老人鼓の鳴らぬ事を恨み。桂の池に身を投げ空しくなりて候。かやうの者の執心も餘りに恐ろしう候へば。そと御出であつて御覽ぜられ候へ

ツレ『いかに人々聞くかさて。あの波の打つ音が。鼓の聲に似たるは如何に。あら面白の鼓の聲や。あら面白や

ワキ『不思議やな女御の御姿。さもうつつなく見え給ふは。如何なる事にてあるやらん

ツレ『うつつなきこそ理なれ。綾の鼓は鳴るものか。鳴らぬものを打てといひし事は。わが現なき初めなれと

ワキ『夕波騒ぐ池の面に

【五】

○そと―一寸。

○現なく―正氣がない。

○夕波騒ぐ―初めなれと言ふといひかけた。

第二段

【五】

御殿に本の丸の皇居。ワキ臣下は狂言の連者から老人が身投げした事を聞き、女御の御前に出て、臣下「申し上げます。かの老人は鼓の鳴らない事を恨んで、桂の池に身を投げて死んでしまひました。このやうな者の執心は餘り怖しうございますから、一寸御出でになつて、御覽遊されては如何かと存じます」

女御は桂の池へ出られた態で、

女御「そなた達にあの聲が聞えるか。あの波の打つ音が鼓の聲に似てゐるのは、どうしたことであらう。あゝ面白い鼓の聲だ。あゝほんとに面白い」

女御は狂氣の態。臣下は驚いて、

臣下「これは變だ。女御の御姿がまるで御正氣のない御樣子なのは、これは一體どうした事だらう」

女御「正氣のないのも當然だ。綾の鼓は鳴る筈がないのだ。鳴りもしない鼓を打てといつたあの時に、もはや正氣を失つてゐたのであつた……おゝ、あの夕波の立ち騒ぐ池の面に、鼓を打つ音が交つて聞

【八】

○又たち歸る―波の立ち歸るを、執心のこの婆婆へ立ち歸るにいひかけた。

○一念嗔恚の邪淫の恨み―邪淫の嗔恚(怒り)から出た恨みの一念。

○魔境―佛道の修行を妨げる魔障の多い所。外道。

○小山田の苗代水は―後撰集讀人不知の歌「小山田の苗代水は絶えぬとも心の池のいひは放たじ」を引いた原歌「心の池の」までは序で心に思ふ事を人にいひはしないとの意。

○心づくしの木の間―古今集讀人不知の歌「木の間より漏りくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」を引いて、月の桂とつゞけた。

女御『猶打ち添ふる

ワキ『聲ありて

【八】出端の囃子にて、後ジテ老人の怨靈、面大惡尉・白頭・金入鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶・打杖の裝束にて鐘木杖をつき橋懸に出で、一の松に立ち、

後ジテ『池水の。藻屑となりし老の波

地『又たち歸る執心の恨み

シテ『恨みとも歎きとも。いへばなかなか愚かなる

地『一念嗔恚の邪淫の恨み。晴れまじや晴れまじや心の雲水の。魔境の鬼と今ぞなる

シテ舞臺に入り、

シテ『小山田の苗代水は絶えずとも。心の池のいひは離さじとこそ思ひしに。などしもされば情なく。鳴らぬ鼓の聲立てよとは。心を盡し果てよとや。心づくしの木の間の月の

地『桂にかけたる綾の鼓

えるわ」

臣下「いかにも幸が致します」

【八】

後ジテ御庭掃除の老人の怨靈登場。

怨靈「この老人は池水の藻屑と消えたのですが、やはり執心が殘つて、またこの婆婆へ歸つて、お恨み申しに參りました。いや恨みとか歎きとかいふ言葉では、この苦しい思ひはいひ現せません。戀を失つた腹立ちの恨みは、どうあつても晴らすことが出來ません。私は今は魔道の鬼となつたのですぞ」

怨靈「私もこんなことは言ふまい、言ふまいと思つてゐたのだが、何故あれほど無情な、鳴らぬ鼓を鳴らせと仰しやつたのです。かうして心も盡きはてて死ねと仰しやつたのですか。あの桂にかけた綾の鼓が鳴るものか、打つて御覽なさい。さあ早くお打ちなさい」

○責め鼓―打てやと責めるを攻鼓といひかけた。攻鼓は敵軍に攻め入る合圖の鼓
○よせ拍子―太鼓の打ち方の名。
○笞―罪人を打つ鞭。
○さて懲りや―さて懲りたか。

【七】
○ぜつ鬼―責鬼か。刹鬼か。
○阿防羅刹―地獄の獄卒のこと。牛頭人首で、手に剛鐵劍を持つといふ。

シテ『鳴るものか鳴るものか打ちて見給へ
地『打てや打てやと責め鼓よせ拍子とうとう打ち給へ打ち給へとて。笞を振りあげ責め奉れば。鼓は鳴らで悲しや悲しやと。叫びまします女御の御聲。あらさて懲りやさて懲りや

【七】
地『冥途のぜつ鬼阿防羅刹。冥途のぜつきあはうらせつの。呵責もかくやらんと。身を責め骨を碎く火車の責といふとも。これにはまさらじ恐ろしやさて何と。なるべき因果ぞや
シテ『因果歴然は目のあたり
地『歴然は目のあたり。知られたり白波の池の。邊の桂木に掛けし鼓の時も分かず。打ちよわり心つきて。池水に身を投げて波の藻屑と沈みし身の。程もなく死靈となつて。女御につき祟つて。笞も波も打ちたたく池の凍の東頭は。風渡

○池の凍の東頭は―和漢朗詠集菅原篤茂の詩句「池凍東頭風度僧、窓梅北面雪封褰」を引いた。
○因果歴然―因果應報の理の明かなこと。

と怨靈は笞を振上げて女御をお責めするが、鼓は鳴らないので、
女御「あゝ悲しい／＼」
と女御がお叫びになる。
怨靈「さあこれにお懲りになつたか」

【七】
女御「身を責めて骨をも碎くやうなこの苦しみ、地獄の惡鬼獄卒の責め苦もこのやうであらうかと思はれるばかりだ。いや地獄の火の車の責め苦もこれほどではあるまい。あゝ恐しい、何といふ因果であらう」
怨靈「因果應報はこの通り明らかなものですぞ」
誠に因果應報は明らかなもので、先にこの池の傍の桂にかけた鼓を少しも休まず打ち續けて、力も心も弱り果て、池に身を投げて死んだ老人が、間もなく死靈となつて、女御につき祟り、笞を振り上げてゐるうちに、池に氷つて紅蓮・大紅蓮地獄のやうになり、亡靈は

り雨落ちて。紅蓮大紅蓮となつて。身の毛もよだつ波の上に。鯉魚が躍る惡蛇となつて。まことは冥途の鬼といふともかくやと思ひ白波の。あら恨めしや恨めしや。あら恨めしや。恨めしの女御やとて。戀の淵にぞ入りにける

と常座にて留拍子を踏む。

身の毛もよだつやうな惡蛇となつて、戍程地獄の鬼といふのも、このやうであらうかと思はれる姿となり、

惡雲「あゝ女御樣、お恨めしい」

といつて戀の淵に飛び入つてしまつた

亡霊退場。

○紅蓮大紅蓮　八寒地獄の第七・第八。その身氷に閉ぢられて皮肉分裂し、紅の蓮華の如くになるといふ。

○鯉魚が躍る　鯉の王祥といふ孝子が母に鯉を食べさせたいと思つて、寒中氷の上に伏してゐると、體溫で氷が解け鯉が躍り出たといふ故事によつて、惡蛇の躍り出る形容としたので、ここにはもとの故事の意味はない。

○戀の淵　後撰集陽成院御製「筑波ねの峯より落つるみなの川戀ぞ積りて淵となりぬる」から出た語。

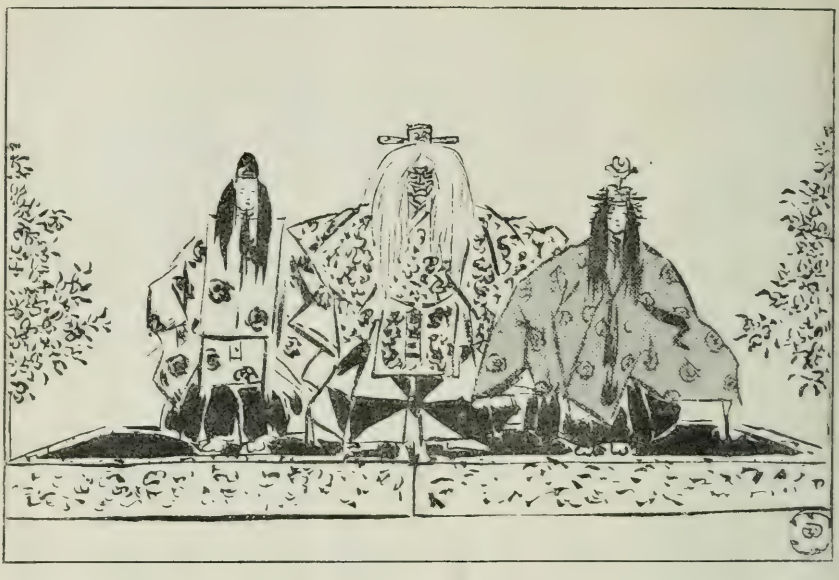
〔考異〕

諸流（寶剛）

金剛流との異同は殆どない。

古謠本（觀世流元祿二年本）

【一】ワキ「これは……皇居に仕へ奉る（元申）臣下にて……この事を申聞け（元つけ）ばやと……　【二】ワキ「いかに老人……老人參りてうち（元仕り）候へ……急いで鼓を（元ナシ）仕り候へ。シテ「仰せ畏つて……參りて（元此）鼓を仕り（元見參らせ）候べし。ワキ「（元中々の事）さらば彼鼓をやかて見せうするにて有そ）此方へ來り候へ……シテ「げにや承り及ぶ（元ひたる）月宮の……　【三】地クセ「然るに……年（元時）去り時は來り……　【四】シテ「出でもせぬ……心の關を晴す（元はかるべき……　【五】ワキ「いかに申し上げ（元ナシ）候。かの（元戀の）老人……身を投げ空しくなり（元ナシ）て候……そと御出であつて（元ナシ）御覽ぜ……



嵐山（あらし やま）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 當今の勅使、**ワキツレ** 同從者（二人）、**前シテ** 花守の尉（木守神靈）、**前ツレ** 花守の姥（勝手神靈）、**狂言** 藏王權現末社神、**後ツレ** 木守神、**後ツレ** 勝手神、**後シテ** 藏王權現

【所】 京都　嵐山

【時】 春（三月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに金春禪竹の作とす。栗田口勘進猿樂記に永正二年四月十三日勸進猿樂の初日に金春の演したことが見えてゐる。

【梗概】 勅使が吉野千本の櫻を移植遊ばされた嵐山の櫻見に出かけると、花守の老人夫婦が花に對して禮拜するので、その謂れを尋ねると、老人はこの櫻は吉野から移されたものであるから、吉野の木守勝手の明神が時折影向せられる。それで禮拜するのだと答へ、吉野と嵐山を比べ、御代をたゝ

へ、自分達がその神であるといつて消え失せる。やがてこの二神が神の姿を顯して、花を賞し舞を舞ふと、藏王權現も來現して、國土を照らし、衆生を守る誓ひを顯す」のである。

【出典】嵐山に吉野の櫻を御移植遊ばされたといふ事は、建長年中後嵯峨上皇が龜山の仙洞御所に御移植遊ばされた史實から出たものでこの事は續古今集にも、

龜山の仙洞に吉野山の櫻をあまた移し植ゑ侍りしが花の咲けるを見て、太上天皇

春毎に思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ

とある。この龜山殿は嵯峨檀林寺の跡で、嵐山の對岸であるが、やがて嵐山の櫻も亦吉野から移植したものといひ傳へられてゐるのでその俗說に從ひ、更に吉野との緣故により、修驗道の開祖役行者が感得したといふ藏王權現をシテとして出し、更にまた同じ吉野の木守・勝手神をこれに配して脚色したのである。藏王權現のことは、太平記卷二十六「吉野炎上事」に、

昔役優婆塞濟度利生の爲に金峰山に一千日籠つて、生身の薩埵を祈り給ひしに、この金剛藏王まづ柔和忍辱の相を顯し、地藏菩薩の形にて地より湧出し給ひたりしを、優婆塞首を揮つて、未來惡世の衆生を濟度せんとならば、かやうの御形にては叶ふまじき由を申されければ、卽ち伯耆の大山へ飛び去り給ひぬ。その後大勢忿怒の姿を顯し、右の御手には三鈷を握つて臂をいらゝげ、左の御手には五指を以て御腰を抑へ給ふ。一脫大に忿つて魔障降伏の相を示し、兩脚高く垂れて天地經緯の德を顯し給へり。

とある。

【概評】實說に據らないで、たゞ名所舊跡を緣とし、殆ど全く作者の空想によつて一曲を形作るものは、神事物にも、本曲の外にその例が少くないが、多くはその時に適ほしい和歌を引用して、これによつて文を綴つてゐるのであるが、この曲に引歌の甚だ少いのは、珍しい例である。それからシテ・ツレの人物も、普通の曲では前ジテと後ジテと同一人格で、たゞ前後姿を變へるだけであるが、この曲では前ジテ木守神靈が後にはツレとして登場し、後ジテには前段に現れなかつた藏王權現が新しく出場するのである。從つて前ジテは寧ろ前ツレとも見るべきものであり、しかもツレが本曲の重要地位を占めてゐて、後段に於てもツレの舞はあるが、シテの舞はない。かういふ脚色は他に例のない珍しいことである。

舞臺效果は櫻の嵐山を背景とした曲だけあつて、甚だ華麗であるが、これを本曲と趣の相似た「吉野天人」に比べると、彼は天女を主

人公とした優雅なものであり、これは權現を主人公とした雄健なもので、兩者とりぐ〳〵の趣が味はれるのである。

【一】

○吉野の花の種とりし―建長年中後嵯峨上皇が嵯峨の仙洞御所に吉野の櫻を移植遊ばしたことをいふ。委しくは解説に掲ぐ。

○嵐の山―嵐山を和らげた語。後嵯峨上皇の仙洞御所は嵐山の對岸であるが、いつしか嵐山の櫻も吉野山から移植したものと言傳へる樣になつたのである。嵐山は京都の西、葛野郡にある。

○當今―古謠本には一條院とある。

○千本の櫻―吉野山の七曲坂を登つた上は、見渡す限り櫻で美しい展望であるから、世にこれを「一目千本」といつて居る。千本の櫻は卽ちそのあたりの櫻をいふ

○ゑんまん十里―從來「圓滿」又は「遠萬」の字を充てゐるが、いづれにしても

【二】

後見、櫻の立木の作物を舞臺正面先に置く。

次第の囃子にて、ワキ當今の勅使、大臣烏帽子・赤上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、同樣の裝束（但し上頭掛萠黃・狩衣赤）のワキヅレ從者二人又は三人を隨へ、舞臺に入り、向合ひ、

ワキヅレ次第『吉野の花の種とりし。吉野の花の種とりし嵐の山に急がん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の櫻は。聞しめし及ばれたる名花なれども。ゑんまん十里の外なれば。花見の御幸かなひ給はず。さるにより千本の櫻を嵐山に移し置かれて候間。この春の花を見て參れとの宣旨を蒙り。唯今嵐山へと急ぎ候

といひて、ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ道行『都には。げにも嵐の山櫻。げにも嵐の山

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ今上陛下の勅使、ワキヅレ從臣を隨へて登場。

勅使「吉野の櫻を御移植になつた嵐山へ急いで行かう」

と次第に旅の目的地を述べ、

勅使「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さて、大和國吉野の一目千本の櫻の事は、帝の御聽にも達した有名な花ではあるが、十里餘も距つた遠い所なので、花見の行幸を遊ばすことがお出來になりません。それで、かの一目千本の櫻を嵐山へ御移植になつたのです。そして『この春の花はどのやうであるか、見て參れ』と仰せつけられたので、これから急いで嵐山へ行かうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

勅使「なるほど都には嵐山の外にこのやう

解し難い。恐らく「遠望」を訛つたのか、或は遠方を書き誤つたのであらう。
○宣旨—天子の御詞。
○けにも嵐の—都には他にこのやうな美しい花はあらじを嵐といひかけた。
○今ぞ三吉野の—今ぞ見るを三吉野といひかけた。三は美稱。
○花は雲かと詠めける—古今集序に「春のあした吉野山の櫻は人麻呂が心には雲かとのみなんおぼえける」とあるを引いた。
○その歌人—柿本人麻呂を指す。
○よそ目になれば猶しもの—近く見るよりは遠く見る方が一層美しいとの意。

【二】

○雲も上なき—花の梢ばかりでなく、花雲もこの上なく勝れて美しいとの意。

櫻。千本の種はこれぞとて。尋ねて今ぞ三吉野の。花は雲かと詠めける。その歌人の名殘ぞと。よそ目になれば猶しもの。眺め妙なる、けしきかな眺め妙なるけしきかな

ワキ「その歌人の名殘ぞと」と正面に向き二三足出で、またもとへ歸りてワキヅレと向合ひ、一同嵐山に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや嵐山に着きて候。心靜かに花を眺めうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

ワキ以下脇座へ行き下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ花守の扇、面小牛扇・扇髮・襟淺黃・着附小格子厚板・茶絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、萩箒を持ち、ツレ花守の姥、面姥・姥髮・帶・襟朽葉色・姥着物・無色唐綾・淺黃縫水衣の裝束にて移箒を持ち、ツレを先に立てて幕を出で、橋懸にて向合ひ、

シテ一聲『花守の。住むや嵐の山櫻。雲も上なき。梢かな

二人とも正面に向き、

な花の美しい所はあるまい、流石一目千本の櫻を御移植になつたものだといふことが直ぐ分る。さう思つて眺めて見ると全く柿本人麻呂が『吉野の花は雲のやうだ』といつた通り、嵐山の櫻も遠くから眺めた景色が一層立派だ」

と遠くから花を眺めながら歩いてゐる間に嵐山に着いた態で、舞臺は嵐山となる。

勅使「道を急いだので、思ひの外早く嵐山に着いた。こゝでゆつくり花を眺めませう」

脇座へ行つて、嵐山の花を眺めてゐる態。

【三】

シテ木守の神靈花守の扇の姿をして、ツレ花守の姥の姿をした勝手の神樂と連立つて登場。花を眺める態で、

扇「かうして花番をして暮らしてゐる嵐山の花は、實にこの上もない美しい花盛りだ」

○春も久しき―千本の名にあやかつて、春も千代八千代久しい氣持がするとの意

○名に負ふ―有名な。

○後の世までの例―後世まで名勝として傳へられるとの意。

○御影山―君の惠みの御蔭を御影山といひかけ、山の如く安らかな意を以て一治まる御代―と續けた。御影山は大和國高市郡にあるがこゝには詞の綾に用ゐただけである。

○九重の内外に通ふ―嵐山の花見に都から往復することをいふ。

○花車―花見車。

○轅―車に牛をつなぐ長い柄。

○西に廻る日の―嵐山は都の西であるから車の西に向ふのと、日の西に向ふのとを兼ねていつた。

○影ゆく雲の―「影ゆく」は日のかげること。日のかげる雲、雲の嵐、嵐山といひつづけた。

○戸無瀬―嵐山の麓を流れる大堰川の急流をいふ。夫木抄に「吹きおろす春の嵐の山風に戸無瀬の瀧の花の白波」

ツレ二句『千本に咲ける種なれや。シテ(向合ひ)『春も久しき。氣色かな

二人とも舞臺へ入り、ツレは眞中に立ち、シテは常座に留まりて正面に向き、

シテサシ『これはこの嵐山の花を守る。夫婦の者にて候なり。シテ(向合ひ)『それゑんまん十里の外なれば花見の御幸なきままに。名に負ふ吉野の山櫻。千本の花の種とりて。この嵐山に植ゑ置かれ。後の世までの例とかや。これとても君の惠みかな

シテ下歌『げに頼もしや御影山治まる、御代の春の空。上歌『さも妙なれや九重の。さも妙なれや九重の。内外に通ふ花車。轅も西に廻る日の影行く雲の嵐山。戸無瀬に落つる白波も。散るかと見ゆる花の瀧。盛り久しき、氣色かな盛り久しき氣色かな

櫻吉野千本の櫻を移したものである爲でせうか、一面に咲き揃つてゐる花を見てゐると、千代八千代幾久しくめでたい感じがします」

こいひながら勅使に近づき、

尉「私どもはこの嵐山の花の番をしてゐる夫婦の者です」

こ見物人に自己紹介をし、また花を眺める態で、

尉「遠く十里も距つた所では、花見の行幸も遊ばされないので、あの有名な吉野の一目千本の櫻を、この嵐山に御移植遊ばして、後世までの名勝と遊ばしたのであらう。これと申すのも、大君のありがたい御惠みだ。ほんとに大君の御蔭によつて、天下泰平に治まるのは、ありがたいことだ。

おゝこの美しい眺めに誘はれて來る、都人の花見の車が實に賑はしいことだ。かうして夕日のかげつて行く嵐山の景色の美しさ、戸無瀬の瀧の白波も花の散るやうで、實にめでたい盛んな景色だ。

こいつて老人夫婦は花に向つて禮拜する。

【三】

○渇仰—深く信仰すること
○おこと—そなた。

○木守勝手の神—木守の神は吉野山中、水分山に鎭座の神。水分神社といひ水の配分を司る神でミクマリと稱へたのが、訛つてミコモリ、コモリとなり、木守の字を充てるやうになつた。それで花を守る神として本曲を趣向したのである。勝手の神は吉野七曲坂の西側に鎭座の神、憂憂命を祀る。
○影向—神が姿を現して、來現し給ふこと。
○さしもこそ厭ふ憂き名の嵐山—新千載集藤原良基の歌。下句「花の所といかでなりけん」

【三】

と、シテとツレと入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「不思議やなこれなる老人を見れば。花に向ひ渇仰の氣色見えたり。おことは如何なる人やらん

シテ「さん候これは嵐山の花守にて候。又嵐山の千本の櫻は。皆神木にて候程に。花に向ひ渇仰申し候

ワキ「そも嵐山の千本の櫻の。神木たるべき謂れはいかに

シテ「げに御不審は御理。名に負ふ吉野の千本の櫻を。移し置かれしその故に。『人こそ知らね折折は。木守勝手の神ともに。この花に影向なるものを

ワキ「げにやさしもこそ厭ふ憂き名の嵐山。「とりわき花の名所とは。何とて定め置きけるぞ

勅使は老人夫婦が花に向つて禮拜してゐるのを見て、

勅使「これは不思議だ、この老人は花に向つて丁寧に禮拜してゐるやうだ。（壽に向ひ）一體あなたはどういふ方です」

壽「はい、私どもはこの嵐山の花守でございます。この嵐山の千本の櫻は皆神木ですから。花に向つて丁重に禮拜してゐるのです」

勅使「して、嵐山の千本の櫻が神木であるといふのは、どういふ謂れがあるのです」

壽「いかにも御不審は御尤もです。この嵐山の櫻は吉野の千本の櫻を御移植になつたのですから、それで人は知らないが、吉野の木守・勝手の神が折々この花へ御來現になるのです」

勅使「なるほど。ところで、花にとつては最も厭な嵐といふ名のつく嵐山が、どうして殊更花の名所に定められたのでせう」

シテ「それこそ猶も神慮なれ。名に負ふ花の奇特をも。顯さんとの御惠み

シテ（向合ひ）『げに賴もしや御影山。靡き治まる三吉野の。神風あらばおのづから。名こそ嵐の山なりとも（と正面に直す）

地下歌『花はよも散らじ。風にも勝手木守とて。夫婦の神はわれぞかし。音たかや嵐山。人になし知らせ給ひそ（とシテワキに向く）

ツレ地謠座前へ行き下に居り、ワキも下に居る。

【四】

シテ次の謠に合せて仕科。

地上歌『笙の岩屋の松風は。笙の岩屋の松風は。實相の花盛り。開くる法の聲立てて今は嵐の山櫻。菜摘の川の水清く。眞如の月の澄める世に。五濁の濁りありとても。流れは大堰川その水上はよも盡きじ。いざいざ花を守らうよいざいざ花を守らうよ（とツレに向き）。春の風は空に滿ちて、

○神風あらば—神の守護あらば。嵐の緣で神の力を風に喩へたのである。

○風にも勝手—風にもうち勝つを勝手にいひかけた。○音たかや—聲の高いのを制する意と、嵐の音の高いのとを兼ねた。

【四】○笙の岩屋—吉野大峯の國見山にある岩屋。新今古集日藏上人の歌に「御獄の笙の岩屋に籠りてよめる」と詞書して「寂寞の苔の岩屋の靜けきに涙の雨の降らぬ日ぞなき」○實相の花盛り—實相は虛無の反對で萬有の實體。これを花に喩へていふ。○開くる法—花を承けて「開くる」といひ、法華經の意を含めて讀經の聲といふ○菜摘の川—吉野山中國栖村の邊を流れる川。

ツレ「いやそれこそ特に神の思召で、花の奇特をも顯さうといふ、ありがたいお惠みなのです」

樹蔭「ほんとにありがたい泰平の御世で、天下がうち治まつてゐるのですから、神の力があれば。たとひ所の名が嵐であらうとも、花はよもや散りはすまい。神の力は風にも勝つものですから。……かういふ自分は實は勝手・木守といふ夫婦の神なのだ。——いや大きな聲をして人に知らして下さるな」

【四】

樹蔭「あの吉野の笙の岩屋に吹く松風は法華經讀誦の聲のやうに響くが、こゝ嵐山も爛漫たる花盛りの樣は佛法の實相を示してゐるやうだ。あの吉野の菜摘川は水が清くて、月の如く澄み通つた眞如の姿を示してゐるが、こゝ大堰川でも、水嵩が多く、たとひ末の方は俗界に濁つても清い水上は恐らく盡きはしないだらう。さあ／＼我々はこの花の番をしよう。春の風が空一面に吹いて、梢を吹き折つて

春の風は空に滿ちて。庭前の木を切るとも神風にて吹き返さば妄想の雲も晴れぬべし。千本の山櫻のどけき嵐の山風は。吹くとも枝は鳴らさじ（と作物を見）。この日も既に吳竹の。夜の間を待たせ給ふべし（とワキを見）。明日も三吉野の山櫻。立ちくる雲にうち乘りて。夕陽殘る西山や。南の方に行きにけり南の方に行きにけり

「夕陽殘る西山や」と橋懸へ行き、幕をすてゝ「南の方に行きにけり」と正面に開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて幕に入る。

【間】

來社來序にて、狂言來社神、來社頭巾・面袋髭・上頭掛・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。和州三吉野の藏王權現に仕へ申す來社の神にて候。扨もわが住む吉野山は。天下に隱れなき花の山にて。峯も尾上も花ばかりにて候。又千本の櫻の御事を。君聞しめし叡覽ありたく思しめせども。遠万十里の外へは行幸なり難く。されば都の內へ移し叡覽あるべしとて。千本の櫻の種をとり。都の西嵐山へ植ゑ給へば。もとより君の御惠み深き故。花も心あるにや色美しく咲き亂れ。殊に木守勝手の兩神花を守り給ふにより。吹く風も嵐の峯をよぎて吹き申し候。さる間當今に仕へ御申しある臣下殿。花の盛りを御覽ありて奏聞あるとの御事にて。唯今嵐山へ御下向なされ候を。木守勝手の兩神嬉しく思しめし。かりに顯れ御詞をかはし給ふが。重ねて奇特を見せ申も、神風が吹き返すと直ぐもと通りに生長するやうに、人はたとひ迷ひの心を起しても、神佛を信じれば、すぐ妄想は晴れるのだ。この咲き揃つた嵐山の花盛り、吹く風ものどかで、實に天下泰平だ」

と花の盛りを賞し世の太平を稱へて、さて勅使に向ひ、

「時經、おやもう日が暮れて來たが、今夜ここでお待ちなさい。また明日も花見が出來ようから」

といつて、老夫婦は雲に乘り、夕日の傾く西山から南に向ひ、吉野の方へ行つてしまつた。

○眞如の月—眞如は眞實不變の意で、實相と同義。往生要集に「色卽空故謂之眞如實相」これを月に喩へた。
○五濁—世に行れる五つの惡まはしいこと。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁をいふ
○大堰川—嵐山の北を流れる川。流れは多いを大堰川にいひかけた。
○春の風—迷ひの心に喩ふ
○庭前の木を切るとも—和漢朗詠集輔仁の詩句「春風暗剪二庭前樹一、夜雨偸穿二石上苔一」を借りた。
○神風—悟りの心に喩ふ。
○妄想の雲—妄想は迷ひの心で、眞如の光を藏ぶものであるから、前に眞如を月に喩へたに對し、これを雲に喩へた。
○枝は鳴らさじ—泰平の相。王充の論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條」より出づ。
○吳竹の—日も暮れといひかけ、竹の節を夜にいひかけた。
○明日も三吉野の—明日も見んを三吉野にいひかけた
○西山—嵐山の山つゞきである京都西方の諸山。
○南の方—吉野を指す。

さんとの御事にて候。その間我等にも罷り出で。一曲仕り慰め申せとの御事により。是まで罷り出でて候。臣下殿は何方に御座あるぞ。(ワキを見て)いや是に御座ある。急いで一曲奏で申さう

囃子座前へ出で、

狂言『めでたかりける時とかや。(三段舞)やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も。顯れ出でて謠ひ奏で。これまでなりとて末社の神は。元の社に歸りけり

と舞ひ納めて幕に入る。

【五】

下端の囃子にて、後ヅレ木守神、面郡鄙男・黑垂・風折烏帽子・赤地金緞鉢卷・襟淺黃・着附段厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、同じく勝手神、面連面・黑垂・天冠・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・長綿・緋大口・腰帶・扇の裝束にて、二人とも櫻の折枝を持ち て出で、橋懸に立ち、

地 三吉野の。三吉野の。千本の花の種植ゑて。嵐山あらたなる神遊びぞめでたきこの神遊びぞめでたき

後ヅレ(二人)色々の

地 色々の。花こそまじれ白雪の。木守勝手の。惠みなれや松の色

二人とも舞臺に入り、

ツレ(二人) 青根が峯ここに

○嵐山あらたなる—「あら」の音を重ねた。
○神遊び—神の舞樂。

○白雪の木守—白雪の籠るを木守にいひかけた。白雪は櫻花の形容。

【五】

後段

後ヅレ木守神は男裝、同勝手神は女裝して、二人とも櫻の枝をもつて登場。

吉野の千本の櫻を移植した嵐山で、この木守・勝手の神が神樂を催されるのは、まことにめでたいことである。

木守 勝手 われ〳〵木守・勝手の神が丹誠した結果であらうか、色々の花が咲き亂れて、一面白雪のやうだ。そしてその間に松の青い色が交つていかにも美しい。おゝさういへば、吉野の青根が峯に似た小倉山が見える。向ふには嵯峨の原が見

地。青根が峯ここに。小倉山も見えたり。向ひは嵯峨の原。下は大堰川の。岩根に波かかる龜山も見えたり。萬代と。萬代と。囃せ囃せ神遊び。千早振る

と大小前へ出で花をすてゝ扇を持ち、

〔天女舞〕　二人相舞

地上歌　神樂の鼓聲澄みて。神樂の鼓聲澄みて。羅綾の袂を飜し飜す舞樂の祕曲も度重なりて。感應肝に銘ずる折柄。不思議や南の方より吹きくる風の。異香薫じて瑞雲たなびき。金色の光輝き渡るは。藏王權現の來現かや

とツレ仕手柱際に行き、橋懸に向ひて扇にて後ジテを迎ふる心。

【六】

早笛にて、後ジテ藏王權現、面大飛出・赤頭・唐冠・赤地金襴鉢卷・襟紺・紫附段屋板・給狩衣・赤地半切・腰帶・扇の装束にて舞臺に入り、次の謠に合せて舞ふ。（ツレは早笛になりたる時地謠座前へ行き下に居る）

【六】
○青根が峯　吉野山の東嶺で、金峯の北に聳ぶ。松の色青きといひかけた。
○小倉山　嵯峨の西にあり大堰川を距てゝ嵐山と對す吉野の青根が峯に擬へていつたのである。
○嵯峨の原　嵐山の對岸にある平原。
○龜山　小倉山の南にありこの山と嵐山との間を大堰川が流れる。
○萬代　龜の齡は萬年といふので、龜の字を承けていつた。
○千早振る　神の枕詞。
○羅綾　うすものの絹。
○藏王權現　吉野金峯山に鎭座の金剛藏王權現。役行者が一千日金峯山に修行して感得した菩薩。忿怒身で右手に三鈷を握り臂をいからし、左手は五指を開いて腹を押さへ、三眼怒視して魔障降伏の相を示し、一足を擧げ一足は踏み、天地經緯の相をした、釋迦如來の變化身であるといふ。

【六】
木宇・勝手の二神祝言の舞を舞ひ、
木宇　かうして神樂の鼓の音も澄み渡り、羅綾の袂を飜して、舞樂の祕曲を舞ひ重ね、深い感に打たれてゐると、これは不思議だ、南の吉野の方から吹いて來る風が唯ならぬ香かし、めでたい雲がたなびき、金色の光が輝き渡つて來た。さては藏王權現が御來現になつたのであらうか」
木宇・勝手の神、藏王權現を迎へる心で神の方を見る。

【六】
後ジテ藏王權現登場。

えゝる。下には大堰川が流れて、白波が岩にかゝつてゐる。おゝ龜山も見えゝる。實にめでたい景色だ。さあ『萬づ代に榮えませ』と囃してくれ。神の舞樂を始めよう」

〔天女舞〕

○和光利物―佛菩薩が德光を和らげて世俗に交はり、衆生を利益すること。
○本覺の都―本覺とは宇宙法界の根本體たる眞如の理體をいふ。この法性眞如の本地を出で垂跡化現する意
○分段同居―分段は衆生がその業因によつて分々段々相應の果報を受けて六道に輪廻すること。同居は凡聖同居の畧で、佛菩薩が德光を和らげて、業因によつて輪廻してゐる衆生と交はり之を救濟すること。平家物語に―法性眞如の都より出でて、分段同居の塵に交り、愚痴の衆生に緣を結び給ふ―
○金胎兩部の一足をひつさげ―金胎兩部を具有した藏王權現が一足をあげ一足をさげて、天地經緯の德を示すの意。金胎兩部は金剛界と胎藏界との二。金剛界は智の世界、胎藏界は理の世界で、この二を眞言密教の根本教理とす。
○苦海の煩惱―人間界の情欲、苦海は人間界の苦の多く際涯のない喩、煩惱は心身を惱亂する情慾。
○青蓮のまなじり―佛の眼の喩、法華經に―足菩薩目如廣大青蓮華葉―
○金の峯―吉野金峯山。

地『和光利物の御姿。和光利物の御姿
後ジテ『われ本覺の。都を出でて。分段同居の塵に交はり
地『金胎兩部の一足をひつさげ
シテ『惡業の衆生の苦患を助け
地『さて又虛空に御手をあげては
シテ『忽ち苦海の煩惱を拂ひ
地『惡魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて。國土を照らし。衆生を守る。誓ひを顯し。木守勝手。藏王權現同體異名の姿を見せて。各々嵐の山に攀ぢのぼり。花に戲れ梢に翔つて。さながらここも。金の峯の。光も輝く千本の櫻。光も輝く千本の櫻の。榮ゆく春こそ。久しけれ

「各々嵐の山に攀ぢのぼり」とツレ二人は幕に入り、シテは「榮ゆく春こそ久しけれ」と仕手柱際にて留拍子を踏みて舞ひ納む。

德光を和らげて衆生を御救ひ下さる誠にありがたい御姿である。
權現、自分は本地の極樂淨土を出で、生死の迷界に輪廻してゐる俗界の衆生と交はり、金剛・胎藏の理智二面を兼ね、一足を下にさげ地を踏んでは、惡業に苦しむ衆生を助け、又手を空に高く擧げ天を指しては、娑婆世界の煩惱を拂ひ惡魔を降伏し、青蓮花の如き眼からは光明を放つて、國土を守り衆生を守る誓約を立てゝゐるのであつて、木守神も勝手神も自分と異名同體のものだ。今その誓約を顯して、この姿を見せるのだ―
と藏王權現も木守神・勝手神も皆嵐山に攀ぢ上り、花に戲れ梢の間を縣け廻られるのである。その樣は修驗道の靈山金峯山そのまゝで、千本の櫻のあたりの、光り輝く有樣、誠に幾久しくめでたい限りである。
藏王權現以下退場。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「さても和州吉野の千本の櫻は……嵐山に移し置かれて候間この春の花を（下懸嵐の山の花。今を盛りなる由君聞召し及ばせ給ひ。急ぎ）見て參れ……　【六】地「惡魔降伏の……藏王權現（寶下懸一體分身）同體異名の……

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「抑もこれは當今（元一條院）に仕へ奉る……花見の御幸かなひ給はずさるにより（元遂け給はさるにより）……嵐（元の）山に移し置かれて候間（元去間）……遊狂「都には……これ（元それ）ぞとて……猶しも（元に）眺め（元ナシ）妙なる（元花の）けしきかな　【二】シテ一聲「花守の……雲も（元に）上なき……　シテサシ「これはこの嵐（元の）山の……　上歌「さも妙なれ（元り）や……　【三】ワキ「不思議や……花に向ひ（元ナシ）渴仰の……ツレ「さん候……　又嵐山の（元此）千本の櫻は……ワキ「そも（元此）嵐山の……ツレ「げにや……花の名所（元在所）とは何とて定め置き（元給ひ）けるぞ　シテ「それこそ……御惠み（元ちかひ）　【四】地上歌「筆の……眞如の月の（元は）……千本の山（元ナシ）櫻のどけき……　【六】地「惡魔降伏の……藏王權現（元一體分身）同體異名の……

蟻通（ありどほし）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】ワキ　紀貫之、ワキツレ　同從者（二人）、シテ　老社人（實は蟻通明神）

【所】和泉國　蟻通明神

【時】平安盛期（四月）

【作者】能作書に應永年間の新作として本曲を擧げ、申樂談儀にも同樣世阿彌の作として數へてゐるが、同書に田樂增阿が世阿彌を批評した詞に「蟻通の初より終まで喜阿（田樂）」といひ、更にまた、

蟻通の「思ふべきかはとは、あら面白の御歌やゝなど、「これ六道の巷に定めをいて、六つの色を見する也」などやうなる所、「何となく宮寺なんど」（現行本にはないが、光悅本にはある）は、深夜の鐘の聲御灯の光」など、「夜毎（現行本にはない）灯火もなく、すずし（め）の聲も聞えず」かやうの所、皆喜阿かゝりなり。「神は宜禰が習はし」など、かくといひし也。「宮守一人も」のやうなる「ひ」文字、つまりて「ひつ」といひし也。

とあるのを見れば、勿論これは節扱ひについての說であるが、詞章も田樂の方にあつたものを、世阿彌が改作したのではなからうかと疑ふのである。能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌作とす。言經卿記文祿四年三月廿七日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗概】紀貫之が玉津島參詣の途次、和泉國で、急に日が暮れ大雨が降り、乘馬も倒れて、せん術もなく苦しんでゐると、老社人が來てそれは物咎めをする蟻通明神の神境へ馬を乘り入れた爲であらうといひ、その貫之なることを聞くと、それでは歌を詠んで神に手向けよといふ。貫之が一首の歌を詠むと、社人は深く感じ、和歌の物語などをする。そして貫之の乞ひによつて祝詞をあげ、やがて自分が明神であると打明けて鳥居の笠木に隱れる。

【出典】この事は、貫之集に、

紀の國に下りて歸り上る道にて、俄に馬の死ぬべくわづらふ所にて、道行き人立ちとまりていふやう、「これはこゝにいましつる神のし給ふならん、年頃社もなく、しるしもなけれと、いと畏くていましける神なり、さまざまかやうに煩ふ人々ある所なり、祈り申し給へよ」といふに、みてぐらもなければ、何わざすべくもあらず。唯手を洗ひて跪きて、ふし拜むに、「神おはしげもなしや、そもそも何の神とかいふ」といへば、「ありどほしの神となむ申す」といふを聞き、詠みて奉りける。そのけにや馬の心地やみにけり。

かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは

とあるに據つたのであらう。なほ蟻通明神の事は枕草子・大鏡・古事談にも出てゐる。

【概評】本曲のシテは老社人實は神靈で、普通の脇能の複式シテと同樣のものであるが、シテに前後の變裝がなく、從つて單式能又は半能と見られるのである。しかしワキの側から見れば、このワキほありふれた當今の臣下や神職ではなく、古今に勝れた和歌の名人で、その詠歌にめでて、特に神靈の影向を見るといふ、ワキの職能の最も發達した劇能の形をとつてゐるのである。ワキが歌人である故に神靈の影向せられるものには〔雨月〕もあるが、それはやはり複式で、しかもその後ジテに老社人に神靈の憑り移るといふ趣向をとつてゐるのである。本曲の如くシテの性質は複式能の前ジテに似てゐて、ワキの方は劇的に最も發達した樣式であるといふものは、他に類例が少い。シテとワキとの關係がこのやうな狀態にあるので、劇の結末「立廻」以後の行文は稍不自然な感を與へるものがあるが、大體に於て文段の推移が流動的で、四番目物らしい興味と脇能に近い莊重とを併有してゐる。やはり世阿彌の盛時、應永の頃には類型を脫

した佳作が多かつたのであらうと想はしめるのである。

【一】

○和歌の心を道として―玉津島明神は和歌三神の一であるから、和歌を思ふ心を旅行く道の力としてといふ意に綴つた。
○玉津島―紀伊國和歌浦にあり、玉津島明神は衣通姫を祀る。
○紀の貫之―紀文幹の子で御書所預、大内記、土佐守木工權頭等に歴任し、天慶九年に八十歳ばかりで沒した。古今和歌集撰者の一人で、その序文の筆者である〔草子洗小町〕参照。
○住吉―攝津國東成郡住吉にある住吉明神。玉津島明神・人麻呂明神と共に和歌三神として崇められた。〔高砂〕〔雨月〕参照。
○夢に寢て現に出づる―夜は旅の宿に夢を結び、夢がさめれば、宿を出て旅を續けるとの意。
○夜の關戸の明暮に―旅宿を夜の關に喩へ、その戸の開く意を夜の明ける意にかけて綴つた。

【二】

次第の囃子にて、ワキ紀貫之、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束（一人は太刀を持つ）にて、舞臺に入り向合ひて、

次第『和歌の心を道として。和歌の心を道として。玉津島に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは紀の貫之にて候。われ和歌の道に交はるといへども。未だ住吉玉津島に參らず候程に。唯今思ひ立ち紀の路の旅にと志し候

といひて、ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ道行「夢に寢て。現に出づる旅枕。現に出づる旅枕。夜の關戸の明暮に都の空の月影を。さこそと思ひやる方も雲居は跡に隔たり暮れ渡る空に聞ゆるは里近げなる鐘の聲里近げなる鐘

【二】

舞臺は初め京都で、ワキ紀貫之、ワキヅレ從者を隨へて着場。

貫之「長い旅の道も、歌道を思ふ心を力として、勇んで玉津島明神に參詣しよう」

と次第に旅の目的地を述べ、

貫之「私は紀貫之一寸。さて私は和歌の道にたづさはつてはゐるが、まだ住吉や玉津島に參詣したことがないので、今思ひついて、紀伊國の方へ旅に出かけようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

貫之「夜は旅の宿に假寢の夢を結び、覺めればまた宿を出て、旅に日を明かし暮らし、なつかしい都の空では、どんなにか美しい月影のさしてゐることであらうなどと思ひやつてゐるうちに、都を遠く離れてしまつたが、この日の暮れかゝつた

○雲居は跡に―雲居を京都の意と眞の雲の意とに兼ねて用ゐた。
○あら笑止や―あゝ困つたことだ。
○前後を辨へず―どうしてよいか慮置に困る意。
○燈火暗うしては―和漢朗詠集橋相公の詩句「燈暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲」を引いて、雨の序詞とした。虞氏は後に引く項羽の愛姿
○足をも引かず―雨の脚を馬の足にいひかけた。
○雖行かず虞奈何すべき―楚項羽が敵の漢軍に取圍まれた時に歌つた詩「力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈何」とある句を、馬の縁で引き「奈何すべき」と續けた。騅は項羽の愛馬の名。
○虞奈何―これを「ぐいいかゞ」と讀ぶのは、いの音を長く延ばしたのであらう。謠曲評釋に「愚意」の字を充てゝあるのは如何かと思ふ。

【二】

○瀟湘の夜の雨―支那湖南省洞庭湖の南を流れる瀟水と湘水の附近は風光が秀れてゐて、平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月。瀟湘夜雨、煙寺の聲

ワキ「さこそと思ひやる方も」と正面に向き二三足出で、またもとに歸り、「里近げなる」と謠ひながら一同脇座に行き、ワキは正面の方に向きて、（ワキヅレは下に居る）

ワキ「あら笑止や。俄かに日暮れ大雨降りて。しかも乘りたる駒さへ臥して（と馬を見る心にて面を伏せ。）前後をわきまへず候はいかに（と安坐し）。『燈火暗うしては數行虞氏が淚の雨の。足をも引かず雖行かず。虞奈何すべきたよりもなし。あら笑止や候。

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ老社人（蟻通明神）、面小牛尉・尉髮・翁烏帽子・樸淺黃・着附小格子厚板・縷單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、左手に傘を持ち、右手に松明を振りながら橋懸に出で、一の松に立ちて、

シテサシ『瀟湘の夜の雨頻りに降つて。遠寺の鐘の聲も聞えず。何となく宮寺は。深夜の鐘の聲。御燈の光なんどにこそ。神さび心も澄み渡るに。社

空に、入相の鐘が聞えて來るところを見ると、人里近く來たらしい」

といつてゐるうちに旅は進んだ態で、舞臺は和泉國蟻通明神の境内となる。俄かに大雨が降つて來た態で、

貫之　あゝ困つたことだ。急に日が暮れ大雨が降つて來て、おまけに、乘つてゐる馬さへ倒れてしまつて、どうしてよいか分らない。實に困つたことだ。この闇夜の雨に、馬は一歩も進まず、どうするすべもない、實に困つたことだ」

と當惑してゐる。

【二】

シテ蟻通明神、老社人の姿で、傘をさし松明をともして、登場。

社人「この夜に雨は頻りに降つて、遠い寺の鐘の聲も聞えない。一體宮とか寺とかいふものは、夜更けに鐘の聲が聞え、御燈明の光が照り輝いたりなどしてこそ、何となく神々しい感じがして、人の心も

晩鐘、漁村夕照の八景が傳唱せられてゐるので、瀟湘を夜の雨の形容に用ゐたのである。
○遠寺の鐘—これも瀟湘八景に據つて綴つた。
○宮寺—ことでは宮と寺との意。
○神さび—神々しい感じのすること。
○すずしめの聲—神を慰める歌舞で、神樂を指す。
○神は宜禰が習はし—神社の盛衰は神職の精勤如何によるといふ意の諺。海道記に「江尻太明神に詣づ……神慮は人知らず、宜禰がならはしに從ひて伏し拜みて通りぬ—宜禰は神職。
○和光—和光同塵の略。神德といふ意。
○無沙汰の—神仕へもせぬ怠け者のといふ意。

【三】
○その火の光—シテの社人は松明を持つてゐるからいつたのである。
○前後を忘じ—前後を辨へぬ。處置に困る。
○下馬は渡りもなかりけるか—下馬してお通りにならなかつたか。神前に馬を乘り入れる事は禁ぜられてゐて、これを下馬といふ。
○馬上のなき所か—馬を乘

頭を見れば燈火もなく（と松明を高く上げて舞臺先を見込み）。すずしめの聲も聞えず。神は宜禰が習はしとこそ申すに。宮守一人もなき事よ。よしよし御燈は暗くとも（と舞臺に入り）。和光の影はよも暗からじ。あら無沙汰の宮守どもや

と常座にて松明を上ぐ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】
ワキ「なうなうその火の光について申すべき事の候
シテ「このあたりにはお宿もなし。今少し先へお通りあれ
ワキ「今の暗さに行く先も見えず。しかも乘りたる駒さへ臥して。前後を忘じて候なり
シテ「さて下馬は渡りもなかりけるか
ワキ「そもや下馬とは心得ず。ここは馬上のなき所か

澄み渡るものであるのに、この社を見れば、燈火もなく、神樂の聲も聞えない。神の威光は神職の働き次第によるものだといふのに、宮守が一人もゐないとは、何といふ事だらう。いや〳〵構はない。御燈明の光は暗くても、まさか神の德光までが暗いといふこともあるまい。それにしても、怠け者の宮守ばかりだ」

こいひながら、貫之の居る方へ來る。貫之これを見て、

【三】
貫之「もうし、その火の光をお持ちになつてゐる方にお願ひしたいのですが」
社人「お宿の事ですか、この邊にはお泊まりになる所もありません。も少し先へお出でなさい」
貫之「この暗さで行先も見えず、おまけに乘つてゐた馬まで倒れてしまつて、どうしやうもなく困つてゐるのです」
社人「すると、こゝで馬をお降りにならなかつたのですか」
貫之「一體馬から降りる所だとは合點の行かないことですが、こゝは馬を乘り入れることの出來ない所なのですか」

り入れることの出來ない所か。
○蟻通の明神―和泉國泉南郡長滝村にある。
○かくぞと知りて―蟻通の神境であることを知りながら。

○宮居は蟻通の―宮居は有りを蟻にいひかけた。
○鳥居の二柱―鳥居の兩脚の立つ雲透―柱の立つを雲の立つにいひかけた。雲透は雲の絶え間。
○馬上に折り殘す―詩句を引いたのであらうと思ふが分らない。
○絲もて繫ぐ駒―拾葉抄に「春胸の勇める心青柳の絲もて繫ぐ風は吹くとも」（乾七百首）を引いてゐる。
○かくとも知らで―馬の驅くといひかけた。

シテ「あら勿體なの御事や。蟻通の明神とて。物咎めし給ふ御神の。かくぞと知りて馬上あらば。よも御命は候べき

ワキ『これは不思議の御事かな。さて御社は

シテ『この森のうち

ワキ『げにも姿は宮人の

シテ『ともしの光の影より見れば（と松明をあげて鳥居のあたりを示す心）

ワキ『げにも宮居は

シテ『蟻通の（とワキへつめ）

地『神の鳥居の二柱。立つ雲透に（と正面へ出で）。見れば かたじけなや（松明をあげワキも正面に向き）。げにも社壇のありけるぞ。馬上に折り殘す。江北の柳蔭の。絲もて繫ぐ駒。かくとも知らで神前を恐れざるこそ、はかなけれ恐れざるこそはかなけ

社人「これは勿體ない事をなされた。こゝは蟻通明神といつて、物咎めをなさる神樣なのです。もしも、明神の境内だと知りながら、馬を乘り入れられたのでしたら、よもやお命はありますまいよ」

貴之「これは不思議なことだ。して、そのお社といふのは……」

社人「この森の中です」

貴之「成程、あなたのお姿を見れば宮人で……」

社人「この火の光で御覽になれば分りませう」

と松明をさし出す。

貴之「いかにもお社があります」

社人「あれが蟻通明神で、鳥居の柱が見えませう」

貴之「雲の絶え間から見ますと、いかにも御神殿があります。これは勿體ないことをしました。馬に乘つたまゝ入り込んで御神境とも知らずして、御神前を汚したのは、われながら情ない次第です」

とお詫びする心持で神を拜す。

【四】

○得たらん人―その道に達した人。

○雨雲のたち重なれる夜半なればありとほしとも思ふべきかは―貫之の歌。但し貫之集には上句「かきくもりあやめも知らぬ大空に」とある。「ありとほし」は「蟻通」を「有りと星」にいひかけたのである。

れ

「げにも社壇のありけるぞ」にシテ舞臺の眞中に出で下に居り、ワキも下に居て、神前にある心。ワキ「かくとも知らで」と正面に向き合掌す。シテ、ワキに向ひ、

【四】

シテ「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ

ワキ「これは紀の貫之にて候が。住吉玉津島に參り候

シテ「貫之にてましまさば。歌を詠うで神慮に御手向け候へ

ワキ「これは仰せにて候へども。それは得たらん人にこそあれ。我等が今の言葉の末。いかで神慮に叶ふべきと。思ひながらも言の葉の末を心に念願し。『雨雲のたち重なれる夜半なれば。ありと・ほしとも。思ふべきかは

シテこれに耳を傾けて、

シテ『雨雲のたち重なれる夜半なれば。ありと・ほ

【四】

社人「ところで、あなたはどういふ方なのです」

貫之「私は紀貫之ですが、住吉玉津島へ參詣する所なのです」

社人「貫之でいらつしやるなら、歌を詠んで神樣へお手向けなさい」

貫之「折角のお言葉ですが、それはその道の達人のすることで、自分達のやうな者の歌がどうして神の思召に叶ひませう……とは思ひますが」

と卑下しながらも心中に祈りを凝らして、歌の詞を考へ、

貫之「――『雨雲のたち重なれる夜半なれば、ありとほしとも思ふべきかは』――」

（雨雲の一面にたちこめてゐる夜中の事ですから、まさか空に星が出てゐようとは思ひません。このくらやみで、おそかこゝに蟻通明神のお社があるうとは氣がつきませんでした）

社人妻の明神は耳を傾けて聞いて、

社人「――『雨雲のたち重なれる夜半なれ

○叶はぬ耳―和歌を聞いてもその善惡も分らない耳。

○萬の言葉は雨雲の―萬の言葉はあまたあれどといひかけて雨雲のとつゞけた。
○歌には六義―古今集眞名序に「倭歌有二六義一一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌一」
○六道―天上、人間、修羅餓鬼、畜生、地獄をいふ。和歌の六義を佛說に結びつけたのである。
○六つの色―六種類。卽ち和歌の六義をいふ。
○ことわざ―事、業。
○神代よりも始まり―古今集假名序に「この歌天地のはじまりける時よりいで來にけり」
○人倫―人間。
○御書所―古今集撰修の時貫之は御書所預であつた。
○喜びを延べし―古今集假名序に「貫之らがこの世に同じく生まれて、この事の時に逢へるを喜びぬる―とあるに據り、古今集の出來た時の年號延喜を隱して入れた。

しとも。思ふべきかは。面白し面白し。われ等叶はぬ耳にだに。面白しと思ふこの歌を。などか納受なかるべき

ワキ『心に知らぬ科なれば。何か神慮に背くべきと

シテ『萬の言葉は雨雲の

ワキ『たち重なりて暗き夜なれば

シテ『ありと・ほしとも思ふべきかはとは。あら面白の御歌や

地下歌『凡そ歌には六義あり。これ六道の。巷に定め置いて六つの色を見するなり。上歌『されば和歌のことわざは。神代よりも始まり。今人倫に遍し誰かこれを褒めざらん。中にも貫之は。御書所を承りて。古今までの歌の品を撰みて喜びを延べし君が代のすぐなる道を顯せり

ば、ありとほしとも思ふべきかは』……これは面白い。自分達のやうな歌の分らない耳でさへ、この歌は面白いと思ふのですから、神様は必ず喜んでお受けになりませう」

貫之『自分に氣がつかないで科を犯したのですから、まさか神の思召に背きもしないだらうと思ひまして……」

社人『いろ／＼歌の詞もあらうが、『雨雲の……』といつて……」

貫之『それで『たち重なりて暗き夜なれば』と……」

社人『……『ありとほしとも思ふべきかは』とは、實に面白いお歌です」

一體和歌には六義といふことがあるがこれは衆生生死の迷界六道に擬へて、和歌を六種類に分けたものである。そして、この和歌といふ事は、古く神代から始まり、今は人間一般に行き亘つて、誰もこれを賞美しないものはないのである。殊にこの紀貫之は御書所預に任せられて、古今の和歌を集めて、その秀れたものを撰び、延喜の聖代に生まれ出た喜びを述べ、わが大君の御治世を天下に明らかにしたのである。

二人は衆物語を始めて、

【五】

○人代に及んで―古今集眞名序に「爰及二人代一、此風大起、長歌・短歌・旋頭・混本之類、雜體非レ一、源流漸繁」とあるを引いた。

○長歌短歌旋頭混本　長歌は五七調を重ねて最後を五七七で結び、短歌は三十一字、旋頭歌は五七七・五七七混本は五七・五七で一首をなす歌。「鶯鳴小町」の語釋參照。

○木の花のうちの鶯―繁るの緣で木を出し、同眞名序「若夫春鶯之囀二花中一、秋蟬之吟二樹上一、雖レ無二曲折一、各發二歌謠一、物皆有レ之、自然之理也」を引いた。

○わが邪をなさざれば―拾葉抄に「穴貴わが邪をなさざればなどかは神の守らざるべき」（神道二百首）を引く。

○逢坂の關の清水に―奇特に逢ぶを逢坂にいひかけ、拾遺集紀貫之の歌「逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒」を引き、月毛の駒の序とした。月毛は薄桃色の毛をいふ。

○越鳥南枝に―文選の詩句「胡馬嘶二北風一、越鳥巢二南枝一」を引いて「嘶え」の序とした。

【五】

（居クセ）

地クセ『凡そ惟つて見れば歌の心すなほなるは。これ以て私なし。人代に及んで。甚だ興る風俗。長歌短歌旋頭混本の類これなり。雜體一つにあらざれば。源流漸く繁る木の花のうちの鶯又秋の蟬の吟の聲いづれか和歌の數ならぬ。されば今の歌。わが邪をなさざれば。などかは神も納受の。心に叶ふ宮人も

シテ『かかる奇特に逢坂の

地『關の清水に影見ゆる。月毛のこの駒を。引き立て見れば不思議やな。もとの如くに歩み行く。越鳥南枝に巢をかけ胡馬北風に嘶えたり。歌に和らぐ神心。誰か神慮の誠を仰がざるべき

ワキ「關の清水に影見ゆる」と立上り、ワキヅレの前へ出で兩手にて手綱を取る形をし、「引き立て見れば」と扇にて引立てる形をし、「もとの如くに歩み行く」と正面へ二三足出で、「越鳥南

【五】

貫之「よく考へて見ますと、心の素直な歌には私心邪心といふものがありません。古い神代の事はさて置き、人の代になつてから盛んに流行するやうになつたのは長歌・短歌・旋頭歌・混本歌などの類で、歌の體に種々あつて、皆一樣なものではありませんから、從つて多くの流派も次第に出來てくるのですが、歌體は變るにしても、木の花に鳴く鶯又は秋の蟬の聲に至るまで、皆歌の中に入らないものはないのです。それで、今の歌にしましても自分に邪心がなければ、神も必ず御嘉納遊ばすことと思ふのです。現に今御社人のお心にも叶つて……」

社人「このやうな奇特にも逢ふことが出來るのです」

そこで、貫之がこの月毛の馬を引立てて見ると、不思議にも元のやうに歩み出し、胡馬が北風に嘶くやうに元氣よく嘶くのである。

貫之「和歌によつて神の御心がこのやうにお和らぎになる、このありがたい神の御心を誰一人として崇めないものがあらう」

と感激して禮拜する。

枝に集をかけ」と正面を見、「歌に和らぐ神心」とワキヅレの前に歸り、下に居て拜し、神前に禮拜する心。直してシテに向ひ、

【六】

ワキ「宮人にてましまさば。祝詞を讀うで神慮をすずしめ御申し候へ

シテ「承り候

シテ、後見より幣を受取り正面に出て坐し、ワキは脇座に歸り下に居てシテに向く。

シテ『いでいで祝詞を申さんと。神の白木綿かけまくも

ワキ『同じ手向と木綿花の

シテ『雪を散らして（と幣を振りわけ）

ワキ『再拜す（と拜す）

シテ『謹上再拜（と幣を振り分けて右に立て）。敬つて白す神司。八人の八少女。五人の神樂男。雪の袖をかへし。白木綿花を捧げつつ。神慮をすずしめ奉る。御神託に任せて。猶も神忠を致さん。ありがた

○白木綿―白木綿で作つた幣。木綿は楮の皮で作つた紙又は布。
○かけまくも―幣をかける意。
○木綿花―白木綿を細かく切つた切りぬさ。しでをかけるのもぬさを散らすのも神への手向となるのは同じであるといふ意。
○謹上再拜―以下「ありがたや」までが祝詞の文である。
○雪を散らし―木綿花を散らす形容。
○神樂男―舞姫に對して囃子をする男をいふ。
○雪の袖をかへし―美しく舞ふこと。美しい舞を形容して廻雪之袖といふ。
○神忠―神に對する忠誠。

【六】

貴之「あなたは御社人でしたら、祝詞を讀んで神樣をお慰め下さい」

社人「承知しました」

と幣を持つて神前に出で、

社人「それでは祝詞を申しませう」

と幣をかけると、

貴之「木綿花も幣と同樣、神への手向となりませう」

と、きりぬさを雪のやうに散らして、

貴之「謹んで拜し奉る」

と禮拜する。社人は祝詞をあげて、

社人―謹んで拜し奉り、敬つて申しあげます。こゝに八人の舞姫、五人の囃子男を以て、美しい舞を舞ひ、白木綿のきりぬさを捧げて、神樣をお慰め申し上げます。なほ神の思召に從つて、意を誠忠を盡さうと存します。御神德ありがたく

○和歌よりもよろしきはなし―古今集眞名序に「動二天地一感二鬼神一化二人倫一和二夫婦一、莫レ宜二於和歌一」
○返す返すも―少女の袖を飜すといひかけた。
○面白―古語拾遺に、天照大神天岩戸隱れの時、神々が神樂を奏されたのを、大神が岩戸からお覗きになると、その光に照らされて、神々の面が白く見えたので聲々に「あなおもしろし」といつたといふ故事から出で更にこれを「おもてしろ」といふやうになつたのである
【七】○和光同塵は結緣の始め―摩訶止觀に「和光同塵結緣之初、八相成道以論二其終一」とあるを引いた。和光同塵は佛菩薩が衆生濟度の爲にその德光を和らげて俗塵に交はること。
○八相成道―八相は佛菩薩がこの世界に出現して一生の間に示す、降兜率・託胎・降生・出家・降魔・成道・說法・涅槃の八種の相。成道（悟りを開くこと）はその一である。
○利物―衆生を利益すること。
○神の代七代―古今集眞名序に「神世七代、時質人淳、情欲無レ分」とあるを引いた

や（と幣を振りて左に立て）。抑も神慮をすずしむる事。和歌よりもよろしきはなし。その中にも神樂を奏し少女の袖。返す返すも面白やな。神の岩戸の古の袖。思ひ出でられて（と謠ひて仕手柱際へ行き）

〔立廻〕（に神樂の様を示し）

【七】

シテ『和光同塵は結緣の始め

ワキ『八相成道は利物の終り

シテ『神の代七代

ワキ『すなほに人あつうして

シテ『情欲分つ事なし

地『天地開け始まりしより。舞歌の道こそ。すなほなれ

シテ『今貫之が。言葉の末の（とワキへ向き）

地『今貫之が。言葉の末の。妙なる心を感ずる故に。假に姿を見ゆるぞとて。鳥居の笠木にたち

存じます』――」（と祝詞をあげ）

社人「一體神をお慰め申すのに、和歌より勝つたものはありません。殊に神樂を奏して、少女が舞を舞ふとは、實に面白いことです。古い神代に天岩戸の前で奏せられたあの神樂の事が思ひ出されます」

ミ、貫之の詠歌に感じ、今奉納せられた神樂に興じて、

〔立廻〕（に神代の神樂を偲ぶ心持を示し）

【七】

社人「神佛が德光を和らげて俗塵とお交はりになるのは、衆生と緣をお結びになる始めで……」

貫之「この世に現れて種々の相を示し、悟りをお開きになるのは、衆生を利益せられる爲の、神佛の最後のお仕事です」

社人「神の代七代は……」

貫之「もの事が素直で、人情が厚くて……」

社人「欲得といふ事がなかつたが、その神代天地の開けた始めから行はれて來た、この舞や歌といふものは誠に素直なよいものだ」

ミ、神佛の德、和光の德をたゝへ、

社人「今の貫之の詠歌の勝れた心持に感心して、明神が假りに姿を見せるのだ」

隱れ。あれはそれかと、見しままにてかき消すやうに失せにけり貫之もこれを悅びの。名殘の神樂夜は明けて旅立つ空にたち歸る旅立つ空にたち歸る

シテ「鳥居の笠木に」と橋懸へ行き、幣を投げすてて「かき消すやうに」と足早に幕に入る。ワキ、シテの橋懸へ行くを見て立ち、仕手柱際に行きてシテを見送り「貫之もこれを悅びの」と正面に向き扇を開きて「たち歸る」と留拍子を踏む。

といつて、鳥居の笠木に隱れられて、貫之が、あれが蟻通明神であるのかと見てゐるうちに、かき消すやうに消えてしまつた。貫之は悅びの餘り、なほも神樂を奏して、夜が明ければ、こゝを出て、旅立つて歸つて行つた。

〔鳥居の笠木＝鳥居の頂の横木。

〔考異〕

諸流（五流）

著しい異同はない。

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは……われ（光いまた）住吉……ワキ「あら笑止や……前後を舞へず候はいかに（光ナシ）【二】シテ「二瀟湘の……宮寺（光なむと）は……よも晴からじ（光くもらし）……【三】ワキ「なう〳〵その火（光あの灯）の光について申すべき事の候（光一夜の宿を御借候へ）……ワキ「今の晴さに行く先も見えず（光しらず……シテ「ともしの光の（光ナシ）影より（光よく）見れば……【四】シテ「さて（光いかに申へき事の候。ワキ「何事にて候ぞ。シテ「御身はいかなる……ワキ「これは……住吉（光ナシ）玉津島に……シテ「貫之にてましまさば（光御いり候はは）……御手向け（光手向御申）候へ……神樂奏見そ……六つの色を見する（光わかつ）なり……【六】ワキ「（光いかに申へき事の候）宮人にてましまさば……すゞしめ御申し候へ（光給へ）。シテ「承り候（光ナシ）……

藍染川（あゐぞめがは）　觀（春）

解說

【能柄】　四五番目　夢幻的劇能

【人物】　**ワキツレ**　宿主左近尉、**前シテ**　京女（梅壺侍從）、**子方**　梅千世、**狂言**　神主の後妻、**ワキ**　太宰府神主、**トモ**　同從者、**後シテ**　天滿天神

【所】　筑前國　太宰府

【時】　（無季）

【異稱】〔染川〕ともいつた。

【作者】　能本作者註文に作者不明とある。同書に曲名が出てゐるのであるから、室町時代の作ではあるが、さほど古いものではたからう。

【梗概】　太宰府神主と契りを結んだ京女が、わが子梅千世を連れて筑紫へ夫を尋ねて行つたところ、折柄神主は不在で、その後妻が、夫の僞手紙を作つて京へ追ひ返さうとした。女は悲しんで藍染川に身を投げて死んだ。そこへ神主が歸つて來て、驚き憐んで、神前に祝詞をあげると、天滿天神が出現せられ、女を蘇生せしめ給ふ。

【出典】　當時の巷說を取扱つたものか、作者の創作したものか、兎に角出典と見るべきものはない。

【概評】謡曲としては稍長篇の世話物で、世話物の中でも、母子が相伴つて夫を尋ねたところ、後妻が嫉妬して詭計を用ゐ、前妻をして死に至らしめるといふのであるから、最も世話物らしい、普通の劇に近いものである。そして、もし性格描寫といふ事をいふならば、ワキヅレ左近尉の、旅客に對し親切で、しかし主人筋の命とあれば、神主の後妻のいふがまゝに、何の考慮もなく可憐な旅の女を追ひ出してしまふ、それでも、神主に對して「御姿にては如何にて御座候」と利口ぶつた事をいふ、さうした宿主らしい性格がよく描き出されてゐると思ふ。第一段は殆ど謡曲とは思はれないほどな純世話狂言であるが、第二段に後ジテとして天滿天神を出現せしめ、これによつて、京女の蘇生を陰から描き出したことは、謡曲らしい巧みな手際であると思ふ。

【一】

ワキヅレ左近尉、着附熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて出で、笛座の上に着く。

次第の囃子にて、シテ京女、面深井・鬘・鬘帶・襟淩黄・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、子方梅千世、着附箔・稚兒袴・扇の裝束にて橋懸に出で、子方は一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

次第（シテ子方）忘れは草の名にあれど。忘れは草の名にあれど。忍ぶは人の面影

地取に二人とも正面に向き、

シテサシ『これは一條今出川に住む女にて候。げにやあだなる契りとて。心をさへに筑紫人の。袖觸れそめし憂き中の。疎くなりぬる身の果は兎にも角にもあらばあれ。（子方を見て）この子が爲に父

○忘れは草―萱草とも書き百合科に屬する草。その異名を忍草といふ。伊勢物語に「忘れ草をしのぶぐさとやいふとて」と見ゆ。

○忍ぶは―忍草にかけていふ。契りを結んだ人のことが忘れられず、その面影を戀ひ忍ぶとの意。

○一條今出川―京都上京の地名。

○筑紫人―心を盡くすを筑紫にいひかけた。

○憂き中の―別離後の心持

【二】

第一段

鉾懸は初め京で、シテ京女（ムスメ）の梅千世侍從（子方）のわが子梅千世を伴つて登場。

京女「草の名には忘れ草といふのもあるけれど、私はどうしてもわが夫のことが忘れられず、いつもその人の面影が身を離れず、戀ひ忍んでゐます」

と次第にわが心持を述べ、

京女「私は京都一條今出川に住んでゐる女です。ほんの假初に、筑紫の人と契りを結んで、その人に棄てられ、辛い思ひをすることとなつたのですが、私だけが夫に棄てられたのならば、是非ないことと諦めもしませうが、この子の爲には、切

をいふ。「憂き中の疎くなりぬる身の果は」云々は引歌でなからうかと思ふが、見當らない。
○心は子にや迷ふらん—後撰集藤原兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」を胸に置いて綴つた。
○月の入るさ—月の入る方

○菅の根の—長の枕詞。思ひをするといひかけた。
○長門の關路—今の下の關
○香椎—筑前國粕屋郡にある。
○博多—もと福岡の東。今福岡市に入る。
○宰府—太宰府の略。筑前國筑紫郡水城村。菅原道眞を祀つた天滿宮がある。

を尋ねて

二人向合ひ、

シテ子方下歌「馴れも馴れぬに遠旅の心は子にや迷ふらん（とシテしをり）。上歌「筑紫とは。西ぞとばかり聞きしより。西ぞとばかり聞きしより。月の入るさをしるべにて。行方も知らぬ旅衣野山幾重か重ぬらん。かかる思ひを菅の根の。長門の關路程もなく。香椎博多をうち過ぎて。宰府に早く、着きにけり宰府に早く着きにけり

シテ「かかる思ひを菅の根の」と正面に向きて二三足進み、また返して子方と向合ひ、太宰府に着きたる心。シテ正面に向き、

シテ「あら嬉しや急ぎ候程に。宰府とやらんに着きて候。まづこの所にて宿を借らうずるにて候。

（子方に向ひ）此方へ來り候へ

【二】

二人とも舞臺に入り、子方は目附柱際に、シテは常座に立つ。

シテ、宿を乞ふ心にて地謠座の方に向ひ、

シテ「いかにこの家の内へ案内申し候

つても切れない父のことですから、どうか尋ね探したいと思つて、これまでしたこともない旅に出掛けようと思ふのですこれが子に迷ふ親心と申すものでございませう。

ミ旦物人に自己紹介をし、

京女 夫の在所の筑紫は西の方だと聞いたことだけを頼りにして、月の入る方角を目當てにして、行衛も分らない旅に出かけ、いくつも〳〵野を過ぎ山を越えて來ました。かうして辛い旅を續けてゐるうちに、それでもいつしか下の關を過ぎ、香椎・博多を通つて、存外早く太宰府に着きました。

かういつてゐる間に筑紫に着いた態で、舞臺は太宰府となる。

京女「あゝ嬉しい。道を急いだので、思ひの外早く太宰府といふ所へ着きました。まづこゝに宿を借りませう。（梅干世に向ひ）こちらへお出でなさい」

ミ宿屋へ行く態。

【二】

舞臺は宿主左近尉の家。ワキヅレ宿主左近尉は登場してゐる。京女この門口に立つた態で、

京女「もうし、このおうちへ御願ひ致しま

ワキヅレ有近尉立ちてシテに向ひ、

ワキヅレ「誰にて渡り候ぞ

シテ「これは都方の者にて候。一夜の宿を御貸し候へ

ワキヅレ「心得申し候。これは女性旅人にて候程に。奥の間に置き申さうずるにて候。此方へ御入り候へ

シテ・子方、案内せられたる心にて幽座に行き下に居る。ワキヅレも下に居る。シテ、ワキヅレに向ひ、

シテ「いかに申し候。この所に宰府の神主殿と申す人の渡り候か

ワキヅレ「なかなかの事この在所の主にて御座候。我等もその御内の者にて候

シテ「都より文をことづかりて候。神主殿へ参らせて給はり候へかし

ワキヅレ「易き御事にて候。やがて媒けて参らせう

○宰府の神主殿—天満宮の神主。

○なかなかの事—然りといふ意。

○御内—家来。

○やがて—早速。

寸—

左近「どなたです—

東女「私は都方の者でございます。どうか一晩お泊め下さいませ—

左近「畏りました。女旅でいらつしやるのですから、奥の間へお通ししませう。こちらへ御入り下さい—

東女と梅千世は奥の間へ入る。気つて幽座は奥の間の幽。

東女「お伺ひ致しますが、こちらに太宰府の神主様といふ方がお出てになりませうか—

左近「えいえ、お出てになります。その方がこの地の領主で、私共もその家来でございます—

東女「それでは、都から手紙をことづかつて来たのですが、それを神主様にあげて下さいまし」

左近「お易い御用です。早速お届けしませ

ずるにて候

シテ「あら嬉しや候。さらばこの文を參らせ候。御返事を取りて給はり候へ

ワキヅレ「心得申し候

シテ懷中より文を出してワキヅレに渡す。

【三】

ワキヅレ一の松へ出で、神主の家を訪ふ心にて幕に向ひ、

ワキヅレ「誰か渡り候

狂言神主の妻、美男鬘・箔小袖の裝束にて三の松へ出で、

狂言「誰にて渡り候ぞ。いや左近尉にてあるか

ワキヅレ「さん候神主殿へ申し上ぐべき子細あつて參りて候

狂言「なにと神主殿へ申し上ぐべき子細があると申すか。折節神主殿には持佛堂に看經して御入り候。その文はいづ方よりの文にてあるぞ。われは持ちて參らうずるぞ

ワキヅレ「それは恐れがましく候

狂言「いや〳〵苦しからぬ事にて候。その文はいかやうなる者の方よりの文にてあるぞ

○持佛堂に—後にワキは「この間は他所に候ひて」といつてゐる。

○看經—讀經。

○恐れがまし—失禮のやうに思はれる。

う」

妻「あゝ嬉しい。それではこの手紙をお上げ致します。(と手紙を渡し)どうぞ御返事を貰つて來て下さいまし」

左近「承知しました」

【三】橋懸は神主の家で、左近尉、神主の家を訪ねる態で橋懸へ行く。

左近「とたたか御取次を願ひます」

狂言神主の後妻幕内、

後妻「誰です。おゝ左近尉か」

左近「神主樣へ申し上げたいことがあつて參りました」

後妻「何、神主樣へ申し上げたいことがあるといふのか。神主樣は今持佛堂で看經中だが、その手紙は誰のだ、私が持つて行つてあげよう」

左近「それでは、失禮と存じますが」

後妻「いや構はない、その手紙は誰から來たのだ」

ワキヅレ「都より女性旅人の我等が宿に御泊り候が。この文を神主殿へ参らせよと申され候

狂言「妾屈けて参らせう。こなたへ渡し候へ

とワキヅレより文を受取り、

狂言「やがて返事を参らせう。暫くそれに待ち候へ

ワキヅレ「畏つて候

狂言(正面に向き)「これは不思議なる事かな。都より下りたる女の方より神主殿へ参る文ぢや。そと見ようと存ずる。(文を開きて)さればこそ。腹立ちや腹立ちや。これは神主殿御在京の節契り給ふ女に子が出來て。その子を連れて下りたると申す。この文を神主殿に見せてはなるまい。妾が返事を致さうと存ずる。(扇にて文を書く形をし)あらつれなや〳〵〳〵。これで一段とよい。(ワキヅレに向ひ)いかに左近尉。最前の返事にてあるぞ(と文をワキヅレに渡し)。さて女は子を連れて來てあるか

ワキヅレ「さん候幼き人を連れ申されて候

狂言「女はいづくにあるぞ

ワキヅレ「未だ某が家に御座候

左近「京から女の旅人が私の宿に來て泊つてゐるのですが、この手紙を神主様に上げてくれと申すのでございます」

後妻「ては私があげてやらう」

さいつて手紙を受取り開いて見る。あたし女の手紙であるので、嫉んで憂想づかしの神主の偽手紙を書き、「あらつれなやつわだ」と書き終り、之を左近尉に渡し「その女は子を連れてゐるか」と尋ねる。

左近「はい、小さな子を連れて居られます」

後妻「その女は何處に居るのだ」

左近「まだ私の家に居られます」

○そと―一寸。

○あらつれなや―文の最後の句、その全文は後に出てゐる。

○曲事―不正、惡事。

狂言「神主殿の仰せには。その女も伴も追ひ出し候へとの御事にて候。一夜にても宿を貸したらば曲事と仰せ候間。急ぎ追ひ出し候へ

ワキヅレ「言語道斷さやうの御事をば存ぜず候程に泊め置きて候。さらばやがて追ひ出だし申さうずるにて候

狂言「構へて神主殿の仰せを背き後日に迷惑するな。急ぎ追ひ出だし候へ〳〵。なう腹立ちや〳〵〳〵

といひて狂言は幕に入る。

ワキヅレ舞臺に歸リシテに向ひ、

ワキヅレ「いかに旅人へ申し候。唯今の文を神主殿へ御目にかけて候へば。やがて御返事を給はりて候。急いで御覽候へ

と文をシテに渡す。

シテ「あら嬉しと早く御屆け候ものかな。さらばやがて御返事を見うずるにて候。（文を開きて）御下りめづらしく候へども。男の身なりとも。遙

○御下りめづらしく候―以下「あらつれなやつれな」まで手紙文。めづらしは愛づらしで、嬉しいとの意。

後妻「神主様がその女も子供も追ひ出してしまへと仰しやるのだ。一晩でも泊めてはいけないよ。すぐ追ひ出しておしまひなさい」

左近「これは驚きました。さやうな事とは知らないものですから泊めて置いたのでございます。では早速追ひ出しませう」

神主の妻は腹を立てながら退場。左近尉はわが家へ歸る。

無憂は左近尉の家、もとの奥の間の態。

左近「もうし旅の御方。唯今の手紙を神主様へお目にかけましたら、すぐ御返事を下さいました。早速御覽なさい」

と手紙を渡す。

京女「あゝ嬉しい、よく早くお屆け下さいました。それでは早速御返事を見ませう

と手紙を開いて、

『遙々こゝまで御下りになつたのは嬉しいが、この遠い旅は男の身でも一人で下ることはむつかしいのです。まして

〔めづらしき人―愛人。あだ―男。

○梅千世―子の名。天神の縁で梅の名をつけたのである。

○不肖―親に似ぬ者。愚か者。

○つれな　無情。女の心が薄情であるとの意。

遙の遠國に一人は下りがたし。いかさまめづらしき人に誘はれて御下りかと思ひ候へば。對面中す事はあるまじく候。これは梅千世が方へ申し候。もとよりこの身は不肖なれば。親ありとも思ふべからず。はやはや都に歸り給へ。『あらつれなやつれなと書かれたり。(文を二つに折り)これは夢かやあらあさましや候(としをる)

子方「いかに母上。いたくな御歎き候ひそ。梅千世かくて候へば。御心安く思しめせ

シテ「げに子ながらも恥かしや。父が心の變る事を。身の上に歎くと思ふかや。『御身を父に見せ、一跡をも繼がせばやと思ひてこそ。遙々伴ひ下りたるに。孤となすべき事の悲しさよ(としをる)

子方「よしなうそれも力なし。今更何と歎くべき

地上歌「筑紫人。虛言すると聞きつるに。虛言する

女の身で一人下ることの出來る筈がない、きつと仇し男に誘はれて下られたのだらうと思ふから、御會ひすることは出來ません。

たゞ梅千世にいふか、自分はもと〳〵愚か者だから、親とも思ふな。早く都にお歸りなさい。

あゝ薄情な女心が情ない――

京女「まあこんなことが書いてある。これは夢であらうか、何といふ情ない淺間しいことでせう」

梅千世「お母さま、そんなにお歎きなさいますな、私がかうして居ります以上、とうぞ御安心下さいませ」

京女「ほんとにわが子ながらも恥かしい。唯父の心變りしたのが、私に薄情だと思つて、それで歎いて居るのだと思ふのですか。私はそなたを父にも見せ、父の跡目相續もさせたいと思つて、遙々淺い所を連れて來たのに、父無しの孤子にしようとは、私にそれが何より悲しいのです」

梅千世「いえ〳〵、それも今に致し方がございません。今更何も歎くことはございません」

京女(獨言に)「筑紫の人は虛言をいふもの

○なかなかに―却つて。
○かきくらす心の闇の―伊勢物語の歌「かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とは世人定めよ」(古今集にも)の詞を借りた。
○今はなき身と―頼りとすべき人きへ無きを亡き身にいひかけた。

【四】

と聞きつるに。頼みけるこそ、なかなかにはかなかりける心かな。かきくらす。心の闇のひたすらに。夢現なき道のべの便りと頼む木蔭さへ。今はなき身となるべしと。思ふにつけて獨子を殘し置くべき悲しさよ殘し置くべき悲しさよ

(しをる)

【四】

ワキヅレ、シテに向ひ、

ワキヅレ「いかに申し候。御痛はしう候へども。神主殿よりこの所には置き申すなとの御事にて候間。急いでこの家を出でて何方へも御出であらうずるにて候

といひてくつろぐ。シテ常座へ行き子方に向ひ、

シテ「いかに梅千世

子方「何事にて候ぞ

シテ「このまま都に上らん事も人目さすがに候へば。(脇正面の方に向き)あれなる庵室に立ち越え。樣

○人目さすが―人の見る目もさすが恥かしいから。
○樣變へばや―尼にならうと思ふ。

【四】

だ、と以前から聞いてゐながら、その筑紫人の言葉を信じてゐたのは、こちらの考へが足りなかつたのだ。あゝ悲しい、心の中が眞闇になつてしまふ。夢といはうか現といはうか、遠い旅に出て、頼りにするものはなし、今は是非もない、私は死んでしまはう。……と思ふにつけても、獨子を後に殘して行くのが悲しい」

左近「もうし旅のお方。お氣の毒ですが、神主樣からこの所に置いてはならないとの仰せですから、すぐこの家を出て、どちらへなりとお出で下さい」

京女「梅千世や」

梅千世「何でございます」

京女「このまゝで京へ上るのは、人目も恥かしいから、私はあそこの庵室へ行つて尼姿にならうと思ひます。そなたはこゝ

○おこと―そなた。
○心許なく―氣がかり。不安心。
○うたてや―情ない。
○歸さ―歸るさ。歸りしな。

變へばやと思ふなり。おことはこれに待ち給へ

子方「いやいや母の御氣色心許なく候程に、離れ申す事は候まじ

シテ「うたてやな父こそ變り給ふとも。母が心の變るべきか。唯々おことはこの所にて。『母が歸さを待ち給へ

子方『母の仰せを眞と思ひ。さらばとくとく歸り給へ

シテ『母は今こそ限りなれと。下安からぬ思ひの色。行きもやられぬ袖の別れ

子方『引き留められて

シテ『親心の

地上歌『思ひ煩ふ母が身の。思ひ煩ふ母が身の。亡き跡いかがと別れ得ぬ今の憂き身かな。兎に角に。歸らんまでは待ち給へと(子方に向き)。夕顏の

○下安からぬ―下とは心をいふ。心に不安に思ふ。
○夕顏の空目して―源氏物語夕顏卷の歌「光ありと見し夕顏のうは露はたそがれ時の空目なりけり」の詞を借り「言ふ」の音を承けて夕顏を出し、その緣で空目の序に用ゐた。空目は餘所目、わが子の方を見まいとする意。

で待つていらつしやい」

梅子世「いえ〳〵お母さまの御樣子が氣がかりですから、お母さまのお側を離れることは出來ません」

京女「情ないことをいつてくれる。お父さまこそお變りになつても、私の心は變りはしませんよ。たゞそなたはこゝでお母さまの歸るのを待つていらつしやい」

梅子世は母の詞をほんとと思つて、

梅子世「それでは早くすぐ歸つて來て下さい」

母は今がわが子を見る最後かと思へば心中悲しみに堪へず、別れかねてゐると、子梅子世は母の袖を捉へて引留めるので、親心の愈々悲しさに思ひ惑ひ、自分の死んだ後は、どうなることだらうと、身の不運を歎かれたが、

京女「ともかく歸るまで待つていらつしやい」

とわが子の顏を見ないやうにして別れ出て、藍染川に身を投げて死んでしまつた。

○藍染川―太宰府神社と觀世音寺との間を流れる川。染川ともいひ、逢初川とも書く。

【五】

○言語道斷―いひやうもなく呆れた時に發する語。

空目して藍染川に身を投ぐる藍染川に身を投ぐる

シテ常座に身を屈め、入水したる心にて、靜かに中入。

後見、女の死骸の心にて小袖を正面先に置く。

【五】

ワキヅレ名乘座に出で、

ワキヅレ「何と申すぞ。藍染川に人の身を投げたると申すか。如何やうなる者ぞ立ち越え見ばやと存じ候。(正面に出で小袖を見て)や。言語道斷。如何なる者ぞと存じて候へば。某が所に泊りたる女性にて候は如何に。(子方に向ひ)なう梅千世殿。母御の身を投げ給ひて候ぞ。急いで御覽候へ

子方小袖の前へ行き、下に居て、

子方 なう母上。『恨めしの御有樣やな。母御のかくてましませばこそ。賴もしく思ひ候ひつるに。これは夢かやあさましや(しをる)。悲しやな知らぬ筑紫の果に來て。父母さへに捨子となる。み

【五】

第二段

舞臺は藍染川の川端。左近將、多勢の者が女が身投げしたと騷いでゐる物音を聞きつけた體で、

左近「何といふ、藍染川に人が身投げしたと。といふ者が身投げしたのか知ら、行つて見て來ませう」

死骸の前へ來て、

左近 やあこれは驚いた。身投げした者を誰かと思へば、私の所に泊つてゐた女であつたわ」

わが家の方へ行き、

左近 もうし梅千世殿、母さまが身投げをなさいましたぞ。早く來て御覽なさい」

梅千世死骸の側へ走り寄つて、

梅千世「あゝお母さま、何といふ恨めしいお姿です。お母さまがお出でになつてこそ賴もしくも思つてゐましたのに、まあこのお姿は。何といふあさましい。夢ではなからうか。あゝ悲しい。知らぬ筑紫の果へ來て、父にも母にも捨てられてし

○木の露本の雫―後撰集信正遍照の歌「木の露本の雫や世の中の、後れ先だつ始めなるらん」を引いた。人は遅かれ早かれ死ぬものであるとの意。

○御働き―御行ひ。

づからは誰を頼むべき

地下歌。木の露本の雫もよしやよし。われとても。ながらへ果てじ身を捨てて。母に追ひつき申さんと藍染川に歩み行く藍染川に歩み行く

子方橋懸へ行きかゝる。ワキヅレ之を留め、

ワキヅレ。暫く。これは勿體なき御働きにて候。おことと身を投げ給ひては。さて母御の御跡を誰か弔ひ申すべき。唯思しめし止まり給ひ候へ。これは母御の遊ばされたる文にて候。御形見によく御持ち候へ（と文を子方に渡し）。かかる痛はしき事こそ候はね

子方脇座、ワキヅレ笛座前に行き下に居る。

【六】

ワキ太宰府神主、着附厚板・單狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束にて、トモ從者二人（着附意斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束）を伴ひ、橋懸に出で一の松に立ち、

ワキ。これは宰府の神主にて候。われこの間は他所に候ひて。唯今罷り歸り候。（舞臺を見て）あら不

きって、私は誰を頼りにしたらよいのでせう。いづれ人は遅かれ早かれ一度は死ぬものだ。さうだ、私も生きてゐたところでしやうがない。身を投げてお母さまの後を追つかけて行かう」

といつて藍染川へ駆けて行く。

左近「まあお待ちなさい。これはとんでもない御所業です。あなたが身をお投げになつたら、誰がお母さまの御菩提を弔ふ人があります。必ず思ひとまりなさい。さう〳〵、これはお母さまのお書きになつた手紙です。御形見に大切にお持ちなさい。（と手紙を渡し）あゝこんな氣の毒なことはない」

【六】

ワキ太宰府神主、トモ從者を連へて、外出先から歸る途中の趣で橋懸に出で、

神主「私は太宰府の神主です。私は此間中他所へ行つて居つて、唯今歸つて來た所です。（川端を見て）おや變だ、あの藍染川に

○網をばし引くかーしは語勢を強める助詞。

思議や。あの藍染川に人の多く集まりて候は何事にて候らん。や。推量申して候。某他所に候間に。網を引かすると存じ候。（トモに向ひ）いかに誰かある

トモ「御前に候

ワキ「あの藍染川に人の多く集まりてあるは。網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるに。急いで皆々あがれと申しつけ候へ

トモ「畏つて候

トモ仕手柱先に出で、

トモ「やあやあ神主殿の御出でにてあるぞ。網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるぞ。急いで皆々あがり候へ。何と人の身を投げたると申すか。（ワキヅレに向ひ）や。左近の尉にて渡り候か。これへ神主殿の御出でにて候。急ぎ御參りあつて。

人か多勢集まつてゐるのは、どうした事だらう。あゝさうだ〳〵。私が他所へ行つてゐる間に、網を引かせてゐるものらしい。（從者に向ひ）おいこれ」

從者「はい」

神主「あの藍染川に人が多勢集まつてゐるのは、網を引いて居るのではないか。殺生禁斷の所だから、皆々すぐあがれといつて來い」

從者「畏りました」

從者川端へ行つて、

從者「やあ〳〵神主樣が御出でだぞ。網を引いてはいけない。こゝは殺生禁斷の所だ。皆々すぐあがれ。……何ちやと、人か身投げしたといふのか。（左近尉を見て）おや左近尉が居られるのか。これはどうしたことたのか。こゝへ神主樣が御出でになる。早く來てこのわけを申し上げて下さい」

この謂れを御申し候へ

ワキヅレ「心得申し候

トモ、ワキの前へ出で、

トモ「いかに申し上げ候。網にてはなく候。人の身を投げたる由申し候。あれに左近の尉が候ひて。謂れを申し上げうずるとてこれへ參りて候

ワキ舞臺へ入りワキヅレに向ひ、

ワキ「いかに左近の尉。身を投げたると申すは如何やうなる者ぞ

ワキヅレ「さん候都より女性の人を尋ねて下り候が逢はぬを恨みて身を投げたる由申し候

ワキ「言語道斷。都より遙々下りたるに。逢はぬは不得心なる者にてあるよな。(子方の方に向き)あれなる幼き者は如何やうなる者にてあるぞ

ワキヅレ「あれはかの者の子にて候

(不得心…不心得。

左近「承知しました」

從者神主の許へ歸つて、

從者「申し上げます。あれは網ではございません。人が身を投げたのださうでございます。あそこに左近尉が居りまして、そのわけを申し上げに、こちらへ參ります」

神主少し進んで左近尉に向ひ、

神主「左近尉、身投げをしたといふのは、どういふ者だ」

左近「さやうでございます、都から女の者が人を尋ねて參りましたところ、逢つて貰へなかつたのを恨んで、身投げをしたのださうでございます」

神主「これは驚いた。都から遙々尋ねて來たのに、逢はないとは不心得な者だた。(梅千世を見て)あそこにゐる幼い子はどういふ者だ」

左近「あれはその女の子でございます」

ワキ「手に持ちたるは文にてあるか

ワキヅレ「さん候文にて候

ワキ「そと見たき由申して取りて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候

ワキヅレ子方の前に行き、

ワキヅレ「なうその文をそと人の御覽ぜられたき由仰せ候賜はり候へ

子方「いやこれは母御の御形見にて候程に參らせ候まじ

ワキヅレ「そと御覽じてやがて返し申されうずるにて候こなたへ賜はり候へ

子方ワキヅレに文を渡す。ワキヅレ文を受取りワキの前に行き、

ワキヅレ「文を取りて參りて候

ワキ文を受取り一讀む。

ワキ「これは梅千世が方へ書き置き候。憂き身は

○やがて―直に。

○これは梅千世が方へ―以下「宰府の神主」まで京女の遺書。

神主「その手に持つてあるのは、手紙か―

左近「さうでございます。手紙でございます」

神主「一寸見たいといつて、取つて來てくれ」

左近「畏りました」

梅千世の許へ行き、

左近「その手紙を主人が御覽になりたいと仰しやるから、こちらへ下さい」

梅千世「いえこれはお母さまのお形見ですから、あげられません」

左近「一寸御覽になれば、すぐ返されるのですから、こちらへ貸して下さい」

梅千世左近尉に手紙を渡す。左近尉神主の前へ出で、

左近「手紙を取つて參りました―

神主手紙を受取つて讀む。

神主――

『この手紙を梅千世に書き遺して置きます。私のやうな不運な者が夫に捨てら

○捨て妻―夫に捨てられた妻。
○きぬぎぬ―男女の別れをいふ。妻は捨、恨みは妻、いづれも衣の縁語。
○いひ甲斐なくは―相續させる程の子でないと思ふならば。
○扶持―養育する。
○大内―内裏。御所。
○梅壺の侍從―この梅も天神の縁で用ゐたのである。

もとより捨て妻の。きぬぎぬなれば恨みもなし。いかに情知らずとも。子に知れぬ親の候べきか。いひ甲斐なくは出家になし。扶持し給はば草の蔭にて。守の神となるべきなり。大内にありし時は梅壺の侍從。一條今出川の御留主。當所の御名は知らねども。御在京の御時は。中務頼澄宰府の神主。（文を二つに折り）や。言語道斷の次第にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候に。かかる不思議なる事こそ候はれ。あの幼き者をこなたへ連れて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候

ワキヅレ子方の前へ行き、

ワキヅレ「いかに申し候。神主殿の物仰せられうずると仰せ候。此方へ御出で候へ

子方ワキの前に行き下に居る。ワキ子方に向ひ、

ワキ「あら不便の者や。さて眞の父に逢ひたくは

れたのは、今更何の恨みもありません。しかし、どんな情知らずの男でも、子の可愛くない親はありますまい。とうそこの子を立派に育てあげて下さい。もし相續させることが出來ないならば出家にして、保護してやって下さいませ。そしたいば、と一なにか嬉しく、きつと草葉の蔭で守りの神となります。

宮中に仕へてゐた時には梅壺侍從といひ、今は一條今出川の御留主をしてゐます女より、

唯今の御名は何と仰しやるか存じませんが、御在京の時には、中務頼澄と仰しやつた、太宰府の神主様へ」

神主「これは意外なこともあるものだ。今まではよそ事と思つてゐたのに、こんな不思議なことはない。（左近將に向ひ）あの幼い子をこちらへ連れて來てくれ」

左近「畏りました」

（幼子供の前へ行き、）

左近「もうし、神主様が話をしたいと仰しやるから、こちらへ御出で下さい」

神主（幼子世に向ひ）「あゝ可哀想な子だ。そなたはほんとの父に逢ひたくはないか」

なきか

子方「かほどに情ましまさば。『父に逢はせてたび給へ

ワキ『げにげにこれは理なりと。名のらんとすれば涙に咽び

子方『目もくれ心

ワキ『月影に

地『それと見えねど梅千世が。顔も姿も馴れし母に。たがはぬ面影の。これこそ父よ無慙やな。さこそ便りも歎きの力を添へて木綿附の。取りつき髪かき撫でよそめ思はぬ氣色かな

【七】

ワキ「いかに左近の尉。餘りにかの者不便に候程に。そと見うずると思ふはいかに

ワキヅレ「御意尤もにて候さりながら。御姿にてはいかがにて御座候

○目もくれ—目も暗み。
○月影に—心盡くといひかけた。
○無慙—惡業を恥ぢないこと、轉じて殘酷、三轉して不便、かわいさうの意。
○便りも歎きの—便りもなきといひかけた。
○木綿附の—木綿附鳥は鶏の異名。力を添へていふを木綿附に、鳥を取りつきにいひかけた。こゝには木綿附鳥に意味はない。

【七】

○御姿にては—神主は身を清淨に保ち死人を忌むものであるから、かういつた。

梅千世「それほど御親切がおありでしたらどうぞお父さまに逢はせて下さいませ」

神主「おゝ尤もなことだ」

と名乘らうとはしたが涙に咽んで、聲も出ず、目もくらんで、はつきりとは見えないが、月影に透かしてよく見ると、梅千世の顔も姿も、自分の馴染んだ母親そつくりの樣子である。

神主「自分がほんとの父なのだ。あゝ可哀想に。さぞ頼りもなく悲しかつたことだらう。これからきつと力になつてやらう」

といつて、梅千世のからだにとりつき、髪をかき撫でてやり、他所目も恥ぢない有樣であつた。

【七】

神主「左近尉、あの女が餘り可哀想だから一寸見ようと思ふが、どうであらう」

左近「思召は御尤もでございますが、そのお姿では如何でございませう」

○苦しからぬ事―不都合でない。

ワキ「げにげに汝が申す如く。總じて死人を見る事はなけれども。かの者の心中餘りに不便にある間。苦しからぬ事そと一日見うずるにてあるぞ。死骸のあたりなる人をのけ候へ

ワキヅレ「畏つて候

ワキヅレ仕手柱際に立ち、

ワキヅレ「やあやあ神主殿御出であるぞ。皆々のき候へ

ワキ正面先へ出で下に居て小袖を見て、

ワキ「いかに申し候。さても御下り夢にも知らず候。梅千世が事は某一跡を讓り世に立てうずるにて候。又御跡をも懇に弔ひて參らせ候べし。かまへてわれを恨み給ふなといへどもいへども

(居クセ)

地クセ「いへども平生の顏色は。草葉の色に異なる

○いかに申し候―以下「われを恨み給ふなまで、神主が女の死骸に對していふ詞

○かまへて―必ず。

○平生の顏色は―存命中の顏色はなくなつてといふ意

神主 いかにもお前のいふ通り、一體神主の姿で死人を見るものではないが、あの女の心根が餘りに不便だから、構はない、一日見よう。死骸のあたりに居る人を退けてくれい」

左近「畏りました。(皆の者にいふ心で)さあ皆の者、神主樣がお出でになるのだ。そこを退け」

神主死骸の側へ行き、

神主「おゝ、そなたの下られたことは夢にも知らなかつたのだ。梅千世の事は確かに承知した。跡目を相續させて、立派に出世させてやるぞ。又そなたの菩提も丁寧に弔つてあげるから、決して私を恨んでくれるな」

神主かういつても、もはや答はなく、生前の顏色は變つて草葉のやうに青く、あ

○芳態―美しい姿。以下一句、詩の引用であらうと思ふが、見當ない。
○嬋娟の黑髮―和漢朗詠集白樂天の詩句に「嬋娟兩鬢秋蟬翼、宛轉雙蛾遠山色」
○紅顏空に消えて―詩句の出典があるのであらう。
○累々たる古墳―累々は多く重り合つてゐる形容。本朝文粹に「累々墳墓之絲邊」
○郊原に朽ち果て―和漢朗詠集義孝少將の詩句「朝有二紅顏一暮二世路一、暮爲二白骨一朽二郊原一」を引いた。

【八】
○我此道場如帝珠―以下「頭面接足歸命禮」まで羅漢講式の總禮偈を改作した。
（以下本眞の註）
原文「我此道場如帝珠、十六大聖影現中。我等於彼大聖前、頭面接足歸命禮」
○道場―もと釋迦成道の場所、後世汎く佛寺をいふ。
○帝珠―帝釋天の網珠。帝釋天の宮殿（因陀羅網境界門）にかけられた珠で、その珠が互に相映じ、映中の珠がまた相映じて美觀をなすといふ。よく物の映る譬。
○十方三寶―十方は東西南北四維上下の十方世界。三寶は佛法僧。十方世界の諸佛が帝釋天の珠に物の映ず

らず。芳態あらたに眠りて眼蓋を開く事なし。嬋娟の黑髮は。亂れて。草根にまとはり婉轉たる黛は。消え失せて面影の亡き身の果ぞかなしき

ワキ「紅顏空に消えて
華麗を失へり。飛楊の魂いづくにか獨り赴く
有樣憐むべし累々たる。古墳のほとり。顏色終に消え失せて。郊原に朽ち果てて。思ひや跡に殘るらん

【八】

ワキ、ワキツレに向ひ、

ワキ「いかに左近の尉。かの者の心中餘りに不便にある間。臨時の幣帛を捧げ。肝膽を碎きかの者の命を二度蘇生させばやと思ふはいかに

ワキツレ「げにげにこれは尤もにて候

ワキ「さらば祝詞を參らせうずるにて候

の愛らしかつた姿も眠つてしまつて、眼蓋を開くことはなく、美しかつた黑髮も亂れて藻草のやうになり、優しかつた黛も今は消え失せてしまつて、全くの死人となつてしまつたのは、實に悲しいことだ」

神主「あゝあの美しかつた姿は全く消え果てゝしまつた。魂は何處へ飛んで行つたことであらう。可哀想に身は朽ちてしまつて、思ひはこの世を去らないことだらう」

【八】

神主「左近尉、あの女の心中が餘りに可哀想だから、臨時の幣帛を捧げ、一心不亂にお祈りして、あの女の命を今一度生き返らしたいと思ふが、どうであらう」

左近「いかにも、それは御尤もでございます」

神主「それでは祝詞をあげよう」

るが如くに影現し給ふ意。○頭面接足―わが頭面を以て尊者の足を頂く印度の最敬禮。○歸命禮―誠心を以て敬禮する意。歸命は南無の漢譯。○天滿天神―太宰府神社を指す。延喜五年菅原道眞を祀つて天滿大自在天神と稱へた。○舊里―菅公はもと佛身であると觀て、その本地佛世界をいふ。○幕下―近衛大將の異名。菅公は右近衛大將を兼ねた。○西海の西都―太宰府。○安樂寺―太宰府にあつた寺。菅公延喜三年二月謫所に薨じて、その柩車安樂寺に止まつて動かなかつたと傳ふ。○春秋を招く―永い歲月を過す。○覺王如來―覺王も如來も同義。垂跡の本體たる佛陀をいふ。菅公の本地は觀世音であると傳ふ。○寂光―常寂光土の略。佛世界。

【九】○唯賴め―新古今集に清水觀音の御詠として「なほ賴め標茅が原のさしも草われ世の中にあらん限りは」とあるを引いた。

ワキヅレ「然るべう候

後見、小袖を引き、引廻をかけたる神殿の作物を一疊臺に載せて大小前に出す。後ジテ天滿天神、面天神・黑垂・初冠・襟白・着附厚板・給狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて作物の中に入り居る。

ワキ御幣を持ちて作物に向ひ、

ワキ『神主御幣おつ取つて。神前に參り跪き。既に祝詞を申しけり。（御幣を振りて）謹上再拜。我此道場如帝珠。十方三寶影現中。我身敬禮三寶前。頭面接足歸命禮。南無天滿天神。廣く舊里を去つて。遍く幕下を兼ねたり。明才衆に越え。明智世に勝れ。西海の西都に安樂寺の地を點じて。春秋を招く

地や本地覺王如來。寂光の都を出でて。この太宰府に住み給ふ

【九】後ジテ天滿天神、出端の囃子を聞きて、

後ジテ『唯賴め。標茅が原のさしも草。われ世の中

左近「それがよろしうございます」

舞臺は太宰府神殿の前。

神主は御幣を持ち、神前に跪いて祝詞をあげた。

神主――『謹んで申しあげます。この齋場に十方世界の御佛達が、帝釋天の珠に物の映るやうに、みな影向遊ばされます。私はこの諸々の御佛の前に最敬禮をして歸依致します。殊には、わが天滿天神は本地の極樂世界を離れて、特にこの現世に現れ、右近衛大將をお兼ねになりました。そしてその才識は人に超え、その慧智は世に勝れ、天下の鶴にお盡しになつた後、この九州の都安樂寺にお留まりになり、永い年月をお過しになるのでございます。あゝ天滿天神は本地は御佛でありながら極樂世界を出て、この太宰府にお住みになるのでございます。（どうかその御力を以てこの女を蘇生させて下さいませ）』――」

と祝詞をあげる。

【九】後ジテ天滿天神、神殿に出現し給ふ態。

天神『たゞ賴め標茅が原のさしも草、われ世の中にあらん限りは』

○昨日は北闕に―正暦五年一條天皇菅公に正一位太政大臣を贈らせ給ふ敕使が太宰府に下り、詔書を讀み上げた時、天に聲あり神靈の吟ぜられたといふ詩「咋爲二北闕蒙し悲士一、今作二西都雪し恥尸一、生恨死歡其我奈、今須二望足護二皇基一」（太平記等に見ゆ）を引き、これを京女の身上にとり做した。
○法性の都―法性眞如の佛世界の都。
○分段同居―佛菩薩が衆生化益の爲に分段生死の世界（善惡の業因によつて變易する三界）に凡夫と同居すること。
○冥々とある苦海―冥々はくらい貌。苦海は苦惱の涯りない生死の世界を海に喩へた語。京女の入水に通はせていふ。
○菩提涅槃―菩提 Bodhi 涅槃 Nirvana ともに正覺成佛の意。
○宿因―前世の因緣。善因をいふ。
○受け難き人身を受け―普通には「萬物の長たる人間に生まれて」の意であるがこゝには京女蘇生の事に轉用したのである。平家物語に「人身は受け難く、佛教には遇ひ難し」

に。あらん限りは

地『御殿頻りに鳴動して。現れ給ふぞかたじけなき

後見、作物の引廻を下す。

地上歌『昨日は北闕に。昨日は北闕に悲しみを蒙る身なれども。今日は西都に蘇さんと。生きて恨み死して悅ぶ。ありがたの誓ひや

シテ『抑も當社と申すは

シテ作物より出で、これより謠に合せて舞ふ。

地『抑も當社と申すは。法性の都を出でて。分段同居の境に入つしよりこの方。冥々とある。苦海に沈み。菩提涅槃に至らず。ここに宿因内に通じて受け難き人身を受け。知識、外に助け逢ひ難き。誓ひの春に。又逢ふ事も。唯これ當社の神恩ぞと悅びの祝詞を奉り悅びの祝詞を奉れ

（自分がこの世に居る以上は必ず救つてやるから、短氣を起さず自分を賴りにするがよい）

とあらたかな御聲がして、御神殿が頻りに鳴り動き、忝くも天滿天神が出現せられた。

天神「自分は昔は都に於て悲しい思ひをしたが、今は九州にあつて人を助けようと思ふ。生きてゐる間は恨めしい思ひをしたが、死んだ後は悅びを持つてゐるのである」

とありがたい御詞である。

さて、この太宰府神社と申すのは、菅公が本地佛世界を出て、この迷ひの多い三界に衆生凡夫と同居せられてより以來、絕えず衆生をお救ひ下さる神で、今こゝに身投げをして成佛することの出來ない京女をも、前世の善因を以て人間界に取戻し、善知識の助けを以て再びこの世に蘇生せしめられたのである。そこで

神主「これも全く御當社の神恩でございます」

と御禮の祝詞をあげると、天神はそのまゝ上つておしまひになつた。

○知識―善知識。佛道に緣を結ばしめる人。
○春に又逢ふ―京女の蘇生をいふ。

ば、神は上らせ給ひけり

と、仕手柱際にて留拍子を踏む。

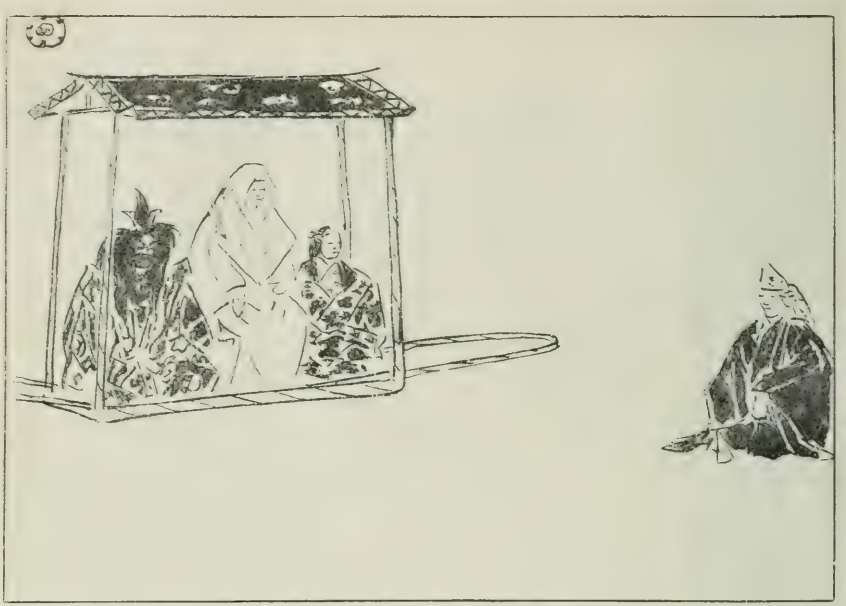
〔考異〕

諸流（觀春）

【六】ワキ「これは宰府の……この間は他所に候ひて唯今罷り歸り候（春程は宰府の天神に一七日參籠申し。今日滿參にて候程に。私宅に歸らばやと存じ候）……ワキ「そと見たき由申して取りて來り候へ（春急ぎあの文を取りて來り候へ。文のうちを見て都へ確かに送り屆けうずる由申し候へ）

古謠本（元祿八年本）

【三】ワキツレ「言語道斷さやうの御事をば（元何をも）存ぜず（元旅人やの事にて）候程に……が所に……ワキツレ「暫く（元候）……　【六】ワキ「これは宰府の……推量申し（元仕り）て候……ワキツレ「なう（元いかに梅千代殿）その文を……　【七】ワキ「げにげに……かの者の心中（元路次の事と申し）餘りに不便に……ワキツレ「やあやあ……皆々（元罷）のき候へ。ワキ「いかに……（元又）梅千世が事……地ワキ「いへども……蟠蟠（元ゑん〳〵）たる……　ワキツレ【八】「げにげに（元御意）尤にて候……ワキ「さらば（元頓て）祝詞を參らせうずるにて候（元急ひて幣帛を捧げ候へ）ワキツレ「然るべう候（元畏て候）



碇潜（いかつき）

觀（剛）

解說

【能柄】 二番目　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　都方の僧、**前シテ**　漁翁（平敎經の靈）、**狂言**　當浦の者、**後ツレ**　二位尼、**後ツレ**　大納言局、**後シテ**　平知盛

【所】 長門國　早鞆浦

【時】 （無季）

【作者】 能本作者註文に作者不明として擧げてゐる外、古記錄にこの曲名は見當らない。恐らく室町末期に近い作であらう。

【梗概】 平家に緣故のある都方の僧が長門國早鞆浦に行つて、便船した漁夫に、壇の浦の軍物語を所望すると、漁翁は平敎經が義經の船に飛び乘つて奮鬪し、源氏の武士を兩脇に挾んで海に沈んだ事を語り、自分達はその幽靈であるといつて消え失せる。僧が平家の跡を弔つてゐると、早鞆の海中に琴を彈ずる船が現れ出た。その船中には二位尼・大納言局・平知盛が乘つてゐて、二位尼・大納言局が帝を奉じて入水した樣を語り、

舟の回向を乞うてゐると、空中に修羅の叫び聲が聞えて、知盛は修羅道の鬪爭に身を苦しめ、源氏の軍兵と戰ひ、敵を散々に追拂つた後、碇を戴いて海中に飛んで入る。

【出典】本曲は平家物語卷十一「先帝御入水の事」「能登殿最期の事」「內侍所の都入の事」に據り、そのうち「能登殿最期の事」を前段、餘を後段としたもので、詞章も平家物語の文をそのまゝ引いてゐる所が少くないから、之を抄出すると、敎經最期の事は、

敎經は今日を最期とや思はれけん、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形打ちたる甲の緒をしめ、いか物作りの太刀を佩き、二十四さしたるきりふの矢負ひ、滋藤の弓持ちて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、者ども多く手負ひ射殺さる。矢種皆盡きければ、黑漆の大太刀・白柄の大薙刀左右に持ちて、散々に薙ぎて廻り給ふ。新中納言知盛の卿、能登のもとへ使者を立てゝ「いたく罪な作り給ひそ、さりとてはよき敵かは」と宣へば、能登殿「さては大將に組めごさんなれ」とて、打物莖短にとり、艫舳に散々に薙ぎ廻り給ふ。されども判官を見知り給はねば、物具のよき武士をば判官かと目をかけて飛びかゝる。判官も內々面に立つやうにはし給へども、とかく違へて能登殿には組まれず、されどいかゞはし給ひたりけん、判官の船に乘りあたり、あはやと目を懸けて跳びてかゝる。判官叶はじとや思はれけん、薙刀をば弓手の脇にかい挾み、味方の船の二丈ばかりのきたりけるに、ゆらりと飛び乘り給ひぬ。能登殿早業や劣られたりけん、續きても飛び給はず。能登殿今はかくとや思はれけん、太刀薙刀をも海へ投げ入れ、甲も脫ぎて捨てられけり。鎧の袖草摺をもかなぐり捨て、胴ばかりきて、大童になり、大手を廣げて船のやかたに立出で、大音聲をあげて「源氏の方に我と思はん者あらば、寄りて敎經組みて生捕にせよ、鎌倉へ下り兵衞佐に物一言いはんと思ふなり、寄れや寄れ」と宣へども、寄る者一人もなかりけり。こゝに土佐の國の住人、安藝の鄕を知行しける、安藝の大領實康が子に、安藝の太郎實光とて、凡そ二三十人が力あらはれたる大力の剛の者、我にちつとも劣らぬ郎等一人具したりけり、弟の次郎も普通には勝れたる兵なり。かの三人寄合ひて、たとひ能登殿心こそ剛におはすとも、何程のことかあるべき、長十丈の鬼なりとも、我等三人が摑みつきたらんに、などか從へざるべきとて、小舟に乘り能登殿の船に押並べて乘り移り、太刀の鋒を揃へて、一面に打ちてかゝる。能登殿是を見給ひて、先づ實光に進みたる安藝の太郎が郎等に裾を合せて海へどうと蹴入れ給ふ。續きてかゝる安藝の太郎をば弓手の脇にかい挾み、弟の次郎をば馬手の脇に取りて挾み、一しめしめて、「いざそれ已等死出の山の供せよ」とて、生年二十六にて海へつゝとぞ入り給ふ。

後段、先帝御入水の事は、

新中納言知盛の卿、小舟に乘りて急ぎ御所の御船に參らせ給ひて、「世の中は今はかくと覺え候、見苦しきものどもをば皆海へ入れて船の掃除めされ候へ」とて……手づから掃除し給ひけり。……二位殿は日比より思ひ設け給へることなれば、鈍色の二ぎぬ打ちかづき、ねり袴のそば高くとり、神璽を脇に挾み、寶劍を腰にさし、主上を抱き參らせて、「我は女なりとも敵の手にはかゝるまじ、主上の御供に參るなり、御志思ひ給はん人々は、急ぎ續き給へや」とて、しづ〳〵と舷へぞ歩み出でられける。主上今年は八歳にぞならせおはします。……二位殿幼き君に向ひ參らせ、涙をはら〳〵と流して、「君は未だ知し召され候はずや、先世の十善戒行の御力によりて、今萬乘の主とは生まれさせ給へども、惡緣に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。まづ東に向はせ給ひて、伊勢太神宮に御暇申させおはしまし、其後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らんと誓はせおはしまして、御念佛候ふべし、この國は粟散邊土と申して、物憂き境にて候、あの波の上にこそ極樂淨土とてめでたき都の候、それへ具し參らせ候ぞ」と樣々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙に溺れ、小く美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢太神宮・正八幡宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、「波の底にも都の候ぞ」と慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。

とあり、知盛最期の事は「內侍所の都入の事」に

新中納言知盛の卿は、見るべき程のことは見つ、今は唯自害せんとて、乳母子の伊賀の平內左衞門家長を召して、「日比の契約をば違へまじきか」と宣へば、「さる事候」とて、中納言殿にも鎧二領きせ奉り、我身も二領きて、手に手を取組み、一處に海にぞ入り給ふ。

とある。但し本曲の題目たる碇潜のことは、平家物語にも源平盛衰記にも見えない。たゞ參考源平盛衰記所收の如白本にだけ、我身も二領着て」の次に「碇を負ひ」と記してゐるから、本曲は如白本に據つたやうであるが、或は流布本の「能登殿最後の事」に、門脇の平中納言教盛、修理の大夫經盛兄弟、手に手を取組み、鎧の上に錨を負ひて、海にぞ沈み給ひける」とあるのを、わざと人違ひして知盛の事とし、その代り前段は教盛を主題にしたのでなからうかと思ふ。

【概評】修羅物には平家物語を本說としたものが多く、本曲もその一であるが、同系統の類曲の中で、本曲の如きは稍異色のものといふべきであらう。その一は、前段と後段とその主材を異にしてゐることで、この種のものには「八島」もあるが、その前段三保谷と景清の錣引は、義經陣中の一挿話であり、シテは前後とも義經であるが、本曲の前後段は對立的のもので、シテも後は知盛であるが、前は

教經と解せられるのである。その二は後段に登場人物が多く、しかも誠によく夢幻的情趣を溢えてゐることで、殊にその前半は女性の優雅な悲話であり、後半は勇士の凄壯な闘爭で、この一段中に柔剛二面を相應させてゐるのは、面白い趣向であると思ふ。たゞ舞臺效果の實際を見ると、後段の興味が二部に分裂し易いのは、その詞章のやゝ冗漫に流れた結果であらうか。

【一】

○雲をしるべのよそに見て―平生は雲を案内者としてたゞ身を雲に任かせて所定めず行脚する身であるが、今日はさうはしないで、目的を以て都を出發するとの意。雲は雲水の意と雲居の意とを兼ね「よそに見て」は「しるべとせずして」の意と「雲居をよそに見て」の意とを兼ねた。

○月の行方―月の行く方。西國を指す。

○長門の浦―長門國早鞆・境の浦の邊をいふ。

○もとよりも浮世の旅に―元來人世は憂き事の多い旅のやうなものであるが、今その眞の旅に出てとの意、

【一】

次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・數珠の裝束にて、經を懷中して出で、名乘座に立ちて囃子座の方に向き、

ワキ次第『雲をしるべのよそに見て。雲をしるべのよそに見て。月の行方を尋ねん

地取に正面に向き、

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。さてもも平家の一門は。長門の浦にて果て給ひて候。われ等も平家のゆかりの者にて候程に。一門の御跡を弔ひ申さんと思ひ。唯今長門の國へと志し候

ワキ道行『もとよりも。浮世の旅に又出でて。浮世の旅に又出でて。宿定めなく捨つる身の行末な

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ都方の僧登場。

僧「所定めず行脚する雲水の身であるが、今度は少し目的があつて、都を出て、西國の方へ行かうと思ふ」

ミ次第を謠つて旅の目的地を述べ、

僧「私は都の方から出て參つた僧です。さて平家一門の人達は長門の浦でお果てになりましたが、私も平家に緣故のある者ですから、御一門の御菩提を弔ひたいと思ひ、これから長門の國へ行かうと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

僧「元來人生は辛い事の多いもので、浮世に旅のやうだといはれて居るが、今はそのほんとの辛い旅に出て、しかも一所不

○そことしも波に—落ち着く先を其處と定めることもなくを波といひかけた。
○早鞆の浦—汐風の早きを早鞆といひかけた。早鞆の浦は長門國下關海峽の海、壇の浦はその北に續いてゐる。平家物語に「かの早鞆が沖と申すはたぎつて落つる汐なれば—とあり、實際に汐風の早い所。
○便船—船に便乘すること

【三】

◎磯千鳥—古謠本には、この上に數句の文のあつたのを、今本は省略したのである。「考異」の項に掲ぐ。
○海士の子ども—海士の子は海士といふに同じ。海士も互に呼びあひ誘ひ合つて海に出よとの意。
○なかなかの事—承知したとの意。
○門司赤間—門司は豐前國の北部、赤間は今の下關で長門國の南端にあり、早鞆の瀨戸を挾んで本州と九州との接近した所。

ればそことしも。波に落ちくる汐風早鞆の浦に、着きにけり早鞆の浦に着きにけり

「波に落ちくる汐風」と右の方に向き、二三足出で、またもとに歸りて、早鞆に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。早鞆の浦に着きて候。暫く船を相待ち。便船を乞はばやと存じ候

【二】

といひて脇座へ行き下に居る。

一聲の囃子にて、シテ漁翁、面笑尉・尉髮・襟淺黃・着附無地熨斗目・水衣・腰簑・腰帶・扇の裝束にて棹を持ちて出で、常座に立ちて、

シテ一聲『磯千鳥。友呼びかはす聲すなり。海士の子どもも。心せよ

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「なうなうあれなる船に便船申さう

シテ「なかなかの事召され候へ。さて船賃は候

ワキ「さん候出家の事にて候へば船賃は持たず候

シテ「門司赤間や波風の。早鞆といひて恐ろしき

住の僧侶のこととて、落ち着く先を何處と定めることもなく、旅を續けてゐるうちに、あの汐風の早い早鞆の浦に着いた」

と旅程を述べてゐる間に、舞臺は長門早鞆浦となる。

僧「道を急いだので、存外早く早鞆の浦に着きました。こゝに暫く待つてゐて、通りがかりの舟に乘せて貰ひませう」

と舟の來るのを待つてゐる態。

【二】

シテ能登守教經の亡靈漁翁の態で、舟を漕いで來る態で登場。

漁翁「そら磯千鳥が鳴いて友を呼びかはしてゐるわ。漁師たちも誘ひあつて仕事をするがよい」

と、舟の漕いでくるのを見て、ワキ僧は立ち上り、

僧「おういおい、その舟に乘せて下さい」

漁翁「よろしうございます。どうぞお乘り下さい。ところで船賃はいかがでせう」

僧「いや私は出家のことですから、船賃は持つてゐません」

漁翁「こゝは『門司・赤間關殊に波風の荒い早鞆』といつて、恐ろしい所だのに、船

○無道心—佛道を修めない懈怠放逸の者。こゝでは横着者との意。

○無緣—こゝには世間的な金錢に緣がないとの意。

○一乘妙典—一佛乘（一切の衆生を成佛せしめる法）を說いた靈妙な經典。法華經をいふ。

○法の道—佛道。船に乘るといひかけた。

○門司の關の—法華經の文字を門司といひかけ、關の戸開くを、篝火を明るくせよにいひかけた。

所を。『船賃なくて渡らんとは。無道心なる僧達かな

ワキ『不思議の事を聞くものかな。無緣の僧に船賃を。取らんと思ふ人々こそ。無道心とはいふべけれ

シテ「げにげにこれは御理。さて又頸に懸け給ふは。如何なる物にてあるやらん

ワキ「これは一乘妙典なり。御望みあらば讀誦せん

シテ『さては嬉しや御僧の。讀誦をわれらが船賃にて

ワキ『今この船に法の道

シテ『いざ聽聞せん法華經の。門司の關の戸あかせや篝火

と謠ひながら、二人とも下に居り、ワキは懷より經を取出して開き、

賃もなしで乘らうとは、實に横着なお坊さんだ」

僧「これは異な事を仰しやる。金に緣のない僧から船賃を取らうと思ふ人こそ、横着といふものです」

漁翁「なるほどこれは御尤もです。して又頸にお懸けになつてゐるのは、どういふ物です」

僧「これはありがたい妙法蓮華經です。御望みならば讀誦しませう」

漁翁「それは嬉しい。お僧が御讀經下されば、これこそよい船賃です」

僧「では讀經して船に乘せて貰ひませう」

漁翁「さあ法華經を聽聞しませう。さうだ、經文の讀みよいやうに篝火を明るくしませう」

と舟の篝火を明るくして、僧にさし出す。僧は法華經を開いて、

○藥王菩薩品―法華經第二十二品の卷の名。委しくは「藥王菩薩本事品」といひ、藥王菩薩が佛恩を報ずる爲に身を燒いて佛に供養した事を記す。
○如子得母如渡得船―藥王品の文句。「子の母を得たるが如く、渡に船を得たるが如し」と讀み、法華經の功德を說いた喩。
○とくとく召され―御法を說くといひかけた。
○三つの船―願ひも滿つを「三つにいひかけた。「三つの船」は圓融天皇大堰川行幸の御時、詩・歌・管絃の三の船をお浮べになつた故事をいふのであるが、こゝにはたゞ船の意。
○上人の御法―上人の乘るを法にいひかけた。
○誓ひの船―すべての衆生を漏れなく救つて善所に渡すといふ佛の誓願を船に喩へた語。
○他生の緣―前世からの宿緣。

【三】
○似合はぬ申し事―僧に不似合な望み。

ワキ『妙法蓮華經藥王菩薩品。如子得母如渡得船シテ『こは渡に船を得たりとや。あらたふとやこの御法

ワキ經を卷きて懷中す。シテ立ち、

地上歌『とくとく召され候へ（ワキシテの前へ行き下に居て船に乘りたる心）。とくとく召され候へと。いふや願ひも三つの船に。上人の御法こそ。よき船賃と覺えたり。げにや漏らさじの。誓ひの船に法の人他生の緣は、ありがたや他生の緣はありがたや

【三】
シテ「船が着いて候。御上り候へ

ワキ脇座へ行きながら、

ワキ「いかに尉殿。まづまづ船より御上り候へ申すべき事の候

シテ「心得申し候

と棹を捨てて舞臺の眞中に出で、二人とも下に居る。

ワキ「何とやらん似合はぬ申し事にて候へども。

僧――『妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十二……子の母を得たるが如く、渡に船を得たるが如く……』――」

漁翁「なるほど『渡で船を得たやうだ』とございますか。實にありがたい貴い御經です、さあ〳〵早く船にお乘り下さい」

と喜んで僧を船に乘せ、

漁翁「お上人の御讀經こそ結構な船賃でございます。佛樣は衆生を一人漏さず法の舟に乘せて極樂へ渡さうと御誓約になりましたが、今貴いお僧を船にお乘せ申すことの出來るのは、前世の宿緣かとありがたく思はれます」

かういひながら船を漕いで行く態。

【三】
船は向ふ岸に着いた態で、僧は上陸し、

僧「おぢいさん、あなたもまあ船からお上りなさい、少しお話したいから」

漁翁「よろしうございます」

漁翁も上陸した態。

僧「何だか僧侶に不似合なお尋ねをしますが、昔この浦で源平の戰ひのあつた軍

○古この所―刊行會本には「古との浦」とある。
○今はかうよ―今は致方がない。
○門脇殿―平中納言教盛。忠盛の子で清盛の弟。六波羅の總門の脇に住んでゐたので、世に門脇と呼ばれてゐた。
○能登の守教經―教盛の子で通盛の弟。一門中で特に武勇の聞えの高かつた人。
○薙長にとりのべ―柄の末の方を持つて、先を長く突き出すこと。但し平家物語には「白柄の大長刀、薙短に持つて」とある。
○新中納言―平知盛。清盛の子で、一門中智勇兼備を以て聞えた人。
○せんなき―下らない。つまらない。
○九郎判官―源義經。義經は檢非違使判官であつた。

古この所にての軍物語が承りたく候

シテ「易き間の事語つて聞かせ申し候べし

シテ床几にかゝり、

シテ(語)「さてもこの壇の浦の合戰。今はかうよと見えし時。門脇殿の次男。能登の守教經小船に取り乘り。大長刀を薙長にとりのべ。此處彼處を薙ぎ給ふにぞ。兵多く亡びにけり。その時新中納言使者を立て。せんなき能登殿の振舞かな。さればとてよき敵にてもあらばこそと宣ひければ。さてはこの詞は。大將と組めといふ事にてやあるらんとて。敵の船に紛れ入り。九郎判官を尋ね給ふ

地「いかがはしたりけん判官の船に乘り移りぬ

シテ「能登殿悦び打つてかかる

地「判官これを見て。判官これを見て。叶はじと

物語を聞かして戴きたいのです」

邊翁「それはお易い御用です、お話致しませう」

ミ座を寫いで、

邊翁「さてこの壇の浦の合戰で、平家も今は駄目だと思はれた時、門脇中納言教盛の次男能登守教經が小さな船に乘り、大長刀を長く突出して、あちらこちら斬りまくられたので、源氏の兵も多勢殺されてしまつたのです。その時、新中納言知盛が使者をやつて『能登殿はつまらないことをせられる。あのやうな者はよい敵でもないのに』と仰しやつたので、教經も、さては今のお傳言は敵の大將と取組めといはれたのだなと思つて、敵の船に紛れ入り九郎判官義經を探されたのです」――

邊翁「そのうち、どうしてか旨く義經の居る船に乘り移られました。能登守教經は悦んで義經に打つてかゝりました。義經は之を見て、とても適はないと思つたのでせう、長刀を脇に挾み、二丈ばかりも

○腹立て叱りあたりを拂つて立つたりけり―「あと見送りて怒りをなしてぞ立つたりける」とも謠ふ。

○安藝の太郎同じき次郎―源氏方の武士。平家物語に「土佐國の住人、安藝郷を知行しける安藝大領實康が子」と見ゆ。

○ものものし―仰山らしい

○冥途―死後の世界。

○左右―右を「みぎり」といふのは當時の俗語。

○人々の幽靈―こゝで語つてゐる主人公は教經で、後段の人物は知盛及び二位尼等であるから、特に人々といつたのであらう。

○白波の―幽靈ぞと知らんを白波にいひかけた。

や思ひけん。長刀脇にかい挾んで。二丈ばかりの味方の船に。ゆらりと飛び乘れば。教經はせん方もなく。長刀投げ捨て腹立て叱りあたりを拂つて立つたりけり

シテ『かかりける處に

地『かかりける處に。安藝の太郎同じき次郎。兄弟二艘の船を押し寄せ能登の守とぞ闘ひける

シテ『ものものしおのれ等に（と扇を腰にさし）

地『太刀も刀もいるまじや。いざや冥途の供に連れんと左右の腕をさし出だし（と兩手を出し）。彼等を掴んで引き寄せて。左右の脇に挾んで波の底に沈みけり（と床几を離れて安坐し）

シテ『さてこそ人々の（と立ち）

地『幽靈ぞとは白波の。跡弔ひてたび給へ亡き跡弔ひてたび給へ

距つた味方の船に飛び乘りました。それで教經も仕方なく、長刀を投げ捨て、腹を立てゝ大聲をあげあたりを睨みまわしました」――

演劇『かうしてゐる所へ、源氏方の安藝の太郎次郎の兄弟が二艘の船で押寄せ、能登守と闘ひました。能登守は『何を仰山らしい、このやうな相手に太刀も刀もいるものか、さああの世への道連れにしてやらう』と、左右の腕を差出して、彼等を掴んで引寄せ、左右の脇に挾んで、海底に飛び入つたのです。

かういふ私達は、實はその人々の幽靈です。どうか菩提を弔つて下さい」

といつて消え失せる心で退場。

【間】

と常座にて開き靜かに中入。

【間】　狂言當浦の者、着附縞慰斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、棹をかたげて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。早鞆の浦に住居する者にて候。この間は漁船を出し申さず候間。今日は舟を出し申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御入り候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左樣にて候はば先づ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所は平家の一門あまた果て給ひたる由承り及びて候。軍物語あつて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の事委しくは存ぜず候へども。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程にこの浦にて源平の御合戰あつて。平家討ち負け給ひ。海に沈み給ふ樣體は。平家は都を落ちて津の國一の谷に籠り給ふ。範頼義經押し寄せ給ひ。讃岐の國八島へ追ひ落し給ふが。八島にても打負けこの所に落ち給ふ。義經この浦まで來り戰ひ給ふが。兎角平家負け軍にて候間。知盛申さるゝは。安德天皇を波の底に行幸なさしめんとあれば。二位殿尤もの事なりとて。玉體を抱き波の底に入り給へば。御一門は皆々入水ありたると申す。又能登守教經は判官と組まんとて。義經の舟に飛び乘り給へば。義經は二丈ばかり間のある味方の舟に飛び移り給ふ間。教經力及ばず。安

藝の太郎兄弟の者を左右の脇にかい込み。その儘海に入り給ひたると申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何とて御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老人一人。舟人の體にて來られ候程に。即ち便船申して候へば。御經を聽聞申され。古の軍物語候ひて。跡弔ひてたべといひもあへず。その儘姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は御僧貴くましますにより。知盛の御亡心現れ給ひ。御詞を交はし給ひたると存じ候間。この所に御逗留あつて。御一門の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はゞ重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて、狂言は引く。

【四】

後見、屋形船の作物に引廻をかけて、囃子座前に出す。

ワキ『さてもわれ夜も靜かなる折節に。この海際のほとりにて。平家の跡を弔ふ處に。（作物に向ひ）「不思議やな今までは。無かりし大船浮かみ出でて。『さも早鞆の海なれども。流れもやらず漕ぎもせず。潯陽の江のほとりならねど。舟船のう

○亡心―亡靈、亡魂。

【四】

○潯陽の江―支那江西省九江府の北方、楊子江の尋水と合する附近の稱。白居易が江上に船を操る一娼女が琵琶を彈いてゐるのを聞いて「琵琶行」を作つた所。

○舟船―たゞ船といふと同じ。

【四】

後段

これよりワキ僧の夢の場の心で、舞臺に御座船が出て、二位尼・大納言局が乘つて居る。その船の中から琴の音が漏れる心。僧は夢うつゝに之を聞いてゐる體で、

僧「これは不思議だ、夜も靜かに更けて來た今、私がこの海際で平家の菩提を弔つてゐると、今までなかつた大船が海中に浮かび出で、こゝは流れの早い早鞆の瀨戸だのに、船は流れもせずまた漕ぎ上り

○松風にも岩越す波にも―松風はよく琴の音の形容に用ゐられ、岩越は琴柱の上の絲のかゝる所で、いづれも琴の緣語である。
○更に紛れぬ―風や波の音にも紛れないで、はつきりと聞える。

【五】
○大納言の局―安德天皇の御乳母。重衡の妻。五條大納言邦綱の養女であつたから大納言の局といふ。
○苫―菅・茅などで作つた雨露を防ぐ船具。

ちにて彈ずる祕曲。松風にも岩越す波にも。更に紛れぬ琴の爪音。あら不思議の事やな

【五】

後ヅレ二位尼、引廻をかけたる作物の中にて、

後ヅレサシ『いかに大納言の局。今宵は波も靜かなれば。月を叡覽あらんとの御事なり。あの苫取れと申せ

後見、次の地謠に作物の引廻をとる。

後ジテ平知盛、面怪士・黑頭・鉢卷・梨打烏帽子（鍬形をつく）・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶・太刀の裝束、後ヅレ二位尼、面姥・花帽子・襟朽葉色・着附摺箔・無色唐織・數珠の裝束、後ヅレ大納言局、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織・數珠の裝束にて、二位尼は船の中央に床几にかゝり、知盛にその右脇に、大納言局は左脇に下に居る。（大納言局には謠なし）

地上『梶枕。せめては月を松風の。せめては月を松風の。吹くもよしなや苫取りて。夜船に月を待たうよ

【六】

地ヅレ『それ身を觀ずる時は岸上の草。命を知れば。江のほとりに繫がざる船

○梶枕―船中で寢ること。
○月を松風の―月を待つを松にいひかけた。

【六】
○身を觀ずる時は―和漢朗詠集薄雪の詩句「觀身岸頭離根草、論命江頭不繫船」を引いた。

もせず、同じ所にゐて、昔白樂天が琵琶の音を聞いたといふ潯陽江のやうに、船の中で琴の曲を彈じてゐて、その爪音が松風にも岩うつ波の音にも紛れず、はつきり聞えてくる。實に不思議だ―

【五】
これより夢幻的に現れた船中の光景で、船の中にはツレ二位尼、同大納言局、シテ平知盛が乘つてゐる。

二位『大納言の局、今宵は波も靜かだから月を御覽遊ばすとの仰せです、あの苫を取れといひつけて下さい」

船の苫屋根がとり去られて、船中の人々が見える。

二位『このやうな船中の寢起きでは、せめて月を眺めて慰めるより外に術もない、さあ苫を取除けて、月の出を待ちませう」

【六】
二位『昔の人が――
『身を觀ずれば岸額根を離れし草、命を論ずれば江頭繫がざる船』
（人の運命をよく考へて見ると、根のない水草か、岸に繫いでない小船のやうなものだ）
といつた通り、人の命といふものはほんとに果敢ないものだ」
以上は昔さながらの光景であるが、以下亡靈が付に物語る心となる。

○さる程に―以下クセ一章演奏には二位尼の詞としてゐるが、解釋の上からは、大納言局の詞と見た方が適當であらう。
○二位殿―清盛の妻、名は時子。その女建禮門院の生み奉つた安德天皇が御即位になつたので、從二位に叙せられた。
○供奉―天子の御供。

○今は―この世の最後。

○神璽―三種神器の一である八坂瓊の曲玉。
○寶劍―同じく草薙の劍。
○内侍所―同じく八咫の御鏡。常には御鏡を奉安した賢所をいふ。
○皇居―船中の玉座をいふ。
○龍宮―海神龍王の宮殿。
○めでたき―立派な。

○龍顏―天子の御顏。
○東―伊勢太神宮の方を指す。

ツレサシ『さる程に壇の浦の合戰。今は頼みもなかりしかば

地『新中納言知盛。二位殿に向ひ宣ふやう。今はこれまで候。御痛はしながら行幸を。波の底になしまゐらせ。一門供奉し申すべしと

（居クセ）

地クセ『涙を抑へて宣へば。二位殿は聞し召し。心得て候とて。しづしづと立ち給ひ。今はの出立とおぼしくて。白き御袴の。つま高う召されて。神璽を脇に挾み。寶劍を腰にさし。大納言の局に内侍所を戴かせ。皇居に參り跪き。いかに奏聞申すべし。この國と申すに。逆臣多き所なり。見えたる波の底に。龍宮と申して。めでたき都の候行幸をなし申さんと。泣く泣く奏し給へば

ツレ『さすが恐ろしと思しけるか

地『龍顏に御涙を。浮かめさせ給ひて。東に向はせ

大納言「このやうにしてゐるうちに、壇の浦の合戰も、もはや平家に勝ち目がなくなつたので、新中納言知盛が二位殿に仰しやるには『今はもはや是非ございません。御痛はしいことでございますが、海底へ行幸を仰ぎ、私ども一門の者が御供申し上げませう』と、涙を抑へながらいはれるのを、二位尼はお聞きになつて『よく分りました』と仰しやつて、靜かにお立ちになり、最後の裝束だとお思ひになつて、白絹の御袴を褄高く身輕に裝はれ、御璽を脇に挾み御劍を腰にさし、私に御鏡をお戴かせになり、さて、天子の玉座に跪いて『申し上げます、この國は逆臣の多い所でございますが、あの波の底には龍宮と申しまして、立派な都がございます。それへ行幸遊ばしますやうに』と泣く〳〵奏上せられました」――

大納言「帝には御幼少ながらも恐ろしく思しめしたのでございませう、御顏に涙をお浮かめになり、東の方にお向きになつ

○十念—念佛十返する事。

○夜すがら—終夜。

○くどき—繰返し語る事。

【七】

○修羅—阿修羅の略。衆生の生死輪廻する六道の一で常に三十三天と戰ふ苦闘の世界。戰に死んだ者はこゝに墮ちて死後も戰苦を離れ得ないといふ。

◎合戰の始まるぞや—シテ謠ともす。

○無明王—無明は一切煩惱の根本をなすもの。

○上北面下北面—北面は「北面の武士」の略で、鳥羽上皇の御時に創められた仙洞御所護衛の武士をいふ。その中四位五位の者を上北面、六位の者を下北面といふ。

○宰相—參議の唐名。

○辨の藏人—藏人頭で太政官の辨を兼ねた者。

おはしまし。天照大神に。御暇申させ給ひ。その後西方にて。御十念も終らぬに。二位殿歩みより玉體を抱き目をふさぎて波の底に入り給ふ。恨めしかりし事どもを。語るもよしなや跡弔へや僧達と。夜すがらくどき給ひしに。俄かにかき曇り。虚空に鬨の聲聞ゆ

「俄かにかき曇り」に三人とも立ち、ツレ二人は切戸より入り、シテは薙刀を持ちて舞臺の眞中へ出で、

【七】

後ジテ『すは又修羅の地』合戰の始まるぞや

〔カケリ〕

シテ合戰の樣を示し、引續き次の謠に合せて仕科。

シテ「波の上に浮かみ出でたるは何者ぞ。なに修羅の大將無明王とや。あらものものし上北面下北面。宰相三位辨の藏人。もつこん百官楯を突き。あれ追つ拂へ」又修羅の瞋恚が起るぞとよ

て、天照大神宮にお暇乞ひを遊ばされ、それから西方淨土に向つて御念佛十返遊ばさうとしたのですが、その終るや終らぬに、二位殿が歩みより、玉體を御抱き申上げ、目を塞いで海底にお沈みになつたのでございます。あゝこのやうな恨めしかつた事を今更お話しても仕方のないことです。どうか菩提をよく弔つて下さい」と僧に向つて夜中泣き話をせられたのであるが、急にあたりが曇つて來て、空に鬨を作る聲が聞えて來た。

【七】

後ジテ平知盛、修羅道から現れた樣を、

知盛「そら又修羅の合戰が始まるぞ」

〔カケリ〕

修羅の戰の樣を示し、

知盛「波の上に浮び出たのは何者おや。なに修羅の大將の無明王だといふのか。何を仰山らしい。さあ上北面の武士も下北面の武士も、參議三位のものも辨の藏人も、すべて平家一門の亡靈は楯を突いてあの修羅の敵を逐つ拂つてしまへ。あゝ

○もつこん百官―「もつこん」は「物故」の撥音便。修羅道に墮ちた平家の人達をいふ。
◎修羅の瞋恚が起るぞとよ恨めしや―「修羅の瞋恚が起るぞや」とも謠ふ。修羅の嗔恚は三毒の一で、修羅道の通性なる敵に對する憤怒の激情。
◎御座船を中にとりこめ―この一節、今「御座船には目もかけず。ただ兵船にぞかかりける」とも謠ふ。御座船は安德天皇の御乘船をいふ。
○艫舳に立ち渡り―艫は船尾、舳は船首。御座船の前後を守護する意。

恨めしや

地『修羅の戰始まれば。修羅の戰始まれば。源氏の軍兵その數浮かみてかの御座船を。中にとりこめ攻め戰ふ事夥し

シテ『平家の公達艫舳にまはり

地『平家の公達艫舳に立ち渡り矢先を揃へ。切先を並べて寄せくる敵を待ちかけたり。中にも知盛進み出でて。大長刀を。莖長に取りのべ、左を薙ぎては右を拂ひ。多くの敵を亡ぼしけるが（薙刀を捨てて扇を持ち）。今はこれまで沈まんとて。鎧二領に兜二はね。猶もその身を重くなさんと。遙かなる沖の（と正面先の下を見）。碇の大綱えいやえいやと引き上げて。兜の上に。碇を戴き碇を戴きて。海底に飛んでぞ。入りにける

海底に飛び入る形をして、仕手柱際にて留拍子を踏む。

それにしても、このやうに修羅の瞋恚の起るのは怨めしいことだ」

かうして修羅の合戰が始まると、源氏の軍兵の亡靈が多勢浮かび出て、（昔の合戰の時と同じやうに）この御座船を中に取圍んで、激しく攻め戰ふのである。すると平家の公達は御座船の前後に立働いて、矢先を揃へ切先を並べて、寄せ來る敵を待ちかけた。

その中にも知盛は殊に進み出て、大長刀を長く突出し、左を薙いでは右を拂ひ、多くの敵を殺したが、もはや今は致方がない、入水しようと、からだを重くする爲に鎧二つに兜二つ、なほその上に、遙か向ふの沖にある碇の大綱をえいや〳〵と引上げ、兜の上に碇を戴いて海底に飛んで入つた。

かうして修羅の亡靈は消え失せた體で退場。ワキ僧の夢ちがめた態。

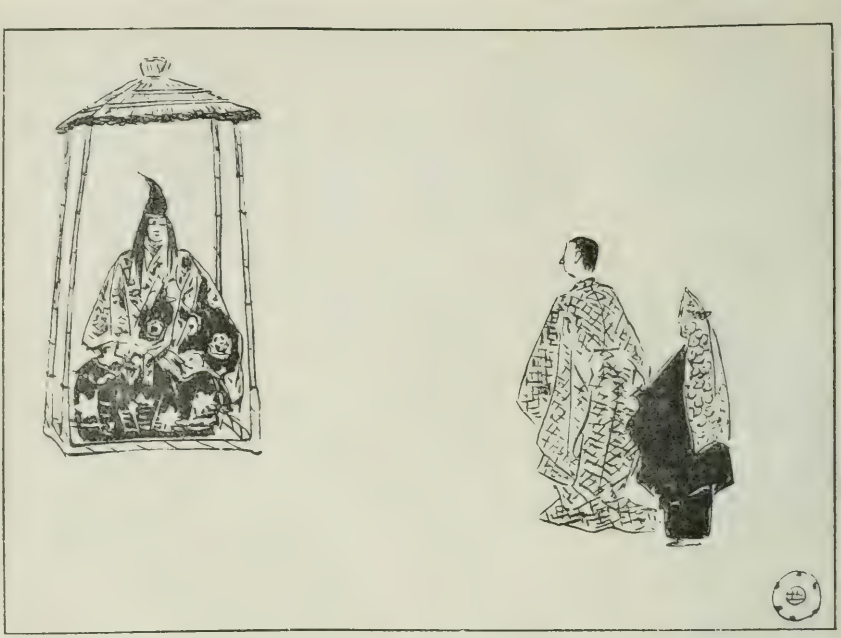
〔考　異〕

諸　流（觀　剛）

【二】シテ一聲の前に、剛、元祿本と同じく「いかに綱の村君……急ぐとよ」を加ふ。

古謠本（元祿八年本）

【二】（元シテ一聲）いかにあみのむらきみ。けふは朝なきの其儘に。沖も磯邊も波はなし。釣たるゝいとまもをしやとく出て。浮世のわさを急とよ）シテ磯千鳥……



生田敦盛（いくたあつもり）

觀（寶春剛）

解說

【能柄】 二番目 劇的夢幻能

【人物】 **子方** 平敦盛の遺子、**ワキ** 法然上人の從者、**シテ** 平敦盛の靈

【所】 攝津國 生田森（前半、山城國賀茂明神）

【時】 鎌倉初期 秋（七月）

【異稱】〔生田〕ともいふ。

【作者】 二百十番謠目錄に金春禪鳳の作としてゐるが、能本作者註文にも〔生田〕を禪鳳作としてゐるが、これを脇能に數へてゐる所を見ると、或は別曲であらうか。

【梗概】 法然上人が賀茂へ參詣の歸途、美しい男の捨子を拾つて歸り、養ひ育てたのが、今は十幾歲となつた。上人或時說法の後、この事を話すと、聽衆の中から若い女性が走り出て、自分がその母で、父は平敦盛であると告白した。その子は父を慕ひ慕つて、上人の從者とともに賀茂明神に一七日參詣して、父との對面を祈ると、生田の

森へ行けとの靈夢を蒙つた。早速生田へ行くと、敦盛の靈が現れて、一の谷合戰の物語をする。そのうちに閻王から迎への使が來て、修羅闘爭の樣を演じ、やがて曉になれば、修羅の敵も消え、敦盛の靈も消え失せる。

【出典】敦盛に遺子のあつたことは、雍州府志卷八に、

子捨馬場。在二上賀茂南一、平敦盛密通二大納言源資方卿之女一、得二一男子一、未レ離二襁褓一時、壽永亂起、敦盛遂赴二西海一、於レ鼓資方卿女棄二幼兒於斯處一、法然上人拾二得之一、成長後爲レ僧、舊記載、法然上人詣二大賀茂社一之次、於二下松邊一拾得之云、然則子捨馬場是紫野今宮旅所邊乎。

とあるが、これは謠曲以後のもので、史實には出てゐない。お伽草紙に「小敦盛」があり、本曲と殆と全く同じ事を記し、制作に前後の關係のあることは疑ひないが、本曲に遺子が一度賀茂に參り次で生田森に行くと、舞臺を二箇所にして脚色してゐるのは、謠曲に珍らしい手法で、草子の記述をそのまゝ取入れたやうであるが、草子に遺子が敦盛の亡靈に遭ふと記してゐるのは、謠曲の常例を眞似たもののやうで、いづれが先とも定め難い。そのいづれにしても、熊谷直實が黑谷で出家した史實に暗示を得て創案したものであらう。なほ敦盛最期の事は〔敦盛〕の解說に述べた。

【概評】修羅物であるが、普通の複式能のやうに前ジテがなく、直に敦盛の幽靈が現れるといふ脚色で、單式の形をとつてゐる。しかし普通複式能の序段に相當する、ワキが生田森へ着くまでの部分が、甚だ分量が多く、黑谷から直に生田へ赴かないで、その間賀茂明神新願の場を構想して、卽ち舞臺面を二箇所にとつてゐるのは、甚だ珍らしい例で、分量からいへば、殆と普通の複式能の前段に相當してゐるのである。シテ登場後、わが子に軍物語をする條は、誠に哀情の深いものであり、一變して修羅の闘爭を描く手法も甚だ妙を得てゐる。恐らく〔敦盛〕以後、別種の趣向を凝らして本曲を構想したものであらうが、前曲に劣らない出來榮であつたと思ふ。

【一】

後見、引廻を掛けたる藁屋の作物を大小前に出す。
子方平敦盛の遺子、角帽子・襟淺黃・着附小格子厚板・絎水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキ黑谷僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り、子方は正面に出で、ワキは名乘座に立ちて、

【一】

舞臺は初め京都。（演能には場面に藁屋の作物を出すが、それには引廻がかけてあつて、また見物人に見えない態）
ワキ黑谷の僧、子方敦盛の遺子を伴つて登場。

○黒谷―京都の岡崎にあり、法然上人のゐた所。その金戒光明寺は淨土宗本山の一である。
○法然上人―名は源空、法然はその房號である。始め比叡山に登り、後南都に遊學して、安元元年淨土宗を開いた。建暦二年八十歳で寂す。東山天皇の時圓光大師の謚號を賜つた。
○賀茂―山城國愛宕郡にある賀茂神社。上下二社ある。この賀茂は雍州府志に據れば、大賀茂即ち下賀茂神社である。
○下リ松―同郡修學院村字一乘寺にあつた。
○手箱―手廻り道具などを入れる箱。
○尋常に拵へ―尋常は見苦しからぬこと。衣裝や道具など體裁よく取揃へてとの意。
○不便―氣の毒。
○いろいろ育て給ひ―色々心を盡して育て給ひとの意。
○一の谷―攝津國武庫郡須磨の西にあり、平家の敗れた所。
○敦盛―平清盛の弟經盛の末子。壽永三年二月一の谷の戰に熊谷直實に殺された。〔敦盛〕參照。
○滿參―祈願の日數の終る日の參詣。

ワキ「これは黒谷法然上人に仕へ申す者にて候。又これに渡り候人は（と子方を見て）。或時上人賀茂へ御參詣御下向の時。下り松の下に二歳ばかりなる男子の美しきを。手箱の蓋に入れ尋常に拵へ捨て置きて候を。上人不便に思し召され抱かせ御歸り候ひて。いろいろ育て給ひ候程に。はや十歳に御餘り候。父母のなきことを歎き給ひ候程に。說法の後この事を御物語り候へば。聽衆の中より若き女性の走り出で。わが子にて候由仰せ候を。密かに御尋ね候へば。一年一の谷にて討たれ給ひし。敦盛の御子にておはしまし候。この事を聞き給ひて。夢になりとも父の姿を見せて給はり候へと。賀茂の明神へ祈誓あるべき由仰せられ候ひて。一七日詣で給ひ。今日はは や滿參にて候程に。同道申し賀茂の明神へ參詣

世「私は黒谷の法然上人にお仕へしてゐる者です。またこゝに居られる人は（敦盛の子を見て）或時上人が賀茂明神に御參詣になつたお歸りの途中、下り松の下に。二つばかりの美しい男の子を手箱の蓋に入れ、衣裝や小道具などを體裁よく取揃へて捨ててあつたのを、上人は可哀想にお思ひになり、抱いてお歸りになり、色色心を盡してお育てになつてゐるうちに、そのお子がはや十いくつにもなられたのです。そして兩親のない事を歎かれるので、上人が說法の後にこの事をお話になると、說法聽聞衆の中から若い女が走り出て『それは私の子でございます』と申されたので、密かにその事情をお尋ねになると、このお子は先年一の谷で討死せられた敦盛のお子であつたのです。お子はこの事を聞いて、せめて夢になりとも父の姿を見せて戴けるやうに、賀茂の明神に祈願をこめたいといはれて、一七日參詣せられ、今日ははや滿願の日なので、これからお連れして賀茂明神に參詣するのです」

申し候

賀茂に着きたる心にて、子方に向ひ、

ワキ「これははや賀茂の明神にて御座候。よくよく御祈誓候へ

【二】

ワキ、子方の右側に行き、二人とも下に居て、

子方サシ『ありがたや所からなる御社の。朱の玉垣神さびて。心も澄める御手洗の。深き恵みを頼むなり（と二人とも合掌）

地下歌「夢になりともたらちねのその面影を見せ給へ。上歌「かくばかり。祈る心の末遂げば。祈る心の末遂げば。恵みになどか漏るべきと。誓ひ糺の神ともに願ひを叶へおはしませ願ひを叶へおはしませ

子方「あら不思議や。少し睡眠のうちに。あらたに靈夢を蒙りて候（とワキに向く）

ワキ「あらめでたやな御靈夢のやうを御物語り候

○所からなる—神境の地勢が神々しい上に、朱塗の玉垣などがあつて、一層森厳に感じられるとの意。

○心も澄める—心の澄むと水の澄むとを兼ねた。玉葉集藤原定家の歌に「聞くたびに頼む心ぞ澄みまさる賀茂の社の御手洗の齋」

○御手洗—神社の前にある池又は川で、参詣人の手を洗ふ所。こゝでは賀茂川の上流。

○深き恵み—水の深きを恵みの深きにいひかけた。

○たらちね—もと母の枕詞であるが、これを両親の意にも用ゐ、更に父の意にも用ゐるやうになつた。こゝでは父の意。

○誓ひ糺の神—神の誓ひの正しきを地名の糺の森にいひかけた。糺の森は愛宕郡下鴨にあり、下賀茂神社即ち賀茂御祖神社鎮坐の地。

○あらたに—あらたかに。

と見物人に事件の概略を紹介し、やがて賀茂明神に着いた態で、無理に賀茂の神明となり、僧は子に向つて、

僧「もはやこゝが賀茂明神です。よくお祈りなさない」

【三】

子「御神境の場所柄がいかにも森厳である上に、朱塗の玉垣などが實に神々しく、御手洗の水は心も澄み渡るばかり清らかなことだ。どうかこのありがたい神様の深い御恵みを戴きたいものだ」

と神前に礼拝して、

子「どうか夢になりとも父の姿をお見せ下さいませ。このやうに心をこめてお祈りしますれば、神様にはきつとお恵み下さることでございませう。どうか糺の森の神様も御一所に、私のこの願を叶へて下さいませ」

と祈つて少しねむり、目がさめた態で、

子「おや不思議だ。少し眠つた間に、あらたかな夢のお告を戴きました」

僧「それはめでたいことです。どういふ御

○御寶殿―御神殿。

○生田の森―平家が一の谷に城を構へた時大手口とした所。今神戸市の東部にその跡がある。

へ

子方「あの御寶殿のうちよりも。あらたなる御聲にて。汝夢になりとも父を見んと思はば。これより津の國生田の森へ下れと。あらたに靈夢を蒙りて候

ワキ「これは不思議なる事にて候ものかな。黑谷へ御歸りあるまでもなく候。これより生田の森へ御供申し候べし。やがて思し召し立ち候へ

【三】

二人とも立ち上り向合ひて、

ワキ道行「山陰の。賀茂の宮居を立ち出でて。賀茂の宮居を立ち出でて。急ぐ行くへは山崎や。霧立ち渡る水無瀨川。風も身にしむ旅衣。秋は來にけり昨日だに。訪はんと思ひし津の國の。生田の森に着きにけり生田の森に着きにけり

ワキ「風も身にしむ旅衣」と正面に向きて二三足進み、またもとに歸りて、生田に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

○山陰の―賀茂の枕詞。

○山崎―山城國乙訓郡。

○水無瀨川―淀川の一支流で、攝津國三島郡水無瀨で淀川に合す。

○風も身にしむ―川風の身にしむを承けて旅衣と續け、又秋を呼び起した。

○昨日だに訪はんと思ひし―新古今集藤原家隆の歌「昨日だに訪はんと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり」を引いて、生田の序とした。

靈夢かお話し下さい」

子「あの御神殿の中から、あらたかな御聲で、お前が夢になりとも父に會ひたいと思ふならば、これから攝津國生田の森へ下れと仰せになる、かういふあらたかなお告を戴いたのです」

僧「これは實に不思議な事です。黑谷へお歸りになるまでもありません、これから早速生田の森へお供致しませう。すぐ御出立なさい」

二人は立ち上がつて、

【三】

僧「賀茂の社を出立して、道を急いで、山崎や霧のたちこめた水無瀨川を過ぎ、吹く川風に旅のつらさを感じながら、やがて、「昨日だに訪はむと思ひし津の國の、生田の森に秋は來にけり」と歌に詠まれた生田の森に着いた」

と、旅を進めた態で、舞臺は攝津國生田の森となる。

○生田の小野―生田附近の平野。（求塚）参照。

【四】○五蘊もとよりこれ皆空―五蘊は色（肉體）・受（財寶等）・想・行・識の五が蘊集すること。この五は假りに集合したものであるから、死ねば離散して空になるとの意。詩の引用であらう。謠曲叢書には作者未詳として「五蘊本來皆是空、因レ何平生愛二此軀一、守レ軀幽魂飛二夜月一、失レ屍窮魂嘯二秋風一」を引いてゐる。○幽魂―目に見えない魂。○ぐはく―前掲の詩によれば窮魂であるが、この語意が通じかねる。

ワキ　御急ぎ候程に。これははや津の國生田の森にて候。森の氣色川の流れ。都にて承り及びたるにもいや勝りて面白き名所にて候。（左の方を見て）あれに見えたる野邊は生田の小野にてもや候らん。立ち寄り眺めばやと思ひ候（と二足詰め）。ここかしこを眺め候程に。はや日の暮れて候は如何に。（脇座の方に向き）あれに燈火の影の見えて候は人家にてありげに候。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候

ワキ（子方に）「まづかう御座候へ

といひて、子方は脇座、ワキはその吹に行き下に居る。

【四】

後見、作物の引廻を下すと、シテ平敦盛、面敦盛・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白赤・着附縫箔・單法被・白大口・腰帶・太刀・扇の裝束にて、作物の中に床几にかゝり居り、

シテサシ『五蘊もとよりこれ皆空。何によつて平生この身を愛せん。軀を守る幽魂は夜月に飛び。屍を失ふぐはくは秋風に嘯く。あら心すごの折か

但、道をお急ぎになつたので、もはやこゝが攝津國の生田の森です。（あたりを眺めて）森の樣子といひ、川の流れといひ、都で聞いてゐたよりも一層勝れた面白い所です。おゝあれに見える野邊が生田の小野でせう。あそこへ行つて景色を眺めませう。（小野へ來て）あちらこちら眺めてゐるうちに、これは大變、はや日が暮れました。あちらに燈火の影の見えるのは、人家のやうです。あちらへ行つて宿を借りませう」

といつて、人家を求める心で脇座へ行く。

【四】その人家の中には、シテ平敦盛がゐて、敦盛「色・受・想・行・識はもと〳〵假に集まつたもので、一度死すれば皆空になつてしまふのだ。だから、その空なからだを平生愛してゐるといふ事は、何の意味をもなさないのだ。一體人間のからだといふ者は誠に果敢ないもので、このからだを守つてゐてくれる魂は、夜の月とともに浮かれ出て、死體を離れた魂は秋の風に泣くのだ。さうだ、今はその秋で、いかにもの凄い時だ」

【五】

○おろかの—迂濶な。
○面々—そなた方。

○絶えこがれ　魂も絶え入るばかりに泣きこがれること。
○鶯の逢ふ事—鶯の字音アウを逢ふにいひかけた。
○頼まれぬ—頼み難い。はかない。
○夢の契り—父は幽靈であるから、夢に對面する外ない、これを現實に引戻し、生前の父に會ひたいとの意
○返すよしもがな—返す手段があればよいが。「がな」は希望の助詞。

らやな

【五】

ワキ（子方も）作物に向ひ、

ワキ「不思議やなこれなる草の庵の内に、さも花やかなる若武者の。甲冑を帶し見え給ふぞや。これは如何なる事やらん

シテ『おろかの人の心やな。「面々これまで來り給ふも。われに對面の爲ならずや。恥かしながら古の。敦盛が幽靈來りたり

子方『なう敦盛とはわが父かと。身にも覺えず走りより

と謠ひながら、シテの右側へ行き、下に居て、シテの右袖に兩手を添へ、

地上歌『袂に縋り絶えこがれ。袂に縋り絶えこがれ

（と子方しをり）。泣く音に立つる鶯の。逢ふ事の嬉しさも。憂き身に餘るばかりなり。かくは思へど頼まれぬ。夢の契りを現に返すよしもがな

子方「かくは思へど」にもとの座に歸り、下に居てシテに向く。

と獨言をいふ。

【五】

僧は敦盛の姿を見て、

僧「これは不思議だ。この草庵の中に、いかにも花やかな若武者の甲冑を着て居られるのが見えるが、一體これはどうした事であらう」

敦盛　何といふ迂濶な人であらう。そなた方がここまで來られたのも、自分に會ふ爲でほないか。恥かしながら昔の敦盛の幽靈が來たのだ」

子「おゝ敦盛とは、私のお父樣ですか」

と、われを忘れて敦盛の傍へ走り寄り袂に縋つて、絶え入るばかりに泣きこがれ、

子「お父樣にお逢ひする事の出來たことは、身に餘るばかり嬉しうございます。でも、思へばこれは果敢ない夢のやうな對面で、どうかこれをこの世の現實にとり戻す術がほしいものです」

【六】
○無慙―恥を恥としない意轉じて無情、三轉して、不便、可哀想といふ意。
○撫子―愛撫する子といふ意を草の名に借りて、花とつゞけた。
○花やかなるべき身―平家の盛んな時ならば、公達として花やかに裝ふべき身。
○閻王―地獄の王、閻魔王の略。

【六】
シテサシ『無慙やな忘れ形見の撫子の。花やかなるべき身なれども。衰へ果つる墨染の。袂を見るこそ哀れなれ。さても御身孝行の心深き故。賀茂の明神に歩みを運び。夢になりともわが父の。姿を見せてたび給へと祈誓申す。明神憐みおはしまし。閻王に仰せつかはさる。閻王仰せを承り。暫しの暇を賜はるなり。親子の契りも今を限りなるべし

地『更け行く月の夜もすがら昔をいざや語らん

と作物を出で、これより謠に合はせて仕科、(舞クセ)

地クセ『然るに平家の。榮華を極めしその始め。花鳥風月の戯れ詩歌管絃の樣々に春秋を送り迎へしに。如何なる折か來りけん。木曾の棧かけてだに。思はぬ。敵に落されて。主上を始め奉り一門の人も悉く。花の都を立ち出で西海の空に

○花鳥風月―春の花・鳥、秋の風・月。その時折の雅びやかな遊び。
○木曾の棧―かけての序詞。その中に木曾義仲に都を追はれた意を含めた。
○主上―安德天皇。

【六】
敦盛　あゝ不便なことだ。忘れ形見のいとし子が、世が世なれば、花やかに飾り立てられる筈であるのに、このやうな衰へ果てた墨染衣の姿になつてゐるのを見ようとは、ほんとに哀れなことだ。それにしても、そなたは孝行の心深くて、賀茂明神に度々參詣して、『夢になりとも、わが父の姿を見せて下さい』とお祈りしたので、明神が可哀想に思し召し、閻魔王に仰せつけられたのだ。それで、閻魔王が明神の仰せを承つて、自分に暫くの暇を與へられたのだ。親子の對面も今度限りで、またと會ふことは出來まい。さあ、この月の更けて行く夜中、昔話を話して聞かせよう」――

敦盛　さて、平家が榮花を極めた始めのうちは、春は花や鳥、秋は風や月、その時折の風流な遊びに戯れ、詩歌音樂など色色の事をして年月を過してゐたのだが、どうした運の廻りあはせであらう。夢にも豫想しなかつたことに、敵の木曾に都を攻め落され、安德天皇を始め奉り、平家一門の人々殘らず花の都を立ち出で、

○天ざかる―鄙の枕詞。
○鄙の住居―壽永二年木曾義仲に追はれて筑前に逃れたことをいふ。
○又立ち歸る―その後室山水島二箇所の戰に勝つて、福原に歸り、東生田の森、西一の谷の間に城郭を構へたことをいふ。
○浦波の―歸るの緣で浦波を出し、浦邊の須磨を呼び起した。
○範頼―源頼朝の弟で、一の谷の戰に生田の方から平氏を攻めた。
○義經―範頼の弟で、一の谷鵯越から平氏を攻め落した。
○槻弓―運も盡きを槻にいひかけた。
○やたけ心―弓の緣語矢竹を彌猛心にいひかけた。
○身を捨てし物語―うなゐ處女が二人の男に求婚せられて「住みわびてわが身投げてん津の國の生田の川は名のみなりけり」と詠んで生田川に身を投げたといふ、大和物語に記された傳說で、この事〔求塚〕に作られてゐる。これを敦盛の戰

赴きぬ。習はぬ旅の道すがら。山を越え海を渡り。暫しは天ざかる。鄙の住居の身なりしに。又立ち歸る浦波の。須磨の山路や一の谷。生田の森に著きしかば。ここは都も程近しと。一門の人々も喜びをなしし折節に

シテ『範頼義經のその勢

地『雲や霞の如くにて。暫く戰ふといへども平家は運も槻弓の。やたけ心も弱々と。皆散り散りになりはてて。あはれも深き生田川の。身を捨てし物語。語るぞ、よしなかりける

シテ『嬉しやな。夢の契りの假初ながら。親子鸚鵡の袖ふれて

地『名殘盡きせぬ。心かな

〔中舞〕

舞ひあげて、正面を見、

西海の方へ行つたのだ。そして慣れない旅の道中に、辛い思ひをして山を越えたり海を渡つたりして、暫くは遠い田舍住ひをしてゐたが、やがてまた東へ歸るやうになつて、須磨の山路や一の谷又は生田の森に着いたので、こゝは都に近い所だと思つて、一門の人々も喜んでゐたのだ。ところがその時、範頼や義經の軍勢が雲や霞の如くに多勢攻め寄せて來たのだ。暫くは力を出して戰つたが、平家の運ももはや盡きて、武勇の心も次第に弱り果て、皆ありぢりになつてしまつて、自分はあのうなゐ處女のやうに、この生田川の邊で死んでしまつたのだ。いやこのやうな話をして見ても、今更致し方のないことだ。

それよりも、たとへ夢のやうなほんの假初の對面とはいひながら、親子相會ふことの出來たのは、ほんとに嬉しいことだ。さあ酒盛でも致さう。いつまで經つても名殘の盡きないことだ。

〔中舞〕

敦盛、親子の對面を喜んで舞を舞ふ。既に相當長い時間が過ぎたと思ふと、あたりの形勢が變つてゐる。

死の事に借りたのである。
○よしなかりける―語つても今更仕方のないことだ
○親子鷄鳴の袖ふれて―親子逢ふを鷄鳴にいひかけ、鷄鳴盃といふ盃があるので酒宴を開く意に續けた。袖ふれては盃に袖の觸れること。
【七】
○心得ず―不都合である。

【七】

シテ「あれに見えたるは如何なるものぞ。なに閻王よりの御使とや。片時の暇とありつるに。今までの遲參心得ずと。『閻王怒らせ給ふぞと

地『いふかと見れば不思議やな。いふかと見れば不思議やな。黑雲俄かに立ち來り。猛火を放ち。劒を降らして。その數知らざる修羅の敵。天地を響かし充ち滿ちたり（と上下を見）

シテ『ものものし明暮に

地『馴れつる修羅の。敵ぞかしと。太刀眞向に（と太刀を拔き一仕科）。さしかざし。ここやかしこに走り廻り。火花を散らして戰ひしが。暫くありて黑雲も。次第に立ち去り修羅の敵も忽ちに消え失せて。月澄み渡りて明々たる曉の空とぞなりたりける

シテ『恥かしや子ながらも（と太刀をすてて扇を持ち）

【七】
敦盛「あれに見えるのは何者だ。たに、閻魔王からの御使だといふのか。暫くの暇を與へたのに、今までも遲なはつたのは不都合だと、閻魔王がお怒りになる。」といふのか。
といふかと思ふうちに、不思議にも黑雲が俄かに起つて來て、怖しい火を放ち、劒を降らし、幾千と數の知れない修羅道の敵が天地を響かして、一面に攻め寄せて來た。

敦盛「なにを仰山な。始終戰ひ馴れた修羅道の敵だ」
と、敦盛は太刀を振りかざし、あちらこちらに走り廻つて、火花を散らして戰つたが、暫くすると、黑雲も次第に立ち去り、修羅道の敵も忽ちに消え失せて、たゞ上には月の澄み渡つた、あかるい夜明の空となつた。

敦盛「わが子ながらも、このやうに苦しんでゐる樣を見せるのは、恥かしいことだ。

○かく苦しみを見る事よ―このやうな苦しみをわが子に見せるのが恥しいとの意
○かげろふの小野―姿は陽炎のやうにほんやりと薄くなるといふのを、大和國吉野郡の地名にいひかけ、小野から淺茅の露を呼び起した。
○淺茅の露霜と―雜草の上の露や霜の如くに。淺に朝を含めた。

地、かく苦しみを見る事よ（と子方へ向き）。急ぎ歸りて亡き跡を、懇に弔ひてたび給へと（下に居立ち）。泣く泣く袂を引き別れ（しをりながら仕手柱際へ行き）。立ち去る姿はかげろふの。小野の淺茅の露霜と形は消えて、失せにけり形は消えて失せにけり

と留拍子を踏む。

急いで都に歸り、自分の亡き跡を弔つておくれ！

と泣きながらわが子と別れて、その立ち去る姿は陽炎のやうにおぼろになりやがて野の淺茅に宿る露霜のやうに消えてしまつた。

〔考　異〕

諸　流（觀寶春剛）

【一】ワキ「これは……この事を聞き給ひて……一七日詣で給ひ（春及び。父御に會ひましまさぬ事を歎き給ひ。御命も危く見えさせ給ひ候程に。加茂明神へ一七日參させ申し。夢になりとも父の御姿を見せ給へと御祈誓候）

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは……加茂へ御參詣（元社參）……若き女性（元上臈）の走り出で……一七日詣で給ひ（元御社參）今日は……　【二】子方「あの御寶殿の……津（元攝津）の國……　【五】中舞（元カケリ）　【六】シテ「あれに……片時の暇とありつるに（元仰られしに）……

一角仙人（いつかくせんにん）

觀（春喜）

解說

【能柄】五番目　一段劇能

【人物】ツレ　旋陀夫人、ワキツレ　輿丁（二人）　ワキ　波羅奈國官人、シテ　一角仙人、子方　龍神（二人）

【所】印度　波羅奈國の山中

【時】（九月）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに金春禪鳳の作とす。

【梗概】印度波羅奈國に於て、一角仙人が龍神と爭つてこれを岩屋に封じこめた爲、旱天が打續いたので、國王は深く心配して、計略を以てその神通力を失はしめようと計つた。かくして、旋陀夫人が官人に伴はれて仙人の栖家を尋ねると、果して仙人は夫人の美色に迷ひ、酒に醉うて神通力を失つてしまつた。夫人は效を奏して歸り、諸龍は岩屋を碎つて雨を降らした。

【出典】これはもと印度神話から出たもので、智度論その他の佛典に

見えて居り、わが傳說文藝にも採られて、今昔物語卷五に「一角仙人被レ負レ女從レ山來二王城一語」として、太平記卷三十七には「身子聲聞一角仙人志賀寺上人事」として記してゐる。本曲は太平記に據つたものと思はれるから、その文を抄出すれば、

昔天竺の波羅奈國に一人の仙人あり。……形は人にして額に一の角ありければ、見る人是を一角仙人とぞ申しける。修行功積つて、神通殊にあらたなり。或時山路に降つて、松の雫苔の露、石岩滑かなりけるに、この仙人谷へ下るとて、滑りて地にぞ倒れける。仙人腹を立て、龍王があればこそ雨をも降らせ、雨があればこそ我はすべりて倒れたれ。しかじこの龍王共を捕へて禁籠せんにはと思ひて、內外八海の間にあらゆる所の大龍小龍共を捕へて、岩の中にぞ押籠めける。是より國土に雨を降らすべき龍神なければ、春三月より夏の末に至るまで、天下大に旱魃して、山田の旱苗さながらに取らでその儘枯れにけり。君遙かに民の愁ひを聞召して「いかにしてかこの一角仙人の通力を失つて、龍神を岩の中より出すべき」と問ひ給ふに、或智臣申しけるは「……三千の宮女の中に容色殊に勝れたらんを、一人かの草庵の中へ遣されて、草の枕を並べ、苔の筵を友として、夜もすがら蘿洞の夢に契を結ばれば、などかかの通力を失はで候べき」とぞ申しける。諸臣皆この議に同じければ、即ち三千第一の后扇陀女と申しけるに、五百人の美人を副へて、一角仙人の草庵の內へぞ送られける。……されば、この仙人も、一度后に落されけるより、覩桓の審も破れて通力もなく、金骨返つて本の肉身となりしかば、仙人忽に病衰して、やがて空しくなりにけり。其後后は宮中に立歸り、龍神は天に飛び去つて、風雨時に隨ひしかば、農民東作を事とせり。その一角仙人は佛の因位なり。其婬女は耶輸陀羅女これなり。

【概評】　神話を題材にした曲には、劇能に脚色して、興味を深からしめたものが多い。本曲も亦その一であるが、たゞ題材が仙人の美色に迷ふことを中心としてゐる爲に、稍ともすれば、雅趣を失ひ易い。作者はこゝに意を用ゐて、優雅な「樂」の間にこの心理的變化を描いて、雅趣と興味とを併せ持つやうに力めたのを面白く思ふ。

【一】

後見、藁屋の作物に引廻を掛けて脇座に出し、一疊臺に岩の作物をのせて大小前に出す。

ツレ旋陀夫人、面連面・髱・髱帶・天冠・襟赤・着附摺箔・舞衣・緋大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ輿丁、着附厚板・白大口・腰帶・

【一】

舞臺は初め天竺波羅痲國の都（舞臺に仙人の岩屋があるが、それはまた見物人には見えない樣）で、ワキ波羅痲國官人、ワキヅレ從者、ツレ旋陀夫人に隨つて登場。

扇の裝束、ワキ官人、着附厚板・法被・白大口・腰帶・扇・劍の裝束にて、ツレ、ワキヅレの輿に乘りたる態にて、ワキを隨へて舞臺に入り、ツレは眞中、ワキは名乘座に立ち、

ワキ　これは天竺波羅那國の帝王に仕へ奉る臣下なり。さてもこの國の傍に。一人の仙人あり。鹿の胎内に宿り出生せし故により。額に角一つ生ひ出でたり。これによつてその名を一角仙人と名づく。さる子細あつて龍神と威を爭ひ。仙人神通を以て諸龍を悉く岩屋の内に封じこむる間。數月雨下らず候。帝この事を歎き給ひ。色色の御方便を廻らし給ひ候。ここに旋陀夫人とて並びなき美人の御座候を。踏み迷ひたる旅人の如くにして。仙境に分け入り給はば。夫人に心を移し。神通を失ふ事もあるべきとの御方便により。夫人を具し奉り。唯今かの山路に分け入り候

○波羅奈國―中印度、波羅奈斯國の畧。鹿野苑の古跡のある所。今のベナレス市の邊に當る。

○一角仙人―印度神話中の人物、委しくは解說にいふ。

○神通―神變不可思議の力

○數月雨下らず―佛典にも今昔物語にも十二年とあるが、太平記には本文の通り「春三月より夏の末に至るまで、天下大に旱魃して」とある。

○旋陀夫人―印度神話中の婬女の名。釋迦出離以前の夫人耶輸陀羅の前身。

官人　私は印度ハラナ國の天子にお仕へしてゐる臣下です。さてこの國の傍に一人の仙人が居ります。この仙人は鹿の胎内に宿つて生まれたので、額に一本角が生えて居ります。それで一角仙人と呼ばれて居ります。この仙人がある事情から龍神と威力爭ひをし、神通力を以て諸龍を全部岩屋の内に封じ籠めましたので、數ケ月に亘つて雨が降りません。帝はこの事を御心配遊ばされ、色々と計畧を御工夫になりました。そして、旋陀夫人といつて比類のない美人が居られるので、これを道に踏み迷うた旅人のやうに裝うて仙人の住家へ分け入らしめたならば、仙人がこの夫人に心を移して神通力を失ふ事もあらうかと、御計畫を御思ひつきになりましたので、こゝに夫人をお連れして、これから仙人の住んでゐる山路へ分け入らうと思ふのです。

ミ見物人に事件の概畧を紹介ス、

○山遠うしては―和漢朗詠集紀齊名の詩句「山遠雲埋二行客跡一松寒風破二旅人夢一」を引いた。

○露時雨漏る山陰の―新古今集藤原家隆の歌―露時雨漏る山陰の下紅葉滿るとも折らん秋のかたみに―の詞を借りた。

○たづきも知らぬ―古今集讀人不知の歌「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」を借りた。「たづき」は頼り。

（一壁）山遠うしては雲行客の跡を埋み。松寒うしては風旅人の。夢をも破る。假寢かな

（上歌）露時雨。漏る山陰の下紅葉。漏る山陰の下紅葉。色そふ秋の風までも。身にしみまさる旅衣。霧間を凌ぎ雲を分け。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも踏み迷ふ。道の行方は、如何ならん道の行方は如何ならん

（一道の行方は」とツレ二三足後に下り、ワキは二三足右の方に出で、またもとに返し、正面に向きて、

ワキ「日を重ねて急ぎ候程に。いづくとも知らぬ山路に分け入りて候ぞや。（脇座へ向き）ここに怪しき巖の陰より。吹き來る風のかうばしく。松桂の枝を引き結びたる庵あり。若しかの仙境にてもや候らん。暫くこのあたりに徘徊し。事の由を窺はばやと思ひ候

ワキ（ツレに）まづかう渡り候へ

官人從者　古人が「山又山のうち重なつた遠い旅路で、旅人の妻はいつしか雲の中に隱れてしまつた。そして吹く松風はいかにも寒いから、夜も旅人は安らかに寢ることが出來ないだらう」といつたやうな遠い山旅をすることだ。露時雨の降るにつけて、山陰の紅葉も次第に色づいて來たが、それにつれて吹く秋風も寒くなつて、旅の身には沁み入るやうに感じられる。かうした思ひをしながら、霧の間を過ぎ雲間を分けて、見當もつかない山中に踏み迷つてゐるのだが結局どこへ落ちつくことであらう」

といつてゐる間に、舞臺は山中仙人の住家となる。

官人　幾日も幾日も旅を急いだので、何處だか見當もつかない山中に踏み入つてしまつた。おや、この變な岩藤かをいゝ香のする風が吹いて來て、松や桂の枝で作つた家がある。もしやあの仙人の住家ではなからうか。暫くこの邊を徘徊して、樣子を探りませう」

といつて、樣子を窺ふ。

【二】

○瓶には谷漣一滴の水を納め―以下「數片の雲を煎ず」まで詩句の引用であらうと思はれるが、出典が分らない。

○曲終へて人見えず―唐の錢起の詩句「曲終人不レ見、江上數峯青」を引いた。

【三】

○人倫通はぬ―人間の往來しない。

○前後を忘じて―どう處置すればよいのか、分別がつかない。

○さればこそ―その事である。折角のお望みであるがとの意。

といひて、一同後見座にくつろぐ。

シテ一角仙人、面一角仙人・黑頭・色鉢卷・襟淺黃・着附小格子・水衣・腰帶・木葉簑・唐團扇・劔の裝束にて、藁屋の中に居り、引廻を掛けたるまゝにて、

【二】

シテ「瓶には谷漣一滴の水を納め。鼎には青山數片の雲を煎ず。曲終へて人見えず。江上數峯青かりし。梢も今は。紅の。秋の景色は面白や

ツレ・ワキ、シテ謠の間に靜かに舞臺に入り、ツレは目附柱に近く、ワキは名乘座に立ちて、作物に向ひ、

【三】

ワキ「いかにこの庵の内へ申すべき事の候

シテ「不思議やここは高山重疊として。人倫通はぬ所なり。そも御身は如何なる者ぞ

ワキ「これはただ山路に踏み迷ひたる旅人なるが。日もやうやう暮れかかり前後を忘じて候。一夜の宿を御貸し候へ

シテ「さればこそ人間の交はりあるべき所ならず。とくとく歸り給へとよ

【二】

舞臺は仙人の住家。シテ一角仙人、岩屋の中にあつてあたりの景色を眺め觀音の體で、

仙人「瓶には谷川の水を汲み入れ、鼎には山にかゝつた雲の滴を受けて煎じ、これを食物として暮らしてゐることだ。時には興に乘じて琴を彈く事もあるが、彈き終へても誰一人訪れて來るものはない。しかし見上げる山々は、つい先程まで青かつた梢が今はもう紅葉して紅くなつて居る。やはり秋の景色は面白いものだ」

【三】

ワキ官人はこれを仙人の住家と見定めた體で、岩屋に近づき、

官人「この家の内の方にお伺ひ致します」

仙人「これは變だ、人聲がするぞ。こゝは山又山の重なつた、人間の通はない所なのだ。それだのに變だぞ。(官人に向ひ)一體そなたは何者だ」

官人「私どもはたゞ山路に踏み迷つた旅人ですが、日もだん〳〵暮れて來て、どう行けばよいのか分らないで困つて居るのです。どうか一晩泊めて下さい」

仙人「いや〳〵、こゝは人間の交はりの出來ない所だ。早くお歸りなさい」

○天仙―天人・仙人。

ワキ「さも人間の交はりなきとは。さては天仙の住家やらん。まづまづ姿を見せ給へ

シテ「この上は恥かしながらわが姿。『旅人にまみえ申さんと

後見、引廻を下す。

地上歌「柴の樞を推し聞き。柴の樞を推し開き（シテ作物を出で）。立ち出づるその姿。綠の髪も生ひのぼる牡鹿の角の。束の間も仙人を。今見る事ぞ不思議なる

○牡鹿の角の―仙人の頭に鹿のやうな角が生えてゐるといひかけて「束の間」の序とした。新古今集柿本人麻呂の歌に「夏野行く牡鹿の角の束の間も忘れず思ふ妹が心を」

【四】

○面々―あなた方。

○桂の黛―桂は月の異名。三日月の如く美しい眉墨。

○羅綾―うすものの絹。美衣の形容。

三人とも下に居る。

ワキ「唯今思ひ出だして候。さては承り及びたる一角仙人にて御座候か

テシ「さん候これこそ一角と申す仙人にて候。さてさて面々を見申せば。世の常の旅人にあらず。さも美しき宮女の貌。桂の黛羅綾の衣。更に唯人とは見え給はず候。これは如何なる人にてま

官人「して又、人間の交はりのない所とは、それではこゝは仙人の住家なのでせうか。ともかく姿をお見せ下さい」

仙人「それでは恥かしながら自分の姿を旅人にお見せしよう」

といつて、柴の戸を開いて出て來たその姿を見れば、綠の髪も上へ生え上り、鹿のやうな角が生えてゐる。このやうな仙人を暫くでも見得るとは、實に不思議なことである。

【四】

官人「さうだ、今思ひ出しました。なるほどあなたが噂に聞いてゐた一角仙人ですか」

仙人「さうです、私が一角といふ仙人です。ところで、あなた方を見ると、世間並の旅人とは違つてゐる。大變美しい官女が居られて、美しい容貌美しい服裝をして全く普通の人とは思はれませんが、この女の方はどういふ人なのです」

しますぞ

ワキ「先に申す如く。踏み迷ひたる旅人にて候。旅の疲れの慰みに。酒を持ちて候。一つ聞し召されて候へ

シテ「いや仙境には松の葉を好き。苔を身に着て桂の露を甜め。年經れども不老不死のこの身なり。酒を用ゆる事あるまじ

ワキ「尤も仰せはさる御事なれども。唯志を受け給へと。（ワキ、ツレ〈向き〉）夫人は酌に立ち給ひ。仙人に酒を勸むれば（ワキシテ〈向き〉）

シテ「げに志を知らざらんは。鬼畜には猶劣るべしと

地上歌「夕の月の盃を。夕の月の盃を。受くるその身も山人の。折る袖匂ふ菊の露。うち拂ふにも。千代は經ぬべき契りは今日ぞ始めなる

○松の葉を好き―松葉を好んで食ふとの意。

○夕の月の―言ふ、夕の月、月の盃といひつづけた。月の盃は盃の形を月に見立てたもの。

○山人の折る袖匂ふ菊の露―新古今集藤原俊成の歌。下句「うち拂ふにも千代は經ぬべし」山人は仙人。菊の露は酒の異名、慈童の故事より出づ。〔枕慈童〕〔菊慈童〕参照。

官人「いや別段變つたものぢやありません。先程申しました通り、道を踏み迷つた旅人です。旅の疲れを慰める爲に酒を持つて居りますが、一つお上り下さい」

仙人「いや仙人は好んで松葉を食ひ、苔を身に纏ひ、桂の露を甜めて暮らしてゐるのだが、それでいつまでも不老不死の身で居るのです。酒は飲みますまい」

官人「仰せは御尤もですが、たゞ私どもの志をお受け下さい」

といつて、旋陀夫人が酌に立つて、仙人に酒を勸めると、

仙人「いや御尤も、人の志を知らないのは、鬼・畜生にも劣ること」せう」

といつて、仙人は盃を受ける。美しい袖で酌をせられる酒の心地よさ。千年も生き延びさうな氣持がするのである。

地上歌にツレ・ワキ立ち、ワキは笛座前に坐し、ツレは「うち拂ふにも」とシテに酌す。

【五】

ツレ『面白や盃の（と立ち）

地『面白や盃の。めぐる光も照り添ふや。紅葉襲の袂を共に飜し飜す。舞樂の曲ぞ、面白き

〔樂〕

ツレ舞ひ、シテ中途より興に乘じたる態にて立ちてツレと相舞、ツレ舞を止めて地謠座前に坐し、シテ獨り舞ふ。

地上歌『絲竹の調とりどりに。絲竹の調とりどりに。さす盃も。度々廻れば夫人の情に心を移し。仙人は次第に足弱車の、廻るもただよふ舞の袂を片しき臥せば。夫人は悅び官人を引き連れ、遙遙なりし山路を凌ぎ。帝都に歸らせ給ひけり

シテ舞の袂を片しき「とよろ〳〵と作物に安坐して寢ねたる態。ツレ・ワキ夫人は悅び「と立ちて幕に入る。

【六】

地『かかりければ岩屋の内頻りに鳴動して。天地も響く。ばかりなり

シテ、右の方に向き、

【五】

夫人『ほんとに面白いこと。お盃が重なるにつれ、お顏が美しう輝いて參ります」と旋陀夫人は美しい袂を飜して、面白い舞樂の秘曲を舞ひ奏でる。

〔樂〕

旋陀夫人が一角仙人の興をひく爲に、面白く舞ふ。仙人も興に乘じていつしか立上り、一所に舞ふ。かうして色々音樂を奏し、酒を度々勸めると、一角仙人は旋陀夫人の情に心をひかれて、酒に醉ひ、足もともよろよろと危くなつて來て、醉ひ倒れて、そのまま假睡に寢てしまつたので、旋陀夫人は悅んで、官人を引連れ、遙々と來た山路を通つて、都へ歸られた。

ツレ旋陀夫人ワキ官人等退場。

【六】

かうしてゐる間に、岩屋の内が頻りに鳴り動いて、天地も響くばかりの騷ぎがする。

一角仙人はこの物音に眼をさまし「と態で、

シテ「あら不思議や思はずも。人の情の盃に。酔ひ臥したりしその隙に。龍神を封じこめ置きし（と岩の作物へ向き）。岩屋の俄かに鳴動するは。何の故にてあるやらん

子方龍神二人、赤頭（龍戴）、鉢巻・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて、岩の作物の中にて、

子方「いかにやいかに一角仙人。人間に交はり心を迷はし。無明の酒に酔ひ臥して。通力を失ふ天罰の。報いの程を思ひ知れ

地上歌「山風荒く吹き落ちて。山風荒く吹き落ちて。空かき曇り。岩屋も俄かにゆるぐと見えしが、磐石四方に破れ碎けて。諸龍の姿は。現れたり

「磐石四方に破れ」と、岩の作物は二つに割れ、子方二人打杖を持ちて臺より飛び下り、

【七】〔舞働〕（子方勇しき樣を示す）

シテ「その時仙人驚き騒ぎ

○無明―無明は一切煩惱の根本。酒は人の心を惱亂させるものであるから、無明の酒といふ。

仙人「これは不思議だ、うつかり人の情にひかされて、酒に酔つて寢てゐたその隙に、龍神を封じ籠めて置いた岩屋が急に鳴り動くのは、これはどうした事であらう」

子方龍神二人岩屋の中から聲を出して、

龍神「こりや一角仙人、仙人の身でありながら人間に交はり、女に心を迷はし、煩惱の酒に酔ひ伏して、神通力を失つたのだ。天罰の報いを思ひ知れ」

山風が荒く吹き、空はかき曇り、岩屋も俄かに搖ぎ出したと思ふや否や、大きな岩が四方に破れ碎けて、龍神の姿が現れ出た。

【七】〔舞働〕

龍神現れ出て勇壯な働きを示す。

その時一角仙人は驚き騒いで、鋭い劒

地。その時仙人驚き騒ぎ。利劍をおつとり立ち向へば。と劍を抜きて子方と切組み。龍王は黄金の甲冑を帯し。玉具の劍の刃先を揃へ。一時が程は。闘ひけるが。仙人神通の力も竭きて。次第に弱り。倒れ伏せば。龍王悦び雲を穿ち。雷鳴稲妻天地に滿ちて。大雨を降らし。洪水を出だして立つ白波に。飛び移り。立つ白波に。飛び移つて。また龍宮にぞ歸りける

シテ「倒れ伏せば」と佛倒に倒れて切戸より入り、子方「また龍宮にぞ歸りける」と橋懸にて留拍子を踏む。

をとつて龍神に對抗したが、龍神は黄金の甲冑を身につけ、玉飾の劍の刃先を揃へて、暫くの間戰ふと、仙人は神通力も竭き、次第に弱つて倒れてしまつた。

シテ一角仙人舞臺に倒れて洪場。龍神は悦んで、雲に穴を穿ち、雷電を天地に轟かせ、大雨を降らし洪水を出して、その白波に飛び移つて、また龍宮に歸つた。

〇利劍　鋭利な劍。

〇黄金の甲冑を帯し玉具の劍の―正德本及びその以前の古謡本には―瞋恚の甲冑を帯し邪見の劍の―とある。

〔考　異〕

諸　流　（觀春喜）

【七】地　その時仙人……龍王は黄金（春瞋恚）の甲冑を帯し。玉具（春邪見）の劍の刃先を……

古謡本　（元祿八年本）

【一】ツヽ日を重ねて……分け入りて（元逢ひ）候ぞや……　【七】地　その時仙人……龍王は黄金（元瞋恚）の甲冑を帯し玉具（元邪見）の劍の……

岩船

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 祝言能（脇能） 單式（複式）夢幻能

【人物】 ワキ 當今の勅使、ワキツレ 同從者（二人）、（前シテ 童子）、（前ツレ 童子）、シテ（後） 龍神

【所】 攝津國 住吉浦

【時】 （九月）

【作者】 作者に關する記錄はないが、飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日音阿彌の演じたこと、栗田口猿樂記に永正二年四月十七日勸進申樂の四日目に演じたことが見えてゐる。

【原形】 觀世流現行曲は近代省略して半能としたもので、正德以前の原文は複式能で、ワキ「次第」「名乘」の次に「道行」があり、次に天探女の神靈が童子として現れた前ジテ、同じく童子のツレが出て、普通の複式夢幻能の前段のやうに、「一聲」「サシ」から「歌」となり、ワキ・シテの掛合「地謠」となり「ロンギ」で中入することとなつてゐるのである。現行曲はこの「道行」以下を削つて、新にワキ上歌を加へ、直に後ジテの出に移つてゐるのである。この原形は觀世流以外の四流では今も存續してゐるから、元藤本によつて、本文の間に挿入して、語釋通譯をも附けて置いた。

【梗概】 當今の勅使が濱の市を立てて支那朝鮮の寶物を買取る爲に、攝津國住吉へ行くと、龍神が現れ出て、天探女の岩船を漕ぎ寄せ、諸龍を召し寄せて、金銀珠玉を降らし、御代をたゝへる。

【出典】 これは萬葉集卷三、角兄麻呂の歌に、

久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香裳

とある、天の探女が難波津に天降つたといふ神話から出たもので、この事は攝津國風土記にも、

難波高津者、天稚彦天降時、屬之神天探女、乘二磐舟一而至二于此一、其磐舟所泊故、號二高津一。

とある。この高津は住吉の近くであり、住吉は唐船の入津交易した所であるから、かれこれ取合せて、財寶輸入の祝言曲を脚色したのである。

【概評】 原文は形式内容ともに素直な作で、文辭の上からは何等削減する要を認めない。これを觀世流で半能としたのは、尾能・附祝言として演奏する場合、時間の經濟上短縮したものであつて、その爲に文意の通じ難いものとなつたのは、この曲がめでたいものであつたが故に受けた、この曲の災難であらう。これと同樣の厄に遭つたものに「金札」がある。

【一】

次第の囃子にて、ワキ勅使、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り、向合ひ、

ワキヅレ次第『げに治まれる四方の國。關の戸ささで通はん

地取にワキは正面に向き、

ワキ『抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さて

○關の戸ささで―何處の關所も戸を閉ぢて通行人を吟味することはなく、自由に旅行が出來るとの意。

【一】

次第は初め都で、ワキ勅使、ワキヅレ從者を隨へて登場。

勅使　一天四海誠によく治まつて、何處へ行くにも、關所の吟味もなく、實に太平な御代である。

ニ次第に御代をたゝへ、

勅使　私は今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さてわが君が賢王にあらせられるので、國家安穩、吹く風も枝を鳴らさず

もわが君賢王にましますにより。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしをささず。誠にめでたき御代にて候。さる間攝州住吉の浦に。始めて濱の市を立て。高麗唐土の寶を買ひとるべしとの宣旨に任せ。唯今津の國住吉の浦に下向仕り候

この時の。ためしもありや日の本の。國豐かなる秋津洲の。波も音なき四の海。高麗唐土も殘りなき。御調の道の末ここに。津守の浦に着きにけり津守の浦に着きにけり

【二】

道行「何事も心に叶ふこの時の。心に叶ふまたに。出づるなり

ツレ二句「遠里小野の草葉まで

シテ「君の恵みによも漏れじ

シテサシ「それ圓滿十里の外なれども。ここは所

○吹く風枝を鳴らさず―太平の世の形容。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」

○民戸ざしをささず―盜賊の憂ひもなく民の安らかなこと。史記に「門不二夜關一、道不レ拾レ遺」

○濱の市―海邊に開かれる市。住吉神社に行はれた神事「寶の市」をいふ。攝津名所圖會に「九月十三日相撲の節會又寶の市とも號す。……寶の市といふは、三韓より獻ずる貢物を當社に獻らるゝなり。この寶の市を始元として唐船入津し、諸品貨物も交易す」

○高麗唐土―朝鮮、支那。

○秋津洲―日本の異名。

○津守の浦―住吉の浦。朝廷に奉る貢物の積るといひかけた。

【二】

○遠里小野―住吉の東方にある。

○圓滿十里の外―都から十里以上を離れた所。〔嵐山〕の語釋參照。

民は安らかで、夜戸締りをする憂ひもない、誠にめでたい御代です。それで、『攝津住吉の浦に今度始めて濱市を立てて、支那朝鮮の寶物を買ひ取つて參れ』と仰せ出されたので、これから攝津國住吉の浦に行かうと思ふのです」

（見物人に自己紹介をし、（以下觀世現行曲にはないが）

勅使「何事も心のまゝになるといふめでたい御代は、遠く支那の昔に尋ねるまでもない、現在わが日本の大御代がその例で、國土は豐かで、天下は安穩、朝鮮支那などの外國からも殘らず朝廷へ貢物を奉つてゐるのである。そのめでたい、貢物の到着する港、住吉の浦に着いた」

（聖代を讃歌してゐるうちに住吉に着いた態で、舞臺は住吉となる。

【二】シテ天探女の霊、童子の姿を變ゝて、ツレ童子を伴つて登場。

童子「松風もそよ〳〵とのどかに吹いてゐる住吉の市場に出かけるのだ」

（喜びの心に滿ちて出かける態で、

童子「誠にありがたい大御代で、人は申すに及ばず、あの遠里小野の草葉まで、大君の御惠みに漏れないだらう。ここゝは、都から十里以上も離れた所では

○所も住吉の―土地も住みよいといふのを地名にいひかけた。
○瑞籬の―久しきの枕詞。
○久しき世々の―伊勢物語の歌「むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」を引いた。
○御幸を深緑―御幸に雪の意を含めて深といひかけた御幸とは伊勢物語に「昔帝住吉に御幸し給ひけり」とあるを指す。前に掲げた和歌はその時の御神詠である
○松にたぐへて―君が代を松に比べたのである。
○出汐―滿汐。市に出でといひかけた。
○伊勢島や汐干に拾ふ―またまの序。風雅集伏見院の御歌に「伊勢の海渚に拾ふたま〳〵も袖干す間なきものをこそ思へ」
○鸚鵡の玉―碧玉で作つた鸚鵡盃。御代に逢ふを鸚鵡にいひかけ、玉鬘かゝる、かかる時といひ續けた。

【三】

も住吉の。シテ『神と君とは隔てなき。誓ひぞ深き瑞籬の。久しき世々のためしとて。ここに御幸を深緑。松にたぐへて千代までも。正しき君の御旅居。いづくも同じ日の本の。もれぬ御影ぞありがたき

シテ下歌『いざいざ市に出汐の月面白き松の風。

上歌『伊勢島や。汐干に拾ふたまたまも。汐干に拾ふたまたまも。待ちえにけりなこの御代に。鸚鵡の玉鬘。かかる時しも生まれ來て。民豐かなる樂しみを。何にたとへむ秋津洲や。高麗唐土も隔てなき。寶の市に出でうよ寶の市に出でうよ

【三】

ワキ『不思議やな市人あまた多き中に。これなる者をよくよく見れば。姿は唐人なるが聲は大和詞なり。又銀盤に玉をすゑて持ちたり。

あるが、土地の名も住吉で、昔大君が行幸遊ばされた時、神樣が隔てなく御詞をお交ぜになり、「君が代を永く守らう」と堅くお約束遊ばされ、かうして緑の深い松のやうに、千代八千代に御榮え遊ばすのだが、その大君の行幸遊ばされた所はここなのだ。……いや住吉ばかりではない。日本國中すべて大君の御惠みに浴してゐるのだ。

さあ市に出掛けよう。浦には汐が滿ちて月影は面白く、松風はそよ〳〵と吹いてゐるのだ。たま〳〵人間に生まれ得た我我が、このやうなありがたい大御代に生まれ逢うて、豐かな生活を樂しむ喜びは何に譬へよう、譬へるものもないのだ。

さあ、日本ばかりでない、朝鮮支那の寶物までみな集まつてゐる寶の市に出掛けよう」

といつて、やがて市場に着いた態。勅使はこれを見て、

【三】

勅使―これは不思議だ。市人が多勢來てゐるが、その中で、この者をよく見ると、姿は外國人であるが、話す言葉は日本語だ。そして銀の盆に玉を載せて持つてゐる。（※御言をいつて童子に一體そなたはど

○龍女が寶珠―法華經提婆達多品に八歳の龍女が釋迦如來に寶珠を捧げ、變じて男子と成り、南方無垢世界に生まれた事が出てゐる。

○むつかし―うるさい。

○合浦の玉―〔合浦〕の解説にいふ。

○如意寶珠―梵語眞多摩尼の譯語。意のまゝに種々の珍寶を出すといふ玉。

そも御身は如何なる人ぞ

シテ「さん候かかる御代ぞと仰ぎ參りたり。又これなる玉は私に持ちたる寶なれども。あまりにめでたき御代なれば。『龍女が寶珠とも思し召され候へ。「是は君に捧げ物にて候

ワキ「ありがたしありがたし。それ治まれる御代のしるしには。賢人も山より出で。聖人も君に仕ふといへり。然れば御身は誰なれば。かかる寶を捧ぐるやらん。『委しく奏聞申すべし

シテ「あらむつかしと問ひ給ふや。唐土合浦の玉とても。寶珠の外にその名はなし。これも津守の浦の玉。意の如しと思し召せ

ワキ『意の如しと聞ゆるは。さては名に負ふ如意寶珠を。わが君に捧げ奉るか

童子「はい、このやうな大御代をありがたく思つて參つたのです。そしてこの玉は私個人の持つてゐる寶なのですが、餘りにめでたい大御代なので、これを大君に捧げたいと思ふのです。龍女の寶珠とも思し召して戴ければ、ありがたう存じます」

勅使「これはありがたいことだ。昔の人も『仁政の御代には賢人も山から出て世に交はり、聖人も君に仕へる』といつたことだ。それにしても、そなたはどういふ人で、このやうな寶を捧げるのだ。委しく奏上するがよからう」

童子「これは面倒な事をお尋ねになるものです。支那の合浦の玉にしたところで、寶珠といふ外に、別段名前はないのです。是も所の名によつて津守の浦の玉とでも申しませう。たゞわが意の如くなる玉だとお思ひ下さいませ」

勅使「意の如くになるといふと、さては有名な如意寶珠を大君に捧げ奉るのか―

シテ「それ賢王の御代のしるしには。天も納受し地も潤ひ。かかる寶も出現すべし

ワキ『げにげに今の御代の有樣。治めぬ國もおのづから。靡き從ふ四方の國

シテ『運ぶ寶や高麗百濟

ワキ『唐土船も西の海

シテ『あをきが原の波間より

ワキ『あらはれ出でし住吉の

シテ『神も守りの

ワキ『道すぐに

地上歌「ここに御幸を住吉の。神と君とは行合ひの。まのあたりあらたなる。君の光ぞめでたき

【四】

地ロンギ『千代までと。菊賣る市の數々に。菊賣る市の數々に。四方の門邊に人騷ぐ。住吉の

シテ「聖天子の御代には、天地も感應してこのやうな寶も現れるのです」

勅使「なる程、今の大御代の有樣を見ると、日本以外の海外諸國までが自然と靡き從つてゐるのだ」

童子「朝鮮の高麗百濟からも寶を運んで來ます」

勅使「西の海を隔てた支那からも來るし……」

童子「その西の海のあをきが原の波間から御出現になつた住吉明神の御守りになる國で、御政道は正しく、昔大君がこの地に行幸遊ばして住吉明神と御出逢ひになつた當時の樣が、今現在眼の前に見えるやうな、ありがたい御稜威でございます」

【四】

勅使は眼を轉じて市場の樣を眺め、

勅使「大君の御代を千代までと壽いで、菊を賣る市場やその他、どの家でもどの家でも、皆大騷ぎをして、この住吉の濱の

○西の海あをきが原の波間よりあらはれ出でし住吉の神―續古今集卜部兼直の歌を引いた。〔高砂〕參照。

○行合ひの―神と君とが行合ふといひかけて、まの序とした。新古今集住吉明神の御神詠に「夜や寒き衣やうつきかたぎの行合のまより霜や置くらん」

【四】

○菊賣る市の―千代までと聞くを菊にいひかけた。

濱の市。寶の數を賣るとかや

シテ『春の夜の一時の。千金をなすとても。たとへはあらじ住吉の。松風價なし金銀珠玉いかばかり

地『千顆萬顆の玉衣の。浦ぞ津守の宮柱

シテ『立つ市館かずかずに

地『御垣もつづく片そぎの

シテ『みとしろ錦綾衣

地『頃も秋なる夕月の。影に向ふや淡路潟

シテ『繪島が磯はななめにて

地『松のひま行く捨小舟

シテ『寄るか

地『出づるか

シテ『住吉の

地『岸うつ波は茫々たり松吹く風はせつせつ

○春の夜の一時の—蘇東坡の詩「春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰」に據つた。

○松風價なし—春宵の價は千金であるが、松風の面白さは金錢では計られない。

○千顆萬顆—顆は玉を數へる詞。

○津守の宮柱—住吉明神。

○片そぎの—神社の屋根の千木をいふ。

○みとしろ—御戸張。

○繪島—淡路の北にある。

○松のひま行く—松の木の間から見える。

童子「春の夜の一時には千金の價があるといはれてゐますが、この住吉の松風はたとへやうもない結構なもので、その價は金錢で計ることが出來ません。その上金銀珠玉が夥しい事で……」

勅使「その結構な浦に住吉明神が鎭坐遊ばすのだ」

童子「市を立ててゐる家は澤山ありますし……」

勅使「御神境は廣大であり……」

童子「御戸張も御立派であり……」

勅使「時は秋で、夕月の影に見える淡路潟の美しさ」

童子「繪島が磯はその斜めに見えますし」

勅使「松の木の間から捨小舟も見える」

童子「あの舟は岸へ寄せるのか、沖へ出るのか、波にゆられて、その波の岸にうち寄せる音はどう／＼と高い音を立て、松吹く風はさら／＼と小さな音を立てて、あの琵琶の曲で有名になつた潯陽の江も

○四の緒の音―琵琶を指す。
○潯陽の江―支那江西省九江府にあり、白樂天の「琵琶行」に、娼女が舟中で琵琶を彈ずるのを聞いたといふ所。
【五】
○岩船―天の岩船。諸神が高天原より天降りになつた時、お乘りになつたといふ船。

として。ささめごとかくやらん。その四の緒の音を留めし潯陽の江と申すとも。これにはよもまさじ面白の浦のけしきや

【五】

シテ「又岩船の夜の空。月の天路に急ぐべし。暇申して人々よ

ワキ「そも岩船のよりくるとは。御身いかなる人やらん

シテ「げに人々はよも知らじ。天も納受喜見城の。寶をここに降さんとて。天の岩船雲の波に。唯今ここに寄すべきなり

地「今は何をかつつむべき。その岩船を漕ぎ寄せし。天の探女は我ぞかし。飛びかける天の岩船尋ねてぞ。秋津島根は宮始め。住吉の松の緑の空の。嵐と共に失せにけり嵐と共に失せにけり（中入）

○天の探女―天若日子に仕へた女神。解說參照。
○飛びかける天の岩船尋ねてぞ―新古今集三統理平の歌を引いた。下句―秋津島根に宮はじめける」

○喜見城―忉利天主帝釋の住む城。

これほどではあるまいと思はれます。實に面白い浦の眺めです」

童子思はず時を過ごした心さ、

【五】

童子「おゝ、又天岩船を漕ぎ寄せる爲に、急いで月の空へ行かう。では皆樣、お暇します」

勅使「一體天岩船を漕ぎ寄せて來るとは、そなたはどういふ人なのです」

童子「いかにもあなた方は御存じあるまい。天も御仁政を感應せられて、極樂世界の寶をここへ降さうと思つて、天岩船を雲の波に載せ、今ここへ漕ぎ寄せるのです。今は何を隱さう、その天岩船を漕ぎ寄せた天の探女といふのは、自分の事です。この天岩船の飛びかける後を尋ねられたところから、わが日本の國の都が始めて奠められたのです。

といつて、住吉の松の緑の映えうつた空に、嵐のやうに消え失せてしまつた。

（前シテ退場。以上舊世現行曲に省略した部分）

【六】
◎げに今とても—このワキ上歌一章は、本曲の原形が複式能であつたものを、半能に省略した結果、前後の聯絡を調へる爲に、原文の道行を削つて〔右近〕の待謠と同文のものを加へ、これに道行と待謠との兩義を兼ねしめたのである。
○神の代の誓ひ—天照大神皇孫瓊々杵尊に三種の神器を授けて、「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆當與二天壤一無レ窮者矣」と仰せられた詔を指す。

【七】
○下界—普通には天上界に對して人間界をいふが、ここには人間界に對して海中をいふ。
○秋津島根の龍神—秋津島根は日本の異稱。日本土着の龍神といふ意。
○神代の佳例—神代に諸神が天岩船に乘つて高天原より天降り給うた事を指す。神武紀に「嘗有二天神之子一、乘二天磐船一自レ天降止、號曰二櫛玉饒速日命一」など見ゆ。

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

【六】
ワキ上歌げに今とても神の代の。誓ひは盡きぬしるしとて。神と君との御惠み。誠なりけり、ありがたや誠なりけりありがたや

ワキ・ワキヅレ脇座に行き下に居る。

【七】
地久方の天の探女が岩船を。とめし神代の幾久し

早笛にて、シテ龍神、面黑髭・赤頭(龍戴)・赤金鍍鉢卷・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて棹を持ち、船を漕ぎ寄せたる心にて橋懸一の松に立ち、

シテ われはこれ。下界に住んで神を敬ひ君を守る。秋津島根の。龍神なり

地 或は神代の佳例をうつし

シテ 又は治まる御代に出でて

地 寶の御船を守護し奉り

【六】
勅使は住吉浦の嚴はしい樣に感歎した心で、勅使 天照大神が皇孫に仰せられた通り、神代の昔から今日に至るまで、神の御惠み君の御惠みにより、幾久しく國土の榮えて行くのは、實にありがたいことだ」
といつて、大御代を讃美してゐる趣。(この一章古謠本にはない)

【七】
まことに、この住吉は天の探女が岩船を漕ぎ寄せた神代より、幾久しく榮えてゐるのである。(この一節現行曲にはない)

後ジテ龍神、寶の御船を漕ぎ寄せる爲に海中より現れた態で登場。

龍神 自分は海中に住んで、神を敬ひ君を守護し奉る日本の龍神である。

龍神 神代の昔、神々が天の岩船に乘つて高天原からお降りになつためでたい先例に倣つて、今又この太平の御代に寶船を御召寄せになるので、勅命を奉じて、その寶物を載せた岩船を守護し奉るのだ。

〇波の鼓―波の音を鼓に喩へた。寶を寄する、寄する波といひつゞく。

〇腰鼓―腰につけて打つ鼓

波の越すといひかけた。

〇ていとう―鼓を打つ音。

〇さざら波―さら〳〵と岸に寄せる小波。

シテ『勅も重しや勅も重しや、この岩船

地『寶を寄する波の鼓。拍子を揃へてえいやえいや

とシテ舞臺に入り、

シテ『引けや岩船

地『天の探女は

シテ『波の腰鼓

地『ていとうの拍子を。打つなりやさざら波、經めぐりめぐりて(と小廻りをし)。住吉の松の風。吹きよせよえいさ。えいさらえいさと。おすや唐艪の(と棹にて船を漕ぐ形)。おすや唐艪の潮の滿ちくる波に浮かんで(と仕手柱際に立ち)。八大龍王は(と棹をすて、扇を開きこれより謠に合せて舞ふ)。海上に飛行し御船の綱手を手に繰りからまき。潮に引かれ波に乘つて。長居もめでたき住吉の岸に。寶の御船を着け納め。數も數萬の捧げ物。運び出だすや意の如

〇唐艪―唐風に作つた艪。

〇八大龍王―法華經に見えたる難陀・跋難陀・波加羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅をいふ。こゝでは龍神の眷屬である諸龍どもの意。

〇長居もめでたき―古今集千生忠岑の歌に「住吉と海士は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり」とあり、古の歌人はこゝに長居をするなと戒めたが、今は長居をしてもよい所であるとの意。

さあ皆の者も、波の鼓に拍子を揃へて、えいやえいやと掛聲を合せ、この岩船を引寄せよ―

龍神「天の探女も拍子を合せて、腰鼓をとん〳〵と打つてゐるのだ。岸打つ波も、住吉の松風も、皆力を合せて岩船を漕ぎ寄せよ。さあ皆の者、えいさえいさと調子を揃へて艪を漕げ」

と龍神が艪をおすと、滿潮の波に、龍神眷屬の八大龍王が浮び出で、海の上を飛行し、岩船の綱を手に卷きつけ、汐に引かれ波に乘つて、いつまでもいつまでもめでたい住吉の岸に、寶の御船を着け納めた。そして御船に載せた幾萬の捧げ物を思ひのまゝに運び出し、金銀珠玉を山のやうに積み重ねた。

かくて、神はいつまでも我が君を守護せられ、我が國は千代に八千代に榮える御代となつたのである。

く。金銀珠玉は降り滿ちて。山の如く津守の浦に。君を守りの。神は千代まで榮うる御代とぞ。なりにける

と仕手柱際にて留拍子を踏み、舞ひ納む。

○津守の浦―山の如く積るといひかけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

寶・春・剛・喜、觀世流元祿本と大體同じである。

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ抑もこれは……下向仕り候（元、この下に上掲波線内の文を加ふ）【六】ワキ上歌げに今とても……ありがたや（元ナシ）

【七】上掲波線内の文を加ふ。シテわれはこれ（元又）下界に……地ていとうの……山の如く津守の浦に（元い）君を守り……

鵜飼

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】五番目　夢幻的劇能

【人物】ワキ　旅僧（日蓮上人）、ワキツレ　同從僧、狂言　石和の者、前シテ　鵜使の靈、後シテ　閻魔王

【所】甲斐國　石和

【時】（五月）

【作者】世子六十以後申樂談儀に、「鵜飼、柏崎などはゑなみの左衛門五郎作なり。さりながら、いづれも惡き所を除き、よき事を入れられければ、皆世子の作なるべし」といつて居る。能本作者註文に世阿彌作とし、二百十番謠目錄に江波左衛門作としてゐるのは、一は改作者を、他は原作者を作者として擧げたものである。歌舞靈腦記に正花風古體としてこの曲名を出してゐる。紀河原勸進猿樂記に寛正五年四月四日勸進能の初日に、蔭涼軒日錄に寛正六年九月廿七日春日社祭禮能に、音阿彌の演じたことが見え、言經卿記に文祿四年四月一日本曲註釋のことを記してゐる。

【梗概】安房國清澄の僧（日蓮）が甲斐國石和に行き、川端の堂に泊つてゐると、鵜使の老人が來る。從僧がこの人は二三年前擯待を受けた漁翁に似てゐるといふと、老人は實はその亡靈であるといふ。そして、僧の言葉に從つて、懺悔の爲に鵜飼の樣を語り、回向を願

つて消え失せる。僧が法華經の句を一石に一字書いて川に投げ回向してゐると、閻魔王が現れ、かの鵜使は罪業が深くて、無間地獄に墮つべきものであつたが、僧を攝待した功德によつて、これから極樂に送るのであると語る。

【出典】今甲斐國石和に日蓮宗の遠妙寺があり、日蓮が鵜使の亡靈を濟度したといふ傳說と共に、當時の遺物と稱するものを傳へて居り、名勝志にも、大納言平時忠が罪を得てこの地に流された時、石和川の殺生禁斷を破つて鵜を使ひ、遂に土地の荒法師ともに搦められて河に投げられた、その亡靈が日蓮上人の濟度によつて成佛したといつてゐるが、いづれも謠曲以後の附會說と思はれ、本曲の原據と見るべきものは見當らない。

【概評】殺生を業とする漁夫・獵人を主題としたものには、本曲の外に〔阿漕〕〔善知鳥〕があるが、この三者を比較して見ると、まづ樣式の上では〔阿漕〕は普通の複式であるが、本曲と〔善知鳥〕の前ジテは初めから亡靈であることを名乘つてゐる。兩者のうち、〔善知鳥〕の前ジテは旅僧に鄕里へのことづてを賴むだけで、直に中入するが、本曲の前ジテが出遇ふ旅僧は、娑婆にゐた時、攝待した因緣のあるもので、その勸めに應じて、委しく殺生の樣を懺悔してゐる。後段に於ても、〔善知鳥〕の方は同じ獵人の亡靈が再現するのであるが、本曲ではもはや漁夫は登場しないで、閻魔王が漁夫の成行について語つてゐるのである。次に內容について見ると、〔善知鳥〕は殺生の慘忍そのものについて力說してゐるが、〔阿漕〕と本曲とは殺生の罪業はこれを從にして、〔阿漕〕では歌道の興味を旨とし、本曲では佛法の功德を中心として、法華經の功力により、一僧一宿の功德による、大罪人の佛果得脫を說いてゐる。そしてその效驗を陰かに日蓮の高德に歸せしめてゐるのである。それにしても、何故日蓮の名をあらはに出さなかつたのであらう。高僧の名を揭げたものは、〔春日龍神〕〔明慧上人〕、〔善願寺〕〔一遍上人〕、〔第六天〕〔解脫上人〕など少くない。然るに本曲のワキ僧が名を明かにしてゐないのは、高僧の功力よりは廣く佛敎の功德を說かうとした爲であらうか。日蓮の高德を描いたものには、本曲の外に〔現在七面〕〔身延〕があるが、いづれもその名を明示してはゐない。それらは皆、作者の創案に出た所が多い爲であらうか、或は反對に、顯著な事實として、殊更その名を出さなかつたのであらうか。

【一】

○安房の清澄—日蓮上人誕生の地小湊の近くで、山中に清澄寺といふ寺がある。日蓮はこゝで出家得度した。この地名を出して暗に日蓮上人であることを知らしめた。

○甲斐の國—日蓮宗の大本山身延山がこの國にあるので、特にこの國をあげたのである。

○いつと白波の—行末いつまでかゝるか知られぬを白といひかけた。

○六浦—武藏國久良岐郡、今の金澤の邊一帶の地をいふ。安房から船出してこゝに着いたのである。

○捨つる身なれば恥ぢられず—捨身の僧であるから、窶れた旅姿も恥ぢるに及ばないとの意。

○都留の郡—甲斐國の郡名。都留を鶴に通はせて「朝たつも」と續けた。

○石和—甲斐國東八代郡にある。光悅本には生澤の字を充ててゐる。

【一】

名乘笛にて、ワキ安房の僧(日蓮上人)、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・數珠・扇の裝束にて、同樣の裝束のワキヅレ從僧を隨へて、ワキは名乘座に立ち、(ワキヅレは一の松にて下に居り)

ワキ「これは安房の清澄より出でたる僧にて候。われ未だ甲斐の國を見ず候程に。この度甲斐の國行脚と志して候

ワキサシ『行末いつと白波の。安房の清澄立ち出でて。六浦のわたり鎌倉山

と謠ひながら眞中に出で、ワキヅレも舞臺に入りて、ワキと向合ひ、

ワキヅレ上歌『やつれ果てぬる旅姿。やつれ果てぬる旅姿捨つる身なれば恥ぢられず。一夜假寢の草筵。鐘を枕の上に聞く。都留の郡の朝立つも日たけて越ゆる山道を。過ぎて石和に、着きにけり過ぎて石和に着きにけり

ワキ「一夜假寢の草筵」と正面に向きて二三足出で、またもとへ歸りて、石和に着きたる態。上歌濟みて正面に向き、

【一】

前段

舞臺は初め安房清澄で、ワキ安房の僧(日蓮上人)ワキヅレの從僧を隨へて登場。

僧 私は安房國清澄から出た僧です。私はまだ甲斐の國を見ないので、今度甲斐の國へ行脚しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧 行先いつまでかゝるといふ豫定もなく、安房國の清澄を出立し、海を渡つて六浦に着き、鎌倉山を越え、旅の疲れにすつかり窶れてしまつたが、捨身の僧はこのやうなみすぼらしい姿をも恥ぢるに及ばないと、旅を續けて、鐘の音を枕の上に聞きながら假寢の夢を結んだりしてゐる間に、はや甲斐の都留郡に入り、ここを朝立つて、日中、山道を過ぎると、やがて石和に着いた」

といつてゐる間に、石和に著いた態で、舞臺は甲斐國石和となる。

ワキ僧は狂言所の者に一夜の宿を賴んだが泊めてくれないので、石和川端の御堂に泊まることとする。

ワキ「急ぎ候程に。これははや石和川に着きて候。日の暮れて候程に。この所に宿を借り泊らばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

ワキヅレは地謠座の前に行きて坐し、ワキは橋懸の方に向き、

ワキ「石和川在所の人の渡り候か

狂言在所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「石和川在所の者とお尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「是は往來の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ

狂言「尤も泊め申したく候へども。この所の大法にて。往來の者に宿貸す事禁制にて候間。なるまじく候

ワキ「御大法はさる事にて候へども。平に一夜を明かさせて給はり候へ

狂言「いや〳〵我等一人として大法は破られ申さず候間。なるまじく候

ワキ「さては了簡なく候か(といひて行きかゝる)

狂言「あら笑止や。なう〳〵お宿を參らせうずるにて候

ワキ「祝着申して候

狂言「あの川崎の御堂を貸し申さう

ワキ「その御堂に泊り候へば。方々に借るまでもなく候

狂言「我等が建てたる堂にてなく。寄り合ひ建てたる堂にて候さりながら。あの御堂へは夜な〳〵光るものの上り候間。心得て御泊り候へ

ワキ「法力を以て泊り候べし

○往來の僧—旅の僧。
○大法—厳しい規則。
○平に—是非とも。
○笑止や—氣の毒なことだ。
○祝着—嬉しい。

○すねい—強情な。

【二】

○後の闇路—現世で犯した惡業の報いから受ける、死後闇黑世界の苦しみ。

○夏河に—心なしを夏にいひかけた。鵜飼は夏の季節のものであるから、かくいふ。

○遊子伯陽—昔けいしやう國に遊子・伯陽といふ夫婦の者があつた。ともに月を愛してゐた果報で、死後二つの星となつた。牽牛・織女が卽ちそれであると、曾我物語卷二「牽牛織女の事」に記して居る。

○二つの星—牽牛と織女と

○雲の上人—公卿。外國の故事に對して「今の」といつた。

○月の夜頃を厭ひ—鵜飼は篝火の光に鮎を集めるもので、月夜は篝火の妨げとなるからこれを厭ふ。

狂言「あらすねいお僧ぢやよ

といひて狂言は狂言座につく。ワキは脇座へ行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ鵜使の亡靈、面朝倉尉・尉髮・襟淺黃・着附無地熨斗目・水衣・腰簑・腰帶・扇の裝束にて、松明を持ち、これを振りながら常座に出で、松明をあげて、

シテ一聲『鵜舟に燈す篝火の。後の闇路を。いかにせん(と松明を下す)

シテサシ『げにや世の中を憂しと思はば捨つべきに。その心更に夏河に。鵜使ふ事の面白さに。殺生をするはかなさよ。「傳へ聞く遊子伯陽は。月に誓つて契りをなし。夫婦二つの星となる。『今の雲の上人も。月なき夜半をこそ悲しみ給ふに。われはそれには引きかへ。月の夜頃を厭ひ。闇になる夜を悅べば

シテ下歌『鵜舟に燈す篝火の消えて闇こそ悲しけれ。上歌『拙かりける身の業と。拙かりける身の業

【三】

舞臺は石和川端。

シテ鵜使の亡靈、裝束にゐた時の姿で登場。鵜を使つてゐる態で、

鵜使「鵜舟にともす篝火の光で、この舟のあたりは明るくも見えようが、かういふ罪業を作つて死んだ後は、冥途の闇にどんなに苦しい思ひをするか、思ひやられることだ。

考へて見れば、この世の中が辛いと思へば出家すればよいものを、さういふ佛心は全くなく、河に出て鵜を使ふ面白さにまぎれて、殺生をしてゐるのは、思へば果敢ないことだ。昔話に聞いたことには、遊子・伯陽といふ夫婦の者は月を愛した果報で、死んだ後牽牛・織女といふ二つの星となつたさうだ。昔話に限らない、今の雲の上人公卿樣達も月のない夜をお悲しみなさるのに、私はそれとは全く反對で、月の出る夜を嫌つて闇の夜を悅ぶ仕事をしてゐるので、せめてもの光としてゐる鵜舟の篝火が消えて、全くの闇となるのが何よりも悲しいのだ。

○かひも波間に―その甲斐もなしを波といひかけた。
○惜しめども叶はぬ命―いかに惜しんでも、死は結局免れないものであるのに、その僅かな命を繋ぐ爲にとの意。

【三】
○御堂―今石和村に鵜飼山遠妙寺といふのがある。勿論後のものであらう。

と。今は先非を悔ゆれども。かひも波間に鵜舟漕ぐ。これほど惜しめども。叶はぬ命繋がんとて。営む業の、もの憂さよ営む業のもの憂さよ

【三】

シテ「いつもの如く御堂に上り鵜を休めうずるにて候

と御堂に上る態にて、松明を振りながら少し出掛け、ワキを見て、

シテ「や。これは往來の人の御入り候よ

ワキ「さん候往來の僧にて候が。里にて宿を借り候へば。禁制の由申し候程に。さてこの御堂に泊りて候

シテ「げにげに里にてお宿參らせうずる者は覺えず候

ワキ「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ

シテ「さん候これは鵜使にて候が。いつも月の程はこの御堂に休らひ。月入りて鵜を使ひ候

こんなつまらない仕事はないと、今は後悔してはゐるのだが、それでもやはり致し方もなく、鵜舟を漕いで暮らしてゐることだ。一體人の命といふものはどんなに惜しんだところで、やがて死ななければならない、はかない人生であるのに、その僅かな命を生きる爲に情ない仕事をして居ることだ」

【三】

鵜使は今仕事を休んだ態で、

鵜使「いつものやうに御堂にあがつて、鵜を休めませう」

ミ川端の御堂へ來て、僧を見て、

鵜使「やあ、こゝに旅の方がお出でですな」

僧「さうです、私達は旅僧なのですが、里で宿を借りようと思つたところ、土地の禁制だといつて貸してくれないので、それでこの御堂に泊まつてゐるのです」

鵜使「いかにも、この里にはお泊めしさうな者は居りません」

僧「ところで、そなたはどういふ方ですか」

鵜使「はい、私は鵜使ですが、いつも月の出てゐる間はこの御堂で休み、月が入つてしまふと鵜を使つて居るのです」

○苦しからぬ人—うるさい人でない、心置きのいらない人。
○抜群に—非常に。
○年たけ—年老い。

ワキ「さては苦しからぬ人にて候ぞや。見申せばはや抜群に年たけ給ひて候が。かかる殺生の業勿體なく候。あはれこの業を御とまりあつて。餘の業にて身命を御つぎ候へかし

シテ「仰せ尤もにて候へども。若年よりこの業にて身命を助かり候程に。今更とまつつべうもなく候

ワキヅレ、シテを見てワキに向ひ、

ワキヅレ「いかに申し候。この人を見て思ひ出だしたる事の候。この二三箇年前に。この川下岩落と申す所を通り候ひしに、かやうの鵜使に行き逢ひ候程に。科の中の殺生の由を申して候へば。げにもとや思ひけん。わが家に連れて歸り。一夜けしからず攝して候ひしよ

シテ「さてはその時の御僧にて渡り候か

僧「それでは私達がこの御堂を借りるのに、心置きのない人だ。お見かけしたところ隨分御老人のやうですが、そのやうな殺生の業をなさるのは罰當りのことです。どうぞその仕事は思ひ切つてしまつて、外の仕事でお暮らしなさい」

鵜使「お詞は御尤もですが、私は若い時からこの仕事で生計を立てゝゐるのですから、今更止めるわけにも參りません」

○岩落—石和川の下流。
○科の中の殺生—科は佛の戒律。殺生は十惡の一に數へられて居る。
○けしからず—惡くない。
○相應の。
○攝して—攝待して。もてなして。

從僧「御師僧さま。この人を見て思ひ出したことがございます。この二三年前、この石和川の川下の岩落と申す所を通りました節、丁度このやうな鵜使に行逢ひましたので『殺生は佛のお戒めになつた十惡の一であるぞ』と教化しますと、鵜使も尤もだと思つたのでございませう、自分の家に連れて歸り、一晩隨分よくもてなしてくれたのでございます」

鵜使(從僧に向ひ)「それでは、あなたがその時の御僧でございますか」

ワキヅレ「さん候その時の僧にて候

シテ「なうその鵜使こそ空しくなりて候へ

ワキ「それは何故空しくなりて候ぞ

シテ「恥かしながらこの業にて空しくなりて候。その時の有様語つて聞かせ申し候べし。跡を弔うて御やり候へ

ワキ「心得申し候

【四】

シテ舞臺の眞中へ行き下に居て、松明を側に置き、

シテ(語)「抑もこの石和川と申すは。上下三里が間はかたく殺生禁斷の所なり。今仰せ候岩落邊に鵜使は多し。夜な夜なこの所に忍び上つて鵜を使ふ。憎き者のしわざかな。かれを見顯さんとたくみしに。それをば夢にも知らずして。又ある夜忍び上つて鵜を使ふ。狙ふ人々ばつと寄り。一殺多生の理にまかせ。かれを殺せといひあへ

○石和川―金川の別名。甲斐國八町山から出て笛吹川に入る。

○一殺多生の理―多くの生類を救ふ爲に、その害をなす一つを殺すこと。報恩經に見ゆ。

從僧「さうです、その時の僧です」

鵜使「もうしその鵜使は亡くなつてしまひました」

僧「それは何故亡くなつたのです」

鵜使「恥かしながらこの仕事で亡くなつたのでございます。その時の有様をお話申し上げませう。どうぞ後世を弔つてやつて下さいませ」

僧「承知しました」

【四】

鵜使、座に着いて、

鵜使「さてこの石和川と申す所は、上下三里の間嚴しい殺生禁斷の所となつて居りますが、今仰しやつた岩落の邊には鵜使が多く、夜々こゝへ忍んで來ては鵜を使つてゐたのです。土地の者は一憎い奴だ其奴を見つけてやらう』と待ち構へてゐたのですが、鵜使はそのやうな事は夢にも知らず、又ある夜忍んで川上に上り鵜を使ひました。待ち構へて狙つて居つた人々はばつと寄つて來て『一人を殺して多くのものを助けるのだ。其奴を殺してしまへ』といひました。その時鵜使は兩

り。その時左右の手を合はせ（と合掌し）。かかる殺生禁斷の所とも知らず候。向後の事をこそ心得候べけれとて。手を合はせ歎き悲しめども助くる人も波の底に。ふしづけにし給へば叫べど聲が出でばこそ。「その鵜使の亡者にて候

ワキ「言語道斷の事にて候。さらば罪障懺悔に。業力の鵜を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候べし

シテ「あらありがたや候。さらば業力の鵜を使うて御目にかけ候べし。跡を弔うて給はり候へ

ワキ「心得申し候

【五】

シテ「既にこの夜も更け過ぎて。鵜使ふ頃にもなりしかば。いざ業力の鵜を使はん

ワキ『これは他國の物語。死したる人の業により。かく苦しみの憂き業を。今見る事の不思議さよ

○ふしづけ—柴を水中に漬けて置いて、魚がその中に集まるのを捕ふる法。轉じて罪人を簀卷にし水中に投げ入れて殺す刑。
○罪障懺悔—過去の惡事を後悔して語り、罪亡ぼしにすること。
○業力—罪に陷る因となつたとの意。

【五】

○他國の物語—こゝの他國は現世でない地獄との意であらう。拾葉抄には他國は墮獄の誤りであらうといふ

手を合はせて、『かやうな殺生禁斷の所とも知らなかつたのです。今後は必ず氣をつけますから』と歎願して泣き悲しんだのですが、誰一人助けてくれる者はなく、からだを簀卷にして川中に投げ入れられたので、いかに叫んでも聲の立つ筈はなく、遂に死んでしまつたのです。實は私がその鵜使の亡者でございます。

僧　これは意外千萬のことだ。それでは罪亡ぼしの爲に、罪業を作つた鵜使ひの樣をこゝでお見せなさい。跡をよく弔つてあげませう。

鵜使　ありがたうございます。それでは罪作りな鵜使ひの樣をお目にかけませう。どうぞ跡をお弔ひ下さいませ」

僧　承知しました」

【五】

鵜使　丁度今夜も夜更けになつて、鵜を使ふのによい頃合となりました。それではこれから罪作りな鵜使ひの樣をお目にかけませう」

僧　まあこのやうな地獄の話、死んだ者が前世の罪業によつて辛い苦しみをする樣を、現在目の前で見るとは、實に不思議

○濕る松明―夜露にしめつた松明。
○藤の衣―藤葛などで作つた粗末な衣。
○玉襷―單に襷の意。
◎鵜籠を開き取り出だし―以下「いかにせん」までを鵜の段といふ。
○島つ巣おろし―鵜は島に棲む鳥であるから、その異名を「島津巣」といふ。その鳥の巣から取出したとの意
○荒鵜―未だ馴らされてゐない、嘴めて使ふ鵜をいふ。
○かづき上げ―水に潜つて魚を引上げる。
○淀―鯉の名産地である山城の淀。水のよどむ意にかけていふ。鵜飼の面白さに他の漁をも思ひ起した。
○生簀―魚を生きたまゝ飼つて置く所。捕り易いといふ意で鯉の序に用ゐた。夫木抄藤原知家の歌に「世の中は淀の生簀のつなぎ鯉身を心にもまかせやはする」
○玉島川―肥前國松浦郡。神功皇后三韓征伐の途次、鮎をお釣りになつた所。
○さばしる―さ走る。走り泳ぐこと。
○せぜらぎ―小波の立つ小さな流。
○かだみて―かだむは「けだむ」に同じ。内輪にする狭める。こゝでは狭く追ひなることだ―

鵜使の上者は立つて、こゝ―り仕方話に移る。

シテ「濕る松明ふり立てて
と松明を持ち振りながら立上り、
ワキ『藤の衣の玉襷
シテ「鵜籠を開き取り出だし
これより謠に合せて仕科、
ワキ『島つ巣おろし荒鵜ども
シテ「この川波にばつと放せば
地、面白の有様や、底にも見ゆる篝火に。驚く魚追ひまはし。かづき上げすくひ上げ。隙なく魚を食ふ時は、罪も報いも、後の世も忘れ果てて面白や。漲る水の淀ならば。生簀の鯉や上らん玉島川にあらねども。小鮎さばしるせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ　松明と扇をすて、仕手桂際にてしをり)。鵜舟の篝影消えて。闇路に歸るこの身の名殘惜し

鵜使　このやうに宣言に濕つた松明を振り立てゝ、粗末な着物に襷をかけ、鵜を入れる籠を開いて、島から取つて来たばかりの鵜を取出し、この川波にばつと放しますと、その面白い事。篝火が水の底にも映る、映る火を見て魚が驚き驚くのを、鵜が追ひまはして、水に潜つては引上げすくひ上げ、絶間なく魚を呑み込むのです。その樣を見てゐると、もう罪業の罰いも後世の怖しさも忘れてしまつて面白くてたまらないのです。これがあの水の多い淀川だと、澤山鯉が上つてきて、さぞ捕へ易いことでせう。こゝも昔話の玉島川ではないが、走り廻る鮎を川の狭い所へ追ひつめて、一尾殘さず捕つてしまふのです。おや不思議だ、篝火はまだ燃えてゐるのに、光が暗くなつて来たわ。なるほど分つた。悲しいことに、月が出て来たのだ。おゝもう篝火が消えて暗くなつてしまつた。またしてもあの眞暗な冥途へ歸らなければならない。お名殘惜

込んでとの意。
○ためじ―溜めない。餘さない。
○闇路に歸る―もとの暗夜に返ると、亡者の冥途に歸るとを兼ねて用ゐた。

【間】

○是非に及ばず―致し方がない。
○苦しからず―構はない。

さを二ワキを鶯と見、いかにせん名殘惜しさをいかにせん

シテ舞臺に心を殘して中入。

【間】 前の狂言、仕手柱際へ出で、

狂言「夜前往來の御僧の一夜の宿を仰せ候へども。大法の由申して貸し申さず。川崎の御堂を教へ申して候。未だあれに御座あるか。參りて見申さばやと存じ候。(ワキを見て)御僧は未だ是に御入り候よ

ワキ「未だ逗留申して候。さて御身は夜前宿を貸さざる人にて渡り候か

狂言「なか〳〵お宿參らせたく候へども。この所の大法にて是非に及ばず候

ワキ「いや〳〵苦しからず候。それにつき尋ねたき事の候。まづ近う御入り候へ

狂言「畏つて候。(と眞中へ出で下に居て)さて何事を御尋ねなされ候そ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古この所にて柴漬(ぢつ)にせられたる鵜使の事。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「それは我等のよく存じたる事にて候間。凡そ存じたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづこの石和川と申すは。上下三里が程は堅く殺生禁斷にて御座候處に。何者やらんこの川に忍び出で鵜を使ふ。所の者ども是を聞き。何卒捕へたしとて川のつまり〳〵に忍び居て。かの鵜使を待ち申す所に。狙ふ事は夢にも知らず。いつもの如く忍び出で鵜を使ふ。狙ふ者どもばつと寄つて。其まゝ捕へよく〳〵見れば。あたり近き岩落と申す在所の者にて候が。殺生禁斷とも知らず候。眞平免してくれよと申せども。片脇より申すは。殺生禁斷の所にて鵜を使うたる者なれば。柴漬に致せよとて。大竹を取り寄せ。それを割り簀に編み。その上にかの者を寢させ。くるくると卷いて

しいことでございます」
と亡霊が消え失せる態で退場。

○一の深み―最も深い所。

○亡心―亡魂。亡靈。

五番六番しつかと縛め。大石を括りつけ。この川の一の深みに柴漬と申すに仕り候。誠にかの者は殺生禁斷の所にて。鵜を使うたる咎により。かくの如くなりたるとて。今に取沙汰致し候。まづ我等の存じたるはかくの如くにて候が。さて唯今は何と思しめし御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。この御堂には光る物が出ると仰せ候程に。佛道を念じ心を澄ます所に。火の光見えて候間怪しく存じ候處に。老人一人鵜使の體にて來られ候程に。老體の身にて殺生の業勿體なき由申して候へば。誠は古の柴漬にせられたる鵜使の亡心なるが。作りし罪の報い來て。苦しむことの悲しさよと。後悔すれども返らぬなどと懇に語り。篝火も消ゆると見て姿を見失うて候よ

狂言「さては鵜使の幽靈現れたると存じ候。それを如何にと申すに。誰あつて弔ふ者もなく候間。御回向にも預りたくと存じ。業力の鵜を使ひ。御目にかけたると存じ候間。かの跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。石を拾ひ一石に一字書きつけ。波間に沈め。かの者を成佛させう

狂言「左樣にて候はゞ石を拾ひて參らせうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言引く。

【六】

○妙なる法の御經―妙法蓮華經。

○浮まざるべき―地獄から極樂へ浮かび出るとの意。

【六】

ワキ上歌（待謠）「河瀨の石を拾ひあげ。河瀨の石を拾ひあげ。妙なる法の御經を一石に一字、書きつけて。（正面の方に向き）波間に沈め弔はば。などかは浮かまざるべきなどかは浮かまざるべき（と

【六】後段

舞臺は石和川の川端。

僧「この河瀨の石を拾ひあげて、妙法蓮華經の經文を一石に一字づつ書いて、波間に沈めたならば、亡者も極樂へ浮かび出られないことはあるまい」

ミ一石に一字を書きつけて川に投げ入れる態。

【七】○地獄遠きにあらず―地獄もその獄卒惡鬼もみな人々の心中にあるのであるとの意。正法念經に「閻魔獄卒非二實有情一以二衆生妄業力一故見レ之」榮華物語玉臺の卷に「人の心の內に淨土も地獄もありといふは誠にこそあめれ」

○鐵札―閻魔の廳で惡人の名を記す札。

○金紙―同じく善人の名を記す紙。十王經註に「二童子以二亡人罪福諸業一錄二金鐵札一奉レ見二閻王一也」

○無間の底―無間地獄の略。八熱地獄中最も苦痛の甚しい所。梵語阿鼻といふ。

○一僧一宿の功力―僧に一夜り宿を貸した功德。

○弘誓の船―衆生の迷ひに溺れてゐる者を救ふ、佛の弘い誓約を船に喩へた語。法華經普門品に「弘誓眞如レ海」

○篝火も浮かむ―亡者が極樂に浮かぶばかりでなく、篝火も水上に浮かぶとの意

○實相の風―實相は萬有の本體本質。迷ひを破つて、眞實を悟ることを風に喩へた。

○眞如の月―眞如は動くことのない絕對平等の理體。これを月に喩へた。

いひて脇正面に直す)

【七】早笛にて、後ジテ閻魔王、面小癋見・唐冠・赤頭・金地鉢卷・襟標色・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松へ出で、

後ジテ『それ地獄遠きにあらず。眼前の境界。惡鬼外になし。抑もかの者。若年の昔より。「江河に漁つてその罪夥し。されば鐵札數をつくし。金紙をよごす事もなく。『無間の底に。「墮罪すべかつしを。一僧一宿の功力に引かれ。急ぎ佛所に送らんと。惡鬼心を和らげて。鵜舟を弘誓の船になし。『法華の御法の助け船。篝火も浮かむ氣色かな

と謠ひながら舞臺へ入り、大小前に立ち、

地『迷ひの多き浮雲も

シテ『實相の風荒く吹いて

地『千里が外も雲晴れて。眞如の月や出でぬらん

【七】後ジテ閻魔王、地獄に沈んでゐた鵜使の亡者を極樂へ送る態で登場。

閻魔「地獄といつても遠い所にあるのではない、人間世界の眼前にあるのだ。亡者を責める獄卒惡鬼といつても外にあるのではない、皆人の心中にあるのだ」

と謠つて僧の前に出で、

閻魔「かの鵜使は、年の若い頃から河に出ては魚を捕り殺生を事とした、罪業の夥しいものだ。それで閻魔廳に於ても、罪のしるしの鐵札は數限りなくふへ、善を記す金紙には一度も書かれたことがないのだから、無間地獄に墮ちる筈であつたのだが、僧に一夜の宿を貸した功德によつて、その罪を赦し、これから急いで極樂に送つてやるのだ」

と地獄の鬼も心を和らげて、鵜舟をそのまゝ衆生を極樂へ送る弘誓の船とし、法華經の功德によつて亡者を助ける樣を見ると、亡者が極樂に浮かぶばかりでなく、篝火まで水上に浮かぶ心持がするのである。

誠にこの樣を見ては、いかに迷ひの多いものも悟りを開き、一切の煩惱を離れて、澄み渡つた月のやうな佛心になることであらう。

【八】

○奈落―梵語那落迦ノ略。地獄の一ツ。

○褒美の詞―法華經玄義に「所言妙者、褒美不可思議之法也」

○聖教の都名―都は總。佛の教の總名。法華經玄義に「經者外國稱修多羅、聖教之都名也」とあるを引いた。

○二つもなく三つもなく―法華經方便品に「十方佛土中、唯有一乘法、無二無三」とあるを引いた。

○一乘―一佛乘に同じ。一切衆生をして悉く成佛せしめる法。

○佛果―成佛の結果。

【八】

ワキシテへ向き、

地ロンギ『ありがたの御事や。奈落に沈む惡人を。佛所に送り給ふなる。その瑞相のあらたさよ

シテこれより謠に合せて舞ふ。

シテ『法華は利益深き故。魔道に沈む群類を救はん爲に來りたり

地『げにありがたき誓ひかな。妙の一字はさて如何に

シテ『それは褒美の詞にて。妙なる法と說かれたり

地『經とはなどや名づくらん

シテ『それ。聖教の、都名にて

地『二つもなく

シテ『三つもなく

地『唯一乘の德によりて。奈落に沈み果てて浮かみ難き惡人の。佛果を得ん事はこの經の力なら

【八】

僧はこの樣を見て、

僧「ありがたい事です。地獄に沈んでゐる惡人を極樂へ引上げるとは、誠にあらたかな結構なことです」

閻魔「法華經は利益の多いものだから、この功德によつて、地獄に沈んで居る者ともを救ふ爲に來たのだ」

僧「實にありがたいお詞です。さて妙法華の妙とはどういふ意味の語です」

閻魔「それは褒め稱へた詞で、結構な義といふ意味である」

僧「では經といふ名はどうしてつけられたのです」

閻魔「それは佛の教へについていふ總名だが、中にも妙法華經は二なく三なき唯一絕對の、一切の衆生を成佛せしめるといふありがたい教へで、今現に地獄に沈んでしまつて、極樂に浮かばれない罪人が成佛することの出來るのも、この御經の功德ではないか」

○僧會を供養す―僧を集めて佛事をする。
○往來の利益―釋迦教化の利益。釋迦は天竺菩提樹の下で始めて成佛したのではなく、もと久遠の佛で、極樂淨土を出てこの穢土に往來して衆生を濟度すること既に八千返、釋迦の出現はその往來に過ぎないといふのである。こゝには前の「往來の僧」を承けてこの文字を用ゐたのである。

ずや

地(キリ)『これを見かれを聞く時は。これを見かれを聞く時は。たとひ惡人なりとても。慈悲の心を先として。僧會を供養するならば。その結緣に引かれつつ。佛果菩提に到るべし。げに往來の利益こそ。他を助くべき力なれ他を助くべき力なれ

仕手柱際にて留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（五流）

【三】ワキ「それは(下懸生死の習ひ尋ね申す事はなく候へども)何故空しく……

【四】シテ「抑もこの石和川……その禍使の亡者にて候(下懸地獄)娑婆の業因深き故。〳〵。魂は冥途に赴けば。魄はこの世に苦しみを受くる。人のうへにてはなきものをわが跡弔ひてたび給へ〳〵。

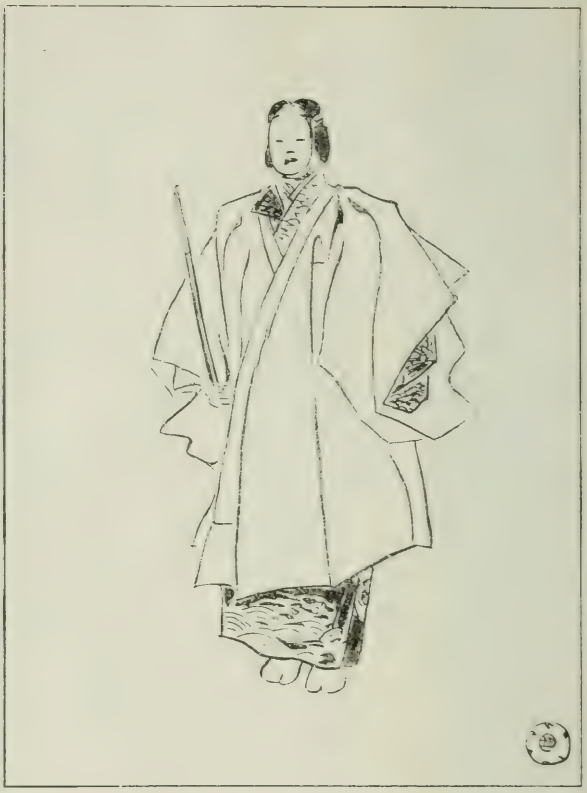
古謠本（光悅本）

【三】シテ「いつもの如く御堂に上り鵜を休めうずるにて候(光ナシ)。シテ「やこれは往來の人の御入り候よ(光御僧にて渡り候か)……ワキ「さて御身(光是)は如何なる人にて渡り(光御いり)候ぞ。シテ「さん候……この御堂に休らひ(光み候て)月入りて……ワキ「さては苦しからぬ人にて候ぞや(光渡り候。シテ「中々の事くるしからぬ者にて候。ちから參りて御物語申候へし。シテ「)見申せばはや(光ナシ)年たけ給ひて候が

閻魔「かういふ色々の實例によつて分る通り、たとひ如何なる惡人でも、まづ慈悲の心を起して、僧を集め佛事をすれば、その緣によつて極樂往生することが出來るのである。實に釋迦如來の敎へは衆生を助ける力である。

閻魔王罪人を逢る惡で裏場。

（光たる人にて御いり候か）かゝる殺生の……シテ「仰せ尤もにて候へども（光さりながらいまた）若年より……ワキツレ「いかに……一夜けしからす（光けしからす一夜）……【四】シテ「抑も……亡者にて候（光跡をとふて給り候へ）【七】シテ「それ地獄……篝火も浮かむ氣色（光ひかり）かな



浮舟（うきふね）

觀（春剛）

解說

【能柄】 四番目 複式夢幻能

【人物】 ワキ 旅僧、前シテ 里女（浮舟の靈）、狂言 宇治の者、後シテ 浮舟

【所】 前段 山城國 宇治、後段 同 小野

【時】 （無季）

【異稱】〔浮船〕とも書く。

【作者】 世子六十以後申樂談儀に「うき船、これはしろうと横尾光久作、節は世子つくり」とある。能本作者註文には細川弘源寺殿（持之）の作とし、二百十番謠目錄には與江元久作としてゐる。この與江は横尾光久の誤りであらう。世阿彌の能作書に女體の例としてこれを擧げ、

女體の能姿、風體をかざりて書くべし。これ殊に舞歌の本風たり。其内におきて上々の風體あるべし。或は女御・更衣、葵、夕顔、浮舟などと申したる貴人の女體、氣高き風姿の、世の常ならぬかかりよそをひを心得て書くべし。……如此の貴人妙體の見風の上に、或は六條御息所の葵の上に附きたゝり、夕顔の上の物の氣にとられ、浮舟のつきものなどとて、見風のたよりある幽花種、あひ難き

風得也。

といひ、中樂談儀にも、

浮舟の能に、この浮舟そよるべしられぬ　と云ふ所、肝要也。そこをば一日二日にもし果つるやうに、ねぢつめてをさむべし。

といつて居る。金春禪竹の歌舞髓腦記にもこの曲名が出てゐる。春日拜殿方諸日記に寶德四年二月十日薪能に〔宇治浮舟〕を勤めたこと、言經卿記に文祿四年三月廿六日〔浮舟〕を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】旅僧が初瀨から上洛の途次、宇治で一人の里女に會ひ、浮舟の物語を聞く。里女は語り終つて、自分は小野に住む者であるから、都への序に訪ねてくれといつて消え失せる。旅僧が小野に行つて讀經してゐると、浮舟の靈が現れ出て、宇治川に身を投げようとして、物怪に捕へられ、横川僧都に助けられた次第を語り、やがて都率天に生まれ得た喜びを述べて消える。

【出典】源氏物語の女性を主人公としたものの一で、この浮舟は閑狂言が委しく語つてゐるやうに、桐壺帝の八宮の三の君で、初め薫大將に通はれてゐたところ、匂兵部卿宮が忍び寄つて、物のまぎれがあり、それ以來懊惱して、薫大將を頼むべきか、匂宮に從ふべきか、決心がつかず、遂に身を投げて亡きものにしようとしたのであつた。本曲は宇治十帖、殊にその「浮舟」「手習」の二卷を引いてゐる所が多い。その引用文は語聲に揭げることとす。

【概評】脚色の形式は普通の三番目臺物と同樣の樣式に從つてゐるが、その舞は、しとやかな序舞や中舞ではなく、物怪の爲に正氣を失つた「カケリ」で、この故に四番目に組入れてゐるが、世話物の物狂のやうに、科白・仕科が卑近でない。どこまでも源語物らしい優艶な趣があつて、しかも物狂ほしい態度のほの見える所が、世阿彌の所謂「見風のたよりある幽花種」たる特色であらう。複式能の前ジテには、里人里女の態を裝うて、昔語にわが身上を讀歎してゐるものが多いのに、このクセ語に極めて謙抑な態度を持してゐることも、ゆかしさを感ぜしめる一つである。

源氏物語を題材としたものには、この外に、〔葵上〕〔源氏供養〕〔須磨源氏〕〔住吉詣〕〔玉葛〕〔野宮〕〔半蔀〕〔夕顏〕などあつて、それ〴〵特色を持つてゐるが、〔夕顏〕が本曲に最も近いやうに思はれる。併せ比べて見るとよい。

【一】

○初瀬―大和國磯城郡にあり、長谷觀音のある所。このワキ僧を初瀬から都に上る途次としたのは、横川僧都の浮舟を助けたのが、初瀬から歸洛の途次であつたのに擬へたのである。

○初瀬山夕越え暮れし―新古今集禪性法師の歌「初瀬山夕越え暮れて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹く」を引いた。

○檜原―大和國磯城郡、三輪山の麓。

○三輪の山―同郡三輪町の東にある。

○しるしの杉―古今集の旋頭歌に「初瀬山古川のべに二本ある杉、年を經て又もあひ見む二本の杉」とあつて、三輪の名物。源氏物語手習卷にも「はかなくて世にふる川のうき瀬には尋ねも行かじ二本の杉」

○椙の葉の―椙に奈良を含ませて、奈良を通り過ぎる意に用ゐ、椙の紫をしばしにいひかけた。

○狛―山城國相樂郡にある地名を乘る駒にいひかけた

○宇治―同國宇治郡にある

【一】

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附屢斗目・水衣・帚・數珠の裝束にて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は初瀬に候ひしが。これより都に上らばやと思ひ候

ワキ道行「初瀬山。夕越え暮れし宿もはや。夕越え暮れし宿もはや。檜原のよそに三輪の山。しるしの杉も、立ち別れ嵐とともに椙の葉の。暫し休らふ程もなく。狛のわたりや足早み。宇治の里にも着きにけり宇治の里にも着きにけり

「暫し休らふ程もなく」と右の方に向き二三足進み、またもとに歸りて、宇治に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや宇治の里に着きて候。暫く休らひ名所をも眺めばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ里女、面若女・長鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・絓水衣・無色縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて、棹を持ちて出で、常座に立ち、

【一】

前段

舞臺は初め大和國初瀬で、ワキ旅僧登場。

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。私はこの間中は初瀬にゐましたが、これから都に上らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「初瀬山を夕暮に越えて泊まつた宿を、も早や出發して、檜原の向ふに見える三輪山の麓の、あの目じるしの杉とも別れを告げ、嵐の吹く中を通つて、奈良の都にも暫く休むといふこともせず、旅を續けて、狛のあたりを急いで行くうちにはや宇治の里に著いた」

と旅程を語つてゐるうちに旅に進む態で、舞臺は山城國宇治となる。

僧「道を急いだので、思ひの外早く宇治の里に著いた。暫くこゝに休んで、名所をも見物しませう」

と暫く休む態で脇座に行く。

【二】

シテ浮舟の霊、甲女の姿を裝ひ、宇治川に身を潜いでくる態で登場。

【二】
○柴積み舟―宇治の名物で源氏物語浮舟巻に「宇治橋の長々と見渡さるゝに柴つみ舟の所々に行きちがひたる」
○たづき―たより。據り所。
○心の科―わが心から求めて犯した罪。浮舟が二人の男に會つたことを指す。
○かこつ―恨み歎く。
○宇治の橋柱―住家は憂しを宇治に、柱の立つを立居にいひかけた。
○思ひ草―物思ひの種。草の緣で葉末の露とつゞけた
○白眞弓―行く末も知らずを白に、弓の本筈をもとの心にいひかけた。
○もとの心―罪を犯した昔のわが心。
○月日も受けよ行く末の―新古今集後鳥羽上皇の御製「大空に契る思ひの年も經ぬ　月日も受けよ行く末の空」を引いた。
○御ヶ連繩長くや―玉葉集前大僧正公響の歌「頼むぞよ神もうけ引く御注連繩ながくと祈る君が千年を」に據つた。

シテ一聲『柴積み舟の寄る波も。猶たづきなき。憂き身かな。二句』憂きは心の科ぞとて。誰が世をかこつ。方もなし

シテサシ『住み果てぬ住家は宇治の橋柱。立居苦しき思ひ草。葉末の露をうき身にて。老い行く末も白眞弓。もとの心を歎くなり

シテ下歌『とにかくに定めなき世の影頼む。上歌『月日も受けよ行く末の。月日も受けよ行く末の。神に祈りの叶ひなば。頼みをかけて御注連繩。長くや世をも、祈らまし長くや世をも祈らまし

【三】
「長くや世をも」と右の方に向きて三足出で、返句に正面に向く。
ワキ、シテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる女性に尋ね申すべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「この宇治の里に於て。古如何なる人の住み

女「私はこの柴積み舟のやうな、何の據り所もないたよりない、哀れな身の上ですけれども、このやうな哀れな身となつたのも、わが心から招いた罪だと思へば、誰を恨むすべもありません。
この宇治の里にも永く住み果てることが出來ない、何かにつけて心苦しい物思ひをする哀れな身上で、この後老い先もどうなることやら分らないと案じられるにつけて、罪を犯したあの當時の心が情なく思はれます。
どうせ、この世の中は老少不定、果敢ないものだとはいひながら、この世を守る月日の神樣にお頼りして、行先の事を神樣にお祈りすれば、願ひを叶へて下さらうかと思はれますから、神樣の惠みをお頼みして、長い將來の事をお祈りしませう」

シ獨言をいひながら扉に著いた體。旅僧はこれを見て、

【三】
僧「もうし、こゝな女の方にお尋ねしたいのですが」
女「私をお呼びでございますか、何の御用でございます」
僧「この宇治の里には、昔どういふ人が住

給ひて候ぞ委しく御物語り候へ

シテ「所には住み候へども。賤しき身にて候へば。委しき事をも知らず候さりながら。古この所には、浮舟とやらんの住み給ひしとなり。『同じ女の身なれども。數にもあらぬ憂き身なれば。いかでかさまで知りさむらふべき

ワキ「げにげに光源氏の物語。猶世に絶えぬ言の葉の。それさへ添へて聞かまほしきに。『心に殘し給ふなよ

シテ「むつかしの事を問ひ給ふや。里の名を聞かじといひし人もこそあれ。『さのみは何と問ひ給ふぞ

地上歌「さなきだに古の。さなきだに古の。戀しかるべき橘の（とシテ右に向き）。小島が崎を見渡せば（と正面に出で）。河よりをちの夕煙立つ河風に行く雲

○浮舟—源氏物語に描かれた宇治八宮の三の君。委しくは解説にいふ。

○さまで—さほど委しくは

○光源氏の物語—光源氏といふ皇子を主人公として作つた「源氏物語」。作者は紫式部。

○むつかしの事—面倒な事

○里の名を聞かじ—宇治といふ名を聞くさへいやだといふ意。浮舟巻浮舟の歌に「里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住みうき」

○橘の小島が崎—宇治川の名所。伊勢物語の歌に「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」などあるから、古の戀しの緣で橘を呼び起した。浮舟巻に見ゆ。後に掲げる。

○河よりをちの—川向ふの。浮舟巻に「河よりをちの人の家にゐておはせむ」

玄「この里には住んで居りますが、賤しい者ですから、委しい事は存じません。でも聞けば、この所には昔浮舟とかいふ方がお住みになつたといふことでございます」

僧「いかにもあの源氏物語——源氏物語といへば、後の世までも、いついつまでも語りつがれて來たもので、その點からいつても是非聞きたいと思ふのですから、どうか殘らず委しくお話し下さい」

玄「うるさい事をお尋ねになる方ですね。宇治といふ里の名を聞くさへ嫌だといつた人さへありますのに、どうしてそのやうにお尋ねになるのです。

このやうなお話が出なくても、兎角昔の事は戀しいものです。今この橘の小島が崎を見渡しますと、河の向ふ岸には夕煙が立ち上り、河風に吹かれて動く雲の絶え間からは、雪の白い色が輝いて、山は鏡を懸けたやうです。あのやうな景色を見

○あとより雪の色添へて―同巻に「風も殊にさはらず垣のもとに雪むら消えつゝ今もかき曇りつつ降る」
○山は鏡をかけまくも―同巻に「雪の降り積れるに……山は鏡を懸けたるやうにきら〳〵と夕日にかゞやき」とあるを引いて、かけまくも」の序とした。
○身を宇治と―身を憂しといひかけた。

【四】
○この物語―源氏物語。
○玉の数にもあらぬ―玉の数多しといひかけて、数にもあらぬと轉じた。
○そむきし世―前非を後悔して尼となつた身上。
○薫中將―光源氏の子。實は柏木中納言と女三宮との間に生れた密の子で、浮舟と契つた時は、二十六歳で、大將であつた。
○すゑ給ひしなより―すゑ給ひしなんなりのんを暑したのである。「すゑ」は住まはせる意。
○心ざまよしありて―浮舟の卷に「こめきおほとかにたをたをと見ゆる」。「よしあり」は品がある、「おほとか」は鷹揚といふ意。
○物いひさがなき―口さがない。同巻に「物いひさが

の（上を見）。あとより雪の色添へて（橋懸の方を見）。山は鏡をかけまくも。かしこき世々にありながら猶身を宇治と、思はめやなほ身を宇治と思はめや（と常座にてワキに向く）

【四】
ワキ「猶々浮舟の御事委しく御物語り候へ
地クリ『抑もこの物語と申すにその品々も妙にして。事の心廣ければ。拾ひていはん。言の葉の
シテこの間に大小前に行きて坐し、
シテサシ『玉の數にもあらぬ身の。そむきし世をや顯すべき
地『まづこの里に古は。人々あまた住み給ひける類ひながら。とりわきこの浮舟は薫中將のかりそめに。すゑ給ひしなより
（居クセ）
地クセ『人がらもなつかしく。心ざまよしありておほとかに過し給ひしを。物いひ。さがなき世

るにつけて、このありがたい聖代に生まれ合ひながらも、私はやはり昔の事が思ほれて、悲しい氣持になるのですもの」

【四】
浮舟の事をもつと委しく話して下さい」
そこで里女はうちくつろいで、
玄「一體この源氏物語と申しますものは、どの卷々も立派な、情趣の深いものですから、勝れた箇所を拾ひ上げようとしても、數へきれないのでございます。それだのに、その中から殊更人數にも入らない女の、前非を後悔して尼になつた話などを取出して、恥さらしをしない方がよいやうに思ふのでございます。
でも、まあ申しますれば、この宇治の里には、昔色々の人が多勢お住みになつた事ですが、こゝに申す浮舟は薫中將がほんの一時お住ませになつたのでございます。この浮舟といふ人は、人柄のなつかしい、心柄も氣品のある人で、鷹揚に暮らして居られたのですが、日さかない世間の人達がこの人の噂を一寸兵部卿宮に申しあげると、宮樣は色好みの方で、人知れず浮舟をお尋ねになつたのでございます。そして宵の間、裁縫なと忙しくしてゐ

なく聞えいたたらんにも—
○兵部卿の宮—光源氏の御兄朱雀院の皇子で、薫の從弟。
○織り縫ふ業のいとまなき—浮舟の侍女が忙しく裁縫などしてゐて、人目の隙のなかつたことをいふ。
○不便—不都合。
○山住みの—宇治の山里に住んでゐる浮舟の樣をいふ。
○有明の月澄み昇る—浮舟巻兵部卿宮が浮舟を宇治川の向岸に渡す條に「有明の月澄みのぼりて水の面も曇りなきに、これなむ橋の小島と申して、御船しばしさしとどめたる」
○汀の氷踏み分けて—同巻兵部卿宮の歌に「峯の雪汀の氷踏み分けて君にぞまどふ道はまどはず」
○一方—薫大將を指す。浮舟巻に「かの心のどかなるさまにて見んと、行末遠かるべきことをの給ひわたる人もいかゞ思さん」
○晴れぬながめ—同巻薫の歌に「水まさるをちの里人いかならん晴れぬながめにかきくらす頃」とあるをいふ。
○とにかくに思ひわび—薫も捨て難く兵部卿宮も忘れ難く、どうしようかと途方

の人の。ほのめかし聞えしを。色深き心にて。兵部卿の宮なん忍びて尋ねおはせしに。織り縫ふ業のいとまなき。宵の人目も悲しくて。垣間見しつつ、おはせしもいと不便なりし業なれや。その夜にさても山住のつめづらかなりし有樣の心にしみて有明の。月澄み昇る程なるにシテ『水の面も曇りなく

地一舟さしとめし行方とて。汀の氷踏み分けて。道は迷はずとありしも淺からぬ御契りなり。一方はのどかにて訪はぬ程經る思ひさへ。晴れぬながめとありしにも。涙の雨や增りけん。とにかくに思ひわび。この世になくもならばやと。歎きし末ははかなくて終に跡なくなりにけり。終に跡なくなりにけり

【五】

ワキ浮舟の御事は委しく承りぬ。さてさて御身

るので、人目にお困りになつて、隱れて隙見を遂ばしたのは、ほんとに御不都合なことだと思はれます。さてその夜、宮樣には浮舟の山家住ひの姿を珍しくも愛らしくもお思ひになり、浮舟を宇治の向岸へお渡しになり、折柄有明の月が冴に澄みのぼつて、川の水も曇りなく淸らかなのを御覽遂ばして、川の途中に舟をお留めになつたりして——

『峯の雪汀の氷踏み分けて、君にぞまどふ道にまどはず』

（峯の雪、汀の氷、山も野もひどい道中でしたが、ただあなたの爲に心を迷はして、道中はまちがへずに來ました）

と仰せになつたほど、深い契りをお結びになつたのでございます。ところが、片方の薫中將はのんびりした心の方で、永い間訪れなかつた心持を現すのにも——

『水まさるをちの里人いかならん、晴れぬながめにかきくらす頃』

（この頃の晴れ間も無い長雨に、私はあなたの事を思つて、ほんやり暮らしてゐますが、この長雨に水嵩も增した宇治川のあなたの方では、どうしていらつしやいます）

といつてお寄越しになる程度でございましたので、浮舟は感々悲しみの涙にくれたことでせう。かうして、薫中將を思ひ切ることも出來ず、宮樣をも忘れることも出來ず、兎や角と思ひ惑つて、結局

にくれて。
○終に跡なく―終に行方知れずになつた。
【五】
○通ひものする―通つてくる。
○小野―山城國愛宕郡。比叡山の西麓にあり、浮舟が入水後救はれて住んだ所。
○都のつて―上京のついで
○事たがひたるやう―様子がちがつてゐる。
○大比叡の杉―新續古今集堯仁法親王の御歌に「大比叡や杉たつ蔭を尋ぬればしるしも同じ三輪の神垣」
○杉のしるしはなけれども―三輪などには、古今集讃人知らずの歌に「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」などといつて、杉の目じるしがあるが、小野にはそれがないといふ意。
○横川―比叡山三塔の一。新續古今集眞綿の歌に「思ひ出づる雲居の月の面影も横川の水に澄ましてぞ見る」
○水のすむ方―澄むを住むにいひかけた。
○比叡坂―小野から比叡山に登る坂路。
○物の氣―生靈死靈などの人に憑き祟るもの。浮舟を

はいづくに住む人ぞ

シテ「これはこの所にかりに通ひものするなり。わらはが住家は小野の者。都のつてに訪ひ給へ

ワキ「あら不思議や。何とやらん事たがひたるやうに候。さて小野にては誰とか尋ね申すべき

シテ「隱れはあらじ大比叡の。杉のしるしはなけれども。横川の水のすむ方を。比叡坂と尋ね給ふべし

地下「猶物の氣の身に添ひて。惱む事なんある身なり法力を賴み給ひつつ。あれにて待ち申さんと。浮き立つ雲の跡もなく行く方知らずなりにけり行く方知らずなりにけり

「浮き立つ雲の」とシテ立ち、仕手柱際にて開き靜かに中入。

【問】 狂言所の者、著附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて、名乘座に出で、狂言「かやうに候者は。宇治の里に住居する者にて候。今日は里に出で心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

自分が死んでしまつた方がよいと思ひ込み、歎きの餘り遂に行方知れずになつてしまつたのでございます」
【五】
僧「浮舟の事は委しく伺つて、ありがたうございました。ところで、あなたはどこにお住ひなのです」
女「私はこゝへはほんの一寸通つて來ますので、私の住家は小野でございます。都へのおついでにお訪ね下さいませ」
僧「これは不思議だ。何だか樣子がちがふやうに思はれますが、小野ではどなたといつてお尋ねすればよいのです」
女「なによく分ります。あの大比叡の杉――いえ小野には三輪のやうな目じるしの杉はありませんが、横川の方で、比叡坂といつてお尋ね下さいませ。私は未だに物の氣が身に憑いて、惱んでゐる者なのです。佛法の功力をお賴りにして、あの小野でお待ち致しませう」
といつて、浮雲のやうに跡形もなく消えてしまつた。

惱ましたのは、世を恨んだ法師の死靈であつた。
○法力―佛法の功力。
○頼み給ひつつ―給ひは謙語の「給へ」を誤つたのであらう。
【問】

○優婆塞―俗體のまゝで佛道を修める男。
○乙子―愛子。
○比翼連理―睦しい夫婦の契りを譬へた語。白樂天の長恨歌に「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」

○面はゆく―氣まり惡く。

ワキ「是は都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か
狂言「なか〳〵このあたりの者にて候
ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候
狂言「畏つて候。(舞臺の眞中に坐し)さて御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古この所に於て。浮舟の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりには住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「さる程に浮舟と申したる御方は。桐壺の御子八の宮の三番目の御息女にて御座ありたると申す。その八の宮を後には優婆塞の宮と申し候。即ち御子に揚卷の大君中の君三の君と申して御座候。中の君は匂兵部卿と夫婦の語らひをなし給ふ。三の君は源氏の御乙子薫大將殿と。比翼連理の御契りありたると申す。然るに匂兵部卿ある夕暮に。三の君を御覽じて思し召し惑はれ。夢かとのみの御契りあり。それより忍び〳〵に御契りありたると申す。ある時兵部卿三の君を誘ひ橘の小島の邊へ御出であつて。御遊さま〴〵あり。その時の御歌に。年ふとも變らじものを橘の。小島が崎に契る心はと詠み給へば。三の君御返歌に。橘の小島の色は變らじを。この浮舟を行衛知られぬと。かやうに詠み給ひしより。三の君を浮舟と申して候。この事世上に隱れなければ。薫大將浮舟の方へは御出でなく候間。面はゆくや思し召しけん。夜に入り忍び出で給ひ。この川へ來り給ひて。御身を投げ給はんとて川の氣色を見給ふに。折節波風荒く物凄く候間。彳みて御座候へば。變化のものの

業とて虚空につかんで失せて候が。又平等院の邊へ捨て置き申して候。それより御心現なくならせ給ふ所に。横川の僧都の祈り加持にて。御本心にならせられ。小野の大尼と一つに御入りあり。御飾りを下し給ひ。小野の里にて往生の素懐を遂げ給ひたると申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず　御身以前にいづくともなく女性一人。柴舟に乘りて來られ候程に。卽ち詞をかはして候へば。浮舟の御事を懇に語り。住家は小野の者なれば。都のつてに尋ねよといひもあへず。その儘姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては浮舟の御亡心現れ給ひ。御詞をかはされたると存じ候間。小野の邊へ御出であつて。かの御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。小野のあたりへ立越えかの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事候はゞ重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ「かくて小野には來れども。いづくを宿と定むべき。上歌（待謠）所の名さへ小野なれば。所の名さへ小野なれば。草の枕は理や。今宵はここに經を讀み。かの御跡を、弔ふとかやかの御跡を

○御飾りを下し―髪飾を下し、剃髪して。

○亡心―亡靈。

○草の枕は理や―小野であるから、草原で寢るのも道理だ。

【六】

後段

舞臺は山城國小野。ワキ僧は小野に着いた態で、僧かうして小野へは來たが、どこを宿としようやら、目あてもないことだ。さうだ、土地の名も小野だから、草原で寢るのがあたりまへだ。今夜はこゝで御經を讀んで、かの女性の御回向をすることと

【七】○亡き影の—後に引く浮舟の歌に據つて綴つた。○涙川—涙の絶え間なく流れ出る喩。手習卷浮舟の歌に「身を投げし涙の川の早き瀨にしがらみかけて誰かとゞめし」○憂き名漏れんと—浮舟卷浮舟の歌に「歎きわび身をば捨つとも亡き影にうき名流さんことをこそ思へ」とあるを引いた。○明暮思ひ煩ひて—手習卷に浮舟入水當時の樣を語つて「いといみじと物を思ひ歎きて、皆人の寢たりしに妻戸を放ちて出でたりしに風烈しう川波も荒う聞えしを、ひとり物恐しかりしかば、來し方行く先も覺えで簀子の端に足をさし下しながら、行くべき方も惑はれて……つく〳〵と居たりしを、いと淸げなる男のより來て、いざ給へ、おのが許へといひて、抱く心ちせしを、宮(兵部卿)と聞えし人のし給ふと覺えし程より、心ち惑ひにけるなんめり」とあるに據つた。○あふさきるさ—兎や角する。○われかの氣色—わが身とも覺えぬ樣。正氣を失ふこと。

弔ふとかや

【七】

一樺の囃子にて、後ジテ浮舟、面若女・鬘・鬘帶・襟巾・着附摺箔・唐織・腰帶・扇の裝束にて出で、常座に立ち、

後ジテ『亡き影の絶えぬも同じ。涙川。寄るべ定めぬ浮舟の。法の力を頼むなり。あさましやもとよりわれは浮舟の。寄る方わかで漂ふ世に。憂き名漏れんと思ひわび。この世になくもならばやと。明暮思ひ煩ひて。人皆寢たりしに。妻戸を放ち出でたれば(と二足出で)。風烈しう河波荒う聞えしに(右の方に向きて開き)。知らぬ男の寄り來つつ(少し出で)。誘ひ行くと思ひしより。心も空になり果てて

〔カケリ〕

シテ『あふさきるさの事もなく

地『われかの氣色もあさましや

シテ『あさましやあさましやな橘の

しませう」—を讀經する態。

【七】後ジテ浮舟、ワキ僧の假寢してゐる夢に現れた樣で登場。

浮舟「死んだ後までも、存命中と同じやうに悲しみの涙の絶え間たい、たよりもないこの浮舟は、たゞ佛法の功力をお頼みするのでございます。あゝ思へばあさましいことです。私はもと〳〵名も浮舟で何たよる所もなく、浮世に漂ふ身上で、なほこの上に情ない噂が世間に漏れはしないかと歎き苦しみ、一層死んでしまつた方がましだと、明暮思ひ惱んで、人が皆寢靜まつた後、戸を開けて外へ出ますと、風が烈しく吹き河波の荒い音が聞えます。そこへ、知らない男が近寄つて來て、私を誘つて行くと思ふと、もう心がぼうつとしてしまつたのでございます」

〔カケリ〕

に、物の氣に捉はれた時の樣を示し、

浮舟「かうして、兎や角する隙もなく、自分で自分が分らない樣に、正氣を失つてしまひました。思へばほんとにあさましいことでございます。私が歌に詠んだ『橘の小島の色は變らじを、この浮舟そ

○橘の小島の色は―浮舟巻
浮舟の歌「橘の小島は色も変らじをこの浮舟ぞ行方知られぬ」を引いた。

【八】○観音の慈悲―手習巻に、浮舟に憑いた物の氣が一観音のとさまかうさまにはぐくみ給ひければ、この僧都にまけて奉りぬ。今はまかりなん」といつて退散したとあるに據つた。

○横川の僧都に見つけられ―手習巻に、横川僧都の母小野の尼が初瀬から歸洛の途次、宇治で病に罹つたため、物の氣に憑かれて倒れてゐた浮舟が、僧都に見つけられたと記してあるのをいふ。

○加持―眞言の修法。

○大比叡や―苦しみは多しを地名にいひかけた。

○古き事ども―浮舟在世當時の事など。杉の古木といひかけた。

○今この聖―在世の時横川僧都に救はれたやうに、死後の今もなほ慈僧に弔はれるといふ意。

○都率―都率天。その内院は壽命限りなく、歡楽に満ちた淨土であるといふ。

地。小島の色は変らじを
シテ『この浮舟ぞ。寄るべ知られぬ

これより謠に合せて舞ふ。

【八】地。大慈大悲の理は。大慈大悲の理は。世に廣けれど殊にわが。心一つに怠らず。明けては出づる日の影を。絶えぬ光と仰ぎつつ。暮れては闇に。迷ふべき後の世かけて頼みしに
シテ『頼みし。ままの觀音の慈悲
地。頼みしままの觀音の慈悲。初瀬の便りに横川の僧都に、見つけられつつ小野に伴ひ、祈り加持して物の氣除けしも夢の世になほ。苦しみは大比叡や。横川の杉の。古き事ども、夢に現れ見え給ひ。今この聖も、同じ便りに弔ひ受けんと思ひしに(と坐してワキに合掌し)。思ひのままに執心晴れて(と立ち)。都率に生まるる、嬉しきといふかと寄るべ知られぬ』

(あの橘の小島はいつまでも色の變ることがありますまいが、この浮舟は何時どうなるか分らないたよりない身上です)

の通りになつてしまひました」

【八】○佛の慈悲の廣大なことは申すまでもありませんが、私は一心に佛を念じて、夜が明けても、日が暮れても、たえず日の光のやうに佛を仰ぎまつり、後世冥途の闇に迷はないやうにお祈りしてゐました爲め、觀世音の慈悲を蒙つて、横川僧都が初瀬からお歸りになる途中、私の倒れてゐるのをお見つけになつて、小野に連れられ、加持祈禱して物の氣を退散させて戴いたのでございます。でも、なほ死んだ後の苦しみが多く、どうかこの横川僧都に助けられた昔話を夢物語にして、も一度今の世のお僧にも僧都と同じやうに回向して戴きたいと思つてゐましたところ、幸ひにお出會ひ申して、執心もすつかり晴れ、都率天に生まれることが出來まして、ほんとに嬉しうございます」

といつたかと思ふと、はや夜は明けて

○明け立つ横川…夜を横川にいひかけた。

思へば明け立つ横川。いふかと思へば明け立つ横川の、杉の嵐や残るらん杉の嵐もや残るらん

と舞ひ納めて仕手柱際にて留拍子を踏む。

来て、浮舟の姿はなく、たゞ横川の杉に嵐が吹き残つてゐるばかりである。

後ジテ浮舟、夢の消えたやうにして退場。

〔考異〕

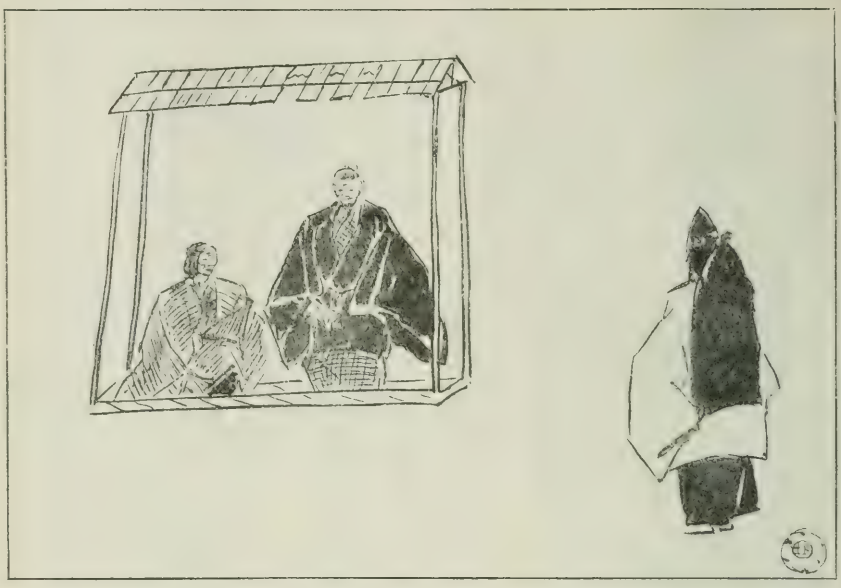
諸流（觀春剛）

【一】ワキ「これは諸國一見の（春剛都方より出でたる）僧にて候　【二】シテ「句「憂きは心の……かこつ方もなし（春剛ナシ）

【六】ワキ「かくて小野には……」宿と定むべき（春剛ナシ）。上歌「所の名さへ小野なれば……かの御跡を弔ふとかや（春剛今もその世を宇治山の道出でて。〳〵。うつるも迷ひあだ波の。小野の草村露分けて。あはれをかけて弔はん。〳〵）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「急ぎ候程に……眺めばやと思ひ候（光ナシ）　【三】シテ「こなたの事にて候か（光ナシ）……　【五】ワキ「浮舟の御事は委しく承りぬ（光ナシ）さてさて（光かやうにかたりたまふ）御身はいづくに……



雨月（うつ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 夢幻的劇能

【人物】 **ワキ** 西行法師、**前シテ** 老翁（住吉明神神靈）、**前ツレ** 老嫗、**狂言** 住吉門守の神、**後シテ** 住吉明神神靈の憑りたる社人

【所】 攝津國・住吉

【時】 鎌倉初期 中秋（八月）

【作者】 能本作者注文、二百十番謠目錄ともに金春禪竹の作とす。演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】 西行法師が住吉に參詣して、とある家に宿を求めると、老夫婦が翁は雨音を聞く爲に板を葺かうといひ、姥は月を見る爲に葺くまいといつて、互にいひ爭つて、計らず「賤が軒端を葺きぞわづらふ」といふ下句を得た。翁はこれに上句を續げばお泊めしようといつたので、西行は「月は漏れ雨はたまれととにかくに」と詠んだので、翁は喜んで招じ入れ、歌物語などして眠りについた。すると、住吉の社人に明神が憑りう

つつて西行の歌を讃めたゝへ、舞を舞ふ。

【出典】西行法師自作の書と傳へて居る撰集抄第五「江口遊女事」に、

治承二年長月の頃、ある聖と伴ひ、西國へ赴きしに、さしていづくとしもなきまゝに、日の傾くにも急がずして、江口桂木などいふ遊女が住家見廻れば、家は南北の岸にさしはさみて、心は旅人の暫しの情を思ふ樣に、さもはかなきわざにて、さても空しくこの世を去りて、來世はいかならん。これも前世の遊女にてあるべき宿業の侍りけるやらん。露の身の暫しの程を渡らんとて、佛の大きに戒め給へる業をするかな。……うち語らひて、その里を過ぎなんとするに、冬を待ち得ず村時雨の烈しくて、人の門にたちやすらひて、内を見入り侍るに、あるじの尼の時雨の漏りけるをわびて、板を一ひらさげて、あちこち走りありきしかば、何となく、かく、

賤が伏屋を葺きぞわづらふ

とくちずさみたるに、この尼さばかり物聞がしく走りあわつるが、何とてか聞きけむ、板を投げすてて、

月はもれ雨はたまれと思ふには

とつけ侍りき。

とある、この尼を和歌の守護神住吉明神に擬へ、更に古今著聞集に記された、住吉の神高貴德王大菩薩の御託宣（語釋に揭げる）を取交ぜて本曲を脚色したのである。

【概評】西行の歌話を題材とした曲には、本曲の外に〔江口〕〔西行櫻〕〔松山天狗〕などがあり、いづれもその和歌の德を說いたものであるが、殊に本曲は住吉明神の影向せられる略脇能で、紀貫之の〔蟻通〕とともに、歌人の德を最も高唱したものである。そして〔蟻通〕のシテ明神が老社人の姿を裝うてゐるやうに、本曲の後ジテも老社人に明神の憑りうつつたもので、兩曲相似てゐて、他には類例の少い樣式をとつてゐるのである。但しこの工夫は〔蟻通〕では特異な效果を擧げてゐるが、本曲ではさうした效果を收めてゐない。むしろ神靈自身の影向とした方がよかつたと思ふ。恐らくは作者はこの舞臺が社前ではなく、普通の民家であつた爲に、神聖を汚さんことを恐れて、このやうな樣式に從つたのであらう。本曲の主題となつた連歌の取扱について、原據では西行が何となく下句を口ずさんだのに對し、尾が上句を繼いだのであるが、それを、本曲ではまづ「月はもれ雨はたまれ」を老夫婦趣味の相異として脚色し、その口爭ひから、老翁が計らずも下句を口ずさみ、この興に乘じて西行に上句を求めることにしたのは、作者の秀れた働きであるといはな

ければならない。

【一】

後見、引廻をかけたる板屋の作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ西行法師、角帽子・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて塗笠を被りて出で、名乘座に立ち、囃子座の方に向き、

ワキ次第『心を誘ふ雲水の。心を誘ふ雲水の。行方やいづくなるらん

地取に笠を脫ぎて正面に向き、

ワキ「これは嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。われ宿願の子細あるにより。唯今住吉の明神に參詣仕り候

といひて笠を被り、

ワキ道行『住み馴れし。嵯峨野の奥を立ち出でて。嵯峨野の奥を立ち出でて。西より西の秋の空。月を行方のしるべにて。難波の御津の浦傳ひ。入りぬる磯を過ぎ行けばはや住の江に着きに

【一】

前段

舞臺は初め山城國嵯峨で、ワキ西行法師登場。

西行「自然の面白い景色に誘はれて、所定めず面白い所を見て歩かう」

ミ次第を謠つて、旅の心持を述べ、

西行「私は嵯峨の奥に住んでゐる西行法師です。私は以前から願望があるので、これから住吉明神へ參詣しようと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

西行「住み馴れた嵯峨野の奥を出て、西へ西へと、秋の月の行く方角を目當にして旅を續けてゐるうちに、難波津へ出、それから浦傳ひ磯傳ひに道を歩いて、住吉に着いた」

【一】○心を誘ふ雲水の―雲や水など自然の景色が心を旅路に誘ひ出す意と、雲や水の行く先はいづくであらうとの意と兼ねていふ。

○嵯峨―山城國葛野郡、嵐山の對岸にある。こゝに西行庵があつた。〔西行櫻〕參照。

○西行法師―俗名を佐藤憲清といひ、鳥羽院に仕へた北面武士であつたが、二十三の年佛門に入つて圓位といひ、後に西行と號した。諸國を周遊して、多くの秀れた吟詠を遺した、わが國有數の歌人。建久元年洛東雙林寺で寂した。平七十三。

○住吉明神―攝津國東成郡住吉にあり、表筒男命・中筒男命・底筒男神の三神を祀り、古くから海神として尊崇せられてゐたが、平安末期頃から和歌の守護神として深く尊信せられるやうになつた。

○月の行方をしるべにて―しるべは道案内。月は西に傾くものであるから、かういつた。

○難波の御津―今の大阪の中島の邊であらうといふ。
○入りぬる磯―滿潮にかくれた磯をいふ。こゝでは「御津に入る」といひかけたので、たゞ磯邊といふ意。
○さすらひ―さまよひ。
○釣殿―水上に掛け出して魚など釣るやうに作つた家

【二】

○風枯木を吹けば―和漢朗詠集白樂天の詩句に夏夜と題して「風吹二枯木一晴天雨、月照二平沙一夏夜霜」とあるを引いた。「晴天雨」を「はれてんの雨」と讀むは朗詠の讀み癖である。
○それさへあるに―夏の夜でも月は面白いのに。
○餘りに堪へぬ―面白さに堪へられない。
○半ばの月―中秋の月。

けりはや住の江に着きにけり

「難波の御津の」と右の方へ向き二三足出で、またもとに歸りて住吉に着きたる態。道行濟みて正面に向き笠を脱ぎ、

ワキ「急ぎ候程に。これははや住吉に着きて候。われこの所に來りここかしこをさすらひ歩き候程に。はや日の暮れて候。又あれを見れば釣殿の邊と思しくて。火の光の見えて候程に。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候

といひて、脇座に行き下に居る。

【三】

後見作物の引廻を下す。シテ老翁、面小牛尉・尉髮・襟淺黄・着附小格子・茶袈裟水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ老嫗、面姥・姥髮・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・無色唐織・淺黄縷水衣の裝束にて、作物の中にシテは床几にかゝり、ツレは下に居る。

シテ「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の霜。それさへあるに秋の空。餘りに堪へぬ半ばの月。あら面白の折からやな

ワキ作物の前に行き、

ワキ「いかにこの家の内へ案内申し候

といつてゐるうちに、住吉に着いた態で、後見は住吉となる。

西行「道を急いだので、思ひの外早く住吉に着いた。そして、あちらこちら逍遥してゐるうちに、もはや日が暮れてしまつた。丁度幸ひ、向ふの方に釣殿があると見えて、火の光が見える。あそこへ行つて宿を借りませう」

西行はその火を尋ねて行く態で、脇座につく。

【二】

後見は住吉の老夫婦の住家。後見の作物は老夫婦の住家で、シテ住吉明神老翁の姿、ツレ老嫗と共にその中に居る。

老翁「白樂天の詩にも――

『風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照せば夏の夜の霜』

（風が枯木に吹き渡る音は晴天にも雨が降るかと疑はれ、月が沙原を照らした樣は、夏の夜にも霜が降つたかと思はれる）

といつたやうに、雨や月の景色はいつでも面白いものだが、殊に秋の空、中秋の月は何ともいへない面白いものだ」

と景色を眺めてゐる。

西行法師は老人夫婦の住家へ來た態で、

西行「御免下さい」

シテ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「行き暮れたる修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ

シテ「餘りに見苦しき柴の庵にて候程に。お宿は叶ひ候まじ。今少し先へ御通り候へ

ツレ(シテに向ひ)「なうなうこれは世を捨人。痛はしければ入らせ給へ

シテ(向合ひ)ツレ『さりながら秋にもなれば夫婦の者。月をも思ひ雨をも待つ。心々に葺き葺かで。住める軒端の草の庵。いづくによりて留まり給ふべき(とワキに向く)

ワキ「さては雨月の二つを爭ふ心なるべし。月はいづれぞ雨はいかに

ツレ『姥はもとより月に愛でて。板間も惜しと軒を葺かず

○月をも思ひ雨をも待つ—月の光も眺め雨の音をも聞きたいので、月を見る爲には屋根を葺かずに置きたく雨の音を聞く爲には屋根を葺きたく思ふとの意。

○月はいづれぞ—夫婦の中で孰れが月を愛し、孰れが雨を好まれるかとの意。

○板間も惜し—板の隙間を洩る月影を遮るのも惜しい

老翁「どなたです」

西行「旅に行き暮れた修行者です。一晩お泊め下さい」

老翁「餘り見苦しい粗末な家ですから、お宿は出來ません。も少し先へ御出でなさい」

老嫗(翁に)「もうしあなた。この方は御出家でお氣の毒ですから、泊めておあげなさいませ」

老翁「しかしこの頃のやうに秋になると、お互夫婦が、一人は月が眺めたいと思ひ、一人は雨音が聞きたいといつて、一方が雨音を聞くやうに屋根を葺かうといへば、一方は月を眺める爲に葺かずに置かうといつて、結局屋根も葺ききらないでゐるのだから、どこにお泊めする所もないぢやないか」

西行「なるほどこれは、雨の趣と月の眺めと、どちらが面白いかいひ爭つてゐるのであらう。一體お二人の中で、どちらが月がお好きで、どちらが雨がお好きなのです」

老嫗「私は元來月が好きで、板の隙間を塞ぐのさへ惜しいと思つてゐるのですから、勿論屋根は葺きたくありません」

○村時雨―はら〳〵と降る秋雨。

○定めなき身の―人の命のはかない定め難い意と夫婦がものを愛する心の一致しない意とを兼ねた。

○賤が軒端を―撰集抄に見えたる歌、解説にいふ。それには「ふせ屋」とあるのをこれには「軒端」と改めたのである。ふと口ずさんだ詞が和歌の下句になつたので繰返して二度吟じ味つたのである。

○月は漏れ雨はたまれと―第三句選集抄には「思ふには」とあるを、こゝには「とにかくに」と改めた。

シテ「祖父は秋の村時雨。木の葉を誘ふ嵐までも。音づれよとて軒端葺く

ツレ『かしこは月影

シテ『ここは村雨

ツレ『定めなき身の住居までも

シテ（屋根を見上げて）『賤が軒端を葺きぞわづらふ。（面を伏せて）賤が軒端を葺きぞわづらふ。（面を直し）「面白や卽ち歌の下の句なり。（ワキに向ひ）この上の句をつがせ給はば。お宿は惜しみ申すまじ

ワキ『もとよりわれも和歌の心。その理を思ひ出づる。（少し考へて）月は漏れ雨はたまれととにかくに

シテ『賤が軒端を葺きぞわづらふ

シテ『月は漏れ雨はたまれととにかくに。賤が軒端を。葺きぞわづらふ

老翁　私は秋の村時雨が好きで、雨音のやうな音のする、木葉の屋根打つ音までが聞きたいので、風も吹いてくれゝばよいと思ふ位ですから、屋根を殘らず葺きたいと思ふのです」

老嫗「私は月影が好きですし」

老翁「私は村雨の音が好きですし」

老嫗　假の宿のこの世の住家についても、やはり色々心が迷ひまして―

老翁　それで私共は軒を葺きかねて、いはば『賤が軒端を葺きぞわづらふ』……これは面白い、歌の下句が出來ました。これに上の句をつけて下されば、喜んでお宿を致しませう―

西行「私も元來和歌が好きですから、それではこの下の句の出來た理由を考へて、『月は漏れ雨はたまれと兎に角に』……―

老翁「下の句が『賤が軒端を葺きぞわづらふ』で」

老翁・西行――

『月は漏れ雨はたまれと兎に角に、賤が軒端を葺きぞわづらふ』

（月の光は家の中へ入つてくるやうに、しかし雨音は屋根に關えるやうにと思ふので、どうしようかと、里人が屋根を葺きかねてゐる）と西行と老翁とが同吟する。

○深き夜の――理の深きを深夜の月にいひかけた。
○三五夜中の――和漢朗詠集白樂天の詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」を引く。三五夜は八月十五夜新月は今山の端から出たばかりの月。
○瀟湘の――支那湖南省洞庭湖の邊、瀟水・湘水と相會する所。その夜雨は瀟湘八景の一として廣く稱されて居る。

【三】
○遠里小野――住吉の名所。今俗に「をりをの」といふ。新勅撰集覺延法師の歌に「住吉の松の嵐も霞むなり遠里小野の春のあけぼの」

シテ『面白の言の葉や地『げに理も深き夜の。月をも思ひ雨をさへ。厭はぬ人ならば。此方へ入らせ給へや

この間にシテは眞中へ行き、ツレは脇正面先に出で、ワキを案内する心。ワキ脇座に行き、三人とも坐す。

地上歌「折しも秋なかば。折しも秋なかば。三五夜中の新月の。二千里の外までも。心知らるる秋の空。雨は又瀟湘の。夜のあはれぞ思はるる

【三】
ツレ『なう村雨の聞え候（とシテに向く）
シテ「げに村雨の聞ゆるぞや。遠里小野の嵐やらん
ツレ『よくよく聞けば時雨ならで。更け行くままに秋風の
シテ『軒端の松に
ツレ『吹き來るぞや

ツレ立ちて笛座前に行き下に居る。シテ立ちて次の謠に合せ

老翁「いかにも面白い歌です。意味の深い歌で、月の眺めも好きなら、雨の音も嫌ひでないといふ、さういふ方なら、どうぞこちらへお入り下さい」
（西行を家の中に入れる。從つて舞臺は老人住家の室内となる。
老翁「丁度今は中秋で、白樂天の――『三五夜中の新月の色、二千里外の故人の心』――（八月十五日の月が今しも山の端から出たのを見ると、遠くに離れてゐる友人のことが思ひ出される）
といつた心持が偲ばれ、又あの『瀟湘の夜雨』の面白い樣子が想像されます」
【三】
老爺「もうし村雨の音が聞えます」（と老翁にいふ）
老翁「いかにも村雨の音が聞えるぞ。いや違ふ、遠里小野の方から吹いて來る風の音だらう」
老爺「なるほどよく聞くと、時雨ではなくて、秋風が軒端の松に吹いてくる音でした」

○なかなか空は住吉の―なか〳〵は却つて。雨の降るどころか、却つて嵐の爲に雲が拂はれて、空が澄み渡るといふを住吉にいひかけた。
○所からなる―地名の住(澄み)にふさはしく。
○さらでも―岸打つ波の音がしなくても。
○浮世の業を賤の女―浮世の業をしを賤の女にいひかけた。
○身の爲にはさもあらで―自分の生業の爲にするのではなく。
○秋の恨みの小夜衣―秋の恨みの小夜(秋らしい感慨の深い夜)を小夜衣といひかけた。小夜衣はこゝではたゞ衣の意。
○時雨せぬ夜も―後拾遺集源頼實の歌「木の葉散る宿は聞き分くことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も」を引いた。
○心を染めて―心に泌みて思ひ亂れる意を、時雨によつて木の葉の色づく意にいひかけた。
○木の葉衣―木葉の身にかかるを衣に見立てたのである。(「嵩砂」の「落葉衣」と同義。)

て舞ふ。

地　雨にてはなかりけり。小夜の嵐の吹き落ちて。なかなか空は住吉の。所からなる月をも見。雨をも聞けと吹く。閨の軒端の松の風。ここは住吉の。岸打つ波も程近し。假寢の夢もいかならん。よしとても旅枕さらでも夢はよもあらじ。いざいざ砧擣たうよいざいざ砧擣たうよ。浮世の業を賤の女は。雨寒しとて衣。うつ。身の爲はさもあらで。秋の恨みの小夜衣月見がてらに擣たうよ

シテ　時雨せぬ夜も時雨する

地　木の葉の雨の音づれに。老の涙もいと深き心を染めて色々の。木の葉衣の袖の上。露をも宿す月影に。重ねて落つるもみぢ葉の。色にも交る塵ひぢの。積る木の葉をかき集め雨の名殘と

美爲　雨ではなかつたのだ。夜嵐が吹いて、雨音を聞かしてくれるのであつた。雨の降るどころか、嵐の爲に雲も吹き拂はれて、空は澄み渡つて名所の月が殊に面白く、その上雨音をも聞かせようとして、軒端に松風が吹いてゐるのだ。しかしここは住吉の濱邊で、岸打つ波音も其近いので、客人はおやすみにたれないかも知れない。が、それもよからう、どうせ旅のことととてよくおやすみにはなれないだらう。さあ砧を擣つてお慰めしよう。浮世を渡りかねた女達は風が雲くなつたといつて、その用意に衣を擣つのだが、私達はさういふ意味ではなく、この秋景色の面白さに、月見がてらに砧を擣たう―

老爲　――

「時雨の降らぬ晴れた夜に、
木の葉の音がことことと、
雨の降るやうに音づれて、
思ひ出多い老の身に、
深い思ひを染めて行く。
色さまざまに紅葉した、
木の葉の露に月影の、
映る景色の面白さ。
そのもみぢ葉がことことと、

○塵ひぢの―紅葉の色に似た血を塵にいひかけ、「塵ひぢの」を積るの序とした。
○津守の―津守は住吉の異名。年も積るといひかけた。住吉明神であることを仄かしたのである。
○小尉―小は謙遜の辭。
○夢に歸る古―夢に現れて來る昔の有樣。やがて西行の夢に明神の現れ給ふことを仄かした。
○松が根―古を待つを松にいひかけた。

【間】

思はん

シテ舞ひ上げて下に居り扇をたゝみながら、

シテ「はや夜も更けたり旅人も御休み候へ。『ここはもとより所から。年も津守の小尉なればわれも

地『老衰の眠り深き夢に返る古を。松が根枕して共にいざやまどろまん

シテ「老衰の眠り深き」と立上り、仕手柱際へ行き、來序の囃子にて靜かに中入。ツレも後より入る。後見作物を取り入る。

【間】

末社來序の囃子にて、狂言末社神、末社頭巾・面卷髭・上頭掛・着附厚板・縷水衣・括袴・曙帶・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。住吉明神に仕へ申すあらはじきの神と申す門守の神にて候 誠に申すまでもなき事ながら。國々に靈社あまた御座候にも當社明神は。異國の夷を追拂ひ國家安全に守り給ふ中にも。和歌の道を守り給ふ故。西行法師唯今當社に御參詣ありしを。明神嬉しく思しめし。神木の松蔭に庵を結び老人夫婦と現じおはします。はや日も暮れ方になる故。西行かの庵に立ち寄り宿の無心を申されければ。その時内より御申し候は。こゝに姥と祖父の中に爭ひの候。姥はこの庵の軒を葺くまじい月を見ようと申せば。祖父は又雨の音を聞かうずる間軒端を葺かう。葺かう葺くまじいと兩人の間に雨月の爭ひの候。それにつき歌の句の候。曉が軒端を葺きぞわづらふと候。この上の句を御附けあらば御宿を參らすべしとありしかば。されば附けて見申さんとて。月は漏れ雨はたまに降るやうな音のして、散つて積ればかき集め、雨の名殘と樂しまう『―!』

と謡ひながら詞を打つ。(實際の演能には詞は打たず、シテ老翁が立つて舞ひ、その心持を示す)

老翁「もはや夜も更けました。お客人もお休みなさいませ。私もこのやうな老人で眠も衰へました。よく寢て昔の夢でも見ませう。さあ御一所に寢ませう」

といつて、老人夫婦は寢室に入る態で退場。

【四】

（面白の詠吟）—月は漏れ雨はたまれ—云々の歌を指す。

（陰陽）—つの道—陰陽は男女の意。古今集序に和歌の徳を述べて「男女の中をも和らけ」といつて居るので、和歌は夫婦を和合せしめるものであるといふ。

○五體—和歌の上句下句を陰陽二つの道の二つと見、更に和歌は五・七・五・七・七の五句から成立つてゐるので、これを木火土金水の五行に附會したのである。

○上下は卽ち天地人の—和歌の上下句は卽ち天地を表す「天地人の三才はこれ詠吟なるべし」の二意を續けたのである。天地人の三才とは宇宙萬物の三大分類で、和歌はこのすべてを盡すとの意。

○西の海檍が原の—續古今集卜部兼直の歌「西の海や檍が原の汐路よりあらはれ出でし住吉の神」を引いた。住吉明神は前掲の通り表筒男命等三神を祀つたもので、この神々は併非諾尊が流紫日向の橘小門の檍が原で御祓ぎ遊ばした時にお生まれになつた神であるからいふ。

れと更に角に、賤が軒端を葺きごわづらふと詠まれければ、あら面白の言の葉や。さればこなたへ御出であれとて、夜もすがら歌の極意を御物語あり。はや夜も明方になり候間、まづ御休み候へ我等も休まんと御申し候間、西行も少しまどろみ目覺めてあたりを見れば、老人夫婦はましまさず御神木の松の木蔭にて候間、西行も肝も消し未だ不審半ばにて候間、急ぎ立ち越え右の子細を告げ知らせよとの神勅に任かせ。是まで出でて候。西行は何方に居らるゝか知らん。（ワキを見て）されば、これに居らるゝ。いかに西行に申し候。これは當社に仕へ申す門守の神にて候が。夜前御宿を申されしは忝くも當社大明神なり。御身和歌の道に好み給ふ故。歌の極意を御物語あるべき爲御宿を參らせられ候が。はや夜も明方になり候へばまづ御歸り候へども。今少し仰せ殘されし事を。宮人に乘り移り仰せ聞かさるべしとの御事なり。唯今これへ參る宮人こそ正身の御託宣にて候間。心を靜めて御聞き候へ。この事を知らせよとの神勅に任せ。是まで參りて候。構へてその分心得候へや

といひて幕に入る。

【四】

後見幣帛に幣を載せて正面先に出す。

出端の囃子にて、後ジテ住吉明神の神靈憑りたる社人、面繊扇・白垂・烏帽子・白鉢巻・襟淺黄・着附小袖・厚板・縷狩衣・色大口・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に出で、

後ジテ　あら面白の詠吟やな。陰陽二つの道を守る。その句を分つて五體とす。木火土金水なり。上下は卽ち天地人の三才はこれ詠吟なるべし。（ワキに向ひ）われをば誰とか思ふ。忝くも西の海。檍

【四】

後段

後ジテ住吉明神の神靈の憑りうつつた社人登場。

社人「今の西行の歌は實に面白い歌であつた。一體和歌といふものは男女夫婦の中を和合せしめるもので、句は五つあつて木火土金水の五行から成り、上句下句は天地を示し、やがて天地人の三才、宇宙の森羅萬象すべてのものが、詠歌の種と

【五】○因位―果上の對、未だ佛果を得ないで、因行を修めて向上する菩薩の地位。神佛不二の說により住吉明神にも因位のあつたものを見て居るのである。古今著聞集に「住吉は四所におはします。一御所は高貴德王大菩薩なり、龍に乘る。御託宣に曰く、我是兜率天內、高貴德王菩薩也、爲レ鎭二護國家一、垂二跡於當朝墨江邊一、松林久塗二風霜一」○兜率の內院―兜率 Tusita は梵語で、知足と譯す。須彌山の頂上、欲界六天の第四重の天。この天に內院外院があり、內院には彌勒が居て下生淸度の時を待つてゐるといふ。○高貴德王菩薩―文殊・迦葉等の菩薩と共に問答論議して大乘甚深の妙義を宣揚した菩薩。涅槃經二十一卷に高貴德王菩薩品がある。○玉垣の內の國―日本國をいふ。日本書紀に「大巳貴大神目レ之曰、玉牆內國」○跡を垂れ―垂跡。本地の佛神が假にこの娑婆世界に出現すること。○和歌を守りて―當時、住吉明神と玉津島明神・柿本人麻呂を和歌三神として崇めた。

が原の波間より

と舞臺に入り、

地 現れ出でし。住吉の

シテ 神託正に。疑はざれ

【五】幣臺の前へ行き下に居て、幣をとり上げ、

シテ 抑もこの神の因位を尋ね奉るに。昔は兜率の內院にして。高貴德王菩薩と號し。今はまた玉垣の內の國に跡を垂れ。和歌を守りて住の江や。松林の下に住んで。久しく風霜を送る。ここに和歌の人稀なる處に。西行法師歩みを運び給ひ。心を述ぶる和歌の友とて。神明納受垂れ給ふこれによつて。神慮の程を知らしめんと。宜禰が頭に乘りうつる。謹上（幣を振り）

地 再拜

幣を戴きてこれを臺にのせ、扇を持ちて立上り、

〔眞序舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

なるのである」

と獨言して西行に向ひ、

社人 自分を誰だと思ふ、奈くも就紫檀が原の波間からお現れになつた住吉明神の神託であるぞ。確かに疑つてはならないぞ」

【五】

社人、これより神がかりで神託を述べる。

社人「抑もこの住吉明神の御前身を伺へば、昔は兜率天の內院におはして高貴德王菩薩と申し、今はこの日本に垂跡せられ、和歌を守護して年久しくこの住吉に鎭座遊ばされるのである。然るに和歌の名人は少いのであるが、こゝに西行法師がこの地へ來られ、心地よい和歌を詠じたので、明神はこれを御嘉納遊ばされたのである。これより神の樣子となつて）それで神意の程を知らしめる爲に、社人の頭に乘り移つて來たのであるぞ」

社人「謹んで禮拜し奉る」（之半は社人の心に歸り）

〔眞序舞〕

社人神がかりの樣を舞ふ。

○松林の下に住んで―前に掲げた古今著聞集の住吉明神託宣の詞を引いた。
○納受垂れ給ふ―西行の宿願を神がお聞き入れになる
○宜禰―神主。
【六】○影向―神が姿を現し給ふこと。
○返す心も―舞の袖を返す心も澄むを住吉にいひかけた。
○ていとう―鼓の擬聲。
○心詞に現るる―古今集序に「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」とあるにより、歌も舞もその心持の外に現れるものであるといふ
○木綿四手―仰ぐべしといふといひかけ、木綿四手（御幣）の紙を神といひかけた。

【六】地ありがたの影向や。ありがたの影向や。返す心も住吉の。岸うつ波も松風も。颯々の鈴の聲。ていとうの鼓の音。和歌の詠吟舞の袂も同じく。心詞に現るる。その風等しかりけり。これまでなりや今ははや疑はで神託を。仰ぐべしと木綿四手の神は。上らせ給ひければ。もとの宮人となりて。本宅に歸りけりや、もとの方に歸りけり

「もとの宮人となりて」と平坐してうつむき、宮人に返りたる心にて立ち上り、仕手柱際にて留拍子を踏む。

【六】まことにありがたい明神の御出現である。
社人「住吉の岸に寄せては返す波音も、松風も、さら〳〵と鳴る鈴の聲も、とうとうと打つ鼓の音も、和歌を詠むのも、舞を舞ふのも、皆わが心持の外に現れたものでは、眞心の現れてあることは同じである。今は歸るぞ、この神託を疑はず信ずるがよからう」
といつて、神靈は上天せられたので、社人は普通の人にかへつて、自分の家へ歸つた。
後ジテ社人、われに返つた心持で退場。

〔考異〕

諸流（五流）
著しい異同はない。
古謡本（元祿八年本）
異同がない。

右近（うこん）

觀（寶）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 鹿島神職、**ワキツレ** 同從者（二人）、**前シテ** 貴女（櫻葉神靈）、**前ツレ** 侍女（二人）、**狂言** 所の者、**後シテ** 櫻葉明神

【所】 京都　右近馬場

【時】 春（三月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作としてゐる通り世阿彌の五音曲條々に、

「ひをりせし右近の馬場の木の間こゝより」のうたひのかゝり、是皆幽曲也。凡そ應永年內より以來のうたひ物、節曲節なと、皆々幽曲也。

とあつて、應永年間世阿の新作である。同じく世子六十以後申樂談儀にも、

右近の馬場の能、「まつことあれや有明のこかやうの所、次第々々によすべし。……

右近の馬場の能に、「はなぐるまにてながむる」ま、大事の字なり。

なと見え、金春禪竹の五音次第にも、【二】のシテ下歌「花見車の八重一重」より、上歌の終「轅や北につゞくらん（觀世流現行曲と同文）を幽曲の例として擧げてある。異本紀河原勸進猿樂記に寛正五年四月七日勸進能二日目の番組に出てゐる。

【梗概】龍島の神職が都に上つて、右近の馬場の花見に行き、同じく花見に來た貴女が車を木蔭に立てとせたのを見て、昔在原業平がこの所で女車を見て歌を詠んだ故事を思ひ出し、ふとその古歌を口ずさんだところから、この貴女と語り合ふこととなる。やがて貴女は北野の縁起を語り、自分は北野の末社櫻葉の神であると告げて、花の蔭に隱れ失せた。そして暫くすると、櫻葉の神は眞の姿を現して影向し、御代をたゝへて歌舞を奏する。

【出典】伊勢物語九十九段に、

昔、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顏の下簾よりほのかに見えければ、中將なりける男の詠みてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめくらさむ

返し

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

後は誰と知りにけり。

とあるのを主材にし、この後ジテとして、場所季節の關係から櫻葉明神を思ひつき、一曲に脚色したものである。

【概評】本曲は脚色の形式に於ては普通の脇能物と別段變つた所もないが、その後ジテが女體であることは、脇能物として類例の少いことで、脇能にも「佐保山」のやうに後ジテの女體である場合も全くないではないが、大抵は男體で、女體はツレとして登場することとなつてゐるのである。從つて脇能後ジテの舞は多くは神舞又は序舞であるのに（「佐保山」も序舞である）、これは序舞と中舞とで、三番目物又は四番目物の觀がある。たゞに後段ばかりではない、前段【三】のワキ、シテの掛合も、伊勢物語を材料とした戀物語に近いもので、全體を通じて憂物らしい色彩が強い。さはいへ、優美な神事物として、又は氣品の高い憂物として、異色のある佳作たることを失はないのである。

【二】

○四方の山風のどかなる―王充の論衡に「太平之世……風不鳴條」とあるにより、帝都の太平を祝ふ意に用ゐた。新千載集金光院入道の歌に「梅が枝の花は久しき匂ひにて雲居の春ぞ風のどけき」

○鹿島―常陸國鹿島の鹿島神社。武甕槌命を祀る。

○洛陽―京都。

○北野―京都の西北隅、北野神社のある地。

○右近の馬場―北野神社の東南に當り、昔右近衛府に屬し、毎年五月競馬の行事のあつた馬場。

○雲の行くそなたや―櫻が咲き亂れて雲のやうに見える、從つて雲を目あてにして行けば、櫻の傍へ行けるとの意。新千載集津守國助の歌に「まがふとはかつ知りながら山櫻雲を尋ねて行かぬ日ぞなき」

○櫻狩雨は降りきぬ同じくは―拾遺集讀人知らずの歌を引いた。下句「濡るとも花の蔭に隱れむ」

○北野の森―千本松原の邊より西、紙屋川まで、北野神社の附近をいふ。

【一】

後見櫻の作物を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ鹿島神職、大臣烏帽子・赤上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束にて、同樣の裝束、上頭掛は崩黄、狩衣は赤地）のワキヅレ從者二人を隨へて舞臺に入り、向合ひて、

次第「四方の山風のどかなる。四方の山風のどかなる雲居の春ぞ久しき

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは鹿島の神職何某とはわが事なり。われこの度都に上り。洛陽の名花殘りなく一見仕りて候。又北野右近の馬場の花。今を盛りなる由承り候間。今日は右近の馬場の花を眺めばやと存じ候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ「道行」雲の行く。そなたやしるべ櫻狩。そなたやしるべ櫻狩。雨は降りきぬ同じくは。濡るとも花の蔭ならばいざや宿らん松蔭の。行方も見ゆる梢より。北野の森も近づくや。右近の馬

【一】

前段

囃子は京流。ノ上鹿島神社の神職、ワキヅレの從者を從へて登場。

神職「天下泰平で、吹く風ものどかな都の春景色は幾久しくおめでたいことだ

ミ次第に、君が代をたゝへ、

神職「私は鹿島神社の神職と何某といふ者です。今度都に上つて、都の花の名所を殘らず見て歩きましたが、今又北野の右近の馬場の櫻が丁度花盛りだと聞きましたので、今日は右近の馬場の花を眺めようと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

神職「櫻の花盛りは雲のやうに見えるのだから、雲を目あてにして行けば、丁度花盛りの所へ行けるだらう。誠に花の盛りは何よりも面白いもので、歌人が『櫻狩雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の蔭に隱れん』といつた通り、雨が降つても花の木蔭に宿るのは面白いことであらう。

場に着きにけり右近の馬場に着きにけり

ワキ「行方も見ゆる梢より」と正面に向き二三足出で、またもとへ戻り、ワキツレと向合ひて、右近の馬場に着きたる態。道行濟みてワキ正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや右近の馬場に着きて候。あれを見れば花見の人々と見えて。車を竝べ輿を續け。誠に面白う候。暫く休らひ花を眺めばやと存じ候

ワキツレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

後見、車の作物を仕手柱先に出す。

一畳の囃子にて、シテ貴女、面增・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、ツレ侍女二人又は四人、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて出で、シテは車の中に入り、ツレは車の左右に立ちて、

シテサシ「春風桃李花の開くる時。人の心も花やかに。あくがれ出づる都の空。げにのどかなる時とかや

○春風桃李花の開くる時　白樂天「長恨歌」に「春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時」とあるを借りた。
○あくがれ出づる―浮かれ出る。

おや、向ふの方に松の梢が見えて北野の森へ近づいて來た。……といつてゐるうちに、はや右近の馬場へ着いた

と道々花を賞美してゐるうちに右近馬場に着いた心で、暫くは右近馬場となる。

神職「道を急いだので、思ひの外早く右近の馬場に着いた。おゝ向ふを見ると、花見の人達と見えて、車や輿が立ち竝び、ほんとに面白いことだ。暫くこゝに休んで花を眺めませう」

といつて、花を眺める態。

【二】

シテ櫻葉神、貴婦人の姿でツレの侍女を伴ひ、花見車に乘つて登場。

貴女「春の風がそよ〳〵と吹いて、桃や李の花の開く頃になると、人の心も自然花やかになつて、誰も彼も浮かれ出る都の樣は、ほんとにのどやかなことです。

シテ一聲『見渡せば。柳櫻をこきまぜて。錦を飾る。

花車

シテ二句『來る春毎に誘はるる。シテ心も永き。景色かな。

シテ下歌『花見車の八重一重見えて櫻の色々に。上歌

『ひをりせし。右近の馬場の木の間より。右近の馬場の木の間より。影も匂ふや朝日寺の。春の光も天滿てる神の御幸の跡古りて。松も木高き梅が枝の。立枝も見えて紅の。初花車廻る日の。轅や北に續くらん。轅や北に續くらん

【三】 ワキ立ちて、

ワキ『のどかなる頃は彌生の花見とて。右近の馬場の並木の櫻の。蔭踏む道に休らへば

シテ『げにや遙かに人家を見て。花あれば則ち入るなれば。木蔭に車を立て寄せけり

○見渡せば柳櫻をこきまぜて―下句「都ぞ春の錦なりける」古今集素性法師の歌を引いた。

○花車―花やかな車といふを花見車にいひかけ、車の音を重ねて來る春と續けた

○八重一重見えて―八重・一重・三重と數を重ねた。

○ひをりせし―「ひをり」の語義は諸説あつて明らかでないが、五月五日左近衛舍人同六日右近衛舍人が、大内の馬場で競馬騎射すること。こゝには右近の馬場の枕詞の如くに用ゐた。

○朝日寺―北野天神の未だ鎭座せられない前にあつた寺。山州名跡志に「天神宮此所初朝日寺地也」とある。日の緣で「影も匂ふや」を承け、次句を出す料とした。

○天滿てる神の御幸―「天滿てる」は天滿天神を和らげた語。天神が筑紫の安樂寺から北野へ渡御せられて以來長い年月を經たとの意

○松も木高き―新千載集慈濟法親王の歌「跡垂れし神の御幸の古を思へば遠き幸崎の松」を借り、天神の本社老松社と紅梅殿とに通はせて松と梅を出した。

○梅が枝の立枝も見えて―拾遺集平兼盛の歌「わが宿あたりを見渡すと、綠の柳と花の櫻とが人交つて、錦を飾つたやうで、そこへまた奇麗に飾り立てた花見車の來る美しさ。春になると、いつもかういふ景色に慰められて、氣ものんびりすることです。まあ、花見車が七重八重に寄り集つてゐること。それを、この一重や八重と色々の櫻花の咲き亂れた右近の馬場の木の間から眺めてゐると、あたり一面匂ひ滿ちてゐるやうで、殊にこの朝日寺の地へ、天神樣が御鎭座遊ばして以來既に永い年月を經たこととて、松の木や紅梅の枝までいかにも神々しい感がします。おゝ、花見車がまた／＼澤山こちらへ續いてくること。皆この初花を見ようと思つて、北野を指して來るのであらう」

と、あたりの景色を眺めながら、馬場の中へ入つて來る態。

【三】 ワキ立ちて、

神曆「三月の花見時のこととて、いかにものどかなことだ」

と鹿島神職が右近の馬場の並木櫻の木蔭道に休むと、

貴女「花見には見知らぬ人家へでも入つて眺めるものだといふほどですから、さあ遠慮せずに、この花の木蔭に休みませう」

と、貴女も亦木蔭に車を立て寄せた。

の梅の立枝が見えつらん思ひの外に君の來ませる―を借り、來(く)―より紅といひ、初花より花車と續け、車の縁でめぐる日といひ、日の長きを轅にいひかけた。轅は牛車に牛をつける爲の長い柄。北は北野をさす。

【三】

○蔭踏む道に休らへば―新古今集藤原高遠の歌―うちなびき春は來にけり青柳の蔭ふむ道に人ぞ休らふ」の青柳を櫻にかへて引いた。

○遙かに人家を見て―和漢朗詠集白樂天の詩句「遙見二人家一花便入、不レ論二貴賤與一親疎一」を引いた。

○所からなる昔語―解説に集げた伊勢物語の故事。

○見ずもあらず―伊勢物語の歌、解説に掲ぐ。「あやなく」はわけもなしにとの意。

○業平―姓は在原。平城天皇の御子阿保親王第五子。左近衛中將に任ぜられたので、在五中將といふ。元慶四年五十六歳で薨ず。和歌の名人。「杜若」參照。

○口ずさみ―誰に語るともなく言ふこと。

○わが身の上に業平の―わが身の上になりたりといふを業平にいかけた。

○何かあやなくわきていはん

ワキ「向ひを見れば女車の。所からなる昔語。思ひぞ出づる右近の馬場の。ひをりの日にはあらねども。『見ずもあらず。見もせぬ人の戀しくは。「あやなく今日やながめ暮らさん。これ業平のこの所にて。女車を詠みし歌。今更思ひ出でられたり

シテ『あら面白の口ずさみや。右近の馬場のひをりの日。「向ひに立てる女車の。所からなる昔語。恥かしながら今は又。わが身の上に業平の。何かあやなくわきていはん。『思ひのみこそしるべなりしを

ワキ『さやうに詠めし言の葉の。その舊跡もここなれば。今又かやうに言問ふ人も。いつ馴れもせぬ人なれども

シテ『唯花ゆゑに北野の森にて

神職これを見て、

神職「向ふの女の花見車を見ると、この所にふさはしい昔話が思ひ出される事だ。尤もそれは右近の馬場の競馬の日のことで、今日はその日ではないけれど、――『見ずもあらず見もせぬ人の戀しくは、あやなく今日やながめ暮らさん』

（全く見たことのない人でもなし、といって、よく知つてゐる人でもないのに、あの人を見ると、どうしてこんなに戀しいのだらう。その爲に今日一日ぼんやりと過してしまふことだらう）

と業平がこの所で女車を見て詠んだ歌のことが、今更のやうに思ひ出される」

貴女はこの歌を耳に聞き入れて、

貴女「あゝ面白い歌をお吟じになりますこと。あの右近の馬場の競馬の日に、向ふに立つてゐる女車を見て、業平が歌を詠んだ、この場所にふさはしい昔話を伺ひますと、お恥かしながら私の現在もそのやうな感じがしまして、あの返歌の――『知る知らぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ』

（これまでにお知合であるかどうかは、夫々の問題ではありません。何よりも恩召の深さが第一でございます）

と私も申したい氣持がします」

神職「さういふ歌を詠んだ昔話の跡もこの

ん―「見ずもあらず」の歌に對する女の返歌。
○言問ふ―ものをいふ。

○相宿り―同宿。こゝでは同じ花の木蔭に居てとの意
○榻―車より牛をとり放つた時轅を支へて置く几。

○花の下に歸らん事を忘るる―和漢朗詠集白樂天の詩句「花下忘レ歸因美景、檐前勸レ醉是春風」を引いた。
○花心―花に興ずる心。
○百千鳥花に馴れ行くあだし身は―下句「はかなき程に羨まれぬる」で、古今六帖の歌。
○上の空の心―うきうきして落着きのない心。

【四】

○櫻葉の宮―時を得て花咲くを櫻葉にいひかけた。櫻葉の宮は山州名跡志に「櫻葉宮、出水道千本東南方にあり。……祭る所天照大神、此宮初右近馬場の邊にあり」

ワキ『言葉をかはせば

シテ『見ずもあらず

地上歌。見もせぬ人や花の友。見もせぬ人や花の友。知るも知らぬも花の蔭に。相宿りして諸人の。いつしか馴れて花車の。榻立てて木の下に。下り居ていざや眺めん（シテ車より出で眞中に行き、ツレ地の前へ行き座につく、ワキ下に居る）。げにや花の下に。歸らん事を忘るるは。美景によりて花心。馴れ馴れそめて眺めんいざいざ馴れて眺めん。百千鳥。花に馴れ行くあだし身は。はかなき程に羨まれて上の空の心なれや上の空の心なれ

【四】

地ロンギ『げに名にし負ふ神垣や。北野の春も時めける。神の名所數々に

シテ『眺むれば。都の空の遙々と。霞み渡るや北の宮居。御覽ぜよ時を得て（と正面を示し）。花櫻葉の宮

所てすから、今お話するあなたも、これまでお目にかゝつたことのない方ですけれども……―

貴女『たゞ花に誘はれてこの森へ參りましたのが御緣で……』

神職『かうしてお話をし合ふのですから」

貴女『これこそあの歌の『見すもあらず見もせぬ人』と申すのでございませうか。……さあどなたも御一所に、この花の木蔭に寄り合ひまして、私もお馴染になつて、こゝで車を下りて、御一所に花を眺めませう（といつて車より下り）

貴女『花の下に居ると、面白さに歸るのを忘れると申しますが、ほんとにその通り美しい眺めでございます。さあ御一所に花を眺めませう。あの色々の鳥が花に馴れ戲れるのは、ほんの暫くの間で、やがて落花の憂き目を見る果敢ないものだといはれて居りますが、やはり花の頃は鳥が羨ましくなつて、人の心もうきうきするものでございます』

【四】

神職『北野のお社は誠に有名なところで、名所も多いことゝせう

貴女『見渡す限り、都の空が一面に霞んで

○花の濃染―濃染は濃く染めた色で紅梅をいふ。
○色わけて―他所よりは特に色が紅であるとの意。
○紅梅殿―山州名跡志に「紅梅社、在二天王寺前西向一、所レ祭菅神所レ愛の一夜飛梅の靈神也」〔老松〕参照。
○老松―同書に「老松社、在二右社(天神)西一、所レ祭菅神御愛松之靈也」〔老松〕参照。
○一夜松―同書大神宮の條に、「菅神託宣云、吾棲所於二一夜一可レ生二千松一矣、將軍、其地今此所也、故稱云二一夜松一也」
○茜さす紫野行き標野行き―野守は見ずや君が袖ふる―萬葉集額田女王の歌。雲もあかきといひかけてこの歌を引き、袖ふるを古きにいひかけた。こゝには唐歌の意を離れて、彼方此方に見物人の集まる樣をいつたのである。
○古き御幸の物見―筑紫から北野へ天神の神靈の渡御あつた昔に擬へて、神輿の渡御のあるのを見物する意
○御輿岡―宗祇名所集に「御輿岡と申すは北野鳥居の外なり、經堂の北なり、岡とは名のみなり、唯平地なり」と。後撰集枇杷左大臣

所

地『花の濃染の色わけて、紅梅殿や老松の

シテ『緣より明けそめて一夜松も見えたり(と脇正面の方を示し)

地『日影の空も茜さす(角へ行き)

シテ『紫野行き。標野行き(左へ廻り)

地『野守は。見ずや君が袖。古き御幸の物見とて。車も立つや御輿岡これぞこの神の御旅居の(大小前へ行き)。右近の馬場わたり神幸ぞたつとかりける(と下に居て合掌す)

【五】

ワキ「あらありがたの御事や。かくしも委しく語り給ふ。社々の御本地を。猶々敎へおはしませ

シテ「眞はわれはこの神の。末社と現れ君が代を。守りの神と思ふべし

ワキ「よくよく聞けばありがたや。守りの神とは

北野神社はほんとに結構なお宮でございます。御覽なさいませ、あれが櫻葉の宮でございます」

神職「花の色も殊に濃く咲くといふ紅梅殿や老松の社もございますな」

貴女「向ふに緣の色も濃い一夜松が見えます。おゝこの夕暮に美しい花見の人があちらこちらに動いてゐるさまは『茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る』といふ歌のやうでございます。……あそこに見えるのが、御輿岡で、この神樣の御旅所で、その御渡御はほんとに尊いことでございます」

【五】

神職「よく委しくお話し下さつて、ありがたうございます。なほこれらの御社の緣起をとうかお敎へ下さい」

貴女「自分はほんとはこの北野の末社で、君が御代を守る神ですぞ」

神職「かやうな事をお伺ひして、誠にありがたい事に存じます。して、守りの神と

の歌に「北野の御幸に御輿岡にて」と詞書して「みこし岡いくその世々の年を經て今日の御幸を待ちてたつらん」

○御旅居―御旅所。神輿の暫く止まる所。

【五】

○御本地―垂跡の本體。ここでは神々の由來緣起といふ意。

○末社―本社に附屬した社

○靈神―靈驗の高い神。

○あさまには―あらはには

○岩代の―何といはんを岩代といひかけ、岩代は紀伊國の松の名所であるから、松を出して、待つにいひかけた。

○天照る神―天照大御神。こゝでは伊勢大神宮の意。

○櫻の宮―匠村集に「櫻の宮とは伊勢内宮の御ことなり」とあり、勢陽雜記には祭神木華開耶姫といふ。續古今集西行法師が伊勢で詠んだ歌に「神風や心やすくぞまかせつる櫻の宮の花の盛りを」

○ここに北野―こゝに來るを北野といひかけた。

○神と夕の―神といふを夕にいひかけた。

【間】

○まれ人―客人。ワキの神

さてさていづれの靈神にて。かやうに現れ給ふらん

シテ「あら恥かしや神ぞとは。あさまには何と岩代の

地上歌『待つことありや有明の。待つことありや有明の。月も曇らぬ久方の。天照る神にては。櫻の宮と現れ(と立上り)。ここに北野の櫻葉の。神と夕の空晴れて月の夜神樂を待ち給へ と花に隱れ、失せにけりや花に隱れ失せにけり

と仕手柱際にて少し腰をかゞめて花に隱るゝ心を示し、靜かに中入。

【間】 狂言所の者、着附縞袷斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて仕手柱際に出で、

狂言「かやうに候者は。都北野のあたりに住居仕る者にて候 さる程にこの所に右近の馬場と申して御座候が。毎年春にもなり申し候へば。いつれも櫻を御賞翫なされ。貴賤群集をなし申し候 又唯今承り候へば。鹿島の神職何某殿。花を御覽あらせらるべく御出でありたる由承り候 (ワキを見て) いや是に御座候

眞中へ出で下に居て、

狂言「唯今の御參詣近頃めでたく候。まれ人の御參詣の由承り候間。これまで御見舞申して候はどういふ神樣なれば、このやうに御出現遊ばしたのでございます」

貴女「いやお恥かしい。どうして神などと、あらはにいへよう。しかし、この月夜を待つてお出でなさい。自分は伊勢大神宮では櫻の宮として現れ、この北野神社にては櫻葉神と現れたものです。この月の夜に神樂を奏しよう程に、それをお待ちなさい」

といつて、花に隱れて見えなくなつてしまつた。

職をさす。

）參り下向―東西諸方から參詣する者。

（方々―あなた。

ワキ「御見舞ありがたう候。所の人にて候はゞ當社の御謂れ語つて聞かされ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等この邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候が。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「まづこの所を都右近の馬場と申し候。扨又櫻葉の明神は。一段あでたい御神にて候。この御神を伊勢太神宮にては櫻の明神と申す。筑紫の日向の國にては櫻木の明神と號す。この所にては櫻葉の明神と祝ひ奉り候。いづれも同じ御事ながら。櫻葉の葉の一宇にて天下を守り。土城の靈守として靈驗あらたに御座候により。參り下向は夥しき事にて候。當社に於てひをりの日と申す事の候。これは五月三日より四日五日六日まで。右左を爭ふことにて候。その出で立ちは。まづ隨身の如くにて。衣裳につけるものは作り花を致し馬に乘り。そのつけ物を取らう取られまいとする事にて候。その折節は袖か連ね鞭をついで。我も〳〵と見物仕り候。されば在原の業平も。御出であり十女車の立ちたるを御覽じて。御歌を詠ませられたると申す。その歌は。見すもあらず見もせぬ人の戀しくは。あやなく今日やながめ暮らさんと詠ませられたると申し候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候で。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に女性あまた花見車を立て來られ候程に。卽ち言葉をかはして候へば。色々戯れを申され。櫻葉の神といひもあへず。花の蔭にて姿を見失うて候と

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては遠國より御參詣の御事なれば。この所の子細を申す者もあるまじいと思しめされ。當社明神假に現わ給ひ。御詞をかはし給ふと存じ候間。暫く御逗留ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「慇懃信心を致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御返留にて候はゞ重ねて御用仰せ候へ
ワキ「頼み候べし
狂言「心得申して候
といひて狂言は引く。

【六】

ワキ上歌（待謡）げに今とても神の代の。げに今とても神の代の。誓ひは盡きぬ驗とて。神と君との御恵み。眞なりけり、ありがたや眞なりけりありがたや

【七】

出端の囃子にて、後ジテ櫻葉明神、面増・黒垂・天冠・襟白赤・着附摺箔・長絹・緋大口・腰帯・扇の装束にて橋懸一の松に出で、

後ジテ『天皇の畏き御代を守るなる。右近の馬場の春を得て。花上苑に明らかにして。輕軒九陌の塵に交はる神心。和光の影も曇りなき。君の威光も影高く。花も搖がず治まる風も。のどかなる代の。めでたさよ

地『曇りなき。天照る神の恵みを受けては。櫻の宮居と現れ給ひ

○花上苑に明らかにして―和漢朗詠集張讀の句に「花明二上苑一、輕軒馳二九陌之塵一」とあるを引いた。上苑は上林苑で漢武帝の苑。輕軒は輕い車。九陌は九重の街。

○和光―神佛が德光を和らげて世塵に交はり衆生を利益し給ふこと。

【六】

後段

神驗 神代に、天照大神の下し給うた天壤無窮の御神勅は、今に至るまで變ることがなく、皇統連綿として續かせ給ひ、神と大君との御恵みにより、國家安穩なのは、誠にありがたいことです」

ミ神を禮拜する。

【七】

後ジテ櫻葉明神、影向の心で登場。

神「自分は、わが大君の御代を守る神で、右近馬場の花盛りに、人が車を引き寄せ多勢集まるにつけて、神の自分も德光を和らげて俗塵に交はるのである。これといふのも、大君の御威光の尊い事を示すもので、天下泰穩、吹く風の花をも搖がさない、のどやかな御代は、誠にめでたいことである」

神驗 あゝこの神こそ、御代を曇りなく照らし給ふ伊勢大神宮の末社としては、櫻の宮として現れ給うた御神で……」

シテ『ここに北野の。神の宮居に
地『花櫻葉の神と現れ（と舞臺に入り）。曇らぬ威光を顯し衣の。袖もかざしの。花盛り

〔中舞〕

を舞ひ、

地『月も照り添ふ花の袖。月も照り添ふ花の袖。雪を廻らす神かぐらの。手の舞足踏拍子を揃へ。聲澄み渡る。雲の棧。花に戯れ。枝に結ぼほれかざしも花の。絲櫻

〔破舞〕

引續き次の謠に合はせて舞ふ。

【八】

シテ『治まる都の花盛り
地『治まる都の花盛り。東南西北も音せぬ波の。花も色添ふ北野の春の。御池の水に。御影を映し。映しうつろふ。櫻衣の裏ふき返す梢にあがり。枝に木傳ふ花鳥の。とぶさに翔り。雲に傳ひ。

○顯し衣―衣裝によつてその人柄の外に現れること。威光を顯しといひかけ、衣の袖とつゞけた。
袖もかざしの―舞ふ時に袖を頭に戴くをいひ、又花を頭に挿すことを「かざし」といふ。こゝには二意を兼ね、かざしの袖も花も美しい盛りであるといつた。
○雪を廻らす―舞容の美しいことをいふ。張衡の觀舞賦に「袖如レ回レ雪」
○雲の棧―聲澄み渡るの渡るを承けて棧を出し、身輕く立ち舞ふ樣をいつた。

【八】

○うつろふ―移るの延語。
○櫻衣―表白裏紫の襲をいふ。うらの序としたのである。
○とぶさ―梢。

舞「この北野の宮に於ては櫻葉神として現れたもので、曇りなき大君の御威光を顯す爲に、頭飾にも季節の花櫻を挿して、ここに影向したのである」
といつて、

〔中舞〕

を舞ひになる。

この神の美しい御衣裝には、折柄月の光も照り映えて、美しい神樂の舞をお舞ひになる。その舞の手、足拍子はよく調子がそろつて、歌聲は空に澄み渡り、身も輕々と、花に戯れ枝によりかかり、頭飾の花に色美しい櫻の花をさして、面白くお舞ひになるのである。

〔破舞〕

神はまた前よりも更に打寛いでお舞ひになる。

【八】

のどかな都の春の花盛り、いづこも平和な安穩な中にも、殊に秀れて美しいこの北野で、櫻葉神は御池の水に御影を映し、または梢に上つたり枝を傳つたり、鳥のやうに木の間を翔け回つてお舞ひになり、やがて雲に傳ひ羽風に吹かれて、遥か天上にお上りになつた。

○雲の羽風―雲の端、羽風といひ續けた。

遙かに上るや雲の羽風遙かに上るや雲の羽風に。神は上らせ給ひけり

櫻集神上天せられた體で退場。

仕手柱際にて留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（觀寶）

殆ど異同がない。

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「抑もこれは……神職（光統波の）何某……今を（光ナシ）盛りなる……ワキ「急ぎ候程に……（光又）あれを見れば……暫く（光此所に）休らひ……【二】シテサシ「春風……あくがれ（光さそはれ）出づる……【三】ワキ「さやうに詠めし……言問ふ人も（光の）……地上雲見もせぬ……上の空の心なれ（光哉）【八】地「治まる……梢にあがり（光のぼり）

右

近

歌占（うらうた）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四・五番目　一段劇能

【人物】 子方　幸菊丸、ツレ　里人、シテ　度會何某

【所】 加賀國　立山の麓

【時】 四月

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に、曲舞の序にもむ所あり。……「劍樹共にけすとかや石割地獄の」といふ所をば、きつとひきく成りて、小あしにひらく所也。さやうにせめてはのべ〳〵、「火燥あなうらを燒く」など云ふ所にては、はや手もつき、いかんともせられぬ所にては、後など、へりもなく踏んでしさり、きり〳〵とまはりなどして「うへては鐵丸をのみ」など云ふ所を待ちうけて、扇を左へ取りて、うつ開きて、おしまはりなどする……と、本曲のクセについて說き、その後にも「或時は焦熱大焦熱の焰に咽び、或時は」の句を引いてゐるのを見れば、世阿彌當時に存してゐたことは疑ひない。金春禪竹の五音三曲集にも、蘭曲第一、拉ゝ鬼體曲味の

例として、本曲の【二】のシテサシ「それ歌は天地開けし」から、上歌の終り「伊勢や日向の事も問ひ給へ」を擧げてゐる。

【梗概】加賀國立山の麓の里人が、近頃この地へ來た男神子の歌占がよく當るといふ事を聞いて、親に別れた小兒を連れて、見て貰ひに行く。神子はまづ里人の父の病氣について判斷をし、次にその小兒の歌占を見て、そなたの尋ねる父には既に逢つてゐる筈だがと、不思議に思ひ、その子の素性を聞くと、伊勢國二見の神職度會何某の子幸菊丸で、卽ち自分がその父であつたのである。里人は親子の再會を祝し、神子に地獄の曲舞を謠へと所望する。これは度會何某が神にお暇を申さないで廻國した神罰により、一度地獄に墮ちた、その時の樣を作つたもので、これを謠ふと今も神氣がつくのであるが、所望せられるまゝ、名殘りの一曲を奏すると、果して正氣もなくなつたが、やがて狂亂からさめて、親子うち連れて歸國した。

【出典】父子再會の世話物で、出典といふべきほどのものはないが、本曲の興味の中心をなしてゐる「地獄の曲舞」は、太平記卷二十「結城入道墮二地獄一事」から出たもので、本曲のシテを伊勢の神官としたのも、太平記に結城入道が伊勢國で死んで阿鼻地獄に墮ちたとあるのに暗示せられたのでなからうかと思ふ。

【概評】行き別れた父子の再會を主題としたものには、本曲の外に、〔木賊〕〔雲雀山〕〔弱法師〕〔花月〕などがあるが、その別離の悲哀は〔櫻川〕〔隅田川〕〔三井寺〕などの母子關係に比べて、甚だ冷淡である。父子關係の曲でも、〔木賊〕などはその悲しみが可なり強く出てゐるが、本曲の如きは、子方の方は父を尋ねて歌占を引いてゐるが、シテ父の方は諸國を廻つてゐるのも、わが子を尋ねる爲ではなく「一見の爲」に過ぎない。主題についての描寫がこのやうに稀薄である上に、舞臺上の興味は歌占と地獄の曲舞とに分れて、從つて一曲の中心的興味を失つてゐる。恐らく前項に擧げたやうな地獄の曲舞に創作の興味を感じて、これを主材として、親子の再會を主題とした世話物の一曲を脚色しようとした爲に、創作の氣分が不純となり、遂に失敗に終つたものと思はれる。

【一】

次第の囃子にて、子方幸菊丸、着附縫箔・兒袴・扇の裝束、ツレ里人、着附段織斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ツ：次第「雪三越路の白山は。雪三越路の白山は夏

○雪三越路―夏でも雪を見るといふのを三越路にいひかけた。三は接頭語、越路は北陸道の古名。

【二】

舞臺は加賀國白山の麓。
ツレ里人、子方幸菊丸を連れて登場。

里人「この北陸第一の高山白山には、いつも雪が眞白にかゝつてゐて、夏らしい趣

○白山—加賀飛彈越前の三國に跨る北陸第一の高山。白に雪の白い意を含ませた。○夏陰いづくなるらん—年中雪が積つて、夏らしい樣子は少しもないとの意。○男神子—神子は神慮を伺つて占ひなどする者。普通は女であるから、特に男神子といつた。○歌占—多くの歌の中からその一を引かせて、その歌意によつて吉凶を判斷する占法。○けしからず正しき—不思議によく當る。

【二】

○神心種とこそなれ—古今集序に「やまと歌は人の心を種として」とあるのを、歌占は神慮を伺ふのであるから、神心といひかへたのである。○引くも—占を引くと弓を引くと、兩方に兼ねて用ゐた。○白木の手束弓—木地のままで塗つてない、握り頃の大きくない弓。これに占ひの歌を結びつけたのである。○それ歌は天地開けし始めより—以下和歌の德を述べたもので、古今集序の「この歌天地の開けはじまりける時よりいでにけり」を引いたのである。

陰いづくなるらん

地取に二人とも正面に向き、

ツレ「かやうに候者は。加賀の國白山の麓に住居する者にて候。さてもこの程いづくの者とも知らぬ男神子の來り候が。小弓に短册をつけ歌占を引き候が。けしからず正しき由を申し候程に。今日罷り出で占を引かばやと存じ候

子方に向ひ、

ツレ「いかに渡り候か。歌占の御所望にて候はば御供申さうずるにて候。まづかう御座候へ

といひて、子方は脇座、ツレはその次に坐す。

【三】

一聲の囃子にて、シテ度會何某、面邯鄲・白垂・翁烏帽子・襟淺黄・着附厚板・縷狩衣・色大口・腰帶・扇の裝束にて、短册をつけたる小弓を持ちて出で、橋懸一の松に立ち、

シテ一聲『神心。種とこそなれ歌占の。引くも白木の。手束弓

シテサシ『それ歌は天地開けし始めより。陰陽の二はどこにも見えない」

ミ次第に附近の景趣を述べ、

里人「こゝへ出ました私は、加賀國白山の麓に住んでゐる者です。さてこの頃何處の者だか分らないが、一人の男神子がこの地にやつて來て、小弓に短册をつけ、歌占の占ひ判斷をしてゐますが、不思議によく當るといふことなので、今日はそこへ行つて占ひをやつて見ようと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、幸菊丸に、

里人「幸菊丸殿、歌占を引いて見たいといふお望みならば、お供をしませう」

ミ二人うち連れて、男神子の居る所へ行く態で、脇座に着く。

【二】

シテ度會何某、歌占の小弓を持つて登場。

度會「この歌占は神慮を伺つて判斷するのだから、これを引けば、弓を引くやうによく當るのだ。

一體、和歌といふものは、天地開闢の始めから、かの伊弉諾伊弉册の夫婦神樣が

○陰陽の二神—伊弉諾尊と伊弉册尊。
○天の巷に行合の—諸册二神が天の御柱を廻つて、女神「あなにやしえをとこを」男神「あなにやしえをとめを」と仰せになつて、夫婦の道をお始めになつたと、古事記・日本書紀に記して居り、このお詞を古來和歌の始としてゐるので、まづこゝに擧げたのである。
○小夜の手枕—男女の共に寢ること。
○世を學び國を治めて—その神代を學んで、今も和歌の德を以て國を治めるとの意。
○妙文—ありがたい文。和歌を指す。
○神風や—伊勢の枕詞。
○伊勢の濱荻名をかへて—蒐玖波集の連歌に「草の名も所によりて變りけり、難波の蘆は伊勢の濱荻」とあり、また嘉應二年十月九日住吉社歌合、藤原俊成の跋に「この神風伊勢島には濱荻と名づくれど、難波わたりにはあしとのみいひ、吾妻の方にはよしといふなるが如くに」とあり、同じ草を濱荻とも「あし」とも「よし」ともいふ。
○難波の事も—伊勢の神子

神天の巷に行合の。小夜の手枕結び定めし。世を學び國を治めて。今も道ある妙文たり

シテ下歌「占問はせ給へや歌占問はせ給へや。上歌

『神風や。伊勢の濱荻名をかへて。伊勢の濱荻名をかへて。よしといふもあしといふも。同じ草なりと聞くものを。所は伊勢の神子なりと難波の事も問ひ給へ、人心。引けば引かるる梓弓。伊勢や日向の事も、問ひ給へ日向の事も問ひ給へ

「人心」と謠ひながら舞臺に入り常座に立つ。ツレ立ちて、

【三】

ツレ「いかに申すべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

ツレ「さて御身はいづくの人にて渡り候ぞ。見申せば若き人にて候が。何とて白髮とはなり給ひて候ぞ

シテ「げにげに普く人の御不審にて候。これは伊

天上でお出會ひになり、歌を詠んで夫婦の契りをお結びになつた時から始まるもので、それよりこの方、この神代の風を學んで、代々和歌の德を以て國をお治めになり、それで今日も御政道が正しいのであつて、和歌は誠にありがたいものなのだ。

さあ、皆樣占ひをお尋ねなさい。この結構な歌占をお引きなさい。あの伊勢國の濱荻を、他の國では名前をかへて、「よし」とか「あし」とかいつて、名はちがつても草は同じ草だといふことだが、私もそれと同じで、國は伊勢でも、神子には變りがなく、難波の事でも何でも分るのだ。さあお尋ねなさい。人の心がこの歌占を引けば、すぐ分るのだ。伊勢の事であらうと、日向の事であらうと、どんな事でもお尋ねなさい」

【三】

里人は神子の傍へ行つて、

里人「もうし、お伺ひしたいのですが」

度會「何の御用です」

里人「一體あなたはどちらの方なのです。お見受けすれば、若い方ですが、どうしてそのやうに白髮におなりになつたのです」

度會「お尋ね御尤も。どなたも不思議に思

勢の國二見の浦の神職なるが。われ一見の爲に國々を廻る。ある時俄かに頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。これも神の御咎めと存じ候程に。當年中に歸國すべきとおこたりを申して候

ツレ「さてはその謂れにて候な。さらば歌占を引き申し候べし

シテ「易き間の事。一番に手に當りたる短册の歌を遊ばされ候へ。考へて參らせ候べし

ツレ「承り候

シテ大小前に行き、床几にかゝり、弓を兩手にて持つ。ツレ、シテの前に出で、短册を手に持ち、

ツレ「教へに任せ短册をとりあげ見れば。何々北は黄に。南は青く東白。西くれなゐの蘇命路の山。かやうに見えて候

と短册を下し、少し下りて坐す。

であるが難波人の事も分るといひかけ、難波を「何は」に轉じて、いかなる事でもといふ意に用ゐた。

○梓弓—巫女が口寄せに用ゐる。〔葵上〕參照。

○伊勢や日向の事—種々雜多の事といふ諺。天孫降臨の時の、天鈿女命と猿田彦命との問答から起つた諺であるといふ。

【三】

○二見の浦—伊勢國度會郡にある。

○一見の爲—諸國一見の爲

○神の御咎め—下懸の諺に神に御暇をも申さないで諸國を廻つた神罰であるといふ。〔考異〕參照。

○おこたり—怠慢を謝すること。

○遊ばされ候へ—お讀みなさい。

○北は黄に南は青く東白西くれなゐの蘇命路の山—紫式部の歌と傳へられてゐるが家集には見當らない。蘇命路の山は須彌山 Sumeru に充てた字で、これをまた染色にいひかけたのである須彌山は世界の中央金輪の上に在り、四面各一色で、北は金、南は吠瑠璃、東は銀、西は頗胝迦寶色であるといふ。この歌は北黄南青

はれるのです。私は伊勢國二見浦の神職なのですが、見物の爲めに諸國を廻つてゐるうちに、或時俄かに頓死したのです。そして又三日目の日に生きがへりました。それからこのやうに白髪になつたのです。これも神樣のお咎めだと思ひますので、今年中に國に歸りますと申して神樣にお詫びをした事です」

里人「成程さういふわけだつたのですね。では、一つ歌占を引きませう」

度會「お易い事です。一番始めに手に當つた短册の歌をお讀み下さい。それで判斷して進せませう」

里人「承知しました」

男神子がいつたやうに、その弓につけてある短册を一つ手にとつて、

里人「いはれた通りに短册をとつて見ると何と書いてあるのだ。——

『北は黄に南は青く東白、西くれなゐの蘇命路の山』

と、かう書いてあります」

東白西紅と解釋してゐる。○所勞―病氣。○邊涯一片の風―倶舍論に世界成立の次第を說いて、「先於二最下一依二止虛空一有二風輪生一」といふ。即ち世界の最下底が風輪であるといふことから、病氣の原因を風邪と判斷したのである。○水金二輪の重結―風輪の上に水輪があり、水輪の上が凝結して金輪となる、金輪は地輪で、かくして世界が成立したといふ。倶舍論に「有情業感別風、起搏二繫此水一、上結成レ金」とある。これを風邪の次第に重くなる意に判斷したのである。○十六萬由旬―須彌山は水中に入る部分が八萬由旬、水上よりの高さが八萬由旬合せて十六萬由旬の高さであるといふ。由旬は三十里又は四十里の長さをいふと。倶舍論に「九山住二金輪上一、入レ水輩岸等、八萬踰繕那、蘇迷盧山、出レ水亦然」踰繕那は由旬と同じ意。○四洲―須彌山の四方にある洲。即ち東勝神洲、南贍部洲、西牛貨洲、北倶盧洲をいふ。○金銀碧瑠璃玻球迦寶―南揚須彌山の四方の色。玻球迦寶は頗胝迦寶の訛で紅色

シテ「須彌山を詠みたる歌にて候。これは父の事を御尋ね候な

ツレ「さん候親にて候者この程所勞仕り候間。生死の境を尋ね申し候

シテ「心得申し候。委しう判じて聞かせ申さう。それ今度の所勞を尋ぬるに。邊涯一片の風より起つて。水金二輪の重結に顯る。それ須彌は金輪より長じて。その丈十六萬由旬の勢ひ。四洲常樂の波に浮かみ。金銀碧瑠璃玻球迦寶の影。五重色空の雲に映る。されば須彌の影映るによつて。南贍部洲の草木綠なりといへり。さてこそ南は青しとはよみたれ。ここにまた父の恩の高き事。高山千丈の雲も及び難し。されば父は山。染色とは風病の身色。しかも生老病死の次第をとれば。西くれなゐと見えたるは。命期六爻の

度會　これは須彌山を詠んだ歌です。これは父御の事をお尋ねになるのですね」

里人　さうです、親がこの頃病氣をしてゐますので、助かるかどうかをお尋ねするのです。

度會　承知しました。委しく判斷してお聞かせしませう。……まづ今度の病氣の次第を見ると、須彌山の基をなす世界の初めが風輪で、從つてこの病氣の原因は風邪と判ぜられる。それから、世界は風輪からその上が水輪、水輪が凝つて金輪（地輪）となつたもので、病氣の方も次第に進んで行つたものと判ぜられる。さて須彌山はこの金輪の上に聳えてゐて、その高さが十六萬由旬といふばらしさで、その四洲には樂しみの衰へることのない波が溢へてゐて、金・銀・瑠璃・瑪瑙の色が空の雲に映つてゐる。それでこの須彌山の影が映るから、この娑婆世界の草木が綠色をしてゐるのだといふことです。そこで、『南は青し』と歌に詠まれたのです。さて又、父の恩の高い事は、高山乃至は千丈の高い所にある雲もこれには及ばないのです。それで父を山に喩へたのです

の瑪瑙。俱舎論に「妙高山王、四寶爲體、金、銀、吠瑠璃、頗胝迦寶」○五重色空—五重の虚空。○南贍部洲—須彌山四洲の一で、我等の住む世界。閻浮提ともいふ。○身色—からだの容態。○生老病死の次第—人間一生の生老病死の四相を四方に配すれば、西は日の入る方で死に相當するといふ意○命期六爻—六爻は易の數であるが、これを命期と同じく壽命の期限といふ意にとり、且六十といふ意を含ませて、人間六十の定命で死すといふ意に用ゐたのである。○滅色—死相をいふ。○難義の所勞—危篤の病氣○却來—あともどりすること。○なかなかの事—さやう。然り。○近頃—近頃にない。甚だ。○鶯のかひこの中の子規—萬葉集卷九高橋虫麻呂歌集の「鶯のかひこの中に、霍公獨り生まれて、しが父に似ては鳴かず、しが母に似ては鳴かず一云々とある長歌を短歌に改作したのである「かひこ」は卵の意。○しやが父—しが父を訛つ

滅色なれば。おうこれは既に難義の所勞なれども。ここに又染色とは。聲を借りたる色どりにて。文字には蘇命路なり。蘇る命の路と書きたれば。まことに命期の路なれども。又蘇命路に却來して。『二度ここに蘇生の壽命の。種となるべき歌占の詞。賴もしく思しめされ候へ

ツレ「あら嬉しや。さては苦しかるまじく候かシテ「なかなかの事御心安く思しめされ候へ

ツレ「近頃祝着申して候。又これなる幼き人も占の所望にて候

といひてもとの座に歸り坐す。シテ、子方に向き、

シテ「さてはおことも占の所望にて候か。以前の如く一番に手に當りたる短册の歌を御讀み候へ

子方、シテの前に出で、短册を手に取りて、

子方「鶯のかひこの中の子規。しやが父に似てし

それから、そめいろ(染色)とはこの風邪の容體を現したものだが、この重さが生老病死のいづれに當るかといふと、『西くれなる』とあるから、入日の樣を示してゐて、人間六十の定命が盡きた死の相であるから、これはもはや危篤の病氣と判ぜられるのです。ところが又、この染色とは蘇迷盧の音を借りて詞の飾りとしたもので、漢字では『蘇命路』で、蘇る命の路と書きますから、實際定命が來たのではあるが、『蘇命路』といふので、またあとへ返つて、二度生き返つて、壽がつゞく、とかういふ歌占の詞です。心丈夫にお思ひなさい」

里人「あゝ嬉しい。それでは心配はいりませぬか」

度會「さやう、御安心なさい」

里人「實にありがたいことです。それから又この少い人も占ひをしてほしいとの事ですが」

男神子、幸菊丸の方に向いて、

度會「では、そなたも占ひが御所望ですか。前の人の通りに、一番先に手に當つた短册の歌をお讀みなさい」

幸菊丸、小弓の短册を手にとりて、

幸菊——

たもので、「しが」は「それが」「おのれが」といふ意。

○鶯にあふ言葉の―鶯の字音は「あう」で「逢ふ」といふ言葉に似てゐるとの意。

○時も卯月―卯月は四月の異名で、時鳥の鳴く季節である。

○當面―まのあたり。
○黄舌―まだ音の調はない若い聲。
○鶯のこは子なりけり―今鏡讀人知らずの歌「親の親ぞ今はゆかしき時鳥はや鶯のこは子なりけり」を引いた。

やが父に似ず

といひて少し下り、シテに向ひて坐す。

シテ「これも父の事を御尋ね候な

子方「さん候父を失ひて尋ね申し候

シテ「これははや逢ひたる占にて候ものを

子方「いや逢はねばこそ尋ね申し候へ

シテ「さりとては占に僞りよもあらじ。鶯にあふ言葉の緣あり。又かひこの中の子規ともいへり。時も卯月程時も合ひに合ひたり。（右の方上を見て）や。今啼くは子規にて候か（と子方に向く）

子方「さん候子規にて候

シテ「面白し面白し。當面黄舌の囀り。鶯のこは子なりけり子なりけり（と面を伏せて考へ）。不思議や御身はいづくの人ぞ

子方「伊勢の國の者

『鶯のかひこの中の子規、しやが父に似てしやが父に似ず』――」

と歌を讀む。

度會「これも父御の事をお尋ねですね」

幸菊「はい、父が見えないので、お尋ねするのです」

度會「これはもはや父に逢つたといふ占ですがね」

幸菊「いや逢はないからこそ、お尋ねするのです」

度會「さういつても、まさか占ひに僞りはない筈だが。……鶯の字音は「あう」で「逢ふ」といふ言葉に緣があり、又『かひこの中の子規』ともあり、今の季節は四月、子規の鳴く折で、季節も皆合つてゐるのだ。（折柄時鳥の聲がする）おや、今啼いたのは子規ですか」

幸菊「さうです、子規です」

度會「これは面白い。まのあたり若々しい囀り聲がする。確に鶯の育てた子だ……けて不思議だ（と考へ）一體そなたはどこの人です」

幸菊「伊勢の國の者です」

シテ「在所は
子方「二見の浦
シテ「父の名字は
子方「二見の太夫渡會の何某
シテ「さてその父は
子方「別れて今年八箇年
シテ「さておことの幼名は
子方「幸菊丸と申すなり
シテ「こはそも神の引き合はせか。これこそ父の何某よ
子方『不思議や父にてましますかと。いはんとすれば白髪の
シテ『身は白雪の面忘れ
子方『されども見ればわが父の
シテ『子は子なりけり

度會「その在所は……」
幸菊「二見の浦です」
度會「父の名字は……」
幸菊「二見の太夫度會何某です」
度會「そしてその父は……」
幸菊「別れてから今年で八年になります」
度會「そしてそなたの幼名は……」
幸菊「幸菊丸といひます」
度會「これはまあ、神様のお引合はせであらうか。自分がお前の父の何某だよ」
幸菊「おゝ不思議なことだ。お父さまですか」
　といはうとしたが、父の白髪姿を見てためらうと、
度會「自分のこの白髪姿で、見忘れたのであらう」
幸菊「いえ、でも見れば、私のお父さまで」
度會「わしの子であつたわい。永い年月が

○子規の程經て―「ほと」の音を重ねた。

○二見のうらかた―親と子の、二人を、二見に、浦を占方にいひかけた。
○正しき親子―占の正しきをいひかけた。
○君が住む越の白山知らねども―古今集藤原兼輔の歌を引いた。下句「雪のまに跡は尋ねむ」
○古りにし人―年古くなつた人。永く別れてゐた人。雪の縁語「降り」をいひかけた。
○四鳥の別れ―親子の別れを悲しむ喩。孔子家語に「桓山之鳥生三四子焉、羽翼既成、將レ分二于四海一、其母悲鳴而送レ之」

【四】
○やがて―すぐと。

○曲舞―鎌倉室町時代俗間に行はれた一種の歌舞で、語り物めいた歌を舞ふもので、觀阿彌がこれを謠曲にとり入れたのである。

子方。子規の
地。程經て今ぞ廻り逢ふ。占も合ひたり親と子の。
二見のうらかたの。正しき親子なりけるぞ。げ
にや君が住む。越の白山知らねども。古りにし
人の行方とて。四鳥の別れ親と子に二度逢ふぞ。
不思議なる二度逢ふぞ不思議なる

「占も合ひたり」とシテ弓を落して子方を兩手に抱き、「正しき親子」と二人ともしをり、「げにや君が住む」と直す。

【四】
ツレ「かかる不思議なる事こそ候はね。さては御子息にて候か
シテ「さん候疑ひもなきわが子にて候。これも神の御引き合はせと存じ候程に。やがて伴ひ歸國せうずるにて候
ツレ「近頃めでたき御事にて候ものかな。又人の申され候は。地獄の有樣を曲舞に作りて御謠ひある由承り及びて候。とてもの事に謠うて御聞

過ぎて今出逢ふとは。占ひも合ひ、親子も二度逢ふ。占ひも確かたれば、二人も確かに親子だ。思へば、どこへ行つたやら行方も知れずに、永らく過してゐて、別離の悲しい思ひをしてゐた親子がまた出逢ふとは、實に不思議なことだ」

【四】
里人「こんな不思議なことはない。すると、これがあなたのお子さんなのですか」
度會「はい、確かに私の子です。これも神樣のお引合はせだと思ひますから、これからすぐ國へ連れて歸りませう」
里人「近頃にないめでたい事です。又人の話によれば、地獄の有樣を曲舞に作つてお謠ひになるといふ事ですが、一つこれを謠つて聞かして下さい」

○狂言す―「狂言綺語」の狂言で、藝事をするとの意。○神氣が添うて―神靈が憑き祟つて正氣を失ふ。神罰を受けるのである。○月の夕の浮雲は―世阿彌の申樂談儀に―曲舞は次第にて舞ひそめて次第にて舞ひ止むるなり―とあり、「これよりこの一節の終り「後の世の迷ひなるべし」まで」が曲舞である。○無常の虎―人生無常の恐ろしさを虎に喩へた諺。太平記にも「無常の虎の身を責むる上野の原を過ぎ行けば」○雪山の鳥―雪山の寒苦鳥天竺の雪山に栖むといふ想像上の鳥で、衆生の懈怠心に喩へて用ゐらる。日蓮遺文錄新池鈔に―雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて、夜明けなば栖つくらんと鳴くと雖も、日出でぬれば朝日のあたゝかなるに眠り忘れて、又栖をつくらずして一生虛しく鳴く」玉葉集に「朝な〳〵雪のみ山に鳴く鳥の聲に驚く人のなきかな」○一生は唯夢の如し―以下「業に悲しみ猶添ふる」まで、會我物語卷十一「箱根にて佛事の事」と同文。○常住―無常の反對で、永久に變りのないこと。

かせ候へ

シテ「易き御事にて候へども。この一曲を狂言すれば。神氣が添うて現なくなり候へども。よしよし歸國の事なれば。面々名殘の一曲に。『現なき有樣見せ申さん

といひながら、子方を抱へて立ち、子方は脇座に坐し、シテは仕手柱際に行く。

地次第『月の夕の浮雲は。月の夕の浮雲は後の世の迷ひなるべし

シテクリ『昨日も徒らに過ぎ。今日も空しく暮れなんとす

と、眞中に行き床几にかゝる。

地『無常の虎の聲肝に銘じ。雪山の鳥啼いて。思ひを傷ましむ

シテサシ『一生は唯夢の如し。誰か百年の齡を期せん

地『萬事は皆空し。いづれか常住の思ひをなさん

度會「お易いことですが、この曲を舞ひ謠ふと、神靈が憑いて正氣がなくなるのですが、まあよろしい、歸國する時の事ですから、皆樣にお名殘の爲、一曲謠つて、正氣のない有樣をお見せしませう」

といつて、これより曲舞を始める。

度會『夕暮の月に浮雲のかゝる樣は、人間後世の迷ひを示してゐるやうだ。とは思ひながらも、佛道を修めようともせず、昨日も無意味に過し、今日も相變らず何のなす事もなく暮らしてしまふ事だ。そして人生の無常を虎のやうに恐れ、空しく過した事を雪山の鳥のやうに後悔するのだ。

人間の一生といふものは全く夢のやうなもので、如何なる人でも百年の命を保つことは出來ないのだ。すべての事が皆果敢ないもので、何事でも永久不變と思ふことは出來ないのだ。

人の命は水の上の泡のやうな、又風と一所に廻つてゐるやうなものだ。人の魂は籠の中の鳥のやうなもので、籠を開けばすぐ飛び去つてしまふのだ。そして一度消えたものは再び生せず、一度去つたものは、またと出て來ないのだ。

○えめぐる—えは、經の訛か、或は隨つてのての生み字を誤つて本文に書き入れたものか。
○須臾に生滅し—今あつたと思ふものも忽ちに消え失せる。
○刹那に離散す—刹那は梵語Kṣaṇaで、一念と譯す。極めて短い時間。
○閻魔法王—地獄の主で、衆生の罪を監視し、惡の恐るべきことを知らしめるもの。
○名利身を扶くれども—名譽と利益とは、この世ではわが身を助けて幸福とするが。
○北邙の煙—北邙は支那洛陽の北にある邙山で、漢唐宋の名士の墓の多くある所これを人は死を免がれないといふ例に擧げた。
○恩愛心を惱せども—恩愛の情が深くて、死別を悲しむけれども。
○黄泉の責に隨ふ—死の苦しみを受ける。
○これが爲に馳走す—このやうな果敢ない浮世の名利を得る爲に心を苦しめて奔走す。馳走は奔走と同じ意。
○これによつて追求す—この世の恩愛の爲に、親を追ひ子を求める妄執の所行は

シテ『命は水上の泡
地『風に隨つてえめぐるが如し
シテ『魂は籠中の鳥の
地『開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは二度見えず。去る者は。重ねて來らず
地クセ『須臾に生滅し。刹那に離散す、恨めしきかなや。釋迦大士の慇懃の教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の。呵責の詞を聞く。名利身を扶くれども。未だ。北邙の煙を免れず。恩愛心を惱ませども。誰か黄泉の責に隨はざる。これが爲に馳走す。所得いくばくの利ぞやこれによつて追求す。所作多罪なり。暫く目を塞いで。往事を思へば。舊遊皆亡ず。指を折つて(左指を折り數へ)。故人を數ふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今なんぞ。渺茫たらんや人留まり われ往く

今こゝにあつたと思へば、忽ちになくなつてしまひ、今一つになつてゐたと思ふものも、忽ちに離れてしまふのだ。人間といふものは、殘念なことに、とかく釋迦如來の御親切な御教を忘れて、冥途で閻魔法王から悲しい呵責の詞を聞かされるのだ。名譽とか利益とかいふものは、一時この世のわが身を助けて幸福にはしてくれるが、やがてその身も一片荼毘の煙となることを免れないのだ。親子夫婦の情愛に、どのやうに心を惱ましたところで、結局死の責め苦に逢はなければならないのだ。それにも拘らず、名利の爲に奔走して、果してどれだけの利益が得られようぞ。恩愛の爲に執着する妄執の所行は、多くの罪を作ることとなるのだ。暫く目を塞いで、過ぎ去つた時を思ふと、昔の遊び友達は皆亡くなつてしまつて、指を折つて死んだ人を數へて見ると、親しかつた者も親しくなかつた者も、大抵死んでしまつたのだ。そして時の過ぎ去つた今、ふり返つて見ると、まるで夢のやうにぼうつとしてゐるのだ。かうしてまた、人が後に殘つて、自分が死んで行くので、誰一人變りがないといふ者は

多くの罪を作ることとなるとの意。

○往事を思へば舊遊皆亡ず―和漢朗詠集白樂天の詩句「往事渺茫都似夢、舊遊零落半歸泉」を引いた。舊遊は舊い遊び友達。

○三界無安猶如火宅―法華經譬喩品の句。三界は欲界・色界・無色界で、衆生の轉輪廻する三つの世界。火宅は燒けてゐる家。

○天仙―天人と神仙。

○下劣貧賤の報―下劣貧賤で色々の惡因を作り、やがて惡報を受くべき身。

○ざんすゐ地獄、劍樹地獄―地獄の名。委しくは本曲の末に附記す。

○萬死萬生たり―殺しては生かし、生かしては殺して苦ませること。

○よどれば―よづれば の訛

○百節零落―からだの節々が盡く裂け落ちること。長阿含經劍樹地獄の條に「著レ手手絶、著レ足足絶、身體頭面無不二傷壞一」

○刀山―刀劍が樹木のやうに仰向に植ゑ並べてある山

劍樹地獄の光景である。

○劍樹共に解す―劍樹に觸れると同時にからだがちりぢりばら〳〵に解け裂かれる。

誰か又常ならん

「時移り事去つて」と床几を離れ、これより謠に合せて仕科。

シテ『三界無安猶如火宅

地『天仙尚し死苦の身なり。況んや下劣。貧賤の報に於てをや。などかその罪輕からん死に苦しみを受け重ね業に悲しみ猶添ふる。ざんすゐ地獄の苦しみは。臼中にて身を斬る事截斷して。血狼藉たり。一日のその中に。萬死萬生たり。劍樹地獄の苦しみは。手に劍の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。劍樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは。兩崖の大石もろもろの。罪人を碎く次の火盆地獄は。頭に火焰を戴けば。百節の骨頭より。燄々たる火を出だす或時は。焦熱大焦熱の。焰に咽び或時は。紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ鐵杖頭を碎き火燥足裏を

ないのだ。

經文に『衆生の輪廻する三界の不安なことは、宛も火に燒けてゐる家のやうなものだ』と說かれた通りで、天人や神仙でさへも死の苦しみを受けるのだ。まして下劣貧賤で色々の惡因を作つた者が、惡報を受けるのは當然の事だ。多くの人々は、當然受けなければならない死の苦しみの外に、なほ色々苦の種を作り、免がれにくい惡業の悲しみを持つてゐる上になほ色々悲しみの種を加へてゐるのであるから、死後受ける罪の輕からう筈はないのだ。かうして、死後墮ちて行く地獄の苦しみは、例へば斬鉋地獄では、臼の中でからだをさんざんに斬り裂かれて、血があたり一面に亂れ漂うてゐるのだ。しかも、これが一度ではなく、一日の中に殺しては生かし、生かしては殺してこの苦しみを繰返されるのだ。又劍樹地獄では、手を力にして劍の樹によぢ登らうとすれば、からだの節々が盡く裂け落ちてしまひ、足を力にして劍の山を登らうとすれば、劍の樹に觸れると同時に、からだがちり〳〵ばら〳〵に解け離れてしまふのだ。それから、石割地獄では、兩

○石割地獄、火盆地獄、焦熱大焦熱、紅蓮大紅蓮―地獄の名。委しくは本曲の末に附記す。
○鐵杖頭を碎き―「謠曲評釋」には鐵釘の字を充て、鐵釘地獄の樣であるといつて居るが、次の句と共に焦熱地獄の樣をいつたものであらう。
○飢ゑては鐵丸を呑み―智度論に「以二鉗開レ口、灌以二洋銅一、吞二熱鐵丸一、入レ口口焦、入レ咽咽爛、燒二爛五臟一」
○餓鬼―地獄と共に六道三惡趣の一で、飢渴に苦しむ世界。
○畜生修羅―畜生道と修羅道。いづれも六道の中で、畜生道は三惡趣の一。
○心の鬼の身を責めて―わが心が鬼となつてわが身を責めるのである。
【五】○後の世の闇をば何と照らすらん胸の鏡よ心濁すな―道歌。出典は分らない。
○あら悲しや―神に御暇しないで廻國した呵責を受けるのである。

焼く

シテ『飢ゑては。鐵丸を呑み

地『渴しては。銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり餓鬼の。苦しみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも。我等にいかで勝るべき。身より出だせる科なれば心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受くるなり、月の夕の浮雲は後の世の迷ひなるべし

【五】シテ『後の世の。闇をば何と。照らすらん

地『胸の鏡よ心濁すな心濁すな

〔カケリ〕

を舞ひ、神氣のつきたる心にて、一の松にて、

シテ「あら悲しや唯今參りて候に。これ程はなどやお責めあるぞ。『あら悲しやあら悲しや（としをる）

ツレ『不思議やな又かの人の神氣とて。面色變り

崖に大きな石があつて、罪人をうち碎いてしまひ、次の火盆地獄では、頭に火冠を戴くのであるから、からだ全體から髓髓たる火が出るのだ。その外また或時は焦熱地獄大焦熱地獄で火焰に啊び、また或時は紅蓮地獄大紅蓮地獄で氷に閉ぢこめられ、又或時は鐵の杖で頭を碎かれたり、火焰で足を燒かれたりするのだ。そして飢ゑれば鐵の玉を呑まされ、咽喉が乾けば銅の汁を飲まされるのだ。地獄の苦しみは、このやうに數へきれない程あるのだ。成程餓鬼道の苦しみもひどい、畜生道や修羅道の悲しみもひどい。しかし自分達の墮ちる地獄道の苦しみほどひどくはないのだ。けれども、これもわが身の犯した罪であるから、誰が責めるのでもない、われとわが心が鬼となつて身を責めて、このやうな苦しみを受けるのだ。まことに、夕暮の月に浮雲のかゝる樣は人間の迷ひを示してゐるやうだ―

（と曲舞を舞ひ納め、

【五】度々『我々はどうすれば後世の苦を免れることが出來よう。どうかこの胸の鏡よ、この心を濁してくれるな」（といつて）

〔カケリ〕

○逆髪―頭髪が上に生ひ上つてゐるのである。
○一もみ揉んで―風が揉むやうに吹き荒れること。
○卯の花くだし―「卯の花朽たし」で、卯の花の咲く四月頃の雨をいふ。それを直に五月雨の形容に用ゐた
○露の繁玉―汗の形容。
○時ならぬ霰玉散る―これも汗の形容。今は四月で、霰の降る時でないから、時ならぬといつた。
○足踏はとうとう―霰の音から足拍子の音を呼び起し足踏から手の舞、手の舞から足踏へ、その舞に伴ふ笏拍子を出した。
○笏拍子―笏を二枚打ち合せて神樂などの拍子とするもの。その音から窓の雨、雨の降る、震ひ戰きとつゞけて行つた。
○肝膽を碎き―必死になつて。
○神の怠り―神に對する怠慢の謝罪をの意であらう。
○神は上らせ給ひ―神子に憑いた神靈が神子から離れて上天せられたとの意。
○歸りなば二見の―歸つたならば二度見るといひかけた。

さも現なきその有樣

シテ『五體さながら苦しめて（と舞臺に入り仕科）

ツレ『白髪は亂れ逆髪の

シテ『雪を散らせる如くにて

ツレ『天に叫び

シテ『地に倒れて

地『神風の一もみ揉んで。神風の一もみ揉んで。時しも卯の花くだしの五月雨も降るやとばかり。面には。白汗を流して。袂には、露の繁玉。時ならぬ霰玉散る。足踏はとうとうと。手の舞笏拍子。打つ音は窓の雨の。震ひ戰き立つつ居つ。肝膽を碎き神の怠り申し上ぐると見えつるが。神は上らせ給ひぬとて。茫々と。狂ひさめて。いざやわが子ようち連れて。思ふ伊勢路の古里に又も歸りなば二見の浦。又も歸らば二見の。

に苦悶の狀を示し、神憑に憑かれ、想で、神に向つてゐるやうな心持で、

度會「あゝ悲しい。すぐ參ります。どうしてこれ程までにお責めになるのでございます。あゝ悲しい、あゝ悲しい（と泣く）

里人「これは不思議だ。またあの人に神氣がついたと見えて、顏色が變り、全く正氣もない有樣だ―

度會「からだ全體が苦しくて……」

と、その白髪は亂れて上ざまに生ひ立ち、雪を散らしたやうで、天に叫び、地に倒れ、宛も神風が一もみ吹き荒れて、折柄の卯の花を朽ち落す五月雨のやうに、顏一面に汗を流し、袂には露のたまつたやうに、玉の汗を宿し、その季節でもないのに霰が散り落ちるやうな音をして、とんとんと足拍子を踏んで、舞を舞ひ、窓を打つ雨音のやうに、笏拍子をうち鳴らし、ぶるゝ震へて、必死になつて、神にお詫びを申しあげてゐるやうであつたが、やがて神靈はその身から離れて上天せられたので、ぼんやりと狂氣からさめて、

度會「さあ幸菊丸、一所に連れ立つて、なつかしい伊勢の古里に歸らう」

○千鳥友呼び―二見浦を承けて千鳥を出し、千鳥の友呼びかはすのを、親子伴ひ語り合ふ樣の形容とした。

浦千鳥友呼びて伊勢の國へぞ歸りける　伊勢の國へぞ歸りける

シテ「神の忘り申し上ぐる」と下に居て兩手をつき、「神は上らせ給ひぬ」と立ち上り、「いざやわが子よ」と子方の側へ行き、子方を引き立てて橋懸の方へ送り、仕手柱際にて留拍子を踏む。

と、二見の浦の千鳥が友を呼ぶやうに樂しく語りあつて、伊勢國へ歸つて行つた。

歸國する態で、子方幸菊丸を伴つて、ッテ度合何某退場。

〔考異〕

諸流（五流）

ツレ。下懸ワキとす。【三】シテ「げにげに昔く人の……おこたりを申して候（春われは伊勢の國二見の浦の神子にて候が。廻國の望みあるにより。神に御暇をも申さで。諸國を廻り候ひし其神罰にや頓死し。三日と申すによみがへる。その間の地獄の苦しみにかやうに白髮となりて候。剛喜セホヾ春ニ同ジ）……ッテ「心得申し候……それ須彌は金輪より長じて……草木綠なりといへり」下懸惣じて須彌は十六萬由旬の勢ひ。五重色空の雲に聳え。金銀碧瑠璃玻球迦賚の影。四洲常樂の波に浮べり。されば南瞻部州の草木。須彌の影映るにより綠なりといへり。さてこそ……

古謠本（元祿八年本）

ツレ。元祿本もワキとす。【一】かやうに候者は……住居する者にて候（元久是に渡り候人は。いつく共なく某を頼む由仰られ候間頼れ申て候）さてもこの程（元爰に）いづくの者とも……男神子の來り候が（元ナシ）……ッレ「いかに（元なふ）渡り候か歌占の御所望にて候はば（元望め由承候間）……【三】ッテ何事にて候ぞ（元ナシ）。ッレ「さて御身はいづくの人にて渡り候ぞ（元ナシ）見申せば若き人にて（元渡り）候が……給ひて候ぞ（元ナシ）。ッテ「げにげに……神職なるが（元にて候か）……ッレ「さては……歌占を引き申し候べし（元候へかし）。シテ易き間の事（元さん候）一番に手に當りたる（元らんする）短册の歌を遊ばされ（元水）候へ考へて（元判して）……ッレ「教に任せ短册をとりあげ見れば何何（元ナシ）……かやうに見えて（元ナシ）候。ッテ「（元是は）須彌山を……これは（元ナシ）父の……ッレ「さん候親にて候者この程（元を持て候か）……仕り（元て）候間……ッテ「心得申し候……聞かせ申さう（元候へし）……重結（元きようけつ）に顯るそれ（元されは）須彌は……その丈

（元ナシ）……勢ひ（元よそほひ）……碧瑠璃玻球（元へいるりはてい）……南は青し（元く）とは……及び難し（元と見へたり）……減色なればおうこれは……ここに又（元にて。すこし大事の所勞にて。誠に命期の道なれ共。但此）染色の（元也）とは……色どりにて（元なり）……ッと「あら嬉しや……まじく候か（元よなふ）……ッレ「近頃祝着申し……占の所望にて候（元ヂ「某も占を引申候はん」。シテ「さてはおことも占の所望にて候か（元安き御事）以前の（元申候ひつる）如く一番に手に當りたる（元らんする）……子方「鶯の……父に似ず（元か様に候）……子方「さん候父を失ひて尋ね申し候（元ナシ）。シテ（元鶯にあふ言葉の縁あり。かいこのなかの子規といへり）これは早や……占にて候ものを（元ナシ）……シテ「さりとては……よもあらじ（元有へからす）鶯にあふ……又かひこの中の（元鶯の子は子成けり）子規とも……シテ「面白し……不思議や御身はいづくの人ぞ（元扨おことはたそ）……子方「見の太夫渡會の何某（元家次）……シテ「さて（元扨々）おこと（元御身）の……シテ「こはそも……父の何某（元家次）よ……

【四】ッとかゝる不思議なる事こそ候はね（元いかに申候）さては御子息にて（元渡り）候か（元かゝるふしき成事社候はね。聽て同道有て御歸り候へきか）。シテ「さん候疑ひもなき……これも（元ナシ）神の御引合せと存じ（元にて。唯今引あひ）候程に……ッレ「近頃めでたき……申され候は（元荒御名殘惜や候。又承及ひ候へは）地獄の……とてもの事に謠うて（元おうたひあつて）……シテ「易き御事にて候へどもこの一曲を……歸國の事なれば面々（元去なから。此謠をうたひ候へは。すこし神氣に成候。然共かた〳〵御）名殘……

【五】シテ「後の世の……何と（元か）……

附　記

○ざんすゐ地獄―斬鎚地獄を訛つたのであらうか。但しこの名の地獄、經典に見當らない。

○劒樹地獄―因果經に「今身屠二殺斬一戮衆生一者、死墮二刀山劒樹地獄一」とあり、樹木がすべて刀劒となつてゐる地獄。

○石割地獄―この名は佛典に見當らない。多分、長阿含經に「其地獄中、有二大石山一、兩々相對、罪人入レ中山自然合、推二壓其身一、骨肉摩碎」とある推壓地獄をいつたのであらう。

○火盆地獄―この名も佛典に見當らない。或は次の焦熱地獄と同一であらうか。「謠曲評釋」には火煩地獄の字を充て、阿鼻地獄（八熱地獄の最高位）であるといふ。

○焦熱・大焦熱　八熱地獄中の焦熱地獄と大焦熱地獄。三界義、焦熱地獄の條に「彼獄卒以二諸有情一、置二無量由旬三熱大鐵蒸上、左右傳レ之表裏燒如二魚炙一、又以二大鐵串一於二下徹頂而出、反覆炎令二彼諸有情諸根毛孔口中悉皆焰起一」また大焦熱地獄の條に「以三三支大熱鐵串一、自上下貫レ之徹二其兩肩膊及頂一而出」之、由レ此從二眼耳鼻口毛孔一猛炎流出」

○紅蓮・大紅蓮―八寒地獄の中の紅蓮地獄と大紅蓮地獄。三界義に「鉢特摩者此云二紅蓮華一地獄一、此地獄受苦過二前(青蓮華地獄)一故色變爲二紅赤一、皮膚分裂或十或多、似二紅蓮華色形一。摩訶鉢特摩者此云二大紅蓮地獄一、彼身分極大紅赤、皮膚分裂或百或多也、更過二於前(紅蓮地獄)一、故名二大紅蓮華地獄一也」

内外詣（うとと）　剛

解説

【能柄】　脇能　二段劇能

【人物】　**ワキ**　當今勅使、**ワキツレ**　同從者（二人）、
シテ　皇太神宮神主、**ツレ**　同神子

【所】　伊勢國　太神宮

【時】　（三月）

【作者】　金剛流の所傳によれば、古くは〔參宮〕と稱し、同流の十代目亦兵衞長賴の作であるといふ。

【梗概】　當今の臣下が勅命を奉じて伊勢太神宮に參詣すると、神主が祝詞をあげて、仁義の道を說き、又勅使の求めによつて、神樂を奏し、獅子を舞ふ。

【出典】　大體作者の創作脚色したもので、出典といふ程のものはない。

【概評】　本曲は一般脇能の類例を破つて、劇能に脚色し、その演舞にも神樂の外に、獅子、破舞等を出して、新しい工夫を凝らしたものであるが、その結果は終に失敗に歸したものと見なければならない。

第一に、脇能は神韻縹渺たる情趣の描出を主眼とするもので、それは夢幻能に脚色することによつて容易に達せられるのである。尤も神話物に於てはこれを劇能に脚色しても、そのものの本來の性質からこの趣を感受することが出來るが、本曲のやうな一般的な場合には、劇能に脚色し現實的な色彩を強く出しては、さうした情趣を味ふことが出來ない。第二に、この作者は勿論神德を讃歎し道德を高唱しようとしたものであるが、それは劇として具象的描寫によるべきものであるのに、本曲は「クセ」によつて、直接法におのが思想を論述説明してゐるから、甚だ露骨なものとなつた。第三に、樣々の演舞を試みたこと、殊に神前に奏せられる莊重な神樂と、民衆に提供せられる輕快な獅子とを共演させ、なほこれに破舞まで附け加へたことは、變化の妙を得ないで、徒らに混雜を起さしめることとなつたのである。

【一】

○内外の宮―伊勢の内宮と外宮。内宮には天照大神、外宮には豐受大神を奉祀す。
○當今―今上陛下。
○勢州―伊勢國。
○矢橋―春立つやのやを承けて矢橋とつゞけた。矢橋は近江國栗太郡老上村の字琵琶湖の東岸にあり、近江八景の一。

【一】

次第の囃子にて、ワキ勅使、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて出で、舞臺に入り向合ひ、

ワキヅレ「次第」光のどけき日の本や。光のどけき日の本や。内外の宮に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さてもわが君伊勢大神を信じ給ひ。急ぎ參詣仕れとの宣旨を蒙り。唯今勢州の旅に赴き候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキヅレ「道行」春立つや矢橋の浦の朝霞。矢橋の浦の

【一】

第一段

舞臺は初め京都で、ワキ當今勅使、ワキヅレ從者を囃して登場。

勅使「わが日本の國を太平にして下さる、ありがたい伊勢の内宮外宮へ參拜しよう」

ミ次第を謠つて神德をたゝへ、旅の目的を述べ、

勅使「私は今上陛下にお仕へ申し上げてゐる臣下です。さてわが君には伊勢大神宮を御尊信遊ばされ、急いで參詣せよと仰せ出されたので、これから伊勢へ旅に出かけるのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

勅使「春のこととて、矢橋の浦のあたり朝霞の立ちこめてゐるところを通つて、琵

○たなびく末を湖や―見るを湖にいひかけた。湖は琵琶湖をさす。
○鏡の峯―近江國蒲生郡の鏡山をいふ。
○鈴鹿川―松吹く風が鈴の如き音を立てるとの意で鈴鹿川にいひかけた。鈴鹿川は伊勢國鈴鹿峠より出て、鈴鹿郡を流れる川。
○關の戸―昔鈴鹿に關があつたので、その名を借りて「戸ささで」と太平を祝ふ。

朝霞たなびく末を湖や。影も常磐に見え渡る鏡の峯をよそに見て。松の嵐も鈴鹿川。關の戸ささでこれぞこの。伊勢の宮居に着きにけり伊勢の宮居に着きにけり

ワキ「松の嵐も鈴鹿川」と正面に向き二三足出で、またもとに歸りて伊勢に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。伊勢の宮居に着きて候。心靜かに神拜申さうずるにて候

ワキツレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行き下に居る。

眞一聲の囃子にて、シテ神主、翁烏帽子・着附厚板・縷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ツレ神子、面小面・疊・疊帶・着附摺箔・唐織腰卷の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸に出で向合ひ、

【二】

○神風や―伊勢の枕詞。

ワキ「一聲『治まれる。御代の惠みも神風や。伊勢の宮居に。出づるなり

ツレ二句『曇らぬ夜半の星までも。シテ(向合ひ)『和光に餘る影ならん

二人とも正面に向き、

琵琶湖を渡り、常磐木の生ひ茂つてゐる鏡山を遠くに見て、松吹く風の音も面白い鈴鹿川邊を過ぎ、天下太平のことと、まことにのどかな旅を續けてゐるうちにもはや伊勢大神宮に着いた」

といつてゐるうちに、舞臺は伊勢太神宮となる。

勅使「道を急いだので、思ひの外早く伊勢大神宮に着きました。心靜かに參拜しませう」

と神前へ參る態で腰座に行く。

【三】

舞臺は伊勢内宮で、シテ太神宮神主、ツレ同神子と共に登場。

神主「このやうな天下太平の、ありがたい大御代の御惠みを受けるのも、伊勢大神の御神德の賜物であるから、誠にありがたいことと思つて、お社にお參りをするのだ」

と神前に近づき、

神主「この夜空に星の輝いて、一點曇りのないのも、皆御神德の餘光であらう。――

○五十鈴の清き宮柱―五十鈴は伊勢内宮の境内を流れる川。その川水の清きを清き宮柱といひかけ、内宮即ち皇太神宮の意に用ゐた。
○太しく立ちて―家を立派に建築する意の古語。
○秋津洲―日本國の別稱。
○立て―誓ひに―宮柱を太しく立てし、立てし誓ひといひつづけた。
○二心―表に忠誠を裝うて裏に不忠を懷く心。
○ただ正直を本として―「正直の頭に神宿る」といふ古諺。「日月は六合を照らせども」の語釋參照。

と謠ひて舞臺に入りツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ『ありがたや五十鈴の清き宮柱。太しく立ちて秋津洲の。シテ(向合ひ)『神の御稜威は異國に。仰ぎてもなほ餘りあり。賤しき賤の身にしありとも。心を磨くに。隔てはなし

シテ下歌『神さぶる伊勢の内外の宮柱。上歌』立てし誓ひに二心。立てし誓ひに二心。あらずは末は榮えなん。皇大神の御心に叶はんとしも思ひなば。ただ正直を本として。仰ぎて仕へ申せとよ仰ぎて仕へ申せとよ

と謠ひながら、シテ、ツレ入替り、シテは眞中に立ち、ツレは笛座前に下に居る。ワキ立ちて、

【三】

ワキ『いかにこれなる宮人に申すべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「これは當今に仕へ奉る臣下なるが。勅使に參詣仕りてあるぞとよ

【三】

○宮人―神社に仕へる人。社人。神主。

ありがたくも大神はこの五十鈴川の地に神鎭まりましたので、日本の神の御稜威は外國にまで及んでゐるのだ。だから、たとひ身分の卑しい者でも、心を磨いて信仰したならば、神は貴賤の別け隔てなく御惠み下さるのだ。――

この尊い伊勢内宮外宮にお誓ひを立てゝそれを違へなかつたならば、末は必ず榮昌するに相違ない。皇大神の御心に叶へたいと思ふならば、たゞ〳〵正直を第一として信仰するのがよいのだ」

と謠し合つてゐる。

勅使は神主の來たのを見て、

勅使「もうし神主殿」

神主「私の事ですか、何の御用ですか」

勅使「私は今上陛下にお仕へ申して居る臣下ですが、この度勅使として參詣致したのですぞ」

シテ「何と勅使に御座候とや

ワキ「なかなかの事

シテ「唯今の御參宮返す返すも御めでたうこそ候へ

ワキ「急ぎ祝詞を參らせ候へ

シテ「畏つて候

といひてくつゝぎ幣を持ちて出で（ワキは下に居り）

シテ『謹上再拜（と幣を振り）。高天原に神集りまして、天の岩戸を押し開き、天の八重雲をいづのちわきにちわきて聞し召せ。抑も天長く地久しく。上直なれば下までも。安く樂しむ御惠み。仰ぎ願はくは祓殿の神。八百萬の神達、聞し召し給へと畏み畏み申す

地『げにありがたやこの神のげにありがたやこの神の。深き惠みの道廣く。萬物も出生し四海

○謹上再拜―以下「畏み畏み申す」までが祝詞。
○高天原―神々のおはす所
○天の岩戸を押し開き―祝詞大祓詞に「天つ神は天の磐門を押開きて、天の八重雲をいつのちわきにちわきて聞しめさむ」とあるを引いた。
○天長く地久しく―白居易の長恨歌に「天長地久有レ時盡、此恨綿々無二絶期一」新葉集序に「天長く地久しくして神代の風はるかに仰がざらめかも」
○祓殿の神―祓處の神。大祓の時に祭られる瀬織津比咩、速開都比咩、氣吹戸主、速佐須良比咩の四神をいふ。
○四海の波も靜かにて―太

神主「なんと仰しやいます。勅使でいらつしやるのですか」

勅使「さうです」

神主「これは〳〵御參宮、誠におめでたう存じます」

勅使「急いで祝詞をあげて下さい」

神主「畏りました」

神主は神前に進いて、

神主「――『謹み畏み申し上げます。どうか神々様には高天原にお集まり遊ばし、天岩戸をお開きになり、幾重にも重なつた天雲をかき分けて、私共の申し上げる事をお聞き入れ下さいませ。わが國は天長地久、幾久しく榮えて、上にまします大君が御仁政を垂れ給ふので、下萬民も御惠みにより安樂に暮らして居るのでございます。どうか私共の罪禍をお除き下さいます祓處の神様、八百萬の神々様、どうか私共の申し上げます事をお聞き入れ下さいませ』――」

と祝詞をあげる。

誠にこの大神の深い御惠みによつて萬物が出生し、天下に太平で、世の中に

平の形容。宴曲「祝言」に「四海波しづかにして、九州風おさまり」

○君は船臣は水―荀子王制篇に「君者船也、庶人者水也、水則載レ船、水則覆レ船」とあるを引いた。

【四】○君臣親子夫婦―いはゆる五倫で、孟子滕文公上に「使契爲二司馬一、教以二人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」

○人は天地の恵みを受け―天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩の、所謂四恩を擧げ、その中、國王の恩を第一とした。

○日月は六合を照らせども―倭姫命世紀に「奉二神祇一再拜禮、日月廻二四州一、雖レ照二六合一、須レ照二正直頭一、止、詔命明矣、已專如レ左禮、奉レ祈二朝廷一、眞喪、天下泰平志矣、四民安然、雲良布告、訖自退二尾上山峯石一隱坐」とあるに據った。六合は天地四方。

の波も靜かにて。げに君は船臣は水。水よく船を浮かぶなる。この日の本はありがたきこの日の本はありがたき

【四】地クリ『それ神の御孫の末長く。君臣親子夫婦兄弟。ともに禮儀をなすとかや

シテサシ『中にも人は天地の恵みを受け

地『父母の身を分け生まれ來て。赤子の身より哀憐の情によりて人となる

シテ『されども君の恵まずば。一時の命を保ち得じ

地『これぞ神君父母の重恩。言葉に盡くし。難かるなり

（居クセ）

地クセ『日月は。六合を照らせども。誠は正直の頭を照らす徵を。水晶の玉の内に。御影を映し給

『君臣の關係は船と水とのやうなものである』といはれてゐるが、その水に譬へられた臣下も、穏かな水のやうによく大君の御旨に從ふわが國は實にありがたいことである。

【四】神主祝詞を奏つて、物徒に向ひ、神主一體わが國は天照大神の御子孫の末長く御統治遊ばす國で、君臣親子夫婦兄弟、皆禮儀を正しく守つて居るのです。殊に人間たる者は天地の恵みを受け、父母の身を別けて生まれて來たもので、赤子の時から多くの人々の愛撫を受けて成長するものです。しかし、その中でも、大君の御恵みを受けたければ、一時も命を保つことは出來ないのです。即ち神、大君、兩親の御恩は言葉ではいひ盡くせない程大きなものです。――

月日はこの世界を普くお照らしになるのですが、誠の御恵みは正直の者に下るものので、その徴として日神月神とも水晶の玉に御影をお映しになるのです。このやうな次第で、人間も心を清くし正直にす

○家人―眷屬、家臣。
○五常の道―漢書董仲舒傳に「仁義禮智信五常之道」
○本立ちて道なる―論語學而篇に「君子務レ本、本立而道生、孝弟也者、其爲レ仁之本與」
○神樂―太古から行はれてゐた我國固有の歌舞で、神前に奏す。

へり。その如く人の身も。清淨心の。頭を深く天照らす皇大神の御神言はありがたや。君に仕へて義を守り。己を盡くし身を碎き。忠信に仕へ申すべし。孝行のその道。多き中にも父母の。わが子は心に。信の深きものなれば。如何なる遠國に獨りありとても行末の。心に懸かる事なしと樂しみを。なさせ申すを先とする

シテ『友と交はり信ありて地『私の意趣を以て。身を捨つる事なかれ。たとひ我とは不和なりとも君の爲によき人をば。德を擧げて褒むべし。この理を辨へば。夫婦兄弟朋友。子孫家人に至るまで。五常の道に叶ひなん。これ本立ちて道成る驗とこそは見えにけれ

ワキ「げにありがたき物語。心にしみて覺えたり。又時刻も來りてある間。急ぎ神樂を參らせ候へ

れば、必ず深い惠みを與へようと、ありがたくも天照大神は仰せ下されたのです。それで、人は君に仕へては義を守り、心を盡くし身を碎き、忠信にお仕へしなければなりません。その外人の行ふべき道德は色々ありますが、第一に大切なのは孝行の道で、その孝行の道についても父母といふ者はわが子を深く案じるものであるから、たとひ獨り遠國に行つてゐても、兩親にわが子は何も心配する事がないと樂しませるのが、最も大切です。それから友と交はるには信義が大事で、自分一身の意趣遺恨を以て、その人を捨てることをせず、たとひ自分と私情に於ては不和であつても、君の爲によい人であるならば、その德を擧げて褒めるのがよいのです。この道理を辨へれば、夫婦兄弟朋友の間も、子孫、眷屬に至るまでも仁義禮智信の道に叶ふのです。これが卽ち『道德の根本が確立すれば、すべての道德が隨つて行はれる』といふものであります」

勅使「ありがたいお話を伺つて、身にしみて感じました。もう時刻も來ましたから急いで神樂をあげて下さい」

シテ「畏つて候」（ツレに）いかに申し候。急ぎ神樂を參らせ候へ

ツレ「心得申して候

シテ中入。ツレ【物着】に長絹を着て立ち、

【五】

ツレ『さる程に時移り

地『さる程に時移り。宜禰が鼓も數至りて。月も雲も白妙の。袖を飜して神かぐら

ツレ『千早振る

〔神樂〕

ツレ『五日の風や十日の

地『雨もうるほふ獅子の舞

と舞ひてツレ笛座前に着く。この間に、後ジテ神主、厚板壺折・大口の裝束にて獅子頭をつけて出で、

〔獅子〕（を舞ひ）

地『かくて明け行く山風に

と、くつろぎてシテ【物着】、獅子頭・厚板を脱ぎ、烏帽子・單狩衣・白大口の裝束となる。ツレとこの間に立ち、

○千早振る―神の枕詞。神樂歌の謠ひ出しの詞として出した。

○宜禰　禰宜。神官。

○五日の風や十日の雨―王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」

○獅子―外來の雜樂で、獅子の面を着て舞ひ、惡魔を拂ふ。

神主「畏りました」

といつて、神子に向ひ、

神主「急いで神樂をあげて下さい」

神子「承知しました」

といつてその仕度をする。シテ神主は獅子舞の仕度をする爲に退場。

【五】

第二段

かうして時刻も移れば、神主は鼓の拍子を拍ち、月夜に美しい神樂を奏する。

神子「――『千早振る……』

と謠ひ出して、

〔神樂〕

を奏し、

神子「――『五日の風に十日の雨、天下太平めでたい獅子の舞……』――」

と謠つて休む。後ジテ神主、獅子舞の裝束をして登場。

〔獅子舞〕

を舞ふ。神子さた立つて、

〔破舞〕

ツレ舞ひ終ると、シテ立ち次の謠に合せて舞ふ。

地。かくて明け行く山風に。波の鼓も聲うち添へて。幾萬代と舞ひをさむれば。星月神燈白みわたるや東の空に五色の雲も輝き出づる。日神の御姿照らし給へば。夜も明け行くや內外の宮居。夜も明け行くや內外の宮居の。榮ゆく春こそ久しけれ

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

○日神―天照大神。

〔破舞〕

を舞ふ。

かうして夜も明け行く頃、山風も波の音も鼓に合はせて囃子の興を添へ、神主が『幾萬代までも』とめでたく舞ひ納めると、星も月も御神燈も次第に白らんで來て、東の空に五色の雲が輝き出で、日神が御姿をお現しになると、夜も明け放れた。かうして伊勢太神宮の御神德により、わが國は幾久しく榮えて行くのである。

神主めでたく舞ひ納めて退場。

善知鳥

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 劇的夢幻能

【人物】 **ワキ** 旅僧、**前シテ** 獵師の靈、**狂言** 外の濱の者、**ツレ** 獵師の妻、**子方** 千代童、**後シテ** 獵師の靈

【所】 **第一段** 越中國立山の麓、**第二段** 陸奥國外の濱

【時】 （四月）

【異稱】 喜多流では「烏頭」と書く。

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記に寛正六年二月廿八日觀世が演じたこと、粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十三日勸進申樂の初日に演じたこと、言經卿記文祿四年三月廿九日及卅日に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 諸國一見の旅僧が陸奥外の濱見物の途次、越中の立山に立ち寄ると、外の濱の獵師の亡靈が現れて、外の濱へ行くならば、わが妻子に簑笠を手向けるやうにと言傳してくれ」と頼み、證據の爲に自分の着てゐる衣の片袖を解いて渡す。旅僧は外の濱へ行つて、獵師の妻子を訪ね、形見の衣とかの袖とを合はせると、正しく合ふので、簑笠を手向けて回向をする。すると、獵師の亡靈がまた現れ出

て、婆婆で善知鳥を殺した報いで、地獄でこの鳥の爲に苦しめられてゐる有樣を示し、僧の囘向を賴んで消え失せる。

【出典】この善知鳥について、安齋隨筆に、

うたふといふ鳥、奥州卒都の濱にあり、母鳥砂の中に子生み、砂にて隱し置きて、母鳥餌を運び來て、うたふと呼べば、兒やすかたと答へて出でて餌をほむとぞ。獵人が母鳥の聲をまねて、うたふと呼べば、兒やすかたと答へて出づるを捕るとぞ。其血人の身にかかりて惡しとて、簑笠を着て捕るとなり。定家卿の

みちのくの卒都の濱なる呼子鳥鳴くなる聲はうたふやすかた

とある。しかし、これは謠曲を本とした說であつて、本曲の原據を知る材料とはし難い。たゞこゝに引いた定家の歌は善知鳥の傳說を詠んだもののやうであり、謠曲拾葉集にもこの歌を擧げて「夫木抄に入る」と記してゐるが、現在流布の夫木抄その他の歌集には見當らない。たゞ一條兼良の作と傳へる鴨鷺合戰物語に、

子を思ふ涙の雨の蓑の上に、うとうとなくはやすかたの鳥こそわれも又、唐紅の袖の露

とある。これも本曲の原據とはし難いが、大體同じ時代の作であるから、室町初期にこの種の傳說が行はれてゐて、これを一曲に脚色したものであらう。

【概評】魚鳥殺生の罪業を說いたものには、本曲の外に〔阿漕〕〔鵜飼〕があるが、鵜飼の漁夫は一僧一宿の功力によつて、地獄から極樂に移されて居る。阿漕の漁夫は地獄の苦を訴へてゐるが、この獵師ほど凄慘ではない。本曲は殺生の罪業を假借なく責め立てたもので、その本舞臺が陸奥であるにも拘らず、第一段の舞臺を越中立山としたのも、まづ最初にこの世ながらの地獄を提出したのに外ならない。そしてこゝに現れて來る前ジテは普通の複式能のそれのやうに、里人の姿を裝ふ餘裕もなく、亡靈そのものが登場して、妻子への言傳を賴んでゐるのである。他の曲に比べて、それが劇的であり、人情味が強く現れてゐるだけ、一層悲慘な感じを與へてゐる。第二段に於ては、妻子の前に亡靈が現れ、妻子は夢心地ではなく現實にその姿を認めながら、亡靈の消え失せることを恐れて一言をも發せずに居るのである。亡靈は懷しさにわが子の側へ近寄らうとするが、一橫障の雲に隔てられて、わが子を見定めることさへ出來ないのである。かうして、死別した夫婦父子が相對しながら、話すことも近寄ることも出來ず、しかも、妻子の前に於て、亡靈は今地獄で化鳥となつた善知鳥に苦しめられる慘忍な有樣を示して見せるのである。陰慘眼を掩はしめるばかりで、謠曲としては類例の少い深刻な描寫である。

【一】

○外の濱―陸奥國東津輕郡青森灣に面した沿海の地。
○立山―越中國中新川郡の東南に聳ゆる山。地獄谷・死出山・三途川など嶮難の箇所が多い。こゝに來れば死者に逢ふといひ傳ふ。
○禪定―高山に登つて修行すること。
○地獄の有樣―今昔物語卷十四「修行僧至越中立山會小女語」に「越中の國中新川の郡に立山と云ふ所あり、昔より彼の山に地獄ありといひ傳へたり。その所の樣は原の遙に廣き野山也。その谷に百千の出湯あり、深き穴の中より湧出づ、巖を以て穴を覆へるに湯荒く湧て、巖の邊より湧出づるに大なる巖動く、熱氣滿ちて人近付き見るに極めて恐し亦その原の奥の方に大なる火の柱あり、常に燒けて燃ゆ。亦その所に大なる峯あり、帝釋の嶽と名付けたり。これ天帝釋冥官の集會ひ給て、衆生の善惡の業を勘へ定むる所也と云へり、その地獄の谷に大なる瀧あり、高さ十餘丈也、これを勝妙の瀧と名付けたり。白き布を張るに似たり、而るに昔より傳へいふ樣、日本國の人罪を造て、多くこの

【二】

囃子方座につくと、子方千代童、襟赤・着附縫箔・兒袴・腰帶・扇の裝束、ツレ獵師の妻、面深井・臺・疊帶・襟朽葉色・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて出で脇座へ行き下に居る。

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われ未だ陸奥外の濱を見ず候程に。この度思ひ立ち外の濱一見と志して候。又よきついでにて候程に。立山禪定申さばやと存じ候」（と二足つめ）

ワキ「急ぎ候程に。これははや立山に着きて候。心靜かに一見せばやと思ひ候」

舞臺の眞中へ行き、

ワキ「さてもわれこの立山に來て見れば。まのあたりなる地獄の有樣。見ても恐れぬ人の心は。鬼神より猶恐ろしや。山路に分つ衢の數。多くは惡趣の嶮路ぞと。涙も更に留め得ぬ。慚愧の心時過ぎて。山下にこそは、下りけれ山下にこそ

【一】

第一段

舞臺は初めどこだか明らかでない。ワキ旅僧登場して、

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧ですが、まだ陸奥の外の濱を見た事がないので、今度思ひ立つて外の濱を見物しようと思つてゐます。そして丁度よい序だからその途中立山禪定しようと思ふのです」

と自己紹介をし、やがて越中國立山に着いた態で

僧「道を急いだので、はや立山に着きました。ゆつくりと見物しませう」

と立山の山頂に登つた態で、

僧「さて〳〵恐ろしいことだ。この立山に來て見ると、地獄の有樣を眼の前に見るやうだ。しかしこんな恐ろしい有樣を見ても平氣でゐる人間の心がなほ恐ろしい、鬼よりもなほ恐ろしいことだ。この山道が地獄道・餓鬼道だ、といふ恐ろしい所へ行くやうになつてゐる。何といふ恐ろしいことだらう」

と旅僧は涙も暫くは留まらず、慚愧懺

立山の地獄に墮つといへり」

○山路に分つ衢―山中に地獄・餓鬼などの所があつて、道がそれへ通じてゐるのである。

○惡趣―惡業によつて趣く場所。地獄・餓鬼・畜生道など。

○懺悔―罪惡を愧ぢること

○山下―山の麓。懺悔にいひかけた。

【二】

○それに候―國許にある。

○上の空に申しては―何の據りどころ證據もなく漠然といつては。

○やはか―まさか。

○承引―聞き入れる、合點する。

は下りけれ

といひて地謠座前に行き幕へ向く。

【二】

シテ獵師の靈、面笑尉・尉髮・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・扇の裝束にて、幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなうあれなる御僧に申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ

シテ「陸奥へ御下り候はば言傳申し候べし。外の濱にては獵師にて候者の、去年の秋みまかりて候。その妻や子の宿を御尋ね候ひて。それに候蓑笠手向けてくれよと仰せ候へ

ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。屆け申すべき事は易き程の御事にて候さりながら。上の空に申してはやはか御承引候べき

シテこの間に一の松まで出で、

シテ「げに確かなるしるしなくてはかひあるまじ

悔の時を過して、やがて山の麓に下りた。

【三】

獵場は立山の麓。シテ獵師の靈、旅僧を迎へ場けるやうにして登場。

獵師「もうしもし、お僧さま、お願ひでございます」

僧「何の御用です」

獵師「陸奥へお下りでございましたら、どうかお言傳を願ひます。私は外の濱で獵師をして居りましたもので、去年の秋に死んだのでございます。その妻子の居ります家をお尋ね下さいまして、あの家にある蓑と笠を手向けてくれと仰しやつて下さい」

僧「これは意外な事を伺ふものだ。お言傳するのはお易いことだが、何の證據もなしに申しては、まさか先方で本當にせられますまい」

獵師「いかにも御尤もです、確かな證據が

○今はの時―臨終の時。
○木曾の麻衣―着たるを木曾にいひかけた。信濃國木曾は古く麻の産地。
○涙に添へて旅衣―僧にたぶを旅にいひかけた。たぶはこゝでは渡すとの意。
○立ち別れ―衣を裁ちを立ちにいひかけた。
○雲や煙の立山―地獄谷から雲や煙が立つといふを立山にいひかけた。
○木の芽も萌ゆる―立山に地獄の火が燃ゆるばかりでなく、木の芽も萌ゆといひかけ、木の芽の出る春を遙遙にいひかけた。
【間】
○高もがり―「もがり」は竹を筋違ひに組合せて作つた柵。その高いものを「高もがり」といふ。

じ。や。思ひ出でたり在りし世の。今はの時までこの尉が。『木曾の麻衣の袖を解きて（と左の袖を解き）

地上歌『これをしるしにと。涙を添へて旅衣（袖を兩手に持ちてしをり）。涙を添へて旅衣（ワキ橋懸へ行き袖を受取り）。立ち別れ行くその跡は（ワキは舞臺へ、シテは幕の方へ歸り）。雲や煙の立山の。木の芽も萌ゆる遙々と客僧は奥へ下れば。亡者は泣く泣く見送りて行く方知らずなりにけり行く方知らずなりにけり

ワキ「客僧は奥へ下れば」と正面の方へ行く。シテワキを見送り「亡者は泣く泣く」としをり、ワキを見直して中入。

【間】

ワキ奥へ行く心にて少しくつろぎたる後、名乘座へ出で、

ワキ「外の濱在所の人の渡り候か

狂言所の者、着附縞夏斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「在所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「この所に於て去年の秋身まかりたる獵師の屋を敎へて給はり候へ

狂言「さん候その身まかりたる獵師の屋は。あれに見えたる高もがりの内にて候。急ぎ御尋ね候へ

ワキ「懇に御敎へ祝着申して候。さあらばあれへ立ち越へ。心靜かに尋ねうずるにて候

なくては具合が惡うございませう。さうざう、思ひ出した。存命の頃臨終まで私の着てゐました着物がございます。と着てゐる着物の袖を解いて、

獵師「これを證據にして下さい。と涙ながらに旅僧に渡す。僧は亡者と別れて、この煙の立ちあがる立山から遙々と陸奥の方へ行くと、獵師の亡者はその姿が雲のやうに見えなくなるまで、涙ながらに見送つて、どことも知れず消えてしまつた。

獵師の霊消え失せる樣で退場。

狂言「御用の事候はゞ重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

【三】　狂言引く。ワキは後見座にくつろぐ。ツレその場にて、

ツレ『げにやもとよりも定めなき世の習ひぞと。思ひながらも夢の世の。あだに契りし恩愛の。別れの後の忘れ形見。それさへ深き悲しみの。母が思ひをいかにせん

【四】　ワキ、ツレ謠の間に袖を懐中して仕手柱先へ出で、ツレに向ひ、

ワキ「いかにこの屋の内へ案内申し候はん

ツレ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「これは諸國一見の僧にて候が。立山禪定申し候處に。その樣すさましき老人のありしが。陸奥へ下らば言傳すべし。外の濱にては獵師にて候者の。去年の秋みまかりて候。その妻子の宿を尋ねて。それに候蓑笠手向けてくれよと仰

○忘れ形見・忘れ難きを形見の遺子にいひかけた。

【三】　第二段

舞臺は外が濱、獵師遺族の住家。

ツレ獵師の妻、子方千代童と共に登場して居る。

妻「ほんとにこの世は果敢ない無常なものだとは、兼ねて知つてはゐるものの、契りを結んだ夫に死に別れて、後に殘つた忘れ形見のこの子を見ると、この母はどうしてよいやら、ほんとに悲しくてたまらない」

と謠言をいふ。

【四】　ワキ旅僧は獵師の家に着いた態で、

僧「お頼み申します」

妻「どなたでございます」

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧ですが、立山に禪定してゐた折、もの凄いやうな老人が來て『陸奥へ下るのならば言傳をして下さい。私はもと外の濱の獵師で、去年の秋死んだものです。どうかその妻子の居る家を尋ねて、その家にある簑と笠を手向けてくれと、かういつてくれ』といはれたので、何の證據もなしにその

○四手の田長―時鳥の異名四手を死出と解し、時鳥は冥途の音づれを傳へる鳥といふので、亡き人の序とす。○上聞きあへぬ―身の上話を聞き終らないうちに。○蓑代衣―蓑の代りに着る衣。形見を見んといひかけ「身の代」に通はせた。○藤袴―萬葉集卷三に「須磨の海人の鹽燒衣の藤衣間遠にしあれば未だ着なれず」とあるを借りた。藤衣は藤葛などで作つた粗末の衣間遠は織り目の粗いこと。こゝには藤衣といふのを、藤袴衣と續けたので、袴に意味はない。○頃も久しき―衣を頃もにいひかけた。○形見ながら―片袖のない衣と記念の意の形見とを兼ねた。○夏立つけふの―疑ひもなしを夏に、今日を陸奥の狭布にいひかけた。新勅撰集二條大貳の歌に「夏衣たちかへてける今日よりは山時鳥一重にぞ待つ」○そで―それにて、そにての約言。そでに袖の意を含ませて「形見ながら」に照應させた。

せ候程に。上の空に申してはやはか御承引候べきと申して候へば。その時召されたる麻衣の袖を解きて賜はりて候程に。これまで持ちて參りて候。もし思しめし合はする事の候か

ツレ『これは夢かやあさましや。四手の田長の亡き人の。上聞きあへぬ涙かな(しをり)。「さりながら餘りに心もとなき御事なれば。『いざや形見を蓑代衣。間遠に織れる藤袴

ツレ前ジテの着たる片袖のなき水衣を後見より受取り、これを兩手にさゝげてワキに示す。

ワキ『頃も久しき形見ながら(と袖を懐中より出だし)

ツレ『今取り出だし

ワキ『よく見れば(とツレの持ちたる水衣と見比ぶ)

地上歌『疑ひも。夏立つけふの薄衣(ワキ片袖をツレの水衣の上へ持ちて行き)。夏立つけふの薄衣。一重なれども合はすれば。そでありけるぞあらなつかしの形

やうな事を申しても、先方でよもや本當になさるまい』と申しますと、その時老人は、自分の着て居られた着物の袖を解いて渡されたので、これを持つて參りました。もしや思ひ當りになることがありませうか―

妻「これはまあ夢でせうか、ほんとにあさましい事でございます。亡くなつた人の噂を伺つて思はず涙が出るのでございます。それにしても餘り不思議な氣がかりの事でございますから、それでは片袖のない形見の着物、それもほんのお粗末なものですが、取り出して見ませう―僧「といつても、大分以前の形見でせうが……」

妻「でも合はせて見ませう―

ミ、わが家にある形見の着物と、今旅僧の持つて來た袖とを合はせて見て、

妻「よく合はせて見ますと、全く疑ひはございません、ほんの薄い粗末なものでございますが、合はせて見ると、袖も丁度合つて、ほんとに夫の形見の品に相違ございません。あゝなつかしいことでございます―

○出離生死頓證菩提―囘向文。生死輪廻の迷界を出離して、速かに菩提佛果を證得せよとの意。

【五】○陸奥の外の濱なる呼子鳥鳴くなる聲はうとうやすかた―解說參照。

○呼子鳥、うとうやすかた―本曲の末に記す。

○一見卒都婆―塔婆開眼の偈文「一見卒都婆、永離三惡道、何況造立者、必生二安樂國」を引いた。三惡道は地獄・餓鬼・畜生道をいふ。

○紅蓮大紅蓮―八寒地獄の中、紅蓮地獄は酷寒の爲に膚肉が裂けて紅蓮花の如くになるとの謂。大紅蓮はその一層烈しいもの。

○名號智火―阿彌陀佛の名號と佛の智慧。これを紅蓮の氷に對して火に喩へたのである。

○焦熱大焦熱―八熱地獄の中。焦熱地獄は獄火が熾烈で、罪人の皮肉が焦爛するの謂。大焦熱はその一層烈しいもの。

○法水―煩惱の塵垢を洗ふ佛法を水に喩へた語。焦熱に對してこの語を用ゐた。

見や（とシテしをり）。やがてそのまま弔ひの。御法を重ね數々の。中に亡者の望むなる。蓑笠をこそ、手向けけれ蓑笠をこそ手向けけれ

ワキ「やがてそのまま」に笛座へ行き後見より笠を受取り、正面先に置き、舞臺の眞中に下に居て、笠に向ひ合掌して、

ワキ『南無幽靈出離生死頓證菩提

といひて笛座前に行き坐す。

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ獵師の靈、面痩男・黑頭・黑地金鍛鉢卷・標淺黃・着附縞熨斗目・白練水衣・羽箒・扇の裝束にて、杖をつきて出で常座に立ち、

後ジテ一聲『陸奥の。外の濱なる。呼子鳥。鳴くなる聲は。うとうやすかた

ジテ『一見卒都婆永離三惡道。この文の如くば。たとひ拜し申したりとも。永く三惡道をば遁るべし。いかにいはんやこの身の爲。造立供養に預からんをや。たとひ紅蓮大紅蓮なりとも。名號智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法

そこで、旅僧は早速色々と囘向の佛事を營み、殊に亡者が望んだ蓑と笠を手向けて供養した。

僧――『とうか幽靈よ。生死の迷界を離れ出て、早く成佛せよ』――」

と讀經する。

【五】

後ジテ獵師の亡靈謠終にひかれて登場。

亡靈「――『陸奥の外の濱なる呼子鳥、鳴くなる聲はうとうやすかた』――」

（外の濱の鳥は親がうたうと鳴いて子鳥を呼ぶと、子鳥がやすかたといって答へる）といふ歌を謠ひながら、妻子の住家に近ついた態で、

亡靈 經文に『一たび卒都婆を見れば、永く三惡道から離れられる』とある通り、卒都婆に實にありがたいもので、これを見ただけでも、地獄・餓鬼・畜生の惡道を遁れることが出來るのに、殊にわざわざ自分の爲に卒都婆を建てて供養して貰つたのだから、たとひ紅蓮大紅蓮又は焦熱・大焦熱の怖ろしい地獄に墮ちても、佛の御力によつて遁れ出ることが出來るであ

○心はいつかやすかたの―心はいつか安まらんを「やすかた」にいひかけた。
○衆罪如霜露―觀普賢經の偈「衆罪如霜露、慧日能消除」を引いた。
○汐蘆―汐のさし引きする所に生えてある蘆。
○末引きしをる―列をなして生えてゐる蘆が汐にしをれて、浦里を圍む籬となつてゐるとの意。
○籬が島―陸前國鹽釜の沖にある島。外の濱とは別所であるが、籬を承けて出し、苫屋形の序とした。
○苫屋形―屋形を苫で葺いた海士の家。
○圍ふとすれど―屋根を苫で葺かうとするが苫が疎らで、よく圍ひきれないが。

【六】
○あれはともいはば―この句〔朝長〕にもある。幽靈に聲をかけると、その姿が消え失せるといひ傳へられてゐる。
○今はうとうの音に泣きて―今は疎くなるを鳥の名の「うとう」にいひかけ、うたうの如くに泣くといつた。
○やすかたの鳥の―うとうを承け、「やす」の音を重ねて「安からず」の序とした。
○いとほし―かはゆし。

水には勝たじ、さりながらこの身は重き罪科の。心はいつかやすかたの。鳥獸を殺しし

地下歌〔衆罪如霜露慧日の日に照らし給へ御僧（とワキへ合掌す）

地上歌〕所は陸奥の。所は陸奥の。奥に海ある松原の。下枝に交る汐蘆の。末引きしをる浦里の籬が島の苫屋形。圍ふとすれど疎にて。月の爲には外の濱心ありける、住居かな心ありける住居かな

【六】
ツレ『あれはともいはば形や消えなんと。親子手に手を取り組みて。泣くばかりなる。有樣かな

と謠ひながら立ちて子方を前へ出し、ツレは下に居てしをる。

シテ『あはれやげに古は（と子方へ向き）。さしも契りし妻や子も。今はうとうの音に泣きて。やすかたの鳥の安からずや。何しに殺しけん。わが子のらう。とはいひながら、自分は餘りに重い罪を犯したので、いつ安らかな心になり得ることやら。どうかお僧樣、私の鳥獸を殺した恐ろしい罪を、照る日に消える草の露のやうに、早く消滅させて下さいませ」（と合掌する）

この住家といふのは、陸奥の外の濱、松原つゞきの海岸で、濱邊に列んで生えた蘆が汐に引きしをれて垣を作つたやうになり、その中に建つた苫屋根の家で、屋根も葺ききらない粗末なものであるが、その爲月も室の中へ光がさし込んで、一寸情趣のある樣である。

【六】
妻と子は漁師の亡靈を見つけたが、
妻「あゝあのやうに夫の姿が見えるのだけれど、あれと一言でも聲をかけたなら姿が消えてしまふだらう」
と親子が手を取りあつて、たゞ泣くより外なかつた。
亡靈「あゝ、以前はあのやうに親しくしてゐた妻や子であるのに、今はこのやうに自分を疎んじて近づかうとはせず、たゞ泣くばかりで不安な氣持であるのだ。自

○横障の雲―慧日の光を障蔽する煩惱の雲。
○姫小松―千代童を指す。
○木隠れ笠―わが子はいづくに隠れたのであらうといふを、松の緣で木隠れといひ、手向の笠の緣で隠れ笠と續けた。
○輪田の笠松―攝津國兵庫輪田岬附近にあつた名松。笠の緣で出した。
○箕面の瀧―攝津國豐能郡箕面山中にある。箕の緣で出し、瀧つ波を涙に喩へた。
○立つや卒都婆の―波の緣語「立つ」を卒都婆の造立にいひかけた。
○そとは誰―卒都婆の音を重ねて「外は誰」といつた。自問するのである。
○松島や小島の苫屋―松島は陸前にある。新古今集藤原俊成の歌―立ち歸りまたも來て見ん松島や小島の苫屋波にあらすな―を借り、苫屋の序とした。
○外の濱千鳥―苫屋の外にゐるを外の濱にいひかけ、濱千鳥を靡を立て泣く形容とした。

【七】往事渺茫として―和漢朗詠集白樂天の詩句「往事渺茫都似夢、舊遊零落半歸泉」を引いた。

いとほしき如くにこそ。鳥獸も思ふらめと。千代童が髪をかき撫でて（と子方へ少し行き）。あらなつかしやといはんとすれば

とシテ子方の前へづか〳〵と行く。子方脇座へ歸り下に居る。

シテ子方を見失ひたる心にて眞中へ下り、

地上歌「横障の雲の隔てか悲しやな（しをり）雲の隔てか悲しやな今まで見えし姫小松のはかなやいづくに。木隠れ笠ぞ津の國の（と笠を見）。輪田の笠松や箕面の瀧つ波もわが袖に。立つや卒都婆のそとは誰簑笠ぞ隔てなりけるや。松島や。小島の苫屋うちゆかしわれは外の濱千鳥。音に立てて泣くより外の事ぞなき

と、しをりながら仕手柱際へ行き下に居る。

【七】

地クリ「往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊遊零落して半ば。泉に歸す

シテ「とても渡世を營まば。士農工商の家にも

分がこのやうに子を可愛く思ふやうに、鳥獸だつてわが子を可愛く思ふであらうのに、どうして自分はあのやうに殺生したのだらう。今わが子のかわいさに、千代童の髪を撫でて、あゝなつかしいと言はうとすれば、煩惱の迷ひに苦しめられて、その姿が見えないのだ。何といふ悲しいことだらう。今こゝにゐたわが子は何處へ行つたのだらう。わが子の姿は見えず、悲し涙が瀧のやうに流れて袖を濡らすばかりだ。かうして家の外に立つてゐるのは誰であらう、この家の主人であつた自分ではないか。それだのに、今は隔てられて妻子に會ふことが出來ないのだ。あゝこの苫屋の内が見たい、なつかしい、けれど會ふことも出來ず、かうして外で泣いてゐるより仕方がないのだ。

【七】白樂天の詩に『昔の事を思ひ出すとまるで夢のやうだ、その頃の友達は既に大部分死んでしまつてゐるのだ』とある通り、この世は果敢ないものなのだ。その果敢ない世の中で、同じく生活の途を

○士農工商―漢書食貨志に「士農工商四民有レ業、學以居、位曰レ士、闢レ土殖レ穀曰レ農、作レ巧成レ器曰レ工、通レ財鬻レ貨曰レ商」
○琴棊書畫―いづれも高尚な嗜み。
○遲々たる春の日―遲々は日暮れの遲いこと。和漢朗詠集白樂天の句に「遲々兮春日、玉鶯啜兮溫泉溢」
○秋の夜長し―同じく白樂天の句に「秋夜長夜長無レ眠天不レ明、耿々殘燭背レ壁影」
○漁火白うして―漁火の影が白くなつて夜の明ける事
○九夏―夏三箇月九十日。
○玄冬―冬に同じ。
○鹿を逐ふ獵師は山を見ず―一事に熱中して他のことを顧みない喩。淮南子に「逐レ鹿者不レ顧レ兎、又逐レ獸者目不レ見レ太山」
○忘れ草の追鳥―忘れ草は萱草の異名。忘れるといひかけ、草の緣語「生ひ」の音を承けて追鳥と續けた。
○高繩―繩に鵠を塗つて鳥のかゝるのを捕へる獵法。
○さしひく―さしは高繩を設ける事。ひくは高繩に鳥のかゝつた時引いて捕へる事。これを汐のさし引きにかけて、汐の字を出した。
○末の松山―陸前國宮城郡

生まれず
地「又は琴棊書畫を嗜む身ともならず
シテ「唯明けても暮れても殺生を營み
地「遲々たる春の日も所作足らねば時を失ひ。秋の夜長し夜長けれども。漁火白うして眠る事なし
シテ「九夏の天も。暑を忘れ
地「玄冬の朝も寒からず
地クセ「鹿を逐ふ獵師は。山を見ずといふ事あり。身の苦しさも悲しさも。忘れ草の追鳥高繩をさしひく汐の。末の松山風荒れて。袖に波越す沖の石。又は干潟とて。海越しなりし里までも。千賀の鹽竈身を焦がす。報いをも忘れける事業をなしし悔しさよ。そもそも善知鳥。やすかたのとりどりに。品變りたる殺生の

立てゝ行くならば、せめて人らしい士農工商の何れかの家に生まれてもすればよかつたものを、それは叶はず、又琴棊書畫などといふ風流を嗜むこともなく、唯明けても暮れても、殺生ばかりを仕事として、春の日永にもたゞ獵の仕事に追はれて時を過し、秋の夜長にはまた夜長の時節相應に、海に出て夜の明けるのも知らずに、漁をして眠ることもせず、殺生の爲には暑い夏にも暑さを忘れ、寒い冬にも寒さを忘れてゐたのだ。――

○鹿を逐ふ獵師は山を見ず―といふ諺がある。全くその通りで、たゞ獵に夢中になつて、身の苦しい事も悲しい事も忘れて、追鳥や高繩など、鳥を捕へる事に苦心したり、汐のさしひく海に出て、風が荒れて袖の濡れるのも忘れて、漁に夢中になつたりして、後世の報いをも忘れて殺生をしたのは、今になつて思へば悔しいことだ。
それにしても、あの善知鳥は、外の鳥は捕るのに色々手段を考へるのだが、この鳥は可哀想な馬鹿な奴で、巢を作るのに、

八幡沿海の沙丘。古今集に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」など詠まれた所であるから「波こす」の序に用ゐ、涙の譬とした。○沖の石―千載集讃岐の歌「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなき」を借り、その汐干を承けて干潟と續けた。○千賀の鹽釜―陸前國宮城郡の名勝。近くなるを千賀といひかけ、鹽釜に寄せて身を焦がすといつた。○やすかたのとりどり―やすかたの鳥を樣々の意のとりどりにかけた。○品變りたる―追鳥・高繩などと獵法が色々ある中で。○筑波嶺の―筑波嶺は常陸國にあり、木々の枕詞とした。

―羽をしき―羽を敷いて巣を造る。敷きを頻波に通はせて、浮巣―蘆又は桔梗で水上に作る鳥の巣。○かけよかし―かけるは巣を作ること。

落雁の―瀟湘八景の一に平沙落雁があるので、平沙を承けて落雁の羽といひかけ、はかなやと續けた。

―そもそも善知鳥―と杖を持ちて立ち、これより謠に合せて仕科。

シテ『中に無慙やなこの鳥の地『思かなるかな筑波嶺の。木々の梢にも羽をしき波の浮巣をもかけよかし。平沙に子を生みて落雁の。はかなや親は隱すと。すれどうとうと呼ばれて、子はやすかたと答へけりさてぞ取られやすかた

【八】シテ『うとう

「カケリ」

シテ鳥を捕ふる仕科。

地『親は空にて血の涙を（杖をすてゝ笠を持ち）。親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと菅蓑や。笠を傾けここかしこの。便りを求めて隱れ笠。隱れ蓑にもあらざれば。猶降りかかる。血の涙に（笠をすて）日も紅に染み渡るは。紅葉の橋の。鵲か

高い木の梢に羽根を敷いて造るか、それとも水上に浮巣を造りでもすればよいものを、雁のやうに砂原に子を生むものだから、親鳥は子鳥を隱してゐるつもりでも、親鳥の聲に似ていうとうと呼ぶと、子鳥がやすかたと答へる、それで居所が知られて捕られ易いのだ」

【八】

「カケリ」

に鳥を捕へる仕科を示す。

亡霊、しかしあの子鳥を捕つた時は、親鳥が悲しんで血の涙を降らす、あれが身にかゝると死んでしまふので、血に濡れてはならないと、簑や笠で身を掩うて、あちらこちらと逃げるのだが、隱れ笠・隱れ簑ではないから、身を隱しきることは出來ず、降りかゝる血の涙に眼もくらみ、あの七夕の鵲の紅葉の橋のやうに、からだが眞赤にたつてしまふのだ。

○うとうと呼ばれて―獵師が親鳥の聲を眞似て「うとうと」と呼ぶと。うとうとやすかた―を親鳥の聲は「うとうと」子鳥の聲は「やすかた」と解して脚色した。○取られやすかた―取られ易しといひかけた。

【八】

○菅簑―菅で造つた簑。濡れじとすといひかけた。○隱れ笠隱れ簑―本曲の末に記す。○目も紅に―目もくらむ、目が紅に染まる、二意を兼ねていふ。○紅葉の橋の鵲―本曲の末に揭ぐ。○化鳥―往生要集無間地獄の項に「有二惡鳥一、身大如レ象名曰二閻婆一、嘴利出レ炎、熱二罪人一、遂上二空中一、東西遊行」○眼をつかんで―同書に「此鳥探二啄眼睛一、而噉二食之一」○さけばん―裂く、叫ぶの二意を兼ねた。○鴛鴦―啞にかけていふ。○羽拔鳥―羽の脫け變る頃の鳥。○交野―河内國北河内郡で古の御狩場。遁れ難しといひかけた。○心うとう―心憂といひかけた。

シテ引續き次の謠に合せて舞ふ。

地『婆婆にてはうとうやすかたと見えしも。うとうやすかたと見えしも。冥途にしては。化鳥となり罪人を追つ立て鐵の。嘴を鳴らし。羽をたき銅の爪を。磨き立てては。眼をつかんで肉をさけばんとすれども猛火の煙に咽んで聲を。上げ得ぬは鴛鴦を殺しし科やらん。遁げんとすれど。立ち得ぬは。羽拔鳥の報いか

と眞中に安坐し、

シテ『うとうは。却つて鷹となり

地『われは雉とぞなりたりける。遁れ交野の狩場の吹雪に、空も恐ろし（立上り）、地を走る。犬鷹に責められて。あら心うとうやすかた、安き隙なき身の苦しみを。助けてたべや。御僧助けてたべや。御僧といふかと思へば失せにけり

「助けてたべや」と仕手柱際にてワキに胸ざしし、返句に留拍子を踏む。

獵師の亡靈は婆婆の思出を語つてゐたが、今は地獄の責め苦に惱まされて、

亡靈『婆婆にゐた時は善知鳥は捕へ易い鳥だと思つてゐたが、今この地獄では、これが怖ろしい化鳥となつて罪人を追ひたて、鐵の嘴を鳴らして羽ばたきをし、銅の爪を磨き立てて罪人の眼をつかみ出し、からだを引き裂く。その怖ろしさ苦しさに聲を出して叫ばうとするが、猛火の煙に咽んで聲が出ない。さては鴛鴦を殺した科で啞になつたのであらうか、どうかして遁げ出さうとするが、立つことも出來ないのは、羽拔鳥を殺した報いであらうか。婆婆での善知鳥が今この地獄では怖ろしい鷹となつて、自分がそれに殺される雉の身分となつたのだ。そして逃げても逃げおほすことが出來ず、空を飛べば鷹に追はれ、地を走れば犬に責められ、少しも心の安まる時はなく、この苦しめられてゐるのだ。どうぞお僧さま、この苦しみをお助け下さいませ」

といふかと思ふと、消え失せてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「これは諸國……われ未だ陸奥外の濱を見ず……禪定申さばやと存じ候（下懸、左ノ光悦本ト略同ジ）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「これは諸國一見の……われ未だ陸奥外の濱を見ず候程に……立山禪定申さばやと存じ候（光立山禪立申さず候程に。此たびおもひたち立山禪定申。それより陸奥のはてまて行脚せはやとおもひ候）。急ぎ候程にこれはや（光ナシ）……　【二】ホウ（光こなたの事にて候か）何事にて候ぞ。シテ「陸奥へ……言傳申し候（光ナシ）べし外の濱にては（光ナシ）……ワキ「これは……承り（光仰）候ものかな……シテ「けに確かなる……や（光ナシ）思ひ出で……　【四】ワキ「いかにこの屋の内へ（光ナシ）案内……ワキ「これは諸國……その樣すさましき（光けなる）老人のありしが（光ナシ）……言傳（光申）すべし外の濱にては（光ナシ）獵師にて候者の去年の秋……その妻子（光ナシ）の宿を尋ねて……手向けてくれよと仰せ候（光たまはり候へと申へきよし仰られし）程に……その時召されたる（光ナシ）麻衣（光の衣）の

附記

○呼子鳥―古今傳授三鳥の一で、種々說を立てられてゐる鳥であるが、郭公の異名であるといふ。萬葉集卷一に「やまとには鳴きてかくらむ呼兒鳥、きさの中山呼びぞ越ゆなる」但しこゝにはわが子を呼ぶ鳥との意。

○うとうやすかた―古來疑問の語としてゐるが、大日本國語辭典には「游禽類に屬する鳥。體は鳩の大さにて、羽色は一體に灰黑色、嘴短大にて橙黃色と黑色とを帶ぶ。左右の鼻間に角狀突起を有す、北海道の海岸に多く產すといふ」

○隱れ笠隱れ簑―これを着たものは、その形が人に見えないといふ。寶物集に「隱れ蓑といふ物こそよき寶にてあるべけれ、食ひ物・衣る物、欲しきと思はば、心に任せて取りてんず、人の隱れていはんずる事をも聞き、又ゆかしからん人の隱れんをも見てんず。されば程の寶やはあるべき」

○紅葉の橋の鵲―七夕の夜、鵲が羽を竝べて橋を作り、牽牛・織女の二星を會はせるが、二星別れの時、悲しさに泣く涙が鵲の羽に染まつて紅になる、これを紅葉の橋といふ。古今集讀人知らずの歌に「天の川紅葉を橋に渡せばや、たなばたつめの秋をしも待つ」

采女（うねめ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 三番目　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　旅僧、**ワキツレ**　從僧（二人）、**前シテ**　里女（采女の靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　采女

【所】 大和國　春日の里

【時】 三月

【作者】 能本作者註文二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀後人加筆の永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能に〔猿澤〕を演じたとあるは、今の〔采女〕のことであらうか。言經卿記文祿四年三月二十七日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 諸國一見の旅僧が奈良春日明神に參詣すると、一人の里女が來て、當社の謂れを語り、なほ僧を誘つて猿澤の池へ行き、昔帝の寵幸を辱うした采女が、帝の御心變りを恨んで、この池に入水した事を物語り、自分はその幽靈であるといつて、池の中に入る。それで、僧が池の邊で讀經回向してゐると、采女が現れ出て、成佛を喜

び、采女についての逸話を語り、歌舞を奏して、又池の中に入つてしまふ。

【出典】 大和物語に、

昔奈良の帝に仕うまつる采女ありけり。顔かたちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人なども、よばひけれども、あはざりけり。そのあはぬ心は、帝を限りなくめでたきものになん思ひ奉りける。帝召してけり。さて後またも召さざりければ、限りなく心憂しと思ひけり。夜晝心にかゝりて覺え給ひつゝ、戀しくわびしく覺え給ひけり。帝は召しゝかとも思さず。さすがに常には見え奉る。なほ世に經まじき心地しければ、夜みそかに出でて、猿澤の池に身を投げてけり。かく投げつとも、帝はえ知ろしめさざりけるを、事の序ありて人の奏しければ、聞し召してけり。いといたうあはれがり給うて、人々に歌よませ給ふ。柿本人麻呂、

我妹子が寢くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

とよめる。時に帝、

猿澤の池もつらしな我妹子が玉藻かづかば水も干なまし

とよませ給うけり。さてこの池に墓せさせ給うてなん歸らせおはしましけるとなむ。

とあるに據つて、脚色したものであらう。

【概評】 三番目雜物として普通の作であるが、複式能の一般的形式からいふと、世阿彌の所謂序段に、ワキ次第かなく、(ワキ道行が上歌となつてゐるが、これは實質には變りがない)、破二段が二節から成り、その代り破三段に相當するロンギがなく、急段に相當する後段にはクセがあつて、普通曲よりは稍長い。內容の方では、これも悲戀說話をそのまゝ題材としたものであるが、その後ジテは墮獄の苦を訴へることがなく、早くも變成男子となつて、「采女とな思ひ給ひそ」といひ、喜びの歌舞を奏してゐるのが、戀愛の執著に歎く他の女性と異つた點である。

【一】

【一】 名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキ同樣の裝束（着附は無地熨斗目）にて、舞臺に入り、ワキは正面に向き、（ワキヅレは下に居り）

【一】 前段

舞臺は初め京都で、ワキ旅僧、ワキヅレ從僧を圖へて登場。

○洛陽―京都。
○南都―奈良。
○彌生―三月の異名。
○夜をこめて―夜のまだ明けない内に。續後拾遺集大中臣頼基の歌に―東雲に起きて見つれば櫻花まだ夜をこめて散りにける哉―
○下り月―二十日頃の月。都を下り、といひかけ、月影の殘ると續けた。上に「彌生の十日餘り―とあるのは「下り月」と相應しない。「廿日餘り―」を誤り傳へたのであらう。下懸には「末つ方」とある。
○深草山―山城國紀伊郡。稲荷の南東に續いた山。霞深きといひかけた。
○木幡の關―同國宇治郡にあり、深草の南に當る。昔矢烏峠と城山との間に關があつた。
○宇治の中宿―宇治は同國宇治郡にある。源氏物語椎本卷に「宇治のわたりの御中宿―とあるので、中宿の字を出した。
○井手の里―山城國綴喜郡にある。中宿を出でといひかけた。
○奈良坂―奈良山の北坂。京から奈良へ入る口。
○春日の里―今の奈良市をいふ。

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は都に候ひて。洛陽の寺社殘りなく拜みめぐりて候。又これより南都に參らばやと思ひ候

ワキサシ『頃は彌生の十日餘り。花の都を旅立ちて。まだ夜をこめて東雲の

と、ワキヅレも立ちて向合ひ、

ワキヅレ上歌『影ともに。われも都を下り月。われも都を下り月。殘るあしたの朝霞。深草山の末續く。木幡の關を今朝越えて。宇治の中宿井手の里。過ぐればこれぞ奈良坂や。春日の里に着きにけり春日の里に着きにけり

ワキ「宇治の中宿井手の里」と正面に向きて二三足出でまたもとに歸りて、春日に着きたる心。上歌濟みてワキは正面に向きて、

ワキ「急ぎ候程に。春日の里に着きて候。心靜かに社參申さばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。この間中は京都に居て、都の神社佛閣を殘らず參拜して歩きました。又これから奈良へ參らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「今は三月十日(廿日の誤か)頃で、都は花も眞盛りであるが、まだ夜の明けない間にこゝを出發し、空に消え殘る月影を踏んで行くうちに、朝霞の深くかゝつた深草山や、それから木幡の關を越えて、宇治に一休みをし、井手の里を過ぎたかと思ふと、もう奈良坂にかゝつて、はや春日の里に着いた」

といつてゐる間に、舞臺は奈良春日の里となる。

僧「道を急いだので、思ひの外早く春日の里に着きました。これから心靜かに春日の社に參詣しませう」

と春日神社に參詣する心。

【一】

○宮路正しき―社へ參る道の正しいと、神の垂跡の正しいとに意を兼ねた。

○春日野の寺―興福寺。春日神社はこの所の鎮守である。

○更闌け夜靜かにして―和漢朗詠集長文成の句「更闌夜靜、長門閣而不レ開、月冷風秋、團扇舍而共絶」（遊仙窟）を引いた。

○四所明神―春日明神は、第一殿常陸鹿島の建甕槌命、第二殿下總香取の伊波比主命、第三殿河内枚岡の天兒屋根命、第四殿伊勢太神宮の比賣神、四座の神を祭る。下の「神護景雲二年」の註釋參照。

○寶前―神前。

○耿々―あきらか。

○燈火も世を背けたる―和漢共憐深夜月、踏花同惜少年春」を引き、背の字を倚が世を遁れる意にかけ、神前の燈と深夜の月と相對した景を叙す。

○しくものなくや―上の「朧々」を承けて、新古今集大江千里の歌「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」を引いた。

といひて、脇座へ行き下に居る。

次第の囃子にて、シテ里女、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて、木の葉の小枝を左手に持ちて出で、常座に立ち、囃子座の方に向きて、

シテ次第「宮路正しき春日野の宮路正しき春日野の寺にもいざや參らん

地取に正面に向きて、

シテサシ「更闌け夜靜かにして、四所明神の寶前に。耿々たる燈火も、世を背けたる影かとて、共に憐む深夜の月朧々と杉の木の間を洩りくれば、神の御心にもしくものなくや思すらん

シテ下歌「月に散る花の蔭行く宮めぐり。上歌「運ぶ歩みの數よりも。運ぶ歩みの數よりも、積る櫻の雪の庭。また色添へて紫の一花を垂れたる藤の門明くるを春の、景色かな明くるを春の景色かな

「また色添へて紫の」といひて、正面へ二三足出で、木を供ふる心にて木葉を下に置き、もとへ歸り正面に向きて「花を垂れ

【二】

囃子は春日社前で、シテ采女の亡靈、里女の姿で手に榊木を持つて登場。

シテ「忝くもこの地に御垂跡遊ばした興福寺内の春日明神へお參りしませう」

夜が更けて、あたりは靜かで、たゞ春日の四所明神御神前の御燈明だけが、世離れた淸らかな姿で耿々と輝き、これと相對して、夜更けの月が杉の木の間から朧な光で洩り出る景色の面白さ、さぞ神樣も、この樣を何よりも嬉しく思しめすことでせう。

月夜に美しい花の散るこの木蔭を通つていつも參詣してゐるが、この櫻花の散つた庭は雪が積つたやうで、また一段と趣を添へてゐる。ほんとにこの藤原氏の氏神樣春日神社の春景色は、まあ何といふ美しいことでせう」

といひながら社前に近づき、木を植ゑる樣。

○月に散る花の蔭―榮花物語の歌「月かげに散りしく庭の櫻ばなかきあつめても類ひなきかな」の想をとつた。

○積る櫻の―參詣の度數の積るを櫻の雪の積るにいひかけた。

○藤の門―藤原氏の榮えを藤咲く門に喩へ、門の開くを夜の明くにいひかけた。

春日明神は藤原の氏神である。

【三】

○神護景雲二年―稱德天皇御宇。大鏡裏書に「神護景雲二年戊申、藤氏四所明神奉レ祝二春日山一」。神社考に「神護景雲元年六月廿一日武雷神自二常陸國鹿島一出求二棲處一駕二白鹿一持二神枝一爲レ鞭、到二于伊勢國名張郡一、中臣連時風秀行者侍從、十二月七日入二於大和國阿倍山一、同二年正月九日至二三笠山一告二事於三神所一、於レ是齎主命者自二下總國香取一來、天兒屋根命者自二河內國枚岡一移、姫太神者自二伊勢國一而從來、共於二三笠之山一而太二立宮柱於底磐根一、以崇二奉四所大神一」

○枚岡―河內國北河內郡。

○影向―神靈の現れ給ふこと。

たる」と謠ふ。

ワキシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる女性に尋ね申すべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「見申せばこれ程茂りたる森林に（と脇正面の下を見）。重ねて木を植ゑ給ふ事不審にこそ候へ

シテ「さては當社始めて御參詣の人にて御入り候か

ワキ「さん候始めてこの所に參りて候。當社の謂れ委しく御物語り候へ

シテ（語）「抑も當社と申すは、神護景雲二年に、河內の國枚岡より（と地謠座の方に向き）。この春日山本宮の峯に影向ならせ給ふ（と正面に向き）。されば この山。もとは端山の蔭淺く。木蔭一つもなかりしを。蔭頼まんと藤原や、氏人よりて植ゑし木の、

【三】

旅僧はこの樣を見て、

僧「もうし女子衆、一寸お伺ひします」

女「私でございますか、何の御用でございます」

僧「お見受けするに、木を植ゑて居られるやうだが、このやうに木の生ひ茂つてゐる森へ、なぜ木をお植ゑになるのが、不思議に思はれるのです」

女「そのやうにお尋ねになる所を見ると、あなたはこのお社へ始めて御參詣になつたのでございますか」

僧「さうです、始めてこちらへ參つた者です。どうかこのお社の謂れを委しく話して下さい」

女「この明神は、神護景雲二年に、河內國枚岡からこの春日山本宮の峯に御出現になつたのでございます。その當時この山は兀山で木といふものが一つもなかつたのでございますが、藤原氏一門の人達がこの神の御加護を受けたいとお願ひして皆がよつて木を植ゑましたので、神の御利益により、このやうな木深い繁山とな

○端山―樹木の少い山。繁山に對す。
○蔭頼まんと―神の御影と木蔭と、意を兼ねていふ。
○氏人よりて―藤原氏の人人が集つて。
○もとより―木の緣語。
○當社の御誓ひ―春日明神の木葉を惜しみ給ふ古事、未だ見當らない。
○人の煩ひ繁き木の―煩ひの繁きを葉の繁き木にいひかけた。人の煩ひの多いにつけても、神の惠みの深いやうに祈るとの意。
○諸願成就―就を樹に通はせ、諸願成就の爲に樹を植ゑ置くといふ。
○慈悲萬行―春日明神の菩薩號。神社考に「春日大明神或號慈悲萬行菩薩」。慈悲萬行はすべてのものに對して慈悲深い意。その慈悲を日の光に喩へた。
○三笠の山―春日神社のある山の總名。
○五重唯識―萬法唯心を觀ずる五重の觀法。粗より細に入り次第に唯識の理法に歸する法。遣虛存實識、捨亂留純識、攝末歸本識、隱劣顯勝識、遣相證性識をいふ。これを月に喩へ、神は衆生にこの悟りを與へ給ふといふ。

もとより惠み深き故。程なくかやうに深山となる。然れば當社の御誓ひにも。人の參詣は嬉しけれども。木の葉の一葉も裳裾に附きてや去りぬべきと。惜しみ給ふも何故ぞ。人の煩ひ繁き木の。蔭深かれと今も皆。諸願成就を植ゑ置くなり。『されば慈悲萬行の日の影は。三笠の山にのどかにて。五重唯識の月の光は。春日の里に隈もなし

地下歌。蔭頼みおはしませ。唯かりそめに植うるとも。草木國土成佛の。神木と思し召しあだにな思ひ給ひそ。上歌。荒金のその始め。荒金のその始め。治まる國は久方の（と右の方へ向き）。あめはは こぎの絲より花開け香殘りて（と二三足出で）。佛法流布の種久し（正面に直し）。昔は靈鷲山にして。妙法華經を說き給ふ。今は衆生を度せんとて大明

つたのでございます。それで、神樣の仰せにも、人が參詣してくれるのは嬉しいけれど、木の葉一つでも裳裾につけて持つて行きはしないかと、それが惜しまれると仰せられましたので、この煩ひの多い世の中で、神の御惠みを受けたい爲、今でも皆が諸願成就の祈りに、木を植ゑるのでございます。かうして、慈悲萬行菩薩春日明神はこの三笠山にあつて、日光のやうに我々に慈悲を垂れ、月の光の行き渡らぬ隈のないやうに我々衆生すべてに悟りをお與へ下さるのでございます。――

あなたも、この神を御信心なさいませ。ほんのかりそめに植ゑた木でも、皆諸願成就のありがたい神木であることをお考へになつて、決して粗末に遊ばしてはいけません。

抑もわが國は、國土の始めよりこの方、久しく太平のうち續いた國で、草木もその惠みを受けて、綠も色濃く花も美しく咲き匂ふのでございますが、それがまたやがて佛法流布のよい種となりましたもので、釋迦如來も昔は靈鷲山で妙法蓮華經をお說きになつたのですが、今は衆生

○草木國土成佛―一頌四句の偈文「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」を引いた。
○あらかね―土の枕詞であるのを、直に國土の意に用ゐた。
○久方の―あめの枕詞。治まる國は久しといひかけた
○あめはは―こぎ―文意不明
拾葉抄には「紀中納言の仙家の春雨の詩に云ふ養得自爲二花父母一、雨は母、子は木なりと續けたり」といふ。
○靈鷲山―中印度摩竭陀國にあり、釋迦がこゝで法華經を說いた。
○度―濟度。衆生を苦海より濟ひ出して、常樂の彼岸へ渡すこと。
○鷲の高嶺―靈鷲山に同じ
○菩提樹―釋迦がその樹下で佛道を成就したといふ木
社前の木をこれに喩へた。
○松にも花を春日山―藤の花が松にかゝつて、花を咲すを春日にいひかけた。
○靈山―靈鷲山の略。
【四】○猿澤の池―春日明神の附近、今奈良公園にある。

神と現れこの山に住み給へば（と上を見）鷲の高嶺とも。三笠の山を御覽ぜよ（とワキへ向き）。さて菩提樹の木蔭とも、盛りなる藤咲きて松にも花を春日山。のどけき影は靈山の淨土の春に（と右へ廻り）。劣らめや淨土の春に劣らめや、と常座に立つ）

【四】

シテ「いかに申し候。猿澤の池とて隱れなき名池の候を御覽ぜられて候か

ワキ「承り及びたる名池にて候御敎へ候へ

シテ「こなたへ御出で候へ

正面へ二三足出で、池に來たる心にて、

シテ「これこそ猿澤の池にて候へ。又思ふ子細の候へば。この池のほとりにて。御經を讀み佛事をなして賜はり候へ

ワキ「易き間の事佛事をばなし申すべし。さて誰と志して回向申し候べき

を濟度する爲に、大明神と現れて、この山にお住みになつてゐるのでございます。それで、この三笠山を靈鷲山とも御覽になり、この木々を菩提樹ともお思ひになるのがよろしうございます。殊に藤の花盛りには、その花の松にかゝつた樣など、春日山ののどやかな樣は、靈鷲山淨土の春景色にも劣らないのでございます」

【四】

女「さう申せば、猿澤池といつて有名な池がありますが、御覽になりましたか」

僧「それは噂に聞いてゐる有名な池です、どうぞ敎へて下さい」

女「では、こちらへお出でなさいませ」

二人とも池へ來た心で、僧は池畔に立る

女「これが猿澤の池でございます。つきましては、少し事情がございますので、どうかこの池の邊で御經を讀んで回向をして下さいませ」

僧「お易い事です、お回向致しませう、ところで、その回向はどなたの爲にするのです」

○采女―帝の御膳給仕に仕へた女官。諸國の郡領などの女で容儀才能のある者を召されたのである。
○天の帝―天皇を崇めていふ古語。ある天皇との意。大和物語には「采女の帝」とある。
○吾妹子が寢ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき―大和物語・拾遺集に見えた柿本人麻呂の歌を天子の御製の如く作りなしたのである。

○上童―宮中又は貴族に召使はれる童男・童女。

シテ「これは昔采女と申しし人。この池に身を投げ空しくなりしなり。されば天の帝の御歌に。『吾妹子が寢ぐたれ髪を猿澤の。池の玉藻と見るぞ悲しきと。詠める歌の心をば知ろしめされ候はずや

ワキ「げにげにこの歌は承り及びたるやうに候。委しく御物語り候へ

シテ「昔天の帝の御時に。一人の采女ありしが。采女とは君に仕へし上童なり。始めは叡慮淺からざりしが。程なく御心變りしを。及ばずながら君を恨み參らせて。この池に身を投げ空しくなりしなり

ワキ「げにげにわれも聞き及びしは。帝あはれと思し召し。この猿澤に御幸なつて

シテ「采女が死骸を叡覽あれば

女「それはかういふ人の爲にお願ひ致したいのでございます。昔采女といふ役をしてゐました者が、この池に身を投げて死にました。それで、天子の御製に――『吾妹子が寢ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき』
（自分の愛してゐた女の亂れ髪が、池の藻のやうになつてしまつたのが悲しい）
と、お傷みになりましたが、その御歌の事を御存じではございませんか」

僧「いかにもこの歌は伺つたことがあるやうに思ひます。その事を委しく話して下さい」

女「昔ある天子の御代に、一人の采女がありました。采女と申すのは、君のお側近くにお仕へしてゐる女を申すのでございますが、この女を始めは天子が深く思しめしたのでございますが、やがて御心變り遊ばしたのを、采女は身に及ばないことながら、君をお怨み申し上げて、この池に身を投げて死んだのでございます」

僧「成程さうでした。私が聞きました事には、天子がこれをあはれと思しめし、この猿澤池へ行幸遊ばしたとの事ですが……」

○翡翠―川蟬の羽の色。美しい髪の形容。
○蟬娟の鬢―なよやかに美しい鬢の毛。白樂天の詩句に「蟬娟兩鬢秋蟬翼」
○桂の黛―桂は月中にある木であるのを、月の異名として、三日月の如く美しい黛といふ。
○丹花の唇―丹は朱。紅の花片の如く美しい唇。

○水の月取る猿―無謀な望みを戒める譬。僧祇律に「佛告二諸比丘一、過去世時、波羅奈城有二五百獼猴一、見二樹下枝一、手尾相接入レ井取レ月、枝折一齊死一、夫木抄土御門院御製に―月影に命をかふる猿よりも沈みはてぬるわが身なりけり」
○猿澤のいける―月とる猿を猿澤、猿澤の池を生けるにいひかけた。

ワキ『さしもさばかり美しかりし
シテ『翡翠の髪ざし蟬娟の鬢
ワキ『桂の黛
シテ『丹花の唇
ワキ『柔和の姿引きかへて
シテ『池の藻屑に亂れ浮くを。君もあはれと思し召して
地上歌『吾妹子が。寢ぐたれ髪を猿澤の。寢ぐたれ髪を猿澤の。池の玉藻と。見るぞ悲しきと。叙慮にかけし御情。かたじけなやな下として。君を恨みしはかなさは(としをり)。喩へば及びなき水の月取る猿澤の(と横正面を見)。いける身と思すかやわれは采女の幽靈とて。池水に入りにけり池水の、底に入りにけり

と右へ小廻りして、常座にて開き、靜かに中入。ワキ地上歌の初めにもとの座に歸り下に居る。

左、さうでございます。天子がその采女の死骸を御覽になると、生前あのやうに美しかつた、綠なす髪、美しい鬢、三日月のやうな黛、赤い唇、あのやさしかつた姿に全く消え失せて、池の藻屑に亂れて浮き上つたのを、天子もあはれに思しめして――

『吾妹子が寢ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき』

と、深い思召を感いたのは、ほんとに異れ多いことでございます。下の身を以て君をお怨み申し上げたのは、實にあさはかな事で、譬へば藻が水に映る月を取らうとするやうな無謀なことでございます。……かう申す私を、この世の生きてゐる者とお思ひになりませうが、實は私はその采女の幽靈でございます」

といつて猿澤池に身を投げてしまつた。

【間】

○すさみ参らせ―奥めさめること、御寵の裏へたことをいふ。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて、名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。春日の里に住居する者にて候。この間は春日明神に参らす候間。今日は参詣申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れぬ御僧の御座候が。いづ方より参詣なされ候ぞ

ワキ「是は都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵このあたりの者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。當社に於て木を植ゑて神の御心に叶ふ謂れ。又天の帝の御時。采女の身を投げ空しくなりたる子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかかり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ當社春日大明神と申すは。神護景雲二年河内國枚岡の庄より。この上へ飛び移り給ふ。その頃は端山にて御座候が。その時の御託宣に。木を植ゑて得させよ思ふ願ひを御叶へあるべきとの御事なれば。我も〳〵と木を植ゑ願をかけ候へば。諸願成就仕り候間。程なくかやうの繁山となり申して候。さて又采女と申したる御方は。天の御門に仕へ御申しありたるが。初めは叡慮に叶ひ君邊少しも去らず御座候ひしが。中頃すさみ参らせられ候間。女性のはかなさは。君に御心變り行きては命ありても詮なしとて。猿澤の池へ身を投げ空しくなり給ひて候。さやうの事も存ぜず候處に。是なる柳の木に召したる衣を懸け置き給ふ間。これは采女の衣なりとて。池の内を見渡せば。采女

の身を投げて御座候間。驚き騒ぎその由奏聞申しければ。君もあはれと思し召し。猿澤の池へ行幸あつて。采女の姿を叙覽あるに。君邊に仕へし時は月をも花をも欺く姿なりしが。その姿に引き替へて。池の藻屑なす御髪に亂れ。あはれなる樣體を叙覽あつて。その時の御歌に。吾妹子がねぐたれ髪を猿澤の。池の藻屑と見るぞかなしきと。かやうに遊ばしたると承り及びて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく女性一人來られ候程に。卽ち詞をかはして候へば。當社の謂れ懇に語り。この所へ同道申され。池の邊にて御經を讀み。佛事をなせと申され候程に。いかなる事ぞと尋ねて候へば。采女の事を身の上のやうに申され。池の邊にて姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては采女の幽靈顯れ。御詞をかはしたると存じ候間。暫く御逗留あつて。采女の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて、狂言は引く。

【五】

ワキヅレ上歌「待謠」池の波。よるの汀に座をなして。よるの汀に座をなして假に見えつるまぼろしの。

【五】

後段

無二は猿澤池。

豐、この夜中、池の汀に座を作つて、前に

○よるの汀ー波の寄るを夜の汀にいひかけた。

○采女の衣の色々に―采女は色々に彩色した制服を着るので、色々の佛事にいひかけたのである。

【六】

○心の水―心の濁らないことを水に譬へた語。止觀に「心水澄清珠相自現」「髮がし」浮かむ―は水の縁語。

○心の猿―意馬心猿（煩惱情慾に心の動く譬）の語を文の綾として猿澤と續けた

○蓮の臺―淨土に往生した者の坐る蓮華の臺座。

采女の衣の色々に。弔ふ法ぞ誠なる弔ふ法ぞ誠なる

【六】

一聲の囃子にて、後ジテ采女、前の裝束の唐織を脱ぎ、紫長絹・緋大口を著て、常座に立ち、

後ジテサシ『ありがたや妙なる法を得るなるも。心の水と聞くものを騒がしくとも教へあらば浮かむ心の猿澤の。池の蓮の臺に坐せん。よくよく弔ひ給へとよ（とワキへ向く）

ワキ『不思議やな池の汀に現れ給ふは。采女と聞きつる人やらん

シテ「恥かしながら古の。采女が姿を現すなり。『佛果を得しめおはしませ

ワキ『もとよりも人々同じ佛性なり。何疑ひも波の上

シテ『水の底なるうろくづや

ワキ『乃至草木國土まで

○同じ佛性―佛性は佛たるべき素質。涅槃經に「一切衆生悉有二佛性一」

○佛果―成佛の果報。

○疑ひも波の上―疑ひもなきといひかけた。

幻のやうに現れ出た采女の追善の爲に、色々御經を讀んで、心から回向しよう」

といつて讀經する。

【六】

後ジテ采女の亡靈登場して、僧に向ひ、

采女「ありがたうございます。御讀經を聞けば心も清くなると伺つて居りますから今まで心が亂れてゐましても、御讀經を受ければ、成佛して、極樂の蓮臺に上ることが出來ませう。どうぞよく回向して下さいませ」

僧「これは不思議だ、この池の汀に現れ出られたのは、先に話をした采女といふ人であるかしら」

采女「お恥かしながら、昔の采女が現れて來たのでございます。どうか成佛させて下さいませ」

僧「元來人間は誰でも佛となるべき素質を持つてゐるのです。成佛することは少しも疑ひありません。否人間ばかりでなく、この水底に住む魚類でも、又草木でも、皆成佛出來るのです」

采女「草木でさへ成佛出來るのでございま

シテ『悉皆成佛
ワキ『疑ひなし
地『ましてや、人間に於てをや。龍女が如くわれもはや、變成男子なり采女とな思ひ給ひそ。しかも所は補陀落の。南の岸に至りたり。これぞ南方無垢世界生まれん事も、賴もしや生まれん事も賴もしや

『七』シテ大小前に行き、

地クリ『げにや古に奈良の都の代々を經て、神と君との道すぐに國家を護る誓ひとかや
シテサシ『然れば君に仕へ人、その品々の多き中に
地『わきて采女の花衣の。裏紫の心を碎き、君邊に仕へ奉る
シテ『されば世上にその名を弘め
地『情内に籠り言葉外に現るるためし。世以て類

○龍女―法華經提婆達多品に、娑竭羅龍王の女が八歳で諸法を了達し、忽に男子に變成し、南方無垢世界に往生したとあるをいふ。
○變成男子―女人が變じて男子となること。前掲の佛說から出た語。
○補陀落―印度の南海岸にある、觀音の住處と說かれた地。興福寺の南圓堂はこれに本づいて造られたもので、新古今集春日の神詠に「補陀落の南の岸に堂たてて今ぞ榮えん池の藤波」

【七】
○古に奈良の―今は古になるといひかけた。
○わきて采女の―一般采女の職についていふ。
○裏紫の―衣の裏といひかけ心の枕詞とした。
○情内に籠り言葉外に現るる―和歌など詠む意。本朝文粹菅相公和歌序に「情動二於中一言形二於外一」
○葛城の王―古の采女の例を擧ぐ。古今集序に―淺香山の言の葉は采女の戯れよりよみて―と記し、その古註に―葛城のおほきみを陸奥へ遣したりける時に、國の司ことおろそかなりとて

すから、況して私も人間でございますもの、かの龍女のやうに、私もはや男子に變成しました。もはやもとの采女ではございません。殊にこゝは觀世音のお住ひ、補陀落に譬へられた所でございます。これから更に南方無垢世界に往生することも出來ようと、賴もしく思はれます」

【七】
采女は既に成佛した、平和な心持で、
采女「今は昔、奈良に都のあつた頃から、春日明神は大君と御心を合はせて國家を守護すると御誓約になつたのでございます。
さてその奈良朝の頃、大君にお仕へしてゐた人々には、それ〴〵色々の役があつたのでございますが、その中でも、采女の職にある者は、常に心を盡して大君のお側仕へをしたものでございます。それで、采女の中には、世間に名を謠はれ、情のこもつた和歌など詠んだ者が少くございません。例へば葛城王が勅命によつ

設けなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりて よめるなり、これにぞ王の心とけにけり」とあるを引く。葛城王は敏達天皇五世の孫美努王の御子、養嫡を踏つて橘諸兄といふ。

○忍ぶもぢずり—古今集陸奥の歌、「陸奥の信夫もぢずり誰故に亂れんと思ふわれならなくに」を借りた。

○こともおろそか—待遇が粗略である。

○設け—仕度。

○土器取りし言の葉の—お酌をして歌を詠んだのでとの意。言の葉の縁で露を續けた。

○淺香山影さへ見ゆる—采女の詠んだ歌「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわれ思はなくに」を引いた。

○心の花—和歌の意と雅情の意を兼ねていふ。

○風もをさまり雲靜かに—葛城王の心の和いだ意より轉じて天下太平の祝言とす

○色音に移る—歌舞によつて心が移るとの意。

○とぶさ—梢。

○色添へて—興を添へて。

○小忌衣—大嘗會・五節等の時、祭官・舞人の着る衣。こゝではたゞ舞衣の意。

○櫻をかざす—新古今集山

ひ多かりけり

これより謠に合せて仕科、（舞クセ）

地クセ『葛城の王。勅に從ひ陸奥の。忍ぶもぢずり誰も皆。こともおろそかなりとて設けなどしたりけれど。なほしもなどやらん王の心解けざりしに。采女なりける女の土器取りし言の葉の露の情に心解け。叡慮以て甚し。されば淺香山影さへ見ゆる山の井の。淺くは人を思ふかの。心の花開け。風もをさまり雲靜かに。安全をなすとかや

シテ『然れば采女の戯れの地。色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影もめぐるや盃の。御遊の御酒の折々も。采女の衣の色添へて。大宮人の小忌衣。櫻をかざす朝より。今日もくれはとり聲もあやをなす舞歌の

て陸奥へお下りになつた時、誰も從ふ者、王に對するもてなしが粗略であるとお憤りになつて、御饗應など申し上げても、やはり王の御心が解けなかつたところ、もと采女であつた女が土器をとつて御酌に立ち、和歌を詠んだので、御心も解け大層御機嫌に叶つたのでございます。その歌と申すのは——

『淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわれ思はなくに』

（底の影さへ見える淺香山の山の井のやうな、そんな淺い浅略な心を、私共持つては居りませんのに）

といふので、これによつて王の御心が解けました。このやうに和歌によつて、人の心も和ぎ天下も太平となるのでございます。

このやうに、采女は戯れにも、鳥が花の梢を傳ふやうに舞を舞うて、酒興を添へますもので、宮中御遊の御酒宴の折々にも、采女が興を添へまして、いつも〳〵面白をかしく、拍子を揃へて謠ひ、袖を翻して舞ひ、心地よい樂音が響渡つてございます。殊に私の忘れられない思出は、曲水の御宴のありました時、御盃を幾度か廻り、月も更けた頃、山時鳥が鳴いて興を催しましたのを、帝には御興深く思

邊赤人の歌「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮らしつ」を借りた。○くれはとり—暮れの音を承け、呉織・漢織の成語によつて、綾の序詞とした。○聲もあやをなす—毛詩に「情發二於聲一、聲成レ文」○曲水の宴—宮中に於て行はれた三月三日の御宴。曲水の流に盃を浮べて酒を飲み詩歌を詠じた。この緣で「度々廻り」といふ。○有明の月—夜明け方の月で、三日頃の月でない。山時鳥も三月頃のものでない。こゝは季節にあつてゐない【八】○月に鳴け同じ雲居の—引歌であらうが見當らない。○萬代と限らじものを—これも引歌であらうと思ふが見當らない。○撫づとも盡きぬ—拾遺集讀人不知の歌「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖ならなん」を引き、巖の緣で松に續けた。○松の葉の—以下「鳥の跡」まで古今集序の詞を引いた松の葉に詞の數の多い喩、眞柝の蔓は長い喩。鳥の跡は文字の異名。和歌が長く傳はるとの意。○四海波靜か—太平の形容夫木抄衣笠内大臣の歌に

曲。拍子を揃へ。袂を飜して。遊樂快然たる采女の衣ぞ妙なる。とりわき忘れめや曲水の宴のありし時。御土器度々廻り。有明の月更けて。山時鳥。誘ひ顏なるに叡慮を受けて遊樂の。月に鳴け

〔序舞〕

【八】なほ引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『月に鳴け。同じ雲居の時鳥

地『天つ空音の。萬代までに

シテ『萬代と。限らじものを。天衣。撫づとも盡きぬ。巖ならなん。松の葉の

地『松の葉の。散り失せずして。眞柝のかづら長く傳はり。鳥の跡絶えず。天地穩かに 國土安穩に。四海波。靜かなり

シテ『猿澤の池の面

し召され、私に舞を舞へと仰せられましたまま『月に鳴け』と謠つて舞つたことでございます」

〔序舞〕

舞を舞つてその當時を思ひ出す。

【八】采女はなほも思出の舞を續けて、采女」——

『月に鳴け同じ雲居の時鳥、天つ空音の萬代までに』

（空高く飛んで行く時鳥よ、この御所の上を「君萬歲」とめでたく鳴いて渡れ）

『萬代と限らじものを天衣、撫づとも盡きぬ巖ならなん』

（否、萬代と年限を限ることはない、あの天の羽衣で巖を撫でても巖の撫り盡くすことのないやうにいつまでも〳〵御榮えの盡きないやうに）

『松の葉の散り失せずして、眞柝のかづら長く傳はり、鳥の跡絶えず、天地穩かに、國土安穩に、四海波靜かなり』

（色々の和歌が末永く世に傳はり、天地間上が安穩、天下が太平である）

『猿澤の池の面に、水滔々として波また悠々たりとかや』

（猿澤の池の水が一面に滿ち、波がゆつたりとうねり寄せてゐる）

『石根に雲起つて、雨はそうようを擽つなり』

「四つの海浪しづかなる御代なればはらかのにへもけふ供ふなり」

○そうよう―光悦本、下懸謠本には疎屬（隔間の多い粗末な窓）の字を充て詳釋は草葉の文字かといふ。

○讃佛乘の因縁―和漢朗詠集白樂天の句、眞以三今生世俗文字業狂言綺語之誤一讃爲二當來世々讃佛乘之因轉法輪之緣一による。歌舞も亦佛を讃美する因縁であるとの意。

地　猿澤の池の面に。水滔々として波又。悠々たりとかや。石根に雲起つて雨はそうようを打つなり。遊樂の夜すがらこれ。采女の。戯れと思すなよ。讃佛乘の。因縁なるものを。よく弔はせ給へやとて又波に、入りにけりまた波の、底に入りにけり

と舞ひ納めて、常座にて留拍子を踏む。

（雲が山麓から起つて、雨が隙間の多い窓に降り込んでくる）

なさるさいふ和歌や詩句を謳ひながら舞つて、采女「この夜中、このやうに歌舞を致しましたが、これをたゞ采女の戯れごとと思ひ下さいますな、これも佛を讃美する因縁と思つて致したのでございます。どうぞよく回向して下さいませ。

といつて、また猿澤池の水底に入つてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「これは諸國一見の（下懸郡方より出でたる）……サシ「頃は彌生の十日餘り（下懸末つ方）……

當社の御誓ひにも……諸願成就を植ゑ置くなり（下懸ナシ）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「急ぎ候程に……社參申さばやと思ひ候（光ナシ）【三】ワキ「見申さば（光ふしきやな）これ程茂りたる……シテ「さては當社……人にて御入り（光ナシ）候か。ワキ「さん候……御物語り候へ（光シテ「さらば委かたつてきかせ申候へし。ワキ「あら嬉しやねんごろに御もの語候へ）。シテ「抑も當社と……もとより惠み深き故（光ナシ）程なくかやうに……裳裾に附き（光け）にや去り畏……【四】シテ「いかに申し（光、へき事の）候末澤の……名池の候を（光ナシ）御覽ぜられて候か。ワキ「（光實々）承り及びたる……ワキ「易き間の事……さて誰と志して（光ナシ）……シテ「これは昔……されば天の帝の御歌光るる歌に……ワキ「げにげにこの歌は……御物語り候へ。シテ「（光さらは委かたつてきかせ申候へし）昔天の帝の御時に……【七】ワキ「色香に移る……遊樂快然（光回雪）たる采女の……

【三】シテ「抑も當社と……然れば

鵜祭（うつり）　春

解說

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　當今勅使、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　海士女（氣多明神）、**前ツレ**　海士女（三人）、**狂言**　氣多末社神、**後ツレ**　八尋玉殿神、**後シテ**　氣多明神、**子方**　鵜

【所】　能登國　氣多神社

【時】　十一月初午

【作者】　作者及び曲名演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】　當今の臣下が、能登國氣多明神の十一月初午の神事を見て參れとの勅命を受けて、その社に赴くと、深雪の中を分けて參詣する女性があるので、不審に思つて詞をかけると、その女性は氣多明神のあらたかな謂れを述べ、自分がこの社の神であるといひさして消え失せる。やがて、八尋玉殿神が現れて、社殿の扉を開くと、氣多明神はまことの姿で現れ出で、勅使を慰める業を舞ひ、またこの御神事に供へる鵜も現れて、神慮に從ふ奇特を示す。

【出典】　この鵜を供へる神事は古くから行はれて居り、またこの事を記した古い

蓮起もあつたのであらうと思ふが、未だ本曲の原型と見るべき文獻に見當らない。

【鑑評】本曲の前段は、脇能として著しい特異な所もないが、後段には、シテの外にツレ及び子方が加へられて、賑にしい演出をなしてゐる。この子方舞は神楽に從ふ奇特を示すのは「養老」の主威に似するのと同工で、誠にめでたい場面であるが、脇能の一般的觀念から推せば、却つて現在物に近いあらはな感じを起させて、幽玄な味ひ、森嚴な趣を薄らげる嫌ひがないでもない。

【一】

後見引廻をかけたる宮の作物を一畳臺にのせ、大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ勅使、大臣烏帽子・上垂掛・肩衿厚板・浴狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキヅレ次第　御影尝らで君守る。御影尝らで君守る

神の宮居に參らむ

地取にワキは正面に向き、

ワキ　抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても能州氣多の明神は靈驗無双の神にて御座候。御神事の數々多き中に、霜月初午の御祭禮の儀式君聞し召し及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り。唯今能州に下向仕り候

といひて、ワキヅレと向合ひ、

○當今―今上陛下。
○氣多の明神―能登國羽咋郡一宮村にある。祭神大己貴尊。
○霜月初午の御祭禮―能登國名勝志には十一月中の巳の日に、加越能名勝記には本文の通り十一月初午の日に鵜祭が行はれると記してある。

【一】

前段

無雲に初の東鑑。ワキ當今勅使、ワキヅレ從者を囃し一聲。

勅使　御神樂のあらたかな、わが大君を御守護にたる神社へ參詣しよう―

と謡を謡つて旅の目的を述べ、

勅使　自分に今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さて能登國氣多明神は靈驗のあらたかな樣で、色々御神事が澤山ある中でも、殊にめでたい十一月初午の御祭禮の儀式のこと迄、わが君の御聽に達し急いで見て參れと仰せ下されたので、これから能登へ下るのです」

と勅使に自己紹介をし、

○有乳山―近江國高島郡から越前國敦賀郡に入る境にある山。
○木の目の山―越前國敦賀郡木目峠をいふ。
○越の長濱―能登國鹿島郡今の崎山村・大呑村の海邊。
○一の宮―能登國羽咋郡。氣多神社鎭座の地。

ワキ「道行」思ひ立つ其方の空も北時雨。其方の空も北時雨。降り來る峯や有乳山雪の木の目の山越えて。越の長濱遙々と。行方に續く松原の。蔭見えそめて程もなく一の宮にも着きにけり一の宮にも着きにけり

ワキ「越の長濱遙々と」と正面に向きて、二三足出で、またもとに歸りて、一の宮に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程にこれははや。能州一の宮に着きて候。あら笑止や俄かに雪の降り來りて候。これなる松原に立ち寄り雪を晴らさばやと存じ候

ワキヅレ「尤にて候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ海士女、面增・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・練小袖・大口・腰帶・扇の裝束にて雪笠を被り、柄振を持ち、ツレ海士女三人、面小面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・練小袖・大口・腰帶・扇の裝束にて雪笠を被り、橋懸に立ち並び、

○降る雪の蓑代衣―後撰集藤原敏行の歌「降る雪の蓑

勅使「旅を思ひ立つて、時雨の降る北の方へと向つて進み、有乳山や木目山を越えて、北陸の長濱を遙々と行くうちに、松原が見え出して、やがて一の宮に着いた」

といつてゐるうちに、舞臺は能登國一宮氣多神社となる。

勅使「道を急いだので、はや能登國一の宮に着きました。（雪を見て）あゝこれは困つた、俄かに雪が降り出して來た。この松蔭に寄つて、雪の晴れるのを待ちませう」

と社前の松蔭に休む體。

【二】

シテ氣多明神の神蓑、ツレ八幡宮殿神の神蓑、いづれも海士女の姿を裝うて登場。

海士「このひどい雪降りて、蓑代りに着て

一聲「降る雪の。蓑代衣袖さえて春待ちわぶる。

代衣うち着つゝ春來にけりと驚かれぬる―の詞を借りた。蓑代衣は蓑に代用する衣で、合羽などをいふ。
○待ちわぶる―待ちかねる

○垂跡―本地に對する詞。佛菩薩が衆生濟度の爲に現す種々の形。わが國で中古以來佛者が神は佛の垂跡であると說いたのである。
○歩みも積る雪の―歩みの數の積るを雪の積るに、雪の深きを深き惠みにいひかけた。

心かな

シテ『冬立つ波の音までも。ツレ『うらさびまさる。

夕かな

一同舞臺に入り、

シテサシ『それ國々所々に。神所垂跡多けれども殊更御影を仰ぐなる。シテ『この神垣の松の葉の。千代萬代の末かけて。運ぶ歩みも積る雪の。深き惠みを。賴むなり

シテ下歌『われは賤しき海士の子の餘所の見るめもいかならん。上歌『誰とても隔てはあらじ神慮。隔てはあらじ神慮。交はる塵の浮世にも安く樂しむ身の程を。思ひ返せば勇みあるこの神祭急ぐなりこの神祭急ぐなり

と謠ひてシテは常座に立ち、ツレは引く。

【三】

ワキ「いかにこれなる人々に尋ね申すべき事の候

【三】

○交はる塵の―和光同塵（神佛が德光を和らげて俗塵に交はり衆生を利益すること）の意。

【三】

ある着物の袖までが寒くて、ほんとに春が待ち遠しいことです。
冬にはこの浦の夕暮、波の打ちよせる音までが、もの淋しいことです。――

まあそれはとにかく、神樣の御鎭座遊ばす所は、國々所々、數多いことです が、殊にこの神樣は御神德のあらたかな方で、幾久しく御榮え遊ばすことでせう。それで、私達は積る雪をも厭はず、始終參詣して、御願ひ申しあげてゐることです。――

私達のやうなこんな賤しい海士姿を見ては、外の人はどんなに思ふことでせう。けれど、神樣は貴賤の別け隔てなく御惠み下され、この俗塵に交つて私共を御救ひ下さるので、その御蔭で安樂に暮らしてゐることだと思ひ直すと、心も勇み立つて、この御祭禮を早く拜まうと、足も急がれることです」

と互に話し合ひながら社前に近づく。

【三】

勅使はこの海士女を見て、勅使「もうし、そこな人にお尋ねしたいのだが」

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「これ程深き雪の中に。しかも女性の御身として。かやうに歩みを運び給ふ事不審にこそ候へ

シテ「さん候これはこの浦里に住む女にて候が。霜月初午の御祭禮の儀式。殊更神祕多ければ。とりわき歩みを運び候。これはこのあたりにては見馴れ申さぬ御事なり。もし都よりの御參詣にて候やらん

ワキ「げによく見てあるものかな。これは當今に仕へ奉る臣下なるが。今月初午の御祭禮の儀式。君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り。勅使に下向申して候

シテ「さては遙々の御志返す返すもありがたうこそ候へ

○御事—御方。

海士「私どものことでございますか、何の御用でございます」

勅使「このやうなひどい雪の中を、しかも女の身で、よく御參詣になるのが不審に思はれるのです」

海士「私どもはこの邊の者でございまして、十一月初午の御祭禮の儀式は殊にありがたいものでございますから、とりわけ參詣致すのでございます。ところで、あなた樣はこの邊にはお見馴れしない方ですが、もしや都から御參詣になつたのでございませうか」

勅使「よく分つたな。いかにもその通り、自分は今上陛下にお仕へ致してある臣下だが、今月初午の御祭禮の儀式のことが、わが君の御聽に達し、急いで見て參れと仰せ下されたので、勅使として參つたのだ」

海士「それは御遠方の所をほんとにありがたい事に存します」

ワキ「さらば御神事の謂れ委しく御物語り候へ

シテ「これ猶祕する事なれば、白地には申し難しさりながら、當國ゆのがうと申す所より。荒鵜をとりて貴に供ふ。かの鵜みづから貴に供はり。放てばやがて飛び去る事。これ第一の奇特なり

ワキ「これは不思議の御事かな。さては鳥類畜類までも

シテ「貴に供はる神の誓ひ

ワキ「雲居を翔る翅までも。心なしとはいひがたし

シテ「ましてやいはん人として

ワキ「頼みをかけよ

シテ「かけまくも

地「忝しや神の代の。盡きぬ御恵み。偏に仰ぎ給へや

○ゆのがう―鵜の郷の訛であらう。間語には鵜の郷とある。能登國名跡志に「鹿島郡中山の郷鵜浦村より鵜を取てさゝぐ」とある。

○荒鵜―まだ使ひ馴れない新しい鵜。

○貴―鳥獣を生きながら神に供へる事。

ワキ 就ては、この御神事の謂れを委しく聞かせて下さい」

シテ これは大切な祕事とせられてゐますので、輕々しくは申し上げられないのでございますが、この能登國鵜の郷と申す所から、新しい鵜を取って生贄にお供へするのでございます。ところで、その鵜に生きながら、贄に供へられてゐる間にぢつとして居り、放つとすぐ飛んで行きますのが、第一奇特な事でございます」

ワキ これは不思議な事だ、そのやうな心もない鳥類までが……」

シテ 神祭の贄に供はるといふ事を知つてゐるのでございます」

ワキ 全く鳥類にも心のないものとはいへないな」

シテ「ですから、まして人たるものはよく神信心をするのがよろしうございます」

ワキ「ほんとによく信心しなければいけない」

シテ 畏くも神代から絶える時なく御恵み下さるのですから、深く御信仰になるのがよろしうございます」

【四】

地クリ『抑も當社の致景を見るに。西は蒼海漫々たり。北には青山あり。龜鶴蓬萊山と名づく。一つの岩窟あり。七星常住の。仙鄉たり

シテサシ『然るにこの神は。垂跡年久しといへども。利物の風あらたなり

地『日本第三の社壇。正一位勳一等氣多不思議智滿大菩薩と號し。無佛世界度衆生。今世後世能引導の。誓ひを顯しおはします

地クセ『然るにその昔。神功皇后の勅を受け。干滿兩顆の名珠を海底に沈め忽ちに。新羅百濟の兇賊を。皆盡く亡ぼして。天下安全に國土も豐かなりけり。往昔。垂仁天皇の御宇かとよ。太入杵の神王を祭主と定めこの神を勅請し奉りけり

シテ『然れば代々の帝までも

地『神德を仰ぎ給ひ。社祿を贈り禮奠。隙なく崇

○致景—こゝでは土地の狀況といふ意。

○七星—食狼、巨文、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の七星をいふ。

○利物の風—一切萬物を利益し給ふ神德。

○正一位勳一等—三代實錄に貞觀元年從一位を授くと。續日本後紀に延曆三年勳一等を加ふとある。

○智滿大菩薩—氣多明神の本地菩薩號。

○無佛世界度衆生—無佛世界に衆生を(濟)度し。今世後世とも能く引導すと訓ず

○神功皇后の勅を受け—何に據つたのか詳かにし難いと。

○干滿兩顆—潮盈珠と潮乾珠。潮のさし引きを自由にする珠。

○垂仁天皇—崇神天皇の皇子、太入杵命の皇兄。

○太入杵の神王—太入杵命古事記に崇神天皇の御子で能登臣の祖とある。

○社祿—神社の領田等。

【四】

海士さて當社の地勢は、西は廣々とした海で、北には青山がありまして、これを龜鶴蓬萊山といひます。そこに一つの巖窟があり、これが七星常住の仙境となつてゐるのでございます。

さてこの神樣がこの地に御鎭座になつてよりこの方、永い年月を經てゐるのですが、今も昔に變らず一切衆生にあらたかな御利益を下さるのでございます。この神樣と申すのは、日本第三番の社で、正一位勳一等氣多不思議智滿大菩薩と申し、佛のない世界の衆生を濟度し、今世後世とも仕合にしてやらうと仰せられるのでございます。

今は昔、神功皇后三韓御征伐の時、この神は皇后の勅を受けて、潮盈珠・潮乾珠を海中に沈め、潮のさし引きを自由にせられ、新羅百濟の兇賊を悉く亡ぼして、天下を安全にせられ、國土も豐かになされたのでございます。この神樣はこれより先、垂仁天皇の御時に太入杵命が祭主となつて、この地に勸請せられたのでございます。それで、代々の天子までもこの神の御德を御尊信遊ばされ、社領を贈られ、絕えずお供へを遊ばすとの事でございま

○禮奠―神佛に物を供へること、又はその供へ物。

め給ふとか。されば一度も神前に。歩みを運ぶ輩は。息災延命の德を得二世の願ひも滿つ月の。影明らかに曇りなき。當宮の御惠み。仰ぎてもあまりあるべし

【五】

ワキ「不思議なりとよ方々は。そも誰なればかほどまで。神祕を殘さず語り給ふ。その名はいかにおぼつかな

シテ「今は何をか包むべき。われこの所に年を經て。『有緣の衆生を守るなる地』神とやいはん恥かしや。神とやいはん恥かしや。御身は。勅の使なれば。言葉をかはすぞと。夕の月の光とともに朱の。玉垣に隱れけり玉垣の內に入りにけり

シテ作物に中入。

【五】

勅使「どうも不思議だ。一體あなた方はどういふ方で、そのやうに委しくありがたい御神事を御話し下さつたのです、何といふ御名前か伺ひたいと思ひます」

海士「今は何を隱さう、自分はこの地に永年住んで有緣の衆生を守る神です、といふのも恥かしい氣持がするが、そなたは勅使であるから言葉をかはすのだ」

といふや、夕月の照り映えた朱色の玉垣の中に隱れてしまつた。

前ジテ海士女、社壇に入る。これ作物の中に入る。

○夕の月の―言葉をかはすぞといふといひかけた。

【間】

【間】　亂序の囃子にて、狂言末社の神、末社頭巾・面登髭・着附厚板・縫水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて、名乘座に出で、

○利生―衆生を利益すること。

○渇仰―喉の渇いた者が水を望むが如くに、深く信仰すること。

狂言「かやうに候者は。能州氣多の明神に仕へ申す末社の神にて候。當社は日本第三の御社正一位勳一等。氣多不思議智滿大菩薩と號し。無佛世界度衆生今世後世能引導の誓ひを顯し。その古は干滿の名珠を海中に沈め。三韓の亡ぼし天下安全國土豐かになし給ふ事。偏に當社の御利生なり。されば御神事多き中に。十一月初午の御神事と申すは。卽ち當國鵜の郷と申す所へ。毎年正月朔日に鵜の鳥飛び來るを。これこそ贄に供ふる鳥よとて渇仰申し。育て置きかの鳥を供へ申せば。この鳥諸人を恐れず階に上り。神前に羽をたれ伏し申し。又元の所に下り。それよりいづ方ともなく飛行申し候。かやうに奇特樣々御座候へば。參り下向は夥しき事にて候。さる間當今に仕へ御申しある臣下殿。唯今御參詣を明神嬉しく思し召し。假に顯れ御言葉をかはし給ふが。重ねて舞樂を奏し慰め申さうずるとの御事なり。その間我等がやうなる末社の神にも罷り出で。慰め申せとの御事により。是まで出でて候。急いで御禮申さう。（ワキに膝をつき）御禮申し候。是は當社に仕へ申す末社の神にて候が。唯今の御參詣明神嬉しく思し召し。假に顯れ御言葉をかはし給ふが。今夜は舞樂を奏し慰め申さうずるとの御事なり。その間に我等がやうなる末社にも罷り出で。一曲を仕り慰め申せとの御事により。是まで出でて候。何ぞ一曲を仕らうが何と御座あらうずるぞ。（立ち）あゝやれやれ一段の事ぢや。よからうと思し召すと見えて。左の頰がにつこと致した。急いで一曲奏で申さう。『めでたかりける時とかや。〔三段舞〕『やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も。顯れ出でて舞ひ奏で。これまでなりとて末社の神は。元の社に歸りけり

【六】

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ八尋玉殿神、面小天神・黑頭・鉢巻・襟赤・着附厚板・法被・半切・腰帶・太刀・扇の裝束にて、龍臺を持ちて出で、

と舞ひ納めて引く。

【六】

後段

後ヅレ八尋玉殿神登場、

後ツレ『昔は太入杵の神王と號し。今はこの地に跡を垂れ。八尋玉殿の神とはわが事なり

地。卽ち御影を顯して。卽ち御影を顯し給ひて勅使に參拜の膝を屈し。その後御殿に上らせ給ひ。手づから扉を開き給へば。誠に妙なる相好莊嚴赫奕として。顯れ給ふ。ありがたや

（相好莊嚴―相好はよい姿莊嚴はかざり。

後見作物の引廻を下す。後ジテ氣多明神、面增・天冠・薄垂・襟白・着附摺箔・舞衣・色大口・扇の裝束にて、

後ジテ『いかに八尋玉殿の神。いざ諸共に舞樂を奏し。かの客人を慰めん

ツレ『げに客人は勅の使。さらば舞樂をなすべしと。絃管の役を勸むれば

シテ『誠に勅の使ぞと。聞くにつけても思ひ出づる

地。その古の神祭。その古の神祭。安倍の貞任勅使として。萬歲樂を舞ひし事。唯今の勅の使に。

○安倍の貞任―貞任が勅使として來た事は何に據つたか分らない。

○萬歲樂―雅樂の曲名。委しくは〔翁〕にいふ。

八尋　自分は昔は太入杵の神主といひ、今はこの地に鎭座して、八尋玉殿の神といふ者である―

といつて、神靈が出現遊ばされ、勅使に向つて膝をまげて禮拜をし、その後神殿にお上りになつて、御自身で扉をお開きになると、氣多明神はいとも尊い赫くばかりの御姿を以てお顯れになつた。實にありがたいことである。

後ジテ氣多明神、舞臺の神殿から現れ、

氣多　いかに八尋玉殿の神、さあ一所に舞樂を奏して、この客人を慰めよう―

八尋　この客人は勅使の事ですから、ては舞樂をしませう―

と管絃の役をすゝめられると、

氣多　ほんに勅使と聞いて思ひ出したのは、昔の神祭に安倍貞任が勅使として參拜した時に、萬歲樂を舞うたことだ。この客人が勅使だと聞いて、その事の思ひ出されるのも面白いことだ―

思ひ出づるも面白や

〔樂〕（シテ舞ふ）

【七】

地『更け過ぐる夜神樂の。更け過ぐる夜神樂の。月も傾く空なれや。丑三つも時至れば。神前に供ふる生贄の。眞鳥もここに。現れたり

早笛にて、子方鵜、黑垂・鉢卷・襟赤・着附厚板・唐織・大口の裝束にて、鵜をのせたる臺を持ちて出で、

地『空飛ぶ鳥も地に落ちて。空飛ぶ鳥も地に落ちて。神慮に從ふその有樣。まのあたりなる奇特かな

〔働〕

シテ『この鳥少しも驚かず

地『この鳥少しも驚かず。諸人の中を靜かに歩み出で。階を上り。神前に羽を垂れ伏しけるが。又立ち歸り庭上に下れば神體ともに。立ち出で給ひ。汝よく聞けこの度贄に。供はる結緣に鳥類

〔樂〕

神が昔を思ひ出して萬歲樂を舞はれる態。

【七】

かうして神樂を奏されてゐるうちに、夜も更けて月も傾き、眞夜中になると、神前に供へられる生贄の鵜もこゝへ顯れて來た。

子方鵜、登場。

御神慮に從つて、空飛ぶ鳥も地に落ちる有樣を、まのあたり見るのはありがたい事である。

〔働〕（にこの樣を示す）

さてこの鵜は少しも驚かないで、多くの人々の中を靜かに歩み出て階段を上り、神前に羽根を垂れて伏してゐたが、又庭上へ下りてくると、氣多明神も共に庭上へお出でになつて、

氣多「汝よく聞け、この度贄に供はつた結緣で、鳥類の身を轉じて、成佛せしめるぞ」

○身を轉じ―身を變へること。
○宣命―天子の仰せごとであるが、こゝには神の詞の意に用ゐた。

の身を轉じ。佛果に至れと。宣命をふくめ給ひければ。八尋立ち寄りかの鳥を抱き。海上に向ひて放ち給へばこの鳥喜び羽風を立てて。雲居に翔り。飛びめぐり飛びめぐり。遙かの沖に飛び去りぬ。げにありがたき和光の神德。げにありがたき神德を見せて。神はあがらせ給ひけり

と舞ひ納めて入る。

と仰せられると、八尋玉殿の神が立ち寄り、その鳥を抱いて海に向つて放たれると、この鳥は悅んで羽風を立てゝ空に翔り、飛び廻り〳〵して遠くの沖に飛び去つた。かうして誠にありがたい御神德をお示しになつて、明神は上天遊ばされた。

三氣多明神・八尋玉殿神遺場。

〔考異〕

他流、古謠本ともない。

梅（うめ）

觀

解說

【能柄】 三番目 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 藤原何某、**ワキツレ** 同從者（二人）、**前シテ** 女（梅の精）、**狂言** 所の者、**後シテ** 梅の精

【所】 攝津國 難波

【時】 二月

【作者】 明和年間、觀世大夫元章が從來の謠本を改正して刊行した時、この新曲一篇を彼の自作として發表したもので、その文章は謠本の改正に與つた加茂眞淵・加藤枝直の手に成つたものであらう。

【梗概】 京都五條の藤原何某が難波に行つて、その春景色の面白さに、「櫻花今盛りなり」といふ家持の歌を吟じてゐると、女が出て來て、詞咎めをして、この歌の詠まれた時の事情を述べ、この朧月夜にまことの姿を現さうといつて消え失せる。藤原何某が木蔭に假寢してゐると、梅の精が現れて、梅の尙ばれた故事を語り、舞を舞ひ、御

代の長久を祝ふ。

【出典】前掲家持の歌が事件展開の動因となつてゐるが、全體に亘つた典據といふべきほどのものはない。個々の術語等については語釋に述べることとする。

【概評】本曲は植物の精魂をシテとした複式能で、この種のものには、〔杜若〕〔墨染櫻〕〔芭蕉〕〔藤〕〔六浦〕〔遊行柳〕などがあり、本曲はこれらに倣つたものであるが、その作意が明かでない。一體精魂物の作意には、草木を主題とした歌話を舞臺化するものと、草木國土悉皆成佛の佛說を實證するものとの二種類あつて、本曲はその前者に屬するものであらうが、その歌話には〔杜若〕〔六浦〕の如き劇的興味がなく、前段のシテ・ワキ掛合（第二節）は家持の歌詞を考證しただけであり、後段のクセ（第六節）は梅の尙ばれた實例を擧げたに止まり、兩者ともに劇的興味の索然たるものである。勿論主題の故事來歷を述べるのは、謠曲の常套手段であるが、それはその時代に必要な啓蒙的意義から出たもので、觀衆に對する親切さが伺はれるが、これは徒らに衒學的で、國學者の新知識を誇示してゐるのに過ぎない。用語も亦殊更に古語を濫用して、雅趣を加へるよりも寧ろ嘔澁に陷れてゐる。明和の謠本改正そのものが失敗であつたやうに、その新作たる本曲も亦失敗したものと見られるのである。

【一】

後見、梅の作物を正面先に出す。

名乘笛にて、ワキ藤原何某、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、ワキツレ從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて、舞臺に入り、

ワキ「これは五條わたりに住居する藤原の何某にて候。さてもわれ未だ難波津を見ず候程に、この度一見せばやと思ひ候

ワキツレ「津の國の難波の春のゆかしさに。今日思

○五條わたり―京都五條附近。昔後成の住んだ所であるから、この地名をとつたのであらうか。

○難波津―今の大阪。津は湊の意。

○ゆかしさ―見聞きしたく思ふこと。

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ藤原何某、ワキツレ從者を隨へて舞臺。

藤原　私は京都五條の邊に住んでゐる藤原何某といふ者です。さて私はまだ難波津を見たことがないので、今度見物に出掛けようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

藤原　攝津難波の春景色を見たいと、今日旅出を思ひ立つて、日影ものどかな都を

○今日思ひ立つ―立つを裁つにいひかけて衣の縁とした。
○山崎―山城國乙訓郡にある。
○關戸の宿―昔山崎に關があつた。今も大山崎の西に關戸町といふ字がある。
○戸ささぬ御代―盗賊の恐れがないから、民家が夜も戸締りをしないので、太平の證據である。
○芥川―攝津國三島郡芥川村の邊を流れる川。木の葉も積る芥といひかけて「舊年の木の葉も積る」を芥川の序とした。
◎暫しながらの旅心―刊行會本には「暫しやすらふ昆陽の池」とある。
○なごはしみ―柔らかさに
○聞きて戀ふ難波の―聞きて戀ふ名といひかけて難波とつゞけ、浦の音を重ねて「うらら」といつた。
○家持の卿―姓は大伴。大納言旅人の子、天平年中越中守となり後中納言に進む延暦五年薨。その歌は多數萬葉集に收められ、その撰者に擬せられてゐる。

ひ立つ旅衣。ワキ(向合ひ)『日影のどけき都の空。霞隔たる山崎や。關戸の宿も名のみにて。戸さしぬ御代は行きかふ人の。姿さへげにゆたけしや

ワキ下歌「ここはいづくぞ舊年の。木の葉も積る芥川暫しながらの旅心。上歌『蘆の若葉のなごはしみ。蘆の若葉のなごはしみ。風も音せで寄る波の。響はさすが聞きて戀ふ。難波の浦のうららなる。春の景色を今ぞ見ん春の景色を今ぞ見ん

ワキ「難波の浦のうららなる」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて、難波に着きたる心。上歌濟みてワキは正面に向きて、

ワキ「面白や難波の浦の春の景色。里は花咲き匂ひ滿ち。遠の山々うち霞み。青海原は白波の。八重折る上に海士小舟。行きかふ樣は古の。家持出立し、霞のかゝつた山崎を通つて、關戸の宿へ來ると、こゝには關の名は殘つてゐるが、太平の御代には戸締りをすることもなく、人々が自由に往來して、その姿までがゆつたりしてゐることだ。さてそれから芥川を過ぎ、ほんの暫くの旅ながら疲れを覺えて、やがて、蘆の若葉の柔らかな、吹く風も穩かに、寄る波の音も靜かな、噂に聞いて慕つてゐた、難波ののとかな春景色を見ることとなつた―

といつてゐる間に、舞臺は難波となる。藤原何某はあたりの景色を眺めて、

藤原「いかにも難波の浦の春景色は面白いことだ。里には花が咲き匂ひ、遠くの山山は霞み渡り、青海原には白波がうち重なつて、その上を漁船の往來してゐる樣を見てゐると、あの家持卿の古歌までが思ひ出されることだ。――

○櫻花今盛りなり難波の海おしてる宮に聞しめすなへ―萬葉集卷二十に收められた家持の歌。おしてる宮―は難波の皇居。「聞しめすなへ」は叡覽遊ばす樣にとの意。
○花未だふふみて―ふふむは含むで、櫻の花がまだ蕾であるとの意。

【二】

の卿の詠めまで思ひ出でられて候。『櫻花今盛りなり難波の海。おしてる宮に聞しめすなへ。「今は花未だふふみて梅の盛りにて候

【三】

といひて脇座へ行きかかると、シテ女、面若女・髮・髮帶・襟白・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、幕の内より出でながら、

シテ(呼掛)なうなう今の歌をば。などまことのままに吟じさせ給ひ候はぬぞ

ワキ脇座に着きてシテに向ひ、

ワキ「不思議やなかの歌は。萬葉集にありつるを。唯そのままに口ずさみしに。誤りありや覺束なシテ「もとも今の草子にはさなんめれど。この歌は家持の卿未だ兵部の輔なりし時。公事にてこの國にませし程。きさらぎの十まり三日詠み給へり。さて彌生の三日に。『ふふめりし花のはじめに來しわれや。「散りなん後に都へ行かんと。春のはじめ都を出でて。今暫しますべきに

○萬葉集―わが國最古の歌集。卷數二十。撰者は分らないが、家持の歌が全體の二割餘を占め、彼の選歌の草案がそのまゝ世に傳へられたのでなからうかといはれて居る。
○今の草子―今世に流布してゐる萬葉集。
○きなんめれ―さうであらう。
○兵部の輔―萬葉集前掲の歌の奥書に―右二月十三日兵部少輔大伴宿禰家持―とあるのをいふ。
○ふふめりし花のはじめに來しわれや散りなん後に都へ行かん―萬葉集二十に

『櫻花今盛りなり難波の海、おしてる宮に聞しめすなへ』
(難波の皇居から叡覽遊ばすやうに、今難波の浦一面、櫻の花盛りである)
しかし今は花はまだ蕾で、梅が眞盛りだ」
と辯言をいふ。

【三】

シテ梅の精、女姿を裝うて登場、夢幻何某の方へ近づきながら、

女「もうし、今の歌を何故ほんとの通りにお吟じにならないのです」

藤原「これは變だ、あの歌は萬葉集にあつたのをたゞその儘吟じたのですが、もしや間違つてゐるのでせうか」
女「尤も今の萬葉集にはさうありませうが、この歌は家持卿がまだ兵部少輔であつた時、公務でこの地へお出でになつた頃、二月の十三日にお詠みになつたものです。それで三月三日には――
『ふふめりし花のはじめに來しわれや、散りなん後に都へ行かん』
(私はまだ花の蕾の頃にこの地へ來たのであるが、都へ歸るのは、その散る頃になるだらう)
春の始めに都を出て、この地に來られ、

「三月三日檢二校防人一勅使并兵部使人等、同集飲宴作歌三首」と題した歌の一首で、その奥書に「右二首兵部少輔大伴宿禰家持」とある。○大鷦鷯の天皇―仁德天皇。天皇御即位の時に王仁の詠んだ歌に「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」（古今集序に見ゆ）とあるので、その縁によれば、櫻ではなく、梅をさす筈であるといふ。〔難波〕參照。

○ややあれば―時折あるから。

○わき給ふ―事理を辨別し給ふ。

○理のまにまに―道理があるまゝに。

○それのみにては―平安朝以降の作歌例では、たゞ或る花だけについていふ時は執れの花でも單に花と詠むが、他の花と竝べていふ時、單に花といへば櫻を指すこととなつてゐるのをいふ。

かく詠み給ひしかば。かのきさらぎの中の三日は。梅の花こそ盛りならめ。その上おしてる宮に聞し召すなへとは。大鷦鷯の天皇の。御位に即かせ給ひしことなれば。かたがたいかで櫻の歌なるべき

と諳ひながら舞臺に入る。

ワキ『げに理なり古き書には。文字の違ひのややあれば。よく辨へて見るべかりけり。「さてさてかくまでわき給ふ。御身は如何なる人やらん

シテ「いや誰とても理の。まにまに聞しめさんには。その人の名は不用ならん。まづまづさきの御言葉の末に。花未だふふみて梅の盛りと宣ひき。梅の盛りは花ならずや

ワキ「まことにこれも誤りなり。何の花をもそれのみにては。花とのみ詠めど異花と。ならべていなほ暫くお出でになる筈であつたので、このやうにお詠みになつたのですから、あの二月十三日は梅の花の盛りである筈でございます。その上、この『おしてる宮にきこしめすなへ』とは、仁德天皇が御位にお即きになつた事を申し上げたものでし、（仁德天皇と申せば、王仁が『難波津に咲くやこの花』と梅によそへてお祝ひして居るのですから）かたゞ〳〵櫻の歌である筈がないと思ひます」

藤原「いかにもこれは御尤もです。昔の書物には時折文字違ひのあるものですから、よく考へて見なければならない事でした。ところで、このやうによく御存じのあなたは、一體どういふ方なのです」

女「いゝえ誰であらうとも、たゞ道理のある所をお聞きになればよいので、その人の名をお聞きになるのは、無益のことです。それよりは、先程の御詞に『今は花はまだ蕾で、梅が眞盛りだ』と仰しやいましたが、梅の盛りが即ち花の盛りではございませんか」

藤原「いかにも、これも間違ひでした。どの花でも、たゞその木だけについていふ時は、たゞ花といふが、外の花と竝べて

◎花といふなる古言は―刊行會本には「花といふべきそのよしは」とある。
○荒磯海―いかでその跡あらんといひかけて、古今集序の歌「わが戀はよむともつきじ荒磯海の濱の眞砂はよみつくすとも」を引いた。
○よみぬとも―この「よむ」は眞砂を數へること。
○人の心を種として―古今集序「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」を引く。
○ものからに―ものであるから。
○うらやすの―うらやすの國、心の安かな國、日本の國をいふ。「やす」の音を重ねて安きとつゞけた。
○まうけで―無理に作らないで。わざとではなく、ありのまゝに。
○鬼神をも―古今集序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」
○和しむく―心を和らげてこちらへ向はせる。
○浮かめる古歌―浮薄な思慮の足りない歌。

【二】
○木綿四手の―歌の理をいふ。木綿にいひかけ、木綿四手(木綿で作つた幣)は神に供へるものであるから、神とつづけた。

ふに櫻をのみ。花といふなる古言は。『いかでその跡荒磯海

シテ『濱の眞砂はよみぬとも。歌の言葉の數々は

ワキ『人の心を種として。詠み出づるなるものからに

シテ『よも盡きせじなさりながら

地上歌。うらやすの。安き神代の傳へとて。安き神代の傳へとて。まうけで詠み出づる歌の道直なればこそ鬼神をも。和しむくなれいかでさる。浮かめる古歌のあるべき

【三】

地ロンギ『聞けばいよいよいちじるき。歌の理木綿四手の。神の示しかありがたや

シテ『神かとは。うたてはかなき天少女。ただ夕風に難波江の。あしやよしやも辨へで。そよと聞えし恥かしや

いふ時には、花といへば櫻を限つていふものだといひ傳へてゐますが、それは古い例にあることではないのでした」
女「和歌は實に數が多く、濱の眞砂は數へ盡せても、歌の數に數へきれない程澤山あるのですが……」
夢覺「さうです。和歌は人の心持を本として詠んだものですから、いくらでも出來るわけですね」
女「全く數へ盡されない程あるのですが、この和歌はわが國の神代から傳へて來たもので、無理に作つたものでない、自分の心持を素直に詠むものですから、鬼神の心をも和らげることが出來るのです。櫻花を限つてただ花と詠むといふやうな、輕薄な古歌のあらう筈がございませんー」

【三】

夢覺「お伺ひしてゐると、實に委しく歌の道理をお聞かせ下さいますが、これは神樣のお告げかとありがたく存じますー」
女「神樣などとは勿體ない、私はつまらない少女で、善し惡しの道理も辨へずに、うつかり申しあげてお恥かしうございます」

○難波江のあしやよしやー難波江の葦蘆を善惡にいひ通はせたのである。
○そよとーふいと思ひついて。夕風のそよと吹くに通はせていふ。
○包み井ー草木などに掩はれた井戸。さのみ包み隠し給ふなといひかけて、深き心のとつぐけた。
○底ひなくーそきへ（退き方）の轉。果てなくとの意。
○さし出でてー月のさし出ると天女のさし出ると兼ねていふ。

【四】
○本曲の間語、索め得なかつた。
○待ちがてー待ちかねる。
○まくー枕とする。袖を枕とする意。
○闇にもしるきー古今集紀貫之の歌「梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける」の想をとつた。

【五】

地『今はさのみな包み井の深き心の底ひなく。聞かまくほしや

シテ『さもあらば

地『この木の下に下臥して。待たせ給はば夜もすがら月の影もさし出でて。おぼろながらも慰めんと梅の蔭に入ると見えて跡も見えずなりにけり跡をも見せずなりにけり

シテ静かに中入。

【四】

間語済みて後、

ワキ上歌『春の夜の。月待ちがての枕さへ。月待ちがての枕さへ。とりあへずまく衣手に。移るその香は隠れなき。闇にもしるき、木蔭かな闇にも、梅の木蔭かな

一聲の囃子にて、後ジテ梅の精、前の裝束のうち、唐織を脱ぎて、紫長絹・緋大口をつけ、常座に出で、

【五】

後ジテ『月うつる難波の海の。夜の波。心もゆたに

藤原「今はそのやうにお隠しにならず、どうぞ深い道理をすつかりお聞かせ下さい」

女「さういふお望みならば、この木蔭に寢てお待ち下さい。さうすれば、この夜月の出た頃、おぼろげながらも現れ出て、お慰め致しませう」

といつて梅の木蔭へ入るかと思ふうちに、跡形も見えなくなつてしまつた。

【四】

後段

僧「春の夜の月を待ちかねて、とりあへず袖を枕にして、梅の木蔭に寢てゐると、この闇の中にも梅の香が袖に移つて、きつく匂ふことだ」

といつてゐるうちに、旅人は假睡する心。

【五】

後ジテ梅の精、旅人の夢に現はた心。舞。

梅精「難波の海の夜の波に、月の映つた景

○夜ら―らは接尾語で意味はない。
○畫なして―畫の如くにて

○玉鬘―髪にかけて飾とするもの。鬘の頭に懸かるを斯かる姿といひかけた。
○木の花―梅の花。

○知ろしめさねば―知ろしめさぬはの意。謠曲の筆癖である。

○梅の掟―神の定め。
○風のまに―風のまに〳〵風の吹くにつれて。

面白や。(ワキに向ひ)いかに客人この夜らは。空もいとよう晴れ渡り。月の光も畫なして。花の姿もあらはならん。人にな洩し給ひそとよ

ワキ『こは如何にありし女の顏ばせながら。錦の衣玉鬘。かかる姿は木の花の。精とも今は思ほえず

シテ「知ろしめさねば御理。もとより梅の精なれば。唯その折に從ひて。定まる姿もあらぬ上。舞を奏でて慰めんと。『かくは現れ來りたり

ワキ『まづまづかしこしさりながら。かたへに人の影もなし。琴笛鼓は誰やせん

シテ「天にます神の掟の風のまに。『松の小枝は琴を調め

ワキ『汀の蘆は

シテ『笛を吹き

色の面白さ、心もゆつたりするやうだ」

梅精「もうしお客人、この夜は空もよく晴れ渡り、月の光も畫のやうに輝いてゐますので、花の姿もはつきり見られることでございませう。だけれど、外の人には私のことをいつて下さいますな」

旅人、夢現に梅精の姿を見て、

薄原「これはどうしたことであらう、この人は前に會つた女と同じ顏つきではあるが、立派な着物を着、美しい髮飾をして居られる樣子を見ると、前に會つた梅の花の精と同じ人だとも思はれないが」

梅精「お分りにならないのも御尤もですが、梅の精の事ですから、たゞその時折に都合のよい姿をしますので、定まつた姿といつてはないのでございます。その上今日は舞を舞うてお慰めしようと思つて、このやうな姿で現れて來たのでございます」

藤原「それは誠にありがたいことです。しかしこの傍には人は誰も居りませんが、囃子の琴や笛・鼓は誰がするのです」

梅精「天にます神樣のお定めに從つて、自然に吹き來る風につれて、松の小枝は琴を調べますし、汀の蘆は笛を吹き

○覆槽―中を空虚にして踏み鳴らすのに都合よく作つた舞の踏臺。天岩戸隱れの時、天宇受賣命がこの上で舞はれたことが記紀に見えてゐる。
○神さぶる―神々しい。
○昔を返す―往昔の樣を偲ばさせる。

【六】

○嘉して―よいと褒めて。

ワキ『岸うつ波は
シテ『覆槽の音
地『おのづからなるものの音は。神さぶるこの浦の。昔を返す袖ならめ

【八】

地クリ『抑も神代の習はし。草を賤しみ木を貴む。その木の中にかばかりの。形色香の花なければ。梅花を嘉して。木の花といへり

と舞臺の眞中に出でて床几にかゝり、

シテサシ『さて梅の名はさる花の。咲き出るのみかうるはしき
地『藥の實さへ結びつつ。木の肌妙に木立まで。異木に勝れくはしければ
シテ『うまてふ言を。通はせて
地『梅のその名を許りたるなり

シテ立ち、次の謠に合せて舞ふ。(舞クセ)

○藥の實―梅實を藥乾して藥品とするのである。
○くはし―美し。
○うまてふ―「うま」といふ。うまは賞美する詞。
○さる花の―そのやうな美しい花が。
○許りたるなり―許されたのである。

ますし、岸うつ波は覆槽の音を立てます。かうした自然の音樂か、この浦の神々しい物さびした昔の樣を現す舞に適はしい囃子でございませう」

【八】

梅精 さて、神代の風習では、草を卑しんで木を貴んだものですが、その木の中でもこれほど形も色香も勝れたものは外にないので、梅花を殊に褒めたゝへて木の花といつたのでございます。それから、梅といふ名は、この木の花が美しいばかりでなく、藥となる立派な實をも結び、木の肌も美しく、木立まで外の木とは勝れてゐますので、うま（うまい、勝れてゐる）といふ語に通はせて、うめといふ名を與へられたのでございます。――

○ずはえ—木の枝また幹などの、細長く眞直なもの。○紫の蓋—後に記す。○頭に仕ん奉る—頭は「ほとり」の讀み誤り。○初春の七日の豐の明—正月七日に白馬節會といつて天皇内裏にて白馬を御覽じ給ふ公事があり、終つて群臣に宴を賜ふをいふ。この時舞臺の飾りに梅と柳を用ゐた記錄は見當らない。○木綿花—木綿の紙又は布で造つた花。○大嘗—後に記す。○小忌の人—小忌衣を着る人。大嘗祭などの神事に奉仕する人。○髻華—冠の上にかざした草木の花葉などの飾をいふ。○巾子—冠の後頂の高く立つてある處。○久方の—天の枕詞。○天の日蔭のかづら垂で—天の日蔭、日蔭の葛とつゞけた。日蔭の葛は深山の木又は岩にはふ葛草で、神事に奉仕する官人がこれを冠の笄の左右より垂れるのを葛垂といふ。後世は多く葛に擬した組絲の日蔭絲を用ゐた。○黒酒白酒—ともに古來大嘗會新嘗會等に神に供ふる酒で、黒酒は鬱酒に久佐木の灰（後は黒胡麻の粉）を入

地ゝセ『その上神事の、御先に立たす宮人に。取らするも本はこの、ずはえに限ることなりき、又御佛の御教へにも。行ひには必ず梅のずはえを取れよとぞ、天皇の、大儀の御場にも。主殿の舍人等が。梅のずはえを棒げつつ。紫の蓋の、頭に仕ん奉れるは、御先を拂ふ由にして、やがて神代の傳へなり

シテ『初春の。七日の豐の明には

地『舞の臺の飾らひに。梅と柳を立てらるる。さて木綿花は古にもてはやせしもこの花を。とこしへに見まほしく。思ひて造りそめにけん。又年の端の大嘗に、從ふ小忌の人達も。昔の髻華の心ばせ、木の花の木を冠の、巾子に添へ立て久方の。天の日蔭のかづら垂で。黒酒白酒の神酒たうべ。千代萬代も限らじと、謠ひ舞ふその

なほその上、御神事の時前驅を勤める神職が持たれるのも、もとはこの梅の枝に限つてゐたことでございます。又御佛事の法要にもこの梅の枝を持つ筈になつてゐたのでございます。それから畏くも、天皇の御儀式の場合にも、主殿の舍人等が梅の枝を捧げて、紫の蓋のお側で、御前驅を勤めるのでございまして、これが卽ち神代の風俗を傳へたものでございます。——

正月七日豐明の節會にも、舞臺の飾りに梅と柳とを立てられるのでございます。その外、昔木綿花といつて造花を賞美したのも、この梅の花を花のない夏秋にもいつも見たいと思つて、木綿花を梅に擬へて造り出したものでございませう。又毎年新嘗祭にも御神事を勤める人達が、髻華としてこの梅の花を冠の巾子に添へ、葛垂につけて、黒酒白酒の神酒を戴き、千代萬代限りもなく御榮え遊ばすやうにと、謠ひ舞うたのでございます。その樣を眞似て、これから舞つてお見せしませう」

れて製した酒、白酒はその久佐木の灰を入れないもの。

○うつして―眞似て。

【モ】

○月もおしてる難波の―月もおし照る、おしてる難波と續けた。「おしてる」は難波の枕詞。

○鶯の聲ものどけき春風に梅の匂ひや天に滿つらん―本曲作者の創作した歌であらう。

○難波の事か―難波を何はにいひかけた。何事かとの意。

○楮領巾―楮の皮で織つた領巾で、領巾は上古婦人の禮服に領より肩へかけて飾りとしたもの。

○撫づとも盡きせぬ―拾遺集讃人不知の歌「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖ならなん」を引く。佛說に、劫とは天人が百年に一度來て四十里四方の岩を撫で、その岩が擦り盡すよりもなほ長い時間をいふとある故事に據つて詠んだ歌である。

袖を。うつしていざや奏でん

【モ】

地『月もおしてる。難波の浦

〔序舞〕

シテワカ『鶯の。聲ものどけき。春風に

地『梅の匂ひや。天に滿つらん天に滿つらん。天に滿つらん

シテ『ゆたけしや。難波の事か。大君の

地『惠みに洩れねば草木まで。時をりをりを。違へずして。花咲き實を結び

シテ『人民も唯安らかに

地『人民も唯安らかに。明くれば暮るる。暮るれば明方の。東の山の端。匂ひそめて。霞みながらに明け行くまにまに。綠の空に。たなびく白雲は。天つ少女の天つ楮領巾。撫づとも撫づとも盡きせぬ巖も。わが君が代のたとしへに足らじ

【モ】

梅精『月もおしてる難波の浦――』

（月も照り渡つたこの難波の浦に）――と高ひ出し

〔序舞〕

を舞ひ、

梅精――

『鶯の聲ものどけき春風に、梅の匂ひや天に滿つらん』

（鶯の聲ものどかな春風に誘はれて、梅の匂ひが空一面に漂ふことであらう）と謠つて舞ひつゞけ、

なほ、

梅精『何事も豐かな大君の御惠みに漏れるものはなく、草木まで御惠みに浴して、その季節々々を違へず、春は花咲き秋は實を結び、人民もたゞ安らかに明かし暮らして居ります。……おや、さういへば、もはや夜も明方になつて、東の山の端が白ムで來て、一面霞んだまゝで次第に明けて行くにつれて、空が綠色となつてくる、その中に白雲のたなびいてゐる樣は、宛も天女の姿のやうです。天女といへば『君が代は天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巖ならなん』といふ歌がありますが、それてはまだいひ足りたい、天地と共に幾久しく御榮え遊ばすやう、お祈り

な。ただ幾久に天地の。ただ幾久に。天地のむたに。榮えまさなん。めでたさよ

と舞ひ納めて、常座にて留拍子を踏む。

○天地のむたに—「むた」は共にといふ意。

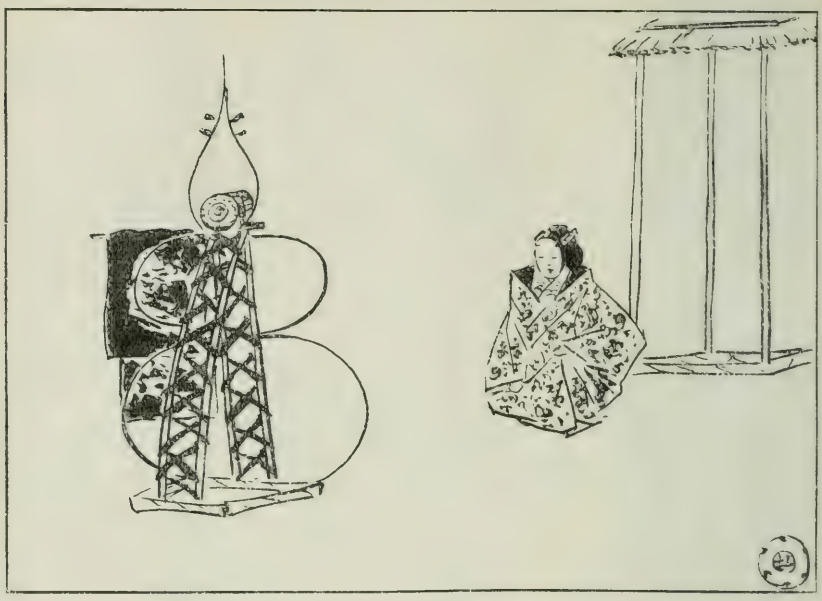
するのでございます」

といふ意味のことを謠つて舞ふ。その間に夜が明け旅人の夢がさめた心で、梅精に舞ひ納めて退場する。

附記

○紫の蓋—紫色の絹又は織物を張つた長柄の傘。延喜式の主殿式に「正月元日燒香史生左右各二人……一人執二梅枝一、二人紫繖、三人紫蓋……」

○大嘗—毎年十一月天皇新穀を召し上り給ふにつき、まづこれを神祇に供へ給ふ御儀式がある。これを古は大嘗と稱へたが、後世天皇御即位の年に行はせ給ふのを特に大嘗といひ、例年のは新嘗と稱へることとなつた。こゝは上古の稱に從つたのである。



梅枝（うめがえ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 身延山僧、**ワキツレ** 同從僧（二人）、**前シテ** 里女（富士妻の靈）、**狂言** 所の者、**後シテ** 富士の妻

【所】 攝津國 住吉

【時】 （九月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。

【梗概】 身延山の僧が廻國行脚して、住吉で一夜の宿を求めたところ、その庵に不似合な太鼓と舞衣裝があるので、不審を起し、女主人にその謂れを尋ねると、「昔天王寺の淺間といふ伶人と、住吉の富士といふ伶人とが、內裏で行はせられる管絃の役を爭つて、富士は淺間に殺されてしまつた。富士の妻はこれを悲しんで、いつも夫の形見の太鼓を打つて心を慰めてゐたが、これも遂に死んでしまつたから、その執心を弔つて下さい」といつて消え失せた。僧は不思議に思つて、法華經を讀誦してゐ

ると、富士の妻の亡靈が夫の衣裝を着て現れ出て、愛着の執心を述べ懺悔の舞を奏する。

【出典】〔富士太鼓〕と同材のものを、一は現在物として、これは幽靈物として脚色したのであるが、確かな出典は見當らない。委しくは〔富士太鼓〕に於て述べようと思ふ。なほ本曲の曲名〔梅枝〕は、後ジテの舞ふ越天樂の唱歌「梅が枝に鶯は巣をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯」の名を取つたのである。

【概評】まづ形式的方面について見ると、前段、前ジテの眞性告白が、普通はロンギの形をとつてゐるのに、これは唯詞で進んで居り、後段、ワキ待謠が、これはワキサシ、地、地上歌といふ複雜な形をとり、クセが片クセで、クリ、サシのないことなどが、普通の複式能と異つた點である。內容は〔富士太鼓〕と同材であるから、その曲に於て併せ考へることとして、たゞこゝに一言したいのは〔富士太鼓〕及び本曲の問語によれば、內裏の管絃の役は淺間に定つてゐたのを、富士が推參して、その役を爭ひ、失敗して且殺されることとなつてゐるのであるが、本曲のシテ語では「富士にこの役を賜はるによつて、淺間安からず思ひ、富士をあやまつて討たせぬ」と、淺間だけが惡人であるやうにいつてゐることで、これは、妻が夫を庇ふ心持として、本曲作者の特に考慮した點であらうと思ふのである。演奏效果については〔富士太鼓〕も決してまづくはないが、そのシテ妻の心理には、繾綣の情と共に雄々しい復讐の念が交錯してゐて、女らしい雅馴を缺く恐れがあるが、これはひたすら繾綣の情に終始して、しかもその情を表すのに、樂人の妻らしい優雅な歌舞を演じてゐるので、複式能としての夢幻的情趣と相俟つて、一層幽玄な趣を表してゐるのである。

【一】

後見、藁屋に引廻をかけたる作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ身延山僧、角帽子・着附無地夏斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて經卷を懷中し、ワキヅレ從僧二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキ　次第　捨ててもめぐる世の中は。捨ててもめぐる世の中は。心の隔てなりけり

地取にワキに正面に向き、

【一】

前段

舞臺は初め身延で、ワキ身延山僧、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

僧　出家したとはいへ、廻國巡禮をしてゐるのだから、やはり世の中を離れきつてはゐないのだが、出家前と心の持ち方は違ふのだ」

さ次第にわが心持を述べ、

○捨ててもめぐる―世を捨てて出家したが、やはり廻國巡禮して、世の中を離れてゐないの意。

○心の隔て―心の持ち方が違ふとの意。

○身延山―日蓮宗の總本山久遠寺の山號。甲斐國南巨摩郡身延山にあり、文永十一年日蓮上人の開基。
○沙門―梵語のśramanaで靜止又は勤息と譯す。出家して佛道を修める者。僧。
○緣の衆生―佛道に有緣の衆生。
○濟度―衆生を生死の苦海より濟ひ出して、涅槃の彼岸に渡すこと。
○雲水の身―行脚僧。所定め不諸國を行脚する樣を雲水に比していつたのである
○果て知らぬ―身の終と旅の終とを兼ねていふ。
○わが衣手や―世を厭ふわが衣の色の墨染を住の江にいひかけた。
○住の江―住吉の古名。攝津國東成郡にある。
○笑止や―困つたことだ。

ワキ「これは甲斐の國身延山より出でたる沙門にて候。われ緣の衆生を濟度せんと。多年の望みにて候程に。この度思ひ立ち廻國に赴き候

といひて、ワキヅレと向合ひ、

ワキヅレ「道行」いづくにも。住みは果つべき雲水の。住みは果つべき雲水の。身は果て知らぬ旅の空。月日程なく移り來て。所を問へば世を厭ふ。わが衣手や住の江の里にも早く着きにけり里にも早く着きにけり

ワキ「所を問へば世を厭ふ」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて住吉に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き

ワキ「急ぎ候程に。これははや津の國住吉に着きて候。あら笑止や。俄かに村雨の降り候。これなる庵に宿を借らばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて、一同脇座の方へ行き、ワキは作物に向ひ、

ワキ「いかにこの屋の內へ案內申し候

僧「私は甲斐國身延山から出て來た僧です。私は多年の間有緣の衆生を濟度したいと望んでゐたので、今度思ひ立つて廻國巡禮に出掛けるのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「どこと所定めず諸國を巡禮する行脚僧のことと、落ちつく光もなく、旅に月日を過して、今來たここを、何處であらうと尋ねると、出家の墨染衣に緣のある住吉だといふことだ。それではもはや住吉に着いたのであつた」

といつてゐるうちに舞臺は住吉となる。

僧「旅を急いだので、思ひの外早く攝津の國住吉に着きました。(空を眺めて)これは困つた、村雨が降つて來た。この家で宿を借りませう」

舞臺の住家の前へ行つて、

僧「もうしこのお內へお頼み申します」

【二】

○草壁の宿―草を以て壁に代用したあばらや。
○眞柝の葛くる人もなく―葛を繰るを、來るにいひかけて序詞とした。後拾遺集源經信の歌に「旅寢する宿は深山に閉ぢられて正木のかづら來る人もなし」
○無緣の沙門―これまで何の緣故もなく始めて來た僧との意。
○一宿は利益―僧を一夜泊めて供養するのは大きな功德である。〔鵜飼〕にも「一僧一宿の功力に引かれて」
○埴生の小屋―土の上に筵などを敷いた賤しい家。萬葉集卷十一に「をち方の埴生の小屋に小雨降り床さへ濡れぬ身に添へ吾妹」
○いぶせくて―むさくろしくて。
○日もくれ竹の―日も暮れを、呉竹にいひかけ、竹の節をよといふので「呉竹の」を一夜の枕詞とした。
○夕露―いふを夕にいひかけた。
○萑の宿はうれたくとも―「萑の宿」は萑などの野草の生ひ茂つたむさくろしい

【三】

後見、ワキ道行の間に作物の引廻を下す。シテ里女、面深井・鬘・壺帶・襟淺黄・着附摺箔・無色唐織の裝束にて、作物の中に坐し居り、

シテサシ『げにや松風草壁の宿に通ふといへども。眞柝の葛くる人もなく。心も澄める折節に。こと問ふ人は誰やらん

ワキ「これは無緣の沙門にて候。一夜の宿を御貸し候へ

シテ「げにげに出家の御事。一宿は利益なるべけれども。さながら傾く軒の草。埴生の小屋のいぶせくて。何と御身を置かるべき

ワキ『よしよし內はいぶせくとも。降り來る雨に立ち寄る方なし。唯さりとては貸し給へ

シテ『げにや雨降り日もくれ竹の。一夜を明かさせ給へとて（と立上り、作物の戸を開きて眞中に出で）

地下歌「はや此方へと夕露の。萑の宿はうれたくとも。袖をかたしきてお泊りあれや旅人（とワキに

【二】

無壁は住吉のある家。シテ樂人富士の妻の亡靈、女主人の態をして、その家の中に居り、

女「草を壁代にしたこのあばら屋には、松風は通つてくるが、人とては誰一人訪れることもなく、物靜かに暮らしてゐるところへ、誰か尋ねて來たやうだが、一體どなたでございます」

僧「私は御緣故もない僧ですが、一夜宿をお貸し下さい」

女「おゝ御出家のことなれば、一夜の宿をお貸しするのは功德となることですが、このやうな軒も傾いた賤しい家で、餘りむさくるしいので、お泊めする所もないのでございます」

僧「いえ構ひません、たとひむさくるしくても、この雨降りには立ち寄る所もないのです。是非お泊め下さい」

女「御尤もでございます。雨が降り日も暮れたことですから、それではこゝで一夜をお明かし下さいませ。……さあどうぞこちらへ。見苦しい家ではございますが、どうぞ我慢してお泊まり下さいませ」

シテ家の中へ請じ入れた體。無壁はこれより家の中となる。

家。「うれたく」は憂はしくわびしい意。伊勢物語の歌に「葎生ひ荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり」

○所は住吉の―月も松も住吉の名勝。

○旅人の夢をさますなよ―和漢朗詠集紀齊名の詩句に「松寒風破二旅人夢一」とあるを轉用した。

【三】

○天王寺―大阪市の荒陵山四天王寺。聖德太子の創立。

○淺間といひし伶人―「富士太鼓」を參照せよ。

○伶人―音樂を奏する人。

向きワキと共に坐す)。上歌「西北に雲起りて。西北に雲起りて東南に來る雨の脚。早くも吹き晴れて月にならん嬉しや。所は住吉の。松吹く風も心して旅人の夢を、さますなよ旅人の夢をさますなよ

後見、この間に羯鼓臺の作物に舞衣をかけて正面先に出す。

【三】

ワキ「いかに主に申すべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「これに飾りたる太鼓。同じく舞の衣裳の候不審にこそ候へ

シテ「げによく御不審候ものかな。これは人の形見にて候。これにつき哀れなる物語の候語つて聞かせ申し候べし

ワキ「さらば御物語り候へ

シテ(語)「昔當國天王寺に。淺間といひし伶人あり。

女「おゝ西北から雲が起つて、雨脚が東南の方へ行く。すぐ空が晴れて月夜になることでせう。嬉しいことだ。どうかこの住吉の松吹く風も氣をつけて、強い音を立てず、旅人の夢をさまさないやうにしておくれ」

と獨言をいふ。

【三】

僧「御主人、一寸お伺ひしますが」

女「何でございます」

僧「こゝに奇麗に飾り立てた太鼓と舞の衣裳がありますが、これはどういふわけです」

女「よくお尋ね下さいました。これは人の形見でございます。これについて哀れな物語がございます、お話申し上げませう」

僧「ではお話し下さい」

女「昔當國天王寺に淺間といふ樂人があり、又この住吉にも富士といふ樂人があ

○富士この役を賜はる！〔富士太鼓〕及び本曲の問語と違つてゐる。妻がわが夫を身蟲負して、富士が正しかつたやうにいつたのである。

○あやまつて―傷つけて。

○逆縁―順縁の對。順當ならぬ事によつて佛縁を結ぶこと。謠曲では通りがかりの縁といふ意に用ゐ慣らした。

○深き思ひの色に出でて―心中の悲しみが顏色に現れて。

同じくこの住吉にも富士と申す伶人ありしが。その頃内裏に管絃の役を爭ひ。互に都に上りしに。富士この役を賜はるによつて。淺間安からずに思ひ。富士をあやまつて討たせぬ。その後富士が妻夫の別れを悲しみ。常は太鼓を打つて慰み候ひしが。それも終に空しくなりて候。逆縁ながら弔ひて給はり候へ（としをる）

ワキ「かやうに委しく承り候は。その古の富士が妻の。ゆかりの人にてましますか

シテ「いやとよそれは遙かの古。思ふも遠き世語の。ゆかりといふ事あるべからず

ワキ『さらば何とてこの物語。深き思ひの色に出でて。涙を流し給ふぞや

シテ「なういづれも女は思ひ深し。殊に戀慕の涙に沈むを。などか哀れと御覽ぜざらん

りました。この二人がその頃宮中で遊ばす舞樂にお役を戴かうと互に爭ひ、二人とも都に上りましたが、富士がその役を戴きましたので、淺間は憎らしく思つて、富士を討つて殺しました。その後富士の妻が夫の別れを悲しんで、いつも夫の太鼓をうつて心を慰めてゐましたが、それも遂に死んでしまつたのでございます。不思議な御縁でございますが、どうか回向をして下さいませ―

といつて泣く。

僧「そのやうに委しく御存じの所を見ると、あなたは昔の富士の妻と御縁故のある方ですか」

女「いえ／＼、それはずつと昔の、思ふも遠い昔の話で、その縁故などといふ筈はございません」

僧「それならばどうしてこのお話に、大層悲しい樣子をして、涙をお流しになるのです」

女「いえ、女は誰でも情の深いものです、殊に戀慕の思ひに涙を出すのは當然のことで、それをどうしてあはれとはお思ひ下さらないのでございます―

○太鼓は朽ちず苔むして―和漢朗詠集大江音人の詩句に「諫鼓苔深鳥不レ驚」とあるを引いた。原句は天下の太平を祝したもので、昔堯の世に臣下が諫を上らうとする時には太鼓を打つ例であつたが、太平無爲で諫鼓を打つことがなかつたので鼓には苔が生え、鳥も鼓の音に驚かされることがなかつたといふ意。

○住むもかひなき―住むを澄む意に取做して池水とつづけた。

○忘れて年を―野中などの人知れぬ流れを忘水といふので、池水に續けて、忘れて年をとつゞけた。

ワキ『猶も不審は殘るなり。形見の太鼓形見の衣。ここには遺し給ふらん

シテ『主は昔になり行けども。太鼓は朽ちず苔むして

ワキ『鳥驚かぬ

シテ『この御代に

地上歌『住むもかひなき池水の（シテ立上り）。住むもかひなき池水の。忘れて年を經しものを。又立ち歸る執心を。助け給へ といひ捨てて。かき消す如くに失せにけり

と小廻りして常座にて開き、靜かに中入。

【間】

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて、名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。住吉の里に住居する者にて候。今日は松原のあたりへ出で。心を慰めばやと存ずる。あら笑止や。俄かに日も暮れ雨も降るやうになつて候。（ワキを見て）いや是なら御僧は。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「是は甲斐の國身延山より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なかくこの邊の者にて候

僧「それでも猶不審が晴れないのです。それならば、この形見の太鼓や衣裝は、どうしてこゝに遺されたのでせう」

女「その人はとうの昔に亡くなつたのでございますが、形見の太鼓は今に朽ちず殘つてゐるのでございます。私もこの太平の御代でありながら、生き甲斐もない暮らしをして居りますが、それでも太鼓の事は永らく忘れてゐましたところ、今又思ひ出して、深い執心に苦しむのでございます。どうぞお助け下さいませ」

といひ捨てゝ、この女主人はかき消すやうになくなつてしまつた。

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（ワキの前に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。古この所に於て。富士と申す樂人夫婦の果てたる子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に富士の空しくなりたる樣體は。萩原の院の御宇に。内裏に七日の管絃の御座候により。國々より管絃の役者を召し給ふ。當國天王寺より淺間と申す樂人。是は太鼓の上手にて。卽ち太鼓の役を仰せつけらるる。又當所住吉に富士と申す樂人。是も上手なれども御召なく候間。望んで都に上りその由奏聞申しければ。いづれも〳〵面白き名どもかな。さりながら古き歌に。信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば。富士の煙の甲斐やなからんと聞く時は。名こそ上なき富士なりとも。あつばれ淺間はまさうずるとありければ。誰ありて富士と申すものもなかりたると申す。然れども同藝相妬む習ひにて。淺間は富士が推して上りたるを安からず思ひ。念なう富士を討ち申して候。左樣の事を妻子は夢にも知らず。富士が歸りの遲きを不審に思ひ都に上りしに。富士は淺間に討たれたると聞いて。扨は上すまじきものをと後悔すれども叶はず。富士が形見の太鼓鳥甲など申し請け。それを形見に翫び候へども。光陰留め難く彼女空しくなり申し候間。卽ち塚に築き込む。これなるが富士の舊跡にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

○萩原の院―第九十五代花園天皇。

○信濃なる淺間の嶽も―後撰集するがの歌。

○念なう―雜作もなく。

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前この所に宿を借りて候へば。主と思しくて女性一人太鼓を飾り。同じく舞の衣裝の候程に。不審をなして候へば。富士夫婦の事を身の上のやうに申され。かき消すやうに姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては富士が妻の幽靈にて御座あらうずると存じ候間。富士夫婦の跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。夫婦の跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

後見、藁屋の作物及び羯鼓臺にかけたる舞衣を引く。

ワキ扇を懷中し經を持ちて、ワキヅレと共に眞中に出で、正面に向き下に居て、

ワキサシ『それ佛法樣々なりと申せども。法華はこれ最第一

ワキヅレ『三世の諸佛の出世の本懷。衆生成佛の直道なり（と合掌し）

ワキ『就中女人成佛疑ひあるべからず

【四】

後段

旅僧は讀經して、

僧　凡そ佛經は色々數多くあるが、その中でも法華經は最もありがたい第一の經文で、三世の諸佛もこれによつて出世の本懷を遂げられ、一切衆生もこれによつて容易く成佛することが出來るのである。殊に女人もこの經によれば成佛すること疑ひないのである。一體女子といふものは業因の深いもので、一には梵天王とな

【四】
○法華はこれ最第一―法華經法師品に「藥王今告ゝ汝、我所說諸經、而於ニ此經中一、法華最第一」
○三世―過去、現在、未來。
○諸佛の出世の本懷―法華經方便品に「諸佛世尊、唯以ニ一大事因緣一故、出ニ現於世一」とあり、三世の諸佛がこの世に出現して說法するのは、たゞ一佛乘の法華經を說いて、一切衆生を濟度せん爲である。故に衆生が成佛する捷徑はこの法華經であるとの意。
○就中女人成佛―法華經提婆達多品に龍女が成佛したことが見えて居る。

○一者不得作梵天王―以下「速得成佛」まで法華經提婆達多品に、舍利弗が龍女の成佛を疑つて不審した語。「一には梵天王となることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。いかんぞ女身速かに成佛することを得ん」と訓讀す。

○梵天王、帝釋、魔王、轉輪聖王―本曲の末尾に附記す。

○速得成佛―法華經の原文では、成佛が出來ないと否定してゐるのを、轉じて速かに成佛出來ると肯定の形にして、下の句に續けたのである。

○荒磯海の―なに疑ひあらんを荒磯海にいひかけ、海の緣で深き執心と續けた。

○若有聞法者無一不成佛―法華經方便品の語。次の句はその譯文。

【五】

○碧玉の寒き蘆―和漢朗詠集小野篁の詩句「碧玉寒蘆錐脫囊」を引いた。碧玉は青蘆の形容。若蘆が水中から現れる樣は、錐が袋から貫き出たやうだとの意。これをわが妻の見露はされた喩に引いた。

ワキヅレ『一者不得作梵天王。二者帝釋三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身云何女身

地。速得成佛何疑ひか荒磯海の。深き執心を。晴らして浮かみ給へや。上歌或は若有聞法者。或は若有聞法者。無一不成佛と說き。一度。この經を聞く人成佛せずといふ事なし。唯賴め賴もしや。弔ふ燈火の影よりも。化したる人の來りたり。夢か現か見たりともなき姿かな

【五】

後ジテ富士の妻、前の裝束の唐織を脫ぎ、鳥甲を被り、舞衣・無色縫箔腰卷を着て、前の地上歌の間に幕より出づ。

ワキ・ワキヅレ、地上歌の始めに立ちてもとの座に歸り坐す。

ワキ『不思議やな見れば女性の姿なるが。舞の衣裳を着し。さながら夫の姿なり。「さてはありつる富士が妻の。その幽靈にてましますか

後ジテ『げにや碧玉の寒き蘆錐囊に脫すとは今身の上に知られさむらふぞや（と舞臺の眞中に行きしをり

ることが出來ず、二には帝釋夫、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身となることが出來ないといはれて居るけれども、この御經によれば成佛すること疑ひないのである。こゝに回向する幽靈よ、深い執心を晴らして成佛せられよ」

僧「この御經には『この法を聞くものは誰一人として成佛しない者はない』と說かれてあつて、成佛しない者はないのである。たゞ〳〵この御經をお賴みなさるがよい」

と回向してゐる間に、後ジテ富士の妻の幽靈登場する。

僧「おゝかうして回向してゐると、燈火の影から、化性の人が來たか、これは夢であらうかほんとであらうか、どうも見たこともないやうな姿だが」

と詞言をいふ。

【五】

變人富士の妻の幽靈、舞臺に入る。旅僧これを見て、

僧「これは不思議だ、よく見ると女だが、舞の衣裳を着て、まるで男の姿だ。さては昔の富士の妻の幽靈なのですか」

富士妻「昔の句に『碧玉の寒き蘆錐囊を脫す』とありますが、それが今の私の場合にあてはまることとなつて、私の姿が見露

○妙なる法―妙法蓮華經。
○受持―受けたる教を明記して忘れないこと。
○變成男子―前に擧げた八歳龍女が成佛する時、まづ變じて男子と成つたといふ佛説によつていふ。

○惡趣―惡業によつて趣く場所。地獄・餓鬼・畜生道を三惡趣といふ。
○ゆひかひなく―亂れ髪を結ふを「いひ甲斐なき」にいひかけた。
○戀衣の夫―衣の褄を夫にいひかけた。
○涙敷妙の―涙が頻りに出るといふのを敷妙にいひかけた。敷妙は枕の枕詞。

○一念の起るは病となりつつ―一度惡念の起るのは病であるが、二念と續かないのは藥であるとの意。宗鏡錄に「瞥起是病、不レ續是藥。不レ怕二念起一、唯恐二覺遲一」
○戀忘れ草も住吉の―古今集紀貫之の歌「道知らば摘みにも行かん住吉の岸に生ふてふ戀忘れ草」を取つた。

ながら坐し)。さりながら妙なる法の受持に逢はば。變成男子の姿とは。などや御覽じ給はぬぞ。然らば御弔ひの力にて

地『憂かりし身の昔を懺悔に語り申さん

と立ち、これより謠に合せて仕科、

地クセ『さるにてもわれながら。よしなき。戀路に侵されて。長く惡趣に墮しけるよ。さればにや。女心の亂れ髪。ゆひかひなくも戀衣の。夫の。形見を戴きこの狩衣を著しつつ。常には打ちしこの太鼓の。ねもせず、起きもせず涙敷妙の枕上に。殘る執心を晴らしつつ。佛所に至るべし。嬉しの今の教へや

シテ『思ひ出でたる一念の

地『起るは。病となりつつ繼がざるはこれ藥なりと。古人の教へなれば。思はじ思はじ戀忘れ草

はされることとなりました」

と旅僧の傍へ近づき、

富士妻、しかし、ありがたい御經を伺つたならば、變成男子となることも出來ませう。一層のこと、何故この姿をそのまゝ變成男子とお思ひ下さらないのでございます。兎にも角にも御回向の力でこのやうに參れたのでございますから、昔のつらかつた身上話を懺悔に申しあげませう」

富士妻、考へて見ますと、自分ながらつまらない戀路に迷うて、長い間地獄に墮ちてしまつたことでございます。思へば女心のはかなさに思ひ亂れて、何の甲斐もない戀に迷ひ、夫の形見を戴き、この狩衣を着、夫がいつも打つてゐたこの太鼓を持つて、起きもせず寢もせず、たゞ涙にくれてゐたのでございますが、唯今の御教へを受けて、これまでの執心も晴れ、やがて極樂へも參ることでございませう。ほんとに唯今の御回向を嬉しくありがたう存じます。

昔の人の教へに『一度惡念の起るのは病であるが、それが二念と續かず思ひあきらめるのは藥である』とありますから、私ももはや昔の事は思ひあきらめませう、

○手折りやせまし―この忘れ草を手折つて夫を忘れる便りにしようとの意。
○契りあさ衣の片思ひ―契り淺きを麻衣に、麻衣の肩を片思ひにいひかけた。

も住吉の。岸に生ふてふ花なれば。手折りやせましわが心。契りあさ衣の片思ひ執心を助け給へや

と舞ひてワキに向く。

【六】
地ロンギ『げに面白や同じくは。懺悔の舞を奏でて愛着の心を捨て給へ
シテ『いざいざさらば安執の。雲霧を拂ふ夜の。月も半ばなり夜半樂を奏でん

と、また次の謠に合せて仕料、

地『心も共に住吉の。松の隙より眺むれば
シテ『波もて結へる淡路潟
地『沖も靜かに青海の
シテ『青海波の波返し
地『返すや袖の折を得て。軒端の梅に鶯の
シテ『來鳴くや花の越天樂

○夜半樂―唐樂の曲名。教訓抄に「唐玄宗舉兵、夜半誅韋皇后、製夜半樂」
○心も共に住吉の―心の澄むを地名にいひかけた。
○住吉の松の隙より―源三位頼政の歌「住吉の松のひまより眺むれば月落ちかゝる淡路島山」と、古今集の「綿津見のかざしにさせる白妙の波もて結へる淡路島山」を取合せて引いた。
○青海波―盤渉調の唐樂の曲名。
○波返し―青海波の太鼓の打ち方の秘事。
○返すや袖の―波返しを承けて、袖を靡して舞ふといふ。
○折を得て―袖を折つて舞ふとの意を、春の時節の折にいひかけた。
○越天樂―盤渉調の唐樂の曲名。花の枝といひかく。

【六】
地『懺悔話、誠に面白う伺ひました。なほ同じくは、懺悔の舞を舞うて、愛著の心をお捨てなさい」
當主妻『それでは安執の雲霧を拂ひのけますやう、丁度今は夜も半ばになつたのですが、この時に適はしい夜半樂を致しませう。
さういへば、今この住吉は、心も澄むばかり月の照りわたつて、この松の木の間から、向ふを眺めますと、波ご出來たやうな美しい淡路島が見えます。
この沖も靜かな青海原を見ますと、青海波の太鼓を打つのに適はしいやうでございます。
いややはり舞といへば、春になれば鶯が來て鳴く軒端の『梅か枝』の越天樂を致しませう」

○梅が枝にこそ―越天樂の歌詞。興福寺延年舞式にこの歌詞が「越天樂歌物」本調子、盤涉調」として出て居る。

○鶯の聲に誘引せられて―和漢朗詠集白樂天の詩句に「鶯聲誘引來二花下一、草色拘留坐二水邊一」後撰集讀人不知の歌に「鶯の鳴きつる聲に誘はれて花のもとにぞわれは來にける」

○想夫戀―平調の唐樂の曲名。徒然草に「想夫戀といふ樂は女男を戀ふる故の名にあらず、もとは相府蓮、文字の通へるなり。晉の王儉大臣として家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり、これより大臣を蓮府といふ」

○うつつなの―鼓を打つを現にいひかけた。「現な」は現なき夢心。

地『諷へや諷へ

シテ『梅が枝

地『梅が枝にこそ。鶯は巢をくへ。風吹かば如何にせん花に宿る鶯

〔樂〕

羯鼓臺の撥を持ちて舞ひ、

シテ『面白や鶯の

地『面白や鶯の。聲に誘引せられて花の蔭に來りたり

地(キリ)『われも御法に引き誘はれて。われも御法に引き誘はれて。今目前に。立ち舞ふ舞の袖これこそ女の夫を戀ふる。想夫戀の。樂の鼓。うつつなのわが。有樣やな

シテ『思へば古を

地『思へば古を。語るは猶も執心ぞと。申せば月も入り音樂の音は。松風にたぐへて。ありし姿

僧「さあお諷ひ下さい」

富士妻――

『梅が枝にこそ、鶯は巢をくへ、風吹かばいかにせん、花に宿る鶯』

(梅の枝に鶯が巢を作つてゐるが、風が吹いて枝が折れたら、鶯はどうすることだらう)と謠ひ、

〔樂〕

を舞ひ、なほ續いて、

『面白や鶯の聲に誘引せられて、花の蔭に來りたり』

と謠ひ舞ひ、

富士妻『今の歌の鶯か梅に誘はれるやうに、私も御經に引き誘はれて、こゝに出て舞を舞ふこととなりましたが、やはり夫を戀しく思つて想夫戀の樂の鼓をうつのは、自分ながら正氣のないことでございます。もはや思ひあきらめたと申しながら、昔語を致しましたのは、考へて見れば、やはり執心が殘つてゐたのでございました」

といふと、はや月も沈んで、今まで音樂の音と聞えてゐたのは松風の音らしく、今まで見えてゐた姿は明方の光に薄らいで、ぼんやりとしてしまつた。

と富士の妻の亡靈退場す。

○明けぐれ―夜が明け初めて、まだ薄暗い時。

は明けぐれに面影ばかりや残るらん　面影ばかりや残るらん

と舞ひて、常座にて留拍子を踏む。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

著しい異同はない。

古謠本（貞享二年本）

【一】ワキ「急ぎ候程に（貞ナシ）これははや……　【三】シテ「げによく御不審候ものかな（貞ナシ）

附　記

○梵天王―色界初禪天の主で、また衆生の生死輪廻する三界全體の主である。

○帝釋―能天王と譯す。欲界忉利天の主で、佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征する天王。

○魔王―欲界他化自在天の主で、常に多くの眷屬を率ゐて人界に向つて佛道の妨害を爲すといふ。

○轉輪聖王―須彌四洲を統領する王。王位に卽く時に感得する輪寶の種別によつて、金輪王（須彌四天下を領す）銀輪王（東西南の三洲を領す）銅輪王（東南の二洲を領す）鐵輪王（南閻浮提を領す）の四王の別があり、輪寶を轉じて一切を威服するので、轉輪王といふ。

鱗形（うろこがた）

喜

解説

【能柄】 脇能　夢幻的劇能

【人物】 **ワキ**　北條時政、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　女（辯才天神靈）、**狂言**　江島末社神、**後シテ**　江島辯才天

【所】 相摸國　江島

【時】 鎌倉初期（無季）

【作者】 作者及び曲名演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】 北條時政が武士の家として、旗の紋を定めたいと思ひ、江島辯才天に祈願すると、一人の女性が現れて、望みを叶へさせようといふ。時政は不審に思つて、その名を尋ねると、この島に垂跡した神であるといつて社壇に隱れる。やがて光明赫奕として辯才天が現れ出て、一流の旗を時政に與へ、「この旗を持つて居れば、たとひ四方に敵を受けても、自分が神通力を以て救つてやらう」と告げて、神殿の中に入る。

【出典】太平記巻五「時政參龍江島事」に、

昔鎌倉草創の始、北條四郎時政江島に參籠して、子孫繁昌を祈りけり。三七日に當りける夜、赤き袴に柳裏の衣着たる女房の、端厳美麗なるが、忽然として時政が前に來つて告げて曰く、「汝が前生は箱根法師也、六十六部の法華經を書寫して、六十六箇國の霊地に奉納したりし善根に依つて、再びこの土に生まるゝ事を得たり。されば子孫永く日本の主となつて榮花に誇るべし。但しその擧動違ふ所あらば、七代を過ぐべからず、吾が言ふ所不審あらば、國々に納めし所の霊地を見よ」といひ捨てゝ歸り給ふ。その姿を見れば、さしも厳しかりつる女房、忽に臥し、長二十丈許の大蛇となつて、海中に入りにけり。その跡を見るに、大きなる鱗を三つ落せり。時政所願成就しぬと喜びて、則ち彼の鱗を取つて、旗の紋にぞ押したりける。今の三鱗形の紋是也

とあるに據つたのであらう。

【概評】謡曲には、武士を主人公とした曲が甚だ多いが、いづれも源平時代若しくはそれ以前の人達で、北條氏又は足利氏を主人公とした曲は、北條時頼の行脚傳説を主材とした〔藤榮〕〔鉢木〕以外に、殆ど見當らない。その中に、北條時政を題材とし、北條氏の予言を述べた本曲のあることは實に珍しいことで、その制作時代・創作動機を知ることが出來れば、一層の興味を覺えしめるのであらうが、さういふ記錄は、一つも見當らない。作品そのものについて見ると、脇能の定形を辿つたもので、――尤も後ジテを天女とし、これに神樂を舞はしめるなどは、類型から離れてゐるが、それによつて本曲の異彩をなしてゐるとはいへないし、文辭も生氣に乏しく、古い時代の秀れた作と比肩することは出來ない。或は豐臣秀吉が自分を主人公とした〔高野參詣〕〔吉野詣〕などを作つた後、これに刺激せられて、德川初期に何者かが北條時政を題材とした曲の制作を思ひついたのでなからうかと疑ふのである。

【一】

後見、宮の作物に引廻をかけて大小前に出す。
次第の囃子にて、ワキ北條時政、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

【一】

前段

舞臺は初め鎌倉で、ワキ北條時政、ワキヅレの從者を連へて登場。

○弓矢の家—武士の家。○北條の四郎時政—源頼朝の妻政子の父。頼朝を援けて平氏を討滅したが、頼朝の薨じた後、人をしてその子頼家・實朝を弑せしめ、源氏の跡を絶ち、天下の實權をその手に掌握した。建保三年卒、年七十八。○江の島の辯才天—江島は相模國鎌倉の西、片瀬村の濱邊から十一町距つた海中にあり、壽永元年頼朝の本願として文覺がこの地に辯才天を勸請したのである。〔江島〕參照。辯才天は金光明最勝王經護法の天女で、無礙の辯才を有し、佛法を流布し、壽命增益、怨敵退散、財寶滿足の利益を施すといふ。○七德—武に七つの德があるといふ。左傳宜公十二年の條に「楚子曰、夫武禁レ暴、戢レ兵、保レ大、定レ功、安レ民、和レ衆、豊レ財也」と。○五行—木火土金水をいふ。武を五行說に附會したのである。○神農—支那太古の天子。○破戒—佛の戒法を破るもの。元祿謠本には「魔界」とある。○月心にあり—弓の形が月に似てゐるのをいふ。

ワキヅレ矢第『八百萬代を治むなる。八百萬代を治むなる弓矢の家ぞ久しき

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは北條の四郎時政にて候。われ弓矢の家に生まるると雖も。未だ旗の紋定まらず候程に。江の島の辯才天にこの事を祈り申さん爲。唯今參詣仕り候

ワキサシ『それ弓矢は天地陰陽を象り。七德五行の姿なり。ワキヅレ『されば神農の作りし桑の弓。怨敵破戒を亡ぼして。ワキ『國家の爲となすとかや

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ『又は佛法王法の。又は佛法王法の靜かなる國となる事も一張の弓の勢ひ月心にあり。これぞ眞如の月弓の。惡魔もいかで恐れざる惡魔もいかで恐れざる

ワキ正面に向き、

時政「千代萬代まで御代の太平を護る武士の家は誠にめでたいことである」

ミ次第を謠ひ、

時政「私は北條時政です。私は武士の家に生まれたのですが、まだ旗の紋が定まらないので、江島辯才天にお祈りして、お授けを戴きたいと思ひ、これから參詣するのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

時政「弓矢といふものは天地陰陽を象り、七德を具へ五行の姿を示したものである。それでかの支那太古の天子神農の作り始めた桑の弓は、國家に仇をなす者や佛戒を破る者を滅ぼして、國家の爲を計るのである。——

かうして、佛法王法を護つて、國家を安穩にするのも、たゞ一つの弓の力によるもので、弓の形は月に似て明らかなものであるから、この觀弓を見ては、いかな惡魔も怖れずにはゐられないのである」

ミいつてゐるうちに、鱗形は江島となる。

○眞如の月弓―眞如の月を槻といひかけた。槻も桑と同じく弓の材として尙ばれるもの。

【二】

ワキ「急ぎ候程に。これははや江の島に着きて候。まづまづ社壇に參らばやと存じ候

ワキツレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行きかかる。

【三】

シテ女、面增・鬘・鬘帶・襟赤白・清厨摺箔・唐織着流・扇の裝束にて幕の内より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなう時政に申すべき事の候

ワキ脇座に着きてシテに向き、

ワキ「不思議やな人家も見えぬ方よりも。女性一人現れて。わが名をさして宣ふは。何といひたる事やらん

シテ「おろかの仰せ候や。年月歩みを運びつつ。信心深きその故に。望みを叶へ申さん爲。これまで現れ來りたり

と蹲踞に入り、

ワキ「そもや望みを叶へんとは。如何なる人にてましますぞ

時政「道を急いだので、もはや江島に着いた。まづお社に參詣しよう」

と社前に參る型。

【二】

シテ辯才天、女人の姿で幕より出で、

女「もうしもし、時政殿にお話がございます」

時政「これは變だ。人家も見えない所から女の人が一人出て來て、私の名を呼ばれるが、これは一體どうしたことであらう」

女「これは迂濶なことを仰しやる。この永い年月こゝへ參詣して、深く信心せられるから、その望みを叶へてあげようと思つて、こゝまで來たのです」

時政「一體望みを叶へてやらうとは、あなたはどういふ方なのです」

シテ『いやわが名をば名のらずとも。御身まことの志深く

ワキ『神を敬ふ惠みにて

シテ『國も豐かに

ワキ『民榮え

地『治まれる御代のしるしも今更に。御代のしるしも今更に。見えて榮ふる蘆原の。國なれや降る雨も時をたがへぬこの君の。千歳をかけて御注連繩。長くも代々を守るなり長くも代々を守るなり

【三】

地ロンギ『げにや誓ひの數々に。御代を守りの御告とは如何なる人におはします

シテ『今は何をか包むべき。われこの島に跡を垂れ

地『潮の落つる曉は。沖の鷗に心そへ。汀の千鳥

○蘆原の國―日本の古名、神代記に「葦原中國にあらゆるうつしき青人草」

○御注連繩―上の「かけて」を承け、「長く」の序詞とした。

【三】

○跡を垂れ―本地の淨土から、衆生濟度の爲にこの土に降ること。

玄、いや私の名は申さなくとも分る筈です。私はそなたが深く信心して神を敬まはれるから現れて來たもので、わが國は國土豐かに民も榮え、天下太平で、誠にめでたいことですが、この太平の御代をお治めになるわが君を、千年までも永くお守りしてゐるものです」

【三】

時改、そのやうに色々御誓約になつて、大御代をお守りになると仰しやるが、あなたはどういふ方なのです」

玄、今は何を隱さう、自分はこの島に鎭坐してゐる神で、汐の引く曉、沖に飛んで興を添へる鷗も、汀に鳴く千鳥も田鶴も、みなわが惠みを受けてゐるものです。この夜汀にお待ちなさい、聲みを叫へて進

○和光の影―和光は神佛が德光を和らげて衆生に交はり之を救濟すること。鷗も千鳥も田鶴もわが惠みを受けて居るとの意。
○藻汐草―磯邊に流れ寄る海草を掻き集めて鹽を燒く料とするもの。磯邊に寄るの意で、夜にいひかけた。

【問】

○欽明天皇の御宇に―江島涌出のこと〔江島〕に作らる。

○龍の口の明神―五頭龍王の後身。〔江島〕參照。
○なんぼう―いか程。非常に。

鳴く田鶴も。和光の影の數々に。かき集めたる藻汐草夜の汀を待ち給へ。望みを叶へ申さんと。いふかと見えてその儘。社壇に入らせ給ひけり

社壇に入らせ給ひけり

と來序の囃子にて作物の宮に中入。

【問】 亂序の囃子にて、狂言末社神、末社頭巾・面登髭・着附厚板・水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、狂言「かやうに候者は。江の島の天女に仕へ申す末社の神にて候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。珍しからぬ申し事にて候へども。當島の天女と申すは。靈驗あらたなる御事にて候。その子細は。欽明天皇の御宇に雲霧覆ひ暗くして。大雨十日に餘れり。その後この島湧出す。卽ち江の島と號す。その時天女雲中に現れ給ふ。今の辯才天是なり。又武藏相摸の間に海あり。その海に大蛇住んで。人を取る事數を知らず。その時天女かの龍に向ひ。汝惡心を醒し國土の守護神となるならば。夫婦の語らひをなすべしとのたまへば。大蛇大に悅び。されば今より殺生を止むべしとて。やがて夫婦の神となり給ふ。それより龍の口の明神と現れ。國土豐かに守り給ふ。なんぼうあらたなる天女にて候。それにつき北條の四郎時政と申す人。隱れなき弓取にて候が。常に當島を信仰申され。この度御參詣にて候を。天女斜ならず思し召し。假に現れ御詞を交はし給ひて候が。重ねて奇特を拜ませ。大蛇の鱗を三つ捧げ御申しあるべきとの御事なり。これを旗につけて敵陣に向ふ時は。敵方たりとも鉾を伏せ弦を外し。敵對申す者はあるまじく候間。愈〻天下太平にして。何事も思し召すまゝに御座あらうずるは疑ひもなく候。かゝる奇特の御神なれば。何事も祈りを掛け申す事。諸願成就疑ひなし。皆々信仰仕り候へ。その分心得候へ〳〵

せませう―

といふかと思ふと、そのまま神は神殿にお入りになつた。

【註】

○胎藏界―世界を理智の二つに分ち、智の世界を金剛界、理の世界を胎藏界といふ。

○旗さし―旗のこと。

○名も久方の―家の名譽も久しを久方といひかけた。

○久方は月の枕詞。

○久方の月の桂も―拾遺集菅原道眞元服の時その母の詠んだ歌「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」の意をとつた。桂を折るとは仕官立身すること。

○童子―天女に侍する童子をいふ。

○雪を廻らす袂―花に對して雪を出した。雪を廻らすは舞袖の美しい形容。

といひて狂言は引く。

【註】

出端の囃子にて、

地『御殿頻りに鳴動して。日月光り雲晴れて。山の端出づる如くにて。現れ給ふありがたさよ

後見、宮の引廻を下す。後ジテ辯才天、前の裝束の唐織を脱ぎ、黑垂・天冠・舞衣・色大口の裝束をつけ、旗を手に持ちて、作物の中にて床几にかゝり、

後ジテ『われはこれ。この島を守護し衆生を助くる。胎藏界の辯才天とはわが事なり

地『晴れたる空に旗さしの。晴れたる空に旗さしの(シテ宮より出で)。名も久方の月の桂も手に取るばかり。弓矢の家を守りのしるしぞと。時政に旗をたび給ひ(とワキに旗を與へ)。數々の童子。神樂の役役月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす。袂かな

シテ『謹上

地『再拜

〔神樂〕

【註】

後段

神殿が頻りに鳴り轟いて、雲が晴れて、日月の光が山から出るやうにして、辯才天は御出現になつた。實にありがたいことである。

後ジテ辯才天、舞臺作物の蔭壇より現れ出で、

辯才天「自分はこの島を守護し衆生を助ける、胎藏界の辯才天である。この晴れ晴れとした旗を、名譽も久しくうち續き、この後愈々榮達する、武家の守りじるしとして與へるぞ」

と辯才天は時政に旗を授け給ひ、多くの童子が出て神樂の役々を勤める。折柄の月に花の如き童子の姿は愈々美しさを加へ、美しい舞を舞ふのである。

(舞臺の實際には童子は登場しない。シテの辯才天がその意味を示すのである)

辯才天「謹上再拜

といつて、

〔神樂〕

シテが舞を舞ふ。實は多くの童子が神樂を奏する意であらう。

【五】○四敵―四方の敵。○神通―神變不可思議で無礙自在な通力。○六通―六神通の略で、神通力の種類、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏盡通の六つをいふ。○三明―三達ともいふ。阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。宿住智證明（過去の事に通達す）死生智證明（未來の事に通達す）漏盡智證明（現在の事に通達す）をいふ。六通の宿命通・天眼通・漏盡通に同じ。○無明さんげ―無明は一切煩惱の源をなす迷ひの心。「さんげ」は三假であらうか懺悔では意が通じない。三假は因成假・相續假・相待假ですべて假相をなすもの。

【五】地」かくて夜遊も時過ぎて。かくて夜遊も時過ぎて。われ世の中にあらん程。たとひ四敵の寄せ來るとも。この旗をさし上げば。われ神通の身を現じて。六通三明の劍を提げ。無明さんげの敵を拂はばその身も息災安穩なるべしただ信心を致すべしと。あらたに神託なし給ひ。天女は御殿の扉を開き。天女は御殿の扉を開きて。御帳の内にぞ。入り給ふ

と舞ひ、常座にて留拍子を踏む。

【五】かうして、夜の舞樂に時刻も移ると、[illegible]自分がこの世の中にある限りは、たとひ四方から敵が攻め寄せようとも、この旗をさし上げたならば、自分が神通力を現して、六通三明の劍を提げ、無明さんげの敵を拂つてやらう。さうすれば、その身も無事安穩であらう。唯信心を致せ―

とあらたかな神託を仰しやつて、辯才天女は神殿の扉を開いて、御帳の内にお入りになつた。

〔考異〕

古謠本（觀世流元祿二年本）

元祿二年觀世謠本に比べると、それは半能で、

【一】ワキ名乘「江の島辯才天に」の次、元祿「參り、一七日參詣申し候へば。いるこを三つ給はりて候間。重ねて參詣仕り候」とあり、【二】【三】【四】はなく、【四】「御殿頻りに」云々の地謠がなく、直に後ジテの謠となり、次の神樂なく、從つて「時政に旗をたび」以下がなくて「たびにけり。たゞ頼めしめぢが原のさしも草、〳〵」といひて【五】われ世の中にあらん程は」とつゞく。

雲林院（うんりんゐん）

觀（寶剛喜）

解說

【能柄】 三・四番目　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　公光、**ワキツレ**　同從者（二人）、
前シテ　老翁（業平の靈）、**狂言**　京北山の者、
後シテ　在原業平

【所】 京都　雲林院

【時】 （二月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作としてゐるが、世子六十以後申樂談儀に、

（金剛）、雲林院の能に、「もと當の常なき姿に業平のことて、燒松ふりあげ、きといなりし樣、南大門にもうてざりしなり。近江の別當が舞を似せける也」

とある文句は、現行曲には見えないから、古曲がその儘傳つて來たものではないらしい。

【梗概】 攝津國蘆屋の公光は、幼少の時から伊勢物語を愛讀してゐたと

ころ、或夜、京都紫野雲林院で、在原業平と二條后とが伊勢物語を持つて佇んでゐる夢を見たので、奇特の思ひをなし、雲林院に來て折柄今を盛りと咲き亂れてゐる櫻の枝を折ると、一人の老翁が現れて來て、これを咎める。二人は古歌を引いて互に問答した末、老翁は今宵はこゝに寢て奇特を待てといつて、夕霞の中に消え失せる。やがて業平の靈が現れて出て、伊勢物語の祕事を語り、夜遊の舞樂を奏する。そのうちに夜があけて、公光の夢も覺める。

【出典】伊勢物語第四段、業平と二條后との戀物語及びこれについての古註を題材としたものであるが、弘徽殿の細殿に人目を深く忍び云々といつてゐるのは、源氏物語花宴の卷、光源氏と朧月夜内侍との戀物語を採り入れたものであり、この曲の場所を雲林院としたのも、この寺に源氏物語の作者紫式部の墓のあることから思ひついたもので、伊勢物語を主題としながら、これを源氏物語と混同したものである。

【概評】本曲のシテは男性で、所謂鬘物ではないが、このシテ在原業平は歌舞の菩薩と崇められた幽雅な貴公子であるから、その演舞も序舞で、殆ど女性と同樣な感じを與へて、しかも主人公が貴公子であるだけ、普通の鬘物よりは一層高雅な趣を加へてゐるのである。形の上では、普通の三番目物と變つた點もないが、その内容について、後段に所謂伊勢物語の祕事をうち明けてゐることは、ワキ公光をして感激せしめたばかりでなく、當時の觀客すべてをして驚歎せしめた所でなからうか。歌道の師範家で重大な祕事としてゐることを舞臺化するといふことは、非常な大膽な試みであつただらうと想察せられるのである。なほ伊勢物語を題材とした曲には、この外に、〔村若〕〔井筒〕〔小鹽〕などがある。

【一】

○藤咲く松も紫の―松にかかつて咲く藤を紫雲（淨土）にたなびく雲）によそへて、紫野の序とした。

○紫の雲の林―紫野雲林院を和らげていつたのである。雲林院は京都府愛宕郡大宮村にあり、今は唯觀音堂一

【二】

後見、櫻の作物を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ公光、着附段疑斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇の裝束にて男笠を被り、ワキヅレ從者二人、着附無地疑斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り、向合ひ、

次第（ワキ）（ワキヅレ）藤咲く松も紫の。藤咲く松も紫の。雲の林を尋ねん

【二】

前段

舞臺は初め摂津國蘆屋で、ワキ公光、ワキヅレの從者を隨へて登場。

公光　松の枝にかゝつてゐる藤の花を見ても、極樂の紫雲のやうなありがたい感じを起させる、紫野の雲林院に參らう。

と次第を謠ひ、

宇だけを殘してゐるが、昔は著名な大伽藍であつた。
○蘆屋の里―攝津國武庫郡（もと兎原郡）精道村。伊勢物語に「昔男津の國うばらの郡蘆屋の里にしるよししていきて住みけり」とあり、在原業平の所領であつたのであらう。
○公光―謠曲作者假作の人物。
○伊勢物語―わが國最初の歌物語。主として業平の詠歌を敷衍潤飾したものであるので、業平の自敘傳の如くにいひ傳へられ「在五中將日記」ともいつた。
○花の新に開くる日―和漢朗詠集菅原文時の詩句「花新開日初陽潤、鳥老歸時薄暮陰」を引く。初陽は朝日。
○名殘の月の―公光は東へ行くが、落ち殘る月は西に傾くといふのを西の海にいひかけた。
○蛭子の浦―攝津國武庫郡西の宮の濱邊をいふ。この所に廣田明神あり、蛭子を祭る。西の海の緣で汐を出し、汐の干るを蛭子といひかけたのである。
○松蔭に煙をかづく―「松蔭に」を承けて松の煙（松の梢の霞み渡ること）といひ、

地取にワキは笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「これは津の國蘆屋の里に、公光と申す者にて候。われ幼かりし頃よりも。伊勢物語を手馴れ候ところに。ある夜不思議なる靈夢を蒙りて候程に。唯今都に上らばやと存じ候

ワキサシ『花の新に開くる日初陽潤へり、鳥の老いて歸る時。薄暮くもれる春の夜の。月の都に、急ぐなり

といひて、また笠を被り、ワキヅレと向合ひて、

ワキヅレ下歌「蘆屋の里を立ち出でてわれは東に赴けば。名殘の月の西の海汐の蛭子の浦遠し汐の蛭子の浦遠し。上歌「松蔭に。煙をかづく尼が崎。煙をかづく尼が崎。暮れて見えたる漁火のあたりを問へば難波津に。咲くやこの花冬ごもり。今は現に都路の。遠かりし。程は櫻にまぎれある雲の林に着きにけり雲の林に着きにけり

公光「私は攝津國蘆屋の里の公光といふ者です。私は少い時から伊勢物語を讀み馴れてゐましたが、或夜不思議なありがたい夢を見ましたので、これから都へ上らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

公光「朝は花が咲いて初日に照り映え、夕暮には鳥が塒に歸つて、春の朧月夜となる、あの美しい都へ急いで行かうと思つて、この蘆屋の里を出立し、東の方へ進んで行くと、月は西に傾いて、蛭子の浦へ行くまでも、まだ隨分道のりがあるやうに思はれる。が、そのうちに海士の鹽燒く煙の立ち上る尼が崎も過ぎて、夜漁火の見えるあたりへ來たので、こゝは何處だと人に問ふと、あの『難波津に吹くやこの花冬籠り、今を春べと咲くやこの花』と詠まれた難波津だといふことだ。かうして旅を續けてゐるうちに、夢の告を受けた都、遠くから見た時には一面雲か櫻か見分けのつかなかつた都の、雲林院に着いた」

といつてゐるうちに、無優は京都雲林院となる。

その煙を鹽焼く煙にとりなして、鹽焼く煙をかづく（潜る）海士といひ、海士を尼にいひかけた。

○尼が崎―攝津國川邊郡。今の尼崎市。

○難波津に咲くやこの花―難波津と答へたりといひかけて、古今集序の歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」を引いて「今は現に」といひ續けた。

○今は現に都路―前の夢の告を今は現に見るといひかけて都路と續けた。

○櫻にまぎれある―程遠い所から見ると櫻のやうに見える雲といひかけて、雲の林と語を轉じた。

【二】

○遙かに人家を見て―和漢朗詠集内樂天の詩句「遙見二人家一花便入、不レ論二貴賤與二親疎一」を引いた。

○誰そやう―誰そや。うは音を引く爲に添へただけである。

○夕の空は春の夜の―朝の空は霞んでゐたが、夕方には晴るを春にいひかけた。

○嵐の山は名にこそ聞け―地名には嵐山といふのがあるけれども。

ワキ「咲くやこの花」と正面に向き、二三足出でて、またもとに歸り、雲林院に着きたる心。上歌濟みて笠を脱ぎ正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に雲林院に著きて候。見渡せば數多花の咲きて候。一枝手折らばやと存じ候

ワキツレ「尤にて候

といひて、ワキツレは地謠座の前に坐し、ワキは笠を後見に渡して、舞臺の眞中に出で、作物に向ひ、

【二】

ワキ『遙かに人家を見て花あれば卽ち入るなればと。木蔭に立ち寄り花を折れば

と謠ひながら脇座に行く。

シテ老翁、面阿古父尉・尉髮・襟淺黄・着附小格子厚板・茶水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出ながら、

シテ「誰そやう花折るは。今日は朝の霞消えしまに。夕の空は春の夜の。殊にのどかに眺めやる。嵐の山は名にこそ聞け。まことの風は吹かぬに。「花を散らすは鶯の。羽風に落つるか松の響か人か。『それかあらぬか木の下風か。あら心もとなと散らしつる花や。（ワキを見て）「や。されば

【二】

公光はあたりの景色を見て、

公光「古人の句にも『遙かに人家を見て花あれば卽ち入る』とあるのだから、遠慮もいるまい」

といつて花の木蔭に立ち寄り、花を折ると、

シテ在原業平の姿、老翁の姿で登場し、花の折られたのを見て、

老翁「この花を折つたのは誰だらう。今日は朝霞の消えた頃から、夕暮かけて霞まで、すつと殊の外のどかな氣色で、山の名にこそ花を散らす嵐山もあるが、ほんとの風は吹きはしないのに、どうして花が散つたのだらう。鶯の飛び散らしたのだらうか、松風の音に誘はれたのであらうか。或は人が散らしたのであらうか。それとも花を散らす風が木の下を吹いたのであらうか、どうして花を散らしたことだらう、ほんとに氣がかりなことだ」

といつて、公光を見、

○鶯の羽風に落つるか―千載集六條顯輔の歌「梅が枝に降りつむ雪は鶯の羽風に散るも花かとぞ見る」を借りた。○松の響か―松風の音に誘はれて散つたのか。○それかあらぬか―拾玉集の「袂しるやみ山の秋のもの憂きにそれかあらぬか風の夕暮」を借りたものか。○落花狼藉―和漢朗詠集大江音人の詩句「落花狼藉風狂後、啼鳥龍鐘雨打時」を借りて、花を散らす狼藉者の意に用ゐた。○おこと―そなた。○素性法師―良岑宗貞（僧正遍昭）の子で名を玄利といひ、清和帝の御宇左近將監となり、後出家して、雲林院及び石上の良田院に住んだ歌僧。○見てのみや人に語らん櫻花手毎に折りて家づとにせん―古今集春の部にある素性法師の歌。家づとは土産。○春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつろふと見んー古今集春の部藤原好風の歌。よぎては避けてといふ意。○春の夜の一時を―蘇東坡の詩句「春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰」を引いた

こそ人の候。落花狼藉の人そこ退き給へ

ワキ、シテに向ひ二足つめ、

ワキ「それ花は乞ふも盗むも心あり。とても散るべき花な惜しみ給ひそ

シテ「とても散るべき花なれども。花に憂きは嵐。それも花ばかりをこそ散らせ。おことは枝ながら手折れば。風よりもなほ憂き人よ

と、常座に立つ。

ワキ「何とて素性法師は。見てのみや人に語らん櫻花。手毎に折りて家づとにせんとは詠みけるぞ

シテ「さやうに詠むもあり又ある歌に。『春風は花のあたりをよぎて吹け。「心づからやうつろふと見ん。げにや春の夜の一時を千金にかへじとは。花に清香月に影。千顆萬顆の玉よりも。寶と思ふこの花を。『折らせ申す事は候まじ

老翁「おや、成程こゝに人がゐるわ。この花を折つた亂暴者、さあそこをお退きなさい」

公光「花といふものは、頼んで貰ふにしても、盗んで取るにしても、風流な心からすることです。いづれ遲かれ早かれ、花は散るものなのだから、さうお惜しみなさいますな」

老翁「いかにも結局花は散るものですが、時ならぬに散らす嵐は、花にとつて情ないものです。それでも嵐は花だけを散らすものだのに、あなたは枝のまゝ折つたのだから、風よりもなほ情ない人ですよ」

公光「それならば、素性法師が―『見てのみや人に語らん櫻花、手毎に折りて家づとにせん』

（櫻を見て來たさつぱり人に話したのでは面白味がないから、手ん手に花を折つて、土産に持つて歸ろう）

と詠んだのは、どうしたことです」

老翁「そのやうに詠んだ歌もありますが、またある歌には――『春風は花のあたりをよぎて吹け、心づからやうつろふと見ん』

（春風よ、お前は花のあたりを避けて吹いてくれ、果して櫻が自分の心から、ひとりでに散るものか試して見たいと思ふから、まつか櫻一つが心から散りはしまい）

○千顆萬顆の玉よりも―和漢朗詠集菅原文時の句「聳レ日華レ風高低、千顆萬顆之玉、染レ紋染レ浪表裏、一入再入之紅」を引いた。
○花もの言はぬ色なれば―和漢朗詠集菅原文時の句「誰謂『花不『語、輕漾激兮影動レ唇」を引いた。花は物を言はないと人がいふけれども輕い浪のゆらぎにも、水に映る影は唇を動かしてゐるやうであるとの意。
○人にて花を戀衣―出所があるらしく思はれるが見當らない。前句との續き方が變であるが、花がものを言はないものだから、人が勝手にこれを好きなまゝに手折るとの意であらう。
○又春のため―また來る來年の春のため。
○柳櫻をこきまぜて―優劣是非を決することが出來ないとの譬に、柳櫻を出だし古今集素性法師の歌「見渡せば柳櫻をこぎ交ぜて都ぞ春の錦なりける」を引いて、都目前の景色を述べた。

【三】

○束帶―平安朝時代在朝男子の禮裝。

ワキ『げにげにこれは御理。花もの言はぬ色なれば。人にて花を戀衣

シテ「輕漾激して影唇を動かせば。『われは申さずとも

ワキ『花も惜しきと

シテ『いひつべし

地上歌『げに枝を惜しむは又春のため手折るは。見ぬ人のため。惜しむも乞ふも情あり。二つの色の爭ひ柳櫻をこきまぜて。都ぞ春の、錦なる都ぞ春の錦なる

【三】

シテ「いかに旅人。御身はいづ方より來り給ふぞ

ワキ「これは津の國蘆屋の里に。公光と申す者にて候が。われ幼かりし頃よりも。伊勢物語を手馴れ候ところに。（作物を見て）ある夜の夢に。とある花の蔭よりも。紅の袴召されたる女性。束帶とも詠んでゐるぢやありませんか。世の諺に『春の夜の一時は千金にもかへられない』といふのも、花の匂ひが香ばしく月影が清らかだからで、花は千個萬個の玉よりも勝れた寶だと思ふのです。その花をお折りになつてはいけません」

公光『いやいかにも御尤もです。花は物を言はないものだから、人が勝手に好きなまゝに手折りますが、それは花の心を察しない仕業でした」

地謠　花影を映した水が小波にゆれる樣に花が唇を動かしてゐるやうに見えるのですから、花自身が物を言はないにしても、散るのを惜しんでゐる氣持は伺はれるのです。このやうに、枝の手折られることを惜しむのは、來年の春も亦よい花を見たい爲であり、又花を手折るのは、花を見なかつた人に見せたい爲であり、結局花を惜しむ人も折りたいと思ふ人も、風流心から出たことで、兩方とも無理のない事なのです。

いやさういふこの都は、柳と櫻と織り交ぜた錦のやうに、誠に美しい景色です」

【三】

地謠　ところで、あなたはどちらからお出でになつたのです」

公光　私は攝津國蘆屋の里の公光といふ者

給へる男。伊勢物語の草子を持ち佇み給ふを。あたりにありつる翁に問へば。あれこそ伊勢物語の根本。在中將業平。女性は二條の后。所は都北山陰。紫野雲の林と語ると見て夢覺めぬ（とシテへ向き）。餘りにあらたなる事にて候程に。これまで參りて候

シテ「さては御身の心を感じつつ。伊勢物語を授けんとなり。今宵はここに臥し給ひ。別れし夢を待ち給へ

ワキ『嬉しやさらば木の下に。袖をかたしき臥して見ん

シテ「その花衣を重ねつつ。また寢の夢を待ち給はば。などか驗のなかるべき

ワキ『かやうに委しく教へ給ふ。御身は如何なる人やらん

○在中將業平―在原業平。阿保親王の第五子で兄行平と共に在原姓を賜はつたわが國屈指の歌人。近衞中將であつたから、在五中將とも、在中將ともいつた。

○二條の后―藤原長良の女で、清和天皇の中宮となり二條の后と呼ばれた人。入内の前に業平と契り、業平に誘はれて家を遁れ出て途中で捕はれた由伊勢物語に見えて居る。

○紫野雲の林―業平は雲林院に何等關係がない。これは雲林院に源氏物語の作者紫式部の墓があるので、伊勢と源氏とを混同して、業平の墓がこの寺にあるもののやうに考へて作つたものであらう。

○伊勢物語を授けん―伊勢物語の祕事を傳授しようとの意。

○花衣―こゝでは花の散りかゝつた衣。

○また寢の夢―再び寢ること。

ですが、少い時から伊勢物語を讀み馴れてゐましたところ、或夜夢に、ある花の木蔭に、紅の袴を着た女と束帶を着た男とが伊勢物語の本を持つて立つて居られたので、その傍にゐた老人に『この二人はどういふ方です』と尋ねると、『あの男の方は伊勢物語の主人公在原業平、女の方は二條の后で、この所は京都の北山、紫野の雲林院です』といつたかと思ふと、夢がさめました。餘りにあらたかな事なので、こゝまで參つた次第です。

老翁「それでは、業平があなたの熱心に感じて、伊勢物語の祕傳を授けようとせられるのでせう。今夜はこゝに寢て、前の夢の告をお待ちなさい」

公光「嬉しいことです、それではこの木の下に袖を敷いて寢て見ませう」

老翁「その花の散りかゝつた着物を着て、こゝに寢て、二度の夢をお待ちになつたならば、きつと奇特な靈驗がありませう」

公光「そのやうに委しくお教へ下さるあなたは、一體どういふ方なのです」

○昔男―在原業平のこと。業平を主人公とした伊勢物語は毎段「昔男ありけり」と書き起してゐるので、昔男を業平の異名の如く取扱つたのである。

○何と夕映の―何と言ふを夕といひかけた。

○花をし思ふ心ゆゑ―前の「年の古びやう」との意を承けて、古今集藤原良房の歌「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」を引いたのであらう。

○木隠れの月に―後撰集讀人知らずの歌「春来れば木隠れ多き夕月夜おぼつかなくも花蔭にして」を引いた。

○昔を戀衣―昔を戀しく思はゞといひかけて、戀衣といひ、衣の縁語一重の音を借りて一枝と續けた。

【問】

○大伴の黒主が歌の様―古今集序に黒主の歌を評して「大伴黒主はその様いやし。いはゞ薪木負へる山人の、花の蔭に休めるが如し」とあるを指す。黒主のこと、「志賀」参照。

シテ「その様年の古びやう。昔男となど知らぬ

ワキ『さては業平にてましますか

シテ『いや

次の地上歌にワキは下に居り、シテは謠に合せて仕科、

地上歌『わが名を何と夕映の。わが名を何と夕映の。花をし思ふ心ゆゑ木隠れの月に現れぬ誠に昔を戀衣一枝の花の蔭に寢て。わが有様を見給はば。その時不審を晴らさんと。夕の空の一霞思ほえずこそなりにけれ思ほえずこそなりにけれ

と常座にて開き、静かに中入。

後見、作物を引く。

【間】

狂言所の者、着附段鬘斗目・長上下・腰帶・小刀・扇の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。都北山邊に住居する者にて候。やう〳〵花も盛りにて候間。醍醐清水大原などの花を見申して候が。承り候へば雲林院の花盛りなる由申し候間。参つて見申さばやと存する。(雲林院に着きたる心にて)扨も〳〵見事なる事かな。梢には白雲の棚引きたる如く。見事さ申すも愚かに御座候。大伴の黒主が歌の様にはあらねども。我等如きの心なき者までも。木蔭に休らひ花を眺めばやと存する。(ワキを見て)いや是なる御方はいづ方より御出で候へば。花に眺め入り御入り候ぞ

老翁「この年をとつた姿を御覽になつても昔男だといふことがお分りにならないのですか」

公光「さては、あなたは業平でいらつしやるのですか」

老翁「いや私が何といふ名であらうと、それはどうでもよい、たゞ花の面白さに引かれて、この木隠れの月を幸ひに出で來たのです。ほんとに昔の事を慕はしく思はれるならば、この花の蔭に寢て、私の様子を御覽なさい。その時に不審を晴らしませう」

といふや、夕霧を蔽ふ霞のやうに、ぼんやりとして消えてしまつた。

シテ退場する。

ワキ「是は津の國蘆屋の里に住居する者にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左樣に候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。(眞中に出で下に居て)さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。是なる櫻の謂れ。又業平二條の后の御事につき。樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづこの所を都北山雲林院と申し候。然るにこの花名木なる子細は。昔歌人名將の御賞翫ありて。色々御歌數多御座候。既に。櫻散る花の所は春ながら。雪も降りつつ消えがてにするとも。かやうにも御座候。又素性法師の歌に。いざ今日は春の山邊に歸りなん。暮れなばなげの花の蔭かはと詠み給ふ。是も素性法師の歌に。見てのみや人に語らん櫻花。手毎に折りて家土産にせんと御座候。又散りがたになりて散るを惜しみての歌に。春風は花のあたりをよぎて吹け。心づからやうつろふと見んと。かやうに申せば何とやらん歌物語の樣に候へども。又業平の御事は。伊勢物語に事盡き申すにより。申すに及ばぬ御事ながら。業平と申したる御方は。平城天皇の御子阿保親王の五男にて渡らせ給ふが。歌道花に御好みあつて。あなたこなたの花を御覽候へども。とりわけ雲林院の花面白く思し召し。明暮眺め給ひしより。御歌數多御座候。まづ我等の承り及びたるは。かくの如くに御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

○櫻散る花の所は—古今集承均法師の歌。詞書に「雲林院にて櫻の花の散りけるを見てよめる」とある。

○歌道花に—歌道や花見に

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。是は蘆屋の里に公光と申す者にて候が。われ幼き頃より伊勢物語を手馴れ候處に。この雲林院に參れとあらたに靈夢を蒙り。これまで遙々參りて候。最前これなる花を眺め。暫く休らひ候處に。いづくともなく老人一人來られ。色々に歌などを詠まれ戯れを申され候程に。靈夢のやうを語り候へば。今宵は木蔭に臥し又寢の夢を待てと申され候程に。いかなる人ぞと尋ねて候へば。昔男といひもあへず。その儘姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は夢に御覽ぜられたるは在原の業平にて候べし。かやうの事も御心淺からず。伊勢物語に御身をやつし給ふ故に。夢に見え給ふと存じ候間。暫く御返留ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃奇特なる事にて候間。花の木蔭に候ひて。彌々信心を致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御返留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて、狂言は引く。

【四】

ワキ上歌（待謠）『いざさらば。木蔭の月に臥して見ん。木蔭の月に臥して見ん。暮れなばなげの花衣。袖をかたしき臥しにけり袖をかたしき臥しにけり

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ在原業平、面中將・追懸卷纓・鉢卷・襟白・着附赤地縫箔・單狩衣・紫地指貫・込大口・腰帶・扇・太刀の裝

【四】

後段

公光　さあ、それてはこの月夜に花の木蔭に寢て見よう。日が暮れても花は消えはしないのだから」

といつて、公光は花の散りかゝつた衣の袖を下に敷いて寢た。

【五】

後ジテ在原業平、公光の夢中に現れた心で登場。

【四】○暮れなばなげの花衣―古今集素性法師の歌「いざけふは春の山べにまじりなん暮れなばなげの花の蔭かは」を少しかへて引いた。「なげ」は「無げ」で、よし日は暮れてもやはり花の蔭ではないかとの意。それをここには衣の名の如くに用ゐたのである。

【五】

○月やあらぬ春や昔の春ならぬ―伊勢物語及び古今集に見えた業平の歌。五條の大后宮の西對にお出でになつた藤原高子（二條后）の許へ業平が通うてゐたところ、女を外へ隱されてしまつたので、翌年の正月そこに行つて、去年を追慕して詠んだものであるといふ。

○雲の上人―殿上人。

○花にうつろひ―花に美しく照り映えて。

○その品々―伊勢物語各段の物語。

【六】

○弘徽殿の細殿―弘徽殿は清涼殿の北にあり、女御の住み給ふ所。細殿は廊下。源氏物語花宴の卷に、源氏

東にて出で常座に立ち、

後ジテ『月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わが身一つはもとの身にして

ワキ『不思議やな雲の上人匂やかに。花にうつろひ現れ給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ「今は何をか包むべき。昔男の古を。語らん爲に來りたり

ワキ『さらば夢中に伊勢物語の。その品々を語り給へ

シテ「いでいでさらば語らんと。『花の嵐も聲添へて

ワキ『その品々を

シテ『語りけり

【六】

シテクリ『抑もこの物語は。如何なる人の何事によつて

業平『月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして』

（月は去年のまゝの月だ、春も去年のまゝの春景色だ、しかし人間は、自分は去年のまゝの身であるが、契りかはした女は、去年に變つて、その姿の見えないのがかなしい）と獨言をいふ。公光これを見て、

公光『これは不思議だ、立派な殿上人が美しい花に照り映えてお見えになるが、一體あなたはどういふ方でいらつしやいます」

業平「今は何を隱さう、伊勢物語の主人公昔男の事を話して聞かせる爲に來たのだ」

公光「それでは、どうかこの夢の中に、伊勢物語の色々の話をお聞かせ下さい」

業平「では話をしよう」

と折柄花の木蔭に風の吹く中で、伊勢物語の品々の話を語つた。

【六】

業平「さて、この物語の主人公は、どういふ人で、どういふ譯で深い戀に落ちたのであらうと不審にいふのは、尤もなことだ。

君が弘徽殿の細殿で朧月夜内侍に逢つた事を記してゐるのを、業平と二條后との事柄の如くにとり做した。○心の下簾の―心の中で密かに思ふ事を下簾に、簾を釣るを「つれづれ」にいひかけた。○人は―二條后を指す。○共にあくがれ―二人ともにうかゝと立ち出る。○日の本のうちに―本曲の末尾に記す。○遍昭―俗名を良峰宗貞といひ、仁明天皇の崩御を悲しんで出家し遍昭といつた。その連れた歌とは、古今集の「散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずも惑ふ蝶かな」を指す。○芥川―本曲の末尾に記す。○紅葉襲―衣の色目の名。表紅裏青、又は表赤裏濃紅。○踏みしだき―踏みつけて。○まめ男―實意のある男。○紫の一本ゆひの―古今集讃人不知の歌―紫の一本散に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る―源氏物語桐壺の卷の歌―結びつる心も深きとゆひに濃き紫の色しあせずは―を取合せて、紫の緣語藤を呼び出した。○藤袴―薄紫の指貫。○しをるる―萎える。○信濃路や閑原―信濃國閑

と謠ひながら眞中に出で、

地『思ひの露を染めけるぞと。いひけん事も。ことわりなり

シテサシ『まづは弘徽殿の細殿に。人目を深く忍び

地『心の下簾のつれづれと人は肴めば。われも花に心を染みて。共にあくがれ立ち出づる

と、これより謠に合せて仕舞。舞クセ

地クセ『二月や。まだ宵なれど月は入り。我等は出づる戀路かな。抑も日の本のうちに名所といふ事は。わが大内にありかの遍昭がつらねし。花の散り積る芥川をうち渡り。思ひ知らずも迷ひ行く。かづける衣は紅葉襲。緋の袴踏みしだき。誘ひ出づるやまめ男。紫の。一本ゆひの藤袴。しをるる裾をかい取つて

シテ『信濃路や

その次第といふのは、まづ弘徽殿のお廊下に、あの方が人目を深く忍んで、心密かに思ひ惚れて立つて居られたので、自分も同じ戀心に落ちて、二人ともうかうかと御所を立ち出たのだ。時は二月で、まだ宵のうちであつたが、月は既に雲に隱れた中を、戀の關路に旅立つたのだ。さてあの物語に日本中の名所が書いてあるのは、あれは實にみた御所のうちのことなので、自分達二人は、かの僧正遍昭が、散りぬれば後は芥になる花を―と詠んだ芥に緣のある芥川を渡つて、何の分別もなく迷ひ歩いたのだ。その時、女の上に着た衣は紅葉襲で、緋の袴の裾を踏みつけながら歩き、女を誘ひ出した私は、紫の藤袴の裏えた裾をからげ上げ、木賊色の狩衣の袂を冠の巾子に引きかぶつて忍び出たのだ。――

原は木賊の名産地。園原しげるは園原に茂るとの意。○木賊色―崩黄の黒みがかつた色。○冠の巾子―冠の上に立つてゐる柱のやうな所。○うちかづき―引きかぶり○黄昏月―夕暮の月。○降るは春雨か―古今集大伴黒主の歌に「春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ」

【モ】○思ひ出でたり―業平生前盛んな頃、舞ひ遊んだ事を思ひ出したとの意。○月や知る―前出「月やあらぬ」の歌を承けていふ。○山藍の羽袖―月も山に入るを山藍に、藍の葉を羽袖といひかけた。山藍は藍草で摺つた小忌衣。羽袖は羽衣で、舞姿の輕やかな形容に用ゐた。○返すや夢の―袖を翻して舞ふ事と、衣を裏返して寢て夢を見る事と兼ねていふ。古今集小野小町の歌に「いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣を返してぞぬる」○黄楊の枕―夢の告といひかけた。○松の葉の散り失せず―古今集序―松の葉の散り失せず、眞榊のかづら長く傳はり」を引いて、伊勢物語の長く傳はる意に用ゐた。

地『園原茂る木賊色の。狩衣の袂を冠の巾子にうちかづき。忍び出づるや二月の。黄昏月もはや入りて。いとど朧夜に。降るは春雨か。落つるは涙かと。袖うち拂ひ裾をとり。しをしをすごすごと。たどりたどりも迷ひ行く

と舞ひ上げ、

【モ】シテ『思ひ出でたり夜遊の曲

地『返す眞袖を。月や知る

〔序舞〕

を舞ひ、引續き次の謠に合せて仕科、

地(キリ)『夜遊の舞樂も時移れば。夜遊の舞樂も時移れば。名殘の月も。山藍の羽袖。返すや夢の黄楊の枕。この物語。語るとも盡きじ

シテ『松の葉の散り失せず

地『松の葉の散り失せず。末の世までも情知る。言の葉草のかりそめに。かく著せる古の。伊勢

時は二月の夕暮、月は早くも西に傾いて、薄暗い夜、たまらなく悲しくなつて、春雨のやうに、落ちくる涙を袖で拂ひながら、裾をからげて、しをしをすごすごと、たどりたどりに迷ひ出たのだ」

【モ】業平「おゝ思ひ出した、あの頃の面白かつた夜の舞樂。あの頃を思ひ出して舞を舞はう。おゝよい月夜だ、月は昔の事を知つて居るだらう」

〔序舞〕

業平、昔を追懷して舞ふ。

かうして、夜の舞樂に時刻も過ぎて行くと、名殘の月も山に入つたが、舞ひながら語る昔物語の夢の告はいつまでも盡きない。

誠にこの物語は長く末の世まで傳はるありがたいもので、後世の人に人情を知らせる爲に書かれた歌物語であるが、その伊勢物語を終夜語り聞かされてゐるうちに、夢に覺めてしまつた。

○末の世までも情知る―後世までもこの物語を讀んで人情を知る。
○言の葉草のかりそめに―言の葉草は歌詞。葉草を刈るをかりそめといひかけた

物語。語る夜もすがら覺むる夢となりにけりや
覺むる夢となりにけり
と舞ひ納めて、常座にて留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（觀賓剛喜）

著しい異同がない。

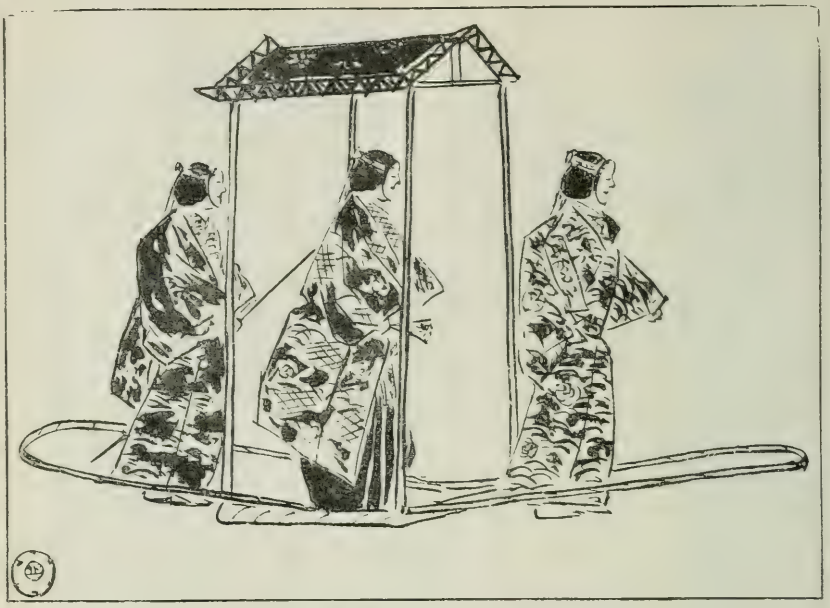
古謠本（貞享二年本）

異同がない。

附記

○日の本のうちに名所といふ事はわが大内にあり―所謂伊勢物語の祕事で、難儀抄・冷泉流注等に、業平が東に下つたといふのは物語の作り事で、東とは業平が東山に蟄居した事、三河國八橋とは紀有常女・二條后など八人の女の喩へである等といつて居るのをいふ。今この祕事を公光に授けるのである。

○芥川　伊勢物語、二條后を連れ出した事の條に「からうじて女心を合はせて盜み出で、いとくらきに來にけり。芥川といふ河をわたていきければ」とあるを指す。伊勢物語の冷泉流注に「芥川といふは津の國芥川にはあらず、内裏にあり、これは常寧殿の下より流れ出でて朝清めの塵はき入るゝなり。塵の入るゝ義をもて芥川といふ」と。



江口（えぐち）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 三番目 複式夢幻能

【人物】 ワキ 旅僧、ワキツレ 同從僧、狂言 所の者、前シテ 里女（江口君の靈）、後シテ 江口君、後ツレ 遊女（二人）

【所】 攝津國 江口

【時】 （九月）

【作者】 能本作者註文には世阿彌の作とし、二百十番謠目錄に金春禪竹の作としてゐるが、禪竹の歌舞髓腦記に閑花風の例としてこの曲を擧げ、また一休題頌（禪竹集所收）に、このクセの文を採つて、

有レ時染レ色、貪著思不レ淺、又有レ時聞レ聲、愛執心彌深、心思曰云、妄染緣成者現也、皆人六塵境迷、作二六根罪一見事聞事、迷心可レ有レ心

右金春遊客、江口歌、題レ之、頌曰、

見色聞聲吟興長、明心悟道沒二商量一、
愁人不レ識普賢境、歌吹檀前總斷腸。

題仁二年二月日

東海純一休、書于薪酬恩庵、以與禪竹老僧二者也。

とあるのを見れば、禪竹の作であらうと思はれる。――この題頌の爲に、一休の作とも誤り傳へられた――親長卿記に長享二年二月二十三日この曲を演じたこと、言經卿記文祿四年三月廿六日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】諸國一見の旅僧が攝津國江口の里に來て、書こゝで西行法師が一夜の宿を斷られて「世の中を厭ふまでこそかたからめ」と詠んだ歌を口ずさんでゐると、一人の里女が出て來て、それは世捨人を諫めたのであると辯解し、自分がその江口君の幽靈であるといつて消え失せる。旅僧は奇特の思ひをして、その跡を弔つてゐると、やがて江口の君が他の遊女と共に現れ出て、舞遊びの樣をなし、歌舞を奏する。その內に、舟は白象と化し、江口の君は普賢菩薩となつて、白雲にうち乘り西の空に行つてしまふ。

【出典】西行が江口の遊女の家に宿を借りたことは、西行の著と傳へる撰集抄第九に、

過ぎぬる長月二十日あまりの頃、江口といふ所を過ぎ侍りしに、家は南北の川にさしはさみ、心は旅人の往來の船を思ふ。遊女の有樣いとあはれにはかなきものを見立ちし程に、冬を待ち得ぬ村時雨の、さえくらし侍りしかば、何となく、

世の中を厭ふまでこそかたからめ、かりの宿りを惜しむ君かな

とよみて侍りしかば、あるじの遊女うちわらひて、

世をいとふ人とし聞けばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ

と返して、急ぎ內に入り侍りき。たゞ時雨のほどの暫しの宿とせんとこそ思ひ侍りしに、この歌の面白さに、一夜のふしどとし侍りき。この主の遊女、今は四十餘りにもやなり侍らん、みめことがらさてもあてにやさしく侍りき。

この贈答歌は新古今集卷十羇旅歌にも西行の歌として見え、その詞書に、

天王寺へ參り侍りけるに、俄かに雨降りければ、江口に宿をかりけるに、かし侍らざりければ、よみ侍りけるとし、返歌の主を「遊女妙」として居る。

又、遊女が普賢菩薩となつて現れたことも、撰集抄第六に出てゐるが、古事談、十訓抄に記された文の方が謠曲に近いから、十訓抄第

三の文を擧げれば、

書寫の性空上人、生身の普賢を見奉るべき由寤寐に祈請し給ひけるに、或夜轉經に疲れて、經をにぎりながら脇息によりかゝりて、暫しまどろみ給へる夢に、生身の普賢を見奉らんと思はば、神崎の遊女の長者を見るべき由示すと見て夢覺めぬ。奇異の思ひをなして、かしこへ行き向ひて、長者が家におはし着きたれば、只今京より上日の輩下りて遊宴亂舞のほどなり。長者横座に居て鼓を打ちて、亂拍子の次第をとる。その詞に曰く、

周防むろづみの中なるみたらひに、風は吹かねどもさざら波立つ

と。上人閑所に居て信仰恭敬して、目をふさぎて居給へり。この時長者忽ちに普賢菩薩の形に現じ、六牙の白象に乘りて、眉間より光を放ちて、道俗貴賤男女を照らす。卽ち微妙の音聲を出して「實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ時なし」と仰せらる。感涙抑へ難くて、眼を開きて見れば又もとの如く女人の姿となりて、周防むろづみの詞を出す。眼を閉つる時は又菩薩の形と現じて法門を演べ給ふ。かくの如き度々、敬禮して泣々歸り給ふ時、長者俄かに座を立ち、間道より上人の許へ來りて、「この事口外に及ぶべからず」といひて、卽ち俄かに死す。異香空に滿ちて甚だ香ばし。

とある。この二つの話を結びつけて本曲を脚色したものである。

【概評】前段第一節、ワキ道行の次に、狂言との問答、ワキサシ謠を加へたのは、「松風」の曲と同樣、舞臺の情景を想像せしめる上に、劇的效果の多い手法で、殊に舞臺の景趣を述べるべきシテの一聲・サシ・上歌を省いて、直に呼掛によつてシテを登場せしめる場合には、一層有效な方法であつた。第二節、ワキ・シテの掛合による、西行と遊女との贈答歌の取扱ひ方も、巧みな要領を得たものである。後段は遊女の舟遊びといふ華麗な場面で、第五節第六節には遊女らしい感慨を述べてゐるが、この遊女を邪淫の罪業に苦しむものとはせず、普賢菩薩の化現として取扱つてゐるので、一體に氣品の高いものとなり、殊にクセの一章は遊女の感慨と佛敎の覺悟とを巧みに織り交ぜた妙文で出來てゐると思ふ。それにしても、女性を常に偏斥して墮獄の苦に惱ませてゐる謠曲作者が、邪淫破戒の遊女を菩薩の化現として取扱つたのは、甚だ奇怪なことといはなければならない。尤もこれは謠曲作者の創作したものではなく、先進文藝にその典據があるので、その說話をあるがままに取入れたもの、否、先進文藝のやうに、單なる遊女を菩薩の化現とすることは、この作者の忍びない所であるから、その遊女を西行と歌を贈答した女性に結びつけ、和歌に達してゐるから、普賢菩薩と現れたものと解釋して、取扱つ

たのであらうか。なほ「室君」に於ても考へて見ようと思ふ。

【一】

○月は昔の友ならば—月は世捨人の友とすべきものであるが、これも在俗の時からの昔馴染であるとすればやはり濁世のもので、全くこの濁世を離れ得る所がどこにあらうとの意。

○天王寺—大阪市の荒陵山四天王寺。聖德太子の創建。

○淀の川舟—淀川は宇治川と桂川との合流したもので京から大阪に入る水路。

○鵜殿—攝津三島郡五領村にある蘆の名所。淀川に沿うた地。

○ほの見えし—蘆の穗といひかけた。

○松の煙—鵜の字を承けて魚を捕る松明の煙をいふ。

○江口—攝津國西成郡中島村。神崎川が淀川の本流から岐れる所で、昔は水驛として賑ひ、遊女の多く居た所である。

【一】

次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧、ワキと同樣の裝束（着附は無地熨斗目）にて、舞臺に入り、向合ひて、

次第「月は昔の友ならば。月は昔の友ならば。世の外いづくならまし

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われ未だ津の國天王寺に參らず候程に。この度思ひ立ち天王寺に參らばやと思ひ候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ「道行」都をば。まだ夜深きに旅立ちて。まだ夜深きに旅立ちて。淀の川舟行く末は。鵜殿の蘆のほの見えし。松の煙の波寄する。江口の里に着きにけり江口の里に着きにけり

ワキ「松の煙の波寄する」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて江口の里に着きたる心。道行濟みて、ワキヅレは地

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ旅僧、ワキヅレ從僧を遣へて登場。

僧「自分では浮世を離れてしまつたと思つてゐるが、出家の友である月が、在俗の昔からの馴染であるとすると、やはり全くこの濁世と無關係な所はどこにもないのだ」

と次第を謠つて、心持を述べ、

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧ですが、まだ攝津國の天王寺に參らないので、今度思ひ立つて天王寺に參らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「まだ夜中のうちに都を出立して、淀の川舟に乘つて下つて行くと、鵜殿の蘆が見え出し、やがて漁火の波にうつる江口の里に着いた」

といつてゐるうちに、舞臺は江口となる。

こゝで狂言所の者から、この邊が江口の遊女の居つた所だと聞き、

○江口の長―長は長者の略多くの遊女を抱へて旅客を慰める者。女將。

○祝着―喜ばしい。

○江口の君―江口に住む遊女。

○その身は土中に埋む―和漢朗詠集白樂天の句に「遺文三十軸、軸々金玉聲、龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」

謠座前に坐し、ワキは仕手柱際に行き、

ワキ「江口の在所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段髭斗目・長上下・腰帶・小刀・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「是は都方よりこの所初めて一見の僧にて候間。江口の長の舊跡を敎へて給はり候へ

狂言「さん候あれに見えたるが江口の長の舊跡にて候。御心靜かに御一見候へ

ワキ「懇に御敎へ祝着申して候。さあらばあれへ立ち越え。心靜かに一見申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

狂言は狂言座にくつろぐ。ワキ舞臺の眞中に行き正面に向きて、

ワキサシ『さてはこれなるは江口の君の舊跡かや。痛はしやその身は土中に埋むといへども。名は留まりて今までも。昔話の舊跡を。今見る事のあ

僧「さては此處が江口の遊女の舊跡であるのか。かの遊女は早く死んでしまつたが、その名は後に殘つて、今に至るまで昔話として傳へられてゐることだ。今その舊跡へ來て見ると、ほんとにあはれな感じがすることだ。さういへば、西行法師が一夜の宿を借られたのに、主人の遊

○西行法師　俗名佐藤憲清、もと鳥羽院下北面の武士で左兵衛尉に任ぜられたが、後出家して圓位又西行といひ、天下を歴遊して、秀歌を多く遺したわが國有數の自然詩人。建久元年寂、年七十三。

○世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りを惜しむ君かなー撰集抄及び新古今集に見えたる西行の歌。委しくは解説にいふ。

【二】

はれさよ。「げにや西行法師この所にて。一夜の宿を借りけるに。主の心なかりしかば。『世の中を厭ふまでこそかたからめ。「假の宿りを惜しむ君かなと詠じけんも。この所にての事なるべし。『あら痛はしや候」

といひて脇座へ行く。

【三】

シテ里女、面増・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて、幕を出ながら、

シテ(呼掛)なうなうあれなる御僧。今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候ぞ

ワキ「不思議やな人家も見えぬ方よりも。女性一人來りつつ。今の詠歌の口ずさみを。如何にと問はせ給ふ事。そも何故に尋ね給ふぞ

シテ「忘れて年を經しものを。又思ひ染む言の葉の。『草の陰野の露の世を。厭ふまでこそ難からめ。假の宿りを惜しむとの。その言の葉も恥かしさよ。「げにや西行法師この所にて。一夜の宿を借りけるに。主の心なかりしかば。『世の中を厭ふまでこそかたからめ。「假の宿りを惜しむ君かな』

女は無情な者で、借さうともしなかつたので、

『世の中を厭ふまでこそかたからめ、假の宿りを惜しむ君かな』

（あなたは俗人の事だから、この世の中を捨てて出家してしまふのはむづかしいだらうが、假か一夜の宿を惜しむのは、あまり難人情）

と詠まれたのも、この所であらう。ほんとにあはれな事だ」

ミ謂言をいふ。

【三】

シテ江口の君の幽霊、里女の姿で登場、旅僧の謂言を聞き咎めた態で、

女「もうしもし、そこにお出でになるお僧さま、今の歌をば何と思つて、お吟じになつたのです」

僧「これは不思議だ、人家も見えない所から女の人が一人來て、今の歌をどうして吟じるのかと尋ねられるが、一體、何故そんな事をお尋ねになるのです」

女「その話はもはや永い年月忘れてゐたのですが、今のお言葉で昔の事が泌み泌みと思ひ出されたのです。そして、『世の中を厭ふまでこそ難からめ、假の宿りを惜しむ君かな』と仰しやつたが、私をそ

○草の陰野の―言の葉の縁で草を出し、草の陰、陰野、野の露、露の世といひつづけた。陰野は山陰などになつてゐる野。

しければ。さのみは惜しみ參らせざりし。その理をも申さん爲に。これまで現れ出でたるなり

と謠ひながら舞臺に入り、ワキに向く。

ワキ「心得ず假の宿りを惜しむ君かなと。西行法師が詠ぜし跡を。ただ何となく弔ふ處に。さのみは惜しまざりしと。ことわり給ふ御身はさて。『如何なる人にてましますぞ

シテ「いやさればこそ惜しまぬ由の御返事を。申しし歌をば何とてか。詠じもせさせ給はざるらん

ワキ『げにその返歌の言の葉は世を厭ふ

シテ『人とし聞けば假の宿に。「心とむなと思ふばかりぞ。心とむなと捨人を。諫め申せば女の宿りに。泊め參らせぬも理ならずや

ワキ『げに理なり西行も假の宿りを捨人といひ

○世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ—西行の歌に對する遊女の返歌。新古今集には遊女の名を妙として居る。

○假の宿りを捨人と—假の宿を人世の意に用ゐた。

のやうに物惜しみをするものとお思ひになつたのかと思ふと、あまりにお恥かしいので、それほど惜しみはしなかつたといふ理由を申したいと思つて、こゝまで現れて來たのです」

僧「これは分らない。私はたゞ西行法師が『假の宿りを惜しむ君かな』とお詠みになつた舊跡を、たゞ何の意味もなく追懷してゐただけだのに、それほど惜しみはしなかつたのだと辯解せられるが、一體あなたはどういふ方なのです」

女「いゝえ、それよりも私はその時宿を惜しみはしませんと御返事しましたのに、何故その歌をお吟じ下さらないのです」

僧「なるほど、その返歌は——

『世を厭ふ人とし聞けば假の宿に、心とむなと思ふばかりぞ」

（別段宿を惜しむのではないが、あなたは世を厭ひ捨てた御出家の事だから、この假の宿に御執着なさらない方がよろしうございませう）

と、出家に御忠告になつたのでしたな」

女「さう、でございます、こちらは女の宿の事ですから、出家の方をお泊めしないのも當然ぢやありませんか」

僧「いかにも御尤もです、西行はこの假の世を捨てた出家なのですから……」

○色好みの家にはさしも！古今集序に「色好みの家に埋れ木の人知れぬ事となりて」とあるを借りた。

○夕波の―などや惜しむといふといひかけ、波をうけて、返らぬ古とつゞけた。
○捨人の世語に―世捨人がかゝる俗談に心を留めらるなとの意。

【三】

○たそかれ―夕暮、薄暗くて、物のはつきり見えぬ時。
○かげろふ人―影のやうに見える人。

○川隈―河の折れ曲つた所
○流れの君―遊女。

○疑ひあら磯の―疑ひあらじを荒磯にいひかけた。

シテ「此方も名に負ふ色好みの家にはさしも埋れ木の。人知れぬ事のみ多き宿に

ワキ『心とむなと詠じ給ふは

シテ『捨人を思ふ心なるを

ワキ『ただ惜しむとの

シテ『言の葉は

地上歌『惜しむこそ。惜しまぬ假の宿なるを。惜しまぬ假の宿なるを。などや惜しむと夕波の。返らぬ古は今とても。捨人の世語に。心な留め給ひそ

【三】

地ロンギ『げにや浮世の物語。聞けば姿もたそかれに。かげろふ人は如何ならん

シテ『たそかれに。たたずむ影はほのぼのと。見え隠れなる川隈に。江口の流れの君とや見えん恥かしや（と面伏せ）

地「さては疑ひあら磯の。波と消えにし跡なれや

客「それに、私の方は名に聞えた色好みの家で、色々人知れぬ嬉はしい事が多いのですから……」
僧「それで、このやうな所に『心とむな』と詠まれたのは尤もな事です」
客「宿を惜しんだのではない、御出家の身を思つたからです」
僧「それを唯惜しんだやうにいふのは、こちらの誤りでした」
客「宿を惜しんだのは、實はこの假の世を惜しまない爲であつたのに、どうして惜しんだなどと仰しやつたのです。あなたも御出家のことですから、そのやうな俗世間の話に心をお留めにならないのがよろしうございます」

【三】

僧「いかにも御尤もなお話だ。ところで、お話を聞いてゐるうちに、夕暮になつて、お姿がよく見えないが、一體どういふ方なのです」
客「夕暮の薄暗い時に、外に彳み、川隈に見え隠れして、流れを立ててゐる江口の遊女とお分りになりませう、お恥かしいことでございます」
僧「さては疑ひもなく、かの亡くなつた人の亡魂なのですな」

○わが宿の梅の立枝や見えつらん思ひの外に君が來ませる―拾遺集平兼盛の歌を引いて、僧の不意に來た意に用ゐた。

○一樹の蔭にや宿りけん―説法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一……皆是先世結緣」平家物語巻七福原落の條に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず、同じ流をむすぶも、他生の緣なほ深し」

シテ『假に住みこしわが宿の
地『梅の立枝や見えつらん
シテ『思ひの外に
地『君が來ませるや。一樹の蔭にや宿りけん。又は一河の流れの水。汲みても知ろしめされよや。江口の君の幽靈ぞと聲ばかりして、失せにけり聲ばかりして失せにけり

と消え入るやうに、靜かに中入。

【間】 狂言、仕手柱際へ出で、

狂言「最前お僧の。江口の長の舊跡を御尋ねにて候間。敎へ申して候が。未だあれに御座あるか。參つて見申さばやと存ずる。(ワキを見て)いやお僧はこれに御座候よ

ワキ「未だ逗留申して候。御身は最前の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵最前舊跡を敎へ申したる者にて候

ワキ「左樣にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「心得申して候。(眞中に出で坐して)さて何事を御尋ねありたく候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この舊跡について江口の長の謂れ。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を仰せ候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左樣の事委

女「浮世にあつた時住んでゐましたこの宿へ、思ひがけなくも、お僧がお出で下さつたのでございます。これも御承知の『一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むも他生の緣』と申すものでございませう。私は江口の君の幽靈です」

といふ聲だけは聞えて、姿は見えなくなつてしまつた。

里女消え失せる樣で中入。

しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ江口の長と申したる御方は。生國は周防の國室住の庄中の御手洗江の里の御方と承り候。初めは播磨の國室の津に御座候ひしが。それよりこの所に御出でありて。江口の里と申す間。さてはわが住む里も江の里なれば。この所へ御出であるべしとて。こゝにて流れを立てたると申す。この江口の長は。普賢菩薩の御再誕なれば。衆生濟度の御方便と承り候。その子細は。播州書寫の開山性空上人。普賢菩薩を拜みたく思し召し。觀世音へ御祈誓ありしに。ある夜の御靈夢に。江口の長を御覽ぜよとの御事なるにより。この所へ御出でありて。長に御對面ありたしと御申し候に。折節長は旅人の女を連れて船遊びをして御座候を。上人つくづく御覽じて候へば。水が文を唱へ候。一分佛釋迦牟尼佛。不分佛多法佛道と唱へ申す間。その時上人開目卽祝とて目を寒ぎ得心あれば。普賢菩薩と現れ。十人の女は十羅刹女と現じ給ふ。又上人開目卽見とて目を開き御覽すれば。江口の長は人間なり。扨は普賢菩薩の御再誕なりとて。拜をなし給ひたると申す。まう我等の承りたるはかくの如くにて候が。御尋ね不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前江口の長の舊跡を眺め。西行の歌などを詠じ候處に。いづくともなく女性一人來られ。その時の返歌などを詠まれ。江口の幽靈といひもあへず。かき消すやうに姿を見失ひて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。江口の長かりに現れ出で給ひ。御詞をかはし給ふと存じ候間。暫く御逗留なされ。ありがたき御經をも御讀誦ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

○室住の庄―周防國熊毛郡室積。一名御手洗といふ。傳說に述べた性空上人の傳說によつて、江口の君の出身をこの地と取做したのである。浦に娥眉山普賢寺がある。

○室の津―〔室君〕參照。

○十羅刹女―羅刹 Rakkasas は梵語で、食人鬼と譯す。十羅刹女は藍婆、毘藍婆、曲齒、華齒、黑齒、多髮、無厭足、持瓔珞、皐諦、奪一切衆生精氣をいふ。

狂言「御逗留にて候はゞ御宿を申さうずるにて候

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ「さては江口の君の幽霊假に現れ。われに言葉をかはしけるぞや。『いざ弔ひて浮かめんと

上歌(待謠)『いひもあへねば不思議やな。言ひもあへねば不思議やな。月澄み渡る河水に。遊女の謠ふ舟遊び。月に見えたる、不思議さよ月に見えたる不思議さよ

【五】

後見、屋形船の作物を脇正面に出す。

一聲の囃子にて、後ジテ江口君、前の裝束に緋大口を着け、唐織壺折とし、後ツレ遊女二人、面連面・臺・臺帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、ツレ・シテ・ツレの順にて舞臺に入り先のツレは舳に、シテは胴間に、後のツレは艪に乘りて棹を持ち、

地上歌『川舟を。とめて逢瀬の波枕。とめて逢瀬の波枕。浮世の夢を見ならはしの。驚かぬ身のは

○言ひもあへねば—言ひも終らぬに。

【五】

○逢瀬の波枕—逢ふ事を逢ふせといふので、それを河の瀬にかけて波を出し、波に枕の浮くといふ意で浮世を呼び出した。波枕は舟の中で寢ること。

○驚かぬ—氣がつかぬ。

【四】

後段

僧「さては江口の君の幽霊が現れて、私に言葉を交はしたのであつた。さあ回向して成佛させよう。……といひも終らないのに、これは不思議だ、月の澄み渡つたこの河に、遊女が舟遊びをして歌を謠つてゐる樣が月の光で見える。これは不思議だ」

【五】

舞臺に屋形舟の作物を出し、後ジテ江口の君がツレ遊女と共にこれに乘る。舟遊びをして、こちらへ漕ぎ寄せてくる態。

江口君「川舟をとめて船中に一夜の契りを結ぶといふやうな生活をしてゐて、この人生のはかないことに氣もつかないでゐるとは、ほんとに愚かなことだ。昔松浦

○佐用姫＝大伴狭手彦といふ人の妻。夫が任那國に遣はされて、肥前松浦潟から船出した時、別れを惜しんで山に登り、船影の見えなくなるまで眺めて歎いたといふ。（萬葉集に數首が詠まれて居る）

○松浦潟＝東は筑前國絲島半島から西は肥前國松浦半島に至る一帯。

○宇治の橋姫＝古今集讀人不知の歌「さむしろに衣片しき今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫」を引き、訪ねてくれる當もなしに人を待つてゐる、遊女の身の上をいふ。

○よしや吉野の＝よしやの、よしを重ねて吉野といひ、花・雪・雲・波とつゞけて、波の泡の縁であはれを呼び出し、何なりと世の面白い事に逢ひたいといふ。

【六】

○川遊遙＝川遊び。

○現なや＝正氣でない。

かなさよ。佐用姫が松浦潟。かたしく袖の涙の唐土舟の名殘なり。また宇治の橋姫も訪はんともせぬ人を待つも身の上とあはれなり。よしや吉野の。よしや吉野の花も雪も雲も波もあはれ。世に逢はばや

【六】

ワキ『不思議やな月澄み渡る水の面に。遊女のあまた歌ふ謠。色めきあへる人影は。そも誰人の舟やらん

後ジテ『なにこの舟を誰が舟とは恥かしながら古の。江口の君の川遊遙の月の夜舟を御覽ぜよ

ワキ『そもや江口の遊女とは。それは去りにし古の

シテ『いや古とは、御覽ぜよ月は昔に變らめや

ツレ（二人）『我等もかやうに見え來るを。古人とは現なや

佐用姫は支那へ渡つて行く夫との別れを悲しんで、涙にくれたといひ、又宇治の橋姫は訪ねてくれない夫を待ち佗びたといふ事だが、私の今の身の上は丁度そのやうなものだ。いや／＼そんな事を歎いてゐても致し方がない。何はともあれ、樂しい日を迎へたいものだ」

と述懷する。

【六】

僧「これは不思議だ、この月の澄み渡つた川に、多勢の遊女が歌を謠つて賑やかな舟遊びをしてゐるが、一體誰の舟であらう」

江口君「なに誰の舟かとお尋ねになるのですか。お恥かしながら私は江口の君で、この月夜に川遊びをしてゐるのです。どうぞ御覽下さいませ」

僧「なに江口の遊女だといはれるのか。でも、それはずつと昔の話であるのに……」

江口君「いゝえ、昔だと仰しやるが、御覽の通り、月は昔のまゝ變りがないぢやありませんか」

遊女「私達もこのやうに一所に來てゐますのに、昔人だとは變なことを仰しやいます」

○いはじや―答を申すまい。
○むつかし―面倒である。うるさい。
○秋の水漲り落ちて　和漢朗詠集鄙展の詩「秋水漲來船去速、夜雲收盡月行遲」を引いた。
○棹の歌―遊女が棹をさしながら謠ふ船歌。
○うたかたの―泡の枕詞。歌の音を重ねて、「あはれ」を呼び出す。

【七】
○それ十二因縁の流轉は―是より船歌。十二因縁は無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死で、これらの因縁が移り廻つて、相應の結果を生ずといふ。六道講式に「流轉無レ窮、如二車廻レ庭、昇沈不レ定、似二鳥遊レ林」
○前生又前生―愚迷發心集に「鎭墮二三途八難之惡趣一、所レ得二苦患一而既失二發心之謀一、或時適感二人中天上之善果一、顚倒迷謎而未レ殖二解脫之種一、先生亦先生都不レ知二生々前一、來世猶來世全無レ辨二世々終一」とあるを引いた。
○生々の前　前世の前世のずつと前の世をいふ。

シテ「よしよし何かと宣ふとも
ツレ『言はじや聞かじ
シテ『むつかしや
シテ・ツレ『秋の水。漲り落ちて。去る舟の
シテ『月も影さす。棹の歌
地『歌へや歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを
今も。遊女の舟遊び。世を渡る、一節を歌ひて、いざや遊ばん

シテ・ツレ舟より降り、ツレ二人は笛座の上に坐し、シテは眞中に行きて床几にかゝる。後見、舟の作物を引く。

【七】
地クリ『それ十二因縁の流轉は車の庭に廻るが如し
シテ『鳥の林に遊ぶに似たり
地『前生又前生
シテ『曾て生々の前を知らず

江口君、他の遊女に向つて、
江口君「もうそのやうな事はとうでもいゝわ。何と仰しやつてもお答へはしないことにしませう」
遊女「何も耳に入れますまい」
江口君「もうそんな事、ほんとにうるさい話です」
江口君――『秋の水漲り落ちて去る舟の……』
遊女――『棹を持つて、
……』
（秋は川水が多いので、舟が早く行くと謠ひながら舟を漕ぎ出し、
江口君「おゝよい月夜だ。さあ船歌を謠ひませう。昔戀しさに催したこの遊女の舟遊びに、世渡りの歌を謠つて、さあ遊びませう」

【七】
江口の君、他の遊女と共に棹をさしながら、次のやうな意味の船歌を謠ふ。
江口君――『われ／＼衆生が種々樣々の因緣を作り、その果報によつて、六道世界に輪廻流轉する樣は、宛も車輪が地を廻るやうであり、或は沈み或は浮かみして、榮枯不定な有樣は、宛も林に鳥の遊ぶやうである。かうして、われ／＼の生涯はたゞこの現世だけではなく、現世以前に前生又前生と前の世が限りなくあ

○世々の終り―後世の後世のずつと後の世をいふ。
○人中天上の善果―死んだ後、また人間界に生まれるか天上界に生まれるかの善果報。
○顚倒迷妄―道理の正當を誤り、煩惱に迷ふ。
○解脫―顚倒迷妄の反對で迷ひを離れ悟りに入ること。
○三途―火に燒かれる火塗(地獄)、骨肉血を食ふ血塗(畜生)、刀杖にてうち追はれる刀塗(餓鬼)をいふ。餓鬼名義集に出づ。
○八難―佛を見ず、正法を聞き得ない難。これに八種あり、在地獄の難、在畜生の難、在餓鬼の難(以上三處は苦が劇しくて法を聞くことが出來ない)在長壽天の難、在北鬱單越洲の難(以上二處は樂みが多くて却て法を聞くことが出來ない)盲聾瘖啞の難、世智辯說の難、生佛前佛後の難をいふ。
○惡趣―惡業によつて趣く所。三途は卽ちそれである。
○河竹の流れの女―遊女。
○紅花の春の朝―和漢朗詠集小野篁の詩句に「著野晨敷紅錦繡、當天遊織碧羅綾」
○黃纈纈―纈纈は古代の染樣の名、絞り染の類。その黃色に染めたもの。

地『來世猶來世。更に世々の終りをわきまふる事なし

シテサシ『或は人中天上の善果を受くといへども

地『顚倒迷妄して未だ解脫の種を植ゑず

シテ『或は三途八難の惡趣に墮して

地『患にさへられて既に發心のなかだちを失ふ

シテ『然るに我等たまたま受け難き人身を受けたりといへども

地『罪業深き身と生まれ。殊にためし少き河竹の流れの女となる。前の世の報いまで。思ひやるこそ悲しけれ

シテ、次の謠「夕の風に誘はれ」に床几を立ち、以下謠に合せて仕科、(舞クセ)

地クセ『紅花の春の朝。紅錦繡の山 粧ひをなすと見えしも。夕の風に誘はれ 紅葉の秋の夕。黃纈纈の林。色を含むといへども朝の霜にうつろふ。

り、現世以後には又來世又來世と後の世が果てしなく續いてゐるのである。――

この限りのない時に於て、或は善い果報を得て、人間界又は天上界に生まれ得る事があつても、道理を誤つて道に迷ひ、煩惱解脫の種を殖やさうとはせず、又惡い業因によつて、三途・八難などといふ惡い世界に墮ちても、たゞその苦患に惱まされるだけで、これに懲りて發心しようとはしないのである。

私達は幸ひにしてこの容易に得られない人間界に生まれたとはいへ、罪業の深い女と生まれ、殊にものもあらうに人らしくもない遊女となつたのは、思へば前世の報いであらうと實に悲しい。――

私達は外見は春の花、秋の紅葉にも譬へられる盛粧を凝らしてゐるけれど、その春の花が夕暮の風に誘はれて散つてしまふやうに、又秋の紅葉が一時は林全體を美しい黃色の絞り染めに染めても、やがて朝の霜に色のあせてしまふやうに、ほんとにはかない身の上だ。――

○松風蘿月―松吹く風や蔦かづらを照らす月。本朝文粹十一に「松風蘿月偕老二於煙巖之阿二」

○翠帳紅閨―和漢朗詠集大江以言が遊女と題した句に「翠帳紅閨、萬事之禮法雖レ異、舟中浪上、一生之歡會是同」

○貪著―色慾を貪ること。

○六塵―心身を汚すもの。男女の形を見る色塵、男女の歌詠等を聞く聲塵、男女の身に持つた香をかぐ香塵美味を食ふ味塵、男女の身に觸る觸塵、及び以上の五塵に對し善惡の諸法を起す法塵の六をいふ。

○六根―六塵を受け入れる所。眼・耳・鼻・舌・身・意をいふ。

【八】

○實相無漏―煩惱を脱して法身に歸すること。

○五塵―前掲六塵の中、法塵を除いた五つ。

○六欲―六根より生ずる欲念で、六塵と同じ。

松風蘿月に言葉をかはす賓客も。去つて來る事なし。翠帳紅閨に。枕をならべし妹背もいつの間にかは隔つらん。凡そ心なき草木。情ある人倫いづれあはれを遁るべきかくは思ひ知りながら

シテ『ある時は色に染み貪著の思ひ浅からず

地『又ある時は。聲を聞き愛執の心いと深き心に思ひ口にいふ妄舌の緣となるものを。げにや皆人は六塵の境に迷ひ六根の罪を、作る事も。見る事聞く事に迷ふ心なるべし

と舞ひ上げ、

【八】

地『面白や

〔序舞〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『實相無漏の大海に。五塵六欲の風は。吹かねども

松吹く風や蔦かづらを照らす月の景色に誘はれて、浮かれて訪ねより、言葉を交はす客も、ほんの一時の出來心であるから、いつの間にか通ひが絶えて來なくなつてしまふし、一度は美しく粧つた閨中に契りを結んだ夫婦の中も、いつの間にか別れてしまふのだ。結局心のない草木も情のある人間も、等しく無常を免れることは出來ないのだ。

かういふ事をよく悟つてゐながら、或時は容色に溺れ、或時は聲色に溺れて、深い愛着の思ひに前後の考へもなく、心にもないことをいつて、妄舌の佛戒を破ることとなるのだ。

結局人間がこの塵俗の世で、色々の罪惡を作るのも、もとは眼に見る色、耳に聞く聲に迷ふから起ることだ『――」

と謠ひ、

【八】

〔序舞〕

を舞ひ、

江口君、――『面白や實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の、立たぬ日もなし立たぬ日もなし』

（煩惱を離れた法身は、いかなる欲望にも動かされることがないが、しかも、この眞相の姿、緣に隨

○隨緣眞如　眞如は眞實不變で、一元であるが、緣に隨つて萬法に現れる。その樣を波に譬へて、解脫した境地には一切の劣慾が存在しないが、是を具象的に觀れば、種々の相となつて現れるといふ。

○波の立居―迷ひの心を喩へていふ。

○嵐吹く―別れ路もあらじを嵐にいひかけた。

○ふること―雪の降るを古言にいひかけた。古言は西行と問答の歌をさしていふ

○よしなや―つまらない、益がない。

○白象　普賢菩薩の乘物。

○普賢菩薩―華嚴三聖の一。釋迦佛の右の脇士で、慈悲を司り、身は月色の如く、右手に金剛杵を持ち、左手に金剛鈴を執り、五智の寶冠を戴き、六牙の白象に乘る。

○西の空―西方淨土をいふ

地『隨緣眞如の波の。立たぬ日もなし立たぬ日もなし

シテ『波の立居も何故ぞ。假なる宿に。心とむる故

地『心とめずは浮世もあらじ

シテ『人をも慕はじ

地『待つ暮もなく

シテ『別れ路も嵐吹く

地『花よ紅葉よ。月雪のふることも。あらよしなや

シテ『思へば假の宿

地『思へば假の宿に。心とむなと人をだに。諫めしわれなり（と下に居り）。これまでなりや歸るとて（と立ち）。卽ち普賢菩薩と現れ舟は白象となりつつ（と心持を改め）。光とともに白妙の白雲にうち乘りて西の空に、行き給ふありがたくぞ覺ゆるあつて色々に現れるのは面白いことである）と諫ひながら舞ひ、

江口君、さういへば、私達が迷ひの心に動かされるのは、つまりこの假の世に心を留めるからで、この浮世に心を留めなければ、何の心配もないのだ。人を慕ふといふこともなければ、人の來るのを待ち遠しく思ふこともなく、別れを悲しむこともないのだ。一歩進んで考へれば、花よ紅葉よ月よ雪よと、自然の美に心を奪はれるのも、つまらないことだ。――

思へば私としたことが、人にさへ假の宿に心をお留めなさるなとお誡めしたのであつた。それに自分が心を迷はすといふことがあらうか。さあもう歸りませう―といつて立つや、今まで江口の君と見えてゐたものが忽ち普賢菩薩となり、舟は白象となつて、光り輝く白雲に乘つて、西の空へ行つてしまはれたのは、實にありがたく思はれる。

江口の君普賢菩薩となつた態で退場す。

りがたくこそは覺ゆれ

と白雲に乘る心にて拍子を踏み、仕手柱先へ行き、右へ廻りて正面に開き、留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（五流）

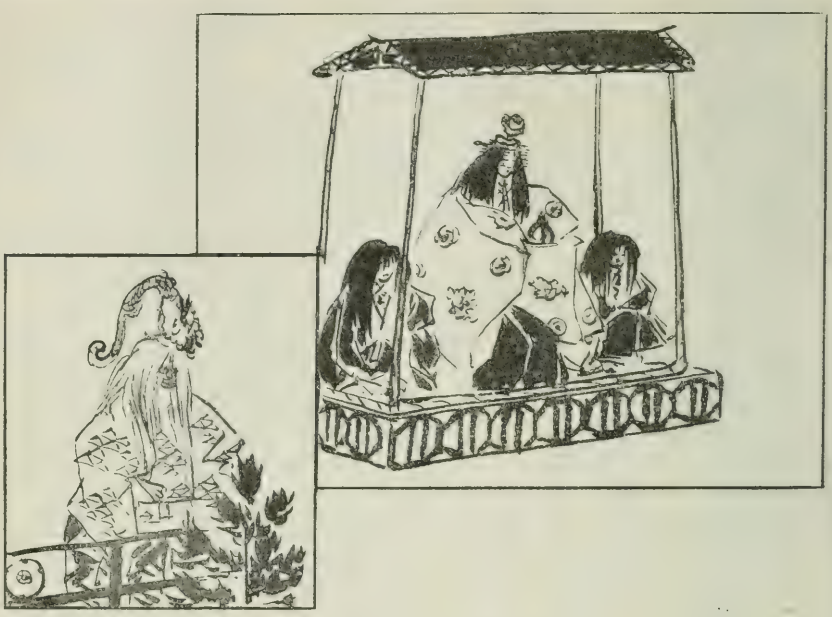
【一】ワキ「これは諸國一見の（下懸都方より出でたる）僧にて候われ未だ津の國天王寺を……參らばやと思ひ候（下懸西國を見ず候程に。唯今思ひ立ち西國行脚と志して候）

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは……われ未だ津の（光攝津）國天王寺に……この度思ひ立ち（光ナシ）　【二】ワキ「不思議やな……何故に尋ね（光とひ）給ふぞ……　【七】地　又ある時は……口に言ふ妄舌（光染）の緣と……

江口

四八八



江島（えのしま）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 ワキ　欽明天皇勅使、ワキツレ　同從者（二人）、前シテ　漁翁（五頭龍王神靈）、前ツレ　漁夫、狂言　鵜の精、後ツレ　辯才天、後子方　童子（二人）、後シテ　五頭龍王

【所】 相摸國　江島

【時】 欽明天皇御宇（無季）

【異稱】 〔江之島〕〔江野島〕とも書き、〔榎島〕とも書いた。

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに、觀世小次郎の作とす。

【梗概】 欽明天皇の十三年相摸國江野の海上に島が涌き出で、辯才天が影向せられたので、勅使が下向する。折柄老漁夫が來て、勅使の尋ねに應じて、この島の涌き出た時の樣を語り、この島の鎭守である辯才天及びその夫神である五頭龍王卽ち瀧口明神の事を語り、自分がその五頭龍であるといつて消え失せる。やがて、辯才天が十五童子を伴つて出現、勅

使に如意寶珠を捧げると、五頭龍王も現れ出て、國土の守護を誓つて上天する。

【出典】本文の主要部、前段第二節のシテサシ、第三節のシテ詞「抑もこの島は」より、シテ・ツレ同吟の「江の島とこれを申すなり」まで第四節の地クリ「その廻れる事三十餘町」より、地の「洞門開けて翠屏あらはれたり」まで、クセの「ここに又古」より、クセ上地の終「國土を守護し給ふなり」まで、等、いづれも江島緣起と殆と同文であるから、本曲はこの緣起に據つたのであらう。但しこの緣起の制作年代は明らかでなく、またこの緣起と同趣のものに、日蓮聖人注畫讃があり、

欽明天皇十三年夏四月十二日戊刻、至二十二日、江野南海湖水湊口、雲霞晴蔽、天水氤氳、大地震動、終日不レ息、天女顯二雲上一、童子侍二左右一、其後雲收霽退、海上成二一島一、曰二江島一、

などと記してゐるが、これとの母子關係も明らかにすることが出來ない。たゞこの緣起は餘り古いものではなく、鎌倉末期或に室町時代に入つてからの所產でなからうかと推測するだけである。

【概評】脇能神事物として、緣起を忠實に採り入れたもので、前段シテ・ツレの掛合又はクセに、委しい說明を試みてゐるが、それはたゞ緣起を精細に語つたといふだけで、劇的構想は深く考へられてゐない。後段にはシテの外にツレ及び子方が登場して、賑やかな曲柄となつてはゐるが、一島が湧出したといふやうな莊嚴な光景はあまり強く描き出されてゐない。〔竹生島〕參照。

【一】○治まる折を＝國家泰平の時を得を江島に、島の動かぬを國の動かぬにいひかけた。

○江の島＝相模國鎌倉郡片瀨から十一町許距つた海中にある島。吾妻鏡養和二年四月五日の條に「武衞（頼朝）令レ出二鎌越一辻一江島一給、足利冠者、北條殿、畠山次郎等御共、是高雄文覺上人、爲二奉二武衞御願一、奉レ勸二請後見、一疊臺に大宮の作物に引廻をかけて、大小前に出す。次第の囃子にて、ワキ欽明天皇勅使、大臣烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキツレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキツレ　次第　治まる折を江の島や。治まる折を江の島や。動かぬ國ぞ久しき

地取にワキは正面に向き、

【二】

前段

舞臺に初め都で、ワキ欽明天皇の勅使、ワキツレの從者を連へて登場、

勅使「天下泰平に治まつて、ゆるぎのないわが國は、誠に幾久しくおめでたいことである」

と次第に大御代を祝ひ、

大辯才天於此島、始行二供養法一之間、故以令二臨臨一給、審議、此事爲レ調二伏鎭守府將軍藤原秀衡一也云々」とある。

○欽明天皇—紀元千百九十九年御即位。天皇の十三年に佛教始めてわが國に渡來した。

○江野といふ浦—正史實錄には見えない。

○奇瑞—不思議なめでたいしるし。

○辯才天—大辯才功德天。金光明最勝王經護法の天女で、無礙の辯才を有し、佛法を流布し、壽命增益、怨敵退散、財寶滿足の利益を施すといふ。その相は頭に白蛇を飾つた寶冠を戴き、一蓮葉に乘じて右手に劍を把り、左手に寶珠を捧ぐ。

○影向—神佛の來現すること。

○鴉の海—近江國琵琶湖の異名。

○駿河—旅をするといひかけた。

○移り來し—月影のうつると、旅に山々の移るとを兼ねていふ。

ワキ「抑もこれは欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。さても相摸の國江野といふ浦に。去んぬる卯月十日餘りに。不思議の奇瑞樣々あつて。海上に一つの島涌出す。卽ち江野になぞらへてこれを江野島と號す。島の雲上に天女現れ給ふ。これ辯才天影向の地にて。福壽圓滿の靈地なれば。急ぎ見て參れとの勅に任せ。唯今東海道に下向仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ「道行」東路も。そなたの空に行く雲の。そなたの空に行く雲の。影も涼しき鴉の海。遙けき旅を駿河なる富士の高嶺の月影も。幾山々に移り來し。相摸の國に着きにけり相摸の國に着きにけり

ワキ「幾山々に移り來し」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸り、ツレと向合ひて、相摸に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

勅使「自分は欽明天皇にお仕へしてゐる臣下です。さて、相摸國江野といふ浦に、去る四月十日過ぎに、色々不思議なめでたいきざしがあつて、海の中に一つの島が涌き出たので、江野といふ地名に據つて、この島を江野島と名づけられたのです。そして、この島の上の空に天女がお現れになつたのは、卽ち辯才天がこの地に御出現になつたわけで、誠に福壽を圓滿に具備したためでたい土地なので、帝より急いで見て參れとの仰せを蒙り、これから東海道へ下つて行くのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

ミいつてゐるうちに、勅使は相摸國に到着し、態で、舞臺は江島となる。

【二】○鳥つ鳥―鵜の枕詞。鵜の音で浮海松とつゞけた。海松は海藻の一種で、その海上に浮んで居るのを浮海松といふ。○有明殘る―有明の月の消え殘る。○波もて立つや―波の立つを夏衣を裁つに、衣の裏をうらぶれにひかけた。○うらぶれ渡る―もの憂く思つて世を渡る意。○それ江の島は―以下「祕跡なり」まで「江島緣起」と同文である。○崑崙のき―崑崙は西藏新疆省にあり、黃河の水源となる山。きは爾雅に「西北之美者有二崑崙之墟一」とある墟を誤つたのであらう。○五城―天上の白玉京にありといふ五城十二樓の五城○なほけれども―なほくしての意に解すべきであらうか。もし原文のまゝとすれば、五城の構へは立派であるが、なほそれよりもめでたい蓬萊山の……との意であらう。○蓬萊界―仙人の住むといふ海中三神山の一。

ワキ「日を重ねて急ぎ候程に。これはは や相撲の國江の島に着きて候。この浦の者を相待ち。事の由をも窺はばやと存じ候

ワキツレ「尤も然らべう候

といひて、脇座に行き下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ漁翁、面朝倉尉・尉髮・襟淺黃・着附小袴子厚板・絓水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ漁夫、直面・襟赤・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帶・扇の裝束にて、二人とも釣竿を持ちて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテ一聲『島つ鳥。浮海松凉し波の上。有明殘る。あさぼらけ

正面の方に向き、

ツレ二句『波もて立つ や 夏衣。シテ(向合ひ)『うらぶれ渡る。沖つ風

といひて、竿を下して舞臺に入り、シテは常座、ツレは眞中に立ち、

シテサシ『それ江の島は崑崙のきを寫し。五城の垣重なほけれども。シテ(向合ひ)『蓬萊界の勢ひを傳へ

鵜飼毎日々々急ぎの旅を續けたので、存外早く相撲國江島に着きました。こゝでこの浦の者の來るのを待ち受けて、島の涌き出たいはれを聞きたいと思ふのです」

といつて、その邊に休憩する態。

【二】

シテ五頭龍王の神奏、漁翁の姿をして、ツレ漁夫と共に登場。

漁翁「鵜の鳥が浮海松の漂うてゐる涼しげな波の上に浮かんで、空には有明の月の消え殘つてゐるこの明方の景色は、宛も波で作つた夏衣のやうで、沖からはそよそよと物靜かな風が吹いてくる。實に心よい眺めだ」

とあたりの景色を眺め、

漁翁「この江島は神仙の住む崑崙山の形を寫し、天上界の五城の構へに象り、神山蓬萊界の形勢を傳へたもので、海中の三神山にも比ぶべきあらたかな所である。(このやうな仙境はこれまで多くの人が求めようとして失敗した所で、秦始皇帝も仙境を求めてく

○三壺　方丈、蓬萊、瀛洲の三神山をいふ。搜神記に「三壺者海中三山也、一曰二方壺一、二曰二蓬萊一、三曰二瀛壺一、山形似レ壺故曰レ壺也」和漢朗詠集都良香の句に「三壺雲浮、七萬里之程分レ浪、五城霞峰、十二樓之構挿レ天」○秦皇―秦の始皇帝。以下「澄まざらまし」までの一節仙境を求めるものの愚を嘲つた句で、前後不相應ない方である。

○徐市―徐福とも書く。始皇に上書して、三神山の仙人及び不死藥を求めた方士○驪山ちよ―驪山は始皇を葬つた所「ちよ」は頂の訛であらうか。白樂天が仙を求むる者を戒めた詩に「秦皇漢武信二此語一、方士年々采レ藥去、蓬萊今古但聞レ名、煙水茫々無二覓處一……徐福文成多二誑誕一、上元太一虛祈禱、君看驪山頂上茂陵頭、畢竟悲風吹二蔓草一」○漢帝―漢武帝。

○せいしやう―齊少の文字であらうか。武帝一時、齊國の方士季少翁を尊信した。

○霸陵原―漢文帝を葬つた所。武帝の茂陵と誤つたのである。

○人間の妙奇―人間世界の不思議。

たる。三壺の形あらたなり。秦皇徐市を疑はば、驪山ちよの春の風。なほさりがてらに渡らめや。漢帝せいしやうを用ゐずは。霸陵原の秋の月。心すごくは澄まざらまし。眞に人間の妙奇仙境の祕跡なり

シテ下歌「一度も歩みを運ぶともがらは。上歌「三千界の内にまづ。三千界の内にまづ。無量福の寶を得。一期生の後に早く不退轉の位に至る。かかる誓ひの海山も。なほ萬代の末かけて。靡き從ふこの國の。盡きせぬ御代は、ありがたや盡きせぬ御代はありがたや

【三】

ワキ「われ江の島に上り。山海の致景を眺め。事の由を窺ふ處に。海人あまた來れり。いかに翁おことはこの浦の者か

「盡きせぬ御代は」と謠ひながら、シテとツレ入替り、シテは大小前に、ツレは右の正面先に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

ると虛言をいつた徐市の言を信じさへしなければ、始皇の墳墓の地驪山に春の風が空しく吹き渡るといふやうな哀れな末路を遂げはしなかつたであらうし、漢武帝も方士齊少翁を信じさへしなければ、その墳墓霸陵原に秋の月がもの淋しく照るといふやうなみぢめな目には遭はなかつたであらう。（しかも江島はその神仙境をさながらに寫したものぞ）、實に人間世界の不思議で、仙人の棲むやうな神祕の別天地だ。このやうにありがたい所であるから、たとひ一度でもこの所へ參つたならば、廣い三千世界で量り知れぬ福を受け、死んだ後には直に天上界に上ることが出來るのだ。辯才天はこのやうに海山にも比ぶべき深い高い御誓約を遊ばされたのであつて、この惠みを受けて、天下萬民のいついつまでも限りなく靡き從ふわが國の大御代は實にありがたいことだ」

といひながら勅使の方に近寄つて來る。

【三】

勅使は漁翁達を見て、「江島にあがつて、この美しい景色を眺めて、この島のいはれを聞かうと人を待つてゐると、幸ひ多勢の漁夫が來た。この人に聞かう。（漁翁に向ひ）おぢいさん、そなたはこの浦の人か」

○仙境の祕跡―仙人の棲む神祕な別天地。
○三千界―三千大千世界の略。極めて廣い世界をいふ。
○一期生の後―一生涯を終つた後。死後。
○不退轉の位―佛道を修めて、再び迷ふことのない境地。

【三】

○抑もこの島は―以下「江の島とこれを申すなり―まで緣起の文と同趣。日蓮聖人註畫讃にも同樣のことを記す。解說參照。
○戊の刻―夜の八時。
○辰の刻―朝の八時。
○天水氣氳―雨水が盛んに降る。
○とばかり―暫く。
○天衆―天上の諸神。
○水火雷電―水神、火神、雷神。
○鬼魅―鬼神、精魅。歌の形をなした山神を魑、獸頭人形の澤神を魅といふと。
○夜叉―梵語Yaksa。暴惡又は捷疾鬼と譯す。
○羅刹―梵語Raksasa。惡鬼の總名。

シテ「さん候この浦の者にて候が。毎日この島に上り。山上山下巖窟社々を淸め申す者にて候。さて御身はいづくよりの御參詣にて候ぞ

ワキ「これは欽明天皇に仕へ奉る臣下なるが。この島涌出の由聞しめされ。事の子細を悉く尋ね見て參れとの宣旨に任せ。これまで勅使を下さるるなり。委しく子細を申し候へ

シテ「さては忝くも帝よりの勅使にてましますぞや。抑もこの島は。欽明天皇十三年。卯月十二日戊の刻より。同じく二十三日辰の刻に至るまで。江野南海湖水湊の口に雲霞暗く蔽ひて。天水氣氳たり。大地震動する事十日に餘れり。とばかりありて天女雲上に現れ。童子左右に侍り。もろもろの天衆龍神水火雷電。山神鬼魅夜叉羅刹。雲上より磐石を下し。海底より塊砂を噴き

漁翁「さうでございます。この浦の者で、毎日この島にあがつて、山上・山下・巖窟・社々を淸めてゐる者でございます。して、あなた樣はどちらから御參詣になつたのでございます」

勅使「自分は欽明天皇にお仕へ申してゐる臣下だが、わが帝にはこの島の涌き出た事を聞し召され、その樣子をすつかり尋ねて來いと仰せ出されたので、これまで勅使として參つたのだ。委しく樣子を話してくれい」

漁翁「さては、畏れ多くも帝からお下しになつた勅使さまでございますのか。この島と申しますのは、欽明天皇十三年四月十二日夜の八時頃から、同月二十三日朝の八時頃まで、野も河も、海も湊も、一面に雲霞が靄暗に蔽うて、雨が盛んに降りました。そして大地の震動することが十日餘りも續きました。それから暫くすると、天女が雲の上に現れ、童子がその左右に侍し、多勢の天上の諸神、龍神・水神・火神・雷神・山神・鬼神・魑魅・夜叉・羅刹等が雲の上からは磐石を投げ下し、海底からは塊砂をふき出しました。この間、雷の鳴り響く音は天地に轟き、その烈

○虺々—雷の聲。緣起には「かう〳〵」とある、轟々の字であらう。
○せいく—緣起には「せいこ」とある。いづれにしても意味不明。
○霹靂—雷の烈しく鳴ること。
○銅杵—銅のきね。緣起に「あかゞねのほこ」とある。岩を碎いて島を作る爲に用ゐる意。
○鐵杖—緣起には「鐵棒」

出だす

ツレ『虺々たる雷の光。せいくを萬天の間に飛ばし

シテ「霹靂帛を裂くが如し。波浪金を沸かすに似たり

ツレ『宕巖多く浮かめ出だし。夜叉鬼神島を作る

シテ「或は銅杵を以て打ち碎き

ツレ『或は鐵杖を以て裂き破る

シテ「又は二つの岩を押し合はせ

ツレ『又は一つの石を峙てたり

シテ「とりどりに島を造り給へば。梵天帝釋四大天王。上界の天人下界の龍神

ツレ『殘らずここに現れ給ひ

シテ『おのおのこれを衞護し給ふ。その後靄雲收まりて。海上に一つの島を成せり。卽ち江野に。

しい音は帛を裂くやうで、波は湧き返つて、金を沸かすやうでありました。——かうして、大きな岩を澤山浮かめ出し、夜叉・鬼神等がよつてこの島を作つたのでありまして、夜叉・鬼神に或は銅の杵を以て岩をうち碎き、或は鐵の杖を以てこれを裂き破り、或は二つの岩を押し合はせ、或は一つの石を峙てたり、色色工夫して、やがて島が出來上ると、梵天王・帝釋天・四天王、その外天上の諸神・海中の龍神、殘らずこゝに御出現にたつて、皆が集まつてこの島をお護りになりました。それから後櫂引き渡つた雲が收まると、海中に一つの島が出來上つてゐたのでございます。そこで、この地名の江野に擬へて江野島と名づけられたのでございます」

○梵天—大梵天王。色界初禪天の主で、また三界の主。
○帝釋—能天王と譯す。須彌山の頂上、忉利天の主で、四天王及び他の三十二天を總領す。
○四天王—帝釋の外將で、須彌山の中腹にある四天王の主。東は持國天、南は增長天、西は廣目天、北は多門天。
○下界—こゝでは龍宮を指す。
○靄雲—たなびく雲。

なぞらへて。江野島とこれを。中すなり

ワキ『謂れを聞けばありがたや。卽ちこれは明君の。すぐなる御代のしるしを見せて。かかる奇特を拜む事よと。いよいよ御影を仰ぐなり。「さてこの島は天部の影向。又は如何なる御神の。

『鎭守と現れ給ふらん

シテ「なかなかの事この島に。おのおの諸神ましますゆゑにも。龍の口の明神は。天部と夫婦の御神にて。衆生濟度の御方便。崇めても猶餘りあり

ワキ『げにありがたやかくばかり。深き惠みの海山も。なほ萬歲を呼ばふなる

シテ『聲か松吹く風の音の

ワキ『涼しき巖に寄る波も

シテ『治まる國のしるしを見せて

ワキ『豐かに住める

○龍の口の明神―龍の口は鎌倉郡川口村片瀨。明神は今龍口寺の山上にある。

○天部！天衆に同じ。ここでは辯才天を指す。

勅使、いはれを聞いて實にありがたく思つた。これと申すのも、上明君御仁政のお蔭で、このやうな不思議なめでたい事に遭ふことが出來たのであつて、これにつけても、わが帝の大御惠みを愈〳〵ありがたく思ふのだ。

ところで、この島は辯才天の御鎭座遊ばされた所で、その外にはどういふ神樣が御鎭座になつてゐるのか」

漁翁「さやうでございます。この島には多くの神々が御鎭座遊ばされますが、殊に龍の口明神は辯才天と御夫婦神で、衆生を御助け遊ばす爲に、こゝへ御鎭座になつたので、實にありがたいことでございます」

勅使「實にありがたいことだ。このやうな深い御惠みを以て、御代のいつまでも御榮え遊ばすのは、ほんとにめでたいことだ」

漁翁「松吹く風の音も萬歲を唱へるやうであり、巖に寄る波も太平の瑞兆を示して、天下萬民みな豐かな生活をして居るのでございます。――

シテ「この時を

次の地謠にツレは地謠座の前に行きて坐し、シテは謠に合せて仕科、

地上歌『萬代の。始めと今日を祈り置き。始めと今日を祈り置きて。今行く末もこの島の。誓ひは盡きぬ無量億の樂しみの數々を。受けつぐ國ぞ久しき。善神は。一切の福を授け。惡神は萬里の禍を拂ふ浦風も。天部の誓ひなるとかや。賴め猶隔てなき。眞如の玉も曇らじ

【四】

ワキ「猶々江の島に於てめでたき子細樣々あるべし。殘さず申し候へ

シテ、舞臺の眞中に行き、二人とも坐す。

地クリ『抑も江の島といつぱ。その廻れる事三十餘町。その高き事。數十餘丈なり

シテサシ『水は山の影を含み。山は水の心に任せたり

○その廻れる事三十餘町―以下「翠屏あらはれたり」まで緣起の文と同趣

しかも、このめでたさはこの後萬代までも續くやうにとお祈りするのでございますが、この島の神樣はこの祈りの通りこの後も限りのない樂しみを授けようと御誓約下さるので、かうして幾久しくわが國は榮えて行くのでございます。『善神は一切の福を授け、惡神は少しの禍をも拂ひ除けてやらう』といふのが辯才天の御誓約ださうでございますから、よくお願ひになるがよろしうございます。この御神德は眞如の玉のやうに曇りのないものでございます」

【四】

勅使「たほこの江島には色々めでたい事があるだらう。すつかり話してドさい」

漁翁「この江島と申すのは、周圍が三十餘町、高さが數十餘丈ありまして、水には山の影を映し、山はまた水の動くに從つてゐるやうに見えます。――

○壕中―壕は岸邊の地。島の周圍をいふ。
○洞門―岩屋の入口。
○翠屏―綠色の山が屏風の如く立ち並んで居るのをいふ。
○西天―西天竺。
○無熱池―阿耨達池といふ崑崙の南、雪山の北にあり、金・銀・瑠璃・頗胝の四寶を以て岸となし、龍王これに住み、常に清涼水を出し、流れて圓淨淵に入るといふ。想像上の池。緣起及び日蓮聖人註書讀に辯才天を無熱池の龍王第三の女と記して居る。
○禪定無漏―禪は一心に物を考へること、定は一境に念を靜めること。漏は煩惱。卽ち、惱りを開いて煩惱を離脫する意。
○彌陀有緣の敎主　末代の衆生に有緣の敎主卽ち阿彌陀佛。
○衆生―衆生。
○二世安樂―現世も來世も安樂を得る意。
○ここにまた古―以下「國土を守護し給ふなり」まで緣起の文と同趣。
○海月―鎌倉郡の東隣。武藏國久良岐郡をいふ。久良岐郡を吾妻鏡にも海月郡と記してゐる。この借字を誤

地『壕中の砂淸淺たり。白雲の破るる所に。洞門開けて翠屏現れたり。巖窟の奥遙かに入つて。峨々たる巖の間より。落ちくる水は西天の。無熱池の池水なるとかや

シテ『禪定無漏の仙人は

地『この地を占めて住家とし。彌陀有緣の敎主はこの島に來つて生を導く

シテ『二世安樂の。この島に

地『誰か賴みをかけざるべき

（居クセ）

地クセ『ここに又古。武藏相摸の境に、鎌倉海月の間に深澤といふ湖あり。かの湖に大蛇住めり。その身一つにして。その頭五つあり。隆準の鼻胡將の腮。眼に。白日をつなぬき身に黑雲をまつへり。然れば神武天皇より。垂仁天皇の御宇

島の周圍の岸邊は淺淺て奇麗な砂地であり、上空白雲の漂うた破れ目に岩穴の入口があつて、そこから立ち並んだ綠の山山が屏風のやうに見えます。岩屋の中はずつと奥深く、峨々と聳えた巖の間から流れ落ちる水は西天竺の龍王の住む無熱池の水であるとのことでございます。惱りを開き煩惱を離れた仙人はこの地を住家とし、末代の衆生に有緣の阿彌陀佛は、この島に來て衆生をお導きになります。だから、現世・來世の安樂を願ふ者は、誰一人この島に賴みをかけないものはないのでございます。――

さて、昔武藏と相摸との國境、鎌倉と海月との間に深澤といふ湖がありまして、この湖に大蛇が住んでゐました。その形は身體は一つで頭は五つあり、鼻は高く、腮には髯があり、眼光は太陽を射るが如くに輝き、身には黑雲を纏うて居りました。この大蛇は神武天皇の御時から垂仁天皇の御時まで十一代の御歷朝を過ごし、七百餘年の年月を經て、國中に跋扈し、人

つて「かいげつ」と音で讀んだのである。
○深澤―今の鎌倉大佛の邊吾妻鏡曆仁元年の條に「相模國深澤里、大佛堂事始也」
○隆準―鼻の高いこと。
○胡髯―あごひげ。
○眼に白目をつなぬき―「つなぬき」は貫きの訛。眼光の輝く形容。
○年祀―たゞ年のこと。

○思ひ龍の口―思ひ立つといひかけた。

【五】

○かかる神祕―雲の懸かるといひかけた。
○木綿四手の―いかでいふべきを木綿四手といひかけ木綿四手(御幣)の紙を神といひかけた。

までは。十一代の帝祚を經、七百餘歳の年祀を經て國中に滿ちて人を取る

シテ『景行天皇の御宇に至り

地』龍惡いよいよ盛んなれば。人皆石窟に隱れ住み涕哭の聲限りなし。時に天部は龍に向ひ。汝が惡心を飜し殺生をとどめこの國に守護神とならば夫婦の、語らひをわれなすべしと。堅く誓約し給へば龍王もこれに應じつつ。今より殺害をとどめて、善心を思ひ龍の口の。明神となり給ひ。國土を守護し給ふなり

【五】

地ロンギ『はや時移る夕雲の。はや時移る夕雲の。
かかる神祕も大方の。浦人いかで木綿四手の。
神の告かやありがたや

シテ「なかなかなれや大君の。御言畏み勅に今ぞ。
應ずるしるしを現さん。夜すがらここに待ち給

を取つて苦しめました。景行天皇の御時に至つて、龍の惡業は愈〻激しくなりましたので、人は皆岩屋に隱れ住み、泣いてばかり居たのでございます。その時辯才天が龍に向つて、『そなたが惡心を改めて殺生をやめ、この國の守護神となられるならば、私は夫婦の契りを結ばう』と堅く誓はれたので、龍王もこれを承諾して、『今より後は殺生を止めて善心を思ひ立たう』と誓ひ、それから龍の口明神となられ、以來國土を守護せられるのでございます」

【五】

勅使「おゝ時刻も移つて、はや夕暮となつたが、このやうなありがたい神の祕事を、普通の浦人ではいへる筈がない。これは神樣のお告であらうか、實にありがたいことだ」

漁翁「いかにもその通り、帝の勅命を受けてここまで來られた應報の靈驗を示さう、夜中こゝにお待ちなさい」

○五頭龍―深澤の湖に住んだ龍をいふ。

へ

地勅に應ぜんしるしとは。そも老人は誰やらんシテ誰とはさてもおろかなり。われは五頭龍地今は又。天部の夫婦の神となりし龍の口の明神とは。老人を見るべし（とシテ立ち）。今宵の月に天部の御姿わが姿をも。現すべしと夕波に。たち紛れつつ失せ給ふこそあらたなれ失せ給ふこそあらたなれ

と常座にて開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて幕に入る。

【間】

亂序の囃子にて、狂言鵜の精、末社頭巾・面鼻引・着附厚板・縷水衣・括袴・腰帶・脚半・扇の裝束にて、名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。江の島の山海に住む鵜の鳥の精にて候。さる程に當島涌出し天女現れ給ふ御事は。人皇二十代欽明天皇の御代。始めて十三年卯月十二日の戌の刻より。同じく二十三日辰の刻に至るまで。江野南海湖水港の邊に雲霞暗く掩ひ。大雨頻りにして大地震動すること十日に及べり。その時一つの島涌出す。卽ち江の島と號す。その時雲上に天女現れ給ふ。今の辯才天これなり。又武藏相摸の間に湖水あり。是に五頭龍とて大蛇住んで。人を取ること數知らず。天女かの龍に向ひ。汝惡心を翻しこの國の守護神となるならば。夫婦の語らひをなすべしとありければ。さあらば守護

勅使「勅命に對する應報の靈驗を示さうとは、一體御老人は誰たのです」

漁翁「誰だなどと今更尋ねるのは、さても迂闊なことだ。私はもとの五頭龍で、今は辯才天女と夫婦神となつた龍の口の明神だ。今夜の月に、辯才天のお姿も見えようし、自分の姿も現さう」

といふや否や、波に紛れて隱れてしまはれたのは、實にあらたかな事である。

漁翁退場する。

神になるべしとて。夫婦の語らひをなし。かの五頭龍は龍の口の明神と現れ。今に至るまで靈驗あらたに御座候間。參り下向は夥しき事にて候。また當今に仕へ御申しある臣下殿。唯今御參詣にて候間。我等がやうなる眞鳥にも罷り出で。一曲を仕り慰め申せとの天女の仰せにより。これまで出で候。急いで一曲奏で申さう

囃子座前に出て、

狂言『めでたかりける時とかや。〔三段舞〕『やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる鵜の鳥までも。現れ出でて一さし奏で。これまでなりとて鵜の鳥の精は。〳〵。遙かに飛び行き失せにけり。

と謠ひて引く。

【六】

ワキ立ちて作物に向ひ、

ワキ『岐伯が絶技を先にあげ。張儀が英聲を後に馳す。これ聰明勇進辯才天の地『無量無邊不可思議の功德を。樣々現しおはします

ワキ、もとの座に坐す。

【七】

出端の囃子にて、後ツレ辯才天、作物の中にて、

後ツレ『月も照り添ふ如意の寶珠の。光を誰か。仰がざる

【六】

後段

勅使「支那上古岐伯の醫術、戰國時代張儀の辯舌、ともに後世まで名を留めた人であるが、(その張儀と竝べて申すのは恐れ多い事ながら)辯舌に秀れた辯才天樣、どうか無量無限の不可思議なありがたい功德を色々お示し下さいませ」

【七】

後ツレ辯才天、子方の童子二人を左右に侍らせて、神殿の作物の中に居り、

辯天「月も照り添うて輝くこの如意寶珠の光を、誰とて仰がないものはなからう。その名も意の如しとは、わが大君に誠に適

【六】

○岐伯—支那上古黃帝の時の名醫。下の張儀と對にする爲に出しただけである。

○張儀—戰國時代の魏の人辯舌の達人で、連衡の策を立てて秦の大臣となつた。

「岐伯が絶技」より「英聲を後に馳す」までは、次の辯才天をいひ出す爲の文飾に過ぎない。

○聰明勇進—能辯の形容。

○無量無邊—邊は際涯の意

【七】

○如意の寶珠—求めんと欲するものを意の如く出す寶玉。天女の飾に戴く玉の名。

○眞鳥—鵜をいふ。

○卞和が玉―卞和は楚の人で玉を鑑識することの名人或時山中に玉を得て楚厲王に献じたところ、詐僞者として罪せられたが、後その寶玉であることが明らかになり、王はこれを和氏之璧と名づけて珍藏せられたといふ。韓非子に見ゆ。

○十五童子―辯才天に給仕する十五人の童子。印鑰、官帶、筆硯、金財、稻杵、斗舛、飯櫃、衣裳、鑷養、酒泉、愛敬、生命、從者、牛馬、船車。

○現受無比樂後生清淨土―現世にては無比の快樂を得、後世にては清淨土即ち極樂に生まれる。

地　仰げ猶。仰げ猶。意の如しと聞く時は

ツレ　今この君のそれと御影に。逢ひに逢ふ

地　卞和が玉も何ならず。かの如意寶珠を。君に捧げんと光も輝く御殿の扉。左右に開けて十五童子。天部の御姿。現れたり

後見、作物の引廻を下す。その中に後ツレ辯才天、面連面・鬘・靈帶・黑垂・天冠・襟赤・着附箔・長絹・色大口・腰帶・扇の裝束にて床几にかゝり玉盤に載せたる火焔を捧げ、子方童子二人、黑頭・白鉢卷・襟赤・着附箔・水衣・腰帶・扇の裝束にて、その左右に坐す。

地　衆生濟度のその御方便。衆生濟度のその御方便も、ツレ・子方作物より出で）。まづ福壽圓滿の願ひを叶へ。現受無比樂後生清淨土曇らぬ寶珠を君に捧げんと（ツレワキに火焔を與へ）、勅使にこれを。授け給ひ。舞樂を奏し。拍子を揃へ。羽袖をかへして舞ひ給ふ（子方は笛座の上に行きて坐し）

〔樂〕

ツレ舞ひ、引續き次の謠に合せて舞ふ。

はしいもので、かの有名な卞和の玉もこれに比べては物の數にも入らない。この如意寶珠を大君に捧げよう」

といつて、光り輝く御殿の扉を左右に開けて、十五童子を左右に侍らせ、辯才天はお姿をお現しになつた。

辯才天は衆生を救ふ御方便として、まづ衆生に福壽圓滿の願を叶へさせ、わが大君に、現世にてはこの上もない樂しみを受け、來世にては極樂淨土に生まれることの疑ひない如意寶珠を捧げようといつて、勅使にこれをお授けになり、舞樂を奏し拍子を揃へ、美しい袖を翻して、お舞ひになる。

〔樂〕

辯才天舞を舞はれる。

地「天人聖衆菩薩の舞も。天人聖衆菩薩の舞も。かくやと思ひ白波の。立ち來る沖に。雲暗がつて。疾風吹き立て逆卷く潮は。五頭龍王の。出現かや

【八】

と常座にて幕に向き招扇をし、地謠座の前に行きて床几にかかる。

早笛にて、後ジテ五頭龍王、面大飛出・赤頭（龍戴）・鉢卷・襟紺・着附段厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて打杖を持ち、橋懸一の松に出で、

後ジテ『われ昔は。深澤の池に住んで。五頭龍王と現れ。今は國土の守護神となる。龍の口の。明神なり

地「聞きしに變らぬ因位の形。聞きしに變らぬ因位の形

シテ「頭は五頭龍

地「胡髯の腮。眼に白日をつなぬき。その身に黑雲をまつへり。苔むす松も野べ伏す巖の。峨々

○白波の―思ひ知らるといひかけた。

【八】

○因位の形―因位は佛果を得るまでの修行の位。前身の姿の意。

○まつへり―まとへりの訛

○苔むす松―龍體の形容。

この舞は、誠に天人・佛菩薩の舞もこのやうであらうかと思はれるさまであつたが、やがて白波の立つ沖に雲がま黑に起り、疾風が吹いて、波の逆卷く所から、五頭龍王が出現せられた。

【八】

後ジテ龍口明神登場。

明神「自分は昔は深澤の池に住んで五頭龍王となり、今は國土の守護神となつた龍の口の明神である」

その姿は前に聞いたのと變りのない前身の形で、頭は五頭の龍で、腮には髯を生やし、眼は太陽をも貫くばかりに輝き、身には黑雲を纏ひ、苔の生えた峨々たる巖の上に現れた。

たる上にぞ現れたる（と舞臺に入り）

〔働〕續いて、次の謠に合せて仕科、

シテ『神佛水波の隔てなり

地『神佛水波の隔てなれば。同一體の。利益も樣樣の辯才天部は威光を現し明神もろともに百千劫の。齡を守らんと約諾堅き（シテ坐してツレと向合ひ）。岩間を傳ひ。涼み取るてふ綠の海に（シテ立ちて仕科）。飛行し給へば、磯打つ波も龍の口の（ツレ・子方立ちて橋懸へ行く）。明神忽ち威を揮ひ雲を吹き嵐に輝く眼の光は天地に充ち滿てり、その時天部は童子を伴ひ紫雲の上に（ツレ・子方二の松にてシテに向ひ）。現れ給へば明神立ち來る黑雲に乘じ（ツレ・子方幕に入る）。光を放つて島根を廻り。廻り廻るや暫しが程は。とりどり姿を雲中に現し、とりどり姿を雲中に現すも、げにありがたき。影向かな

と舞ひ納めて仕手柱際にて留拍子を踏む。

○神佛水波の隔て―神と佛との差異は水と波とのやうなもので、形は違つても實は同一體であるとの意。
○百千劫―劫は無限の年月をいふ。
○約諾堅き―約束堅きと、岩の堅きとを兼ねていふ。
○涼み取るてふ―涼しさを身に取入れる意。身を綠にいひかけた。
○とりどり―辯才天女も明神も。

〔働〕

龍口明神、勇ましい有樣を示す。

神といひ佛といふも、水と波との違ひのやうなもので、形に違つても實は同一體で、色々の利益をお授けになるが、中にも辯才天はありがたい威光を現し龍口明神も、同じく壽命長久を守らうと堅く誓約して、岩の間を傳ひ、涼みを取るのだといつて、綠なす海を飛行せられると、襲うつ波も立ち騷ぐので、明神は愈威光を揮ひ、雲を吹き嵐を起して、その鋭い眼光は天地に充ち滿ちた。

その時辯才天が童子を伴つて、紫の雲の上にお現れになると、明神はまた黑雲に乘つて島を廻り、暫くの間は辯才天も明神もそれ〴〵雲中に御姿をお現しになつたのは、實にありがたい御出現である。

龍口明神も辯才天も雲中を示して退場する。

箙（えびら）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 二番目 複式夢幻能

【人物】 ワキ 西國僧、ワキツレ 同從僧（二人）、前シテ 里男（梶原景季の靈）、狂言 所の者、後シテ 梶原景季

【所】 攝津國 生田

【時】 （二月）

【異稱】 古くは〔箙梅〕といつた。

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作として擧げてゐる外、曲名演能などに關する古記錄は見當らない。

【梗概】 西國方の僧が都に上る途次、攝津國生田に來て、梅の花を眺めてゐると、里人が來たので、この木は名木かと尋ねる。里人は、昔この地で源平合戰の時、梶原景季がこの花を箙にさして奮戰したので、この木を箙の梅と名づけるやうになつたのであると、當時の合戰の樣を語り、自分が景季の幽靈であるといつて消え失せる。その夜旅僧が花の木蔭に寢てゐると、その夢に、景季が昔さながらの姿で現れ出で、修羅闘爭の樣を語つてゐるうちに、今この生田に來てゐることに氣がつき、昔を思ひ出して、生田の合戰の樣を示し、旅僧の回向を乞ひ、夜も明ければ旅僧の夢もさめて、景季の姿も消えてしまふ。

【出典】平家物語物の一であるが、この曲の主題である、箙に梅をさしたことは、流布本には出てゐたい。源平盛衰記及び長門本には出てゐるが、盛衰記の方は、その主人公が父の景時であるか、子の景季であるか明らかになつてゐない。本曲に近いのは長門本であつて同書に梶原景時二度の懸を記した後に、

梶原源太、かゝる時は旗をさゝげ母衣をかけ、ひく時は旗を巻き母衣をぬぎて、度々入れかへ〳〵戰ひけり。武藝の道ゆゝしく見えける中にも、優しき事は、片岡なる梅のまだ盛りなるを、一枝折りて箙にさし具して、敵の中へかけ入りて、戰ふ時も引く時も、梅は風に吹かれてさつと散りければ、敵も味方もこれを見て感じける。

とある。しかしクセ前の一節は盛衰記に最も近い。即ち同書卷三十六「一谷城構事」に、

平家は播磨國室山、備中國水島、二箇度の合戰に討勝つてぞ會稽の恥をば雪めける。かゝりければ、山陽道七箇國、南海道六箇國、都合十三箇國の住人等悉くに靡きて、軍兵十萬餘人に及べり。木曾討れぬと聞きければ、平家の人々は讃岐國屋島をば漕ぎ出して、播津國と播磨との境、難波潟一の谷にぞ籠りける。去る正月より、これよき所也とて城郭を構へたり。東は生田森を城戸口とし、西は一の谷を城戸口とす。……誠に由々しき城郭なり。海には兵船數萬艘を浮べて算を散らせるが如く、陸には赤旗立並べて不知其數、春風に吹かれて飜飜天、猛火の燃え上るに似たり。

これを見れば、長門本を骨子として盛衰記を參照したものか、或はこの二書の中間にある異本に據つたものであらう。

【概評】謠曲には武人を主人公としたものが多いが、それは大抵敗軍の將で、戰勝の勇將を取扱つたものは殆どない。戰爭に勝つことは勿論武士として望ましいことであるが、さういふ人は多くは武骨一邊で、風流がなく、敗將のやうに他人の同情を集め得ない。無骨藝術としては、まづ觀衆の同情を集めることが大切であり、演出の上には、風流な華やかさが欲しい。この故に、貴族的な敗將平家の公達は謠曲の題材として恰好であるが、武邊の賴朝及びその一黨は謠曲の主人公に擇び難いのである。かうして、武人を主人公とした二番目物は、いづれも負修羅物であるが、たゞ本曲と「田村」と「八島」とは戰勝の武將を題材としてゐるので、特に「勝修羅物」といつて、珍重されてゐるのである。勝修羅三曲のうち、「田村」は一面淸水觀音の御利生を說いたものであり、「八島」は判官贔負と淫にまで謠はれた義經を主人公としたもので、特殊な意義を持つてゐるのであるから、單純な勝修羅は本曲一篇だけであるといつてもよい。然らば、何故景季だけが勝修羅の主人公として擇ばれたのであらうか。それは「箙の梅」といふ風流、この花やかな扮裝が、謠曲作者

を喜ばせたのに外なからうと思ふ。

さて、本曲の脚色を見ると、二番目物の定型を履んだものであるが、その構想に於て、修羅の闘爭と生田の合戰とを巧みに結びつけて「閻浮に歸る生田川の、波を立て水を返し、山里海川も、皆修羅の巷となりぬ」と、修羅道をこの閻浮の生田に引き出し、續いて「心を靜めて見れば、所ほ生田なりけり。時も昔の春の梅の盛りなり」と、昔を思ひ出させて、昔さながらの景季の靈魂に、昔さながらの合戰を再現せしめ、やがて「夢さめてしら〳〵と夜も明くれば」と、夜の明けると共に、旅僧の夢の破れると共に、この主人公を退場せしめることとしたのは、夢幻能として、最も鮮かな描法であると思ふ。

【一】

○しるべ—案内。

○憂からぬ旅—旅は辛いものであるが、のどかな春景色に誘はれて、心も浮き立ち、旅も樂しく思はれるとの意。

○筑紫の海—心盡しを筑紫にいひかけた。筑紫は九州北部の總稱。

○八重の潮路—遠い海路。

○雲の波—白樂天の詩句に

【二】

次第の囃子にて、ワキ西國の僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて、同じ裝束のワキヅレ從僧二人を隨へて、舞臺に入り向合ひて、

ワキヅレ次第 春を心のしるべにて。春を心のしるべにて。憂からぬ旅に出でうよ

地取にワキは正面に向きて、

ワキ「これは西國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この度都に上り。洛陽一見と志し候

ワキ・ワキヅレ向合ひて、

ワキヅレ道行 旅心。筑紫の海の船出して。筑紫の海の船出して。八重の潮路を遙々と分けこし方の雲

【一】

前段

舞臺は初め九州の或所で、ワキ西國僧、ワキヅレの從僧を隨へて登場。

僧「のどかな春景色に誘はれて、愉快な旅をしよう」

ミ次第に自分の心持を述べ、

僧「私は西國の方から出て來た僧ですが、まだ都を見たことがないので、今度都に上つて、京見物をしようと思ふのです」

ミ見物人に自己紹介をし、

僧 旅を思ひ立つて、九州の海を船出し、遙々と廣い海路を漕ぎ渡つて、わが故郷の方もいつの間にやら全く見えなくなつ

「雲濤烟波最深處」とあるを借りて煙とつゞけた。
○煙も見えし—松の緑を煙と見なして松原と續けた。
○須磨—攝津國武庫郡。
○生田—神戸市の東にある

の波。煙も見えし松原の。里の名問へば須磨の浦。生田の川に、着きにけり生田の川に着きにけり

ワキ「煙も見えし松原の」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて、生田川に着きたる心。正面に向きて、

ワキ「急ぎ候程に。これははや津の國生田の川とかや申し候。又これなる梅の木立。餘の木に勝れ色美しく候程に。立ち寄り眺めばやと思ひ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

【二】

といひて、ワキは脇座に、ワキヅレはその次に行きて下に居る。次第の囃子にて、シテ里男、直面・襟縒色・着附段廣斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇の裝束にて、常座に立ち、囃子座の方に向きて、

シテ次第『來る年の矢の生田川。來る年の矢の生田川。流れて早き月日かな

地取に正面に向き、

シテサシ『飛花落葉の無常は又。常住不滅の榮をなし。一色一香の緣生は。無非中道の眼に應ず。人

たと思ふうちに、松原に鹽燒く煙が見えるので、ここは何處であらうと人に尋ねると、須磨の浦だといふことで、思ひの外早く生田川に着いたことだ」

といつてゐるうちに、生田川へ着いた心で、舞臺に攝津國生田となる。旅僧はここに暫く休んで梅を眺める態。

【三】

シテ梶原最季の亡靈、里男の姿をして登場。

里男「月日の經つのは、矢を射るがやうに、またこの生田川の水の流れのやうに、實に早いものだ。——

一體花の散り葉の落ちるのは、いふまでもなく無常變化の姿であるが、佛心を以て達觀すれば、これも亦不變不滅の實相

個の人間が緣生のものであるといふ觀念。人生は無常であるが涅槃は不滅であるといふ悟り。現行謠本には「えんじやう」に圓成の字を充ててゐる。
○身命—觀世以外の四流には「身上」とある。
○有爲の變轉—生あるものの變化すること。
○げんし—謠曲評釋には「眼子」(目前の意)、檜本には「眼時」、刊行會本には「彈指」(瞬間の意)の字を充ててゐる。未だ是非を定め難い。
○閻浮—この世。
○生死の海—生死の迷界を海に喩へた語。
○夢の直路—夢路。人生は結局夢であるといふ意と、直に冥途に歸らうといふ意とを兼ねてゐる。

【三】

間個々緣生の觀念。猶以て至り難し。あら定めなの身命やな

シテ下歌『人間有爲の轉變は。げんしの中に現れて。

上歌『閻浮に歸る妄執の。閻浮に歸る妄執の。その生死の海なれや。生田の川の幾世まで夢の巷に迷ふらん。よしとても身の行方定めありとても終には夢の直路に歸らん夢の直路に歸らん

「よしとても」と脇正面の方に向き二三足出で、またもとに歸りて正面に直す。

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかに申すべき事の候。(作物に向き)これなる梅は名木にて候か

シテ「さん候これは箙の梅と申し候

ワキ「あら面白や箙の梅とは。いつの世よりの名木にて候ぞ

シテ「いや名木ほどの事は候はねども。ただ私に

【三】

旅僧はこの里男を見て、

僧「一寸お尋ねしますが、この梅は名木ですか」

里男「さうです、これは箙の梅と申します」

僧「これは面白い。箙の梅とは何時頃からの名木です」

里男「いや名木といふ程の事はございませんが、唯私達の間で、さういひ傳へてゐを示してゐるもので、いかに小さな色、いかに僅かな香にも、すべて萬物は皆佛道實相の理を示してゐるのだ。しかし、われ〳〵人間がかういふ理を悟るといふことは、なか〳〵容易なことではなく、やはり迷ひに迷つて、落着きのない生涯を送つてゐることだ。かうして人間の無常變化は目前に現れ、死んだ後までもこの世に執心が殘つて成佛することが出來ず、幾百年を經た今日もなほこの生田川にさ迷ひ出たのだが、結局人生は夢なのだから、もう迷はずに直樣冥途へ歸らう」

シ圓言をいふ。

○私に名づけたる―公の沙汰ではなく、民間で勝手に名づけたものであるとの意

○大手―城の表口。
○梶原平三景時―平國香の弟良文の子孫で、源範頼に屬して生田森で平家と戰ひ武功を立てた。後に八島の戰に義經と反目して、これを悲境に陥れた。
○源太景季―景時の子。この時年二十三。
○色殊なる―殊に色のよい
○笠印―戰陣で、隊を辨別する爲に、兜又は袖につける目じるし。
○八幡の神木―八幡大菩薩は源氏の氏神であるからいふ。觀世以外の四流には「八幡叡感の神木」とある。この事軍記には見えない。

○ふるは程なき―年の經るを雨の降るにいひかけた。
○ふるきにかへる―春雨の降るを古木にいひかけた。

申しならはしたる異名にて候

ワキ「よしよし私に名づけたる異名なりとも。委しく御物語り候へ

シテ(語)「抑もこの生田の森は。平家十萬餘騎の大手なりしに源氏の方に梶原平三景時。同じき源太景季。色殊なる梅花のありしを。一枝折つて籠にさす。この花卽ち笠印となりて。氣色あらはにいちじるく。高名人に勝れしかば。景季かへつてこの花を禮し。卽ち八幡の神木と敬せしよりこの方。名將の古跡の花なればとて。籠の梅とは。申すなり

ワキ『げにや名將の古跡といひ名木といひ。名殘盡きせぬ年々に

シテ「ふるは程なき春雨の。ふるきにかへる名を聞けば

る異名なのです」

僧 いや〳〵、たとひ民間で勝手につけた名であらうとも、その謂れを委しく話して下さい」

里男 一體この生田森は、源平合戰の時、平家方の軍陣の表口の構へとして、十萬餘騎で陣を張つてゐた所ですが、その時、源氏方の武士に梶原平三景時、その子同じく源太景季がこれに向ひ、景季はそこにあつた色の勝れた梅花を一枝折つて籠にさしました。すると、この花が目印となつて他の者よりは際立つて目に立ち、人に勝れた功名を立てることが出來たので、景季はこの花を八幡大菩薩の神木であると禮拜しましたので、それ以來名將の古跡だといふので、籠の梅と申すのです」

僧「いかにも名將の古跡で、そこにこのやうな名木があつて、昔に變らず年々花を開いてゐるのは、誠に面白いことです」

里男 殊に春雨の降る頃など、昔の面影が偲ばれます」

○白眞弓―白木の弓。花の白きといひかけ、弓の縁で箙を呼び起した。

○花の景季の―花の蔭を、景にひかけ、季の音を重ねて、末の世とつゞけた。

○身を捨ててこそ―生田に對す。大和物語に「住みわびてわが身投げけん津の國の生田の川は名のみなりけり」

○弓筆の名―歴史に殘る武名。

【四】

○さる程に―この條は源平盛衰記の文に近い。その原文は解説に掲げた。

○去年―壽永二年十月。

○室山―平家が源行家と戰つた所。

○水島―同じく木曾義仲と戰つた所。

○合はせて十四箇國―盛衰記には「山陽道七箇國南海道六箇國、都合十三箇國の住人等」とある。

ワキ『その景季の盛りなりし

シテ『若木の花の白眞弓

ワキ『箙の梅の

シテ『今までも

地上歌『名をとめし。主は花の景季の。主は花の景季の。末の世かけて生田川の。身を捨ててこそ。名は久しけれ武士の。やたけ心の花にひく弓筆の名こそ妙なれや弓筆の名こそ妙なれ

地上歌にワキ下に居る。

シテ、次のクリ謠に眞中へ出で、下に居り、物語の心にて、

地クリ『さる程に平家は去年播磨の室山。備中の水島二箇度の合戰にうち勝つて。山陽道南海道。合はせて十四箇國のつはもの。都合十萬餘騎。津の國一の谷にぞ籠りける

シテザシ『東は生田の森。西は一の谷を限つて。そのあひ三里が程は充ち滿ちたり

僧「あの景季が年若くて戰つた姿は……」

里男「丁度この若木の花のやうで……」

僧「それが箙に花をさして……」

里男「花やかな武名を留めたのが、箙の梅の主人公景季でありますが、その名が今日まで傳はつてゐるのも、この生田川に身を投げて奮戰したからで、このやうに武名を歴史に殘したことは誠に勇ましいめでたいことです」

ミ語り合ふ。

【四】

里男は當時の軍物語を始めて、

里男「さて、平家は壽永二年播磨國室山、備中國水島兩度の戰にうち勝つて、山陽道・南海道合はせて十四箇國の兵を集め、合計十萬餘騎の大勢で攝津國一の谷に籠りました。――

その軍兵は東は生田森、西は一の谷まで東西三里の間、一杯に群れ集つたのです。そして、浦々には數千艘の船を浮かめ、

○とよりかくより—明石の門を、とよりにいひかけた。あちらからもこちらからもといふ意。
○ともね—船の艫を共音にいひかけた。共音は一所に音を立てて鳴くこと。
○時しも二月上旬—一の谷の戦は寿永三年二月七日の早朝から始まつた。
○若木の櫻—源氏物語須磨の巻に「日ながくつれづれなるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて」とあるによつて、須磨の名木のやうにいはれて來た。
○薄雪—櫻の黄の薄色を消え残る薄雪に通はせていふ
○さえかへる—寒さの強いこと。「かへる」は波の縁語。
○波ここもとに—波音の近く聞えること。源氏物語須磨の巻に「波ここもとにたち来る心地して」
○生田のおのづから—ここもとに行くを生田に、生田の小野をおのづからにいひかけた。
○かつ色見する—軍に勝つ色を見せる。太平記の連歌に「さきかけてかつ色見せよ山櫻」
○一花開けて—大集經に「一華開天下春」

地『浦々には數千艘の船を浮かめ。陸には赤旗いくらも立て竝べ。春風に靡き天に飜る有様。猛火雲を焼くかと見えたり

シテ『總じてこの城の。前は海後は山

地『左は須磨右は明石の。とよりかくより。行きかふ船の。ともねの千鳥も聲々なり

（居クセ）

地クセ『時しも二月上旬の空の事なれば。須磨の若木の櫻もまだ咲きかぬる薄雪のさえかへる波ここもとに。生田のおのづから盛りを得て。かつ色見する梅が枝、一花開けては天下の春よと。軍の門出を祝ふ心の花もさきかけぬ。さる程に味方の勢。六萬餘騎を二手に分けて。範頼義經の。大手搦手の。海山かけて須磨の浦。四方を圍みて押し寄する

陸に赤旗を幾百となく立て竝べ、その旗の春風に靡き飜る様は、猛火が天を焼くが如き盛んな勢ひでありました。——

一體この一の谷の城は、前には海、後には山、左には須磨、右には明石を控へ、何れの方面から見ても要害堅固で、その間に船が往き來をし、千鳥が友を呼んで聲々に鳴いてゐるといふ趣があります。

この時は二月の上旬で、須磨の若木の櫻もまだ咲きかね、空の寒さも冴え返る頃でありましたが、生田森に攻め寄せた源氏の軍勢は、花の魁である梅花の一ひら咲いてゐるのを見て、これこそ勝利の前兆であると、軍の門出を祝ひ、その勢六萬餘騎を二手に分けて、範頼と義經とが両方の大將となり、大手と搦手、海と山と両方から須磨の浦を取圍んで、平家の軍に押し寄せました。——

○さきかけぬ―梅が百花の魁をすることと、軍に先驅の功名を取る事を兼ねた。
○範頼義經―ともに源頼朝の弟。この戰に範頼は大手の、義經は搦手の大將であつた。
○魚鱗鶴翼―陣立の名。源平盛衰記に「魚鱗の戰とて、魚の鱗を竝べたるが如く、さきは細く中ふくらにこそ立てたりけれ」。「鶴翼の戰とて、鶴の羽を擴げたるが如くに、勢をあらはに立てなして、小勢を中に取籠めんとぞ構へたる」
○眞鶴の翼―源氏の白旗の形容。
○いさりたく火―漁火として焚く火。平家の赤旗を喩へた。
○かげろふ―陽炎のやうにちら〳〵光る事。
○野にも山にも―無理ない方であるが、野山には軍兵が夥しく、海上には軍船が漕ぎ寄せるといふ意に用ゐたのであらう。
○天の鳥船―神代にあつたといふ船。古事記に「鳥の石楠船又の名は天の鳥船」とある。

【五】
○夕ばえの―夕日に照り映えて色の一層美しく見えること。

シテ『魚鱗鶴翼もかくばかり
地『後の山松に群れゐるは。殘りの雪の白妙に。時をたたぬ眞鶴の翼をつらぬる その氣色。雲にたぐへて夥し。浦には海人樣々の。漁夫の船影數見えて。いさり たく火もかげろふや。嵐も波も須磨の浦野にも山にも漕ぎ寄する。兵船はさながら、天の鳥船もかくやらん

【五】
地ロンギ『はや夕ばえの梅の花。月になり行くかり枕。一夜の宿を貸し給へ
シテ『われはやどりも白雪の。花の主と思しめさば下臥に待ち給へ
地『花の主と思へとは。御身如何なる人やらん
シテ『今は何をか包むべき。われはこの世に亡き影の
地『跡弔はれんといふ草の

その戰陣は、ある時は魚鱗の如くに中心に軍勢を集め、また或時は鶴翼の如くに左右へ擴げ、源平兩軍の相對峙した樣は、源氏の白旗を立て竝べたのは、殘雪の消えやらぬ後の山に、鶴が翼を列ねた樣か、または白雲の棚引くやうであり、平家が赤旗を立て竝べた樣は、數多くの漁船が漁火を焚いてゐるやうで、野山の軍兵に對して、その兵船の須磨の浦に漕ぎ寄せて來る樣は、宛も神話の天の鳥船のやうでありました」

【五】
この軍物語の間に、時は移つて夕暮となつた體で、
僧「もはや梅の花に夕日が映つて、月も出て來ましたから、今夜はここに泊めて下さい」
里男「私は宿もないものですが、私を花の主と思しめすならば、古歌にありますやうに、この花の蔭に寢てお待ち下さい」
僧「花の主と思ふならばと仰しやるのは、一體あなたはどういふ方なのです」
里男「今は何を隱さう、私はこの世には亡いもので……」
僧「跡を弔つてくれといはれるのですか」

シテ『その景季が幽靈なり（と立ち）
地、御身他生の縁ありて、一樹の蔭の花の縁に。
鶯宿梅の木のもとに（と梅を見る心にて正面を見）。宿らせ給へわれはまた世を鶯の塒はこの花よととて失せにけりこの花よととてぞ失せにける

「宿らせ給へ」とワキに向き、「われはまた」と常座にて開き、靜かに中入。

里人「さう思つて出て來た景季の幽靈ですあなたとお會ひしたのも、前世からの宿緣だと思ひます。今夜はこの梅の木の下にお寢み下さい。私の住家も鶯と同じで、この花がそれなのです」

といつて、見えなくなつてしまつた。

○かり枕―假寢。借の緣で「貸し給へ」と續けた。
○白雪の―知らぬといひかけて。白梅の形容とした。
○花の主―平忠度の歌に「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」
○下臥―花の下に寢ること
○いふ草の―跡弔はれんといふを夕にいひかけた。
○その景季が―草の蔭を景季にいひかけた。
○他生の緣―前世からの因緣。
○一樹の蔭の―「一樹の蔭に宿り、同じ流れを汲むも、皆これ他生の緣淺からず」などとある成語によつた。
○鶯宿梅―緣に逢ふといひかけた。鶯宿梅は梅の名で、紀貫之の女が宮中から家の紅梅を召されて「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へむ」と詠んだ故事から出た名。
○世を鶯の―世を憂く思ふといひかけた。

【問】

狂言所の者、着附縞麻斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。生田の里に住居する者にて候。今日は簾の梅を眺め心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬお僧の御座候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「是は筑紫方より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左樣に候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（眞中に出で下に居り）さてお尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。簾の梅の謂れ。梶原父子の御事御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等このあたりに住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候

○河原太郎兄弟―盛衰記卷卅七「景高景時入レ城」に武藏國住人篠黨に、河原太郎高直、同二郎盛直、兄弟馳せ來りて馬より飛び下り……城の内に入りけるを……讃岐國住人眞鍋五郎助光、弓の上手精兵の手足なりければ……左も右も戰ふに及ばずして、二人が頸はとられにけり」

○かち立ち―徒歩。

ワキ「近頃にて候

狂言「總じて梅の花は色々樣々御座候中にも。籏の梅と申す子細は。平家はこの所に御座を構へ。多勢を以て固め給ふ中にも。この所は大手にて御座ありたると申す。然る處に源氏は平家を亡ぼさんと。六萬餘騎を二手に分け。大手搦手より押し寄せ給ふ中にも。河原太郎兄弟は生田の森の魁として。兄弟ながら討たれしを。梶原聞いて腹を立て。篠原黨の殿原達の不覺にて。河原兄弟を討たせてあり。いざや押し寄せ平家に手並を見せんとて。逆茂木のけさせ敵の中に割つて入り。火花を散らし戰ひさつと引かれたる有樣。申すも愚かに御座ありたると申す。又梶原の二度の懸と申すは。その時引いて味方の陣に源太見え給はねば。景時源太は如何にと尋ぬるに。見え給はぬと申す景時これを聞き。源太を討たせ景時殘りて何かせん。續けや續けつはものと。敵の中へ割つて入り。馳せ廻り見給ふに。源太はかち立ちになり兜をもうち落され。大童の姿となつて妻を先途と戰うたり。景時これを見つけ。やがて馬より飛んで下り。一所になつて戰ひ敵あまた討ち取り。かゝるも引くも折によるぞ源太とて。源太をかい具し引かれたる有樣は。鬼神もかくやと見え。梶原の二度の懸と申して。敵味方の眼を驚かしたると申す。その時源太はこの梅花の色よきを一枝手折り籏にさし。その日は一の御高名あり。本陣へお歸りありてこの梅に向ひ。二度拜をなし給ふにより。籏の梅と申して名木のやうに申し傳へ候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて候が。御尋ね不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく若き男の來られ候程に。籏の梅の謂れ尋ねて候へば。唯今御物語の如く懇に語り。景季の幽靈といひもあへず。花の蔭にて姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。扨は景季の御亡心現れ給ひ。御言葉をかはし給ふと存じ候間。暫くこの所に御逗留ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

○御亡心―御亡靈。

ワキ「暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うするにて候

狂言「御逗留にて候はば御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ「ツレ」上歌(待謠)「うば玉の。夜の衣を返しつつ。夜の衣を返しつつ。更け行くままに生田川水音も澄む夜もすがら。花の木蔭に臥しにけり花の木蔭に臥しにけり

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ梶原景季、面平太・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟紺・着付色入段厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて、太刀を佩き白梅枝を肩にさして出で、常座に立ちて、

後ジテ「魂は陽に歸り。魄は陰に殘る。執心却來の修羅の妄執。去つて生田の名に負へり

地「血は涿鹿の河となり(と右の方を見)

シテ「紅波楯を流しつつ(正面に直し)

地「白刃骨を碎く苦しみ(拍子を踏み)月をも日をも。

○うば玉の夜の衣を—古今集小野小町の歌—いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞぬる」を引いた。「うば玉の」は夜の枕詞。ここでは夢になりとも花の主景季を見たいと思つてといふ意。

【七】

○魂は陽に—人のたましひを魂と魄とに分ち、その陽性を魂といひ、陰性を魄といふ。左傳に「人生始化爲レ魄、既生魄、陽曰レ魂」

○執心却來—執着の心が障りとなつて、成佛することが出來ず障落すること。却來は正位から偏位に來ること。

○修羅—六道の一で、戰死者の墮ちる世界。日夜鬪爭の苦患の絶えない所。

○去つて生田の—暫く修羅道の妄執を去つて、生田の名の如くこの世に生き返つて來る。

○涿鹿—支那古代、黃帝と蚩尤とが激戰した所。この一節(賴政)にも同文がある

○紅波—血が波の如くに流れること。

○月をも日をも—太平記に修羅の事を記して、「この頃帝釋の軍に打勝つて、手に

【六】

後段

旅僧は夢になりとも、この物語の主人公景季を見たいものだと思つて、時も次第に更けて、生田川の水音も澄み渡る夜、花の木蔭に寢た。

【七】

後ジテ梶原景季、旅僧の夢に現れた態、舞場。

景季　人間は死ねば、魂は天に昇り、魄は地に歸るものであるのに、自分はこの世に對する執着心が障りとなつて成佛することが出來ず、修羅道に苦しんでゐるのだが、今暫く修羅道の妄執を離れて、この生田川に現はれて來たのだ。

修羅道に於ける鬪爭は實に激しいもので傷ついた人の血は河のやうになつて、楯

日月を握り、身は須彌の頂に居り、一足に大海を踏むと雖も、その眷屬毎日數萬人亡ぶ」その原據は長阿含經にある。

○長夜のやみやみと—日月を取るといふのを承けて長夜の闇とつゞけ、闇を「やみやみ」にいひかけた。

【八】○胡籙—矢を盛る器。箙と同じ意。

○法味—ここでは弔ひの意

○瞋恚の敵—わが怒る心が敵となつてわが身を責めること。

手にとる影かや（角へ行き）長夜のやみやみと眼もくらみ（扇にて顏を蔽ひながら小廻りし）。心も亂るる修羅の苦しみ。御覽ぜよ（と常座にてワキへ開く）

【八】ワキ『不思議やなその樣未だ若武者の。胡籙に梅花の枝をさし。さも花やかに見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ『今は何をか包むべき。これは源太景季。他生の緣の一樹の蔭に。夢中の對面向顏をなす。御身貴き人なれば。法味を得んと魄靈の。魂にうつりて來りたり。跡弔ひ給へといはんとすれば

〔カケリ〕

に修羅の鬪爭の樣を示し、

シテ『又瞋恚の敵の責。あれ御覽ぜよ御聖（とワキへ向く）

をも流す勢ひで流れ、鋭い刃に打たれては骨をも碎き、月もなければ日もなく、朝から夜まで眞の闇で、眼もくらみ心も亂れてしまふのだ。（と獨言をいつて旅僧に向ひ）どうぞこの苦しい有樣を御覽下さい」

【八】旅僧に夢中に景季の姿を認めて、

僧　これは不思議だ、年若い武者で、箙に梅花の枝をさし、大層花やかな姿をした方がお見えになるが、一體あなたはどなたです」

景季　今は何を隱さう、私は梶原源太景季ですが、前世からの宿緣があつて、この木蔭に夢ながらお目にかかるのです。あなたは貴い高僧だから、回向をして戴きたいと思つて、魂魄がここへ出て來たのです。どうかわが跡を弔つて下さい」

といはうとすると、また修羅道の苦に責められる。

〔カケリ〕

に景季、修羅道の苦惱の樣を示す。

景季「旅僧に向さ、

景季「またしても憤怒の惡心に責められてこのやうな苦しみをするのです。お僧さま、あの修羅道の樣を御覽下さい」

○紅焔の旗―平家の赤旗を喩へていふ。
○閻浮―須彌山の南にある閻浮提洲。轉じて廣く現世をいふ。

ワキ『げにげに見れば恐ろしや。劒は雨と降りかかつて

シテ『天地をかへす如くにて

シテこれより謠に合せて仕科、

ワキ『山も震動

シテ『海も鳴り

ワキ『雷火も亂れ

シテ『惡風の

地『紅焔の旗を靡かし紅焔の旗を靡かして。閻浮に歸る生田川の。波を立て水をかへし。山里海川も。皆修羅道の。巷となりぬ。こは如何にあさましや

と下を見ながら安坐。

シテ『暫く。心を靜めて見れば

地『心を靜めて見れば(と正面を眺め)。所は生田なりけり。時も昔の春の梅の花盛りなり(と立ちて舞ふ。

僧「ほんとに、見れば實に恐ろしい樣だ。劒は雨のやうに降つて來るし……」

最參 天地も覆すかと思ふ程、山も震動し、海も鳴り、雷火も亂れ、惡風は火焔の旗を靡かして、今歸つて來たこの世の生田川にまで、波を立て水をかへし、山も里も海も川も皆修羅道となつてしまつた。何といふあさましいことだらう」

と暫く心を靜めて、

最參「暫く心を靜めて見ると、ここはこの世の生田川であつたのだ。昔ここで合戰した時と同じやうに、今も春で、梅の花盛りだ。(思ひ起せばあの合戰の時、この梅の枝

○若武者に相逢ふ―若武者に似あはしい若木。
○花かづら―花を髪にかけて頭飾とするもの。籠を花かづらに見立てたのである

○大童―兜が落ちて、髪を振り亂した樣。
○後を合はせ―背中合はせ。

○拜みうち―眞向から打ち下して斬ること。

○車斬り―胴切りにすること。
○蜘蛛手―八方へ打ち違へに斬りまくること。
○かくなは―緒を結ぶやうにして刀を使ふこと。
○十文字―縱横に斬り入ること。

一枝手折りて籠にさせば。もとよりみやびたる若武者に。相逢ふ若木の花かづら。かくれば籠の、花も源太もわれ さきかけん。さきかけんとの。心の花も梅も。散りかかつて面白や。敵のつはものこれを見て。あつぱれ敵よ遁すなとて。八騎が中に。とりこめらるれば。

シテ『兜も打ち落されて

地『大童の姿となつて（太刀を抜きて仕科）

シテ『郎等三騎に後を合はせ

地『向ふ者をば

シテ『拜みうち

地『又めぐりあへば

シテ『車斬り

地『蜘蛛手かくなは十文字。鶴翼飛行の祕術を盡くすと見えつるうちに（太刀を棄て）。夢覺めて。しら

を一枝折つて籠にさすと、丁度優雅な若武者に似合つた趣だと、人がいつてくれる。よしそれならば、自分はこの花の名の通り先驅けの功名を立ててくれようと、勇みに勇んで敵陣に亂れ入ると、敵の武者はこれを見て、よい相手だ、遁すなといつて、八騎ばかりで自分を取圍んだ。取圍まれて兜を打ち落され、大童の姿となつて奮戰し、郎等三騎と背中合はせになつて、向つて來る者は眞向から斬り落し、横より來れば車斬りにし、或は蜘蛛手、或はかくなは、或は十文字と色々祕術を盡して戰つたのだ」

といつてゐる間に、旅僧の夢も覺めて、夜も白々と明けてくると、

しらと夜も明くれば（と居立ち）。これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に（とワキに一禮して立ち）。鳥は古巢に歸る夢の鳥は古巢に歸るなり　よくよく弔ひてたび給へ

と常座にてワキに合掌し、直して留拍子を踏む。

○花は根に鳥は古巢に歸るなり―千載集崇德院の御製を引いて、冥途に歸る意に用ゐた。この下句「春のとまりを知る人ぞなき」

景季　今は夜も明けて來た。もはやこれでお暇をしませう。花が根に、鳥が古巢に歸るやうに、自分は修羅道へ歸ります。とうかよく跡を弔つて下さい

といつて消え失せる態で、シテ景季退場。

〔考　異〕

諸　流　（五　流）

【一】ワキ歌「春を心のしるべ……旅に出でうよ（春喜ナシ）。ワキ「これは西國（春喜統紫）方より……

【三】シテ「抑も（下懸總じて）この生田の……色殊なる梅花のありしを一枝（春喜一）の木戸切つて落し、分捕高名目を驚かす處に。景季何とか思ひけん。この梅花の枝を手折つて旅にさす……

古謠本　（元祿八年本）

【三】シテ「抑もこの生田……敬せしよりこの方（元ナシ）……

【八】シテ「又瞋恚の敵（元修羅）の責……

老松（おいまつ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　梅津何某、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　老翁（老松神靈）、**前ツレ**　男（紅梅殿神靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　老松の神靈

【所】 筑前國　安樂寺

【時】 春（正月）

【異稱】 古く〔追松〕とも書いた。

【作者】 能作書、世子六十以後申樂談儀ともに世阿彌の作としてゐるから、その自作に違ひない。能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作として擧げてゐる。言繼卿記天文十四年三月十一日の條に演能の事、言經卿記文祿四年三月廿七日の條に註釋の事が見えてゐる。

【梗概】 梅津何某は日頃北野天滿宮を信仰してゐたが、或夜靈夢を蒙つたので、筑紫の安樂寺に參詣すると、一老翁と男を伴つて現れ出て、ここの神木である紅梅殿及び老松の謂れを語り、自分はその老松の靈であるといつて消え失せる。やがて、老松の神體が現れて樂舞を奏し、御代を壽く。

【出典】まづ紅梅殿即ち桃梅の事については、源平盛衰記卷三十二「北野天神飛梅事」に、

北野天神は時平大臣の讒訴によつて、延喜五年正月廿五日に安樂寺に遷され給ふ。住みなれし故郷の恋しさに、常は都の空をぞ御覽じける。比は二月の事なるに、日影長閑に照しつつ、東風の吹きけるに、思し召し出づる御事多かりける中に、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな

と詠じければ、天神の御所、高辻、東洞院、紅梅殿の梅の枝刎け折れて、雲井遥に飛び行きて、安樂寺へぞ參りける。櫻も御所に在りけるが、御歌なかりければ、梅櫻とて同じく簾の内にそだち、同じく御所に枝をかはしてありつるに、如何なれば梅は御言にかかり、我はよそに思し召さるらんと怨み奉りて、一夜が中に枯れにけり。されば源順が、

梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や深くぞ頼む神の誓ひを

とあり、同樣の事を北野緣起、梅城錄等にも記してゐるが、老松又は追松に關する古い傳說は見當らない。たゞ北野緣起に、

（天曆元年近江國比良宮にして、禰宜三和良種男子七歲なるに託宣ありき。……佛舍利玉帶銀造りの劒芳鏡、老松福部に持たせらる。……我居たんには、老松して松の種をまかする也、われ菅大臣たりし時、夢に三本生えて即ち折れぬと見しは、流さるべき相也……さても右近の馬場こそ興宴の地なれ。われかのほとりにうつるべし。このほとりに松を植うべしと仰せられける。……良種左近の馬場に行きむかひ、朝日寺住僧最鎭、法儀鎭世等にこの託宣の旨を語り、子細を相議する程に、一夜のうちに松數千本生え侍りき。

とあるが、この一夜千本の傳說が轉化したものであらうか。謠曲拾葉抄に引いてゐる榻鳴曉筆に、飛梅の傳說を記した後、

心なき草木までも御別れを悲しみけるにや、その後古郷御庭の櫻は枯れけるとなん、この事を聞し召し及ばせ給ひて、

梅は飛び櫻は枯るる世の中に松ばかりこそつれなかりけれ

扨こそ都の松は御跡を追ひて、西府には生ひたりけれ、追松と申し侍るこれなり。

といつてゐるのは、前揭盛衰記源順の歌の轉化したもので、或はこのやうな本曲の問語にも語つてゐるやうな「追松」傳說が、謠曲以前に既にあつて、作者はそれを本として脚色したのでなからうか。

【演出】同じく神事物といふが中にも、この曲はめでたい松と梅とを主題としたものであるから、「眞の脇能」として珍重されてゐる。曲の推移は極めてなだらかで、どこにも無理がないが、後段の演出に、後ジテ老松の神靈だけが登場するのは、前段の行懸りから見ても

物足りない。やはり小書の「紅梅殿」のやうに、後ヅレ紅梅殿が天女姿で登場演舞する方がよいと思ふ。古くは後ヅレを出したものでなからうか。

【一】

○關の戸ささで―昔は要路に關門を設けて往來の人を吟味したが、今は天下泰平で、關の戸も閉ぢず、往來も自由になつてゐるとの意。

○梅津の何某―梅津は京都の西、葛野郡にある。ここに梅津をワキとしたのは、老松飛梅の緣であるが、實際に梅津姓を名乘つてゐたものが古くからあつた。

○北野―京都北野にある北野天滿宮で、菅原道眞を祀る。もと北野天神は、續日本後紀に「仁明帝御宇承和三年二月、爲二遣唐使一祠二天神地祇於北野一也、蓋此神鎭座始乎」とあり、天神地祇を祀つてゐたのを、村上天皇天曆元年その地に道眞を祀ることとなつたのである。

○歩みを運ぶ―度々參詣する。

○安樂寺―筑前國筑紫郡太宰府にあり、道眞を葬つた寺。よつて延喜五年神殿を建てて天滿大自在天神と號し、中古頗る盛んな宮寺であつたが、明治になつて寺

【一】

次第の囃子にて、ワキ梅津何某、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキヅレ 次第「げに治まれる四方の國。げに治まれる四方の國。關の戸ささで通はん

次第三返かへし濟みて、ワキは正面に向き（ワキヅレは下に居り）

ワキ「抑もこれは都の西。梅津の何某とはわが事なり。われ北野を信じ。常に歩みを運び候處に。ある夜の靈夢に。われを信ぜば筑紫安樂寺に參詣申せと。あらたに御靈夢を蒙りて候間。唯今九州に下向仕り候

ワキ・ワキヅレ、向合ひて、

ワキヅレ 道行「何事も。心に叶ふこの時の。心に叶ふこの時の。ためしもありや日の本の。國豐かなる

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ梅津何某、ワキヅレ從者を隨へて登場。

梅津「實に天下泰平の大御代で、關所の吟味もない、氣樂な旅に出かけよう」

と次第を謠つて、御代を祝ひ、

梅津「自分は京都の西の、梅津の何某といふ者です。さて私は北野天神を信仰して、いつも參詣してゐましたところ、或夜『自分を信仰するならば、筑前の安樂寺に參詣せよ』と、あらたかなありがたい夢のお告を受けましたので、これから九州へ下るのです」

と見物人に自己紹介をし、

梅津「民に少しの不平もなく、何事もわが思ふやうになる、實にありがたい御治世であるといふ證據には、日本國中米の收

は廢せられた。
○何事も心に叶ふ―政道が正しくて、民に不平のないこと。
○たあしもありや―その泰平の實例が、現に今日ここに示されてゐるとの意。
○秋津洲―日本の古稱。洲は「しま」をいふのが正しいが、謠曲では常に「す」と訓んでゐる。豐かなる秋を國の名にいひかけたのである
○波も晉なき四つの海―天下泰平の喩。宴曲「祝言」に「四海波靜かにして九州風をさまり」
○高麗―三韓、朝鮮。
○御調の道の末―朝鮮支那からの朝貢船の到着する所即ち筑紫。その航路が安らかであるといふ意を含めて安樂寺とつゞけた。

【二】
○梅の花笠―古今集大歌所の歌「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」の想をとつた。鶯が梅の梢を傳つて、花びらを頭に戴く樣を花笠に見立てたのである。
○春もきて―春の來る意と笠を着る意とを兼ねた。
○時めきて―色の變らぬ松

秋津洲の。波も晉なき四つの海。高麗唐土も殘りなき。御調の道の末ここに。安樂寺にも着きにけり安樂寺にも着きにけり

ワキ「高麗唐土も殘りなき」と正面に向き、二三足出でて、またもとに歸り、安樂寺に着きたる心。道行濟みて、ワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや九州安樂寺に着きて候。心靜かに參詣申さばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・肩髮・襟淺黃樺・着附小格子・茶絣水衣・白大口・腰帶の裝束にて杉箒を持ち、ツレ男、直面・襟赤・着附無地熨斗目・淺黃縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ一聲。梅の花笠。春もきて。縫ふてふ鳥の。梢かな

と謠ひて正面に向き、

ツレ二句『松の葉色も時めきて。シテ(向合ひ)十廻り深き。綠かな

穫は豐かで、國の隅々まで安樂で、朝鮮や支那からも殘らず御貢物を奉つてゐることだ。……おゝはやその朝貢船の着く筑紫の、安樂寺に自分も着いたのだ」

と御代の太平を祝つてゐるうちに安樂寺に着いた態で、舞臺は安樂寺となる。梅津は寺の神に參詣する態。

【三】

シテ老松の神霊、老人の姿をして、ツレの若い男(紅梅殿の神霊)を伴ひ、境内を掃き清める態で登場。社内の景を眺めて、

翁「もはや春の季節になつて、鶯が花笠を縫ふといふ梅の梢は、丁度今が花の眞盛りだ」

男「松の葉色も春らしい深綠となつて、全く『松は千年』といふ趣が味はれます」

も春の好時節に逢つて、色濃く盛んになるとの意。
○十廻り深き綠―新撰朗詠集大江朝綱の句に「德是北辰、棒葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻、豈唯天意乎」。松は百年で、また若返り、かくすること十返、千年目に花が開くといひ傳へて、めでたい例に引かれてゐた。
○風を逐つて―和漢朗詠集紀淑望の句「逐レ吹潛開、不レ待二芳菲之候一、迎レ春乍變、將レ希二雨露之恩一」を二句に別けて引いた。
○年の葉守の―「年毎に」といふ意を「年のは」といふので、これを掛詞として「葉守の神」とつゞけ、神の字を略した。葉守の神は樹木の守護神で、松をこれに擬へた。
○宮寺―神をも祀つた神佛混淆の寺。ここでは安樂寺を指す。
○苔筵―岩間に生ひ擴つた苔を筵に喩へ、筵を敷くを敷島にいひかけた。
○敷島の道―和歌の道。道眞は和歌に達してゐたので朝貢船がこの地に着くばかりでなく、和歌の道もこの神が守護するといふ意に用ゐたのである。

二人とも舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、正面に向き、

シテサシ『風を逐つて潛かに開く。年の葉守の松の戸に。シテ(向合ひ)『春を迎へて忽ちに。霑ふ四方の草木まで。神の惠みに靡くかと。春めき渡る盛りかな

シテ下歌『歩みを運ぶ宮寺の光のどけき春の日に。

上歌『松が根の岩間を傳ふ苔筵。岩間を傳ふ苔筵。敷島の道までもげに末ありやこの山の。天ぎる雪の古枝をも。なほ惜しまるる花盛り。手折りやすると守る梅の。花垣いざやかこはん梅の花垣をかこはん

「花垣いざや」と謠ひながら、シテとツレ入替り、シテは眞中に、ツレは右の正面先に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる老人に尋ね申すべき事の候

翁「さうだ、春風の吹くにつれてそつと花が咲き出し、この葉守の神である松のあたりに、春の暖かさがやつてくると、忽ちにあたり一面のすべての草木までが、春の雨露に霑うて、宛も神の御惠みに靡くかのやうに、すつかり春らしくなつてしまふことだ」

翁「かうして自分達が毎日參詣してゐるこの宮寺には、春ののどかな光が照り渡り、松の根もと、岩の間に生え擴がつてゐる苔は筵を敷いたやうだ。さうだ、筵といへば、この神樣は和歌の道まで御守護遊ばすのだ。だから、このあらたかな境内のものといへば、雪のかかつた古枝でさへ惜しまれるのだ。まして花盛りの枝を人に折られはしないかと惜しまれて、嚴しい番をしてゐることだ。さあ、この梅の花を盜られないやうに、垣根をいはう」

シ、飛梅の側へ來る。

【三】

梅津はこれを見て、

梅津「もうし御老人、一寸お尋ねします」

○この山の―安樂寺を天原山といふので、この山號を承けて天ぎるとつゞけた。
○天ぎる雪の―古今集讀人知らずの歌「梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れれば」を引き「降る」を古枝にかけて、梅の事にいひつゞけた「天ぎる」は空を遮ぎり曇らす意。
【三】
○飛梅―道眞の都の邸から太宰府に飛んで來たと傳へられてゐる梅。解說參照。
○紅梅殿―拾芥抄に「紅梅殿、西條坊門北町尻西町面北野御子家、或云天神御所」とあり、もと道眞の邸の名であつたが、飛梅の傳說によつて、この梅の異稱となつたのである。
○御詠歌―道眞の詠「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」を指す。この歌拾遺集大鏡等に見ゆ。

○老松―典據は明かでない解說及び問語參照。
○遲くも―老松の頭韻をふんだ。
○若木の花守まで―紅梅は

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ
ワキ「聞き及びたる飛梅とは何れの木を申し候ぞ
ツレ「あら事もおろかや我等は唯。紅梅殿とこそ崇め申し候へ
ワキ「げにげに紅梅殿とも申すべきぞや。『忝くも御詠歌により。今神木となり給へば。崇めてもなほ飽き足らずこそ候へ
シテ「さてこなたなる松をば。何とか御覽じ分けられて候ぞ
ワキ「げにげにこれも垣結ひまはし御注連を引き。誠に妙なる神木と見えたり。『いか樣これは老松の
シテ「遲くも心得給ふものかな。シテ(向合ひこ)紅梅殿は御覽ずらん。色も若木の花守までも。花やか

翁「私ですか、何の御用です」
梅津「話に聞いてゐた飛梅とは、どの木をいふのです」
男「これは亂暴なことをいふ人だ。私達はただ紅梅殿と申して崇めてゐるのですぞ」
梅津「いかにも、紅梅殿と申す筈であつた。忝くも菅公の御詠歌によつて、この地に來て、神木となられたのだから、どこまでも崇めなければならない筈でした」
翁「ところで、こちらの松をどういふものと御覽になります」
梅津「なるほど、これも垣がいつて、注連繩が引き廻してあつて、ほんとにあらたかな神木のやうに思はれるが、なるほどこれは老松の……」
翁「分りの遲い人ですね。御覽なさい、紅梅殿の方は木も若くて、花守までが年が若くて花やかですが、それに引きかへて、

若木であるので、その花守までが年若で花やかである

○まつ人の―古びたる松を待つ人にいひかけ、年老いて淋しく人の訪れを待つてゐるとの意に用ゐた。

○翁さみしき―翁さび（老人らしい）を淋しきにいひかけた。

【四】

○峨々たる青山―大江匡房の參安樂寺詩に「北有二崔嵬山一」

○朧月松閣の中に映じ―朧な月光が松林の中の高殿にさしてゐる。但し「松閣」は下懸謠本に「松柏」とあるのが穩當である。

○寂々たる瓊門―瓊門は玉で飾つた門。安樂寺の南門をいふ。「寂々」は文字を誤つたものであらう。

○斜日竹竿のもとに―夕日が竹林の中にさし入つてゐる。

○火焔の輪塔―五輪塔の、上に火焔に象つた形のものを飾りとしたもの。

○翠帳紅閨―もと美人の室の形容であるのを、ここには華麗な建物の意に用ゐた

○古寺―天滿宮の西五六町の所にある觀音寺を指す。道眞の詩に「觀音寺唯聽二鐘

なるに引きかへて

次の地下歌に、ツレは地謠座前に行きて坐し、

地下歌『守るわれさへに老が身の。影古びたるまつ人の。翁さみしき木のもとを。老松と御覽ぜぬ神慮もいかが恐ろしや

と、シテ眞中にてワキと向合ひ下に居る。

【四】

ワキ『猶々當社の謂れ委しく御物語り候へ

シテサシ『まづ社壇の體を拜み奉れば。北に峨々たる靑山あり

地『朧月松閣の中に映じ南に寂々たる瓊門あり。斜日竹竿のもとに透けり

シテ『左に火焔の輪塔あり

地『翠帳紅閨の粧ひ昔を忘れず。右に古寺の舊跡あり。晨鐘夕梵の響絶うることなし

（居クセ）

地クセ『げにや心なき。草木なりと申せども。かか

老松の方は、その番人の私までがこのやうな老人で、いかにも古びた、人待ち顏な、年寄りおみた木であるのに、それが老松だとすぐお分りにならないやうでは、神の御心にも背くことだと、そら恐ろしく思はれますよ」

といつて、梅津の側にくつろぐ。

【四】

梅津「どうか、もつと委しくこのお社の謂れを話して下さい」

翁「まづお社の周圍の形勢を拜しますと、北には峨々と聳えた靑山があり、朧げな月の光が松林の中の高殿に照り映えますし、南には寂々（？）とした立派な御門があり、夕日が竹林の中にさし入ります。又左には塔上に火焔の形を戴いた五輪塔があり、その莊麗な建物を見ては、昔の事が偲ばれますし、右には古い觀音寺の舊跡があつて、朝な夕なに梵鐘の響きの絶えることがありません。――

さう申せば、心もない草木でも、佛の敎へられた諸行無常の理を知つてゐるので

る浮世の理をば。知るべし知るべし諸木の中に松梅は殊に天神の御慈愛にて紅梅殿も老松も皆末社と現じ給へり。さればこの二つの木は、わが朝よりも猶漢家に徳を現し。唐の帝の御時は國に文學盛んなれば花の色を増し匂ひ常より勝りたり。文學廢れば匂ひもなく。その色も深からず。さてこそ文を好む木なりけりとて梅をば。好文木とは附けられたれ。さて松を。大夫といふ事は。秦の始皇の御狩の時。天俄かにかき曇り大雨頻りに降りしかば帝雨を凌がんと小松の蔭に寄り給ふ。この松俄かに大木となり。枝を垂れ葉を並べ。木の間透間を塞ぎて、その雨を漏らさざりしかば。帝大夫といふ爵を贈り給ひしより松を大夫と申すなり

シテ。かやうに名高き松梅の

ありますが、殊に諸木の中でも、松と梅は天神様の御慈愛遊ばされたもので、松も梅もこれに感激して、紅梅殿・老松といつて、皆このお社の末社として現れになつたのでありますこの二つの木は、わが日本よりもたに支那に於て德を現したもので、まづ梅については、かの菅の武帝の時に、國に文學が盛んに興れば、花の色が増し匂ひもいつもより多くなり文學が廢れると、匂ひもなく色も悪くなりました。それて、梅は文を好む木であるといふので、好文木と名づけられたのです。それから又、松を大夫といふ事は、秦始皇が巡狩せられた時、空が俄かにかき曇り、大雨が盛んに降つたので、始皇が雨を凌がうと思つて、小松の蔭に寄られました。すると、その松が俄かに大木となり、枝を垂れ葉を並べ、木の枝の隙間を塞いで、その雨を漏らさなかつたので、始皇がその德をほめて大夫といふ位をお贈りになりました。それで松を大夫といふのです。——

このやうに名高い松や梅の花は、千代八千代まで行末長く、この御本社の御垣を

羣一。
○晨鐘夕梵　朝夕につく梵鐘の聲。
○浮世の理　榮枯盛衰、無常の理。
○末社—本社に附屬した社
○漢家—支那。
○唐の帝—支那の天子。ここでは菅の武帝を指す。
○好文木—梅の異名。晉の紀居の註に「晉武、好レ文則梅開、廢レ學則梅不レ開、故梅云二好文木一」
○松を大夫といふ事—史記に「始皇東行二郡縣一、乃遂上二泰山一、立二石封一祠祀、下風雨基、休二於樹下一、因封二其樹一爵二五大夫一」五大夫は秦の爵名。委しくは〔高砂〕にいふ。

地花も千代までの。行く末久に御垣守。守るべし守るべしや神はここも同じ名の。天滿つ空も紅の（とシテ立ち）。花も松も諸共に。萬代の春とかや千代萬代の春とかや

と右へ廻りて常座にて開き靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。

【間】

ワキ（ワキヅレに向ひ）「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「所の者を呼びて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候。（仕手柱際に出で橋懸に向ひ）所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・小刀・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねある。罷り出でて承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）所の者と御尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來りて給はり候へ

狂言「心得申して候

ワキヅレ・狂言、ワキの前に出で、

ワキヅレ「所の者を召して參りて候

狂言「所の者御前に候（ワキヅレもとの座に坐す）

ワキ（狂言に向ひ）「是は都の西梅津の何某にて候が。御靈夢につき參詣申して候。當社の御謂れ老松紅梅殿の子細語つて聞かされ候へ

○御垣守―行く末久しく見んを御垣守にいひかけた。御垣守はここでは御垣を守る末社の神。

○神はここも同じ―北野も太宰府も同じ名の天滿大自在天神であるといひかけ、天滿を和らげて天滿つと續けた。

○空も紅の―空も暮れをくれなる色の梅にいひかけた

◎萬代の春とかや―原は「神さびて失せにけり」であつたのを、松の失せるといふ語を、德川氏の松平姓に憚つて謠ひ改めたものである。

【間】

守る末社神として仕へることでございませう。御本社と申せば、かの北野もこのお社も、同じ天滿大自在天神で、御本社は申すまでもなく、末社の紅梅殿も老松も諸共に、君が代の幾久しい御榮えをお守り致すことでございます」

といつて、消え失せる態で退場。

狂言「是は思ひも寄らぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等もこの所には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「まづこの安樂寺に於て。老松紅梅殿の子細と申すは。昔都北野の天神。未だ菅相亞にて御座候時。時平の大臣の讒言により。この遠國まで流され給ふ。その頃は人皇六十代。醍醐天皇昌泰二年に終り延喜の年號になりて。延喜の帝と申し奉り候。卽ち延喜元年六月。この太宰府へ流され給ふが。あらぬ御住居にて。都の事御なつかしく思し召し。折節東風の吹き來り候を。五文字に置かせられ。御歌を詠ませられたると申す。その御歌は。東風吹かば匂ひおこせよ梅の花。主なしとて春な忘れそと。かやうに遊ばされければ。一夜の内にこれなる梅出來仕り候間。不審に思し召し。よくよく御覽あれば。都にて庭上に植ゑ置かれし。御寵愛の梅にて候が。御詠歌の心を感じ。筑紫まで飛び來り候間。卽ち飛梅と御名づけなされ候。又これなる松は。梅の後を追ひ來り候間。追松と名づけられ候。然れば兩木飛び來り候を。菅相亞嬉しく思し召し候。その故は。梅はこれ無罪遠流の愁歎の訪ひ。松はまた歸洛本望の實體を現すとの御事なれば。御本望遂げらるべき事疑なしとて。卽ち延喜十六年丙子の年。鳴る雷となつて都へ上り。色々の子細候て。今は北野の天滿大自在天神と現れ給ふ。さるによつて兩木をも神に祝ひ。追松紅梅殿の神と崇め申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くに候が。唯今の御尋ね不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に老人と若き男の來られ候程に。卽ち言葉をかはして候へば。兩木の子細唯今御物語の如く懇に語り。神さび給ふと見て姿を見失うて候よ

狂言「是は奇特なる事を承り候ものかな。扨は御參詣を嬉しく思し召し。老松紅梅殿かりに現れ。御言葉をかはし給ふと存じ候。暫く御逗留あつて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

○東風吹かば―この歌の第五句、解說に揭げた盛衰記の文には「春を忘るな」となる。大鏡には「春な忘れそ」とあり、問語の方が正しい。

○近頃にて候―誠に結構なことですといふ意。

【五】

○風も嘯く寅の時―寅は今の午前四時。孝經序に「虎嘯而風起」とあるので、「風も嘯く」を寅の序に用ゐた。

【六】

○客人―ワキを指す。

○名こそ老木の―名は老松といつて老木であるが、葉は綠も若々しいとの意。

ワキ「彌〻信心致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「それは近頃にて候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ・ワキヅレ立ちて舞臺の眞中に出で向合ひ、

ワキヅレ上歌(待謠)『嬉しきかなやいざさらば。嬉しきかなやいざさらば。この松蔭に旅居して。風も嘯く寅の時。神の告をも待ちて見ん神の告をも待ちて見ん

【六】

「神の告をも」と謠ひながら、またもとの座につく。

出端の囃子にて、後ジテ老松の神靈、面皺尉・白垂・初冠・金襴鉢卷・襟淺黃・着附無色段厚板・袷狩衣・崩黃大口・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に出で、

後ジテ『いかに紅梅殿。今夜の客人をば。何とか慰め給ふべき

地『げにめづらかに春も立ち

シテ『梅も色添ひ

地『松とても

シテ『名こそ老木の若綠

【五】

後段

梅津何某は老松の神靈が假の姿で現れ出たことを喜んで、

梅津「ああ實に嬉しいことだ。それでは、今晩はこの松の蔭に寢て、風も嘯く夜明け時、神のお告があるか、お待ちして見よう」

と假寢する態。

【六】

後ジテ老松の神靈、梅津の夢に現れる態で登場。

(鉢卷には普通紅梅殿の神靈は登場/ないが、目には見えなくても、紅梅殿も登場してゐると同じ心持で)

老松「紅梅殿、今夜の客人を、どうしてお慰めしよう」

紅梅「ほんとに御立派なお客人で、折柄季節もまたのどかな春でございますし…」

老松「梅の花も色美しく咲き匂うて居り……」

紅梅「松だつて同じやうに……」

老松「さうだ、名前こそ老松だが、心は若

○空澄みわたる―絲を承けて、空を出し、空の澄み渡るを、神樂の聲に兼ねて用ゐた。

○聲も滿ちたる―天滿宮の滿の字を通はせた。

地『空澄み渡る神かぐら

シテ『歌をうたひ。舞を舞ひ

地『舞樂をそなふる宮寺の。聲も滿ちたる。ありがたや（と舞臺に入り）

〔眞序舞〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『さす枝の

地『さす枝の。梢は若木の花の袖

シテ『これは老木の神松の

地『これは老木の神松の千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで

シテ『苔のむすまで松竹。鶴龜の

地（キリ）『齡を授くるこの君の。行く末護れとわが神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ

と舞ひ納めて、常座にて留拍子を踏む。

○さす枝の―舞のさす手を若枝のさすにいひかけた。

○若木の花の袖―若木は飛梅、舞の緣で花の袖といつた。

○千代に八千代にさざれ石の―この歌の初句、古今集には「わが君は」和漢朗詠集には「君が代は」とある。よみ人知らず。

○松竹鶴龜―いづれも長壽の例に引かれるもの。內侍所千首、日野大納言の歌に「仰ぎ見る君には飽かじ鶴龜に松吳竹のよを添ふるとも」

綠のやうに苔々しいのだ。この空も澄渡つた夜、神樂を奏し、歌を謠ひ舞を舞はう」

といつて、この安樂寺で舞樂を奏せられる、その聲の空にまで滿ち渡るのは、實にありがたいことである。

〔眞序舞〕

老松の神靈、神樂を奏する心で舞を舞ひ、（紅梅殿も舞ふ心である）

老松「花の袖をかざして美しい舞を舞ふのは、梢も若木の紅梅殿で、自分は姿も老木の神松であるが、この松のやうに、わが大君が、千代に八千代に、小さな石が年を經て次第に大きくなり、遂には大きな巖となつて、それに苔の生えるまでも、松や竹や鶴龜のやうに、長い長い壽命をお保ちになるやうに、わが大君の行末を御守護申しあげよと、かう御本神がおいひつけになつた、そのお告を知らせるのだ」

といふ。このやうに松も梅もわが大君をお守りして、幾久しく御代の御榮え遊ばすことは、實にめでたいことである。

老松の神靈は、神託を告げ、舞ひ納めて退場。

〔考異〕

諸流（五流）

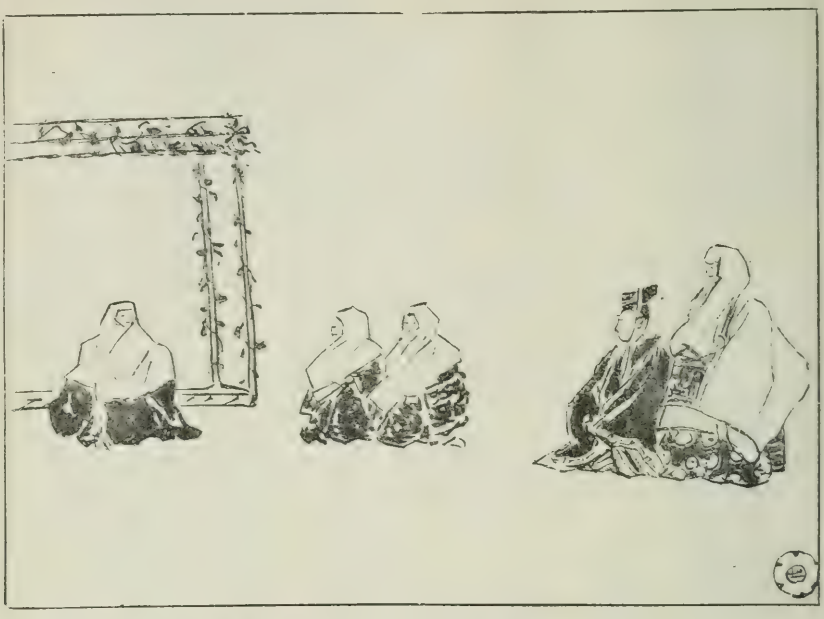
【一】ワキ道行「何事も心に叶ふ……安樂寺にも着きにけり（下懸上野に通ふ春風の。〳〵。音も吹飯の浦傳ひ。明石のとよりかくよりてげに定めなき旅の空。猶遙かなる播磨潟。室の友君きぬ〳〵の。朝妻船やしら玖ひの、筑紫の地にも着きにけり〳〵」【四】ワキ「猶々當社の謂れ委しく御物語り候へ（寶下懸ナシ）

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「抑もこれは……あらたに御靈夢を蒙り（光の御事に）て候間……【四】埋花も千代までの……花も松も諸共に萬代の……春とかや（光神さひてうせにけり跡神さひてうせにけり）

老松

五三四



大原御幸（おはらごかう）

觀（寶剛喜）

解說

【能柄】 三番目　二段劇能

【人物】 **ワキツレ**　後白河法皇臣下、**狂言**　同從者、**前シテ**　建禮門院、**ツレ**　阿波內侍、**ツレ**　大納言局、**後ツレ**　後白河法皇、**後ワキ**　萬里小路中納言、**ワキツレ**　供奉輿舁（二人）、**後シテ**　建禮門院、**後ツレ**　大納言局

【所】 山城國　大原寂光院

【時】 文治二年四月

【異稱】 喜多流では〔小原御幸〕と書く。

【作者】 能本作者註文には作者不明として擧げ、二百十番謠目錄には世阿彌の作とす。金春禪竹の拾玉得花の第六麗體に、〔大原御幸〕を擧げ、

しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきをきのすみ染の袖

といふ歌を揭げて居り、言經卿記文祿四年四月三日の條に本曲註釋の事が見えてゐる。

【梗概】平家沒落の時、建禮門院も安德天皇に隨つて入水せられたが、源氏の武士に救はれて、今は大原寂光院に出家して、天皇の御跡を弔つて居られるのを、後白河法皇がお訪ねになつた。女院は折柄大納言局を伴つて、山へ佛の花を取りに行つて居られたが、やがて庵室に歸つて、法皇の御尋ねに答へて、自ら御經驗になつた六道の樣、安德天皇御最期の御樣を語られる。

【出典】平家物語灌頂卷「小原への入御の事」「小原御幸」「六道の沙汰の事」及び卷十一「先帝御入水の事」に據つたものである。その文章も原文をそのまゝ引用した箇所が甚だ多いから、「語釋」にその著しいものを揭げて對照することとする。

【鑑賞】世阿彌が能作書に「源平の名將の人體の本說ならば、殊に〳〵平家の物語のまゝに書くべし」といつてゐるが、本曲の如きは、平家物語を最も多く引用したもので、しかもその原文は平語の祕曲としてゐる「灌頂卷」が主材となつてゐるのであるから、演能についても重要な習ひ事としてゐるのは當然のことであらう。

さて、本曲は平語の材料をそのまま現在物として劇的に取扱つたもので、登場人物も多いが、舞臺の變化・文段の推移には無理が少く、所作の少い、しんみりした曲柄としてゐるから、語り物を舞臺化したといふ感じが、よい意味で著しく現れてゐる。引用文を原文に引用して、あちらこちらに置き換へてゐるが、さほど不自然な感じを與へず、殊にクセの一章は、實に巧みに書きこなしてゐる。たゞロンギの一章は、朗吟するには美しい氣持のよいものであるが、劇として解釋する上には、可なり無理な書き方であつたと思ふ。

【一】

後見、大屋臺の作物に引廻をかけて、大小前に出す。

ワキヅレ臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、狂言從者（着附鶴皮斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束）を隨へて出で、名乘座に立ち、

ワキヅレ「これは後白河の院に仕へ奉る臣下なり。さてもこの度先帝二位殿を始め奉り。平家の一門長門の國早鞆の沖にして悉く果て給ひて候。

○後白川の院、先帝、二位殿―本曲の末に記す。

○早鞆の沖―長門國下關海峽の海、平家の沒落した壇浦はその東北部である。

【一】

序段

（舞臺には引廻をかけた大屋臺が出てゐるが、それはまだ見物人には見えない態で、こゝは京の都である）

ワキヅレ後白河院臣下、狂言の從者を隨へて一番場。

官人「自分は後白河院にお仕へしてゐる臣下である。さてこの度先帝安德天皇を始め奉り、二位尼殿以下平家一門の人々が長門の國早鞆の沖で皆お果てになつた。

○女院―本曲の末に記す。
○かひなき御命―生き甲斐のない御命。
○三河守範頼、判官義經―本曲の末に記す。
○兄弟供奉し申し―事實は東鑑に「義經供二奉内侍所神璽一、元暦二年四月二十五日入二奉京都一納二朝所一」とあり平家物語卷十一「内侍所の都入の事」にも「九郎大夫の判官義經源八廣綱を以て……内侍所しるしの御箱事故なく都へ返し入れ奉るべき由奏聞せられ……さる程に九郎大夫の判官義經、平氏男女の生捕ども相具して上られけるとあり、義經だけが供奉したのである。
○三種の神寶―八咫鏡、草薙劍、八坂瓊曲玉を申す。平家物語覺一本に「三種神器無二事故一返し入れ奉る」
○大原の寂光院―山城國愛宕郡、京都の西北にある。平家物語灌頂卷「小原への入御の事」に「文治元年九月の末に、かの寂光院へ入らせおはします」
○法皇―後白河院。

女院も御身を投げさせ給ひ候を取り上げ奉り。かひなき御命助かりおはしまし候。三河の守範頼。九郎大夫の判官義經兄弟供奉し申し。三種の神寶事故なく都に納まり給ひ候。さる程に女院は都に移らせ給ふべかりしを。先帝安德天皇の御菩提。並に二位殿の御跡御弔ひの爲に。大原の寂光院に浮世を厭ひ御座候を。法皇御幸をなされ。御訪ひあるべきとの勅諚にて候間。御幸の山路をも申しつけばやと存じ候

狂言に向ひ、

ワキヅレ「いかに誰かある

狂言「御前に候

ワキヅレ「大原へ御幸あるべきなれば。行幸の道をもつくりその清めを仕り候へ

狂言「畏つて候

ワキヅレ幕に入る。狂言名乘座に立ちて、

建禮門院も御身をお投げになつたのであるが、人がお救ひ申しあげたので、生き甲斐もなく思し召す御命をお助かりになつた。そして三河守範頼・九郎大夫判官義經の兄弟が御供申しあげて、三種の神器も御障りなく都へ御納まりになつたのである。それで、建禮門院は都にお移りになる筈であつたのだが、先帝安德天皇の御菩提の爲、且は二位尼殿の御跡御回向の爲に、大原の寂光院に御遁世遊ばされたのて、後白河法皇が大原へ御幸遊ばされて、女院を御訪れ遊ばされるやう仰せ出されたから、御幸御道筋の清めを申しつけようと思ふ」

さ事件の概略を見物人に紹介し、狂言の從者の方へ向き、

官人「おい誰かゐないか―

從者「はい」

官人「大原へ御幸遊はされる筈だから、御幸の御道筋の用意を致し、よくお清め申せ

從者「畏りました」

ワキヅレ官人退場。從者は更に他の役人にこの事を傳へて退場。

【三】
○山里は―古今集讀人知らずの歌に―山里はものの寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり―平家「小原への入御の事」に―女院山里は物淋しき事こそあんなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものをとて思召し立たせ給ひけり―
○柴の樞―柴で作つた粗末な門。
○間遠に結へる―都の音信の遠いことを間を遠くして疎らに結んだ垣にいひかけた。平家物語「小原御幸」に「世にたへぬ身の習ひとて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、僅かに言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これ等が音づれならでは、眞柝のかづら青つゞら、來る人稀なる所なり」
○ませ垣―竹又は木で造つた低い籬。
○憂き節繁き―辛い事の多いのを、柱にした竹の節の多いことにいひかけてた。
○立居につけて―柱を立つといひかけた。
○人目なきこそ―山里のことを、訪ねてくる人もないので、人に見られることのないのが。
○心なけれど―わざ〳〵自

狂言「皆々承り候へ。法皇大原へ御幸あるべきとの御事なれば。道をもつくりその用意仕り候へ。その分心得候へ〳〵

【二】

といひて引く。

後見作物の引廻を下す。シテ建禮門院、面若女・壷・花帽子・襟白・着附摺箔・上着白綾・數珠の裝束にて、作物の中央に床几にかゝり、ツレ大納言局及び阿波内侍、面連面・壷・花帽子・襟淺黄・着附摺箔・上着熨斗目・數珠の裝束にて、その左右に坐し、局の前に籠を置く。

シテサシ『山里はものの寂しき事こそあれ。世の憂きよりはなかなかに。侍・局『シテ・内』住みよかりける柴の樞。都の方の音づれは。間遠に結へるませ垣や憂き節繁き竹柱。立居につけて。物思へど。人目なきこそ安かりけれ

シテ・内下歌『侍・局』折々に心なけれど訪ふものは。上歌『賤が爪木の斧の音。賤が爪木の斧の音。梢の嵐猿の聲。これらの音ならでは。眞柝の葛青つゞら來る人稀になりはてて。草顏淵が巷に。滋き思ひの行方とて。雨原憲が樞とも濕ふ袖の、涙かな

【二】

第一段

屋臺の引廻をさり、舞臺は大原寂光院となる。シテ建禮門院、ツレ阿波内侍、ツレ大納言局を左右に侍らせてその中に居り、

女院『山里は何かともの寂しくはあるが、世間の辛いうるさいのに比べると、それよりは却つて住みよい。とはいふもののこの粗末な庵へは、都から音信といつてはめつたになく、このまばらな垣根、あやしげな竹柱、見るにつけ聞くにつけ、悲しい思ひばかりせられるのであるが、この恥かしい樣を見る人のないのが、まあ氣安いとでもいはうか。――殊更自分の爲に訪ねてくれるのではないけれど、とにかく時折この邊で音を立てるものといへば、山人が薪を切る斧の音か、梢を吹き渡る嵐の響か、猿の鳴き聲か、そのやうなものだけで、これ以外に、訪ねてくれる人といつては、ほんとに少くなつてしまつて、昔の貧しい君子人顏淵や原憲の住家のやうに、草は生ひ茂り、戸は雨に朽ち果て、たゞ物思ひばかり多くて、悲しい涙にくれてゐること

分を訪ねて來ようとするのではないが。

○眞柝の葛青つづら―二つとも蔓草の名。「くる」の枕詞に用ゐた。

○草顏淵が巷に―和漢朗詠集橘直幹の句に「瓢簞屢空、草滋顏淵之巷」、藜藿憲深鎖、雨濕二原憲之樞一」、平家「小原御幸」の條に「さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には葛朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、瓢簞屢空し、草顏淵が巷にしげく、藜藿深くとざせり、雨原憲が樞を濕すともいひつべし」。顏淵も原憲も孔子の弟子で、甚だ貧しい人であつた。

【三】

○大納言の局―本曲の末に記す。

○爪木―薪に用ゐる木の枝

○供御―召上り物。

○便なき事―不都合なこと

○悉達太子―釋迦の在俗、太子であつた時の名。平家「小原御幸」の條に、阿波內侍が法皇に申し上げる詞として「昔悉達太子は十九の麓を出で、檀特山城を出で、伽耶城を連ねて、木の葉を上つて、峯に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬び、難行苦行の功によつてこそ、終に成等正覺し給ひきとぞ申しき」

濕ふ袖の涙かな

【三】

シテ(局に)「いかに大納言の局。後の山に上り樵を摘み候べし

局「わらはも御供申し。爪木蕨を折り供御に供へ申し候べし

シテサシ「例は便なき事なれども。悉達太子は淨飯王の都を出で。檀特山のさかしき道を凌ぎ。菜摘み水汲み薪

地「とりどり樣々に難行し仙人に仕へさせ給ひて。終に成道なるとかや。われも佛の爲なれば。御花筐とりどり猶山深く入り給ふ猶山深く入り給ふ

「われも佛の爲なれば」とシテ立ちて作物を出で、局も籠を持ちて出で、舞臺の眞中にて籠をシテに渡し、シテこれを受取りて中入、局も後に隨ひて入る。(內侍は後に留まる)

【四】

一聲の囃子にて、ツレ後白河法皇、直面・花帽子・襟白・着附白綾・白水衣・指貫・込大口・腰帶・掛絡・扇・數珠の裝束、ワキ萬里

です」

シ獨言をいふ。

【三】

女院「これ大納言の局、私はこれから後の山へ上つて、樵を摘まうと思ふが……」

局「それでは私もお供を致し、薪を折り蕨をとつて、御食事の御用意を致しませう」

女院「このやうな例を引くのは勿體ないことだが、悉達太子は父君淨飯王の都を態態お出でになり、檀特山の險しい道をわけ入り、菜を摘んだり、水を汲んだり、薪をとつたり、色々樣々の難行苦行を遊ばして、仙人にお仕へになり、とう〳〵佛道をお悟り遊ばされたとやら。私も御佛の爲であるから、どんな苦勞でもしませう」

と仰せられて、大納言の局とお二人とも、御花籠をお持ちになつて、山中奥深い所へお出でになつた。

建禮門院と大納言局、山へ入る態で退場。

【四】

第二段

舞臺はもとの通。

○淨飯王―釋迦の父、印度迦毘羅國王。
○檀特山―印度健陀羅國にあり、釋迦が登つて、阿羅羅仙人迦羅々仙人に師事して修行したといふ山。
○菜摘み水汲み―法華經提婆達多品に「即隨二仙人一、徙二給所須一、採レ菜汲レ水拾レ薪設レ食」
○とりどり―薪を取るを色色の意にいひかけた。
○成道―佛道を成就す。
○花籠―花籠。

小路中納言、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・小刀・扇の裝束、ワキヅレ輿舁、着附厚板・白大口・腰帶の裝束にて、法皇は輿丁に輿を差し掛けさせ、ワキその後に隨ひて舞臺に入り、正面に向きて、

ワキ一聲『九重の。花の名殘を尋ねてや。青葉を慕ふ。山路かな

ワキヅレ次第『分け行く露も深見草。分け行く露も深見草。大原の御幸急がん

地取に、法皇は輿を差しかけさせながら橋懸一の松へ行き、ワキは名乘座にて法皇に辭儀して、

ワキ「行幸を早め申し候間。大原へ入御候。(立ちて正面に向き)『かくて大原に御幸なつて。寂光院の有樣を見渡せば。露結ぶ庭の夏草繁りあひて。(右の方に向き)青柳絲を亂しつつ。池の浮草波に搖られて。錦をさらすかと疑はる。(正面に向き)岸の山吹咲き亂れ。八重立つ雲の絶間より。山郭公の一聲も(と聞く心)。君の御幸を。待ち顏なり(と法皇に辭儀す)

臣下「都はもはや花が散つてしまつたが、その名殘が惜しまれるから、殘花と新綠を慕つて、山路へ行かう」

ツレ後白河法皇、ワキヅレ輿舁の御輿に御乘りの態で、ワキ嵯峨里小路中納言を隨へて登場。

臣下「道草が生ひ茂つて、置く露も深い大原へ御幸遊ばすので、道をお急ぎ申さう」といつてゐるうちに、舞臺は大原寂光院の近くになる。

中納言「御幸をお急ぎ申したので、はや大原へ入御遊ばされたのでございます」

と法皇に申しあげ、あたりを眺めて、

中納言「かうして大原へ御幸遊ばされたので、その御供をして、寂光院の有樣を見渡すると、庭には露を置いた夏草が生ひ茂り、青柳の枝は絲を亂したやうであり、池の浮草は波に搖られて、錦を曝したかのやうに思はれる。そして池の岸邊には山吹が咲き亂れ、幾重にも重なり立つた雲の絶間からは、山郭公の聲が聞えて、法皇樣の御幸をお待ち申しあげてゐるやうだ」

と獨言のやうにいふ。

ぞ遊ばされける。『池水の汀の櫻散りしきて波の花こそ盛りなりけれ』『ふりにける岩の絶間より落ち來る水の音さへゆゑよしある所なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し」とあるを引いた。

○八重立つ—幾重にも重なり立つ。

○池水に汀の櫻散りしきて—この歌は千載集に後白河院の御製として收めたもので、その詞書には「みこにおはしける時、鳥羽殿に渡らせ給へりける頃、池上の花といへる心を詠ませ給ひけるに」とあるのを、平家物語には前掲の如く大原で御詠み遊ばされたものと解した

○ふりにける—古くなつた

○よしありて—趣があつて

○綠羅の垣—青い蔦の卷きついた垣。

○翠黛の山—翠のまゆずみのやうに美しく見える遠くの山。

○一宇の御堂あり—平家「小原御幸」の條に「西の山の麓に一宇の御堂あり、卽ち寂光院是なり。古く造りなせる泉水木立、よしある樣の所なり。甍破れては霧不斷の香を燒き、扃落ちては月常住の燈をかゝぐとは

法皇『法皇池の汀を叡覽あつて（と右の方を見。池水に、汀の櫻散りしきて、波の花こそ、盛りなりけれ地上歌『ふりにける。岩のひまより落ちくる（ワキ立ちて法皇と景を眺むる心）。岩のひまより落ちくる。水の音さへ由ありて。綠蘿の垣翠黛の山。繪にかくとも。筆にも及び難し。一宇の御堂あり。甍破れては霧不斷の香を燒き　樞落ちては月も又常住の燈火をかかぐとはかかる所か物すごやかかる所か物すごや

五

ワキ、作物に向ひ、

ワキ「これなるこそ女院の御庵室にてありげに候。『軒には蔦朝顏這ひかかり藜藿深く閉せり。あら物すごの氣色やな。「いかにこの庵室のうちへ案內申し候

內侍「誰にて渡り候ぞ

法皇は池の水際を叡覽遊ばされて、

法皇——「池水に汀の櫻散りしきて、波の花こそ盛りなりけれ」

（水際の櫻が池の水へ一面に散りしいて、櫛の花こそ散りてしまつたが、水の面では今花盛りの有樣である）と和歌をお詠みになり、

法皇　古さびた岩の隙間から落ちくる水の音さへ趣があつて、青い蔦の卷きついた垣根、翠の黛のやうに美しく見える遠山の景色、ほんとうに繪にも文にも表せられないほどだ。とほいへ、こゝにあるたつた一つの御堂に、瓦屋根が破れて、霧が御堂の中へも立入つて、朝夕絶えぬ香を焚いてゐるやうな趣をなし、板戸は朽ちて、月が中へさし込み、佛前の常夜燈のやうな趣をしてゐて、ほんとに物凄い淋しさだ」

【五】

中納言「これが女院樣の御庵室のやうだ。軒には蔦や朝顏が這ひかゝり、板戸にはあかざが掩ひかゝつて、ほんとに物凄い有樣だ」

と獨言をいつて、庵室の方へ進み、

中納言「もうし、この庵室の方にお伺ひ致します」

內侍「どなたでございます」

ワキ「これは萬里小路の中納言にて候

内侍「それはさて人目稀なる山中へは。何とて御渡り候ぞ

ワキ「さん候女院の御住居御訪ひの爲。法皇これまで御幸にて候

内侍「女院は上の山へ花摘みに御出でにて。今は御留守にて候

ワキ、舞臺際へ行き法皇に辭儀して、

ワキ「御幸の由申して候へば。女院は上の山へ花摘みに御出でにて。今は御留守の由候。暫くこの所に御座をなされ。御歸りを御待ちあらうずるにて候

法皇、舞臺に入り脇座に二床几にかゝり、ワキは地謠座前に坐す。(輿舁はくつろぐ)内侍作物を出でて、女院を迎へに橋懸へ行きかゝると、法皇内侍に向ひ、

法皇「やあいかにあの尼前。汝は如何なる者ぞ

内侍、常座にて下に居て、

かやうの所をや申すべき」原文ではこの次に「庭の若葉繁りあひ云々」あるを、謠曲は前後入替へて引いた

○荒―瓦葺の屋根。

○霧不斷の香を燒き―霧が僧に代つて朝夕絶えず香をたく意。霧を香の煙に擬したのである。

○常住の燈―月の光を佛前の燈に見立てたのである。

【五】

○薺摩―あかざ。草顏淵の巷に―の項に掲げた平家物語の文による。

○萬里の小路の中納言―平家物語諸本盛衰記いづれにも供奉の人の中にこの名はない。謠曲作者の假作であらう。

中納言「私は萬里小路の中納言です」

内侍「これは意外な、この、人も殆ど來ない山中へ、何の御用でお出でになつたのでございます」

中納言「女院様の御住居を御尋ね遊ばす爲に、法皇様がこゝへ御幸遊ばされたのです」

内侍「女院様は上の山へ花を摘みにお出でになりまして、唯今は御留守でございますが……」

中納言、法皇に向ひ、

中納言「御幸遊ばしましたことを庵室の者に傳へましたところ、女院様は上の山へ花を摘みにお出でになり、唯今はお留守との事でございます。暫く此處に御出で遊ばし、女院様の御歸りをお待ち遊ばされますやうにと存じあげます」

法皇庵室へお入りになる態で、輿舁へ入り、阿波内侍が女院をお迎へに行くのを御覽になる態で、

法皇「やあおい尼御前、そなたは誰だ」

○阿波の内侍―平家「小原御幸」の條、法皇御尋に對し内侍の答へ奉る詞に「憚り覺え候へども、故少納言信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深くこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なくこそ候へ」とある。盛衰記には「少納言信西が孫辨入道貞憲が女」と記して居る。

【六】

○極重惡人無他方便―慧心僧都の往生要集に見ゆ。非常に重い罪人である末世の衆生は、他の方便では救はれ得ない、たゞ阿彌陀佛の稱名によつてのみ救はれるとの意。

内侍「げにげに御見忘れは御理。これは信西が女。阿波の内侍がなれる果にて候。『かくあさましき姿ながら。明日をも知らぬこの身なれば。恨みとは更に思はずさむらふ

法皇「女院はいづくに御渡り候ぞ

内侍「上の山へ花摘みに御出でにて候

法皇「さて御供には

内侍「大納言の局。今少し待たせおはしまし候へ。やがて御歸りにて候べし

【六】

アシラヒの囃子にて、後ジテ建禮門院、前の裝束に紫水衣を着け、籠に木葉を入れて手に持ち、ツレ大納言局爪木・蕨を持ちて出で、シテは二の松、局は三の松に立留り、

後ジテサシ『昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。明日をも知らぬこの身ながら唯先帝の御面影。忘るる隙はよもあらじ。（合掌して）』極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位

内侍「いかにも御見忘れ遊ばすのは御尤もでございます。私は信西の女阿波の内侍のなれの果てでございます。このやうなあさましい姿になりまして、明日の命も計られぬ身の上でございますから、御見忘れ遊ばすも御尤もで、決して恨みとは存じません」

法皇「女院はどちらへ御出でになつたのだ」

内侍「上の山へ花を摘みにお出ましになつたのでございます」

法皇「して、お供には誰が參つた」

内侍「大納言の局がお供致しました。今暫くお待ち遊ばしますやうに。すぐ御歸りになることと存じます」

【六】

後ジテ建禮門院、ツレ大納言局、山より庵室へ歸る態で橋懸へ出で、

女院「昨日も徒らに過ぎ、今日も空しく暮れかけてゐる。かうして何の生き甲斐もない、明日の命をも知られぬ身上ではあるが、たゞ先帝安德天皇の御姿が一時も忘れられない。――

『極重惡人は他に方便なし、唯彌陀を稱へば、極樂に生まるるを得ん』（と合掌して御經を誦し）

○成等正覺　佛果を得ること。

【七】

○花筐臂にかけ―平家「小原御幸」の條に「老尼（阿波内侍）涙を抑へて、花がたみ臂にかけ、岩つゝじ取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候、つまに養折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言これきれが女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐の局と申しもあへず泣きけり」

○妄執―迷ひの心の離れないこと。

○浮浮―　萎萎。現世。

○浮名をまた―入水して二度生き返つた恥を曝した上また法皇に會ひ奉つたといふ噂が立てば、なほ憂き思ひをするとの意。源氏を憚り給ふ意である。

殿一門の人々成等正覺。南無阿彌陀佛。（舞臺の方を見て）「や。庵室のあたりに人音の聞え候

局「暫くこれに御休み候へ

シテその場にて床几にかゝり、局も下に居る。

【七】

内侍、橋懸の方を見て法皇に向ひ、

内侍「唯今こそあの岨傳ひを女院の御歸りにて候

法皇（橋懸を見て）「さていづれが女院。大納言の局はいづれぞ

内侍「花筐臂にかけさせ給ふは。女院にて渡らせ給ふ。爪木に蕨折り添へたるは。大納言の局なり

といひて立ち、一の松へ出で、シテに向ひ下に居て、

内侍「いかに法皇の御幸にて候

シテ「なかなかに猶妄執の閻浮の世を。忘れもやらで浮名を又漏らせば漏るる涙の色。袖の氣色

安德天皇を始め奉り、母上二位尼殿以下平家一門の人々が成佛せられますやうに南無阿彌陀佛」

といつて庵室の方を見、

女院「やあ、庵室の方に人聲が聞える」

局「暫くこゝにお休み遊ばしませ」

【七】

舞臺は庵室で、阿波内侍橋懸の方を見て、法皇に向ひ、

内侍「唯今、あの山路傳ひに女院樣がお歸りでございます」

法皇「して、どちらが女院で、大納言の局はどちらなのだ」

内侍「花籠を臂にかけてお出でになるのが女院樣に渡らせられます。それから薺に蕨を折り添へて持つてゐるのが大納言の局でございます」

といつて、橋懸、女院の傍へ行き、

内侍「申しあげます、法皇樣の御幸でございます」

女院「お目にかゝれば、却つてこの世に執着を作り、入水を助けられて生き恥をさらした上、また法皇樣にお目にかゝつたといふ噂で辛い思ひをすることであらう。それよりも今現にこの涙に濡れた姿をお目に入れるのがお恥かしい。……と

○法の人―法皇を指す。
○一念の窓の前―平家「六道の沙汰の事」に「女院涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かなとて、御見參ありけり。」攝取とは佛が衆生を淨土へ迎へ攝ること。觀經に「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不レ捨」
○則し　希望して待つ。
○聖衆の來迎　臨終の時菩薩が來て極樂へ迎へとること。聖衆は菩薩。
○思はざりける今日の暮―思ひがけない法皇の御幸。
○古に歸る―平家の盛んであつた時を思ひ出す。
○叡慮の惠み―女院を訪ひ給ふ御心のありがたさ。
○あはれもさぞな　法皇の御憐みと物のあはれと。その多きを大原にいひかけた
○芹生の里―大原の西、草生村の地をいふ。
○朧の清水―草生村寂光院の東南にあつたといふ。細道が朧氣ではつきりしないとの意を承けて、地名を出し、朧の縁で月を呼び出す。

【八】
○さてや御幸の―このロンもつつましや（としをる）

地下歌『一念の窓の前。一念の窓の前に。攝取の。光明を期しつつ十念の柴の樞には。聖衆の來迎を待ちつるに。思はざりける今日の暮。古に歸るかと猶思出の涙かな。げにや君ここに叡慮の惠み末かけて。あはれもさぞな大原や。芹生の里の細道朧の清水月ならで。御影や今に殘るらん

上歌『春過ぎ夏もはや。北祭の折なれば。青葉にまじる夏木立春の名殘ぞ惜しまるる

地『遠山にかかる白雲は

内侍「一念の窓の前に」にシテの籠を持ちて舞臺に入り、籠を作物の中に入れて、笛座前に坐す。シテ・局「げにや君ここに」と立ちて、一の松・二の松に進む。

【八】
地ロンギ『さてや御幸の折しもは。如何なる時節なるらん

シテ『春過ぎ夏もはや。北祭の折なれば。青葉にまじる夏木立春の名殘ぞ惜しまるる

地『遠山にかかる白雲は

は思ふが、法皇樣も御出家遊ばした御身であり、同じ佛道をお話し申しあげることが出來ると思へばほんとに頼もしい。それにしても、常日頃たゞひたすら、念佛唱名して、阿彌陀如來のお引き取り、諸菩薩のお迎へをばかりお待ちしてゐたのに、これは又思ひもかけない、今日の夕暮、法皇樣にお目にかゝらうとは。でも、その爲に昔の事が思ひ出されて、やはり涙の種となることだ。

いや〳〵、法皇樣がこのやうにお情深い御心をかけさせられ、このあはれの深い大原へ、芹生の里の細道や朧の清水をお分け遊ばして、御幸遊ばされた御惠みは、今更ながらほんとにありがたい事ですー

といひながら、大納言局と共に庵室の方へ進む。

【八】
局「かうしてまあ、法皇樣の御幸遊ばした今を、どういふ季節とでも申しませう」
女房「さうだ、春も過ぎはや夏が來て、賀茂祭の頃だから、夏木立の間に青葉の交るのを見ては、春の名殘の惜しまれる時だ」
局「あの遠山にかゝる白雲を見ますと…」

ギは對話としては解釋し難い。通説には女院と局との對話として解して見た。

○春過ぎ夏もはや―平家「小原御幸」の條に「かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奥に御幸なる。……蓬山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。卯月二十日餘の事なれば、夏草のしげみが末を分け入らせ給ふ、しげみが末を分け入らせばば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり」

○北祭―四月の中の酉の日に行はれる賀茂祭。男山八幡の南祭に對していふ。

○寂光の寂かなる―寂光の二字を訓に讀み、光の陰と續けた。光陰は月日の意。

○玉松が枝―玉は松の美稱

○池の藤波夏かけて―「一宇の御堂あり」の語釋に掲げた平家の文で、前節に引かなかつた部分「中島の松にかゝれる藤波」云々をここに引いた。

○青葉隱れの遲櫻―平家の文を引いたのであるが、その原據は金葉集藤原盛房の歌「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりもめづらしきかな」

シテ『散りにし花の形見かや

地『夏草のしげみが原のそことなく分け入り給ふ道の末

シテ『ここととてや。ここととてや。げに寂光の寂かなる。光の陰を惜しめただ

地『光の影も明らけき。玉松が枝に咲き添ふや

シテ『池の藤波夏かけて

地『これも御幸を

シテ『待ち顏に

地『青葉隱れの遲櫻。初花よりもめづらかに。なかなか樣變る有樣をあはれと（シテ・局舞臺に進み）。叡慮にかけまくも。忝しやこの御幸柴の樞のしばしが程もあるべき住居なるべしや。あるべき住居なるべし

と、シテ舞臺の眞中に行きて坐し、局はワキの次に坐す。

女院『散つた花の形見であらうかと思はれる」

局『かうして、夏草の生ひ茂つた野原の、道もはつきりしない所をお分け遊ばして、こゝへお出で遊ばしたことでございます」

女院『でも、この寂光院は名前の通り、ほんとにもの靜かな所だ」

局『明らかな日の光のさす松の枝には、藤の花が興を添へてゐまして……」

女院『その花の影の池水に映る樣も、御幸をお待ち申しあげてゐるやうに思はれ、青葉隱れに咲いてゐる遲櫻は春の初花よりも珍しく感じられるので、この變つた趣を却つて風情のあるもののやうに、法皇樣が思し召さうかと思ふのも、ほんとに畏れ多いことだ。何にしても、このお粗末な庵室には、嘗くもお住ひになることが出來ようとも思はれないが……」

と語りながら庵室に着く。

○叡慮にかけまくも―叡慮にかけ給ふもといひかけて言葉にかけて申すも恐れ多いの意にとる。
○しばし―柴の音を重ねた
○あるべき住居―身を置くべき住家。「なるべしや」のやは反語。返句にやを除いたのは文意を誤つたものである。
【九】○思はずも深山の奥の住居して―平家「小原御幸」の條女院の御歌。但し原歌第一句「思ひきや」
○六道―地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界。
○佛菩薩―佛は佛道を成覺した最上位のもの。菩薩はその次に位するもの。
○身を觀ずれば―和漢朗詠集羅維の詩句「觀レ身岸額離レ根草、論レ命江頭不レ繫舟」を引いた。
○天上の樂しみも―まづ六道の最上位についていふ。平家「六道の沙汰の事」に「わが身平相國の女として、天子の國母となりしかば、一天四海は皆掌のままなりき。……明けても暮れても樂しみ榮え候ひしこと、天上の果報もこれには過ぎじと覺え候ひしか、……古郷

【九】
シテ『思はずも深山の。奥の。住居して。雲居の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに。この山里までの御幸。かへすがへすもありがたうこそ候へ
法皇「先つ頃ある人の申せしは。女院は六道の有様正に御覽じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこそ候へ
シテ「勅諚はさる御事なれども。つらつらわが身を案じ見るに。クリ『それ身を觀ずれば岸の額に根を。離れたる草
地『命を論ずれば。江のほとりに繫がざる舟
シテサシ『されば天上の樂しみも。身に白露の玉葛
地『ながらへ果てぬ年月も。終に五衰の衰への
シテ『消えもやられぬ。命のうちに
地『六道の巷に。迷ひしなり

【九】女院は庵室へお入りになつた心で、
女院「私はこゝへ參りまして――
『思はずも深山の奥の住居して、雲居の月をよそに見んとは』
（都の内、御所を離れて、このやうな深山の奥に住まうとは、ほんとに思ひがけないことであつた）
とこのやうに思ひましたのに、その山里まで御幸を仰ぎますことは、返すがへすもありがたいことでございます」
法皇「先達、ある人が申した話によると、女院は六道の有様をはつきり御覽になつたとか。このやうなことは佛菩薩の位に達したものでなければ、御覽になれない筈なのに、不審に思はれますが……」
女院「仰せは御尤もでございますが、よくわが身の上を考へますと、人間の身命のはかないことは、譬へば岸邊の根のない浮草や水上の繫いでない舟のやうなものでございます。それで、私は一度は國母の高い位に昇つて、天上界の樂しみを受けましたが、それはいつまでも身には添はず、永い年月も經ないうちに、天人の五衰のやうに衰へ果てて、生死の界に迷ひました間に、六道の世界を經めぐつたのでございます。まづ平家一門が西海に落ちのびて、波に浮き沈み、寄る邊もない

を燒野が原とうち詠め、古は名をのみ聞きし須磨の浦傳ひ、……かくて寄る方なかりしかば、五衰必滅の悲しみとこそ覺え候ひしか—

○身に白露—身に知らるを白露といひかけ、露の玉、玉葛とつゞけた。玉葛は長きの枕詞。

○五衰—天上界にも命終の時があり、天衆の壽命の盡きる時には、衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不樂本座の五の衰相を生ずこれを天人五衰といふ。

○消えもやられぬ—女院の入水せられて又救はれ給うたことをいふ。

○餓鬼道—平家に「神無月の頃ほひ清經の中將が源氏の爲に攻め落され……貢物もなければ、供御を備ふる事もなく、たま〳〵供御を備へんとすれども、水なければ參らず。大海に浮ぶといへども潮なれば飲むことなし、是又餓鬼道の苦とこそ覺え候ひしか—

○うち返す……波の打返すと船の覆へるとを兼ねていふ

○叫喚の罪人—叫喚は八熱地獄の一である叫喚地獄の略。平家に「かくて生き殘りたる者どもの、をめき叫びし有樣は、叫喚大叫喚、

（居クセ）

地クセ『まづ一門西海の波に浮き沈み。よるべも知られぬ船の内。海に臨めども。潮なれば飲水せず。餓鬼道の如くなり。又ある時は。汀の波の荒磯に。うち返すかの心地して船擧りつつ泣き叫ぶ。聲は叫喚の罪人もかくやあさましや

シテ『陸の爭ひある時は

地『これぞ眞に目の前の。修羅道の戰ひあら恐ろしや數々の。駒の蹄の音聞けば。畜生道の有樣を。見聞くも同じ人道の。苦しみとなり果つる憂き身の果ぞ悲しき

【一〇】

法皇『誠にありがたき事どもかな。先帝の御最期の有樣何とか渡り候ひつる御物語り候へ

シテ「恥かしながら語つて聞かせ申し候べし。（床几にかゝり）その時の有樣申すにつけて恨めしや。長

船のうちに不自由な暮らしをしまして、海に臨んではゐたが鹽水である爲に、水さへ飲むことの出來なかつたのは、餓鬼道のやうでございました。それから又ある時には汀に打寄せる荒波に、船が覆へされさうに思はれ、船中の者すべてが泣き叫びました聲は、地獄道の叫喚地獄の罪人がこのやうであらうかとあさましく思はれました。又ある時は陸で物凄い戰のあります時は、修羅道の戰ひを眼の前に見るやうで恐ろしうございますし、多くの馬の蹄の音を聞きますと、畜生道の有樣を見るやうでございました。そしてこのやうな色んな苦界の有樣を目の前に見聞しましたのは、わが心身の苦しみを增す、卽ち人間界の苦しみでございまして、このやうにして情ない一生を終るのはほんとに悲しいことでございます」

【一〇】

法皇『まことにありがたいお話でした。それから先帝安德天皇の御最期は、どのやうな御樣子であつたか、お話し下さい」

女院『お恥かしながらお話申しあげませう。その時の有樣を申しあげようとすれば、まづ恨めしい思ひが致すのでござい

無間、阿鼻、炎の底の罪人も、これには過ぎじと覺え候ひしか」

○修羅道—平家に「各直衣束帶を引替へて、鐵をのべて身を纏ひ、明けても暮れても、軍よばひの聲の絶ゆることもなかりしかば、修羅の道場帝釋の爭ひも、これには過ぎじと覺え候ひしか」

○畜生道—平家物語にはこの一道を省いてゐるが、盛衰記には「但今一を殘させ給ふ事、いと本意なし」と勸められて、御覽になつた樣を記して居る。

○人道—以上擧げた五の苦界の樣を目の前に見聞したのは、わが心身の苦痛を增すのであつて、即ち人道の苦しみであるとの意。

【一〇】

○緒方の三郎—名は維義。「六道の沙汰の事」に「さても筑前の國太宰府とかやに九國の内をも追ひ出され」

○上り汐に支へられ—あげ汐に妨げられて渡海することが出來ず。

○今はかうよ—今は最早致し方がない。

○能登の守教經—教盛の第二子で通盛の弟。平家物語卷十一に—安藝の太郎をば門の國早鞆とやらんにて。筑紫へ一先落ち行くべきと一門申しあひしに。緒方の三郎心變りせし程に。薩摩潟へや落さんと申しし折節。上り汐に支へられ。今はかうよと見えしに。能登の守教經は、安藝の太郎兄弟を左右の脇に挾み。最期の供せよとて海中に飛んで入る。『新中納言知盛は、「沖なる船の碇を引き上げ。兜とやらんに戴き。乳母子の家長が弓と弓とを取りかはし。そのまま海に入りにけり。『その時二位殿鈍色の二つ衣に。練袴の稜高く挾んで。わが身は女人なりとても。敵の手には渡るまじ。主上の御供申さんと、安德天皇の御手を取り舷に臨む。いづくへ行くぞと勅諚ありしに。この國と申すに逆臣多く。かくあさましき所なり。極樂世界と申して。めでたき所のこの波の下にさ

ます。長門の國早鞆とか申す所で、平家一門の者が、一先九州へ落ちのびようと申しあつてゐましたところ、緒方の三郎が心變りをして、源氏の味方を致しましたので、薩摩潟の方へでも逃げようと申してゐますと、折柄上汐の爲に船を出すことが出來ず、今は他にせん術もないと覺悟をきめてゐます時、能登守教經は敵の安藝の太郎兄弟を兩脇に挾み『最期の御供をせよ』といつて、海中へ飛んで入りました。續いて、新中納言知盛は沖の船の碇を引き上げて、兜とか申す物の上に戴き、乳母子の家長と弓を取りかはして、その儘海に入りました。その時二位尼殿は薄墨色の二つ襲を着、練絹の裾を高くからげて『自分は女ではあるけれど、敵の手にはかかるまい、主上の御供をしよう』といつて、安德天皇の御手をお執り申して、舷に近づきました。主上が『こへ行くのだ』と仰せられましたので、二位尼殿が『この日本と申す所は逆臣が多くて、このやうにあさましい所でございますが、極樂世界と申して立派な所がこの波の下にございますから、そこへ御供申しませう』と泣き泣き申しあげます

弓手の脇にかい挾み、弟の次郎をば馬手の脇に取つて挾み、一しめしめて、いざうれ己等死出の山の供せよとて、生年二十六にて海へつゝとぞ入り給ふ。〔碇潜〕參照。

○安藝の太郎　源氏方の武士。

○新中納言知盛　清盛の第四子。宗盛の弟。〔碇潜〕シテ。その解說參照。

○家長　伊賀の平内左衞門といふ、經盛の家人。

○その時二位殿　以下平家物語卷十一先帝御入水の事に據つた。その原文は〔碇潜〕の解說に掲げた。

○鈍色　薄黑い色。

○二つぎぬ　二枚襲ね。

○練袴　練絹で作つた袴。

○今ぞ知る御裳濯川の流れには波の底にも都ありとは　平家物語には見えない。盛眞記に二位殿入水の時の詠として出す。御裳濯川は伊勢太神宮の前を流れる川

むらふなれば。行幸なし奉らんと。泣く泣く奏し給へば。さては心得たりとて。東に向はせ給ひて。天照大神に御暇申させ給ひて

地『又。十念の御爲に西に向はせおはしまし

シテ『今ぞ知る

地『御裳濯川の流れには。波の底にも都ありとは。これを最期の御製にて。千尋の底に入り給ふみづからも。續いて沈みしを。源氏の武士取り上げてかひなき命ながらへ。二度龍顏に逢ひ奉り。不覺の涙に袖をしほるぞ恥かしき。いつまでも御名殘はいかで盡きぬべき。はや還幸と勸むれば。はや還幸と勸むれば。お輿を早め遙々と。寂光院を出で給へば

「はや還幸と勸むれば」とワキ法皇に辭儀をし、返句に法皇立ちて輿舁に輿をさしかけさせ、ワキを隨へて靜かに橋懸へ行く。シテも立ちて法皇を見送り、作物の袖に手をかけて、

と、主上は『では分つた』と仰せられて東にお向ひになつて、天照大神に御暇乞を遊ばし、又十念稱名の爲に西にお向ひになつて、それから、——

『今ぞ知る御裳濯川の流れには、波の底にも都ありとは』

（天照大神の御子孫の爲には、たゞこの國土ばかりでなく、海底にも都とすべき所があるとのことを今初めて知つた）

といふ御製を最後として、千尋の海底に御入り遊ばされたのでございます。私自身も續いて入水したのでございますが、源氏の武士がとり上げましたので、生き甲斐もない命を助かり、二度法皇樣にお目にかかり、思はず涙に袖を濡らしてお恥かしう存じます」

かうして、いつまでも御名殘は盡きないのであつたが、供奉の臣下が『もはや還幸遊ばしますやうに』とお勸め申したので、法皇の御輿に早速御仕度を調へ、寂光院を御出ましになると、

シテ「女院は柴の戸に
地「暫しが程は見送らせ給ひて御庵室に入り給ふ御庵室に入り給ふ

法皇は幕に入り、シテは作物の前にてしをり留め。

女院は柴の戸口に立つて、暫く御見送りになつて、やがて御庵室にお入りになつた。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【五】ワキ「これなるこそ女院の……軒には葛朝顔這ひかゝり……あらものすごの氣色やな（喜ナシ）　【六】シテ「昨日も過ぎ……や、庵室のあたりに人音の……扃暫くこれに御休み候へ（喜ナシ）　【七】法皇「さていづれが……内侍「筐膏にかけ……大納言の局なり（喜ナシ）

古謠本（貞享二年本）

【一】ワキヅレ「これは後白河の……浮世を厭ひ御座（貞をなされ）候を……　【八】地「青葉隱れの……住居なるべしやあるべき住居なるべし（貞〃〃）　【一〇】シテ「恥かしながら語つて聞かせ申し候べし（貞ナシ）

附記

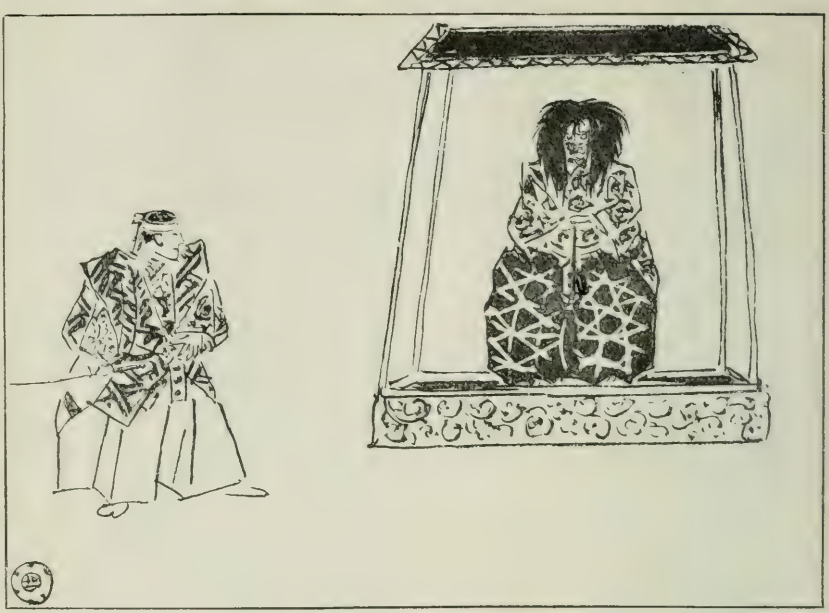
○後白河院—鳥羽天皇第四皇子、久壽二年御即位、御在位三年、嘉應元年御出家、建久三年崩御御年六十六。

○先帝—安德天皇。高倉天皇第一皇子、治承二年御即位、文治元年三月廿四日平家沒落の時、壇浦の海底に御入水遊された。御年八歳。

○二位殿—名は時子、平清盛の室、建禮門院の御母で、從二位に叙せられた。壇浦で安德天皇を抱き奉つて入水した。

○女院—建禮門院。名は德子、清盛の女で、高倉天皇の中宮となり、安德天皇を生み奉る。壇浦で入水せられたが、源氏の兵に救はれて京都に送られ、文治元年五月落飾、同年秋大原の寂光院に移られた。平家物語卷十一「能登殿最後の事」に「女院はこの有樣を見參らせ給ひて、今はかくとや思し召されけん、御硯御やき石左右の御懷に入れて、海に入らせ給ふを、渡邊の源五右馬允肥、小船をつと漕ぎ寄せて、御ぐしを熊手にかけて引き上げ奉る」

○三河守範頼―源義朝の第六子、從五位下三河守で、弟義經と共に平家を滅ぼした。
○九郎大夫の判官義經―義朝の第九子。左衞門尉で檢非違使判官を兼ね五位であつたから、九郎大夫判官といふ。
○大納言の局―平重衡の室、安德天皇の御乳母。五條大納言邦綱の養女であるから大納言の局といふ。「花がたみ臂にかけ」の語釋五四四頁參照。



大江山（おほえやま）

觀（寶剛喜）

解說

【能柄】 五番目　二段劇能

【人物】 **ワキ**　源頼光、**ワキツレ**　獨武者保昌貞光李武綱・公時等、**狂言**　頼光隨從の强力、**狂言**　童子に捕はれたる都女、**前シテ**　酒呑童子、**子方**　童女（二人）、**後ワキ**　前ワキと同人、**後ワキツレ**　前ワキツレと同人等、**後シテ**　鬼神（酒呑童子）

【所】 丹波國　大江山

【時】 平安初期　秋（七月）

【作者】 能本作者註文には世阿彌の作とし、二百十番謠目錄には宮增の作としてゐる。このいづれが正しいか分らない。演能曲名に關する古記錄も見當らないが、能本作者註文に曲名が出てゐるのであるから、室町時代の制作であることは疑ひない。

【梗概】 源頼光平井保昌等が勅命を奉じて、山伏姿をして、大江山の鬼神退治に出掛ける。この鬼神は酒呑童子といつて、もと比叡山から追はれ

たもので、童子は山伏にわが隱れ家を見顯された事を歎き、外に洩さないやうにと賴み、酒宴を開いて山伏を歡待してゐるうちに、自分が醉ひ伏してしまつた。賴光等はこの隙に乘じて、これを退治する。

【出典】本曲と同じく賴光の武勇傳說を取扱つた「土蜘蛛」及び「羅生門」には、確かな典據があるが、この酒呑童子の依據は明らかでない。お伽草子に「酒顚童子」があり、本曲と同趣の事を記してゐるが、制作の前後は分らない。これよりも古い、恐らく謠曲の典據であらうと思はれるのに、「大江山繪詞」がある。この繪詞にも異本が多いが、その中で最も古いと思はれるのが所謂香取本（もと下總國香取大宮司の傳へたもの）で、詞書の筆者を兼好法師とも二條爲世とも傳へてゐる。井澤長秀の廣益俗說辨卷十には、

今按るに、賴光酒顚童子を討つ事實錄に見えず。但、源氏系圖に賴光誅二伊吹山凶賊一とあり、古今著聞集に市原野にて牛の腹にかくれ居たる鬼同丸といふ者を賴光切殺せる事を載せたり。是等を附會して世に傳ふるにや。又異邦に似たる事あり。

と記して、明の說郛の「白猿傳」を引き、酒顚童子の傳說は恐らくこれから出たのであらうといつてゐる。

白猿傳には「梁武帝の時、歐陽紇といふ者が山中で妻を鬼に奪はれたので、これを取り返さうと鬼の栖家に赴き、ここに捕へられてゐる女達と計を廻らして、美酒で鬼を醉はせ、麻繩でその體を縛つた。鬼は白猿の姿で眼を怒らし繩を解かうとしたが叶はず、遂に紇等の爲に殺された」といふので、本曲の間狂言に鬼に捉へられた都女の出てくるのは、これによく似てゐるが、鬼畜怪賊を討つのに女と酒とを以てするのは、必ずしも白猿傳を俟つことはない。遠く素盞嗚尊の大蛇退治の神話も亦その一種なのである。事實、都近い大江山や伊吹山などには屢山賊が居つて世人を惱まし、またこれを退治した事があつた。これが傳說化して、酒顚童子物語となり、繪詞として傳へられ、やがて謠曲の題材となつたのであらう。

【概評】鬼神退治を題材とした謠曲「土蜘蛛」「羅生門」「紅葉狩」などの中で、本曲は最も童話的興味の深いものといへよう。前段の舞臺演出も興趣があり、間狂言も本曲にふさはしい效果を擧げてゐる。たゞ本曲描く所の鬼神酒呑童子の性格を見ると、狂言都女の登場によつて、その怖ろしさが察せられる外、童子自身の語る所によれば、わが重代の住家を追はれても穩かに還出し、諸所を遊行した際も都を戀しがつて居り、今山伏に會つても、ただひたすら外聞を恐れてゐるだけで、一向惡意を持つてゐない。山伏に對して絕えず不安を感じて、さすがに「鬼が城も程近し賴もしや」と萬一の場合を警戒はしてゐるものの、「飲む酒は數添ひ」て、他愛もなく醉ひ伏してゐるのである。そして賴光等に討たれようとする時にも、なほ「情なしとよ客僧達、僞りあらじといひつるに」と愚痴をこぼしてゐ

る、全體として寧ろ可憐な感じを觀客に與へしめてゐるのである。これは恐らく作者が「一稚兒二山王」の興に乘じ過ぎた結果でなからうかと思ふ。

【一】○西川―京都の西にある大堰川の下流桂川のこと。丹波に出る道筋に當る。秋風は西に吹くといはれてゐるので、西とつゞけたのである。
○大江山―山城・丹波・丹後の三箇所に同名の山があるが、普通には、丹波國天田郡と丹後國與謝・加佐二郡の境にある普甲山をいふ。
○源の賴光―清和源氏の嫡流滿仲の子で武勇を以て聞えた人。滿仲の事は〔仲光〕の曲に作られる。
○占方の言葉―陰陽師に鬼神退治の事を占はせられたところ、賴光保昌等を遣されよと占つたのである。
○保昌―姓は平井、大納言藤原元方の孫致忠の子で、和泉式部の夫であつた。丹後國司で賴光の家來ではない。
○たとひ大勢ありとて―「大勢」を金剛・喜多で「仰せ」としてゐる方が穩かである。
○人倫―人間。

【一】一聲の囃子にて、ワキ源賴光、兜巾・篠懸・着附厚板・水衣・白大口・腰帶・小刀・扇・數珠の裝束、ワキヅレ獨武者・保昌・貞光・季武・綱・公時等、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひ、（狂言强力、兜巾・篠懸・着附厚板・狂言袴・脚半・腰帶・小刀・扇の裝束にて、ワキ・ワキヅレに隨ひ出で狂言座に控ふ）

ワキヅレ一聲『秋風の音にたぐへて西川や。雲も行くなり。大江山

ワキは正面に向き、

ワキサシ抑もこれは源の賴光とはわが事なり。さてもこの度丹波の國。大江山の鬼神の事。占方の言葉に任せつつ。賴光保昌に仰せつけらる

ワキヅレ同『賴光保昌申すやう。たとひ大勢ありとても。人倫ならぬ化生の者。いづくを境に攻むべきぞ

ワキ『思ふ子細の候とて。山伏の姿に出で立ちて

【二】

第一段

舞臺は初め京都で、ワキ源賴光、ワキヅレ獨武者保昌・貞光・季武・綱・公時等と登場して、

一同「秋風の吹く方角と同じやうに、西川の流れも雲の進みも、みな西に向つてゐるが、自分達も同じく西の方、大江山へ行くのだ」

ミ勇ましい心持をいひ、

賴光「自分は源賴光である。さてこの度丹波國大江山の鬼神退治の事を、占ひの詞によつて、我等賴光・保昌に仰せつけられたのである。――

一時自分達は、たとひ大勢かゝつても相手が人間でない化物のことだから、何を目あてに攻め入ることが出來ようかと當惑したのだが、思ふ所あつて、山伏の姿を裝ひ、兜の代りに兜巾をつけ、鎧の代りに篠懸を着、兵具の代りに笈を負ひ、一

○山伏―修驗道の行者。山伏とは野山に起き伏して修行するとの意から出た名。
○兜巾―頭巾とも書く。山伏の頭に戴く小さな帽。
○篠懸―山伏の上衣。深山の露を拂ふ爲の衣といふ意
○笈―佛具食器などを入れて背に負ふ具。
○貞光・季武―碓井貞光、卜部季武、渡部綱、坂田金時いづれも頼光の家來で、その四天王と稱せられた。
○獨武者―その姓名は分らない。本曲に「保昌の館に獨武者」といつてある。卽ち頼光と保昌とがそれ〴〵勇武な家來を連れて鬼神退治に出掛けたのである。

―

○白木綿―楮の皮で造り、榊などにかける幣。これを波の白い形容に用ゐ、神前に供へるものであるから、この緣によつて御祓を呼び起した。
○御祓―河瀨に出て身を祓ひ清めること。鬼神退治の成功を神に祈る爲にしたのである。
○足引の―山の枕詞。

一ワキ・ツレ一同『兜にかはる兜巾を著
ワキ『鎧にあらぬ篠懸や
一ワキ・ツレ一同『兵具に對する笈を負ひ
ワキ「その主々は頼光保昌
一ワキ・ツレ一同『貞光季武綱公時
獨武者『又名を得たる獨武者
一ワキ・ツレ一同『かれこれ以上五十餘人
ワキ『まだ夜のうちに有明の
ワキ・ワキツレ一同向合ひ、
ワキ・ワキツレ『月の都を立ち出でて、月の都を立ち出でて。行く末問へば西川や。波風立てて白木綿の。御祓も頼もしや鬼神なりと大君の。惠みに漏るる方あらじ。ただ分け行けや足引の。大江の山に着きにけり大江の山に着きにけり

ワキ「惠みに漏るる」と正面に向きて、二三足出で、またもとに歸りて、大江山に着きたる心。ワキ正面に向きて、

行頼光・保昌・貞光・季武・綱・公時及び武名の高い獨武者など都合五十餘人で、まだ夜も明けない間に京を出立するのだ―
と見物人に自己紹介をし、

一回「夜の中に都を出立して、西川といふ所を通り、こゝで御祓をして鬼神退治の成功を祈り、いかに鬼神と雖も、王威に反抗することは出來まいと、勇みに勇んで大江山に着いた」
といつてるうちに、大江山に着いた心で、舞臺は大江山となる。

○急ぎ候程に！以下「宿をとり候へ」までのワキ詞、檜本にはこれを省く。

ワキ「急ぎ候程に。大江山に着きて候。この所にて童子の住家を尋ね宿をとり候べし（「この所にて」以下謡本には省略す）

ワキヅレ「然るべう候

といひて、一同橋懸へ行く。ワキ一の松にて狂言強力に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

強力（舞臺際にて）「御前に候

ワキ「この所にて童子の住家を尋ねて宿をとり候へ

強力「畏つて候

【二】 ワキ・ワキヅレ一同羽目板に向ひてくつろぐ。

狂言、名乗座に立ちて、

強力「さても〳〵迷惑な事を仰せつけられて候。鬼の住家へ先驅はこわものでござる。まづ急いで參らう

と小廻りす。この間に狂言女、美男鬘・着附箔小袖・帶の裝束にて、縫箔を持ちて切戸より出で、笛座の前にて洗濯する態、

強力「扨も〳〵谷深く險難さかしき道にて候。あら不思議や。この川へ血の流るゝが合點の行かぬ事ぢや。（女を見て）さればこそあれに鬼が女に化けて濯ぎをして居る。扨も〳〵氣味の惡い事ぢや。さ

○こわもの！恐ろしいもの

【三】

頼光以下一同大江山に着き、狂言強力に酒呑童子の住家を尋ねさせる。強力、酒呑童子に捕はれてその召使となつてゐる女狂言に出會ひ、童子の住家へ案内させる。

りながらあの女は都で見たやうな女でござるが。まづ言葉をかけて見よう

女「扨も〳〵迷惑な事でござる。又しては〳〵。このやうに血のついたものを洗へといはるる。このやうな悲しい事はござらぬ

強力「これ〳〵女房衆

と強力、狂言女の方へ近づく。狂言女これを見て、

女「こちの事でござるか。そなたは何をしてこれへおりやつた

強力「某は子細があつて來たが。まづそなたは何として此處に居るぞ

女「その事でござる。妾は三歳以前に酒呑童子に捕はれて。毎日毎日このやうな濯ぎをして居る事でござる

強力「子細を聞けば尤もでござる。某がこれへ來たは。この度頼み奉る頼光公。童子を退治あるべきとの事ぢや程に。そなたも都へ同道せうによつて。何卒そなたは肝を煎つてお宿を申してくれぬかせう程に。まづそれに待たせられい

女「何がさて。都に連れて行つて下さるならば。お宿の事は妾が合點でござる。童子へその由申しませう程に。

強力「心得ておりやる

強力座につく。女一の松に出で幕に向ひ、

女「いかに童子の御座あるか

シテ酒呑童子、面童子・黒頭・鉢卷・襟花色・着附無地厚板・唐織壺折・色大口・腰帶・扇の裝束にて、子方童女二人（鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織腰卷・扇の裝束）を隨へて幕より出で、

シテ「童子と呼ぶは如何なる者ぞ

○おりやつた―お出でになつた。

○肝を煎つて―心配して、世話をして。

○合點―承知。

【三】○童子―酒呑童子。即ち大江山鬼神の統領。

鏑鬼は酒呑童子の住家。女狂言童子の侍女、シテ酒呑童子に山伏が宿を求めてゐる由を告げる。シテ酒呑童子、侍女に呼はれて幕から出る、

童子「自分を呼ぶのは誰だ」

○桓武天皇―天皇は京都に奠都遊ばされたについて、王城の鬼門比叡山に延暦寺を御建立遊ばされた。
○御請け申し―御命令に服從して。延暦寺建立の爲に比叡山から立退を命ぜられたのである。
○比叡の山―山城・近江の國境にある山。その山頂に延暦寺が建てられた。〔兼平〕〔白髭〕參照。
○手をささじ―手を出すまい。手向ひをすまい。
○中門の脇の廊―中門は寢殿造の、東對と泉殿又は西對と釣殿の中間にある門、その兩脇の廊下を中門の脇の廊といふ。

女「山伏達の御入り候が。一夜のお宿と仰せられ候

シテ「何と山伏達の一夜のお宿と候や。恨めしや桓武天皇に御請け申し。われ比叡の山を出でしより。出家には手をささじと。固く誓約申せしなり。中門の脇の廊にとめ申し候へ

といひて、橋懸にて床几にかゝる。狂言女舞臺に出で、

女「最前の人の渡り候か

強力「これに候

女「その由申して候へば。中門の廊を御貸しあらうずるとの御事にて候。かう〳〵御通り候へ

強力「心得申して候

女は囃子座の後にくつろぎ、強力狂言はワキの前に出で、

強力「いかに申し候。その由申して候へば。中門の廊を御貸しあらうずるとの御事にて候。かう〳〵御通り候へ

ワキ・ワキヅレ一同、舞臺に入り、脇座より大小前にかけて、弓形に竝び坐す。シテも舞臺に入り、眞中に床几にかゝる。

【三】

シテ「いかに客僧達。いづくよりいづ方へ御通り候へば。この隱れ家へは御出でにて候ぞ

【三】
○客僧―山伏の異稱。

童子「何といふ、山伏達が一夜の宿を貸してくれいといふのか。わしは桓武天皇の勅命に從つて、比叡山を立退いてよりこの方、出家には手出しをしまいと決心してゐたのに、今山伏達が來たとは恨めしいことだ。しかし是非がない。中門の脇の廊下にお泊めせい」

○童子―童子の侍女。輝光等を案内する。

【三】

酒呑童子、輝光等に向つて、

童子「客僧達は、どこからどこへお出でになるため、この隱れ家に立ち寄られたのです」

○筑紫彦山―豊前國田川郡にある英彦山。修驗道行者の道場である。
○前後を忘じ―進退に窮して。
○祝着―感謝。

ワキ「さん候これは筑紫彦山の客僧にて候が。麓の山陰道より道に踏み迷ひ。前後を忘じ佇み候處に。今宵のお宿何より以て祝着申し候。さて御名を酒呑童子と申し候は。何と申したる謂れにて候ぞ

シテ「わが名を酒呑童子といふ事は。明暮酒を好きたるにより眷族どもに酒呑童子と呼ばれ候。さればこれを見かれを聞くにつけても酒ほど面白きものはなく候。客僧たちも聞しめされ候へ

童女立ちて、ワキ・ワキヅレに酌をす。

ワキ「仰せにて候程に一つ下され候べし。(童女の酌を受け)又この山をばいつの頃よりの御居住にて候ぞ

シテ「われ比叡の山を重代の住家とし。年月を送

○重代―代々。

観光「さやう、私達は筑紫彦山の山伏ですが、麓の山陰道から道を踏み迷ひ、方角も分らず困つてゐたのですが、今夜のお宿をお許し下され、忝う存じます。さて、御名前を酒呑童子と申されるのは、どういふわけです」

童子「私の名を酒呑童子と申しますのは、私が朝夕酒を嗜みますので、家來共がこのやうに申すのです。いや何と申しても酒ほど面白いものはありません。客僧達も一つおあがり下さい」

観光「折角の仰せですから、一つ戴きませう。(酒を受けて)さてこの山には何時頃からお住ひなのです」

童子「自分は比叡山を代々の住家として、

○大師坊―傳教大師卽ち僧最澄。桓武天皇の勅願により延暦寺を創建した人。
○えせ人―にせ者。いかがはしい者。
○根本中堂―延暦寺の本堂で、一乘止觀院ともいふ。延暦七年傳教大師の創立したもの。
○七社の靈神―延暦寺の鎭守、日吉神社附屬の社で、すべて二十一社あるうち、これを上中下の七社に區分し、單に七社といへば、上七社卽ち大宮、二宮、聖眞子、八王子、客人、十禪師、三宮をいふ。
○齋ひし―祭つた。
○阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ―根本中堂創建の時傳教大師の詠んだ歌。新古今集に收む。阿耨多羅三藐三菩提は梵語Anuttara-samyak-sambodhiで、無上正徧智、無上正等正覺と譯し、佛の無上の智德を讃めた語。
○かたらはされ―誑かされ
○力なくして―致し方がなくて。
○久方の―天の枕詞。
○天ざかる―鄙の枕詞。
○日のたてぬき―日のたては東西、日のぬきは南北。

りしに。大師坊といふえせ人。嶺には根本中堂を建て。麓に七社の靈神を齋ひし無念さに。一夜に三十餘丈の楠となつて奇瑞を見せし處に。大師坊一首の歌に。『阿耨多羅三藐三菩提の佛たち。わが立つ杣に冥加あらせ給へ とありしかば。佛たちも大師坊にかたらはされ。出でよ出でよと責め給へば。力なくして重代の。比叡のお山を出でしなり

ワキ『さて比叡山を御出でありて。そのままここに御座ありけるか

シテ「いや何くとも定めなき。霞に紛れ雲に乘りワキ『身は久方の天ざかる。鄙の長路や遠田舍

シテ「御身の故郷と承る。ワキ『筑紫をも見て候なりワキ『さては殘らじ天が下。天ざかる日のたてぬきに

永い年月を送つてゐたのだが、傳教大師といふ喰はせ者が出て來て、山の頂には根本中堂を建て、麓には日吉七社を祭り、わが住家を蹂躙したので殘念でならず、一夜の中に三十餘丈の楠となつて、不可思議力を見せてやつたのです。するとまた傳教大師が

「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、わが立つ杣に冥加あらせ給へ

（眞德無上の尊い佛樣方、どうか私の建立致しました この佛寺―御加護を垂れ給へ）

と歌を詠んだので、佛達も傳教大師に誑かされて、自分にこの山を出て行け〳〵と責められたので、致し方なく、代々住み馴れた比叡山を立退いたのです―

輝光「比叡山を立退いてから、すぐこゝへ來られたのですか」

童子「いや何處といふ目當もなく、霞に紛れ雲に乘つて立ち出たのです」

輝光「では、都から遠い片田舍へも行かれたのですか」

童子「あなたの故郷と承る筑紫へも參りました―

輝光「それでは日本國中餘す所なく、縱横に歩かれたのですな」

○大山—伯耆國西伯郡にある高山。
○白山—加賀・飛彈の國境にある高山。
○立山　越中國にある。〔善知鳥〕參照。

○輪廻—衆生が死んだ後もこれまでになした業因によつて六道の中を車輪の如くにめぐり廻ること。こゝでは山々を流轉した後、また京に執着が殘つて歸つてくること。

シテ『飛行の道に行脚して
ワキ『或は彦山
シテ『伯耆の大山
ワキ『白山立山富士の御嶽
シテ「上の空なる月に行き
ワキ『雲の通ひ路歸り來て
シテ「猶も輪廻に心引く
ワキ『都のあたり程近き
シテ「この大江の山に籠り居て
ワキ『忍び忍びの御住居
シテ「隱れすましてありし處に。今客僧達に見あらはれ申し。『通力を失ふばかりなり
ワキ『御心安く思しめせ。人に顯す事あるまじ
シテ「嬉しし嬉しし一筋に。賴み申すぞ一樹の蔭
ワキ『一河の流れを汲みて知る。心はもとより慈

童子「いかにも雲に乘つて飛び歩いたことです」
賴光「彦山へも來られたのですな」
童子「伯耆の大山へも參つた」
賴光「加賀の白山、越中の館山、富士山へも行かれたことでせう」
童子「何處と定めず飛び廻つたのですが、さてやはり都に心が引かれて、都に近いこの大江山に籠つたのです」

賴光「そしてこのやうに忍び住居をして居られるのですか」
童子「仰せの通り、人に隱れすましてゐたところ、今客僧達に見顯されて、通力をも失はんばかりに困つて居るのです」
賴光「いや御安心下さい。人に知らせるやうな事はしません」
童子「それは實に嬉しい。偏へにお賴みします。このやうにお會ひするのも『一樹の蔭一河の流』とやら、前世からの宿緣でございませう」
賴光「我等は何事にも佛說を守り、慈悲を

山伏だから心はもとより行も慈悲を旨とする。

悲の行

シテ『人を助くる御姿

ワキ『われはもとより出家の形

シテ『童子もさすが山育ち

ワキ『さも童形の御身なれば

シテ『あはれみ給へ

ワキ『神だにも

地『一稚兒二山王と立て給ふは神をさくるよしぞかし。御身は客僧われは童形の身なればなどかあはれみ給はざらん。かまへてよそにて物語せさせ給ふな

と左手にてワキにさし、他言せぬやう頼む形をし、次の上歌に立ちて舞ふ。

地上歌「陸奥の。安達が原の塚にこそ。安達が原の塚にこそ。鬼籠れりと聞きしものを。眞なり眞なりここは名を得し大江山。生野の道は猶遠し。

○一稚兒二山王：山法師が山王（日吉神社）よりも美しい稚兒を大切にしたことを諷した謗。七十一番歌合の山法師の歌に「ひえあがるわが獨り寝のとことはにいちちごならぬ人ぞ戀しき」その評に「左、一ちご二山王といふこと、よく思ひをよせたり」

○神をさくる：神を避けてまで稚兒を愛する。

○かまへて：注意して。必ず。

○陸奥の安達が原の：拾遺集平兼盛の歌「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか」を引いた。安達原は岩代國安達太良山の裾野。安達原、参照。

○生野の道は：小式部の歌「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」を引いた。生野は丹波國天田郡にある。

童子「いかにも人をお助けなさる出家の御姿で……」

頼光「さやう、出家に相違ありません」

童子「私も比叡山に育つたもので……」

頼光「いかにも稚兒のやうなお姿です」

童子「だから、どうぞ可愛がつて下さい。神でさへ『一稚兒二山王』といつて、稚兒を神の上にお立てになるのです。あなたは客僧、私は稚兒姿のことですから、きつと可愛がつて下さることでせう。必ず外でお話し下さいますな。――

旨とする者です」

陸奥の安達原の黒塚には鬼が籠つてゐると聞きましたが、この大江山は鬼の住家ではありません。歌にも有名な所で、生野へは道も遠いが、天橋立や與謝の海はすぐ近くです。さう申せば、伯耆大山の

○天の橋立―丹後國與謝郡府中村にある沙洲。日本三景の一。
○與謝の海―天橋立の左右の海灣。
○大山―前出の「だいせん」に同じ。伯耆坊といふ天狗が栖んでゐたといふ。
○親しき友―天狗は屢山伏妻をして現れ出るもので、山伏と緣故がある。自分はその天狗と親しい友であるから、眞の山伏のそなた方とも親しくしようといふ意

【四】
○桔梗刈萱破帽額紫苑―みな秋草の名。
○鬼の醜草―紫苑の異名。紫苑を「しをに」と呼んだので、鬼に思ひ寄せてこの名がついたのである。
○鬼が城―大江山の東南三里ばかりの所にある鬼が城山。

○興がる―興味のある。面白い。
○うち見―一寸見たところ
○つぼい―愛らしい意の俗語。

天の橋立與謝の海。大山の天狗も。われに親しき友ぞと知ろしめされよ（とワキに向ひ下に居る。）

【四】

地『いざいざ酒を飲まうよいざいざ酒を飲まうよ（とワキ立ちてシテに酌をして脇座に歸る）

シテ酌を受けて立ち、次の謠に合せて舞ふ。

地『さてお肴は何々ぞ。頃しも秋の山草桔梗刈萱破帽額。紫苑といふは何やらん。鬼の醜草とは誰がつけし名なるぞ

シテ『げにまこと

地『げにまこと。丹後丹波の境なる。鬼が城も程近し。賴もし賴もしや。飲む酒は數そひぬ。面も色づくか。赤きは酒の科ぞ。鬼となる思しそよ。恐れ給はでわれに馴れなれ給はば。興がる友と思しめせ。われもそなたの御姿。うち見には。うち見には。恐ろしげなれど。馴れてつぼいは山伏

天狗も親しい友で、山伏と滿更緣故のない者でもありません。どうぞお親しく願ひます」

といつて酒宴を開き、

【四】

童子「さあ〳〵、お近づきのしるしにお酒を飲みませう」

と互に盃をとりかはして、

童子「さて、酒のお肴には何がよからう。時節柄秋の山草では、桔梗・刈萱・破帽額・紫苑などがありますが、この紫苑の異名を鬼の醜草といふのは、一體誰がつけた名なのでせう」

と酒盛を餘興し、

童子「さうだ、丹後・丹波の境にある鬼が城も近くのことだから、いざといふ時には賴もしい」（と獨言のやうにいひ）

童子「酒を澤山飲んだので、顏も赤うなつたやうだ。この顏の赤いのは酒の故です。鬼であらうかなどとお疑ひ下さるな。恐れないでお馴染下されば、隨分面白い遊び友達ですよ。實は私もあなた方のお姿を一寸お見掛けした時には、恐ろしい氣持がしましたが、馴れれば可愛い山伏さ

○天も花に醉へり—和漢朗詠集菅原道眞の句「春之暮月、月三朝、天醉二於花一桃李之盛也」を引いた。
○いざよふ—徘徊す。醉歩のよろめく形容と、雲の形容とを兼ねた。
○雲折りしきて—雲を折り重ねて敷物とし。
○目に見えぬ—古今集序に「目に見えぬ鬼神をも」とあるを引いて、鬼の序とした。
○鬼の間—鬼の居間。清涼殿の西廂にある「鬼の間」の名を借りたのである。
○荒海の障子—清涼殿の萩戸の前の廂に立てられた衝立障子の名。枕草子に「荒海のかた、生きたるものどもの、恐ろしげなる手長足長をぞかかれける」とあり、氣味の惡い畫が書いてあるので、鬼の居間に似合はしいものとして、前の「鬼の間」の緣で借りたのである。

【間】
○おりやるか—お入りあるか。お出でなさるか。

（とワキへ行きて坐し）。猶々めぐる盃の（ワキヅレ、シテに酌をす、シテ受けて立ち）。度重なれば有明の。天も花に醉へりや。足もとはよろよろと（と後へよろめきて安坐）。だよふかいざよふか（童女に助けられて立ち）。雲折りしきてそのまま、目に見えぬ鬼の間に入り荒海の障子おし開けて。夜の臥處に、入りにけり夜の臥處に入りにけり

シテ「目に見えぬ」と橋懸へ行き、「荒海の障子を」と扇にて戸を開く形をして中入。
ワキ、シテを見送りて名乘座に立ち、強力に向ひ、
ワキ「いかに誰かある
強力「御前に候
ワキ「汝はたばかつて童子が閨の鍵を預り候へ
強力「畏つて候
ワキ・ワキヅレ中入。

【間】
強力名乘座に立ちて、
強力「最前の女房衆おりやるか
狂言女、脇座の方へ出で、
女「これに居りまする

まですな」
などといつて、なほも盃を重ねてゐるうちに、酒呑童子はすつかり醉つてしまつて、足もともひよろ〳〵と、あちらこちらへひよろつきながら、鬼の居間に入り、恐ろしげな障子を開けて寢床に入つてしまつた。

強力「鍵をば賴光へ御渡しあつたか
女「いかにも上げました
強力「それは一段の事ぢや。扨賴光の仰せには。總じてこのやうな時に。女は足手纏ひぢや程に。某に先へ都へ連れて行けと仰せつけられたが。何とありがたい事ではないか
女「やれ〳〵それは嬉しい事でござる
狂言「それならばいざ參らう。さあ〳〵おりやれ〳〵
女「參りまする〳〵（と二人大廻りして）
強力「さてそなたは仕合せな者ぢや
女「いかにも妾は仕合せでござる
強力「その上そなたはお宿の世話をしたによつて。都へ歸らせられたならば。定めて御褒美が出るであらう
女「妾は御褒美どころではござらぬ。この度都へ戻り夫や子に會ふと思へば。このやうな嬉しい事はござらぬ
強力「それは近頃尤もぢや。さりながらそなたはぢきには内へは行かれまい
女「それは何にてござる
強力「そなたは童子に捕はれた事なれば。今ではどれからや眉目よい若い女房衆が來て。子供の事はわきになして。仲のよさといへば某などは羨ましい事ぢや
女「なう腹立ちや。さては妻を入れましたか
強力「そなたが生きたやら死んだやら知れぬ事なれば。妻を持つまいものでもないわさ
女「妻を持つはようござるが。子供をわきにするのが口惜しうござる

○どれからやーどこからか
○わきになしてーうち棄てて置いて。

○談合―相談。

○ぶつきやうや―物狂や。馬鹿々々しい。

強力「それについてちと談合があるわ

女「何事でござる

強力「某もこの度先驅をしたによつて。都へ歸らせられて褒美を下さるであらう。そなたも御褒美を下されう。兩人は樂々と暮さるる。幸ひ身共も妻がないによつて。某が妻になつておくりやれ

女「なうぶつきやうや〳〵。妾は外に子のある中を。何とそのやうな事がなりませうぞ

強力「そなたばかりそのやうに義理を立てても。内へ行くことはならぬによつて。是非とも身共が妻にならしめ

女「その儀ならばこなたの妻になりませう

強力「それは一段の事ぢや。もはや都も近うなつた。急がしめ

女「參りまする〳〵

強力「千年も萬年も添うておくりやれ

女「心得ました

【五】

○鬼が城―こゝではたゞ鬼のゐる城といふ意。

【五】

といひて幕に入る。

後見、一疊臺に引廻をかけたる大屋臺をのせて大小前に出す。

大小のアシアヒにて、後ワキ源頼光・後ワキヅレ獨武者等ともに、兜巾・篠懸・水衣を脱ぎて白鉢巻をし、太刀を佩き、ワキは松明を振りて、一同橋懸に竝び、

ワキ『既にこの夜も更け方の空なほ暗き鬼が城。鐵の扉を押し開き』(と舞臺際に行き作物に向ひ戸を開く形をして)見れば不思議や今までは。人の形と見えつる

【五】

第二段

頼光一行は、鬼に捕へられてこゝに居る都女から鬼の居間の鍵を受取つて、

頼光童「もはや夜も更けて、空の暗闇の時、鬼の城に攻め入り、鐵の扉を開いて中を見ると、今まで人間の姿に見えてゐた童子は、二丈ばかりもあらうと思はれる大きな鬼神の姿に變つて、その眠つてゐる

○神國氏社―神國の爲といふべきを略して、直に氏社（氏神）とつゞけたのである
○南無―佛に歸依敬禮する語。轉じて神に對してもいふ。
○八幡―八幡大菩薩。武の守護神。殊に源氏の氏神。
○山王權現―近江國比叡山麓の日吉神社。卽ち酒呑童子の恐れた神。

【六】

が（と松明を上げて見込み）

地『その丈二丈ばかりなる。その丈二丈ばかりなる。鬼神の裝ひ眠れるだにも勢ひの（松明を棄てて名乘座に出で）。あたりを拂ふ氣色かな。かねて期したる事なれば。とても命は君の爲（と正面にて辭儀し）。又は神國氏社。南無や八幡山王權現われ等に力を添へ給へと。（橋懸のワキヅレに向き）賴光保昌綱公時貞光季武獨武者。心を一つにして（と立ちて脇座にて作物に向ひ構へ）。まどろみ臥したる鬼の上に。劍を飛ばする光の影。稻妻震動。夥し

「賴光保昌綱公時」に、ワキヅレ一同舞臺に入り、獨武者は目附柱際に、他のワキヅレは脇座、ワキの次に立ち並びて作物に向ひ身を構ふ。

【六】

この間に後見作物の引廻を下す。後ジテ鬼神、面顰・赤頭・金緞鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて、打杖を持ち、熨斗目をかつぎてうつむき伏したるままにて、

後ジテ『情なしとよ客僧達。僞りあらじといひつるに。鬼神に横道。なきものを

様でさへ恐ろしい、あたりを拂ふ勢ひである。しかしわれ等はもとより覺悟して來たことであるから、命は君の爲、國の爲、なに惜しからう」

賴光等「八幡大菩薩・山王權現、われらに力を添へて鬼神を退治せしめ給へ」

と神々に祈願を籠め、賴光・保昌・綱・公時・貞光・季武・獨武者等一同心を一つにして、寢てゐた鬼神に劍を以て斬りつけた。その勢ひの凄しいこと、雷電の震動するがやうである。

【六】

後ジテ鬼神の本性を顯した酒呑童子に眼を見開いて、

童子「これは情ない。うそ僞りはないといつたのに、鬼神は道に外れたことをしないものだのに」

○鬼神に横道なし―古諺。徒然草に「鬼神に横しまなし咎むべからず」。横道は道に外れたこと。
○なかなかの事―然りといふ意の時代語。
○空言―僞り言。

○土も木もわが大君の―太平記卷十六、紀朝雄の歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき」を引いた。この歌のこと「田村」參照。

と熨斗目を上げてワキを見込み、またうつむく。獨武者太刀に手をかけ、

獨武者「なに鬼神に横道なしとや

シテ「なかなかの事

獨武者「あら空言やなどさらば。王地に住んで人を取り。世の妨げとはなりけるぞ。われをば音にも聞きつらん。保昌が館に獨武者。鬼神なりとも遁すまじ。況してやこれは勅なれば。『土も木も。わが大君の國なれば。いづくか鬼の。宿りなるらん

地「餘すな洩らすな攻めよや攻めよ。人々とて

（ワキ・獨武者向合ひ）。切先を揃へて切つてかかる

と一同太刀を抜きシテに向ひて構ふ。

【七】

地「山河草木震動して。山河草木震動して（シテ立ち）。光滿ちくる鬼の眼（被衣を脱ぎ）。ただ日月の。天つ星。照り輝きて。さながらに。面を向くべきやう

獨武者「なに鬼神は無道をしないといふのか」

童子「その通り」

獨武者「うそをいふな。それならば何故この王地に住みながら人を捕へ世の中の妨げをしたのだ。わしの事は嘸にも聞いたであらう。保昌の家來で獨武者と申す者だ。いかに鬼神でも取遁がすものではないぞ。殊に今度は勅命を奉じて來たのであるから、土も木もすべて大君の御領であるわが國に於て、どうして遁れる所があるものか。（一行に向ひ）さあ各々方、この鬼神を遁さず攻め寄られよ」

と、一同刀の切先を揃へて、鬼神に斬つてかゝつた。

【七】

鬼神が怒つて頼光にうち向つてくると山河草木盡く震動して、鋭く光り渡る鬼の眼は、日月の光か空の星のやうに照り輝いて、面を向けることの出來ない勢ひであつた。

ぞなき（と臺より下り）

〔舞働〕

シテ、ワキ・ワキヅレと切組み、また臺に上り打杖を振り上げてワキに向く。

ワキ・ワキヅレ一同太刀を構へてシテに向き、

ワキ『頼光保昌もとよりも

地『頼光保昌もとよりも。鬼神なりともさすが頼光が手なみにいかで。洩らすべきと。走りかかつてはつたと打つ手にむんずと組んで（シテワキ切組）。えいやえいやと組むとぞ見えしが頼光下に（ワキ膝をつき）。組み伏せられて（シテ打杖にてワキを見込み）。鬼一口に。食はんとするを。頼光下より刀を抜いて。二刀三刀刺し通し刺し通し（ワキシテの腰を太刀にて突き）刀を力にえいやとかへし（シテ打杖を振り上ぐるも力弱りて安坐）。さも勢へる。鬼神を押しつけ怒れる首を。打ち落し（ワキシテを切り）。大江の山を。又

〔舞働〕

頼光一行、童子と切合ひ組合ふ。

頼光・保昌等は、

頼光等「もとより鬼神であらうと何恐れることがあるものか、われらの手並で何を遁すものか」

と走りかゝつて、はつたと手を取り、むずと組み合ひ、えいや〳〵と押しあつた。頼光は下に組み伏せられて、あはや鬼の一口に喰ひ殺されようとしたが、頼光は下から刀を抜いて、童子を二刀三刀刺し通し、刀を力にして刎ね返し、勢ひ込んでゐた鬼の首を打ち落しめてたく鬼神を退治して、大江山から都へ歸つた。

○鬼一口―伊勢物語に、雷雨の烈しい夜、業平の連れ出した女を奪ひ返された事を記して「鬼は女をば一口に食ひてけり」とあるを借りた。

踏み分けて。都へとてこそ。歸りけれ

「打ち落し」に、シテ死したる態にて切戸より入り、ワキは仕手柱際に刀をかたげて留拍子を踏む。

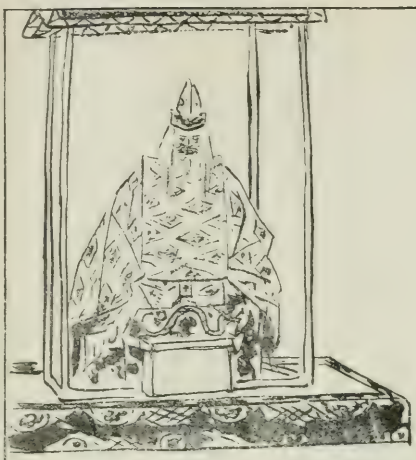
〔考　異〕

諸　流　（觀寶剛喜）

些細な異同は多いが、著しいものはない。

古謠本　（元祿八年本）

【一】ワキ「抑もこれは……仰せつけらる(元ハ)……ワキ「思ふ子細(元存し)の候……ワキツレ「兵具に對する笈を負ひ(元ワキ「さも行體の姿なれは)……ワキ「急ぎ候程に……着きて候(元ナシ。以下狂言ニ對スルワキ詞ナシ)　【三】シテ「わが名を酒呑……客僧達も聞召され(元ナシ)候へ……ワキ「忍び忍びの御住居。シテ「隱れすましてありし處に今(元ナシ)客僧達に見あらはれ……なりけるぞ(元つらん)……況してや(元ナシ)……　【六】獨武者「あら空言や……妨げとはらぬき)大江の山を……　【七】地「頼光保昌……怒れる首を打ち(元かき)落し(元て。太刀につらぬきかなたに



大社（おほやしろ）

觀（剛喜）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　當今臣下、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　老社人（杵築大神）**前ツレ**　若き社人、**狂言**　神主、**狂言**　參詣人、**狂言**　巫子、**後ツレ**　天女、**後シテ**　杵築大神、**後ツレ**　龍神

【所】 出雲國　杵築大社

【時】 十月

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに觀世彌次郎の作とす。

【梗概】 毎年十月には、日本國中の神々が出雲國にお集まりになるので、出雲ではこの月を神有月といひ、大社で色々御神事があるといふことを聞いて、朝臣が出雲杵築大社に參詣する。折柄老社人が若い社人と共に神前に來たので、これに大社の謂れを尋ねる。社人は末社の神々について物語り、「これは神の告てあるぞ」といつて社壇に入つてしまふ。やがて、時雨の空は晴れて月も輝き渡り、十羅刹女が現れ出て舞を舞ひ、多

くの神々も出現せられると、杵築大神も神殿から現れ出て、樂を舞ひ、龍神もまた海底から現れ出て、黄金の箱に小龍を入れて神前に捧げる。

【出典】確かな典據は見當らないが、當時廣く流布してゐた俗說と見え、これと同樣の材料に據つた謠曲が幾つかある。まづ神有月のことは、〔神有月〕(能本作者註文に世阿彌作といふ)に、手名槌足名槌の神が、十月には諸神が出雲に集まり給ふので、他國では神無月といふが、この國では神有月といふと語る態に脚色し、十羅刹女のことは、〔御崎〕(作者不明)に、天竺月氏國王が船八萬艘億兆の兵を載せて日本へ攻め寄せて來たので、素盞嗚尊が日本の神々を出雲に勸請して防戰せられた時、曾て尊が龍王の姫と契つて生まれられた姫君が、十羅刹女と現じて、父尊に力を合せて敵を退治せられたといひ、毎年十月龍神が出雲大社に小龍を捧げることは、〔出雲龍神〕(作者不明)に鹽冶貞俊といふものがこの奇特を見ると脚色してゐる。

【概評】本曲の內容は、神事物として、神社の緣起を語り、天下の泰平を祝つたもので、別段變つた所もないが、舞臺面は普通の脇能に比べて甚だ賑やかなものである。前段は普通の脚色であるが、クセに多くの神々を擧げてゐることが一寸變つて居り、間狂言には神主參詣人・巫子が登場して、語問・來社問とは違つた劇的な場面を作つて居り、殊に後段では、後ヅレ十羅刹女の天女舞、後ジテ大神の樂、後ヅレ龍神の舞働といふ、三種の演舞を並べて、誠に賑々しい曲柄を作つてゐるのである。

【一】

後見、一疊臺に小宮を載せ引廻をかけて大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ當今の臣下、ワキヅレ從者二人、三人とも大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、舞臺に入りて向合ひ、

○誓ひ　誓願。衆生利益の誓ひをいふ。

【一】

次第『誓ひあまたの神祭。誓ひあまたの神祭。

出雲の國を尋ねん

地取三返がへしの後、ワキは正面に向きて、

【一】

前段

舞臺は初め都で、ワキ當今の臣下、ワキヅレ從者を隨へて登場。

朝臣「靈驗のあらたかな神樣のお祭を拜みに、出雲の國へ行かう」

と次第を謠つて旅の目的を述べ、

○神有月―陰暦十月には八百萬の神々が出雲の大社にお集まりになるので、この月の事を神無月といふが、出雲國では神々がお集まりになるので神有月といふ。詞林采葉抄に「天下の神無月をば出雲には神在月とも申也」

○影向―神靈の來臨し給ふこと。

○朝立つや―「立つ」を「裁つ」に通はせて「旅の衣」の語を呼び起し、衣の縁語「張る」を「遙々」にいひかけた。

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても出雲の國に於て。今月は神有月とて諸神影向なり。御神事樣々の由承り及び候程に。この度參詣仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ道行「朝立つや。旅の衣の遙々と。旅の衣の遙遙と。行方しぐるる雲霧の。山又山を越え過ぎて。神有月も名にし負ふ。出雲の國に、着きにけり出雲の國に着きにけり

ワキ「神有月も名にし負ふ」と正面に向きて二三足進み、またもとに歸りて、出雲に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや出雲の國大社に着きて候。この所にて案内を伺はばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

【二】

といひて、脇座に行き下に居る。

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・茶水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて杉箒を持ち、ツレ

朝臣「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さて出雲の國では今月は神有月といつて、神々がこの地に御出現になり、色々の御神事があるといふことを聞き及んだので、これから參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

朝臣「朝都を立つて、遠い旅に出掛け、空も時雨れて、雲や霧で一面掩ひ包まれてゐる山又山を越えて、神有月として名高い出雲の國に着いた」

と道行を謠つてゐるうちに、舞臺は出雲大社となる。

【二】

シテ杵雲大神の神案を社人の姿を裝つて、ツレ若い社人を伴つて登場。

○八雲立つ――素盞嗚尊の神詠「八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」を引いて「妻こめし宮路」と續けた。宮路は神社に通ふ路。

○尾上――山上。

○濁世――五濁惡世の略。佛教で、現代は末世澆季で、諸惡の行はれる濁亂の世界であるといふ。

○盡きせぬ――年月の月と掛を重ねていふ。

○神の宿らぬ影ならん――「ならん」は原作「あらん」とあつたのを誤ひ誤つたのであらう。

宮人、直面・翁烏帽子。襟赤・無地熨斗目・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

ツレ一聲『八雲立つ。出雲八重垣妻こめし。宮路に運ぶ。歩みかな

と謠ひて正面の方に向き、

ツレ二句『尾上の松の梢まで。ツレ(向合ひ)『神風誘ふ。聲ならん

二人とも舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、

シテサシ『げにや濁世の人間と。生まれ來ぬれど誓ひある。ツレ(向合ひ)『神に事ふる身にしあれば。漏れぬ惠みにかかり來て心のままの春秋を。送り迎へて。年月の。盡きせぬ代々を。賴むなり

ツレ下歌『いざや歩みを運ばん いざや歩みを運ばん。上歌『いづくにか。神の宿らぬ影ならん。神の宿らぬ影ならん。嶺も尾上も松杉も。山河海村野田殘る方なく神のます。御影を受けて隔てな

社人「素盞嗚尊か。『八雲立つ出雲八重垣妻ごめに、八重垣作るその八重垣を』とお詠み遊ばされた、この出雲の大社へ始終參詣することだ」

といひながら神前に近づき、

社人「あたり一面神々しく、山上の松の梢を吹く風の音までが、神風を誘ふやうに聞える。――

ほんとに、自分達はこの穢れた世の中の人間と生まれて來たのではあるが、御靈驗のあらたかな神樣にお仕へ申しあげてゐるお蔭で、神樣の深いお惠みに預り、思ふまゝに樂しい年月を送つて、千代八千代變りのない大御代の餘澤を仰いでゐることだ」

社人「さあ、早くお參りをしよう(三歩を進めて)ほんとに、神の御光の到らぬ隈はないのだ。嶺も山上も、松も杉も、山も河も海も、村も野も田も、何處にでも殘る所なく、神の御光を受けてゐるのだ。その御靈驗を仰いで、まあこのやうに多勢社

○宮人―神社に仕へる人。

【三】○大社―出雲國簸川郡杵築町にある出雲大社（又杵築大社といふ）。祭神は大國主神で素盞嗚尊を合祀す。神代に創建せられたもので現に官幣大社である。
○案内―様子。
○御事―御方。

き。宮人多き、往來かな宮人多き往來かな

「宮人多き」と謠ひながら、シテとツレと入替り、シテは眞中に、ツレは目附柱近くに立つ。ワキ立ちて正面に向き、

【三】

ワキ「われ出雲の國大社に參り。案内をうかがふ處に。宮人數多來れり。（シテに向ひ）いかに方々に申すべき事の候

シテ「これはこのあたりにては見馴れ申さぬ御事なり。いづくよりの御參詣にて候ぞ

ワキ「さん候これは朝に隙なき身なれども。當國に於て今月は神有月とて。諸神殘らず影向の地と承り及びて候へば。この度君に御暇を申し。遙々參詣申したり

ツレ『げにありがたや神と君との

ワキ『隔てなき世のしるしとて

シテ『歩みを運ぶこの神の

ワキ『惠み普き

○朝に隙なき―朝廷に仕へて閑暇のない身。

人が往き來することだ」

といつて社前につく。

【三】

朝臣は社人を見て、

朝臣「出雲の大社へ參詣して、様子を見てゐると、多勢社人がやつて來た（と獨言をいつて老社人に向ひ）。もうしあなた方、一寸お尋ねします」

社人「これはこのあたりではお見受けしないお方だが、どちらから御參詣でございます」

朝臣「いや私は朝廷にお仕へしてゐる忙しいものだが、この國では、今月は神有月といつて、神々が殘らずここへ御出現遊ばすと伺つたので、今度帝から御暇を賜つて、遙々參詣したわけだ」

社人「それはく、ほんとにありがたいことです。このやうに參詣の出來ますのも、神と君との隔てのない、聖代の餘德であり、またこの神様の深いお惠みによるのです。――

○思ひ出雲の―「思ひ出づ」を出雲といひかけた。
○ふとしき立てて―柱を太く作り立てて。建築の厳しく堅固なる意。
○敷島の―大和の枕詞。
○紅も深くなり行く　紅は紅葉をいふ。後拾遺集永胤法師の歌「神無月深くなり行く梢より時雨れて渡る深山邊の里」を引いた。

【四】
○神祕―ありがたい謂れ。

○三十八社―大社附属の摂社・末社をいふのであらう。典據は分らない。
○勸請―遠方から神靈を招き移して祀ること。
○五人の王子　大國主神の御子。古事記には大國主神の御子として、木俣神（御母須世理毘賣命）阿遲鉏高日子根神（御母多紀理毘賣命）高比賣命（亦名下光比賣命、

シテ『月影も
地上疊　神の代を。思ひ出雲の宮柱。思ひ出雲の宮柱。ふとしき立ちて敷島の。大和島根まで。動かぬ國ぞ久しき。げにや紅も。深くなり行く梢より。しぐれて渡る深山邊の。里も冬立つ。氣色かな里も冬立つ氣色かな

ツレ地上歌の初めに笛座前に行き下に居り、ワキも下に居る。
シテは仕科をして常座に立つ。

【四】
ワキ「不知案内の事にて候へば。當社の神祕委しく御物語り候へ

シテ員中に行き下に居て杉箒を置き、（後見箒を引く）
地クリ『抑も出雲の國大社は。三十八社を。勸請の地なり
シテサシ『然るに五人の王子おはします
地『第一はあじかの大明神と現れ給ふ。山王權現これなり

このお社と申せば、神代の昔の事が思ひ出されるのですが、あの遠い神代にここにお社をお建てになつてよりこの方、久しい今日に至るまで、わが日本の國は動くことなく太平が續いてゐるのでございます。
久しいと申せば、秋も深くなり、紅葉の色は愈々濃くなつて、時雨のたちこめた山里は、はや冬らしい景色になつて參りました」

【四】
朝臣「私は土地不案内の者だから、どうかこのお社の緣起を委しく話して下さい」

社人は話をする爲にくつろいで、
社人「一體、この出雲の大社には三十八社の末社をお選し申しあげてあるのです。その中でも、大社の神大國主神の王子が五人お出でになります。第一は阿受祇の大明神で、これは近江の山王權現をお選し申しあげたもの。――

御母同上）、事代主神（御母神屋楯比賣命）、鳥鳴海神（御母鳥耳神一連御名方神一御母舊事記に沼河姫と記す）を擧げてゐるが、本曲はこれと所傳を異にしてゐる。その出所は分らない。

○あじかの大明神―出雲郡遙堪村の阿須岐神社をいふ。祭神は高日子根神。阿須岐は古く阿受枳、阿式ともいつたのをまた「あじか」と訛つたのであらう。

○山王權現―近江國比叡山麓の日吉神社をいふ。この祭神と同一と見るのは附會である。

○みなとの大明神―出雲國美談神社の訛であらうか、祭神は大國主神の御子和加布都努志神。或は出雲の對岸伯耆國美保關にある美保神社（祭神事代主神）をその地が湊であるから湊の大明神といつたのであらうか。

○宗像の明神―筑前國宗像郡田島村の宗像神社。但し祭神は天照大神の三女神で大國主神の御子ではない。

○伊奈佐の速玉の神―伊奈佐神社は竹築の海濱にあり建御雷神・天鳥船命を祀り、速玉神社は意宇郡にあり速玉男神を祀る、いづれも大

シテ『第二にはみなとの大明神

地『九州宗像の明神と現れ給ふ。第三は伊奈佐の。速玉の神。常陸鹿島の。明神とかや

（居クセ）

地クセ『第四には。鳥屋の大明神。信濃の諏訪の明神と。卽ち現じおはします。第五には。出雲路の大明神。伊豫の三島の明神と。現れ給ふ御誓ひ。げに曇りなき長月や。月の晦日にとりわきて

シテ『住吉一所は影向なる

地『殘りの神々は。十月一日の寅の時に悉く影向なり。樣々色々の神遊。今も絕えせぬこの宮居。語るもなかなかおろかなる、誓ひなるべし

【五】

地ロンギ『げにありがたき物語。げにありがたき物語。末世ながらも隔てなき。神の威光ぞあらたなる

第二はみなとの大明神で、これは九州の宗像明神と御一體です。第三は伊奈佐の速玉の神で、これは常陸の鹿島明神のことを申し上げるのださうです。――

それから第四は鳥屋の大明神で、信濃の諏訪明神として御出現になつた神樣、第五は出雲路の大明神で、これは伊豫の三島明神として御出現になつた神樣で、いづれも靈驗のあらたかなことでございます。

さて、多くの神々のうち、住吉明神お一方だけは九月晦日に他の神々に先立つて密かにこの地へお出でになり、他の神々は十月一日の朝早く皆ここへ御出現になり、色々と神遊をなされるので、それが昔から今まで絕えることのない、誠に申しやうもないあらたかなことでございます」

【五】

臣下　實にありがたいお話を伺ひました。世は末世とはいひながら、昔に變らぬ神樣の御威光はあらたかなことです。

國主神の御子ではない。但し本曲では伊奈佐神社の祭神を達玉男神とし、達玉男神を大國主神の御子と見たものらしい。
○常陸鹿島の明神－常陸國鹿島郡にあり建御雷神を祀る。この神は大國主神をして日本國土を天孫にお讓りさせた神で、大國主神の御子ではない。
○鳥屋の大明神－出雲郡北鳥屋村にあり、建御名方神を祭る。
○諏訪の明神－信濃國諏訪郡諏訪村にあり、建御名方神を祀る。
○出雲路の大明神－出雲國神門郡の出雲神社か。但し祭神は八束水臣都奴命で大國主神の御子ではない。
○伊豫の三島の明神－伊豫國越智郡三島宮浦の大山祇神社。祭神は大山積神で大國主神の御子ではない。元祿本には伊豆の三島といふ
○長月－九月。
○晦日－「密か」と兼ねていふ。八百萬の神々は十月一日に出雲へ參會せられるが、佳吉明神は諸神に先立つて、九月晦日密かに來臨せられるとの意。
○佳吉－攝津國東成郡住吉

シテ『なかなかなれや年々に、今日の今宵の神遊地』その役々も

シテ『數々に

地』あらぶる神達の舞歌の袖。引くや御注連の名は誰と（シテ立ち）。白木綿かかる玉垣に（と作物を見）。立ち寄ると見えつるが（常座へ行き）。神の告ぞといひ捨てて。社壇に入りにけり社壇の、内に入りにけり

シテ作物の中に入り、ツレ來序の囃子にて中入。

【間】亂序の囃子にて、神主、烏帽子・着附厚板・縷水衣・括袴・腰帶・脚半・扇の裝束にて名乘座に出で、神主「かやうに候者は。出雲の國大社の神主にて候。誠に申すに及ばぬ御事なれども。わが國は小國なれども神國にて。王位めでたき御國にて候。是と申すも國々に靈神あまた御座候中にも。この大社は天下に隱れもなき御神なれば。參り下向の人々は夥しき事にて候。又今日も社參致し神前を清め申さばやと存ずる

狂言參詣人、着附段熨斗目・掛素袍・括袴・脚半・腰帶・小刀・扇の裝束にて出で、參詣人「是はこの邊に住居致す者にて候。某宿願の子細ありて。大社へ月參り仕り候。當月は未だ仕らず候間。參詣申さばやと存ずる。誠に當月を餘の國にては神無月と申し。當國にては神有月と申す。是につき子細御座ある由申し候間。今日は神主殿へ尋ねばやと存ずる。何かと申す内に神前に

宮人「ほんとにその通りです。毎年今日の夜には、こゝで神遊があるのです。そして、その舞樂の役々は多勢の神々がそれぞれ遊ばすので、かうして神々が歌を謠ひ舞をお舞ひになる面白さ。……いやかくいふ自分が誰であるか、その名は……」

といひかけて、宮人は玉垣に立ち寄るやうに見えたが、

宮人「實ば神の告であるぞ」

といひすてゝ、お社の内へ入つてしまつた。

シテ老社人は舞臺の作物社壇に入り、ツレ宮人は退場。

の住吉神社。底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命及び神功皇后を祀る。
○寅の時—今の午前四時。
【五】
○あらぶる—神の枕詞。
○引くや御注連—袖の縁で「引く」といひ、御注連の繩を「名は」といひかけた。
○白木綿—誰と知らずといひかけた。白木綿は楮の皮で織つた白い布で、玉垣や榊などに懸けるもの。

【間】

て候。されば神拜申さう(作物に向ひ)。あらありがたや候。(神主に向ひ)いかに神主殿の渡り候か

神主「誰にて候ぞ

參詣人「某にて候

神主「御參詣にて候。誠に方々ほどの信者はあるまじく候。左樣のしるしにて。御子息達も繁昌にてめでたく候

參詣人「忝う候。扨神主殿へ尋ねたき事の候。餘の國にては當月を神無月と申し。當國にては神有月と申す。是につき子細さまざま御座ある由申し候。御物語り候へ

神主「御不審尤もにて候。左樣の事も大社についての子細にて候。その故は。日本六十六箇國の神々。當月はこの大社へ參り給ふ。その故は。天下安全の御守りなさるべしと懇に仰せ合され。又男女夫婦の緣をも御定めなさる御事にて候。さるによつて餘の國は神無月。當國は神々の集まり給ふにより神有月と申し候。扨又日本國の神々社々へ御歸り候は。十月末つ方にて。向ふに見えたる大山は。神あげの山と申して。あの山へ早鞆の明神御上りありて。神々に御歸りあれと榊の枝にて他方へ歸し給ふ。是につけてもめでたき神祕樣々御座候へども。神の事淺々しくは申さぬ事にて候。先は神有月の子細かくの如くにて候

參詣人「委しく御物語祝着申して候。さればいつもの如く御神樂を參らせて給はり候へ

神主「心得て候。まづ御通り候へ

參詣人「心得申して候

參詣人、地謠座の前に着く。神主幕に向ひ、

神主「いかに巫殿渡り候か

巫子、鬘・鬘帶・着附縫箔・側次・白水衣・腰帶・黑骨中啓の裝束にて、幕より出でながら、

巫子「何事にて候ぞ

神主「御神樂を參らせよとの御事にて候間。呼び出だして候

巫子「妾もその事と存じ身拵して出でて候

神主「されば某も身拵して給はり候へ

巫子「心得て候

狂言座にて身拵をして、

神主「何と身拵はよいか

巫子「一段にて候

神主「急いで御神樂を參らせられ候へ

巫子「心得申して候

神主は名乘座にて拍子をうち、巫子は鈴を持ちて作物の前に出で、

巫子「遙かなる沖にも石のあるものを。蛭子の御前の腰掛の石。〔神樂〕御神樂こそめでたうおりやらしませ。命長うちうよふのぞいて守らせ給へ

と謠ひ舞ひて、狂言一同樂屋に入る。

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ天女、面連面・臺・臺帶・黑垂・天冠・襟赤・着附摺箔・長絹・大口・腰帶・扇の裝束にて、一の松に出で、

地『しぐるる空も雲晴れて。月も輝く玉の御殿に。光を添ふる。氣色かな

後ヅレこの間に舞臺に進み常座に立ちて、

後ヅレ『われはこれ。出雲の御崎に跡を垂れ。佛法

○ちうよふ―分らない。

【六】

○出雲の御崎―日御崎をいふ。杵築西浦に突出する岬で、杵築大社はこの西南に當る。

○跡を垂れ―佛が衆生濟度の爲に假の姿を以てこの國土に現れること。

【六】

後段

朝臣「おゝ、今まで時雨れてゐた空も雲が晴れ渡つて、月も煌々と輝き、玉の如き尊い御神殿に光を添へるばかりの趣だ」

三人感歎してゐるミ、後ヅレ天女登場。

天女「自分は出雲の御崎に垂跡して、佛法

○本地—假の姿で現れる佛のその本體。
○十羅刹女—十種の羅刹女のことで、藍婆、毘藍婆、曲齒、華齒、黑齒、多髮、無厭足、持瓔珞、皐諦、奪一切衆生精氣をいふ。羅刹 Rakṣas は食人鬼と譯し、惡鬼の通名。

王法を守りの神。本地十羅刹女の。化現なり

地『容顏美麗の女體の神。容顏美麗の女體の神。光も輝く玉の簪かざしも匂ふ。袂を返す。夜遊の舞樂は。面白や

〔天女舞〕

地『げに類ひなき舞の袖。げに類ひなき舞の袖。靡くや雲の。絕間より。諸神は殘らず現れ給ひ。舞樂を奏し神前に飛行し（作物へ行きて坐し）、はや疾く姿を現し給へ と夕の月も。雲晴れて。光も朱の（立ち）。玉垣輝き。神體現れ。おはします

【七】

○夕の月も—現し給へといふを夕にいひかけた。
○光も朱の—光も明きを朱にいひかけた。

【七】

○御相好—御姿。

地ロンギ『げにや尊き御相好。げにや尊き御相好。まのあたりなる神德を。受くるも君の惠みかな

後ジテ『とても夜遊の神祭。委しくいざや現し、か

王法を守護する神で、本體十羅刹女の化現したものである」

と、容貌の美しい女神が出現せられ、頭には光り輝く玉の簪をさし頭飾の花を匂はせ、袂を飜して、夜の舞樂を奏せられる、その面白いこと。

〔天女舞〕

天女、舞を舞ふ。

實に何物にも比べやうのない舞の美しさ。これに引續いて、たなびく雲の絕間から神々が殘らず出現遊ばされ、舞樂を奏し、大社の神前を飛行し、大神に『早く御姿を御現しなされませ』といはれると、夕の雲は晴れて、月の光に照り映えた朱色の玉垣のあたりが輝き渡つて、大社の御神體が御出現になる。

【七】

後ジテ杵築大神、神殿から現れ出る。
ワキ朝臣大神の御姿を拜して、

朝臣「おゝ實に尊いお姿だ。このやうなありがたい御神德を眼の前に拜することの出來るのも、全くわが大君の御惠みによることだ」

大神「さあ、それでは一層のこと、夜遊の

の客人を慰めん

地『さて神樂の役々は

シテ『住吉鹿島

地『諏訪熱田。その外三千世界の諸神はここに影向なり（と作物を出でて眞中に行き）。とりどりの小忌の袖。返す返すも、面白や

〔樂〕

シテ引續き次の謠に合せて仕科、

地『舞樂も今は時過ぎて。舞樂も今は時過ぎて。更け行く空も。しぐるる雲の。沖より疾風。吹き立つ波は。海龍王の。出現かや

【八】

と橋懸に向き扇にて招き、作物の床几にかゝる。

早笛にて、後ヅレ龍神、面黑髭・赤頭（龍戴）・金緞鉢卷・標紺・着附段厚板・法被・赤地半切・腰帶・打杖の裝束にて、金の箱に龍を入れて持ち橋懸一の松に出で、

龍神『抑もこれは。海龍王とは。わが事なり。「さても毎年龍宮より。黃金の箱に小龍を入れ。『神前神祭を委しく現して、この客人を慰めよう」

と仰せられ、神樂の役々には、住吉、鹿島、諏訪、熱田、その外全世界の神神がこゝに御出現になり、それ〴〵舞衣をお召しになつて、神舞をお舞ひになる面白さ。

〔樂〕

シテ大神、界に乘じ、舞を舞ふ。

かうして、舞樂を奏して居られるうちに、はや時間も過ぎて夜も更けて行くと、空の時雨れた雲の、かなた沖合から颶風が吹き起り、波が立ち騷ぐのは海龍王の出現せられるのであらう。

【八】

後ヅレ龍神の場。

龍神「自分は海龍王である。さて自分は毎

○渴仰―渴いたものが水を望むやうに、深く信仰すること。

【九】○福壽圓滿―財福と壽命とが缺ける所なく具足してゐること。○木綿四手の―君を守るべしといふを木綿にいひかけた。木綿四手は木綿で作り玉串注繩などに垂れるもの四手の數々を數々の神にといひかけた。

に捧げ、申すたり

地『龍神卽ち現れて（舞臺に入り）。龍神卽ち現れて。波を拂ひ。潮を退け汀にあがり御箱をすゑ置き（箱を作物の前に置き）。神前を拜し。渴仰せり（目附柱際にて坐し）。その時龍神御箱の蓋を。その時龍神御箱の蓋を。忽ち開き。小龍を取り出だし、卽ち神前に捧げ申し。海陸共に。治まる御代のげにありがたき。惠みかな

「その時龍神御箱の」と、龍神箱の蓋を開きて龍を上に載せ、立ちて、

〔舞働〕

龍神、舞ひ終りて、仕手柱先、シテの右側に坐し、シテは床几にかゝりたるまま、

【九】

シテ『四海安全に國治まり

地『四海安全に國治まつて。五穀成就。福壽圓滿にいよいよ君を守るべしと。木綿四手の數々神

年龍宮から黃金の箱に小龍を入れて、この神前にお供へ申すのである」と、龍神が現れ、波を拂ひ潮を退けて、岸邊に上り、黃金の箱を供へて神前を拜し、深く禮拜した。

そして龍神は直にその御箱を開いて、小龍を取り出し、神前にお供へ申した。かうして、海陸ともに、穩かにうち治まる大御代は實にありがたいことである。

〔舞働〕

龍神勇ましい舞を舞ふ。

【九】

大神「天下安穩に國土治まり、五穀は豐かに、財物壽命ともに具足して、愈々大君をお守りしよう」

といはれる。やがて多くの神々がそれぞれ大神に拜禮して、天上へお上りに

○神あげの山…神々をもとの天上へ送り歸し奉る山。

神とりどりに（天女立ちて靜かに幕に入り）、御前を拂ひ。神あげのお山に上らせ給へば、龍神平地に波浪を起し（龍神立ちて勢よく幕に入り）。逆卷く潮に引かれ行けば。諸神は虛空に遍滿しつつ。げにあらたなる。神は社內。げにあらたなる神は社內。龍神は海中に入りにけり

「諸神は虛空に遍滿し」と、シテ作物を出で、小廻りして仕手柱際にて開き、留拍子を踏む。

たるべきお山へお發りになると、龍神はまた平地に波を起し、逆卷く潮にひかれて神前を退いて行く。かうして神神が空に滿ち〳〵てお歸りになると、あらたかな大神は御神殿の內へお入りになり、龍神は海の中へ入つてしまつた。

シテ大神は神殿に入る心、ツレ龍神は海へ入る心で退場。

〔考　異〕

諸　流（觀剛喜）

著しい異同はない。

古謠本（元祿八年本）

【三】シテ「これはこのあたりには（元ナシ）見馴れ申さぬ……ワキ「さん候われ朝に（元役）隙なき……影向の地と承り及び（元ナシ）て候……

【四】ワキ「不知峯內の……當社の神祕委しく（元其殘らず）……地クセ「第四には……伊豫（元豆）の三島の……【五】地ロンギ「げに……神の威光（元德）そ……【九】地「四海安全に……平地に波浪（元らん）を起し……

項羽

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 五番目　複式夢幻能

【人物】 ワキ　草刈男、ワキツレ　草刈男（二人）、前シテ　老舟夫（項羽の靈）、狂言　烏江の渡守、後シテ　項羽、後ツレ　虞氏

【所】 支那　烏江の岸邊

【時】 秋（九月）

【異稱】〔美人草〕ともいつた。

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作とす。粟田口勸進猿樂記に、永正二年四月十三日〔美人草〕を演じたことが見えてゐる。

【梗概】 烏江の草刈男が家に歸る爲に渡船に乘ると、その舟夫は船賃の代りに、美人草を所望したので、草刈がその謂れを尋ねると、舟夫は、これは項羽の后虞氏を埋めた塚の上に生へた草であると答へ、項羽最期の有樣を語り、自分がその幽靈であると云つて消える。草刈男は俗人ながらも、讀經してその跡を弔つてゐると、項羽と虞氏の靈が現れ出て、最期の時の樣を示す。

【出典】 項羽の事は、漢書、史記など支那の史籍に見えて居り、史記の項羽本紀には、

項王軍壁二垓下一、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍レ之數重、夜聞二漢軍四面皆楚歌一、項羽乃大驚曰、漢既得レ楚乎、是何楚人之多也、項王則

夜起飲二帳中一、有二美人一名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎レ之、於是項王乃悲歌慷慨、自爲レ詩曰、力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈二若何一、歌數闋、美人和レ之、項羽泣數行下、左右皆泣、……項王欲二東渡一烏江一、烏江亭長艤レ船待、……謂二亭長一曰、吾知二公長者一、吾騎二此馬一五歲、所レ當無レ敵、嘗一日行二千里一、不レ忍レ殺レ之、以賜レ之、乃令二騎皆下レ馬步行一持二短兵一接戰、獨籍所レ殺漢軍數百人、項王身亦被二十餘創一、顧見二漢騎司馬呂馬童一曰、若非二吾故人一乎、馬童面レ之、指二王翳一曰、此項王也、項王乃曰、吾聞漢購二我頭千金邑萬戶一、吾爲レ若德、乃自刎而死。

しかし、本曲はこの記事を更に傳說化した太平記卷二十八「漢楚合戰の事」に據つたものであらう。太平記の文は語釋の隨所に引いて、謠曲文と對照することとする。

【概評】　平家物語、太平記などの軍記物に採り入れられた支那傳說、秦始皇・唐玄宗・楊貴妃・張良、又はこの項羽・虞氏の如き說話は、わが古傳說と殆ど同樣の親しみを以て、謠曲の題材となつたもので、本曲は卽ちその一であるが、本曲の如き武將傳說であるに拘らず、これを二番目修羅物とはせず、鬼畜物と同樣に五番目を本格としてゐるのは、やはり異國傳說である爲に、源平武士に對すると同じやうな感じが起らなかつた爲であらうか。

本曲のワキを旅僧とはせず、草刈男としたのは、美人草を出さんが爲の用意であつて、「敦盛」の前ジテを逆に行つたもので、ワキ・シテいづれを草刈男とするのも、風雅な趣向であるが、後段待謠に、ワキをして讀經回向せしめるのには、ワキが在家であるのは具合が惡い。それで、間狂言をして「俗在出家に限るまじく候間」といはしめてゐるが、やはりそれだけ無理が出來てゐる。前段にはツレを出さないで、後段にツレ虞氏を出し、項羽最期の樣を髣髴せしめてゐるのは、よい思ひつきであるが、他の多くの後ヅレのやうに舞をも演じないで、登場して間もなく「身を投げ」て脇座に控へさせるのは、聊かあつけない感じがしないでもない。

【一】

次第の囃子にて、ワキ草刈男、着附段熨斗目・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ同草刈男二人、ワキと同樣の裝束（熨斗目は無地）にて、いづれも秋草に美人草一本を挿みたる挿花をかたげて舞臺に入り、向合ひ、

【一】

前段

無拍子は初め支那烏江に近い野原で、ワキ草刈男、ワキヅレの草刈男と共に登場。

○ながめ暮らして―平家物語平忠度の歌「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」の想を借りたのであらう。

○烏江　支那安徽省和州揚子江北岸の地。項羽が漢軍に敗れて自殺した所である

○錦の小萩原―錦を敷いたやうに美しい小萩の生ひ茂つた原。

○心なく―風流な心のない

○思ひ草　物を思ふ種。ここではたゞ花を刈るとや思ふらんをいひかけただけである。

○家づと―家に持つて歸る土產。

○すだく―集まつて鳴くこと。

○心あれ―心ありの意。「あれ」は命令形ではない、係結を誤つたのである。

ワキ次第『ながめ暮らして花にまた。ながめ暮らして花に又。宿かる草を尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは烏江の野邊の草刈にて候。今日も草を刈り唯今家路に歸り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ下歌『野邊は錦の小萩原刈萱まじる烏江野に。上歌『草刈るをのこ心なく。草刈るをのこ心なく。花を刈るとや思ひ草。家づとなれば色々の。草花の數を刈り持ちて。歸れば跡は秋暮れて。枯野にすだく蟲の音も花を惜しむか心あれ。花を惜しむか心あれ

ワキ「歸れば跡は」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて、ワキヅレと向合ひ、烏江の川岸に着きたる心。上歌濟みて、ワキは正面に向き、

ワキ「便船を待ち向ひへ越さうずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

草刈「終日草花を眺め暮らしても、なほ興は盡きないことだ」

と次第を謠ひ、

草刈「私どもは烏江の野邊で草を刈つてゐる男です。そして今日も一日草を刈り暮らして、今家に歸る所です」

と見物人に自己紹介をし、

草刈「烏江の野原には小萩と刈萱とが咲き交つて、錦を敷いたやうに美しい。その美しさを愛しようともせずに、われ／＼草刈男は何の風流な心もなく花を刈り取るやうに、人は思ふかも知らないが、自分達は家への土產にしようと思つて、いろ／＼の草花を刈り取つて歸るのだ。だが、あとに殘つて、晩秋の枯野に鳴きすだく蟲の音も、花を惜しむやうな、心あり顏に思はれることだ」

といひながら、岸邊に着いた樣で、舞臺は烏江の川岸となる。

草刈「こゝで便船を待つて、向ふ岸へ越さう」

と船を待つてゐる。

といひて、脇座へ行きて坐し、挿花を下に置く。

後見、舟の作物を脇正面に出す。

【二】

一聲の囃子にて、シテ老舟夫、面笑尉・尉髪・裃淺黄・無地熨斗目・紺水衣・腰帶・扇の裝束にて舟に乘り、棹を持ちて、

シテサシ『蒼苔路滑らかにして僧寺に歸り。紅葉聲乾いて牡鹿鳴くなる夕まぐれ。心も澄める面白さよ

シテ一聲『秋毎に。野分を船の追風にて

地『荻の穗かくる。露の玉

【三】

ワキ、挿花をかたげて立ち、

ワキ「なうなうその船に乘らうずるにて候

シテ「おう召され候へ。さて船賃は候

ワキ「われら如きの者の船賃參らせたる事はなく候

シテ「船賃なくはこの船には叶ひ候まじ

ワキ「さらば上の瀨へ廻らうずるにて候

と正面に向き二三足出で、上瀨に行く心。

【二】

シテ項羽の樣、老舟夫の姿で、船を岸邊に寄せた體で登場。

舟夫「昔の人が、『青々と苔の生えた滑らかな道を通つて、僧が寺に歸つて行く。紅葉のさらさらと音のする林に、夕暮牡鹿が鳴いてゐる』といつたが、全くその通りで、秋の景色は心も澄むばかり面白いものだ。どうれ、秋毎に吹く野分の荒風をこちらは順風にして、帆をかけて船を走らせて行かう」

【三】

草刈男はこの船を見て、

草刈「おういおい、その船に乘せてくれ」

舟夫「おうお乘りなさい。ところで船賃はどうなさる」

草刈「わしらは船賃なと出したことがないのだ」

舟夫「船賃がなければ、この船に乘せることは出來ない」

草刈「では仕方がないから、上の瀨へ廻らう」

と行きかける。

○月をや船に―刈りとつた草葉の露に月の宿つてゐるのを、そのまま船に載せる。○天の河―以下船を漕ぎながらうたふ船唄二章であらう。『天の河……心せよ』までが一章、『秋風吹けば』以下が他の一章。○たな渡りして―「たなぐもり」といふ語はあるが、「たな渡り」といふ用例は他に見當らない。『たな』は七夕と韻を重ねた接頭語で、ただ渡るとの意であらう。○七夕―毎年一度七月七日に牽牛織女の二星が天の河を渡つて契りを結ぶといふ故事。○年に一夜は心せよ―七夕の二星は年に一度逢ふのであるから、その夜だけは天の河の波が立たないやうに風も氣をつけて吹け。○秋風吹けば波の音―秋風吹けば波の音高けれどの略○水馴棹―水にさし馴れた棹。

シテ「なうなう道理は申しつ船に召され候へ

ワキ『乘りおくれじと草刈は。もとの渚に立ち寄れば（とシテに向く）

シテ『とく乘り給へとさし寄する（棹をさす）

ワキ、次の地上歌に舟に乘り、正面に向き下に居る。

地上歌『露刈りこめて秋草の。露刈りこめて秋草の。葉毎に影やどる、月をや船に乘せつらん。天の河。たな渡りして七夕の。たな渡りして七夕の。年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音。湊に近き海士小船。水音なしに行く船の水馴棹をささうよや水馴棹をささうよ

【四】

シテ「船が着いて候御上り候へ

ワキ舟より上り、脇座へ行きながら、

ワキ「御船恐れて候

シテ「さて船賃は候

【四】○御船恐れて候―船に乘せ一貫つてありがたいとの意「恐れ」は恐縮の意。謠曲評釋に「波の立つか〳〵と思ひて、船中が恐ろしかりしなるべし」といつてゐるのは如何であらう。

舟夫「おいおい。今のはものの道理をいつたまでぢや。まあ船にお乘りなさい」

といはれて、草刈男は乘りおくれまいと、岸に立ち寄ると、老舟夫は、

舟夫「さあ早くお乘りなさい」

と船を岸に寄せる。草刈男は、露の置いたままを刈りとつた秋草の一葉毎に月が宿つてゐるのを、そつくりそのまま船に乘せる。

舟夫「――

『今日は七月七日、牽牛織女二つの星が、年に一度の逢瀬の夜ぢや。渡つて行かしやる天の川原に、波風立てるなお邪魔をするな。

『秋風吹けば、沖では波音高いが、湊の近くぢや音をも立てない。小船も安心、棹さして行かうよ」

ミ船唄をうたひながら、船を漕いで、對岸に着く。

無參は烏江の對岸にたる。

【四】

舟夫「船が着いた、お上りなさい」

草刈は船より上つた體で、

草刈「どうもありがたう」

舟夫「ところで、船賃は……」

○聊爾―粗忽。失禮。

○美人草―虞美人草の略。和名「ひなげし」。曾子宣夫人の虞美人草の詩に「青血化爲二原上草一、芳心寂寞寄二寒枝一」とあり、その註に「項王亡滅、虞嫗自刎、其墓上草、人呼爲二美人草一」、虞氏は諸書みな自刎と記してゐるのに、謠曲は烏江の緣で入水のやうに作つた。

ワキ（脇座にて）「又船賃と仰せられ候よ。その爲にこそ向ひにて申し定めて候に。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ

シテ「いや船賃と申せばとて別の子細にても候はばこそ。それ程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ

ワキ「あらやさしや。いづれにても召され候へ

と、ワキ挿花を持ちて眞中に出づ。シテ出て美人草を一本取り、

シテ「さらばこの花を賜はらうずるにて候

ワキ「不思議やなこれ程多き草花の中に。何とてその花をば選つて召され候ぞ

シテ「さん候これは美人草と申して故ある花にて候

ワキ「あら面白や美人草とは。何と申したる謂れにて候ぞ

草刈「又船賃の事をいはれる。その爲に、向ふ岸で船賃を上げないと約束して置いたのに、何故そのやうな粗忽の事をいはれるのだ」

舟夫「いや船賃といつたところで、別段むつかしいことを申すぢやなし、それ程澤山草花を持つて居られるのに、なぜ一本下さらないのだ」

草刈「これはやさしいことをいはれる。さあ、どれなりとお取りなさい」

草刈男草花をさし出す。舟夫その中から美人草を取出して、

舟夫「それではこの花を貰ひませう」

草刈「これに不思議だ。これ程多い草花の中から、どう思つて、その花を選り出されたのだ」

舟夫「左樣さ、これは美人草といつて、謂れのある花だ」

草刈「これは面白い。美人草とはどういふ謂れなのです」

○項羽―名は籍。始め漢の高祖と共に秦を滅ぼしたが後互に天下を爭つて遂に敗北した。太平記に「昔漢の高祖と楚の項羽と戰ふこと七十餘度なりしに、項羽遂に高祖に圍まれて夜明けば討死せんとせし時に、漢の兵四面にして皆楚歌するを聞きて、項羽乃ち帳中に入り、その夫人虞氏に向つて別れを慕ふ……虞氏悲しみに堪へかねて、即ち自ら劍の上に伏し、項羽に先立つて死にけり」

○高祖―漢の始祖。劉邦字は季。項羽を破つて天下を一統した。

○虞氏　項羽の寵姫。前掲「項羽」の條參照。

○望雲騅　項羽の愛馬の名

漢書・史記その他の諸書にはたゞ騅とだけあるが、元稹の作に「望雲騅馬歌」がある。謠曲はこれに據つたものか。太平記に「人こそあらめ、心なき馬さへ震ひわなゝいて小膝を折りて伏したりける」

シテ「これは項羽の后虞氏と申せし人の。身を投げ空しくなり給ひしを。取り上げ土中につきこめ候へば、その塚より生ひ出でたる草なればとて。さて美人草とは申し候

ワキ「さらば項羽高祖の戰ひのやうを。御存知候はばそと御物語り候へ

シテ「さらば語つて聞かせ申し候べし

ワキ脇座に歸り、二人とも下に居る。（後見舟の作物を引く）

シテ（語）「さても項羽高祖の戰ひ。七十餘度に及ぶといへども。始めは項羽うち勝ち給ひ。一度も高祖の利なかりしに。或時項羽の兵心變りし。却つて項羽を狹めつつ。四面に鬨の聲を上ぐれば。虞氏は思ひに堪へかねて。いかがはせんと伏し給ふ。又望雲騅といふ馬は。一日に千里を驅くる名馬なれども。主の運命盡きぬれば。膝を折

舟夫「これは、項羽の后の虞氏と申す方が身を投げてお亡くなりになつたのを、御死骸を取り上げて土中にお埋めしたところ、その塚からこの草が生えて出たので、それで、美人草と申しますのぢや」

草刈「それでは、項羽が漢の高祖と戰つた樣子を御存知ならば、一寸聞かして下さい」

舟夫「では、お話して聞かせませう」

舟夫「さて、項羽と高祖との軍話だが、この戰は七十餘度もあつたが、始めは項羽がいつも勝つて、高祖は一度も勝つたことがなかつたが、ある時、項羽の兵が心變りをして、却つて項羽を攻め圍み、四方から鬨の聲を作つたので、虞氏は悲しさに堪へられず、どうしようかと途方に暮れて泣き伏せられた。それから又、望雲騅といふ馬は、一日に千里を驅ける名馬であつたが、わが主人の運命が盡きたので、膝を折つて一足も進まなかつた。しかし、項羽は少しも驚かず、馬からし

○呂馬童―漢軍の士。後に中水侯となる。太平記に「愛に漢の司馬呂馬童が遙かに控へたりけるを、項羽手を擧げて招き、汝はわが年頃の知音なり。われ聞く漢わが頭を以て千金の報萬戸の邑に購ふと、我今汝が爲に頭を與へて、朋友の恩を謝すべしといふ。呂馬童涙を流して敢て項王を討たんとせず。項王、よしやさらば我とわが頭を搔き切つて汝に與へんとて、自ら劍を抜きて己が首を搔き落し、左の手にさし上げて立ちすくみにこそ死に給ひけれ」

○不覺―憶病。

○黄なる涙―鬼の涙、馬の涙などにいふ國文の慣用語

つて一足も行かず。その時項羽はちつとも騒がず。馬よりしづしづと下り立つて。いかに呂馬童。わが首とつて高祖に捧げ。『名を揚げよやと呼ばはれども

地 呂馬童は。恐れて近づかず不覺なる者の心かな これ見よ後の世に。語り傳へよといひあへず。劍を抜いてあへなくも（扇にて形を示し）。われとわが首をかき落し呂馬童に與へそのままこの原の露と消えにけり。望雲騅は膝を折り。黄なる涙を流せばさのみ語ればわが心。昔に返る身の果。今は包まじわれこそは。項羽が幽靈現れたり跡弔ひて、たび給へ跡弔ひてたび給へ

シテ「今は包まじ」と立ち、仕手柱際へ行き、ワキに向ひて開き、靜かに中入。

【問】 狂言渡守、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて棹を持ちて名乘座に出で、狂言「かやうに候者は。烏江の渡守にて候。今日は某が番にて候間。罷り出で船を渡さばやと存ずる。（ワキを見ていやこれなる草刈達は向ふへ御渡り候はば。越して參らせう

【答】

づしづと下りて、昔の知合で今漢軍についてゐる呂馬童に向つて、『おれの首をとつて高祖に捧げ高名を揚げよ』と呼ばはつたが、呂馬童は恐れて近づかない。項羽は『何といふ憶病な奴だ、これを見ろ、そして後の世に語り傳へろ』といひも終らず、劍を抜いて、はかなくも、われとわが首をかき落し、呂馬童に與へ、その儘この烏江が原の露と消えてしまつた。これを見て、望雲騅は膝を折り黄な涙を流して……いや、このやうな話をしてゐると、昔に返つたやうな心持になるのだ。今は何を隱さう、項羽の幽靈が現れて來たのだ。どうか跡を弔つて下さい」

といつて消え失せる態で退場。

ワキ「これは向ひより越して候

狂言「左樣にては御座あるまじく候。この所の大法にて。人の番の日を某が儘にせず。某が渡し番の日は人の儘に致さぬ大法にて候。今日は某が番にて候間。餘の者は越し申すまじく候が。妄語を仰せ候か

ワキ「いや〳〵妄語は申さず候。それにつき尋ねたき事の候。まづ近う御入り候へ

狂言「心得申して候。(舞臺の眞中に行き下に居て)何事を御尋ねなされたく候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。美人草の謂れ又項羽の果て給ひたる樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。左樣の御事委しくは存ぜず候へども。承り及びたる通り物語申さうずるにて候。まづ項羽高祖の戰ひは。八箇年の間に七十餘度に候。その度毎に項羽打勝ち給ふと雖も。七十餘度目の合戰に。項羽打負け給ひ。垓下の城に籠り給ふ。漢軍これを圍むこと。稻麻竹葦の如くにて御座ありたると申す。この時高祖の兵に。蕭何韓信樊噲張良この四人の兵。項羽の兵高祖につきたるといふ歌を作り。四面より楚歌の聲を立てて諷ひければ。項羽大に驚き。扨はわが運命も極まりたりとて。虞氏と申す后に名殘を惜しみ給へば。虞氏も別れを悲しみ。項羽に先だち身を投げて空しくなり給ひて候。さて項羽は南をさして落ち給ふに。漢軍數千騎にて追ひ驅けしかば。ここまで來り給ふに。烏江の亭の長は御船を拵へ待ち奉り。江東は小地なれども數萬人ある所なれば。急ぎ東に御渡りありて。重ねて兵を揃へ。再び本意を遂げ給へと申す。項羽聞し召し。われ江東より八百人を召し具し出でしに。今日はその者一人もなし。なに面目ありて江東の者に見えんやと宣ふ。誠に御運も盡きけるか。項羽の召したる御馬は。望雲騅とて一日に千里を驅ける馬なれども。膝を折り黃なる涙を流し。一足も行かず候間。御馬は亭の長に賜は

○大法—嚴しい規則。

○かち立ち―徒歩。

○亡心―亡靈。

○僧俗にあらず―僧侶と俗人との區別はないとの諺。

【五】○樣々に弔ふ法の―この待謠「藤戸」の待謠と同じ。○波にうき寢の―うき寢は水上に眠る意。こゝでは水邊の弔ひである緣で、夜を呼び起す序としたのである

り。それよりかち立ちになり。御身にも傷數多蒙り。あたりを見渡せば。高祖の兵に呂馬童といふ者あり。是は項羽御存じの者なれば。いかに呂馬童。汝はわが首取つて高祖に奉り名を擧げよと宣へども。恐れて近づかねば。項羽自ら御首をかき落し。呂馬童に與へ空しくなり給ひて候。又美人草と申すものは。虞氏の死骸を築き込みたる塚より生ひ出でたる草なれば。美人草とてこの野邊の名草にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老人一人。渡守の體にて來られ候程に。卽ち便船申しこの所へ越して候。その後草花を所望申され。美人草の謂れ項羽の果て給ひたる樣體。唯今御物語の如く懇に語り。項羽の幽靈といひもあへず。そのまま姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては項羽の御亡心現れ。船を越したると存じ候間。俗在出家に限るまじく候間。項羽の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「仰せの如く僧俗にあらずと申すことの候へば。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

狂言引く。

【五】後見、一疊臺を正面先に出す。ワキ・ワキツレ立ちて、

ワキ・ワキツレ上歌（待謠）『樣々に。弔ふ法の聲立てて。弔ふ法の聲立てて。波にうき寢の夜となく。晝とも分

【五】後段

ワキ・ワキツレ刈男は狂言の渡守から、項羽の話を繰返して聞き、僧侶ながら讀經して、項羽の後世を弔はうと思ひ、色々追善の御經を聲を立てゝ讀み上げ

○般若—Prajna. 智慧と譯す。佛の智慧を以て愚痴の凡夫を助ける意。水邊の弔ひであるから、これを船に喩へたのである。

○とく法の—船の纜を解くを法を說くにいひかけた。

○一切有情—大般若經理趣品に「金剛手若有レ聞「此理趣」受持誦讀、殺害三界一切有情「不レ墮三惡趣」」とあるを引いた。有情は生あるもの。

○三界—欲・色・無色の三界即ち衆生の輪廻する一切の世界。

○惡趣—地獄・餓鬼・畜生の三惡道をいふ。

〔六八〕○月卿雲客　公卿殿上人。

○爛體—骨肉の腐爛したもの、屍。以下「舊銘を埋む」まで詩句らしいが、出所が分らない。

○舊銘—墓碑。

○紫の雲間横ぎる、虞氏の亡靈の現れたのを、天女が紫雲に乘つてくるのに見立てたのである。

○伎樂—くれ樂ともいふ。呉國の風を傳へた舞樂で、奈良朝時代よりわが國にも行はれ、能樂はこの影響を受けてゐるといはれて居る。こゝでは單に舞樂の意。

かぬ弔ひの。般若の船のおのづから。その纜をとく法の。心を靜め聲をあげ

ワキ、一疊臺の前に出で下に居て合掌して、

ワキ『一切有情。殺害三界不墮惡趣

といひて、ワキは脇座の次に、ワキヅレはその次に下に居る。

【六】出端の囃子にて、後ジテ項羽、面三日月・黑頭・唐冠・金緞鉢卷・襟白淺黃・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束、ツレ虞氏、面連面・鬘・鬘帶・女ばさら・襟赤・着附摺箔・唐織着流・側次の裝束にて、ツレは先に立ちて大小前に立ち、シテは鉾を持ちて橋懸一の松に立ち、

後ジテ『昔は月卿雲客うち圍み。今は樵歌野田の月。爛體霧深し。古松下の蔭

地『苔紛々として舊銘を埋む

シテ「紫の雲間横ぎる出立は

地『天つ少女の。調めかな

地『各々伎樂を奏しつつ。各々伎樂を奏しつつ。夢の黃楊櫛彈く琴琵琶の。四面に鬨の聲を上ぐれば又執心の責め來るぞや。あら苦しの。苦患

項羽「昔は公卿殿上人に取圍まれて、花やかな生活をしたのだが、今は屍を霧深い古松の下に埋んで、たゞ樵夫の歌を聞き、野田の月を眺めるばかりだ。古い碑銘は生ひ茂つた苔に埋れて、文字も見えないのだ。——

おゝ、虞氏が紫雲の間から出て來た樣は、天女が樂を奏するやうだ。——

夢の中ながら、かうして昔の者が舞樂を奏し、面白い琴や琵琶を彈く……おや、琵琶と思つたのは、四方からあげる勝鬨の聲か、あゝ又しても修羅道の責め苦に夜晝となく回向をして、殊にありがたい般若經を開いて、心を靜め聲を張りあげて、

草刈——『たとひ三界の一切有情生物を殺害しても、この御經を讀誦すれば、三惡道に墮ちることはない』——

と般若經を讀む。

【六】後ジテ項羽、ツレ虞氏と共に草刈男の夢に現れた態で登場。

○夢の黄楊櫛―夢中に虞氏が現れ出たといふ心で、夢の告といひ、告を黄楊といひかけ、櫛の齒を挽くといふ縁で弾く琴と續け、琵琶の四絃と音が似通つてゐるので、四面と調を轉じた。
○落つるはさながら―高樓より落つるを涙の落つるにいひかけた。

やな

ツレ「虞氏は思ひに堪へかねて（と一疊臺に上り合掌し）

地「虞氏は思ひに堪へ かね給ひて高樓に登りて落つるはさながら涙の雨の。身を投げ空しくなり給へば

と、ツレ身を投ぐる心にて一疊臺を飛び下りて脇座に行き下に居る。シテこれを追ふ心にて一疊臺に飛び上り、

〔舞働〕

舞ひ終りて一疊臺の上にて、

【七】

シテ「項羽は虞氏が別れとわが身の

地「なり行く草葉の露諸共に消え果てし悲しさ。思ひ出づれば劒も矛も皆投げ捨てて（と矛を投げ）。身をたくばかりに口惜しかりし。夢物語ぞ。あはれなる（一疊臺に安坐して面伏せ）

シテ「あはれ苦しき瞋恚の焔

地「あはれ苦しき瞋恚の焔の立ちあがりつつ（立

○瞋恚の焔―燃え立つ如き憤怒。莊嚴論に「瞋恚如レ火」
○立ちあがり―焔の立ち上るを項羽の立ち上るにかけていふ。

惱まされる。あゝ苦しい」

花やかな昔に返らうとしても、今の修羅の苦患が離れないのである。

虞氏「あゝ私は悲しい思ひに堪へません」

と、虞氏は悲しみに堪へられなくて、高樓に登り、雨のやうに降り落つる涙ながらに、身を投げて死んでしまつたので、

〔舞働〕

に、項羽は虞氏を墓つてその後を追ふ樣を示し、

【七】

項羽「わしは虞氏と死別したいとしさ、わが身の行末の心細さ、とり集めて生き延びる樂しみもなく、はかなく死んでしまつた悲しさ。その時の事を思ひ出すと、劒も矛も問題でない、たゞ身を焼くばかり口惜しい」

と、夢の中で物語るのは、實にあはれである。

そのうちに、項羽はまた修羅の闘爭に焔の如き憤怒をなして立ち上り、

○寄せくる波の―敵を波に喩へた。

ち)。味方を見れば(仕手柱へ向き)。高祖に屬して寄せくる波の。荒き聲々聞けば腹立ちいで物見せんと(臺を飛び下りて常座へ行き)、みづから驅け出で敵を近づけ。取つては投げすて(扇にて形を示し)。又は引き伏せ捻ぢ首とりどりに、恐ろしかりける勢ひなれども、運盡きぬれば、烏江の野邊の(橋懸へ行き)、土中の塵とぞなりにける

三の松にて留拍子を踏む。

項羽「味方の軍勢を見ると、いつの間にやら高祖の方についてしまつて、寄せくる波の如き荒々しい聲を立てるので、わしは腹が立ち、よし目に物見せてくれるぞと、自分自身驅け出して敵を近づけ、敵の來る者をば取つては投げ捨て、又は引き寄せて捻ぢ伏せ、首を掻きとつて、恐ろしい勢ひを示したのだが、運の盡きた者は致し方もなく、遂に土中の塵となつてしまつたのだ」

と語り、夢中の亡霊が消える態で退場。

〔考異〕

諸流(五流)

【三】ワキ「われら如きの者の船賃を參らせたる事はなく候(下懸これはいつもの里通ひの草刈にて船賃は持たず候)【四】ワキ「又船賃と仰せられ……聊爾なる事を承り候ぞ(下懸先に向ひにて申す如く。いつもの里通ひの草刈にて船賃は持たず候)……埴「呂馬章は……項羽が幽靈現れたり跡弔ひて……たび給へ(春喜と夕霧も立ち添ひて空すさまじく暮れにけり)

古謠本(光悅本)

【一】ワキ次第「ながめ暮らして……草を尋ねん(光のこさん)。ワキ「これは……今日も(光又立いて)草を刈り唯今(光ナシ)家路に歸り(光らはやとおもひ)候……ワキ「便船を待ち向ひへ越さうずるにて候(光いつものごとく舟にのらふするにて候)【二】シテサシ「蒼苔……紅葉聲乾い(光かはし)て……【三】ワキ「なうなうその(光船頭殿)舟に乘らう……シテ「おう(光中々の事とく〳〵)召され候へ……シテ「(光いや)船賃なくば……シテ「なうなう(光草刈たち)道理は申しつ……【四】ワキ「又船賃と仰せられ候よその爲にこそ(光是は思ひもよらぬ事

を仰候そや。はや）向ひにて……何とて聊爾なる事をば承り（光さやうに仰）候ぞ。シテ「いや船賃とて……別の子細（光餘の儀）にても候はばこそ（光す）　ワキ「あらやさしや（光くも承候ものかな）いづれにても（光あれ。御所望に候はむを）召され候へ……ワキ「不思議やなこれ（光か一程多き）……何とてその（光色のなき）花をば選つて（光ナシ）召され候ぞ。シテ「さん候これは（扨此花の名をは）御存候か。ワキ「いや我等はたゝかるまてにてこそ候へ。何とも存せす候。シテ「是こそ）美人草と申し（光ナシ）て故ある……ワキ「あら面白や……何と申したる（光いか様なる）謂れの……シテ「これは（光さん候昔この所にて）項羽の后……土中につきこめ（光て）候へば……草なればとてさて（光にて候程に）美人草と……ワキ「さらば……御存知候はば（光ナシ）御物語り候へ……シテ「さても……始めは項羽……高祖の利なかりしに（光項羽一度もうちまけ給はす）或時……項羽を狭めつつ四面に鬨の聲を上ぐれば（光責ければ）虞氏は……堪へかねていかゞはせんと伏し（光ナシ）給ふ……膝を折つて（光り黄なる涙をなかし）一足も……高祖に捧げ（光奉り）名を……

【五】ワキ「上藝様々に……心を静め（光すまし）聲をあげ……

高野物狂

觀（寶喜）

解說

【能柄】四番目　二段劇能

【人物】前シテ　高師四郎、狂言　高師の臣、子方　平松春滿丸、ワキ　高野山僧、ワキツレ　同從僧（二人）、後シテ　高野四郎

【所】第一段　常陸國平松菩提寺、第二段　紀伊國高野山

【時】（無季）

【作者】能本作者註文には世阿彌の作としてゐる一方、作者不明とも記してこれを疑ひ、二百十番謠目錄には安清作としてゐるが、世阿彌の能作書に「丹後物語、かうや、あふさか、如此遊狂」と記してゐる「かうや」が「高野物狂」であることは、世子六十以後申樂談儀に、

かうや（吉田東伍博士校訂本に「かやう」とあるは誤植）の能に、「文こそ君の形見なれ、あら覺束なの御行方やな呼子鳥」と狂ひ出して、あまりに久しくくるひて、「誘はれし」と一聲になす、わろし。呼子鳥といふ心根を、未た見物衆にもたせて、そのにほひを少し風情にこめて、「誘はれし」と一聲にうつるべし。

といつてゐるのによつて明らかである。そして、この〔かうや〕を申樂談儀に世子作と記してゐるから、世阿彌の作に疑ひなからう。

【梗概】高師四郎が舊主平松の死後、その遺子春滿丸を養育してゐたところ、春滿は亡き父母の後生を弔ふ爲に出家するとの遺書を置いて、行方不明になつてしまつたので、高師は幼君を慕つてあてもなく尋ね歩くうちに、狂氣になつて、高野山に辿り着いた。ここで、高野僧にその異樣な姿を見咎められて、一度追ひ出されようとしたが、高師は自分の志を述べ、高野山の佛德を讃歎して、この僧に伴はれてゐた春滿丸に再會し、相携へて國許に歸る。

【出典】この主人公高師四郎については何等所傳が見當らない。そのクセ高野山に關する記事は、源平盛衰記卷四十「高野山事 及び「弘法大師入唐事」に出てゐて、本曲は恐らくこれを本として、主從再會の世話物を脚色したのであらう。――盛衰記の文は語釋に揭げる。

【概評】謠曲には母子の再會を題材としたものが甚だ多く、父子の再會を取扱つたものもいくらかあるが、本曲の如く主從の再會を描いたものは實に珍しい。幼君の行方を尋ねて、臣下が狂ひ歩くといふのは、忠誠の志として誠に美しいことで、謠曲作者の最も尙ぶ所ではあるが、その情味に於て、母性愛に燃えた母が狂ひ歩くほどの同感を與へない。やゝ不自然な感じさへ起させるのである。この事がやがて母子再會の曲の多くて、主從再會の曲の少い所以であるが、然らば、何が故に本曲には特に主從の再會を取扱つたのであらうか。作者の意ある所を忖度すれば、恐らく作者は、まづ高野山の曲舞を中心として、幼子との再會物を脚色しようと試みたのであらう。ところが、高野山は女人禁制の山であるから、〔柏崎〕のやうに、母の物狂を演ぜしめることが出來ない。しかし、父が尋ねて行く事とするには、子供に出家の動機を與へることが出來ない。そこで、傅役の家來をして物狂を演ぜしめることを考へついたのではなからうか。その結果、前に述べたやうに、やゝ情味の薄いものとなつた上、その結末に於て、觀世流現行曲のやうに、子方を剃髮させないで置いて、他の母子再會物と同樣、相伴つて家路に歸ることとしたのは、高野山といふ場所柄、これ亦不自然な感を加へてゐる。これは觀世古謠本や寶生・喜多流現行曲のやうに、子方が既に剃髮してゐて、高師も同じく出家するといふ方がよかつたと思ふ。とにかく謠曲としては珍しいものではあるが、讀者に與へる感銘は、お伽草子の稚兒物ほどの深さがない。

【一】

【一】シテ高師四郎、直面・赫茂黃・着附段壁斗目・素袍上下・小刀・扇・數珠の裝束にて出で、常座に立ち、

【二】第一段

無羅は初め常陸國平松の館で、シテ高師四郎巻巻

○平松殿　平松といふ所の領主。但し平松といふ地の所在は今明かでない。或は茨城郡の平町（ひらまち、今穴戸町の大字）を訛つたものか。
○高師の四郎—謠曲作者の假作名か。
○春滿殿—假作の人名。
○片時—少しの時。
○昔在靈山名法華—南岳慧思禪師の偈文と傳ふ。〔盛久〕に「昔在靈山の御名は法華一佛今西方の主又娑婆示現し給ひて我等が爲の觀世音三世の利益同じくは」と出づ。釋迦と彌陀と觀音とは同一體であるとの意。靈山は靈鷲山の略で、釋迦が法華經を說いた所。
○西方—西方極樂世界。
○阿彌陀—梵語 Amita 無量と譯す。極樂世界の教主。
○娑婆—梵語 Sabha 雜界と譯す。この世界のこと。
○觀世音—世間の人のその名を稱する音聲を聞いて皆解脫を得しめる慈悲の深い菩薩。
○三世—過去、現在、未來。
○悲願—大慈悲の誓願。
○慈眼視衆生—法華經普門品の語。慈悲の眼を以て一切衆生を平等に見渡し、惠みを與へるとの意。觀世音

シテ「これは常陸の國の住人平松殿に仕へ申す。高師の四郎と申す者にて候。さても賴み奉る平松殿は。去年の秋空しくなら せ給ひて候。又春滿殿と申して御子息の御座候が。未だ幼くましますにより。某に傳り立て申せとの御遺言にて候程に。片時も離れ申さず春滿殿を傳りたて申し候。又今日は平松殿の御忌日にて候間。御寺に參らばやと存じ候

といひて、眞中に行きて坐し、合掌して、

シテサシ『昔在靈山名法華。今在西方名陀彌陀。娑婆示現觀世音。三世利益同一體。げにありがたき。悲願かな

地上歌『慈眼視衆生悉く。慈眼視衆生悉く。誓ひ普き日の影の。曇りなき世の御惠み。後の世かけて、賴むなり後の世かけて賴むなり

高師「私は常陸の國の住人平松殿に仕へてゐる高師の四郎といふ者です。さて私の主人平松殿は去年の秋お亡くなりになつたのです。そして春滿殿といふ御子息がお出でになるのですが、まだおちいさいので、私によくお養育申せと御遺言があつたので、少しの間もお離れせずに春滿殿をお育てしてゐるのです。今日はまた平松殿の御命日だから、これから菩提寺へ參らうと思ふのです」

と自己紹介をして、菩提寺へ參詣する態で、舞臺は菩提寺となる。

高師四郎は佛前に合掌して、

高師「——『昔靈山に在りて法華と名づけ、今西方に在りて阿彌陀と名づけ、娑婆には觀世音と示現すれど、三世の利益は同一體なり』——」

（昔佛が靈鷲山に居られた時は法華（釋迦如來）といひ、今西方淨土に於ては阿彌陀如來といひ、現世に示現せられては觀世音といひ、名は時により所によつて變るけれど、過現未の三世を通じて、衆生に利益を與へ給ふことは全く同じである）との御經を讀誦して、

高師「あゝ實にありがたいお慈悲だ。佛樣は慈悲深い眼を以て一切衆生を平等に見渡して、厚い惠みを垂れられ、その佛德が添うて、この大御代は愈安らかなのだ。

菩薩の誓願である。
○誓ひ普き日の影の　觀音の誓願の普く一切衆生に及ぼすことを日光が萬物を照らすのに喩へ、日の曇らないことを聖代の恩德の曇りなきことにひかけた。
○後の世かけて　佛の恩德が聖代の現世に普く及ぶばかりでなく、亡君の後世にまで及ぼして、極樂へ導き給へとの意。

【二】
○受け難き人身を受け！涅槃經に「人身難レ得、如二優曇華一」。平家物語に「人身は受け難く、佛教には遇ひ難し」
○如來の教法　釋迦如來の教、佛教。
○闇夜の燈火渡りの船！法華經藥王品に「如二手得レ母、如二渡得レ船、如二病得レ醫、如二暗夜得レ燈」
○われと覺めん夢の世に！自分自身でこの世は夢であると悟る。
○三途！一は火途、地獄道。二は血途、畜生道。三は刀途、餓鬼道。
○この生にこの身を浮かめずは！この人間界に生きてゐる間に、この身を極樂淨土に浮かばせる善根を作つて置かなければといふ意。

【二】

狂言高師の臣、萩附段夏斗目・長上下・腰帶・小刀・扇の裝束にて、文を手に持ち、橋懸一の松に出で、

狂言「かやうに候者は。高師の四郎殿に仕へ申す者にて候。ここに春滿殿と申して御入り候が。この曉にいづくともなく御出で候御跡を見申して候へば。御文を殘し置かれて候。四郎殿は觀音堂に御座候間。この御文を持ちて參らばやと存ずる。（舞臺に入り目附柱際にてシテに向ひ膝つき）いかに申し候。この曉春滿殿いづくともなく御出で候御跡に。御文を殘し置き給ひて候間。持ちて參りて候御覽候へ

と文をシテに渡して引く。シテ文を受取りて、

シテ「あら思ひよらずや。まづまづ御文を見うずるにて候。（文を披き）それ受け難き人身を受け。逢ひ難き如來の教法に逢ふ事。闇夜の燈火。渡りの船待ち得たる心地して。われと覺めん夢の世に。今を捨てずは徒らに。又三途にも歸らんこと。歎きても猶餘りあり。この生にこの身を浮かめずは。いつの時をか。賴むべき。然るに一子出家すれば。七世の父母成佛すといへり。このどうか佛樣、この現世を安らかにし給ふばかりでなく、來世をも照らし給ひ、亡君を極樂へお導き下さいますやうに…」

ミ祈つてゐるところへ、狂言高師の臣手紙を持つて出で、高師に渡す。

【二】高師はその文を受取つて、

高師「これは意外だ。とにかくお手紙を拜見しよう」

ミ手紙を開いて讀む。

高師「――

『容易に生まれてくることの出來ないこの人間に生まれて來て、あり難い釋迦如來の御教を受けるといふことは、闇夜に迷うてゐる時に燈火を得、向ふ岸へ渡ることが出來ないで困つてゐる時に船を見つけたと同じやうに、この上もない嬉しいことです。それで、このよい折に、現世は夢のやうな無常なものだといふことを悟つて出家得道しなければ、死んだ後、地獄餓鬼畜生の惡道に墮ちて、いくら後悔し悲しんでも、何の益にも立たないのです。この人間界に生まれてゐる間に、極樂に身を浮かべるやうに善根を作つて置かなければ、もはや何時の世になつても、成佛する事は出來ないのです。殊に一人の

○一子出家すれば―通俗編に「一子成道、九族生レ天」。盂蘭盆經に「七世父母、離二餓鬼苦一、得レ生二天人中一、福業無レ極」

○無爲―爲作造作のないこと、涅槃の異稱。

○生々の親　先祖代々。

○乳房の恩の父母―生みの親。

○墨衣思ひ立てどもさすが世を出づる名殘の袖は濡れけり―文の奥に書き添へた歌。歌の出所は分らない。

○若木の花―幼君の喩。花の縁で「實の生るし」を「身の爲る」にいひかけた。

○三世の道―諺に「主從は三世」といふので、主從の道の意に用ゐた。

身を捨てて無爲に入らば、別れし父母の御事のみか。生々の親を助けんこと。これに如かじと思ひ切りつつ家を出で、修行の道に赴くなり。父母に別れしその後は、唯おことをこそひたすらに。父とも母とも賴みつれ。かくとも申さで別るること。乳房の恩の父母に。再び別るる心地して。名殘こそ惜しう候へ。かまひて尋ね給ふなよ。三年が内には必ず必ず。身の行方をも知らせ申さん。墨衣思ひ立てどもさすが世を。出づる名殘の袖は濡れけり

地下歌『書き殘されし言の葉の（文を見やり）。若木の花を先立てて身のなる果は如何ならん（としをり）。上歌』恨めしの御事や（文を疊み）。恨めしの御事や。たとひ世を捨て給ふとも（と立ち）。三世の契りなるものを、いづくまでも御供に（右の方を見）。などや

者が出家すれば、その功德によつて、七代前の祖先まで成佛することが出來るとの事です。今私が出家して佛道に入れば、お亡くなりになつた御兩親ばかりでなく、先祖代々の人々をも助けることが出來るといふことは、これほどありがたいことはないと決心して、家を出て修行の道に入ります。

御兩親にお別れして以來は、唯そなたをばかり父とも母とも賴みにしてゐたのです。それだのに、今仔細をも話さないで別れてしまふのは、生みの父母にまた別れるやうな心持がして、名殘が惜しまれてなりませんが、決して私の行方を尋ね探して下さるな。三年のうちには必ず自分の行方をお知らせしますから。

墨衣思ひ立てどもさすが世を、出づる名殘の袖は濡れけり』

（出家を思ひ立つたけれど、さすがこの現世を離れてしまふのだと思ふと、名殘が惜しまれて、涙に袖が濡れる）

春滿の手紙をかう讀み終つて、

高師　まあ、このやうな書置をして出ていつてしまはれたのか。若君を先立ててしまつて、自分獨り後に殘つて何にな

○頼む木蔭も嵐吹く―木蔭もあらずを嵐にいひかけた
○雲水の―行先の目當のない喩。

【三】

○高野山―紀伊國伊都郡の山嶽。山上の金剛峰寺は弘仁七年弘法大師の創立した眞言密教の道場。
○三鈷の松―高野山御影堂の前にある。

伴ひ給はぬぞ。今は散り行く花守の。頼む木蔭も嵐吹く。行方やいづち雲水の（常座へ行き）。跡を慕ひていづくとも知らぬ道にぞ出でにける知らぬ道にぞ出でにける

と、常座にてしをりて中入。

【三】

次第の囃子にて、子方春満丸、襟赤・着附縫箔・稚兒袴・腰帶・扇の裝束、ワキ高野山僧、角帽子・着附段斐斗目・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同樣の裝束（着附は無地）にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキ次第『浮世の夢も覺めぬべし。浮世の夢も覺めぬべし。深き御法を頼むなり

地取にワキは正面に向きて、

ワキ「これは高野山の僧にて候。（子方を見て）又これに御座候幼き人は。いづくとも知らず來り給ひ。出家の御望みの由にて愚僧を御頼み候へども。もし尋ぬる人もや候らんと。樣々に痛はり日を送り候。又今日は三鈷の松に伴ひて。慰め申らう。

あゝお恨めしい。たとひ御出家なされるにしても、私は三世の契を結んだ主從の間柄ぢやありませんか。なぜ私をお連れ下さらないのです」

と悲歎して、若君の出家してしまつた今は、何の頼みも樂しみもなく、いづこをそれといふあてもなく、たゞ若君の跡を慕つて、あてもない旅に出掛けて行つた。

高師四郎、若君を慕ひ行く心で退場。

第二段

囃子は高野山で、ワキ高野山の僧、子方平松春満を伴うて登場。

僧　ありがたい深遠な佛の教へを受けて、この浮世の迷夢を晴らしたい」

ミ次第を謠つて自分の心持を述べ、

僧　私は高野山の僧です。（春満の方を見て）またこゝに居られる幼い人は、何處からか知らないが、この山へ來られて、出家がしたいと私に頼まれたのですが、もしや尋ねてくる人がありはしないかと、姿を變へさせず、色々となだめて日を過してゐるのです。そして今日はまた三鈷の松へ連れて行つて、慰めようと思ふのです」

【四】

○薄墨に書く玉章と見ゆるかな—後拾遺集津守國基の歌。下句「霞める空に歸る雁がね」

○蘇武が文—漢の蘇武が胡國に使して、囚はれの身となつてゐた時、雁に帛書を結びつけて、故郷に消息を送つたといふ故事。〔砧〕の語釋參照。

○君を忘れぬ—旅衣を着るを君にいひかけた。

○上の空なる—行方の知れない。雁の飛ぶ空にかけていふ。

○陸奥紙—昔陸奥から産出した檀紙。遙々の道を陸奥にいひかけ、又遙々を張るの意にとつて紙の緣語とした。

○疊束な—氣がかりな。

○呼子鳥—深山で人を呼ぶやうな聲をして鳴く鳥といふ。若君の名を呼びながら尋ね歩く意に通はせて用ゐた。

○花の行方—若君を花に喩へた。

○風狂じたる—花の緣で落花を誘ふ狂風を出し、四郎が狂氣した意を述べる。

さばやと存じ候

ワキ(子方に)「まつかう渡り候へ

【四】

といひて一同脇座へ行き、子方・ワキ・ワキヅレの順に下に居る。

一聲の囃子にて、後ジテ高師四郎、前の裝束の素袍を脫ぎ、侍烏帽子・掛素袍・白大口を着け、文を竹に挾みて持ち、橋懸一の松に立ちて、

後ジテサシ『薄墨に書く玉章と見ゆるかな。霞める空に。「歸る雁の。翼につけしは蘇武が文。それは故郷の旅衣。君を忘れぬ心ぞかし。『われも主君の御行方。上の空なる御跡を。尋ねや逢ふと遙遙の。陸奥紙に書き殘す(と文を見)。文こそ君の形見なれ。あら覺束なの御身の行方やな

と謠ひながら舞臺に入り、仕手柱際にて、

シテ『呼小鳥

〔カケリ〕

なほ文の謠に合せて舞ふ。

シテ一聲『誘はれし。花の行方を尋ねつつ地『風狂じたる。心かな

【四】

後ジテ高師四郎、春鶯を尋ねあぐみ、狂亂ながら、高野山麓へ辿りついた態で登場。

高師「霞み渡つた空に、雁が列を竝べて行く樣は、宛も薄墨で書いた手紙のやうに見えるわ。さうだ、雁、手紙——といへば、昔支那の蘇武は雁に托して故郷に手紙を送つたが、それは主君を思ふ忠誠の心から出たのであつた。自分も主君を思ふ心は蘇武と變りはなく、行方も知れぬ若君のお跡を尋ね當てることが出來ようかと、遙々の道を、たゞ陸奥紙に書き殘された手紙一つを若君の形見として、遠い旅に出掛けたことだ。あゝ若君は何處へ行かれたことだらう、氣がかりのことだ」

〔カケリ〕

に狂亂の樣を示し、

高師「若君の行方を尋ねあくんで、氣も狂ひさうだ。——

ミ見物人に自己紹介して、三鈷の松のほとりへ來た態で、舞臺は三鈷の松のあたりとなる。

シテ『肌身に添ふこの文を
地『懐紙と、人や見ん

地上歌『麻裳よし。紀の關越えて名に聞きし。紀の關越えて名に聞きし。これや高野の山深み。繁みの木蔭分け行けば。ここも筑波の山やらんとわが方を思ひ出の。昔ゆかしき心にも。なほわが主君戀しやと。夕山松の根はふ道を、いざや狂ひ登らんいざいざ狂ひ登らん。立ちのぼる雲路の。立ちのぼる雲路の。ここはいづく高野山に。來て見ればたふとやな。或は念佛。稱名の聲聲或は鬼鐘鈴の聲。耳に染み心澄みて。物狂の狂ひさむる心や

シテ『いつかさて
地『いつかさて。尋ぬる人を道のべの便りの櫻折あらば。などか主君に逢はざらんと。懇に祈念

○麻裳よ―紀の枕詞。
○紀の關―白鳥の關ともいふ。紀伊・和泉の國境にあつた古關。
○筑波の山―常陸國筑波郡にある。高師の郷國であるから出した。
○夕山松の根はふ―言ふを夕にいひかけた。「根はふ」は根のはびこる意。
○立ちのぼる―四郎の登ると雲の昇るとを兼ねていふ
○鬼鐘―鐘のこと。周禮に「鬼氏爲レ鐘」とある故事より出た語。
○道のべの―人を見るを道にいひかけた。
○折あらば―時節が來れば。櫻を折るといひかけた。

私はこのお手紙を肌身離さず、大切にしてゐるのだが、外の人はたゞの懐紙と思ふことだらう。

かうして、紀の關を越えて、名高いこの高野山の樹木の鬱蒼として生ひ茂つた木蔭へ來ると、この木の茂つた樣が故郷の筑波山に似てゐるやうで、わが故郷の方が思ひ出され、昔の事がなつかしまれるが、それにつけても、若君が戀しくてならない。いや〳〵今更ぐちをいつてゐるよりも、さあ急いでこの松の根の生えはびこつた道を狂ひ上らう」

と山上へ登りついた樣で、

高師「かうして登りついて、高野山を見ると、ほんとに尊い感に打たれることだ。或は念佛稱名の聲、或は鐘や鈴を打ち鳴らす聲が耳に泌み渡り、心も澄みきつて、狂亂の心も靜まるやうだ。――

それにしても、いつになつたならば、尋ねる若君にお會ひする折がくることだらう。いや〳〵機會さへ來れば、若君にお會ひ出來ない筈はない。佛樣によくお祈

【五】

して（と正面に合掌し）。三鈷の松の下に。立ち寄りて休まんいざ立ち寄りて休まん（と平坐す）

子方シテを見て、ワキに向ひ、

【五】

子方「これなる物狂をよくよく見候へば。古里にて召し使ひし高師の四郎と申す者にて候が。某を尋ねてかやうに物狂となりたると思ひ候

ワキ「言語道斷。さらば御名乘り候へ

子方「いや暫く。思ふ子細の候へば。まづ知らぬ由にて言葉をかけて御覽候へ

ワキ「心得申し候

シテこの間に立ちて常座に行く。ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「不思議やな姿を見れば異形なる有樣なり。この高野の内へは叶ひ候まじ。人に咎められぬさきに疾う疾う出で候へ

シテ「これは御利益ともなき仰せかな。人を尋ねてこの山に來るを。唯歸れとは情なや。『かかる

○疾う疾う―疾く疾くの音便。

りをして、そしてあの三鈷の松の下にたち寄つて、一休みしよう」

ミ、三鈷の松へ近づく態で、舞臺は三鈷の松のあたりとなる。

【五】

春滿は高師四郎の近寄つたのを見て、僧に向ひ、

春滿「おゝ、この狂人をよく見ると、故郷で召使つてゐた高師の四郎といふ者ですが、私を尋ねて、このやうな狂人となつたらしく思はれます」

僧「これは意外なことだ。それではお名乘りなさい」

春滿「いやお待ち下さい。少し考へがありますから、とにかく知らない振りをして、言葉をかけて見て下さい」

僧「承知しました」

といつて高師四郎に向ひ、

僧「これは不思議だ。そなたの姿を見ると實に變たなりをしてゐる。そのやうな者はこの高野山の内へ入ることは出來ないのだ。人に咎められない前に、早く出て行つておしまひなさい」

高師「これはお寺にも似合はない、御利益のないことを仰せられる。私は人を尋ねてこの山へ來た者ですのに、たゞ歸れと

○結界―結界地の略。修道の障害を入らしめない地。
○入り定まれる―結界清淨の地に入るを入定にいひかけた。「入定」とは禪定に入ること。高野山は弘法大師の入定した地であるから、かくいふ。

○發心初緣―初めて佛道歸依の志を起した時をいふ。
○人佛不二―人間は成佛すべき性を具へてゐて、悟れば直に佛に爲り得るとの意

結界清淨の地に、入り定まれる高野の山を、歸り出でよの御說教。心得ずこそ候へとよ

ワキ「入り定まれる高野の山とは。耳に留まる言葉なり

シテ「げにもげにも入定と申すことは。憚り多き言葉やらんさりながら。かく世を遁れ身を捨てて。山に入るは順義ならずや

ワキ「さてはおことは人をば尋ねず。われとその身を捨人か

シテ「いや尋ぬる主君も捨人なれば。出家の御供申さん爲。『われも憂き身を捨人なり

ワキ『さやうの出家の望みならば。何とて樣をばかへざるぞ

シテ「姿を改めぬこそ發心初緣の形なれ

シテ「まこと發心初緣ならば。人佛不二の道は知

は情ないお言葉です。殊にこゝは淸淨な佛境として、大師の入定遊ばされた所で、高野山と申せば、入り定まるといふことに緣の深い所ですのに、その山を歸り出よとの仰せは、合點の參らないことです」

僧「高野山に入り定まるとは、凡夫がこのやうな詞を用ゐるとは、耳觸りなことだ」

高師「いかにも大師の入定に擬へて、このやうなことを申すのは、恐れ多いことでございませう。しかし、このやうに世を遁れ身を捨てて山に入るのは、佛の御敎へに適つたことではありませんか」

僧「それでは、そなたに人を尋ねるのではなく、自分の心から出家するのか」

高師「いゝえ、私のお尋ねする主君も御出家なされたので、私も出家のお供をしようと思つて、この憂き世を遁れ身を捨てたのです」

僧「そのやうに出家を望むのなら、何故姿を變へないのだ」

高師「姿を變へてゐないのが、はじめて佛道歸依の心を起した時の姿でございます」

僧「成程、ほんとに佛道歸依の心を起した者ならば『人間も佛も變りはない、この

○大師　弘法大師。
○内身三昧　三昧はSamadhi. 心を一境に安住せしめて動かないこと。内身は肉身の誤りで、弘法大師は肉身のまゝ三昧境に入り、人佛不二の實證を示したとの意。盛衰記「弘法入唐事」に「晝夜慈心萬民、住菩賢悲願、肉身證三昧、待慈氏下生」
○生ありながら―生身のまま。
○生死涅槃　生死即涅槃。生死の變化ある身のままで涅槃に入ること。
○昔薩埵の印明を授かり―盛衰記、前掲の文の前に「我昔遇薩埵、親悉傳印明、發無比誓願、陪邊地異域」。薩埵は菩薩に同じ。印明の印は佛菩薩が法德の標幟として手指で色々の形を結ぶこと。明は口に陀羅尼即ち眞言を唱ふること。
○慈氏　彌勒菩薩のこと。
○下生―この世に生まれること。
○慈尊三會の曉　慈尊は慈氏と同じ。彌勒は釋迦入滅後、五十六億七千萬年、人間界に下生し、三度の法會を開き、一切衆生を濟度するといふ。これを三會の曉

れりや

シテ「こと新しき仰せかな。忝くも大師の御身は。内身三昧目前なり。これぞ正しく人佛不二

ワキ「おう殊勝なりげにも大師は。『生ありながら生死涅槃に

シテ『入り定まれる高野の奥

ワキ『今この山にまのあたり

シテ『昔薩埵の印明を授かり。慈氏の下生を待ち給ふ事。人佛不二の妙體なり

地『大師の待ち給ふは。慈尊三會の曉。われは三世の。主君を尋ねてこの高野山に參りたり

シテ舞臺の眞中に行き下に居る。ワキも坐す。

【六】

地クリ『抑もこの高野山と申すは。帝都を去つて二百里。人家を離れて。無人聲

シテサシ『されば末世の隱所として。結界淸淨の道

身この儘佛となり得る道がある』といふことを知つてゐるか」

高師「これは今更らしい分りきつたことを仰せられる。忝くも弘法大師は肉身のまま三昧境にお入りになり、眼のあたりに、人間と佛と變りがないといふ實證をお示しなされたぢやありませんか」

僧「おゝ感心なことをいふ。いかにも大師は生身のまま佛果を證得遊ばされたのだ」

高師「その大師の入定せられた高野山の奥を今眼のあたり拜してゐるのです。實に大師は昔菩薩から印形を結び陀羅尼を誦する祕法を授かり、五十六億七千萬年の後に彌勒菩薩がこの人間界へお生まれになる時をお待ちになつてゐる、人間と佛陀と變りのないことを實證せられたありがたい方です。

さう申せば、大師がお待ちになつていらつしやるのは、彌勒菩薩が人間界に下生して、龍華樹の下に三度の法會をお開きになる時ですが、私は三世の緣を契つた若君をお尋ねして、この高野山に參つたのです」

【六】だいつて、次のやうな曲舞を謠ひ舞ふ。

高師「一體この高野山と申す所は、帝都か

といふ。盛衰記に「弘法大師の高野の石室に籠り給ひしより以來、五十六億七千萬歳の春秋を隔てて、慈尊三會の曉を待ち給ふこそ遙かなれ」

【六】○抑もこの高野山―盛衰記「高野山事」に「彼高野山は、帝城を去て二百里、鄕里を離れて無二人聲一、晴嵐梢を鳴して夕日の影も閑也」○無人聲―幽邃なこと。法華經に「寂寞無人聲」○この三鈷の松は―盛衰記「弘法入唐事」に「空海和尙行年卅四、平城天皇御宇、大同二年丁亥八月に、歸朝の船を泛ぶる日、發願祈誓して曰、所學の教法祕密撰所感應の地あらば、此三鈷到點せよとて、日本に向つて抛上げ給ふに、遙に雲中に飛入つて、東を差て去にけり」○三鈷―三叉の金剛杵。金剛杵はもと印度古代の武器で、煩惱を破る菩提心の表象としてある。○舊記―三鈷松は後鳥羽上皇御作大師傳、仁和寺濟遷僧正の大師傳等には見えてゐるが、元亨釋書、本朝高僧傳には見えない。○眞如平等の松風―眞如の

場たり

地『中にもこの三鈷の松は。大同二年の御歸朝以前に。わが法成就圓滿の地の。しるしに殘り留まれとて。三鈷を投げさせ給ひしに。光とともに飛び來り。この松の梢に留まれるシテ『抑も諸木の中にわきて

地『松に留まるその例。千代萬代の末かけて。久しかれとの御誓願。委しく舊記に。載せられたり

地クセ『されば にや。眞如平等の松風は八葉の峯を。靜かに吹き渡り。法性。隨緣の月の影は八つの谷に曇らずして。誠に三會の曉を待つ如くなり。さてこそ卽身成佛の相を現し入定の地を示しつつ（と立ちこれより仕科）。深々たる奥の院。深山鳥の聲澄みて。飛花落葉の嵐まで。無常。觀念を勸

ら二百里を距たり、人家を離れて、あたりには人聲もない、實にもの靜かな、末世澆季のこの世には珍しい所で、佛寺の境内として誠に適はしい清淨な場所である。殊にこの三鈷の松は、弘法大師が入唐せられて、大同二年に御歸朝になる前『わが佛法の成就する完全な土地のしるしになるやうに、適當な場所に留まれ』といつて、三鈷をお投げになると、光とともに飛び來つて、この松の梢に留まつたのである。それにしても、色々木の種類のある中で、殊更松に留まつたといふことは、千年萬年久しく變りなく榮えるとの意味を含められたもので、この事は委しく舊記に載せられてゐる。

このやうなわけで、眞如の佛法が平等一樣に行はれるやうに、松風が高野八峰に普く靜かに吹き渡り、眞如の法性が隈に隨つて色々に形を現すやうに、月が高野八谷に普く照り渡つて、宛も彌勒菩薩が三度の法會をお開きなる時を待つてゐるやうである。殊に奥深い所にある奥の院は、この身このまゝ佛となり得る實相を證して、大師が入定せられた廟所の地を示してゐる。そして、この深山の鳥の聲

佛法の平等一様に行はれることを、松風の吹き渡らぬ方のないのに喩へた。
○八葉の峰―高野山をいふ。盛衰記「高野山事」に「金剛八葉峰の上、祕密瑜伽の道場也、一度參詣の輩は、永く三途の苦を離る。……八の尾八の谷に、衆生本覺の心蓮華を像り、或は上り或は下る」
○法性隨緣の月　眞如法性が緣に隨つて、色々に形を現すを、月影が萬象に宿るのに喩へた。
○即身成佛―この肉身そのまゝ佛となること。
○奥の院　大師の入定した廟所のある所。
○無常觀念を―深山鳥の聲、飛花落葉の嵐までが、世の生滅無常を觀察想念せしめるたよりとなるとの意
○又常住の　無常の姿かやがて常住不變の佛道に入る便りとなるとの意。
○皆令佛道―法華經方便品に「皆令レ入二佛道一」とある入の字を誤脫したのである
○圓覺　圓滿なる靈覺の義で、佛果と同じ。
○雲霞―群集の多いことを雲霞に喩へ、雲霞のかゝる高野と續けた。

むるこれとても又常住の。皆令佛道圓覺のよしを明かすなり

シテ『然れば時移り事去りて

地『四季折々のおのづから。光陰惜しむべし。時人を待たざるに。貴賤群集の雲霞。かかる高野の山高み。谷嶺の風常樂の夢さめ。法の稱名妙音の。心耳に殘り充ち滿ちて。唱へ行ふ聞法の。聲は高野にて靜かなる靈地なりけり

【七】

地『尋ねきし（と常座へ行き）

〔中舞〕

を舞ひ、引續き謠に合せて舞ふ。

シテワカ『霞の奥の。高野山

地『時しも春の

シテ『花壇場

地『花壇場月傳法院。紅葉三寶院よりも猶深く。

は澄み渡り、嵐は花や葉を散らして、人生無常の觀念を敎へてゐるが、そのことがやがて常住不變の佛道に入り、佛果を得せしめる便りとなつてゐるのである。大師入定の後、既に幾多の年月が過ぎたが、その間四季折々の移り變るにつけて、時の大切なこと、人生のはかないことを知つた貴賤の人々は、雲霞の如く多勢、この高い高野山に登り、山風谷風を聞いてはこの現世が常樂でないことを悟り、稱名讀經のありがたさを心に泌み〳〵と感じて、稱名讀經する聲は、高らかに高野の山に滿ち〳〵てゐるが、靈場は依然として靜寂を保つてゐるのである。

【七】〔中舞〕

高師四郎はまた佛德を稱讃し、舞を舞ひ、更に舞をつゞけて、

高師――

『われ計らずも尋ね來し、
霞の奥の高野やま。
佛德高きお山とて、
四季折々の眺めにも、
わきてめでたき景色あり。
春咲く花のめでたきは、
金剛峯寺の壇場よ。
夏照る月のをかしきは、

○常樂の夢さめ―無常苦惱の現世を常住安樂と思ふ迷夢がさめる。
○聞法―佛法の教を聞く事
○聲は高野にて―聲は高きを高野にいひかけ、聲は高いが地は靜かであるといふ意に用ゐた。
【七】
○花壇場―高野山内で四季折々の景色の勝れた所を擧げる。壇場は金剛峰寺の主な建物のある所。檜本には壇上とある。
○傳法院―鳥羽上皇の勅命により、大治年中に建立せられたもの。
○三寶院―蓮華谷にある寺坊。
【八】
○捨てさせ申すべき―出家させられない。

雪は奥の院。かれよりもこれよりも。いつも常磐の三鈷の松蔭に、立ち寄る春の。風狂じたる。物狂物狂。あら恐れや

シテ『高野の内にては

地『高野の内にては。謠ひ狂はぬ御制戒を。忘れて狂ひたり。許させ給へ御聖。許させ給へ御聖

と舞ひて常座に立つ。

【八】

子方(シテに)「やあいかにあれなるは高師の四郎にてはなきか。何とてこれまで來りたるぞ

シテ(子方を見て)「や。あれにましますは春滿殿にて御座候か。何とてこれまで來るとは。あら情なの御言葉や。たとひ御身を捨て給ふとも。いかでか捨てさせ申すべき(上下に居り)。御心を靜めて聞し召せ。平松の御名字を誰か繼がせ給ふらん。まづこの度は御歸りあつて。さてその後はとも傳法院に籠まりぬ。
秋の紅葉は三寶院、
冬降る雪は奥の院。
その折々にまされども、
なほかれよりもこれよりも、
四季のけぢめの夏になく、
めでたきものは常磐なる、
三鈷の松のながめなり。
その松蔭に立ち寄れど、
風に狂へる花のごと、
心狂へるわれなれや』

(二物狂しの舞を舞ひて、あれに歸り、

高師「あゝ恐ろしいことだ。この高野山の境内では謠ひ狂つてならないといふ御制戒であるのに、それを忘れて、つい物狂をやつてしまひました。どうかお僧さま、お許し下さい」

【八】

春滿「やあそこにゐるのは、高師の四郎ではないか。どうしてこゝへ來たのだ」

高師「やあ、そこにお出でになるのは春滿樣でございますか。どうしてこゝへ來たとは餘りな、お情けないお言葉です。たとひ御自分勝手に御出家遊ばしても、どうしてそのまま、おさせして置くことが出來ませう。どうかよくお心を靜めてお聞き下さいませ。あなたが御出家遊ばし

かくも。『御意をばなどか背かんと(立ち)地』御袖にとりつきて(と子方へ行き)。三世の契り朽ちせねば。これまで尋ね紀の國や。高野の山の陰頼む主君に逢ふぞ嬉しき(と下に居りしをる)地(キリ)』かくあるべきにあらざれば。高野の山を立ち出でて(と立ち)。語り慰め古里に。御供申し歸りつつ(と子方を立たせ)。ともに行末榮えけり。これも御法を弘めにし。大師の惠みなりけりや。大師の惠みなりけり

「ともに行末榮えけり」と子方シテに伴はれたる心にてまづ幕に入り、シテ仕手柱際にて開き留拍子を踏む。

たら、誰が平松の御名字をお繼ぎになるのです。どうかこの度はお歸りになつて下さいませ。その上で、この後はどう遊ばさうとも、お心に背きは致しませんから」

と春滿の袖にとりつき、

高師「三世の契りが盡きず、ここまでお尋ねして來まして、高野山のお蔭で、わが主君にお逢ひすることの出來たのは、ほんとに嬉しうございます」

と喜ぶ。しかし、いつまでもかうしてはあられないので、高師の四郎は高野山を立ち出で、道すがら色々話をして若君を慰めながら、お供をして故郷に歸り、主從ともに末繁昌した。これといふも、佛法を弘布せられた弘法大師のお惠みによるのである。

〔考異〕

諸流（觀寶喜）

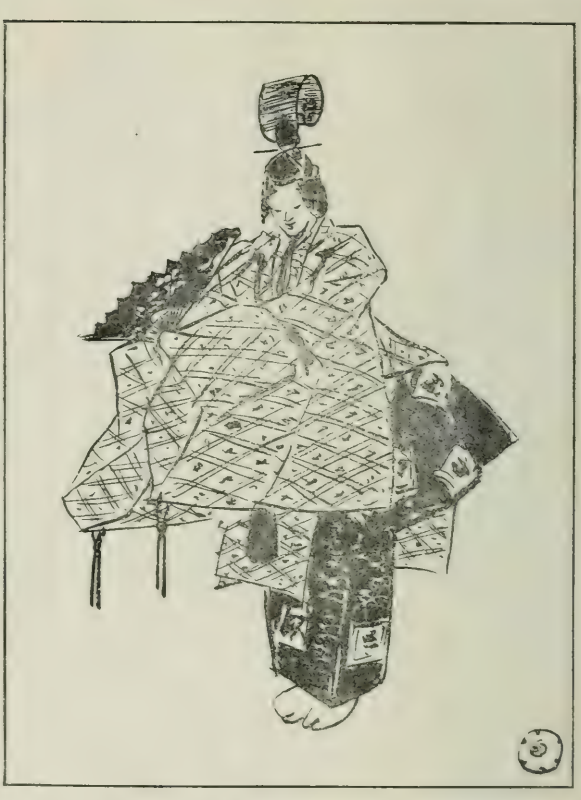
寶生・喜多は次に擧げる元祿本に略〻同じ。

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ名乘の前に、(元ワキ次第「影頼むべき行すゑやゝ若木の花をそたてん)。ワキ「これは常陸の國の……御子息の(元一人)御座候が未だ幼くましますにより某に傳り立て申せとの(元彼御方をは某に預け置れ候由)御遺言……離れ申さず春滿殿を傳りたて申し(元ナシ)候久(元

あたり近き觀音寺と申所に。平松殿の御位牌を立置申て候。今日は平松殿の(元ナシ)御忌、元命)日にて候間御寺に參ら(元り燒香せ)にやと

【二】シテ「あら思ひよらずや……見うずるにて候(元ナシ)それ受け難き……いつの時をか頼むべき(元思ひ見ん)然るに……七世の父母成佛すといへり(元るなれは)この身を……生々の親を助けんこと(元執心の大慶)これに如かじ……父とも母とも頼みつれ(元るに)……乳房の恩の(元を出し)父母に……(元御)名殘こそ惜しう……知らせ申さん(元唯名殘こそ惜う候へ)墨衣……濡れけり(元と)。地キ雲書き殘されし(元遊ばれたる)言の葉の……上歌「恨めしの……三世の契りなるものを(元道の末あらは)……　【三】ワキ雲雲「浮世の夢も……御法を頼むなり(元昨日重し花の袖)。〳〵今日墨染の袂かな)。ワキ「これは高野山の(元住)僧にて……いづくとも知らず來る給ひ出家の御望みの由にて(元ナシ)愚僧を御頼み候へども……日を送り候(元間。師弟の契約をなし申て候)又今日は三鈷の松に伴ひて(元御供申)……　【四】シテサシ「薄墨に……君を忘れぬ(元忠勤の)心(元君邊に歸り上雁札)ぞかし……陸奥紙に書き殘す(元送る)文こそ……　【五】子方「これなる物狂を……ワキ「言語道斷……子方「いや暫く……ワキ「心得申し候(元ナシ、元シテ「いかに申候。三鈷の松とは此木の事にて候か。ワキ「さん候三鈷の松とは此木の事にて候。ワキ「不思議やな見れば異形の有樣なり(元そも御身はいつくより來る人そ。シテ「實よ、御覽せられて候。是は放下にて候。歌をうたひ放埒したる狂者にて候。ワキ「左樣の狂者ならは)この高野の内へは……シテ「これは御利益とも……唯歸れとは(元御御情なやの(元人をも尋ひとつは又)かゝる結界……ワキ「(元けうかる事を申物哉)入り定まれる高野の山とは(元言中に響)耳に留まる言葉なり(元れり)。シテ「げにも〳〵入定と申すことは(元入定まれるとは入定よなふ。忝も高野の内にて入定と申事は實も〳〵)憚り多き山に入る(元高野に參る)は……シテ「(元いや)姿を改めぬるこそ……　【六】地クセ抑もこの……帝都(元城)を去つて……この松(元か枝)の梢に留まれる(元り)。シテ「抑も(元然れは)諸木の……地「松に留まる……久しかれとの御誓願(元方便)……栽せら(元あらは)れたり。地クセ「されば……さてこそ(元然れは)即身成佛の……無常觀念を勸むる(元の粧ひ)……圓覺のよしを明かすなり(元相をなしたまふ)。シテ「然れば時移り事去りて(元るや)……　【八】子方「やあいかに……來りたるぞ(元いかに御望に申へき事の候。ワキ「何事にて候そ。子方「是成物狂ひを能々見候へは。古郷に留め置たるめのとにて候)。シテ「や(元不思議やな)あれにましますは(元主君)春滿殿にて御座(元ナシ)候か(元御跡をはる〳〵尋參て社候へ)何とてこれまで來るとは(元御供には召具せられ候はぬそ)あら(元御)情なの御言葉や(元候)。たとひ御身を捨て給ふとも……御意をばなどか背かんと(元ナシ、元ワキ「是はふしきのきえんかな。偖ねことの國はいつくそや。シテ「常陸の國筑波の里。ワキ「父の名字は。シテ「平松の何某。ワキ「又おことか名をは。シテ「高師の四郎。ワキ「何れも誠か。二人「さん候)。地「御袖にとりつきて(元ナシ)三世の契り朽ちせねば……地キリ「かくてあるべきに……大師の惠みなりけり(元本より誠の狂氣ならず。主君の爲なれば。やかてもとゆひ押切て。こき墨染に身をやつし。主君と同じ捨人の御供申すこゝろさし實主從の道とかや〳〵)



杜若（かきつばた）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 三番目 單式夢幻能

【人物】 ワキ 旅僧、シテ 里女（杜若の精）

【所】 三河國 八橋

【時】 （四月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。紀河原觀進猿樂記に寛正五年四月十日普阿彌の演じたこと、觀元日記に寛正六年二月廿八日觀世の演じたこと、飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日觀世又三郎が演じたこと、その他桑田口勸進猿樂記等に演能のことが屢々見えてゐる。古くからもて囃されたものであるらしい。言經卿記にも文祿四年三月卅日本曲註釋の事が見えてゐる。

【梗概】 諸國一見の旅僧が東國行脚の途中、三河國八橋で、美しく咲き揃つた杜若の花を眺めてゐると、一人の女性が現れ出て、昔在原業平がこゝに來て、「かきつばた」の五字を句の頭に置いて、都の妻を忍んだ歌を詠んだ故事を語り、旅僧に勸めてわが家に泊らせる。かの女はやがて冠・唐衣を着けて現れ出たので、僧が驚いて、その素性を尋ねると、自分は杜若の精であると打明け、業平は菩薩の化現で、自分はその詠歌によつて成佛したものであるといひ、伊勢物語について語り、舞を舞ふ。

【出典】伊勢物語を題材としたもので、

昔男ありけり。その男身を用なきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき國求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりして諸共に行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは水行く河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいひける。その澤のほとりの木の蔭におり居て、かれ飯くひけり。その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつはたといふ五文字を、句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければよめる。

唐衣きつゝなれにし妻しあれば、はるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人かれ飯の上に涙おとしてほとびにけり。

とあるのを主題とし、なほ物語の著名な文章を引いて文の綾としたものである。その引用文は語釋に掲げることとする。

【概評】本曲は伊勢物語を主材とし、植物の精魂を主人公としたものである。植物の精魂を主人公とすることは、「草木國土悉皆成佛」の佛教理から出たもので、この種のものに〔墨染櫻〕〔芭蕉〕〔藤〕〔六浦〕などあるが、いづれも初め里女として出て、中入した後、精靈として現れ出る複式能であるのに、これは里女として登場したまま、物着があるだけで、中入しない單式能の形をとつてゐる。それで、シテが「眞はわれは杜若の精なり」といはなければ、里女であるか植物の精靈であるか、殆ど差別がつかないのである。夢幻能の中には、複式の形をとらず、初めから亡靈が現世の人と同樣な姿で現れる〔松風〕などもあるが、本曲はそれらよりもなほ一層模糊としてゐるのである。そして、夢幻能といへば〔松風〕のやうな單式のものにしても、普通の複式のものにしても、ワキの讀經回向によつて、シテの亡靈・精魂が成佛することに脚色してゐるのであるが、本曲ではそれもはつきりしてゐない。否、本曲のシテ杜若の精が成佛したのは、伊勢物語の主人公在原業平の詠歌の功德によるものであつて、この曲のシテは、「業平は極樂の、歌舞の菩薩の化現なれば、詠み置く和歌の言葉までも、皆法身說法の妙文なれば、草木までも靈の惠みの、佛果の緣を弔ふなり」といつてゐるのである。卽ち本曲のワキはたゞシテを登場せしめる爲の所緣に過ぎず、旣にシテを登場せしめた後は、作者は殆どワキの存在をも忘れて、ひたすら業平を讃歎し、「これぞ卽ち歌舞の菩薩の、假に衆生と業平の、本地寂光の都を出でて、普く濟度、利生の、道に、遙々來ぬる唐衣」といつて、全く佛菩薩として崇仰してゐるのである。これは當時和歌を極度に尊重した結果、その名手を唯人ならぬ佛菩薩の化現と仰ぐに至つた

ものであるが、それにしても、源氏物語の作者は女性であり且その作品が小説である爲に、死んで地獄の苦を受けてゐるものと見た〔源氏供養〕に比べると、その距りの餘りに甚しいのに驚かされるのである。それはともあれ、本曲は杜若の精靈に歌聖業平の氣品を添へしめたもので、漂渺たる高雅な趣を具へた佳作たるを失はない。

【一】

○洛陽―京都。

○行脚―僧の修行の爲の旅行。

○美濃尾張―「身の終り」といひかけた。

【二】

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの間は都に候ひて。洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りて候。又これより東國行脚と志し候

ワキ道行『夕々の假枕。夕々の假枕。宿はあまたに變れども。同じ憂き寢の美濃尾張。三河の國に着きにけり三河の國に着きにけり

「同じ憂き寢の」と右の方に向き二三足出で、またもとに歸りて、三河に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候間。程なう三河の國に着きて候。又これなる澤邊に杜若の今を盛りと見えて候。立ち寄り眺めばやと思ひ候

舞臺の眞中に出で、

【二】

舞臺は初め京都で、ワキ旅僧登場。

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。そしてこの間中は都にゐて、京の名所舊跡を殘らず見て歩きました。それでこれからは又、東國の方へ行脚に出掛けようと思つてゐるのです」

ミ見物人に自己紹介をして、

僧「夕暮になる毎に泊まつて、幾くの夢を結んだ宿は、隨分數多くあるが、どこに泊まつても、旅の辛さの離れる時とてはなく、それにつけても、假の宿に譬へられた人生の果敢なさを泌み〴〵と感じながら、いつの間にか三河國に着いた」

ミいつてゐるうちに、旅僧は三河國へ着いた心で舞臺は三河國八橋となる。

僧「道を急いだので、存外早く三河國に着きました。（ミいつて八橋の景を眺め）おゝ、この澤には杜若が今眞盛りに咲いてゐる。傍へ寄つて眺めませう」

ミいつて杜若の傍へ寄り、

○草木心なし―草木は非情である。
○顔佳花　杜若の異名。

【二】

ワキ『げにや光陰とどまらず春過ぎ夏も來て。草木心なしとは申せども。時を忘れぬ花の色顔佳花とも申すやらん。あら美しの杜若やな

といひて脇座に行きかゝる。

【三】

シテ杜若の精、面若女・鬘・鬘帶・襟赤白・着附摺箔・色入縫箔腰卷・唐織着流・腰帶・扇の裝束にて、幕より出ながら、

シテ(呼掛)「なうなう御僧。何しにその澤には休らひ給ひ候ぞ

ワキ(脇座にて)「これは諸國一見の者にて候が。杜若の面白さに眺め居て候。さてここをばいづくと申し候ぞ

シテ「これこそ三河の國八橋とて。杜若の名所にて候へ。さすがにこの杜若は。名に負ふ花の名所なれば。『色も一入濃紫の。なべての花のゆかりとも。思ひなぞらへ給はずして。とりわき眺め給へかし。あら心なの旅人やな

○八橋―三河國碧海郡牛橋村。今八橋の字名が殘つてゐる。
○なべての花―ありふれた花。
○ゆかり　紫色の異名。緣りの意にかけていふ。
○心なし―心なきの略。思慮の足りない、無風流な。

僧「草木には心がないといはれてゐるけれど、時の歩みの絶間なく、春が過ぎて夏が來ると、時節を間違へずに、このやうに奇麗な花が咲く。成程杜若は異名に顔佳花とやらいふ通り、ほんとに美しいことだ」

と感歎として見惚れてゐると、

【二】

シテ杜若の精が里女の姿をして登場。

精「もうしお僧さま、どうしてその澤にお休みになつていらつしやるのです」

と呼び掛ける。

僧「私は諸國を遊歷してゐる者ですが、この杜若が面白いので眺めてゐるのです。して、こゝは何といふ所です」

精「これこそ三河國八橋と申して、杜若の名所です。さすがにこゝは有名な杜若の名所でございますから、紫の色も他所のものとは一際勝れて居ります。ありふれた花と同じやうな紫だとは思はないで、よく心して御覽なさいませ。たゞの花と同樣にお思ひになるとは、ほんとに無風流な方ですね」

○古歌―解說に擧げた「からころも」の歌を指す。
○伊勢物語―わが國最古の歌物語。大部分業平の作歌を中心とした物語であるので、業平の自叙傳の如くにいひ傳へられた。本曲も亦その心で取扱つてゐる。
○蜘蛛手―蜘蛛の手は八本あるので、河水の八方に分れて流れるのを喩へていふ。
○五文字を句の上に置きて―短歌の毎句の頭字に五文字の一つ一つを充てて詠むことをいふ。このやうな歌を折句といふ。
○唐衣着つつなれにし―唐衣を着馴れるとの意により「唐衣着つつ」を「馴れにし」の序としたのである。妻(褄)、遙々(張る)來(着)ぬる、いづれも衣の縁語。
○在原の業平―平城天皇御子阿保親王の第五子で、兄行平と共に在原姓を賜はつた。左近衛中將で、古今に勝れた歌人。前出「唐衣」の歌は、伊勢物語には「昔男ありけり」と書き出して、その男の詠歌としてゐるが、古今集には業平の詠歌とし一擧げてゐる。
○心の奥深き―歌に寄せる心の奥深いことを陸奥にい

ワキ「げにげに三河の國八橋の杜若は。古歌にも詠まれけるとなり。いづれの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ

シテ「伊勢物語に曰く。ここを八橋といひけるは。水行く河の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるなり。その澤に杜若のいと面白く咲き亂れたるを。或人かきつばたといふ五文字を句の上に置きて。旅の心を詠めといひければ。『唐衣きつつなれにし妻しあれば。遙々來ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原の業平の。この杜若を詠みし歌なり

と舞臺に入りて常座に立つ。

ワキ『あら面白やさてはこの。東のはての國々までも。業平は下り給ひけるか

シテ「事新しき問ひ事かな。この八橋のここのみか。猶しも心の奥深き。『名所名所の道すがら

僧「なる程、三河國八橋の杜若は古歌にも詠まれてゐるといふことですが、あれはどういふ歌人が詠んだのでしたか知ら、伺ひたいものですが」

精「それは伊勢物語にあるのでございます。こゝを八橋を申したのは、川の水が蜘蛛の足のやうに八方に分れてゐるので橋を八つ架けてあるから、さう申すのでございます。その澤に杜若が非常に面白く咲き亂れてゐるのを見て、一所に旅をした一人の人が、この『かきつばた』といふ五文字を句の頭に置いて、旅の心をお詠みなさいといはれたので、――

『カらころも キつゝなれにし ツましあれば ハるばるきぬる タびをしぞ思ふ』

(親しくしてゐた妻が都にゐるので、遠く離れて來た旅をしみ〴〵淋しく思ふ)

とお詠みになりました。卽ち在原業平がこの杜若をお詠みにたつたのでございます。

僧「あゝ面白い、それではこのやうな遠い國までも、業平は下られたのですか」

精「まあそのやうな世間に知れきつたことをお尋ねなさいます。業平は。この八橋ばかりでなく、たほもつと遠くの國々

ひかけた。
○とりわき心の―是非とも行つて見ようと心掛けてゐたとの意「掛けて」渡りし」は橋の縁語。
○思ひの色を―「旅をしぞ思ふ」の句を轉じて、思ひの色と續けた。思ひの色は、思ふ心、深い心といふ意。
○昔に業平―昔になりを業平にいひかけた。
○かたみの花―業平の形見とも見るべき花。
○今ここに在原の―今ここにありを在原にいひかけた
○跡な隔てそ―在原の古跡を心隔てなく弔へとの意。杜若の「かき」を垣の意にとつて、その縁語「隔て」の語を用ゐたのである。
○淺からず契りし人―澤邊の水の淺からず、淺からず契りしと續けた。女と深く契つた人、業平を指す。
○蜘蛛手に物ぞ―心の千々に思ひ亂れる意。續古今集讀人不知の歌に「戀せよとなれる三河の八橋の蜘蛛手に物を思ふころかな」
○やがて馴れぬる心かな―歌の句「着つゝ馴れにし」に擬へて綴つた。

ワキ『國々ところは多けれども。とりわき心の末かけて
シテ『思ひ渡りし八橋の
ワキ『三河の澤の杜若
シテ『遥々來ぬる旅をしぞ
ワキ『思ひの色を世に殘して
シテ『主は昔に業平なれども
ワキ『かたみの花は
シテ『今ここに
地上歌『在原の。跡な隔てそ杜若。跡な隔てそ杜若。澤邊の水の淺からず。契りし人も八橋の蜘蛛手に物ぞ思はるる。今とても旅人に。昔を語る今日の暮やがて馴れぬる、心かなやがて馴れぬる心かな
【三】
シテ「いかに申すべき事の候

までも、方々の名所を尋ねてお出でになつたのでございまして……―
僧「諸國到る所に名所が多いのですが、殊にこの八橋に心をとめて……―
精「はい、この八橋が大層お氣に召しまして……」
僧「それで、この三河の澤の杜若に思ひを托して……」
精「――『遥々來ぬる旅をしぞ思ふ』といふ情のこもつた歌をお詠み遣しになつたのでございます。そして、歌の主業平は今は遠い昔の人となられましたけれど、歌に詠まれた形見の杜若は、今もこゝに殘つてゐるのでございますから、業平の古跡を心隔てなくお弔ひ下さいませ。さう申せば、京の女と深い契りをお結びになつた業平は、この澤邊の杜若を見て、なつかしさに思ひ亂られたのでございますが、今この夕暮、旅の方に昔話をしてゐる私も、いつの間にやら、旅の方に馴れ〳〵しくなつてしまつたことでございます」
【三】
精「もうし、お僧樣―

○冠唐衣―冠は男子禮裝のかぶりもの、唐衣は女子禮裝に裝束の上に被る短い衣
○臥處―臥る室。ここでは賤の宿で、家そのものをいつたのである。
○透額の冠―額にすかしのある冠。元服した男子で未だ十六に達しないものが用ゐたもの。
○高子の后―清和天皇の中宮、二條の后と申す。后入内の前業平と契りを結ばれたと伊勢物語に見ゆ。「右近」參照。
○豐の明―毎年十一月新嘗祭の行はれた翌日、百官を召して賜はる饗宴。
○五節の舞―豐の明の節會に舞姫の奏する舞曲をいふ從つて業平は舞に加はらない筈である。業平が五節の舞を拜觀する時に着たといふ意に解すべきであらう。五節の舞の事「國栖」參照。
○精―精靈、精魂。

ワキ「何事にて候ぞ

シテ「見苦しく候へども。わらはが庵にて一夜を御明かし候へ

ワキ「あら嬉しややがて參り候べし

庵に入りたる心にて、ワキ下に居る。

シテ後見座にくつろぎて【物着】。唐織を脱ぎ、初冠（緌附け）を冠り、長絹を着て、常座に立ち、

シテ「なうなうこの冠唐衣御覽候へ

ワキ「不思議やな賤しき賤の臥處より。色もかかやく衣を着。透額の冠を着し。これ見よと承る。こはそも如何なる事にて候ぞ

シテ「これこそこの歌に詠まれたる唐衣。高子の后の御衣にて候へ。又この冠は業平の。豐の明の五節の舞の冠なれば。かたみの冠唐衣。身に添へ持ちて候なり

ワキ「冠唐衣はまづまづ置きぬ。さてさて御身は

僧「何です」

精「むさくるしうございますけれど、私の家に一夜お泊まりになりませんか」

僧「それは忝い、早速伺ひませう」

里女は旅僧をわが家へ連れて歸つた心で、舞臺は里女の家の中になる。

シテ里女は冠、唐衣を身につけて、

精「もうし、この冠・唐衣を御覽なさいませ」

僧「これは不思議だ。このやうな粗末な里人の家であるのに、輝くばかりの美しい衣を着、透額の冠を被つて『これを見よ』と仰しやるのは、これは又どうしたことなのです」

精「これが『杜若』の歌に詠まれた唐衣で、高子の后のお召しになつた衣でございます。又この冠は業平が豐の明の節會の五節舞を拜觀する時に被られたもので、昔の形見の冠・唐衣ですから、身につけて持つてゐるのでございます」

僧「冠や唐衣のことは兎も角、一體あなた

○植ゑ置きし—本曲の末に記す。
○歌舞の菩薩—天樂を奏し歌舞して、如來を讃歎し、極樂往生の人を賞揚する菩薩。鷲鷲合戰物語にも「かの中將（業平）は極樂の歌舞の菩薩、正に觀音の化身なり。内には密かに誓ひの道を守ると雖も、外にはみだりに色を貪るに似たり」
○化現　神佛が姿を變へてこの世に現れること。
○法身說法の妙文—和歌の言葉までが法を說く聲であるからとの意。止觀に「風音水音、我等言語、鳥鳴聲、何者不二三諦佛性聲一、是曰二法身說法一」
○草木までも—草木までも說法を受けて成佛する意。
○昔男—業平のこと。伊勢物語の每段「昔男ありけり」の句から始まつてゐるので昔男を業平と解した。
○衆生と業平の—衆生となりてといひかけた。
○本地—化現しない前の眞實身。
○寂光の都—常寂光土。淨土。
○濟度—衆生を苦海から濟つて、極樂の彼岸に渡すこと。
○利生　衆生を利益する事

如何なる人ぞ

シテ「眞はわれは杜若の精なり。植ゑ置きし昔の宿の杜若と。詠みしも女の杜若に。なりし謂れの言葉なり。又業平は極樂の。歌舞の菩薩の化現なれば。詠み置く和歌の言の葉までも。皆法身說法の妙文なれば。草木までも露の惠みの。佛果の緣を弔ふなり

ワキ『これは末世の奇特かな。正しき非情の草木に。言葉をかはす法の聲

シテ『佛事をなすや業平の。昔男の舞の姿

ワキ『これぞ卽ち歌舞の菩薩の

シテ『假に衆生と業平の

ワキ『本地寂光の都を出でて

シテ『普く濟度

ワキ『利生の

僧「私はほんとは杜若の精です。かの『植ゑ置きし昔の宿の杜若』と歌に詠まれたのも、杜若が女になつた謂れを申したものでございます。それから又、業平は極樂の歌舞の菩薩が假にこの世に現れて來られたのでございますから、そのお詠みになつた和歌の言葉までが、佛法を說く經文と同じ利益がありまして、業平の歌に詠まれれば、そのお蔭によつて、草木までも成佛の緣を得るのでございます」

僧「これは末世の今の世に珍しいありがたいことだ。心なき草木とまさしく詞を交はし、佛說を語り合ふことが出來ようとは」

精「佛事供養の效驗によつて、昔の業平の舞姿をそのまゝ現して參りましたので……」

僧「それでは、この業平が卽ち歌舞の菩薩の……」

精「假に人間となつて、その御本體の住家である極樂淨土を出て、普く衆生を利益濟度せん爲に、この娑婆へ遙々とお出でになつたのでございます。——

○遙々來ぬる―遙々この世へ來たとの意を歌の句の「はるゞ〳〵」にいひかけた。
○別れ來し跡の恨みの―前文寂光の都を京の都にとりなし、京を出て遙々と來た恨みを述べる。
○袖を都に返さばや―旅より都に歸りたいとの意を、舞の袖を飜す意に兼ねて用ゐた。

【四】
○この物語―伊勢物語。
○信夫山―思ひの露の緣で忍草といひかけ、「しのぶ」の音によつて信夫山といひ伊勢物語の歌「信夫山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」を引き、通ふ道より芝に續け、芝の葉を始めのはにいひかけた。信夫山は岩代國信夫郡にある山で、忍ぶの枕詞に用ゐた。
○昔男初冠して―以下「狩に往にけり」まで伊勢物語初段をそのまゝ引いた。
○初冠―初めて冠を戴く事で、元服をいふ。
○知るよしして―領地を所有してゐて。
○往にけり―往きけり。

シテ『道に
地次第『遙々來ぬる唐衣。遙々來ぬる唐衣。着つつ
や舞をかなづらん
シテ『別れ來し。跡の恨みの唐衣
地。袖を都に。返さばや
〔イロヘ〕（を舞ひて大小前に立ち）

【四】
シテクリ『抑もこの物語は。如何なる人の何事によつて
と謠ひながら眞中に行き、
地『思ひの露の信夫山。忍びて通ふ道芝の。始めもなく終りもなし
シテサシ『昔男初冠して奈良の京。春日の里に知るよしして狩に往にけり
地『仁明天皇の御宇かとよ。いとも畏き勅を受けて。大内山の春霞。たつや彌生の初めつ方。春日

さあ『遙々來ぬる旅をしぞ思ふ』と詠まれたこの唐衣を着て、舞を舞ひませう。女と別れて京を出て、遙々と來た恨みを歌にお詠みになつたこの唐衣で舞を舞ひませう」
といつて、
「イロヘ」を舞ひ、更に次のやうな伊勢物語の故事を謠ひながら舞を舞ふ。

【四】
物――『さて、この伊勢物語は、いかなる人がいかなる事から戀をした、胸の思ひを述べたものかと申しますに、たゞ忍ぶ戀路の亂れ書きで、始めもなく終りもないものです。
まづ物語の初めには『昔、ある男が元服して、奈良春日の里に領地があるので、そこへ狩に行つた』とあります。その時代は、仁明天皇の御代とかで、御所のあたりに春霞のたなびいた三月の上旬、業平はいとも畏き勅命を蒙り、春日の祭の勅使として發向の際、透額の冠を許されたのです。當時業平は誠にありがたい君寵を忝うしてゐましたので、御所の殿中で元服を許されたのでありますが、この

の祭の勅使として透額の冠を許さる

シテ『君の恵みの深き故

地『殿上にての元服の事。當時その例稀なる故に。

初冠とは申すとかや

これより謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ『然れども世の中の。一度は榮え。一度は衰ふる理の眞なりける身の行方。住みどころ求むとて。東の方に行く雲の。伊勢や尾張の海面に立つ波を見て。いとどしく過ぎにし方の戀しきに。うらやましくも。歸る波かなとうちながめ行けば信濃なる。淺間の嶽なれや。くゆる煙の夕景色

シテ『さてこそ信濃なる。淺間の嶽に立つ煙

地『遠近人の。見やは咎めぬと口ずさみ猶遙々の旅衣。三河の國に着きしかば。ここぞ名にある

○仁明天皇―嵯峨天皇第二皇子、天長十年御即位、御在位十七年。
○大内山―内裏を申す。
○春日の祭の勅使―本曲の末に記す。
○殿上―清涼殿の殿上間。
冷泉流伊勢物語註に―業平……十六の歳承和十四年三月十一日仁明天皇の内裏にて元服するなり。此時業平は五位無官にて左近の太夫といふ―と。
○初冠とは申すとかや―ここでは禁中で初めて冠すといふ意にとつたのである。
○一度は榮え―菅原道眞の詩句に「驛長莫驚時變改、一榮一落是春秋」
○伊勢や尾張の―伊勢物語に次項の歌の詞書として、「京にありわびて、あづまに行きけるに、伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、波のいと白く立つを見て」
○いとどしく過ぎにし方の戀しきにうらやましくも歸る波かな―前項詞書の本歌。後撰集に業平の詠、第二句を「過ぎ行く方の」として收む。
○信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やは咎めぬ―伊勢物語の歌。但し物語には第四句「遠方人の」とある

頃かやうな例は珍しいことであつたのでこれを初冠といつたのであるとの事でございます。

しかし、この世の中は、一時榮えたものも亦衰へる時の來るのが、世上の道理で、業平も亦その例に漏れず、悲しい運命に誘はれて、都に居留まることも出來ず、外に住み所を求める爲に東國の旅に出ました。そして伊勢も過ぎ、尾張へ入つた時、海岸に立つ波を見て、――

『いとどしく過ぎにし方の戀しきに、衰ましくも歸る波かな』

（遠く都を離れて來たことを顧みると、都の方が實に戀しくて、歸りたくなるのに、この波が思ふまゝもとの所へ歸るのを見ると、羨しくてならない）

と詠んで、また旅を續けて信濃へ入り、淺間嶽から煙の立ち上る夕景色を見て、

『信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の見やは咎めぬ』

（この信濃の淺間嶽から立ち上る淺ましい煙を見ては、誰も不思議に思つて、見咎めないものはなからう）

と歌を詠んで、また遠い旅を續けて、三河の國に着きますと、ここで有名な八橋で、この澤邊に咲き匂ふ杜若は、色も紫のゆかりの花であるので『妻しあるや』と

○品多き事ながら―物語の中には種々のことを記してゐるがとの意。
○底ひなく―深くの意。川の深いのを契りの深い意にいひかけた。
○名をかへ品をかへて―物語の中には名をかへ事柄をかへて様々書いてゐるがとの意で、その例として「人待つ女」「物病み」等を擧げた。
○人待つ女、物病み、玉簾―本曲の末に記す。
○飛ぶ螢の―伊勢物語の歌―飛ぶ螢の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ―を引き、雁を「假」にいひかけ、假に業平の姿を現してとの意に用ゐた。
○暗きに行かぬ―本曲の末に記す。
○月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身にして―伊勢物語業平の歌「もとの身」を本地の意にとつたのである。
○本覺眞如の身―本覺は始覺の對。宇宙法界の根本本體、佛といふ意。
○陰陽の神―男女の中を和らげる和歌の神。玉傳深祕抄に「伊弉諾化して住吉となり、住吉化して業平となる」と。

八橋の。澤邊に匂ふ杜若。花紫のゆかりなれば。妻しあるやと思ひぞ出づる都人。然るにこの物語。その品多き事ながら。とりわきこの八橋や。三河の水の底ひなく。契りし人々の數々に。名をかへ品をかへて。人待つ女物病み玉簾の。光も。亂れて飛ぶ螢の。雲の上まで往ぬべくは。秋風吹くと。假に現れ衆生濟度のわれぞとは知るや否や世の人の

シテ『暗きに行かぬ有明の

地『光普き月やあらぬ。春や昔の春ならぬわが身一つは。もとの身にして。本覺眞如の身をわけ陰陽の神といはれしも。唯業平の事ぞかし。かやうに申す物語疑はせ給ふな旅人遙々來ぬる唐衣。着つつや舞をかなづらん

と舞ひ上げ、なほ次の謠に合せて舞ひつゞく。

都の女の事を思ひ出したのです。

ところで、この伊勢物語には種々様々の事を記してありまして、その中でも、殊にこの八橋の歌のやうに深い契りを結んだ人々の事も數多く、或は名を變へ事柄を變へて、或は『人待つ女』或は『ものやみの女』、或は『玉簾の女』など、簾を照らす螢の亂れて飛ぶやうに、亂雜に秩序もなく書き記してゐますが、實は業平は人は知らないかも知れませんが、天上界から衆生濟度の爲に、假に現れ出て、この世の人が暗い關路に迷はないやうに、善き光を與へたもので、

『月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして』

（月も春も昔ながらの姿で、何の變りもない。それだのに、二人の間は自分だけはもとのまゝで、相手はすつかり變り果てゝしまつた。といふ原歌の意をこゝには表面の文字通りに、自分はもとと變りのない身だ。と解したのである）

と詠まれたやうに、本身佛體でありますが、その佛の身を化現して、男女の中を和らげる和歌の神として祭られることとなつたのでございます。即ちそれが業平の事なのでございます。

旅の方、このやうにお話し申すこの物語

【五】
○花前に蝶舞ふ―「花前蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金」と、百聯抄解に見ゆ。この句〔熊野〕にも見ゆ。
○昔なりけれ―「植ゑ置きし」の歌の第五句「形見なりけれ」を更へて、次の「昔男」の話につゞけた。
○花橘の―伊勢物語に「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
○菖蒲の鬘―五月五日の節會に菖蒲を冠にかけて鬘とすることをいふ。その菖蒲が同じ季節の花橘の匂ひにまじり合ふといふ意。
○杜若花菖蒲―杜若と花あやめと、色はいづれが濃いといひかけ、この音を以て梢を出し、梢から蟬を呼び起した。
○蟬の唐衣の―蟬の殼を唐衣にいひかけて、前文の唐衣と照應させ、更に衣の袖とつゞけた。
○袖白妙の―夏の衣であるから白妙といひ、卯の花は白いので、雪といひ、白い物を並べて、夜の明ける形容とした。
○淺紫の―東雲の朝を淺にいひかけた。
○草木國土悉皆成佛―中陰經の句と傳ふ四句偈文。

【五】
シテ『花前に蝶舞ふ。紛々たる雪
地『柳上に鶯飛ぶ。片々たる金
〔序舞〕
シテ『植ゑ置きし、昔の宿の。杜若
地『色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ昔なりけれ色ばかりこそ
シテ『昔男の名をとめて。花橘の。匂ひうつる。菖蒲の鬘の
地『色はいづれ。似たりや似たり。杜若花菖蒲、梢に鳴くは
シテ『蟬の唐衣の
地『袖白妙の卯の花の雪の。夜も白々と。明くる東雲の淺紫の。杜若の。花も悟りの。心開けて。すはや今こそ草木國土。すはや今こそ、草木國土。悉皆成佛の御法を得てこそ。失せにけれ

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

の眞意をお疑ひになつてはいけません。では「遙々來ぬる旅をしぞ思ふ」と詠まれたこの唐衣を着て、舞を舞ひませう」

【五】
詞――「花より花に舞ふ蝶は、雪のひらひら降る如く、柳の枝を飛びちがふ、翼黄色の鶯は、黄金の片の飛ぶ如し」――」
と謠つて、
〔序舞〕
を舞ひ、更に次のやうな歌を謠つて舞ひつゞける
詞――「ゆかりの色と植ゑ置きし、昔の宿のかきつばた、宿のあるじは跡もなく、花の色のみ殘りたり。
「昔男の業平は、今はなけれど杜若、昔の名殘留むなり。
「昔の人の袖の香を、忍ぶよすがの橘の、匂ひうつせる花あやめ。あやめの花と杜若、いづれの色か勝れたる、似たりや似たり。
「梢に鳴くは蟬の聲、身に着るものは唐衣、衣の袖は白妙の、卯の花雪の花」
そのうちに夜も白々と明け初めて、朝となれば、紫色の杜若の花の精も、佛道の悟りを得て「草木國土皆悉く成佛す」との經文の通り、成佛して消えてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「これは諸國一見の（下懸都方より出でたる）僧にて候……

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「これは諸國一見の……われこの間（光程）は……ワキ「急ぎ候間程なう（光程に。是ははや）三河の……

附記

○植ゑ置きし昔の宿の杜若—後撰集に「藤原のかつみの命婦にすみ侍りける男、人の手にうつり侍りにける又の年、杜若につけてかつみに遣しける」と詞書して「いひ初めし昔の宿の杜若色ばかりこそ形見なりけれ」とあり、この歌を雲玉集に收め、その次に「男の夢に女の返しける歌」と詞書して「紫の色に出でずはそれと見じいとどへだつる宿の昔を」といふ歌を擧げて「杜若の精の歌なり、これより女を杜若といふ」といふ。

○春日の祭の勅使—冷泉流伊勢物語註に「承和十四年三月十三日業平春日祭の使に行きしなり。かりと云ふは假初の儀なり、これ五位の檢非違使の行く使なり。業平は親王の子なれば此使をすべきにあらねど、時のきらにつきて假初の使に行きしなり」

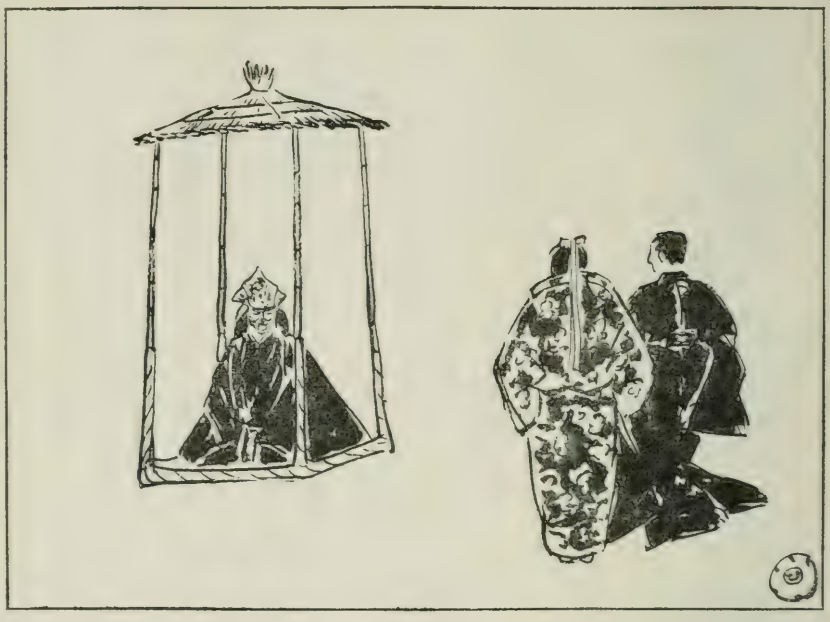
○人待つ女—伊勢物語に「かの女（高安の女）大和の方を見やりて、『君があたり見つつを居らん生駒山、雲なかくしそ雨は降るとも』といひて見出すに、辛うじて大和人來むといへり。喜びて待つに、度々過ぎぬれば、『君來むといひし夜ごとに過ぎぬれば、頼まぬものの戀ひつつぞ居る』といひけれど、男すまずなりにけり」とあるを指す。

○物病み—伊勢物語に「昔男ありけり、人のむすめのかしづく、いかでこの男にものいはんと思ひけり。うちいでんこと難くやありけん、ものやみになりて死ぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、親聞きつけて、泣く〳〵告げたりければ、まどひ來りけれど、死にければ、つれ〴〵と籠り居りけり」とあるを指す。

○玉簾—伊勢物語に「昔男女密かに語らふわざもせざりければ、いづくなりけんあやしさによめる、『吹く風にわが身をなさば玉すだれ、ひまもとめつゝ入るべきものを』、かへし、『とりとめぬ風にはありとも玉すだれ、誰が許さばか隙求むべき』とて止みにけり」とあるを指す。

○暗きに行かぬ—難儀抄に「元慶四年五月廿七日の夜、（業平）弱げに見え給ふ時、有常の息女、枕により面を合せて、悲しみの涙を流して曰く、君失せなん後は思ひの闇に迷ひて、罪深き道に赴き、暗きより暗きに至りなんといへるによめる。知るや君我になれぬる世の人の暗

きに行かぬ便りありとは」とあるに據つた。



景清（かげきよ）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】ツレ　景清女　人丸、トモ　同從者、シテ　惡七兵衛景清、ワキ　里人

【所】日向國　宮崎

【時】鎌倉初期　秋（無季）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。飯尾宅御成記に寛正七年二月二十五日觀世又三郎が本曲を演じたと記してゐる。

【梗概】平家の勇士惡七兵衛景清も今は日向國宮崎に流されて、盲目の乞食となつてゐる。景清が嘗て熱田の遊女に生ませた女人丸は父を慕つて遙々日向國まで來たが、まさかわが父がこれほどまで零落してゐようとは思はない。父とも知らないでその行方を尋ねられた景清は、わが子の行末を思つて親子の名乘りをしなかつたが、人丸は里人の敎へによつて、再び父景清に會ふことが出來た。それで、景清

は今の身上を恥ぢつつ、昔屋島の合戰に三保谷と鍾引した武勇談を語り、わが亡き跡の囘向を賴んで別れる。

【出典】景清が宮崎に流されたなどといふ事は、平家物語のいづれの異本にも見えない。たゞ長門本卷二十に、

越中次郎兵衛盛次、上總惡七兵衛景清も例の生き上手なれば、皆落ちにけり。

とあるが、その何處へ行つたかは記してゐない。本曲の前篇とも見るべきものに「大佛供養」があり、この二曲と併せたと同じ趣旨のものに、幸若舞曲の「景清」があり、幸若と謠曲との間には密接な關係のあることは疑はれないが、その制作の前後については遽かに確言せられない。たゞこゝに本曲だけについて考へれば、平家物語に鬼界島に流された主俊寛を尋ねて行く「有王島下りの事」があるが、この有王を景清の息女人丸に醸案して、本曲を創作したものでなからうかと思ふのである。

景清の軍語「鍾引」のことは、流布本平家物語卷十一「弓流しの事」に見えてゐるが、この事は「八島」に作られてゐるから、同曲でその原文を揭げることとする。

【概評】本曲も親子再會物の一であるが、他の多くの親子物のやうに、子を失つた母親が狂亂するのではない。うら若い女性が離所の父を尋ねるのであつて、長い旅路に狂亂もせず、まざ〳〵と浮世の辛苦を嘗め盡くして、九州の涯に辿り着くのである。物に狂はないだけ、一層いとしい感じを與へるのである。しかも漸くにして相會うた父は盲目の乞食で、容易に親子を名乘らない。久しぶりで逢つたわが子に父であることを明さない父の苦衷も泌み〴〵と感じられるのである。名乘りあつた後も、他の親子物のやうに、うち連れてわが家に立ち歸り富貴の身となるのではない、永訣を覺悟して東西に別れ去るのである。人情の悲慘を極めたものといはなければならない。シテ景清は平家の勇士である。謠曲には勇士を主人公としたものが少くないが、そしてそれらは大抵修羅道に苦しんでゐるのであるが、ワキの夢に現れる武士の姿は、現世にあつた時そのままな勇ましい花やかな姿である。しかし、本曲の景清は生きながらにして地獄の苦を受けてゐるのであつて、その姿は昔の面影は見る術もなく老い衰へてゐる。落魂しきつた老武者の軍語は、修羅物の軍語とは全く趣を異にした悲壯な感が深い。勇士の末路をかくまで痛ましく描き出した曲は他に類例がない。謠曲としては珍しい深刻陰慘な人生を描いたものである。

【一】

○消えぬ便りも風なれば―景清の果敢ない命を露に喩へ、風を風の便りと、露を吹き散らす眞の風と雨方に兼ねて用ゐた。景清はまだ生き永らへてゐると噂に聞いたが、吹けば散るやうな果敢ない身上だから、その後果して無事であるか案じられるといふ意。

○龜が江が谷―相摸國鎌倉扇が谷から山の内へ越える所。「龜が谷」が正しい地名である。

○惡七兵衛景清　通稱は上總七郎兵衛。上總介忠清の三男。伯父大日坊を殺したので、世に惡七兵衛と呼ばれた。平家の武士の中で最も武名を謳はれた者。

○宮崎―今縣廳の所在地。

○思ひ寢―物を思ひながら寢ること。心强く思ふといひかけた。

○涙かたしく―涙かゝるをかたしくにいひかけた。かたしくは片袖を下に敷いて寢ること。

○露を添へて―秋草に露の置きまさることと、悲しい涙の多く出ることとを兼ねていふ。

○行方を遠江―行方を問ふを、遠江にいひかけた。

【二】

後見、藁屋の作物に引廻をかけて大小前に出す。

次第の囃子にて、ツレ人丸、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束、トモ從者、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ツレ次第（トモ）「消えぬ便りも風なれば。消えぬ便りも風なれば。露の身如何になりぬらん

地取にツレは正面に向き、

ツレ「これは鎌倉龜が江が谷に。人丸と申す女にて候。さてもわが父惡七兵衛景清は。平家の味方たるにより。源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。未だ習はぬ道すがら。もの憂き事も旅の習ひ。又父ゆゑと心强く（とトモと向合ひ）

ツレ下歌（トモ）「思ひ寢の涙かたしく。草の枕露を添へていと滋き袂かな。上歌「相摸の國を立ち出でて。相摸の國を立ち出でて。誰に行くへを遠江げに遠

【一】

舞臺は初め鎌倉――實際の舞臺には景清の住家である藁屋の作物が出てゐるが、それには引廻があつて、見物人にはまだ見えない態――で、ツレ景清の女人丸、トモ從者を伴つて登場。

人丸「父上はまだ御存命だと、風の便りには聞いたが、流人の身のことだから、果して御無事だか氣がかりのことだ」

ミ次第に自分の心持を述べ、

人丸「私は鎌倉龜が江が谷に住んでゐる人丸と申す女です。さて、私の父、惡七兵衛景清は平家の味方であつた爲、源氏に憎まれて、日向國宮崎とかいふ所へ流され、永い年月を送つてお出でになるのです。それで、私はこれまで旅をした經驗はないのですけれど、いづれ旅は辛いものだと覺悟をして、これも父に會ふ爲だと思へば、心强くも思はれて、出掛けるのでございます」

ミ見物人に自己紹介をし、

人丸「悲しい思ひをしながら、旅の宿に假寢の夢を結べば、秋深いこの頃の事とて、草の露まで置き添へて、袂は涙と露とで愈々濡れしめることです。このやうな心細い思ひをもつて、相摸國を出立し、誰

き江に旅舟の。三河に渡す八橋の。雲居の都いつかさて假寢の夢に馴れて見ん假寢の夢に馴れて見ん

二人とも正面に向き、

トモ「やうやう御急ぎ候程に。これははや日向の國宮崎とかやに御着きにて候。（ツレに向ひ）これにて父御の御行方を御尋ねあらうずるにて候

といひて、ツレは脇座に、トモはその次に坐す。

【二】

シテ景清、面景清・角帽子・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶紺水衣・腰帶・扇の裝束にて作物の中に坐し、引廻をかけたるままにて、

シテ「松門ひとり閉ぢて。年月を送り。みづから。清光を見ざれば。時の移るをも。辨へず。暗々たる庵室に徒らに眠り。衣寒暖に與へざれば。膚は。髏骨と衰へたり

地上歌「とても世を。背くとならば墨にこそ。背くとならば墨にこそ。染むべき袖の、あさましや

○八橋―三河國碧海郡にあり、伊勢物語によつて有名な所。〔杜若〕參照。

○假寢の夢に馴れて見ん―千載集右衛門督隆房の歌―草枕假寢の夢に幾度か馴れし都に行き歸るらん」を借りて、いつ都を親しく見ることが出來ようとの意に用ゐた。

【二】

○松門ひとり閉ぢて―粗末な家に誰訪ねて來るものもなくとの意。張籍の詩に「獨向二饔峰一老、松門閉二兩涯一」松門は松の木が自然に門をなしてゐる所。（松の木の生えてゐる所にある門といふ説もある）

○清光を見ざれば―盲目で月日の光を見ないから。

○衣寒暖に與へざれば―冬になつても暖い着物が着られないから。

○髏骨―肉のない骨ばかりの身體。痩け白骨のさま。

○背くとならば墨にこそ―とても世を背くならば、出家して佛道に入るべきであつたのに、出家もしないで、俗體のまゝ零落して行つてとの意。

○あさましや―嘘といひかけた。

に道を尋ねるといふあてもなく、淺江國を過ぎ、三河國の八橋も渡つて來ましたが、さていつになつたならば、あの昔やかた都を親しく見ることが出來ませう―

ミ旅の悲しさを洩らしてゐるうちに、旅に進んで行つた態で、舞臺は日向國宮崎となる。

從者「道をお急ぎになつたので、思ひの外早く日向國宮崎とか申す所へお着きになりました。（といつて大丸に向ひ）こゝでお父上の御行方をお尋ねなさいませ」

二人はあたりを見る態。

【二】

舞臺は日向國宮崎で、こゝにむさくろ―い家の見えるのは景清の住家。

シテ景清はこの襤褸の中に居て、

景清「野良のまゝなこのあばら家へは、誰一人訪ねてくれるものもなく、獨り淋しく永い年月を送つてゐることだ。殊に自分は盲目のこととて、月日の光も見えないのだから、日の過ぎて行くのも分らず、たゞ眞暗な室に何のなす事もなく眠り暮らして、着物も寒さ暑さに着更へることが出來ないのだから、肉は落ちて骨ばかりのからだに痩せ衰へてしまつたことだ。どうせ人らしい生活が出來ないもの

○われだに憂しと―自分でさへ心苦しいと思つてゐるのであるから。

【三】

○軒端も遠く―乞食の住家かと少し立退くを軒にいひかけた。

○秋來ぬと目にはさやかに見えねども―古今集藤原敏行の歌。下句「風の音にぞ驚かれぬる」盲目の心でこの歌を引き、風の音から音づれと轉じた。

○知らぬ迷ひのはかなさ―知らぬ旅路に迷つて宿もない心細さを、未來を考へぬ人間のはかなさにかけていふ。

○三界は所なし―三界といつても、唯心にあるもので、外に別段所のあるものでない、結局空なものであるとの意。三界は欲界・色界・無色界で衆生の生死輪廻する三の世界。楞嚴經に「三界著二空華一」

窶れ果てたる有樣を。われだに憂しと思ふ身を。誰こそありてあはれみの憂きを訪ふ、よしもなし憂きを訪ふよしもなし

【三】地上歌に作物の引廻を下す。

ツレ・トモ立ちて作物に向ひ、

ツレ『不思議やなこれなる草の庵古りて。誰住むべくも見えざるに。聲めづらかに聞ゆるは、もし乞食のありかかと。軒端も遠く見えたるぞや

シテ「秋來ぬと目にはさやかに見えねども。風の音づれいづちとも

ツレ『知らぬ迷ひのはかなさを。暫し休らふ宿もなし

シテ「げに三界は所なし唯一空のみ。誰とかさして言問はん。『又いづちとか答ふべき

トモ、藁屋に向ひ、

トモ「いかにこの藁屋の内へ物問はう

ならば、早く出家をすればよかつたのに、それもし得ないで、俗塵のまゝでこのやうに窶れ果てたことを、自分ながらあさましくも情なくも思つてゐるのだから、まして他人は誰一人あはれみをかけて訪ねてくれる者はないのだ」

【三】人丸に景清の獨言を聞いて、

人丸「これは不思議だ、ここの小屋は古びて、人が住めようとは思はれないのに、珍しい聲が聞えるが、もしや乞食の住家でもあらうか」

と、少し立退いて、向ふの軒端を見る。

景清「目には見えないが、何處からか人が尋ねて來たやうなけはひがするが……」

人丸「果敢ない知らぬ旅に迷うて、暫くの休み所も見當らない」

景清「休み場所のないのは旅だけのことぢやないのだ。この人間世界は空虛なもので、場所といふものがないのだ、場所がないのだから人もないのだ。さうだ、だから尋ねてくる人もなく、これに答へる者もない筈だ」

かう二人が別々に自分の心持を獨言にいつてゐる時、後者は景清の傍へ行つて、

後者「おい、この藁屋の人に一寸ものを尋ねたいのだが……」

シテ「そも如何なる者ぞ。

トモ「流され人の行方や知りてある

シテ「流され人にとりても。名字をば何と申し候ぞ

トモ「平家の侍惡七兵衛景清と申し候

シテ「げにさやうの人をば承り及びては候へども。もとより盲目なれば見る事なし。『さもあさましき御有樣。承りそぞろにあはれを催すなり。委しき事をば。よそにて御尋ね候へ

トモ「さてはこのあたりにては御座なげに候。(ツレに)これより奥へ御出であつて尋ね申され候へ

二人は後見座にくつろぐ。

【四】

シテ「不思議やな唯今の者を如何なる者ぞと存じて候へば。この盲目なる者の子にて候はいかに。われ一年尾張の國熱田にて遊女と相馴れ一

景清「一體何者だ」

從者「流人の行方を知つてゐるかね」

景清「流人といつたところで、その苗字は何といふのです」

從者「平家の侍で、惡七兵衛景清といふ人です」

景清「なる程、さういふ人の事は聞いたことはあるが、勿論自分は盲目のことだから見た事はなし、大變あはれな御樣子だと聞いて、わけもなくお氣の毒に思つてゐるのです。委しい事は餘所でお尋ねなさい」

從者「それではこの邊にはお出でなさらぬやうだ」

と獨言をいつて人丸に向ひ、

從者「これからなほ奥へお出でになつて、お尋ねなさいませ」

と二人は外へ出掛ける態。

【四】

景清はもとの所にゐて、

景清「不思議なことだ。今來た者を誰かと思つたら、この盲目の子であつたのは意外だ。以前自分が尾張國熱田の遊女と馴染んで、一人の子を生ませたが、女だか

○そぞろに—何となく。

○熱田—今名古屋市に入る

○長　宿驛の長者。轉じて、多くの遊女を置いて旅人を慰めしめる者。
○馴れぬ親子を悲しみ―親子の間柄に馴染のないのを悲しみ。謠曲評釋に「養女として遣りたるなれば、馴染まぬ養父との中を悲しみ實父が慕はしくなりて、目向に來り景清に詞をかはしたるとなり」とあるは如何であらう。
○なかなか―却つて。
○親の絆―絆は綱。親子の情愛の斷ち難い喩。

【五】

人の子をまうく。女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ。鎌倉龜が江が谷の長に預け置きしが。『馴れぬ親子を悲しみ。父に向つて言葉をかはす

地上歌『聲をば聞けど面影を見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそなかなか親の、絆なれなかなか親の絆なれ（と面を伏す）

【五】

ツレ・トモ靜かに橋懸に出で、トモは幕に向ひて、

トモ「いかにこのあたりに里人の渡り候か

ワキ里人、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて幕より出で、

ワキ「里人とは何の御用にて候ぞ

トモ「流され人の行方や御存じ候

ワキ「流され人にとりても。如何やうなる人を御尋ね候ぞ

トモ「平家の侍惡七兵衞景清を尋ね申し候

【五】

橋懸は里人の住家の態。

人丸と從者とは少し出掛けて里人の住家を見つけた態で、橋懸に出で幕に向ひ、

從者「一寸お尋ねしますが、この邊に里人はお出てになりませうか」

ワキ里人橋懸へ出て來て、

里人「里人をお呼びになるのは、何の御用です」

從者「流人の行方を御存じでせうか」

里人「流人と申したところで、どういふ人をお尋ねになるのです」

從者「平家の侍惡七兵衞景清を尋ねてゐます」

ら何の役に立つものかと思つて、鎌倉龜が江が谷の長者に預けて置いたのだ。それが父子の馴染のないのを悲しんで、ここまで尋ねて來て、父に言葉をかはしたのだ。あゝ折角會ひながら、盲目の悲しさに、聲は聞えても姿を見ることが出來ない。いやそればかりでない。親子の名乘りもしないで歸したが……いやこのつれない仕打が却つて親の愛情なのだ―

ワキ「唯今此方へ御出で候山陰に（と舞臺の方を見やり）。藁屋の候に人は候はざりけるか

トモ「その藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ

ワキ「なうその盲目なる乞食こそ。御尋ね候景清候よ。（ツレしをるワキこれを見て）あら不思議や。景清の事を申して候へば。あれにまします御事の。御愁傷の氣色見え給ひて候は。何と申したる御事にて候ぞ

トモ「御不審尤もにて候。何をか包み申し候べき。これは景清の息女にて渡り候が。今一度父御に御對面ありたき由仰せられ候ひて。これまで遙遙御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられ候ひて。景清に引き合はせ申されて給はり候へ

ワキ「言語道斷。さては景清の御息女にて御座候

○御事―御方。

○言語道斷　言葉にいひ表しやうもなく驚いた時に發する語。

里人　今こちらへお出でになつた山陰に、藁屋がありますが、そこに人がゐませんでしたか」

後者　その藁屋には盲目の乞食がゐました」

里人　その盲目の乞食が、お尋ねの景清ですよ」

人丸これを聞いて泣く。里人見詫めて、

里人　これは變だ。景清の事を申したら、あれにお出でになる方が、大變お歎きのやうに見えますが、これはどうした事なのです」

後者　御不審御尤もです。何を隱しませう、この方は景清の御息女ですが、今一度父君に御對面になりたいと仰しやつて、これまで遙々お下りになつたのです。とてもの事に、何とか旨く仰しやつて、景清に引合はせて下さい」

里人　これは意外千萬だ。それではこの方が景清の御息女なのですか。まあ心を靜

○勾當―盲官の一で撿挨の次、座頭の上に位す。しかし景清にこの官を與へられたのではない、前身が勇士であるから、座頭とは呼ばれず、その上の勾當と呼ばれたのである。
○命をば旅人を頼み―旅人の恵みを頼りにして生命を繋ぐ。

か。まづ御心を靜めて聞しめされ候へ。景清は兩眼盲ひましまして。せん方なさに髪を下し。日向の勾當と名をつき給ひ。命をば旅人を頼み。我等如きの者のあはれみをもつて身命を御つぎ候が。昔に引きかへたる御有樣を恥ぢ申されて。御名のりなきと推量申して候。某唯今御供申し。景清と呼び申すべし。わが名ならば答ふべし。その時御對面あつて。昔今の御物語り候へ此方へ渡り候へ

【六】

ツレ・トモは脇座へ行き、ワキは仕手柱先に立ちて藥屋に向ひ

ワキ「なうなう景清の渡り候か。惡七兵衞景清の渡り候か

と、藥屋の柱を扇にて二つたゝき、後へ下り、目附柱近くに坐す。シテ兩手にて耳を掩ひ、

シテ「かしましかしましさなきだに。（手を下して）故郷の者とて尋ねしを。この仕儀なれば身を恥ぢめてお聞きなさい。景清は兩眼とも見えなくなつて、仕方がないので髪を剃り、日向勾當と名をつけ、旅人に米錢を貰つて、私等のやうな者の情で命を繋いで居られるのですが、昔とは變り果てたみぢめな境遇をお恥ぢになつて、お名乘りにならないのだとお察し致します。私がお供して、景清と呼んで見ませう。自分の名だつたら答へませう。その時御對面になつて、いろ〳〵御物語をなさいませ。さあこちらへお出でなさい」

ご景清の住家へ連れて行く。

【六】

里人、景清の住家の戸をたゝいて、

里人「おいおい、景清はお出でか、惡七兵衞景清はお出でか。」

○かしまし―やかまし。
○仕儀―始末、有樣。

景清やかましい〳〵。でなくてさへ、先程故郷の者だといつて尋ねて來たが、この始末だから、わが身を恥ぢて、名乘ら

○千行の悲涙―菅家後草に「離レ家三四月、落涙百千行、萬事皆如レ夢、時々仰二彼蒼一」
○あだし身―夢の世の假の身。

○日向とは―日向勾當といひかけて、日向の文字を分けて「向ひたる」を呼び起す。
○向ひたる名―似合はしい名。現在のわが身にとつて適當した日向勾當といふ名
○梓弓―武士の喩。

○惡心―惡七兵衛の惡といひかけた。
○御扶持ある方々―米錢を與へて命を助けてくれる人人。里人達。
○盲の杖を失ふに似たるべし―體源抄の序に「盲目の杖を失ひ、幼少の乳母に離れたらんが如く侍はん時、悔ゆとも誰か習ふべきや」陳同市集に「別去惻然若二盲者失レ杖」
○腹惡しく―心の直でないこと。ひねくれてゐること。
○由なき―條理の立たない

て。名のらで歸す悲しさ。『千行の悲涙袂を朽たし。萬事は皆夢のうちのあだし身なりとうち覺めて。今はこの世に亡き者と。思ひ切つたる乞食を。惡七兵衛景清なんどと。呼ばば此方が答ふべきか。『その上わが名はこの國の

地上歌『日向とは日に向ふ。日向とは日に向ふ向ひたる名をば呼び給はで力なく捨てし梓弓。昔に歸る己が名の。惡心は起さじと。思へども又、腹立ちや（とシテわが膝を打つ）

シテ『所に住みながら

地『所に住みながら。御扶持ある方々に。憎まれ申すものならば。偏に盲の杖を失ふに似たるべし（と杖を探る形をし）。片輪なる身の癖として。腹惡しく由なきいひごと唯許しおはしませ（とワキに合掌す）

ないで歸したものの、悲しくて涙に袂も朽ちるばかりなのだ。いやもう何もかも過ぎ去つた夢だ。つまらない者だと悟つて、今では死んだも同然の身だと思ひ切つてゐるのに、その乞食の身を惡七兵衛景清などと呼ばれて、こちらが答へると思ふか。その上、自分には現在の境遇に適はしいこの國の名の日向勾當といふ名があるのに、その名をば呼ばないで、是非なく捨てた武士時代の昔の名を呼ぶといふことがあるものか、もはや惡七兵衛などといはれた惡心は起すまいと思つても、つい腹が立つわい」

シ憤つたが、また心をさり直して、

景清「いや惡かつた。この所に住んでゐながら、お助け下さる人々に憎まれたならば、全く盲目が杖を失つたも同樣です。片輪者の癖で、性根の惡い亂暴を申しました。どうぞお許し下さい」

○人の思はく一言のうちに—目は見えないが、人の一言を聞けば、その心持が分る。
○山は松風すは雪よ—山に松風の吹くのを聞いて、今に雪が降るぞと分る。
○見ぬ花の覺むる夢—花の面白さも心の中で想像せられるといふ事を、昔の榮花の思出に喩へ、松風に花の散る如くに、樂しい思出の夢が破れて、われに歸るとの意。
○さすがに—さうはいふものの。さすやらんのさすの音を重ねた。
【七】

シテ『目こそ闇けれど
地『目こそ闇けれども。人の思はく一言のうちに知るものを。山は松風（と脇座の上を見上げ）。すは雪よ見ぬ花の覺むる夢の惜しさよ（と愁ひの心持）。さて又浦は荒磯に寄する波も、聞ゆるは（橋懸の方を見）。夕潮もさすやらん。さすがにわれも平家なり。物語始めて御慰みを申さん

「さすがにわれも」と心持を直し、杖を探りて立上り、作物を出で景中に座す。

【七】

シテ「いかに申し候。唯今はちと心にかかる事の候ひて。短慮を申して候御免あらうずるにて候
ワキ「いやいやいつもの事にて候程に苦しからず候。又我等より以前に。景清を尋ね申したる人はなく候
シテ「いやいや御尋ねより外に尋ねたる人はなく候

景清「私は目こそ暗いが、人の一言を聞けばその心持が分ります。山に松風の吹くのを聞けば、今に雪が降るぞと分ります。目に見えなくても花の樂しみも分ります。いや樂しみといへば、樂しい思ひ出に耽つてゐる時に、その夢の破れるのは惜しい氣がします。分ると申せば、今浦に荒い波音の聞えるのは、夕潮のさしてくるのでせう。さうだ、私ももとは平家の侍だ、いくさ話をしてお慰めしませう」

と座屋を出で里人に向ひ、

【七】

景清「唯今は少し心にかゝる事があつたので、思慮のない事を申しました。御免下さい」
里人「いや〳〵いつもの事だから、氣にもしません。ところで、私より以前に景清を尋ねて來た人はなかつたですか」
景清「いや〳〵あなたより外に、誰も尋ねて來た人はありません」

○お痛はしさ―お氣の毒さ。

○置き所―露の縁語。

○わが名も顯るべし―親が乞食であるといふことが世間に知れよう。

ワキ「あら僞りを仰せ候や。正しう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひしものを。何とて御包み候ぞ。餘りに御痛はしさにこれまで御供申して候。（ツレに向ひ）急いで父御に御對面候へ

ツレ立ちてシテの側へ行きながら、

ツレ「なう自らこそこれまで參りて候へ。（シテの左袖に手をかけて坐し）恨めしや遙々の道すがら。雨風露霜を凌ぎて參りたる志も。徒らになる恨めしや。さては親の御慈悲も。子によりけるかや情なや（としをる）

シテ「今までは包み隱すと思ひしに。顯れけるか露の身の。置き所なや恥かしや（と面伏せ）。御身は花の姿にて。親子と名のり給ふならば。殊にわが名も顯るべしと。思ひ切りつつ過すなり。われを恨みと思ふなよ（とツレの肩に手をかく）

地「あはれげに古は。疎き人をも訪へかしと恨み

里人「これ、うそをいはれるな。確かに景清の御息女と仰しやつてお尋ねになつたものを、何故お隱しになるのです。餘りにお氣の毒なので、ここまでお供して來ました」

こいつて人丸に向ひ、

里人「さあ、すぐ父上に御對面なさい」

人丸父の側へ行き、

人丸「もうし父上、私がこゝへお伺ひしたのでございます。それだのに、お會ひ下さらぬとは餘りにお恨めしうございます。遠い〳〵旅に辛い思ひを堪へ忍んで參りました志を無にしておしまひになるとは、餘りにお恨めしうございます。それでは親の慈悲も子供によつて差別があるのでございますか、あまりお情なう存じます」

景清「今までは隱すつもりでゐたが、とうとう顯れたのか。身の置き所もなく恥かしいことだ。實はそなたは花のやうな美しい姿であるのに、親子と名乘つたならば、乞食の子だといふことが世間に知れようかと、それで思ひ切つて過したのだ。わしを恨みに思うてくれるな。あゝ思へば、昔盛んな時代には、何の縁故もない者までに、わしを訪ねて來ない

○一門の船の内―以下「駑馬に劣るが如くなり」まで〔大佛供養〕にも同文がある
一門は平家の一族。
○所狹くすむ月の―所狹くは窮屈に。
○御座船―安德天皇の御乘船。
○名を取り楫の―武名を取る。取楫にいひかけ、その縁で船とつゞけた。取楫は船の左にある艪。
○騏驎も老いぬれば―景清の末路に喩へた。騏驎は一日に千里を走る馬、駑馬は力のない駄馬。戰國策に「騏驎之衰也、駑馬先レ之、孟賁之倦也、女子勝レ之」。史記に「田光曰、臣聞騏驎盛壯之時、一日而馳二千里一、至二衰老一、駑馬先レ之」

誹るその報いに。正しき子にだにも訪はれじと思ふ悲しさよ（と肩を離してしをる）

地上歌一門の船の内。一門の船の内に肩を竝べ膝を組みて。所狹くすむ月の。景清は誰よりも御座船になくて叶ふまじ。一類その以下武略樣樣に多けれど。名を取り揖の船に乘せ。主從隔てなかりしは。さも羨まれたりし身の。騏驎も老いぬれば駑馬に劣るが如くなり

【八】

ワキ（ツレに）「あら痛はしやまづかう渡り候へ

ツレ立ちて脇座に歸り坐し、ワキも立ちて地謠座前、トモの次に坐し、

ワキ「いかに景清に申し候。御女御の御所望の候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「屋島にて景清の御高名のやうが聞しめされたき由仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申され候へ

と不平がましく思つた報いで、今はほんとの子にさへ訪ねてくれないやうにと思ふやうになつた。實に悲しいことだ。昔平家の一門が船に乘つて軍に從ひ、船中で多勢の者が肩を突き合はせ膝を折り曲げて、窮屈な思ひをした時にも、わしは御座船になくてはならぬものとせられてゐたのだ。平家一族を始め味方の諸侍には武略の勝れた者が多かつたが、その中でも高名を取り、御座船に陪乘して、主從のお隔てもなかつたのは、わし一人で、皆に羨まれたものだが、それが騏驎も老いては駑馬に劣るの譬へ通り、よくもこのやうなみぢめな有樣になつたものだ

【八】人丸はその時まで景清の傍に凭たから立つてゐたので、

里人「あゝお氣の毒なことだ。まづこちらへお出でなされ」

と人丸に座を與へて、また景清に向ひ、

里人「景清殿、御息女がお願ひでございます」

景清「それは何です」

里人「屋島の合戰に御高名をお立てなされた有樣をお聞きになりたいと仰しやるのです。少しお話をして聞かせておあげなさい」

○不便—可哀想。

○壽永三年三月下旬—屋島の合戰は實は元暦二年二月である。
○能登守教經　門脇中納言教盛の次男。清盛の甥である。
○播磨の室山備中の水島—室山は播取郡室津の背後にあり、平家が源行家を破つた所、水島は淺口郡玉島港の東南にあり、平家が木曾義仲を破つた所。從つて「味方の利なかつし事」といつてゐるのは、鵜越の敗軍に含めて、文の勢ひでいつたのであつて、事實には違つてゐる。「簸」には平家が勝つたと記してゐる。
○鵜越—摂津國鐵枴嶽の中腹から南方一の谷に出る險路で、義經はこゝから平家を退ひ落した。
○利なかつし事—勝利なかりし事の促音便。
○九郎—源義經。
○判官—檢非違使判官。義經の官名。

シテ「これはなにとやらん似合はぬ所望にて候へども。これまで遙々來りたる志。餘りに不便に候程に。語つて聞かせ候べし。この物語過ぎ候はば。かの者をやがて古里へ歸して給はり候へ

ワキ「心得申し候。御物語過ぎ候はば。やがて歸し申さうずるにて候

シテ(語)「いでその頃は壽永三年三月下旬の事なりしに。平家は船源氏は陸。兩陣を海岸に張つて。互に勝負を決せんと欲す。『能登の守教經宣ふやう。去年播磨の室山。備中の水島鵜越に至るまで。一度も味方の利なかつし事。偏に義經が謀。いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討たん。謀こそあらまほしけれと宣へば。「景清心に思ふやう。判官なればとて鬼神にて

景清「それは何だかわしに不似合な註文だが、折角遠い所を遙々尋ねて來てくれた志が、あまりいとしいから、話して聞かせませう。その話が濟んだら、あれをすぐ故郷へ歸して下さい」

里人「承知しました。お話が濟んだら、すぐお歸ししませう」

景清「さてその時は壽永三年三月下旬のことであつたか、平家は船、源氏は陸に、兩軍とも海岸に沿うて陣を張り、互に勝負を決しようとしたのだ。その時能登守教經が『去年播磨の室山、備中の水島、さては鵜越の合戰まで、一度も味方に勝利のなかつたのは、全く義經の謀がうまかつたからだ。何とかして義經を討ち取る謀がほしいものだ』と仰せられたので、わしは心の中で思つた、義經だといつても鬼神でもなし、こちらが命を棄ててかかれば、討ち取るのは容易なことだと。そこで、教經に最期の暇乞をして、陸に

○あますまじ—漏らすまい、遁がすまい。
○ものものしや—仰山らしい、事々しい。
○夕日影に—といふを夕にいひかけた。
○打物—太刀。
○こらへずして—敵對することが出來ないで。
○刃むいたる—敵對してゐた。
○さもうしや—さもしやの延言。卑屈の意。
○案のうち物—案の内を打物にいひかけた。案の内は案外の反對で、思惑通りとの意。
○何某—それがし。揣者。
○手どり—素手で捕へること。
○三保の谷—景清と鍾引したのは、平家物語では「武藏國の住人美尾の屋の十郎」であるが、「八島」では弟の四郎としてゐる。
○鍾—兜の後に垂れて、頸を被ふ部分。

もあらばこそ。命を捨てば易かりなんと思ひ。教經に最期の暇乞ひ。陸にあがれば源氏の兵。『あますまじとて驅け向ふ

地上歌『景清これを見て。景清これを見て。ものものしやと。夕日影に。打物ひらめかいて。斬つてかかればこらへずして（扇を刀の心にて切拂ふ形をし）。刃むいたる兵は四方へばつとぞ逃げにける遁さじと（左右に面をつかひ）

シテ『さもうしや方々よ

地『さもうしや方々よ。源平互に見る目も恥かし。一人を。留めん事は案のうち物。小脇にかいこんで。何某は平家の侍惡七兵衛。景清と。名乘りかけ名乘りかけ手どりにせんと追うて行く（と左手を前に出して追驅くる形をし）。三保の谷が着たりける。兜の鍾を。取り外し取り外し（と左手を伸して二度上り源氏の陣に打ち入ると、源氏の侍は遁がすまいと驅け向つてくる。——

わしはこれを見て、何を仰山らしいと、夕日に太刀をひらめかして、斬つてかゝれば、源氏の兵は敵對も出來ず、四方へばつと逃げてしまつた。何を遁がすものかと、——

『卑怯な振舞をするな、敵味方環視の中で物笑ひになるな』と呼ばはり、一人と組打ちするこそこちらの望みと、太刀を小脇に挾んで『われこそは平家の侍惡七兵衛景清』と名乘りを上げ、手捕りにしてやらうと、追つ驅けて行つた。遁げる三保の谷の兜の鍾を取外し取外して、二三度は遁がしたが、このよい敵を遁がしてなるものかと、飛びかゝつて兜を提み、ぐつと引くと、鍾は切れて、こちらに留まり、三保の谷は遁げのびてしまつた。そして遙か遠くへ行つてから、少し立歸つ

つかみ外し)。二三度、逃げのびたれども、思ふ敵なれば近さじと、飛びかかり兜をおつとり(扇を兜の心にて前に出し)。えいやと引く程に鎧は切れて(扇をはたりと膝に引附けて安坐し)。此方にとまれば、主はさきへ逃げのびぬ、遙かに隔てて立ち歸りさるにても汝、恐ろしや、腕の強きといひければ、景清は三保の谷が、頸の骨こそ(と手を首にあげ)、強けれと笑ひて、左右へのきにける

地 昔忘れぬ物語、衰へ果てて心さへ、亂れけるぞや恥かしや、この世はとても幾程の、命のつらさ末近し。はや立ち歸り亡き跡を、弔ひ給へ盲目の、闇き所の燈火あしき道橋と賴むべし、

(杖を擇りて立ち)さらばよ止まる行くぞとの、唯一聲を聞き殘すこれぞ親子の、形見なるこれぞ親子の形見なる

○闇き所の燈火—盲目の語を承けて闇きとつゞけた。亡き跡の回向を闇所の燈火中絶えた惡道の橋渡しのやうに賴りに思ふ意。法華經藥師菩薩本事品に「如二渡得一船、如二病得一醫、如二暗得一燈」

○さらばよ—父子のとりかはす言葉。

○止まる—父の言葉。

○行く—子の言葉。

○唯一聲を聞き殘す—盲目の父の心。

て來て『それにしても汝は恐ろしい腕の強い男だ』といつたから、わしはまた三保の谷の頸の骨こそ強いわ』と笑つて、兩方に引別れたのだ。——

昔の思出話も、今は記憶まで衰へて、しどろもどろになつて恥かしいことだ。いづれこの世の命は幾程もなく、間もなく死ぬことだらう。早々故鄕へ歸つて、亡くなつた跡を弔つてくれ。そなたの弔ひこそ、盲目のわしにとつて、闇い所の燈火、惡道に架つた橋と同じやうに、何よりも賴もしいのだ。では別れよう。わしはこゝに留まつて居るから」

人丸「それでは參ります」

といふ女の一聲を聞き殘したのが、親子訣別の形見であつたのである。

「さらば止まる」にツレ・トモ立ちて橋懸に行く、シテ仕手柱際にて二人と行き違ひ、ツレ・トモ・ワキの幕に入るを見送りて、しをる。

〔考異〕

諸流（五流）

著しい異同はない。

古謠本（貞享二年本）

【七】ワキ いやいやいつもの……又我等より以前に景清を（貞ナシ）……

柏崎（かしはざき）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 二段劇能

【人物】 **ワキ** 柏崎の臣小太郎、**前シテ** 花若の母、**子方** 柏崎の子花若、**ワキツレ** 善光寺住僧、**後シテ** 花若の母（狂女）

【所】 **第一段** 越後國柏崎、**第二段** 信濃國善光寺

【時】 （十月）

【作者】 世子六十以後申樂談儀に、「鵜飼、柏崎、などは榎並の左衞門五郎作也。さりながらいづれもわろき所を除き、よき事を入れられければ、皆世子の作なるべし。今の柏崎には土車の曲舞を入れらる」と記してゐる。しかし今の「土車」と比べると、ともに善光寺を舞臺にしてゐるが、クセの「極重惡人無他方便」の一句が同文であるだけで、他に類句は見えないが、これは或は「土車」の方がそのクセを變へたのでなからうかとも疑はれる。能本作者注文に世阿彌の作とし、二百十番謠目錄に江波左衞門の作としてゐるのは、一は改作者の、他は原作者の名を擧

げたものである。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十七日演能の事、言經卿記に文祿四年三月廿九日註釋の事が出てゐる。

【梗概】越後國柏崎何某が訴訟の爲鎌倉に滯在中病死したので、一子花若はこれを悲しんで出家してしまつた。その臣小太郎が泣く泣く形見の品々を持つて故郷に歸り、花若の母に事の次第を告げると、母は子を思ひ夫を慕ふ餘り狂氣となつた。そして信濃國善光寺に辿り着き、夫の後生善所、わが子との再會を祈ると、花若はこの寺にゐて、母子再會することが出來た。

【出典】他の物狂と同じやうに、悲說を脚色したものであらう、出典といふべきものは見當らない。

【概評】行方の知れぬわが子を尋ね歩く狂女物は、〔櫻川〕にしても、〔隅田川〕にしても、〔三井寺〕にしても、早く夫に死別して、唯一人ある忘れ形見の綠子に生きて離れ」た悲歎に心も狂ふのであるが、この曲のシテは一時に夫に死別し子に生別したのであるから、この悲痛は他の場合に比べて二倍して居り、その心の亂れには夫に對する戀慕と子に對する思慕とが交錯してゐるのである。從つて、物に狂つて柏崎から善光寺に辿り行く間の描寫、第六・七節の文は誠に悲痛な感を與へてゐるが、その後詳しくわが亂れ心を述べる場合は、夫の戀慕と子の思慕とが分離して、第八節に長々と述べる所は全く夫に對する追慕で、その文が終ると、突然として「これこそ御子花若」といはれて、母子再會の喜びに轉じてゐるので、悲しみが消えて喜びとなつたのではなく、一の悲しみに代へて他の喜びを與へられたこととなり、主想の純一を缺いた憾みがある。勿論駄作ではないが、十分に整つた曲とはいひ得ない。

【一】

シテ花若の母、面深井・壷・壷帶・襟白・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて舞臺に入り、地謠座前に床几にかゝり居る。

次第の囃子にて、ワキ小太郎、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・小刀・扇の裝束にて、守袋を首にかけ、文を懷中し、笠を被て出で、名乘座にて囃子座の方に向き、

ワキ次第　夢路も添ひて古里に。夢路も添ひて古里に。歸るや現なるらん

地取に笠を脫ぎて正面に向き、

○夢路も添ひて―旅寢の夢を重ねて。
○歸るや現なるらん　旅の宿に結んだのは夢であるが悲しい知らせを持つて故郷に歸るのは、夢でない現實である。

【二】

第一段

舞臺は初め幕内で、ワキ柏崎領主の臣小太郎登場。

小太郎「これから旅の宿に數多くの夢を重ねることだらうが、この悲しい知らせを故郷へ告げるといふことは事實で、夢と消えてしまはないのが悲しい」

と次第を謠つてその心持を述べ、

○柏崎殿―柏崎は越後國刈羽郡にあり、柏崎殿はその領主。

○在鎌倉―鎌倉に逗留。鎌倉在といへば鎌倉に近接した村。

○乾しぬべき日影も―普通の濡れた袖ならば、日に當ればすぐ乾くのであるが、これは涙に濡れた袖であるから日に當つても却つて濡れまさるのである。

○雪の下―鎌倉、鶴ケ岡の南の地。行くと雪と音を重ねた。

○一通り降る―道を通るを村時雨の通るにいひかけた

○山の内―鎌倉、鶴ケ岡の西の地。村時雨のやまずを山にいひかけた。

○袖冴えまさる―次第に北國に近づくに從つて、濡れた袖の愈冷えてくること。

○碓氷の峠―上野と信濃との國境にある中仙道の險路

衣の薄きを碓にいひかけた

ワキ「これは越後の國柏崎殿の御内に。小太郎と申す者にて候。さても頼み奉りし人は。訴訟の事候ひて。在鎌倉にて御座候ひしが。唯かりそめに風の心地と仰せ候ひて。程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も。同じく在鎌倉にて御座候ひしが。父御の御別れを歎き給ひ。いづくともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に。御形見の品々を取り添へ。唯今古里柏崎へと急ぎ候

笠を被て、

ワキ道行「乾しぬべき。日影も袖や濡らすらん。日影も袖や濡らすらん今行く道は雪の下。一通り降る村時雨。山の内をも過ぎ行けば。袖冴えまさる旅衣。碓氷の峠うち過ぎて。越後に早く、着きにけり越後に早く着きにけり

「一通り降る村時雨」と右の方に向き二三足出で、またもとへ

小太郎「私は越後國柏崎の領主に仕へてゐる小太郎といふ者ですが、主人は訴訟の事があつて、鎌倉に來て居られたところ、一寸風邪の氣味だと仰しやつたのが、病の因となつて、間もなく死んでしまはれました。そして、御子息の花若殿も父上と一所に鎌倉に來て居られたのですが、父上の御死去を痛くお悲しみになり、出家して何處へやら行つてしまはれたのです。それで、花若殿のお手紙に父上の御形見の品々を添へて、これから故郷の柏崎へ急いで歸るのです」

と見物人に自己紹介をして事件の概略を語り、

小太郎「たゞ水に濡れただけの袖ならば、日に當ればすぐ乾くのだが、悲しい涙に濡れた袖は日に當つても乾かないばかりか、却つて濡れまさることであらう。このやうな悲しい思ひをして、今鎌倉の雪の下を出立し、村時雨のする山の内を通り過ぎて、次第に北國に近づくと、寒さの感じも強くなつて來たが、そのうちに碓氷峠も越して、早や越後國に着いた」

といつてゐるうちに、旅は遂に終結し、無事に越後國柏崎に着く。

歸りて越後に着きたる心。道行濟みて笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。古里柏崎に着きて候。まづまづ案内を申さうずるにて候

【二】　脇座の方(シテ)に向ひ、

ワキ「いかに申し候。鎌倉より小太郎が參りて候それそれ御申し候へ

シテ「なに小太郎とは。もし殿の御歸りありたるか

ワキ二三足出でてシテに向ひ手を突き默し居る。

シテ「あら珍しや何とて物をば申さぬぞ

ワキ「さん候これまでは參りて候へども。何と申しあぐべきやらん。更に思ひも辨へず候(としをる)

シテ「あら心許なや。物をば申さでさめざめと泣くは。さて花若が方に何事かある

ワキ「さん候花若殿は御遁世にて御座候

シテ「何と花若が遁世したるとは。さては父の叱

小太郎は主人の家に着いた樣で、

小太郎　道を急いだので、存外早く故郷の柏崎に着いた。まづ案内を申さう」

【二】　無事に柏崎の館で、シテ花若の母は參場してゐる。

小太郎「もうし、鎌倉から小太郎が參りました。奥へお通しを願ひます」

母「なに小太郎が歸つたとは、もしや殿がお歸り遣ばしたのか」

小太郎、花若の母の前に出て、たゞ默つてゐる。

母「おや、どうしたのだ、何故默つてゐて物をいはないのだ」

小太郎「ここまで參りは致しましたが、何と申しあげてよいやら、全く考へもつきません」(さ泣く)

母「あゝ氣がかりな。物をいはないで、さめ〴〵泣いてゐるのは、花若の方に何か變つたことでもあるのか」

小太郎「さやうでございます。花若樣には御出家なさいました」

母「なんといふ、花若が出家したと。では、

○様々の御形見―亡き人の形見。小太郎の父の死をここに初めて仄かしたのである。

○其方の風―鎌倉の方から吹いてくる風さへ、夫の便りかと思へば懐しかつた。

○なかなか―却つて。

○やがて―直に。その下に「歸らん」を省いてゐる。

○疊束なく―氣がかりに。

○御諚―仰せ。

りけるか。など追手をばかけざりしぞ

ワキ「いやさやうにも御座なく候。様々の御形見の物を持ちて参りて候

シテ「なに様々の形見とは。さては花若が父の空しくなりたるな。『この程は其方の風もなつかしく。便りも嬉しかりつるに。形見を屆くる音づれは。なかなか聞きても恨めしきぞや。唯假初に立ち出でて。やがてといひしその主は

地『昔語にはやなりて形見を見るぞ涙なる（シテしをる）

【三】

シテロンギ『さてや最期の折節は。如何なる事か宣ひし。委しく語り、おはしませせめては聞いて慰まん

ワキ「唯古里の御事を。覺束なく思し召し。御最期までも人知れず密かに御諚ありしなり

父上がお叱りになつたのか。何故追手をやつてとめなかつたのだ」

小太郎「いえお叱られになつたのでもございません。色々お形見の品を持つて参りました」

母「なに、色々の形見を持つて來たといふのか。それでは花若の父がお亡くなりになつたのだな。この間中は、鎌倉の方のものといへば、そちらから吹いてくる風までが、なつかしい便りに思はれて嬉しかつたのに、形見を屆けるための音づれと聞いては、却つて恨めしいぞ。唯暫くの間だといつて御出立になり、すぐ歸つて來ようといつて居られたのに、その事がもはや昔話になつて、形見だけを見るとは、ほんとに悲しい」

【三】

母「それにしても、御最期の時には、どのやうに仰しやつたか聞かして下さい。せめてそれを聞いて心を慰めませう」

小太郎「たゞ故郷のことを氣がかりに思し召し、御最期の時まで、人知れずお話になつていらつしやつたのでございます」

シテ『げにやさこそはおはすらめ。三年離れてその後は。われも御名残いつの世にかは忘るべき

ワキこの間に扇を開きて守袋をのせ、

ワキ『御理と思へども。歎きをとどめおはしまし形見を御覽候へ

と諸ひながら、シテの前に行き、守袋をシテに渡して、もとの座に歸り辭儀す。

シテ『げにや歎きても。かひなき世ぞと思へば地『形見を見るからにすすむ涙はせきあへず（とシテ守袋を見てしをる）

ワキ文を懷中より取出して扇にのせ、

【四】

ワキ「花若殿の御文の候。これを御覽候へ

とシテに文を渡し、もとの座に歸りて辭儀す。シテ文を開きて、

シテ『さてもさても父御前。いたはりつかせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心の中の悲しさは、唯思し召しやらせ給へ。われも歸りて御有樣。

○形見を御覽候へ……夫の形見をいふ。

○せきあへず—止めかねる

○さてもさても—以下「慰みおはしませ」までが花若の文。

○いたはり—病氣。

母「ほんとにさうであらう。三年離れてゐたたつかしさ。私だつて何時までも忘れることは出來はしない」

小太郎「御尤もでございますが、どうぞそのお歎きを止めて、このお形見を御覽下さいませ」

と柏崎の形見を渡す。花若の母これを見て、

母「ほんとに歎いたところで、返らないことだけれども、形見を見ると、すぐ涙が出て來てしやうがない」（と泣く）

【四】

小太郎「花若樣の御書面がございます。これを御覽下さいませ」

と手紙を渡す。母受取つて讀む。

母「——（文）『さて父上は御病氣にお罹りになり、間もなくお亡くなりになりましたので、どのやうに悲しい思ひを致しましたことか、私の心中をお察し下さいませ。私も國へ歸りまして、母上にお目にかゝりたいとは存じましたが、佛道修業

○思ふ心を便りにて―母に逢へば母が出家を止めるであらうと思つて、母に逢ひたい情を抑へて。―便りにて」は理由にして、申譯にしてといふ意。
○命つれなく―惜しからぬ命を長らへて。死にたい身を定命が無情にも死なせないこと。新千載集「惜しからぬ命つれなくながらへばなほも憂き身の果や知られむ」
○亡からん父―亡くなつた父。

見参らせたくは候へども。思ひ立ちぬる修業の道。もしや止められ申さんと。思ふ心を便りにて。心強くも出づるなり。命つれなく候はば。三年がうちには参るべし。様々の形見を御覽じて。御心を慰みおはしませと。書いたる文の恨めしや

地下歌『亡からん父が名殘には子程の形見あるべきか（と文を顔にあててしをり）。上歌『父が別れはいかなれば（文をたゝみ）。父が別れはいかなれば。悲しみ修行に出づる身の。などや生きてある。母に姿を見みえんと。思ふ心のなかるらん（と文にて膝をうち）。恨めしのわが子や（としをりて立上り）。憂き時は。恨みながらもさりとては（と文を懷中して仕手柱際に行き）。わが子の行方安穩に守らせ給へ神佛と祈る心ぞ（と合掌）、あはれなる祈る心ぞあはれなる

○見みえん―互に見たり見せたりすること。「みえん」は見せる。
○恨みながらもさりとては―歎きの餘り、母を思はないわが子を恨めしくも思ふが、やはりわが子が可愛くて。

母「まあ、このやうなことの書いてあるのが恨めしい。父の死んだ後の形見には、子に勝るものはないのに、それなのに、花若は父との別れは悲しくて、佛道修業まで思ひ立ちながら、生きてゐるこの母には、何故會ひたいと思ふ心がないのだらう。あゝわが子が恨めしい。……悲しい辛い時は、ついわが子が恨めしくなるが、でも、無事にゐてくれればよいが。どうか神佛様、わが子が無事安穩に居りまするやうに」

と、神佛に祈る母の心はあはれである。

母、神佛に祈願して退場。小太郎々々樹いて退場。

母は讀み終つて、

母は讀み終つて、

を思ひ立ちましたので、母上にもしや止められはしないかと案ぜられましたのでお會ひしたい心をこの心配の爲に抑へて、お目にも掛らないで、心強く出掛けて行きます。惜しからぬ命を長らへて居りましたらば、三年のうちにはお目にかかります。色々の形見を御覽になつて、お心をお慰め下さいませ』――」

【五】

返句に手を下して靜かに中入。ワキもシテの後より幕に入る。子方花若、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ善光寺住僧、子方と同樣の裝束にて舞臺に入り、子方は眞中に、ワキヅレは名乘座に立ちて、

ワキヅレ『かやうに候者は。信濃の國善光寺の住僧にて候。（子方を見て）又これに渡り候人は。いづくとも知らず愚僧を賴む由仰せ候程に。師弟の契約をなしこの程出家させ申して候。さる間毎日如來堂へ伴ひ申し候。今日も又參らばやと思ひ候

ワキヅレ「まづかう御座候へ

といひて、子方は脇座、ワキヅレはその次に行きて座す。

【六】

一聲の囃子にて、後ジテ花若の母、面深井・髮・髮帶・襟白・着附摺箔・水衣・無色縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて、笹をかたげて橋懸に出で、一の松に立ち、

後ジテ「これなるわらんべどもは何を笑ふぞ。なに物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は。訪らひてこそ給ぶべけれ。それを如何

○善光寺―長野市にある。皇極天皇の勅命により本田善光の創建した寺。本尊は阿彌陀如來、左右に觀音・勢至菩薩を安置す。この三尊は欽明天皇十三年百濟國聖明王の獻じたもので、これにより蘇我・物部二氏の爭亂を起した。

○如來堂―本尊阿彌陀如來を安置した堂。

【六】

○これなるわらんべどもは―路傍にゐて狂女を嘲笑する子供を指す。この類句「蟬丸」にもある。

○うたてやな―情ない。

○心あらん人は―同情心のある人ならば、他人の不幸を見て訪ひ慰めもせられるであらうのに。

【五】

第二段

舞臺に信濃國善光寺。子方花若、ワキヅレ善光寺住僧と共に登場。

僧「私は信濃國善光寺の住僧です。又これに居られる人は何處の人かは知らないが、愚僧をたよつて來られたので、師弟の契約を結び、この開出家させたのです。それで毎日如來堂へ連れて行くので、今日もこれから參詣しようと思ふのです」

シテ自己紹介をして、花若に向ひ、

僧「さあこちらへお出でなさい」

シテ花若を伴つて如來堂へ參詣する態。

【六】

橋懸はまたもシテの柏崎

後ジテ花若の母狂亂して登場。この邊に多くの子供がゐて、狂女を面白さうに見てゐる態で、

母「こゝの子供達に何を笑ふのだ。なに、氣の狂つたのがをかしいといふのか。情ないことだ。同情のある人ならば、氣の毒だといつて尋ねても下さらうものを。何故かといへば、私は夫には死に別れ、

○白絲の―行方をも知らぬを白絲にいひかけ、絲の緣で亂れ心と續けた。この句〔三井寺〕にもある。

【モ】○人の身のあだなりけり―人の命は頼み難い果敢ないものである。この原歌未詳。○思ひには死なれざりけり―早く死にたいと思つても物思ひの爲に死なれるものではない。この原歌も未詳。謠曲拾葉抄には「思ひには死なれぬとなぞ歎きけん憂きためにとてながらふる身を」(雪玉集)を引いてゐる。○何と楢の葉の―何とならんを楢にいひかけ、楢の緣で柏を呼び起した。○國府―國司の廳のあつた所。越後の國府は、和名抄に「在二頸城郡一」とある。○人目も分かぬ―人目をも恥ぢないやつれ姿。○いつまで草の―「いつまで―」の序。いつまで草は壁土などに生える命の短い草。堀川百首に「壁におふるいつまで草のいつまでかかれずとふべきしの原の里」○知らぬ心は麻衣―母の歎きをも知らない子の心は情が淺いを麻にいひかけ、衣の緣語裏を浦にいひかけた

にといふに。夫には死して別れ。唯ひとり忘れ形見とも思ふべき。『子の行方をも白絲の（と舞臺に進み）地』亂れ心や狂ふらん

【カケリ】

【モ】シテサシ『げにや人の身のあだなりけりと。誰かいひけん虛言や。又思ひには死なれざりけりと。詠みしも理や。今身の上に知られたり。これも偏に夫や子の。故と思へば恨めしや

地下歌『憂き身は何と楢の葉の柏崎をば狂ひ出で（と詰足し）。上歌『越後の國府に着きしかば。越後の國府に着きしかば。人目も分かぬわが姿。いつまで草のいつまでと（正面に出で）。知らぬ心は麻衣。浦遙々と行く程に（遠くを見渡し）。松風遠く寂しきは（橋懸の松を見）。常磐の里の夕かや（仕手柱際へ行き）。

たゞ一人の忘れ形見のいとしい子の行方は知れないのだもの。だから、このやうに氣の狂ふのも當り前だ」

〔カケリ〕に狂亂の樣を演じ、

【モ】『さうだ、昔の歌に、『人の命は果敢ないものだ』と詠んだ人があるが、それはうそぢや。現在私はこのやうに生きてゐるではないか。でも『悲しい思ひをしたからといつて、死なれるものでない』と詠んだ歌があるが、これはほんとだ。現在私がこのやうに悲しい思ひをしてゐながら、死れないのを見ても、その道理が分る。このやうな悲しい思ひをするのも、夫や子の爲だと思へば、恨めしい。

シテ「辛いこの身は行末どうなることかと思ひながら、柏崎を狂ひ出て、越後の國府に着くと、もはや私は人目も恥ぢない、亂れ變れた姿になつてしまつたのに、わが子はいつまでも私の心を察してくれない、薄情なのが恨めしい。と、このやうに恨みながら、浦々を通つて行つて、夕暮常磐の里へ來ると、松風が遠く寂しく吹いてゐるが、常磐といへば、あの幼子を連れて雪路にさ迷うた常磐御前の心中

○常磐の里―信濃國水内郡にある。常磐は松の緣語。
○われにたぐへてあはれなるは―常磐の里といへば、源義朝の妾常磐御前が幼い子今若・乙若・牛若を連れて雪中に逃つた事が、今のわが身に引比べて一層あはれに感じられるとの意。
○木島の里―信濃國下高井郡にある。子を愛するものの喩へに「燒野の雉子夜の鶴」といふので、野邊の雉と續けた。
○淺野―同國水内郡。雪の淺きを淺野にいひかけた。
○井上―同國上高井郡。「桐の花咲く」は、賓萃の詩「鳥鵲爭飛井上桐」に據つて、井上の枕詞としたものか。
○生身の―畫像又は木像でない、生き身の佛。

われにたぐへてあはれなるはこの里。子故に身をこがししは野邊の木島の里とかや（大小前に行き）。降れども積らぬ淡雪の（正面へ出て見渡す心）。淺野といふはこれかとよ。桐の花咲く井上の。山を東に見なして。西に向へば善光寺（脇座の方へ廻りて眞中に出で）。生身の彌陀如來。わが狂亂はさて措きぬ。死して別れし夫を導きおはしませ

と正面先に下に居て、笹を下に置きて合掌。内陣に參りたる心。

ワキヅレ立ちて、

【八】

ワキヅレ「いかに狂女。御堂の内陣へは叶ふまじきぞ急いで出で候へ

シテ「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂とこそ見えたれ

といひながら、立ちて仕手柱際に行く。

ワキヅレ「これは不思議の物狂かな。そもさやうの事をば誰が教へけるぞ

○内陣―堂の奥の本尊を安置した所。
○極重惡人無他方便―この句慧心僧都の往生要集に出づ。至極の大惡人である末世の衆生が成佛すべき方法手段は他にない、たゞ南無阿彌陀佛と彌陀の名號を唱へれば、極樂淨土に生まれることが出來る。換言すれば、大罪人も念佛すれば極樂往生が出來るとの意。

【八】

ワキヅレ「いかに狂女。御堂の内陣へは叶ふまじきぞ急いで出で候へ

シテ「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂とこそ見えたれ

といひながら、立ちて仕手柱際に行く。

ワキヅレ「これは不思議の物狂かな。そもさやうの事をば誰が教へけるぞ

が、今のわが身に引比べられて氣の毒に思はれ、誰もわが子ゆゑに身をこがすものだと、親心を思ひ知り、木島の里へ來ては、燒野の雉子を思ひ起し、やがて雪の少い淺野や、桐の花の咲く井上も通り過ぎて、西へ向つて來ると、はやこゝが善光寺だ」

といつてゐる間に、舞臺は善光寺に移つたのである。そして佛に向ふ心で、

甚「南無生身の阿彌陀如來樣、私の狂氣の靜まりますのは第一にして、どうか亡き夫が極樂へ往けまするやうお導き下さいませ」

と合掌する。

【八】

先程から如來堂に參詣してゐた僧は、狂女を見て、

僧「これ狂女、女は御堂の内陣へ入つてはいけない。急いでお出でやれ」

甚「でも經文には、『極重惡人を救ふには他に方便がない、たゞ阿彌陀如來を稱へれば極樂へ往くことが出來る』と書いてありますぞ」

僧「これは不思議な狂女だ。一體そのやうな事を誰が敎へてくれたのだ」

○唯心の淨土―極樂淨土は唯自分自分の心にあるものであるとの意。

○九品上生の臺―九品は極樂の階級で、極樂を上中下の三品に分ち、更に各品を上中下の三生に分けて九品とす。九品上生は上品上生の意で、極樂の最上級である。源平盛衰記に「夕日西に傾けば、九品上生の蓮臺に三尊來迎の御心を運び給へり」

○釋迦は遣り―善導大師觀經疏の「釋迦遣、彌陀招喚」を引いた。釋迦はこの土より淨土へ往けと勸め、彌陀は極樂へ來れと導くとの意。

○ここを去ること遠からず―觀無量壽經に「阿彌陀佛去レ此不レ遠」

○光明遍照―觀無量壽經に「一々光明遍照二十方世界一、念佛衆生攝取不レ捨」とあり善光寺の名は、この彌陀の光明の遍く十方世界を照らし、衆生を救はんとの誓願を表したものであるから、この寺の常燈明を賴みにしてとの意。

○常の燈火―善光寺緣起に「昔油の料盡きて、燈明を挑げさりしかば、如來光明を放ちて家内を照す」云々とある。

シテ「敎へはもとより彌陀如來の。御誓ひにてましまさずや。唯心の淨土と聞く時は。この善光寺の如來堂の。內陣こそは極樂の。九品上生の臺なるに。女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば。如來の仰せありけるか。よし人々は何ともいへ（と見渡し）。『聲こそ知るべ南無阿彌陀佛（と合掌）

地『賴もしや。賴もしや

ワキヅレは下に居る。

シテ『釋迦は遣り

地『彌陀は導く一筋に。ここを去ること遠からず。これぞ西方極樂の。上品上生の內陣にいざや參らん（眞中へ行き）。光明遍照十方の。誓ひぞしるきこの寺の。常の燈火影賴む（正面先に出でて坐し）。夜念佛申せ人々よ。夜念佛いざや申さん

母「この敎は、元來阿彌陀如來御自身が衆生に誓つて仰せになつたのではございませんか。それに又『極樂淨土は外にあるのではない、たゞわが心から生まれるものだ』とも仰せられてあるのですから、私はこの善光寺の如來堂の內陣を第一等の極樂だと思つて參りましたのに。それだのに、女が參つてはいけないとは、そのやうな御禁制をいつ如來樣が仰せになつたのです。いや外の人々が何といはうとも、私は阿彌陀如來の御聲が何よりのお導きでございます。……南無阿彌陀佛」（三拜む）

母「あゝありがたい賴もしい事だ。釋迦如來は衆生を極樂へお遣りになり、阿彌陀如來は極樂でこれをお迎へ下さるのだ。しかもその極樂は遠い所ではない、この內陣が西方極樂の第一等の淨土なのだ。さあその內陣へお參りしよう。佛樣が『光明を遍く照らして、十方世界の衆生を殘らず救つてやらう』と仰せられた通りに、この寺の御燈明が殘る隈もなく光り輝いてゐる。さああなた方も夜念佛をお唱へなさい。私も念佛を唱へませう」

【九】参らせ物―供へ物。
○形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる隙もあらましものを―古今集讀人知らずの歌。
○後生善所―死後極樂に生まれる事。
○弓は三物―流鏑馬、笠懸、犬追物の三種の射藝。
○歌連歌―和歌と連歌。連歌は短歌の上句と下句とを二人で分けて詠み、更に下句より次の上句に詠み連ねる文藝。
○亂舞―もと宮中の御宴等に、殿上人等が今樣の短歌を謠ひ舞つた舞の稱であるが、後には田樂・猿樂などの意に用ゐた。こゝでは後者の意に用ゐたのであらう。
○鎧直垂―鎧の下に着る直垂。
○衣紋―裝束の着け方。
○着ないて―着なして。
○へりぬり―絹で作つた烏帽子で、緣を漆で塗つたもの。兜下に用ゐた。
○手拍子―手を拍つて鼓などの拍子の代りとする事。
○鳴るは瀧の水―當時最も愛誦せられた今樣歌「鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、ありうとうとう」〔參〕の語釋參照。

【九】

後見、笹を引き、前折烏帽子と長絹をシテの前に置く。シテこれを兩手に取上げてワキヅレに向ひ、

シテ「いかに申し候。如來へ參らせ物の候。この烏帽子直垂は、別れし夫の形見なれども。『形見こそ今はあだなれこれなくは。忘るる隙もあらましものをと。詠みしも思ひ知られたり。これを如來に參らせて。夫の後生善所をも。祈らばやと思ひ候

【物着】シテ烏帽子・長絹を着て、

シテ『あらいとほしやこの烏帽子直垂の主は。「よろづ何事につきても闇からず。弓は三物とやらんを射そろへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。いで人々に亂舞まうて見せんとて。『鎧直垂取り出だし。衣紋美しく着ないて。へりぬり取つてうちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り(と立上り)。鳴るは瀧の水

【九】

狂氣の母は、國から持つて來た夫の形見の烏帽子直垂を取出して、李僧に向ひ、

母「お僧に申しあげます。如來樣にお供へしたいものがございます。この烏帽子と直垂は、亡くなつた夫の形見でございますが――

『形見こそ今はあだなれこれなくば、忘るる隙もあらましものを』

(形見を見れば愈〻悲しい思ひに堪へられない。形見がなければ忘れる時もあらうから、一層ない方がましだ)

といふ歌の心も、わが身に思ひ知られたのでございます。これを如來樣にお供へして、夫の極樂往生を祈りたいと思ひますが」

といつて、さすがに形見がなつかしいので、これを着て見て、

母「あゝ痛はしい。この烏帽子直垂の主は、何事にも明らかな人で、弓は流鏑馬・笠懸・犬追物の三つながら上手であり、和歌や連歌にも達者であつた上、酒宴などの時には、さあ皆樣に亂舞を舞うて御覽に入れようといつて、鎧直垂を取出し、着物を取繕ひ、へりぬりを被つて、人に手拍子を囃させ、自分は扇を持つて、「鳴るは瀧の水」と謠はれたものです」

○一念稱名の聲―一度念佛を唱へれば。
○攝取の光明―衆生を闇い所から極樂に導き取る光。
○聖衆來迎―佛菩薩が極樂より娑婆へ來て、衆生を迎へとること。
○異香―靈妙な香。
○白虹地に滿ちて―彌陀來迎の光明の赫々と輝く形容。
○幻相―夢幻の如きはかない奏。
○飛花落葉の風の前には―風の吹くがままに、花の散り葉の落ちるのを見ては。
○有爲―生滅變化する現象界。
○電光石火―人生の極めて果敢ない喩。碧巖錄に「此事如二擊石火一似二閃電光一」
○假の親子―親子の緣はこの世だけであるから、假といふ。
○道芝の露―親子の道、道芝の露、露の憂き身といひ續け、狹衣物語の歌「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」を引いた。
○置き所―露の緣語。續古今集殿富門院大輔の歌に「消えぬべき露の憂き身の置き所いづれの野邊の草葉なるらん」

と仕手柱際に行き、これより謠に合せて舞ふ。

地クリ『それ一念稱名の聲のうちには。攝取の光明を待ち。聖衆來迎の雲の上には

シテ『九品蓮臺の。花散りて

地『異香充ち滿ちて。人に薰じ。白虹地に滿ちて。列れり

ワキサシ『つらつら世間の幻相を觀ずるに。飛花落葉の風の前には。有爲の轉變を悟り

地『電光石火の影のうちには。生死の去來を見ること。始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまとはりし。假の親子の今をだに。添ひ果てもせぬ道芝の露の憂き身の置き所

シテ『誰に問はまし。旅の道

地『これも憂き世の。ならひかや（としをる）

（舞クセ）

と夫を戀慕したが、また佛前の心持にたち歸つて曰「一度南無阿彌陀佛と名號を稱へ奉れば、彌陀如來はわれらを迎へ取る爲に光明を放ち給ひ、御佛が迎への爲に乘つてお出でになる紫雲の上には、極樂の蓮の花が散りかゝり、あたり一面靈妙な香が充ち滿ちて、人間にまで薰り、虹のやうな光は地上まで列るとの事でございます。それに比べて、この人間世界の事を考へますと、花の散り木葉の落ちるのを見ても、この世の變化無常であることが悟られ、電の光や石打つ火を見ても、生死のいかに早いかゞ知られるので、この樣なことを今更驚くことはありませんが、宿緣あつて親子と生まれて來ながら、一世だけの契りといはれるこの世だけさへ添ひ遂げられないのが、身の置き所もなく悲しうございます。あゝこの誰に慰められることも出來ない境遇、これも憂き世の習ひと申すものでございませうか。――

○三界―衆生の輪廻轉生する迷ひの世界、欲界・色界・無色界をいふ。
○晴れ難き雲の―妄執の晴れ難きを雲の晴れ難きにいひかけ、雲より月、月より眞如といひつゞけた。
○眞如平等の臺―眞如は一切萬有の實體。實體は絶對無差別であるから平等といふ。迷ひのない悟の世界をいふ。
○煩惱―心身を惑はす迷ひ
○罪障の山―後に記す。
○身三口四意三―後に記す。
○始めの御法―釋迦一代の内、最初に說いた敎、華嚴經を指す。
○三界一心―後に記す。
○己身の彌陀―阿彌陀佛もわが身を離れてあるのではない。
○この寺の御池の―極樂はわが心から生ずるものであるから、遠く外に求めるまでもなく、この善光寺の蓮の池を極樂の蓮臺と見ることが出來る。
○影頼む―阿彌陀如來の力を頼む。
○聲を力の―わが念佛の聲を力にして成佛する。
○黃金の岸―極樂のこと。阿彌陀經に「池底純以二金砂一布地一」
○樂しみを極むなる―極樂

地々セ三悲しみの涙、眼に遮り思ひの煙胸に滿つ。つらつらこれを案ずるに、三界に流轉して猶人間の妄執の。晴れ難き雲の端の月の御影や明らけき。眞如平等の臺に至らんとだにも歎かずして、煩惱の絆に結ぼほれぬるぞ悲しき。罪障の山高く。生死の海深し如何にとしてかこの生に。この身を浮かめんと。げに歎けども人間の。身三口四意三の。十の道多かりき

シテ『されば始めの御法にも

地『三界一心なり。心外無別法心佛及衆生と聞く時は。是三無差別なに疑ひのあるべきや、己身の彌陀如來唯心の淨土なるべくは。尋ぬべからずこの寺の。御池の蓮の得ん事をなどか知らざらん。唯願はくは影頼む。聲を力の助け船。黃金の岸に至るべし。抑も樂しみを極むなる。敎へ

悲しい涙に眼は見えず、戀しい思ひに胸が一杯です。よく〳〵考へれば、執着心の晴れ難いのは、この娑婆に流轉してゐる人間のあさましさで、悟ればあの山の端の月のやうに明らかになりませうものを、大悟して極樂へ往かうとも願はず、いつまでも煩惱に捉はれてゐるのは、思へばほんとに悲しいことでございます。誠に人間の罪障は山のやうに多く、生死の苦しみは海のやうに深いものです。どうかしてこの苦から脫がれたいと思ひながらも、とかく人間には、身から出る殺生・偷盜・邪淫の罪業、口から起る妄語・綺語・惡口・兩舌の罪業、意から出る貪欲・瞋意・愚痴の罪業など、所謂十惡の業の多いものでございます。だから、釋迦如來もその最初の御敎である華嚴經に『この世はすべてわが心にあるものである。わが心を外にしては、心も佛も衆生もないのだ』と說かれました。このやうにわが心と佛と衆生との區別のないことは疑ひありません。阿彌陀如來も極樂淨土もみなわが心の中にあるものならば、極樂を遠くに尋ねるまでもない事です。この善光寺のお池の蓮がそのまま極樂です。

の字をわけて用ゐた。
○教へあまたに―佛の教の數多あるのと、修行の差別の數多あるのを兼ねていふ。
○道樣々の品―修行の仕方によつて、淨土に生まれる階級に差別のあるのをいふ。
○功德池―後に記す。
○量りなき命の佛―無量壽佛を和らげていふ。無量壽佛は阿彌陀佛の譯語。
○若我成佛十方の―この句のまゝでは意が通じ難い。觀無量壽經の「若我成佛十方世界念佛衆生攝取不捨」(敦盛・參照)を略したのであらう。
○本願―本來の誓願。阿彌陀如來の衆生を攝取するとの誓ひ。
○白雲の―行方を知らぬといひたなびく山や―新古今集大伴旅人の歌に「ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山や西にあるらん」
○彼の國―西方極樂淨土。
○一夫婦一所に淨土に生れたいといふ望み。
○曉かけて―稱名が曉まで續く意と、燈の音が曉まで消えない意とを兼ねて用ゐた。
○善き光―燈明の光に善光寺の名を含ませた。
○南無歸命―歸命は南無Namas の漢譯。原語と譯語とを重複して用ゐた。

あまたに生まれ行く。道樣々の品なれや、寶の池の水。功德池の、濱の眞砂。數々の玉の床。臺も品々の樂しみを極め量りなき命の佛なるべしや。若我成佛十方の。世界なるべし

シテ『本願誤り給はずは

地『今の我等が願はしき。夫の行方を白雲のたなびく山や西の空の。彼の國に迎へつつ。一つ淨土の緣となし望みを叶へ給ふべしと。稱名も鐘の音も。曉かけて燈火の。善き光ぞと仰ぐなりや。南無歸命彌陀尊願ひを叶へ給へや

【一〇】

地ロンギ『今は何をか包むべき、これこそ御子花若と。いふにもすすむ涙かな

と常座にて下に居て合掌、

と、ワキヅレ立ちて、子方に兩手を添へて眞中に出し、ワキヅレはもとの座に歸り坐す。

從つて極樂へ往く事もむつかしいことはございません。彌陀如來の御光を賴み、念佛を力にしてゐれば、極樂へ往けることでございませう。その極樂には、前生の所行によつて住む場所に幾つかの階段はありますが、いづれにしても、極樂には寶の池の功德水があり、砂は玉で出來てゐて、どの階級にしても樂しみは限りがないのでございます。そして阿彌陀如來は『われ若し成佛せば、十方世界の衆生を救はん』と仰せられたのでございます。

このお誓ひのお言葉に誤りがないならばどうか私のお願ひでございます。今何處に居りますやら分らない夫を極樂淨土へお迎へ下さいまして、私も夫と一所に淨土へお迎へ下さいませ。念佛を唱へ鐘を打つてゐますうちに、はや夜明け近くなりましたが、この御燈明の光を御光と仰いで居ります。南無阿彌陀如來、どうぞ私の願ひをお叶へ下さいますやうに」

【一〇】

寺僧はこの狂女が花若の母であることを知つて、

僧　今は何を隱さう、これが御子の花若です」

と同情の情に濡れながら知らせる。

シテ『わが子ぞと。聞けばあまりに堪へかぬる。夢かとばかり思ひ子のいづれぞさても不思議やな（と脇座の方を見）

地『ともにそれとは思へども。變る姿は墨染の（正面に向き）

シテ『見しにもあらぬ面忘れ（と子方に向き）

地『母の姿も現なき

シテ『狂人といひ

地『衰へといひ。互にあきれてありながら（子方の側へ行き）。よくよく見れば（子方の顔をとくと見て、仕手柱際へ伴ひ行き）。園原や伏屋に生ふる帚木の。ありとは見えて逢はぬとこそ。聞きしものを今ははや。疑ひもなき。その母や子に逢ふこそ嬉しかりけれ逢ふこそ嬉しかりけれ

子方はシテに伴はれて仕手柱際へ來て、そのまゝ幕に入り、シテはかざして廻り留拍子を踏む。

【一〇】

○思ひ子　愛子。夢かとばかり思ふといひかけた。

○いづれぞ―餘りの驚喜に、どれがわが子であるか見わけがつかないのである。

○見しにもあらぬ―墨染の身を見にいひかけた。

○面忘れ―顔を見忘れること。榮花物語の歌に「墨染の衣うき世の花盛りおも忘れても折りてけるかな」

○園原や伏屋に生ふる帚木の―下句は「ありとは見えて逢はぬ君かな」新古今集坂上是則の歌を引いた。園原は信濃國にある。

母「私の子ですつて。わが子と聞いただけでも堪へられないのです。夢ではないでせうか。どこに花著があるのです。ほんとに夢のやうに思はれます」

母子ともに互に親子でなからうかとは思つてゐたのであるが、母の姿が變つてしまつて、子も出家してゐるので、分らなかつたのである。

母「すつかり姿が變つてゐるので、顔を見違へました」

花著「母上のお姿も正氣のない……」

一方は狂人となり、一方は出家のやつれ姿となつてゐるので、互に呆れて、暫くは見會つてゐたが、よく〳〵見れば『園原や伏屋に生ふる帚木の、ありとは見えて逢はぬ君かな』といふ歌とは反對に、疑ひもない母子が再會したのは嬉しいことである。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「急ぎ候程に……着きて候まづ〳〵（下懸あらあさましや人一人御座候はねば。さながら茅屋となりて候は如何に。やがて）案内申さうずるにて候　【八】地　彌陀は導く一筋に……夜念佛いざや申さん（下懸　子方　是なる物狂を能々見候へば。柏崎の母にて御入り候。人目の隙をはからひて。名のらばやと思ひ候）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「これは越後の……頼み奉りし人（光候柏崎殿）は訴訟の……父御（光ナシ）の御別れを歎き……さる間花若殿の御文に（光程に故郷に御入候母この御かたへ。御文を殘しをかれて候程に）御形見の品々を……　【二】ワキ「いかに申し候（光誰か渡り候）鎌倉より……シテ「なに小太郎とはもし殿の御歸りありたるか（光申か）。シテ「あら珍しや何とて物をば申さぬぞ（光こなたへきたり候へ）。ワキ「さん候……何と申しあぐべきやらん「出すべき事とも）更に……シテ「何と花若が……さては（光ナシ）父の（光御）叱りたる（光ありたる）か……ワキ「いやさやうにも御座（光ナシ）なく候……　【三】ワキ「唯古里の御事を疊束なく（光も）……シテ「さても〳〵……われも歸りて御有樣（光を）……

【四】ワキツレ「かやうに候者（光是）は信濃の國善光寺の……この程（光ナシ）出家させ（光になし）申して候さる間（光程に）毎日……伴ひ申し（光同道申參り）候今日も……思ひ（光存）候　【六】後ジテ「これなる（光やあ〳〵いかにあれなる）わらんべども（光ナシ）は……なに（光わらはか）物に狂ふが……給ぶべけれ（光きに）……　【七】シテサシ「げにや……今（光うき）身の上に知られ……　【八】ワキツレ「いかに（光是）皮狂女……　【九】シテ「いかに申し候……參らせ物の候（光よなふ）……夫の形見なれども（光ほ。身をはなさずもちて候へども）形見こそ

附記

○罪障の山―この世の罪障煩惱の多く深いことを山や海に喩へた。宗觀に「罪障山高、以レ刀不レ能レ斬、煩惱海深、以レ手不レ可レ覘」往生禮讃に「煩惱深無レ底、生死海無レ邊、度レ苦船未レ立」

○身三口四意三―身にて犯す罪、殺生・偸盜・邪淫の三、口にて犯す罪、妄語・綺語・惡口・兩舌の四、意にて犯す罪、貪欲・瞋恚・愚癡の三。以上を十惡といふ。

○三界一心　華嚴經に「三界唯一心、心外無二別法」心佛及衆生、是三無差別」三界はすべて自分の心から現れるもので、主觀以外に客觀の別物はない。從つて心と佛と衆生との三種の區別を立てるのも心の迷ひで、唯わが心の外に何の差別も無いとの意。

○功德池　阿彌陀經に「極樂國土有二七寶池一八功德水充二滿其中一」。八功德は清淨・清冷・甘美・輕快・潤澤・安和・除飢渴・長養諸根をいふ。

春日龍神（かすがりうじん）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】五番目　劇的夢幻能

【人物】**ワキ**　明慧上人、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　春日宮守の翁（時風秀行）、**狂言**　春日社人、**後シテ**　龍神

【所】大和國　春日の里

【時】鎌倉初期（二月）

【異稱】〔明慧上人〕ともいつた。

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記に寛正六年三月九日觀世が〔明慧上人〕を演じたとあるのは、この曲のことであらう。言經卿記に文祿四年三月廿八日本曲註釋の事が見えてゐる。

【梗概】摂尾の明慧上人が、天竺に渡つて佛蹟を拜まうと思ひ、暇乞の爲に春日明神に參詣すると、老社人が出て來て、上人の入唐渡天を諫止し、釋迦入滅後の今日では、わが國が佛蹟で、この春日の、

山が靈鷲山であり、野が鹿野苑であると語り、自分は時風秀行で、神の告を知らせるのであるといつて消え失せる。やがて、春日の里に金色の光がさして、龍神が現れ出で、釋迦が靈鷲山で法華經を說いた會座の樣を示す。

【出典】　この事は古今著聞集卷二に、

（高辨上人、釋尊の御遺跡拜み奉らむとて、弟子千餘人を相具して、天竺へ渡り侍らむと思はれける頃、春日大明神に暇申さむとて、かの御社へ參られけるに、鹿六十頭膝を折りて、地に伏して上人を敬ひけり。その後生所紀伊の國湯淺郡へ向はれたりけるに、上人の伯母なりける女房につきて、春日大明神御託宣ありけるは、「我佛法を守護せむが爲に、この國に跡を垂れり、上人我國をすてゝ、いづくへか行かむとする」とのたまひければ、上人申し給ひけるは、「この事信せられず、まことなれば、その驗を示し給ふべし」と申し給へば、「汝我を疑ふことなかれ、汝この山に來りし時、六十頭の鹿膝を折りて敬ひしは、我汝が上に六尺あがりて翔りて離れてありし故に、我を敬ひしによりて、上人に敬ひて膝を折りしなり」。上人又申すやう、「それはまことにさりき、さりながら猶疑ひあり、速に凡夫の振舞に離れたらむ事を示し給へ」と申されければ、この女房飛び上りて萱屋の棟に尻をかけて坐せり。その顏の色、瑠璃の如くに靑く透き通り、口より白き泡をたらす。その泡かうばしき事限りなし。その時上人信仰して、誠にこの樣不可思議なり。年頃華嚴經の中に不審多かり。悉く解脫し給ふ。上人涕泣隨喜して渡海の事も思ひ留り給ひけり。

とある。これが卽ち本曲の原據であらう。

【概評】　謠曲には、天子の萬歲を祝し國土の太平を讚へた曲が多いが、本曲又は「白樂天」の如きは、更に一歩進んで排外に及んだものである。それだけまた熱の籠つた作で、前段第四節の、佛蹟をわが國に祝する條も力强く、後段の、法華會座の描寫も、舞臺には龍神一人登場するのであるが、行文がよく引締まつてゐて、會座の樣をさながら髣髴せしめ、最後に「これまでなりや明惠上人、さて入唐は」「とまるべし」「渡天は如何に」「わたるまじ」と抑へて行くあたりは、苟もわが說に服さしめないでは置かないといふ氣概が現れてゐて、誠に緊張した曲である。

【一】

○月の行方―日本を日域といふに對して、天竺を月支又は月氏（實は印度の西方の一國）ともいふので、西方天竺を指して月の行方といつたのである。

○日の入る國―支那をいふ

聖德太子が隋の煬帝に贈られた書に「日出處天子致二書日沒處天子一無レ恙一」

○栂の尾―山城國葛野郡、高尾の東北にある。

○明慧上人―名は成辨、後に高辨と改めた。明慧はその號。建永元年後鳥羽上皇より栂尾山を賜はり、廣寺を再興して高山寺を建て、華嚴宗を唱道した。寛喜四年寂、年六十。

○入唐渡天―唐土に入り、天竺に渡ること。

○春日の明神―奈良市春日山に鎭座の神社。祭神四座、第一武甕槌命（鹿島神）、第二齋主命（香取神）、第三天津兒屋根命（春日神）、第四姫大神（天照大神の分身）。

〔采女〕參照。

○南都―奈良。

○愛宕山―山城國葛野郡にある。

○櫛が原―愛宕山の中程にあつたといふ。

○雙が岡―山城國葛野郡花園村にある岡。松の立ち並

【一】

次第の囃子にて、ワキ明慧上人、角帽子・着附熨斗目・袴水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附熨斗目・綾水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキヅレ次第「月の行方もそなたぞと。月の行方もそなたぞと。日の入る國を尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは栂の尾の明慧法師にて候。われ入唐渡天の志あるにより。御暇乞の爲に春日の明神に參らばやと思ひ。唯今南都に下向仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ道行「愛宕山。櫛が原をよそに見て。櫛が原をよそに見て。月に雙が岡の松。綠の空ものどかなる都の山を跡に見て。これも南の都路や。奈良坂越えて三笠山。春日の里に着きにけり春日の里に着きにけり

ワキ、「これも南の都路や」と正面に向き、二三足出でてまたもとに歸り、春日に着きたる心。道行濟みて、ワキはまた正面に

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ明慧上人、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

明慧「月の進む西の方天竺へ渡らうと思ふについて、同じ方角の支那をも見物して行かう」

と次第を謠つて旅の目的を述べ、

明慧「私は栂尾の明慧上人です、私は支那天竺へ渡らうと考へてゐるので、そのお暇乞に春日明神へ參詣しようと思ひ、唯今奈良へ行くのです」

と見物人に自己紹介をし、

明慧「朝夕見馴れた愛宕山櫛が原を出で立ち、月の光に綠滿る雙の岡の松を眺めながら、空も長閑な都の山に別れを告げて、京の都と同じやうに南の都といはれてゐる奈良に向ひ、奈良坂を越えて、三笠山の聳え立つ春日の里に着いた」

と旅程を述べてゐる間に、旅が進んだ態で、舞臺は奈良春日神社の社前となる。

ぶを雙の岡にいひかけ、その松を月の光で見るを緣にいひかけた。下鬘書本には「雲に雙が岡」とある。
○奈良坂—奈良市の北にあり、京より奈良に入る坂路。
○三笠山—春日山の別名。今三笠山といつてゐるのは實は若草山のことである。
○春日の里—昔の春日郷、今の奈良市。

【二】
○和光の光—神の光。和光とは佛菩薩が衆生濟度の爲光を和らげ姿を變へて世塵に交はることをいふ。
○山は動ざる—山は動ぜざる意。ぜの字を脫したのであらう。
○古今に至る—古今變りのないとの意。用字を誤つたものであらう。
○平安の巷—奈良の古字「平城」の文字を引きのべて太平安穩の意に用ゐたのである。
○久方の—天の枕詞。御名を聞くことも久しといひかけたのである。
○天の兒屋根—春日の祭神。天孫瓊々杵尊に隨つて、この國土に降臨せられた神で藤原氏の祖先。

向き、
ワキ「急ぎ候程に。春日の里に着きて候。心靜かに參詣致さばやと存じ候
ワキツレ「然るべう候

【三】
といひて脇座に行き下に居る。
一聲の囃子にて、シテ宮守の翁、面小牛尉・尉髮・翁烏帽子・襟淺黃・着附小格子厚板・練狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて萩箒を持ちて出で、常座に立ちて、
シテ一聲『晴れたる空に向へば。和光の光。あらたなり
シテサシ『それ山は動ざる形を現じて。古今に至る神道を表し。里は平安の衢を見せて。人間長久の聲滿てり。誠に御名も久方の。天の兒屋根の代々とかや
シテ下歌『月に立つ影も鳥居の二柱。上歌『御社の。誓ひもさぞな四所の。誓ひもさぞな四所の。神の代よりの末うけて。澄める水屋の御影まで塵に

【三】
シテ時風秀行、春日神社宮守翁の姿で登場、
宮守『晴れ渡つた空を見るにつけても、あらたかな神の御光が仰がれることだ。いや、空ばかりではない、山は動きなき形を現して、神の道の古今を通じて變りのないことを示して居り、町の名は平城と呼ばれて太平安穩、人々は壽福圓滿の喜びに滿ちてゐるのだ。まことにこの明神の御名は遠い昔から語り傳へられ、神代の昔、天兒屋根命と仰しやつた頃から、幾久しく榮えて居られるのだ。
このやうなありがたいお社は、月影に立つ鳥居の柱を見ても見違へよう筈もなく、このお社に鎭座の四柱の神々は、神代から今に至るまで、變りのないあらたかな御誓願を立てさせられ、末社水屋明神ま

○鳥居の二柱―二柱は鳥居の左右の柱。月影に立つ鳥居を見ても、御社を見誤らないとの意。二柱、御(三)社、四所と數字を並べて、文の綾とした。
○四所の―四所の神は春日祭神四座を指す。四所の神、神の代といひ續けた。
○水屋―春日の末社水屋明神。水の縁で、前に「澄める」といひ、後に「御影」といふ。夫木抄に「春日山水屋の水の末までも神にまかせて身を頼むかな」
○塵に交はる―前に掲げた「和光」と同義。常に和光同塵と續けていふ詞。
○枝を鳴らさぬ―太平の相

【三】

交はる神心。三笠の森の松風も。枝を鳴らさぬ、氣色かな枝を鳴らさぬ氣色かな

「三笠の森の松風も」と右の方に向きて二三足出で、「枝を鳴らさぬ」の返しに正面に直す。

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなるみやつこに申すべき事の候

シテ「や。これは栂の尾の明慧上人にて御座候ぞや。唯今の御參詣。さこそ神慮に嬉しく思し召し候らん

ワキ「さん候唯今參詣申す事餘の儀にあらず。われ入唐渡天の志あるにより。御暇乞の爲に唯今參りて候

シテ「これは仰せにて候へども。さすがに上人の御事は。年始より四季折々の御參詣の。時節の少し遲速をだに。待ちかね給ふ神慮ぞかし。さ

でが、この地に垂跡して衆生に利益を與へ給ふので、まことに天下太平、この三笠の森を吹き渡る松風までがいかにも穏やかな、のどかな趣だ」

ミ腦言をいひながら社前に近づく。明慧上人、この宮守を見て、

【三】

明慧「もうし宮守どの」

宮守「やあ、これは栂尾の明慧上人でございますな。唯今はよくこそ御參詣。さぞ明神様も嬉しく思し召すことでございませう」

明慧「いや、唯今參詣致すのは別の事ではない、私は支那大竺へ渡らうと思つてゐるので、そのお暇乞の爲に、參詣したわけです」

宮守「それは折角の思召ですが、いかゞかと存じます。と申すのは、上人さまは、年始をはじめ四季の季節々々に、少しも時節を違へずに御參詣なさるのですが、それでさへ明神様は上人の御參詣をお待

○笠置―山城國相樂郡にあり、山上に笠置寺がある。
○解脫上人―藤原左大臣貞憲の子、名は貞慧、法相宗の學匠で、笠置山に隱棲し建保二年年五十九で寂す。解脫はその謚號。後の書であるが、神社考に―春日大明神託宣曰、明慧房解脫房我太郎次郎也、或時此兩人詣二春日社一、鹿折レ膝而伏、明慧欲レ渡二天竺一、神託而留レ之」
○晝夜各參―毎日毎夜參詣すること。
○佛蹟―釋迦如來說法の古跡。
○佛在世―釋迦在世の時。
○靈鷲山―中印度摩訶陀國の耆闍崛山の譯語、釋迦が法華經を說いた所。靈鷲山とは山の形が鷲に似てゐるといふ事から名づけられたもので「鷲の御山」とも「鷲峯」ともいふ。
○初參―社參の誤傳であらう。
○この手を合はせ―萬葉集の歌に「奈良坂のこのて柏の二おもてかにもかくにもねぢけ人の友」とある句を借りて、手を合せて上人を禮拜する人間とつゞけた。
○野邊に朝立つ鹿までも―解說參照。

れば上人をば太郎と名づけ。笠置の解脫上人をば次郎と賴み。雙の眼兩の手の如くにて。晝夜各參の擁護懇なるとこそ承りて候に。日本を去り入唐渡天し給はん事。いかで神慮に叶ふべき。唯思し召しとまり給へ

ワキ「げにげに仰せはさる事なれども。入唐渡天の志も。佛蹟を拜まん爲なれば。何か神慮に背くべき

シテ「これ又仰せとも覺えぬものかな。佛在世の時ならばこそ。見聞の益もあるべけれ。今は春日の御山こそ。卽ち靈鷲山なるべけれ。その上上人初參の御時。『奈良坂のこの手を合はせて禮拜する。人間は申すに及ばず心なき地上歌』三笠の森の草木の。三笠の森の草木の。風も吹かぬに枝を垂れ。春日山野邊に朝立つ、鹿

宮生「これは上人に不似合なことを仰せられる。釋尊の御在世の時ならば、天竺見聞の利益もありませうが、釋尊滅後の今日では、この春日山が卽ち靈鷲山に相當するのです。その上、上人が春日明神へ御參詣の時には、沿道の人間が合掌して上人を禮拜するばかりではなく、三笠の森の草木も風が吹かないのに、上人の前では枝を垂れ、春日山の野邊を歩いてゐる鹿までが、皆お出迎へをして、膝を折り角を傾けて、上人を禮拜するのです。これほどまで不思議な靈驗を見ながら、

○武藏野のはてしなの心―新古今集源通具の歌に「武藏野は行けども秋の果ぞなきいかなる風の末に吹くらん」とあるので、武藏野を果しなの序に用ゐた、なほこの上に淨土を尋ねようとするのは、欲に限りのないことだといふ意。

○神のまにまに―神慮のままに。

【四】

○天台山―支那浙江省台州府にあり、智者大師が天台宗を開いた所。

○比叡山―京都の東北、近江との國境にあり、傳教大師入唐して天台宗を傳承し歸朝後こゝに延暦寺を創建したので、比叡山を日本の天台山といふ。

○五臺山―支那山西省にあり、一に清涼山ともいふ。後漢明帝の時印度の僧この山に來て弘法結界の地としたと傳へられ、和漢佛教徒に崇敬せられた所。

○吉野―大和國吉野の金峰山。「詞林采葉抄」に「金峰山昔五臺山片端乘レ雲飛來」

○筑波―常陸國にあり、春日第一社の祭神武甕槌命の鎭座し給ふ鹿島に近いので、併せ引いたのであらう。

○衆生を度せん―衆生を濟度せん。

までも。皆悉く出で向ひ。膝を折り角を傾け上人を禮拜する、かほどの奇特を見ながらも眞の淨土は、いづくぞと、問ふは武藏野のはてしなの心や、唯返す返すわが賴む。神のまにまに留まりて神慮を崇めおはしませ神慮を崇めおはしませ

と眞中に行きて坐す。ワキも下に居る。

【四】

ワキ「猶々當社の御事委しく御物語り候へ

シテサシ『然るに入唐渡天といつぱ。佛法流布の名をとめし

地『古蹟を尋ねんためぞかし。天台山を拜むべくは。比叡山に參るべし。五臺山の望みあらば。吉野筑波を拜すべし

シテ『昔は靈鷲山

地『今は衆生を度せんとて。大明神と示現しこの

【四】

明慧「では、もつと委しく當社の御事を話して下さい」

宮人「一體支那天竺へ渡るといふのは、佛法の流布で有名になつた古蹟を尋ねる爲でせう。それならば、かの天台山を拜みたいと思へば、わが比叡山へ參ればよいのです。五臺山を見たいとならば、わが吉野や筑波へ參詣すればよいのです。昔靈鷲山で說法遊ばした釋迦は、今は衆生を濟度する爲に、大明神と化現して、この山に鎭座遊ばすのですから、この春日のお山を靈鷲山と思つて拜めばよいのです。この事に、春日明神の御神詠に―

なほまことの淨土は何處であらうと、支那天竺を尋ねようとせられるのは、餘りな限りのない欲と申すものでございます。是非とも、私どもの仰いでゐる明神樣の思召に從つて、渡唐を思ひ切り、わが明神樣の思召をおあがめなさいませ」

○われを知れ―續古今集―我を知れ釋迦牟尼ぶつの世に出でてさやけき月の世を照らすとは」と引いた。その詞書に「これ春日大明神の御歌となん」とある。

○慈悲萬行―春日明神の菩薩號。神祇正宗に「第三殿春日明神、是天兒屋根命也、號二慈悲萬行大菩薩一」

○小機の衆生―利己にのみ走る凡夫。小機は大機の對で、小乘の機、捨世利己に陷る心をいふ。

○瓔珞細輭の衣―法華經信解品に「即脫二瓔珞細輭上服嚴飾之具一、更著二麁弊垢賦之衣一」釋尊初め華嚴經を說いたが、凡夫小乘の機類はその高遠の理が解せられず、皆逃げ去つて鹿野苑へ行つた。釋尊これを悲んで、瓔珞細輭の結構な衣を脫ぎ、粗末な破れ衣を着、かの鹿野苑に入つて、小乘の法門四阿含經を說いたことをいふ。

○四諦の御法―阿含經の說法をいふ。四諦とは苦集滅道の四で、苦は生死の苦、集はその原因たる業煩惱、滅は苦集の滅し了つた悟境、道はその悟境に到達する修行をいふ。

山に宮居し給へば

シテ『卽ち鷲の。御山とも

地『春山のお山を。拜むべし

（居クセ）

地クセ『われを知れ。釋迦牟尼佛世に出でて。さやけき月の　世を照らすとはの御神詠もあらたなり。然れば誓ひある。慈悲萬行の神德の。迷ひを照らす故なれや。小機の衆生の益なきを。悲しみ給ふ御姿。瓔珞。細輭の衣を脫ぎ麁弊の。散衣を著しつつ。四諦の御法を說き給ひし鹿野苑もここなれや。春日野に。起き臥すは鹿の苑ならずや

シテ『その外當社の有樣の

地『山は三笠に影さすや。春日そなたに、現れて誓ひを四方に春日野の。宮路も末あるや曇りな

『われを知れ釋迦牟尼佛世に出でて、さやけき月の世を照らすとは』

（自分は釋迦牟尼佛の化現で、世の迷ひを照らし、衆生を淸ふ爲に、再び現れ出たものであるといふことをよく合點せよ）

と仰せられたのによつても、明らかな事で、これは慈悲萬行菩薩春日明神が、迷へる衆生を遍く照らし救はうとの御誓願を仰せられたものでございます。

それからまた、釋尊が高遠な佛理では利己的な凡夫を救ふことが出來ないのをお悲しみになつて、殊更立派な衣を脫ぎ棄て、粗末な破れ衣を身に纏うて、凡夫の中へ入り、分り易い阿含經をお說きになつた鹿野苑も、亦この所に外ならないのです。それはこの春日野に鹿が起き臥してゐるのを見ても、鹿野苑であることが知られませう。

なほその外、當社の有樣を申せば、三笠の山には隈なき月影がさし、春の日はその山陰から現れて四方を照らし、佛の光の普き樣を示し、春日明神の靈驗は愈々曇りなく、興大寺を初め奈良七大寺普愈

○鹿野苑―中印度波羅奈斯にあり、釋迦が阿含經を說いた所。
○春日野に起き臥すは―春日野が日本の鹿野苑であることは、この野に鹿の起臥してゐるのを見ても知られるとの意。
○西の大寺―西大寺。奈良の西伏見村にあり、孝謙天皇の御創建。
○七大寺―東大寺、西大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、法隆寺をいふ。
○御法の花も八重櫻の―八重櫻は奈良興福寺の名木であつたので、佛法繁昌の喩に引き、三笠、四方、七大寺「八重櫻」と數字を並べて文の綾とした。

【五】
○五天竺―天竺は東西南北中の五部に分れてゐた。
○摩耶の誕生―釋迦の誕生をいふ。摩耶は釋迦の母の名。
○伽耶の成道―釋迦の正覺をいふ。伽耶は中天竺摩竭陀國の地名で、こゝに菩提樹があり、釋迦はその樹下石上で佛道を成就した。
○鷲峰の說法―鷲峰は前に揭げた「靈鷲山」のこと。釋迦が法華經を說いた所。
○雙林の入滅―雙林は娑羅

き西の大寺月澄みて。光ぞまさる七大寺。御法の花も八重櫻の。都とて春日野の春こそのどけかりけれ

【五】
ワキ「げにありがたき御事かな。卽ちこれを御神託と思ひ定めて。この度の入唐をば思ひとまるべし。さてさて御身は如何なる人ぞ。御名を名乘り給ふべし
シテ「入唐渡天をとどまり給はば。三笠の山に五天竺を寫し、摩耶の誕生伽耶の成道。鷲峰の說法
地「雙林の入滅まで悉く見せ奉るべし暫くここに待ち給へ と（シテ立上り）木綿四手の神の告。われは時風秀行ぞとてかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

と常座にて開き靜かに中入。

一光を增し、まことに佛法繁昌の都で、春日野の春の景色は實にのどかなものでございます」

【五】
明神「いかにもありがたい事です。それではこれを明神のお告と思ひ定めて、この度の渡唐を思ひ止まりませう。ところで、あなたは一體どういふ方なのです。どうかお名前を仰しやつて下さい」
童人「上人が支那天竺へ渡ることを思ひ止まられるならば、三笠の山に五天竺の樣を寫し、釋迦の誕生及び正覺、靈鷲山に於ける說法、娑羅雙樹下の入滅の樣まですべてお見せしよう、といふ神のお告を知らせに來たもので、私は時風秀行です」
といつて、かき消すやうに消えてしまつた。

雙樹のこと。中天竺拘尸那國跋提河の邊にあり、釋迦の入滅した所。入滅は死んで寂滅涅槃に入る意。

○木綿四手の―待ち給へといふを木綿にいひかけ、幣の紙を神にいひかけた。

○時風秀行―春日明神が鹿島から春日山へ移り給ふ時に供奉した二人の者。常主編年記に―神護景雲二年戊申、春日大明神自二常陸國一乘二鹿島大和國三笠山一仕人二人時風秀行、給以二被流一爲二當社初行頁一但し謠曲ではこれを一人として取扱つた。

【略】本曲の間狂言、觀世流では前シテが來序で中入しないで、狂言も末社間として亂序で出ることが出來ないので、春日龍神に仕ふる御使者又は社人として出るが、大藏流狂言本には―觀世流は來序無之故に不調―とあり、和泉流の御使者も大體大藏流の末社間と同樣であるから、こゝには下懸に登場する大藏流の末社間の詞を掲げた。

【略】亂序の囃子にて、狂言春日末社神、末社頭巾・面登毘・着附厚板・縫水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて竹杖をつきて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。春日龍神に仕へ申す末社の神にて候。唯今是へ出づる事餘の儀にあらず。梅の尾の明慧上人入唐渡天あるべきとて。御暇乞の爲當社へ御參詣候を。秀行を以て色々と留め給ふ。その故は明慧上人と笠置の解脫上人は。大明神の兩の御眼左右の御手の如く思し召すによつて。片時の間も放し御申しあるべき事いかがとの御事なりさながら。解脫上人は少し慢心ましますにより。次郎と賴み物越に御言葉をかはし給ふが。明慧上人は御心正直にして慈悲心にまします間。太郎と賴み直に御言葉をかはし給ふ。既に當社初社參の時も。奈良坂まで御迎へに出で給へば。心なき草木鳥獸畜類までも。膝を折り羽を垂れて拜し申す程貴き御方なれば。上人御座なくてはいかがと思し召して。色々留め給へども。上人は唯一筋に渡天の事を思ひ立つべしとて。先を考へ御覽するに。大唐長安の都より天竺摩訶陀國王舍城に至るまで。五萬里と云々す。是は夥しき陸路なりとて。海路を尋ねて御覽するに。十萬里の波濤と見えたり。それも風波の難なほ恐ろしく。陸地は山岳嶮曲にして。惡鬼毒獸去り難く。古の玄奘三藏法師も流沙川にて。七度まで眞蛇に生を奪はるゝとは申せども。度々生を替つて行く程に王舍城に至り。大般若の妙軸を渡し。末世の寶となし給ふ。總じて大唐と天竺との間に。流沙葱嶺鐵門弱水とて。四つの難所の候を御通りあるべき事いかがと思し召すなり。されども上人は唯一筋に。往古の三藏法師の如くあらまほしく思し召し。印度の佛生國の懸念の思ひ。忍び難き心をゆるさんが爲。內には三密加持の方便を以て。蓮遊受行の願望を祈り。外には遠近山川の行路をかんしゆうし。千々に心を盡くし給ひ。佛跡を拜まんとの念願なり。大明神その志をあはれみ給ひ。渡天ありても佛跡を拜まん爲ぞかし。佛在世の時ならば。渡天ありても御見聞もあるべけれ。今の折柄の渡天はいかがなり。御止まりあるに於ては今宵の中に三笠山へ五天竺を寫し。摩耶の誕生伽耶の成道。鷲峰の說法雙林の入滅までも盡く見せ申さうずるとの御事にて。秀行色々止め給ふ

【六】
○神託—時風秀行に託し給うた春日明神のお告。

【七】
○八大龍王—難陀龍王以下阿那婆多龍王まで六大龍王に摩那斯龍王、優鉢羅龍王を加へて八大龍王といふ。
○難陀龍王—難陀は歡喜と譯す。
○跋難陀龍王—跋は善と譯す。難陀、跋難陀は兄弟で、常に摩竭提國を護り、國に飢年がなく、百姓皆歡喜するので、この名を附くといふ。
○娑伽羅龍王—鹹海と譯す
○和修吉龍王—多頭とも九頭とも譯す。

間。この上は上人も御留まりあるべく思し召し候間。今夜の奇特が肝要にて候。(正面の上を見)いや漸く五天竺の寫り候やらん。山河大地も震動仕り候。皆々心を靜めて拜まれ候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く

【六】
ワキヅレ上歌(待謠)『神託正にあらたなる。神託正にあらたなる。聲の內より光さし。春日の野山金色の。世界となりて草も木も佛體となるぞ、不思議なる佛體となるぞ不思議なる

【七】
早笛にて、後ジテ龍神、面黑髭・赤頭・輪冠(龍藏)・金般鉢卷・襟紺・着附段厚板・法被・赤地半切・腰帶・扇の裝束にて打杖を挿し、橋懸一の松に立ち、

地『時に大地。震動するは。下界の龍神の參會か

後ジテ『すは。八大龍王よ

地『難陀龍王

シテ『跋難陀龍王

地『娑伽羅龍王

シテ『和修吉龍王

【六】
後段

明慧「おゝ神のお告は實にあらたかで、お告があつたかと思ふと、はや、光がさし出で、春日の野も山も金色世界となつて、草も木も佛體となつた。實に不思議なことだ」

【七】
後ジテ龍神幕より出る。

明慧「やあ、今このやうに大地が震動するのは、下界の龍神が法華會座に列るのであらうか」

龍神舞臺に入る。

龍神「さうだ、八大龍王だ」

と、難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和修吉龍王、德叉迦龍王、阿那婆達多龍王等が幾百千の眷屬を引き連れ、平地に波瀾を立てて、釋迦說法の會座に列なつて、法華經を聽聞する。

○徳叉迦龍王—多舌と譯す
○阿那婆達多龍王—無熱惱と譯す。雪山の頂にある阿耨達池に住むといふ。
○佛の會座—釋迦說法の席
釋迦が法華經を說いた時、その會座に八大龍王及び夫に擧げる緊那羅、乾闥婆、阿修羅等の列座したこと、法華經序品に見ゆ。
○妙法緊那羅王、持法緊那羅王—法華會座に列つた四緊那羅王の中二王を擧げたがあり、帝釋天に奉仕する歌神。
○樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王—これも法華會座に列つた四乾闥婆王の二を擧げた。乾闥婆は帝釋天に奉仕する樂神。
○婆稚阿修羅王、羅睺阿修羅王—これも四阿修羅王の二を擧げた。阿修羅は常に三十三天と戰ふもの。
○恒沙—恒河沙の略で、數の極めて多い譬。恒河は印度のガンヂス河をいふ。

【八】

○わだの原—海原。原の音を重ねて拂ふとつゞけた。

地『徳叉迦龍王
シテ『阿那婆達多龍王
地『百千眷屬引き連れ引き連れ（と舞臺に入り）平地に波瀾を立てて佛の會座に出來して（と下に居り）。
御法を聽聞する（と面を伏せて聽く心）
シテ『その外妙法緊那羅王（と立上り）
地『又持法緊那羅王
シテ『樂乾闥婆王
地『樂音乾闥婆王
シテ『婆稚阿修羅王
地『羅睺阿修羅王の恒沙の眷屬引き連れ引き連れ、これも同じく座列せり

と打杖を手に持ち以下謠に合せて仕科。

【八】

地『龍女が立ち舞ふ波瀾の袖。龍女が立ち舞ふ波瀾の袖。白妙なれや。わだの原の拂ふは白玉立

その外、妙法緊那羅王、持法緊那羅王や、樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王、婆稚阿修羅王、羅睺阿修羅王なども、數限りのない多くの眷屬を引き連れて、これも同じく會座に列なつた。

【八】

次で、龍女は波瀾の舞袖、——眞白な袖で海原の波を拂ひ、水を白玉の如くに飛び散らしながら、絲の塞と相映す

○月の御船―水にうつる月を舟に喩へていふ。
○佐保の川…奈良市の北を流れる川。舟の棹にいひかけた。

○月の三笠の―月の笠といひかけた。
○飛火の野守も―飛火野は春日野の内にあり。古今集讀人知らずの歌―春日野の飛火の野守出でて見よ、今いくかありて若菜摘みてん」を引いた。

○この上嵐の―この上はあらじを嵐にいひかけた。

つは綠の。空色も映る海原や。沖行くばかり。月の御船の。佐保の川面に。浮かみ出づれば

シテ『八大龍王

〔舞働〕

シテ『八大龍王は

地『八つの冠を傾け。所は春日野の。月の三笠の雲に上り。飛火の野守も出でて見よや。摩耶の誕生。鷲峰の說法。雙林の入滅。悉く終りてこれまでなりや。明慧上人さて入唐は（とワキを見込み）

ワキ『とまるべし

地『渡天はいかに

ワキ『渡るまじ

地『さて佛蹟は

ワキ『尋ぬまじや

地『尋ねても尋ねてもこの上嵐の雲に乘りて（と

る海原の沖から出て來て近づき、月影の映る佐保川へ浮かび出ると、八大龍王は

〔舞働〕にその樣を示し

それ〴〵八つの冠を傾け、ここ春日野の、月のさし出た三笠山上の雲に上り、――さうだ誰も彼もよく見るがよい――釋迦の誕生、靈鷲山に於ける說法の樣、娑羅雙樹下の入滅の樣なと、悉く示してしまつて、

龍神「さあこれでお別れするが、明慧上人、渡唐はどうする」

明慧「思ひとまります」

龍神「天竺へは、どうだ」

明慧「いや渡りますまい」

龍神「では、釋尊の古蹟は……」

明慧「尋ねますまい」

龍神「いくら尋ねても、この上はないの

○龍女は南方に―法華經に八歳の龍女が寶珠を佛に奉づて、南方無垢世界に生まれたとあるので、南方といつた。
○猿澤の池―奈良市にある
○池水を返して―波を立てること。

飛返り雲に乘る心)。龍女は南方に飛び去り行けば(右の方へ歩み)。龍神は猿澤の池の青波(角へ行き)。蹴立て蹴立ててその丈千尋の大蛇となつて。天に群り。地に蟠りて池水を返して。失せにけり

「蹴立て蹴立てて」と飛び上りて拍子をきざみ「天に群り」と脇座にて上をさし、「池水を返して」と橋懸に行き、幕際に飛返り下に居て、池に入る心を示し、袖を被ぎて留む。

だ」

といつて、先づ龍女が南方無垢世界へ飛び去つて行くと、龍神は猿澤の池の青波を蹴立て〳〵して、長さ千間の大蛇となり、天地一面に擡がつて、池水に波を立てて消えてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【六】ワキ上歌「神託正にあらたなる……佛體となるぞ不思議なる（下懸ナシ）

古謠本（貞享二年本）

異同がない。

合浦（がつぽ）觀

解說

【能柄】 五番目 複式劇能

【人物】 ワキ 合浦里人、狂言 漁夫、前シテ 童子（鮫人）、狂言 鱗の精（二・三人）、後シテ 鮫人

【所】 支那 合浦

【時】 （無季）

【異稱】 〔合浦〕とも書き、古くは「合浦の玉」といつた。

【作者】 作者についての記錄は見當らないが、看聞日記に永享四年三月十四日仙洞御所で〔かつぽの玉〕を演じたことが見えてゐる。田樂にも古くからこの曲があり、春日大宮若宮祭禮闘の田樂にこの曲名が出て居り、その詞章（謠の後段とほゞ同文）も現存してゐる。

【梗概】 合浦の里人が漁夫の釣つた美魚を買ひ取り、その命を助けて海に放たせると、その美魚は鮫人といふもので、その涙から出來た如意寶珠を捧げて、助けられた恩を報ず。

【出典】 この合浦の玉については、蒙求、孟嘗還珠に、

後漢孟嘗字伯周、會稽上虞人、遷二合浦太守一、郡不レ産二穀實一、而海出二珠寶一、與二交趾一比レ境、常通二商販一、買二穀食一、先時宰守、並

多貧磯、詭レ人採求、不レ知紀極一、珠漸徙二於交趾郡界一、行旅不レ至、人物無レ資、貧者餓二死於道一、嘗到レ官、革二易前弊一、求二良病利一、未レ逾レ歲、去珠復遠、百姓皆反レ業、商貨流通、稱爲二神明一。

とあり、鮫人に就ては、述異記に、

南海中有二鮫人一、水居如レ魚、不レ廢二機織一、其眼能泣、泣則出レ珠。

とあり、魚が恩を報じた事は、十訓抄第一に、

漢の武帝、昆明池に遊び給ふに、一つの鯉の鉤を含んで死なんとするあり。帝これを見て、人をして解き放ち給へり。その夜帝の御夢に、鯉來りて喜べり。次の日池に幸し給ふに、昨日の鯉、明月の珠を含みて、池の邊に置き去りぬ。

とある。この三つの說話が結びついて、本曲の如き說話が生まれたのであらうが、この構想が謠曲作者の手に成つたものか、或はそれ以前にこの種の說話が出來てゐたものか、なほ考究の餘地がある。

【概評】魚鳥の類が命恩を報ずることは、浦島太郎など幾種かわが文藝に傳へられてゐるが、謠曲にはこの種のものが殆ど見當らない。本曲はその珍しいものの一であつて、その構想が謠曲作者の創意に出たと否とを論ぜず、本曲は甚だ童話的興味の深い、又童話的風趣にふさはしく小じんまりと纏つた輕快な曲である。

【一】

○合浦―支那廣東省の西端廉州の傍にあり、古來眞珠の名產地として知られてゐる。刊行會本には「合浦と申す處に住居する……眺めにやゝ思ひ候」とある。

○目もうらら―「うらら」はうららか。ほがらか、美りなくのどかなこと。

【一】

ワキ里人、蕭附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて、舞臺の眞中に出で、

ワキ「これは唐土合浦の浦に住居する者にて候。今日は日もうららに候程に。浦に出で釣するを眺めばやと存じ候

といひて脇座に行き下に居る。

狂言漁夫、蕭附縞夏斗目・狂言上下・腰蓑・脚半の裝束にて釣棹

【一】

前段

舞臺は支那の合浦。ワキ合浦の里人登場。

里人「私は支那の合浦といふ所に住んでゐる者です。今日は天氣もよいので、浦へ出て漁師達の釣りを見物しようと思ひます」

と見物人に自己紹介をする。

狂言漁夫登場。釣をして美しい魚を捕へる。ワキ里人これを見て憐み、金を出して魚を助ける。やがてわが家へ歸つた體。

をかたげて出で、名乘座に立ちて、

狂言「かやうに候者は。合浦の浦に住む漁師にて候。今日は天氣もよく候間。釣を垂れ申さばやと存ずる。さればこの邊へおろさう。やつとな(と正面に棹を下し)。ここもとは喰はぬ。所をかへう。爰に致さう(と脇正面に下し)。さればこそ何やらかかつた。扨も〳〵重いわ重いわ(と棹を上げ)。あら嬉しや〳〵。是は珍しい見事な魚ぢや。急いで持つて歸り。古き人に見せ申さう

と一の松に行きかゝる。ワキ立ちて、

ワキ「これは見なれぬ魚にて候。何と申す魚にて候ぞ

狂言「某も存ぜず候。急いで持つて歸り。古き人に見せ申さばやと存じ候

ワキ「さやうのものを殺生を致さぬものにて候。もとの如く致され候へ

狂言「いや〳〵漁師の身として。釣りたる魚を放ち申す事はならず候

ワキ「さらばそれがし買ひ取り申さうずる間。放され申され候へ

狂言「あたへを給はり候はば放ち申さう。やれ〳〵そちは仕合なものぢや。されば放つぞ。やつとな(と放つ形をし)。喜ぶわ〳〵。某はまづ罷り歸らう

と狂言は幕に入り、

ワキ「さらば家路に歸らうずるにて候

【二】

と、ワキは下に居る。

一聲の囃子にて、シテ童子、面童子・黑頭・金襴鉢卷・襟赤白・着附縫箔・水衣・腰帶・扇の裝束にて出で、常座に立ち、

シテ一聲「わたづみの。そこともいさや白波の。龍の都を。出づるなり

【二】

囃子は里人の家。シテ童子實は龍人參場。

童子 深さの測り知れない海底の龍宮から出て來たのである。

といつて、里人の家の戸口に立つた態で、

◎このワキセリフ春藤流による。

○ならず候—出來ない。

○あたへ—代價。

【二】

○わたづみ—海の古語。

○そこともいさや—海の底といひかけた。どこがどこだか、行先の知れないとの意。

○白波の—知らぬを白に、波の立つを龍にいひかけた

龍の都は龍宮。

○戸ざし―戸を締めること
○その情に―あなたの情深い心を以て。
○一村雨の雨宿り―後に引く「一樹の蔭に宿り、同じ流れを汲むも、皆是他生の縁」といふ成語を用ゐ、一村雨、一夜と、相似た音を重ねたのである。
○叩く水鶏の―水鶏の鳴き聲が板戸を叩く音に似てゐると、和歌によく詠まれてゐるのを、こゝには逆に、人の訪れたのを、水鶏の鳴く音に間違へたやうに作りなしたのである。
○久方の―外に立つてゐることの久しいを久方にいひかけた。
○埴生の小屋に小雨降る―萬葉集卷十一「をち方の埴生の小屋に小雨降り床さへぬれぬ身に添へ吾妹」を引いた。埴生の小屋は賤しい粗末な家。
○床冴えぬれば―床が寒く冷えたから。但し「冴え」は原歌の「床さへ濡れて」を誤つたのであらう。
○ひぢ笠の雨―俄か雨。肘を膝して笠の代りとするを肘笠といふ。古今六帖に「妹が門行きすぎかねつひぢ笠の雨も降らなむ雨隠れせ

ワキに向ひて、

シテ「いかにこの屋の内に主やまします。一夜の宿を貸し給へ

ワキ「日もはや暮れて戸ざしつるに。宿とは誰にてましますぞ

シテ「よし誰なりともその情に。一村雨の雨宿り。

『一夜の宿を貸し給へ

ワキ『叩く水鶏の外面に立つや久方の。埴生の小屋に小雨降る

シテ『床冴えぬれば

ワキ『我妹子が

地上歌、ひぢ笠の。雨は降り來ぬ雨宿り。雨は降りきぬ雨宿りの。頼む木蔭かや。一樹の蔭の宿りもこの世ならぬ契りなり。一河の流れを汲みて知る。合浦の浦の江のほとり、うろくづもなど

童子「この家の御主人はお出てになりますか。一夜お泊め下さい」

里人「日もはや暮れたので戸締りをしてしまつたのに、宿を貸してくれといふのは、どなたです」

童子「まあ誰であらうとも、御難のあるものと思つて、お情で、一夜お泊め下さい」

里人「かう永い間戸口に音のするのは、水鶏の鳴く音であらうか、それとも、この粗末な家に小雨の降る音があのやうに聞えるのであらうか」

童子「外では、身が冷えきつて寒い思ひをしてゐるのです。おゝ俄かに雨が降つて來ました。この雨宿りに宿を貸して下さい。世の諺にも『一樹の蔭に宿り一河の流を汲むのも、前世からの因縁だ』と申します。この合浦のあたりに住む魚類でも、命を助けられた御恩は存じてゐるの

む」

○一樹の蔭の宿りも―偶然の出會も實は前世からの因緣であるとの意。說法明眼論に、「宿二樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」。平家物語に「一樹の蔭に宿り、同じ流れを汲むも、皆是他生の緣淺からず」

○この世ならぬ―この現世だけでない、前世からの。

○命恩―命を助けられた恩

【三】

○鮫人―支那古傳說中の生物。述異記に「南海中有二鮫人一、水居如レ魚、不レ廢二機織一、其眼能泣、泣則出レ珠」

○魚の精―鮫人は海中に住むものであるから、作者が魚の精として取扱つたのである。

○絕えぬ寶―永久不變の寶

○命恩を寶珠―命恩を報ずるを寶珠にいひかけた。

○ひれ伏して―平伏して。鰭を伏しての意を含めて用ゐた。

や命恩のその情をば、知らざらんその情をば知らざらん

と舞臺の眞中に出で下に居る。

【二】

ワキ「何と見申せども更に人間とは見え給はず候。名を御名乘り候へ

シテ「今は何をか包むべき。われは鮫人といへる魚の精なり。命をつがれ參らせし報謝の爲に來りたり。わが泣く涙の露の玉。絕えぬ寶となるべきなり

地「鮫人涙に。玉をなして命恩を。寶珠を猶も捧げて合浦にも入らせ給へと（ワキに向ひて居立ち）。前なる（正面に向きて立ち）。渚の波の上に。入るよと見えつるが。白魚となつてその儘に。ひれ伏して失せにけり跡ひれ伏して失せにけり

「ひれ伏して」と一寸下に居て平伏の形をし、返しに立上り、來序の囃子にて中入。

ですし」

【三】

里人は童子を家の中へ入れたが、

里人「どう見ても、全く人間とは見えませんが、一體あなたはどういふ方なのです。お名前を仰しやつて下さい」

童子「今は何を隱さう、私は鮫人といふ魚の精です。先程命を助けて貰きました御禮に參つたのです。私の泣く涙は凝つて永久不變の寶玉になります。それで、涙で玉を作り、御恩報じにこの珠を差上げたいと思ふのです。どうぞ合浦の浦へお出で下さい」

かういつて、家の前の渚の波の中へ這入つたかと思ふと、やがてそのまま白い魚となつて、ひれふして見えなくなつてしまつた。

シテ波に隱れた樣で退場する。

【間】

○それぞれの心になり―その時の風采壊通相當の心持となつて。魚の姿となつたので、魚のやうな心持となつて。

○儀敬―本曲の原據とした傳說にある名であらうと思はれるが、出所が分らない。

【間】　亂序の囃子にて、狂言オモ・アト鱗の精、二人とも、面鼻引・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて出で、舞臺に入り、

オモ「かやうに候者は。合浦の浦に住むうろくづの精にて候。我等賴うだる鮫人の身の上に。めでたい子細の候。（アトを見て）いやそち達は何として出た

アト「何かは知らぬが。めでたい事があるといふによつて出た

オモ「その儀ならば子細を語つて聞かせう

アト「急いで語らしめ

オモ「さても賴うだる鮫人は。この程浦遊びをなされうとあつて。美魚の姿となつてあなたこなたと遊び歩き給ふが。ふと御心に入つたものがあつて。日頃は鮫人なれども。はやそれぞれの心になり給ふと見えて。その餌に喰ひつかせられ。磨き立てたる釣針にかかり。上より引き上げる程に。ぶらり〳〵と上られたを。儀敬とやら申す人。類ひ稀なる正直な人にて。餘り美しき魚なれば不便に思はれ。漁師に價をとらせ。その儘放されし程に。鮫人は御命助かり。その儘御歸り候が。何とめでたい事ではないか

アト「やれ〳〵それは危い事であつた

オモ「その報恩に龍宮の寶珠をも見せ。その上壽命長遠の守護神となり給はうずるとて。その用意あるが。何と尤もな事ではないか

アト「是は尤もな事ぢや

オモ「かゝるめでたい折柄なれば。一さし奏でて罷り歸らう

アト「一段とよからう

オモ『治まる波の浦わの遊び

【四】

○龍女は—法華經提婆達多品に、婆竭羅龍王の女が寶珠を釋尊に捧げて南方無垢世界に生まれたとある說に據つた。

○如意の寶珠—望みのものが意の如く、中から出てくる寶の珠。

○變成就—變成男子の願を成就したとの意。女子には五障の罪業があつて、佛道を得難いものであるが、婆竭羅龍王の女は男子に變成して、佛道を得たといふ。提婆達多品に「當時衆會、皆見龍女忽然之間變二成男子一」

○奈落—地獄。深い海底の喩へとした。

○うたかた—泡沫。こゝでは海面の意。

○眞如の玉の緒—眞如は淸淨無垢な玉の形容。玉から魂の緒といひかけた。魂の緒は生命。

○壽命長遠息災延命—金光明經に見えた語。

○當來—生まれかはつて後住むべき未來の世。

○二世—今生と後生との二世。

○織りつる綾の—前掲述異記に「不レ廢二機戀一」とあり、鮫人は常に機を織るといはれて舞ひ奏で。是までなりとて鱗どもは。〳〵。合浦の水底に入りにけり。

二人『治まる波の浦わの遊び。鮫人の喜び限りなければ。我等がやうなるうろくづまでも。現れ出で

【四】

と拍子を踏みて幕に入る。

出端の囃子にて、後ジテ鮫人、面小飛出・白頭・金襴鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に出で、

後ジテ『龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ。變成就の法をなし

地『奈落や奈落の底の。白魚なれどもなど命恩を。報ぜざらんと。波立ち騷ぎ。潮渦卷いて。うたかたの上にぞ現れたる

〔舞働〕

シテ、なほ次の謠に合せて仕科、

シテ『これこそ眞如の玉の緒の

地『これこそ眞如の玉の緒の。壽命長遠息災延命の寶の珠は。當來までの。二世の願ひも。成就なるべしこれまでなりや。織りつる綾の。浦は合

後段

後ジテ鮫人登場。

鮫人「龍女は如意寶珠の玉を釋迦如來に捧げたので、女の身ながらも男子に變成して、佛道に入ることが出來た。自分は海底に棲む醜しい白魚ではあるが、命を助けて貰つた御恩を是非報じたいと思つて海底から波を立て渦を卷いて、海面へ現れ出たのだ」

〔舞働〕

にその樣を示す。

それから里人に向ひ、

鮫人「これが眞如の玉です。これさへあれば、家庭にたゝ壽命に長久とある寶の珠です。この寶を持てば、この世ばかりでなく來世まで、二世を通して願望が成就するのです。この寶を差上げて、私はお暇をします」

れてゐるので、この語を出し、綾の裏にかけて、浦の序とした。

○玉は二度―鮫人が無病延命の誓ひをなした後、二度寶珠と共に海底に入つたといふ意。

○歸る波の―玉の歸るを波の歸るにいひかけた。

浦。珠は二度歸る波の千秋萬歳の寶の珠は。千秋萬歳の寶の珠は合浦の浦にぞ、をさまりける

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

かういつて、鮫人は海へ歸り、千秋萬歳めでたい寶の珠は、この合浦の浦にをさまつた。

〔考異〕

古謡本（元祿二年本）

【一】ワキ「これは……住居する（元住）者にて候……

【二】ワキ「日もはや暮れ……宿とは誰にてましますぞ（元いかに誰人そ）……

【三】ワキ「何と見申せども更に（元ナシ）……シテ鮫人涙に……入るよ（元か）と見えつる（元し）が……

【四】シテ奈落や……現れたる（元うきあかる）

葛城（かづらき）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 三・四番目　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　羽黑山伏、**ワキツレ**　同行山伏（二人）、
前シテ　里女（葛城の神靈）、**狂言**　山下の者、
後シテ　葛城の神

【所】 大和國　葛城山

【時】 冬（十一月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。觀元日記に寛正六年二月二十八日觀世の演じたこと、言經卿記に文祿四年四月二日註釋の事が見えてゐる。

【梗概】 出羽國羽黑山から出た山伏が、葛城山に來て、折柄降りしきる雪に惱んでゐると、一人の女が出て來て、わが家に伴ひ歸つた。山伏はその好意を謝して、やがて後夜の勤行を始めようとすると、女は「雪り加持して、わが三熱の苦を助けて下さい」といふ。山伏が不審に思つて、その素性を尋ねると、「自分は葛城の神で、役行者に命せられた岩橋を

架けなかつた爲に、明王の索に縛られてゐるのである」といつて消え失せる。山伏が奇特の思ひをなし、神の爲に祈禱してゐると、葛城の神が二度現れ出て、三熱の苦を免れた喜びを述べ、大和舞を舞ひ、夜の明け易き光に、と岩戸の内に隱れてしまふ。

【出典】役小角が葛城の神を呪縛したといふ說話は、古く日本靈異記に見えて居り、續日本記文武天皇三年五月の條にも、

世傳云、小角能役二使鬼神一、汲レ水採レ薪、若不レ用レ命、卽以レ呪縛レ之。

とあり、今昔物語卷十一「役優婆塞誦二持呪一驅二鬼神一語」その他諸種の書に傳へられてゐるが、本曲の直接の典據は源平盛衰記で、同書卷二十八「役行者事」に、

役行者と申すは小角仙人の事也。……大峰葛城を通りて行き給ひけるに、道遠しとて、葛城の一言主と云ふ神に、二上の嶽より神山まで石橋を渡せと宣ひける。顏の見惡くければとて、晝はさしも出すして、夜々渡し給ひけるを、行者遲しと腹立て、葛にて七遍縛り給ひけり。

とあるに本づいたものであらう。

【概評】本曲の後ジテは女體の神であるが、これを普通の三・四番目物として取扱つてゐるやうに、このシテ葛城の神は神とはいひたから、晝の人目を避けた「見苦しき顏はせ」て、役の行者から「法の咎めの呪咀を負ひ」、「蔦葛にて身をいましめて」、「三熱の苦しみ」に惱んでゐる神で、神としての功力を持つてゐない。否、この惱みを免れたいために、祈り加持を請うてゐるのであるから、「和光の影に現れ」出るとはいへ、たゞ悅びの舞を奏してゐるだけで、他の神事物のやうに御代の萬歲國土の泰平を祝つてゐない。これが三・四番目物として取扱はれてゐる所以であるが、それにしても、この神が自分を苦しめた行者の末流たる山伏に祈り加持を請うてゐるのは、この場所葛城山が修驗道の靈場であるから、他の普通の僧とはしにくかつた結果であらうが、行屆いた構想であるとはいへない。

【一】

○神の昔の跡とめて、葛城山に鎭座し給ふ神の古跡を尋ねて。

【二】

次第の囃子にて、ワキ羽黑山伏、兜巾・篠懸・着附厚板・縞水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠の裝束、ワキツレ同行山伏二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキ　次第　神の昔の跡とめて、神の昔の跡とめて

【一】

前段

舞臺は初め出羽から大和へ行く道中のある所。ワキ出羽羽黑山の山伏、ワキツレの同行山伏を伴つて登場。

山伏「昔神のお出でにたつた當時の古跡を

○葛城山—大和河内の國境にあり、役小角が行法を行つた所で、修驗道の靈場。
○羽黒山—羽前國東田川郡にあり、修驗道の靈場。
○山伏—役小角が開いた修驗道の修行者。山野に起伏して道を修めるので山伏といふ。
○大峯—大和國吉野郡金峰山中の最高峯で、修驗道の靈場。
○篠懸—山伏の上に被る衣。深山の露を拂ふ爲に着たもの。
○袖の朝霜—袖の麻を朝に霜の置くを起きにいひかけた。
○岩根の枕松が根の—山中で岩を枕とし、松の根を床として宿るをいふ。
○宿りもしげき嶺續き—野宿の多いことを樹木の繁つた嶺にいひかけ、更に嶺續きといひ續けた。
○笑止や—困つた事だといふ意。

【二】

葛城山に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。われこの度大峯葛城に參らばやと存じ候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキヅレ「道行」篠懸の袖の朝霜起臥の。袖の朝霜起臥の。岩根の枕松が根の。宿りもしげき嶺續き。山又山を分け越えて。行けば程なく大和路や。葛城山に着きにけり葛城山に着きにけり

ワキ、「行けば程なく」と正面に向き、二三足出で、またもとに歸りてツレと向合ひ、葛城山に着きたる心。ワキ正面に向き、

ワキ「急ぎ候間。程なく葛城山に着きて候。あら笑止や。又雪の降り來りて候。(ツレに向ひ)これなる木蔭に立ち寄らばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひてワキヅレは地謠座前に坐し、ワキも脇座に行きかかる。

シテ里女、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・水衣・縫箔腰卷・

尋ねに、葛城山へ參らう」

と次第に旅の目的を述べ、

山伏「私は出羽の羽黒山から出て來た山伏です。私は今度大峯や葛城山へ參らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

山伏「篠懸衣にかゝる露霜を拂ひながら旅を續け、岩根を枕とし、松の根を床にかへて、野宿の旅を重ね、嶺つゞきの山々を越えて行くうちに、いつしか大和路に入つて、葛城山に着いた」

と旅の樣をいつてゐるうちに、葛城山に着いた態で、舞臺は大和國葛城山となる。

山伏「旅を急いだので、思ひの外早く葛城山に着いた。(といつてあたりを見て)おやこれは困つたことだ。また雪が降つて來た。ここの木蔭に寄つて休みませう」

ここの木蔭に休む態。

【三】

ここへ、シテ葛城の神女、嫗しいかの姿を襲ひ

腰帶・扇の裝束にて雪綿のつきたる女笠を被り、雪綿のつきたる標を持ちて、幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなうあれなる山伏は何方へ御通り候ぞ

ワキ脇座に立ちて、

ワキ「此方の事にて候か。御身は如何なる人やらん

シテ「これはこの葛城山に住む女にて候。柴とる道の歸るさに。踏み馴れたる通路をさへ。雪の吹雪にかきくれて。家路も定かに辨へぬに。ましてや知らぬ旅人の。末いづくにか雪の山路に。迷ひ給ふは痛はしや。見苦しく候へども。わらはが庵にて一夜を御あかし候へ

ワキ「嬉しくも仰せ候ものかな。今に始めぬこの山の度々峯入して。通ひ馴れたる山路なれども。今の吹雪に前後を忘じて候に。御志ありがたう

○歸るさ—歸りがけ。
○雪の吹雪にかきくれて—烈しい吹雪の爲にあたりが暗くなつて。
○知らぬ旅人—道を知らない旅人。
○末いづくにか雪の—行くを雪にいひかけた。
○痛はしや—氣の毒だ。

○峯入—山伏が修行の爲に山に入ること。
○前後を忘じ—どうしてよいか分らない。

幕場、山伏を見て、

女「もうし、そこにお出でになる山伏は、これからどちらへお出掛けになるのです」

山伏「私のことですか。それよりは、あなたはどういふ方なのです」

女「私はこの葛城山に住んでゐる女でございます。今柴を取つて歸る途中ですが、通ひ馴れた道でさへ、この吹雪にあたりが昏くなつて、わが家の方角さへはつきり分らないのですもの、まして案内知らぬ旅人では、これからどちらへ行つてよいやら、この雪の山路にお迷ひになることだらうと、お氣の毒に思ふのでございます。むさくるしい所ですけれど、私のところで一晩お泊まりなさいませ」

山伏「これはありがたいお詞です。實は私は今度始めて參つたのではありません、これまで度々この山へ修行に參つた、通ひ馴れた山路なのですが、この吹雪で跡先も分らず困つてゐたのです。御親切に

○岨傳ひ—岨は山の側の嶮しい所。
○程ふる雪の—時の經るを雪の降るにいひかけた。
○夕の山の—御供申さんといふを夕にいひかけた。
○常陰—一日中日光の當らない陰地。
○さらでもさかしき—さうでなくても、雪が降らなくても嶮岨な。
○笠は重し吳山の雪—詩人玉屑に陶僧可士送僧詩として收めた詩句「笠重吳天雪、鞋香楚地花」を引いた。原詩は時と所とを定めずに旅をして、或時は吳國で雪に惱み、又或時は楚國で落花を憐むとの意であるが、ここでは花を雪の喩として用ゐたのである。
○肩上の笠には—以下「不香の花を手折り」まで詩句であらうと思はれるが、出典は分らない。謠曲拾葉抄に上句は無問覯の序に出でゐるといふが、見當らない
○無影の月—雪を喩へたのである。
○擔頭の柴—肩に擔いだ柴上句には頭上といふべきを肩上といひ、ここにはまた肩といふべきを頭といってゐる。

こそ候へ。『さて御宿りはいづくぞや

シテこの間に舞臺に入り常座に立ち、右の方に向きて、

シテ「この岨傳ひのあなたなる。谷の下庵見苦しくとも。（ワキに向ひ）程ふる雪の晴間まで。御身を休め給ふべし

ワキ「さらば御供申さんと。夕の山の常陰より

シテ『さらでもさかしき岨傳ひを

ワキ『道知るべする山人の

シテ『笠は重し吳山の雪。

ワキ『地上歌『肩上の笠には。肩上の笠には。無影の月を傾け。擔頭の柴には不香の花を手折りつつ。歸る姿や山人の。笠も薪も埋もれて。雪こそくだれ谷の道をたどりたどり歸り來て柴の庵に着きにけり柴の庵に着きにけり

シテ「たどりたどり歸り來て」と舞臺を小廻りし、「柴の庵に着きにけり」と大小前に行きて庵に着きたる心。笠を脫ぎ後見に渡し、標の雪を拂ふ。

いつて下さつて、ほんとにありがたうございます。して、あなたのお宅はどちらです—

女「この嶮しい崖傳ひに行きまして、向ふの谷の下にある家がそれでございます。むさくるしい所ですけれど、暫く雪の晴れるまで、お休み下さいませ—

山伏「ではお供しませう」

といつて、この夕暮、山の小暗い所、吹雪でなくても嶮しい崖傳ひを、山人の女は山伏を案内して行きながら、

女「かうして道々笠や肩に雪が一杯積りましたが、この雪のついた笠を被つてゐる樣は影のない月を傾けたやうであり、肩に擔つた柴の雪は匂ひのない花のやうな風情がありますね—

山伏「たとと語り合ふ。とはいふものゝ、かうして歸る山人は笠も薪も雪に埋もれて、雪の愈々降りしきる谷道を、一筆束ない足取りで、やつと粗末な家に辿り着いたのである。

山伏を案内して歸つた樣で、御臺は女の家である。

○不香の花―雪の喩。新後撰集藤原師重の歌に「夜もすがら降りつむ雪の朝ぼらけ匂はぬ花も枯にぞ見る」

○山人の笠も薪も―菅家後集に「山人の笠も薪も埋れて雪こそくだれ谷の下道」とあるを引いた。

【三】

○標―細い木の枝。

○うたてやな―心ない、興がない。

○古き歌の言葉―後に擧げる「しもといふ葛城山に」の歌をさす。

○標を結びたる―標卻ち柴を結び束ねた葛といふ意で、その葛を地名にいひかけて、葛城山の枕詞としたとの意。

○大和舞―大和國振の舞。大嘗會、十二月の鎮魂祭等に行はる。倭歌に合せて舞ふもので、歌と舞とを主とし、樂器には笏拍子・笛・篳篥を用ゐる。

【三】

ワキ「あら嬉しや候。今の雪に前後を忘じて候處に、今宵のお宿返す返すもありがたうこそ候へ

シテ「餘りに夜寒に候程に、これなる標を解き亂し、火に焚きてあて參らせ候べし

シテ、眞中へ行きて坐し、標を側に置く。ワキも坐す。

ワキ「あら面白や標とはこの木の名にて候か

シテ「うたてやなこの葛城山の雪の中に、ゆひ集めたる木々の梢を。標と知ろし召されぬは御心なきやうにこそ候へ

ワキ「あら面白やさてはこの。標といふ木は葛城山に。由緒ある木にて候よなう

シテ「申すにや及ぶ古き歌の言葉ぞかし。標を結ひたる葛なるを。この葛城山の名に寄せたり。これ大和舞の歌といへり

ワキ「げにげに古き大和舞の。歌の昔を思出の

【三】

山伏「あゝありがたい。今の雪で跡先も見えず困つてゐたところ、今宵の宿をお貸し下さつて、ほんとにありがたうございます」

女「餘りきつい夜寒でございますから、このしもとを解いて、火に焚いておあていたしませう」

ミ手に持つた小枝を下に置いて火に焚く型

山伏「これは面白い、しもととはこの木の名ですか」

女「まあ、つまらない。この葛城山の雪の中で束ねた木の小枝を、しもとと申しますのに、それを御存じないとは、不風流な方のやうに思はれます」

山伏「これは面白い。すると、このしもといふ木は葛城山に緣故のある木なのですね」

女「勿論のこと、古歌の詞でございます。しもとを結び束ねた葛といふ意味で、この葛城山の名に冠せて詠んだもので、その歌は大和舞の歌だと申すことでございます」

山伏「なる程、古い大和舞の歌の昔話を思ひ出しました」

○標結ふ葛城山に降る雪は　間なく時なく思ほゆるかな　―古今集大歌所御歌の中に「ふるき大和舞のうた」と題して見ゆ。但し原歌第三句「降る雪の」とある。「標結ふ―は葛城山の枕詞。第三句までは「間なく時なく」の序。

○袖の雪もふるき世の　舞の美しさを形容して「廻雪の袖」といふので、舞の袖の雪といひ、雪も降るを古き世にいひかけたのである。

○よそにのみ―新古今集讀人知らずの歌―よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲―の詞を借り、白雲のしより柴屋と續けた。

○高間山　葛城山の上部で俗に高天原といふ。

【四】○葛城や木の間に光る稲妻は山伏の打つ火かとこそ見れ―夫木抄源兼昌の歌。但し原歌の第二句「木蔭にひかる」とある。打つ火は火打石の火をいふ。

○電光朝露石の火の　人生の果敢ない喩、漢書蘇武傳に「人生如二朝露一、何久自若如レ此」寶玉論に「人生在レ世如二石火電光一」

シテ「をりから雪も（と空を見上げ）

ワキ「降るものを

地上歌「標結ふ。葛城山に降る雪は。葛城山に降る雪は。間なく時なく。思ほゆるかなと詠む歌の。言の葉添へて大和舞の袖の雪もふるき世の。よそにのみ。見し白雲や高間山の嶺の柴屋の夕煙。松が枝添へて、焚かうよ松が枝添へ　て焚かうよ

シテ「よそにのみ」と立ち、標を持ちてワキの前に行きて坐し、標を前の心にてワキの前に置き、扇にてあふぐ。

シテ、次のクセに立上りて舞ふ。（舞クセ）

【四】地クセ「葛城や。木の間に光る稲妻は。山伏の打つ。火かとこそ見れ。げにや世の中は。電光朝露石の火の。光の間ぞと思へ唯。わが身の歎きをも取り添へて思ひ眞柴を焚かうよ

シテ「捨人の。苔の衣。の色深く

女「さう申せば、丁度今も雪が降つてゐまして、

『標結ふ葛城山に降る雪は、間なく時なく思ほゆるかな』

（葛城山に降りしきる雪のやうに、私は少しの忘れる暇もなくあなたの事を思つてゐます）

と大和舞の歌に詠まれたと同じ雪景色で、たゞ昔話だとばかりいつては居られません。

『よそにのみ見てや止みなん葛城や、高間の山の峯の白雲』

（あの遠い高い高間山の白雲を及びもない事としてはるかに眺めてゐるやうに、あの人の事をたゞよそ事としてはかり見てはゐられない）

といふ歌の文句ではありませんが、この高い山の寒さを防ぐため、松の枝でも焚きませう。」

と扇で木の枝を扇ぎ、

【四】女「古歌に――

『葛城や木の間に光る稲妻は、山伏の打つ火かとこそ見れ』

（葛城山の木の間に光る電は、山伏の火打石を打つ火の光のやうに思はれる）

とありますが、ほんとにこの人生は電の光か朝の露か石の火の光のやうに、實に短い果敢ないものだと思はれます。いやこのやうな愚痴の歎きは、なほ木たと思つて、柴と一所に焚いてしまひませう。

○わが身の歎きをも―歎きのきを木の意にとりなしていふ。
○思ひ眞柴―物思ひの增すを眞柴にいひかけた。
○法に心は墨染の―心の澄むを墨染にいひかけた。
○そみかくた―山伏の異名色を染むといひかけた。「そみかくた」は「蘇民書く札」の約言で、山伏が蘇民將來と書いて人に與へる所から山伏の異名となつたのであるといふ。
○標を集め―さえ增る霜をしめとにいひかけた。
○山伏の名にし負ふ―葛城の山、山伏とつゞけ、山伏といふ文字の通り山に臥すとの意に續つた。
○片敷く袖―片袖を下に敷いて寢ることゝこゝでは書いふ意。
○横になつてと
【五】
○後夜の勤め―午前四時頃の勤行。
○加持―佛力を信者に附加して功德を持たしめる行法
○五障―佛教で女は罪が深くて、轉輪王・梵天・帝釋・魔王、佛の五に爲ることが出來ないとて、これを五障といふ。法華經に見ゆ。

地。法に心は墨染の。袖もさながら白妙の。雪にや色をそみかくたの。篠懸も冴えまさる。標を集め柴を焚き寒風を防ぐ葛城の。山伏の名にし負ふ。片敷く袖の枕して。身を休め給へ　や御身を休め給へや

と舞ひ上げて眞中に行き下に居る。

【五】

ワキ「あら嬉しや篠懸を乾して候ぞや。急ぎ後夜の勤めを始めばやと思ひ候

シテ「御勤めとはありがたや。われに惱める心あり。御勤めのついでに祈り加持して給はり候へ

ワキ「そも御身に惱む事ありとは、何といひたる事やらん

シテ「さなきだに女は五障の罪深きに。法の咎めの呪詛を負ひ。この山の名にし負ふ蔦葛にて身を縛めて。猶三熱の苦しみあり。「この身を助け

世捨人の御事とて、佛道に心をお澄ましになり、召していらつしやる衣まで色の深い墨染めにお見受けしますが、それまでがこの眞白な雪で色が變つたやうで、寒さも一入お感じのことと存じます。さあ、しもとを集め柴を焚いて、この寒さだけはお暖めしませうから、山伏のお名前通り、この山で野宿遊ばすおつもりで、お召しになつた着物の袖を枕にして、お休み下さいませ―

【五】山伏は衣をあたゝめた態で、

山伏「あゝありがたうございました。お蔭で篠懸衣を乾かしました。では、急いで後夜の勤行を始めませう」

女「お勤めとは、ほんとにありがたうございます。私は實は惱みの心を持つてゐるのでございます。お勤めのお序に、私の爲にも加持祈禱をして下さいませ―

山伏「何ですつて、あなたに惱みの事があるとは、それは又どうした事なのです―

女「女は何の科を犯さないでも五障の罪業の深いものですのに、私は行者の咎めを受け、法力を以てのろはれ、この山の名物の蔦葛でからだを縛られて、今なほ三熱の苦しみを受けてゐるのです。どうか私をお助け下さいませ―

○法の咎めの呪詛を負ひ―役の小角の怒りを受け、法力を以てゐはれ、岩屋に押籠められたことをいふ。○三熱の苦しみ―長阿含經に見える龍の三患、熱風熱沙、惡風暴起、畏金翅鳥（金翅鳥は龍の子を奪ふ）をいつたのであらう。或はその一である熱風熱沙で、日に三度この熱の苦を受けることをいつたものか。いづれにしても龍神の受ける苦患であるが、こゝには普通の神にもこの苦があるやうに解してゐる。○法の岩橋架けざりし―葛城の神が役の小角の詞に背いて、佛法の爲の岩橋を架けなかつたことをいふ。解說參照。○明王―不動明王。但しこの傳說を取扱つた先進文藝はいづれも役小角は孔雀明王の法を修行したとしてゐる。○索―不動明王の手に持つ縛り繩。○石は一つの神體として―御神體の石像が、昔役小角に縛られた時のやうに、今も蔦葛にからめられてとの意。○撫づとも盡きじ―拾遺集讀人知らずの歌「君が代は

てたび給へ

ワキ『そも神ならで三熱の。苦しみといふ事あるべきか

シテ『恥かしながら古の。法の岩橋架けざりし。その咎めとて明王の。索にて身を縛めて。今に苦しみ絕えぬ身なり

ワキ『これは不思議の御事かな。さては昔の葛城の。神の苦しみ盡き難き

シテ『石は一つの神體として

ワキ『蔦葛のみかかる巖の

シテ『撫づとも盡きじ葛の葉

ワキ『はひ廣ごりて

シテ『露に置かれ

シテ『霜に責められ起臥の。立居も重き磐戸の內

地下歌『明くるわびしき葛城の（とシテ立ち）。神に五衰

山伏「何ですつて、神でなくては、三熱の苦しみといふ事があるものですか」

女「お恥かしながら、私は行者のいひつけに背いて、佛法の爲の岩橋を架けなかつた咎めによつて、不動明王の縛り繩でからだをくゝられ、今なほ苦しみの絕えないものなのでございます」

山伏「これは不思議なことだ。さては、昔の葛城の神樣が苦しみの絕えたいために……」

女「神體は一つの石像となつたが、その石像まで、昔縛られた時と同じやうに、蔦葛にからめられて、撫づとも撫でて取り去らうとしても、葛の葉は盡きず、蔓を生え擴がつて、露や雷に責められ、身動きすることも出來ず、岩屋の中に閉ぢこめられて、人目も恥かしい姿で居るのです。葛城の神の身を以て、五衰の苦しみを受けてゐるのです。どうか加持祈禱して下さい」

の苦しみあり祈り加持してたび給へと（ワキへ向き）岩橋の末絶えて。神隠れにぞなりにける。神隠れにぞなりにける

といふやいなやに、神隠れになつて、見えなくなつてしまつた。

（仕手柱際にて聞き、静かに中入。）

【問】　狂言山下の者、着附段屋斗目・長上下・腰帯・小刀・扇の装束にて、名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。葛城山の麓半田と申す在所の者にて候。今日は山へ登り薪をとり申さばやと存ずる。（脇正面に向きあら笑止や。俄かに雨の降り来つて候。さりながら山は雪麓は霰里は雨と申し候間。山は雪にて候べし。（正面の上を見て）されば〻こそ大雪にて候。（二三足出てワキを見）いやこれに客僧の御入り候が。この大雪に彳みて御入り候と見え申して候よ。さていつくより出て給ひたる御客僧にて候ぞ

ワキ「是は出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左様にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねありたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この葛城山に於て岩橋の子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左様の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

天の羽衣まれにきてなづともつきぬ巖ならなむ」を借り、撫ぜ撫でて取去らうとしても、葛の葉の盡きない意に用ゐた。

○明くるわびしき―岩戸を開くを夜の明くにいひかけ拾遺集春宮女藏人左近の歌―岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしき葛城の神―を引いた。

○五衰―天上界の天衆が壽命の盡きる時、現れる五つの衰相、衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不樂二本座一をいふ。

○岩橋の末絶えて―岩橋が成功しないで、末の續かなかつたことを、言葉の末の絶えたことにいひかけた。

【問】

○半田―正しくは吐田と書く。大和國南葛城郡、今の吐田郷村。

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ當山と申すは。御覽の如く谷峯峨々として往き來も叶はぬ山路にて候へども。役の行者踏み分け給ひてより。客僧達も御出である由承り候。その行者と申すは。文武天皇の御宇に葛城の役の優婆塞と申して。生國は大和の國。姓は加茂氏御名は小角と申して。三十餘年この山に住み給ひ。鬼神を自由に遣ひ給ふ。然るに行者思し召すは。葛城より大峯までは谷峯を廻り遠ければ。岩橋を架けて通路にせんと思し召し。葛城の御神に御談合候へば。明神も叶ふまじく思し召せども。行者の仰せなれば。畫はわが形見苦しとて。夜なゝ岩を集め橋を架け給へども。なか〳〵成就仕らず橋もかゝらねば。行者怒りをなし。明神を葛葛にて縛め給ふ故。明神その讎をなさんとて。常の臣下に讒し御申し候へば。行者を召しとらんとし給へども。空を走り地を驅けり。取るべき樣もなく候間。行者の母をいましめ給へば。それを歎き母に替らんと御出で候處を。その儘島へ流し給ふ。その後行者は御母を鉢に入れ。異國へ移し御申し候が。猶も本性を忘れ給はず。常に葛城山大峯富士の嶽へ通ひ給ふと承り候。又明神行者のいましめ故に。今に御苦しみ御座あると申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くに御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前雪に前後を忘じ岩陰に休らひ候處に。いづくともなく女性一人來られ。この所へ同道申され。標の謂れ又岩橋の事を懇に語り。神に五衰の苦しみあり。祈り加持せよといひもあへず。その儘姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は一言主の御神現れ給ひ。御道しるべありたると存じ候間。彌〻祈り加持なされ。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき法味をなし。重ねて奇特を見うするにて候

○御談合―御相談。

○一言主の御神―葛城の神。書事本紀に葛木一言主神、座二倭國葛上郡一、是素盞嗚命神子也―

【六】
○法の筵のとことはに―法の筵は說法の場、とことはは永久の意。筵の床をとことはにいひかけたのである。こゝには法力の久遠な佛敎といふ意に用ゐたのである。
○法味―佛道修行をして、その味ひを覺知すること。こゝには修法の意に用ゐた
○夜の行ひ―夜中の勤行。
神心の寄るといひかけた。
○一心敬禮―佛を禮拜する時の詞。法華懺法に「一心敬禮十方一切常住佛」

【七】
○和光―神佛が衆生濟度の爲にその德光を和らげて人界の俗塵に交はること。その光を受けて影と續けた。
○無上正覺の月―正覺は佛道を悟ること。この悟りを明月に喩へたのである。
○法性眞如の寶の山に―法性眞如、眞如の玉、寶、寶の山といひつゞけた。法性眞如は悟りの體。眞如の寶は如意寶珠、寶の山は葛城山の異名。
○玉葛―玉を緒に貫いて頸にかける裝飾。
○なほ懸け添へて―玉鬘の上になほ葛かづらをかけて

狂言「御逗留にて候はゞ重ねて御用仰せ候へ
ワキ「賴み候べし
狂言「心得申して候
　といひて狂言は引く。

【六】
ワキゾレ上歌（待謠）□岩橋の。苔の衣の袖添へて。苔の衣の袖添へて。法の筵のとことはに。法味をなして夜もすがら。かの葛城の神心。夜の行ひ聲澄みて。（ワキは正面に向き）一心敬禮（と合掌）

【七】
出端の囃子にて、後ジテ葛城神、面增・黑垂・天冠・襟淺黃・着附摺箱・長絹・大口・腰帶・扇の裝束にて常座に出で、
後ジテ「われ葛城の夜もすがら。和光の影に現れて。五衰の眠りを無上正覺の月に覺まし。法性眞如の寶の山に。法味に引かれて來りたり。よくよく勤め。おはしませ
ワキ「不思議やな峨々たる山の常陰より。女體の神とおぼしくて。玉の簪玉葛の。なほ懸け添へて

【六】
後段
山伏　この岩屋で、衣をとり繕ひ、祭壇をとゝのへ、久遠の法力を以て終夜修法をして、あの葛城の神をお慰め申さう―と夜の勤行を行ひ、澄みきつた聲で、
山伏「一心に佛を敬ひ奉る……」
と讀經する。

【七】
後ジテ葛城の神登場。
■自分は葛城の神であるが、この夜化現の神の姿で現れ出で、五衰の苦を離れて明月の如き悟りを得、寶の山ともいふべき佛の世界に入りたいと思つて、修法に引かれてこゝへ來たのです。よく勤行をして下さい」
山伏　これは不思議だ。嚴しく聳え立つた山の小暗い所から、女體の神と思はれる方が、玉の簪に玉葛をおつけになつた上、なほ葛葛をお懸けになつて、それが御衣

○はひまとはるる―蔦かづらの這ひまつはるを衣の纏はることにいひかけた。
○小忌衣―祭服。こゝには神の着給ふ衣の心でいふ。
○年ふる雪や―年經るを降る雪にいひかけた。
○標結ふ―雪や霜といひかけた。
○夜なれど月雪の―夜であるが、月と雪との光によつて、姿のはつきり見える。
○よしや吉野の―恥かしいが致し方がない、まあよいわとの意で、「よしや」といひ、よしの音を重ねて吉野山、山をうけて「山かづら」かづらの縁で「かけて」通へ―通へをうけて「岩橋」橋の高い意にかけて「高天の原」と、順次に文飾を施した。
○高天の原―葛城山の上部高間山の俗稱。これを神代天上の高天原に見立て、天の岩戸に於ける天佃女命の神樂の故事を思ひ出した心

【八】
○標木綿花の―雪の縁語、霜を―しもと」にいひかけ、しもとゆふ」を「木綿花」にいひかけ、木綿花の縁で「白和幣」と續けた。
○磐戸の舞―天の岩戸隱れの時、天佃女命の奏した舞をいふ。

蔦葛の。はひまとはるる小忌衣

シテ『これ見給へや明王の。索はかかる身をいましめて

ワキ『猶三熱の神ごころ

シテ『年ふる雪や

ワキ『標結ふ

地『葛城山の岩橋の。夜なれど月雪の。さもいちじるき神體の。見苦しき顏ばせの神姿は恥かしや。よしや吉野の山葛。かけて通へや岩橋の。高天の原はこれなれや。神樂歌始めて大和舞いざや奏でん（と大小前に出で）

【八】

シテ『降る雪の。標木綿花の。白和幣

〔序舞〕

續いて次の謠に合せて舞ふ。

地『高天の原の磐戸の舞。高天の原の磐戸の舞。

に這ひからまつてゐるが……」

神「これ御覽なさい。不動明王の縛り繩でこのやうにからだを縛られて……」

山伏「やはり今も三熱の苦しみをお受けになつて……」

神「さうです。雪や霜の多い葛城山に永い年月見憎い姿で送つてゐるのです。今は夜だけれど、月や雪の光で、につきりと、この見苦しい神姿の見られるのが、ほんとにお恥かしい。……が、まあ構はない、吉野から岩橋を架けて通ふやうになつてゐる、この高間山は、俗に高天原といつたのだから、こゝは天上も同じことです、神代の古事に倣つて、神樂歌を始めて、大和舞を舞ひませう」

【八】

〔序舞〕

を大和舞の心で舞ひ、

神「おゝ折柄降る雪は、木綿花や白い御幣のやうで、この場合に丁度適はしい。かうして高天原の磐戸の前の神樂に擬へて舞を舞ふと、向ふに天の香具山も見え

○天の香具山　大和國葛城山の東方にある。大神岩戸隱れの時、天香具山の眞榊に神鏡・神寶及び青和幣・白和幣に神鏡・神寶及び青和幣・白和幣をかけて、神前に供へたことが記紀に見えてゐるのでその緣でこゝに引いた。

○月白く雪白く　大神が御出現遊ばすと、天初めて晴れ、皆白くなつたといふ說話に思ひ寄せた。〔三輪〕の「而白や」の語釋參照。

○而なし　而目のない。

○おもはゆし　恥かしさにまばゆいこと。

○あさまし　あさましの音を重ね、朝間といひかけた。

天の香具山も向ひに見えたり。月白く雪白く、いづれも白妙の。けしきなれども。名に負ふ葛城の。神の顏がたち、面なやおもはゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべし。明けぬ前にと。葛城の。明けぬ前にと葛城の夜の。磐戸にぞ入り給ふ、磐戸の內に入り給ふ

と、仕手柱際にて留拍子を踏む。

る。そして天照大神が岩戸から御出現になつた神代の時のやうに、月も白く、雪も白く、すべてのものが白く明らかになつて來た。けれどこの葛城の神は見苦しい貌かたちで、人に見られるのが面目ない、きまりが悪い、恥かしい、あさましい。……いやさういつてゐるうちに、明るくなつて、夜も明方になつた。さあ夜の明けないうちに歸りませう」

といつて、葛城の神は愈暗い岩戸の中へお入りになつた。

〔考異〕

諸流（五流）

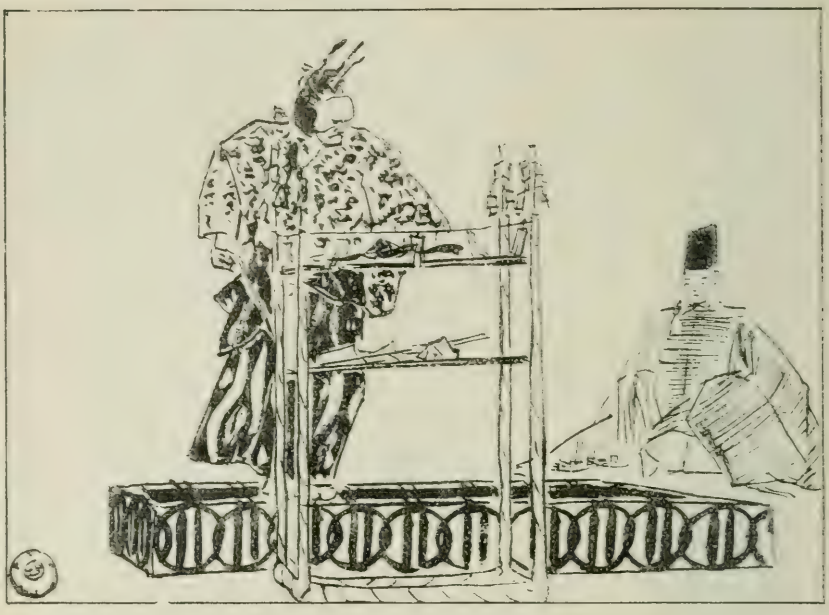
【二】ゥ本「これはこの……踏み馴れたる通路をさへ雪の吹雪にかきくれて（下懸ナシ）……」

【三】ゥ本「あら嬉しや……」

うこそ候へ（下懸ナシ）（寶、ゥ本「暫く御休み候ひて。御篠懸を乾されうずるにて候。ゥ本「心得申し候」ヲ加フ）返す〳〵もありがた

古謠本（光悅本）

【一】ゥ本「これは出羽の……われ（光ナシ）この度大峯……



鐵輪

觀（寶剛喜）

解說

【能柄】 四番目　二段劇能

【人物】 狂言　貴船の社人、前シテ　京の女、ワキツレ　下京の男、後ワキ　晴明、後シテ　京女の生靈（鬼女）

【所】 第一段　京　貴船の社前、第二段　京　晴明の邸

【時】 （九月）

【作者】 能本作者註文には作者不明とあるが、二百十番謠目錄には世阿彌の作とす。親長卿記に長享二年二月廿三日演能の記事、言經卿記に文藤四年四月二日註釋の事が見えてゐる。

【梗概】 下京の女が、夫が自分を棄てて後妻を迎へたのを恨み、貴船の社に丑刻詣をしてゐると、一頭に鐵輪を戴き、その三つの足に火をともして怒れる心を持たば、忽ちに鬼神となるであらうと、社人を通じて神のお告げがあつた。一方その夫は毎夜惡夢を見るので、晴明に占つて貰ふと、女の恨みで今夜の内にも命が危いとの事であつた。男は驚いて晴

明に調伏の祈禱をして貰つてゐると、女が鬼女となつて現れ、恨みの數々を述べ、夫を連れて行かうとしたが、三十番神に追ひ立てられて、力なく退散する。

【出典】　このやうな戀の呪詛は古く源氏物語に六條御息所の物怪のことが描かれてゐるが、本曲直接の典據は、平家物語剣の卷に、「嵯峨天皇の御宇に、或公卿の女餘りに嫉妬深くして、貴船の社に詣でつゝ、七日籠りて申すやう、「歸命頂禮貴船大明神、願くは七日籠りたる驗には、われを生きながら鬼神になしてたび給へ、妬しと思ひつる女取殺さん」とぞ祈りける。明神あはれとや思しけん、誠に申す所不便なり、實に鬼になりたくば、姿を改めて、宇治の河瀨に行きて三七日漬れ」と示現あり。女房悦びて都に歸り、人なき所にたて籠りて、長なる髪をば五つに分け、五つの角にぞ造りける。顏には朱を指し、身には丹を塗り、鐵輪を戴きて、三つの足には松を燃し、續松を拵へて、兩方に火をつけて、口にくはへつゝ、夜更け人定りて後、大和大路へ走り出で、南を指して行きければ、頭より五つの火燃え上り、眉太く鐵漿にて、面赤く身も赤ければ、さながら鬼形に異ならず。これを見る人、肝魂を失ひ倒れ伏し、死せずといふ事なかりけり。さて妬しと思ふ女、そのゆかり、われをすきむ男の親類、境界、上下をも選ばず、男女をも嫌はず、思ふ樣にぞ取り失ふ。男を取らんとては女に變じ、女を取らんとては男に變じて人を取る。京中の貴賤、申の時より下になりぬれば、人をも入れず、出づることもなし。門を閉ぢてぞ侍りける。」

とあるのが、それであらう。

【概評】　女が戀慕嫉妬の餘り鬼女となつた事を描いたものには、本曲の外に〔葵上〕〔道成寺〕があるが、その一は源氏物語から出たもので、興味が古典文藝の上にあり、他の一は亂拍子の舞が中心となつてゐて、いづれも舞臺上の興味が戀慕嫉妬の外に移つてゐるが、この曲の主人公は市井の女性であり、嫉妬の描寫にのみ力を盡してゐるから、戲曲的興味が一つに集中して、誠に緊張した曲柄となつてゐる。一體、一段又は二段の劇能とも、脚色としては夢幻能に比べて發達したものであるとはいへ、徒らに舞臺面の變化が烈しく、しかもその演出が寫實的で、簡素な能舞臺に不相應なものが多いのであるが、これは主な舞臺が二箇所に局限せられてゐて、殊に第一段は筋を運ぶだけの簡單なものであり、第二段には人形の調伏といひ、鬼女の出現といひ、能樂に適はしい構想で、その怨言も亦眞情を叶露した凄怨にして情味のこもつたもので、劇能として佳作の一に擧ぐべき曲であらうと思ふ。

【序】

◎狂言詞、謡本（光悦本にも）には、「かやうに候者は。貴船の宮に仕へ申す者にて候。さても今夜不思議なる霊夢を蒙りて候その謂れは。都より女の丑の刻詣をせられ候に申せと仰せらるる子細。あらたに御霊夢を蒙りて候程に。今夜参られ候はば。御夢想のやうを申さはやと存じ候」とある。

○丑刻詣―丑の刻（今の午前二時）に参詣すること。他を呪詛せん爲に、人に知られぬやうに、密かに参詣して祈願するのである。

【一】

○日も數添ひて―日の經つに從つて戀心が增して行く

○戀衣―戀する人の衣。衣を着るを貴船にいひかけた。「日も」は紐と同音で衣の縁語。

○貴船の宮―山城國愛宕郡鞍馬村にある。祭神は詳かでない。

○蜘蛛のいへに―「蜘蛛のいに荒れたる駒は繫ぐとも二道かくる人は頼まじ」といふ古歌を引いた。「い」のいは巣のことであるのを、家と訛つたのである。

○あだ人―氣の變り易い人

○人の僞り末知らで―男の詞は一時の出來心でいつた僞りで、行末に心變りをしようとは知らないで。

○われからの心―自ら招いた過ち。

【序】　狂言貴船の社人、梨打烏帽子・上頭掛・着附厚板・綾水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、狂言「かやうに候者は。貴船の宮に仕へ申す社人にて候。さる程に今夜不思議なる御靈夢を蒙りて候その樣體は。都より女の當社へ丑の刻詣をする人の御虛候間。卽ち願ひを御叶へあるべきとの御告にて候。その女に。鐵輪の三つの足に。松明をともし頭に戴き。顏には丹を塗り。身には赤き衣を着。怒る心をめされよと。確かに申し渡せと御告にて候間。心がけて申さばやと存ずる

といひて狂言座にくつろぐ。

【一】

次第の囃子にて、シテ女、面泥眼・長髮・髮帶・襟淺黃・着附摺箔・唐織壺折・無色腰卷・腰帶・扇の裝束にて女笠を被りて出で、常座に立ち囃子座の方に向きて、

シテ次第『日も數添ひて戀衣。日も數添ひて戀衣。貴船の宮に參らん

地取に正面に向き、

シテサシ『げにや蜘蛛のいへにあれたる駒は繫ぐとも。二道かくるあだ人を。頼まじとこそ思ひしに。人の僞り末知らで。契り初めにし悔しさも。唯われからの心なり。餘り思ふも苦しさに。貴船の宮に詣でつつ。住むかひもなき同じ世の。內に報いを見せ給へと

【一】

第一段

舞臺は京都で、シテ京の女巫場。

女「日數の經つに從つて、愈〻戀しい思ひは增すばかりだ。さあ貴船の宮へお參りしよう」

ミ次第を謠つて心持を現す、

女「ほんとに昔の歌に――

『蜘蛛のいに荒れたる馬は繫ぐとも、二道かくる人は頼まじ』

（あのか弱い蜘蛛の巣に荒れ狂ふ馬を繫ぐことは出來ても、浮氣男の心を捉へて置くことは出來ない。他の女に心を引かされるやうな男は頼みにならない）

とあるやうに、浮氣な男を頼みにはしまいと思つてゐたのに、あの人の詞を當座の僞りであらう、やがて心變りするであらうとは知らないで、契りを結んだのは、

○同じ世の―惡業は當然未來世で報いられるものであるが、その死後まで待ちきれない、今現世の間に直に報いの來るやうにとの意。
○貴船川―貴船山の北から發し、貴船神社の下を過ぎて鞍馬川に合す。頼みをかけて來を貴船にいひかけた
○早く歩みを―川の流れの早いことを歩みの早い意にいひかけた。
○通ひ馴れたる―丑の時參りに通ひ馴れた意に久しく契つてゐた夫婦の仲の破れた後といふ意を含めていふ
○夜も紀の―紀は下賀茂の地。夜も直路にを紀に、紀の河原を變らぬにいひかけた。夜見ても紀の邊の景色の變らないといふ意に、夜も晝も物思ひの變らないことを兼ねたのである。
○みぞろ池―上賀茂村にある御菩薩池。美曾呂池とも美度呂池とも書く。沈む身をみぞろといひかけたのである。沈むは池の緣語。
○生けるかひなき―池と「生け」と音を重ねた。
○消えん程とや―物思ひの苦しさに身も消え失せようとするほどであるとの意。

シテ下歌『頼みをかけて貴船川早く歩みを運ばん。上歌『通ひ馴れたる道の末。通ひ馴れたる道の末。夜も紀のかはらぬは。思ひに沈むみぞろ池生けるかひなき憂き身の。消えん程とや草深き市原の野邊の露分けて。月遲き夜の鞍馬川。橋を過ぐれば程もなく。貴船の宮に着きにけり貴船の宮に着きにけり

「月遲き夜の」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸りて貴船に着きたる心。上歌濟みて笠を脱ぎ正面に向き、シテ「急ぎ候程に。貴船の宮に着きて候。心靜かに參詣申さうずるにて候

といひて大小前に行き床几にかゝる。

狂言舞臺に出で、シテを見て、

狂言「さればこそ。この女の事にてあらう。御告の通りを申さばやと存ずる。(シテの右側に坐して)いかにそなたへ申し候。每夜御參りなされ候祈念の事。叶へて參らせうずるとの。當社より我等までの御告にて候。その樣體は。鐵輪の三つの足に。松明をたて頭に戴き。顏には丹を塗り。身には赤き衣を召し。ほんとに悔しいが、これも結局私の心の到らない報いだ。けれど餘りといへば口惜しく心苦しいから、貴船の宮にお參りして、あの男に來世といはず、この今の世で罰が當りますやうにと、お祈りする爲に、急いで貴船川の方へ行きませう」

シテ「親しみあつた夫婦の仲が絶えて、それ以來いつもいつも悲しい思ひに沈んで、この來馴れた道を通り、夜も景色の變らない紀河原やみぞろ池のあたりを過ぎ、何の生きてゐる樂しみもなく、今にも死にさうなからだをして、市原野の草深い露を分け、月の出も遲い鞍馬川の橋を渡つて、間もなく貴船の宮に着いた」

と道を感慨を洩らしてゐるうちに、貴船に着いた態で、舞臺は貴船社前となる。

シテ「道を急いだので、はや貴船の宮に着きました。さあ心靜かにお參りしませう」

といつて社前に額づく。

先程から登場してゐた狂言の社人、女の來たのを見て、神の告を傳へる。

「消えん」はその下にある露の絲語。
○市原野―愛宕郡靜市野村
○鞍馬川―上賀茂村の邊で貴船川と雲畑川と合して、賀茂川の源となる川。夜の暗きといひかけた。
◎されはこそ―以下狂言詞、謠本には「いかに申すべき事の候。御身は都より丑の刻詣めさるる御方にて渡り候。今夜御身の上を御夢想に蒙り候。御申しある事はやり叶ひて候。鬼になりたきとの御願にて候程に。わが家へ御歸りあつて。身には赤き衣を着。頭には蘿蔔を戴き。三つの足に火をともし。怒る心を持つならば。忽ち鬼神と御なりあらずるこの御告にて候。急ぎ御歸りあつて告の如く召され候へ。なんぼう奇特なる御告にて御座候ぞ」とある。
○鐵輪―五德の古語。鐵製の輪形に三脚を立てたもの

【一】
◎いや〳〵―以下狂言詞、謠本には「いやいやしかさあらたなる御夢想にて候程に。御身の上にて候ぞ。かやうに申す内に何とやらん恐ろしく見え給ひて候。急ぎ御歸り候へ」とある。
○空さまに―上に向つて。
○立つや黑雲の―髮の立つを黑雲の立つにいひかけた
○鳴る神―雷。風となると知らずの歌―天の原ふみ轟かしなる神も思ふ中をばさくるものかは―を引いて、原歌は、雷神の威光を以て怒る心を御持ちあれと御告にて候間。構へてその分御心得候へ

【二】
シテ「これは思ひもよらぬ仰せにて候。妾が事にてはあるまじく候。定めて人違ひにて候べし
狂言「いや〳〵しかとそなたの事にて候。やあはやかやうに申すうちに。何とやらものすさまじい體になり申されて候。これはいかな事。顏の氣色が變つた。なう〳〵恐ろしや〳〵
といひて幕に逃げ入る。
シテ「これは不思議の御告かな。まづまづわが家に歸りつつ。『夢想の如くなるべしと
地上歌『いふより早く色かはり。いふより早く色かはり。氣色變じて今までは。美女の形と見えつる。綠の髮は空さまに。立つや黑雲の(と立上り)。雨降り風と鳴る神も。思ふ中をば避けられし。恨みの鬼となつて、人に思ひ知らせん。憂き人に思ひ知らせん
と鬼氣を帶びて勢强く中入。

【二】
女「これは思ひも寄らないことを仰しやる。それは私のことではございますまい。恐らく人違ひでございませう」
社人「いや〳〵確にあなたの事です。お〻、このやうにいつてゐるうちに、何やら恐ろしう見えて來た。これは驚いた。顏つきが變つて來た。お〻恐ろしい。」
といつて社人は退場する。
女「これは不思議なお告げだ。ともかく自分の家に歸つて、神樣のお告げ通りにしませう」
といふや否や、はや顏色も態度も變り、今までは美しい女姿に見えてゐたものが、綠なす髮は上に生え上り、あたりに黑雲が掩ひかゝるや、雨が降り風が吹き、雷が鳴る。
女「よし、神樣も夫婦の仲をお裂きになつたのだ。この恨みに鬼となつて、あの男に思ひ知らしてやらう。私に辛く當つた人に思ひ知らしてやらう」
といつて退場。

しても、思ひ合ふ中は引離すことは出來ないといふ意であるのを、句の半ばから轉じて、思ひ合ふ中を引裂かれたといふ意に綴つた。○憂き人―我につらい人。

【三】○下京―京都の四條より南をいふ。○晴明―姓は安倍。一條天皇頃の天文博士で陰陽師として世に著名な人。但し、こゝには「占はせ申すべく」などと敬語をも用ゐてゐない所から推すと、晴明をただ陰陽師といふほどの意に用ゐたのであらう。

【三】

ワキヅレ男、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて名乗座に出で、

ワキヅレ「かやうに候者は。下京邊に住むものにて候。われこの間うち續き夢見悪しく候程に。晴明の許へ立ち越え。夢の樣をも占はせ申さばやと存じ候（といひて、橋懸際に行き幕に向ひ）

ワキヅレ「いかに案内申し候

ワキ晴明、風折烏帽子・着附厚板・縷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、幕より出でながら、

ワキ「誰にて渡り候ぞ

ワキヅレ「さん候下京邊の者にて候が。この程うち續き夢見悪しく候程に。尋ね申さん爲に參りて候

ワキ「あら不思議や。勘へ申すに及ばず。これは女の恨みを深く被りたる人にて候。殊に今夜の内に御命も危く見え給ひて候。もしさやうの事にて候か

第二段

舞臺は初め下京。ワキヅレ下京の男登場。

男「私は下京邊に住んでゐる者です。私はこの間中、引續いて悪い夢を見たから、晴明のところへ行つて、夢の判斷をして貰はうと思ふのです」

と自己紹介をす。

舞臺は阿倍晴明の邸。

下京の男は晴明の家に行つた樣で、

男「お頼みします」

ワキ晴明登場。

晴明「どなたです」

男「はい、私は下京邊の者ですが、この間中ずつと引續いて夢見が悪いので、お尋ねしたいと思つて參つたのです」

晴明「おゝこれは驚いた。占ふまでもない。これは女の深い恨みを受けた人だ。殊に今夜のうちにお命も危いやうに見えますが、もしやそのやうなお心當りがありますか」

○語らひ—契る。

○調法—調伏の修法。調伏は神佛に祈つて怨敵魔障などを降伏すること。

○轉じかへて—自分の受けようとする禍を轉じて怨敵に與へること。

ワキヅレ「さん候何をか隱し申すべき。われ本妻を離別し。新しき妻を語らひて候が。もしさやうの事にてもや候らん

ワキ「げにさやうに見えて候。かの者佛神に祈る數積つて。御命も今夜に窮まつて候程に。某が調法には叶ひ難く候

ワキヅレ「これまで參り御目にかかり候事こそ幸ひにて候へ。平に然るべきやうに御祈念あつて給はり候へ

ワキ「この上は何ともして御命を轉じかへて參らせうずるにて候。急いで供物を御調へ候へ

ワキヅレ「畏つて候

【四】

ワキヅレ幕に入る。ワキ大小前にくつろぐ。

後見、二段の棚(その上段には夫婦の人形に擬して侍烏帽子と疊とを載せ、下段には幣を置き、四隅の柱には五色の幣を立て、周圍には注連を張る)の作物を正面先に置き、その手前に一疊臺を出す。

男「はい、何を隱しませう、私は本妻を離別して、新しい妻と契りましたが、もしやそのやうな事ででもございませうか」

晴明「いかにもそのやうに見えます。その本妻が神佛にお祈りした數が積つて、あなたのお命も今夜限りになつたのですから、私の調伏修法ではとても祈り伏せることが出來ません」

男「これまで參つてお目にかつたのが仕合せでした。是非とも何とか宜しいやうに御祈禱して下さい」

晴明「この上は致し方がない、何とかしてお命を轉じて助かるやうに祈禱してあげませう。では早速お供物をお拵へなさい」

男「畏りました」

下京男は供物を調へる態で退場。

【四】

舞臺には祭壇が調へられる。

○人尺に作り—人形を人間と同じ大きさに作り。
○名字をうちに籠め—名を書いて人形の中に籠め。
○おのおの供物を—神酒洗米などの供物を取揃へて。
○肝膽を碎き—心を籠めて
○伊弉諾伊弉冊尊—わが國造化の神。〔淡路〕參照。
○みとのまくばひ—結婚。
○陰陽の道—夫婦の道。
○魍魎—一種の妖鬼、山川木石などの精靈をいふ。千手陀羅尼經に「爲降伏二一切魍魎鬼神者、當二於寶劍手一」
○非業の命—定命が盡きたのではなく、非道の災厄の爲に命を墮すこと。
○大小の神祇—大社小社の天神地祇。
○諸佛菩薩—佛は佛道を正覺した最上位のもの。菩薩は佛陀の次に位するもの。
○明王部—諸の惡魔を降伏して人民を擁護する天部の神。不動明王など。
○天童部—護法の鬼神又は天人などが童子の形を現して人界に來るものをいふ。
○九曜—九曜星の略。日月木火土金水の七曜星と、計都・羅喉の二星。
○七星—北斗七星。貪狼・巨文・祿存・文曲・廉貞・武曲・破軍。

ノットの囃子にて、ワキ一疊臺に上り、幣を持ちて、

ワキ『いでいで轉じかへんとて。茅の人形を人尺に作り。夫婦の名字をうちに籠め。三重の高棚五色の幣。おのおの供物を調へて。肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜（と幣を左右に振りて戴き）。それ天開け地固まつしよりこの方。伊弉諾伊弉冊の尊。天の磐座にして。みとのまくばひありしより。男女夫婦の語らひをなし。陰陽の道、永く傳はる。それになんぞ魍魎鬼神妨げをなし。非業の命を取らんとや

地『大小の神祇。諸佛菩薩、明王部天童部。九曜七星。二十八宿を驚かし奉り、祈れば不思議や雨降り風落ち、神鳴り稻妻頻りに滿ち滿ち（正面を見上げ）、御幣もざめき鳴動して。身の毛よだちて。恐ろしや

と幣をもとの通りに置き、地謠座前に行き、下に居る。

晴明『では、命を轉じかへて助けよう」といつて、茅の人形を呪はれた夫婦と同じ大きさに作り、夫婦の名字をその中に書いて、三段の高い棚を作り、五色の幣を立て、それ〴〵供物を調へて、必死になつて祈つた。

晴明『——『謹上再拜。それ天地の開闢よりこの方、伊弉諾伊弉冊の尊が天上の御座で御結婚遊ばし、男女夫婦の契りを遊ばしてよりこの方、夫婦の道は今日に至るまで何の障りもなく傳つたのである。それだのに、魍魎鬼神が妨げをして、定命も盡きたい夫婦の命を奪はうとは何事だ』——」

（三祈禱の詞を捧げて、

大社小社の天神地祇、諸の佛菩薩、明王、天童、九曜星、七星、二十八宿、あらゆる神佛に向つてお祈りすると、不思議なことに、雨が降り風が吹き、雷が鳴り稻妻が頻りに閃き、御幣もざわ〳〵と鳴り動いて、身の毛もよだつばかり恐ろしい氣色となつた。

○二十八宿―支那星學の名稱で、東宮の角・亢・氏・房・心・尾・箕・南宮の斗・牛・女・虛・危・室・壁・西宮の奎・婁・胃・昴・畢・觜・參・北宮の井・鬼・柳・星・張・翼・軫。○驚かし―神佛明王天童に祈り、又人の運命を司る星に祈るをいふ。驚かすは他の注意を促がすこと。○ざめき―ざわ〳〵と音を立てること。

【五】○斜脚の暖風―和漢朗詠集慶滋保胤の「微雨自レ東來」と題した詩に「斜脚暖風先扇處」に據つたもの。斜脚は雨の斜に降ることで、春雨の意。○因果は車輪の止む時のないのを車輪に譬へていふ。涅槃經に―三世因果循環不レ失―。○戀の身の浮かむことなき―戀慕の爲に苦惱するものは極樂に浮かぶことが出來ない意。○賀茂川―京都の東を流れる川。浮かむの緣で鴨にいひかけ、後の「貴船の川瀨の螢火」―と照應す。○青き鬼―水の青きにかけていふ。戀慕の爲に死んだものは青鬼となるといふ。文盛衰記に―吾は是宋朝の作文の博士、好色の遊客也。作……色に耽りては詩を作り、女を戀ひては歌をなせり。彼の好會積りてかく青き鬼となり侍り―又同書に「文德天皇の染殿の后は……

【五】出端の囃子にて、後ジテ女の生靈、面橋姫・鬘（鐵輪を戴く）・曇帶・襟淺黃・着附赤地箔・縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて、打杖を持ちて橋懸に出で、一の松に立ちて、

後ジテ『それ花は斜脚の暖風に開けて。同じく暮春の風に散り。月は東山より出でて早く西嶺に隱れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く。われに憂かりし人々に。忽ち報いを見すべきなり（と詰足し）。戀の身の。浮かむ事なき賀茂川に

地『沈みしは水の。青き鬼

シテ『われは貴船の川瀨の螢火

地『頭に戴く鐵輪の足の

シテ『焰の赤き。鬼となつて

と舞臺に入り、

地『臥したる男の枕に寄り添ひ（一疊臺に上り）。いかに殿御よ。珍しや（と柵の烏帽子を見込み）

【五】後ジテ女の生靈鬼女の姿となつて登場。

生靈『花は春雨や暖い風に育てられて美しく咲き出るが、春の暮になれば風に誘はれて散つてしまふ。月は東の山から出て赤く輝くが、間もなく西の山に隱れてしまふ。世の中の無常な果敢ないことは、すべてこの通りなのだ。善因あれば善果があり、人に辛く當れば、自分も亦つらく當られるのだ。自分も自分につらく當つた人に、つらい報いを見せてやるのだ。戀に身を失つて、極樂に浮かび出ることが出來ず、賀茂川ならぬ地獄に沈んだ者は青い鬼となるといふことだが、私は貴船の川瀨の螢火のやうに、頭にのせた五德の脚に火を燈して、赤い鬼となつて、寢てゐる男の枕許に寄り添つて行かう―

と男の枕許（祭壇の人形）に寄り添つて行かつて、

生靈『もうし、あなた、お久しい。――

…柿木紀僧正御修法のついでに思を懸け奉り、紺青鬼に變じて御身に近づきたり」

○貴船の川瀬の螢火―後拾遺集和泉式部の歌「男に忘られて侍りける頃貴船に參りてみたらし川に螢の飛び侍りけるを見て詠める」と詞書して「物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る」を引き、前の鴨、賀茂川に對して、螢、貴船川を出し、螢火の緣で鐵輪の娼を出し、娼の赤きを承けて赤き鬼といひ、前の青き鬼に對す。

○殿御―女より男に對して呼ぶ敬語。

○玉椿の八千代―久しいものの譬。玉は美稱。莊子逍遙篇に「上古有二大椿樹一、以二八千歲一爲二春、以二八千歲一爲二秋一」

○因果は今ぞ―人につらく當つた報は今思ひ知るだらうといひ、その知らんを白雪にいひかけ、雪の緣で消えん命と續けた。

【六】○惡しかれと思はぬ山の―詞花集和泉式部の歌「あしかれと思はぬ山の峰にだに生ふなるものを人の歎きは」を引いた。歎きのきを

シテ『恨めしや御身と契りしその時は。玉椿の八千代。二葉の松の末かけて。變らじとこそ思ひしに。などしも捨ては果て給ふらん。あら。恨めしや、捨てられて（と安坐してしをる）

地『捨てられて。思ふ思ひの涙に沈み（と臺より下り）。人を恨み（仕手柱際へ行き）

シテ『夫をかこち

地『ある時は戀しく

シテ『又は恨めしく（と作物を見やり）

地『起きても寢ても忘れぬ思ひの。因果は今ぞと（取殺さんとする樣を示し）。白雪の消えなん命は今宵ぞ。いたはしや（心持を綏め）

【六】　次の上歌に舞ひながら心持を現す。

地上歌『惡しかれと。思はぬ山の峯にだに。思はぬ山の峯にだに。人のなげきは生ふなるに。いはあゝ恨めしい。あなたと夫婦の契りを結んだ時には、玉椿や二葉の松のやうに幾千代かけて、いつまでも變りのないものと思つてゐたのに、どうして私をお捨てになつたのです。あゝ恨めしい。私はあなたに捨てられて、戀しい思ひ、悲しい思ひに身を苦しめ、ある時は恨めしく、ある時は戀しく、又恨めしく、起きても寢ても忘れられない苦しい思ひをしたのです。その因果を今こそ思ひ知るがよい、あなたの命の亡くなるのは今宵だ。でもお氣の毒なことです」

【六】女『古い歌に――

『あしかれと思はぬ山の峰にだに、生ふなるものを人の歎きは』

（五によかれと思つてゐる中でさへ、いろ〳〵歎かはしい事の起り易いものだ）

とあるのです。ましてこの永い年月悲しい思ひに沈んで、恨みの數々の積つたものは、執心の餘り鬼となるのも當然のことです」

といつて女の人形に向ひ、

木の意にとつて、「山の峰に生ふ」といつたのである。

○笞―罪人を打つ杖。地獄の鬼が鐵杖を以て死者を呵責するさまに擬していふ。

○うはなり―後妻。

○からまいて―絡め卷いて

○うつの山―駿河國にある「打つ」の音を重ねていひ、更に「うつつ」を呼び起す。伊勢物語の歌に「駿河なる宇都の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり」

○三十番神―月の三十日を一日づつ分擔して法華經を護り給ふ三十體の神々。例へば一日は伊勢、二日は石清水、三日は氣比明神が番神に當らせられるといふ。

○あだし男―薄情な浮氣男

んや年月思ひに沈む恨みの數。積つて執心の鬼となるも理や

シテ『いでいで命を取らん（作物を見込み）

地『いでいで命を取らんと笞を振り上げうはなりの（臺に上りて打杖を振り上げ）。髪を手にからまいて（柵の臺を卷き持ち）。打つやうつの山の（打杖にて臺を打ち）。夢現とも。分かざるうき世に。因果はめぐりあひたり今更さこそ。悔しかるらめさて懲りや思ひ知れ（打杖にて臺を打ち）

シテ『殊更恨めしき

地『殊更恨めしき（と臺を下りて仕手柱際へ行き）。あだし男を。取つて行かんと臥したる枕に立ち寄り見れば（作物の側へ行きて打杖を振上げ）。恐ろしや御幣に（たらたらと退き）。三十番神ましまして。魍魎鬼神は穢らはしや出でよ出でよと責め給ふぞや。腹立ちや

生靈『さあ命をとつてしまふぞ」

といつて杖を振りあげ、後妻（人形）の髪を手にまきつけて、打ちつける。

生靈『この夢か現か分らないやうな現世で因果がめぐつて來たのだ。さぞや今になつて悔しい思ひをするだらう。さあこれに懲りたか。よく思ひ知るがよい」

男の人形に向つて、

生靈『殊更恨めしいのは、この人だ。この浮氣男を連れて行かう」

といつて、生靈は男（人形）の寢てゐる枕許に立ち寄つて見たが、

生靈『まあ恐ろしい。祭壇の御幣の許に三十番神がお出でになつて、『魍魎鬼神がここへ來るとは穢はしい、さあ早く出て行け』とお責めになるわ。あゝ腹が立つ。戀しい夫を取り返すことが出來ないのみか、神々のお責めさへ受けて、惡鬼の神

○あまさへ—あまつさへ。その上に。
○神通力—自由自在にふるまひ得る力。
○足弱車—車輪の弱い車。進みが鈍くよろけまわるものの喩。
○廻り逢ふ—車の縁語で、男に廻り合ふことをいふ。
○目に見えぬ鬼—古今集序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」とある詞を借りて、鬼の姿の消え失せる意に用ゐたのである。

（拍子を踏み、思ふ夫をば。取らであまさへ神々の責めを蒙る惡鬼の神通通力自在の勢ひ絶えて。力もたよたよと。足弱車の廻り逢ふべき（常座に安坐して兩手をつき）。時節を待つべしや（打杖をすて）。まづこの度は。歸るべしと（立上り）。いふ聲ばかりはさだかに聞えていふ聲ばかり聞えて姿は目に見えぬ鬼とぞなりにける日に見えぬ鬼となりにけり

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

通自在力の勢ひも絶えて、力も弱々となつて來た。仕方がない、また廻り逢ふ時節を待たう。今日は一先歸らう」

といふ聲だけは、はつきり聞えたが、姿は目にも見えず消え失せてしまつた。

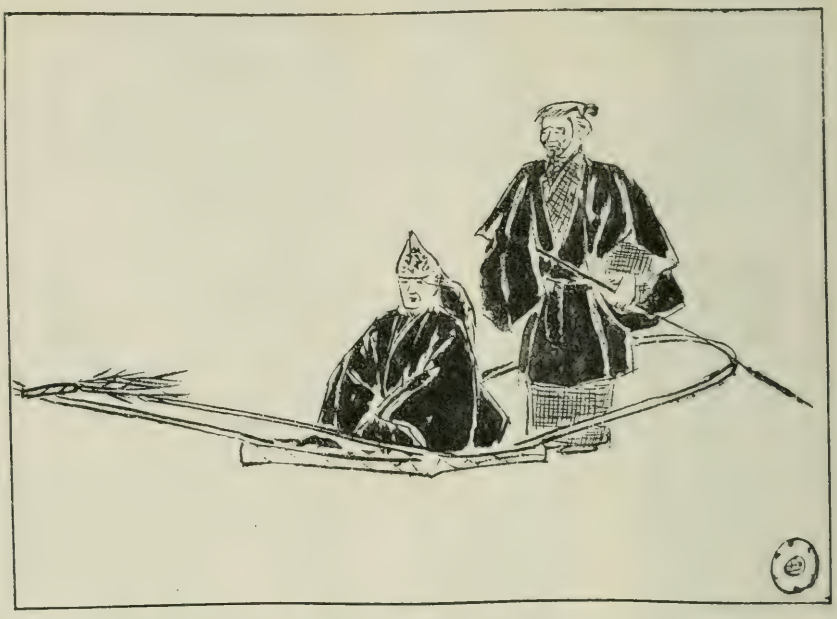
〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

著しい異同はない。

古謠本（光悦本）

【一】シテ上畫「通ひ馴れたる……消えん程とや（光よ）……シテ「急ぎ候程に……參詣申さうずるにて候（光ナシ）【二】シテ「これは思ひも……人違ひにて（光御入）候べし……【三】ワキツレ「かやうに……下京邊に住む（光住居仕る）者にて候われ（光ナシ）……ワキツレ「さん候下京……尋ね申さん爲に（光唯今）參り……ワキ「あら不思議や勘へ申すに及ばず（光ナシ）……被りたる人にて（光わたり）候……さやうの事にて（光はし）候か。ワキツレ「さん候……われ（光此間）本妻を離別し（光仕り）……さやうの事にても候やらん（光候か）……ワキ「この上は……急いで供物を御調へ候へ。ワキツレ「畏つて候（光ナシ）【四】ワキ「いでいで（光ナシ）轉じかへん……天聞け（光き）【五】後ジテ「それ（光春の）花は



兼平（かねひら）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 二番目　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　木曾の僧、**前シテ**　老船頭（兼平の靈）、**狂言**　矢橋の渡守、**後シテ**　今井兼平

【所】 **前段**　近江國矢橋より粟津までの船中　**後段**　近江國粟津原

【時】 （四月）

【作者】 能本作者註文二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に〔柴舟〕といふ曲名の見えてゐるのは、この曲の事であらうか。言繼卿記天文十七年二月十六日の條に演能のこと、言經卿記文祿四年三月二十九日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 木曾の僧が義仲の戰死した跡を弔はうと思つて矢橋の浦まで來ると、老船頭が柴舟を漕いで來たので、これに便船を乞うて、船頭に比叡山やその附近の名所を聞いてゐるうちに、舟は粟津に着いて、老船頭はどこへやら消えてしまふ。やがて僧が粟津原で回向して假睡すると、

その夢に今井兼平が現れて、前に便船させたのは實は自分であるといつて、主君義仲及び自分の最期の樣を物語る。

【出典】前段は主として作者の創意であり、後段卽ち本曲の主題は、流布本平家物語卷九「河原合戰の事」の末尾、去年信濃を出でしには、五萬餘騎と聞えしが、今日四宮河原を過ぐるには、主從七騎になりにけり。から、次の「木曾の最期の事」を劇化したものであらう。〔巳〕の解說參照。

【槪評】本曲の脚色法は最も異色あるもので、前段は矢橋から粟津まで漕ぎ行く船中で、全體が道行の形をなしてゐる。その內容は〔白髭〕の曲に似てゐて、特殊なものではないが、このやうに前半すべてを道行としたものは、他に例がない。後段は義仲の最期を叙したもので、類曲に〔巳〕があり、それは愛妾の立場から叙してゐるのに對し、これは忠臣の立場から描いたもので、義仲の最期を全からしめようとした忠愛の情が、誠によく寫されてゐる。末尾を「兼平が最期の仕儀、目を驚かす有樣なり、目を驚かす有樣」で止めたのも、この曲に適はしいものではあるが、謠曲文としてはこれ亦類例のない結び方である。

【一】

○旅を信濃路や―旅を爲を信濃にいひかけた。
○木曾の行方―木曾路に木曾義仲をかけて義仲の亡き跡を尋ね弔はうといつたのである。
○木曾の山家より―普通のワキ僧の如く諸國一見の者とはせず、義仲に多少緣故のある者としたのである。
○木曾殿―木曾義仲。源義賢の二男、幼少の時父を失ひ、乳母の夫中原兼遠に養はれて、信濃國木曾に居つたので、木曾を冠した。平家を追つて都に入り征夷大將軍となつたが、やがて元暦元年正月範頼義經に攻め

【二】

次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地鼠斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて、名乘座に出で、大小前の方に向き、

ワキ次第「始めて旅を信濃路や。始めて旅を信濃路や。木曾の行方を尋ねん

地取に正面に向き、

ワキ「これは木曾の山家より出でたる僧にて候。さても木曾殿は。江州粟津が原にて果て給ひたる由承り及び候程に。かの御跡を弔ひ申さばやと思ひ。唯今粟津が原へと急ぎ候

【二】

前段

鏡裏は初め信濃國木曾で、ワキ木曾の僧登場。

僧「始めて旅を思ひ立ち、信濃國木曾を出立して、義仲の亡き跡を尋ねようと思ふ」

と次第に旅の目的を述べ、

僧「私は木曾の山家から出て來た僧です。さて木曾義仲殿が近江國粟津が原でお果てになつたと、人傳に聞いたので、その御跡を弔ひたいと思ひ、これから粟津が原へ急いで出かけるのです」

と見物人に自己紹介をし、

られて、近江國栗津原で戰死した。〔木曾〕〔四〕參照。
○栗津原—近江國勢田橋本から膳所に至る街道邊の松原。
○木曾の棧—木曾の險路。信濃國沓掛から福島邊までの通路をいふ。棧は懸崖に沿うた險路をいふ。
○名にし負ふ—木曾の棧の有名なことと、義仲の有名なことと兼ねていふ。
○その跡—義仲の亡き跡。
○草の陰野—草の陰、陰野といひかけた。陰野は日の當らない野邊をいふ。
○矢橋の浦—近江國滋賀郡琵琶湖の東岸にあり、粟津と共に近江八景の一。

【二】
○憂きを身に積む—憂きのきを木に聞かせ、「積む」を憂きことの積むと、柴を積むとに兼ねて用ゐた。
○こがる—火に焦がるを、舟の漕がると、思ひこがるとにいひかけたのである。
○便船—船に便乘すること
○山田—栗太郡にあり、矢橋と共に古來有名な渡。

ワキ道行「信濃路や。木曾の棧名にし負ふ。木曾の棧名にし負ふ。その跡とふや道のべの草の陰野の假枕。夜を重ねつつ日を添へて。行けば程なく近江路や。矢橋の浦に着きにけり矢橋の浦に着きにけり

「夜を重ねつつ」と右の方に向き二三足出で、またもとに歸りて矢橋に着きたる心。道行濟みて、脇座に行き下に居る。

【三】

後見、船の作物を持ち出して、仕手柱先に置く。
一聲の囃子にて、シテ老船頭、面朝倉尉・尉髮・襟淺黃・着附無地熨斗目・茶色絓水衣・腰帶・扇の裝束にて出で、船の轅に乘り、竹棹を持ちて、

シテ一聲「世の業の。憂きを身に積む柴舟や。焚かぬ前より。こがるらん

ワキ立ちて、シテに向ひ、

ワキ「なうなうその船に便船申さうなう

シテ「これは山田矢橋の渡舟にてもなし。御覽候へ柴積みたる舟にて候程に。便船は叶ひ候まじ

ワキ「こなたも柴舟と見申して候へども。折節渡

僧「有名な信濃の木曾の險路を通つて、義仲の亡き跡を弔ふ爲に、道々、野邊の草蔭に夜を明かし、一日一日と過して行くうちに、間もなく近江國矢橋の浦に着いた」

と旅の樣を述べてゐるうちに矢橋に着いた體で、舞臺は矢橋浦となる。

【三】

シテ今井兼平老船頭を裝ひ、矢橋浦に柴舟を漕ぎ寄せて來た體で登場。

船頭「はかない柴舟通ひの生活に、あはれな年月を過してゐると、柴を焚くよりもまづ、わが身の悲しさに、心が思ひこがれることだ」

と自分の境慨を述べる。

旅僧はこの老船頭を見つけて

僧「おういおい、その船に乘せて下さい」

船頭「これは山田や矢橋の渡舟ではない。御覽の通り柴を積んだ舟だから、お乘せすることは出來ません」

僧「私にも柴舟とは分つてゐますが、折惡

○別の御利益―特別の御好意。

○如渡得船―法華經藥王菩薩本事品に、佛の慈悲を喩へて、「如二子得レ母、如二渡得レ船、如二病得レ醫、如二闇得レ灯」とあるを引いた。

○船待ち得たる―上に引いた經文を和譯して、旅の夕暮、途方にくれてゐた時に便船を得て、佛の慈悲を受けたやうに嬉しいとの意に用ゐた。

○近江の海の―かゝる折にも、逢ふを近江にいひかけた

○乾されぬ袖―苦しい生活で、悲しい涙で袖が常に濡れてゐる。

○水馴棹―常に水に浸つてゐる棹。音を重ねて「見馴れぬ」とつゞけた。拾遺集讀人知らずの歌に「大井河下す筏の水馴棹見馴れぬ人も戀しかりけり」

○法の人―船に乗る意を含めて用ゐた。

【三】

に船もなし出家の事にて候へば別の御利益に、『船を渡してたび給へ

シテ『げにもげにも出家の御身なれば。「餘の人にはかはり給ふべし。げに御經にも如渡得船

ワキ『船待ち得たる旅行の暮

シテ『かかる折にも近江の海の

ワキ『矢橋を渡る船ならば。それは旅人の渡舟なり

地上歌「これは又。浮世を渡る柴舟の。浮世を渡る柴舟の。乾されぬ袖も水馴棹の。見馴れぬ人なれど。法の人にてましませば。船をばいかで惜しむべきとくとく召され候へ とくとく召され候へ

【三】

シテ「とくとく召され候へ」と右手にてワキを招く。

ワキ、船の胴間に乗りて坐す。シテは棹をさして船を漕ぎ行く心。

しくこの渡に船もないので困つてゐるのです。出家の事だから、特別の御好意で乘せて下さい」

船頭「いかにも御出家の事だから、外の人とは違ひませう。さう／＼御經にも『佛の慈悲は渡で船を得たやうだ』とございますな」

僧「旅先で日が暮れて、途方にくれてゐる時に、船に乘せて貰へるのは、ほんとに佛の慈悲のやうにありがたく思はれます」

船頭「不思議な御縁でお會ひしたものです。これが矢橋の渡舟なら、普通の旅人を渡すといふだけのことですが、これは果敢ない渡世をしてゐる柴舟乘りで、悲しい思ひに涙の乾く時もないのですが、あなたは初めてお目にかゝつた人とは申せ、御出家の事だから、喜んでこの舟にお乘せしませう。さあ／＼早くお乘りなさい」

【三】

旅僧が船に乘る。これより粟津の方へ船を漕ぎながら船中の物語。

○比叡山—山城と近江との國境に聳え、山上に天台宗總本山延暦寺がある。
○山王二十一社—山王は比叡山麓坂本村にある日吉神社。二十一社はその攝社で、上の七社即ち大宮・二宮・聖眞子・八王子・客人權現・十禪師・三宮、中の七社即ち大行事・牛御子・新行事・下八王子・早尾・王子宮・聖女、下の七社即ち小禪師・大宮竈殿・二宮竈殿・山末・岩瀧・劔宮・氣比をいふ。
○八王子—前掲二十一社の一。
○戸津坂本—比叡山東麓の村。戸津は今下坂本村の一部となる。
○王城より艮—京都から北東に當る。
○わが山—比叡山のこと。
○王城の鬼門—陰陽道で東北を鬼門とし、鬼神の集會し、災禍の起る所とす。延暦寺座主慈鎭の歌に「わが山は花の都の丑寅に鬼いる門をふさぐとぞ聞く」
○一佛乘の嶺—比叡山の別名。佛法に小乘・大乘・實大乘の三乘があり、一佛乘はその實大乘で、佛教の極致である。比叡山はこの教を專要とするので、かくいふ。
○鷲の御山—釋迦の說法し

ワキ「いかに船頭殿に申すべき事の候。見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候らん御教へ候へ

シテ「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし

ワキ(正面の上を見て)「まづ向ひに當つて大山の見えて候は比叡山候か

シテ(正面の上を見て)「さん候あれこそ比叡山にて候へ。(少し右に向き)麓に山王二十一社。茂りたる峯は八王子。戸津坂本の人家まで殘りなく見えて候

(とワキを見やる)

ワキ「さてあの比叡山は。王城より艮に當つて候よなう

シテ「なかなかの事それわが山は。王城の鬼門を守り。惡魔を拂ふのみならず。一佛乘の嶺と申すは。傳へ聞く鷲の御山を象れり。又天台山と

僧「もうし船頭殿、あれにずつと見える浦や山は皆名所でしよう。教へて下さい」

船頭「さうです、皆名所です。お尋ね下さい、お教へしませう」

僧「まづ向ふに大きな山の見えるのは、比叡山ですか」

船頭「さうです、あれが比叡山です。麓にあるのが日吉山王二十一社で、あの茂つた峯は八王寺、それに續いて、戸津坂本の人家までずつかり見えます」

僧「さてあの比叡山は京都の北東に當るのですな」

船頭「さうです、この比叡山は都の鬼門を守り、惡魔を拂ふために建てられたものですが、そればかりでなく、こゝを一佛乘の嶺と申すのは、天竺の靈鷲山に象り、又天台山と申すのは、支那の四明洞に倣

た天竺の靈鷲山を和らげた名。○天台山―延暦寺の山號。○震旦―支那。○四明の洞―浙江省寧波にある。山頂に四方石門があり、日月の光がその中に入って明かであるから、四明洞といふと。實は天台山とは別で、その隣にある。○傳教大師―僧最澄の大師號、元亨釋書に「釋最澄、世姓三津氏近州滋賀郡人也……延暦四年秋七月上二叡山一、結二草舍一、讀二法華金光明等諸大乘經一、乃發二五種大願一、時年十九、七年於二山頂一創二一宇一、名曰二一乘止觀一」○わが立つ柚―新古今集傳教大師の歌に「比叡山中堂建立の時」と詞書して「阿擽多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ柚に冥加あらせ給へ」○根本中堂―山上の本堂。○大宮―傳教大師が延暦寺を建立した際、三輪明神を勸請した社。二十一社の一。○橋殿―波止土濃とも書く大宮神前の關道、この事「白髭」にも見ゆ。○一切衆生悉有佛性―涅槃經「師子吼者名二決定說一、一切衆生悉有二佛性一、如來常住

號するは。震旦の四明の洞をうつせり。「傳教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中の御草創。わが立つ柚と詠じ給ひし。『根本中堂の山上まで。殘りなく見えて候

ワキ「さてさて大宮の御在所橋殿とやらんも。あの坂本のうちにて候か

シテ「さん候麓に當つて（と右へ向き）。少し木深き影の見え候こそ。大宮の御在所橋殿にて御入り候へ

ワキ「ありがたや一切衆生悉有佛性如來と聞く時は。我等が身までも頼もしうこそ候へ

シテ「仰せの如く佛衆生通ずる身なれば。お僧も。われも隔てはあらじ。『一佛乘の峯には遮那の梢を竝べ

ワキ「麓に止觀の海を湛へ

つたのだといふ事です。傳教大師が桓武天皇と御心を一にして、延暦年中にお建てになつたもので、大師が『わが立つ柚に冥加あらせ給へや』とお詠みになつた、山上の根本中堂まですつかり見えます」

僧「それから、大宮權現の御垂跡になつた橋殿とか申す所も、あの坂本のうちにあるのですか」

繪頭「さうです、麓に當つて少し木深い影の見えるのが、大宮の橋殿です」

僧「このやうなありがたいお山を拜するにつけ『一切の人間は皆佛となり得る性がある』と仰せられた經文が思ひ出され、自分達のやうな者でも、終には佛になり得るかと心丈夫に思はれます」

繪頭「仰せの通り、佛も衆生ももと同一體なのですから、從つてお僧と私も同じく佛となれる身で、別段隔てはない譯です」

僧「あのお山には大日覺王の御教が弘められたのですな」

繪頭「さうです、止觀の御教が弘く流布さ

無レ有二變易一」を引いた。
○遮那の梢—遮那は摩訶毘盧遮那即ち大日如來。大日の觀法を弘通することを梢の繁るのに喩へた。
○止觀の海—止觀は天台宗の教「法性寂然名レ止、寂而常照名レ觀」と。その教の廣大なことを海に喩へた。
○戒定慧—三藏法數に「如來立レ教其法有レ三、一曰戒律、二曰禪定、三曰智慧」と。惡業を防ぐ戒律、心を澄ます禪定、眞理を啓く智慧、即ち佛道修行の三大綱。
○三塔—東塔・西塔・横川の三伽藍。三學に象つて建てたのであるといふ。
○一念三千の機—一念の心に三千の諸法を具へる機緣として。止觀五に「一法界具二三千種世間一、百法界即具二三千種世間一、此三千在二一念心一」
○圓融の法—事理の圓滿に融通して支障のないこと。
○曇りなき—法と月とにかけていふ。
○横川—叡山三塔の一。月の夜を横川にいひかけた。
○さざ波や—志賀の枕詞。
○辛崎—滋賀郡にあり、近江八景の一。
○七社—廿一社の中の上七社をいふ。日吉の祭禮に神

ワキ『又戒定慧の三學を見せ
シテ『三塔と名づけ
ワキ『人はまた
地『一念三千の。機を現して。三千人の衆徒を置き圓融の法も曇りなき月の横川も見えたりや、
さて又麓はささ波や。志賀辛崎の一つ松。七社の神輿の御幸の、梢なるべし。さざ波の水馴棹こがれ行く程に。遠かりし。向ひの浦波の。粟津の森は近くなりてあとは遠きささ波の。昔ながらの山櫻は青葉にて。面影も夏山のうつり行くや青海の。柴舟のしばしばも。暇ぞ惜しきさざ波の寄せよ寄せよ磯際の。粟津に早く着きにけり
粟津に、早く着きにけり

シテ、地謠の中「月の横川も」と右の方に向き、「麓はささ波や」と橋懸を見やり、「御幸の梢」と角の方を高く見上ぐるなど、名所名所を敎ふる心持を示し、謠濟みて、ワキは船より下りて脇座に行き坐し、シテは船より下りて靜かに中入。

れた所で、戒律・禪定・智慧の三大綱が重ぜられ、この三大綱に象つて、東塔・西塔横川の三塔が建てられたのです。そして又、一念の中に三千の諸法を具有するといふ經文に象つて、三千人の僧徒が置かれたのです。……おゝ、さういつてゐるうちに、佛德圓滿な横川も見えました。又麓に見えるのが志賀辛崎の一つ松で、日吉七社の神輿の渡御せられる所です」
かうして、舟を漕いで行くうちに、遠い向ふ岸であつた粟津原にも近づいて來た。あたりを眺めると、昔『さゝなみや』と詠まれた山櫻は散つて青葉となり、一體が夏山の景色となつてゐる。はや舟は岸に近づいたので、旅僧はこの後度々來ることも出來ないから、早く岸に着いて、一刻も早く義仲の跡を弔はうと、舟を急がせて、粟津に着船した。
シテを船頭は常えるが如く浪漫する。

【問】　後見、船の作物を引く。

狂言渡守、着附縞袷斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、棹をかたげて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。矢橋の浦の渡守にて候。今日は某が渡し番にて候間。罷り出で船を渡さばやと存ずる。天氣ようて滿足申し候。（ワキを見て）これなる御僧は。向へ御越しあらば越させて參らせう

ワキ「是は向ひより越して候

狂言「左樣にては御座あるまじく候。この所の大法にて。人の番の日を某が儘にせず。某が渡し番の日は人の儘にせぬ大法にて候。今日は某が番にて候間。餘の者は越し申すまじく候。御僧は妄語を仰せ候か

ワキ「いや妄語は申さず候。それにつき尋ねたき事の候。まづ近う御入り候へ

狂言「心得申して候

狂言舞臺の眞中に出で、棹を置きて坐し、

狂言「何事を御尋ねなされたく候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。古この所に於て木曾殿兼平の果て給ひたる樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。左樣の御事委しくは存ぜず候へども。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ木曾義仲の御最期の樣體。今井の四郎兼平の事を如何にと尋ぬるに。木曾殿は。平家と北國方の軍に打勝つて。勝に乘じて都へ上り。借上我意に任せらるる間。鎌倉より六萬餘騎にて攻め上ると聞えしかば。木曾殿は大に驚き。まづ宇治瀨田を防がんとて。瀨田は大手なれば兼平向ひ給ふ。

奥が辛崎に渡御する。

○さざ波の水馴棹―この「さざ波」は岸に打寄せる小波で、水馴棹と續けたのである。

○粟津の―浦波の泡といひかけた。

○昔ながらの山櫻―平忠度の歌「さゝ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」を引いた。

○夏山の―面影もなしといひかけた。

○うつり行くや―春より夏へ季節の移ることと、湖水の景色の東岸から西岸へ移ることとを兼ねていふ。

○しばしばも―柴の音を重ねて文の綾とした。屢ミ見物に出る暇がないから、早く岸に着いてよく見ようと船を急がせるのである。

【問】

○木曾殿は大に驚き―平家

物語「宇治川の事」に、「木曾大に驚き、宇治勢田の橋を引きて、軍兵共を分ち遣す。折節勢こそなかりけれ、まづ勢田の橋へは大手なればとて、今井四郎兼平八百餘騎にて差し遣す。宇治橋へは、仁科、高梨、山田次郎三百餘騎にて遣しけり」盛衰記「範頼義經京入事」には「根井大彌太行親、楯六郎親忠、進六郎親直、仁科、高梨、三百餘騎にて」とある。

宇治の方へは楯の六郎根の井の大彌太。仁科高梨山田の次郎を遣さるる。東國よりは範頼義經六萬餘騎を二手に分ち。瀬田へは範頼を大將として。三萬餘騎にて當國瀬田の橋詰に陣を取り給ふ。宇治へは義經を大將として。二萬騎にて伊賀越をして宇治橋に着き給ふ。宇治瀬田ともに橋は引かれたり。頃は睦月二十日あまりの事なれば。比良の高根の雪も消え。折節水高く。左右なく越ゆべき樣もなく候ところに。梶原源太佐々木の四郎を先として。我も〳〵と宇治川へ打入り打入り越ゆる程に。宇治の口攻め破られしかば。木曾殿の兵は木幡山伏見醍醐をさして落ちて行く。瀬田は稻毛の三郎はかりて渡し御申し候間。大手も破れ。木曾殿は兼平に今一度逢ひたく思し召し。瀬田をさして落ち給ふ處に。大津打出の濱にて互に行き合ひ。御悅びあつて。兼平の旗を上げ給へば。是を見て落ち行く味方の三百騎ばかりの集まり候間。この勢にて花やかに最期の軍あるべきとて。散々に戰ひ。又主從二騎になり候間。兼平申され候は。あの松原へ落ち給ひ。御腹召され候へとて。兼平跡に殘り戰ひ給ふが。木曾殿討たれ給ふと聞き。その儘自害ありたると申す。又木曾殿は松原へ落ち給ふ道にて。石田の次郎が方へ討ち取り申して候。まづ我等が承り及びたるはかくの如くにて候が。扨唯今は何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。是は木曾の山家より出でたる僧にて候。是まで參り候も。木曾殿兼平の御跡弔ひ申さん爲にて候。御身以前に老人一人。渡守の體にて來られ候程に。則ち便船申して候へば。所々の名所など敎へ。この所へ船を寄すると見て。姿を見失うて候よ

狂言「扨は兼平の御亡心現れ給ひ。船を越し給ひたると存じ候間。暫く御返留あつて。兼平の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。暫く返留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ上歌(待謠)『露をかたしく草筵。露をかたしく草筵。日も暮れ夜にもなりしかば。栗津の原のあはれ世の。亡きかげいざや、弔はん亡きかげいざや弔はん

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ今井兼平、面平太・黒垂・梨打烏帽子・白鉢巻・標淺黄・着附段厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて太刀を佩きて出で、常座に立ち、

後ジテ『白刃骨を碎く苦しみ。眼睛を破り。紅波楯を流す粧ひ、築杭に殘花を亂す

右の方に向き、

シテ一聲『雲水の。栗津の原の朝風に地。鬨つくり添ふ。聲々に

シテ『修羅の。巷は。騷がしや(と拍子を踏む)

【四】

後段

舞臺は粟津原。

僧「露の置いた草原に行んとするうちに、はや日も暮れて夜になつたから、この粟津原で討死した故人の跡を、さあ回向しよう」

と讀經して假睡する。

【五】

後ジテ今井兼平、旅僧の夢に現れる態で登場。

兼平「白刃を以て骨を碎く激戰の恐ろしさに、眼睛も破れるばかりで、楯を浮かべ流す河には血潮が一面に溢れ、それが築杭に當つては、跳ね飛んで、紅の花を散らしたやうだ。——それは昔木曾の合戰の光景であつたが、今も亦修羅道でも、栗津の朝風が敵の作る鬨の聲のやうに聞え、もの騷がしい修羅の鬪爭に、少しの休む時もないのだ」

と獨言のやうにいふ。

○草枕に―野邊で眠つた夢に。ワキが讀經して假睡した夢に後ジテが現れるのである。

○おろかと―迂濶に。

○兼平―今井四郎兼平。義仲の乳母の子。義仲が兵を起して北陸道へ出陣した時一番に盃を頂戴して、君御出世に於ては兄樋口次郎兼光を執權になし下さるべし。君戰場にて御最期の時至らば、某一番に御供申さん」といつて、以來義仲の爲に諸方で奮戰した。

○現にも―現實にも。本曲の後段は夢幻能、前段は現實劇のやうに見做してゐるのである。

○はや水馴棹の―はや見たるといひかけた。

○見みえし―見・見せし。相會つた。

○樣ある人―由緒のあるらしい人。

ワキ（シテに向ひ）「不思議やな粟津の原の草枕に、甲冑を帶し見え給ふは、如何なる人にてましますぞ

シテ「おろかと尋ね給ふものかな。御身これまで來り給ふも、わが亡き跡を弔はん爲の。御志にてましまさずや、兼平これまで參りたり

ワキ「今井の四郎兼平は、今はこの世に亡き人なり。さては夢にてあるやらん

シテ「いや今見る夢のみか。現にもはや水馴棹の。船にて見みえし物語。早くも忘れ給へりや

ワキ「そもや船にて見みえしとは、矢橋の浦の渡守の

シテ「その船人こそ兼平が。現に見みえし姿なれ

ワキ「さればこそ始めより。樣ある人と見えつるが。さては昨日の船人は

僧「これは不思議だ。この粟津原に居睡つてゐる處へ、甲冑を着た人がお見えになるが、一體あなたはどういふ方です」

兼平「分りきつたことをお尋ねになるものだ。そなたがこゝまで來られたのも、わが亡き跡を弔はうとの御志からではござらぬか。兼平がこゝへ參つたのです」

僧「今井の四郎兼平は、今はこの世にはゐない人だ。さては、自分は夢を見てゐるのであらうか」

兼平「いや今夢に會ふばかりではない、現實にも既に出會つて、船中で話をしたのに、はやお忘れになつたのか」

僧「はて、船中でお會ひしたとは、あの矢橋の渡守のことでしようか」

兼平「その船頭こそ、私が現實にお會ひした姿です」

僧「なる程、始めから普通の人ではないと思つてゐたが、それでは昨日の船頭は兼平殿であつたのか」

○武士の―矢といひかけて矢橋とつゞけた。
○御法の船―柴舟を弘誓の船にかゝて。
○彼の岸―涅槃の境。「生死爲二此岸一、涅槃爲二彼岸一」「渡二生死此岸一、到二涅槃彼岸一」などといふ。

【六】
○有爲生死の巷―「有爲」は人生の生滅無常なこと。生死盛衰の無常な人間界ではその變化がいかにも早いとの意。
○老少もつて前後不同―老いた者が先に死し、若い者が後まで生き殘るには限らない。
○夢幻泡影―人生の果敢ないことは夢幻泡影と差異がない。金剛經に―一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應レ作二如レ是觀一」
○槿花一日の榮―人の榮花は槿花（むくげ）が一日だけの盛りを見せて忽に凋むのと何等變りがない。和漢朗詠集白樂天の句に―松樹千年終是朽、槿花一日自爲レ榮―
○弓馬の家にすむ月の―武士の家に住むを月の澄むにいひかけ、更に月影の「殘る」とつゞけた。

シテ『船人にもあらず
ワキ『漁夫にも
シテ『あらぬ
地上歌『武士の。矢橋の浦の渡守。矢橋の浦の渡守と。見えしはわれぞかし。同じくはこの船を。御法の船にひきかへて。われを又彼の岸に。渡してたばせ給へや（とワキに二足詰め）

【六】
地クリ『げにや有爲生死の巷。來つて去る事早し。老少もつて前後不同。夢幻泡影。いづれならん
シテこの間に舞臺の眞中へ行き、床几にかゝる。これより物語の心持。
シテサシ『唯これ槿花一日の榮
地『弓馬の家にすむ月の。わづかに殘る兵の。七騎となりて木曾殿は。この近江路に下り給ふ
シテ『兼平瀨田より參りあひて
地『又三百餘騎になりぬ

兼平―あれに漁夫でも漁夫でもない、武士であつたのです。矢橋の渡守のやうに見えたのは、實は私です。どうかあの者を柴舟ではなく、極樂へ渡す弘誓の船として、私を淨土へ送つて下さい―

【六】
兼平―思へば、生死盛衰の無常な人間界では、その變化がいかにも早くて、老いた者が先に死に、若い者が後に殘るとも限らない。その果敢ないことは、夢幻泡影と何の差異もないのだ。人間の榮花はほんの槿花の花盛りのやうな短いものだ―
ミ感慨を洩して、これより軍語を始める。
兼平―自分も武士の家に生まれて、戰場に出たが、戰敗れて、主從僅かに七騎となり、木曾殿はこの近江路へお下りになつたのです。自分も瀨田から參りあつて、また三百餘騎になつたが、その後度々の合戰に打破れて、また主從二騎になつて

○七騎となりて―解説參照

○御腹召され候へ―自害せられよ。

○汝一所に―汝と一所になりたいといふ考。

○末代の御恥辱―後代までの恥辱。

○やがて參らんとの―下應の謠本には「の」の字がない

シテ『その後合戰度々にて。又主從二騎に討ちなさる

地『今は力なし。あの松原に落ち行きて。御腹召され候へと。兼平勸め申せば。心細くも主從二騎。粟津の松原さして落ち給ふ

（居クセ）

地ク『兼平申すやう。後より御敵。大勢にて追つかけたり。防ぎ矢仕らんとて。駒の手綱を返せば。木曾殿御諚ありけるは。多くの。敵を逃れしも。汝一所にならばやの。所存なりつる故ぞとて同じく返し給へば 兼平又申すやう。こは口惜しき御諚かな。さすがに木曾殿の。人手にかかり給はん事。末代の御恥辱。ただ御自害あるべし。今井もやがて參らんとの。兼平に諫められ。又引つ返し落ち給ふ。さてその後に木曾殿

しまつた。それで、『今は致し方がない、あの松原に遁げて御自害なされませ』と、自分がお勸めしたので、木曾殿は心細くも自分と二騎で、粟津の松原さしてお遁げになつたのです。――

その時、自分が『後から敵が大勢追駈けて來ました。私は之を防ぎませう』と申して、馬を引返すと、木曾殿は『自分が多くの敵を逃れて來たのも、お前と一所になりたいと思つたばかりでだ』と仰せられて、自分と同じやうに引返されたので、自分はまた『これは口惜しいことを仰せられる、木曾殿ともあらう方が、人手にかゝつて死なれては、後代までの御恥辱でございます。是非とも御自害なさいませ、私もすぐ後から參ります』とお諫めしたので、木曾殿はまた引返して、心細くたゞ一騎で、粟津原の向ふの松原へ遁げ落ちられたのです。――

○睦月の末つ方―平家物語巻九に「頃は正月廿一日、入相ばかりの頃なるに、薄氷はりたりけり。深田ありとも知らずして、馬を颯と打入れたれば、馬の頭も見えざりけり」

○くれはとり―空の暮れ行くを、呉織漢織にかけて、「あやしや」と續けた。

○末白雪の―行末知られぬを白雪にいひかけた。

○望月の―駒の序。信濃國望月は馬の名産地であつたから、馬に冠して用ゐた。

○命は槻弓の―命は盡きるを槻弓にいひかけた。

○内兜―兜の内側。

○痛手―重傷。

は。心細くも唯一騎。栗津の原のあなたなる。松原さして落ち給ふ（と橋懸の方を見）

シテ『頃は睦月の末つ方

地『春めきながら冴えかへり（と正面を見廻し）比叡の山風の。雲行く空もくれはとり。あやしや通路の。末白雪の薄氷。深田に馬を驅け落し（下を見て拍子を踏み）。引けども上らず打てども行かぬ望月の（扇を鞭の心にて後をうち）。駒の頭も見えばこそ。こは何とならん身の果。せん方もなくあきれはて。このまま自害せばやとて。刀に手を掛け給ひしが。さるにても兼平が。行方如何にと遠方の跡を見かへり給へば（と橋懸の方を見）

シテ『いづくより來りけん

地『今ぞ命は槻弓の。矢一つ來つて内兜にからりと射る（と扇にて頭をさし）痛手にてましませば。たま

その時は正月の末で、春らしくなつたとはいふものの、まだ空寒く、比叡の山風が吹き下して、日も暮れれば、行き通ふ路さへも分りかねる時で、木曾殿は薄氷の張つた深田に馬を驅け落して、引いても打つても馬は動かず、次第に深みに落ち込んで、馬の頭も見えないまでになつたので、これは何といふ不幸な運命だらう、しかし是非もないことだと呆れ果てて、その儘自害をしようと、刀に手をお掛けになつたが、それにしても、兼平はどうした事であらうかと、遠く後を見返へられた時に、何處からか命とりの強い流矢が飛んで來て、兜の内側を射當てたので、重傷に堪へられず、馬から落ちて、遠國の土となられたのです。その討死なされた所はこゝです。私よりも先にまづ主君木曾殿の御跡を弔つて下さい」

りもあへず馬上より。遠近の土となる（と右膝をつきて下に居）。所はここぞわれよりも（と立ち）。主君の御跡を。まづ弔ひてたび給へ（とワキに向ひ開く）

【七】

地ロンギ『げに痛はしき物語。兼平の御最期は。何とかならせ給ひけ。る

シテ『兼平はかくぞとも。知らで戰ふその隙にも、御最期の御供を、心にかくるばかりなり

シテこれより謠に合せて仕科。

地『さてその後に思はずも。敵の方に聲立てて

シテ『木曾殿討たれ給ひぬと

地『呼ばはる聲を聞きしより

シテ『今は何をか期すべきと

地『思ひ定めて兼平は

シテ『これぞ最期の廣言と

地『鐙踏んばり

○遠近の土となる―馬より落つを遠にいひかけた。近は虛字で、遠國の土となるとの意。

○所はここぞ―主君義仲の戰死した所はここである。

【七】

地『まことにお氣の毒な話です。さて兼平殿の御最期はどのやうであつたのです』

兼平『自分は木曾殿がこのやうになられようとは知らず、必死に戰つてゐたが、その間にも主君御最期のお供のことが氣になつてゐたのです。すると、意外にも、敵の方から大聲で『木曾殿は討たれられた』といふ聲が聞えたので、もはやこの上は何の望みもないと、覺悟を定めて、最後の意氣を示す爲に、鐙を踏んばり、大きな聲で、――

シテ『大音あげ木曾殿の。御内に今井の四郎地『兼平と名乗りかけて（と太刀を抜き）。大勢に割つて入れば。もとより一騎當千の。祕術を現し大勢を。粟津の汀に追つつめて磯打つ波の。まくり切り。蜘蛛手十文字に。撃ち破り。驅け通つて。その後。自害の手本よとて。太刀を銜へつつ逆様に落ちて。つなぬかれ失せにけり。兼平が最期の仕儀目を驚かす有様なり目を驚かす有様

「名乗りかけて」と太刀を抜きて勇しき様を示し「逆様に落ちて」と太刀を捨てゝ、仕手柱際にて留拍子を踏む。

『われこそは木曾殿の御内の今井四郎兼平だ』と名乗りをあげて、大勢の敵の中へ割つて入り、一騎當千の勢ひで、あらゆる祕術を盡し、敵の大勢を粟津の汀に追つ詰め、まくり切り、蜘蛛手十文字なと色々の手を盡して敵を撃ち破り、その後、『自害の手本を見よ』と、太刀を口に銜へ、眞逆様に落ち、われとわが喉を貫いて討死したのです。

かくの如き天晴れた兼平の最期の様は、實に目を驚かすばかりであつた。

○まくり切り―隙間もなくまくりまくること。鋤法の名。
○蜘蛛手―四方八方に斬り拂ふこと。鋤法の名。
○つなぬかれ―貫かれの訛。馬より落ち、わが刀でわが身を刺し通す。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ次第「始めて旅を……木曾の行方を尋ねん（下懸山家を出でうよ）。ワキ「これは木曾の山家より出でたる（春殿のゆかりの）僧にて候……

【六】地ウタ「兼平申すやう……さてその後に木曾殿は心細くも……松原さして落ち給ふ（下懸ナシ）

古謡本（光悦本）

【一】ワキ道行「信濃路や（光たひ衣）木曾の……

【二】シテ「これは山田矢橋の渡舟にてもなし（光候はす）……ワキ「こなたも柴舟と見申して候へども（光へは）こそ。便船とは申候へ）折節……

【三】ワキ「いかに船頭殿に申すべき事の候。光シテ何事にて候そ。ワキ「これは此所初て一見の者にて候）見え渡りたる……御教へ候（光ナシ）……

【四】ワキ上歌「露をかたしく草莚。光枕……亡きかげいさや（光跡猶も）……

【六】地「今は力なし……松原さして落ち給ふ（光行けり）

昭和五年十月十五日印刷
昭和五年十月二十日發行

不許複製

謠曲大觀第一卷奥附　（非賣品）

著者　佐成謙太郎

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹退三

印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目　株式會社　明治書院
【振替貯金口座東京四九九一番】
電話神田（25）二二一一番　六六四四番　九九一一番　六五四四番

謡曲大觀總目錄

（曲名の左に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。別巻は索引その他）

首巻

能樂總說
能樂の生成
能樂の源流
新伎散樂
猿樂藝の展開
猿樂の歌舞的發達
猿樂の戲曲的展開
猿樂座と田樂
大和申樂四座
能樂の大成
時代の風尙
觀阿彌の集成
世阿彌の大成
音阿彌の守成
その後の申樂
元曲との關係
能樂の詞章
謠曲の題材
謠曲の出典
謠曲の脚色
謠曲の構造
謠曲の章節
謠曲の修辭
謠曲の作者

第一巻

○翁
か
鸚鵡小町
あ
阿漕
蘆刈
飛鳥川
安宅
安達原
敦盛
淡路
菱上
海士
綾藪
嵐山
蟻通
藍染川
い
碇潜
田敦盛
生一角仙人
岩船
う
鵜飼
浮舟

第二巻

か
茂賀
茂物狂
通小町
邯鄲
成陽宮
き
鬼界島（俊寛）
菊慈童
木曾
砧
清經
祇王
金札
く
草薙
國栖
楠露
九世戸
熊坂
馬天狗
鞍僧
車吳服
塚（安達原）
黑
皇帝

第三巻

し
俊寛
俊成忠度
鐘巻
白髭
代主
神歌（第）
す
須磨源氏
墨染櫻
隅田川
染
誓願寺
住吉詣
西王母
昭君
善界
善光寺小町
關寺
關原與市
殺生石
攝待
緯丸
緯師曾我
千手
そ
卒都婆小町
泰山府君
大佛供養

第四巻

て
天鼓
と
藤永
東岸居士
東方朔
東北
木賊
知章
碓
朝長
巴
な
鳥追舟
仲光
難波
奈良詣（大佛供養）
に
錦木
錦戸
ぬ
鵺
ね
寢覺
の
野宮
野守
は
放下僧
放生川

第五巻

ま
松風
松尾
松蟲
松山鏡
松山天狗
滿仲
み
通盛（仲光）
三山
水無瀨
水無月祓
身延
御袋
澤
輪
三井寺
三浦
六君
む
室布
め
和月
も
望月
求塚
紅葉狩
盛久

能樂の演出
能樂の種類
能舞臺
演奏者
能面
能裝束
能作物・能小道具
能樂の演奏
能樂の價値
複式夢幻能の意義
能樂の藝術美
謠曲の思想
狂言との對比
謠曲の影響
謠本・參考書
術語略解
現行曲一覽表

能樂畫譜

能舞臺全景
能面
能裝束
小道具
能作物
狂言面
狂言裝束
能樂器
現行謠本
古謠本

雨月　右近　歌占　内外詣　善知鳥　采女　梅枝　梅鶯祭　麟形　雲林院　江口　江島　能簸　老松　大原御幸　大江山　大社　項羽　高野物狂　杜若　景清　柏崎　春日龍神　合浦　葛城　鐵輪　兼平

花月　宮殿月（鶴亀）　現在七面　源氏供養　紘上　源太夫　元服曾我　小督　小鍛冶　小袖曾我　胡蝶　戀重荷　西行櫻　草子洗小町　逆鬼　櫻川　佐保山　實盛　三笑　志賀落　七騎　自然居士　猩々　正尊　石橋　舍利　春榮

大瓶猩々　第六天　大會　道成寺　唐船　道明寺　當麻　竹雪　高砂　忠信　忠度　龍田　谷行　玉井　玉苅　田村　堺風　竹生島　張良　土蜘蛛　土車　綱（羅生門）　經政　妻戸（雷電）　鶴亀　定家　調伏曾我

白樂天　羽衣　半蔀　橋辨慶（附笛之卷）　芭蕉　鉢木　初雪　花筐　班女　飛雲　檜垣　雲雀山　氷室　百萬　笛（橋辨慶之卷）　富士山　富士太鼓　二人靜　藤戸　船橋　船辨慶　佛原　卷絹　枕慈童（觀世貝外須慈童）

楊貴妃　養老　八島　山姥　雪　遊行柳　夕顏　熊野　弓八幡　夜討曾我　吉野靜　吉野天人　賴政　法師　弱法　雷電　羅生門　龍虎　輪藏　籠太鼓　井筒　烏帽子折　繪馬　小鹽　姨捨　女郎花　大蛇

(12)

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 2438